



PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

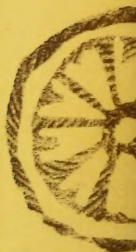
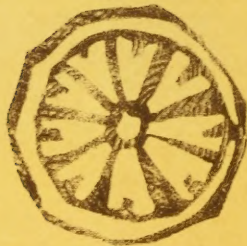
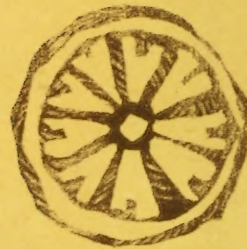
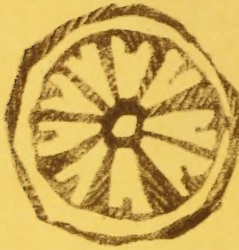
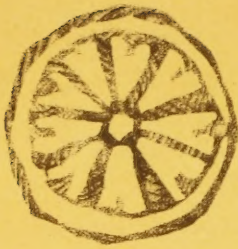
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

HL  
1411  
T8J3  
1927  
v.8

Tripitaka. Japanese. 1927  
Kokuyaku daizokyo

East Asia

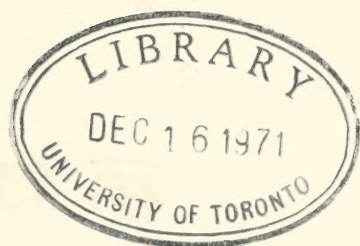




國譯大藏經

經部  
第八卷

BL  
1411  
T853  
1927  
v.8



# 目次

大般涅槃經開題	一七
大般涅槃經疏釋	一〇
國譯大般涅槃經	一〇三
漢譯原文	
大般涅槃經	一二六

以上

目次

大輿地全圖……………一

輿地全圖

大清輿地全圖……………一

大清輿地全圖……………一

大清輿地全圖……………一

目次



北涼曇無讖譯

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

# 大般涅槃經開題

譯者 島地大等

【佛說本緣】 惟みるにそれ如來常住無有變易はこの經の眼睛にして一切衆生悉有佛性はこの經の肝腑なり。爾れば則ち大覺の體たる、元より有無を離れ、修性を絶し、動靜相即し、眞俗相融す。古今同然の常樂と十方周遍の眞淨と四徳を具足してこれを莊嚴し、自在に萬縁に應じ、忽ち玄默に寂す。誠に慈悲無窮にしてまた智智無邊なるものなり。茲を以て非生に生を現じて迦毗羅衛に迹を留め、無相に相を示して次第に出家・降魔・成道・轉法輪の諸相を成じ、化縁盡くるに至りて非滅に滅を現す。生や滅や、大覺に在りては元より二相を存せず、自在に如來し任運に如去す。生も滅に即し非生に即す、滅も生に即し非滅に即す。誠に是れ大悲止むことを得ずして驚いて火宅に入り、攝化利生の大事に従ふの化相なるが故に生も滅も唯是大心中の一波瀾たるべきのみ。然るに悲しい哉、一切衆生に在りては有無・生滅永く相隔つるを以て、沈淪久しうして遂に祕密藏界に入ることを得ず。哀しい哉衣

裏の佛性も亦空しく朽敗に委せられんとせり。故に大聖憐愍して臨滅の夕、三徳の祕藏を開き、四徳の寶鑰を授けんが爲に懇ろに遺教を鶴林に垂る。人の死せんとするその言や善し矣。果然如來常・佛性遍の明燈を懸げて十方の迷闇を照破し、三世永へに生死の群萌を救ふ。生佛感應し甚深微妙大般涅槃經の此界に示現せる所以詢に茲に在り矣。

故に如來、大菩提樹下金剛座上阿耨多羅三藐三菩提を成じ給ひしより已來四十餘年、機縁を隨逐して縱横説利顯る力む、而して慈懷獨り悠悠たること能はずして寶算七十九歳の老軀を提げ、特に摩揭陀國を發して波多利子城に至り、恆河を渡りて毗舍離城に入り、捺女園に捺女を度し、竹林村に於て最後の安居を結し、寶壽八十歳、聖軀背後の疼痛を疾んで尙は且つ屈せず、波婆城に至りて金工純陀より最後の供養を受け、行く行く有縁を化し、遂に拘尸那揭羅城に達し、跋提河畔沙羅雙樹林下に寶牀を設けしめ、老婆羅門須跋陀羅を度し、寶牀を圍繞せる四衆の爲に一夜仔細に如來常・佛性遍の妙義を示し、波羅提木叉を滅後の大師と誡め、懇ろに一代の法要を約説して衆疑を決し、化道事終りて後、寂然として入滅し給ひけり。

今この大般涅槃經は釋迦牟尼如來、拘尸那揭羅城外、跋提河畔、沙羅雙樹林下一日夜中の遺教を結集し、以て滅後機縁の爲にすと傳ふ。この經説の本縁略して是の如し矣。

## 【經本部別】

等しく泥洹經・涅槃經と題すれども、その經本頗る多種ありて、外形・内容共に一様に非

す。且く漢譯大藏經に就いてこれを見るも、本經あり支分あり、全譯あり分譯あり、同本異譯あり異本別譯あり。同本異譯と稱するものと雖も、尙ほ且その内容に異同を存す。而して大藏經中涅槃經及びその支分として見るべきものにして現に存するもの十一種あり。諸經錄中にその名を存する缺本を加ふれば總て二十餘種に上るべし。この諸種經本は、古來一括して二類に判屬す。所謂小乘涅槃經と大乘涅槃經となり。前者は生滅因縁の事相に滯著する人情に應せるもの、後者は非滅現滅の眞常を體得し得べき大縁に應せるもの。前者は釋尊入滅の歴史的事實を敍説したるもの、後者は釋尊最高の理想たる如來常・佛性遍の理想を力説したるものなり。畢竟この兩者の別は、滅後諸弟子の大聖涅槃觀の別にして、同時に諸弟子の涅槃觀に即せる釋尊聖化の偉大を示現したるものなり。要を得て之を云へば、涅槃大小乘の別は生佛感應の別に過ぎず。更に各部中の異別は翻傳・講讀等の歴史的事情と相關するものあること勿論なり。

【小乘經本】 小乘涅槃經の部に屬するもの、漢譯大藏の中現に五種の經本を傳ふ。五本とは次の如し。

- 一 佛般泥洹經 二卷 (西晉) 白法祖譯
- 二 大般涅槃經 三卷 (東晉) 法顯譯
- 三 般泥洹經 二卷 失譯今付東晉錄
- 四 佛遺教經 一卷 (姚秦) 鳩摩羅什譯

五 遊行經 一卷 (姚秦) 佛陀耶舍・竺佛念共譯

この他に尙ほ南方佛教傳持のパーリ三藏中 *Diṅṭhi Nikāya* 第十六經を成せる *Mahāparinibbāna sutta* あり。Myの *Rhys Davids* 氏の英譯は現に東方聖典集 第十一卷に存す。漢譯五本中の遊行經は長阿含經中の二分にして正に此のパーリ本と等し。總じてこの諸本たる、その内容は共に小乘の教意に立脚し、大聖人滅の現相を敍すること大同なり。然るにその中、法顯譯するところの經は前半の說相、遊行經及び白法祖譯に比して頗る略なりと雖も、滅後供養の記事は却つて稍精し。遺教經はその内容他本と大に異にして入滅の事相を説くこと最も簡なりと雖も、大體上小乘涅槃の部屬に攝すべきものたるは文義共に炳焉たり。

【大乘經本】 大乘涅槃經の部に屬するもの、漢譯大藏の中現に六部存せり。

- 一 方等般泥洹經 二卷 (西晉) 法護譯
- 二 大般泥洹經 六卷 (東晉) 法顯・佛陀跋陀羅共譯
- 三 大般涅槃經 四十卷 (北涼) 曇無讖譯
- 四 四童子三昧經 三卷 (隋) 闍那崛多等譯
- 五 大悲經 五卷 (齊) 那連提耶舍・法智共譯
- 六 大般涅槃經後譯茶毘分 二卷 (唐) 若那跋陀羅・會寧共譯

この中、曇無讖譯の經本は最も全譯に近きものとし、法顯譯はその初分を別譯せるもの、若那跋陀羅譯はその殘缺を補へるものと云ひ、この三本を本經と爲し、他の四童子三昧經 *Caturdhyaka samadhi sutra* は竺法護譯の方等般泥洹經と同本異譯にして共に涅槃經の支分と見るべく、大悲經 *Mahakarunapitakaniya sutra* また如來入滅の事實を中心とせるに鑑み、この經の支分に屬すべし。

總じて涅槃經の漢譯は小乘涅槃經に先づ傳譯せられたり。經錄を案するに、後漢の頃支婁迦讖 (A.D. 147—186.) 來つて胡般泥洹經二卷を譯す、是れ大乘涅槃經傳譯の最初なり。次に三國時代に入り江北に在りては魏の安法賢 (A.D. 220—265.) 大般涅槃經二卷を譯し、江南に在りては吳の支謙 (A.D. 223—253.) 大般泥洹經二卷を譯す。また北涼の智猛 (A.D. 423—493.) は曇無讖の譯出でて後その將來するところの般泥洹經二十卷を譯出せり。然るに以上の四本は惜しい哉共に名獨り存してその本久しく逸す。

要するに、現存大乘涅槃經中最も重要なは、曇無讖譯の四十卷本と、法顯譯の六卷本と、及び若那跋陀羅譯の後分涅槃經となり。曇無讖譯は普通に大涅槃經を以て稱し、或は大本涅槃と稱す。南北二本あり、後に敍するが如し。法顯譯は大本涅槃に簡んで特に六卷泥洹と通稱せらる。傳譯の前後を論ずれば、法顯と曇無讖と地は江の南北を分てども殆んど同時に起稿し、(共に東晉義熙十三年即ちA.D. 414.) 法顯は翌年を以て譯業を了へ、曇無讖は七歳の後即ち北涼玄始十年 (A.D. 421.) これを卒ふ。後

分涅槃は爾後二百五十年を距て唐朝に入りて始めて傳へらる。

【六卷泥洹】殆んど同時と云ふに近しと雖も法顯三藏の所譯はこれを曇無讖三藏の所譯に比するに前出たるは勿論、彼は北方邊陲の地に在つて譯せられ、此は江南群賢の間に傳へられしを以て學界に與へたる影響の遲速固より同日の論に非ず、法顯本の注目を値する所以なり。

法顯三藏常に經律の闕略を慨す。乃ち晉隆安三年(A.D. 383)同學數輩と長安を發し、西流沙を涉り、葱嶺を越え、逼く五天を周遊し、遂に楞迦に航し、東大船に乗じて支那に還り、中印度摩揭陀國波連弗邑(Pataliputra)阿育王塔南天王寺に在りて得たる大涅槃經を、江南金陵道場寺に在りて佛陀跋陀羅(Buddhabhadra)と共に譯して六卷と爲す。初、東晉義熙十三年(A.D. 414)譯經に著手し、翌年これを譯了す、是れ所謂六卷泥洹經なるものなり。

曇無讖譯の四十卷本に比すれば廣略固より同日の論に非ざれども大乘涅槃の説かんとする理想の大體は法顯譯の六卷本に依るも略これを領することを得。眞常大我・如來常住の金說最も明了に、悉有佛性の旨亦綱領を擧ぐ。時代教學の中心は羅什・佛陀跋陀羅の傳譯に存し、無相般若の大義最も力ありて此の如きの新說に於て未だ與り知らざるなり。加之小乘に滯著せる一類の學徒尙ほ存せるあり、法顯の所譯を讀んで佛說に非ずと難するものあり、無相の學徒亦動もすれば闡提成佛の義に徹すること能はずして道生の深識を沮む。此の如くにして六卷泥洹の傳譯に忽ち時代學界に諸の問題を惹起

し、研究頗に盛んとなり、時代教學の發展に資するところ淺からざりしなり。是より前、羅什の所譯に諸部の般若あり、維摩あり、一代の所説を概括調制の態度に立てる法華經あり、大小論律あり、佛陀跋陀羅の所譯に佛初轉法輪たる華嚴經あり、今亦釋尊終窮の極説たる大涅槃經あり。時代學者の佛敎研究は俄然として進展し、六朝佛敎の精華たる諸種の敎判論も亦實にこの時より興れり。劉虬居士の五時七階説、慧觀の頓漸五時敎判は誠にこの間に成れり。

【大本涅槃】東晉初期の金陵學界は何等提はるる所なく、極めて自由なる態度に立ち、緇素争つて印度文明の精粹を研磨したる結果は闡提成佛。不成佛の問題をも呼び起したるが、之が重要な動機を爲せるものは六卷泥洹たること疑を容れず。然り六卷泥洹は重要な學材たりしなり。然れどもその説の完からずしてその義の徹底を缺く所以は學界の問題に對して解決を與ふるの最後の權威たること能はざりしなり。而して所謂最後の權威たりしものは曇無讖譯の四十卷本なりとす。四十卷本の翻譯は六卷本と共に東晉の義熙十年（A.D. 412）に著手し、玄始十年（A.D. 421）漸くこれを譯了したるを以て始終七年を要せり。

四十卷本の譯主たる曇無讖二藏 Dharmasthana は元中印度人なるが、六歳父を亡び、母利養を好むを縁とし達摩耶舍 Dharmayasa の弟子となり、小乘を學び五明を習ふ。後白頭禪師の精理に服し、

【二】一に曇無讖・或は曇摩讖と記す。古來の讀みくせにもドンムシンとドンムサンとの二傳あり。

樹皮の涅槃經本を授けらるるに依りて之を研尋し、是より大乘佛教を崇信す。年二十、大小乘經を誦すること二百餘萬言に達す。また咒術に善し。後罽賓(Kashmir)に往き、大涅槃前分十卷・菩薩戒經・菩薩戒本等の大乘を傳ふ。小乘學徒喜ばず。是に於て雪山を踰え崑崙を越えて龜茲(Kucha)に達し、後復進んで遂に北涼姑臧に到れり。この間大涅槃等の經本を失はんことを恐れ常に相從ふ。時に河西王沮渠蒙遜(A.D. 403—433) 僭して北涼の王たり。固より佛教を崇信したりしかば、曇無讖の名聲を聞き迎接甚だ厚し。讖これより足を姑臧に止む、實に北涼玄始元年(A.D. 412) なり。讖入涼の始未だ語學に閑はず、故を以て翻傳苟もせず。學語三年漸く傳譯に従事し、先づ大涅槃經初分十卷を譯出す。時に惠嵩・道朗河西に獨歩す。皆その譯場に參じ、また請うて大乘・大雲・悲華・地持・優婆塞戒・金光明・海龍王・勝鬘・楞迦・菩薩戒本等の六十餘萬言を譯す。然るに涅槃の經本品數足らざるを以て、自ら印度に歸り、これを訪索せんと欲し遙に中天に至る。偶母の喪に遇ひ留ること歲餘、歸途于闐(Khotan)に於て涅槃の中分を得、依て姑臧に歸りこれを譯す。後其の品數猶ほ足らざるを以て、使を于闐に遣はし、涅槃の後分を得て續譯遂に四十卷と爲す。玄始三年(A.D. 414) 起稿、同十年(A.D. 421) 十月二十三日宋武帝永初二年に至りて方に竟れり。

(二) 北魏の太武帝三藏の名徳を景仰し、北魏にこれを迎へんと欲し、若に使を遣はして蒙遜に令す。其の辭に曰く、  
 一 聞三彼有三曇摩讖法師一博通多

【二】 梁高僧傳二、二十三至抄。



識羅什之流秘呪神驗澄公之匹朕思欲講道可馳驛送之云云と。景仰の情切なること察すべし。三藏の保護者たる蒙遜固より愛惜に堪へず、言を左右にして應せず。偶西來の僧曇無發なるもの四十卷譯本を見て尙ほ闕分あることを三藏に告ぐ。三藏慨然として起ち、重ねて西遊し、廣く殘闕を搜索せんと欲し、蒙遜に乞うて西征す。遼三藏の北魏に私せんかを疑ひ、表にこれを允し、竊に刺客を發して中路に三藏を害す、三藏歳正に四十有九。時に 北涼義和三年三月（劉宋元嘉十年西曆四百三十三年）なり。

噫曇無識三藏は大涅槃經に依つて大乘に歸し、この經を傳持せんと欲して闕賓に容れられず、雪嶺・崑崙を踰えて遙かに北涼に來り、終始嘗てこの經を奉持して身を離さず。既に涼土に入りて傳譯功を累ね、中分を得んと欲して重ねて流沙を涉り嶮難を踰え、再び經本を手闔に求めて之を續成し。涅槃の殘闕尙ほ西方に存するを聞いて慨然として起ち、奮然西行忽ちにして難に遇へり。その終始一

にこの經の傳弘に専らにして遂にこの經の爲に身命を舍つ。偉なるかな三藏其の徳千古に昭昭たり、澤當に萬代を沾すべし。果然道普は忽ち三藏の志を繼いで涅槃後分の尋訪に西行し、道生は經義を成せんが爲に謗難交起るも屈する所なく、淨影は法難の禍中において泰然義記を著し、章安は三難九易を排して遂に克くこの經を疏し、孤山は病軀を提げて玄機を明にし指歸を究む。乃至古來涅槃經

【三】 異説あり、歴代三寶紀には承和四年とす。今は梁高僧傳並に開元釋教錄に依る。  
 【四】 梁高僧傳二、二十五。

鑽仰の人同工異曲、幾許か三藏不情身命の勇健定相と相似たるものあるを看取すべし。而して是豈三藏自然の感應に非ざらんや。

【所依梵本】 曇無讖譯するところの梵本は、三藏自ら將來するところを譯したりとの説と、別に智猛將來の梵本に依つて譯したりとの説と二説あり。梁高僧傳等の所傳は前説なるが、出三藏記中に出せる大涅槃經記は後説を傳へたり。

北涼智猛は佛跡に詣し、大乘經本を得んと欲して秦弘始六年（二二二）同志と長安を發して西し、遂に印度に入り華氏國阿育王の舊都に羅闍宗（二）と名くる大智の婆羅門に遇ふ。この婆羅門は擧族佛教を崇奉し、國王の欽重するところたり。智猛その家に於て大涅槃經の梵本一部竝に僧祇律其の他の梵本を得て誓願流通す。猛初め長安を發するに同志十五人あり、中路次第に斃れその俱に涼土に歸るもの曇曇一人の

既に北涼に歸りて大涅槃經を譯し二十卷を得たり。北涼亡ぶを以て元嘉十四年（二二二）蜀に入り、十六年七月印度旅行記を著す、元嘉末成都に卒すと云ふ。已上は梁高僧傳に顯れたる智猛の傳なり。また同書に依るに、猛の印度を發して歸路に就きしは甲子歲（二二二）なり。然れば則ち智猛は自己將來の梵本に依つて大涅槃經を譯したるは甲子歲已後の事たらざる可からず。且その譯せるものは大涅槃經の初分にして曇無讖所譯に對すればそれ前半に止まるものと察すべき理由あり、故に出三藏記中に見ゆる大涅槃經記の説は恐らくは誤なるべし。蓋しその説に依るに、智猛の印度より歸り

【五】 梁高僧傳三、二十一已下。

て高昌かうじやうに在るや、偶曇無讖たまたもん北涼ほくりやうに來る。蒙遜もうそん乃使なほつかひを高昌かうじやうに遣し、猛將みやうしやう來するところの大涅槃經だいはんぎやう梵本ぼんぽんを取り、讖しんをして譯やくせしむ、是れこの經翻傳きやうはんでんの本縁ほんえんなりと云ふ。然るに讖しん・猛二人傳譯年代みやうにんでんの前後ぜんごに照し、曇無讖だんむしん一代の經歷けいれきに照し、この説の誤りなること明なり。故に曰く曇無讖譯するところの大涅槃經だいはんぎやう梵本ぼんぽんはその初分しよぶんは自ら遙はるかに將來しやうらいし、常に奉持ほうぢせるところを譯し、中分ちゆうぶんは再び西遊さいいゆうして于闐ちてんに得たるものを譯し、後分ごぶんは更に使つかひを遣つかはして于闐ちてんより得たるものを譯せしなり。智猛ちみやう將來の梵本ぼんぽんに依ると云ふの説は誤りなり。

【南北兩經】曇無讖だんむしん三藏さんざうの大本涅槃譯だいはんねはんやくせられてより久しからず、宗文帝そうぶんでい元嘉年中げんかちゆうなん江南かうなんに傳つたふ、時に姚

秦しん前に亡ほろびて羅什らし門下もんげの英賢えいけん多く江左かうざに來り、北涼ほくりやう後に亡ほろびて曇無讖だんむしん門下もんげの名匠めいじやう亦また江南かうなんに來る。江南かうなんの天地てんちは人法にんぽう共に頓とみに豐潤ほうじゆんを加へ、學事がくじこれより進すすみ、法教ほふきやうの講讀かうだんまた轉うたた盛さかんなり。況いはんや六卷ろくけん泥洹にくわんない先に譯やくせられて道生だうしやうの闡提せんたい成佛ぶつたひ說起せつていり、學者がくしや適歸てききするところに迷まよふ。此時このときに當りて大本涅槃經だいはんねはんぎやうの南渡なんたを迎へ、如來常住にょらいぢやうぢゆうの義ぎ、悉有しつじゆう佛性ぶつじやうの説徹底せつていして世人せじんの疑網ぎまうを斷たんずることを得たり。涅槃ねはんの講讀かうだん是より江南かうなんに重おもきを爲し、遂つひに後世こうせいの所謂いはずる涅槃宗ねはんしゆうなる一學派いちがくはいを生しやうずるに至りし所以ゆゑ豈あに偶然ぐぜんならんや。大本涅槃だいはんねはん南渡なんたの後、學者がくしやの試こころみたる事業じぎふは經本再治きやうほんさいぢの問題もんだいなり。蓋けだし大本涅槃だいはんねはんを以て六卷ろくけん泥洹にくわんないに比較ひかくするに文義もんぎ互たがひに相扶あひた成なずるところあり、卷數くわんすう・品名ひんめいの分割ぶんけつに於て開合かいがふを便べんとするところあり、學者がくしや此に鑑かんみるところあり、初學しよがく・後進こうしんの爲ために謀はかりて校訂かうてい・治定ぢぢやうを加ふるに決けつす。その任にんに當りし主しゆなる人物じんぶつは

京師東安寺慧嚴法師・道場寺慧觀法師竝に白衣士謝靈運等なりとす。

大般涅槃は、卷數四十、品數十三なり、六卷泥洹は、その最後品たる隨喜品第十八は、大般涅槃の第十卷

一切大衆所問品第五に當るを以て彼此の卷品頗る疎密の別あり。茲に於て新本はその前半を六卷泥洹

に照順せしめて大に品數を開き、始終の卷數は之を合し、文字・章句を潤色修治するところありて遂に

三十六卷、二十五品を分つに至れり。人情固より舊本に親し、此を以て一時これを議するものあり。

梁傳の中に所謂慧嚴夢に形狀極偉の一人厲聲嚴に、「涅槃尊經何を以て輒く斟酌を加ふるや」と曰へる

に依り嚴覺めて惕然たりと云ふもの竊かに這裏の消息を傳ふるものに非ず

や。然りと雖も實用に潤澤を加ふるものに存して必しも典雅なるに在らず、

學者實に之を用ふるに従つて新本廣く行はる。是より大般涅槃兩種を分ち

未再治の舊本は北本涅槃と名け、再治を經たる新本は南本涅槃と名けて南

北兩經を分つに至れり。後の學者或は南本を釋し、或は北本を疏す、後に至りて知るべし。

【品數開合】 品數の開合は固より經本の外形に屬し深く論ずるの要なきに似たれども、これに依てま

た略して經本の内容を推するに便あり。今次に略して六卷泥洹と南北兩經との品數開合を知るべき

略圖を作り、添ふるに後分涅槃の四品餘を以てす。之に依つて見るに、六卷泥洹の隨喜品を以て終れ

るは五行十德の大義を闕くことを知らしめ、南本品數の開列は全く六卷泥洹に照應するものなること

【六】 調卷必しも一ならずりし

か、梁傳竝に嘉祥の遊意には

三十三卷と記せり。

【七】 梁高僧傳七、七卷。

を領すべし。而してまた、大本涅槃は未完の經にして後分涅槃少かにその缺を補するに擬するものなることを知らしむ。

(六卷泥洹)

(南本涅槃)

(北本涅槃)

(後分涅槃)

序品	一	序品	一
大身菩薩品	二		
長者純陀品	三	純陀品	二
哀歎品	四	哀歎品	三
長壽品	五	長壽品	四
金剛身品	六	金剛身品	五
受持品	七	名字功德品	六
四法品	八	四法品	七
四依品	九	四依品	八
分別邪正品	一〇	邪正品	九
四諦品	一一	四諦品	一〇
四倒品	一二	四倒品	一一
如來性品	一三	如來性品	一二
文字品	一四	文字品	一三
鳥喩品	一五	鳥喩品	一四
月喩品	一六	月喩品	一五

關題

閻 菩薩 品 一 七 — 菩薩 品 一 六  
 喜 品 一 八 — 一切大衆所問品 一 七 — 一切大衆所問品 五

現 病 品 一 八 — 現 病 品 六

聖 行 品 一 九 — 聖 行 品 七

梵 行 品 二 — 梵 行 品 八

嬰 兒 行 品 二 一 — 嬰 兒 行 品 九

光明通照高貴德王菩薩品 一 — 光明通照高貴德王菩薩品 二 二

師子吼菩薩品 二 三 — 師子吼菩薩品 一 一

迦葉菩薩品 二 四 — 迦葉菩薩品 一 二

橋陳如品 二 五 — 橋陳如品 一 三 — 橋陳如品 餘

遺 教 品 一  
 遺 源 品 二  
 茶 毘 品 三  
 廓 潤 品 四

【後分涅槃】

大本涅槃は未完了の經なること文に在て明なり。

唐義淨三藏の所傳に曰く、大乘涅槃

はその大數二十五千頌あり、翻譯すれば六十餘卷を成すべし。その全部を檢するに竟に獲ず」と云云。

涅槃殘缺索訪の事たる、實に歷代西遊學者の宿題たりしなり。故に曇無讖

三藏曰く、(五)此經の梵本三萬五千偈あり、此方には百萬言を滅す。今出

【八】義淨西域求法高僧傳上、  
 【九】梁高僧傳卷二、二十三看。

すところは止だ一萬餘偈のみ」と。遂に残缺を索訪せんとして西に向つて發し横難に遭へり。道場寺の慧觀また後分を得んと欲して宋の太祖資給の下に沙門道普をして書吏十人を將ゐて西行尋訪せしめしも難に遭つて果さず、「涅槃後分此土無縁」の歎は此時より創れるなり。梁朝の諸家は相共に餘分此土に縁無きを歎き、章安は居士調僧經に涅槃後分は更に燒身品・起塔品・囑累品ありと云へるを引いて三品此土に來らざるを慨せり。然るに唐朝に入り會寧入竺の途南海波凌國に次し、若那跋陀羅と共に後分涅槃二卷四品餘を譯せり。

後分涅槃は即ち大般涅槃經後分上下二卷これなり。唐麟德年中 (A.D. 664-665)

蓋府成都の沙門會寧入竺巡禮を志し、船を泛べて南海を過ぐ。路波凌國を經、停住三年なり。時にその國に若那跋陀羅 (Jinabhadra) あり、會寧と共に後分涅槃二卷を譯す。會寧經を以て遙かに支那に寄せ、先づ交州 (廣東) に達す。後儀鳳年間交州の都督梁某、使を以て經を送り京兆に入る。儀鳳三年戊寅 (A.D. 678) 大慈恩寺僧靈會この經を東宮に啓請し天下に施行す。

今この經は初に陳如品餘ありて、大本涅槃に次ぎ、更に遺教・還源・茶毘・廓潤の四品を存し稍大本の殘缺を補ひ得たるもの如し。然るに義淨はこの後分を以て 二) 阿笈摩經内より如來涅槃經の事を譯出したるものにして大乘涅槃と頗る相渉らず」と云ひ、小乘涅槃經に屬すべきものと爲せり。

【一】譯經圖記、義淨求法高僧傳上。

【二】求法高僧傳上。

(三) 智昇は却つて疑を存し、「この經は長阿含初分遊行經と少分相似て同じからず。經中には法身常存(と云ひ)、常樂我淨(と云ひ)、佛菩薩の境界にして二乗の所知に非ずと言へば、大(乘)涅槃の義理と相渉れり。(加ふるに)經初に復憍陳如品末と題し文勢相接す。且く此に編す」と云ひ、寧ろ大乘涅槃經に屬すべきものと爲すに似たり。私に案するに、この經如來入滅の事を敘すること頗る小乘涅槃の說相に似同すと雖も、大義は大乘の理趣を具へ、文相また大本に次ぐ。義淨恐らくは經の現文を讀まずして彼の說を爲すか、智昇の說依るべきに似たり。

【印度流傳】

釋尊滅後印度に於ける大教の傳流は通説の如し。その中、特に大乘大涅槃經傳持講讚の歴史は餘他大乘諸經の流傳史と共に頗る明了

を缺くものあり。今經結集(成立)の研究は且く他日に委す。大衆部の學者が蚤に華嚴・法華・金光明・般若等の諸大乘經と共に傳持したりとの事は、世尊尊者 Vasumitra の異部執輪論に見えたり、然るにこの記未だ確説たるを得ず。龍樹菩薩 Nāgārjuna の諸論は頗る諸大乘經を引用すと雖も、未だ大乘涅槃經の目を見ず。その資提婆菩薩 Zhiya 楞迦經に付して盛に外道小乘の涅槃觀を論斥すと雖も直ちにこの經に就て大乘涅槃の深義を顯揚するところあらず。茲に羅暎羅多 Ishināta 尊者あり 龍樹第二の資と傳ふ、中論八不の義を釋するに常樂我淨の說を以てすと云ふ、これ

- 【二】 開元釋教錄卷十一。
- 【三】 付法藏經、六。中論疏、十末。三論疏文義要卷一。
- 【四】 嘉祥、中論疏三本、二十
- 五。

(四) 嘉祥等の傳ふるところなり。この傳説にして信すべくんば羅暎



羅多は大乗涅槃經の義を以て中論の八不を釋したるものと見るべく、同時にこの經は當時に在つて闍浮に流行したりしを察すべし。如來滅後九百年中無著(Asaśra)は世親(Śālisth)の二大士あり。盛んに大乘瑜伽の深義を唱へ、特に世親論主は諸多の大乗論部を著せしが、その中簡單ながら此經の註釋たる「大般涅槃經論」(Mahā-parinirvāṇa Sūtra Śāstra)一卷を著し、また別にこの經所說の本有今無偈を釋したる「涅槃經本有今無偈論」(Nirvāṇa-sūtra-parivṛtṭi-paryāyātīkā-gāthāśāstra)を著す。前者は東魏(A.D. 501—528)時代に來れる印度僧達磨菩提(Dharmabodhi)の譯するところにして、後者は梁の代西印度僧眞諦(Ānandīya)の譯するところなり。この二書は現存印度佛典中、大般涅槃經の註釋として存する唯一のものなりとす。世親已前の出世と察し得る後漢の支婁迦讖(Jōkarakṣa)(A.D. 147—186)が既に大乘涅槃の支分と見るべき胡般泥洹經を月支より將來傳流し、曹魏の安法賢・吳の支謙・西晉の竺法護等相繼ぎて傳譯したるに徴し、月支・安息・西域を経てこの經既に流布したりしを知るべく、隨つて印度本土に世親大士の註釋有るを見るは毫も不自然に非ず。然るに此に奇とすべきは、法顯・曇無讖等諸三藏傳譯の史蹟これなり。蓋し曇無讖は始めて初分十卷を白頭婆羅門と稱する人より中印度に得て將來傳譯す。而して罽賓等の地方にはこの經を信奉せざりし形跡あり。法顯三藏は印度周遊中特に中印度華氏城阿育王塔南天王寺に摩訶僧祇律等と共にこれを得たることを特記し、而してその經本はまた是れ經の初分なり。智猛も亦中印度華氏國阿育王舊都に於て

大智婆羅門と云へるよりこの經の初分、竝に摩訶僧祇律等を得て將來傳譯す。所謂華氏國は Pāṭaliputra 故なり、傳來の事蹟互に相通するところあり。且つ曇無讖は自ら將來するところを譯了して遙かに印度の故地に中分を求めて得ず、歸途却つてこれを于闐に得、後その後分を更にまた于闐に得たり。是等の事蹟を綜合するに、この經流布の因縁は印度の故地に在つて猶ほ且つ廣からず。加之、その經本も世親七分の科釋に徴するに完本に非ずして所謂殘缺本たりしものと察せらる。而して于闐國の佛教徒が印度故地に存せざりし後分をも傳持したりし形跡を存するは、頗る奇異の感なくんばあらず。

世親大士已後講讀の史蹟全く闇黒なり。眞諦三藏が世親の註釋傳譯の事蹟と會寧が南海波凌の地より後分涅槃を發見傳譯したる奇異なる事蹟と、竝に義淨三藏が西域求法高僧傳中に記するところとを綜合してこの經の印度故地に於ける歴史の意外に寂寞たりしを想定するに難からず。

## 【支那流傳】

大乘涅槃經の支那に傳譯せられたる歴史は後漢の支讖に遡ると雖も、涅槃經の經典として學界に承認せらるるに至りしは、曇無讖三藏の大本涅槃傳譯の功に歸すべく、その直接の前驅たりしものは實に法顯三藏の六卷泥洹ならざるべからず。故に支那に於けるこの經の流傳は法顯・曇無讖兩三藏に元由すと云ふべし。

鑽仰の歴史は道朗・道生・慧嚴・慧觀に發端すと見るべし。道朗は夙に河西に獨歩し、曇無讖の大本譯場に參じ、後これを講讀し、義疏を著し、

【一五】 嘉祥大乘玄論三。

五門を分別して佛性中道の深義を發明したる名匠なり。道生は所謂羅什門下四聖の一人にして闡提成佛の義を發明して時代學界を驚かし、慧嚴は大南渡の後校訂・再治の中心人物たりし人、而して慧觀は大北修治に力ありしのみならず、進んで頓漸五時の説を創め、涅槃經格を第五時佛性常住教と判せしは江南諸家教判の根柢を定めたるものと云ふべし。

道生、慧觀已後、山門三論の勃興より、南岳・天台の講道に至るまで、梁朝を中心としてその前後に互り、支那江南の佛教は殆んどこの經の講讀を中心となせり。宋朝には寶林・慧靜・曇無成・僧含・僧莊・道汪・靜林・慧隆・慧定・曇斌・僧鏡・超進・法瑤・道慈等の諸匠あり。齊朝には道登・曇度・僧鍾・僧盛・僧惠・僧宗等の名匠あり。皆涅槃講讀に力あり。寶林・慧靜・僧鏡・法瑤の如き各この經の義疏を作る。僧宗の如きは生涯この經を講ずること百遍に及ぶと云ふ。梁朝の佛教は涅槃經中心の佛教と稱するも過言に非ず。古來有名なる梁朝の三大法師、所謂光宅寺法雲・開善寺智藏・莊嚴寺僧旻の三師は各得意とするところ別異ありと雖も、その本宗は共に經に在ては涅槃宗、論に於ても成論大乘に立脚するものたる一同なり。泥んや智秀・寶亮・僧亮・曇准・慧皎・法朗・法令・僧遷・曇愛・曇讖・道慧・法安等の名匠・英賢枚擧に違あらず。加之梁武帝は親しく自らこの經を講讀し、また寶亮等に勅してこの經の義疏を作らしめ、且つ自ら毫を執つてその序を製す。現に傳ふるところの大涅槃經集解八十卷即ち是なり。寶亮・法朗・慧皎・僧遷・寶瓊等皆各義疏を作る。就中寶亮法師は筆舌雙運頗る力め、その生涯この經を講

するもの八十四遍に及ぶと云ふ。この經の講讃史は印度・支那・日本を通じて梁朝に至極と爲す。當代に成れる諸家の教判を案ずるに、或は三時・四時・五時等判目を殊にすと雖も、佛性常住の經を以て究竟の實義と奠むるに於ては歸を一にす。

陳・隋の間、山門三師（道明・僧詮・法明）の三論興りて成論大乘衰へ、天台・章安の佛教興りて涅槃宗勢漸く衰ふ。然りと雖もこの經の講讃は梁朝已後陳・隋を経て唐朝の始終に互り、未だ全く衰へず。行等の涅槃經を講ずること百十遍、靈潤の七十遍、道洪の八十七遍に及ぶるが如きあり。法上・曇延・惠遠・靈裕・灌頂・古藏・玄會・晋空・良愿・繼延・思孝・憬興・太賢・極大・義寂・法實・惠沼・道暹・行滿等の如き各義疏を著してこの經を釋す。淨影寺慧遠の義記二十卷、章安大師灌頂の玄義二卷、疏十五卷、嘉祥寺古藏の遊意一卷は現に存し、斯學の珍たり。その他この經の講讃に名あるもの道憑・靈詢・道慎・僧妙・寶海・法安・慧哲・法敏・法常・道綽・玄鑒・智衍等頗る多し、繁を恐るるが故に列せず。近くは梁・唐の僧傳並に經錄等を按じて知るべし。

南北朝に於ける斯經の研究は寶亮・淨影・章安・嘉祥の四疏に依て代表せらるべく、その後世に力あるものは獨章安を推す、蓋し天台教學傳流の餘勢なり。唐朝の講讃は法實・憬興・太賢・義寂等あり、大陸より朝鮮半島に互り、始終その人少からずと雖も荆溪湛然の治定とその門下行滿・道暹の註釋を以て終りを告ぐ。而して支那佛教史上この經講讃の掉尾を爲すものは趙宋の初運に出でたる孤山智圓

なるべし。

孤山智圓は章安の玄義を釋して發源機要四卷を著し、疏を釋するに三德指歸二十卷を著し、且添ふるに後分涅槃二卷の釋を以てす。後分涅槃の釋あるこれを以て嚆矢と爲す、而して唯是あるのみ。章安の疏文由來簡潔に過ぎ初學解し易からず、行滿・道暹の子釋ありと雖も簡樸用ふるに足らず。孤山の釋ありて始めて眉目を明かにすべし。章安涅槃の疏は孤山の釋を以て終歸と爲し、また以て支那に於けるこの經講讀の餘輝と爲す。

【皇朝鑽仰】 皇朝に於ける涅槃講讀の歴史は極めて簡單なり。皇朝文明の太祖にしてまた吾佛教傳弘の高祖師たる聖德皇太子は古今唯一人の涅槃宗系統に屬すべき學者たりしなり。勿論太子佛教の眞面目は宗派未分の境地に位し、爾後一切の學派・宗派の源頭と見るを穩當とすれども、若しその由來を討ねて梁朝佛教の淵源を探り、更に順觀して繼承するところを論ずれば、明かに梁朝佛教の正系に屬し、涅槃宗學者たるの資格を十分に具へ給へるを見るべし。蓋しその講讀・註疏する所は法華・維摩・勝鬘の三經に止りて所謂大涅槃經に及ばずと雖も、三經疏釋の立脚せる教判の根據は明かに光宅法師五時教判を繼承して涅槃常住の經教を以て佛說一代の至極と爲すものなり。故に法華疏中屢光宅の義に依つて五時の説を爲す。(一六) 權實二智を五時に約して判じ、或は四佛知見に約し、或は佛果

【一六】 上宮法華疏卷一、二十五至二十七。同一、四十時。同一、五十。同四、十一、三十四等の文を見よ。

の常無常に約する等の文の如し。

太子の涅槃宗系に屬し給ふこと此の如しと雖も、太子自ら稱して涅槃宗侶と云はず、またその講讀するところは所謂三經に在りて就中法華を重しと爲す。竊に太子の聖襟を推するに法華の萬善同歸と佛壽無極とは、直ちに是れ涅槃の悉有佛性と如來常住とに相同じく、法華の中に涅槃を存し、涅槃の妙諦全く法華の上に在つて十分なるを知る。太子實に此に著眼し給ふ。故に曰く「漸行の機は涅槃を要す、頓證の人は法華に足る」と。太子既に此見地に在つて法華を釋し給ふ。故に太子に在つて法華を釋するは即ち涅槃を釋するに同じ、その涅槃宗系に屬して併も所謂涅槃宗學者の分に屈在するものに非ざるや明かなり。

太子已後三論・成實・俱舍・法相等所謂古來の諸宗傳來し、天台・眞言の二

【一七】 上宮法華疏卷四、三十四取意。

宗これに繼ぎ、華嚴と律宗とその間に介在し、源平・鎌倉に至りて所謂禪・淨土・日蓮等の諸種新佛教競ひ起る。この間特にこの一經を講讀註疏する人殆んど存する莫しと雖も、古來已來佛性の問題に絶えず諸宗學匠の間に論難せられ、性相・顯密・各特異の説を發揮す。然れば則ち直接に文字章句を釋する無しと雖も、この經の大義は皇朝佛教古今評論の主題たりしを見るべし。源平の間に叡山東塔東谷に有名なる實地房證眞大法印あり。親しく筆を操つて涅槃經疏抄四卷を著し、以て行滿・道暹・智圓の諸註を評論して章安の疏意を明かにするに努めたり。この經の疏釋として本朝現に傳ふるもの唯是あ

るのみ。

直接の註釋はこれ無しと雖も本朝佛教の諸宗は何れも涅槃經の根本義を取つて問題と爲し、且自の宗義を莊嚴せざるはなし。この意味に於て皇朝佛教は涅槃經に對する眞實の鑽仰者なりと見るを得べき歟。故に予常に謂へらく、「印度佛教は涅槃經の作者なり、支那佛教はこの經の文を釋し、皇朝佛教は實に今經の義を辨す」と。而して更にこの經の眞精神を體驗するものは誰ぞ、今より後この經の眞骨頂を體驗する者は果して何種の人たるべき歟。

【諸家教判】次に諸家の大涅槃經觀を敍すべし。所謂諸經中、この經の有する地位に關し、古來佛教學者の見るところを明かにする是れなり。是れ固より聖典成立史の根本研究を遂げたる後ならでは頗る架空の嫌なきに非ずと雖も、古來佛教の見るところを如實に傳ふるも亦この經講讀史中重要な問題たるを以てなり。案ずるに教判は支那佛教の特長たるべし。而してそのこれあるに至りし最も有力なる動機を爲せるもの一は大涅槃經なるべし。蓋し竺法護・鳩摩羅什婆の譯ありと雖も、未だ一代の聖說を具備せざるが故に、明かに教判的意見を發表せしむるの因縁具足すと云ふべからず。偶佛陀跋陀羅あり。華嚴經を譯して成道最初の聖說を紹介し、法顯・曇無讖の大涅槃經を譯するありて如來終窮の遺教を明かにすることを得て、此に聖說一代の始終を決し、中間大小乘諸經ありて縱橫縁に赴くを知る、此の如くにして始めて一代佛說の本末・始終を大觀すべき礎石を得たり。南北諸家の教判是

より雲湧霧發する所以また宜ならずとせんや。

羅什の一音未だ明據を得ず、教判らしき教判の創成は略道場寺慧觀に在るべし。觀師已後、江南・江北諸家の説蘭菊美を恣にすと雖も、南地の説多く觀師の説と同工異曲す。北土の諸判また初頓・漸極・同圓歸一を大綱と爲すに似たり。天台章安出でて同一醍醐の説を唱へ、金陵大師また諸大乘經道無別といひて涅槃特勝の思想を融せしより、唐朝已後諸家の涅槃觀は一變せるを見る。所謂賢首大師の華嚴中心觀、慈恩大師の深密中心觀、荆溪大師の法華中心觀、而して

無畏・不空の大日中心觀等陸續崛起し、涅槃經の地位は、是等中心經典に一等を輸するに及べり、且く五六の説を掲げて三隅を推せしむべし。

【慧觀五時】 宋道場寺慧觀法師の大涅槃經觀よはその立つるところの

漸五時教判に在りて明かなり。師は先づ聖說一代の諸經を大判して

漸・不定の三種を分ち、漸中更に五時を別てり。

頓教

華嚴經——爲三菩薩、具足顯理

初時教——有相教——小乘諸經——三乘別教

二時教——無相教——般若經等——三乘通教

漸教——三時教——抑揚教——維摩・思益經等

四時教——同歸教——法華經

【一八】 天台法華玄義第十卷、嘉祥三論玄義上卷、大品遊意、三論大疏等亦之を出す。

【一九】 一説に頓漸二種教のみ、不定は後人の加ふる所なりと。



偏方不定教

金光明・勝覺經等

頓・漸・不定の三教は古來南地の通用と云ひ、(二〇)或は南北の通判と稱す。頓教は如來成道最初頓説の教法なるを示す。漸教は初頓華嚴の會中小機の聲啞の如くなるを哀愍し、一定の傳導的經綸を立て、これに依りて次第漸次に化育せられしを云ひ、この中更に年時に約して前後を明かにし五時を建立す、所謂有相教・無相教・抑揚教・同歸教・常住教是れなり。(二一)不定教は具さに偏方不定教と云ひ、(二二)一代の化儀に與からず、唯一機一縁に趣くが故なり。また三乘有相の法を説くものは小乘諸經の説なり(有相教)、般若は無相大乘の法門なり(無相教)、維摩經は後の大乘法を以て前の小乘法を彈斥褒貶するものなり(抑揚教)、更に大乘の深義を明かにして三乘の異路等しく一乘に歸し、萬善の同歸を説くは法華經なり(同歸教)、而して如來最後の臨滅に當りて佛性常住の幽義を光闡したるものを大般涅槃經と爲す(常住教)。故に涅槃經は如來所説の經中漸教の至極にして、眞實了義の妙典と判するを慧觀の大涅槃經觀と爲す。

齊上定林寺僧柔法師

齊教師謝寺慧次法師

開題

【二〇】この説は誤なるが如し、法華玄義第十卷の文中一字の誤寫に由來するか。

【二一】不定教は慧觀・劉虬の時未だこれあらざるが如し、今は且く古徳の説に順ず。

【二二】一定の傳導的經綸に與からざるを云ふ。

梁光宅寺法雲法師

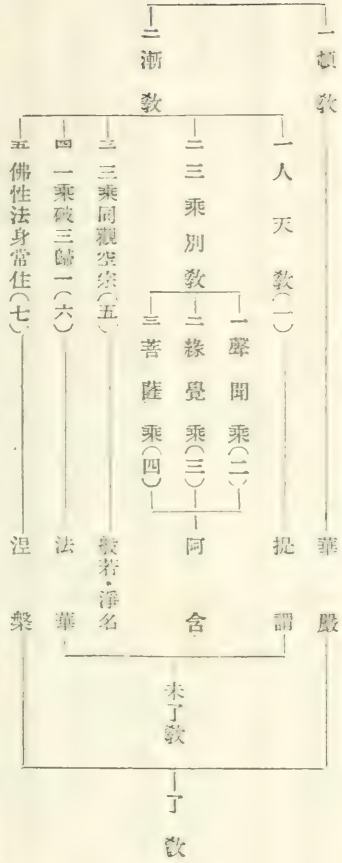
梁開善寺智藏法師

是等の諸師は皆觀師の五時教を傳へてその説を同じうすと云ふ。

【劉虬七階】 慧觀師に次ぎて顯はれたるは、劉虬居士の五時七階説なるべし。

居士の傳未だ審かならざれども、身荊州の武當山に隱れて佛教に通ず。

今 諸記を綜觀してその説を見るに、



この説は頓漸二教の漸中に於て五時七階を分つ。その五時の初に人天教を加ふる、一化の始終を約して、了・不了を明かにする、共にその特色を見るべし。

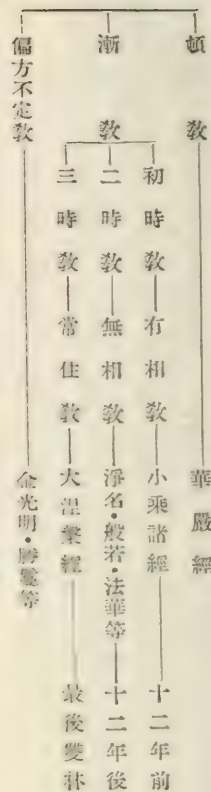
【笈公三時】 虎丘山 笈師の三時教は前者の略なるものと見るべし。頓・

【三】 出三藏記卷九、

淨影大乘義章、卷一、新、  
慈恩大乘義林章、卷一九、  
慧祥法華傳記卷二、九、  
慈恩法華玄贊卷一。

【四】 天台の法華玄義卷十上、  
十七、未だその傳を得ず。

漸・不定の三教を本とする（こ）前に同じ、漸中三時を開く。

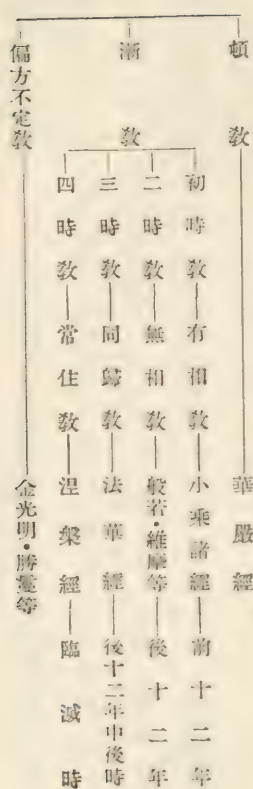


漸教中、如來成道後前十二年間の説を一括して有相教と判じ小乘諸經をこれに屬し、十二年後涅槃に至る法華・般若・維摩等の諸大乘經は悉く合して無相教と判す。而して大涅槃經は特に別して常住教と標しその地位を高尚にすること前に同じ、蓋し共に涅槃宗意に立脚するが故なり。

【宗愛四時】

宗愛師の大涅槃經觀は、この四時教判に顯はる、四時は即ち

笈師の三時教中無相教を別開して同歸を加ふるもの是なり。



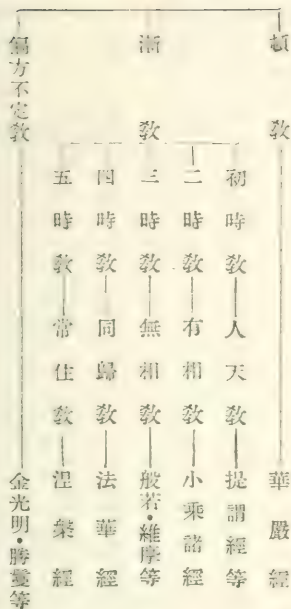
【五】天台法華玄義卷十上、+  
七、未だその傳を得ず。

前の三時教に在りては法華經をも般若・維摩等の諸大乘經と合して一無相教中に屬せしが、今は特に法華經を別開して同歸教を立つるものは、本の觀師五時教に還るに似て、また實に法華經の價値の時代學界に於ける認識を示すに非ざる歟。若し果して然らば是れ聽て涅槃特勝の思想的權威が漸く將に動搖を來さんとするの由漸として見るべし。

梁莊嚴寺僧旻法師も亦この説を承用すと云ふ。

【云】天台法華玄義卷十、北地師の一説として傳へ、その名を逸せり。

【北地五時】南北朝の閑、江北の天地。また五時教を建立するものあり、頓・漸・不定の三教に本き漸中五時を聞く、五時の名目少しく前來と異なるものあり。



この教判は前の四時教の初教たる小乘教中より人天教を別開したるを特色とし、その他何等別異なし、その劉虬所判と相似たるを注意すべし。唯江南諸家と略同一の教判的見地に立てる涅槃特勝の佛

りうくんのゆう 教観を有する學者が、當時江北にも存せしことをこれに依りて知るに足らん。

【光統四宗】 當時江北の地に在りては流支三藏の一言教竝に半滿二教、光統律師の頓・漸・圓三教竝に

四宗教判、自軌法師の五宗教、法遠師の六宗教、某禪師の有相・無相二種大

乘教、慧誕法師の頓漸二教、淨影寺慧遠の二教四宗等の諸家の判釋頗る繁

多なり、今且く後世に有力なりし光統惠光律師の四宗教を出して以て江北

諸家の涅槃經觀を代表せしむべし。

北魏光統律師の四宗教は時代佛教教學に對する批評にして且つ分類なりと見るべし、故に自ら江

南諸家の化儀に偏するものと批評の態度を異にす。所謂四宗判とは、

- 一 因緣宗 —— (立性宗) —— 毘 曇 —— 六 四 四 緣
- 二 假名宗 —— (破性宗) —— 成 實 論 —— 三 假 淨 虛
- 三 誑相宗 —— (不眞宗) —— 大 品 三 論 —— 諸 法 無 相
- 四 常 住 宗 —— (顯實宗) —— 涅 槃 華 嚴 —— 佛 性 常 住

因緣宗とは諸法は因緣の所生なることを説けるものにして毘曇の説これなり。假名宗とは一步を進めて因緣所生の諸法は假名のみありてその實無しと説けるものにして成實論の説これなり。次に誑相宗とは更に一步を進め、諸法は因緣假名なるが故にその體唯空にして實有に非ず。實有に非ざるが故に諸法差別の相は是虚誑不眞の相なりと説き諸法畢竟空寂無相と説く、般若經・維摩經・中觀論・大智

【七】 法華玄義卷上、十八、

華嚴五教章卷上、二、四十一、

華嚴探玄記卷一、

大乘玄論等參照。

度論等三論四論の説これなり。次に常住宗とは如來常住・佛性常住を示せる眞實究竟の法を説けるものにして、大涅槃經・華嚴經即ち是なり。

光統律師は江北地論宗の祖として後世に所謂華嚴宗の高祖師と見るべき人なり、然れば則ちその所宗は華嚴に在るべく、一代の聖説は初頓華嚴を以て至極の大乗と爲すものなること論勿し。而して臨滅の大涅槃經を以てこれと位を同じうし、共に常宗と稱するものは、この師また江南諸家涅槃宗者とその揆を一にし、初頓・漸極一味同實と爲すものと見るべし。

光統律師の後、自軌師の五宗は進んで法界宗を加へ、法凜師の六宗は眞宗・圓宗を加へ、以て共に華嚴の特勝を論ず。この説即ち後の華嚴宗別教一乘義の由漸を爲す。

【淨影二教】 隋淨影寺慧遠法師の大涅槃經觀はその著 義記の初に見え

たり。その大意に曰く、一代佛教は大判して二となす、一は聲聞藏にして二は菩薩藏と名く。前者は聲聞法にして後者は菩薩法を教ふるものなり。前者の中二あり、一は聲聞の聲聞にして、二は緣覺の聲聞なり。前者は本來聲聞道を求め、常に四諦を觀するを樂しみ、聲聞性を成じ、最後身に於て值佛聞法(四諦法)し遂に得道す。後者は本來緣覺道を求め、常に十二因緣法を觀するを樂み、緣覺性を成じ、最後身に於て值佛聞法(十二因緣法)し、得道す。此二人に對して説くところの教法を、共に聲聞

【二】 淨影寺慧遠著涅槃表記卷一上初下に依る。その大乘義章卷一、七已下の説は説いて更に精し。

藏ざうと名なく。次に菩薩藏ぼさつざう中に又二またにあり、一いつは漸入ぜんにふにして二には頓悟とんごなり。前者ぜんしやは過去大乘くわこたじやうを修習しゆじゆし、中間ちゆうけん小乘せうじやうを學まなび、後還のちまた大乘だいじやうに入る、故ゆゑに漸入ぜんにふと云いふ。後者こうしやは久ひさしく大乘相應だいじやうさうじやうの善根ぜんこんを習ならひ、中間ちゆうけん小乘せうじやうに依よらず、始終しじゆう大乘だいじやうにして悟入ごにふす、故ゆゑに頓悟とんごと云いふ。この二藏にざうまた大乘だいじやう・小乘せうじやうの別べつ、半字はんじ・滿字まんじの稱しやうあり、名別なべつなれども義意ぎいは一いつなり。今いまこの涅槃經ねはんぎやうは菩薩藏ぼさつざう中漸教ちゆうぜんきやうの衆生しゆじやうを教化けうけするの法門ほふもんなり、故ゆゑに下の經しもきやう文ぶんに先まづ半字はんじを教をしへ、後滿字のちまんじを教をしふと説とけるもの即すなはち是これなりと。

淨影じやうやうまた別べつに四宗ししゆうの判はんあり、二元大乘義章だいじやうぎしやう卷一くわんいちに示しめすが如ごとし。然しかるに今いまの二藏頓漸にざうとんぜんの説せつ、正まさしく經きやうの義記ぎきに出いづ、涅槃經ねはんぎやう觀くわんの本據ほんこ茲こゝに在あつて存ぞんすと云いふべし。然しかれば則すなはち淨影じやうやうの意い、その本宗ほんしゆうたる地論宗意ぢろんしゆういに依據えきして華嚴經けこんぎやうと頓教とんきやうに屬ぞくし、涅槃經ねはんぎやうを大乘教だいじやうきやう中の漸教ぜんきやうに屬ぞくするものと見るべし。これ彼の祖師そし光統くわうとう律師りつしの見みるところと異なる處ところにして、地論宗成立ぢろんしゆうせいりつの歴史的徑路れきしきてきけいに鑑かんみ師資ししの問もん此こゝの如ごときの別べつを生せいずるに至いたれるは、蓋けだし止とむを得えざる所以ゆゑなるべし。

此かくの如ごとくにして江北かうほくの學界がくかい先まづ涅槃經ねはんぎやうの地位ちゐを下くだし、涅槃特勝ねはんとくしやうの根柢こんてい充みた動轉どうてんせり。隋ずい・唐たう交朝かうちやうの問もんに出いでたる三師さんし中ちゆう、淨影じやうやうの批判ひはん先まづ此こゝの如ごとし。天台てんたい・金陵きんりやうの説果せつぐわして如何いか。

【金陵無判】年時ねんじの序ついでを以もつてすれば先まづ天台てんたいを敍じよし、次つぐに金陵きんりやうを以もつてすべし。今義便いまぎべんに約やくするが故ゆゑに嘉祥かじやうを前まへとし、天台てんたいに先まちてその教判けうはんを略説りやくせつすべし。

【二元】大乘義章卷一、六十七、五教章上二、四十三、參考すべし。

金陵嘉祥寺吉藏法師の佛敎觀は二藏・三法輪の二種敎判を大概とす。二藏は般若中心の敎判にして三輪は法華中心の判釋なり。この二者のうち金陵法門の大體は二藏敎判を主とすと見るべし。

二藏は即ち聲聞藏・菩薩藏なり、是れ亦大小二乘・半滿二敎の謂に殊なるなし。然るに金陵の敎判に在りては諸大乘經顯道無別と云ひ、諸經結構の別なるは所謂應病與藥の隨緣假設なるものにして、その實際的價値は機敎相應の處に存し、等同勝劣の互成を談ず。此の如きの説は畢竟無判を判と爲すものにして實に金陵敎判の美談と見るべし。故にその大涅槃經觀に在りても、華嚴・般若・法華・維摩等の諸大乘經と根本大道を詮すに於て何等軒輊あることなし、大道とは諸法實相の大義是なり。然るにこの大義を明すに般若は直に實相の理を顯はし、法華は會三歸一に約して顯はす。大涅槃經も亦實相の理を顯はすに於て相同じと雖も、佛性常住の義に寄顯するを特色と見るべし。已上を金陵涅槃經觀の要領と爲す。

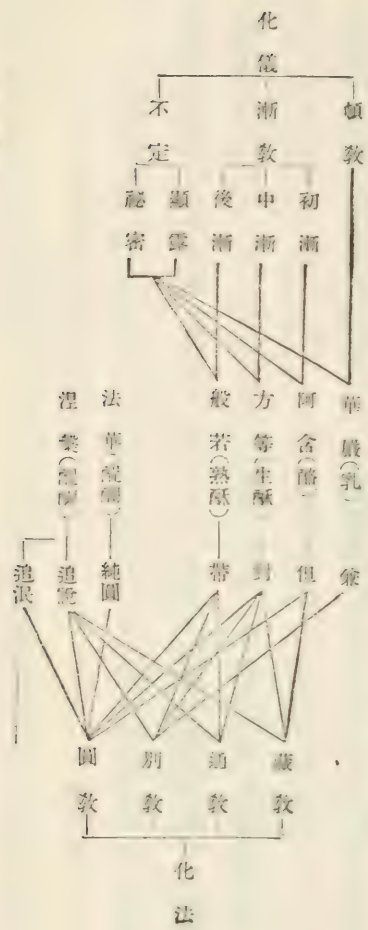
須らく知るべし、金陵の説は顯道無別の故に諸經に勝劣無く、涅槃と般若と全然同値なり。唯機縁萬差の故に衆説あるのみと。この説は大涅槃經を以て諸經と同値と爲すが故に、江南諸家由來の涅槃特勝説と全く異なれり。これ亦古來の涅槃特勝觀を肯定せざるものにして、前の淨影に比すれば稍緩なるのみ、また天台の同醜酬と云ふと別異なること後に説くが如し。

【天台敎判】 章安一度この經の義疏を著してより、その書獨り後世に行はれ、後昆專らこの經講讀



の指南とす。然れば則ち、章安の教判は諸家の宗にして、章安の説最も聞かざる可らず。然るに章安の依るところは、全くその師天台に在り、況や天台の佛教たる、南北朝教學に對する一種の概括たり。その大涅槃經觀は、由來の學說を一變したるの特色あり、加之、今この經の科釋、全く天台・章安に依るを以て特にこれを委悉すべき必要あり。故に章安に先ちて豫め天台の説を敍せざるべからず。

天台の佛教觀は明かに法華中心觀に立脚し、その見地より一代の聖說を綜判したるものなり。所謂由來の頓・漸・不定の三教に加ふるに龍樹大智度論の顯密義を以てして、別に化儀の四教を建立し、由來の三教五時を合糅一括して、別に五時を建立し、以て一代の始終を盡し、竝に前人未だ發せざりし、化法四教を創說し、細に諸經の内容を剖判す。所謂五時八教縱横の判釋具さに教意を詮すものなり。



この五時八教は釋尊成道後入滅に至る四十五年間の傳道を内容・形式の兩面より批判分類したるものにして、五時とは此四十五年間の傳道は五期の別を爲すを謂ひ、成道最初三七日中に説かれたる深玄高妙の法門を華嚴經と爲し、次の十二年間は鹿野苑に在つて四阿含經等の小乘教を説き、次の數年間は方等として諸種の大乗經典を説き、次の二十二年間は大般若經等の諸部の般若を説き、斯くして機緣漸く純熟したるを待ちて、次に正しく法華經を説きて傳道の目的を遂げ給へども、法華經の説會に漏れたるものを招收せんが爲と、竝に未來の惡機を警導せんが爲との理由より、更に最後入滅に當りて一日一夜中拘尸那揭羅沙羅雙樹林下に於て大般涅槃經を説き給へり。已上初頓華嚴已後臨滅涅槃に至るまで聖說一代の始終を剖判して五期と爲すものこれを五時教判と云ふ。

この五時説法の經典を傳道の方法上より分類するときは化儀の四教となり、その内容たる思想上より分類すれば化法の四教となる。化儀の四教とは華嚴經は釋尊成道後最初頓かに説かせ給へるが故に頓教と云ふ。阿含・方等・般若の三時經典は、機根を純熟せんが爲に、淺より深に、卑より高に、次第に機根を導利し、一乘無上の法益に近かしむ。その説漸次の故に漸教と名け、その前後次第を剖ちて初・中・後漸と爲す。古師の不定教は偏方不定教と名けしが、天台大師はこれに顯密の二意を含めて顯露不定・祕密不定の二種と爲し、前者を略して不定教、後者を略して單に祕密教と云ふ。この二者の別は入知法不知を不定教と云ひ、人法俱不知を祕密教と名く。畢竟如來傳道の三輪不思議の業用を示すの

み。この二は前四時の説經に通ず。第五時の法華と涅槃とは非頓・非漸・非秘密・非不定とて化儀の四教に與からず、正に是れ顯露彰灼の妙典究竟一乘の妙法なるが故なり。

次に化法の四教は、一代諸經の思想的内容を批判すべき根本範疇を爲すものにして、藏教は三藏教の略稱、小乗教と云ふと同じ。通教は大乗教の初門にして、三乘同道の教なり。別教は界外獨菩薩の教にして大乘の後門なり。圓教は至高圓滿の大乗佛教を義とす。各其教義と實踐との上に淺深高下の別あり。今試に一例を示さんか。等く四諦の法門を釋するに當りて、藏教は生滅の義に約し、通教は無生滅の義に約し、別教は無量の義に約し、圓教は無作の義に約す。等しく法性の理を詮するに、藏教は析空實有の偏眞に滯著し、通教は體空如幻の即眞に證入し、別教は中道を談すと雖も尙ほ但中に位し、圓教は初後一貫不但中圓融の三諦を開説す。此の如き等の別委細するに違あらず。請ふ天台の教觀を學んで要詮を領すべし。

今この化法の四教を以て、前來五時の經説を判するに、華嚴經は圓教を主説し別教を兼説す。阿含經は但小乘三藏教を説くのみ。方等の諸經は四教を對説す。般若は圓教を主説すと雖も其般若には通教を、不共般若には別教を帶説す。法華は純圓獨妙とて純ら圓教を説き、涅槃は前説四時の法門を追説し、一圓に追泯すと云ふに在り。

如上の説は天台教判の大要なり。須らく知るべし、其の教判の中心思想は全く法華經に在り。故に

是れ一代五十年、華嚴より法華に至る五時大化の縮圖たるものと云ふべきなり。この意に立ちて前の涅槃經聖行品に出でたる根本五味の譬喩を見るとき、彼の文に所謂「般若波羅蜜より大涅槃を出すと云へるは實にこの後番五味の的證たるものと云ふべし。而して天台大師が常に前番五味の左券と爲せるは隨義轉用なるものなり。

【通別五時】次にまた五時教判には通別二種の五時あり。天台常に説くところは別の五時なりと雖もその意常に通の五時を離れず、故に判釋無窮にして自在に法義を建立す。後番五味の説の如き亦通別五時の義説の一應用と見るべし。抑別の五時とは所謂華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃と次第し豎に一化の前後を判ずるものにして常談の如し、通の五時とは別の五時味味に五時を具すると云ふもの是なり。何となれば則ち初頓已來次第に擬宜等の益を得るものは次第に五時を経て法華に入實すと雖も、若し中間阿含・方等・般若等に於て新來横入の機ある時、この種の機は味味に序の如く阿含に擬宜の益方等に誘引の益を得る等、或は方等に擬宜の益般若に誘引の益を得る等の機なくんばあらず。この種の機あることを知りて味味を仔細に論ずる時は豎に五時を判てども横に味味にまた五味を具することを領すべし。故に知るべし、涅槃後番の五味はその實通の五時の義分に外ならず。また當に知るべし、通別五時重重無盡、前後兩番亦無量番の五味あることを。天台大師五時の判教を安立して併も自ら五時の縛著を脱落す。法門の施設無礙自在なること概ね是の如し。

【追説追泯】 五時に約する大涅槃經の地位既に此の如くなるを以て、若し legalization 四教に約して判ずる時

涅槃は法華と等しく醍醐味に位すと雖も、大に左右ありて、法華は純圓獨妙の教とて唯圓教のみを

説きて餘教を併説せず。然るに涅槃は四教を併説す、これに就て追説・追泯の義を領すべし。蓋し大涅槃

は既に後番五味なるが故に一會に四教を具すべき要あり。茲を以て前番五味中所説の四教をこの經

中に重説す、これを追説四教と云ふ。然るにこの四教永く相隔てず、經中に佛性常住を細説して四

教の差別を亡泯し常住の圓實に開會すること猶ほ前番法華の如し、これを

追泯と云ふ。彼の 法華玄義に所謂「涅槃聖行品には追つて衆經を分別

するが故に具さに 四種の四諦を説く(追説四教)、徳王品には追つて衆經

を泯し、俱に四種の四諦を寂す(追泯四教)と云へるは且く聖行・徳王兩

品の顯相に約して對説すと雖も、その實追説と追泯とは一經の始終に遍通

す。要するに部時に約して後番五味たる涅槃經は、化法に約して四教の追説・追泯たるべき理由明白

なりと云ふべきなり。

【三種四教】 涅槃經中四教を追説せるに因み、古來論場に 喧しきは三種四教の論題なりとす。そ

の大意は方等の諸經も四教を對説し、別教に横豎二種の四教あり、今の涅槃追説四教との異同如何と

云ふ問題は是れなり。これに就て追説四教と方等四教との比較は名同義異と決す、共に四教を説くが故

【一】 法華玄義釋籤二下。

【二】 生滅の四諦、無生の四諦、

無量の四諦、無作の四諦、これ

なり。序の如く、藏通別圓四

教の四諦なり。

【三】 法華玄義十下、二十三右。

に名同なり。然るに涅槃四教は初後俱に佛性常住を知解せる上の四教なり。故に藏通等の淺近の教を聞きつつ圓實の理は既に心得居る機なり。法華開會の後なると共に、この經の始終常に佛性常住を談するが故なり。方等の四教はその中の圓教は初後俱知常住なれども、別教は地前は常住を知らず地上に至りて方めて證す。藏通二教に永く常住を知らず、故に義異なり。別教の四教と今の四教とも亦名同義異なり。義異に就て別教は地前但中を知るのみ、常住を領するは地上に於てす。今の四教は初後俱知なるが故なり。而して涅槃の四教は初後共に俱知常住と云ふと雖も、唯是妙解に約す。その觀行に至りては各本習に依りて四教差別あり、故に荆溪の曰く「涅槃は解即して行は即せず」と、蓋しこの謂なり。

【大收摺拾】 涅槃經中特に斯く四教を具説する理由に就て、二意ありと説く。

【三】 法華玄義釋籤二上、三七。

一は在世の機の爲にし、二は滅後の機の爲にす。前者は前番五時中未熟の者の爲に更に四教を説きてその機を調熟し、佛性常住の圓理を説きて、四教の人齊しく圓實に會入せしむるに在り。この意に約すれば前番五時を終へて、更に涅槃の説あるは前番の遺餘の機を化益せんとの意に外ならず。例せば秋穫の大收ありて後遺穗を收拾するが如く、法華開顯の大收ありて後涅槃の説あるは正に摺拾を以て譬ふべし、故に法華を大收教とし涅槃を摺拾教と名く。これを又は譬へて、法華は大陣を破るが如く涅槃は殘黨を驅るが如しとも云へり。

【當座蘇息】 抑も涅槃經所被の機たるもの在世・滅後を通じて論ずるとき總じて三種あり。一は後番調

熟を經るの機にして前節に云ふところこれなり。二は當座蘇息の機にして、この經開説の會座に新來

の機なり。即ち四教追説に依り本習を調熟し、一度藏・通・別等前三教の權果を證して一時蘇息の状態

に入り更に四教追泥の説に依りて三德祕藏に悟入するこれなり。三は滅後の機の爲にするものにし

て所謂未來惡見の機の爲にす。この中大分二種、細別三類あること後に示すが如し。この三種の中、前

二は如來在世の機、後一は如來滅後の機の爲に大涅槃經を説けるなり。

【涅槃贖命】 次に滅後の機の爲にすとは末代鈍根の機、佛法中に於て斷滅

の見を起し、法身の慧命を天傷するを哀愍し給ひて特に四教・小律を説い

て以て法身の慧命を贖はしむ、故にまた末代贖命の涅槃と云ふ。命とは法

身の慧命なり。法身は中道佛性の謂なり。この佛性中道の妙慧は實に衆生成佛の主要なる命根なり。

この慧命を賊害傷失せしむるものは斷滅の邪見なり。今四教・小律を説いてこの邪見の發生を豫防し、

常住佛性の慧命を斷絶せざらしむ、故に贖命と云ふ。

【末代三類】 所謂末代鈍根の機なるもの 古人分別して大分二種・細別三類と爲す。先づ大分二種と

は、末代鈍根の機に如來の無常を執するものと、常住を領するものとあり。前者は現に歴史上の釋尊

を偏重して法・報二身の常相を領すること能はざるものの如き是れなり。この徒輩は獨り如來無常を

【三】 近くは大寶守脫律師説の如し、冠導天台四教儀集註卷上四十六左に往看せよ。

執するのみに非ず、また進んで因果を撥無し、斷滅の惡見に墮す、これを一種と爲す。次に如來の常住を領するものは如實にこれを領すれば、この經の説を要せざるも、所謂如來常住の圓理を偏執誤解し、その眞趣に徹すること能はず、因果を撥無するものあり。これ圓常を領するは斷滅の見に非ざるが如きも因果を撥無する點は斷滅の惡見に墮せるものたり。已上これを大分の二種とす。然るにこの後者中に更に二類あり。一は圓常を偏重誤解したる結果として事戒を無し嚴肅なるべき道德律を無視するもの、二は圓常の教説を偏重固執したる結果として他の大乘・小乗等の諸教を侮蔑し謗難を構ふる等のものは是れなり。前者は圓常を執じて道德を無視するもの、後者は圓常に偏して三權を謗するものなり。この二類は前の第一種と共に何れも常住佛性の慧命を斷ずるものにして最も惡むべく悲しむべきものならずんばあらず。如來此に於て遙にこの滅後三類鈍根の機を救はんが爲にこの大般涅槃經を説き、その中特に第一・第二の二類の爲に或は小乘律を説き、第三類の爲に或は四教を追説して次で本の圓常を扶く。古來この經を呼んで扶律談常の教と云ふものは正しくはこの第二類の機に對するの意的説したるものなればなり。また自ら三類の總意を通示するものとも見るべし。

【法華涅槃】天台大師の涅槃經觀は、前來の説を以て略してその要を盡したるが如し。而して最後に

注意すべき問題は、その法華經と涅槃經との比較と、竝に涅槃經の淨穢土說不に關することとなり。先づ前者より示さん。



法華・涅槃兩經の比較に關し、兩經同醍醐味の證は救學に違あらず。然るに一步を進めて仔細にこれを論じ、**三經**の教意・始末・起盡相同じく、法華經の三周說法に聲聞を斷滅し、咸く一實に歸し更に本門に入りて開近顯遠して以て菩薩増道損生の事を明すが如きは、涅槃經の所謂正説の初に常・樂・我三種の勝修を明して苦・無常・無我三種の劣修を斥け、聲聞を斷滅して秘密藏に入れ、後の長壽品に入りて三十六問を次第敎説して菩薩増道損生の事を明すと同一般、兩經をく起盡を等しうするものと云へり。此の如く云へばこの兩經の問何等軒輊する所なきに似たり。

然るに若し **三六** 別處の説を見るに兩經を比較して涅槃經中に第三乘の得道を帶べり。今此法華經は純一無雜にして純圓獨妙なり。また涅槃經中には更に發迹顯本せず、法華經は顯本の義説來りて顯る明了なりと云ふ。この意蓋し法華は純なり、涅槃は雜なり。また法華は顯本し、涅槃は開迹せずと云ふに歸するが如し。 **三六** 後世六祖荆溪に至り、恐らくはその意を開演する歟、十六意に約して兩經の同異を簡べり。然るに文相簡古初學解し難く、**三六** 慧澄律師の釋頗る要旨を得たり。今試に次に本末對映してこれを示さん、但し澄師の釋亦大に簡潔に似たり。 **釋** 私に聊か文字を増して義旨を領し易からしめん。

一 判レ味同時而有二部異。涅槃の一切衆生悉有佛性は終極法華と味を同じうす。然るにこの兩經の

【三三】 已下の文は法華玄義卷十下、(會本)の意を示す。  
 【三四】 法華玄義卷十上、三六(會本)の文意に依る。  
 【三五】 法華文句記卷十七、五十一の文即是なり。  
 【三六】 法華文句記講義卷九、三十三の文。

開會と蘇息・純圓と帶權の部旨は同じからず。

二 約レ理名別威歸ニ常住。法華の實相と涅槃の佛性と同じく圓常を證す。

三 約レ機彼稱ニ招拾。法華は前番五味化導の大體にして涅槃は後番五味最鈍の一類の爲にす。

四 約レ法彼存ニ三權。所説の法に約するに法華は純圓、涅槃の當座には調機の方便を兼ぬ。

五 論レ意彼帶ニ律儀。涅槃經所説の意は末代贖命の爲にして小律を扶説す、法華にこの事無し。

六 語レ證彼兼ニ小果。その經益を較するに法華經は開會入實、涅槃經は蘇息して小果を證せしむ。

七 受益彼無ニ度記。法華には廣く諸機に互りて授記し、涅槃の會入は意略にして但純陀一人を記

するのみ。

八 説時長短永殊。法華は八年の説、涅槃は一日一夜の説なり。

九 談レ常過未レ同。法華は應用の實本を顯し、涅槃は法身の不變に據る、所謂法華は過去常を明

し、涅槃は未來常を明す。

十 論レ譬大陣餘黨。譬に約すれば大陣と餘黨とに比すべく、開顯の功に勝劣あり。

十一 現瑞表彰各別。法華の現瑞たる雨華動地は一乘開會の因果を表し、涅槃の面門放光は未來流

通を彰す。

十二 破執難易不レ同。法華は定性の小執を破し、涅槃は十仙外道の堅執を破す。

十三 領解近遠迹乖。涅槃の五味は近く一期五味の化迹を領し、法華の信解は遠く法身地の化迹を

領す。

十四 述成被根不等。法華は十界七方便普く被ることを述成し、涅槃は佛但、迦葉菩薩の常・無常

を知るを述成するのみ。

十五 用治生死不同。法華は敗種の二乗を治し、涅槃は有心の闡提を治す。

十六 付囑有下有此。法華は下方の菩薩を召し、涅槃は唯此土の人に付囑するのみ。

以上を妙樂發明するところの十六意と爲す。 叡山證眞の説も亦參考す

べし。彼は更に多寶分身・三變土田・龍女成佛等の事項を擧げて較量せんと

欲するものの如し。荆溪大師の十六意を綜觀するに、畢竟は法華勝・涅槃

劣と云ふに歸著すと見ることを得るが如し。然るに荆溪師自らは以上の諸

意を決して、準此略知三事異意同不可失旨と云へり。所説の事法は相異なるも、終極の大意は兩

經相同じきを云ふものなり。故に後世天台宗學上兩經の異同は皆此に歸結を認め、決して勝劣を談

することなし。然りと雖も子竊に考ふるに、教祖天台の意中自ら褒貶の意を存するに似たり。玄義に

純雜を分かち、顯本の徵著(有無に非ずと譲りて)を分つもの豈然らざらんや、學者指教に吝ならざれ。

【涅槃說不】

最後に附説すべきは今經說不の問題なり。 題意は諸佛出世して人を化するや、或は

【一七】 法華文句私記

【一八】 法華玄義卷十下、五在(會

本) 法華文句卷四、十九 同上

七、十二 大涅槃經疏卷十六、

四十五等參照

法華經を説き終りて涅槃經を説くに及ばずして直ちに入滅するものあり、或は法華經の説後更に涅槃經を説きて後入滅するものあり。此の如く、この經に説不の別ある所以如何と云ふこと是れなり。これに就て古來の説は法華經序品に見ゆるが如く、燈明佛・迦葉佛等の如きは法華經を説き終りて直ちに入滅し涅槃を説かず、今の釋迦牟尼佛の如きは具さに涅槃經をも説き盡して後入滅す。諸佛の化道此の別ある所以は大體上よりは淨土・穢土の關係に在りとす。即ち淨土出世の佛は涅槃を説くの要なく、穢土出現の佛は法華を説き終るのみにては化道窮盡せざるなり。何となれば涅槃經は則ち小律をも説きて特に惡見の徒を救ふ、これ穢土の機を所對とするが故なり。淨土にはこの種の惡機存すべからず、故に國土の淨穢に約してこの經の説不を判すべしと云ふ。然るにこれは涅槃經を以て扶律の經と爲す義邊に依る。若し談常の義を重しと爲す義邊に依れば、淨土出現の諸佛亦必ずしも涅槃經を説かざるに非ず、故に大涅槃經に滿月如來の大涅槃を説くことを示せり。

以上天台の教判を示し了る、章安灌頂の説須らく續説すべし。然るに今の國譯は偏に章安に依る、章安五番の玄義一括して後章に示すを便とす。故に以下は筆を轉じて諸家分科の説に入らん。

【諸家分文】 一經の大綱を知るの法は、その分文科節を明にするに若くはなし。故に漢和の學匠は、古來經論を釋するに、その書一部の科文を分ち、以て始終の大綱を領せしめ、次に文句を逐釋して依て一部の綱目を知らしむるを例とす、今この經を釋するに亦先づ一部の科文を知らむことを要す。

爾るに經論を釋するに、先づ序分・正宗分・流通分の三段を以て大判するは、源彌天の道安法師に權輿すと云ふを古來一定の傳説とす、今暫くこの説を信賴し、次に進で正しくこの經を釋するに、この經特殊の分文科節を分てるものは何人に創まるかを檢するに、<sup>(四一)</sup>章安の「上代は直に唱へて文を消し意を釋す、章段を分節するは 小山の瑠・關内の憑等より起り、茲に因りて則と成ると云へるに依るに、法瑠・道憑等より創まるが如し。爾るに世親開士印度に在りて涅槃經論を著はし、七分の科段を立つるに鑑みれば、瑠憑の分文は漢土の始のみ、況や河西の道朗本經の譯場に列し、親く三藏の指授を蒙り、後五門を立ててこの經の始終を判つ、其の義傳へて昭昭乎たり。故に予、竊に謂らく、この經の分科は河西に創ると、後學請ふ更にこれを審にせよ。今遍く諸文を檢するに世親の分文已下諸家の分文蘭葡の美を競へり。且く二十家の異説を撰んで次第にこれを列敘すべし。

【婆數七分】

世親 *Yaspanhu* 論主の著涅槃論は具に <sup>(四二)</sup> 大般涅槃經論

*Mahaparinirvana-Sutra* と云ひ、印度佛敎文學中この經に對する唯一の註釋たり。この書は元魏の朝に來れる達磨菩提三藏 *Dharmadhi* の譯するところにして、文義頗る晦澁にして初學解し難しこの書の初分に一經の始終を科して七分とす、古來これを婆數の七分と稱す。論文に准じてこれを圖

【四一】 大涅槃經會疏卷第一、  
一有、孤山同上三德指歸卷一、  
八左一九有。

【四二】 宋・吳興の武康小山寺法瑠法師、涅槃・法華・小品・勝鬘等の義疏を著す。

【四三】 北齊・鄴城・寶山寺・道憑法師、地論・涅槃・華嚴・四分律等を講ずる章疏本より無し矣。  
【四四】 縮刷藏經、往帙・第六卷、  
七十四。

示すれば次の如くなるべし。

- 一 不思議神通變示分——序 品
- 二 成就種姓違執分——純陀品・哀歎二品
- 三 正法實義分——長壽品已下六衆問品に至る
- 四 方便修成分——現病品已下高貴德王品に至る
- 五 離諸放逸入證分——師子吼品
- 六 從光善巧住持分——迦葉品
- 七 顯相分——憍陳如口品

この七分の目よ本論の文に依る。後の本經の註疏中には、一或は略して但神通變示分と云ひ、二或は種姓破疑除疑分と云ひ、五或は離諸放逸入證分と云ひ、六或は慈光善巧住持分と云ひ、または略して慈悲住持分と云ふあり。これ地論宗匠の便に隨つて略稱するのみ。蓋しこの論元魏の朝に東來し、直に地論學匠の用ゆるところとなる。故に地論宗學の大涅槃經觀はこの七分説を指南と爲すを以てその本源に就くときは婆藪の七分と稱すと雖も、後世また呼で地人の七分と名くるものある、故なきに非ず。學者乞ふ惑ふことなかるべし。

一に序品を不思議神通變示分と稱する所以は、法身の居士その神徳を隠して、鬼畜等五十二衆を變現せるを云ふ。二に純陀・哀歎の二品を、

【四五】 章安の會疏卷一「一右には

婆藪七分と云ひ、同 五右には地師の説と云ふ。孤山の三徳

成就種姓遺執分と稱する所以は、種姓とは純陀品に施食を常住五果の種姓と爲す是なり。遺執とは哀歎品に勝の三修を施して昔教劣修の三を破すを云ふ。三に正法實義分とは長壽品已下迦葉の三十四問成く眞正の法を問ひ、佛皆顯實了義を以て之を答へ給へることを惣稱す。四に方便修成分とは、方便は五行を謂ひ、修成は十徳を謂ふ。五に離諸放逸入證分とは、諸の不放逸行を成じて證果を得するなり。六に慈光善巧住持分とは、迦葉品中、佛慈悲方便を以て、善星闍提の惡を持して、佛性の善に住せしむるを顯はすを云ふ。七に顯相分とは、陳如品に十仙の邪相を説き、佛性の正相に還らしむることを顯はすを云ふ。

【河西五門】

河西の道朗法師は、親く曇無讖三藏の譯場に參じてその阿世耶を聽く。(四)五門を立てて一經を剖判す。次の如し。

- 一 今昔引接有緣門 — 北本初より第二卷盡に至る
- 二 略廣門 — 北本第十卷盡に至る
- 三 涅槃行門 — 北本第十一卷已下第二十卷盡に至る
- 四 菩薩功德門 — 北本第二十一卷已下第二十六卷盡に至る
- 五 不可思議中道佛性門 — 北本第二十七卷已下經盡に至る

指歸卷一十二に之を評して所謂荆溪大師再治の妙手腕なるものにして影略五顯と云云。

【四〇】 已下の釋は孤山三德指歸一三二五已下の文意に依る。

【四一】 古來の相傳は、涅槃の譯場に參じたる河西の道朗と、三論宗山門三師の初祖たる僧朗と、高麗の大朗・遼東の朗法師等と云ふものと皆同人の異稱とせり。爾に河西の道朗と僧證の師たる僧朗とは、年代その他諸の點に於て、同人と見難し。是予が宿疑なり。後賢請ふ是を審にせよ。

【四二】 章安會疏卷一、一有。同五右孤山・三德指歸、卷一、十有。同三十二右。

一に今昔引接有緣門とは今は即ちこの經の會座に新入の機を云ひ、昔は鹿苑已來稟教の人を云ふ。

所謂五十二衆即是なり。皆聲光の召すところなるを以て引接と云ふ。二に略廣門とは迦葉の三十四問

を設る已前を略門と爲し、廣く三十四問を答るより已後を廣門と爲す。壽命品の第三文と金剛身品、

名字功德品(已上北本の第三卷)、並に如來性品(已上北本の第四卷より第十卷の半に至る六卷半)、及

び一切大衆所問品(北本の第十卷後半)は、實にこの一科に判屬す。三に涅槃行門は現病・聖行・梵行・

嬰兒行の四品(北本の第十一卷より第二十卷に至る十卷)を總判したるものにして、所謂五行の廣説な

り。次の高貴德王品(北本第二十一卷より第二十六卷までの六卷)は、四に菩薩功德門にして十行を説

く。五に不可思議中道佛性門は師子吼菩薩品・迦葉菩薩品・憍陳如品の三品(北本の第二十七卷已下第

四十卷に至る十四卷)にして、共に不可思議中道佛性を廣説するを云ふ。所

謂佛性即中道の義は道朗法師が曇無讖より口傳するところの大義と傳ふ。

【梁武兩段】 涅槃經講讚の盛なること支那梁朝の運に過ぎたるは無し。この時に當りて諸種佛教のう

ち經宗に在りては涅槃經宗、論宗に在りては成論大乘共に最も學匠の鑽仰するところたり。梁の武帝

既に學眞俗に互り親く講筵に臨み大に緇素を會して研鑽頗る力め、また自ら筆をとりて諸經の解釋を

作る。金剛般若二十七章の分文は古來武帝の創むるところと傳ふ。帝諸の學匠に勅して大涅槃經の會

疏を造らしめ、また別にその序を親撰す、現に會疏の初に存するものこれなり。【完】 また自ら一經を大

【四九】 華安會疏卷一—右同四右。卷二十九右。孤山三德指歸卷一—二十右。



判して兩段と爲す。中前・中後の説これなり。

一 中前——序品已下大衆所問品に至る

二 中後——現病品中分已下陳如品盡に至る

中とは所謂日中にして食時を云ふ。純陀の正く供養を獻するの時なり。一切大衆所問品の初分に至りて如來正く純陀獻するところの糠糲成熟の食摩揭陀國滿足の八解等奉設するところを受け給ひ、一切の大衆を充足し給ひけることを説けり。現病品已下の説はこの受供已後の説なり、六卷泥洹はこれの大衆所問品を以て終り、現病品已下を存せず、これ等の内容と形式とに類じてその説を立つるか。梁武帝はこの事説を中心として一經を折半し、中前・中後の二段を分つ。

次の開善の説と共に、この經分文中最も簡單なる説たり。

【五三】唐僧傳卷五に傳あり。

【開善二分】

開善寺智藏法師は梁朝三大法師の一人として鐵中錚錚たるものなり。その涅槃經分文の説は、梁武帝の兩段説に比して一層簡單なり。

一 序 分 —— 序 品

二 正宗分 —— 純陀品已下經本に至る

その意、圖に在りて極めて明了なり。唯この分文の特色とするところは、後の光宅に比して流通分の存在を認めざる點に在り。

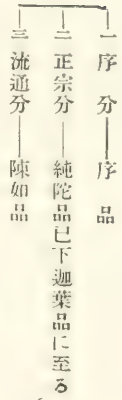
【光宅三分】

光宅寺法雲法師も亦、梁朝三大法師の一人にして、特に後世に重んぜられ、その著法

華經の義疏八卷は現に傳ふるところなり。往往にしてその涅槃經に對する見解を知るに足るべきもの

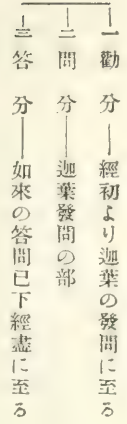
あり。惜い哉涅槃の疏は傳はらず。その大涅槃分文の説は、序・正・流通三分説なり。圖示するに次の

如し。



【曇濟三別】

曇濟法師は、この經を大分して三段と爲す。



この説正しく次の僧亮・寶亮等の四別説の由來を爲すに似たり。本末對映して義趣を領すべし。

【僧亮四別】

梁の僧亮法師は勅撰集解中に重きを爲すの人なり。その涅槃分文の説に曰く、この經

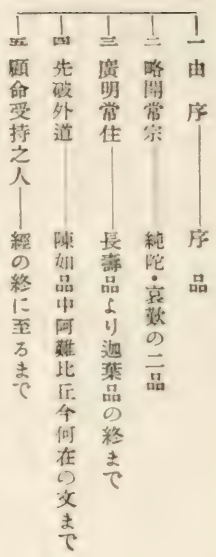
既に全文に非ず。現存の文勢四別と爲すべしと。

【五二】 唐僧傳卷五に傳あり。  
 【五三】 恐らくは宋の曇濟なるべし、次の梁僧亮の四別説に照して年代の前後を推定することを得べし。梁僧傳卷七曇斌傳中にその傳を附説す、七家論の著あり。  
 【五三】 大涅槃經集解卷一、二二四 右下  
 【五四】 大涅槃經集解卷一、二二四 右上

- 一 勸問
- 二 問
- 三 答問
- 四 法輪證

爾るにこの分文は、正しく經文に配して如何に分別すべきか、未だ本説を得ずと雖も、大途は前の曇濟の三別と、後の寶亮の四致とに對映して、推知することを得るが如し。

【僧宗五別】齊京師太昌寺僧宗法師の説に曰く、【五】大涅槃經の始末凡そ五別ありと。その意を圖示するに次の如し。



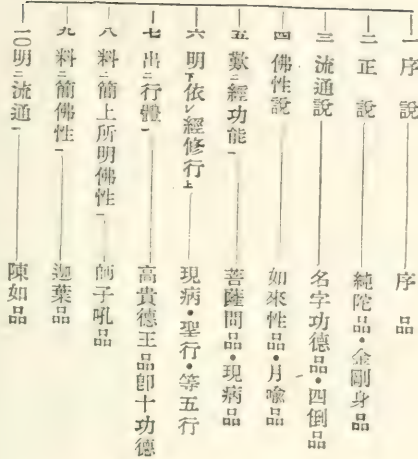
【五】 梁僧傳卷八一七左にその傳あり。  
 【六】 大涅槃經集解卷一、二四右下。

私に案ずるに一は序分、二三は正宗分、四・五を流通分と爲すの説なり。第三別に有りて明す所の因果境行粗已に周し矣。故に次に將に願命付囑する所あらむとして先外道を破し次に正しく願命付囑す。僧宗法師は大涅槃・勝鬘・維摩の名匠にして、講貫各百回に及ぶと云ふ。九歲出家、法援の資た

り。また晩に道を曇斌・曇濟二師に證ふ。建武三年寂、壽五十有九。後出の曇准法師はこの師の縁あり、後に記するが如し。

【曇愛十別】

(五七) 曇愛は (五六) この經の分文に十別を立つ。次に圖を以て示すべし。



【五七】 ?

【五六】 大涅槃經集解卷一、二四 有之。

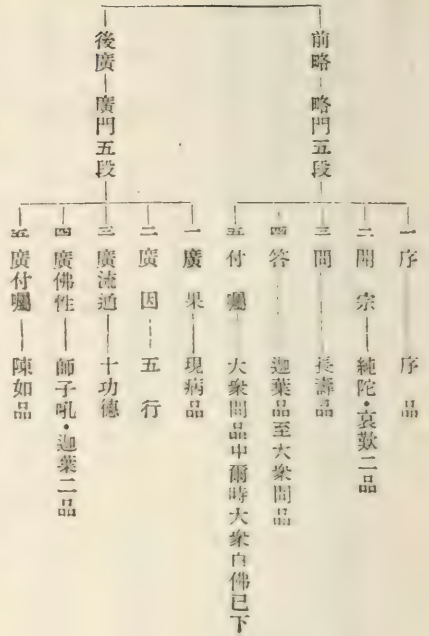
【五九】 梁僧傳第八卷 四右 僧鍾傳に附す。

【六〇】 大涅槃經集解卷一、二四 有之。

このうち第九は重重廣く樹王下已來雙林下に至るまでを料簡し、彼の善星斷根の事を擧ぐ。第十は陳如に命じ十外道を度するを明にして、以てこの經の流通とすと云云。

【曇護十段】

(五九) 齊の曇護法師は (六〇) 廣略十段の説を立つ。簡明領し易し、次に圖するが如し。



【寶亮四致】

(三) 梁の寶亮法師は正しく梁武の勅を奉じて、涅槃經集解を撰したる中心人物たりしもの

と傳へらる。十二歳出家、道明に師事し、齊文宣竟陵王の歸仰を受け、京師靈味寺に住し、大涅槃を講ずること八十四遍、成實論十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍、大小品六遍、その他法華・十地・無量壽等各十遍、黑白の弟子三千餘人と云ふ。

【六】 梁僧傳卷八、二三五已下傳あり。

後梁の武帝の歸仰するところとなり、天監八年五月八日勅を奉じて大涅槃の義疏十餘萬言を撰し、九月二十日を以てその業を訖り、帝爲に其序を製すと云ふ。按ずるに現在の集解卽是なり矣。師撰集の功を卒へ、同年十月四日靈味寺に寂す。春秋六十有六歳なり。そのこの經分科の説に二傳あり。

(三二) は集解に傳ふるところにして、他は章安の會疏に傳ふるところ是なり。先づ前者を見るに、

一 勤 問——初より老少二人の譬に至るまで

二 發 問——多羅聚落迦葉の發問已下

三 答 問——如來迦葉を讀し廣く答問するまで

四 付囑流通——陳如品

而してこの經は問答を以て宗と爲し、雙樹より已前の所説は、半字教・皆不了義、雙樹下の説は正しく、滿字・了義の説と爲し、衆生をして疑あらしめ、如來これに應答せるを一經の宗と爲すと云ふに在り。

次に章安の所傳に依るに、

一 緣 起——長壽品の迦葉設問の前の長行に至る。これ正問の緣起なり

二 正 問——偈中の三十四問

三 正 答——偈後長行より大衆問品の終まで。これ如來の正答なり

四 答家餘勢——現病品已去經の終まで

この科意は前者と少異あり。章安何に依てこの説を爲すか、その據るところを知らず。後賢幸にこれを詳にせよ。

【道慧二説】 齊の道慧法師、この經の分文に就て二説を出せり。その

第一説に曰く、

【六二】 大涅槃經集解卷一、二四左上。

【六三】 章安會疏卷一、一右。

【六四】 孤山三德指歸卷一、九左。

【六五】 梁僧傳卷八、二左に傳あり、同十八左法安傳參照。

【六五】 大涅槃經集解卷一、二四左上。

一 序 説	序 品
二 正 説	純陀品・金剛身品
三 流通説	名字功德品・四倒品
四 佛性説	如來性品・月輪品
五 歎 經	菩薩問品
六 證成常住	現病品
七 明三所得	五行・十功德
八 境界明レ義爲レ成ニ於行	師子吼品・迦葉品
九 破ニ外道説	陳如品

〔一〇〕彌果説 從阿難比丘何在至經盡

第四佛性説は常を得る所以は本有佛性に依るを明す。第六證成常住は不食にして食を現じ、不病にして病を現じ、不滅にして滅を現することを明すなり。第七明所得は病無きは行に由ることを明すなり、行とは五行十功德なり。

道慧の 第二説は次の如し。

一 序 説	序 品
二 開 宗	純陀品
三 會 通	哀歎品
四 流 通	長壽品より現病品に至る

【六】 大涅槃經集解卷一、二二四 在字。

五明	四	五行
六明	果	十功德
七明	佛性	師子吼品
八辨	始終	迦葉品
九破	外道	陳如品
一囑	果	顧問阿難の文

これを第一説に比するに殆ど別人の觀あり。集解に「又撰曰」と云へるに依るに、別疏ありて各分文を殊にするに似たり。

因に道慧法師の傳を案するに、十一歳出家、僧遠の弟子となり、後曇斌・道猛二師の學を稟く。齊の建元三年、春秋三十一歳を以て寂せり。而してその傳文に十七歳にして夙に成實論に通曉せし學匠なること明たれど、涅槃の達人と見るべき文なしの予

竊に同名の異人に非ざるかを疑へり。後に齊法安法師傳を檢するに、張永が京師卓越の年少を問へるに對し、曇斌法師は道慧・法安等を推稱するに依り、永要請して道慧をして涅槃を覆し、法安をして佛性を述せしめたるに各その英才を煥發せり。永依てその年を問へるに慧は十九歳と答へ、安は十八歳と答ふ、永歎じて二道士可レ曰ニ義少一也と云ふと記す、この文に依て文の互顯を領することを得たり矣。

【法安十段】

齊京師中寺法安法師の説

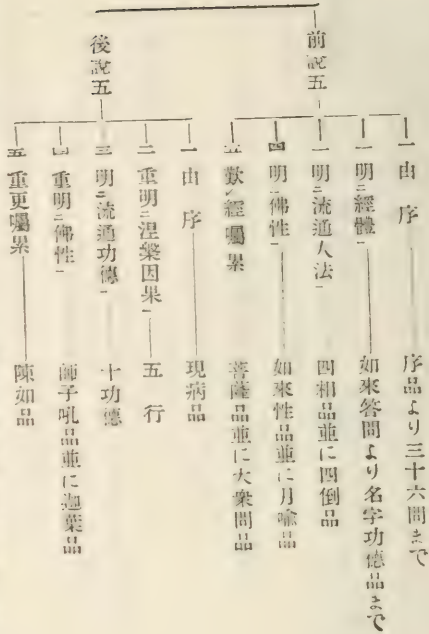
六六

この經大に分ちて前後兩説あり、更に細別して各五

【六六】 梁僧傳卷八、十八左に傳あり、前の道慧二説の項末の文参照し。  
 【六六】 大涅槃經集解卷一、二二四左下。



段を つと。次に圖するが如し。



安も亦涅槃の講匠なり。また維摩・地論・成論等に通ず、歲四十五歳にし  
て、永泰元年中寺に寂す。淨名・十地の義疏、並に僧傳五卷等の著ありと  
云ふ。

【智秀五段】

梁京師冶城寺智秀法師の説は、この經を大分するに先  
づ廣略二門あり。略門三段を分ち、廣門更に二段を分ちて、總じて二門五  
段を爲すと、次に圖示すべし。

【六九】 梁僧傳、卷八、二十一右に  
傳あり。大小涅槃・淨名・般若  
に善矣、天監の初年六十三歳  
を以て冶城寺に寂す。

【七〇】 大涅槃經集解卷一、二二四  
左下。

一 由序 序品

略門三段 二 正說 純陀品より大衆問品爾時大衆曰佛の文まで

三 付囑 大衆問品の殘分

廣門二段 一 廣前正說 現病品より迦葉品終まで

二 廣前付囑 陳如品の全文

【法智七分】

法智法師の説は、<sup>(七二)</sup>この經を大判するに兩別あり。序正の二段これなり。正説のうち

更に分ちて六段と爲す。次に圖するが如し。

一 經家序説

序品

一 開レ宗 純陀・哀歎二品

二 隨レ問説 長壽品より現病品まで

正説六段 三 示ニ開經之人修行之法 一 五行

四 明ニ行人所得之功德 一 十功德

五 明ニ因果佛性 一 師子吼品・迦葉品

六 化ニ外道之説 一 陳如品

【曇准兩説】

梁曇准法師の科説に二あり、その第一説は大に分ちて三段と爲す。

一 序 序品

二 正 説 純陀品より陳如品阿難何在の文まで

三 流 通 陳如品の願命阿難の文已下經終まで

【七二】 大涅槃經集解卷一、一一五 右レ上。

【七三】 梁僧傳、卷八、十七、僧宗の傳に附す。また唐僧傳卷六に本傳あり。

【七四】 大涅槃經集解卷一、一一五 右レ上。

頗る簡なりと云ふべし。

その第二説は始終を大判して八別と爲す。次に圖示するが如し。

一序	序品
二開宗	純陀・哀歎の二品
三明緣因境及經功德	長壽品より圓倒品まで
四明正圓佛性	如來性品・現病品
五廣緣因行	五行・十功德
六廣正圓性	師子吼・迦葉の二品
七廣明果相	陳如品
八付屬	願命阿難の文已下

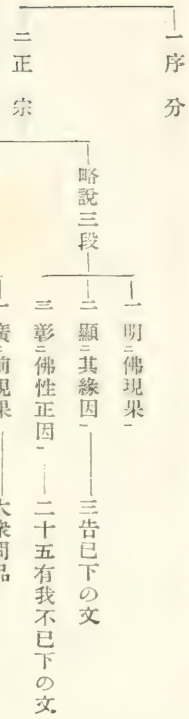
傳文を案するに准師は元北地の學者なりしが、僧宗の涅槃經を善くすることを聞き南遊して就學す。爾るに南北情異思不相參と云へばその説に服すること能はざりしと見ゆ。准依て別に自見に立ちて涅槃を講じ、多く北土に師とせらるると云ふ。天監十四年寂、春秋七十有七。

【有人七別】淨影の義記中に有人の一説を出す。何人の所立なるかを

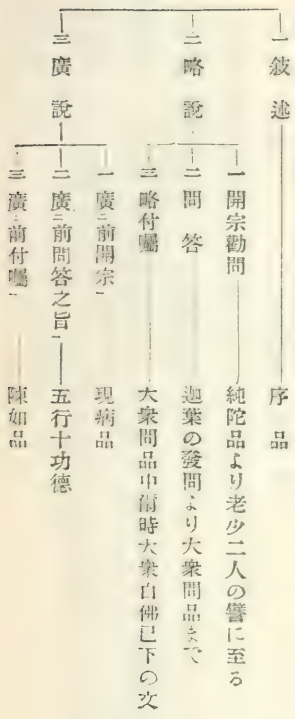
審かにせずと雖も、淨影の特にこの一説を出して廣くこれを破する所以を察するに、當時に在りて有力なりしものと相像せらる。而してその内容を檢するに、大に曇准法師の

【七】淨影寺慧遠大涅槃經義記 第二卷、三一七左下。

八別説と影響するものあるに似たり。次に圖するが如し。



【明駿七別】 明駿法師の説は、大に別ちて、敘述・略説・廣説の三段と爲し、略説のうち更に分ちて三段、廣説も亦分ちて三段と爲す。次にこれを圖示す。



【五】 大涅槃經集解卷一、一一五 右下

食は生の本たり。病は滅の因たり。故に前に純陀品には食に依て以て現生を明し、後の現病品には病に依て以て示滅を明す。またこの經明す所の常住の因果は境と行となり。今五行十功德を説て、以て廣く行を明し因を明す。師子吼品・迦葉品は廣く境を明すなり。陳如品は廣く常果を明すなり。無常の色を滅して解脱常樂の色を獲得すとはこの謂なり。廣略明すところの因果境行、粗已に周悉するが故に、教を未來に傳へんが爲に、彼の異學を推き迷元を伏せんとして、諸の外道を度し弘通無礙ならしむ。是前の付囑を廣する所以、陳如品の説ある所以なり。

【興皇八門】 陳揚都 興皇寺法朗法師は三論山門三師の一にして陳隋の巨匠なり。(七七) その説八門を立てて一經を分つ。

- 一 引接今昔有緣門 序 品
- 二 破疑除執門 純陀・哀歎二品
- 三 略廣門 迦葉問・如來應答
- 四 行 門 五行
- 五 位 門 十功德
- 六 行中道門 師子吼品
- 七 方便用門 迦葉品
- 八 邪正不二門 陳如品

【六】 唐僧傳、卷七に傳あり。  
 嘉祥大師の師、僧証の資なり。  
 【七七】 章安會疏一、二有、同五在。  
 孤山三德指歸卷一、二十三在。

くせつ 舊説に曰く、この八門全く河西朗公の五門を承用するのみ。唯第二門は婆藪七分中の第二分所謂地師の義を加ふるのみと。故に河西の五門と興皇の八門とを配釋して曰く、

(河西五門) (興皇八門)



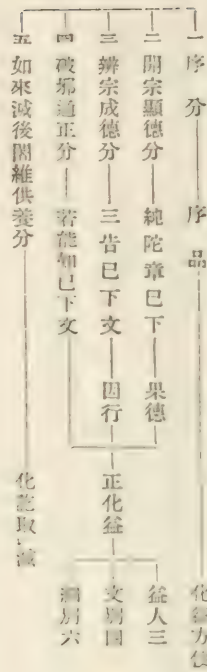
くわりのやくかいがふ 廣略開合の別、圖を案じて知るべし。(七〇) 因に曰く、三論の一宗、僧朗の蹟、香として聞所なし。攝

嶺の僧詮に至りては専ら三論並に般若を講じて涅槃に及ばず。門下屢これを請ふに、依て止むことを得ずして少かに本無今有の偈を講じて止むと曰ふ。涅槃宗史上涅槃の講風大に扇ぐものは實に興皇朗師に創まる。金陵の嘉祥これを承けて涅槃遊意等の著あり。

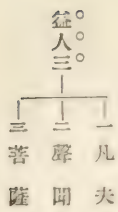
【淨影五分】 (七五) 隋淨影寺慧遠法師の大著、(八〇) 涅槃經義記に出たる五分説は、自ら餘家とその色彩を異

【七六】 已下の説、嘉祥涅槃遊意二、に依る。  
 【七九】 唐僧傳、卷八に傳あり。  
 【八〇】 涅槃經義記卷一、三〇二、左下、同上三二八、左上下。

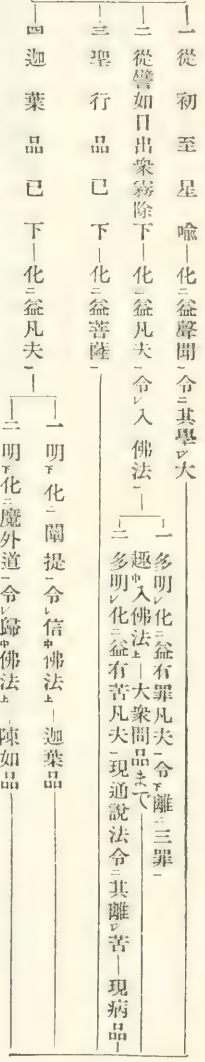
にするものなり。その要に曰く、この經の大科は勝鬘等の如く三分なるべからず。須く五分説を用ひて始終を綜論すべし。而してその五分なるもの、また中開三分を正宗とす。この正宗また細かしく分別するに、益人三・文別四・細別六あり。今試みに次に圖を以て示さん、先づ五分説とは次の如し。



序分は化益の由序なり。第二分の開宗とは諸佛圓極の妙果を云ふ。この果を成ずるの因を明すを第三分と爲す。眞法既に明なれば傳化不絶ならしめんとして第四分あり、第五分は必ず有るべしと雖も外國より來らず。この五分のうち中開の三分をその大體と爲す。所謂正化益なるものなり。この正化益の一段は更にその義趣を分別すれば益人三あり、文別四あり、細別六あり、次に圖示するが如し。



文別四



細別六

【章安略傳】

上來既に諸家の教判と分文とを明し了る。今や正しく章安大師灌頂の見るところを明にすべき順序とはなりぬ。而して所謂章安大師はこの經釋家の宗として特に撰んで今の指南とせり。爾れば則ち、義須く先づその傳を明にし、次にその所見を委悉すべきなり。

(一) 師は俗姓吳氏、臨海章安の人なり。陳文帝天嘉二年(A.D. 561)に生れ

小字は非凡、字は法雲、七歳攝靜寺に入り、慧拯法師に従つて出家し、灌頂を法諱となす。二十歳進具し、二十七歳師の喪に遇ひ、遂に台嶺に登り

修禪寺に詣して天台智顛禪師の門に投ず。之より常隨昵近の弟子となり、熱心その道を學ぶ。所謂金陵光宅寺に在ては法華文句を聞き、荊州玉泉寺に在ては法華玄義、摩訶止觀を聞き、乃至天台大師晚年

圓熟の妙法悉く與り聞く。而してその猛烈なる記憶力と異常なる文才とに依り、悉く之を結集し、その未聞を尋ねてこれを再治し、智者一代の説殆ど凡てこれを集大成す。後世の史家、その法勳を讚

嘆して阿難結集の功に比す。天台の入滅するや、その遺言に従ひて、揚州に至り晉王に謁して、淨名

【八】 唐僧傳卷十九、佛祖統紀卷七、釋門正統卷二、等に傳あり。



疏」を獻じ、台嶺に歸り、千僧會を設け、國清寺建立に與かり、隋仁壽元年（A.D. 601）煬帝の勅に應じて淨名を講じ、既にして隋末唐初の騷亂に遭遇し、東西に流寓し、この間に在て孤山智圓の所謂前後二十一難に遭遇しつつ、この閒刻苦辛慘を窮めつ、大涅槃經の玄義二卷、並に疏三十三卷の大著を完成し、以て平生の志を遂ぐ。この大涅槃經を撰せしは隋大業十年十月十日にして爾來屢刪補を加へ修治に従ふこと五年、この閒居を移すこと六度、漸く筆を收むるに至りしは唐武德元年の事なりと云へば、師生涯の心血を澱ぎし苦辛の大作と云はざるべからず、師この著成りてより、常にその郷土章安の攝靜寺に在りてこれを講ず。唐貞觀六年八月七日國清寺に在りて晏然として化す。世壽七十二。

【造疏緣起】

章安一代の傳を案ずるに詢にこの經と相終始す。（八三）

その自

【八三】涅槃玄義終末の一段造疏緣起を見よ。

ら記するところに徴するに、七歲攝靜寺に出家し、その師慧拯法師より稟學するところ實に大般涅槃經となす。半ならずして師の寂に遇ひ、この經の旨趣を窮めんが爲に天台に歸し、爾來親く智顛禪師に請うて面授を約しつ、併も機緣熟せず、遂に指授を受くること能はずして天台の滅に遇ふ。此の如くにして攝靜より天台に歸せる所以を果遂すること能はず、空く法障の深きを慨く。爾後重難重障、頗る苦辛を積み、併も屈するところなくして遂に玄疏を製し、これを本の攝靜に講じて漸くにして宿志を暢ぶ。噫前に曇無讖三藏ありてこの經傳譯の爲にその生涯を盡くし、後に章安大師ありてこの經講

疏の爲にその全身を終はる。この經を讀まんもの、その惠澤を恩謝せずして可ならんや。

章安大師製疏の緣起を自敘するを釋して、宋の孤山智圓法師、その著發源機要のうちに特に章安製疏の二十一難を數ふ。二十一難とは、前の八障、中の五難、後の六移並に最後の二事是なり。文說冗長を恐るるが故に、且くその義目を列して三障を察せしむ。

前の八障とは、

- 一に天台大師に逢へども台嶺を出でてこの經を聞くを得ざりし障、
- 二に既に金陵に出づれば道俗參詣し門堂交絡して聞くを得ざるの障、
- 三に既にして親しく聽講の許を得たれども忽ち金陵の土崩に遇へる障、
- 四に漸く廬山に會したるも復漳陽の反叛に遇へる障、
- 五にまた江陵の兵亂に遇うて揚州に去るの障、
- 六に獨り疾んで豫章に滯るの障、
- 七に大師に従つて早早とし東台嶺に旋へるの障、
- 八にその冬大師の入滅に逢ふの障、

この八事を具するに依て章安聞法の緣を障ふ。故にこれを八障と云ふ。

次の中の五難とは僧使と遭遣と值水と被讒と及び馬陷となり。已上の八障五難は製疏の遠由なり。依て諸の舊疏を討ぬるに經旨と合せず、怏怏として樂まざるものは製疏の近由なり。

後の六移は正しく製疏の難なり。蓋し章安の起稿より絶筆に至るまで六度その居を移さざるを得ざるの難に遇ふ。初は天台の南赤城に居り、次に沃州に移り、次に遂安に移り、次に桐城に移り、次に重ねて遂安に移り、後安州に移る、この間に在りて火盜の二事あり。辛悻苦思具に記すべからず。已上二十一個の大難を経て宿志遂に満足し、玄義一卷・釋文十二卷・用紙七百張を完成す。これを章安造疏の縁起と爲す。

【玄義五重】章安の玄疏は即ち大般涅槃經玄義と大般涅槃經疏となり。玄義は即入文解釋に先ちて、豫め一經の玄旨を懸譯す。疏は即經の文と句とを逐うて丁寧文義を明にす。玄義には大に五重玄義の大綱を張り、疏には盛に五門の襟領を提ぐ。蓋し疏前に玄義を談ずるは天台の學風にして、玄義は必ず五重を分つもの亦天台の常套なり。今章安その師意を承用して軌轍を脱する勿し。

所謂五重玄義とは一に釋名、二に釋體、三に釋宗、四に釋用、五に釋教なり。

一に釋名玄義の下に在りては翻名・通名・無名・假名・絕名の五番を分ち、翻名の一に無翻・有翻・雙亦・雙非の四門を分ち、無翻家中五家の異説を擧げ、有翻家中梁武の説並に十家の異説を列ね、四門を敍して次に開善の四説と觀師の難とを示し、進で十番(具には十六番)の難を設けて開善を破し、最後に翻名大減度の義を釋して三大・三滅・三度・九番互具不縱不横の大涅槃なることを結し、通名の一には涅槃安樂の通別より達摩多羅の説を擧げ、後に三番通別の四句を開いて料簡し、無名の一に

は三家の舊説を破して三徳不縱不横の大涅槃を釋顯し、假名の一には八義を以て結し、絶名の一には舊説を破し、四教各二絶を出し遂に藏通別三教四門の談は、當位を動せずして圓教四門の妙法なることを開顯せり、縱横の釋義云の如く廣く、重重の玄談嶽の如く高し、一朝の談に非ず。今少かに一隅を擧ぐるのみ。

二に釋體玄義の下に在りては敍舊と正釋との二段あり。前者のうち二諦・三聖・三性の三番ありて二諦體を論ずるに四家の舊説を列して之を破し、三聖の下亦舊説を擧げて之を破し、三性の下亦前に同じ。正釋の段下には初に非を斥け次に正釋、正釋の下、一に三涅槃に約し、二に三徳に約し、三に一諦に約し、四に不生不生に約し、五に正性に約し、五番にこの經非因非果不縱不横一三三一互具互融不可思議大涅槃の妙體を釋顯す。

三に釋玄義の下に在りては先づ古説を非し、次に正しく今經の宗を敍して修行の喉襟因果に過ぎたるは無しと斷じ、この經のうやうや因を修するを明すに一に無常を破して常を修すると、二に大涅槃心に住して五行等淺深漸修すると、三に聖行品に所謂一行如來行を修すとの三四ありと列釋し、この三因畢竟一常の修に外ならずと示し、この常因を修して大涅槃の常果を尅すべきことを示せり。

四に釋用玄義の下に在りては、本用・當用・自在起用の三を分ち、本有佛性の妙用を本用とし、萬惑を漸除してこれを開覺するの妙用を當用とし、既に開覺し了りて自在に妙用を示現するを自在起用とす。

本用を明すの下三師の舊説を破し、常用を示すの下また三師の説を破し、照境の用を論ずるに七家の異義を示し、自在起用を明す下の文、不可思議用・二鳥雙遊用・善惡邪正俱攝用の三段を分ち、不可思議用の下七家の舊義を列し、鳥喩品等の意に依て二鳥雙遊用を明し、陳如品等の意に依て邪正善惡俱攝用を明し、大涅槃自在無窮の妙用を釋顯せり。

五に釋教玄義の一段は節を改めて要説すべし。

【判教五綱】 第五釋教玄義とは 卽章安大師の大涅槃經に對する教判觀なり。玄義に増數に約してこれを明す。所謂一乳・二字・三修・四教・五味これなり。

一〇 一乳の判とは乳の名は通ずれども一概なることを得ず。今分別するに四種あり。一に邪乳は外道の四倒なり。二に二乗乳は三藏の四非常教なり。三に菩薩乳は大乘自在の教法にして慈悲止むことを得ず。權實の法を施設して機縁を満足せしむるこれなり。四に佛敎乳とは乳の最上にして究竟眞實の涅槃敎。卽是なり。これ序の如く、驢乳・羊鹿乳・下品牛乳・上品牛乳の別なるが如し。

二〇 二字の判とは半滿二字に寄せて諸敎を判す。これに五意あり。一には直に是半字敎、二には半に對する滿字敎、三には半を帶する滿字敎、四には半を廢する滿字敎、五には半を開するの滿字敎これなり。一は鹿苑無常の説なり。二は方等褒貶の常説なり。三は大品三人共學の説なり。四は法華の正直捨方便なり。また開權顯實用あるは開半の義なり。五はこの經の劣の三修を斥け勝の三修を辨する

が如きは廢半の義に屬し、一切衆生悉有佛性と説き、須跋陀羅の羅漢果を得るを明すが如きは第五開半の義なり。

三修の判とは、これに邪の三修、劣の三修並に勝の三修あり。邪の三修は外道の倒見なり、その六行觀正に是に當る。劣の三修は二乘半教の四非常觀これなり。勝の三修とは佛の勝教により劣修を破し四徳を明らかに、八自在を具し、祕密藏に入るに名く。一は世伊なり、二は故伊なり、三は新伊なり。今この經は新伊・勝修・最上・最勝の教なり。

四教の判とはこれ天台化法四教の判なり。前既に示すが如し。  
五味の判とはまたこれ天台常に説くところの五時約部の判なり。前既に敍するが如し。  
已上略して章安の五重玄義を略敍したる。

【五門分科】 章安尊者大般涅槃經二十五品の始終を科して五門を立つ。これ所謂玄義の五重と相對して釋經の綱領たるものなり。五門の分科とは一には召請涅槃衆、二には開演涅槃衆、三には示現涅槃衆、四には問答涅槃義、五には折攝涅槃用これなり。略して請・施・行・義・用の五門と云ふ。

一に召請涅槃衆は最初の序品を科す。道孤運せず、時機因縁を待つて始めて顯はる。今大涅槃開演の時、到り、而門放光類に隨つて感動し、拘尸那伽羅城に會し來る。緣牽を召と云ひ、招致するを請と云ふ。來會の大衆權實二類の別あり。當機・結縁の實者は召すべく發起・影響の權者は請すべし。五十

二衆雲の如く來集す、その相正しく序品の示すところなり。故に涅槃衆を召請すと名く。

二に開演涅槃施は純陀品第二より大衆所問品第十七に至る十六品を科す。抑如來多劫に於て難得の大涅槃藏を修習し珍藏す、本より秘懐の心なしと雖も小機小縁は悲哉盡く能く受くること能はず。此に於て佛方便して塵苑に劣修の毒を塗り、今雙林に來りて勝修の淨水を以てこれを洗ふ。蓋し機縁の熟否に依る。誰かこれを如何せんや。既にして純陀の獻供に因り、常色力を施し、比丘の請住に依りて小僞を斥け、大眞を談じ、慇懃に問を勸め、迦葉旨を承け二十二行の僞を説きて三十四問を呈し、如來所問に隨て一十六品中次第に祕藏を施與して遺滯するところなからしむ。誠にこれ法雨充溢して拘尸城に滿つるものなり。故に開演涅槃施と稱す。

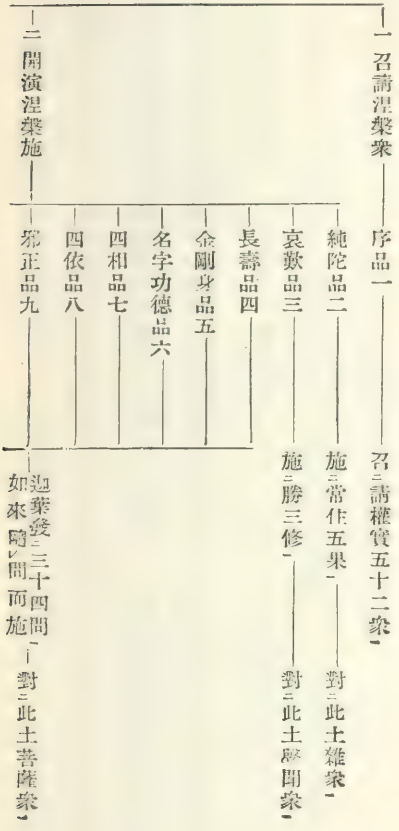
三に示現涅槃行は現病品第十八より高貴德王品第二十二に至るを科す。所謂大涅槃三徳の祕密藏界は行徳に非ざれば到ることなし。此に於て如來廣く五行・十功德を示して涅槃行を教ゆ。示現涅槃行の名ある所以なり。

四に問答涅槃義は師子吼品第二十三の一品を科す。蓋し大涅槃の義たる、前既に屢これを説くと雖も三徳の義諸法に類通して窮盡なく浩然として涯際を知らず、菩薩々の要を的取して特に佛性の一法に約して六句を擧げて問ふに因りて佛慇懃に涅槃佛性の義を答門重重せり。故に問答涅槃義と名く。

五に折攝涅槃用は迦葉菩薩品第二十四並に橋陳如品第二十五との兩品を科す。抑佛性の體たる善

に非ず惡に非ず、善惡雙現なり。またこれ邪に非ず正に非ず、邪正雙用なり。故に善を用ゆれば羅云攝せられ惡を用ゆれば善星收むるに堪へたり、またこれ正を用ゆれば始に陳如五比丘を攝し、邪を用ゆれば終に外邪十類を收む、善惡邪正一如に折攝して自在なることを示す。故に折攝涅槃用と名く。今この經を讀まんもの、請ふこの五門の大義を服膺して以て始終の歸趣するところを領すべし。

### 大涅槃經五門分科總圖





四	問答涅槃義	四諦品十	
四	問答涅槃義	四倒品十一	
四	問答涅槃義	如來性品十二	
四	問答涅槃義	文字品十三	
四	問答涅槃義	鳥喻品十四	
四	問答涅槃義	月喻品十五	
四	問答涅槃義	菩薩品十六	
四	問答涅槃義	大眾所問品十七	
二	示現涅槃行	現病品十八	
二	示現涅槃行	聖行品十九	
二	示現涅槃行	梵行品二十	此品末指「雜華經」 明「天行」
二	示現涅槃行	嬰兒品二十一	
二	示現涅槃行	高貴德王品二十二	
二	示現涅槃行	師子吼品二十三	約佛性一法作六重問答
二	示現涅槃行	迦葉菩薩品二十四	攝惡用
二	示現涅槃行	橋陳如品二十五	攝邪用
五	折攝涅槃用		

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

五行

功德

已上經本・流傳・教判・分科・玄義等を主題と爲し、細目略六十科を設けて舊説を摺撫し聊かこの經の開題に擬す。爾るに、若因縁の許すものあらんか、更に各品の大意を敍し因に要義を辨じ、添ふるに大涅槃經を中心として起れる典禮と彫刻・繪畫とに關して述ぶるところあらんとしき。各品の大意はこの經二十五品の内容を撮略して示し、因に辨ずるの要義は大涅槃經の佛教思想全史上に於ける地位を明かにせんが爲に今經要詮・闡提成不・一性五性・非情成不・依他自發・信心佛性等の題目を設け、漢和佛敎史上生ける人生問題として如何にこの經が多數學匠の頭腦を惱ませしかを明にし、一面この經を中心としたる佛教人性論 Anthropology の問題に關する歴史的敘述を試みんとの希望を有しき、またこの經中心の典禮とは涅槃會の起源並に沿革及び涅槃講式と稱する特殊の文學と音律とに關する研究にして同時に印度・西藏・支那・日本に通じて廣く知られ、且存する如來入涅槃の繪畫並に彫刻、特に金棺出現の變相等に關して記すべきものありと雖も、時機因縁の許さざるものありて今皆これを措く。これ吾章安・孤山慘憺の先躡に鑑み深く自ら慚愧に堪へざる所なり。予今病を力めて開題を草し、將に筆を措かんとするに臨み、重て國譯大涅槃經小成の因縁を案じ、佛祖甚深の冥加と四方有縁の攝護と及び大藏國譯の本願たる鶴田居士、司譯たる山上曹源師、編校者たる靈山・上山諸君を勞するところ多かりしを深念し、感謝せざるを得ず。且それこの稿の成る、本經の譯文修成に關しては高島浩園君あり、その脚註治定に關しては上山任介君あり、殊に攻學上一言の要ある者はこの經の中、第八帙(卷)に於け

(10) 先陀婆 Saikhava (P. 287, F. N. 71) • 阿竭陀 Agasti (P. 368, F. N. 89) • 第九軼に於ける (11) 由提迦 Yulika (P. 13, F. N. 81) • 檀菴迦 Dhanika (P. 13, F. N. 82) • 阿低耶 Atreya (P. 213, F. N. 131) • 楞伽利 Imigali (P. 212, F. N. 10) • 婆积多 Saketa (P. 251, F. N. 76) • 漫陀 Maṅḍara (P. 313, F. N. 105) • 羅陀 Godha (P. 333, F. N. 77) • 迦不多 Kapiltha (P. 315, F. N. 94) • (11) 戸婆富羅 Sivapura (P. 354, F. N. 31) • 婆蹉婆 Yasava (P. 363, F. N. 104) • 摩佉婆 Mahavay (P. 368, F. N. 105) • 波羅留枝 Yaramuci (P. 377, F. N. 133) • (12) 戸利沙 S'ria (P. 417, F. N. 127) 等の如きは或は從來未だその原語の知れざるもの、或はその譯語の見出されざるもの、或は譯語の不完全なるもの等にして、今回特にこの經の脚註に於て聊か意を用ひたる所、これまた上山任介君の研討に俟つ所あり矣。而して已上の諸氏共に予を扶けて幸に斯經あるを致さしむ、これ誠に特に茲に録して永く同事に淨縁を慶せざるを得ず。一部の始終文と質と凡て杜撰に失するところ必ず少からざるべし。恐懼止む能はず、十万の賢聖希くは指教に吝なる勿れ。

大正第七歲丙午に次る十一月四日午前二時

皇都白山居に在りて

龍谷後學 島地大等 度みて識す



# 大般涅槃經疏釋

曇無讖譯大般涅槃經には、南北兩本の別あること前既に問題に示せるが如し。後のこの經を註釋するもの、亦各或は南本を疏し、或は北本を釋す。現存の諸註を大觀するも、淨影の疏は北本を釋し、章安の疏は南本を釋するが如し。今この經に對する三朝の章疏を觀するに、本疏末釋頗る多數に上り、その中或は現に傳流するものあり、或はその名獨り存してその書久しく逸するあり。博引旁證古今の疏目を攻證羅列するはこの次の能くするところに非ず。且く義天錄・永超錄等の古目錄數部を參考し、これを現流の章疏に攻ひ、試にその大概を示さんとす。以下列するところの書目は、その小字を用ゆるものは逸本に屬し、大字を以て記するものは現存を示す。各本の問題は、敘述の廣汎を許さざるものあるが故にこれを略せり。また義天錄は義天撰新編諸宗教藏總錄三卷を、興隆錄は佛典疏鈔目錄二卷を、謙順錄は諸宗章疏錄三卷を、永超錄は東域傳燈目錄一卷を、源空錄は諸宗經疏目錄一卷を略稱したるものなることを記すべし。

一、涅槃論一卷 婆藪槃豆造 達磨菩提譯

二、涅槃經本有今無偈論一卷 天親菩薩造 陳眞諦譯

この二部共に世親の造なり。印度の涅槃經に關する註釋にして現存するもの、唯この二部あるのみ、前者は一經の概説なり、後者は經中に存する本有今無偈四句を釋するのみ。共に藏中に現傳す。

三、大般涅槃經序一紙 後秦釋道朗撰

四、涅槃經疏？卷 河西道朗著

天台・章安・嘉祥等の諸師盛にこの師の説を引く。特に法華涅槃の兩疏を著はせしこと、傳に徴し、前出諸師の著に徴して疑ふべからず。今日に留むるものは惜むべし唯經序一紙あるのみ。現に經初に附す。また應に知るべし、河西の疏は漢地この經の疏釋あるの始なり。爾後南北朝の諸家盛に疏を製す。近くは梁高僧傳に傳ふるが如し。今且くこれを措く。

五、大般涅槃經集解七十一卷 梁寶亮等勅集

東西古今に互りて、この經講讀の盛なること、支那梁朝に若くは勿し。集解七十一卷は、實に梁武帝の勅撰にして、時代名匠の衆説を惣集せり。道生・僧亮・法瑤・曇濟・僧宗・寶亮・智秀・法智・法安・曇准・曇愛・曇識・道慧・明駿等諸家の説を集成す。所謂百花燎亂・梅櫻桃李一時に開くの觀あり。南本涅槃を釋す。卷首に梁武帝の序あり。これに依るに梁天監八年五月八日寶亮に勅してこの撰集あり。同九月二十日その業を訖ると云ふ。現に大日本續藏經中に傳ふ。永超錄に「大涅槃經集解七十二卷梁揚都沙門釋僧朗奉勅註」等と云へるは誤傳なるに似たり。

六、大涅槃經義記二十卷 隋慧遠述

隋淨影寺慧遠の作なり。北本涅槃唯一の釋と云ふべし。元十卷なり。後人開いて各本末を分ち二十卷を成す。久しく寫傳す。現に大日本讀藏經中に入りて存す。

七、大涅槃經疏二十卷 胡吉藏述

八、涅槃經遊意一卷 沙門吉藏撰

共に金陵大師吉藏の撰なり。爾るに現に日本續大藏經中涅槃經遊意一卷を傳ふるのみ。その疏は名獨り古目錄に存して書本久しく逸せるが如し。二十卷或は十四卷と傳ふ。これ恐くは隨文解釋ならんか。遊意は則六科を立てて一經の要旨を概説す。

九、大涅槃經玄義一卷 頂法師撰湛然再治

一〇、大涅槃經疏十五卷 頂法師撰湛然再治

南本涅槃を釋す。これ所謂章安涅槃の玄疏なるものなり。古目錄に依るに、玄義或は二卷とし、疏或は十八卷とす、調卷の不同か。現流の本に、玄義は行滿の文句と會して二卷とし、或は孤山の發源機要と會して四卷とす。疏の現流本は單疏と會本とあり。共に調卷二十六本なり。會本は更に二種あり、單に經疏兩文を會するものと、更に科文を冠するものとなり。前者は活字版並に寬文中坊刻本の二種あり、共に明圓澄の分會に依る。後者は吾守篤本純の配案するところ、重訂交科大般涅槃經會疏三十

六本 卽是なり。これ諸種章安疏本中の最も善本と稱すべきものなり。

一一、大涅槃經後分科文一卷 唐湛然撰

これ永超錄の傳ふるところなり。諸宗章疏錄には佛祖統紀に所謂「涅槃後分疏一卷」と云へるもの恐くは是歟と註せり。今存せざるが故に知り難し。

一二、大涅槃經玄義文句一卷 唐道暹撰

一三、涅槃經疏私記九卷 唐道暹述

荆溪湛然は章安の疏を再治し、別に金剛鉈を造りて非情佛性の大義を顯揚す。その門下また餘風を扇いて競うて涅槃を講敷せるに似たり。行滿・道暹・智雲・元皓の諸匠皆撰述あるに依て徵すべし。道暹の文句は本の章安玄義と會合し大涅槃經玄義文句と題し、調卷二本現に行はる。またこれ守篤本純の印行するところなり。疏私記は永超錄に十卷と云ひ、謙順錄に大涅槃經疏記九卷と云ひ、また別に涅槃經疏鈔五卷道暹述と云ふ。案するに皆是同本調卷を別つのみ。現に大日本續藏經に入る。章安の涅槃疏を釋す。文義共に簡素にして現流の本また寫誤脫文少からず。惜むべし。

一四、涅槃經疏私記十二卷 唐行滿集

一五、涅槃經音義一卷 唐行滿述

行滿は荆溪の上足にして吾最澄の師を以て聞ゆ。今の私記は章安の疏を釋す。永超錄に「大涅槃經疏



鈔五卷又云私記行滿」とあり。謙順錄には涅槃經疏私記五卷行滿述とあり。現行は大日本續藏經中に在り。調卷第十二卷尾に四末畢と云ふ。開合の別なること准知すべし。釋は經第三十卷に至りて盡く、内題また「天台涅槃疏私記、天台沙門行滿集」と云へり。別に經の音義一卷ありしか。永超・謙順二錄共にその名を録す。今存せず。

一六、大涅槃註科文一卷 唐元皓

一七、天台註涅槃經九卷 唐元皓

永超錄に出す。且註して曰く、元皓はこれ妙樂入室の資なり、本を覓るに未だ足らずと。

一八、涅槃經私志記百十五卷 唐智雲述

謙順錄にこの疏目を出して且曰く、未到、智雲述、按東域無百字と、これ荆溪門下石鼓智雲の撰、また別に法華經疏私志記ありて古來傳流すること人の知るところなり。別錄に涅槃經私志記百七卷と云ふ。百字恐くは衍、七卷十五卷は調卷の別歟。

一九、大涅槃經治定疏科十卷 宋智圓排定

二〇、大涅槃經玄義發源機要二卷 宋智圓述

二一、大涅槃經疏三德指歸二十卷 宋智圓述

この三部は誠に章安玄疏を領するの左券なり。靈空光謙師既に曰く、由記以通疏由疏以會經と。

詢に爾り矣、科文は經疏を併せ科す。經と疏と何れを讀まんにも無かるべからず。今の國譯附するところは經文に附順し省略して明すと雖も、依るところ此に在矣。古錄或は二卷と記し或は二十卷と云ふ。現流は十卷なり。次に發源機要は章安の玄義を釋して而して丁寧なるものなり。これを行滿の文句に比するに螢燭の類に非ず。三德指歸は章安の疏文を釋し、且つ後分涅槃を加釋す（恐くはこれ後分涅槃唯一の疏釋ならむ）。疏釋の南針と稱すべし。宋地堂に逸し、本朝また正徳年間始めてこれを美濃長瀧寺の古藏に獲て世に行ふ。惜哉其の第十五卷を闕く。孤山涅槃の三部共に大日本續藏經中に入りて存す。若其れ諸錄の中その名獨り存してその書久しく傳はらざるものに至りては、

二二、大涅槃經疏ノ卷 唐法寶述

義天錄は二卷、或一卷と云ひ、永超錄に大涅槃經略疏十五卷、薦福寺法寶と云ひ、謙順錄亦同じ。興隆錄に疏三十五卷と云へり。その俱舍論疏首に世親撰述を論するもの、竊にその機微を示すに似たり。

二三、大涅槃經疏科文一卷 溜州惠沼述 永超錄出

二四、大涅槃經義記二十卷 溜州惠沼述 謙順錄出

二五、大涅槃經宗要二卷、或一卷 元曉述 義天・永超・謙順諸錄出

二六、大涅槃經述讀十四卷 憬興述

二七、大涅槃經疏料簡一卷 憬興述

憬興疏は義天錄に十四卷、或七卷と云ひ、永超錄に十四卷、分本末爲二十八卷、更料簡一卷と云

ふ。元曉（ケノミダウ、シヨムン、アロヒ、ハイン、ユウ）の疏文（シヤ）或は引用（イユウ）の書あり。其（ナラ）に今傳（イマノト）ハテ惜哉（オシカカ）。

二八、大涅槃經義記五卷 義寂述 永超・謙順等錄出

二九、大涅槃經綱目二卷（或一卷） 義寂述 義天・永超・謙順諸錄出

三〇、大涅槃經云何偈一卷 寂法師 永超錄出

三一、大涅槃經古述記八卷（或四卷又二卷） 大智述 義天・永超・謙順諸錄出

三二、大涅槃經義集七卷 孫家撰

孫泰疏（シヨウタイ、シヤ、アノク、シヨウ、コト、ニ、オフ）は義天錄（ワラテ、シヤク、タケ、ハ、ハ、カ、ヤウ、シヨウ、ク、ウ、ケ、ト、ヨ、リ、ナ、カ、セ）に孫太述（シヨウタイ、シヤ、アノク、シヨウ、コト、ニ、オフ）とし、永超錄（ワラテ、シヤク、タケ、ハ、ハ、カ、ヤウ、シヨウ、ク、ウ、ケ、ト、ヨ、リ、ナ、カ、セ）に大涅槃經疏六卷孫泰撰（シヨウタイ、シヤ、アノク、シヨウ、コト、ニ、オフ）とあり。謙順錄（ハ、シ、ヨ、ン、ル、ク、マ、タ、ト、ア、ル、ク、ノ、ミ）亦疏六卷と云ふ。

三三、大涅槃經後分疏一卷 真慈述 義天錄出

三四、大涅槃經圖指鈔十四卷（或十卷） 知常述 義天・永超錄出

三五、大涅槃經科五卷 善空述 義天・永超錄出

三六、大涅槃經隨疏心鏡三十卷 繼延述 義天錄出

三七、註涅槃經三十卷 唐華江縣令善詒註 永超錄出

三八、大涅槃經後分簡要一卷 思孝述 義天錄出

三九、大涅槃經鈔二卷 玄範述 義天錄出

四〇、大涅槃經鈔四卷（或一卷） 潤述 義天錄出

四一、大涅槃經義章一卷 ？ 義天錄出

四二、大涅槃經大意一卷 ？ 義天錄出

四三、大涅槃經科同卷 ？ 義天錄出

また清淨挺の著涅槃經末後句一卷あり。現に大日本續大藏經中に存す。  
 已下の諸鈔疑ふらくはこれ<sup>わ</sup>和朝の出歟。或は<sup>あるひ</sup>これ異域の造歟。或は<sup>あるひ</sup>書目を傳へて疏主を傳へず。偶人師を指稱すと雖も<sup>いと</sup>茫漠捉ふる勿し。唯諸錄に依てこれを列するのみ。

四四、大涅槃經文段鈔六卷 東寺延法師撰 永超・謙順錄出

四五、大涅槃經疏十卷 惠藏師 永超・謙順錄出

四六、大涅槃經疏十卷 東塔院松院 誦許達 永超・謙順錄出

四七、大涅槃經抄一卷(或二卷) 林法師 永超・謙順錄出

四八、大涅槃經自鏡錄十卷 ? 永超錄出

四九、大涅槃經後分疏三卷 ? 永超・謙順錄出

五〇、大涅槃經料簡一卷 ? 永超錄出

五一、大涅槃經記一卷 ? 永超錄出

五二、大涅槃經開諦二卷 ? 永超錄出

五三、大涅槃經誠證一卷 ? 永超錄出

五四、大涅槃經壽命私記一卷 ? 永超錄出

五五、大涅槃經科文五卷 依丹丘疏 ? 永超・謙順錄出

五六、大涅槃經文字品添義章一卷 ? 永超錄出

五七、大涅槃經十四音義一卷 ? 永超錄出

五八、大涅槃經音義同異二卷 ? 永超錄出

五九、大涅槃經音義七卷 ? 前唐院 永超錄出

六〇、涅槃經音義一卷 法宣 永超・謙順錄出

六一、涅槃經疏鈔一卷 法宣 謙順錄出

六二、涅槃經音義六卷 飛鳥寺信行述 永超錄出

六三、涅槃經雜什譯出十四音辨一卷 智通 永超・謙順錄出

永超録中に梁武勅撰に成れる大涅槃經集解の支分とも察せらるる兩三の書目を出す。

六四、大涅槃經集解鈔十卷 ?

六五、集解大涅槃經略例一卷 ?

六六、集解大涅槃經記一卷 釋明敷

初の鈔十卷は集解の廣本を略鈔したるものに非ざる歟。略例は集解文義の體例を敘述したるものに非ざる歟。記一卷は集解中に存する明駿の説を鈔集したるものに非ざる歟。(駿恐くは駿の誤歟)。

六七、涅槃疏鈔四卷 叡山沙門證眞撰

延寶の刻本現流す。謙順録に涅槃經疏鈔四卷と涅槃私記四卷との書目を列す。恐くは同本別稱歟。爾るに現行の書、一・四兩卷を存し二・三兩卷を逸す。各本末を分つ。第四卷末は經第三十三卷に至りて盡く。恐らくこれ未盡の鈔歟。行滿・道運・智圓等の諸疏を去取評論す。文簡約なりと雖も、義旨頗る力あり。

一六八、涅槃經會疏箇條三卷

現に日本續藏經中に在て存す。末段には後分涅槃の要目をも附列す。撰者の名を逸す。

其の他涅槃經圖說五卷、涅槃經隨筆十卷等あり。皆本朝近代の著作と爲す。

涅槃經より出たる典禮文學の代表として支那に在りては、

六九、釋迦如來涅槃禮讚文一卷 宋淨覺仁岳撰

あり。慈雲遵式が天台祖師の禮讚文を作るに擬して撰するところなり。淨覺の前孤山智圓亦傳徽の白衣觀音禮を作るに擬して涅槃八德讚を作る。後人吟誦して如來の遺德を嘆すと云ふ。皇朝また

七〇、涅槃講式一卷 梅尾高辨撰

あり。涅槃會上哀婉雅亮の唄律を加へて古今廣く行はる。

若其れ涅槃像の繪畫に對する解説として、涅槃像考文鈔一卷あるが如き等、及び涅槃經研究の餘當然あるべき非情佛性の問題に因縁して成れる荆溪湛然の著金剛鐸、及び其の多數の註釋も亦此に加説するは必ずしも不自然に非ず。爾るに今主意とするところは、大般涅槃經直接の子註に在り。故に上來試に章疏の目を列して滿數七十種に及べり。乃ち輒く毫を收めて以てこの稿を了る。後賢請ふ更にこれを審かにせよ。

# 國譯大般涅槃經

## 卷の第一

### 序品第一

是の如きを我聞きき。一時、佛、拘尸那城、力士生地、阿夷羅跋提河の邊、娑羅雙樹の間に在したまふ。爾の時に世尊、大比丘八十億百千人と俱なり。前後圍繞せり。二月十五日、涅槃に臨みたまふ時、佛の神力を以て大音聲を出したまふ。其の聲法界に徧滿して乃ち、有頂に至る。其の頌者に隨ひて普く衆生に告ぐらく、今日、如来、應供、正徧知、衆生を憐愍し衆生を覆護し、等しく衆生を視たま

序品第一

【一】是の如きを。已下の本文は大般五章の初、今の序品は並しく涅槃衆寶二種五十二衆を詳請するを明す。其中二衆、順序と別序なり。順序の五成就六成就等の如し、受註并して五とす、別序の如し、

【二】拘尸那城。且に拘尸那城羅刹(Asuravata)、又拘束那城(Asuravata)、又拘束那城、兜摩城、拘尸城等とも書せり。拘尸(拘尸那)は上掌、兜摩(Asuravata)は市城の義、今の印度西北州 Ghazipur 市の

東北約二十英里邊に存する Kasipa の遺址に當ると云ふ一説あり、摩耶入滅の聖地。

【三】力士生地。力士は梵語 Kshatriya の譯、追放せられたる刹帝利族より生れ、強力を有せる種族の名。章安の註に人中の力士三十萬巨鬪する所なく法に依て暴散ならず、(國を爲せる)一團の土人を力士と云ひ、その本土なるを示して生地と云ふと、恐らくは拘尸城邊を指すならん。

ふくと 羅喉羅の如し。爲に歸依と作り世間の  
 舎と爲りたまふ。大覺世尊、將に涅槃したまはんと  
 欲す。一切衆生若し疑ふ所有らば、今悉く  
 問ふべし。最後の問と爲せよ。』 爾の時に世  
 尊、晨朝の時に於て、其の 面門より種種の光  
 を放ちたまふ。其の(光)明雜色にして、青、黃、  
 赤、白、頗梨、碼碯なり。光徧く此の三千大千  
 の佛の世界を照したまふ。乃至十方も亦復是の  
 如し。其の中の有らゆる六趣の衆生の、斯の光  
 に遇ふ者、罪垢煩惱一切消除す。是の諸の衆生、  
 是を見聞し已りて心大いに憂惱し、同時に聲を  
 擧げて悲號啼哭すらく、「嗚呼慈父、痛しき哉苦  
 しき哉」と。手を擧げて頭を拍ち、胸を椎うて  
 大いに叫ぶ。其の中、或は身體戰慄し、涕泣哽  
 咽するもの有り。爾の時に大地、諸山、大海皆

【四】阿夷羅跋提。梵名、*Amra*  
*Amra* の音譯、伊羅跋提、阿  
 恃多伐底等とも書す、無勝河  
 と譯す。又梵語 *Amrayavan*  
 の音譯なる尸領孛伐底、希連  
 河、希連禰河等の名を以て、  
 の地に名くるあり。此二者を  
 同河の異名と爲す說あれども  
 經の後文に照せば異河別名と  
 するを可とす。故に安註に前  
 者は城南に存し、後者は城北  
 に存すと云へり、更に檢せよ。

【五】娑羅雙樹。 *Sala or Sila*  
 を音譯して沙羅或は娑羅と記  
 す(學名 *Shorea Robusta*)。現  
 に印度北輦の地 *Tami Napani*  
 等の森林を爲せる「樹」是なり。  
 娑羅は堅固の義、この樹  
 質頗る堅固なるに依て名くる  
 歟。雙樹はこの樹、釋尊入滅  
 の地點に存せしもの、一方二  
 株、四方八株、互に對を爲す、  
 即ち四雙八隻たり。本經の後

方に「西方の一雙は如來の前  
 に在り、東方の一雙は如來の  
 後に在り、北方の一雙は如來  
 の首に在り、南方の一雙は如  
 來の足に在り」と云へる是れ  
 なり、故に名く。またこの八  
 株の中四は枯れ四は榮ゆ。下  
 根相連り上枝相合し所謂連理  
 に似たり。釋尊入滅の時、林  
 樹葉悲んで色を失し一様に白  
 色を呈し白鶴の群集せるに似  
 たり、故に又鶴林の名あり。  
 後世如來の入滅を鶴林と稱し  
 國學また鶴の林の語を作りて  
 耆闍崛山を鷲の御山と云ふに  
 對するもの此に由來す。

【六】二月十五日。最も普通に  
 知られたる如來入滅の時日。  
 これに二月八日、三月十五日  
 四月八日、九月十五日等の異  
 說あり。安註に二月は仲春、  
 仲は中、中道を表し、十五日  
 は滿月、圓常を表す。仲春滿



悉く震動す。(二四)時に諸の衆生、共に相謂

つて言はく、『且く各裁抑して、大いに愁苦す

ること莫れ。當に共に疾く、拘尸城の力士生處

に往詣し、如來の所に至りて頭面禮敬し、如來

(二三)般涅槃したまふこと莫く、世に住すること一

劫若は滅一劫なりたまへしと勸請すべし』と。互

相に手を執り、復是の言を作さく、『世間は虚

空となり、衆生は福盡き、不善の諸業増長して世

に出でん。仁者、今當に速かに往き、速かに往

くべし。如來久しからずして必ず涅槃に入りた

まはん。』又、是の言を作さく、『世間は虚空と

なり、世間は虚空となれり。我等今より救護有る

こと無く、宗仰する所無し。貧窮孤露にして、

一旦無上世尊に遠離せば、設疑惑有らんととき、當

に復誰にか問ふべし。』(二七)時に無量の諸の大弟

月の日に入滅し給ひて中道圓

明の法に常住し給ふを表すと

云ふ。此文より後廣く別序段

なり。此中能召、所召、結召

の三段あり。初の能召の一段

に聲、光、動の三召あり、今の

文正しく聲召即ち音聲を以て

大眾を召請するなり。この中

又六段あり、科文を見よ。

【七】涅槃。梵語 Nirvāṇa の音

譯。寂滅、滅度等の譯あり。

最高理想境を顯はすの語とし

て用ひらるるも、また普通如

來その他聖者の入滅を稱する

ことあり、今もその意なり。

【八】有頂。正しくは、三界の

最頂たる第四無色天、即ち非

想非非想處天を指す。然るに

古來或は色界頂たる色究竟天

を指すと云ひ、安註は別に無

學を有頂とし、また妙覺を有

頂とするの義を加説す。

【九】類音。衆生の種類に應じ

る萬差の音聲と云へること。

【一〇】如來、應供、正徧知。この

三號を安註に、序の如く如來

の父、主、師たる三德を表すと

云ひ、之を如來の内德とし、次

の憍態衆生等の四句を慈(憍)

悲(敬)喜(覆護)捨(等視)の四

等定を表すと云ひ、之を如來

の外德を歎すと云ふ。已下の

文應觀、主、師に約して釋する

ことを得べし、指號を略す。

【一一】羅睺羅。Rāhula の音譯。

覆障の義、釋尊在俗時の唯一

の王子の名。

【一二】爾の時に世尊。已下の文

は次に光召なり。即ち光明を

以て大眾を召請するを明す。

之に四段あり、別科の如し。

【一三】首門。釋尊の金目を云ふ。

【一四】是より動召の文。所謂

地動等に依りて大眾を召請す

るを云ふ。動召の中、初は練

べて所召を明す。これに抑

子あり。尊者(一〇)摩訶迦旃延、尊者(二)薄拘羅、

尊者(三)優波難陀、是の如き等の諸の大比丘の、

佛光に遇ふ者、其の身戰掉し、乃至大いに動じ

て自ら持すること能はず。心濁迷悶し、聲を發

げて大いに叫び、是の如き等の種種の苦惱を生

ず。爾の時に復、八十百千の諸の比丘等有

り。皆阿羅漢にして、心に自在を得、所作已に辨

ず。諸の煩惱を離れ。諸根を調伏す。大龍王の

如く大威徳有り。(三三)空慧を成就し、己利を速

得す。(三六)梅檀林の梅檀圍繞するが如く、師子王

の師子圍繞するが如し。是の如きの無量の功德

を成就す。一切皆是佛の眞子なり。各晨朝、日

の初めて出づる時に於て、常住の處を離れ、方

に楊枝を用ふるに佛の光明に遇ふ。更に相謂

つて言はく、「仁等、宜しく速かに澡漱清淨に

苦、異請、釋請、釋苦の四段あり。

【五】般涅槃 (Parinirvāṇa) 寂滅と譯す。涅槃との區別は、般涅槃は寂滅の意に於て涅槃よりも更に強き意味を有す。

一説に依れば涅槃は修道の理想境なれば萬人共通なる目的なり、然るに此の理想と合一し最大境地を體驗せる個人としての菩薩が、二利を盡して正に無餘涅槃に入らんとし、世界と訣別する最後の状態を般涅槃と云ふ。されど此の二概念は混同して用ひらるること多し。

【六】世間は虚空となり。如来入滅し世を去り給ふが故に世間は虚空となり、また應供の主を亡するが故に衆生の福盡く等と云ふ。

【七】是より別して所召の大衆五十二類を明す。此中此土、他

土の二段あり、今先づ此土を召するの文。この中又三段あり、初に闍浮衆中の聲聞の文也。之に僧と尼とあり。

【八】摩訶迦旃延 (Mahākāśyapa) 眉垂、好眉等と譯す。佛十大弟子の隨一、論議第一と稱せらる。

【九】薄拘羅 (Vāṅkura) 善容と譯す。

【一〇】優波難陀 (Upananda) 大歡喜、重喜と譯す。

【一一】八十百千。百千は十萬をいふ、されば八十百千は八百萬のことなり。

【一二】空慧。大乘第一義空の眞理に悟入したる智慧を云ふ。

【一三】己利とは、自己の得道(即ち自行)をいふ。利他の前提としての自調にして世間謂ふ所の利己とは異れり。

【一四】梅檀。梵名 Chandana の音譯、香木の名。

すべし。』是の言を作し已りて舉身毛豎ち、徧體血現じて、波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大苦惱を生ず。衆生を利益し安樂にし、大乗第一空行を成就せんと欲するが爲に、如來の方便密教を顯發し、種種の説法を斷絶せざるが爲に、諸の衆生の調伏の因縁の爲の故に、疾く佛所に至り、佛足を稽首し、繞ること百千市し、合掌恭敬して、御つて一面に坐す。爾の時に復、拘陀羅女、善賢比丘尼、優波難陀比丘尼、海意比丘尼と、六十億の比丘尼等と有り。一切亦是大阿羅漢なり。諸漏已に盡きて心自在を得、所作已に辨じ、諸の煩惱を離れ、諸根を調伏して猶し大龍の如く、大威徳有りて空慧を成就す。亦晨朝、日の初めて出づる時に於て、舉身毛豎ち、徧體血現じて波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にして、大乗の第一空行を成就せんと欲す。如來の方便密教を顯發して、種種の説法を斷絶せざるが爲に、諸の衆生の調伏の因縁の爲の故に、疾く佛所に至りて佛足を稽首し、繞ること百千市し、合掌恭敬して、御つて一面に坐す。比丘尼衆の中、復諸の比丘尼の、皆是菩薩人中の龍なる有り。位三十地に階し安住して動せず。衆生を化せんが爲に現じて女身を受け、而も常に 四無量心

【二五】波羅奢華とは、梵名「Pāśupatya」の音譯、赤花樹と譯す。安註に、葉青く花三色あり、日出前には黒、日中に赤色にして赤脈皆現じ、日後は黄なり、以て奉召前と奉召悲哀と佛滅後とに喩ふと。

【二六】大乗第一空行、大乗第一義空即ち中道實相の理に順じたる自利利他の妙行を云ふ。

【二七】拘陀羅女(Kudrā)。

【二八】善賢(Subhāra)。

【二九】優波難陀尼(Upanandā)。

【三〇】海意(Vaiganthī)。

【三一】十地。菩薩修行の階次たる五十二位の中、十信、十住、十行、十回向を終りて後入る位なり。一説によりて十地の名を列すれば左の如し。

(一)歡喜地 Pramuditā

を修習し、自在力を得て能く佛を化作す。

の時に復、一 恆河沙の菩薩摩訶薩有り。人中の龍、位十地に階し、安住して動せず。方便して身を現す。其の名を 海徳菩薩、無盡意菩薩と曰ふ。是の如き等の菩薩摩訶薩を上首と爲す。其の心皆悉く大乘を 敬重し、大乘に 安住し、大乘を 深解し、大乘を 愛樂し、大乘を 守護し、善能く一切世間に 隨順す。是の誓を作して言はく、『諸の未度の者、當に 度を得しむべし。已に過去無數劫の中に於て淨戒を修持し、善く所行を持す。未解の者を解し、三寶の種を紹きて斷絶せざらしめ、未來世に於て當に法輪を轉ずべし』と。大莊嚴を以て自ら莊嚴す。是の如きの無量の功徳を成就し、等しく衆生を觀ること一子を視るが如し。

(一) 離垢地 Yamāra Prahāṅkārī

(二) 發光地 Archenyūmatī Aroṣṇī

(三) 難勝地 Sudurjayā

(四) 現前地 Abhinīti

(五) 遠行地 Dīraṅgama

(六) 不動地 Anīti

(七) 善慧地 Sādhanā

(八) 法雲地 Dharmameghā

(九) 四無量心 (Cātvarīppīnīnīnī) また、四無量定とも四等定とも云ふ。菩薩が成佛の誓願なる四弘を發する前に持する豫備的心願をいふ。其四とは與樂を目的とする慈 (Maitrī) と、拔苦を目的とする悲 (Karuṇā) と他の得樂を歡喜する喜 (Muditā) と、緣他平等なる捨 (Upekā) とをいふ。此等の四定は無量の衆生界を所緣の境として發するが故に四無量心といふ。

(一〇) 是より菩薩衆の文也、之

に所召、奉願あり。

恆河沙 (Varaṅkārī) 印度カンヂス河に於ける沙の多數に依りて凡て無數を表はす譬喩に用ひらる。諸經に於て恆河を以て量を示すに四義あり。一は萬人之を知るが故に、二は之に入るもの福を得るが故に、三は印度に於ける八河の中の最大なるが故に、四は是れ佛の生處、大聖の同郷なるが故なり。

【三三】 菩薩摩訶薩 Bodhisattva mahāsattva の音譯の略。覺有情、大有情と譯す。

【三四】 海徳 Sīkharvatī。阿耨多羅三藐三菩提の略。

【三五】 無盡意 Akṣayanīti。敬重とは、理に約して論ず、下文に「諸佛の師とする所、所謂法なり」といふに依りて知るべし。

【三六】 安住とは、證に約して論ず、下文に「一切衆生及び諸

赤晨朝、日の初めて出づる時に於て、佛の光明に遇ふ。擧身毛鬣ち、徧體血現じて波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にし、大乘第一空行を成就せんが爲に、如來の方便密教を顯發し、種種の説法を斷絶せざらんが爲に、諸の衆生の調伏の因縁の爲の故に、疾く佛所に至り、佛足を稽首し、繞ること百千市し、合掌恭敬して卻つて一面に住す。爾の時に復二恆河沙の諸の優婆塞有り。四戒を受持して威儀具足す。其の名を威德無垢稱王優婆塞、善德優婆塞等と曰ひ、上首爲り。深く樂ひて諸の對治門を觀察す。所謂「苦樂、常無常、淨不淨、我無我、實不實、歸依非歸依、衆生非衆生、恆非恆、安非安、爲無爲、斷不斷、涅槃非涅槃、增上非增上、常に

序品 第一

佛は悉く秘密藏中に安住す、といふが如し。  
 【四】 深解とは、智に約して論ず、下文に「菩薩の深廣の智慧を生ず」とは即ち此の義なり。  
 【四一】 業樂とは、行に約して論ず、下文の「雪山の八宝以て難しとなさす、日に三雨を割きて未だ曾て苦と稱せず」といふに準じて知るべし。  
 【四二】 守護とは、教に約して論ず、下文に「他預誑を行ひ、覺德障を破る」といへるは此の意なり。  
 【四三】 隨順とは、涅槃を證せずして生死に入り、大悲を以て世間の希冀に隨順し、成就せしむるを云ふ。  
 【四四】 度とは、又た到彼岸、梵語波羅蜜多(Parimita)の譯語なり。  
 【四五】 三寶とは、梵に「Triratna」

トナ、佛(Buddha)法(Dharma)、僧(Sangha)をいふ。此等の三は世の尊重すべきものなれば總じて之を三寶といふ。  
 【四六】 是より涅槃の文也。此中三段あり、初に二十一業を列す、別科に對照して知るべし。  
 【四七】 優婆塞。梵名「Upāsaka」の音譯にして清信士と譯す、また離欲男、善宿男、勳士等の譯あり。  
 【四八】 五戒。在家の修道者の守るべき道德的徳目。即ち不殺戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒是れなり。  
 【四九】 威儀具足。正善なる四威儀具足の義。具足の語に因かて安註に無分、一分、多分、滿分の四種を釋顯す。巧釋と謂ふべし。  
 【五】 苦樂常無常等。此一跋の文、古來異解紛然たり。一口く、苦樂の對より增上非增

樂たのしみひて、是こゝろの如ごとき等の法ほつぽうの對治たいぢの門もんを觀察くわんさつす。亦また無上むじやうの大乗だいじやうを樂聞がくもんし、所聞しよもんの如ごとくし已おほりて、能よく他の爲ために説とかんと欲ほつす。善よく淨戒じやうかいを持もち、大だい乘じやうを渴仰かつやうす。既すでに自ら充足じやうじゆくし、復また能よく餘あまの渴仰かつやう者しやを充足じやうじゆくす。善よ能よく無上むじやうの智慧ちゐを攝取しやくしゆし、大乘だいじやうを愛樂あいらくして大乘だいじやうを守護しゆごす。善よ能よく一切世間いつせせんに隨ず順じゆんして末度みどの者ものを度あし、未解みげの者ものを解あし、三寶さんぽうの種しゆを紹しやうぎて斷絶だんぜつせざらしめ、未來世みらいぜに於おて當あたに法輪ぼんを轉てんすべし。大莊嚴だいじやうげんを以もつて自ら莊嚴じやうげんし、心常しんじやうに深ふかく清淨じやうじやうの戒行かいぎやうを味あはこふ。悉ことごとく能よく是こゝろの如ごときの功德くどくを成就じやうじゆし、諸もろの衆生しゆじやうに於おて大悲心だいひしんを生やうじ、平等びやうどうにして二無になく、一子いっしを視みるが如ごとし。亦また晨朝ちんぢやうに日の初はじめて出いづる時ときに於おて、如來身にょらいしんを 闍毗あつびせんと欲ほつするが爲ための故ゆゑに、人人ひとひと各おの各おの香木かうもく萬束まんしゆくを取り、栴せん檀たん沈水しんすゐ、五ご牛頭梅檀ぎゆとうばいたん、天木香てんもくかう等とう、是こゝろの一一いちいちの木き、文理もんり及び附ぶ、皆みな七寶しちぽう微妙めうめうの光明くわうめい有り。譬たとへば種種しゆじゆの雜彩ざつさい畫飾がしきの如ごとく、佛力ぶつりきを以もつての故ゆゑに是こゝろの妙色めうしき有り。青しやう、黃わう、赤しやく、白びやくなり。諸もろの衆生しゆじやうの樂見がくけんする所ところと爲なる。諸しよ木み皆種種みなしゆじゆの香かうを以もつて塗ぬり、鬱金うつこん、沈水しんすゐ及び膠香きやうかう等とう、散さんするに諸華しよけを以もつて莊嚴じやうげんを爲なす。優鉢羅華ゑはつらけ、毘ひ拘こ

上の對に至るまで十三の對法門あり。各苦を能治の藥、樂を所治の病とす。已下これに准じて知るべしと。安註これを小乘教意の見と貶し別に三義を示して曰く、一に藥病相主に約して解すべし互に藥病となり、能所となること、これ今の意なり。二には先づ常を治し後無常を治する等次第轉深の義なり。三に、常無常を雙治し、病治俱捨す。所謂如來行なるものにして常、無常、雙亦、雙非四門を具足す。後の學行品、鳥喩品の説是れなり。

り。この三義中前二は尙淺、後一は深と。

【五二】 闍毗(Chavita)。又は茶毘とも書し、燒然と譯す。

【五三】 牛頭梅檀とは、梵名をGandharvachandanaと云ふ。

【五四】 優鉢羅華(Uttara)。蓮の一種、睡蓮科に屬す。次の三節の華と合して四種蓮華となす、この中の青色蓮華を云ふなり。

【五五】 拘物頭華(Kumuda)。黄色の蓮華。

【五六】 波頭摩華(Patana)。赤色の蓮華。

【五七】 優鉢羅華、毘拘

物頭華、（五）波頭摩華、（六）芬陀利華なり。諸の香木の上に（七）五色の旛を懸く、（八）柔夷微妙なること猶し天衣の如し。（九）憍奢耶衣、（一〇）芻摩縵縵なり。是の諸の香木、載するに寶車を以てす。是の諸の寶車、種種の光を出す。青、黄、赤、白なり。幘幅皆（一一）七寶を以て厠填す。是の一一の車、駕するに馴馬を以てす。是の一一の馬、駃疾風の如し。一一の車前、五十七の寶妙幢を建立し、眞金の羅網其上を彌覆す。一一の寶車、復五十の微妙の寶蓋有り。一一の車上、諸の（一二）華鬘を垂る。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華純ら眞金を以て葉と爲し、金剛を臺と爲す。此の華臺の中、多く黒蓋有り。其の中に遊集して歡娛受樂し、又妙音を出す。所謂（一三）無常、苦、空、無我なり。此の音聲の中、復菩薩の本所行の道を説く。復種種の歌舞、伎樂、箏、笛、箏篥、簫、瑟有りて鼓吹す。是の樂音の中、復是の言を出す『苦なる哉苦なる哉、世間は空虚なり』と。一一の車前に、優婆塞の四つの寶案を擧ぐる有り。是の諸案の上に、種種の華有り。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。（一四）宣鬱金諸香、及び餘の熏香あり。微妙第一なり。諸の優婆塞、佛及び

連聲

【六】 芬陀利華 (Pindalika)。  
白色蓮華。

【七】 五色。普通に青、黄、赤、白、黑の五種の色彩を云ふ。

【八】 憍奢耶衣 (Kāśyapa)。  
芻摩 (Kṣumā) 麻衣と譯す、植物の名。

【九】 七寶。金、銀、琉璃、頗梨、珊瑚、赤珠、瑪瑙を云ふ。

【一〇】 寶案 (Kammani)。

多くの華を結んで首又は身を飾り、以て供養の一種具と云すも也。

【一二】 無常の音は心(意識)に對し、苦の音は受(感覺)に對し、樂の音は身(肉體)に對し、無我の音は法(上の三巴外)の一切の存在物)に對して起るなり。

【一三】 鬱金香 (Santalum)。花黄色にして香しき植物の名なり。

僧の爲に諸の食具を辨じ、種種備足す。皆是梅檀、沈水香の薪、八功德水の成熟する所なり。其の食甘美にして、六種の味有り。一つに苦、二つに酢、三つに甘、四つに辛、五つに鹹、六つに淡なり。復三徳有り。一つには輕爽、二つには淨潔、三つには如法なり。是の如き等の種種の莊嚴を爲して力士生處の娑羅雙樹の間に至る。復金沙を以て其の地に徧布し、迦陵伽衣、及び繒緋衣を以て砂上に覆ひ、周布して十二由旬に徧滿す。佛及び僧の爲に七寶の師子の座を敷置す。其の座高大にして須彌山の如し。是の諸座の上に皆寶帳有り。諸の瓔珞を垂れ、諸の娑羅樹、悉く種種の微妙の旛蓋を懸け、種種の好香、用ひて以て樹に塗り、種種の名華、以て樹間に散す。諸の優婆塞、各是の念を作さく、『一切衆生、若乏しき所有らば、飲食、衣服、頭目、肢體、其の所須に隨ひて皆悉く給與せん。』是の施を作す時、欲、瞋恚、穢濁、毒心を離れ、餘の思願、世の福樂を求むること無く、唯、無上清淨菩提を志す。是の優婆塞等、皆已に菩薩の道に安住す。復是の念を作さく、『如來、今我が食を受け已りて、當に涅槃に入りたまふべし』と。是の念を作し已りて身毛皆堅ち、偏體血現じて波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大菩薩を生ず。各各供養の具を齎持し、載するに寶車を以てす。香木、幢旛、寶蓋、飲食、疾く佛所に至る。佛足を稽首し、其の所持の供養の具を以て如來に供養し、繞ること百千匝す。聲を擧げて號泣し、天地

【六】 八功德水。八種の水の徳。稱讚淨土經の説に依るに、澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除渴、長養是なり。

【六五】 迦陵伽 (Kirtimukha)。細滑衣と譯す。

【六六】 欲婆羅衣 (Kambhara)。毛と絲とを雜へて織りたる衣。



を哀動し、胸を椎ちて大に叫び、涙下ること雨の如し。復相謂つて言はく、『苦なる哉仁者、世間は虚空なり世間は虚空なり』と。便ち自ら身を擧げて如來の前に投じ、佛に白して言さく、『唯願はくは如來、哀みて我等が最後の供養を受けたまへ』と。世尊、時を知りて默然として受けたまはず、是の如く三請するに悉く皆許されず、諸の優婆塞所願を果さず、心悲惱を懷き、默然として住す。猶し慈父の、唯一子有りて、卒かに病みて命終し、殯送還歸して極めて大いに憂惱するが如し。諸の優婆塞、悲泣懊惱することも亦復是の如し。諸の供具を以て一處に安置し、卻つて一面に在りて默然として坐す。(七) 爾の時に復、三恆河沙の諸の優婆夷有り。五戒を受持し、威儀を具足す。其の名を(八) 壽德優婆夷、(九) 德鬘優婆夷、(十) 毘舍佉優婆夷等と曰ひ、八萬四千に上首爲り。悉く能く正法を護持するに堪忍す。無量百千の衆生を度せんが爲の故に女身を現す。(十一) 家法を訶責し、(十二) 自ら己身を觀す。四毒蛇の如く、是の身常に無量の諸蟲に啖食せらる。是の身臭穢にして貪欲獄縛す。是の身惡むべきこと猶し死狗の如し。是の身不淨にして九孔常に流る。是の身城の如く、血肉、筋骨、皮其上を裹み、手足は以て卻敵の樓櫓と爲り、目を寮孔と爲し、頭を殿堂

- 【六七】 爾の時に。是より次に優婆夷衆を列す。
- 【六八】 優婆夷 (Upāsikā)。清信女と譯す、また善宿女、離欲女、勤女等の譯あり。
- 【六九】 壽德。梵名 Yūthana。
- 【七〇】 德鬘。梵名 (Dharmalya)。
- 【七一】 毗舍佉。梵名 Vāśīkha。
- 【七二】 家法。近くは箕箒婦禮、遠くは三界輪廻の業報に通ず。安註には中庸を取りて五陰を家法と決す。
- 【七三】 自ら己身を觀す。この一段の文は正しく家法の境を觀することを細敘す、所謂事觀なり。この中五門あり、苦觀、不淨觀、空觀、無我觀、無常觀、これなり。安註の意此の如し、文を案じて知れ。

と獨す。心中に處す。是の如きの身域は諸佛世尊の棄捨したまふ所、凡夫愚人の常に味著する所なり。貪淫、瞋恚、愚癡の羅刹其の中に止住す。是の身堅からざること、猶し蘆葦、**【七四】**伊蘭、水沫、芭蕉の樹の如し。是の身無常にして念念に住せず。猶し雷光、暴水、幻骸の如く、亦水に晝くに、晝くに隨ひ、隨ひて合するが如し。是の身壞し易きこと、猶し河岸の峻に臨める大樹の如し。是の身久しからず。當に狐狼、鴟梟、鷓鴣、烏鵲、猓狗に食啖せらるべし。誰の有智の者か、當に此の身を樂むべき。寧ろ牛迹を以て大海水を盛るとも、具さに是の身の無常、不淨、臭穢を説くこと能はじ。寧ろ大地を丸として棗等の如く、漸漸に轉た小さくして、猶し葶藶子、乃至微塵の如くならしむとも、具さに是の身の過患を説くこと能はじ。是の故に當に捨つること、涕唾を棄つるが如くすべし。是の因縁を以て諸の優婆夷、**【七五】**空、無相、無願の法を以て、常に其の心を修す。深く大乘經典を齊受することを樂ひ、聞き已りて亦能く他の爲に演説す。本願を護持し

女身を毀譽す。甚だ患厭すべし。性堅牢ならず、心常に是の如きの正觀を修習して、生死際み無き輪轉を破壊す。大乘を渴仰して既に自ら充足し、復能く餘の渴仰の者を充足す。深く大乘を樂ひ、大乘を守護す。女身を現すと雖も、實は是菩薩なり。善能く一切世間に隨順して未度の者を度し、未解の者

**【七四】** 伊蘭 (Iravan) 花美しけれど惡臭強き樹の名。

**【七五】** 空無相無願の法。之を三昧、又は三空三昧、三解脱門等と云ふ。空三昧 (Śūnyatā) とは諸法に於ける人法の空なるを觀じ、無相三昧 (Aniṣṭa) とは空なるが故に、差別の相なきを觀じ、無願三昧 (Apraṇidhī) とは無相なるが故に願求すべき法なきを觀ずるを云ふ。これに異釋あり。

るを云ふ。これに異釋あり。

女身を毀譽す。甚だ患厭すべし。性堅牢ならず、心常に是の如きの正觀を修習して、生死際み無き輪轉を破壊す。大乘を渴仰して既に自ら充足し、復能く餘の渴仰の者を充足す。深く大乘を樂ひ、大乘を守護す。女身を現すと雖も、實は是菩薩なり。善能く一切世間に隨順して未度の者を度し、未解の者

を解す。三寶の種を紹ぎて斷絶せざらしめ、未來世に於て當に法輪を轉すべし。大莊嚴を以て自ら莊嚴し、堅く禁戒を持して、皆悉く是の如きの功德を成就す。諸の衆生に於て大悲心を生じ、平等にして二無きこと一子を視るが如し。亦晨朝に日初めて出づる時に於て、各相謂つて言はく、「今日宜しく雙樹の間に至るべし」と。諸の優婆夷、設くる所の供具前に倍勝す。持して佛所に至りて佛足を稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、「世尊、我等今、佛及び僧の爲に諸の供具を辦す。唯願はくは如來、我が 妾 供を哀受したまへ」と。如來、默然として許可したまはらず。諸の優婆夷所願を果さず、心に惆悵を懷き、卻つて一面に住す。(七六) 爾の時に復、四恆河沙の毘舍離城の諸の 離車等、男女、大小、妻子、眷屬、及び 閻浮提の諸王の眷屬有り。法を求むるが爲の故に、善く戒行を修して威儀を具足し、異學の正法を壞する者を摧伏せり。常に相謂つて言はく、「我等當に、金銀倉庫を以て、甘露無盡正法深奥の藏をして、久しく世に住せしむるが爲

【七六】 供具、具さに供養といふ。之には物質的の意味もあり、れども供養の本義は精神的にあり、精神的供養とは信養者が菩薩に推置して諸佛より宗教的教化を受くるを云ふ。

【七七】 次に離車衆を列す。  
 云ふ 異邪釋に作るは鹿野  
 里、羅什に廣博と、難公は廣  
 博と譯す。また好道、好術、  
 廣博嚴淨等の譯あり。現今の  
 【七八】 市より恆河を隔てて東  
 北方二十七英里の地點に存する  
 の地の西方に維摩詰(Vimā-  
 2125)の方丈の遺址と稱す  
 るものあり。またこの都城は  
 釋尊未來化し給ひし處なるが  
 最後に將に涅槃地に赴かんと  
 してまた此に來られしところ  
 なり。

【七九】 離車(Uruvela) 毘舍離  
 城の刹帝利種一族の名。  
 【八〇】 閻浮提(Mahāvijaya) 須  
 彌四州中南州の名。

【七六】 諸の優婆夷所願を果さず、心に惆悵を懷き、却つて一面に住す。(七六) 爾の時に復、四恆河沙の毘舍離城の諸の 離車等、男女、大小、妻子、眷屬、及び 閻浮提の諸王の眷屬有り。法を求むるが爲の故に、善く戒行を修して威儀を具足し、異學の正法を壞する者を摧伏せり。常に相謂つて言はく、「我等當に、金銀倉庫を以て、甘露無盡正法深奥の藏をして、久しく世に住せしむるが爲

にすべし。願はくば我等をして、常に修學することを得しめたまへ。若佛の正法を誹謗する者有らば、當に其の舌を斷つべし。』復、是の願を作さく、『若出家の禁戒を毀る者有らば、我當に罷めて俗に還りて策使せしめ、能く正法を深樂し護持すること有らば、我當に敬重すること父母に事ふるが如くすべし。若衆僧の能く正法を修するもの有らば、我當に隨喜して勢力を得しむべし。』と。常に大乘經典を樂聞せんと欲し、聞き已りて亦能く人の爲に廣説す。皆悉く是の如きの功德を成就せり。其の名を淨無垢藏離車子、淨不放逸離車子、恆水無垢淨德離車子と曰ふ。是の如き等、各相謂つて言はく、『仁等、今速かに佛所に往くべし。』辦する所の供養種種具足す。一一の離車、各八萬四千の大象を嚴り、八萬四千の駟馬の寶車、八萬四千の明月寶珠、天木、栴檀、沈水の薪束、種種各八萬四千有り。一一の象の前に寶幢、旛蓋有り。其の蓋小さき者も周市縱廣一由旬に滿つ。旛の最も短き者も長さ三十二由旬、寶幢下き者も高さ百由旬なり。是の如き等の供養の具を持ちて佛所に往き至り、佛足を稽首し、繞ること百千市して、佛に白して言さく、『世尊、我等今者、佛及び僧の爲に諸の供具を辦す。唯願はくは如來、我が供を哀受したまへ。』如來、默然として許可したまはず。諸の離車等所願を果さず、心に愁惱を懷き、佛の神力を以て地を去ること七。多羅樹、虚空の中に於て默然として住す。爾の時に復、五恆河沙の大臣、長者有り、大乘を敬重す。若異學の正法を謗する者有ら

【八二】 多羅樹(二)三。高疎と譯す、其高さ七八十尺あればかくばふか。

【八三】 次に大臣長者衆を列す。

ば、是の諸人等の力能く摧伏すること、猶し雹雨の草木を摧折するが如し。其の名を日光長者、護世長者、護法長者と曰ひ、是の如きの等上首爲り。設くる所の供具前に五倍す。俱共に持ちて雙樹の間に往詣し、佛足を稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、『世尊、我等今者、佛及び僧の爲に諸の供具を設く。唯願はくは哀憫して我等が供を受けたまへ。』如來默然として之を受けたまはず。諸の長者等所願を果さず、心に愁惱を懷き、佛の神力を以て地を去ること七多羅樹、虚空の中に於て默然として住す。

爾の時に復、毘舍離王及び其の夫人、後宮の眷屬、閻浮提内の有らゆる諸王有り。阿闍世并及城邑、聚落の人民を除く。其の名を月無垢王等と曰ふ。各四兵を嚴りて佛所に往かんと欲す。是の一一の王、各一百八十萬億の人民、眷屬有り。是の諸の車兵、駕するに象馬を以てす。象に六牙有り、馬は疾きこと風の如し。莊嚴、供具前に六倍す。諸の寶蓋の中、極小の者有り。周市縱廣八由旬に滿つ。旛は極て短き者も十六由旬、寶幢下き者も三十六由旬なり。是の諸王等、正法に安住し邪法を惡賤す。

大乘を敬重し、大乘を深樂す。衆生を憐憫して等しく一子の如く、持する所の飲食香氣、流布して四由旬に滿つ。亦晨朝に日の初めて出づる時に於いて、是の種種の上妙の甘膳を持ちて、雙樹の間に詣

【八三】次に毗舍離王衆を列す。

【八四】阿闍世。梵名Ajatashatru。未生怨と譯す。中印度摩揭陀國王の名、父を頻婆娑羅(Prasenajit)母を韋提希(Devadatta)と云ひ、如來滅後第一結集の外護者にして、その他佛教と順逆の因縁深かりし人なり。

【八五】四兵とは、象兵、馬兵、步兵、車兵を云ふ。

【八六】由旬(Yojana)。印度に於ける里數を顯はすの目、一由旬は七英里に概當するとの説あり。

で、如來の所に至りて佛に白して言さく、『世尊、我等、佛及び比丘僧の爲に是の供具を設く。唯願はくは如來、哀憫して我が最後の供養を受けたまへ。』如來、時を知りて亦許可したまはず。是の諸王等所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。(七)爾の時に復、七恆河沙の諸王の夫人有り。唯阿闍世王の夫人を除く。衆生を度せんが爲に女身を受くるを現す。常に身行を觀じ、空、無相、無願の法を以て其の心を重修す。其の名を三界妙夫人、愛徳夫人と曰ふ。是の如き等の諸王の夫人、皆悉く正法の中に安住し、禁戒を修行して威儀具足す。衆生を憐憫して等しく一子の如くす。各相謂つて言はく、『今、宜しく速かに世尊の所に往詣すべし。諸王の夫人の設くる所の供養、前に七倍す。香華、寶幢、繪旛、麈尾、寶蓋、上妙の飲食なり。寶蓋小き者も周市縱廣十六由旬、旛最も短き者も三十六由旬、寶幢下き者も六十八由旬、飲食の香氣、周徧流布して八由旬に滿つ。是の如き等の供養の具をもちて如來の所に往き、佛足を稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、『世尊、我等、佛及び比丘僧の爲に是の供具を設く。唯、願はくは如來、哀憫して我が最後の供養を受けたまへ。』如來時を知り、默然として受けたまはず。時に諸の夫人、所願を果さずして心に愁惱を懷き、自ら頭髮を抜き、胸を椎ちて大いに哭し、猶、慈母の新に愛子を喪へるが如くにし、卻つて一面に在りて默然として住す。

(八)爾の時に復、八恆河沙の諸の天女等有り。其の名を廣日天女と曰ひ、上首爲り。是の如きの言

【七】次に夫人衆を列す。  
 【八】次に天女衆を列す。  
 【九】廣日天女。梵名ノリヤス。  
 【十】上首といふ。

を作さく、汝等諸姉、諦かに觀よ諦かに觀よ。是の諸人衆の設くる所の種種の上妙の供具、如來及び比丘僧に供せんと欲す。我等も亦當に是の如きの微妙の供具を嚴設して、如來に供養すべし。如來受け已りて當に涅槃に入りたまふべし。諸姉、諸佛如來の出世は甚だ難し。最後の供養も亦復倍す難し。若佛、涅槃したまはば世間は虚空とならん。是の諸の天女は大乗を愛樂し、大乗を聞かんと欲す。聞き已りて亦能く人の爲に廣く説く。大乗を渴仰して既に自ら充足し、復能く諸の渴仰の者を充足す。大乗を守護し、若異學の大乗を憎嫉するもの有らば、勢能く摧滅すること電の草を摧くが如し。戒行を護持して威儀具足す。善能く一切世間に隨順して、未度の者を度し未脱の者を脱し、未來世に於て、當に法輪を轉すべし。三寶の種を紹きて斷絶せざらしめ、大乗を修學し、大莊嚴を以て自ら莊嚴す。是の如きの無量の功德を成就し、等しく衆生を慈むこと一子を觀るが如し。亦、晨朝に日の初めて出づる時に於て、各種種の天木香等を取る。人間の有らゆる香木に倍す。其の木香の氣、能く人中の種種の臭穢を滅す。白車、白蓋、白馬を駕す。一一の車上、皆白帳を張る。其の帳の四邊、諸の金鈴を懸く。種種の香華、寶幢、旛蓋、上妙の甘膳、種種の伎樂あり。師子座を敷き、其の座の四足は純紺瑠璃なり。其の座の後に於て各各皆七寶の倚牀有り。一一の座前に復金几有り。復、七寶を以て燈樹と爲し、種種の寶珠、以て燈明と爲し、微妙の天羅其の地に徧布す。是の諸の天女、是の供を設け已りて、心哀感を懷き、涕淚交も流れ

【九】師子座。其の號名を五三二五三三といふ。

て大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にせんが爲に、大乘の第一空行を成就し、如來の方便密教を顯發せん。亦、種種の説法を斷せざるが爲に、佛所に往詣して佛足に稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。諸の天女等所願を果さず、心に憂惱を懷き、卻つて一面に住し、默然として坐す。爾の時に復、九恆河沙の諸の龍王等四方に住す。其の名を、和修古龍王、難陀龍王、婆難陀龍王と曰ひ、上首爲り。是の諸の龍王も亦、晨朝に日の初めて出づる時に於て、諸の供具を設くること人天に倍す。持ちて佛所に至りて佛足に稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、『唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來、時を知りて默然として受けたまはず。是の諸の龍王所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。爾の時に復、十恆河沙等の諸の鬼神王有り。毗沙門王上首爲り。各相謂つて言はく、『仁者、今者速かに佛に詣すべし。』設くる所の供具諸龍に倍するを持ちて佛所に往き、佛足に稽首し、繞ること百千市して佛に白して言さく、『唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來、時を知りて默然として許したまはず。是の諸の鬼王所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。爾の時に

【九二】次に龍衆を列す。

【九三】和修古(Ashtakus)は、九頭龍と譯す。

【九四】難陀(Nanda)は、歡喜と譯す。

【九五】婆難陀(Pandita)は、大喜と譯す。

【九六】次に鬼神王衆を列す。

【九七】毗沙門(Vishavanti)は、多聞と譯す。所謂四天王の一、北方の主神なり。

【九八】次に金翅鳥衆を列す。下の列衆別科に照して自知せよ。



復、二十恆河沙の金翅鳥王有り、降怨鳥王上首爲り。復、三十恆河沙の乾闥婆王有り、<sup>(九八)</sup> 那羅達王上首爲り。復、五十恆河沙の摩睺羅伽王有り、大善見王上首爲り。復、六十恆河沙の阿脩羅王有り、<sup>(九九)</sup> 跋婆利王上首爲り。復、七十恆河沙の陀那婆王有り、無垢河水王、<sup>(一〇〇)</sup> 跋提達多王等上首爲り。復、八十恆河沙等の羅刹王有り、可畏王上首爲り。惡心を捨離して更に人を食せず、怨憎の中に於て慈悲心を生ず。其の形醜陋、佛の神力を以て皆悉く端正なり。復、九十恆河沙の樹林神王有り、樂香王上首爲り。復、千恆河沙の持咒王有り、大幻持咒王上首爲り。復、一億恆河沙の貪色鬼魅有り、善見王上首爲り。復、百億恆河沙の天の諸の淫女有り、天藍婆女、鬱婆尸女、帝路活女、毗舍佉女上首爲り。復、千億恆河沙の地の諸の鬼王有り、白澤王上首爲り。<sup>(一〇七)</sup> 復、十萬億恆河沙等の諸の天子及び諸の天王、四天王等有り。復十萬億恆河沙等の四方の風神有り。諸の樹上の時、非時の華を吹きて、雙樹の間に散す。復、十萬億恆河沙の主雲雨神有り、皆是の念を作さく、一如來、涅槃焚身の時、我當に雨を注ぎて、火をして時に滅せしめ、衆中熱悶せば、爲に清涼を作すべし」

序品第一

- 【九八】金翅鳥王。梵名迦樓羅 (Garuda) といふ。
- 【九九】乾闥婆 (Gandharva)。除と譯す、樂神なり。
- 【一〇〇】緊那羅 (Kinnara)。疑神と譯す、歌神なり。
- 【一〇一】摩睺羅伽 (Mahoraga)。大腹行と譯す、鬼族の一。
- 【一〇二】阿耨羅王 (Asura)。非天と譯す。波斯に在りては本來善神の類なりしも印度に來りて惡神の稱となり、戰鬥を好み嫉妬の性に當むと云はる。
- 【一〇三】跋婆利 (Bambali)。香花と譯す。
- 【一〇四】陀那婆王 (Dhanavati)。施と譯す。
- 【一〇五】跋提達多王 (Bhadradatta)。賢授と譯す。
- 【一〇六】羅刹王 (Rakshasa)。暴惡可畏と義譯す。
- 【一〇七】以上にて二十一衆を終り次に是より八衆同衆を擧ぐ。

と。復、二十恆河沙の 大香象王有り、(二〇) 羅睺象王、(二一) 金色象王、(二二) 甘蔗象王、(二三) 紺眼象王、(二四) 欲各無

王等上首爲り。大乘を敬重し、大乘を愛樂す。佛、久しからずして當に般涅槃したまふべし。各各無

量無邊の諸の妙蓮華を拔取して佛所に來至し、頭面に佛を禮し、卻つて一

面に住す。復、二十恆河沙等の師子獸王有り、師子吼王上首爲り。一切衆

生に無畏を施與す。諸の華果を持ちて佛所に來至し、佛足に稽首し、卻つ

て一面に住す。復、二十恆河沙等の諸の飛鳥王有り、鳧、鴈、鴛鴦、鴛鴦、孔雀

の諸鳥、乾闥婆鳥、(二四) 迦蘭陀鳥、(二五) 鸚鵡、(二六) 俱翅羅鳥、(二七) 婆嚩伽鳥

(二八) 迦陵頻伽鳥、(二九) 耆婆耆婆鳥、是の如き等の諸鳥、諸の華果を持ちて佛

所に來至し、佛足に稽首し、卻つて一面に住す。復、二十恆河沙等の水牛、

牛羊有り、佛所に往至して妙香乳を出す。其の乳、拘尸那城の有らる溝

坑に流滿し、色香、美味悉く皆具足す。是の事を成じ已りて、卻つて一面

に住す。復、二十恆河沙等の四天下の中、諸の神仙人有り、(三〇) 忍辱仙等上

首爲り。諸の華香及び諸の甘果を持ちて佛所に來詣して佛足に稽首し、佛を繞ること三市して佛に白

して言さく、『唯、願はくは世尊、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として許し

たまはす。時に諸の仙人、所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。(三八) 閻浮提の中の一

- 【二〇】大香象王 (Mahāgandhānī-hastī)
- 【二一】羅睺象王 (Rāhulānī-hastī)
- 【二二】金色象 (Suvarṇavarṇa-hastī)
- 【二三】甘蔗象王 (Amṛtānī-hastī)
- 【二四】紺眼象王 (Nīlānī-hastī)
- 【二五】迦蘭陀鳥 (Kālandā)
- 【二六】耆婆耆婆鳥 (Jīvāmbhīka)
- 【二七】忍辱仙 (Kṣāntivīra)
- 【二八】是より一衆無數。
- 【二九】迦陵頻伽鳥、鷓鴣と譯す。
- 【三〇】俱翅羅鳥、鷓鴣と譯す。
- 【三一】婆嚩伽鳥、鷓鴣と譯す。
- 【三二】迦蘭陀鳥 (Kālandā)
- 【三三】耆婆耆婆鳥 (Jīvāmbhīka)
- 【三四】鷓鴣の一種、所謂共命鳥なり。
- 【三五】忍辱仙 (Kṣāntivīra)
- 【三六】是より一衆無數。

王、妙音菩薩王上首爲り。種種の華を持ちて佛所に來詣して佛足に稽首し、佛を繞ること一匝して、卻つて一面に住す。爾の時に閻浮提中の比丘、比丘尼、一切皆集る。唯、尊者摩訶迦葉、阿難の二衆を除く。復、無量阿僧祇恆河沙等の世界の中開有り、及び閻浮提の有らぬ諸山、須彌山王上首爲り。其の山の莊嚴は、叢林翁蔚、枝葉茂盛にして、日くわを蔭蔽す。種種の妙華周徧嚴飾し、龍泉、流水清淨香潔なり。諸天、龍神、乾闥婆、阿耨羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、神仙、咒術、作倡妓樂、是の如き等の衆其中に彌滿す。是の諸の山神、亦佛に來詣し、佛足に稽首して卻つて一面に住す。復、阿僧祇恆河沙等の四大海神、及び諸の河神有り、大威徳有り、大神足を具す。設くる所の供養前に偕勝す。諸神身光、伎樂燈明悉く日月を蔽ひて、復現せざらしむ。古婆華を以て

(二三) 毘連河に散じ、佛所に來至し、佛足に稽首して、卻つて一面に住す。

(二四) 爾の時に拘尸那城の娑羅樹林、其の林變じて、白きこと猶し白鶴の如し。虚空の中に於て、自然に七寶の堂閣有り。彫文刻鏤し、綺飾分明にして、周市に欄楯あり衆寶雜廁せり。堂下に多く流泉、浴池有り。上妙の蓮華其の中に彌滿し、猶し北方鬱單越國の如く、亦切利(天)の歡喜

【二九】是より中間衆を召す。此中初は結前列後。

【三〇】古婆華(?)。

【三一】毘連河(Hiranyavaharī)。

古來之を跋提河と同視する説あれども安註に依るに實は異れり。毘連は城北にあり跋提は城南に在り、佛の入滅は跋提河の邊なりと。

【三二】是より悲近、召遠の文なり。鶴林の語實にこれを本據とす。

【三三】鬱單越國。須彌四州の北方に存在する國名。梵語 Utsarāman 北俱盧州とも記す。

【三四】初轉の歡喜國。初轉は、欲界の第二天にして須彌山頂に存し地居天の頂なり。梵名 Trivasthana にして三十三

園の如し。爾の時に娑羅樹林の中間、種種の莊嚴甚た愛樂すべきことも、亦復是の如し。是の諸の天人、阿修羅等、咸く如來涅槃の相を觀、皆悉く悲感し、愁憂して樂まず。(二三) 爾の時に四天王、二天、釋提桓因、各相謂つて言はく、「汝等觀察せよ。諸天人、及び阿修羅、大いに供養を設けて最後に如來を供養せんと欲す。我等も亦、當に是の如く供養すべし。若我、最後に供養することを得ば、(二七) 檀波羅蜜則ち成就満足すること難からずと爲す。」爾の時に四天王の設くる所の供養前に倍勝す。(二八) 曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、迦枳樓伽華、摩訶迦枳樓伽華、(二九) 曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、散多尼迦華、摩訶散多尼迦華、愛樂華、大愛樂華、普賢華、大普賢華、時華、大時華、香城華、大香城華、歡喜華、大歡喜華、發欲華、大發欲華、香醉華、大香醉華、普香華、大普香華、天金葉華、龍華、(三〇) 波利質多樹華、拘毘羅樹華を持ち、復、種種の上妙の甘膳を持ちて佛所に來至し、佛足に稽首す。是の諸の天人の有らゆる光明、能く日月を覆ひて復現せざらむ。是の供具を以て佛に供養せんと欲す。如來、時を知りて默然として受けたまはす。爾の時に諸天、所願を果さず、愁憂苦惱して卻つて一面に住す。

の義なり、この世界は四方各八天あり、中央に別に善見城あり帝釋天(Indra)此に居る、歡喜園(Mandhavyana)はその庭園なり。

【二五】是より上界衆を召すを示す。此中初に欲天の文。之に四王天、帝釋天、空居天あり。

【二六】釋提桓因(Śakra devānāmpati)帝釋天の異名、略して Indra と云ふ。

【二七】檀波羅蜜(Dāna pāramitā)の音譯。六度の一、布施波羅蜜の稱。

【二八】曼陀羅華(Mandāravā)。

【二九】曼珠沙華(Mandjushavā)。

【三〇】波利質多華(Pārijāta)。

帝釋宮の前面に存する樹名。柔軟と譯す。

爾の時に釋提桓因及

び三十三天、諸の供具を設くることも亦前に倍勝す。及び持する所の華も亦復是の如し。香氣微妙にして甚だ愛樂すべし。得勝堂并に諸小堂を持して佛所に來至し、佛足に稽首して佛に白して言さく、  
 『世尊、我等大乘を深樂し愛護す。唯、願はくば如來、我が食を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。時に諸の釋天所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。乃至第六天の設くる所の供養、展轉して前に勝る。寶幢、旛蓋あり。寶蓋小き者も四天下を覆ふ。旛最も短き者も四海を周圍す。幢最も下き者も自在天に至る。微風旛を吹きて妙音聲を出す。上甘膳を持して佛所に來詣し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。是の諸天等所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

(二三) 上有頂に至り、其餘の梵衆一切來集す。爾の時に大梵天王、及び餘の梵衆、身の光明を放ちて四天下に徧うす。欲界の人天、日月の光明悉く復現せず。諸の寶幢、紺綵の旛蓋を持す。旛の極めて短き者も、梵宮に懸りて娑羅樹の間に至る。佛所に來詣し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。爾の時に諸梵所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。  
 (二三) 爾の時に 毗摩質多阿脩羅王、無量の阿脩羅大眷屬と俱なり。身の諸の光明梵天に勝る。諸

【二三】 是より梵衆  
 【二三】 是より脩羅衆  
 【二三】 毗摩質多阿脩羅王 (Vimānaka amaraśakra) 寶錦と翻す。四阿脩羅の一、華嚴宮に住す。

の寶幢、繪綬の旛蓋を持す。其の蓋の小さき者も千世界を覆ふ。上妙の甘膳佛所に來詣し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『唯願はくは如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。諸の阿脩羅所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

【二五】爾の時に欲界の

【二五】魔王波旬、其の眷屬諸天、采女、無量無邊阿僧祇

の衆と地獄の門を開きて清淨水を施し、因つて告げて曰はく、『汝等今者

能く爲す所無し。唯、當に專ら如來、應供、正徧知を念じ、最後の隨喜供

養を建立すべし。當に、汝等をして長夜に安を獲しむべし。』時に魔波旬、

地獄の中に於て、悉く刀劍無量の苦毒を除き、熾然の焰火、雨を注ぎて之を

滅す。佛の神力を以て復是の心を發す。諸の眷屬をして、皆刀劍、弓箭、

鎧仗、矛楯、長鉤、金椎、鐵斧、鬪輪、胃索を捨てしむ。持する所の供養

一切人天の設くる所に倍勝す。其の蓋小さき者も中千界を覆ふ。佛所に來至

し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『我等今者、大乘を愛樂し大乘を守

護す。世尊、若善男子、善女人有り、供養の爲の故に、怖畏の爲の故に、誑他の爲の故に、財利の爲

の故に、隨他の爲の故に、是の大乗を受く。或は眞、或は偽ならん。我等爾の時に、當に是の人の怖

畏を除滅せんが爲に、是の如きの呪を説くべし。』他積、唵唎羅唎積、盧呵隸、摩訶盧呵隸、阿羅、

【二五】是より魔天の文也。之に三殺あり。

【二五】魔王(Mara)、波旬(Mara)は名けて惡中の惡となす、六

天の頂上に住し以て欲界の主となる。

【二五】涅槃經の梵本は、現に發見せられたる者僅に貝葉二紙のみ、而して二紙並に此品に關せず、從て此陀羅尼の梵綴明かならず、憾むべしとす。

遮羅、多羅、絮呵、是の咒能く諸の失心者、怖畏者、説法者、不斷正法者にして外道を伏すが爲の故に、己身を護らんが故に、正法を護らんが故に、大乘を護らしめんが故に、是の如きの咒を説く。若能く是の如きの咒を持する者有らば、惡象の怖無し。若曠野、空澤、險處に至るに怖畏を生ぜず。亦、水火、師し、虎狼、盜賊、王難無し。世尊、若能く是の如きの咒を持する者有らば、悉く能く是の如き等の怖を除滅せん。世尊、是の咒を持する者は、我當に之を護り、總の六を藏すが如くすべし。世尊、我等今者、諛諂を以て是の如き事を説かず。是の呪を持する者は、我、當に至誠に其の勢力を益すべし。唯願はくば如來、我等が最後の 二二三 供養を哀受したまへ。爾の時に佛、魔波旬に告げて言はく、「我、汝の飲食供養を受けず、我、已に汝が説く所の神咒を受く。一切衆生、四部衆を安樂にせんと欲するが爲の故なり。佛、是を説き已りて默然として受けたまはす。是の如く三請するに、皆亦受けたまはす。時に魔波旬所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

二二三 爾の時に 大自在天王、其の眷屬無量無邊、及び諸の天衆と説くる所の供具、悉く 二二三 梵釋、

【二三】佛、飲食の供養を受けずして唯だ神呪を受くるに五意あり。一は呪は鬼神の名、之を知り得る時は惡魔は佛を害する能はず、二は呪は鬼神王の名、主の名を呼ぶ時は、其黨族亦害せず、三は呪は霹靂の如し鬼神之名を聞きて畏る、四は呪は密語、呪に順すれば之を守る、五に呪は佛勅、敢て違する者なし。

【二四】四部衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の通稱。

【二五】是より大自在天の文也。之に所召、順召の二段あり。

【二六】大自在天。梵名を摩醯首羅(Mahesvara)と云ふ。

【二七】梵釋。梵天(Brahma)と云ふ。

帝釋(Indra)。

護世四天王、人天八部、及び非人等の有らゆる供具を覆ふ。梵釋の設くる所は、猶し聚墨の珂貝の邊に在るが如し、悉く復現せず。寶蓋小き者も、能く三千大千世界を覆ふ。是の如き等の供養の具を持して佛所に來詣して佛足に稽首し、續ること無數市して佛に白して言さく、『世尊、我等奉る所の微末の供具、猶し蠱蚋の我を供養するが如く、亦人有りて、一掬水を以て大海に投じ、一小燈を然して百千の日を助け、春夏の月衆華茂盛なるに、一華を持して衆華に益すること有り、亭歷子を以て須彌山に益さんが如し。豈當に大海、日明、衆華、須彌を益すること有るべきや。世尊、我今奉る所の微末の供具も亦復是の如し。若三千大千世界の中に滿つる香華、伎樂、旛蓋を以て如來に供養すとも、尚言ふに足らず。何を以ての故に。如來、諸の衆生の爲に、常に地獄、餓鬼、畜生の諸の惡趣の中に於て、諸の苦惱を受く。是の故に世尊、齊しく哀憫せられて、我等が供を受けたまへ。』

(四)爾の時に東方、此を去ること無量數數阿僧祇の恆河沙微塵等の世界、彼に佛土有り、意樂美音と名け、佛を虚空等 一國 如來、應供、正徧知、明

【四二】八部。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽を云ふ。印度神族鬼族の概括。

【四三】是より他土衆を召すを明す中、初に東方の文也、先づ彼説此見を示す。

【四四】如來等、之を如來の十號といふ。十號の數へ方に異説あり、次の十一號のうち、世尊を總とし前の十號を別とするを通例とす。

- 一、如來 (Tathagata.)
- 二、應供 (Arhan.)
- 三、正徧知 (Samyak sambuddha.)
- 四、明行足 (Vidyacaranamsin-panna.)
- 五、善逝 (Sugata.)
- 六、世間解 (Lokavid.)
- 七、無上士 (Anuttara.)
- 八、調御丈夫 (Tisraṅg; daṃṣṭra; samudhi.)



行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。爾の時に彼の佛、即ち第一の大弟子に告げて言はく、『善男子、汝今、宜しく西方の(二)娑婆世界に往くべし。彼の土に佛有り、(三)釋迦牟尼如來、應供、正徇知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。彼の佛久しからずして、當に般涅槃したまふべし。善男子、汝此の世界の香飯を持すべし。其の飯香美にして、之を食すれば安隱、以て彼の佛世尊に奉獻すべし。世尊、食し已りて般涅槃に入りたまはん。善男子、并に禮敬して所疑を請決すべし。』爾の時に無邊身菩薩摩訶薩、即ち佛教を受けて座より起ち、佛足に稽首して右に繞ること三市し、無量阿僧祇の大菩薩衆と俱うて、彼の國より發して此の娑婆世界に來至す。時に應じて此の閉三千大千世界、大地六種に震動す。是の衆中に於て 梵釋四王、魔王波旬、一眾摩隨首羅、是の如きの大衆是の地動を見、身を擧げて毛豎ち、喉舌枯燥し、驚怖戰慄して各四散せんと欲す。自ら其の身を見るに、復光明無く、有らゆる威徳悉く滅して餘り無し。是の時に (四)文殊師利法王子、即ち座より起ちて諸の大衆に告ぐ、『諸の善男子、汝等懼ること勿れ、汝等懼ること勿れ。何を以ての故に。東方此を去ること無量無數阿僧祇の恆

九。天人師 (Tisrahvimanu-  
shyanam)  
一〇。佛 (Buddha)  
一一。世尊 (Siddhant)  
【四五】娑婆。梵名サハの音譯、  
堪忍上の義なり。  
【四六】釋迦牟尼。梵名 Śākyamuni  
の音譯なり。釋迦は種  
族の名、牟尼は仙人、聖者等  
の義あり、釋迦族出の聖者と  
云ふの意。  
【四七】梵釋四王。梵天、帝釋並  
に四天王の意。  
【四八】摩隨首羅 (Maha-svara)。  
大自在天と譯す。  
【四九】文殊師利 (Manjusri)。  
妙吉祥と譯す。

河沙微塵等の世界に一つの世界有り、意樂美音と名け、佛を虚空等如來、應供、正徧知と號す。十號具足す。彼に菩薩有り、無邊身と名け、無量の菩薩と此に來至して如來を供養せんと思ふ。彼の菩薩の威徳力を以ての故に、汝が身光をして悉く復現せざらしむ。是の故に汝等、歡喜を生ずべし。恐怖を懷くこと勿れ。爾の時に大衆、悉く皆、遙に彼の佛の大衆を見るに、明鏡の中に、自ら己が身を觀るが如し。時に文殊師利、復大衆に告ぐらく、『汝今、彼の佛の大衆を見る所此の佛を見るが如し。佛の神力を以て、復當に是の如く、九方の無量の諸佛を見ることを得べし。』

爾の時に大衆、各相謂つて言はく、『苦なる哉、苦なる哉、世間は虚空となり、如來は久しからずして當に般涅槃したまふべし。』

【二五】是の時に大衆一切、悉く無邊身菩薩、及び其の眷屬を見るに、是の菩薩の身、一一の毛孔、各各一つの大蓮華を生ず。一一の蓮華、各

【二五】是より此見彼來を示す。  
 【二五】毛孔は、小を見るを形容し七萬八千城邑は大を見るを形容す。  
 【二五】閻浮檀金(ambhuda-suvarna)。金屬中殊に貴重なるものとして知られたる名。

七萬八千の城邑有り。縱廣正等にして毗舍離城の如し。牆壁、諸塹七寶雜廁す。多羅寶樹七重に行列し、人民熾盛にして安隱豐樂なり。閻浮檀金、以て卻敵と爲す。一一の卻敵、各、種種の七寶の林樹有り、華果茂盛なり。微風吹動して微妙の音を出す。其の聲和雅にして猶し天樂の如く、城中の人民是の音聲を聞き、即時に上妙の快樂を受くることを得。是の諸塹の中に、妙水盈滿し、清淨香潔にして眞瑠璃の如し。是の諸水の中に、七寶の船有り。諸人之以て遊戯し潔浴し、共に相娛樂

し、快樂極り無し。復、無量の雜色の蓮華あり。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華縱廣、猶し車輪の如し。其の塹岸の上に多くの園林有り。一一の園中に五つの泉池有り。是の諸池の中に復諸華有り。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華縱廣、亦車輪の如く、香氣芬馥にして甚だ愛樂すべし。其の水清淨にして、柔軟第一なり。鳧、鴛鴦其の中に游戲す。其の園各衆寶の宮宅有り。一一の宮宅、縱廣正等にして四山旬に滿つ。有らゆる牆壁は四寶の成する所なり。所謂金、銀、琉璃、頗黎、眞金の窓牖、欄楯を周布す。玫瑰を地と爲し、金沙上に布く。是の宮宅の中、多く七寶の流泉、浴池有り。一一の池邊に各十八の黄金の梯階有り。閻浮檀金を芭蕉樹と爲し、忉利天の歡喜園の如し。是の一一の城に各八萬四千の人王有り。一一の諸王に各無量の夫人、采女有り。共に相娛樂し歡喜して樂を受く。其餘の人民も亦復是の如し。各住處に於て共に相娛樂す。是の中の衆生は餘名を聞かず、純に無上大乘の聲を聞く。是の諸華の中に、一一各師子の座有り。其の座の四足は皆紺瑠璃にして、柔耍の素衣、以て座上に布く。其の衣微妙にして三界に出過す。一一の座上に一王有りて坐し、大乘の法を以て衆生を教化す。或は衆生有りて書持し讀誦し、説の如く修行す。是の如く大乘經典を流布す。爾の時に無邊身菩薩、是の如きの無量の衆生を放ちて自身に安止し、已りて世樂を捨てしむ。皆是の言を作さく、『苦なる哉苦なる哉世間は虛空と  
なり、如來は久しからずして當に般涅槃したまふべし』と。

爾の時に無邊身菩薩、無量の菩薩に周市圍繞せられ、是の如きの神通力を示現し已りて、是の種種の無量の供具、及び以上の妙香美の飲食を持す。若是の食の香氣を聞くことを得ること有らば、煩惱の諸垢皆悉く消滅す。是の菩薩の神通力を以ての故に、一切の大衆悉く皆是の如きの變化を見ることを得、無邊身菩薩は身大無邊にして量虚空に同じ。唯、諸佛を除きて餘は、能く是の菩薩の身、其の量の邊際を見ること無し。爾の時に無邊身菩薩及び其の眷屬、設くる所の供養前に倍勝して佛所に來至す。(二五)佛足に稽首し、合掌恭敬して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくは哀憫して我等が供養を受けたまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。是の如く三請するに、悉く亦受けたまはず。爾の時に無邊身菩薩及び其の眷屬、卻つて一面に住す。(二六)南、西、北方の諸佛世界も亦、無量の無邊身菩薩有り、持する所の供養前に倍勝す。佛所に來至し乃至卻つて一面に任す。皆亦是の如し。

(二七)爾の時に娑羅雙樹、吉祥福地、縱廣三十二由旬、大衆充滿して閒に空缺無し。爾の時に四方の無邊身菩薩及び其の眷屬、所坐の處、或は錐頭、針鋒、微塵の如し。(二八)十方微塵の如き等の諸佛世界の諸大菩薩、悉く來りて集會す。及び閻浮提の一切の大衆も亦悉く來集す。唯、尊者(二九)摩訶迦葉(三〇)阿難の二衆、阿闍世王及び其の眷屬を除きて、乃至毒蛇の、視れば能く人を殺

【二五】是より供不受を示す。  
 【二六】是より南西北の三方を例す。  
 【二七】是より召請を結するを明す。其中初に衆集を結する中を先づ不思議。  
 【二八】次に人不思議。  
 【二九】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)の長老頭陀第一の稱あり。  
 【三〇】阿難(Ānanda)歡喜と譯す。佛十大弟子の一、開持第一の稱あり。

【二五】是より召請を結するを明す。其中初に衆集を結する中を先づ不思議。  
 【二六】次に人不思議。  
 【二七】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)の長老頭陀第一の稱あり。  
 【二八】阿難(Ānanda)歡喜と譯す。佛十大弟子の一、開持第一の稱あり。

【二五】是より召請を結するを明す。其中初に衆集を結する中を先づ不思議。  
 【二六】次に人不思議。  
 【二七】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)の長老頭陀第一の稱あり。  
 【二八】阿難(Ānanda)歡喜と譯す。佛十大弟子の一、開持第一の稱あり。

すと、蛙蟻蝮及び十六種の惡業を行する者と一切來集す。二五 陀那婆神、

皆慈心を生ず。父の如く、母の如く、姉の如く、妹の如く、三千大千

世界の衆生、慈心相向ふことも亦復是の如し。二六 一闍提を除く。

爾の時に三千大千世界、佛の神力を以ての故に、地皆柔栗にして丘壚、

土石、礫石、荆棘、毒草有ること無く、衆寶莊嚴すること、猶し西方 無

量壽佛の 二七 極樂世界の如し。是の時に大衆、悉く十方微塵の如き等の諸

佛世界を見ること明鏡に自ら己身を觀るが如く、諸佛の土を見ることも亦

復是の如し。

二八 爾の時に如來の面門、出す所の五色の光明、其の光明かに曜きて諸の

大會を覆ふ。彼の身光をして悉く復現せざらしめ、作すべき所已りて、還

つて口より入る。二九 時に諸の天人、及び諸の會衆、阿脩羅等、佛の光

明の還つて口より入るを見て、皆大いに恐怖し、身毛豎を爲す。復是の言

を作さく、「如來の光明出で已りて還つて入る。因縁無きに非ず。必ず十

方に於て作す所已に辨じ、將に是の最後に、涅槃せんとするの相ならんは

何ぞ其れ苦しき哉、何ぞ其れ苦しき哉。如何ぞ世尊、一旦四無量心を捨離

阿脩羅等 悉く惡念を捨

【二五】陀那婆神 (Dhanavata)。

【二六】一闍提。Ichhatika の音

譯。信不具足、斷善根等の譯

あり。佛法を誹謗し因果三寶

を信ぜず、道德の訓練に志な

きものを名け、善根を燒失し

生死に沈み永く出期なきもの

を惡稱す。

【二七】無量壽佛 (Amittayus)。ま

た無量光佛 (Amittayus) そ

の他種多の德稱あり、普滿阿

彌陀佛と稱する是れなり。

【二八】極樂とは、梵名 Sukhavati

の譯にして、また安樂、安養等

の異譯あり、正しくは樂有と

云ふべし。

【二九】次に瑞相を結す、其中初

に聖主收光を示す。

して人天所奉の供養を受けず、聖慧日光、今より永く滅し、無上の法船斯に沈没す。嗚呼痛しき哉世間  
大いに苦なり』と。手を舉げ胸を椎ちて悲號啼哭す。支節戰動して自ら持すること能はず。身の諸の  
毛孔血を流して地に灑ぐ。

# 卷の第二

## 純陀品第二

爾の時に會中に優婆塞有り。是拘尸城の工巧の子なり、名を純陀と曰ふ。其の類十五人と俱なり。世閒をして善果を得しめんが爲の故に、身の威儀を捨てて座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、悲感流涙して佛足を頂禮し、佛に白して言さく、「唯願はくは世尊及び比丘僧、哀みて我等が最後の供養を受けたまへ。無量の諸の衆生を度せんが爲の故に。世尊、我等今より主無く親無く、救無く、護無く、歸無く、趣無く、貧窮饑困ならん。如來に従ひて將來の食を求めん

【一】 是より十六品は共に涅槃

施を開演する中、この一品は常の五果を施し此土の雜衆に對するを明す。これに四段あり、其中初に獻供を明し、其中又初に講を擧ぐるの中經家徳を敘す。

【二】 純陀(Cunda)の音譯。妙

義と譯す、釋尊に最後の供養を爲したる人。章安純陀の十徳を數ふ。またその名妙義に付て十妙を説く。

【三】 十五人。安註に曰く一本

には五十といひ、雙卷には五百といふ。十五は端首に據り五十は親近に據り五百は徒屬に據る。

【四】 善果。或は人天に墮せず

或は自調自度に流れず、或は賢聖の位に入り、或は菩提涅槃の妙果を得るをいふ。

【五】 身の威儀を捨て。崇敬の

至極を示す語。安註に俗、道、法門、佛の四種威儀を示す。

且く俗威儀に約せば波斯匿の如來を見奉る時、冠、劍、璎履、車の五威儀を捨つるが如し。

【六】 悲感。他を悲憐し佛を感得するをいふ。

【七】 次に言に顯して請を陳ぶるの文。この中細科あり別科を見よ。

【八】 主無しとは佛を失ひ、親なしとは法を失ひ、救無しと

と欲す。唯願はくは哀みて我等が微供を受け、  
 然して後涅槃したまへ。世尊、譬へば、刹利若  
 は婆羅門、毗舍、首陀、貧窮を以ての故に遠く  
 他國に至るに、役力農作して好調牛を得、良田  
 平正にして諸の沙鹵、惡草、荒穢無く、唯天  
 雨を希ふが如し。調牛と言ふは、(一)身口の七を  
 譬へ、良田平正は智慧を譬へ、沙鹵、惡草、  
 荒穢を除去するは、煩惱を除くを譬ふ。世尊、  
 我今身に調牛、良田有り、衆穢を私除す。唯、如  
 來の甘露の法雨を希ふ。(三)貧の四姓とは即ち我  
 が身是なり。無上の法の財寶に貧し。唯、願は  
 くは哀憫して我等の貧窮、困苦を除斷し、無量  
 の苦惱の衆生に拯ひ及したまへ。我今、供する  
 に充足することを得ん。我今主無く、親無く、  
 歸無し。願はくは矜憫を垂ること維摩羅の如くな  
 れ。』

は僧を失ふなり。要するに三  
 寶に遠ざかるを云ふ。

【九】護無しとはまなきが故に

忠以て護るべきなきをいひ、  
 歸無しとは親なきが故に孝以  
 て歸する所なきをいひ、趣無  
 しとは師僧なきが故に學以て  
 趣く所なきをいふ。

【一〇】已下を四姓といふ。刹利

(Kshatriya)は、政治社會の統  
 治者、婆羅門 (Brahmin)は、  
 知識社會の僧侶、毗舍 (Vaishya)  
 は、實業社會の常民、首陀  
 (Sudra)は、奴隸社會の最下  
 種なり。この四姓、一説は四  
 生を譬ふと云ひ、また一説は  
 六道を譬ふと。安註評して盡

さすと一九法界衆生を束縛方  
 便の菩薩二乘、人天四惡趣の  
 四種として之を譬ふと云ふ。

【一】身口の七。身三口四の業

なり、身三は殺、盜、婬なり、  
 口四とは妄綺雜穢の三語と  
 及び飲酒となり。

【二】上に四姓を挙げ今は四姓

を精神的に一體と見て、かか  
 る精神上貧窮なる我等を希く  
 は世尊極濟し給へと求むるな  
 り。

【三】如來大衆等とは、供養の

對象は唯如來のみに限らず、  
 廣く五十二の大衆にも擴充せ  
 るとの意なり。

三 如來、大衆

所は復微少なりと雖も、冀はくは  
 願はくは矜憫を垂ること維摩羅の如くな



(二四) 爾の時に 世尊、一切種智、無上調御、

純陀に告げて曰はく、「善い哉善い哉、我今汝が

爲に貧窮を除斷し、無上の法雨を汝が身田に雨

して、法芽をして生ぜしめん。汝今、我に於て

壽命と色と力と、安樂と無閼辯才とを求め

んと欲す。我當に汝に常の(壽)命と色と力と安

(樂)と、無閼辯(才)とを施すべし。何を以ての

故に。純陀、施食に 二一つの果報無差なる有

り。何等をか二つと爲す。一つには受け已りて

(二五) 阿耨多羅三藐三菩提を得。二つには受け已り

て涅槃に入る。我今、汝が最後の供養を受けて

汝をして檀波羅蜜を具足せしめん。』

(三〇) 爾の時に純陀、即ち佛に白して言さく、「佛

の所説の如き、二施の果報差別無しとは、是の

義然らず。何を以ての故に。先の受施者は煩惱

【四】次に供を受くる事を示す、この中許受、正受、禪施の三節あり。

【五】世尊、一切種智と無上調御と合して如來の三號とす。安註に序の如く、如來は衆生の爲め、諸國を巡ることを示すと云ふ。

【六】一切種智とは、諸法實相の眞理中道第一義諦を盡り盡せる佛智の美稱、佛に問ひるアルツツニキヤイ。

【七】善色力安樂無閼辯才。これを五果と名く。安註に依るにこの五法共に常住なる常の五果と云ふ。壽命は無始無終にして斷絶なし、常色は非色に即す、此身即法身の謂なり。常力は一切處に通じて窮盡なきの作用なり、常安樂は力用を具し安固不動なる是なり。常無閼辯才とは斷くして一切の我に被るに無餘の慈悲普く法益を施すを云ふ。

の五法、命は意、色力安は身、辯は口なるが故に自ら三密に攝す。また意は常、身は樂我、口は淨の故に四徳に對す。この故に一切法遍く此五法に非ざるなし。佛この五を具して完きが故に施すと云ふ。

【八】二つの果報無差。如來初め、佛は伽藍菩提樹下にて成道しませしことと今の涅槃に入らせ給ふこととの今昔二種の果報を云ふ。

【九】阿耨多羅三藐三菩提。Am-tarasya-sambodhiの音譯。無上正徧智の義、佛果の德稱。

【一〇】次に難の文。之に、難奉と別難との二段あり。また別難の中み清戒は四難に分ち關善は五難に分つ。尊安また五難とすれどその義趣互に別なり。今安註に立つところは一に智斷の有無、二に聖號の有無、三に四身五身の別、四に度眼の具不、五に五果の得

未だ盡きず、未だ一切種智を成就することを得

ず。亦、未だ衆生をして檀波羅蜜を具足せしむ

ること能はず。後の受施者は、煩惱已に盡き、已

に一切種智を成就することを得、能く衆生をし

て、善く檀波羅蜜を具足することを得しむ。先

の受施者は猶は衆生、後の受施者は是天中天な

り。先の受施者は猶は雜食身、煩惱の身、是

後邊身、は無常身なり。後の受施者は、無煩惱

身、金剛の身、法身、常身、無邊の身なり。云何ぞ而るを二施の果報等しくして差別無しと言はん。

先の受施者は未だ檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足すること能はず。唯肉眼を得て、未だ佛眼乃至慧眼を得ず。後の受施は、已に檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足し、肉眼、乃至慧眼を具足することを得。云何ぞ而るを二施の果報等しくして差別無しと言はん。世尊、先の受施は、受け已りて之を食し、腹に入りて消化して命を得、色を得、力を得、安を得、無閼辯を得。後の受施は、食せず、消せず、五事の果無し。云何ぞ而るを、二施の果報等しくして差別無しと言はんや。』

佛の言に、善男子、如來已に無量無邊阿僧祇劫に於て、食身、煩惱の身有ること無く、後邊身

三三

佛の言に、善男子、如來已に無量無邊阿僧祇劫に於て、食身、煩惱の身有ること無く、後邊身

不なり、文を按じて知るべし。

【三】 已下、有漏の四身。雜食

身は業緣所生の果體なり、煩

惱身は是れ惑業の身なり、後

邊身に子縛を斷じ盡すも尙果

縛あるを口ふ。終に必ず滅に

歸す、は無常身なり。

【三】 已下、無漏の五身。此の

中常身とは智斷二徳の果。法

身と異なるは、彼は三菩提を得

て煩惱身を破して得る佛身、食

身を壞して得る佛身なり。

【三】 般若波羅蜜、Brahmajāla

mantraの音譯、智慧到彼岸の

義なり。六度の一。乃至は六

度中の初後を除きたる他の四

度を攝す。

【四】 佛眼乃至慧眼。肉眼、天

眼、慧眼、法眼、佛眼これを五眼

と云ふ。慧眼は空智法眼は假

智、佛眼は中道第一義智なり。

【五】 次に答の文。此中、初に

正しく五難を答ふ。之に五段

あり、前の五難と對して知る

べし。

無し。常身、法身、金剛の身なり。善男子、未だ佛性を見ざる者、煩惱身、雜食の身、是後邊身。名  
 く、菩薩、爾の時に飯食を受け已りて金剛三昧に入る。此の食消し已りて即ち佛性を見、阿耨多羅三  
 藐三菩提を得。是の故に我、二施の果報等しく  
 して差別無し」と言ふ。菩薩、爾の時に四魔  
 を破壊す。今涅槃に入り、亦四魔を破す。是の  
 故に我、二施の果報等しくして差別無し」と言  
 ふ。菩薩、爾の時に廣く十二部經を説かずと  
 雖も、先より已に通達す。今涅槃に入り、廣く  
 衆生の爲に分別して演説す。是の故に我、二施  
 の果報等しくして差別無し」と言ふ。善男子、  
 如來の身、已に無量阿僧祇劫に於て飲食を受け  
 ず、諸の聲聞の爲に、説きて、先に難陀、  
 難陀波羅の二牧牛女の、奉する所の乳糜を受け、  
 然して後に乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ。  
 是の故に汝が最後に奉する所を受け、實は亦食せず。」

- 【四】四魔、煩惱と陰と死と天  
 子の四魔を云ふ
- 【七】十二部經、舊譯にては十  
 二分教と云ふ。その梵語は、  
 十二アリンヤンガム、ブツタマツテヤ  
 Iyadashanjanam-pan-juchhaya-  
 nam. と云ひ、釋尊所説の聖典  
 文學に對しその内容と形式と  
 を包括せる一種の分類にして  
 或は九部經の名を列すること  
 あり。次にその名を示す、
- 一、契經 (Sūtra)
- 二、孤起經 (Gāthā)
- 三、重頌 (Geyya)
- 四、授記 (Vatthana)
- 五、無間自説 (Uttara)
- 六、因緣 (Nāyana)
- 七、譬喻 (Avadhāna)
- 八、方廣 (Vāpiṭṭha)
- 九、末生 (Uttarakā)
- 一〇、本事 (Himuttaka)
- 一一、未曾有 (Amubbhūta-  
 nam)
- 一二、論議 (Uparisāna)
- 【三六】難陀 (Nanda) と難陀波羅  
 最初苦行林より立ちて尼連禪  
 河に當し將に菩提樹處に至ら  
 んとする時乳母を獻ぜし者、
- 【三九】次に普く大會を受くるた  
 明す。

我實は食せず。我今、普く此の會の大家の爲に。

爾の時に大衆、佛世尊の、普く大會の爲に、哀みて純陀が最後の供養を受けたまふを聞きて歡喜踊躍し、**三**聲を同じうして讚じて言はく、『善い哉善い哉、希有なり純陀。汝今字を立て、名虚しく稱

せず。純陀と言ふは解妙義と名く。汝今是の如

きの大義を建立す。是の故に實に依り義に従ひ

て名を立つ、故に純陀と名く。汝今現世に大な

る名と、利と、徳と、願とを満足することを得。

**三**甚だ奇なり純陀、生れて人中に在り、難得無

上の利を得。善い哉純陀、**三**優曇華の世間に希

に有るが如し。佛の世に出づることも亦復甚だ

難し。佛に値ひて信を生じ、法を聞くこと復難

し。佛の涅槃に臨み最後に供養し、能く此の事

を辨するは復是よりも難し。**三**南無純陀、南無

純陀、汝今已に檀波羅蜜を具す。猶し秋月十五日の夜、清淨圓滿にして諸の雲霧無く、一切衆生瞻

仰せざること無きが如し。汝も亦是の如く我等に瞻仰せらる。佛已に汝が最後の供養を受けて、汝を

して檀波羅蜜を具足せしむ。南無純陀、是の故に汝を一月の盛満、一切衆生の瞻仰せざること無きが

**三** 是より大段第二に如来の

住世を請するの文。此中、ま

た四段あり、初に因請の文

の中、又初に喜の文。

**三** 次に歎の文。其中、の長

行。略歎と廣歎とあり。略歎

の文中、安註に妙義は堅深に

約し、大義は横廣に約す。常

非常は深、一帯一切常は廣な

り。大と満足とは名、利徳、願

の四を歎すと。

**三** 已下の文は願、徳、利、

名の序を以て廣く歎す。その

初文に六難あり、人生、佛世、

値佛、生信、聞法、最後供養是

れなり。

**三** 優曇華。Tadmahanaの音

寫、優曇鉢華とも記す。靈瑞

華、瑞應華等の譯あり、如来、

輪王の出世せるとき、この華即

ち開く、靈華と傳ふ。

**三** 南無(Anamika)。歸命と譯

し、或は救我、屈膝とも譯す。

南無の義に就ては異説多し、

屈膝は身業に約し、救我は口

業に約し、歸命は意業に約す

といふ説あり、今は快き哉の

如き輕き意に解釋すべし。

如し」と説く。南無純陀、人身を受くと雖も、心佛心の如し。汝今純陀、眞に是佛子羅睺羅の如く、等しうして異なること有ること無し。』

【三五】爾の時に大衆、即ち偈を説きて言はく、

『汝人道に生ずと雖も、已に第六天を超ゆ、我及び一切衆、今故に稽首して請す。』

【三六】人中の最勝尊、今當に涅槃に入りたまふべし。

汝應に我等を憫み、唯願はくは速かに、佛に一久しく世間に住して、無量の衆を利益し、智所讚、無上甘露の法を演説したまへ」と請せ、

汝若佛を請せずば、我が命將に全からざらんとす、是の故に爲に、調御師に稽首するを見るべし。』

【三八】爾の時に純陀、歡喜踊躍すること、譬へば人有りて父母卒に喪し、忽

然として還活するが如し。純陀の歡喜することも亦復是の如し。復起ちて佛を禮し、偈を説きて言

はく、

【三九】快哉己の利を獲、善く人身を得、

【四〇】

【三五】次に偈頌。

【三六】第六天。欲界頂の第六他化自在天なり。今第六天を超ゆとは第六天を超ゆれば梵天(Brahma)に等しく佛の説法を勸請するの徳を具するを歎するなり。

【三七】次に請。

【三八】次に瞻請の文。その中初に長行。

【三九】次に偈頌。之に瞻衆歎、瞻衆請の二段あり。

【四〇】是より六難を騰ぐ。

貪恚等を蠲除し、永く三惡道を離る、

快い哉己の利を獲、金寶聚を遇得し、

調御師に値遇して、畜生に墮することを懼れず、

佛は優曇華の如く、値遇して信を生ずること難し、

遇ひじりて善根を修し、永く餓鬼の苦を滅したまふ、

亦復能く、阿脩羅の種類を損滅したまふ、

芥子を針鋒に投ず、佛の出でたまふ是よりも難し、

我已に檀を具足して、人天の生死を度す、

佛の世法に染したまはざる、蓮華の水に處るが如し、

善く有頂の種を斷じ、永く生死の流を度る、

世に生じて人と爲ること難く、佛世に値ふことも亦難し、

猶し大海の中に、盲龜の浮孔に遇ふが如し、

我今食を奉する所、願はくは無上の報を得て、

一切の煩惱結、摧破して堅固無し、

我今此處に於て、天人の身を求めず、

【四二】檀。檀那波羅蜜、即ち布施度を云ふ。

設使之を得る者も、心亦甘樂ならず、

如來我が供を受けたまへば、歡喜量有ること無し、

猶し伊蘭の華の、梅檀の香を出さんが如し、

我が身は伊蘭の如し、如來我が供を受けたまふ、

梅檀香を出すが如し、是の故に我歡喜す、

我今 現報、最勝上妙の處を得、

釋梵諸天等、悉く來りて我を供養す、

一切諸の世間、悉く大苦惱を生ず、

佛世尊、今涅槃に入りたまはんと欲するを知るを以て、

高聲に是の言を唱ふ、「世間に調御無し、

衆生を捨つべからず、視ること一子の如くせらるべし、」

如來僧中に在りて、無上の法を演説したまふ、

須彌寶山の、大海に安處するが如し、

佛智能善く、我等が無明の闇を斷じたまふ、

猶し日出づる時、雲を除き光普く照すが如し、

【四二】 現報。現在に感得したる果報、即ち前世の生活の階性。

【四三】 須彌寶山。世界の中心たる須彌(Sumeru)山は水中を

抜くこと八萬由旬、山頂に初利天あり、中腹に四王天あり

て日月運行し、山下四方に所謂須彌四州等あり。

如來能善く、一切諸の煩惱を除きたまふ、猶し虚空の中、雲起りて清涼を得るが如し、

是の諸の衆生等、戀慕して悲慟を増し、悉く皆生死の、苦水に漂はさる、

是を以ての故に世尊、衆生の信を長じ、生死の苦を斷せんが爲に、久しく世間に住したまふべし。』

佛、純陀に告げたまはく、『是の如し是の如し、汝が所説の如し。佛の出世の難きこと優曇華の如し。佛に値ひて信を生ずるも、亦復甚た難し。佛の涅槃に臨み、最後に食を施して、能く檀を具足すること、倍す復甚た難し。汝今純陀、大いに愁苦すること莫れ。應當に歡喜し、深く自ら、最後に如來を供養するに値ふことを得、檀波羅蜜を成就し具足することを慶幸すべし。佛に久しく世に住せられんを請ふべからず。汝今當に、諸佛の境界を觀すべし。悉く皆無常なり。』

諸佛の境界を觀すべし。悉く皆無常なり。

諸行性相も亦復是の如し。』即ち純陀の爲に、偈を

【四一】 是より請を遮す。其中二段ありて初に長行。今六難の中且く無佛時の三難を略して佛出世時の三難を述す。  
【四二】 諸佛の境界。佛境界は唯佛與佛の境地にして所謂言語道斷心行所滅なるものなり。安註に釋して曰く、佛境界とは三諦一諦、一諦三諦、非一非三、而三而一、一空一切空、三諦皆空、一假一切假、三諦皆假、一中一切中、三諦皆中、唯中是俗眞、唯俗眞是中、無二無別、此の如きを即ち諸佛の境界と名くと。佛佛の内證、

談じて此の如くすと雖も蓋しまたその實を去ること違し。違しと云ふと雖も眼前耳後に森羅たり。何と云はんや、  
【四三】 諸行性相。行は行蘊と云ふと大意別なり、諸の有爲法(Phenomena)の總稱、時間的變化生滅ありて、因果的關係を有するもの、謂なり。性相は本質と形相と云はんが如し。  
【四四】 次に偈頌、之に無常の用、常の用を明す二段あり。



説きとて言はく、

【四八】一切の諸の世間、生ずる者は皆死に歸す、

壽命無量と雖も、要必ず終盡有り、

夫盛なる必ず衰ふること有り、合會は別離有り、

壯年久しく停らず、盛色病に侵さる、

命死に吞まれ、法の常に住する有ること無し、

諸王の自在を得、勢力等しく雙ぶ無きも、

一切皆遷滅す、壽命も亦是の如し、

【四九】衆苦は輪際無く、流轉して休息無し、

【五〇】三界皆常無く、諸有悉く樂に非ず、

【五一】道は本性相有り、一切皆空無なり、

可壞の法流轉して、常に憂患等有り、

【五二】恐怖の諸の過惡、老病死衰惱す、

是の諸邊有ること無く、壞し易くして怨に侵さる、

煩惱に纏裏せらるること、猶し慧の蘭に處するが如し、

【四八】 一切の諸の世間、この三  
 頌半は無常觀。  
 【四九】 衆苦は、この一頌は苦觀。  
 【五〇】 三界、欲界と色界と無色  
 界となり。  
 【五一】 諸有、二十五有界を總稱  
 す。  
 【五二】 道は、この一頌は空觀。  
 【五三】 恐怖の、この二頌は無我  
 觀。

何の智慧有る者ぞ、當に是の處を樂むべき、

此の身は苦の集る所、一切皆不淨なり、

扼縛癭瘡等、根本は義利無し、

上諸天の身に至りて、皆亦復是の如し、

諸欲は皆常無し、故に我貪著せず、

欲を離れて善く思惟し、眞實の法を證す、

究竟じて有を斷する者は、今日當に涅槃すべし、

我有の彼岸に度り、一切の苦を出過す、

是の故に今者に於て、唯上妙の樂を受く、

爾の時に純陀、佛に白して言さく、『世尊、是の如し是の如し。誠に

聖言の如し。我今所有の智慧微淺にして、猶ほ蠱蚘の如し。何ぞ能く如

來涅槃深奥の義を思議せん。世尊、我今已に、諸大龍象の菩薩摩訶薩の諸の結漏を斷せること、文殊

師利法王子と等し。世尊、譬へば幼年初めて出家を得る、未だ戒を具せずと雖も、即ち僧數に墮する

が如し。我も亦是の如し。佛、菩薩の神通力を以ての故に、是の如きの大菩薩の數に在ることを得。

是の故に我今如來をして、久しく世に住して、涅槃に入らざらしめん欲す。譬へば饑人の、終に變

【五】此の身は。この一頌半に不淨觀。

【五】是より重請の文。その中に領旨を示す。

【五】次に謙謝の文。章安釋して曰く、この謙謝佛境界より生ずと。

【五】次に正請の文。之に、法、譬、合の三段あり。

吐無きが如し。唯願ふは世尊も、亦復是の如く、常に世に住して入涅槃したまはざれ。

爾の時に文殊師利法王子、純陀に告げて曰はく、『陀純、汝今是の如きの言を發して、如來をして

常に世に住して、般涅槃せざらしめんと欲すること、彼の饑人の變吐有ること無きが如くなるべからず。汝今當に諸行性相を觀すべし。是の如くに行を觀すれば、空三昧

を具す。正法を求めんと欲せば、是の如くに學すべし。』

純陀問うて言はく、『文殊師利、夫如來は天上人中に最尊最勝なり。是の

如きの如來は、豈是行ならんや。若是行ならば生滅の法と爲ん。譬へば水泡の、速かに起り、速かに滅するが如く、往來流轉すること猶し車輪の如

し。一切の諸行も亦復是の如し。我聞く、諸天は壽命極長と云何ぞ世尊、是天中天にして壽命更に促んで百年を滿たざらん。聚落主の如き勢

自在を得、自在力を以て能く他人を制す。是の人福盡きて其の後貧賤に、

人に輕蔑せられ、他に策使せらる。所以は何ん。勢力を失するが故なり。

世尊も亦爾なり、諸行に同じうす。諸行に同じうすれば則ち稱して天中天と爲すことを得ず。何を以

ての故に。諸行は即ち是生死の法の故なり。是の故に文殊、如來を觀じて諸行に同じうすること勿れ。

復次に文殊、知りて説くと爲ん。知らずして説きて、而も如來諸行に同じと言ふや。設使如來を諸行

【五六】 是より下傍論の文。傍論とは猶因論と云はんが如し。

この一品の正明は純陀の獻供に在り、上既にこの獻供を明し終りて今因に文殊と純陀と

如來の有爲無爲を論するが故に傍と云ふ、之に傍論、復宗の二段ありて初に三節あり、初

に文殊の呵勸。之に呵、勸の二段あり。

【五九】 般涅槃 (Anurajam)。

【六〇】 次に純陀の呵勸。其中初に雙べて説勸を呵す。

に同じうすれば、則ち三界の中に於て、天中の天、自在法王と爲すと言ふことを得ず。譬へば人王に大力土有らん。其の力千に當り、更に能く之を降伏する者有ること無し。故に此の土一人當千と稱す。是の如きの力士は、王の愛念する所、偏に爵祿を賜ふ。封賞自然なり。千人に當ると稱することを得る所以は、是の人未だ必ずしも力千に敵せず、但種種の技藝所能の能く千に勝るを以ての故に、故に當千と稱するが如し。如來も亦爾なり。(二)煩惱魔、陰魔、天魔、死魔を降す。是の故に如來を三界尊と名く。彼の力士の一人、當に千に當るが如し。是の因縁を以て、種種無量の眞實功德を成就し具足す。故に如來、應供、正徧知と稱す。文殊師利、汝今憶想分別して、如來法を以て諸行に同じうすべからず。譬へば巨富の長者子を生子、相師之を占ふに短壽の相有り、父母聞き已りて、其の家嗣を紹繼するに任へざるを知り、復愛重せず、之を視ること草の如くするが如し。夫短壽者は、沙門、婆羅門、男女、大小に敬念せられず。若如來をして、諸行に同じうせしめば、亦復一切世間の人天衆生に恭敬せられず。如來の所説は、不變、不異、眞實の法なり、亦受者無し。是の故に文殊、説きて「如來一切の諸行に同じ」と言ふべからず。

三 復次に文殊、譬へば貧女の如し、居家救護の者有ること無し。加ふるに復病苦、饑渴に逼められて

【六二】 煩惱魔等。この四を四魔と通稱す。  
 【六三】 不變不異。不變は變化生滅なし、不異は差別諸相なきなり。前は堅に約し後は横に約す。この二を總じて次に眞實の法と云ふ。  
 【六四】 次に雙べて説勸を勤む。この中の譬喩に六慈あり、即ち初文は理慈、饑渴等は名字慈、他の客命に止るは觀行慈、一子を寄生す已下は相似慈、是の如きの女人等は分證究竟慈なり、是れ即ち六即なり。次の合法の文は初文は四慈を通説し、若正見の者は等は後の兩慈を通説す。

遊行、乞食し、他の客舎に止り、一子を寄生す。是の客舎の主驅逐して去らしめ、是の兒を攜抱して他國に至らんと欲す。其の中路に於て惡風雨に遭ひ、寒苦竝び至る。多く蝨蠃、蠱蟻、毒蟲に喫食せらる。恆河を經由し兒を抱きて度る。其の水漂疾なれども、而も放捨せず。是に於て母子遂に共俱に没す。是の如きの女人、慈念の功德にて、命終の後梵天に生ず。文殊師利、若善男子有りて、正法を護らんと欲せば、如來、諸行に同じ、諸行に同じからず」と説くこと勿れ。唯當に自ら責むべし、我今愚癡にして、未だ(畜)慧眼有らず」と。如來の正法に思議すべからず。是の故に如來、定んで、慧眼有らず、定んでは無爲と演説すべからず。若正見は、如來、定んでは無爲、是有爲、定んでは無爲と演説すべからず。若正見は、如來、定んでは無爲と説くべし。何を以ての故に。能く衆生の爲に善法を生ずるが故に。憐憫心を生ずるが故なり。彼の貧女の、恆河に在りて子を愛念するが爲に、身命を捨つるが如し。善男子、護法の菩薩も、亦是の如くなるべし。寧ろ身命を捨つとも、如來、有爲に同じと説かず。當に如來、無爲に同じと言ふべし。如來、無爲に同じと説くを以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得。彼の女人の(六六)梵天に生ずることを得るが如し。何を以ての故に。護法を以ての故なり。云何が護法。謂ゆる説きて、如來、無爲に同じ」と言ふ。善男子、是の如きの人、解脱を求めずと雖も、解脱自ら至る。彼の貧女の、梵

【六四】慧眼・眞理を透見するの智慧に名く。

【六五】有爲無爲。差別變化あるものを、有爲法(アサンスクリタダルマ)と名け、平等常住なるものを、無爲法(アサンスクリタダルマ)と名く。

【六六】梵天(Brahma)とは、色界の諸天を總稱すれども、又別して初禪天主を總稱し之を梵天王または梵玉、大梵天等と稱す。梵には清淨の義、離欲の義、寂靜の義等あり。

(六六)梵天に生ずる

天を求めざれども、梵天自ら應ずるが如し。文殊師利、入遠行し、中路に疲極して他舍に寄止す。臥寢の中に、其の室忽然として大火卒かに起る。即時に驚寤し、尋いで自ら思惟すらく、「我今に於て定んで死せんこと疑はじ」と。慙愧を具ふるが故に、衣を以て身を纏ひ、即便命終して 初利天に生ず。是より已後、八十反を満ちて大梵王と作り、百千世を満ちて人中に生じ、交てんりやう、轉輪王と爲る。是人復三惡趣に生ぜず。展轉して常に安樂の處に生ずるが如し。是の縁を以ての故に、文殊師利、若善男子、慙愧有らば佛を觀じて諸行に同じうすべからず。文殊師利、外道邪見は、如來、有爲に同じと説くべし。持戒の比丘、是の如く如來の所に於て、有爲の想を生ずべからず。若如來、是有爲と言はば、即ち是妄語。當に知るべし、是の人死して地獄に入ること、人自ら己が舍宅に處るが如くならん。文殊師利、如來眞實には無爲の法。復是有爲と言ふべからざるなり。汝今日より生死の中に於て、無知を捨てて正智を求むべし。當に如來、即ちは無爲と知るべし。若能く是の如く如來を觀する者は、具足して當に 三十二相を得、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

【六七】 初利天。トライヤストリンジャ音訛、三十三と譯す。故に初利天とは即ち三十三天の梵名なり。須彌頂に存し欲界の第二天なり。中央に高臺あり喜見城と名く。帝釋天 (Indra) 此に君臨す。四方各八天あり總じて三十三天となる。

【六八】 轉輪王。Chakravartin (Cakravartin) を譯して、轉輪聖帝、又は轉輪聖王とも云ひ、略して輪王とも云ふ。身に三十二相あり

て即位の時自然に輪寶を具し世界に君臨すと傳ふ。金銀銅鐵四種の輪王あり。

【六九】 三十二相。三十二大人相また大丈夫三十二相 (Dharmakāya) や、(Pāramitā) や、(Vajrasattva) や、(Mahābhairava) とも云ふ。在家にて轉輪聖王の相、出家にては如來の相にして他は其宿福に應じて多少を得べし。阿難三十相を具すと云ふが如き是れなり。三十二とは一、足安平相。二、手

爾の時に文殊師利法王子、純陀を讀じて言はく、「善い哉善い哉、善男子、汝今、已に長壽の因縁を作す。能く如來は是常住の法、不變異の法、無爲の法と知る。汝今、是の如く善く如來の有爲の相を覆ふ。火を被る人、慙愧の爲の故に、衣を以て身を覆ふ。是の善心を以て忉利天に生じ、復、梵王、轉輪聖王と爲り、惡趣に至らず、常に安樂を受くるが如し。汝も亦是の如し。善く如來の有爲の相を覆ふが故に、未來世に於て、必ず定んで當に三十二相、八十種好を得、三十八不共の法を具足し、無量の壽命、生死に在らず、常に安樂を受け、久しからずして應正徧知と成ることを得べし。純陀、如來、次後に自ら當に廣く説くべし。我と汝と俱に、亦當に如來の有爲を覆ふべし。有爲、無爲且く

純陀品第二

輻輪相。三、手指纖長相。四、手足柔軟相。五、手足縷網相。六、足跟滿足相。七、足趺高好相。八、鬪如鹿王相。九、手過膝相。一〇、馬陰藏相。一一、身縱廣相。一二、毛孔青色相。一三、身毛上靡相。一四、身金色相。一五、常光一尋相。一六、皮膚細滑相。一七、七處平滿相。一八、兩腋滿相。一九、身如師子相。二〇、身端四十齒相。二一、肩圓滿相。二二、二四、四牙白淨相。二五、頰車如師子相。二六、咽中津液得上味相。二七、廣長舌相。二八、梵音深響相。二九、眼色如紺青相。三〇、眼睫如牛王相。三一、眉間白毫相。三二、頂上肉髻相是れなり。最後の二相最も重しと爲す。 Mahāvīraṇīti chap. 17, ぞ見て各梵名を知るべし。

【七〇】八十種好。八十隨形好八十隨好また八十種形好、*Ashtāṣṭāṣṭīyāṣṭāṣṭī*とも云ふ。三十二相に附隨せる細相にして彼はこの大數これは彼の細別なり。近くは天台の法界次第又は大明三藏法數等を見て知るべし *Mahāvīraṇīti chap. 18*。に其梵名を出す。

【七一】十八不共法とは、一、如來に誤失あることなし。二、卒暴の音なし。三、妄失の念なし。四、不定心なし。五、種々想退なし。六、不捨捨なし。七、志欲念に退無し。八、請進に退なし。九、一一、慧に退無し。一二、解脫に退無し。一三、一切の身業智慧を前導とし之に依て轉ず。一四、一切の口業も智に從て轉ず。一五、一切の意業も亦智に依て轉ず。一六、過去法を知ること無礙なり。一七、未來法

〔三三〕 其に之を置かん。

〔三三〕 汝、時に隨つて速かに飯食を施すべし。是

の如く施すは諸施中の最なり。若、比丘、比丘

尼、優婆塞、優婆夷、遠行疲極して須ふる所の

物、應當に清淨に、時に隨ひて給與すべし。是

の如く速かに施すは、即ち是、具足檀波羅蜜の

根本種子なり。純陀、若、最後に佛及び僧に施

す有らば、若は多、若は少、若は足(若は)不足、

宜しく速かに時に及ぶべし。如來正爾に當に般涅槃したまふべし。純陀の言はく、文殊師利、汝今何

が故ぞ、此の食を貪爲して、多少と足不足と、我をして時に施さしむるを言ふや。文殊師利、如來、昔

日苦行したまふこと六年、尙自ら支持したまふ。泥んや今日須臾の間に於てをや。文殊師利、汝今、

實に如來正覺斯の食を受たけまふと謂ふや。然るに我定んで知りぬ、如來の身は即ち是法身、食身と

爲すに非ざることぞ。』

〔三四〕 爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、『是の如し是の如し、純陀の言の如し。善い哉純陀、汝已

に微妙の大智を成就し、善く甚深の大乗經典に入れり。』文殊師利、純陀に語りて言はく、『汝、如

を知ることを無礙なり。一八、現

在法を知ることを無礙なり。已

上の十八徳は十力四無所畏と

共に如來不共の別徳なるが故

に不共法と云ふ。

〔三七〕 共に之を置かん。安註に

演釋して曰く、汝は吾に有學

を覆ふことを勸め、我も亦汝

に無爲を覆ふことを勸む。終

日有を説くと雖も其用を盡す

こと能はず、終夜無を論ずる

も其極を勧むること能はず、

言説の及ぶところに非ざれば

且く之を置かん。

〔七二〕 是より宗を復して論ず、

其中初に宗を復して供を勸む

其中又初に勸

〔七四〕 次に如來の印讀。

〔七五〕 次に世可の文。之に、偏

慶、破偏、並、解、寂絶の五悅可

あり。



來は無爲者、如來の身は即ち長壽と謂ふ。若、是の知を作さば佛に悦可せられん。純陀答へて言はく、「如來は獨我を悦可したまふに非ず。亦復一切衆生を悦可したまふ。」文殊師利の言はく、「如來、汝及び我等一切衆生に於て、皆悉く悦可したまはん。」純陀答へて言はく、「汝、如來悦可したまふと言ふべからず。夫悦可とは、則ち是倒想なり。若倒想有らば、則ち是生死なり。生死有らば即ち有爲の法なり。是の故に文殊、如來は是有爲と謂ふこと勿れ。若、如來は是有爲と言はば、我と仁者と俱に顛倒を行す。文殊師利、如來は愛念の想有ること無し。夫愛念は、彼の乳牛の其の子を愛念し、復饑渴して、行きて水草を求むと雖も、若は足、不足にして、忽然として還歸するが如し。諸佛世尊は是の念有ること無く、等しく一切を視たまふこと羅睺羅の如し。是の如く念する者、即ち是諸佛の智慧境界なり。文殊師利、譬へば國王の調御駕駟の馳せんと欲するに、驢乘の之に及ばしむるは、是の處有ること無きが如し。我と仁者とも亦復是の如し。如來の微密深奥を盡さんと欲すとも、亦是の處無し。文殊師利、金翅鳥の虚空を飛昇すること無量由旬なるに、大海を下觀して、悉く水性の魚鼈、鼈鼈、龜龍の屬を見、及び己影を見、明鏡に於て諸の色像を見るが如し。凡夫の少智は、是の如きの所見を籌量すること能はざるが如し。我と仁者とも亦復是の如し。如來の智慧を籌量すること能はず。」文殊師利、純陀に語りて言はく、「是の如し是の如し、汝の所説の如

【七】金翅鳥は、梵語迦樓羅 (Garuda) の音譯、八部衆の一。翅金色なるに依り此名あり。兩翼相距る三百六萬里、須彌山の下側に住し龍を食すとす。

【七】次に讚發の文。

し。我、此の事に於て達せずと爲すに非ず。直、汝が諸の菩薩事を試みんと欲す。」

爾の時に世尊、其の面門より種種の光を出したまふ。其の光、明かに曜きて文殊の身を照す。文殊師利、斯の光に遇ひ已りて即ち是の事を知りぬ。尋いで純陀に告ぐら

く、「如來今者、是の瑞相を現じたまふ。久しからずして必ず當に涅槃に入

りたまふべし。汝、先に設くる所の最後の供養は、宜しく時に佛に奉獻

し、大衆に及ぼすべし。純陀當に知るべし、如來是の種種の光明を放ちた

まふこと、因縁無きに非ざることを。」純陀、聞き已りて悲塞默然す。佛、

純陀に告げたまはく、「汝、佛及び大衆に奉施する所、今正に是時なり。如

來正爾、當に般涅槃すべし」と。第二第三も亦復是の如し。爾の時に純陀、

佛語を聞き已りて、聲を擧げて號哭し、悲明して言さく、「苦なる哉苦なる

哉、世間は虚空なり」と。

復、大衆に白さく、「我等今者、一切當に共に五體を地に投じ、同聲に

佛を勧めて般涅槃したまふこと莫からしむべし。」爾の時に世尊、復純陀に

告げたまはく、「大いに啼哭して自ら其の心を亂すこと莫れ。當に是の身は猶し芭蕉、熱時の炎、水

沫、幻、化、乾闥婆城の如く、坏器、電光(の如く)、亦水に畫くが如く、死に臨むの囚(の如く)、熟果

復、大衆に白さく、「我等今者、一切當に共に五體を地に投じ、同聲に佛を勧めて般涅槃したまふこと莫からしむべし。」

【七六】 是より文殊供を催す。其の中初に催供の文の中、初に催供。之に催、默の二段あり。

【七九】 次に聲催。之に催、悲哭の二段あり。

【八〇】 次に請住の文。其中初に衆に告げて共に請するを示す。之に衆共に請す、佛酬有りの二段あり。

【八一】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八二】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八三】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八四】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八五】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八六】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八七】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八八】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【八九】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九〇】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九一】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九二】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九三】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九四】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九五】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九六】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

【九七】 當に是の身は。この文中の十四譬あり。初の六譬は空を、次の三譬は無常を、次の三譬は不淨を、後の二譬は無我を喩顯す。

段肉(の如く)、織の經の盡くるが如く、確の上下するが如しと觀すべし。當に諸行は猶し雜毒の食の如く、有爲の法は諸の過患多きを觀すべし。』

【八三】 是に於て純陀、復佛に白して言さく、『如來、久しく世に住したまふことを欲せず。我當に云何ぞ啼哭せざるべき。苦なる哉苦なる哉世間虛空なり。唯願はくば世尊、我等及び諸の衆生を哀憫して、久しく世に住して般涅槃したまふこと勿れ。』佛、純陀に告げたまはく、『汝今、是の如きの言を發すべからず。我を哀憫するが故に久しく世に住せよ。我、汝及び一切を哀憫するを以て、是の故に今日涅槃に入らんと欲す。何を以ての故に。諸佛の法爾なり、有爲も亦然なり。是の故に諸佛、是の偈を説きたまふ。』

「有爲の法は、其の性無常なり、

生じ已りて住せず、寂滅を樂と爲す。」

純陀、汝今當に一切行難、諸法無我、無常、不住を觀すべし。此の身は多く無量の過患有り、猶し水泡の如し。是の故に汝今啼泣すべからず。』

【八三】 爾の時に純陀、復佛に白して言さく、『是の如し是の如し、誠に尊敎の如し。如來、方便示現して涅槃に入りたまふと知ると雖も、而も我憂惱を懷かざること能はず。覆うて自ら思惟して、復慶悅を生ず。』佛、純陀を讚すらく、『善い哉善い哉。能く如來、衆生に示同して方便涅槃したまふを知る。』

【八三】 次に重請の文。之に請、  
酬の二段あり。  
【八三】 次に領解の文。其中初に  
を示す。  
【八四】 次に述成。

汝今當に聽くべし。〔八五〕娑羅婆鳥、春陽の月、皆共に彼の阿耨達池に集るが如し。諸佛も亦爾なり、皆是の處に至る。純陀、汝今諸佛の長壽、短壽を思惟すべからず。一切の諸法は皆幻相の如し。如來中に在りて、方便力を以て染著する所無し。何を以ての故に。諸佛の法も爾なり。純陀、我今汝が獻る所の供養を受け、汝をして、生死の諸有の流を度脱せしめんと欲するが爲の故なり。若諸の人天、此に於て最後に我を供養せん者は、悉く皆當に不動の果報を得、常に安樂を受くべし。何を以ての故に。我は是衆生の良福田なるが故なり。汝若復、諸の衆生の爲に福田と作らんと欲せば、速かに所施を辨せよ。久しく停るべからず。』

〔八七〕爾の時に純陀、諸の衆生の度脱を得るが爲の故に、頭を低れ涙を飲みて佛に白して言さく、『善い哉世尊、我若福田と爲るに堪任せん時、則ち能く如來の涅槃及び非涅槃を了知せん。我等今者及び諸の聲聞、緣覺の智慧、猶し蟻蚋の如く、實に如來の涅槃及び非涅槃を量ること能はず。』

〔八八〕爾の時に純陀及び其の眷屬、愁憂啼泣して如來を圍繞し、香を燒き華を散じ、心盡して敬奉し、尋いで文殊と座より去りて食具を供辨す。

〔八五〕 娑羅婆鳥。Salaripa 鴻鳥。これなり。

〔八六〕 阿耨達池。Anavataptaの音譯、無熱惱と譯す。西域記

には瞻部洲の中央、香山の南大雪山の北に在りて周八百里金銀瑠璃等其の岸を飾り金沙彌漫して清波皎鏡等と云ふ。

近世の學者西藏のモナサルラ湖と同視せんとするの一説を立つるものあり。

〔八七〕 次に辨供。其中初に自ら謙す。

〔八八〕 次に供を辨す。

心盡して敬奉し、尋いで

哀歎品第三

三 純陀去り已りて未だ久しからざるの頃、是の時に此の地六種に震動す。乃至梵世も亦復是の如し。地動に二つ有り。或は地動有り、或は大地動(有り)。小しく動する者を名けて地動と爲し、大いに動する者を大地動と名く。小聲有る者を名けて地動と曰ひ、大聲有る者を大地動と(名く)。獨地動する者を名けて地動と曰ひ、山林、河海、一切動する者を大地動と名く。一向に動する者を名けて地動と曰ひ、周回旋轉するを大地動と名く。動くを地動と名け、動く時能く衆生をして心を動せしむるを大地動と名く。(四)菩薩初、兜率天より閻浮提に下る時を大地動と名く。初生出家より阿耨多羅三藐

哀歎品第三

【一】是より譬の三修を施し此上の聲聞衆に對す。其中初に大衆の壽を擧ぐる中、又初に滿縁を示す。之に壽、處、相、山の四段あり。

【二】六種に震動す。次の文に地動(Shuddhikaṅṭhita)の相を明して大小二種の地動の諸相を説く文の如し。華安釋して曰く、相に三あり、一に大小輔相、二に六種動相、三に十八動相、この三皆形聲二動を本とし、影に動(Kampanā)通、(Sthānā)起(Caitā)の三あり、聲に震(Kumbhita)覺(Gaṇṭha)吼(Laṅgha)の三あり、總合十種震動なり。この中形聲の單に動するを小動とし形聲共に動するを大動とし、六種各

各に動、衝動、等衝動の三あるを以て十八動となる。乃至、一閻浮、四洲、小千、中千、大千、十方展轉相望大小を分つべし十八動の梵名は Mahāvijñāna (Sānā) に出でたり。

【三】乃至梵世、安註に曰く、初禪を指すと四禪を通稱すとの二意あれど、前に聲光の有頂に徹するに準じて亦遠解を作すことを得と

【四】菩薩初、已下の文中、八相の中昇天降魔の二相を除くのみ、他の六相は皆有り

【五】兜率天(Trāyastambha)は欲界の第四天なり。一生補處の菩薩必ず此に在りて次に閻浮提に下生するを八相成道の通儀とす。

三菩提を成じ、法輪を轉じ、及び般涅槃するを大地動と名く。今日如來、將に涅槃に入りたまはんとす。是の故に此の地是の如く大いに動す。

〔五〕時に諸の天、龍、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人及び非人、是の語を聞き已りて身毛皆豎ち、同聲に哀泣して、偈を説きて言

さく、

『稽首す調御師、我等今勸請す、

人仙に遠離し、永く救護有ること無し、

今佛の涅槃を見、我等苦海に没す、

悲戀して憂惱を懷き、犢の其の母を失ふが如し、

貧窮にして救護無き、猶し困病の人の、

醫無ければ自心に隨ひて、應せざる所の食を食するが如し、

衆生煩惱の病、常に諸見に害せられ、

法の醫王に遠離し、邪毒の藥を服食す、

是の故に佛世尊、遺捨を見るべからず、

〔二〕國に君主無ければ、人民皆饑饉するが如し、

〔六〕法輪を轉じ。法輪 (Dharmachakra) は如來の説法を稱す。

〔七〕次に正語の文。其中初に哀請、先づ長行。

〔八〕次に偈頌。之に略、廣、結の三請あり。廣中に亡師、亡主、亡親の三節あり。

〔九〕人仙。人中の仙 (Rishin) 即ち人間中の聖者と云ふ意。今の文に調御師、人仙、犢母と云ふは皆釋尊を稱す。

〔一〇〕貧窮にして。已下二頌半は亡師の譬説。

〔一一〕國に。已下三頌半は亡主の譬説。

我等も亦是の如し、蔭及び法味を失ふ、  
今佛の涅槃を聞き、我等の心迷亂す、

彼の大地動に、諸方を迷失するが如し、  
大仙涅槃に入り、佛日地に墮ち、

法水悉く枯涸す、我等定めて當に死すべし、

如來の般涅槃、衆生極めて苦惱す、

【三】譬へば長者子の、新に父母を喪ふが如し、

如來涅槃に入り、如其還りたまはざれば、

我等及び衆生、悉く救護有ること無けん、

如來涅槃に入り、乃至諸の畜生、

一切皆愁怖し、苦惱して其の心を焦す、

我等今日に於て、云何ぞ愁惱せざらん、

如來放捨を見ること、猶し涕唾を棄つるが如し、

【四】譬へば日の初めて出でて、光明甚だ暉炎なり、

【四】既に能く還りて自ら照し、亦一切の闇を滅するが如し。

【三】譬へば。以下二句は亡親の譬説。

【三】次に祈請。

【四】既に能く。此に日還自照とて諸家異論に互る名句あり。開善、莊嚴は佛智自照を立て、光宅は之を許さず。觀師の折中説、章安の綜合説等あり。安註を見よ。

如來の神通光、能く我が苦惱を除きたまふ、

大衆の中に處在すこと、譬へば須彌山の如し。』

【五】世尊、譬へば國王諸子を生育し、形貌端正にして、心に常に愛念す。先に技藝を教へて、悉く

通利せしめ、然して後、之を棄てて旃陀羅に付せんが如し。世尊、我等今日法王の子と爲り、佛の

教誨を蒙るに、已に正見を具す。願はくは放捨したまふこと莫れ。如其放

捨せらるれば、即ち王子に同じからん。唯願はくは久住して、涅槃に入りた

まはざれ。世尊、譬へば人有りて善く諸論を學し、復此の論に於て怖畏

を生ずるが如し。如來も亦爾なり。諸法に通達して、而も諸法に於て亦怖

畏を生ず。若、如來をして久しく世に住して、甘露味を説きて一切に充足せ

しめたまはば、是の如きの衆生は、則ち復地獄に墮することを畏れず。

【七】世尊、譬へば人有りて、初、作務を學び、官の爲に收められ、之を囹

圜に閉ぢん。人有りて之に問ふ、「汝、何事を受くる。」答へて「我今、大憂苦を受く。若其脱すること

を得ば、則ち安樂を得ん」と言はんが如し。世尊も亦爾なり。我等が爲の故に、諸の苦行を修したま

ふ。我等今者、猶未だ生死苦惱を免るることを得ず。云何ぞ如來安樂を受けたまふことを得ん。

【八】世尊、譬へば醫王の善く方藥を解し、偏へに祕方を以て其の子に教授して、其餘の外受學の者

【五】次に哀請。其中初に有始

無終の譬を作す。之に開譬、  
合譬、結請あり。

【六】次に怖畏の譬。之に譬、  
合、結あり。

【七】次に違誓の譬。之に譬、  
合あり。

【八】次に不平等の譬。之に譬、  
合、結あり。



に教へざるが如し。如來も亦爾なり。獨甚深秘密の藏を以て、偏へに文殊に教へ、我等を遺棄して願  
憫せられず。如來、法に於て秘吝して、彼の醫王の、偏へに其の子を教へて外より來る諸の受學者の者  
を教へざるが如くなること無かるべし。彼の醫の苦ろに教ふること能はざ  
る所以は、情に勝負を存するが故に秘吝有り、如來の心は終に勝負無し。  
何が故ぞ是の如く教誨を見ざる。唯願はくは久住して、般涅槃したまふこ  
と莫れ。

二九 世尊、譬へば老、少、病、苦の人の、夷塗を捨遠して險道を行くに、  
險道多難備きに衆苦を受く。更に異人有り、見て之を憫み、即便示すに平  
坦の好路を以てするが如し。世尊、我も亦是の如し。言ふ所の少とは、未  
だ法身を增長せざるの人を譬ふ。言ふ所の老とは、重煩惱を譬ふ。言ふ所  
の病苦とは、未だ生死を脱せざるを譬ふ。言ふ所の險道とは、三三  
を譬ふ。唯願はくは如來、我等に甘露の正道を示導して、久しく世に住し  
て涅槃に入りたまふこと勿れ。』

三〇 爾の時に世尊、諸の比丘に告げたまはく、『汝等比丘、凡夫、諸の天人  
等の如く、愁憂啼哭すること莫れ。當に勤めて精進して、繫心正念すべし。』

【二九】次に無慈悲の譬之に譬、  
合、結あり。

【三〇】二十五有(三三)は、現實  
の宇宙人生を稱す、有にして  
無ならざるが故なり。略して  
欲、色、無色の三有と分ち之を  
三界と通稱す。廣くは廿五有  
廿九有等に分ち。今廿五有と  
は欲界に十四有あり、四惡趣  
と須彌四洲と六欲天となり。  
色界に七有あり、四禪天と外  
に初禪より大梵天を、第四禪  
より淨居天と無想天とを別開  
するが故なり。無色界の四有  
を都合すれば廿五有となる。

【三一】是より如來の答。其中初  
に哀請に酬、其中先づ長行  
の文。

佛の所説を聞きて、止して啼哭せず。猶し人有りて其の愛子を喪ひ、殯送已に訖りて抑止して哭せざるが如し。

〔三三〕爾の時に世尊、諸の大衆の爲に是の偈を説きて言はく、

『汝等當に 意を開くべし、大いに愁苦すべからず、

諸佛の法皆爾なり、是の故に當に默然すべし、

不放逸行を樂ひ、心を守りて正憶念し、

諸の非法を遠離して、自ら慰めて歡樂を受けよ。』

〔三四〕復次に比丘、若疑惑有らば、今皆當に問ふべし。

依非依、若は去不去、若は歸非歸、若は恆非恆、若は斷若は常、若は衆生非衆生、若は有若は無、若は實不實、若は眞不眞、若は減不減、若は密不密、若は二不二、是の如き等の種種法の中、疑ふ所有らば今應に咨問すべし。我當に隨順して、汝が爲に之を斷すべし。亦當に汝が爲に、先に甘露を説き、

然して後に乃ち當に涅槃に入るべし。

〔三三〕次に偈頌。之に止悲、勸空あり。

〔三三〕意を開く。精進の意、定慧の意、實相の意の三章淺深應釋すべし。

〔三四〕次に祈請に酬ひ。

〔三五〕若は空不空。之に十五の雙句あり。安註に曰く舊義の一説は各句藥病に配釋す、空は藥、不空は病と云ふが如し。

〔三五〕若は空不空、若は常無常、若は苦不苦、若は衆生非衆生、若は有若は無、若は實不實、若は眞不眞、若は減不減、若は密不密、若は二不二、是の如き等の種種法の中、疑ふ所有らば今應に咨問すべし。我當に隨順して、汝が爲に之を斷すべし。亦當に汝が爲に、先に甘露を説き、然して後に乃ち當に涅槃に入るべし。

興皇法朗の義は今昔に配説す所謂、空は昔教不空は今教等。章安、前説を肯認しつつ更に三種四種の二説を發明す。曰く、三種に約せば、空、不空、非空非不空なり、餘句准知せよ。四種に約せば空、不空、亦空、亦不空、非空非不空なり、餘句准知せよと。

〔三〕諸の比丘、佛の出世は難し。人身得難く、佛に値うて信を生ずる、是の事も亦難し。能く忍び難きを忍ぶ、是も亦復難し。禁戒を成就し、具足して缺くこと無くして阿羅漢果を得る、是の事も亦難し。金を沙に求むるが如く、優曇鉢華のごとし。諸の比丘、八難を離れて人身を得ること難し。

〔二六〕汝等、我に遇うて空しく過ぐべからず。

我、往昔に於て種種に苦行し、今是の如きの無上の方便を得。汝等が爲の故に、無量劫の中、

身、手足、頭目、髓腦を捨つ。是の故に汝等放逸すべからず。〔二七〕汝等比丘、云何が正法の寶城

を莊嚴する。種種の功德珍寶を具足し、戒定智慧以て牆壁と爲す。汝今、是の佛法の寶城に遇ふ。此の虚偽の物を取るべからず。譬へば商主

の眞寶城に遇ひ、諸の瓦礫を取りて、便ち家に還るが如し。汝も亦是の如し。寶城に値遇して

虚偽の物を取る。〔二八〕汝諸の比丘、下心を以て知足を生ずること勿れ。汝等今者、出家を得と雖も、此の大乗に於て貪慕を生ぜず。汝諸の比丘、身に袈裟、染衣を服することを得と雖も、心猶未だ大

〔二六〕次に讚請に酬ゆ。其中初に歎與能く得能く離るるを明す。之に釋、譬、結あり。釋の文中五難を出す、然るにこの五難前と別、彼は在家の人に約し、此は出家に約するが故に互に出没あり。

〔二七〕八難を離れとは、人身を得て三途の難を離れ、佛に値ひて、佛前、佛後、北州、長壽天、地に邊地の五難を離れ、出家を得て根不具の難を離れ、權漢を得て世智難を離る。

〔二八〕次に不得不離を斥棄するを明す。之に略明と廣明とあり。

〔二九〕我往昔には、道前の方便を擧ぐ、今是の如きの無上の方便を得とは道後の方便を擧ぐ。この一節は眞佛を斥棄す。

〔三〇〕汝等比丘、この一節は眞法を斥棄す。眞法とは正法寶城なり。安註に眞善妙色にして萬善を出生し、甘露圓滿具足缺減なし、乃至一切三學縱橫廣高充溢圓滿す云々。

〔三一〕汝諸の比丘、この一節は眞僧を斥棄す。

乘の淨法に染まらざる。汝諸の比丘、乞食を行

じて多處を經歷すと雖も、初べて未だ曾て大乘

の法食を求めず。汝諸の比丘、鬚髮を除くと

雖も、未だ正法の爲に諸の結使を除かず。汝諸

の比丘、今當に眞實に汝等を教勅すべし。

今現在、大衆和合し、如來法性、眞實にして不倒

なり。是の故に汝等應當に精進し、攝心勇猛

にして諸の結使を推き、十力慧日既に潛没し

已らば、汝等當に無明に覆るべし。諸の比

丘、譬へば大地、諸山、藥草、衆生の用と爲る

が如し。我が法も亦爾なり。妙善甘露の法味

を出生して、而も衆生の種種の煩惱病の良藥

と爲す。我今、當に、一切衆生及び我が諸子、

四部の衆をして悉く皆秘密藏の中に安住せしむ

べし。我も亦復當に是の中に安住して涅槃に入

【三】 我今現在。この一節眞の

三寶を示す。我は佛寶、大衆

和合は僧寶、如來法性に法寶

なり。また、法寶のうる三點

を具す。如來は般若、法性に

法身、不倒解脫、この三を

秘密藏と名け一切法を藏す、

佛僧二寶例して知るべし。

【三】 次に應離應得を勸獎す。

之に離傷を勸むると修眞を勸

むるとあり。

【三】 十力慧日。十力は如來の

別德なり。この十力を具へた

る如來を慧日と稱す。十力

の智力、八に宿命を知るの

智力、九に死生を知るの智力、

十に漏盡の智力、これなり。猶

ほ *Mūla-sūtra*、*Chap. I*、*1*、

梵名あり。

【三】 是より修眞を勸むる中、

秘密藏の實説と法説と釋と結

との四段あり。

【三】 我が法も、この下法説

あり、安詳に曰く、中に順合

と超合との二節あり、以て秘

密藏の自在不定不可思議を表

するなり。順合のうら、我法

亦爾の一句はこれ法身、即三

の智力、八に宿命を知るの

智力、九に死生を知るの智力、

十に漏盡の智力、これなり。猶

ほ *Mūla-sūtra*、*Chap. I*、*1*、

梵名あり。

【三】 是より修眞を勸むる中、

秘密藏の實説と法説と釋と結

との四段あり。

【三】 我が法も、この下法説

あり、安詳に曰く、中に順合

と超合との二節あり、以て秘

密藏の自在不定不可思議を表

するなり。順合のうら、我法

亦爾の一句はこれ法身、即三

るべし。何等をか名けて秘密の藏と爲す。

猶し 伊字の三點の如し。若竝べば則ち伊を

成さず、縦も亦成さず。摩醯首羅の面上の三

目の如くにして、乃ち伊を成すことを得。三點

若別なるも亦成すことを得ず。我も亦是の如

し。解脱の法も亦涅槃に非ず、如來の身も亦涅槃

に非ず、摩訶般若も亦涅槃に非ず。三法各異

なるも亦涅槃に非ず。我今是の如きの三法に安

住して、衆生の爲の故に涅槃に入ると名く、世

の伊字の如し。』

(四) 爾の時に諸の比丘、佛世尊の定んで當に涅槃

したたまふべきを聞きて、皆悉く憂愁し、身

毛豎を爲し、涕泗交も流る。佛足に稽首し、繞

ること無量市し、佛に白して言さく、世尊、

快く無常、苦、空、無我を説きたまふ、

哀歎品第三

しむるは用を越合し、諸子四

部を入藏せしむるは藥草に超

合し、我亦自ら入るは大地に

超合す。一切衆生は初心の故

に初住に、四衆は中間の故に、

四十位に、佛は後心の故に、妙

覺に擬し、共に同じく秘密藏

中に入りて成く佛性を見る。

此六即の分別あること常の

如し。又一義に曰く、大地は

佛寶、諸山藥草は法寶、衆生

の用となるは僧寶に喩ふ。次

に合法の中、我法もは佛寶、

甘露出生は法寶、衆生の後は

僧寶と、この義解し易し。

何等をか名けて秘密の藏と爲す。是より正しく秘密藏を釋す。章安の註に曰く、文三節を分つ、一には伊字の三點に譬へ、二には摩醯首羅の三日に譬へ、三には三徳の法に合す、此三、序の如く、文字と天眼と佛師なるが故に。ま

た序の如く、言教と修行と理

とにして秘密の教行理なるも

のなりと。地論宗學者の曰く、

阿梨耶識の無明妄惑の中に在

るを秘密藏と名くと。成論家

の曰く、當來得べき佛果は衆

生の外に在り然るに此果これ

一切衆生當得の法にして理よ

り云へば人に屬する故、これ

内と云ふべし。内と云ふと雖

も即令有ならざれば是外。外

にして内、内に非ず外に非ず

故に秘密藏と名くと。安は涅槃本有論に依て舊の二説を破して表す。

伊字の三點、梵字の伊字に諸種の形象あり、今、の象字を取りて喩とす、漢字の下字の草體と相似たり。昔教は或は横或は豎、今經の三徳秘密藏は伊字三日の如く不縱不横不並不別圓融の三法なること喩ふるなり。

六三

世尊、譬へば一切衆生の、迹の中象迹を上と爲すが如し。是の無常想も亦復是の如し。諸想の中於て最も第一と爲す。若し精勤に之を修習する者有らば、能く一切の欲界の貪愛、色無色の愛、無明、憍慢、及び無常想を除く。世尊、如來若し無常想を離るれば、今則ち涅槃に入るべからず。若し離れざれば、云何ぞ説きて、「無常想を修すれば三界の愛、無明、憍慢、及び無常想を離る」と言ふや。世尊、譬へば農夫、秋月の時に於て、深く其の地を耕して、能く穢草を除くが如し。是の無常想も亦復是の如し。能く一切の欲界の貪愛、色無色の愛、無明、憍慢、及び無常想を除く。世尊、譬へば田を耕すに秋耕を上と爲すが如く、諸迹の中象迹を勝と爲すが如く、諸想の中に於て無常を最と爲す。世尊、譬へ

【三六】 摩薩首羅の面上の三日。  
Māhāvīra Mahāvīra Māhāvīra Mahāvīra

大自在天神の梵稱なり。具に

摩訶伊濕伐羅と記す。佛教神

話に在りては此神色世界の頂に

居り大千世界を統領すと傳ふ

この神の面上に三眼あり所謂

三目なり。その位置前の伊字

に等しく不縱不横不並不別な

り。以て三德祕密藏の圓融を

譬ふ。

【四〇】 我も亦是の如し。三徳合

法の文なり。安註に曰く、果

【四二】 次に正しく執を陳す。之に執、歎あり。

【四三】 快く、無常と。この無常

(Anitya)、苦(Duḥkha)、空(Śūnyā)、無我(Anātman)の四眞理

は身受、心、法の四法に對して

その實相を説き、以て外道凡

夫のこの四法を常(ニチャ)樂

スカー(アリートマ)淨(Suddha)

と執するを破せる背教(小乘

教)の根本教條なるものなり。

【四四】 次に請の文。其中五譬あり、初に愚教の譬は通じて聲聞の未だ兩惑を除かざる者の爲に請を作すを明す。

【四五】 次に呪師の譬は通じて聲聞の未だ無明を除かざる者の爲に請を作すを明す。

【四六】 次に香象の譬は偏に學人の未だ思惑を除かざる者の爲に請を作すを明す。

ば帝王の命將に終らんとするを知りて、天下の  
 獄囚繫閉を恩赦し、悉く脱するを得しめて、然  
 して後に命を捨つるが如し。如來今者も亦是の  
 如くなるべし。諸衆生の一切の無知無明の繫閉  
 を度し、皆解脱せしめて然して後に涅槃したま  
 へ。我等今者皆未だ度を得ず、云何ぞ如來、便ち  
 放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。聖尊、  
 譬へば人有りて鬼に持へられんに、良呪師に遇  
 ひ呪力を以ての故に、便ち除差を得るが如し。  
 如來も亦爾なり。諸の聲聞の爲に無明の鬼を除  
 き、摩訶般若解脱等の法をして、世の伊字の如  
 くなるに安住するを得しむ。聖尊、譬へば  
 香象の、人に縛せられんに、良師有りて雖も禁制  
 すること能はず、頓に霸鎖を絶ちて自ら恣にし  
 て去るが如し。我未だ是の如く 聖 五十七煩惱の

【四七】五十七煩惱。異説あり、安註に四説を示す、(一)は立者詳な  
 らず、(二)は數人(毘曇宗)、(三)は論人(成實宗)、(四)は興皇寺  
 法朗師の説なり。次に圖するが如し。

(1)  $\begin{cases} 5 = 5蓋 \\ 10 = 10纏 \\ 7 = 7漏 = 7使 \end{cases}$

(2)  $\begin{cases} 欲界; 貪瞋癡慢 4 惑 \times 各迷 5 行 = 20 惑 \\ 色界; 貪 癡 慢 3 惑 \times 各迷 5 行 = 15 惑 \\ 無色界; 貪 癡 慢 3 惑 \times 各迷 5 行 = 15 惑 \end{cases}$   
 50煩惱 + 根本 7 漏(七使) = 57煩惱  
 5行 = 見諦 4 + 思惟 1.

(3)  $\begin{cases} 見諦 10 使 \times 各迷 4 諦 = 40 \\ 惡性 4 使 \times 各迷 4 諦 = 16 \end{cases}$   
 56 + 無明 1 = 57煩惱

(4)  $\begin{cases} 5 門觀 \times 3 倒(想 \cdot 見 \cdot 心) \times 3 界 = 45 \\ 4 諦 \times 3 倒 \dots\dots\dots = 12 \end{cases}$   
 57煩惱

繫縛を脱せず、云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。世尊、人瘡を病み、

良醫に値遇して苦む所を除くことを得るが如し。我も亦是の如し。諸の患苦、邪命、熱病多し。

如來に遇ふと雖も病未だ除愈せず、未だ無上の安隱常樂を得ず。云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。世尊、譬へば醉人の自ら覺知せず、親疏、母女、姉妹を識らず、迷荒淫亂、言語放逸、不淨の中に臥す。時に良師有り、藥を與へて服せしめ、服し已りて即ち吐き、還りて自ら憶識して心に慙愧を懷き、深く自ら克責し、酒を不善諸惡の根本と爲す。若能く除斷すれば、則ち衆罪を遠くするが如し。世尊、我も亦是の如し。往昔已來生死に輪轉して、情色に醉はされ、五欲を貪嗜す。非母母想、非姉姉想、非女女想、非衆生に於て衆生想を生ず。是の故に輪轉して生死の苦を受く。

彼の醉人の不淨の中に臥するが如し。如來、今當に我に法藥を施して、我をして煩惱の惡酒を還吐せしむべし。我未だ醒寤の心を得ず。云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。

世尊、譬へば人有りて、芭蕉樹を歎じて以て堅實と爲すも、是の處有ること無きが如し。世尊、衆生も亦爾なり。若我、人、衆生、壽命、養育、知見、作者、受者、是眞實と歎せんに、亦是の處無し。

我等是の如く無我想を修す。世尊、譬へば漿滓の復用ふる所無きが如し。是の身も亦爾なり。我

【四八】次に瘡病の譬は、偏に無學人の未だ一邊を除かざる者の爲に請を作すを明す。

【四九】次に醉人の譬は、通じて一切の凡聖の爲に請を作すを明す。

【五〇】次に疑の文。其中、初に無我を明す。文の中芭蕉は行陰に約し、人等の七は色陰に約し、七葉は三陰に約す。



無く主無し。世尊、七葉華の香氣有ること無きが如し。是の身も亦爾なり、無我無主なり。我等是の如く心常に無我の想を修習す。佛の所説の如く、一切諸法は我我所無し。汝諸の比丘、應當に修習すべし。是の如く修し已らば則ち我慢を除く。我慢を離れ已りて便ち涅槃に入る。世尊、譬へば鳥迹の空中に現すとは、是の處有ること無きが如し。能く無我想を修習する者有りて、而も諸見有らば亦是の處無し。」

爾の時に世尊、諸の比丘を讚じたまはく、「善い哉善い哉、汝等善能く無我想を修す。」時に諸の比丘、即ち佛に白して言さく、「世尊、我等但、無我想を修するのみならず、更に其餘の諸想を修習す。所謂苦想、無常、無我想なり。世尊、譬へば人酔ひて其の心眩亂し、諸の山川、城郭、宮殿、日月、星辰皆悉く回轉するを視るが如し。世尊、若苦、無常想、無我等の想を修せざるあらば、是の如きの人は、名けて聖と爲さず。諸の放逸多ければ生死に流轉す。世尊、是の因縁を以て、我等善く是の如きの諸想を修す。」

爾の時に佛、諸の比丘に告げて言はく、「諦かに聽け諦かに聽け。汝向に引く所の醉人の譬は、但文字を知りて未だ其の義に達せず。何等をか義と爲す。彼の醉人の、上の日月の、實は回轉に非ざるを見て回轉の想を生ずるが如し。衆生も亦爾なり。諸の煩惱無明に覆はるるが爲に顛倒心を

【五二】次に證を引く。

【五三】次に用を明す。

【五四】是より執を破し疑を除くを明す 其中初に讚の文。

【五五】次に破の文。其中、初に偏理を破する中、初に執を騰ぐ。之に讚に接して執を騰ぐと譬を作すと結歎との三段あり。

【五六】酬を以て破と爲すを明す。其中初に不倒亂是れ倒亂なりと破す。

生じて我を無我と計し、常を無常と計し、淨を不淨と計し、樂を計して苦と爲し、煩惱に覆はるるを以ての故に、此の想を生ずと雖も、其の義に達せず。彼の醉人の非轉處に於て轉想を生ずるが如し。

我とは即ち佛の義、常とは是法身の義、樂とは是涅槃の義、淨とは是法の義なり。汝等比丘、云何ぞも「我想有るは憍慢真高にして生死に流轉すと云ふや。汝等、我も亦無常、苦、空、無我等の

想を修習すと云ふが若きは、是の三種の修實義有ること無し。我今當に勝の三修法を説くべし。苦なる者を樂と計し、樂なる者を苦と計す。是顛倒の法なり。無常を常と計し、常を無常と計す。是顛倒の法なり。無我を我と計し、我を無我と計す。是顛倒の法なり。不淨を淨と計し、淨を不淨と計す。

是顛倒の法なり。是の如き等の四顛倒の法有り。是の人正しく諸法を修することを知らず。汝諸

の比丘、苦法の中に於て樂想を生じ、無常の中に於て常想を生じ、無我の中に於て我想を生じ、不淨の中に於て淨想を生ず。世間も亦常、樂、我、淨有り。出世も亦常、樂、我、淨有り。世

間法は字有りて義無く、出世間は字有り義有り。何を以ての故に。世間の法に四顛倒有り、故に義

を知らず。所以は何ん。想顛倒、心倒、見倒

【五七】 我とは即ち佛の義。安註に曰く、佛とは覺の義、自在を以ての故に名く、常とは法身緣より生ぜざるが故に常、涅槃は受無きが故に大樂なり。法は染無きが故に淨なり。汝が非とすると、今は則ち是なり。この義を知らざるは良に辭に出ると。

【五八】 其中四節ありて、初節に勝劣の兩修を雙擧す。  
【五九】 苦なる者を、この一節次に八倒を雙明す。  
【六〇】 汝諸の比丘、この一節正しく四倒を還らし、次の文三番の料簡あり、世出世と有不有と倒不倒となり。  
【六一】 想顛倒、この一節に四倒三倒あり、四は前文の如し。

有り。三倒を以ての故に、世間の人樂の中に苦  
を見、常に無常を見、我に無我を見、淨に不淨  
を見る。是を顛倒と名く。顛倒を以ての故に、  
世間字を知りて而も義を知らず。何等をか義と  
爲す。無我とは即ち生死、我とは即ち如來、無  
常とは聲聞、緣覺、常とは如來法身、苦とは一  
切外道、樂とは即ち是涅槃、不淨とは即ち有爲法、  
淨とは諸佛菩薩の所有の正法なり。是を不顛倒と  
名く。不顛倒を以ての故に字を知り義を知る。若四顛倒を遠離せんと欲せば、是の如きの常、樂、我、  
淨を知るべし。』

時(六二)に諸の比丘、佛に白して言さく、「世尊、佛の所説の如く四倒を離るれば、則ち常、樂、我、淨  
を了知することを得。如來は今者、永く四倒無ければ、則ち已に常、樂、我、淨を了知したまふ。若  
已に常、樂、我、淨を了知せば、何が故ぞ住まること一劫半劫して、我等を教導して四倒を離れしめ  
たまはざる。而も放捨せられて涅槃に入らんと欲したまふ。如來若し顧念の教勅を見ば、我當に、至心  
に頂受して修習すべし。如來若當に涅槃に入りたまふべくば、我等云何ぞ是の毒身と同じく共に止住  
して梵行を修せん。我等も亦當に佛世尊に隨ひて涅槃に入るべし。』

三倒は想心、見なり。この三  
古來異説あり、一に曰く、序  
の如く想、受、行の三蘊に對す  
と。一に曰く、四心に通在  
すと。一に曰く、凡て心有て  
境を緣すれば心倒、次に想像  
はこれ想倒、能く分別するは  
見倒なりと。又一に曰く、初心

の妄計は心倒、心緣想を成ぜ  
ば想倒、想成じて永執するは  
見倒と、乃至廣く安註に釋す、  
就いて看よ。

【六二】次に偏行を破するを明  
す。其中初に請の文。

(三三) 爾の時に佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝等、是の如きの語を作すべからず。(三三) 我今有らゆる無上正法を、悉く以て 摩訶迦葉に付囑す。是の迦葉は、當に汝等の爲に大依止と作るべし。猶し如來の、諸の衆生の爲に依止處と作るが如し。摩訶迦葉も亦復是の如し。當に汝等が爲に依止處と作るべし。譬へば大王の統領する所多く、(蓋) 若し遊巡の時は悉く國事を以て大臣に付囑するが如し。如來も亦爾なり。所有の正法も亦以て摩訶迦葉に付囑す。(突) 汝等當に知るべし。先より修習する所の無常、苦想は是眞實に非ず。譬へば春時諸人等有り、大池に在りて浴す。船に乗りて遊戯し、瑠璃寶を失ひて深水の中に没す。是の時に諸人、悉く共に水に入りて是の寶を求覓し、競ひて瓦石、草木、砂礫を捉へ、各各自ら「瑠璃珠を得」と謂ひて歡喜して持ち出すに、乃ち眞に非ざるを知る。是の時に寶珠猶水中に在り、珠力を以ての故に水皆澄清す。是に於て大衆、乃ち寶珠の故水中に在るを見ること、猶し仰ぎて虚空の月形を觀るが如し。是の時に衆中に一りの智人有り。方便力を以て安徐として水に入り、即便珠を得るが如し。汝等比丘、是の如く無常、苦、無我想、不淨想等を修習して、以て實義と爲すこと、彼の諸人の各瓦石、草木、砂礫を以て寶珠と爲すが如く、なるべからず。汝等、應當に善く方便を學して、在在處處に常に我想、常樂淨想を修すべし。復應當に先より

【三三】 次に詩を酬い行を破す。

其中初に不應を問す。

【三二】 次に詩を酬ゆ。其中初に人を以て酬ゆ。

【三四】 摩訶迦葉。マハカヤシヤ。

の音譯、大飲光と譯す。釋尊十大弟子の長老。頭陀第一の稱あり。

【三五】 若し遊巡。如來他方に遊化せんとするを辨ふ。

【三六】 次に法を以て酬ゆ。

修習する所の四法の相貌、悉く是顛倒と知り、眞實に諸想を修することを得んと欲せん者、彼の智人の、巧に寶珠を出すが如くすべし。所謂我、常樂淨想なり。爾の時に諸の比丘、佛先に諸法無我なり、汝當に修學すべし。是を修學し已らば、則ち我を離る。我を離るれば、則ち憍慢を離る。憍慢を離るれば、涅槃に入ることを得と説きたまふが如き、是の義云何。佛、諸の比丘に告げたまはく、『善哉善哉、汝今善能く是の義を咨問して、自ら疑を斷せんと爲す。』譬へば國王の關鈍少智なるに、一りの醫師有り、性復頑、而も王別たずして厚く俸祿を賜ふ。衆病を療治するに純ら乳藥を以てす。亦復病起の根原を知らず。乳藥を知ると雖も、復善く風冷、熱病を解せず。一切の諸患に悉く乳を服するを教ふ。是の王、是の醫乳の好醜、善惡を知るを別たす。復明醫有り。八種の術を曉り、善く衆病を療し、諸の方藥を知り、遠方より來る。是の時に舊醫咨受を知らず。反つて貢高輕慢の心を生ず。彼の時明醫即便依附し、請じて以て師と爲し、醫方秘奥の法を咨受す。舊醫に語りて言はく、『我今仁を請じて以て師範と爲す。唯願はくは我が爲に宣暢、解説せよ。』舊醫答へて言はく、『卿、今若能く我が爲に給使すること

【六】 次に偏教を破す。其中初に譬に騰。  
 【六六】 次に破の文。其中初に問を敷す。  
 【六九】 次に答ふ。其中初に譬の文、先づ四倒の病を譬ふ。  
 【七】 次に三修の藥を譬ふ。  
 【七二】 八種の術。明醫の八術とは一に治身、二に治眼、三に治胎、四に治小兒、五に治瘡、六に治毒、七に治邪、八に知星これなり。今如來の八正道能く八倒の病を治するに譬ふ。安註に譬の十種を説いて今の明醫は第十譬とし、その當、無常等に通達し二鳥雙遊するを八術に喩ふと云ふ。

四十八年せば、然して後に乃ち當に汝に醫法を教ふべし。時に彼の明醫、即ち其の教を受け、我、當に是の如くすべし。我、當に是の如くすべし。我が所能に隨ひて當に走使を給すべし。是の時に舊醫、即ち容醫を將て共に入りて王に見ゆ。是の時に客醫、即ち王の爲に種種の醫方、及び餘の技藝を説かく、「大王當に知るべし。善く分別すべし。此の法は是の如し、以て國を治すべし。此の法は是の如し、以て病を療すべし。」爾の時に國王、此の語を聞き已りて、方に舊醫の癡闇無智を知り、即便驅逐して國界を出さしめ、然して後に倍す復客醫を恭敬す。是の時に客醫是の念言を作さく、「王を教へんと欲せば、今正に是時なり。」即ち王に語りて言さく、「大王、我に於て實に愛念せば、當に一つの願を求むべし。」即ち答へて言さく、「此の右臂より餘の身分に及ぶまで、意の求むる所に隨ひて一切相與へん。」彼の客醫の言さく、「王、我に一切の身分を許すと雖も、然も我、敢て多く求むる所有らず。今求むる所は、王、一切國內に宣令せんことを願ふ。今より已往、復舊醫の乳藥を服することを得ざれ。所以は何ん。是藥の毒害傷損多きが故に。若故服する者は、當に其の首を斬るべし。乳藥を斷じ已らば、終に復横死の人有ること無く、常に安樂に處せん。故に是願を求む。」時に王、答へて言さく、「汝の求むる所は蓋し言ふに足らず。尋で爲に一切國內に宣令せ

【七三】 四十八年。外道に就學するもの給侍の年時を四十八年とするの説あり、阿舍の如し、今之に依て解すべし。その所表に付て開善は四十と八とは四禪八定を表すと。治城は八禪各六行觀あるを以て四十八と云ふと。天台止觀には四見を根本とし一見に三假、一假に四句、一見に十二句、四見合して四十八句となす、是邪法四十八年なりと。

ん、凡そ諸の病人、皆悉く乳を以て薬と爲すを聽さず。若薬と爲す者は、當に其首を斬るべし。」爾の時に客醫、衆薬を和合す。(三) 辛、苦、鹹、甜、酢等の味を謂ふ。以て衆病を療するに、差ゆることを得ざる無し。(四) 其後久しからずして王復病を得。乃ち是の醫を命す、「我今病困、當に云何が治すべき。」

【三】 醫、王の病を占ふに、乳薬を用ふべし。尋で王に白して言さく、「王の患ふる所の如きは、應當に

乳を服すべし。我先時に於て乳薬を斷する所は、是實語に非ず。今若服すれば、最も能く病を除く。王今熱を患ふ。正に乳を服すべし。」時に王、醫に

語らく、「汝今狂するか、熱病と爲んや。而も乳を服すれば、能く此の病を除くと言ふ。汝先に毒と言ふ、今云何ぞ服せしむ。我を欺かんと欲するか。

先醫の譏する所を、汝是毒と言ひ、我をして驅遣せしめ、今復好にして、最も能く病を除くと言ふ。汝の言ふ所の如きは、我が本の舊醫、定んで汝に勝ると爲ん。」是の時に客

醫、復王に語りて言さく、「王今、是の如きの語を作すべからず。蟲の木を食して字を成す者有り。此の蟲是字、非字を知らず。智人之を見て、是の蟲字を解すと唱言せず、亦驚怪せざるが如し。大王、當に知るべし、舊醫も亦爾なり。諸病を別たすして悉く乳薬を與ふ。彼の蟲道の偶字を成すことを得るが如し。是の先の舊醫乳薬の好醜、善惡を解せず。」時に王、問うて言さく、「云何が解せざる。」客

醫、王に答ふ、「是の乳薬は亦是毒害、亦是甘露。」云何が是の乳、復甘露と名く。(五) 若是の乳牛、酒

- 【七三】 辛苦鹹等。この五味は五門觀を譬ふ、安註に細釋す。
- 【七四】 次に三條の病を譬ふ。
- 【七五】 四徳の薬を譬ふ。
- 【七六】 若是の乳牛。この一節の文中に七事あり、古師の說なり、安註に細釋す。

槽、滑草、麥麩を食せず、其の犢調善、放牧の處高原に在らず、亦下溼ならず。飲まずに清水を以て馳走せしめず、特牛と共に一羣を同じうせず。飲食調適、行住所を得。是の如きの乳は能く諸病を除く。是則ち名けて甘露の妙薬と爲す。是の乳を除き已りて、其餘の一切は皆毒害と名く。」

爾の時に大王、是の語を聞き已りて讚じて言はく、「大醫、善い哉善い哉、我今日より始めて乳薬の善悪、好醜を知り、卽便之を服して病除癒するを得たり。尋時に一切國內に宣令せん、今より已往、當に乳薬を服すべし。」國人之を聞きて皆瞋恨を生じ、咸く謂つて言はく、「大王、今者鬼に持へらる。」

是狂と爲すや、我等を誑して復乳を服せしむ。一切人民皆瞋恨を懷きて、

悉く王の所に集る。王の言はく、「汝等我に於て瞋恨を生ずべからず。此

の如きの乳薬、服と不服とは悉く是醫教、是我が咎に非ず。」爾の時に大王

及び諸の人民、踊躍歡喜し、倍す其に是の醫を恭敬、供養す。一切病者、皆乳薬を服して病悉く除愈

するが如し。(七) 汝等比丘、當に知るべし。如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、

調御丈夫、天人師、佛、世尊も亦復是の如し。大醫王と爲りて世に出現し、一切の外道、邪醫を降

伏したまふ。諸王衆中、是の如きの言を唱へたまふ、「我醫王と爲り、外道を伏せんと欲す。」故に是の

言を唱ふ、「我無く、人、衆生壽者、養育知見、作者受者無し」と。比丘當に知るべし、是の諸の外道

の我を言ふ所に、蟲の木を食して偶字を成すが如くなるのみ。是の故に如來、佛法の中に於て、唱

【七七】 次に合。其中初に始同を合す。

【七七】 次に末異を合す。



へて無我と言ふ。衆生を調へんが爲の故に、時を知るが爲の故なり。是の如きの無我、因縁有るが故に、亦有我と説く。彼の良醫の、善く乳の是藥、非藥を知るが如し。凡夫の吾我を計する所の如きに非ず、凡夫、愚人の我を計する所の者、或は説きて言ふ有り、大いき拇指の如し、或は「芥子の如し、或は「微塵の如し」と。如來の我を説く、悉く是の如くならず。是の故に説きて「諸法無我」と言ふ。實は無我到非ず。何者か是我、若法是實、是真、是常、是主、是依、性は變易せず。是を名けて我と爲す。彼の大醫の善く乳藥を解するが如し。如來も亦爾なり。衆生の爲の故に、諸法の中眞實に我有りと説く。汝等四衆、應當に是の如く是の法を修習すべし。』

卷の第三

長壽品第四

佛、復諸の比丘に告げたまはく、「汝、戒律に於て疑ふ所有らば、今汝が問を恣にせよ。

我當に解説して、汝が心をして喜ばしむべし。

我已に一切諸法の本性の、空寂を修學して明了

に通達す。汝等比丘、如來のみ唯諸法の本性の

空寂を修す」と。復、比丘に告げたまはく、

『若戒律に於て疑ふ所有らば、今悉く問ふべし。』

時に諸の比丘、佛に白して言さく、「世尊、我等智慧の能く如來、應供、正徧知に問ふこと有ること無し。所以は何ん。如來の境界は思議すべからず。有らゆる諸定は思議すべからず。演ぶる所の

の教誨は思議すべからず。是の故に我等の智慧の、能く如來に問ふこと有ること無し。世尊、譬へば

老人の年百二十なる、身長病に嬰りて牀席に寢臥し、起居すること能はず。氣力虚劣にして餘命

節三分して、初の如來の境界不可思議は前の如來の旬に、次の有ゆる諸定等は前の應供の旬に、後の演ぶる所の教誨等は正徧知の旬に屬對して解すべし。

【一】 問に隨つて應し此土の菩薩に對す。其中初に勸問。其中先づ比丘を勸む。其中又初に疑を除くことを勸む。

【二】 次に寄を受くることを勸む。其中初に勸。

【三】 次に辭。其中初に法を明す。

【四】 如來の境界は等。この一

【五】 次に譬。

【六】 老人の年百二十。諸の聲聞の十二因緣觀に譬ふ。

【七】 老人の年百二十なる、身長病に嬰りて牀席に寢臥し、起居すること能はず。氣力虚劣にして餘命

幾も無きが如し。一りの富人有り。縁事に行かんと欲し、當に他方に至るべきに、百斤の金を

以て彼の老人に寄せて是の言を作さく、「我今他行す。是の寶物を以て持用つて相寄す。或は十年

を經、或は二十年、事畢りて當に還るべし。らん時に我に歸せ。」是の老病人即便之を受く。

而も此の老人復繼嗣無し。其の後、久しからずして病篤うして命終し、寄する所の物悉

く皆散失す。財主行より還りて求索するに所無し。是の如きの癡人、所寄の可不を籌量するこ

とを知らず。是の故に行より還りて求索するに所無し。是の因縁を以て財寶を喪失するが如し。

世尊、我等聲聞も亦復た是の如し。如來の殷勤の教戒を聞くと雖も、受持して久住することを得しむること能はざること、彼の老人の他の寄

付を受くるが如し。我今無智にして、諸の戒律に於て、當に何の問ふ所なるべき。佛、比丘に告げた

まはく、「汝等今者若我に問はば、即ち能く一切衆生を利益せん。是の故に汝に諸有の疑網、恣に所

を見るに譬ふ、法身異ならざるを以て我に歸すと云ふ、三

には通別の惑盡くるとき、即ち是還る時、即ち是我に歸すなり。第三は華安の説、前二

は舊來の説なり。一義に善實心の男、慈悲心の女なきを云ひ。

一義に變化の眷屬後輩のものなきを云ひ。一義に常住信心の子無きを云ふ。

病篤く命終し、灰身滅智を譬ふ。次に合法。

間に隨へと告ぐ。』時に諸の比丘佛に白して言さく、『世尊、譬へば人有りて、  
 正、多く財寶、金銀、瑠璃有り。』父母、妻子、眷屬、宗親、悉く皆具さに存す。時に人有り、來  
 りて其に寶物を寄せ、其の人に語りて言はく、『我緣事有り、他處に至らんと欲す。事訖りて當に還  
 べし。還らん時に我に歸せ。』是の時に壯夫、是の物を守護すること自己の  
 有の如くす。其の人病に遇ひ、即ち家屬に命ず。是の如きの金寶。是他の  
 寄する所、彼若し來り索めば悉く皆之を還せ。智者は是の如く善く籌量を  
 知る。行より還りて物を索むるに、皆悉く之を得て亡失する所無きが如  
 し。世尊も亦爾なり。若法寶を以て 阿難、及び諸の比丘に付囑せば、久  
 住を得ず。何を以ての故に、一切の聲聞及び大迦葉、悉く當に無常すべき  
 に、彼の老人の、他の寄物を受くるが如し。是の故に無上の佛法を以て、  
 諸の菩薩に付すべし。善能く問答して是の如きの法寶、則ち久住を得て  
 無量千世、増益熾盛にして、衆生を利安するを以て、彼の壯人の他の寄物  
 を受くるが如し。是の義を以ての故に諸の大菩薩、乃ち能く問はんのみ。我等の智慧は猶し蠱蚘の如  
 し。何ぞ能く如來に深法を咨請せん。』時に諸の聲聞默然として住す。

二八

爾の時に佛、諸の比丘を讚じて言はく、『善い哉善い哉、汝等善く無漏心、阿羅漢心を得。我

- 【五】 年二十五。二十五三昧を講ふ。
- 【六】 父母妻子。三諦一諦を父母とし、法喜を妻とし、善心を子とす。道品は眷屬、十方諸佛に是宗親なり。
- 【七】 阿難。Kāśyapaの略、慶喜と譯す。釋尊の從弟にして十大弟子の一、常隨の侍者にして多聞第一の稱あり。
- 【八】 次に讚。

も亦曾て念ず。(一九)此の二縁を以て、大乘を以て諸の菩薩に付して、是の妙法をして久しく世に住せしむべし。(二〇)爾の時に佛、一切大衆に告げたまはく、「善男子、善女人、我が壽命は稱量すべからず。樂説の辯も亦盡すべからず。汝等宜しく意に隨ひて、若は戒、若は歸を咨問すべし。(二一)第二、第三も亦復是の如し。」

(二二)爾の時に衆中に一りの童子菩薩摩訶薩有り。是多羅聚落の婆羅門種なり。姓は大迦葉、佛の神力を以て、即ち座より起ちて偏へに右臂を袒ぎ、繞ること百千市し、右膝を地に著け、掌を合せて佛に向ひ、佛に白して言さく、「世尊、我今者に於て少しく咨問せんと欲す。若し佛聽したまはば乃ち敢て發言せん。」(二三)佛、迦葉に告げたまはく、「如來、應供、正徧知、汝が問ふ所を恣にし、當に汝が爲に説きて、汝が疑ふ所を斷じて、汝をして歡喜せしむべし。」(二六)爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來哀憫して已に聽許を垂る。今當に之を問ふべし。然るに我、所有の智慧微妙にして、猶し蠶蝸の如し、如來世尊、道德巍巍として純ら梅檀、師子の難

【一九】此の二縁。塵聞は不能、菩薩可能なるの二縁なり。  
【二〇】次に大衆を勸む。  
【二一】第二第三。慇懃に三度勸説せられしことを示す。  
【二二】是より正問の文。其中四段ありて初に欲問。  
【二三】童子菩薩摩訶薩。童子は別位、菩薩は道位なり。十住中の第九住位を童眞子住と名く、また文殊童子に類せば十地の稱となる。  
【二四】多羅聚落等。Brahmin種なる Mahākāśya なる人。  
【二五】次に詳問。  
【二六】次に謙問。其中に三節あり、大小に約すると、高度に約すると、借助に約するとなり。  
【二七】道德巍巍。佛の威風の高きことを示す。  
【二八】師子難伏。その衆の多きことを示す。

長壽品第四

七九

伏不可壞の衆を以て眷屬と爲す。如來の身は猶し眞金剛の如し。色は瑠璃の如く、眞實にして壞し難し。復是の如きの大智慧海に圍繞せられ、是衆會中の諸の大菩薩摩訶薩等、皆悉く無量無邊の深妙功德を成就す。猶し香象の如し。是の如き等の大衆の前に於て、豈敢て發問せんや。今當に佛の神通の力を承け、及び大衆の善根威徳に因りて少しく問を發すべきのみ。』 卽ち佛前に於て偈を説きて曰さく、

〔一〇〕云何が長壽、金剛不壞身を得、

復何の因縁を以て、大堅固力を得る、

〔一一〕云何が此の經に於て、究竟じて彼岸に到る、

願はくは佛微密を聞き、廣く衆生の爲に説きたまへ、

〔一二〕云何が廣大、衆の爲に依止と作り、

〔一三〕次に正問の文。之に、正問、請答の二段あり。各過現未三世に約して三節あり。この偈總て二十三頌あり。これを解するに古來多説あり、今安註に依るに先づ分偈に關する異説に河西則公は前十九偈を問、後四偈を請答と分つ。又一説は前二十一偈を問、後二偈を自謙と分つ。又一説に始終全く問とす。又一説は始終兩存とす。次に問數に關する異説は梁武帝は三十二問、河西は三十四問とす（靈味の亮、治城の素、莊嚴の晏等の諸師皆この説を用ふ）、中寺の安は三十五問、開善は三十六問、光宅は三十七問とす。次に四起に關する異説は開善は一一の問皆純陀、哀歎品中より生

すと。大昌の宗は悉く時に臨みて問を致すのみと、靈根の令正は前二説を並取す。興皇法朗はこの間通じて釋尊一化の教門を論ずと。章安は已上の異説を羅列して次に自説を敘して曰く、この二十三偈は見方によりて三十二問、三十四問、三十五問、三十七問等と云ふべし、今は河西に従つて三十四問と見る。また二十三偈の中前十九偈は正しく三十四問を作し、後の四偈は答を請すと。またこの三十四問と次下次第に説ける諸品との關係は別科に示すが如し。

〔一四〕正問の中三、初に過去を問ふ。

〔一五〕次に現在を問ふ。

〔一六〕次に未來を問ふ。

實は阿羅漢に非ずして、量羅漢と等しきことを得る。

云何が天魔の、衆の爲に留難を作すを知らん、

如來波旬の説、云何が分別して知りたまはん、

云何が諸の調御、心喜眞諦を説きたまふ、

正善具さに成就して、四顛倒を演説したまふ、

云何が善業を作したまふ、大仙今當に説きたまふべし。

云何が諸の菩薩、能く見難きの性を見る、

云何が滿字、及與半字の義を解す、

云何が共聖行、娑羅迦隣提、

云何が日月、太白與び叢星の如き、

云何が未發心、而も名けて菩薩と爲す、

云何が大眾に於て、無所畏を得ること、

猶し閻浮金の如く、能く其の過を説くこと無き、

云何が濁世に處て、汚れざること蓮華の如くなる、

云何が煩惱に處て、煩惱染むこと能はず、

【三】娑羅迦隣提 (Saras and Kanudā) 娑羅と迦隣提との二鳥の名 二鳥共に鴛鴦の如く、雙遊不離の鳥なれば菩薩の一行、一切行共行するに譬ふ。

醫の衆病を療して、病に汚されざるが如くなる、

生死の大海の中、云何が船師と作る、

云何が生死を捨つること、蛇の故皮を脱するが如くなる、

云何が三寶を觀じて、猶し天意樹の如くする、

三乗若は無性、云何が説くことを得、

猶し樂未生の如く、云何が愛樂と名く、

云何が諸の菩薩、不壞衆を得、

云何が生盲の爲に、眼目導と作る、

云何が多頭を示す、唯願はくは天仙説きたまへ、

云何が説法者、増長すること月初の如き、

云何が復示現して、涅槃を究覓す、

云何が勇進者、人天魔道を示す、

云何が法性を知り、而も法樂を受く、

云何が諸の菩薩、一切の病を遠離す、

云何が衆生の爲に、祕密を演説す、



云何が畢竟、及與不畢竟を説く、

如其疑網を斷せば、云何が定説せざる、

云何が而も、最勝無上の道に近く、ことを得ん、

【三〇】 我今如來に請す、諸の菩薩の爲の故に、

願はくは爲に甚深、微妙の諸行等を説きたまへ、

【三一】 一切諸法の中、悉く安樂の性有り、

唯願はくは大仙尊、我が爲に分別して説きたまへ、

【三二】 衆生の大依止、兩足尊妙藥、

今諸陰を問はんと欲すれども、我智慧無く、

精進の諸の菩薩、亦復、

是の如き等の甚深、諸佛の境界を知ること能はじ。

【三三】 爾の時に佛、迦葉菩薩を讃じたまはく、善い哉善い哉、善男子、汝今、未だ一切種智を得ざる

も我已に之を得たり。然るに汝が問ふ所の甚深密義、一切智の間の如く、等しうして異なること有るこ

と無し。善男子、我 道場の菩提樹の下に坐して、初めて正覺を成す。爾の時に、無量阿僧祇

恆河沙等の諸佛世界に 諸の菩薩有り。亦曾て我に是の甚深の義を問ふ。然るに其の間ふ所の句義

【三〇】 次に請答に三あり、初に過去を請答の文。

【三一】 次に現在を請答す。

【三二】 次に未來を請答す。

【三七】 第二に佛答。其の中初に讚問。先づ讚、之に總別二讚あり。

【三八】 道場 (Bohimandala) とは、今の佛陀伽耶 (Bhithaga) の聖地を稱す。菩提樹は、

イワリクシヤ、梵漢並稱、實名は畢鉢羅樹 (pipala) なり。

功徳も、亦皆是の如く等しうして異なること有ること無し。是の如く問はば、則ち能く無量の衆生を利益す。爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言

さく、『世尊、我が智力の、能く如來に是の如きの深義を問ふ無きこと、世尊、譬へば蠱蚘の、大海の彼岸に飛過し、虚空に周徧すること能はざる

が如し。我も亦是の如し。如來に是の如きの智慧の大海法性の虚空甚深の義を咨問すること能はず。世尊、譬へば國王、譬中の明珠を典藏臣に付

するに、藏臣得已りて頂戴恭敬し、守護を増加するが如し。我も亦是の如し。如來所説の方等深義を頂戴恭敬し、増加守護せん。何を以ての故に。

我をして廣く深智慧を得しめんが故なり。爾の時に佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、諦かに聽け諦かに聽け。當

に汝が爲に説くべし。如來所得の長壽の業、菩薩是の業因縁を以ての故に長壽を得。是の故に應當に至心に聽受すべし。若業能く菩提の因と爲

らば、應當に誠心には是の義を聽受し、既に聽受し已りて、轉じて人の爲に説くべし。善男子、我是の如きの業を修習するを以ての故に、阿耨多羅

三藐三菩提を得。今復人の爲に廣く是の義を説く。善男子、譬へば王子

【三】 次に自謙の文。其中初めに所問横懸及ばざるを諱す。

【四】 次に開法の頂戴増加を誓ふ。

【五】 次に答問。其の中、初に次第に三十四問を答ふるの文の中、初に十二品十五問を答ふる。其中先づ長壽の因果を答ふる。之に二段あり、初に長壽の因を答ふる中、初に聽を謙むるの文。

【六】 次に正しく答ふ。これに三雙あり。初に果人因人を指して以て業を標す。

【七】 次に果法因法を指して業を勸む。

【八】 次に自行化他を明して業を證す。

【九】 次に開會合誓を以て業を況す。

の罪を犯して獄に繋がれんに、王甚た子を憐憫、愛念するが故に、躬自ら駕を回らして其の繋所に至るが如し。(四六)菩薩も亦爾なり。長壽を得んと欲せば、應當に一切衆生を護念して子想を同じうし、

聖 大慈、大悲、大喜、大捨を生じ、不殺戒を授け、善法を教修すべし。亦當に、一切衆生を

(四六) 五戒、十善に安止し、亦地獄、餓鬼、畜生、

阿脩羅等の一切諸趣に入りて、是の中の苦惱の衆生を拔濟し、未脱の者を脱し、未度の者を度

し、未涅槃の者に涅槃を得しめ、一切の諸の恐怖の者を安慰すべし。是く如き等の業因縁を

以ての故に、菩薩則ち壽命長遠を得、諸の智慧に於て自在を得、壽終る所に隨ひて天上に生

す。(五一) 爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の等しく衆生を視たまふ

こと、一子の想に同じ。是の義 深隱にして、我未だ解すること能はず。世尊、如來の説きたまひし菩薩諸の衆生に於て平等心を修し、子想を同じうすと言ふは應せず。所以は何ん。佛法の中に於て

【四六】 菩薩も亦。以下の文に一

子地、四無量心、四弘誓願の三法を擧げて合法す。

【四七】 大慈大悲、大喜大捨。これ所謂四無量(Chetvāriḥspreṣā)なり、即ち

一、大慈 Mahā-mītrīya

二、大悲 Mahā-karūṇā

三、大喜 Mahā-muditā

四、大捨 Mahā-ūpekṣā

之を又た四無量觀、四無量定、四等定、四梵行等ともいふ。

【四八】 五戒、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五惡を戒むる律法

道德にして、有佛無佛、佛説不説に拘らず人倫必守の徳目

として重要視せらる。

【四九】 十善。十惡に對す、殺生偷盜、邪淫(身三)、妄語、兩舌惡口、綺語(口四)、貪欲、瞋

恚、愚癡(意三)を十惡と云ひ、之に反するを十善と云ふ。

十善は苦報の業因なり、十善は樂果善趣の業因なり。十善業、十善道等の異稱あり、戒律としては十善戒と名く。

【五〇】 次に華報果報を示して業を結す。

【五一】 次に論義。其中四番の問答あり、初に初番の問答。

【五二】 深隱。一子想たる同體大悲の長壽業たる所以の幽微不可思議なるを云ふ。



こと羅睺羅の如し。善男子、譬へば國王の、諸の羣臣等の王法を犯す有らば、罪に隨ひて誅戮して捨  
 置せざるが如し。如來世尊は是の如くならず。毀法の者に於て 驅遣羯磨、訶責羯磨、置羯磨、  
 罪羯磨、不可見羯磨、滅羯磨、未捨惡見羯磨を與ふ。善男子、如來、法を謗する者の與に是の如き等の  
 降伏羯磨を作す所以は、諸の行惡の人(苦惱の)  
 果報有ることを示さんと欲するが爲の故なり。  
 善男子、汝今當に知るべし。如來は即ち是れ惡  
 の衆生に恐懼無からんことを施す者にして若は  
 一光、若は二(光)、若は五(光)を放つに、或は  
 遇ふこと有らん者は、悉く一切の諸惡を遠離せ  
 しむ。如來は今具きには是の如きの無量の勢力有  
 り。善男子未だ見るべからざるの法を汝見んと  
 欲せば、今當に汝が爲に其の相貌を説くべし。我  
 涅槃の後其の方面に隨ひて持戒の比丘ありて威  
 儀具足し正法を護持し、(正)法を(破)壞する者を見て即ち能く驅遣訶責糾治するあらば、當に知るべし  
 是人福を得ると無量にして稱計すべからず。善男子譬へば王有り専ら暴惡を行し、會重病に遇ふと有

【六】 驅遣羯磨等々の文に七羯磨あり。安註曰く、この中前四は  
 律文の所謂四羯磨にして後三は三菩薩なり。三菩薩は僧衆の中  
 より擯出せられ、四羯磨は衆外に出ざるに及ばずと雖も羯磨の  
 主體に十四知事たることを得ず。今共に羯磨と通稱すれども自ら  
 輕重の別あり。羯磨は梵語 Ananda の音譯、業、事、作法、辦事  
 等の譯あり。

今文七羯磨

- 一、驅遣羯磨
- 二、訶責羯磨
- 三、置羯磨
- 四、罪羯磨
- 五、不可見羯磨
- 六、滅羯磨
- 七、未捨惡見羯磨

らん。隣國の王有り、其名聲を聞きて兵を興して來り、將に之を滅せんと欲す。是の時病王勢力無きが故に、方に乃ち恐怖して心を改め善を修す。而も是の隣王福を得ること無量なるが如し。持法の比丘も亦復是の如し。壞法の人を驅遣訶責して善法を行せしめば、福を得ること無量なり。善男子、譬へば長者所居の處は、田宅、屋舎に諸の毒樹を生ず。長者知り已りて即便斫伐して悉く永く盡さしむるが如し。又少壯の首に白髮を生ずれば、愧ぢて剪抜して生長せしめざるが如し。持法の比丘も亦復是の如し。戒を破して正法を壞する者有るを見れば、即ち驅遣、訶責、舉處すべし、若善比丘、壞法の者を見て、置きて驅遣、訶責、舉處せずば、當に知るべし。是の人佛法中の怨なり。若能く驅遣、訶責、舉處せば、是我が弟子、眞の聲聞なり。』

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、佛の言ふ所の如きは、則ち等しく一切衆生を視たまふこと、子想を同じうして羅曱羅の如くしたまはす。世尊、若し一人有りて、刀を以て佛を害したてたまつらん。復一人有りて、梅檀を佛に塗りたてまつらん。佛二人に於て、若等心を生ぜば、云何ぞ復當に毀禁を治すべしと言はん。若毀禁を治せば是の言則ち失せん。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、譬へば國王、大臣、宰相の諸子を産育せんに、顏貌端正、聰明黠慧、若は二三四、將ゐて嚴師に付し、是の言を作さ

【六二】次に三番の間答。  
 【六三】國王大臣は、佛菩薩を喻へ、諸子は信を生ずる者種種なるを喻へ、顏貌端正は戒徳、聰明黠慧は定慧二徳を喻ふ。

【六四】若は二三四、多解あり一に曰く二乘、三根、四部と。安註に、生信不同、略して四あり、嚴道別開是なり、今の二三四を云ふ。四教各當分の三學あり、故にまた各各、嚴正、黠慧等の徳あることを得べし。

【六五】嚴師。安註に云く不嚴師は前三教、嚴師に圓法と。

【六六】國王、大臣、宰相の諸子を産育せんに、顏貌端正、聰明黠慧、若は二三四、將ゐて嚴師に付し、是の言を作さ

く、君、我が爲に諸子を教詔して、威儀、禮節、技藝、書數、悉く成就せしむべし。我が今の四子、君に就いて受學す。假使三子、突杖に由りて死して、餘の一子有るも、必ず當に苦治して要す成就せしむべし。三子を喪ふと雖も、我終に恨みず。迦葉、是の父及び師、殺罪を得るや不や。」「不なり世尊、何を以ての故に。愛念を以ての故に。成就を欲するが爲にして、惡心有ること無し。是の如きの教誨、福を得ること無量なり。」「善男子、如來も亦爾なり。壞法の者を觀ること、等しうして一子の如し。如來今、無上の正法を以て、諸王、大臣、宰相、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に付屬す。是の諸の國王及び四部衆、應當に諸の學人等を勸勵して戒、定、智慧を増上することを得しむ。若是の三品法を學ばず、懈怠破戒して正法を毀る者有らば、國王、大臣、四部の衆、應當に苦治すべし。善男子、是の諸の國王及び四部衆、當に罪有るべきや、否や。」「不なり世尊。」「善男子、是の諸の國王及び四部衆、尙罪有ること無し。何に況んや如來をや。善男子、如來善く是の如きの平等を修し、諸の衆生に於て一子想を同じうす。是の如く修する者、是を菩薩平等心を修し、諸の衆生に於て一子想を同じうすと名く。善男子、菩薩是の如く此の業を修習すれば、便ち長壽を得、亦能善く宿世の事を知る。」「迦葉菩薩、復歸に白して言さく、世尊、佛の説きたまふ所の如く、菩薩若平等心を修し、諸の衆生を觀ること子想を同じうする有らば、便ち長壽を得とは、如來、是の

【六五】 威儀等。禮儀禮節は戒學を、技藝は定學を、書數は慧學を指す。  
 【六六】 杖に由りては智杖によりて三教の偏を破するを云ふ。  
 【六七】 一子は圓教を指す。  
 【六八】 次に四番の問答。

如きの言を作したまふべからず。何を以ての故に。知法の人の如き、能く種種の孝順の法を説く。家中に還り至れば、諸の瓦石を以て父母を打擲す。是父母は是良福田なり利益する所多し。遭ひ難く遇ひ難し。好く供養すべきに、反つて惱害を生ず。是の知法の人行相違す。如來の言ふ所も亦復是の如し。菩薩、等心を衆生に修習して、子想を同じうせば長壽を得、善く宿命を知り、常に世に住して變易有ること無かるべし。今者世尊、何の因縁を以て、壽命の極短なる人間に同じき耶。如來將諸の衆生に於て、怨憎想を生ずること無きや。世尊、昔日何の惡業を作す。害する所幾如にして是の短壽を得て、百年を滿たざるや。佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、汝今、何に緣りてか如來の前に於て、是の廳言を發す。如來の長壽は、諸壽の中に於て最上最勝なり。所得の常法は、諸常の中に於て、最も第一と爲す。』(六九) 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、云何が如來、壽無量を得たまふ。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、(七〇) 八大河の如き、一つには恆河と名け、二つには閻摩羅(河)と名け、三つには薩羅(河)と名け、四つには阿夷羅跋提(河)と名け、五つには摩訶(河)と名け、六つには

【六九】 諸常の中に於て。諸常とは安註に云く、世間相續不斷常、數緣常(煩惱を斷じて得るところ)、非數緣常(事緣差ふに依て生ずるもの)及び虛空常(後の三を三無爲常と名く)等を云ふ、今如來常は永く是等諸常に勝る、而してこの如來常また四教の別あり。

【七〇】 次に長壽の果を答ふ。其中初に佛寶常を明す中、先づ略して問答す。

【七〇】 八大河とは、  
 一、恆河 Ganga  
 二、閻摩羅河 Yamuna  
 三、薩羅河 Saravati  
 四、阿夷羅跋提 Himavati  
 五、摩訶河 Mahi  
 六、辛頭河 Sindhu  
 七、博叉河 Pushpa  
 八、悉陀河 Sitata  
 是れ諸壽の常壽に入るを譬ふ。



幸頭(河)と名け、七つには博父(河)と名け、八つには悉陀(河)と名く。是の八大河及び諸の小河は、悉く大海に入る。迦葉、是の如く一切人中天上、地及び虚空の壽命大河、悉く如來壽命海の中に入る。是の故に如來壽命無量なり。復次に迦葉、譬へば阿耨達池の四大河を出す如し。如來も亦爾なり。一切の命を出したまふ。迦葉、譬へば一切の諸の常法の中に虚空第一なるが如し。如來も亦爾なり。諸常の中に於て、最も第一と爲す。迦葉、譬へば諸藥に、醍醐第一なるが如し。如來も亦爾なり。衆生の中に於て壽命第一なり。迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來の壽命若是の如くならば、住すること一劫若は滅一劫して、常に妙法を宣ぶること大雨を澍ぐが如くなるべし。迦葉、汝今如來の所に於て、滅盡の想を生ずべからず。迦葉、若今比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、乃至外道の五通神仙の自在を得る者有り。若は住すること一劫、若は滅一劫、空中に經行し、坐臥自在なり。左脅に火を出し、右脅に水を出す。身煙燄を出すこと、猶如火聚の如し。若壽を住めんと欲せば能く意の如くなることを得。壽命の中に於て脩短自在なり。是の如きの五通、尙是の如きの隨意神力を得。豈況んや如來、一切法に於て自在力を得て、當に壽に住むること半劫、若は一劫、若は百劫、若は百千劫、若は無量劫なること能はざるべきや。是の義を以ての故に、當に知るべし、如來は是常住法、不變易法なり。如來の此の身は是變化身にして、雜食身に非ず。衆生を度するが爲に毒樹を示

【七】 四大河、當壽の諸壽を出すに譬ふ。

【七】 次に論義、この中に三節あり。

同したまふ。是の故に捨てて涅槃に入るを現す。迦葉、當に知るべし、佛は是常法、不變易法なり。汝等是の第一義の中に於て勤めて精進し、一心に修習し、既に修習し已りて、廣く人の爲に説くべし。」

三七三

爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、出世の法は世間法と何の差別有りや。佛の言ふ所の、佛は是常法、不變易法の如くば、世間も亦梵天是常、自在天(是常、變易有ること無し。我が常性も常、微塵も亦常と説けり。若如来是常法と言はば、如来、何が故ぞ常に現じたまはざるや。若常現したまはずは何の差別か有らん。何を以ての故に。梵天乃至微塵世性も亦現せざるが故なり。』

佛、迦葉に告げたまはく、『譬へば長者に多くの諸牛有りて、色種種なりと  
【七】 爾の時に、この文世性を問ふ。

雖も同じく共に一羣たり。放牧人に付して水草を逐はしむ。唯醍醐の爲に  
して乳酪を求めず。彼の牧牛者、轂り已りて自ら食す。長者命終して有らゆる諸牛、悉く羣賊に鈔

掠せらる。牛を得已りて婦女有ること無ければ、即ち自ら轂捋し、得已りて食す。爾の時に羣賊各  
相謂つて言はく、『彼の大長者、此の牛を畜養し、乳酪を求めず、唯醍醐の爲にす。我等今者當に何の

方を設けて之を得べきや。夫醍醐とは名けて世間第一の上味と爲す。我等器無し、設使乳を得とも安  
置の處無し。』復共に相謂へらく、『唯皮囊のみ有り、以て之を盛るべし。盛る處有りとも雖も、鑽搖を知

らず。漿猶得難し、況んや復生酥をや。』爾の時に諸賊、醍醐を以ての故に之に加ふるに水を以てす。

水多きを以ての故に、乳酪、醍醐一切俱に失ふが如し。凡夫も亦爾なり。善法有りと雖も、皆是如来

正法の餘なり。何を以ての故に。如來世尊涅槃に入り、後如來遺餘の善法、若し戒、定、慧を盜竊す。彼の諸賊、羣牛を劫掠するが如し。諸の凡夫人、復是の戒、定、智慧を得と雖も、方便有ること無く、解脫すること能はず。是の義を以ての故に、常に戒、定、慧、常に慧解脫を獲得すること能はず。彼の羣賊方便を知らず、醍醐を亡失するが如く、又羣賊醍醐の爲の故に、之に加ふるに水を以てするが如し。凡夫も亦爾なり。解脫の爲の故に、我衆生壽命士夫、梵天自在天微塵世性、戒定智慧及び解脫、非想非非想天即ち是涅槃なりと説く。實は亦解脫涅槃を得ず。彼の羣賊醍醐を得ざるが如く、是の諸の凡夫、少梵行父母を供養する有り。是の因縁を以て天上に生じて、少安樂を受くることを得。彼の羣賊の加水の乳の如し。而も是の凡夫、實は少梵行を修し、父母を供養するに因りて、天上に生ずることを得ることを知らず。又戒、定、智慧、歸依三寶を知ること能はず。知らざるを以ての故に常、樂、我、淨と説く。復之を説くと雖も、而も實は知らず。是の故に如來、出世の後、乃ち爲に常、樂、我、淨を演説す。轉輪王世に出現す。福德力の故に羣賊退散し、牛に損命無し。時に轉輪王、即ち諸牛を以て一の牧人の巧便多き者に付す。是の人方便して即ち醍醐を得。醍醐を以ての故に、一切衆生患苦有ること無きが如し。法輪聖王世に出現するの時、諸の凡夫人、戒、定、慧を演説すること能はざれば、即便棄捨す。賊の退散するが如し。爾の時に如來、善く世法及び出世法を説く。衆生の爲の故に、諸の菩薩をして、宜しきに隨ひて演説せしむ。菩薩摩訶薩、既に醍醐を得、復無量無邊の衆

住をして、普く無上甘露の法味を得。所謂如來の常、樂、我、淨なる是の義を以ての故なり。善男子、  
 如來は是常不變易法なり。世間の凡夫愚人の梵天等は是常法と謂ふが如きに非ざるなり。此の常法の  
 稱、要ず是如來は是餘法に非ず。迦葉、應當に是の如く如來身を知るべし。迦葉、諸の善男子、善女  
 人、常に當に心を繫けて此の二字佛は是常住を修すべし。迦葉、若善男子、善女人此の二字を修する  
 有らば、當に知るべし、是の人は我が所行に隨ひ我が至處に至る。善男子、若是の如きの二字を修習  
 して、滅相と爲す者有らば、當に知るべし、如來は則ち其の人に於て、爲に般涅槃したまふ。善男子、  
 涅槃の義は、即ち是諸佛の法性なり。〔七四〕迦葉菩薩、佛に白して言さく、世  
 尊、佛の法性とは其の義云何。世尊、我今法性の義を知らんと欲す。唯願  
 はくは如來、哀憫して廣く説きたまへ。夫法性とは、即ち是捨身なり。捨  
 身とは無所有と名く。若無所有ならば、身、云何が存せん。身、若存せば、云何ぞ身、法性有りと  
 言はん。身、法性有らば、云何が存することを得ん。我今、云何が當に是の義を知るべき。佛、迦葉に  
 告げたまはく、善男子、汝今是の如く滅は是法性と説くことを作すべからず。夫法性は滅有ること  
 無きなり。善男子、譬へば無想天の、色陰を成就して、而も色想無きが如し。問ひて「是の諸天等、  
 云何が住し、歡娛受樂し、云何が想を行じ、云何が見聞す」と云ふ。善男子、如來の境界は、諸の聲  
 聞、緣覺の知る所に非ず。善男子、説きて「如來の身は是滅法なり」と言ふべからず。善男子、如來

【七四】 迦葉菩薩等。この一段は  
 法性を問答す。その中に四節  
 あげ。

滅法、是佛の境界なり、諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、汝今、如來何の處に住し、何の處に行じ、何の處に見、何の處に樂むと思ふべからず。善男子、是の如きの義も亦、汝等が知り及ぶ所に非ず。諸佛の法身、種種の方便は思議すべからず。

復次に善男子、應當に佛法及び僧を修習して、常想を作すべし。是の三法は異相有ること無し。無常相無く、變異相無し。若三法に於て異相を修する者は、當に知るべし。是の輩は清淨の三歸、則ち依處無し。有らゆる禁戒皆具足せず。終に聲聞、緣覺の菩提の果を證すること能はず。若能く是の不可思議に於て常想を修する者は、則ち歸處有り。善男子、譬へば樹に因りて則ち樹影有るが如し。如來も亦爾なり。常法有るが故に、則ち歸依有り。は無常に非ず。若如來はは無常なりと言はば、如來は則ち諸天世人に歸依せらるる處に非ず。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、譬へば闇中に樹有りて影無きが如し。』迦葉、汝樹有りて影無しと言ふべからず。肉眼の見る所に非ざるのみ。善男子、如來も亦爾なり。其の性常佳、是不變異なり。智慧眼無ければ見るを得る能はず。彼の闇中に樹影を見ざるが如し。凡夫の人、佛の滅後に於て、説きて「如來は無常法なり」と言ふも亦復是の如し。若如來は法僧に異ると言はば、則ち三歸依處を成すること能はず。汝が父母の、各各異なるが故に、故に無常ならしむるが如し。」

【七五】次に三寶常を明す。其中初に三寶常  
【七六】次に論義。この中に問答と頌讀との二段あり。

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、我今より始めて、當に佛、法、衆僧の三事常住を以て、父母を啓悟し、乃至七世皆奉持せしむべし。甚だ奇なり世尊、我今當に、如來法僧不可思議を學すべし。既に自ら學し已りて、亦當に人の爲に廣く是の義を説くべし。若諸人の能く信受せざる有らば、當に知るべし、是の輩は久しく無常を修す。是の如き等の人には、我當に之が爲に霜雹を作るべし。」

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚すらく、「善い哉善い哉、汝今善能く正法を護持す。是の如きの護法、人を欺かず。人を欺かざるの善業縁を以ての故に長壽を得、善く宿命を知る。」

# 金剛身品第五

爾の時に世尊、復迦葉に告げたまはく、『善男子、如來身とは是常住身、不可壞身、金剛身、非雜食身、即ち是法身なり。』迦葉、佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如く、是の如き等の身我悉く見ず。唯無常(身)、破壞(身)、塵土(身)、雜食(身)等の身を見る。何を以ての故に。如來、今當に涅槃に入りたまふべきが故なり。』

佛迦葉に告げたまはく、『汝今、如來の身不堅可壞凡人の身の如しと謂ふと莫れ。』善男子、汝今當に知るべし、如來の身、無量億劫堅牢にして壞し難し。人天身に非ず、恐怖身に非ず、雜食身に非ず。如來の身は非身是身、不生不滅、不習不修、無量無邊、足迹有ること無し。無知無形、畢竟清淨、動搖有ること無し。無受無行、不住不作、無味無雜、是有爲に非ず。非業非果、非行非滅、非心非數、不可思議、常不可議、無識離心にして、亦心を離れず。其の心平等、無有亦有、去

- 【一】 是より金剛不壞の間に答ふ。其中初に法身の果を明し金剛の間に答ふ。而して先づ法身を明す。
- 【二】 次に論義。其の中、初に問の文。之に問、釋の二段あり。
- 【三】 次に答の文。之に、其初問を非すると、正答と、結勸との三段あり。正答の文中百非を具す、この百非單に數ふれば百六十句あり、若し複に
- 【四】 善男子。已下正答の文なり、大分三番あり。初番に三句、第二番に八十句、第三番に十七句あり。初番三句は人天身に非ざるを明す。
- 【五】 如來の身は。已下第二番の文、この中八十句通じて非身是身を明す。

來有ること無し。而も亦去來、不破不壞、不斷不絶、不出不滅、非主亦主、非有非無、非覺非觀、非字非不字、非定非不定、不可見了了見、無處亦處、無宅亦宅、無闇無明、寂靜有ること無し。而も亦寂靜、是無所有、不受不施、清淨無垢、無爭斷爭、住無住處、不取不墮、非法非非法、非福田非非福田、無盡不盡、離一切盡、是空離空、常住ならずと雖も、念念滅に非ず、垢濁有ること無し。無字離字、非聲非說、亦修習に非ず。非稱非量、非一非異、非像非相、諸相莊嚴、非勇非畏、無寂不寂、無熱不熱、視見すべからず。相貌有ること無し、如來一切衆生を度脱す。度脱無きが故に能く衆生を解す。解有ること無きが故に衆生を覺了す。覺了無きが故に實の如くに法を説く。二有ること無きが故に、不可量、無等等、平かなること虚空の如くにして、形貌有ること無し。衆生の性に同じく、不斷不常、常に一乘を行す。衆生三を見、不退不轉、一切の結を斷す。不戰不觸、非性住性、非合非散、非長非短、非圓非方、非陰入界、亦陰入界、非増非損、非勝非負、如來の身是の如きの無量の功德を成就す。知者有ること無く、不知者無く、見者有ること無く、不見者無し。爲有るに非ず、爲無きに非ず。非世非不世、非作非不作、非依非不依、非四大非不四大、非因非不因、非衆生非不衆生、非沙門、非婆羅門、是師子、大師子、非身非不身、宣說すべからず。一法相を除き、算數すべからず。般涅槃の時般涅槃せず。如來法身、皆悉く是の如きの無量の微妙功德を成就す。迦葉、

【六】知者有ること無く。是れ即ち第三番の文。この中に十七句あり、無有知者、無不知者を明す。



唯如來のみ有りて、乃ち是の相を知る。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。迦葉、是の如きの功德如來身を成ず。是雜食長養する所の身に非ず。迦葉、如來眞身功德是の如し。云何ぞ復諸疾、患苦、危脆、不堅坏器の如くなるを得んや。迦葉、如來病苦を示す所以は、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故なり。善男子、汝今當に知るべし、如來の身即ち金剛身なり。汝今日より、常に當に専心に此の義を思惟すべし。食身を念ずること莫れ。亦當に人の爲に、如來身即ち口是法身と説け。』

七 迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來是の如きの功德を成就したまふ。其の身云何ぞ當に病苦、無常、破壊有るべき。我今日より、常に當に如來の身、是常法身、安樂身なるを思惟すべし。亦當に人の爲に是の如く廣く説くべし。』  
雖然なり世尊、如來の法身は金剛不壞なり。而も未だ所因云何を知ると能はず。』佛、迦葉に告げたまはく、『能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得。迦葉、我往昔に於て法を護るの因縁、今是の金剛身常住不壞を成就することを得。』  
善男子、正法を護持する者は五戒を受けず、威儀を修せず、刀劍、弓箭、矛槊を持たて、威清淨の比丘を守護すべし。迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若比丘有りて守護を離れ、獨空閑塚間、樹下に處らば、當に是の入眞の比丘爲すと説くべし。』

【七】次に領解の文。  
【八】是より法身の圓を明し堅固力の間に答ふ。兼中初に疑の文。  
【九】次に佛答。其中初に正答を明し、先づ略答を示す。之に護法、引證あり。  
【一〇】次に廣答の文。其中、初に廣く護法を明す之に在家、出家あり。

若守護に隨逐する行者有らば、當に知るべし、是の輩は是禿居士なり。佛、迦葉に告げたまはく、  
 『是の語を作して禿居士と言ふこと莫れ。若比丘有りて、所至の處に隨ひて供身取足り、經典を讀誦し思惟坐禪す。來りて法を問ふもの有らば、即ち爲に宣說す。所謂布施、持戒、福德、少欲、知足、能く是の如き種種の法を説くと雖も、然も故師子吼を作すこと能はず。師子に圍繞せられず。非法の惡人を降伏すること能はず。是の如きの比丘、自ら利し、及び衆生を利すること能はず。當に知るべし、是の輩懈怠懶惰、能く持戒し淨行を守護すと雖も、當に知るべし、是の人は能く爲す所無し。若比丘有りて、供身の具、亦常に豐足す。復能く所受の禁戒を護持し、師子吼を能くして廣く妙法を説く。修多羅、祇夜、受記、伽陀、優陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毗佛略、阿浮陀達磨を謂ふ。』  
 是の如き等の 九部の經典を以て、他の爲に廣く説く諸の衆生を利益し安樂にするが故に、是の如きの言を唱ふ。『涅槃經の中諸の比丘を制す、奴婢、牛羊、非法の物を畜養すべからず。若比丘、是の如き等の不淨の物を畜ふる有らば、應當に之を治すべし。如來先に異部經の中に於て、比丘是の如き等の非法の物を畜ふる有らば、某甲國王、法の如く之を治す。驅つて俗に還らしめよ』と説く。若比丘有りて、能く是の如き師子吼を作す時、破戒の者有りて、是の語を聞き已りて、威く共に瞋怒して是の法師を害せん。是の説法は、設復命終すとも、故持戒自利人と名く。是の縁を以ての故に、我國主、

【二】修多羅。是れ九部經の名を列す、前既に十二部經を示す、准知すべし。

【三】九部の經典。新譯には九分教と云ふ。

鞏臣、宰相、優婆塞等説法の人を護ることを聽す。若正法を護ることを得んと欲する者有らば、當に是の如く學すべし。迦葉、是の如くに破戒にして、法を護らざる者を禿居士と名く。持戒者は是の如きの名を得るに非ず。(三)善男子、過去久遠無量無邊阿僧祇劫に、此の拘尸城に於て佛有りて出世す。歡喜增益如來、應供、正徧知、明行、足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。爾の時に世界、廣博嚴淨、豐樂安隱、人民熾盛にして饑渴有ること無し。安樂國の諸の菩薩等の如く、彼の佛世尊、世に住すると無量、衆生を化し已りて、然して後乃娑羅雙樹に於て般涅槃に入る。佛涅槃の後、遺法世に住すること無量億歳、餘四十年佛法未だ滅せず。爾の時に一りの持戒の比丘有り、名を覺徳と曰ふ。多くの徒衆有りて眷屬圍繞す。能く師子吼して九部の經典を班宣廣説す。諸の比丘を制して「奴婢、牛羊、非法の物を畜養するを得ざれ。」爾の時に多く破戒の比丘有り。是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ、刀杖を執持して是の法師に逼る。是の時、國王名を有徳と曰ふ。是の事を聞き已りて護法の爲の故に卽便説法者の所に往至して、是の破戒の諸の惡比丘と共に戰鬥を極めて、説法者をして危害を免ることを得しむ。王、時に劍を被りて舉身周圍す。爾の時に覺徳、尋いで王を讚じて言はく「善哉善哉、王は、今眞に是正法を護る者、當來の世、此の身當に無量の法器と爲るべし。」王、是の時に於て法を聞くことを得已りて、心大りに歡喜す。尋いで卽ち命終して(四)阿閼佛國に生じ、彼の佛の爲に第一の弟

【三】次に廣く引證す。之に護法本義、護法正行、護法果報、結會古今の四段あり。

子と作る。其の王の將を從へる人民、眷屬、戰鬪の者有り、隨喜の者有りて一切菩提の心を退かず。命終して悉く阿闍佛國に生ず。覺德比丘、卻後壽終りて亦阿闍佛國に往生することを得て、彼の佛の爲に聲聞衆中の第二の弟子と作る。若正法滅盡せんと欲する時有らば、應當に是の如く受持擁護すべし。迦葉、爾の時の王とは則ち我が身是なり、説法比丘は迦葉佛是なり。迦葉、正法を護る者は、是の如き等の無量の果報を得。是の因縁を以て、我今日に於て、種種の相以て自ら莊嚴し、法身不可壞身を成就することを得。」

【五】 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、如來常身猶し石に畫くが如し。」

佛、迦葉に告げたまはく、「善男子、是の因縁を以ての故に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、應當に勤加して正法を護持すべし。護法の果報廣大無量なり。善男子、是の故に護法の優婆塞等、刀杖を執りて是の如きの持法比丘を擁護すべし。若五戒を受持し具する者有るも、名けて大乘の人と爲すことを得ざるなり。五戒を受けざるも爲に正法を護る者は乃ち大乘と名く。正法を護る者、應當に刀劍器仗を執持して法師を侍衛すべし。」

迦葉、佛に白して言さく、「世尊、若諸の比丘、是の如き等の諸の優婆塞、刀杖を持する者と共に伴侶と爲らば、師(德)有りと爲るや。師(德)無しと爲んや。是持戒と爲ん

- 【四】 阿闍佛國。 Akrobhya  
アツダクシエイトラ  
Indra Kshetraの音寫、阿闍は不動又は無動と譯す。その佛國に東方に在り。
- 【五】 次に領解。
- 【六】 次に勸修の文。其中、初に適じて因果を擧げて以て四衆を勸む。
- 【七】 次に別して在家を勸めて刀杖を執るを闡す。其中、初に勸。
- 【八】 次に簡。其中、初に問の文。之に師の有無、戒の有無を問ふの二段あり。

や。是破戒と爲んや。佛、迦葉に告げたまはく、是等破戒人と爲すと謂ふと莫れ。善男子、我涅槃の後、濁惡の世、國土荒亂し、互に相鈔掠して人民饑餓せん。爾の時に、多く饑餓を爲すの故に發心出家するもの有り。是の如きの人を名けて禿人と爲す。是の禿人の輩、持戒、威儀具足、清淨比丘の正法を護持するもの有るを見て、驅逐して出さしめ、若は殺し若は害す。迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、是の持戒の人の正法を護る者、云何が當に村落、城邑に遊行して教化することを得べき。」善男子、是の故に我今持戒の人、諸の白衣の刀杖を持する者に依りて、以て伴侶と爲すことを聽す。若諸の國主、大臣、長者、優婆塞等、護法の爲の故に刀杖を持すと雖も、我説きて是等を名けて持戒と爲す。刀杖を持すと雖も、命を斷すべからず。若能く是の如きは、即ち名けて第一持戒と爲すことを得。迦葉言さく、「夫護法の者は、

謂はく正見を具し、能く廣く大乘經典を宣説す。終に王者の寶蓋、油餅、穀米、種種の果菜を捉持せず。利養の爲に國王、大臣、長者に親近せず。諸の檀越に於て心諂曲無く、威儀を具足し、破戒、諸の惡人等を摧伏す。是を持戒護法の師と名く。能く衆生の眞善知識と爲る。其の心弘廣、誓へば大海の如し。」「迦葉、若比丘有りて、利養を以ての故に、他の爲に法を説く。是の人所有の徒衆眷屬、亦是の師に效ひて利養を貪求す。是の人、是の如く便ち自ら衆を壞す。迦葉、衆に三種有り。一つには犯戒雜僧、二つには愚癡僧、三つには清淨僧なり。破戒雜僧は則ち壞すべきこと易く、持戒淨僧

【一九】次に答り、其中初に正答。之に戒の有無、師の有無を答ふるの二段あり。

は利養の因縁、壞すること能はざる所。云何が破戒雜僧といふ。若比丘有りて、

爲すの故に、破戒の者と坐起行來し、共に相親附し、其の事業を同じうす。

是を破戒と名け、亦雜僧と名く。云何が愚癡僧といふ。若比丘有りて、阿

蘭若處に在り、諸根不利、闇鈍、藝管、少欲、乞食、說戒の日及び自恣の日に於

て、諸の弟子に清淨、懺悔を教へ、非弟子の多く禁戒を犯すを見て、教へて

清淨懺悔せしむること能はず。而も便ち與共に說戒自恣す。是を愚癡僧と名

く。云何が清淨僧と名くる。比丘僧有りて、百千億の魔の壞すること能

はざる所なり。是菩薩衆本性清淨、能く上の如きの二部の衆を調へて、

悉く清淨衆の中に安住せしむ。是を護法無上の大師と名く。善持律

の者、調伏して衆生を利せんと欲するが爲の故に、諸の戒相、若は輕、若

は重を知る。是律に非ざる者は、則ち證知せず。若是律なる者は、則便證知

す。云何が衆生を調ふるが故にす。若諸の菩薩、衆生を化せんが爲に、

常に聚落に入りて時節を擇ばず。或は寡婦、及び淫女の舍に至り、與に同

じく住止して多年を経歴す。若是聲聞は爲すべからざる所、是を調伏利益

衆生と名く。云何が知重なる。若如來、事に因りて制戒するを見、汝今日より、慎んで更に犯すこと

【三】阿蘭若。阿蘭若とも書す。閑靜處、遠離處等の譯あり、寺院の通稱。人家を遠く離れ閑靜にして修道に宜しき處たる意。

【三】善持律の者。この一段の文は廣く持律の能く前二を壞することを明す。文中五法あり、一調伏衆生、二知輕、三知重、四是律應證、五非律不證是れなり。律に六種の五法あり、一學人の五法(信、戒、定、慧、多聞)、二無學人の五法(五分法身)、三神解の五法、四畜弟子の五法(十夏、持戒、多聞、能除憂悔、能除惡邪)、五調壽の五法、六事用の五法是れなり、今の五法は其第三種神解の五法なるものなり。

慎んで更に犯すこと

莫れ。(三三) 四重禁の如きは、出家の人の作すべからざる所。而るを故らに作すは、是沙門に非ず。釋種子

に非ず。是を名けて重と爲す。云何が輕と爲す。若輕事を犯すに是の如く三たび諫むるに、若能く捨

つる者は、是を名けて輕と爲す。非律不證とは、若不清淨物受用すべしと讀說する者有らば、共に同

止せず。是律應證とは善く戒律を學び、破戒に近かず、所行戒律に隨順す

る有るを見て、心に歡喜を生ず。是の如く能く佛法の所作を知りて、善能く

解説す。是を律師、善く、(三三) 一字を解すと名く。善く契經を持するも、

亦復是の如く是の如し。(三三) 善男子、佛法無量思議すべからず。如來も亦爾

なり、不可思議なり。(三三) 迦葉菩薩、佛に白して言さく、一世尊、是の如く是

の如し。藏に聖言の如し。佛法無量思議すべからず。如來も亦爾なり。不

可思議なり。故に知りぬ。如來常住不壞にして變異有ること無し。我今善

學し、亦當に人の爲に廣く是の義を宣ふべし。

(三三) 爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、善い哉善い哉、如來身は即ち

是金剛不可壞身なり。菩薩、應當に是の如く善く正見、正知を學す。若能く是の如く了了知覺すれ

ば、即ち是佛の金剛の身、不可壞身を見ること、鏡中に於て諸の色像を見るが如し。

【三】 四重禁、殺生、偷盜、邪淫、妄語の四罪を特に四重禁と云ふ。

【三三】 一字を解す。一字とは律の一字なり。

【三三】 善く契經を持するも。前の善持律に準じ、五事あり、

一隨時教化、二知有餘、三知無盡、四專斷不濫、五是深應證是れなり。

【三三】 次に讚歎。

【三三】 次に讚歎。

【三三】 次に讚歎。

名字功德品第六

爾の時に如來、復迦葉に告げたまはく、『善男子、汝今應當に善く是の經の文字、章句、所有の功德を

持すべし。若善男子、善女人有りて、是の經名を聞きて四趣に生せば、是の處有ること無し。何を以て

の故に。是の如きの經典、乃至無量無邊の諸佛の

修習する所の所得の功德、我今當に説くべし。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、當に

何んが此の經を名づくべき。菩薩摩訶薩、云

何が奉持せん。』佛、迦葉に告げたまはく、『是

の經を名づけて、大般涅槃と爲す。上語も亦

善、中語も亦善、下語も亦善なり。義味深遂に

して、其の文も亦善なり。純備具足、清淨梵行、金剛寶藏滿足無缺なり。汝善く諦らかに聽け。我

今當に説くべし。善男子、言ふ所の大とは、之を名づけて常と爲す。八大河悉く大海に歸するが如

し。此の經は是の如く一切の諸の煩惱結、及び諸の魔性を降伏し、然して後に、大般涅槃を要して身

命を放捨す。是の故に名けて大般涅槃と曰ふ。善男子、又醫師一つの祕方有りて、悉く一切所有の醫

- 【一】 是より究竟彼岸の間に答ふ。其中、初に勸持の文、先づ勸持。
- 【二】 次に受持。
- 【三】 次に問。其中初に名の功德を問ふ。
- 【四】 次に持の功德を問ふ。
- 【五】 次に答。其中初に名を答ふ。之に名を判す、七善、七
- 【六】 譬を明すの三段あり。大般涅槃 (Mahāparinirvāṇa) 大圓寂と譯す。經主世尊の入滅を稱す、今取りて經名と爲す。
- 【七】 上語も亦善。是れ七善の文なり。
- 【八】 善男子言ふ所の。已下の文中七譬あり。



術を攝するが如し。善男子、如來も亦爾なり。所説の種種の妙法、秘密深奥藏門、悉く皆此の大般涅槃に入る。是の故に名けて大般涅槃と爲す。善男子、譬へば農夫春月に種を下し、常に希望有り。既に果實を收むれば、衆望都て息むが如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し。餘經を修學すれば、常に滋味を希ふ。若是の大般涅槃を聞くことを得れば、餘經所有の滋味を希望する、悉く皆永く斷ず。是の大涅槃は能く衆生をして諸の有流を度せしむ。善男子、諸の迹の中、象迹を最と爲すが如し。此の經も是の如し。諸經の三昧に於て最も第一と爲す。善男子、譬へば耕田に秋耕を勝と爲すが如し。如し善く衆生の熱惱亂心を治す、是の大涅槃を最も第一と爲す。善男子、譬へば甜酥の八味具足するが如し。大般涅槃も亦復是の如し、八味具足す。云何が八と爲す。一つには常、二つには恆、三つには安、四つには清涼、五つには不老、六つには不死、七つには無垢、八つには快樂なり、是を八味と爲す。是の八味を具す。是の故に名けて大般涅槃と爲す。若諸の菩薩摩訶薩、是の中に安住し、復能く處處に涅槃を現す。是の故に名けて大般涅槃と爲す。

(九) 迦葉、善男子、善女人、若此の大般涅槃に於て、涅槃せんと欲する者は、當に是の如く如來常住、法僧も亦然るを學すべし。

(一〇) 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「甚奇なり世尊、如來の功德思議すべからず。法僧も亦爾なり

【九】 次に持を答ふ。

【一〇】 次に領解。其中初に名を領す。

【一一】 次に持を領す。

り、不可思議なり。是の大涅槃も亦思議すべからず。(二)若是の經典を修學する者有らば、正法眼を得能く良醫と爲る。若未學者は當に知るべし、是の人盲にして慧眼無く、無明に覆はる。(三)

# 卷の第四

## 四相品第七の上

佛、復迦葉に告げたまはく、善男子、菩薩摩訶薩大般涅槃を分別し開示するに、四相義有り。何等をか四と爲す。一つには自正、二つには正他、三つには能隨問答、四つには善因緣義なり。迦葉、云何が自正なる。若佛、如來諸の因緣を見て説く所有り。譬へば比丘、大火聚を見るが如し。便ち是の言を作さく、「我寧ろ是の火聚の熾然たるを抱くとも、終に敢て如來所説の十二部經、及び祕密に於て、此の經は是魔の所説と言はず。若如來法僧無常と言はば、是の如きの説者自ら侵欺し、亦人を欺くと爲す。寧ろ利刀を以て自ら其の舌を斷つとも、終に説いて如來法僧は無常と言はざるなり。若他説を聞くも亦信受せず。此の説者に於て憐憫を生ずべし。如來法僧思議すべからず。是の如く持すべし。自ら己身を觀するに、猶し火聚の如し。是を自正と名く。迦葉、云何が正他。佛、法を説く時、一

【一】是より開微密の間に答ふるの文。其中、初に日密を開くの文、先づ四相を明す。而して初に一相四相を明す。今は又其中の標。

【二】四相。自行と善解とは自行、正他と答問とは化他、また各相通すと云へども多分に隨ふ。

【三】次に列。

【四】次に釋の文。其中、初に自正を明す。この中また、佛の自正と比丘の自正とあり。

【五】次に正他の文。中に、四段あり、一に歡喜を以て、二に無我を以て、三に常樂を以て、四に第一義を以て他を正す、是れなり。序の如く四悉檀に合す。

りの女人有りて嬰兒を乳養す。佛所に來詣して佛足に稽首し、願念する所有りて心自ら思惟し、  
 便ち一面に坐す。爾の時に世尊、知りて故らに問ひたまはく、「汝愛念を以て、多く兒に酥を含め、消  
 と不消とを籌量することを知らず。」爾の時に女人、即ち佛に白して言さく、「甚だ奇なり世尊、善能く  
 我が心中の所念を知りたまへり。唯願はくは如來、我に多少を教へたまへ。世尊、我今朝に於て多く  
 兒に酥を與ふ、恐らくは消すること能はじ。將壽を夭すること無きや。唯  
 願はくは如來、我が爲に解説したまへ。」佛の言はく、「汝が兒の食する所、  
 尋いで即ち消化して壽命を増益せん。」女人聞き已りて心大いに踊躍す。復  
 是の言を作さく、「如來は實説なり、故に我歡喜す。世尊、是の如く諸の衆  
 生を調伏せんと欲すが爲の故に、善能く分別して消、不消を説きたまひ、  
 亦諸法無我、無常を説きたまふ。若佛世尊、先に常を説くは、受化の徒、  
 當に此の法、彼の外道に同じと言ひて、即便捨て去るべし。」復女人に告げ  
 たまはく、「若兒長大して、能く自ら行來せば、凡そ食喫する所、能く消し  
 難きを消す。本與ふる所の酥は、即ち供足せず。我が所有の聲聞の弟子も亦復是の如し。汝が嬰兒の  
 如く、是の常住の法を消すること能はず。是の故に我、先に苦、無常を説く。若我が聲聞の諸の弟  
 子等、功德已に備へて、大乘經典を修習するに堪忍すれば、我是の經に於て、爲に六味を説く。云

【六】女人は善本の慈に、嬰兒は初信に、乳養は聞法自資に、含酥は讚歎歡喜に譬ふる等知るべし。酥は牛乳の精練したるもの。また曰く、この一段の譬喩に就て古來四説、一にはこれ説法の時の事實と、二には昔事と、三には佛の化女と、四には全然譬喩と、

何が六味なる。昔は酔味、無常は鹹味、無我は苦味を説き、樂を甜味と爲し、我を辛味と爲し、常を淡味と爲す。彼の世間の中に三種の味有り。所謂無常、無我、無樂なり。煩惱を薪と爲し、智慧を火と爲す。是の因縁を以て涅槃の食を成す。常樂我を謂ふ。諸の弟子をして、悉く皆甘嗜ならしむ。復た女人に告げたまはく、「汝若縁有りて他處に至らんと欲せば、惡子を驅つて其の舍を出でしめ、悉く寶藏を以て善子に付示すべし。」女人、佛に白さく、「實に聖教の如く、珍寶の藏善子に示し、惡子に示さざるべし。姉、我も亦是の如し。般涅槃の時、如來微密無上法藏、聲聞の諸の弟子等に與へず、汝が寶藏惡子に示さざるが如く、要らず當に諸の菩薩等に付囑すべし。汝が寶藏を善子に委付するが如し。何を以ての故に。聲聞の弟子、變異想を生じて、佛如來眞實に滅度すと謂ふ。然るに我眞實に滅度せざるなり。汝遠く行きて未だ還らざるの頃、汝の惡子、便ち汝死すと云ふも、汝實は死せざるが如し。諸の菩薩等は説きて如來常に變易せずと云ふ。汝が善子、汝死すと言はざるが如し。是の義を以ての故に、我無上祕密の藏を以て、諸の菩薩に付す。善男子、若衆生の、佛は常住不變異なりと謂ふ者有らば、當に知るべし。是の家は、即ち佛有りて爲す。是を正位と名く。」迦葉、云何が能隨問答なる。若人有りて、來りて佛世尊に問はく、「我當に、云何が錢財を捨てずして、

【七】六味。六味の中前三味は世間の三味、後三味は出世間の三味なり。また、鹹酢等の六味は凡夫の報味、苦無常等の六味は賢聖の道味なり。法喻知るべし。  
 【八】是の家。安註に曰く、佛は是常の義又是覺の義なり。覺は即ち解の義。この人常を解するが故に是の家即ち佛有りて爲すと。  
 【九】次に能隨問答。

しかも名けて大施檀越と爲すことを得べき。佛の言はく、(二〇)若沙門、婆羅門等、少欲知足にして、不淨物を受けず畜へざる者有らんに、當に其の人に、奴婢、僕使を施すべし。梵行を修する者に、女色を施與し、酒肉を斷ずる者に、酒肉を施與し、不過中食に、過中食を施し、不著華香に、華香を施與せん。是の如き施者は、施の名流布し、聲天下に聞えて、未だ曾て己が一毫の費を損せず。是を則ち名けて能隨問答と爲す。」

【一〇】若沙門。文の中五句ありて各兩意あり、一には知らずして施す、彼受けざれば我損する所なくして大施を成す。二には知ると雖も彼の徳を顯さんと欲して施す、我損なし、彼名徳を加ふ、故に大施を成す。

【一一】爾の時に。この文已下斷肉立制の文なり。この中六番の問答あり、今は初番、安註に有師斷肉の十義を出す、有道の士須らく三思すべし。

(一) 昔有佛性盡應作佛也、

(二) 諸佛菩薩變化無方。

【一二】若沙門。文の中五句ありて各兩意あり、一には知らずして施す、彼受けざれば我損する所なくして大施を成す。二には知ると雖も彼の徳を顯さんと欲して施す、我損なし、彼名徳を加ふ、故に大施を成す。

(一) 怨對無窮若損一生二五百生償。

(二) 第二番の問答。

(三) 大慈の種多解あり、一に佛、二に初地、三に性地、四に衆生を大慈と名くと。

【一三】第三番の問答。

(二) 爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、食肉の人に肉を施すべからず。何を以ての故に。我肉を食せざる者を見るに大功徳有り。佛迦葉を讚じたまはく、「善い哉善い哉、汝今乃ち能善く我が意を知る。護法の菩薩應當に是の如くなるべし。善男子、今日より始めて聲聞の弟子に肉を食するを聽さず。若檀越の信施を受くるの時、是の食を觀じて子肉の想の如くすべし。」(二三)迦葉菩薩復佛に白して言さく、「世尊、云何が如來、肉を食するを聽したまはざる。」(二四)善男子、夫肉を食する者は、(二五)大慈の種を斷ず。」(二六)迦葉又言さく、「如來、何

【一〇】若沙門。文の中五句ありて各兩意あり、一には知らずして施す、彼受けざれば我損する所なくして大施を成す。二には知ると雖も彼の徳を顯さんと欲して施す、我損なし、彼名徳を加ふ、故に大施を成す。

【一一】爾の時に。この文已下斷肉立制の文なり。この中六番の問答あり、今は初番、安註に有師斷肉の十義を出す、有道の士須らく三思すべし。

(一) 昔有佛性盡應作佛也、

(二) 諸佛菩薩變化無方。

【一二】若沙門。文の中五句ありて各兩意あり、一には知らずして施す、彼受けざれば我損する所なくして大施を成す。二には知ると雖も彼の徳を顯さんと欲して施す、我損なし、彼名徳を加ふ、故に大施を成す。

(一) 怨對無窮若損一生二五百生償。

(二) 第二番の問答。

(三) 大慈の種多解あり、一に佛、二に初地、三に性地、四に衆生を大慈と名くと。

【一三】第三番の問答。

が故ぞ先に、比丘に三種の淨肉を食することを聽すや。』迦葉、是の三種の淨肉は、事に隨ひて、漸く制す。』(二)迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、何の因縁の故に十種の不淨、乃至九種の清淨、而も復聽さざるや。』佛、迦葉に告げたまはく、『亦是事に因りて漸次にして制す。當に知るべし。即ち是現斷肉の義なり。』(三)迦葉菩薩復佛に白して言さく、『云何ぞ如來、魚肉を稱讚して、美食と爲すや。』善男子、我も亦魚肉の屬を美食と爲すと説かざるなり。我甘藷、秬米、石蜜、一切の穀麥及び黑石、蜜乳、酪酥油を説きて以て美食と爲す。種種の衣服を畜ふべしと説くと雖も、畜ふべき所の者は要す是壞色なり。何に況や是の魚肉の味に貪著せんや。』(四)迦葉、復言さく、『如來、若不食肉を制したまはば、彼の五種の味、乳酪、酪漿、生酥、熟酥、胡麻油等、及び諸の衣服、橋奢耶衣、珂貝、皮革、金銀の五器、是の如き等の物も亦愛くべからず。』善男子、彼の

【五】三種の淨肉。不見、不開、不疑の三種なり。之に亦二解あり。一は我が爲に殺を見ざる等、二は我が爲と爲ならざる等に拘はらず總じて殺を見ざる等是れなり。

【六】第四番の問答。

【七】十種の不淨。下の梵行品に出でたる人(同類)、蛇(似龍)、象、馬(同類)、猪、狗、狐(似惡)、猿猴(似人)、師子(獸王)雜の十肉。

【八】九種の清淨。見、聞、嗅、各前後方便と根本と三あるが故に九種となる。

【九】第五番の問答。

【一〇】美食。隨他意語は美食と云ひ、隨自意語は美食と云はずと安註に曰へり。

【一一】第六番の問答。

【一二】橋奢耶衣とは、カウシエヤの音寫、野蠶衣即ち絹衣の稱。

【一三】尼韃の所見。尼韃は、ニルケランタ、rubia の音寫、今のチベットの一派にして極端なる禁欲主義を唱ふる外道なり、また尼乾とも記す、裸形と譯し、離繫外道又は露形外道とも云ふ。

【一四】如來所制。衆生類に斷すべからざるが故に、先づ三種の想を斷じ、次に十種を斷じ、次に貪想を斷するが故に、一切悉く斷す。外道の見に同じからず。

一切の禁戒、各異意有り。異意の故に三種の淨肉を食することを聽し、異想の故に十種の肉を斷す。異想の故に一切悉く斷じ、自死の者に及ぶ。迦葉、我今日より諸の弟子を制して、復一切の肉を食

することを得しむるなり。迦葉、其の肉を食する者、若は行、若は住、若

は坐、若は臥に、一切の衆生、其の肉氣を聞きて悉く恐怖を生ず。譬へば

人有りて師子に近き已り、衆人之を見、師子の臭を聞きて亦恐怖を生ずる

が如し。善男子、人蒜を啖へば臭穢惡むべし。餘人之を見、臭を聞きて

捨て去る。設ひ遠く見る者も、猶視ることを欲せず。況や當に之に近くべ

きやの如く、諸の肉を食する者も亦復是の如し。一切の衆生其の肉氣を聞

ぎ、悉く皆恐怖して畏死想を生ず。水陸、空行の有命の類、悉く之を捨て

て走り、咸く此の人は、是我等の怨と言ふ。是の故に菩薩食肉を習はず、

衆生を度せんが爲に食肉を示現す。之を食するを現すと雖も、其の實は食

せず。善男子、是の如きの菩薩、清淨の食猶尙食せず、況や當に肉を食す

べきや。善男子、我涅槃の後無量百歲、四道の聖人悉く復涅槃し、正  
法滅して後、像法の中に於て、當に比丘有るべし。貌像持律、少しく經を讀誦す。飲食を貪嗜して其  
の身を長養し、身に被服する所麤陋醜惡、形容憔悴、威徳有ること無し。牛羊を放畜し、薪草を擔負

【五】 四道の聖人。四果の聖者と云ふに同じ、  
【三】 正法滅して後。釋尊入滅の後、その感化の繼續と教法の行はるる時代を三分し、正、像、末の三時とす。その時間の長短に就て異説あれど最も普通なるは、正法五百年、像法一千年、末法萬年とす。正法には教行證三法具足し、像法には教行ありて證道を缺き、本法には唯教のみありて行證永く廢ると云ふ。また大集經に五箇五百年の説あり、今の文と參考すべし。



す。頭鬚爪髮、悉く皆長利なり。袈裟を服すと雖も猶し獵師の如し。細視徐行、猫の鼠を伺ふが如く。常に是の言を唱ふ、「我羅漢を得」と。諸の病苦多くして糞穢に眠臥す。外に賢善を現じ内に貪嫉を懷く。瘴法を受くること婆羅門等の如し。實は沙門に非ずして沙門の像を現す。邪見熾盛にして正法を誹謗す。是の如き等の如し。如來所制の戒律、正行、威儀を破壞し、解脱の果を説けども、清淨法を離れ、及び甚深秘密の教を壞す。各自自ら意に隨ひて經律を反説し、是の言を作さく、「如來、皆我等に肉を食するを聽したまふ」と。自ら此の論を生じて是佛説と言ふ。互に共に爭訟して、各自自ら沙門釋子と稱す。善男子、爾の時に復諸の沙門等有りて、生穀を貯聚し、魚肉を受取し、手自ら食を作し油餅を執持す。寶蓋、革履、國王、大臣、長者に親近し、古相星宿、醫道を勤修し、奴婢、金銀、琉璃、玳瑁、珊瑚、琥珀、眞珠、珊瑚、琥珀、璧玉、珂貝、種種の果齒を畜養す。諸の技藝を學び、畫師泥作、造書教學、種植根莖、學道呪幻、諸藥を和合し、作倡皮樂、香華身を治し、擲蒲圍棋、諸の工巧を學ぶ。若比丘、能く是の如きの諸の惡事を離るる者有らば、當に説くべし、「是の人は眞に我が弟子」と。爾の時に迦葉、復佛に白して言さく、「世尊、諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、他に因りて活する、若乞食の時、雜肉の食を得ば、云何が食することを得て清淨法に應せん。佛の言はく、「迦葉、當に水を以て洗ひ、肉と別れしめて、然して後乃ち食すべし。若其の食器、肉に汚さるるも、但味無からしめば用ふることを聽す。罪無し。若食の中に多く肉肉有る者を見れば、則ち受くべから

す。一切の現肉は、悉く食すべからず。食する者は罪を得。我今是の斷肉の制を唱ふ。若廣說せば、則ち盡すべからず。涅槃時到る。是の故に略說す、是を則ち名けて能隨問答と爲す。

迦葉、云何が善解因緣義。如四部の衆來りて、我に問うて言ふ有らん。世尊、是の如きの義、如來初出何が故ぞ。波斯匿王の爲に、是の法門深妙の義を説かずして、或時は深と説き、或時は淺と説き或は名けて犯と爲し、或は不犯と名く。云何が墮と名け、云何が律と名け、云何が波羅提木又の義と名くる」と。佛の言はく、「波羅提木又とは、名けて知足と爲す。威儀を成就し、受畜する所無し。亦淨命と名く。墮とは、四惡趣を名く。又復墮とは地獄に墮し、乃至阿鼻、其の遲速を論せば暴雨に過ぎたり。聞く者驚怖し、堅く禁戒を持して威儀を犯さず。知足を修習して一切の不淨の物を受けず。又復墮とは、地

次に善解因緣の相を明す、若通じて論すれば一切大の經論皆これ假名因緣の教、若別して論すれば小乘教中三藏事相これ因緣の教なり。文に二番の問答あり。  
【二六】 波斯匿王 Rajā prasena-  
dit の音寫、釋尊同時の橋薩羅 (Pāṭalī) の國王なり、波斯匿の語、勝軍を義とす。  
【二九】 波羅提木又 Prāmokṣa の音寫、別解脫と譯す。戒律の異稱。  
【三〇】 四惡趣。地獄 (Naraka)、餓鬼 (Pitṛiṅgāya) 畜生 (Tiryak-yōni-gata) 、畜羅 (Asura) を總稱す。  
【三一】 阿鼻。Avīci の音寫、無間と譯す。八熱地獄中最も猛惡

なる地獄の名にして苦を受くること間なく、且つ永久出期なき所と云ふ。  
【三二】 戒威儀は、毗尼藏 (Vinaya-piṭaka)。  
【三三】 深經は、修多羅藏 (Sūtra-piṭaka)。  
【三四】 善義は、阿毗曇藏 (Abhidharma-piṭaka)。  
【三五】 四重。梵語に、波羅夷 (Pārāyika) に斷頭と譯し、精神的死罪とも稱すべき佛教戒門の極重罪、その數殺、盜、淫、婬の四あり、故に四重と云ふ。  
【三六】 十三僧殘。Sāmaṃbhāṅgika の梵漢併稱、僧侶としての道德的生命尙に残存せざる程度得罪と云ふ意、其數十三あり。  
【三七】 二不定法。Aniyataṅga 譯

【二七】 次に善解因緣の相を明す、若通じて論すれば一切大の經論皆これ假名因緣の教、若別して論すれば小乘教中三藏事相これ因緣の教なり。文に二番の問答あり。  
【二六】 波斯匿王 Rajā prasena-  
dit の音寫、釋尊同時の橋薩羅 (Pāṭalī) の國王なり、波斯匿の語、勝軍を義とす。  
【二九】 波羅提木又 Prāmokṣa の音寫、別解脫と譯す。戒律の異稱。  
【三〇】 四惡趣。地獄 (Naraka)、餓鬼 (Pitṛiṅgāya) 畜生 (Tiryak-yōni-gata) 、畜羅 (Asura) を總稱す。  
【三一】 阿鼻。Avīci の音寫、無間と譯す。八熱地獄中最も猛惡

獄、畜生、餓鬼を長養す。是の諸義を以ての故に名けて墮と曰ふ。波羅提木叉とは、身、口、意の不善邪業を離る。律とは、戒威儀、深經、善義に入り、一切不淨の物を受け、及び不淨の因縁を遮す。亦四重、十三僧殘、二不定法、三十捨墮、九十一墮、四悔過法、衆多學法、七滅淨等を遮す。或は復人有りて一切戒を破す。云何が一切。四重法、乃至七滅淨法を謂ふ。或は復人有りて、正法の甚深經典を誹謗し、及び一闍提、具足成就し、一切相を盡して、因縁有ること無し。是の如き等の人、自ら「我は是聰明利智」と言ふ。輕重の罪、悉く皆覆藏す。諸惡を覆藏すること、總の六を藏すが如し。是の如きの衆罪、長夜悔いず。不悔を以ての故に、日夜增長す。是の諸の比丘、

四相品第七の上

罪性有無不定なるを以て名く一般に嫌疑とも稱すべき程度の者にして今は兩性關係に就ての僧侶の嫌疑罪二種なり。  
 【一】三十捨墮。梵に三十尼薩耆波逸提(Śikṣāyāni)の譯、棄捨すべき墮罪の意にして、若し之を捨せざれば犯罪を成じて地獄に墮すべきを云ふ。凡てに三十種あり。  
 【二】九十一墮。梵に九十一波逸提(Śikṣāyāni)の譯、前の捨墮に對して單墮とも云ふ。故にまた、九十單墮と云ふ。捨すべき財物なき故單に懺悔罪なり。懺悔せざれば墮獄す。この墮の戒數、十誦律は九十とし、彌沙塞は九十二とす。今は九十一とす。  
 【三】四悔過法。梵の四提舍尼

(Pāṭhaliya)の音寫、說罪、顯示等の譯あり。衆僧の前にて犯せる罪を懺悔すべき罪の義、また向彼悔とも云ふ。之に四種あり。  
 【一】衆多學法。(Śikṣāyāni)の譯、僧團の學修すべき戒一百ある故に衆多と云ふ。最も輕小の戒なり。  
 【二】七滅淨法。Aṭṭhaśāraṇa(アツタシャラナ)の譯、僧侶間の誹謗を止め、之を判決する七種の方法なり。  
 【三】具足。一切の惡を具足すること。  
 【四】一切相とは。一切の善を云ふ。  
 【五】因縁有ること無し。佛法の因縁無きなり、亦是れ因縁を撥無するなり。

是所犯をして途

に復滋蔓せしむ。是の故に如來、是の事を知り已りて、漸次に制して一時にすることを得ず。」

爾の時に善男子、善女人有りて佛に白して言さく、「世尊、如來久しく是の如きの事を知る。何ぞ先制

せざるや。將世尊、衆生をして阿鼻獄に入らしめんと欲すること無きや。譬へば多人、他方に至らん

と欲して正路を迷失し邪道に隨逐す。是の諸人等、迷を知らざるが故に皆是道と謂ふ。復人の是非を

問ふべきを見ざるが如し。衆生是の如く、佛法に迷ひ正眞を見ず。如來、爲に先に正道を説き、諸の

比丘に、此は是犯戒、此は是持戒と敕し、當に是の如く制すべし。何を以ての故に、如來正覺是眞實

とは、正道を知見し、唯如來天中の天有りて、能く十善増上の功德、及び

其の義味を説く。是の故に啓請す。先に戒を制すべし。佛の言はく、「善男

子、若如來、能く衆生の爲に、十善増上の功德を宣説すと言はば、是則ち如來、諸の衆生を視ること

羅睺羅の如し。云何ぞ難じて、將世尊、衆生をして地獄に入らしめんと欲すること無しと言はん。我

一人の阿鼻地獄に墮する因縁有るを見れば、尙ほ人の爲に世に住すること一劫、若は滅一劫せん。我

衆生に於て大慈悲有り、何に縁りてか、當に子想の如くする者を誑して地獄に入らしむべき。善男子、

王の國內に納衣者有りて、衣に孔有るを見て、然して後乃ち補ふが如し。如來も亦爾なり。諸の衆生

に、阿鼻地獄に入る因縁有るを見て、即ち戒善を以て爲に之を補ふ。善男子、譬へば轉輪聖王の

先に衆生の爲に十善の法を説き、其の後に漸漸惡を行ふ者有らば、王即ち事に隨ひて以て漸く之を斷

【四六】 轉輪聖王 (Chakravartin)

す。諸惡を斷じ已りて、然して後自ら聖王の法を行ふが如し。善男子、我も亦是の如し。所説有り」と雖も先制を得ず。要す比丘、漸く非法を行するに因りて、然して後に方に乃ち事に隨ひて之を制し、樂法の衆生、教に隨つて修行す。是の如き等の衆、乃ち能く如來法身を見ることを得。轉輪王の所有の輪寶思議すべからざるが如し。如來も亦爾なり思議すべからず。法僧二寶も亦不可思議、能説法者、及び聞法者も皆不可思議なり。是を善解因緣義と名くるなり。菩薩是の如く四種相義を分別開示す。是を大乘大涅槃中の因緣義と名くるなり。

復次に自正とは、所謂是の大般涅槃を得。正他とは、彼此比丘の爲に説きて、「如來常存不變」と言ふ。隨問答とは、迦葉、汝が所問に因るが故に、廣く菩薩摩訶薩、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の爲めに是の甚深微妙の義を説くことを得。因緣義とは、禪聞、緣覺、是の如きの甚深の義を解せず、伊字の三點、解脫涅槃摩訶般若を成じ、秘密藏を成ずるを聞かす。我今、此に於て闡揚分別して、諸の聲聞の爲めに慧眼を開發す。假使人有りて、是の如きの言を作す。是の如きの四事、云何ぞ一つと爲す、虛妄に非ずや。即ち反質すべし。是の虚空、無所有、不動、無

【四】 輪寶 (Chakkarattana) の喻を擧げて三寶の不可思議を況し、如來の漸開合を顯す。

【五】 次に四相一相を明す。其中初に正しく四一を明す。前段は大般涅槃を分別顯示せんが爲に一相を四相に別説し、今に四相一にみな大涅槃にして一相無二なることを明すが故に四相を一相に示す。前は是れ一に即する四、後は是れ四に即する一を説くなり。

【四九】 伊字の三點、前には法身、般若、解脫の三法を別とし、涅槃を總とす。今は法身に更へて涅槃を別に加へ、秘密藏を總とす、一法の異稱なれば本より自在なり。

【五〇】 次に反質して疑を釋す。之に疑、質、答、通あり。

【五一】 四事。前の四相を指す。

闍、是の如きの四事、何等の異有る。是豈名けて虚妄と爲すことを得んや。』『不なり世尊、是の如きの諸句は、即ちは一義なり。所謂空の義なり。自正、正他、能隨問答、解因縁の義も、亦復是の如し。

即ち(一の)大涅槃、等しくして異有ること無し。』佛、迦葉に告げたまはく、『若善男子、善女人有りて、是の如きの言を作さく、『如來無常、云何が當には無常と知るべきや。佛の言ふ所の如きは、諸の煩惱を滅するを名けて涅槃と爲す。猶し、火滅して悉く有る所無きが如し。諸の煩惱を滅するも亦復

是の如し。故に涅槃と名く。云何ぞ如來、常住法、不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、諸有を離るるをば、乃ち涅槃と名く。是の涅槃の中諸有有ること無し。云何ぞ如來、常住法不變易と爲すや。衣の壞し盡くれ

ば、名けて物と爲さざるが如し、涅槃も亦爾なり。諸の煩惱を滅すれば、名けて物と爲さず。云何ぞ如來、常住法不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、離欲寂滅を名けて涅槃と曰ふ。人の首を斬れば、則ち首有ること無きが如し。離欲寂滅も亦復是の如し。空にして有る所無し。故に涅槃と名く。云何ぞ如來、常住法不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、譬へば熱鐵の椎打するに、星流れ散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫きが如し。正解脱を得るも亦復是の如し。已に淫欲諸有の淤泥を度り、無動處を得ば所至を知らず。云

何ぞ如來常住法不變易と爲すや。』佛、迦葉、若人の是の難を作す者有らば、名けて邪難と爲す。迦葉

【五二】 是より涅槃を料簡す。この中、一佛の料簡、二迦葉の論義、三領解、四述成あり。其中初に佛の料簡の中、先づ初に五難。

【五三】 次に佛答之に呵、答、結異の三段あり。

汝も亦是の憶想を作して、如來性は滅盡と謂ふべからざるなり。迦葉、煩惱者を滅するを、名けて物と爲さず。何を以ての故に。永畢竟の故に。是の故に常と名く。是の句寂靜、上行ること無しと爲す。諸相を滅盡して遺餘有ること無し。是の句鮮白常住無退。是の故に涅槃を名けて常住と曰ふ。如來も亦爾なり、常住にして變無し。星流と言ふは煩惱を謂ふなり。散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫しとは、諸の如來、煩惱滅し已りて、五趣に在らざるを謂ふ。是の故に如來は常住の法にして、變易有ること無し。復次に迦葉、諸佛の師とする所は、所謂法なり。

是の故に如來恭敬供養す。〔番〕法常を以ての故に、諸佛も亦常なり。』

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『若煩惱火滅すれば、如來も亦滅せん。

是則ち如來常住の處無し。彼の逆鐵の赤色滅し已りて、所至を知ること莫きが如し。如來煩惱も亦復是の如く滅して所至無し。又彼の鐵の、熱と赤色と滅し已りて有ること無きが如し。如來も亦爾なり、滅し已れば無常なり。

煩惱の火を滅して便ち涅槃に入る。當に知るべし、如來即ちは無常なり。』『善男子、言ふ所の鐵とは諸の凡夫を名く。凡夫の人は、煩惱を滅すと雖も、滅し已りて復生す。故に無常と名く。如來は爾に置けば、赤色復生するが如し。如來若爾らば、應に還つて結を生ずべし。若結還つて生ぜば、即

【五四】 法常…亦常。常略、具さには法常樂我淨…亦常樂我淨と云ふべし。  
【五五】 次に迦葉の論義。之に兩善の問答ありて先づ初番の問答。  
【五六】 次に第二番の問答。

「是無常なり。」佛の言はく、「迦葉、汝今是の如き言を作すべからず。如來無常」と。何を以ての故に。如來是常なればなり。善男子、彼の木を然し、滅し已りて灰有るが如く、煩惱滅し已りて便ち涅槃有り。

壞衣、斬首、破餅等の譬も亦復是の如し。是の如き等の物、各名字有り。

名けて壞衣、斬首、破餅と曰ふ。迦葉、鐵の冷え已りて、還つて熱からし

むべきが如く、如來は爾らず、煩惱を斷じ已りて畢竟清涼なり。煩惱の

熾火更に復生せず。迦葉當に知るべし、無量の衆生の猶し彼の鐵の如し。

我無漏の智慧の熾火を以て彼の衆生の諸の煩惱結を燒く。」迦葉、復言さ

く、「善い哉善い哉。我今諦かに如來所説の諸佛是常を知る。」佛の言はく

「迦葉、譬へば聖王。後宮に處在し、或時遊觀して後園に在り、王諸の采女

の中に在らずと雖も、亦聖王、命終と言ふことを得ざるが如し。善男子、如來も

亦爾なり。閻浮提界に現せず、涅槃の中に入ると雖も、無常と名けず。如來

無量の煩惱を出でて涅槃安樂の處に入り、諸の覺華に遊びて觀煬受樂す。」

(六〇) 迦葉、復問はく、「佛の言に曰へるが如きは、我已に久しく煩惱の大海を度す」と。若佛、已に

煩惱の海を度しなば、何に縁りてか、復 耶輸陀羅を納れて羅睺羅を生ずる。是の因縁を以

て、當に知るべし、如來未だ煩惱諸結の大海を度したまはず。唯願はくは如來、其の因縁を説きたま

【五七】 次に領解。

【五八】 次に述成。

【五九】 後宮は統化の境、閻浮提を譬ふ。後園は賞觀の所、常樂我淨を譬ふ。

【六〇】 是より廣く身密を闡す。其中初に身密を開す、先づ問

之に領旨、正難、結問、詰猛の四段あり。

【六一】 耶輸陀羅(ヤスナドラー)は釋尊在俗時の妃、拘利城主善覺王(ユプランドラ)の女。



へ。」佛、迦葉に告げたまはく、『汝言ふべからず。如來久しく煩惱の大海を度せば、何に緣りてか、復、耶輸陀羅を納れて羅睺羅を生ず。是の因縁を以て、當に知るべし、如來、未だ煩惱諸結の大海を度せず』と。善男子、是の大涅槃は、能く大義を建つ。汝等、今當に至心に誦らかに聽くべし。廣く人の爲めに説く、驚疑を生ずること莫れ。若菩薩摩訶薩、大涅槃に住する有らば、須彌山王、是の如く高廣なる、悉く能く取りて芥子に入れしむ。其諸の衆生須彌に依らば、亦迫進ならず。往來の想無く、本の如く異なること無し。唯應度の者、是の菩薩須彌山を以て芥子の中に内れ、復還つて本の所住の處に安止するを見る。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、能く三千大千世界を以て芥子に入れ、其の中の衆生も亦迫進、及び往來の想無く、本の如く異なること無し。唯應度の者、見是の菩薩の、此の三千大千世界を以て芥子の中に内れ、復還つて本所住の處に安止するを見る。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、能く三千大千世界を以て一毛孔に入れ、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有り。十方の三千大千諸佛世界を斷取して針鋒に置き、菓葉を貫くが如くにして、他方の異佛世界に擲著す。其の中の衆生、往反何れの處に在りと爲すを覺えず。唯應

【三】次に答。其中初に總じて非ず。

【六三】次に聽を誡む。

【六四】次に正しく答ふ。其中初に通じて菩薩の大涅槃に住するを示す。之に八復次あり。

其中の不思議、成身の人に權巧凡の所知に非すと云ひ、地論の人は是れ法界の用なりと釋す。安曰く、體を離れて用無し、一事として因緣即空假中に非ざるなし、唯度すべきもの乃し能く之を見る、所謂因緣妙慧の所知と。

度の者、乃ち能く之を見、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、  
 十方の三千大千諸佛世界を斷取して右掌に置き、陶家の輪の如く、他方の微塵世界に擲置す。一りの  
 衆生の往來の想有る無し。唯應度の者、乃ち之を見るのみ、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復、善  
 薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、一切十方の無量諸佛世界を斷取して、悉く己身に内る。其の中の  
 衆生、悉く追進ならず、亦、往反及び住處の想無し。唯應度の者、乃ち能く之を見、乃至本處も亦復  
 是の如し。善男子、復、菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、十方の世界  
 を以て一塵の中に内る。其の中の衆生も亦追進往反の想無し。唯應度の者、  
 乃ち能く之を見る。乃至本處も亦復是の如し。善男子、是の菩薩摩訶薩大  
 涅槃に住すれば、則ち能く種種無量の神通變化を示現す。是の故に名けて  
 大般涅槃と曰ふ。是の菩薩摩訶薩の示現すべき所の、是の如きの無量の神  
 通變化は、一切衆生の能く測量する無し。汝今、云何ぞ能く如來愛欲に習近して、羅睺羅を生ずと知  
 らんや。(三)善男子、我已に久しく是の大涅槃に住して、種種に神通變化を示現す。此の三千大千世界  
 の百億の日月、百億の閻浮提に於て、種種示現すること、(四)首楞嚴經の中に廣く説くが如し。我三  
 千大千世界に於て、或は閻浮提到涅槃を示現す。亦畢竟じて涅槃を取る。或は閻浮提到母胎に入るを  
 示し、其の父母をして我が子の想を生せしむ。而も我が此の身、畢竟じて愛欲和合に従ひて生ずる

【三】次に別して釋迦を擧ぐ。  
【四】首楞嚴經は、梵名を Ranagarasūtra といふ。勇健經と譯す、これと同名の經、現に藏中に存すれども今の所指と異同明かならず。

をぞ得るなり。我已に久しく、無量劫より来た愛欲を離れ、我が今此の身、即ち法身なり。世間に隨順して入胎を現示す。善男子、此の閻浮提、林微尼園に、母摩耶よりして生ずるを現示し、生じ已りて即ち能く東行（三六）七歩して、是の如きの言を唱ふ。「我人天、阿脩羅の中（三七）に於て最尊最上」と。父母、人天見已りて驚喜し、希有の心を生ず。是の諸人等（三八）是嬰兒と謂ふ。而も我が此の身、無量劫來久しく是の法を離る。是の如きの身は即ち法身、是肉血、筋脈、骨髓の成立する所に非ず。世間の衆生法に隨順するが故に、示して嬰兒と爲す。南行七歩して、無量の衆生の爲に上福田と作らんと欲するを現示す。西行七歩して、生盡きて永く老死を斷じ、是最後身なるを現示す。北行七歩して、已に諸有の生死を度るを現示す。東行七歩して、衆生の爲に導首と作ることを示す。四維七歩して、種種の煩惱、四魔の種性を斷滅して、如來、應供、正徧知と成ることを現示す。上行七歩して不淨の物に染汙する所と爲らざること、猶し虚空の如くなるを現示す。下行七歩して、法雨地獄の火を滅して、彼の衆生をして安隱樂を受けしむるを現示す。禁戒を畏る者に霜雹を示作す。閻浮提に於て、生じて七日し已りて剃髮を現示す。諸人皆、我是嬰兒初始て髮を剃ると謂ふ。一切の

【三七】 林微尼園 (Amṛitī) はまた毗尼園とも記す、迦毗羅衛王城の離宮、釋尊降誕の聖地なり。今の尼波羅タライ州 (Nainital) 中に存するルンデー (Lunadee) の遺址是れなり。

【三六】 母摩耶 (Māyā) は釋尊の聖母、迦毗羅衛國淨飯王の妃なり。

【三七】 十方に各七歩を行くことは河西の道明は象王の初生にも歩するに依て如來象王の行に示同す云ひ、治城は六道を過ぐることを表すと云ひ、大菩薩經には七覺分、未覺を覺するに應ずと云ふ。

一切の

人天、魔王、波旬、沙門、婆羅門、能く我が頂相を見る者有ること無し。況や刀を持し、之に臨みて髪を剃ること有らんや。若刀を持して我が頂に至る者有らば、是の處有ること無し。我已に久しく無量劫の中に於て鬚髮を剃除す。世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、剃髮を現す。我既に生じ已りて、父母我を將て天祠の中に入り、我を以て彼の摩醯首羅に示す。摩醯首羅即ち我を見る時、合掌恭敬し、立ちて一面に在り。我已に久しく無量劫の中に於て、是の如きの入天祠法を捨離す。世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、是の如きを現す。我閻浮提に於て耳を穿つを現す。一切衆生、實に能く我が耳を穿つ者有ること無し。世間の衆生法に隨順するが故に、是の如きを現す。復、諸寶を以て師子璫を作りて、其の耳を莊嚴す。然るに我、已に無量劫の中に於て莊嚴具を離れ世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、是の示現を作す。學堂に入りて書疏を修學するを示す。然るに我、已に無量劫の中に於て具足成就す。徧く三界の所有の衆生を觀るに我が師と爲るに堪任する者有ること無し。世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、學堂に入るを示す。故に如來、應供、正徧知と名く。乘象、繫馬、角力、種種の技藝を習學するも、亦復是の如し。閻浮提に於て、復、王の太子と爲ることを示現す。衆生皆、我太子と爲り、(七)五欲の中に於て歡喜愛樂すと見る。然るに我、已に無量劫の中に於て、是の如きの五欲の樂を捨離す。世間の法に隨順せんと欲

【七〇】頂相。無見頂相の略、如來の頭頂に存する特相。三十二相の一なり。

【七一】五欲。眼、耳、鼻、舌、身の五官を總じて色、聲、香、味、觸の五境の上にて起る欲を云ふ。

するが爲の故に、是の如きの相を示す。相師我を占す、若出家せずば、當に轉輪聖王と爲りて閻浮提に王たるべし。一切衆生、皆是の言を信す。然るに我、已に無量劫の中に於て轉輪位を捨て法輪王と爲る。閻浮提に於て采女五欲の樂を離れ、老、病、死及び沙門を見已り、出家して道を修するを現す。衆生皆、悉達太子初始めて出家すと謂ふ。然るに我、已に無量劫中に於て出家學道し、世法に隨順す。故に是の如きを示す。我、閻浮提に於て出家して 具足戒を受け、精勤修道して 須陀洹果、(七) 斯陀含果、(八) 阿那含果、(九) 阿羅漢果を得るを現す。衆人皆是、阿羅漢果得易く難からずと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て阿羅漢果を成す。諸の衆生を度脱せんと欲するが爲の故に、道場の菩提樹下に坐し、草を以て座と爲し、衆魔を摧伏す。衆皆、我始めて道場の菩提樹下に於て、魔宮を降伏すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、久しく降伏し已り、剛強の衆生を降伏せんと欲するが爲の故に、是の化を現す。我又、大小便利、出息、入息を示現す。衆皆、我實に便利、出息、入息有りと謂ふ。然るに我が是の身、所得の果報、是の諸患無く世間に隨順す。故に是の如きを示す。我

四相品第七の上

【七〇】 悉達太子 (Siddhattha) の聲尊在俗時の名。

【七一】 具足戒。比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒を具足して缺減なきが故なり。

【七二】 須陀洹果。Srotāyanaの音寫、預流果と譯す。小乘聲聞位中聖者の流類に入れる最初の地位を名く、略して初果と云ふ是れなり。

【七三】 斯陀含果。Sakragāyikaの音寫、一來果と譯す。聲聞聖位の第二の地位なるが故にまた略して第二果と云ふ。

【七四】 阿那含果。Anāgāminの音寫、不還果と譯す。聲聞位中の第三果の聖者に名く。

【七五】 阿羅漢果。Arahantaの音寫、殺賊、應供、不生等の譯あり。聲聞位中最高の聖者にして第四果と通稱す、聲聞は之を極果とす。

又、人の信施を受くるを示現す。然るに我是の身、都て饑渴無く、世法に隨順す。故に是の如きを示す。我又、諸の衆生に示同するが故に睡眠有るを現す。然るに我、已に無量劫の中に於て、無上深妙

の智慧を具足し、三有の進止威儀、頭目腹背、舉身疾痛、木鑽鑽對、盥洗手足、澡面漱口、湯枝自淨を遠離す。衆皆、我是の如きの事有りと謂ふ。然るに我が是の身、都て此無きなり。手足清淨、猶し蓮華の如く、口氣淨潔、優鉢羅香の如し。一切衆生、我是人と謂ふ。我實に人に非ず。我又糞掃

衣を受け、溝濯縫治するを示現す。然るに我、久しく已に是の衣を須ひず。衆人皆、羅睺羅は是我が子、(五五)輸頭壇王は是我が父、摩耶夫人は是我が母、世間に處在して諸の快樂を受く。是の如きの事を捨て、出家學道すと謂ふ。衆人復言さく、「是王の太子、瞿曇大姓、世樂を遠離して出世の法を求む」

と。然るに我、久しく世間の愛欲を離る。是の如き等の事は悉く是示現す。一切の衆生、威く是人と謂ふ。然るに我、實には非なり。善男子、我此の閻浮提の中に在りて、數

數示現して涅槃に入ると雖も、然れども我、實は畢竟涅槃せず。而も諸の衆生、皆如來眞實に滅盡すと謂ふ。而も如來性は實に永く滅せず。是の故に當に知るべし、是常住法、不變易法なり。善男子、

大江衆とは、即ち是諸佛如來法界、我又、閻浮提中世間に出づるを示現す。衆生皆、我始めて成佛すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、所作已に辦じ、世法に隨順す。故に復、閻浮提に於て出

【七六】優鉢羅 (Uttara) 青蓮  
【七九】輸頭壇王 (Sinhulidana Rajā) 白飯または淨飯を譯す、釋尊の聖父、遮毗羅衛 (Ashvapati) 國王なり。  
【八〇】瞿曇 (Gautama) 釋尊の俗姓。

家、成佛を現現す。我又、閻浮提に於て禁戒を持せず。四重罪を犯すを現現す。衆人皆見て、我實に犯すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、堅く禁戒を持して漏缺有ること無し。我又、閻浮提に於て、一闍提と爲るを現現す。衆人皆、是一闍提と見る。然るに我、實は一闍提到非ざるなり。一闍提ならば、云何ぞ能く阿耨多羅三藐三菩提を成せん。我又、閻浮提に於て、和合僧を破するを現現す。衆生皆、我是破僧と謂ふ。我人天を觀るに、能く和合僧を破する者有ること無し。我又、閻浮提に於て、正法を護持するを現現す。衆人皆、我是護法と謂ひ、悉く驚怪を生ず。諸佛法爾なり、驚すべからず。我又、閻浮提に於て、魔波旬と爲るを現現す。衆人皆、我是波旬と謂ふ。然るに我久しく無量劫の中に於て、魔事を離れ、清淨無染なる猶し蓮華の如し。我又、閻浮提に於て、女身佛と成るを現現す。衆人之を見て、皆甚だ奇なり、女人能く、阿耨多羅三藐三菩提を成すと言ふ。如來畢竟女身を受けず。無量の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に女像を現す。一切諸の衆生を憐憫するが故に、復種種の色像を現現す。我又閻浮提の中、四趣に生ずるを現現す。然るに我、久しく已に諸趣の因を斷ず。業因を以ての故に四趣に墮せんや。衆生を度せんが爲の故に是の中に生ず。我又閻浮提の中、梵天王と作ることを示現して、梵に事ふる者をして正法に安住せしむ。然るに我實は非、而も諸の衆生は、咸く皆、我眞の梵天と爲ると謂ふ。天像を示現して諸の天廟に徧うるも、亦復是の如し。我又閻浮提に於て、淫女の舍に入るを示

【八二】四重罪。殺、盜、淫、妄の四波羅夷罪を云ふ。

現す。然るに我、實は貪欲の想無く、清淨にして汚れざること、猶し蓮華の如し。諸の貪淫著色の衆生の爲に、四衢道に於て妙法を宣説す。然るに我、實は欲穢の心無し。衆人、我女人を守護すと謂ふ。我又閻浮提に於て、青衣の舎に入ると示現す。誘化して正法に住せしめんと欲するが爲なり。然るに我、實は是の如きの惡業、青衣に墮在すること無し。我又閻浮提の中、教師と作るを現し、童蒙を開化して正法に住せしむ。我又閻浮提に於て、諸の酒舍、博奕の處に入るを現す。種種の勝負、爭訟を示現して、彼の諸の衆生を拔濟せんと欲するが爲にす。而も我、實は是の如きの惡業無し。而も諸の衆生、皆我、是の如きの業を作すと謂ふ。我又、久しく塚間に住して大鷲の身と作るを現し、諸の飛鳥を度す。而も諸の衆生皆、我是眞實の鷲身と謂ふ。然るに我、久しく已に是の業を離る。彼の諸鳥鷲を度せんと欲するが爲の故に、是の如きを示現す。我又閻浮提の中、大長者と作るを現す。無量の衆生を安立して、正法に住せしめんと欲するが爲なり。又復示して諸王、大臣、王子、輔相と作る。是の衆中に於て、各第一と爲す。正法を修せんが爲の故に、王位に處す。我又閻浮提の中、疫病劫起り、多くの衆生有りて、病に惱まる。先に醫藥を施し、然して後に、爲に微妙正法を説く。其をして、無上菩提に安住せしむるを現す。衆人皆、是病劫起ると謂ふ。又復閻浮提の中、餓劫起り、其の所須に隨ひて飲食を供給し、然して後、爲に微妙正法を説きて、其をして、無上菩提に安住せしむるを現す。又復閻浮提の中、刀兵劫起り、即ち爲に法を説き、怨害を離れしめ、無上



菩提に安住することを得しむるを示現す。又復示現して、計常想の者の爲に無常想を説き、計樂想の者の爲に苦想を説き、計我思想の者に無我想を説き、計淨想の者に不淨想を説く。若衆生の三界に貪著する有らば、即ち爲に法を説きて、是の處を離れしむ。衆生を度するが故に、爲に無上微妙の法樂を説く。一切煩惱の樹を斷せんが爲の故に、無上法樂の樹を種植す。諸の外道を拔濟せんと欲するが爲の故に、正法を演説す。復示現して、衆生の師と爲ると雖も、而も心初べて衆生の師の想無し、諸の下賤を拔濟せんと欲するが爲の故に、現じて其の中に入りて、爲に法を説く。是惡業、是の身を受くるに非ざるなり。如來正覺、是の如く大般涅槃に安住す。是の故に名けて常住無變と爲す。(一三) 閻浮提の如く、(一四) 東弗于逮、(一五) 西瞿耶尼、(一六) 北鬱單越も亦復是の如し、四天下の如く、三千大千世界も亦復是の如し。二十有五有、首楞嚴經の中に廣く説くが如し、是を以ての故に大般涅槃と名く。若菩薩摩訶薩、是の如きの大般涅槃に安住する有らば、能く是の如きの神通變化を示して畏るる所無し。迦葉、是の縁を以ての故に、汝羅睺羅は、是佛の子と言ふべからず。何を以ての故に。我往昔、無量劫の中に於て、已に欲有を離る。是の故に如來、名けて常住にして變易有ること無しと曰ふ。(一七) 迦葉復言さく、如來云何が名けて常住と曰ふ。佛の言に曰へるが如きは、「燈滅し已りて方所有る

【一三】 閻浮提 (Jambhūvīpa) は須彌四州の一、南方に位す。  
 【一四】 東弗于逮 (Turyāvatī) は須彌四州の一、勝身と譯す。  
 【一五】 西瞿耶尼 (Akṣaya-kīṇī) は須彌四州の一、牛貨と譯す。  
 【一六】 北鬱單越 (Uttarakuru) は須彌四州の一、最上と譯す。  
 【一七】 是より論義、之に兩番の問答あり、先づ初番の問答、今は問。

こと無きが如し」と。如來も亦爾なり。既に滅度し已らば亦方所無し。佛の言はく、「迦葉、善男子、汝今是の如きの言を作すべからず。燈滅盡し已りて方所有ること無し。如來も亦爾なり。既に滅度し已らば方所有ること無し」と。善男子、譬へば男女燈を然すの時、燈器の大小悉く中に油を滿つ。油在ること有るに隨ひて其の明猶存す。若油盡き已らば、明も亦俱に盡くるが如し。其の煩惱滅を譬へ、明滅盡すと雖も燈器猶存す。如來も亦爾なり。煩惱滅すと雖も法身常存す。善男子、意に於て云何。明と燈器と俱に滅すと爲んや、否や。」迦葉、答へて言さく、「不なり世尊、俱に滅せずと雖も然も是無常なり。若法身を以て燈器に譬へば、燈器無常なれば法身も亦爾なり。是無常なるべし。」善男子、汝今是の如きの難を作すべからず。世閉に器と言ふが如く、如來世尊は無上の法器なり。彼の器は無常、如來には非ざるなり。一切法の中、涅槃を常と爲す。如來之を體す、故に名けて常と爲す。復次に善男子、燈滅と言ふは、是阿羅漢所證の涅槃なり。貪愛の諸の煩惱を滅するを以ての故に、是を燈滅に譬ふ。阿那含をば名けて有貪と曰ふ。貪有るを以ての故に、説きて「燈滅に同じ」と言ふことを得ず。是の故に我、昔覆相に説きて「譬如燈滅」と言ふ。大涅槃を燈滅に同じうするに非ず。阿那含は數數來るに非ず。又二十五有に還來せず。更に復臭身、蟲身、食身、毒身を受けず。是則ち名けて阿那含と爲すなり。若更に身を受くるは名けて那含と爲し、身を受けざるは阿那含と名く。去來

【七】 次に答。  
 【六】 次に第二番の問答の文。  
 其中初に問。  
 【六】 次に答。

有るは名けて那含と曰ひ、去來無きは阿那含と名く。』

# 卷の第五

## 四相品の下

爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の説きたまふ所の如きは、「諸佛世尊に秘密藏有り」と。是の義然らず。何を以ての故に。諸佛世尊には唯密語有りて秘密藏有ること無し。譬へば幻主、機關、木人の、人の屈伸俯仰を觀見すと雖も、其の内、之をして然らしむるを知ること莫きが如し。佛法は爾らず。咸く衆生をして、悉く知見することを得しむ。云何を當に、「諸佛世尊に秘密藏有り」と言ふべき。」佛、迦葉を讚じたまはく、「善い哉善い哉善男子、汝が言ふ所の如く、「如來實に秘密の藏無し。」何を以ての故に。秋滿月の空に處して顯露、清淨にして翳無く、人皆觀見するが如し。如來の言も亦復是の如し。開發顯露清淨にして翳無し。愚人解せず、之を秘藏と謂ふ。智者了達すれば、則ち藏と名けず。善男子、譬へば人有りて、多くの金銀を積みて無量億に至る。其の心慳吝にして、有て惠施して貧窮を採濟せず。是の如く積聚するを、乃ち秘藏と名くるが

【一】 是より意密を聞く。其中初に密を開き、先づ開密、初に問の文。

【二】 次に答の文。答のうち、九譬あり、初の七は重の三業を折し顯の三業を開く。七とは秋月、積金、身根、負財、多財、根體、語論、譬喩是れなり。この他に長者教子の譬は密の因縁を開し、次の龍王の譬は開密因縁無きことを明す。

如し。如來は爾らず。無量劫に於て無量の妙法、珍寶を積聚し、心に慳吝無く、常に以て一切衆生に  
 惠施す。云何ぞ當に、「如來祕藏す」と言ふべき。善男子、譬へば人有りて身根具せず、或は一目、一手、  
 一足無く、羞恥を以ての故に人をして見せしめず。人見ざるが故に、名けて祕藏と爲すが如し。如來  
 は爾らず。所有の正法具足して缺くること無く、人をして觀見せしむ。云何ぞ當に、「如來祕藏す」と言  
 ふべき。善男子、譬へば貧人、多く人の財を負ひ、債主を怖畏し、隠れて現るることを欲せず。故に  
 名けて藏と爲すが如し。如來は爾らず。一切衆生の世法を負はず。衆生の  
 出世の法を負ふと雖も、而も亦藏せず。何を以ての故に。恆に衆生に於て一  
 子の想を生じて、爲に無上法を演説するが故なり。善男子、譬へば長者、  
 多くの財寶有りて唯一子有り。心甚だ愛重し、情捨離すること無く、所  
 有の珍寶悉く用ひて之を示すが如し。如來も亦爾なり。諸の衆生を視る  
 こと一子に同じうす。善男子、世間の人、男女の根の醜陋鄙惡なるを以て  
 衣を以て覆蔽す。故に名けて藏と爲すが如し。如來は爾らず。永く此の根を斷ず。無根を以ての故に  
 覆藏する所無し。善男子、(三)婆羅門所有の語論の如きは、終に 刹利、毘舍、首陀等をして聞かしむ  
 ることを欲せず。何を以ての故に。此の論の中には過惡有るを以ての故なり。如來の正法は則ち是の  
 如くならず。初、中、後善なり。是の故に名けて祕藏と爲すことを得ず。善男子、譬へば長者に唯一

【三】婆羅門。印度四姓の一、  
 Brahmin 即ち智族是れなり。  
 【四】刹利、毗舍、首陀等。印度  
 四姓中の三なり。刹利は  
 Kshatriya にて王族武族なり。  
 毗舍は Vaishya にして商等の  
 族、首陀は Sudra にして最  
 も賤族とす。

子有り。心に常に憶念し憐愛して已むこと無く、將ゐて師の所に詣りて受學せしめんと欲す。速かに  
 成らざることを懼れ、尋で便も將ゐて還り、愛念を以ての故に、晝夜殷勤に其に半字を教へ、而も  
 伽羅論を教へず。何を以ての故に。其の幼稚にして力未だ堪へざるを以ての故なるが如し。善男子、  
 假使長者、半字を教へ已りて、是の兒即時に能く毗伽羅論を了知することを得んや、否や。『不なり  
 世尊。』『是の如きの長者、是の子所に於て秘藏有りや、不や。』『不なり世尊、何を以ての故に。子年  
 幼を以ての故に爲に説かず。秘吝を以て顯示せざるにあらず。所以は何ん。若嫉妬、秘吝の心有らば、  
 乃ち名けて藏と爲す。如來は爾らず。云何を當に如來秘藏と言ふべし。』佛  
 の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝が言ふ所の如し。若瞋心、嫉妬、慳吝  
 有らば、乃ち名けて藏と爲す。如來は瞋心、嫉妬有ること無し、云何ぞ藏と  
 名けん。善男子、彼の大長者は如來を謂ふなり。一子と言ふは一切衆生を謂ふ。如來等しく一切衆生を  
 視ること猶し一子の如し。教一子とは聲聞の弟子を謂ひ、半字とは九部經を謂ひ、毗伽羅論とは所謂方  
 等大乘經典なり。諸の聲聞、慧力有ること無きを以て、是の故に如來、爲に半字九部經典を説く。而  
 も爲に毗伽羅論、方等大乘を説かず。善男子、彼の長者の子、既に長大して讀んに堪任せんに、若  
 爲に毗伽羅論を説かずば、名けて藏と爲すべきが如し。若諸の聲聞、力能く大乘毗伽羅論を受くるに  
 堪任する有らんに、如來秘惜して爲に説かざれば、如來、秘密藏有りと云ふべし。如來は爾らず。是

【五】 毗伽羅。(Vākyāraṇa) 聲  
 明論と譯す、五明中の語學に  
 關する俗書の總名なり。

の故に如來、秘藏すること有ること無し。彼の長者、半字を教へ已りて、次に爲に毗伽羅論を演説するが如し。我も亦是の如し。諸の弟子の爲に、半字九部經を説き已りて、次に爲に毗伽羅論を演説す。所謂如來常存不變なり。

復次に善男子、譬へば夏月に大雲雷を興し、大雨を降澍して諸の農夫の種子を下す者をして、多く果實を獲しむるが如し。種を下さざる者は收獲する所無し。獲る所無きは龍王の咎に非ず。而も此の龍王も亦藏する所無きが如し。我も亦是の如し。大法雨なる大涅槃經を降す。若諸の衆生の善子を種うる者は慧の牙果を得、善子無き者は則ち獲る所無し。獲る所無きは如來の咎に非ず。然るに佛如來、實は藏する所無し。』(空の聲)迦葉復言さく、「我今、定んで如來世尊の秘藏したまふ所無きを知る。佛の所説の如く、「毗伽羅論は佛如來の常存不變を謂ふ」とは是の義然らず。何を以ての故に。佛昔偈を説きたまひ、

「諸佛及び緣覺、聲聞の弟子衆、

猶無常身を捨つ、何に況や諸の凡夫をや。」

と。今者乃も常存不變と説く。是の義云何。佛の言はく、「善男子、我一切の聲聞の弟子の爲に、半字を教ふるが故に、是の偈を説く。善男子、波斯匿王其の母命終し、悲號慙慕自ら勝ふこと能はず。我が所に來至す。我即ち問ひて言はく、「大王、何が故を悲苦懊惱し、乃ち此に至るや。」王の言さく、「世

【六】次に領解の文。

【七】次に論義の文。其中、初に論義。之に、二番の間答あり。

尊、國の大夫夫人某日命終す。假使能く我が母をして、命還つて本の如くならしむる者有らば、我當に  
 國、象馬、七珍、及以身命を捨て、悉く以て之を報ずべし。」我復語りて言はく、「大王、且く愁惱、憂  
 悲、啼哭すること莫れ。一切衆生の壽命盡くる者、之を名けて死と爲す。諸佛、緣覺、聲聞の弟子尙  
 此の身を捨て、況や復凡夫をや。」善男子、我波斯匿王の爲に、半字を教ふるが故に是の偈を説く。  
 我今、諸の聲聞の弟子の爲に毗伽羅論を説き、如來常存無有變易と謂ふ。若人有りて如來無常と言は  
 ば、云何ぞ是の人、舌墮落せざらん。」迦葉復言さく、「佛の所説の如く、

「積聚する所無し、食に於て足ることを知る、

鳥の空を飛ぶに、迹尋ぬべからざるが如し。」

是の義云何。世尊、此の衆中に於て、誰か名けて無所積聚と爲すことを得ん。誰か復、食知足と名  
 くることを得ん。誰か空を行きて、迹尋ぬべからず。而も此の去る者、何れの方に至ると爲ん。佛の  
 言はく、「迦葉、夫積聚とは、名けて財寶と曰ふ。善男子、積聚に二種有り。一つには有爲、二つには無  
 爲なり。有爲積聚とは即ち聲聞行、無爲積聚とは即ち如來行なり。善男子、僧も亦二種あり。有爲、  
 無爲なり。有爲僧とは名けて聲聞と曰ふ。聲聞僧は積聚有ること無し。所謂奴婢非法の物庫藏穀米、  
 鹽豉胡麻、大小諸豆なり。若説きて、「如來、奴婢、僕使、是の如きの物を畜ふことを聽す」と言ふこ  
 と有らば、舌則ち卷縮せん。我が諸の所有の聲聞の弟子を無積聚と名く。亦名けて食知足と爲すこと



を得。若し食を貪る有らば、不知足と名く。食を貪らざる者、是を知足と名く。迹尋ね難しとは、則ち無上菩提の道に近し。我説く、是の人去ると雖も、至ること無し。迦葉、復言さく、『若有爲僧、尚積聚無し、況や無爲僧をや。無爲僧とは即ち是如來なり。如來云何ぞ當に積聚有るべき。夫積聚とは、名けて藏匿と爲す。是の故に如來、凡そ説く所有りて吝惜する所無し。云何ぞ藏と名けん。迹不可尋とは、所謂涅槃なり。涅槃の中、日月星辰諸宿、寒熱風雨、生老病死、二十五有有ること無く、諸の憂苦、及び諸の煩惱を離る。是の如きの涅槃、如來の住處常に變易せず。是の因縁を以て、如來是の娑羅樹間に至り、大涅槃に於て般涅槃す。』佛迦葉に告げたまはく、『言ふ所の大とは、其の性廣博、猶し人有りて、壽命無量なれば大丈夫と名くるが如し。是の人若能く正法に安住すれば、人中の勝と名く。我が所説の八大人覺の如く、一人有と爲らば多人有と爲さん。若一人八を具すれば則ち最勝と爲す。』言ふ所の涅槃とは、諸の瘡疣無きなり。善男子、譬へば人有りて毒箭に射られ、多く苦痛を受けんに、良醫に毒箭を抜かれ、塗るに妙藥を以てし、其をして苦を離れ、安樂を受くることを得しむるに値遇せん。是の醫即便城邑、及び諸の聚落に遊び、患苦瘡疣の處に隨ひて、即ち其の所に往いて爲に衆苦を療するが如し。善男子、如來も亦爾なり。等正覺を成じて大醫王と爲れり。閻浮提の苦惱の衆生の、無量劫の中に淫、怒、癡の

【八】次に論議。

【九】是より解脫を論ず。其中初に略して解脫を明す。其中又初に略して解脫を説き、先づ廣大の文也。之に法、譬の二段あり。

【一〇】次に瘡疣無きの文也。之に法、譬、合の三段あり。

煩惱の毒箭を被り、大苦切を受くるを見、是の如き等の爲に、大乘經の甘露の法藥を説きて、此を療治し已りて、復他方諸の煩惱の毒箭有るの處に至り、作佛を示現して其が爲に療治す。是の故に名けて大般涅槃と曰ふ。二 大般涅槃とは解脱處と名く。衆生を調伏する有るの處に隨ひて、如來、中に於て示現を作す。是の眞實甚深の義を以ての故に大涅槃と名く。三 迦葉菩薩、復佛に白して言さく

『世尊、世間の醫師は、悉く能く一切衆生の瘡疣の病を療治するや、不や。』

『善男子、世間の瘡疣は凡そ二種有り。一つには可治、二つには不可治なり。』

凡そ治すべき者は、醫師も能く治す。治すべからざる者は、則ち治すること能はず。迦葉、復言さく『佛の言ふ如くならば、如來則ち閻浮提に於て衆生を治し已ると爲す。若治し已ると言はば、是の諸の衆生、其の中に何ぞ、復未だ涅槃を得る能はざる者有らんや。若未だ悉く得ずば、云何ぞ如來、説きて「治し竟りて他方に至らんと欲す」と言はん。善男子、閻浮提内の衆生に二つ有り。一つには有信、二つには無信なり。有信の人は則ち可治と名く。何を以ての故に。定んで涅槃瘡疣無きを得るが故に。是の故に我、閻浮提の諸の衆生を治し已ると説く。無信の人は一闍提と名く。一闍提とは不可治と名く。一闍提を除きて餘は悉く治し已る。是の故に涅槃を無瘡疣と名く。』世尊、何等をか涅槃と名く。』善男子、夫涅槃とは名けて解脱と爲す。』迦葉復言さく、『言ふ所の解脱は、是色と爲んや、』

【二】次に解脱處の文也。之に自解脱、明調伏の二段あり。

【三】次に論義。其中初に二番は瘡疣無きを論ず。之に兩番の問答あり。

【三】次に三番は解脱處を論ず。之に三番の問答あり。

非色と爲んや。佛の言はく、『善男子、或は是色有り、或は是色に非ず。非色と言ふは、即ち聲聞、緣覺の解脱、是色と言ふは、即ち是諸佛如來の解脱なり。善男子、是の故に解脱も亦色亦非色なり。如來諸の聲聞の弟子の爲に説きて非色と爲す。』『世尊、聲聞、緣覺若非色ならば、云何が住することを得ん。』『善男子、非想、非非想天も亦色、非色なり、我も亦説きて非色と爲す。若人難じて、非想、非非想天若非色ならば、云何が住し去來進止を得し』と言はん。是の如きの義、諸佛の境界にして諸の聲聞、緣覺の知る所に非ざるが如し。解脱も亦爾なり。亦色、非色、説きて非色と爲す。亦想、非想、説きて非想と爲す。是の如きの義、諸佛の境界にして諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。』

(四) 爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、唯願はくは哀憫して、重て廣く大般涅槃の行解脱の義を説くことを垂れたまへ。』

(五) 佛、迦葉を讚じたまはく、『善哉善哉善男子、眞の解脱とは名けて遠離一切繫縛と曰ふ。若眞の解脱、諸の繫縛を離れば、則ち生有るに無く、亦和合無し。譬へば父母和合して子を生ずるが如し。眞の解脱は、則ち是の如くならず。是の故に解脱を名けて不生と曰ふ。迦葉、譬へば醍醐の其性清淨なるが如し。如來も

【四】 是より廣く解脱を明す。其中初に問。

【五】 次に答の文。其中、初に上の無著疏を廣す。安註に曰く、此答文の中古來の相傳に百句ありと云ふ。招提の説に頭數は止だ八十四五あり若大小合算すれば九十七八あり、極細に數ふれば一百餘あり、但百の數は數の圓名なるを以て百句と云ふ、例せば大品般若に百波羅蜜と云ふとも實は九十なるが如し。古來またこの百句を譯する者あらず、唯眞諦三藏一卷の義記あれども略にして解すべからず、天台大師嘗て靈石に於て一夏の間にこの百句解脱を釋す、一句各皆百句ありて一萬の法門を説く。然るに先學自ら飽きて之を録せざりし故今傳へず、惜哉惜哉後代聞ゆるなしと。

亦爾なり。父母の和合に因りて生ずるに非ず、其の性清淨なり。父母有るを示現する所以は諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故なり。眞の解脱は即ち是如來なり。如來解脱は二無く別無し。譬へば春秋、諸の種子を下すに、噴潤氣を得れば、尋いで便ち出生するが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。又解脱とは名けて虚無と曰ふ。虚無即ち是解脱。解脱即ち是如來、如來即ち是虚無なり。作の作所に非ず。凡そ是の作は、城郭樓觀の如し。眞の解脱とは、則ち是の如くならず。是の故に解脱即ち是如來なり。又解脱とは即ち無爲法なり。譬へば陶師の作り已りて還つて破するが如し。解脱は爾らず。眞の解脱とは不生不滅なり。是の故に解脱即ち是如來なり。如來も亦爾なり。不生不滅、不老不死、不破不壞なり、有爲法に非ず。是の義を以ての故に、名けて「如來大涅槃に入る」と曰ふ。不老不死何等の義か有る。老とは名けて遷變と爲す。髮白く面皺む。死とは身壞れ命終る。是の如き等の法、解脱の中に無し。是の事無きを以ての故に解脱と名く。如來も亦髮白面皺有爲の法無し。是の故に如來老有ること無きなり。老有ること無きが故に則ち死有ること無し。又解脱とは、名けて無病と曰ふ。所謂病とは、四百四病、及び餘の外より來りて身を侵損する者。是の處に無きが故に、故に解脱と名く。疾病無き者即ち眞の解脱、眞の解脱とは即ち是如來なり。如來は無病なり、是の故に法身も亦病有ること無し。是の如きの無病、即ち是如來なり。死とは名けて身壞命終と曰ふ。是の處、死無し、即ち是甘露なり。甘露とは即ち眞の解脱、眞の解脱とは即ち是如來なり。如來は是の如きの功德を成就す。

云何ぞ當に如來無常と言ふべき。若無常と言はば、是の處有ること無し。是金剛身なり、云何ぞ無常ならん。是の故に如來は命終と名けず。如來は清淨垢穢有ること無し。如來の身は胎に汚されざるごと、(二)分陀利の本性清淨なるが如し。如來解脱も亦復是の如し。是の如きの解脱、即ち是如來なり。是の故に如來は清淨無垢なり。又解脱とは、諸漏、瘡疣永く遺餘無し。如來も亦爾なり。一切の諸漏、瘡疣有ること無し。又解脱とは鬪諍有ること無し。譬へば饑人の他の飲食を見て、貪奪の想を生ずるが如し。解脱は爾らず。又解脱とは、名けて安靜と曰ふ。凡夫の一言ふ、「夫安靜とは、摩醯首羅を謂ふ」と。是の如きの言は、即ち是虛妄なり。眞の安靜とは、畢竟解脱なり。畢竟解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて安隱と曰ふ。多賊の處を安隱と名けず。清夷の處を乃ち安隱と名くるが如し。是の解脱の中、怖畏有ること無きが故に安隱と名く。是の故に安隱は即ち眞の解脱なり。眞の解脱とは、即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱は等侶有ること無し。有等侶とは、諸の國王隣國の等しき有るが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。無等侶とは、轉輪聖王の能く與に等しきを謂ふ。解脱も亦爾なり、等侶有ること無し。無等侶は即ち眞の解脱なり。眞の解脱とは、即ち是如來轉法輪王なり。是の故に如來等侶有ること無し。等侶有るは是の處有ること無し。又解脱とは無憂愁と名く。憂愁有るは、譬へば國王の疆隣を畏難して、憂愁を生ずるが如し。夫解脱は則ち是の事無し。譬へば怨を壞すれば、則ち憂慮無きが

【二】分陀利。梵語 Pindarīka の音譯、白蓮華と譯す。

如し。解脫も亦爾なり。是憂畏無し。無憂畏は即ち是如來なり。又解脫とは、無憂喜と名く。譬へば  
 女人の唯一子有り、役に從ひて遠行す。卒に凶間を得、之を聞きて愁苦す。後復活を聞きて、便ち歡  
 喜を生ずるが如し。夫解脫の中には是の如きの事無し。憂喜無きは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即  
 ち是如來なり。又解脫とは、塵垢有ること無し。譬へば春月日没の後、風塵霧を起すが如し。夫解脫  
 の中、是の如きの事無し。塵霧無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。譬へば聖王の墾  
 中の明珠に、垢穢有ること無きが如し。夫解脫の性も亦復是の如く、垢穢有ること無し。垢穢無きは  
 眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。眞の金性は沙石を雜へず、乃ち眞寶と名く。人の之を  
 得る有らば、財想を生ずるが如し。夫解脫性も亦復是の如く、彼の眞寶の如し。彼の眞寶は眞の解脫  
 を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。譬へば瓦餅破れて聲嘶る。金剛寶餅は則ち是の如からざるが如  
 し。夫解脫は亦嘶破無し。金剛寶餅は眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。是の故に如來身  
 は壞すべからず。其の聲嘶るとは、蕞麻子を盛熱の中に置かば、爆裂して聲を出すが如し。夫解脫は  
 是の如きの事無し。彼の金剛眞寶の餅は嘶破の聲無し。假使無量百千人衆、悉く共に之を射るとも  
 能く壞する者無きが如し。嘶破の聲無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。貧窮の人の  
 他物を負ふが故に他に繋かれ、枷鎖、杖罰、諸の苦毒を受くるが如し。夫解脫の中、是の如きの事  
 無く、負債有ること無し。猶し長者の、多く財寶無量億數有りて、勢力自在にして他物を負はざるが

如し。夫解脫は亦復是の如し。多く無量の法財、珍寶有り、勢力自在にして負ふ所有ること無し。所  
 負無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは無適切と名く。春熱に涉り、夏日  
 甜を食し、冬日冷に觸るるが如し。眞の解脫の中、是の如きの不適意の事有ること無し。適切無きは  
 眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又無適切とは、譬へば人有りて魚肉を飽食し、而も復  
 乳を飲む。是の人則ち、死に近きこと久しからずと爲すが如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。  
 是の人若甘露、良藥を得ば、所患除くことを得。眞の解脫は亦復是の如し。甘露、良藥は眞の解脫を  
 譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。云何が適切、不適切なる。譬へば凡夫の、我慢自高にして是の念  
 を作さく、「一切物の中、誰か能く我を害せん」と。即便蛇虎、毒蟲を捉持す。當に知るべし、是の人壽  
 命盡きす、則便横死するが如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。不適切とは、轉輪王の所有の神  
 珠の、能く蝸蟻、九十六種の諸の毒蟲等を伏す。若是の神珠の香を聞くこと有らば、諸毒消滅するが  
 如し。眞の解脫は亦復是の如し。皆悉く二十五有を遠離す。毒消滅するは眞の解脫を譬ふ。眞の解  
 脫とは即ち是如來なり。又不適切とは、譬へば虚空の如し、解脫も亦爾なり。彼の虚空とは眞の解脫  
 を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又適切とは、乾草に近きて諸の燈火を然し、近くれば則ち熾然  
 なるが如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。又不適切とは、譬へば日月衆生に逼らざるが如し。  
 解脫も亦爾なり。諸の衆生に於て適切有ること無し。適切有ること無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫

は即ち是如來なり。(三七)又解脫とは無動法を名く、猶し怨親の如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。又不動とは、轉輪王の更に聖王の、以て親友と爲る無きが如し。若更に親有らば則ち是の處無し。解脫も亦爾なり、更に親有ること無し。若親有らば亦是の處無し。彼の王の無親は眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。如來とは即ち是法なり。又無動とは、譬へば素衣の染色を受け易きが如し。解脫は爾らず。又無動とは、(三八)婆師華の臭及び青色有らしめんと欲すれば、是の處有ること無きが如し。解脫も亦爾なり。臭及び諸色有らしめんと欲するも亦是の處無し。是の故に解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて希有と爲す。譬へば水中に蓮華を生ずるは希有と爲すに非ず。火中に生せば是乃ち希有なり。人之之を見る有らば便ち歡喜を生ずるが如し。眞の解脫は亦復是の如し。其の見る者有らば心歡喜を生ず。彼の希有は眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。其の如來は即ち是法身なり。又希有とは、譬へば嬰兒の、其の齒未だ生ぜず。漸漸長大して、然して後乃ち生ずるが如し。解脫は爾らず。生、不生無し。又解脫とは、名けて虛寂と曰ふ、不定有ること無し。不定とは一闍提究竟して移らず。重禁を犯す者は佛道を成せず。是の處有ること無きが如し。何を以ての故に。是の人若佛の正法の中に於て、心淨信を得ば、爾の時に即便一闍提を滅す。若復優婆塞と作ることを得れば、是亦能く一闍提を滅することを得。重禁を犯す者、此の罪を滅し已らば則ち成佛を得。是の故に若輩定して移

【三七】次に解脫處を釋す。

【三八】婆師(ワシシユゴ) 雨時或は夏生と譯す、薬花の名。



らず、佛道を成せずと言はば、是の處有ること無し。眞の解脫の中、都て是の如きの滅盡の事無し。  
 又虛寂とは、法界に墮す、法界性の如き即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又一闍提若  
 盡滅せば、則ち一闍提と稱することを得ざるなり。何等をか名けて一闍提と爲すや。一闍提とは、一  
 切の諸善の根本を斷滅し、心一切の善法を繫縁せず。乃至一念の善を生せず。眞の解脫の中、都て是  
 の事無し。是の事無きが故に即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。(一九) 又解脫とは不可量と  
 名く。譬へば穀聚の其の量知るべきが如し。眞の解脫は則ち是の如くならず。譬へば大海の度量すべ  
 からざるが如し。解脫も亦爾なり、度量すべからず。不可量は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是  
 如來なり。又解脫とは無量法と名く。一りの衆生に多の業報有るが如し。  
 解脫も亦爾なり、無量の報有り。無量の報は即ち眞の解脫なり。眞の解脫  
 は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて廣大と爲す。譬へば大海の與に等しき者無きが如し。解脫も  
 亦爾なり、能く與に等しき無し。與等無きは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫  
 とは、名けて最上と曰ふ。譬へば虚空の最高にして比無きが如し。解脫も亦爾なり、最高にして比無  
 し。高無比の者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは無能過と名く。譬へば  
 師子の所住の處は、一切の百獸能く過ぐる者無きが如し。解脫も亦爾なり、能く過ぐる有ること無し。  
 能過無きは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて無上と爲す。譬へば

【一九】次に其性の廣博を廣す。

北方は、諸方の中の上なるが如し。解脱も亦爾なり、上有ること無しと爲す。無有上の者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無上と名く。譬へば北方の、東方に於て上無しと爲すが如し、解脱も亦爾なり、上有ること無し。無上の者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて恆法と曰ふ。譬へば天の身壞し命終る、是を名けて恆と曰ふ、不恆に非ざるが如きなり。解脱も亦爾なり、是不恆に非ず。不恆に非ざる者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて堅住と曰ふ。(三〇) 法陀羅梅檀カライロは、法陀羅梅檀カライロ、空破又は紫檀と譯す、梅檀は Sandal 沈水に、ンダロ略して沈香と云ふもの是れなり。

沈水の、其の性堅實なるが如し。解脱も亦爾なり、其の性堅實なり。堅實なる者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて不慮と曰ふ。譬へば竹葦の其の體空躁なるが如し。解脱は爾らず。當に知るべし、解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可汚と名く。譬へば牆壁の、未だ塗治を被らざれば、蟲蟻の上に在りて止住遊戯す。若已に塗治し、彩畫彫飾すれば、蟲彩香を聞きて即便住せざるが如し。是の如きの不住に眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて無邊と曰ふ。譬へば聚落の、皆邊表有るが如し。解脱は爾らず。譬へば虚空の邊際有ること無きが如し。解脱も亦爾なり、邊際有ること無し。是の如きの難見は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可見と名く。譬へば空中の鳥迹見難きが如し。是の如きの難見は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱

とは、名けて甚深と曰ふ。何を以ての故に、聲聞、緣覺の入ること能はざる所なり。入ること能はざる者、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又甚深とは、諸佛菩薩の恭敬する所なり。譬へば孝子の父母を供養する功德甚だ深きが如し。功德甚深は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可見と名く。譬へば人有りて自ら頂を見ざるが如し。解脱も亦爾なり。聲聞、緣覺の見ること能はざる所なり。見ると能はざる者は、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無舍宅と名く。譬へば虚空の舍宅有ること無きが如し。解脱も亦爾なり。舍宅と言ふは、二十五有を譬ふ。無有舍宅は、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可取と名く。阿摩勒果は人の取持すべきが如し。解脱は爾らず、取持すべからず。不可取持即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可執と名く。譬へば幻物の執持すべからざるが如し。解脱も亦爾なり、執持すべからず。不可執持即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。

(三) 又解脱とは身體有ること無し。譬へば人有りて、體に瘡癩及び諸の癰疽、顛狂、乾枯を生ずるが如し。眞の解脱の中、是の如きの病無し。是の如きの病無きは、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて一味と爲す。乳の一味の如し。解脱も亦爾なり、唯一味有り。是の如きの一味即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて清淨と曰ふ。水の泥無

【三】 實の名。  
 【三】 阿摩勒果 (Amalaka)。果  
 【三】 更に無瘡癩を廣す。

澄停清淨なるが如し。解脱も亦爾なり、澄停清淨なり。澄停清淨は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて一味と曰ふ。空中の雨一味清淨なるが如し。一味清淨は、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて除卻と曰ふ。譬へば滿月の諸の雲翳無きが如し。解脱も亦爾なり、諸の雲翳無し。諸の雲翳無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて寂靜と曰ふ。譬へば人有りて熱病除愈すれば身に寂靜を得るが如し。解脱も亦爾なり、身に寂靜を得るは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり、又解脱とは即ち是平等なり。譬へば野田の毒蛇、鼠狼の俱に殺心有るが如し。解脱は爾らず、殺心有ること無し。殺心無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又平等とは、譬へば父母心を子に等しうするが如し。解脱も亦爾なり、其の心平等なり。心平等の者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無異處と名く。譬へば人有りて、唯上妙清淨の屋宅に居して更に異處無きが如し。解脱も亦爾なり、異處有るを無し。異處無き者即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて知足と曰ふ。譬へば饑人の甘饌に値遇して之を食するに厭くと無きが如し。解脱は爾らず、乳糜を食すれば更に須ふる所無きが如し。更に所須無きは、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて斷絶と曰ふ。人縛せられんに、縛を斷ちて脱を得るが如し。解脱も亦爾なり。一切の疑心結縛を斷絶す。是の如きの斷疑即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは到彼岸と名

く。譬へば大河に此の彼岸有るが如し。解脱は爾らず、此岸無しと雖も而も彼岸有り。彼岸有るは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて默然と曰ふ。譬へば大海の其の水汎長すれば諸の音聲多きが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは名けて美妙と曰ふ。譬へば衆藥に訶梨勒を雜すれば其の味則ち苦きが如し。解脱は爾らず味甘露の如きは、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは諸の煩惱を除く。譬へば良醫の諸藥を和合して善く衆病を療すが如し。解脱も亦爾なり能く煩惱を除く。煩惱を除くは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて無逆と曰ふ。譬へば小舎の多人を容れざるが如し。解脱は爾らず容受する所多し。容受する所多きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは諸愛を滅し淫欲を雜へざるに名く。譬へば女人の諸の愛欲多きが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。如來是の如きの貪欲、瞋恚、愚癡、憍慢等の結有ること無し。又解脱とは名けて無愛と曰ふ。愛に二種有り。一つには餓鬼愛、二つには法愛なり。眞の解脱は餓鬼愛を離る。衆生を憐憫するが故に法愛有り。是の如きの法愛、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは我我所を離る、是の如きの解脱は、即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは即ち是滅盡なり。諸有の貪を離る。是の如きの解脱、即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは即ち是救護なり。能く一切の諸の怖畏の者を救ふ。是の如きの解脱は、即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。

〔三〕又解脱とは即ち是歸處なり。若是の如きの解脱に歸依する有らば、餘依を求めず。譬へば人有りて、王に依恃すれば餘依を求めず。復王に依ると雖も、則ち動轉有るが如し。解脱に依る者は動轉有ること無し。無動轉の者、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは、名けて屋宅と爲す。譬へば人有りて曠野を行くに、則ち險難有るが如し。解脱は爾らず、險難有ること無し。無險難は、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは是無所畏なり。師子王の、諸の百獸に於て怖畏を生ぜざるが如し、解脱も亦爾なり、諸の魔衆に於て怖畏を生ぜず。無怖畏の者即ち眞の解脱なり。眞の解脱

〔三〕次に更に解脱處を廣す。

は即ち是如來なり。又解脱とは進隔有ること無し。譬へば隘路の乃至二人並び行くを受けざるが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又不進有り。譬へば、人有りて虎を畏れ井に墮つるが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又不進有りて、大海の中、壞れたる小船を捨てて堅牢の船を得、堅牢の船を得て之に乗じて海を渡り、安隱の處に至りて心快樂を得るが如し。解脱も亦爾なり、心快樂を得。得快樂は、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは諸の因縁を抜く。譬へば、乳に因りて酪を得、酪に因りて酥を得、酥に因りて醍醐を得るが如し。眞の解脱の中、都て是の因無し。是の因無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは能く憍慢を伏す。譬へば、大王の小王を慢るが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。

來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは諸の放逸を伏す。謂はく放逸の者は多く貪欲有り。眞の解脱の中、是の名有ること無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは能く無明を除く。上妙の酥諸の滓穢を除き、乃ち醍醐と名くるが如し。解脱も亦爾なり、無明の滓を除きて眞明を出す。是の如きの眞明即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて寂靜純一無二と爲す。空野の象、獨一にして侶無きが如し。解脱も亦爾なり、獨一無二なり。獨一無二は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて堅實と爲す。竹葦、蕨麻の莖幹空虛にして子堅實なるが如し。佛如來を除きて、其餘の人天は皆不堅實なり。眞の解脱は一切の諸の有流等を遠離す。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、能く覺了して我を増益すと名く。眞の解脱は亦復是の如し。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは諸有を捨つと名く。譬へば、人有りて食し已りて吐くが如し。解脱も亦爾なり、諸有を捨つ。諸有を捨つるは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて決定と曰ふ。婆師華の香の、七葉の中に無きが如し。解脱も亦爾なり。是の如きの解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて水大と曰ふ。譬へば、水大の諸大に於て勝り、能く一切の草木種子を潤すが如し。解脱も亦爾なり、能く一切の有生の類を潤す。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、名けて曰つて入と爲す。門戸有らば則ち通入の路なり。金性の處、金則ち得可きが如し。解脱も亦爾なり、彼の門戸の如し。無我を修する者則ち中

に入ることを得。是の如きの解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて曰つて善と爲す。譬へば、弟子の師に隨逐して善く教勅を奉すれば、名けて善と爲すことを得るが如し。解脱も亦爾なり。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは出世法と名く。一切法に於て最も出過と爲す。衆味の中、酥乳最勝なるが如し。解脱も亦爾なり。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、名けて不動と曰ふ。譬へば、門闔、風動すこと能はざるが如し。眞の解脱は亦復是の如し。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは無濤波と名く。彼の大海の、其の水濤波うつが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、譬へば宮殿の如し。解脱も亦爾なり。當に知るべし、解脱即ち是如來なり。又解脱とは名けて所用と曰ふ。閻浮檀金

の多く任ぬる所有りて、能く是の金の過惡を説く有ること無きが如し。解脱も亦爾なり、過惡有ること無し。過惡有ること無き、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、嬰兒行を捨つ。譬へば、大人の小兒行を捨つるが如し。解脱も亦爾なり、五陰を除捨す。五陰を除捨する、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて究竟と曰ふ。繫を被る者、繫より脱るることを得、洗浴清淨にして、然して後家に還るが如し。解脱も亦爾なり、畢竟清淨なり。畢竟清淨、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。

【二四】次に三度無著疣を廣す。

【二四】又解脱とは無作樂と名く。無作樂とは、已に貪欲、瞋恚、癡を吐くが故に。譬へば、人有りて誤



ちて毒薬を飲み、毒を除くが爲の故に即ち吐薬を服せん。既に吐くを得已りて、毒即ち除愈し身安樂を得るが如し。解脱も亦爾なり。諸の煩惱、結縛の毒を吐き身安樂を得、無作樂と名く。無作樂は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは 二重 四種の毒蛇煩惱を斷ずと名く。煩惱を斷ずるは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは諸有を離れ、一切の苦を滅し一切の樂を得、永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じ、一切の煩惱の根本を拔斷すと名く。根本を拔するは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは一切の有爲の法を斷じ、一切の無漏の善法を出生す。塞ぐ諸道を斷つ、所謂若は我、無我、非我、非無我なり。唯取著を斷じて我見を斷せずと名く。我見とは名けて佛性と爲す。佛性とは即ち眞の解脱なり。眞の解脱とは即ち是如來なり。又解脱とは不空空と名く。空空は無所有と名く。無所有とは、即ち是外道、尼犍子等の計する所の解脱なり。而も是の尼犍實に解脱無し、故に空空と名く。眞の解脱は即ち是の如くならず、故に不空空なり。不空空は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて不空と曰ふ。水、酒、乳、酪、酥、蜜等の餅の、水、酒、酪、酥、蜜無き時と雖も、猶故名けて水等の餅と爲すことを得、而も是の餅等の、空及以不空と説くべからず。若空と言はば、則ち色、香、味、觸有ることを得ず。若不空と言はば、而も復水酒等の實有ること無きが如し。解脱も亦爾なり。色及以非色と説くべからず、空及以不空と説くべからず。

【三】四種の毒蛇。貪、瞋、癡、慢の四鈍使を取つて今の四蛇とす。此四、見思に通じ能く法身の壽命を損傷するが故なり。

らず。若空と言はば、則ち常、樂、我、淨有ることを得ず。若不空と言はば、誰か是の常、樂、我、淨を受くる者ぞ。是の義を以ての故に、空及以不空と説くべからず。空とは二十五有及び諸の煩惱、一切の苦、一切の相、一切の有爲行無きを謂ふ。餅に酪無きが如き、則ち名けて空と爲す。不空とは眞實、善色、常樂、我淨、不動、不變を謂ふ。猶ほ彼の餅の色、香、味、觸の如し、故に不空と名く。是の故に解脱は、譬へば、彼の餅の如し。彼の餅は、縁に遇はば則ち破壊すること有り。解脱は爾らず、破壊すべからず。不可破壊即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて離愛と曰ふ。譬へば人有りて、愛心に釋提桓因、大梵天王、自在天王を希望するが如し。解脱は爾らず。若阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得已らば、愛無く疑無し。愛無く疑無き、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。若解脱に愛、疑有りと言はば、是の處有ること無し。又解脱とは諸有の貪を斷じ、一切の相、一切の繫縛、一切の煩惱、一切の生死、一切の因縁、一切の果報を斷ず。是の如きの解脱即ち是如來なり。如來即ち是涅槃なり。一切の衆生生死の諸の煩惱を怖畏するが故に。故に三歸を受く。譬へば、羣鹿の獵師を怖畏し、既に免離を得るが如し。若一跳を得れば則ち一歸を譬ふ。是の如きの三跳、則ち三歸を譬ふ。三たび跳るを以ての故に則ち安樂を受く。衆生も亦爾なり。四魔、惡獵師を怖畏するが故に。三歸依を受く。三歸依の故に則ち安樂を得。安樂

【二六】 是より總じて解脱を結す  
 其中初に總じて結す。  
 【二七】 三歸は、三歸依の略、歸  
 依佛、歸依法、歸依僧是れなり

を受くるは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如来なり。如来は即ち是涅槃なり。涅槃は即ちは無盡なり。無盡は即ち是佛性なり。佛性は即ち是決定なり。決定は即ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し涅槃、佛性、決定如来、是一義ならば、云何が説きて三歸依有りと言ふ。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、一切衆生生死を怖畏す、故に三歸を求む。三歸を以ての故に則ち佛性、決定、涅槃を知る。善男子、法名一義異なる有り、法名義俱異なる有り。名一義異とは、佛常、法常、比丘僧常なり。涅槃虚空皆是常、是を名一義異と名く。名義俱異とは、佛名けて覺と爲し、法不覺と名け、僧を和合と名く。涅槃を解脱と名く。虚空を非善と名け、亦無闇と名け、是を名義俱異と爲す。善男子、三歸依は亦復是の如し。名義俱異なり、云何ぞ一と爲ん是の故に我、摩訶波闍波提に告ぐらく、』

橋曇彌、我を供養すること莫れ、當に僧を供養すべし。若し僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得。摩訶波闍波提即ち我に答へて言はく、『衆僧の中、佛無く法無し。云何ぞ説きて衆僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得と言はん。』我復告げて言はく、『汝、我が語に隨へば則ち佛を供養す。解脱の爲の故に即ち法を供養す。衆僧受者則ち僧を供養す。善男子、是の故に三歸は一と爲すことを得ず。善男子、如来或時一を説きて二三と爲し三を説きて一と爲す。是の如き

【一】 次は論義の文。其中、初に三歸を問ふ。之に問答あり。

【二】 摩訶波闍波提 (Mahāvīra) ラジャヤトパティ (Rajayātipati) 大生主と譯す。釋尊の轉母なり。

【三】 橋曇彌 (Tumami) は、摩訶波闍波提の請。

の義は諸佛の境界にして、是聲聞、緣覺の知る所に非ず。』迦葉、復言さく、『佛の所説の如きは、畢竟安樂を涅槃と名くと、是の義云何。夫涅槃とは身を捨てて智を捨つ。若し、身を捨てれば誰か當に樂を受くべき。』佛の言はく、『善男子、譬へば人有り、食し已りて心悶え、外に出でて吐かんと欲す。既に吐くことを得已りて而も復回還る。同伴之に問ふ、『汝今患ふる所、竟に差ゆと爲んや否や。而も復來還す。』答へて『已に差身安樂を得』と言ふが如し。如來も亦爾なり。畢竟

じて二十五有を遠離し、永く涅槃安樂の處を得。動轉すべからず、盡滅有ること無し。一切の受を斷ず、無受樂と名く。是の如きの無受を名けて常樂と爲す。若し如來受樂有ると言はば、是の處有ること無し。是の故に畢竟如來なり。』

迦葉、復言さく、『不生不滅是解脱なりや。』是の如く是の如し。善男子、不生不滅、即ち是解脱なり。是の如きの解脱、即ち是如來なり。』

迦葉、復言さく、『佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、是の事然らず。』世尊、何が故ぞ然らざる。』善男子、迦蘭伽及び命命鳥の其の聲清妙なるが如き、寧ろ鳥鵲の音に同すべきや不や。』不なり世尊、鳥鵲の聲は命命鳥等に比すれば百千萬倍、比を爲すべからず。』迦葉、復言さく、『迦蘭伽等、其の

脱なるべし。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、是の事然らず。』世尊、何が故ぞ然らざる。』善男子、迦蘭伽及び命命鳥の其の聲清妙なるが如き、寧ろ鳥鵲の音に同すべきや不や。』不なり世尊、鳥鵲の聲は命命鳥等に比すれば百千萬倍、比を爲すべからず。』迦葉、復言さく、『迦蘭伽等、其の

脱なるべし。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、是の事然らず。』世尊、何が故ぞ然らざる。』善男子、迦蘭伽及び命命鳥の其の聲清妙なるが如き、寧ろ鳥鵲の音に同すべきや不や。』不なり世尊、鳥鵲の聲は命命鳥等に比すれば百千萬倍、比を爲すべからず。』迦葉、復言さく、『迦蘭伽等、其の

脱なるべし。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、是の事然らず。』世尊、何が故ぞ然らざる。』善男子、迦蘭伽及び命命鳥の其の聲清妙なるが如き、寧ろ鳥鵲の音に同すべきや不や。』不なり世尊、鳥鵲の聲は命命鳥等に比すれば百千萬倍、比を爲すべからず。』迦葉、復言さく、『迦蘭伽等、其の

【一】次に無作樂を問ふ。之に問と答あり。  
【二】次に不生不滅を問ふ。之に五番の問答あり。  
【三】迦蘭伽(Kalavinka)。また迦陵頻迦と云ひ、頻迦鳥とも略稱す。好聲と譯す。  
【四】命命鳥。梵語Mandavataの譯名、また共命鳥とも云ふ。

聲微妙にして身も亦同じからず。如來云何ぞ之を烏鵲に比せん。芥子を須彌山に比するに異なること無し。佛と虚空とも亦復是の如し。迦蘭伽の聲は佛聲を譬ふべし、以て烏鵲の音を譬ふべからず。爾の時に佛、迦葉を讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝今善く甚深難解を解す。如來時有りて、因縁を以ての故に彼の虚空を引いて以て解脱を譬ふ。是の如きの解脱即ち是如來なり。眞の解脱は一切の人天能く匹を爲す無し。而して此の虚空、實は其の譬に非ず。衆生を化せんが爲の故に虚空を以て非喻を喻と爲す。當に知るべし、解脱即ち是如來なり。如來の性即ち是解脱なり。解脱、如來二無く別無し。善男子、非喻とは無比の物の如き引いて喩ふべからず。因縁有るが故に、引いて喩を得べし。經の中、面貌の端、正月の盛滿の如く、白象の鮮潔猶し雪山の如し』と説くが如し。滿月は即ち面に同ずることを得ず、雪山は即ち是白象なることを得ず。善男子、喩を以て眞の解脱を喩ふべからず。衆生を化せんが爲の故に喩を作すのみ。諸の譬喩を以て諸法の性を知る、皆亦是の如し。迦葉、復言さく、『云何が如來二種の説を作したまふ。』佛の言はく、『善男子、譬へば人有りて刀劍を執持し、瞋恚心を以て如來を害せんと欲せんに、如來和悅して悲恨の色無きが如し。是の人當に如來身を壞し逆罪を得べきや不や。』『不なり世尊。何を以ての故に。如來身界壞すべからざるが故に。所以は何ん。身聚無く、唯法性有り。法性の性理壞すべからざるを以て、是の人云何ぞ能く佛身を壞せん。直ちに惡心を以ての故に無間を成す。是の因縁を以て諸の譬喩を引いて實法を知ることを得。』爾の時に佛、

迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、我の説かんと欲する所汝已に之を説けり。又善男子、譬へば悪人の其の母を害せんと欲し、野田に住みて穀積の下に在り。母爲に食を送る。其の人見已りて尋いで害心を生じ、便ち前んで刀を磨す。母時に知り已り、逃れて積中に入る。其の人刀を持ちて積を繞りて徧く斫る。斫り已りて歡喜し已害の想を生ず。其の母尋いで出で、家の中に還り至るが如し。意に於て云何。是の人無罪を成就するや不や。』世尊、定説すべからず。何を以ての故に。若罪有りと説かば、母身壞すべし。身若壞せざれば云何ぞ有と言はん。若無罪と説かば已害の想を生じ心歡喜を懷かん、云何ぞ無と言はん。是の人逆罪を具足せずと雖も、而も亦是逆なり。是の因縁を以て諸の譬喩を引いて實法を知ることを得。』佛、迦葉を讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、是の因縁を以て我種種の方便、譬喩を説きて以て解脱を譬ふ。無量阿僧祇の譬を以てすと雖も、而も實は譬を以て比を爲すべからず。或は因縁有らば亦譬説すべし、或は因縁有らば引譬すべからず。是の故に解脱、是の如きの無量の功德を成就し、涅槃に趣かば、涅槃如來も亦是の如く無量の功德有り、是の如き等の無量の功德成就し満つるを以ての故に、大般涅槃と名く。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今始めて如來の至處盡くることあること無しと爲すことを知る。處若無盡ならば、當に知るべし、壽命も亦無盡なるべし。』佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝今善能く正法を護持す。若善男子、善女人の煩惱、諸の結縛を斷せんと欲する者有らば、當に是の如きの護持正法を作すべし。』

# 卷の第六

## 四依品第八

佛、復迦葉に告げたまはく、**一**善男子、是の大般涅槃微妙經の中、**三**種の人有り。能く正法を護り、正法を建立し、正法を憶念す。能く多く利益し、世間を憐憫す。世間の依と爲りて人天を安樂にす。**三**何等をか四つと爲す。人有り、世に出でて煩悩性を具す、是を第一と名く。**二**須陀洹の人、**六**斯陀含の人、是を第二と名く。**三**阿那含の人、是を第三と名く。**四**阿羅漢の人、是を第四と名く。是の四種の人世に出現して能く多く利益し、世間を憐憫す。世間の依と爲りて人天を安樂にす。**五**何が名けて**二**具

四依品第八

【一】大般涅槃微妙經。この涅槃經の別稱。

【二】四種の人あり等。四種は四依なり。初依は似位、後三は眞位、能護と建立と、憶念との三句は自行、利益は化他、この二徳は通じて四依の徳なり。有佛法處、無佛法處に通じて人天の依止となり利益講敷するが故に四依と云ふ。衆の爲に依止と作るの間に答ふる中、初に名相を標す。其中初に標章敷。

【三】次に列敷敷。

【四】煩悩性を具す。是を第一と名く。後の四果を小乘教當分の聲聞に約して解するに准

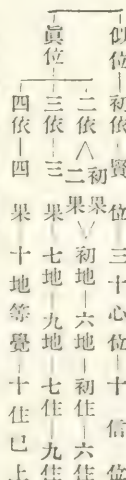
すれば、今の第一即ち初依は初果已前聲聞三賢の似位を通稱す。然るに後の四果は今と合して大乘の四依に約して解すべし。故に今の第一は安註に所謂別教の住、行、向の三十心の菩薩圓教の十倍位に當り、次の初果二果は合して第二依にして、別教の初地より六地に至り圓教の初住より六住に當り、第三果は第三依にして別教の七八九地圓教の九住位に當り、第四果即第四依は別教の第十地等覺圓教の第九住已上を指すと云ふべし。既に聲聞の三賢、別教の三賢、圓教の住前は共に或は通惑未

煩惱性と爲す。若人有りて能く禁戒を奉持し、威儀具足して正法を建立す。佛に従ひて聞く所の其の文義を解し、轉じて他人の爲に分別宣説す。所謂少欲、多欲、非道なり。廣く是の如きの(二)八大人覺を説き、犯罪の者有らば、教へて發露懺悔して滅除せしめ、善く菩薩の方便所行祕密の法を知る。是を凡夫と名く、第八人に非ず。第八人は凡夫と名けず。名けて菩薩と爲し、名けて佛と爲さず。(三)第二人は須陀洹、斯陀含と名く。若正法を得れば正法を受持す。佛に従ひて法を聞き其の所聞の如くす。聞き已りて書寫し、受持、讀誦し、轉じて他の爲に説く。若法を聞き已りて寫さず、受けず、持せず、説かず。奴婢不淨の物を佛畜ふことを聽すと言はば、是の處有ること無し、是を第二人と名く。是の如

だ斷ぜず、或は通惑は斷ずれども別惑は未だ斷ぜざるが故に當教に約して煩惱性を具す

一六二  
と云ふ。文を案じて解すべし。次に圖示すべし。

(聲聞位) (別教) (圓教)



【五】須陀洹 (Srotāpanna)

預流と譯す。始めて聖者の流類に入るの義なり。三界の見惑を斷じたる聲聞をいふ。

【六】斯陀含 (Sakṛdāgāmi)

一來と譯す。欲界三品の思惑を殘存し、今一度娑婆に來りて斷する要あるの義なり。欲界前六品の思惑を斷じたる聲聞を云ふ。大乘の解に前説の如し。

【七】阿那含 (Anāgāmi)

不還と譯す。欲界の惑を斷盡し、ために再び欲界に還生せざる

の義なり。欲界九品の思惑を斷じたる聲聞をいふ。大乘の解は前説の如し。

【八】阿羅漢 (Arhat)

應供と譯す。智徳圓滿し、世間の供養に應ずる價值あるの義なり。非想處に至る一切の見惑思惑を斷じ盡したる極果の聲聞をいふ。大乘の解は前説の如し。

【九】次に示相數を明す。其中

初に四人の相を示す。中、先づ初依。之に伏道、修行、位相の三段あり。



きの人、未だ **【二】** 第二、第三の住處を得ず。名けて菩薩と爲す、已に **【二四】** 受記を得たり。 **【二五】** 第三人は阿那含と名く。阿那含とは正法を誹謗し、若は奴婢、僕使、不淨の物を畜ふことを聽すと云ふ。外道の典籍、書論を受持し、及び客塵煩惱に障へられ、諸舊の煩惱に覆蓋せらる。若は **【二六】** 如來の眞實舍利を藏し、及び外病に惱害せられ、或は **【二七】** 四大毒蛇に侵さる。我を論說せば悉く是の處無し。若無我を説かば斯是の處有り。世法を説著せば是の處有ること無し。若大乘を説き、相續して絶えざれば斯是の處有り。若所受の身八萬戶蟲有らば亦是の處無く、永く淫欲を離れ、乃至夢中に不淨を失はず。斯是の處有り。臨終の日怖畏を生せば亦是の處無し。阿那含とは何の謂と爲すや。是の人不遷、上に説く所の如く、

四依品第八

**【二〇】** 具煩惱性。煩惱未だ斷ぜざるを以て具と云ひ、現行を斷じたるも種子まだ斷ぜざるが故に惡體尙在り、故に性と云ふ。  
**【二一】** 八大人覺とは、聲聞及び菩薩の修行上に於ける階級を種種に分つ中、三乘共通の十地と云へるあり。この十地のうち第三の八人地は斷惑の位ゆゑ菩薩にして、凡天に非ず。但し斷惑全盡に非ざるゆゑ佛にも非ず。この八人地は十六心のうち第八の忍位に進みしものゆゑ第八人と名く。遺教經に出づ、少欲・知足・遠離・精進・正念・正定・正慧・不戲論是れなり。  
**【二三】** 次に二依。之に證行、位の三段あり。

**【二四】** 受記。必ず當に成佛すべきことの記別即ち豫言を佛より受くるを云ふ。  
**【二五】** 次に三依。之に證、行、位の三段あり。證中略して三業の清淨を示す。  
**【二六】** 如來の眞實舍利を藏し、眞實舍利とは法身、佛性なり。故に之を藏するは即ち如來藏の謂なり。  
**【二七】** 四大毒蛇。身體を構成せる地、水、火、風の四大が、増損して人身を惱害すること毒蛇の如きを云ふ。

所の如く、所有の過患永く汚すこと能はずして往反周

旋す。名けて菩薩と爲す。已に受記を得れば、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。是則ち名けて第三人と爲すなり。第四人は阿羅漢と名く。阿羅漢とは諸の煩惱を斷じ、重擔を捨て、己利を速得し、所作已に辦じ、第十地に住す。自在智を得て人の所樂に隨ひ、種種の色像悉く能く示現す。莊嚴する所の如く佛道を成せんと欲すれば、即ち能く成ずることを得。能く是の如きの無量の功德を成ずるを阿羅漢と名く。是を四人世に出現して能く多く利益し、世間を憐憫

し世間依と爲りて人天を安樂にす。人天の中に於て最尊最勝なりと名く。猶し如來を人中勝と名け、歸依處と爲すが如し。迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今是の四種の人に依らず。何を以ての故に。』瞿師羅經の中、佛、瞿師羅が爲に説くが如し。若天、魔、梵、破壞を欲するが爲に變じて佛形と爲り、具足莊嚴し、三十二の相、八十種の好、圓光一尋、面部圓滿、猶し月の盛明なるがごとく、眉間の毫相白きこと珂雪に逾ゆ。是の如く莊嚴し來りて汝に向はば、汝當に檢校して其の虛實を定むべし。既に覺知し已らず、應當に降伏すべし。世尊、魔等尙能く變じて佛形と作る。況や變じて羅漢等四種の身と作り、空中に坐臥し、左脅水を出し、右脅火を出し、身煙炎を出すこと、猶し火聚の如くなること能はざらんや。是の因縁を以

【一六】 阿耨多羅三藐三菩提(Asamkalamahāyaka-sambodhi)の無上正等覺と譯す、佛果の德稱なり。

【一七】 次に四依之に證位、行の三段あり。

【一八】 次に總じて德を歎す。

【一九】 是より利益を辨す。其中初に聲聞に降することを教ふる中、先づ、初に問の文之に唱不依、釋不依、結の三段あり。

【二〇】 瞿師羅(Gotama) 安註に美音と譯すと云ふ。

【二一】 應當に降伏す

て、我是の中に於て心信を生ぜず。或は所説有れども稟受すること能はず。亦敬念して依止と作ること無けん。「佛の言はく、(二三)『善男子、我が所説に於て若疑を生せば、尙受くべからず。況や是の如き等をや。是の故に應當に善く分別して、是の善、不善、作す可く作す可からざるを知る。是の如く作し已りて長夜に樂を受く。(二四)善男子、譬へば偷狗の夜人舎に入るに、其の家の婢使若覺知せば、即ち驅置すべし、汝疾く出で去れよ。若出でざれば當に汝が命を斷つべし。偷狗之を聞き、即ち去りて還らざるが如し。(二五)汝等今より亦、是の如く波旬を降伏すべく、是の言を作すべし、波旬汝今、是の如きの像を作すべからず。若故作さば、當に(二六)五繫を以て汝を繫縛すべし。』魔是を聞き已りて、便ち當に還去すべし。彼の偷狗の更に復還らざるが如し。』(二七)迦葉、佛に白して言さく、「世尊、佛、瞿師羅長者の爲に説くが如し。若能く是の如く魔を降伏する者は、亦(二八)大般涅槃に近くことを得べし。如來、何ぞ必ず是の四人を説きて依止處と爲す。是の如きの四人、言説すべき所、未だ必ずしも信すべからず。」(二九)佛、迦葉に告げたま

【二三】次に答。其中初に問の難答を示す。  
【二四】次に正しく魔を降す。其中初に魔を擧ぐ、之に魔來、魔降、魔退あり。  
【二五】次に合。之に魔來、魔降、魔退あり。  
【二六】五繫。二説あり、一に五繫繋なりと、一に五處を繋ぐなりと。前者は五種の不淨觀にて魔魔を觀伏するを云ひ、後者は五門具魔を觀伏するを云ふ。  
【二七】次に答。其中、初に問を示す。  
【二八】大般涅槃 (Mahaparinirvana) 。般涅槃は佛道修行者の理想とする所なり。  
【二九】次に何ぞ人に依ることを用ひんやを明す。

はく、「善男子、我が所説の如きも亦復是の如し、爾らずと爲すに非ず。善男子、我が聲聞の肉眼有る者の爲に説きて降魔と言ふ。大乘を修學する人の爲に説かず。聲聞の人は、天眼有りとも雖も故肉眼と名く。大乘を學する者は、肉眼有りとも雖も乃ち佛眼と名く。何を以ての故に。是の大乗經を名けて佛乘と爲す。此の如きの佛乘は最上最勝なり。善男子、譬へば人有りて勇健威猛なるに、怯弱の者有り、常に來りて依附す。其の勇健の人、常に怯者に教へて、「汝當に是の如く、弓を持し、箭を執り、稍道、長鈞、買索を修學すべし。」又復告げて言はく、「夫鬪戰する者は、刀を履むが如しと雖も自ら怖畏の念を生ずべからず。當に入天を視て、輕弱の想を生ずべし。自ら心を生じて勇健の意を作すべし。或時人有りて、膽勇有ること無く、詐りて健相を作し、弓刀種種の器仗を執持して以て自ら莊嚴し、陣中に來至して聲を厲まし大いに呼ばう、「汝是の人に於て亦復愛怖を生ずべからず。是の如きの輩人、若汝等の怖畏せざるを見れば、當に知るべし、是の人久しからずして散壞せんこと彼の儻狗の如し。」善男子、如來も亦爾なり。諸の聲聞に告げたまはく、「汝等、魔波旬を畏るべからず。若魔、波旬、佛身を化作して汝が所に至らば、汝當に精勤し、其の心を堅固にして、彼をして降伏せしむべし時に魔即ち當に愁憂して樂まず、道を復して去るべし。」

【三】次に正しく答ふ。其中初に法の文也。之に、兩章門を唱ふ、雙べて小大を釋するの二段あり。

【三】次に譬。其中初に佛鬪戰に教ふるを譬ふ。之に鬪譬、合譬の二段あり。

【三】弓を持し。四念處は弓の如く、五善根に箭の如く、神通は樂の如く、五繫は買索の如し。

善男子、彼の健人の他に從ひて習はざるが如し。大乘を學する者も亦復是の如し。種種の深密經典を聞くことを得、其の心欣樂して驚怖を生ぜず。何を以ての故に。是の如く大乘を修學するの人已に曾て過去の無量萬億の佛を供養し、恭敬し、禮拜するが故に、無量億千の魔衆の、來りて侵燒せんと欲する有りと雖も、是の事の中に於て終に驚畏せず。善男子、譬へば人有りて 阿竭陀藥を得ば、一切の毒蛇等の畏を畏れず。是の藥力の故に、亦能く一切の諸毒を消除するが如し。是の大乗經も亦復是の如し。彼の藥力の如く一切の諸魔惡毒を畏れず。亦能く降伏して復起たざらしむ。

復次に善男子、譬へば龍有りて性甚た弊惡なり。人を害せんと欲するの時、或は眼を以て視、或は氣を以て嘘す。此の故に一切の師子、虎豹、豺狼、狗犬皆怖畏を生ず。是等の惡獸、聲を聞き形を見、或は其の身に觸るれば命を亡はざる無し。善兇者有りて、咒力を以ての故に、能く是の如きの諸の惡毒龍、金翅鳥等、惡象、師子、虎豹、豺狼をして、柔善調順して悉く乘御に任す。是の如き等の獸、彼の善呪を見て、即ち調伏するが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。魔波旬を見て、皆恐怖を生ず。而も魔波旬も亦復畏懼の心を生ぜず、猶魔業を行す。大乘を學する者も亦復是の如し。諸の聲聞の魔事を怖畏し、此の大乗に於て信樂を生ぜざるを見る。先方便を

【三四】次に佛菩薩を教へざるを譬ふ。之に、降を教へず、不降を釋し、譬顯の三段あり。  
 【三五】深密經典。摩佛一如の法門を聞くを云ふ。  
 【三六】阿竭陀(Agata)。無價、無病と譯す、藥の名なり。  
 【三七】次に菩薩聲聞を教ふるを譬ふ。之に譬、合の二段あり。  
 【三八】魔波旬(Mara Prince)。魔は魔羅の略、天魔の總名なり。波旬は魔王の別名なり。

以て諸魔を降伏し、悉く調善にして乘と爲るに堪任せしむ。因つて爲に廣く種種の妙法を説く。聲聞、緣覺、魔を調するを見已りて乃ち怖畏を生じ、此の大乗無上の正法に於て、方に信樂を生ず。是の如きの言を作さく、「我等今より此の正法の中に於て障閼を作すべからず。」

〔三五〕次に善男子、聲聞、緣覺、諸の煩惱に於て而も怖畏を生ず。大乘を學する者は都て恐懼無く、大乘を修學すれば是の如きの力有り。是の因縁を以て、上に説く所の者は彼の聲聞、緣覺をして諸魔を調伏せしめんと欲するが爲にし、大乘の爲に非ず。是の大涅槃微妙の經典は、消伏すべからず、

甚奇甚特なり。若聞者有りて、聞き已りて信受し、能く如來是常住法とし信ぜん。是の如きの人は、甚だ希有と爲す、優曇華の如し。我涅槃の後、若是の如きの大乘微妙の經典を聞くことを得て、信敬の心を生ずる有らん。當に知るべし、是等は未來世百千億劫に於て惡道に墮せず。』

〔四一〕爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、『善男子、我涅槃の後當に百千無量の衆生、是の大涅槃微妙の經典を誹謗して信せざる有るべし。』

〔四二〕迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、是の諸の衆生、佛の滅後に於て久近便ち當に是經を誹謗すべし。世尊、復何等の純善の衆生有りて、當に能く是の謗法の者を拔濟すべき。』

〔四三〕佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、我般涅槃して後四十年

〔三五〕次に結成。之に聲聞の爲にするを結す、菩薩を教へざるを結す、雙べて兩意を結するの三段あり。  
〔四一〕優曇華。具さに優曇波羅(Uddumbara)といふ、靈瑞と譯す。  
〔四二〕是より出時を明す。其中初に佛通じて時を説く。  
〔四三〕次に迦葉別して問ふ。其中、初に問の文。之に兩問あり。  
〔四四〕次に答。其中初に不如法の時を答ふ。

の中、閻浮提に於て廣行流布し、然して後乃ち當に地に隱没すべし。善男子、譬へば甘蔗、稻米、

石蜜、酥酪、醍醐の之有る處に隨ひて、其の土の人民、皆「是の味、味中の第一」と言はんが如し。

或は復人有りて、純ら粟米及び穄稗子を食せん。是の人も亦、「我が食する所の者、最も第一と爲す」

と言はん。是薄福の人、業報を受くるが故なり。若是福人は、耳初て粟稗の名を聞かず、食する所は

唯是糠糧、甘蔗、石蜜、醍醐なり。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。鈍根薄福は聽聞を樂はず。

彼の薄福の、糠糧及び石蜜等を憎惡するが如し。二乘の人も亦復是の如し。

無上の大涅槃經を憎惡す。或は衆生有りて、其の心欣樂して是の經を聽受

し、聞き已りて歡喜し誹謗を生ぜず。彼の福人の糠糧を食するが如し。善

男子、譬へば王有りて深山の險難惡處に居在し、甘蔗、糠糧、石蜜有りと

雖も、得難きを以ての故に、貪惜積聚して敢て啖食せず。其の盡くること

有らんことを懼れて、唯粟稗を食す。異國の王有り、聞きて之を憫み、即

ち車を以て糠糧、甘蔗を載せて之を送與す。其の王、得已りて即便分佈し、舉國共に食す。民既に食

し已りて皆歡喜を生じ、咸く是の言を作さく、「彼の王に囚るが故に、我をして是の希有の味を得しむ」

と。善男子、是の四種の人も亦復是の如し。此の無上大法の將と爲り、是の四種の中、或は一人有り

て他方無量の菩薩の、是の如きの大乗經典を學して、若は自ら書寫し、若は他をして書せしむと雖も、

●●● 閻浮提 (Jambudvīpa)。  
須彌山の南方に當れる大洲の  
名、吾人の生棲せる世界なり。  
【四五】 次に如法の人能く濟救す  
るを答ふ。其中、先づ正答。  
之に小大を褒貶し、正しく救  
濟を明すの二段あり。

利養の爲の故に、稱譽の爲の故に、解法の爲の故に、依止の爲の故に、用ひて其の餘經に貿易するが爲の故にして、廣く他人の爲に宣説する能はざるを見る。是の故に是の微妙の經典を持して彼方に送し、彼の菩薩に與へて無上菩提の心を發し、菩提に安住せしむ。是の菩薩、是の經を得已りて即便廣く他人の爲に演説し、無量の衆をして是の如きの大乗の法味を受くることを得しむ。皆悉く是此の一菩薩の力なり。未だ聞かざる所の經を悉く聞くことを得しむ。彼の人民の王力に因るが故に希有の食を得るが如し。

【四六】 次に迦葉の料簡を明す。  
人の二段あり。

【四七】 次に迦葉の料簡を明す。  
其中初に問。

【四八】 次に答。  
正法の餘八十年。正法は

其の地即ち是金剛なり。是の中の諸人も亦金剛の如し。若能く是の如きの經を聽く者有らば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を退かず。其の所願に隨ひて悉く成就を得。我が今日宣説すべき所の如く、汝等比丘、善く受持すべし。若衆生の是の如きの經典を聽問すること能はざる有らば、當に知るべし、是の人は甚だ哀憫すべし。何を以ての故に。是の人は是の如きの大乗經典の甚深の義を受持すること能はざるが故なり。【四七】 迦葉、佛に白して言さく、『世尊、如來の滅後四十年の中、是の大乗典

【四九】 今この正法の時季を過ぎて後八十年の意なり。

大涅槃經、閻浮提に於て廣行流布し、是を過ぎて已後地に沒せば、卻後久如にして復當に還つて出づべきや。』佛の言はく、『善男子、若我が正法の餘八十年、前四十年、是の經復當に閻浮提に於て大



「法雨を雨すべし。」(五) 迦葉、復佛に白して言さく、「世尊、是の如きの經典、(五) 正法滅するの時、正戒破るの時、非法増長するの時、如法の衆生無きの時、(五) 誰か能く聽受し、奉持讀誦して、其をして通利せしめ、供養恭敬し、書寫解說せん。唯願はくは如來、衆生を哀憫して分別し廣説し、諸の菩薩をして聞き已りて受持し、持し已りて即ち阿耨多羅三藐三菩提心を退かざることを得しめよ。」

(七) 爾の時に佛、迦葉を讚じたまはく、「善哉善哉善男子、汝今善能く是の如きの義を問ふ。善男子、若衆生、(五) 照連河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、乃ち能く是の惡世に於て、是の如きの經典を受持して誹謗を生ぜず。善男子、若衆生、一恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず、是の典を愛樂す。人の爲に分別し廣く説くこと能はず。善男子、若衆生、二恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず、正解、信樂し、受持、讀誦す。」

**【五】** 是より種種の因を論ず。其中、初に問。之に惡時を擧ぐ、好人を素む、答を請する三段あり。

**【五】** 正法滅するの時。この一節の文中、正戒、正教の雙滅と要人、要法の俱興とあり。

**【五】** 誰か能く等。好人を素むるに六句あり、信するを受と云ひ、忘れざるを持と云ひ、文に臨むを讀と云ひ、文に背するを謗と云ひ、文を傳ふるを寫と云ひ、義を傳ふるを説と云ふ、即ち是れ五誦法師、

又是れ三業なり、受持は意、讀誦は口、供養書寫は身なるが故なり。

**【五】** 次に答の文。之れに數問、正答、勸の三段あり。正答のうち九河あり、舊解、仙慧、開善、治城等異説す。安曰く、照連より三性に至るを初依、一分八分を二依、十二、十四を三依、十六を四依となすと。

**【五】** 照連 (Tirivāṇanai)。余河と譯す。佛の涅槃し給ひし所なり。

亦復人の爲に廣く説くこと能はず。若衆生、三恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず。受持、讀誦し、經卷を書寫す。他の爲に説くと雖も、未だ深義を解せず。若衆生、四恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず。受持、讀誦し、經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の一の爲に十六分の中の八分の義を説く。若衆生、六恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず。受持、讀誦し、經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の十二分の義を説く。若衆生、七恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず。受持、讀誦し、經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の十四分の義を説く。若衆生、八恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず。受持、讀誦し、經卷を書寫し、他人を勧めて書寫す。世間の諸の衆生を憐憫す。自ら能く聽受し、復他人を勧めて聽受を得しめ、讀誦通利し、擁護堅持す。世間の諸の衆生を憐憫するが故に、是經を供養し、亦他人を勧めて其をして供養せしめ、恭敬尊重し、讀誦禮拜し、亦復是の如く具足して能く解し、其の義味を盡す。所謂如來常住不變、畢竟安樂にして、廣く衆生に悉く佛性

有るを説く。善く如來の所有の法藏を知り、是の如きの諸佛等を供養し已りて、是の如き無上の正法を建立して受持擁護す。若始めて阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らば、當に知るべし、是の人は未來の世に、必ず能く是の如きの正法を建立し、受持擁護せん。是の故に汝今、未來世の中の護法の人を知らざるべからず。何を以ての故に。是の發心の者は、未來世に於て必ず能く、無上の正法を護持せん。

善男子、惡比丘有りて我が涅槃を聞きて憂愁を生せず、今日如來、般涅槃に入りたまふ、何ぞ其快ひ哉。如來在世に我等が利を遮す。今涅槃に入りたまふ、誰か復當に我を遮奪する者有べき。若遮奪するもの無ければ、我則ち還つて本の如きの利養を得ん。如來在世に禁戒嚴峻なりき。今涅槃に入りたまひ、悉く當に放捨すべし。受くる所の袈裟は本法式の爲なり。今當に廢壞すべし、木頭の簾の如くに。是の如き等の人は、是の大乗經を誹謗し拒逆す。

善男子、汝今應當に是の如く憶持すべし、若衆生、無量の功德を成就し具足する有らば、乃ち能く是の大乗經典を信じ、信じ已りて受持せん。其の餘の衆生、樂法の者有らんに、若能く廣く爲に此の經を解説せば、其の人間き已りて、過去無量阿僧祇劫に作る所の惡業皆悉く除滅せん。若是の經典を信せざる者有らば、現身當に無量の病苦に惱害せられ、多く衆人に罵辱せらるる所と爲るべく、命終の後には人に輕賤せられ、顏貌醜陋、資生艱難にして常に供足せず。

【五五】 是より罪福を判す。其中初に罪福の因果を明す。又中に先づ謗相。  
【五六】 次に信相。  
【五七】 次に謗報。文のうら、現身よりは現報、命終の後よりは是生報、生生常處よりは是後報なり。

復少しく得と雖も、麤澁弊惡、生生常に貧窮下賤にして、誹謗正法邪見の家に處せん。若臨終の時、或は荒亂、刀兵競起に値ひ、帝王暴虐、怨家隣隙に侵逼せられ、善友有りとも雖も遭遇せず。資生の所須求むるに得ること能はず。少しく利を得と雖も、常に饑渴を患ふ。唯凡下に顧誠せられ、國王、大臣悉く齒録せず。設ひ復其の宣説する所有るを聞き、正使是理なるも終に信受せず。是の如き人は善處に至らず。折翼鳥の飛行すること能はざるが如し。是の人も亦爾なり。未來世に於て人天の善處に至ることを得ること能はず。若復、人能く是の如きの大乗經典を信する有らば、本受くる所の形、復麤陋なりと雖も、經の功德を以て即便端正なり。威顔、色力日更に増多し、常に人天に樂見せられ、恭敬し愛念して情に捨離無し。國王、大臣及び家の親屬、其の所説を聞きて悉く皆敬信せん。若我が聲聞の弟子の中、第一希有の事を行せんと欲せば、當に世間の爲に廣く是の如きの大乗經典を宜ぶべし。善男子、譬へば霧露の勢、住せんと欲すと雖も、日出を過ぎじ。日既に出で已らば、消滅して餘無きが如し。善男子、是の諸の衆生の所有の惡業も亦復是の如し。住世の勢力、大涅槃の日を見ることを得るに過ぎず。是の日既に出づれば、悉く能く一切の惡業を除滅す。復次に善男子、譬へば人有り、出家剃髮して袈裟を服すと雖も、故未だ沙彌の十戒を受くることを得ず。或は長者來りて

【五】次に信報。この文の中、また報障、業障、煩惱障を持つるの文あり。上の惡人は三報に約して横に論し今の善人は三障に約して豎に論す。是れ所謂綺互して説くのみ。

【五】沙彌 (Sramana)。勤策男と譯す。男子の出家者な總稱せる名。

衆僧を請する有らんに、未受戒の者、即ち大衆と俱共に請を受く。未だ受戒せずとも雖も、已に僧數に墮するが如し。善男子、若衆生發心して、始めて是の大乗典大涅槃經を學し、書持、讀誦する有らば、亦復是の如し。未だ具足して、位十任に階せずと雖も、則ち已に十住數の中に墮す。或は衆生の是佛弟子、或は非弟子、若は貪怖に因り、或は利養に因りて是の經の乃至一偈を聽受し、聞き已りて謗せざる有らん。當に知るべし、是の人は則ち已に阿耨多羅三藐三菩提に近し。善男子、是の因縁を以て、我四人世間の依と爲ると説く。善男子、是の如きの四人、若佛説を以て佛説に非すと言はば、是の處有ること無けん。是の故に我、是の如きの四人、世間の依と爲ると説く。善男子、汝是の如きの四人を供養すべし。』  
 世尊、我當に云何が是の人を誠知して、而も供養を爲すべき。』佛迦葉に告げたまはく、若正法を建立し護持する有らば、是の如きの人、從ひて啓請し、當に身命を捨て、而も之を供養すべし。我是の大乗經に於て説くが如し。

知法の者有らば、若は老若は少、故に供養、恭敬し禮拜すること、猶し火に事ふる、婆羅門等の如くすべし、

〔六〕 次は福を勤め依を結す。  
 〔六二〕 偈(一)と(二)の二頌と譯す、印度に於ける詩學上の術語、四句を一頌と云ふ。  
 〔六三〕 是より供養を勤む。其中二段ありて初に勸供養を明し初の中先づ勸供養。  
 〔六四〕 次に問答の二問答の二段あり。

知法の者有らば、若は老若は少、

故に供養し、恭敬し禮拜すること、

亦諸天の、帝釋に奉事するが如くす。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の所説の如く師長を供養すること、正に是の如くなるべし。今疑ふ所有り、唯願はくは廣く説きたまへ。若長宿の禁戒を護持する有りて、諸の年少に従ひて未聞を咨受せば云何。是の人當に禮敬すべきや不や。若當に禮敬すべくば、是則ち名けて持戒と爲さざるなり。若是年少の禁戒を護持する、諸の宿舊の破戒の人に從ひて未聞を咨受せば、復當に禮すべきや不や。若出家の人、在家の人に從ひて未聞を咨受せば、復當に禮すべきや不や。然るに出家の人、在家の人を禮敬すべからず。然るに佛法の中、年少、幼小、應當に耆舊、長宿を恭敬すべし。是の長宿、先に具戒を受け、威儀を成就するを以て、是の故に應當に供養、恭敬すべし。佛言に曰へるが如く、其破戒は是佛法の中、容受せざる所、猶し良田に多く稊稗有るが如し。又佛説の如く知法の者有り。若は老、若は少、故に供養すること帝釋に事ふるが如くすべし。是の如きの二句、其の義云何。將如來の虛妄の説に非ずや。佛言に曰へるが如く、持戒の比丘も亦犯す所有りと。何が故ぞ如來是の説を作したまへる。世尊も亦餘經の中に於て、説きて破戒を治すことを聽す。是の如き

【六四】次に論義。其中初に問。之に領旨、陳疑、請答の三段あり。

【六五】長宿。老年の人を云ふ。

の所説、其の義未だ了せず。』【六五】佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、我未來の諸の菩薩等の大乘を學

する者の爲に、是の如きの偈を説く。聲聞の弟子の爲に説かざるなり。【六六】善男子、我上に説くが如く、

正法滅し已りて正戒を毀る時、增長破戒、非法盛なる時、一切の聖人隠れて現せざる時、奴婢不淨の

物を受け畜ふる時、是の四人の中、當に一人有りて世に出現し、鬚髮を剃

除し出家修道すべし。諸の比丘の、各各奴婢、僕使不淨の物を受畜し、淨

と不淨と一切知らず。是れ律、非律も亦復識らざるを見る。是の人は是の如

きの諸の比丘を調伏せんと欲するが爲の故に、與其に光を和ぎて其の惡に

同じうせず、自の所行の處及び佛の行處、善能く別知す。諸人の波羅夷を

犯すを見ると雖も默然として舉せず。何を以ての故に。我世に出で、正法

を建立し護持せんと欲するが爲に、是の故に默然として刹治せず。善男子、

是の如きの人、護法の爲の故に所犯有りと雖も破戒と名けず。

【六七】善男子、譬へば國王病に遇ひて崩亡し、儲君穉小にして未だ紹繼に任

へず。【六八】旃陀羅有り、財寶に豐饒にして巨富無量、多く眷屬有り。遂に疆力を以て國の虛弱に乗じ王位

に篡居す。治化未だ久しからず、國人、居士、婆羅門等亡叛逃走して遠く他國に投ず。在者有りと雖も

乃至眼是の王を見ることを欲せず。或は長者、婆羅門等の本土を離れざる有り。譬へば諸樹の其の生處

【六六】 次に答の文。其中初に略して答ふ。

【六七】 次に廣く答ふ。其中初に時を擧ぐ。之に時濁を擧ぐ、教濁を明す、濁を和す、無罪を明すの四段あり。時濁の中に又五濁あり。

【六八】 次に譬の文。其中、初に譬の文中、先づ、時の爲に譬を作す。

【六九】 旃陀羅。梵語（Antyaja）の音寫、屠者と譯す。

に隨ひ、即ち是の中死するが如し。旃陀羅王、其の國人の逃叛する者衆きを知り、尋で即ち還つて諸の旃陀羅を遣して諸道を守邏す。復七日に於て、鼓を撃ちて諸の婆羅門に唱令す、「能く我が爲に灌頂師と作る者有らば、當に半國を分ちて以て封賞を爲すべし。」諸の婆羅門是の語を聞くと雖も、悉く來る者無し。各是の言を作さく、「云何を當に婆羅門種の是の如きの事を作す有るべき。」旃陀羅王復是の言を作さく、「婆羅門の中、若一人の我が師と爲る者無くば、我要す當に諸の婆羅門をして、旃陀羅と共に住し食し宿し、其の事業を同じうせしむべし。若能く來りて我が頂に灌ぐ者有らば、半國の封、此の言虚しからず。咒術の致す所の三十三天の上妙甘露不死の薬も、亦當に共分して之を服食すべし。」爾の時に一りの婆羅門子有りて、年弱冠に在り。淨行を修治し、長髪を相と爲し、善く咒術を知る。王所に往き至りて白して言さく、「大王、王の敕使する所は我悉く能く爲さん。」爾の時に大王、心の歡喜を生じ、此の童子を受けて灌頂師と作す。諸の婆羅門、是の事を聞き已りて皆瞋恚を生じ、此の童子を責めて、「汝婆羅門、云何ぞ乃ち旃陀羅の師と作る。」爾の時に其の王、即ち半國を分ちて是の童子に興ふ。因つて共に國を治めて多時を經歷す。爾の時に童子、彼の王に語りて言さく、「我家法を捨て、來りて王の師と作り、悉く大王に微密の咒術を教ふ。而も今大王猶親します。」時に王答へて

【七】 灌頂師。灌頂は、梵語ニ  
 Dīkṣita の譯、所謂印度の古  
 俗四海の水を取りて之を太  
 子の頂に灌ぎ、以て王位に進  
 むるの儀にして即ち卽位の式  
 を云ひ、之を司るの職を灌頂  
 師と云ふ。

【七二】 次に同の爲に譬を作す。

【七三】 次に刺の爲に譬を作す。



言はく、「我今云何ぞ汝を親まざらんや。」童子答へて言さく、「先王所有の不死の薬、猶未だ共に食せず。」王の言はく、「善い哉大師、我實に知らず。師若須ひば願はくは便ち持ち去らん。」是の時に童子、王の語を聞き已りて即ち持ちて家に歸り、諸の大臣を請じて共に之を食す。諸臣、食し已りて即ち共に王に白さく、「快い哉大師、是の甘露不死の薬有り。」王既に知り已りて、其の師に語りて言はく、「云何ぞ大師、獨諸臣と甘露を服食して、而も分を見ざる。」爾の時に童子、即ち更に餘の雜毒の薬を以て、王に與へて服せしむ。王既に服し已りて須臾に藥發し、悶亂して地に墮る。覺知する所無きこと猶し死人の如し。」爾の時に童子、本の儲君を立て、還つて以て王と爲す。是の如きの言を作さく、「師子御座、法旃陀羅をして昇らしむべからず。我昔より來た、未だ曾て旃陀羅種の王者と爲るを聞かず。若旃陀羅、國を治し民を理せば、是の處有ること無し。大王、今紹介で先王に還り、正法もて國を治すべし。」爾の時に童子、是を經理し已りて、復解薬を以て旃陀羅に與へて、其をして醒寤せしめ、既に醒寤し已りて驅つて國を出でしむ。是の時に童子、是の事を爲すと雖も、猶故婆羅門の法を失はず、其餘の居士、婆羅門等、其の所作を聞きて未曾有を歎じ、讚じて「善い哉善い哉仁者、善能く旃陀羅王を驅遣す」と言はんが如し。善男子、我涅槃の後、正法を護持する諸の菩薩等も亦復是の如し。方便力を以て、彼の破戒、假名、一切不淨物を受畜する僧と其の事業を同じうす。爾の時に

【七三】 不死の薬。佛性常住の理を譬ふ。  
 【七四】 次に合。其中初に和同を合す。  
 【七五】 次に糾治を合す。

菩薩、若人有りて多く、戒を犯すと雖も、能く毀禁の諸の惡比丘を治するを見る。即ち其の所に往きて恭敬禮拜し、(七五) 四事の供養、經書、什物、悉く以て奉上せよ。如其自ら無くば、要す當に方便して諸の

(七五) 檀越に従ひ、求め乞ひて之を與ふべし。是の事を爲すの故に (七六) 八種の

不淨の物を畜ふべし。何を以ての故に。是の人諸の惡比丘を治せんが爲に。

彼の童子旃陀羅を驅るが如くなるが故なり。爾の時に菩薩復是の人を恭

敬禮拜し、八種の不淨物を受畜すと雖も、悉く罪有ること無し。何を以て

の故に。是の菩薩、諸の惡比丘を擯治して、清淨僧をして安隱に住するこ

とを得しめ、方等大乘經典を流布して、一切の諸の天人を利益せんと欲す

るが故なり。善男子、是の因縁を以て我經の中に於て是の二偈を説き、諸の

菩薩をして皆共に護法の人を讚歎せしむ。彼の居士、婆羅門等、童子を「善

い哉善い哉」と稱讚するが如く、護法の菩薩正に是の如くなるべし。若人

有りて護法の人の、破戒者と其の事業を同じうするを見て罪有りと説かば、

當に知るべし、是の人は自ら其の殃を受け、是の護法者は實に罪有ること無

し。善男子、若比丘、禁戒を犯し亡りて、憍慢心の故に覆藏して悔いざる有らば、當に知るべし、是の

人は眞の破戒と名く。菩薩は護法の爲の故に、所犯有りと雖も破戒と名けず。何を以ての故に。憍慢無

- 【七六】 四事。一切の供養の資具を總括す、即ち衣服、飲食、臥具、湯藥。
- 【七七】 檀越(Dānātī)とは、施主をいふ。一説に布施は貧窮の海を越ゆる功德あるが故に。
- 【七八】 八種の不淨。比丘の蓄積す可らざる不淨物に八種。故に八不淨といふ。然るに其の品名に於ては多説あり。今安註に依らば金、銀、奴、婢、牛、羊、倉、庫の八種をいふ。
- 【七九】 次に結の文。その中初に無罪を結す。
- 【八〇】 次に有罪を結す。

く發露悔するを以ての故なり。善男子、是の故に我、經中に於て覆相して是の如きの偈を説く、

「知法の者有らば、若は老若は少、

故らに供養、恭敬禮拜すべし、

猶し火に事ふる、婆羅門等の如く、

第二天の、帝釋に奉事するが如し。」

是の因縁を以て、我も亦聲聞を學する人の爲にせず。但菩薩の爲にし

て、而も是の偈を説く。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の如き等の菩薩摩訶薩、戒に

於て縱緩ならば、本所受の戒具さに在りと爲んや不や。」佛の言はく、「善

男子、汝今是の如きの説を作すべからず。何を以ての故に。本所受の戒、

本の如くにして失はず。設し所犯有らば、即ち懺悔すべし。悔し已らば清

淨なり。善男子、故き隄塘の穿決して孔有らば、水則ち淋漏す。何を以ての故に。人の治するもの無

きが故に。若し人の治する有らば、水則ち出でざるが如し。菩薩も亦爾なり。破戒と共に布薩、受

戒、自恣を作す。其の僧事を同じうすと雖も、所有の戒律、隄塘の穿決して淋漏するが如くならず。

何を以ての故に。若し清淨持戒の人無ければ、僧、則ち損滅し、縱緩懈怠、日に増上すること有ら

【八一】次に但菩薩の爲にするな  
結す。其中初に偈を引く。

【八二】次に判す。

【八三】是より眞偽を簡ぶ。其の  
中初に問答、この中、先づ問

の文。

【八四】次に答の文。其中初に失  
不失を答ふ。

ん。若清淨持戒の人有らば、即ち能く具足して本戒を失はじ。(八五)善男子、  
乘に於て緩なる者は、乃

ち名けて緩と爲し、戒に於て緩なる者は、名けて緩と爲さず。菩薩摩訶薩、

此の大乗に於て心懈慢ならず、是を奉戒と名く。正法を護るが爲に、大乘

の水を以て自ら深浴す。是の故に菩薩、破戒を現すと雖も、名けて緩と爲

さす。(八六)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『衆僧の中四種の人有りて、(八七)菴羅

果の生熟知り難きが如し。破戒、持戒云何が識る可き。』佛の言はく、『善

男子、大涅槃微妙の經典に因るときは、則ち知るべきこと易し。云何が是

の大涅槃經に因れば、知ることを得べきや。(八八)譬へば田夫の、稻穀を種植

して莠稗を耕除す。肉眼を以て、觀て名けて淨田と爲す。其の實を成ずる

に至りて、草穀各異なるが如し。是の如く八事能く僧を汚染す。若能く除

卻せば、肉眼を以て觀るに則ち清淨を知る。若持戒、破戒惡を作さざる

時、肉眼を以て觀れば分別すべきこと難し。若惡彰露るれば則ち知るべ

きこと易し。彼の莠稗の分別すべきこと易きが如し。(八九)僧の中も亦爾なり。

若能く八種の不淨毒蛇の法を遠離せば、是を清淨聖衆福田と名く。人天に供養せらるべし。清淨

の果報、是肉眼の能く分別する所に非ず。(九〇)復次に善男子、(九一)菴羅迦林の其の樹衆多なる、是の林中

【八五】次に緩不緩を答ふ。有名なる乘戒緩急の文なり

【八六】次に法に約して簡ぶ。其中初に福田に約して簡ぶの中、先づ法。

【八七】菴羅果。具に菴摩羅(Anana)果といふ。無垢清淨と譯す、所謂マンゴーと稱する植物の果實なり。

【八八】次に譬。

【八九】次に合。

【九〇】次に智に約して簡ぶ。其中初に譬。

【九一】迦羅迦(カライカ)の黒と譯す、有害の果を有する樹の名。本文には之を八不淨に喩へたり。

に於て唯一樹有りて 三 鎮頭迦と名く。是の迦羅迦、鎮頭迦樹の二果は相似て分別すべからず。其の果熟する時に一うの友人有りて悉く皆拾取す。鎮頭迦の果は纔かに一分有りて、迦羅迦の果は乃ち十分有り。是の女識らずして持來し、市に詣りて之を街賣す。凡愚、小兒復別たざるが故に迦羅迦を買ひ、啖ひ已りて命終す。有智の人輩是の事を聞き已りて、即ち女人に問ふに、「姉、何の處に於てか是の果を得來れる。」是の時に女人即ち方所を示す。諸人即ち言はく、「是の如きの方所、多く無量の迦羅迦樹有りて、唯一根鎮頭迦樹有り。諸人知り已りて笑ひて捨て去るが如し。善男子、大衆の中、八不淨法も亦復是の如し。是の衆中に於て、多く是の如きの八法を受用する有り。唯一人の清淨持戒、是の如きの八不淨法を受けざる、善く諸人の受畜非法を知りて、而も與に事を同じうして相捨離せざる有り。彼の林中の一一つの鎮頭迦の如く、優婆塞有りて是の諸人の多く非法有るを見て、併せて恭敬し供養せず。是の人若供養せんと欲せば、先に問ひて言ふべし、「大徳、是の如きの八事、受畜すべきや不や。佛の聽したまふ所なりや不や。若佛聽したまふと言はば、是の如きの人は、共に 西 布薩し 盃 羯磨し 自恣

【九二】 鎮頭迦 (Tindāṇa)。柿と譯す、樹の名。其果は無害なりといふ、故に之を下文に清淨持戒に喩へたり。

【九三】 次に合。

【九四】 布薩 (Uparasādhā)。淨住、善宿と譯す、一定期に於て戒を持し、善法を増長するために行ふ佛事なり。之に二種あり、出家にありては、半月毎に僧を集めて戒經を説く。在家にありては八齋日に八戒を持す。

【九五】 羯磨 (Kamma)。業、所作と譯す、比丘の受戒又は懺悔するときの作法なり。

【九六】 自恣は、梵語 Pravāraṇā の譯、新譯には隨意といふ。夏安居の終る日を卜し、比丘が從來行ひ來りて罪惡を恣に衆前に發露し、懺悔する儀式なり。舊律にありては七月十六日、新律に在りては八月十六日に行ふ。

することを得るや不や。是の優婆塞、是の如く問ひ已るに、衆皆答へて「是の如きの八事、如來憐憫して皆悉く畜るふことを聽す」と言はば、優婆塞言へ、祇園精舎に諸の比丘有りて、或は金銀佛の畜ふを聽す所と言ひ、或は聽さずと言ふ。聽すと云ふ者有らば、是の不聽の者與共に住して説戒、自恣せず、乃至一河を共して水を飲まず。利養の物悉く之を共せず。汝等云何ぞ佛聽許す」と言ふ。佛天中天、復之を受くと雖も、汝等衆僧も亦畜ふべからず。若受者有らば、乃至與共に説戒、自恣、羯磨して其の僧事を同じうすべからず。若共に説戒、自恣、羯磨して僧事を同じうすれば、命終して即ち當に地獄に墮すべし。彼の諸人、迦羅迦果を食し已りて、便ち命終るが如し。復次に善男子、譬へば城市に賣薬人有りて、妙甘薬有り、雪山より出づ。亦復多く其の餘の雜薬を賣る。味甘くして相似たり。時に諸人有りて咸く皆買はんと欲すれども、而も識別せず。賣薬所に至りて問うて言はく、「汝、雪山の薬有りや否や。」其の賣薬人即ち答へて言はく、「有り。」是の人欺詐して餘の雜薬を以て買者に語りて言はく、「此は是雪山の甘好妙薬なり」と。時に買薬者、肉眼を以ての故に善く別つこと能はず。すなはち買ひて持ち歸り、便ち是の念を作さく、「我今已に雪山の甘薬を得」といはんが如し。迦葉、若聲聞僧の中、假名僧有り、眞實僧有り、和合僧有り、若は持戒、若は破戒、是の衆中に於て等しく供養、恭敬、禮拜すべし。是の優婆塞、肉眼を以ての故に分別すること能はず。譬へ

【九七】次に天眼に約して簡ぶ。其中初に譬

【九八】雪山。梵語 Himalaya の譯、印度の北境に聳つ大山。

【九九】次に答。

ば彼の人、雪山の甘薬を分別すること能はざるが如し。誰か持戒、誰か破戒、誰か眞僧、誰か  
 是假僧ならん。天眼有る者は乃ち能く分別す。迦葉、若優婆塞是の比丘は破戒人なるを知らば、給施  
 し禮拜、供養すべからず。若是の人八法を受畜するを知らば、亦復所須を  
 給施し禮拜、供養すべからず。若僧中に於て破戒の者有らば、袈裟を被る  
 の因縁を以て恭敬、禮拜すべからず。〔一〇〕迦葉菩薩、復佛に白して言さく、  
 『世尊、善い哉善い哉、如來の所説眞實にして虚ならず。我當に頂受  
 すること、譬へば金剛の珍寶異物の如くすべし。佛の所説の如く、是の  
 諸の比丘、當に四法に依るべし。何等をか四つと爲す。法に依りて人に依  
 らず、義に依りて語に依らず、智に依りて識に依らず、了義經に依りて不了  
 義經に依らず。〔一〇〕是の如きの四法、應當に證知すべし、四種の人に非ず。』  
 佛の言はく、『善男子、依法とは即ち是如來の大便涅槃、一切の佛法、  
 即ち是法性なり。是の法性即ち是如來なり。是の故に如來は常住不變なり。』  
 若復如來無常と言ふ有らば是の人は法性を知らず見ず。若是の法性を知  
 見せざる者は依止すべからず。〔一一〕上に説く所の四人、世に出でて法を護持する者の如く、應當に證知し  
 て而も依止と爲るべし。何を以ての故に。是の人善く如來の微密深奥の藏を解するが故に、能く如來

〔一〇〕次に領解。其中、初に稱  
 歎。  
 〔一一〕次に頂受。  
 〔一二〕是より今昔を會通す。其  
 中、初に問の文の中、先づ昔  
 依。

〔一三〕次に答を請す。  
 〔一四〕次に答。其中、初に別會  
 を擧ぐるの中、先づ法に依る  
 ば即ち人に依るを明す。  
 〔一五〕次に昔無法の人に依らざ  
 るを明す。  
 〔一六〕次に今有法の人に依るを  
 明す。之に應依を唱ふ、應依  
 を釋す、徳を歎す、歎を譯す  
 るの四段あり。

の常住不變じやうじゆふへんを知る。若もし如來無常變易じゆわうむじやうへんやくと言いはば、是この處有ること無し。是かくの如ごときの四人を即すなはち如來じゆわうと名なく。何を以もつての故ゆゑに。是この人能ひたよくく如來の密語みつごを解げし、及び能およく説とくが故ゆゑなり。 一七〇 若人じやくひと有りて能まく如

來の甚深密藏じんしんみつざうを了知りやうちし、及び如來常住不變じゆわうじやうじゆふへんを知る。是かくの如ごときの人、若利養もしりやうの爲ために説ときて「如來是無常じゆわうじゆむじやう」  
と言いはば、是この處有ること無し。是かくの如ごときの人、尙依止なほたすべし。何いかに泥いはんや  
是この四種ししゆの人に依よらざらんや。 一〇八 法ほふに依よるとは即すなはち是こ法ほふ性じやうに依よらずと

は即すなはち是聲聞これじやうもんなり。法性ほつじやうとは即すなはち是如來じゆわう、聲聞じやうもんとは即すなはち是有爲じゆゑ、如來じゆわうとは  
即すなはち是常住これじやうじゆふへん、有爲じゆゑとは即すなはちは無常むじやうなり。善男子ぜんなんし、若人破戒もしひとはいかいし、利養りやうの爲ための  
故ゆゑに説ときて「如來無常變易じゆわうむじやうへんやく」と言いはん。是かくの如ごときの人は依よるべからざる所ところ。

善男子ぜんなんし、是を定義じやうぎと名なく。義ぎに依よつて語ごに依よらずとは、義ぎとは名なけて覺かく  
了りやうと曰いふ。覺了義かくれうぎとは不ふ羸劣るゐりやくと名なく。不ふ羸劣るゐりやくとは名なけて満足まんぞくと曰いふ。満足まんぞく  
義ぎとは名なけて如來常住不變じゆわうじやうじゆふへんと曰いふ。如來常住不變義じゆわうじやうじゆふへんぎとは即すなはち是こ法常ほふじやう、法常ほふじやう  
義ぎとは即すなはち是僧常じゆそうじやう、是を依よ義ぎと名なく。 一〇九 語ごに依よらざれ。何等なんらの語言ごんごんか依よるべからざる所ところ。所謂すゐい諸論しよろん

綺飾きしやくの文辭もんじなり。佛所説ほとけしよせつの無量むりやうの諸經しよきやうの如ごとく、貪求こんぐして厭いとふこと無し。姦巧諛諂かんかうゆてん、詐いつはりりて親附しんぷを現げんじ、  
相さうを現げんじて利りを求もとめ、白衣びやくいを經理きやうりして其そが爲ために役やくを執とる。又復唱またまたなへて言いはく、佛ほとけ、比丘びくに諸しよの奴婢ぬび不な  
淨じやうの物ものを畜たくへ、金銀珍寶こんぎんちんぼう、穀米倉庫こくまいさうこ、牛羊象馬じゆうじやうまを販賣はんまいして利りを求もとむるを聽ゆるす。饑饉けいきんの世よに於おて子こを憐れん

【一〇八】次に總會の文。其中、初  
に今教に就て會する中、先づ  
會。其中初に法に依り人に依  
らざるを會す。之に雙標、雙  
釋、雙結の三段あり。

【一〇九】次に義に依りて語に依ら  
ざるを會す。其中初に義に依  
るを會す。

【一一〇】次に語に依らざるを會  
す。



憫するが故に、復諸の比丘に儲貯陳宿し、手自ら食を作し、受けずして啖ふを聽す一と。是の如き等の語依るべからざる所なり。 (二三) 智に依つて識に依らずとは、言ふ所の智とは、即ち是如来なり。

若聲聞、善く如来の功德を知ること能はざる有らば、是の如きの識依止すべからず。若如来即ち是法身と知らば、是の如きの眞智は依止すべき所なり。若如来の方便の身を見て、是陰界諸入の所攝、食

の長養する所と言はば、亦依るべからず。是の故に識を知りて依止すべからず。若復人有りて是の説を作さば、其の經書に及びて亦依るべからず。

(二二) 了義經に依りて不了義經に依らずとは、不了義經とは謂はく聲聞乘なり。佛如来の深密藏の處を聞きて、悉く疑怪を生じ、是の藏大智海を出

すことを知らず。猶し嬰兒の別知する所無きが如し。是則ち名けて不了義と爲すなり。了義とは、名けて菩薩の眞實智慧と爲す。其の自心の無闇の

大智に隨ひて、猶し大人の知らざる所無きが如し。是を了義と名く。(二三) 又聲聞乘は不了義と名け、無上の大乘を乃ち了義と名く。若如来無常變易と言ふは不了義と名け、若

如来常住不變と言ふは是を了義と名く。聲聞の所説證知すべしとは不了義と名け、菩薩の所説證知すべしとは了義と爲す。若如来食の長養する所と言ふは、是不了義なり。若常住不變易と言ふは是を了

義と名く。若如来涅槃に入る、薪盡きて火の滅するが如しと言ふは不了義と名く。若如来法性に入る

【二二】次に智に依りて識に依らざるを會す。  
【二三】次に了義經に依りて不了義經に依らざるを會す。其中初に宗。  
【二四】次に法。其中五變あり、五變とは大小、常無常、大小所説、食不食、滅不滅是れなり。

と言ふは是を了義と名く。二四 聲聞乘の法は則ち依るべからず。何を以ての故に。如來衆生を度せんと欲するが爲の故に方便力を以て聲聞乘を説く。猶し長者、子に半字を教ふるが如し。善男子、聲聞乘とて猶し初耕して未だ果實を得ざるが如し。是の如きを名けて不了義と爲す。

是の故に聲聞乘に依るべからず。大乘の法は則ち依止すべし。何を以ての故に。如來衆生を度せんと欲するが爲の故に、方便力を以て大乘を説く、是の故に依るべし、是を了義と名く。二五 是の如き四依應當に證知すべし。

二六 復次に義に依るとは、義質直と名く。質直とは名けて光明と曰ふ。

光明とは不羸劣と名く。不羸劣とは名けて如來と曰ふ。又光明とは名けて智慧と爲す。質直とは名けて常住と爲す。如來常とは名けて依法と爲す。

法とは常と名け、亦無邊と名く。思議すべからず、執持すべからず、繫縛すべからず。而も亦見るべし。二七 若説きて不可見と言ふ有らば、是の如き

の人依るべからざる所なり。是の故に法に依りて人に依らず。二八 若復人有

りて微妙語を以て無常を宣説せば、是の如きの言依るべからざる所なり。是の故に義に依りて語に依らず。二九 依智とは衆僧是常、無爲不變、八種不淨の物を畜へず。是の故に智に依りて識に依らず。若

説きて 三〇 識作り、識受くと言ふ有らば、和合僧無し。何を以ての故に。夫和合とは無所有と名く。

- 【二四】次に宗。
- 【二五】次に結。
- 【二六】次に今昔相對して會すの文、其中、初に兩依共釋する中、先づ義に依るを釋し兼て法に依るを明す。
- 【二七】次に人に依らざるを釋す。
- 【二八】次に語に依らざるを釋す。
- 【二九】次に第三を釋す。
- 【三〇】識作り・識受く。識者の因を作り識者の果を受くるあらば是れ生死、常住一體の僧なき所以なり。

無所有ならば云何ぞ常と言はん。是の故に此の識依止すべからず。(二三)了義に依るとは、了義とは名けて知足と爲す。終に現じて威儀清白を許り、橋慢自ら高うして利養を貪求せず。亦如來の隨宜方便所説の法の中に於て執著を生せず、是を了義と名く。若能く是の如き等の中に住する有らば、當に知るべし、是の人は則ち已に第一義に住することを得と爲す。是の故に名けて、了義經に依りて不了義に依らずと爲す。不了義とは、經中に一切熾然、一切無常、一切皆苦、一切皆空、一切無我と説くが如し。是を不了義と名く。何を以ての故に。是の如きの義を了すること能はざるを以ての故に。諸の衆生をして(二三)阿鼻獄に墮せしむ。所以は何ん。取著を以ての故に義に於て了せず。一切熾とは、如來涅槃も亦熾くと説くと謂ふ。一切無常とは、涅槃も亦無常、苦、空、無我も亦復是の如し。是の故に名けて不了義經と爲す。依止すべからず。善男子、若人有りて、如來一切衆生を憐憫し、善く時宜を知る。時を知るを以ての故に輕を説きて重と爲し、重を説きて輕と爲す。如來、所有の弟子、諸の檀越の所須を供給して乏しき所無からしむる有るを觀知し、是の如きの人には、佛即ち奴婢・金銀、財寶を受畜し、不淨物等を販賣し市易することを聽さず。若諸の弟子、檀越の所須を供給する有ること無し。時世饑饉にして飲食得難し。正法を建立し護持せんと欲するが爲には、我、弟子の奴婢、金銀、車乘、田宅、穀米を受畜し、所須を貿易するを聽す。「是の如き等の物を受畜するを聽すと

【二三】次に第四を釋す。  
 【二三】阿鼻(アビチ) 無間と譯す。不斷に苦を受くる所謂無間地獄なり。

雖も、要ず當に篤信の檀越に淨施すべし」と言はば、是の如きの四法依止すべき所なり。若戒律、(二三)阿毘曇、(三四)修多羅の是の四つに違はざる有らば、亦依止すべし。若説きて「時、非時有り、能護法、不能護法有り。如來悉く一切の比丘に、是の如きの不淨物を受畜することを聽す」と言ふ有らば、是の如きの言依止すべからず。若戒律、阿毘曇、修多羅の中、是の説に同じき有る有らば、是の如きの三分も亦依るべからず。(三五)我肉眼の諸の衆生等の爲に是の四依を説き、終に慧眼有る者の爲にせず。是の故に我今是の四依を説く。法とは即ち是法性、義とは即ち是如來常住不變、智とは一切の衆生悉く佛性有るを知り、了義とは一切の大乗經典を了達す。』

【二三】次に結會。

【二四】阿毘曇 (Abhidharma)。舊譯に無比法と云ひ、新譯に對法といふ。三藏の中論部に名づく。

【二五】修多羅 (Sutra)。契經と譯す、經部に名づく。

卷の第七

邪正品第九

爾の時に迦葉、佛に白して言さく、「世尊、上に説く所の四種の人等の如きは、應當に依るべきや。」佛の言はく、「是の如く是の如し。善男子、我が説く所の如きは、應當に依止すべし。何を以ての故に。四魔有るが故に。何等をか四つと爲す。魔の所説の諸餘の經律、能く受持する者の如し。」迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の所説の如きは四種の魔有りと。若魔の所説及び佛の所説は、我當に云何が而も分別することを得べき。諸の衆生の魔に隨逐して行する有り、復佛の所教に隨順する者有り。是の如き等の輩、復云何が知る。」佛、迦葉に告げたまはく、「我般涅槃、七百萬の後、是の魔波旬漸く當に我が正法を壞亂すべし。譬へば獵師の身に法衣を

【一】 この品、前の迦葉の問うて「云何が天魔衆の爲めに留難を作し、如来波旬説を云何が分別して知るや」と云ふに答ふ。其中五段あり、初に略して邪正を明す中、先づ問の文。  
【二】 四種の人、四依の聖を云ふ。  
【三】 次に答の文。  
【四】 四魔、死、天、煩惱の四

魔。  
【五】 是より廣く邪正を明す。其中初に問  
【六】 次に廣く答ふ。其中初に形體を答ふ。  
【七】 七百萬、安註に云ふ、正法一千年なるべきに女人を度せしに依て五百歳を減す、故に六百七百萬の時既に像法に入ると云ふ。

服するが如し。魔王波旬も亦復是の如し。比丘の像、比丘尼の像、優婆塞の像、優婆夷の像と作り、亦復須陀洹の身を化作し、乃至阿羅漢の身及び佛の色身を化作す。魔王此の有漏の形を以て無漏の身を作して我が正法を壞す。是の魔波旬の正法を壞する時、當に是の言を作すべし、「菩薩、昔兜術天上に於て没し來りて、此の迦毗羅城、白淨王の宮に在り。父母の愛欲和合に依因りて是の身を生育す」と、若人の人中に生じて、諸の世閒、天人大眾に恭敬せらるる者有らば、是の處有りと無し。又復説きて言はく、「往昔苦行し、種種頭目、髓腦、國城、妻子を布施す。是の故に今有佛道を成ずることを得。是の因縁を以て、諸の天人、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽に恭敬せらる。若經律の是の説を作す者有らば、當に知るべし、悉く是魔の所説なり。善男子、若經律、是の如きの言を作す有らん、如來正覺久しく已に成佛す。今方に佛道を成ずるを示現する者、諸の衆生を度脱せんと欲するが爲の故に。父母、愛欲和合に依因りて生ずること有ることを示す。世閒に隨順して是の示現を作す」と。是の如きの經律、當に知るべし、眞に是如來の所説なり。若魔の所説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所説に隨順する者は、卽ち是菩薩なり。

【八】次に辭亂を答ふ。其中初に佛身を亂す中、先づ生を亂す。

【九】兜術天上。欲界のうち、天の音寫。如來八相成道の前三祇百劫の功を終りて先づこの天の内院に在り、次に人界に下生す。

【一〇】迦毗羅城白淨王。釋尊降誕の聖地。Sudhodhana 城主。Mudhokana 淨王。云ふ、釋尊の聖父なり。また淨飯大王とも譯す。

【一一】次に行を亂す。

若説きて「如來生じたまふ時、十方面に於て各行

くこと七歩は信すべからず」と言ふ者有らば、是魔の所説なり。若復如來の出世十方面に於て各七歩、此は是如來の方便示現と説く有らば、是を如來所説の經律と名く。若魔の所説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所説に隨順する者は、即ち是菩薩なり。若説きて「菩薩生じ已りて、父王人をして將ゐて天祠に詣でしむ。諸天見已りて、悉く下りて禮敬す。是の故に佛と名く」と言ふ有り。復難じて言ふ有らん、「天は先に出で、佛其の後に在り。云何ぞ諸天佛を禮敬せん」と。是の難を作さば、當に知るべし、即ち是波旬の所説なり。(三)若經に「佛、天祠に到り、是の諸天等、摩醯首羅、大梵天王、釋提桓因、皆悉く合掌し、其の足を敬禮す」と言ふ有らば、是の如きの經律、是佛の所説なり。若魔の所説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所説に隨順する者は、即ち是菩薩なり。(三)若經律の、説きて「菩薩、太子爲りし時、欲心を以ての故に、四方に妻を聘し、深宮に處在して五欲自ら娛み、歡悅受樂す」と言ふ有らば、是の如きの經律は、波旬の所説なり。若説きて「菩薩久しく已に欲心、妻息の屬を捨離し、出家修道す」と言ふ有らば、是の如きの經律、是佛の所説なり。若魔の經律に隨順する者有らば、是魔の眷屬、若佛の經律に隨順する者有らば、即ち是菩薩なり。(四)若説きて「佛、舍衛の祇園精舍に在りて諸の比丘に

- 【一】次に入廟を亂す。
- 【二】次に納妃を亂す。
- 【三】次に結戒を亂す。
- 【四】舍衛・Jalaviyaの訛。
- 【五】祇園精舍・Jetavana
- 【六】た祇陀精舍とも記す。

奴婢、僕使、牛羊、象馬、驢騾、雞豬、貓狗、金銀、瑠璃、眞珠、頗梨、砮磧、碼磧、珊瑚、珂貝、璧玉、銅鐵の釜鍍、大小の銅盤、所須の物を受畜することを聽す。耕田種植、販賣市易、穀米を儲積す。是の如きの衆事、佛大慈の故に衆生を憐憫して、皆之を畜ふことを聽す」と言ふ有らば、是の如きの經律は、悉く是の魔説なり。若説きて言ふ有らん、「佛、舍衛の祇陀精舍、(ニセ)那黎樓鬼所住の處に在りて、爾の時に如來、婆羅門、字は(ニセ)殺叛德、及び波斯匿王に因りて説きて言はく、「比丘、金銀、瑠璃、頗梨、眞珠、砮磧、碼磧、珊瑚、琥珀、珂貝、璧玉、奴婢、僕使、童男、童女、牛羊、象馬、驢騾、雞豬、貓狗等の獸、銅鐵の釜鍍、大小の銅盤、種種の雜色牀敷、臥具を受くべからず。資生の所須、所謂屋宅、耕田種植、販賣市場、

自手作食、自磨自舂、治身の呪術、調鷹の方法、星宿を仰觀し、盈虛を推歩し、男女を占相し、夢の吉凶を解す。是男是女、非男非女、(ニセ)六十四能、復十八の人は惑はす(三)呪術有り。種種の工巧、或は世間の無量の俗事を説き、散香、抹香、塗香、熏香、種種の華鬘、治髮の方術、姦偽詭曲、貪利厭くこと無く、慣鬧を愛樂し、戲笑談説す。魚肉を貪嗜し、毒藥を和合し、香油を治壓す。寶蓋及び革屣を捉持し、扇箱篋の種種の畫像を造り、穀米、大小の麥豆、及び諸の果藏を積聚し、國王、王子、大臣及び諸の女人を親近し、高聲に大笑し、或は復默然

【七】 那黎樓(ニセ)那黎。無恥。  
 【八】 殺叛德。(ニセ)  
 【九】 六十四能。佛に三十二相あるに對して外道之に倍勝すとして六十四能を立。また一説に佛に三十二相並に三十二業あり、外道之に對して六十四能を立つと。  
 【一〇】 呪術。呪は陀羅尼(ニセ)三三三の譯。陀羅尼を唱ふる法。  
 【一一】 復十八の人は惑はす。種種の工巧、或は世間の無量の俗事を説き、散香、抹香、塗香、熏香、種種の華鬘、治髮の方術、姦偽詭曲、貪利厭くこと無く、慣鬧を愛樂し、戲笑談説す。魚肉を貪嗜し、毒藥を和合し、香油を治壓す。寶蓋及び革屣を捉持し、扇箱篋の種種の畫像を造り、穀米、大小の麥豆、及び諸の果藏を積聚し、國王、王子、大臣及び諸の女人を親近し、高聲に大笑し、或は復默然



す。諸法の中に於て多く疑惑を生じ、多語妄説、長短好醜、或は善不善、好んで好衣を著す。是の如  
 き種の不淨の物、施主の前に於て、躬自ら讚歎し、不淨の處に出入し遊行す。所謂沽酒、淫女、博  
 奕、是の如きの人、我今比丘の中に在るを聽さず。應當に道を休め俗に還りて役使すべし。譬へば莠  
 稗の悉く滅して餘無きが如し。當に知るべし、是等の經律の所制、悉く是如來の所説なり。若魔の所  
 説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の所説に隨順する者有らば、即ち是菩薩なり。三 若説  
 きて言ふ有らん、菩薩、天神を供養せんと欲するが爲の故に、天祠に入る。  
 所謂梵天、大自在天、三昧天、韋陀天、三迦旃延天なり。入る所以は諸の天人を  
 調伏せんと欲するが爲の故なり。若爾らずと言はば、是の處有ること無し。  
 若菩薩外道の邪論に入り、其の威儀、文章、技藝を知ることはせず。僕使  
 の鬪争和合すること能はず。男女、國王、大臣に恭敬せられざれ。又亦諸  
 薬を和合するを知らざれ。不知を以ての故に、乃ち如來と名く。其知は是邪見の輩なり。又復如來、怨  
 親中に於て其の心平等なり。若刀を以て割き及び香を身に塗る、此の二人に於て増益損滅の心を生  
 せず。唯能く中に處す、故に如來と名くと言ふは、是の如きの經律、當に知るべし、是魔の所説なり。  
 若説きて言ふ有らん、菩薩是の如し、天祠に入り、外學の法の中、出家、修道するを示し、其の威儀、  
 禮節を知り、能く一切の文章、技藝を解くことを示し、書堂、技巧の處に入るを示し、善能く僕使の

【二】次に佛徳を亂す。

【三】韋陀 (Vajra) 羅又  
 は陰と譯す、婆羅門の事ふる  
 天神。

【三】迦旃延 (Kāśyapa) は  
 剪剃種と譯す、天神の名。

鬪争を和合す。諸の大衆、童男、童女、後宮、妃后、人民、長者、婆羅門等の王及び大臣、貧窮等の中に於て最尊最上たり。復是等に恭敬せられ、亦能く是の如き等の事を示現す。諸見に處すと雖も、愛心を生ぜず。猶し蓮華の塵垢を受けざるが如し。一切諸の衆生を度せんが爲の故に、善く是の如く種種の方便を行じて世法に隨順す」と。是の如きの經律、當に知るべし、即ち是如來の所説に隨順する者は、是大菩薩なり。若説きて言ふ有らん、如來、我が爲に經律を解説す。若惡法の中、輕重の罪、及び 偷蘭遮、其の性皆重く、我等の律の中、終に之を爲さず。我久しく是の如きの法を忍受するも、汝等は信せず。我當に云何ぞ自ら己律を捨てて汝が律に就くべきや。汝が所有の律は是魔の所説なり、我等の經律は、是佛の所制なり。如來先に 九部の法印を説く。是の如きの九印我が經律を印す、初て 方等經典の一句一字有ることを聞かず。如來の所説無量の經律、何の處にか方等經を説くと有らんや。是の如き等の中、未だ曾て十部經の名有るを聞かず。若其有らば、當に知るべし、必定 調達が所作なり。調達は惡人、善法を滅するを以て方等經を造る。我等是

【二四】次に經律を亂す。其中初に通じて經律に就て亂を作す。

【二五】偷蘭遮(スティーライティヤヤスの大障善道と譯す、罪波羅夷、僧殘に次ぐ大罪なり。例へば死屍に就て淫し、五錢已下を盡む如きをいふ六聚罪の一)。

【二六】九部。十二部經中、方廣、授記、無問自說の三部を除けるもの、小乘經を指す。

【二七】方等經。大乘經の通名。大乘經は、皆方廣平等の大理即ち中道の理の方正にして生佛不二なる教を説くが故に名く。

【二八】調達。具さには調婆達多(Devadatta)と云ふ、天授と譯す。又提婆とも略稱す。

の如き等の經を信せず、是魔の所説なり。何を以ての故に。佛法を破壊して相是非するが故に。是の如きの言、汝が經中には有り、我が經中には無し。我が經律の中、如來説きて言ふ、「我、涅槃の後、惡世に當に不正の經律有るべし。所謂大乘方等經典なり。未來の世、當に是の如きの諸の惡比丘有るべし。」我又説きて、「九部經を過ぎて方等典有り」と言ふ。若人能く其の義を了知する有らば、當に知るべし、是の人は正しく經律を了し、一切不淨の物を遠離し、微妙清淨なる、猶し滿月の如くならん。若説きて、「如來、一一の經律に義味を演説すること、恆沙等の如しと爲すと雖も、我が律中に無し。將に無と爲すと知り、如其有らば、如來何が故ぞ我が律中に於て而も解説せざる。是の故に我今信受すること能はず」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は即ち罪を得と爲す。是の人復言はん、「是の如きの經律、我當に受持すべし。何を以ての故に。當に我が爲に知足少欲、斷除煩惱、智慧涅槃の善法の因と作すべきが故なり」と。是の如く説く者は我が弟子に非ず。若説きて「如來衆生を度せんと欲すが爲の故に、方等經を説く」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。若方等經を受けざる者有らば、當に知るべし、是の人は我が弟子に非ず。佛法の爲に出家するにあらざるなり。即ち是邪見外道の弟子なり。是の如きの經律は是佛の所説なり。若是の如くならざれば、是魔の所説なり。若魔の所説に隨順する者有らば是魔の眷屬なり。若佛の所説に隨順する者有らば、即ち是菩薩なり。

【二五】次に常無常に就て亂を作す。

來、無量功德に成就せられざれば、無常變異す。空法を得るを以て無我を宣説す。世間に順せず」と  
 言ふ有らば、是の如きの經律は魔の所説と名く。若人、「如來正覺思議すべからず、亦無量阿僧祇  
 等の功德に成せらる。是の故に常住にして變異有ること無し」と言ふ有らば、是の如きの經律は佛  
 の所説なり。若魔の所説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の所説に隨順する者有らば、即  
 ち是菩薩なり。(三)二五ひと。復人の言ふ有らん、或は丘丘有りて、實に波羅夷罪を毀犯せざるに、衆人皆波羅夷  
 を犯すこと。(三)二七、らじゆのたつが如しと謂ふ。しも此の比丘、實は犯す所無し。  
 何を以ての故に。我常に説きて言ふ、「四波羅夷若一つを犯す者は、猶し石  
 を析きて還つて合すべからざるが如し。」若自ら過人法を得と説く有らば、  
 是即ち名けて犯波羅夷と爲す。何を以ての故に。實は所得無くして詐つて  
 得相を現するが故なり。是の如きの人、人法を退失す。是を波羅夷と名く。所謂若比丘有りて、少欲  
 知足、持戒清淨にして空閑處に住す。若王大臣、是の比丘を見、心念を生じて言ひて羅漢を得と謂  
 ひ、即ち前みて讚歎し、恭敬、禮拜す。復是の言を作さく、「是の如き大師、是の身を捨て已りて、  
 當に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」比丘聞き已りて、即ち王に白して言さく、「我實に未だ沙門の道  
 果を得ず。王、我已に道果を得と稱すること莫れ。唯願はくは大王、我が爲に不知足の法を説くこと  
 勿れ。不知足とは、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふを、皆默然として受く。我今、若當に默然と

【10】阿僧祇 (Asankheyya)。  
 無數と譯す。

【三】次に罪福を亂す。其中初  
 に正を明す。

【三】多羅 (Dra) 崖樹と譯す。

して受くべくば、當に諸佛に訶責せらるべし。知足の行は諸佛に讚せらる。是の故に我、終身歡樂して知足を奉修せんと欲す。又知足とは、我定んで自ら未だ道果を得ずと知る。王、我得と稱す。我今受けず、故に知足と名く。」時に王答へて言はく、「大師實に阿羅漢果を得、佛の如く異なる無し。」

爾の時に其の王、普く皆内外の人民、中宮、妃后に宣告して、悉く皆沙門果を得と知らしむ。是の故に威く一切聞者をして、心に敬信を生じて供養尊重せしむ。是の如きの比丘は眞に是梵行清淨の人なり。是の因縁を以て普く諸人をして大福德を得しめ、而して是の比丘は實に波羅夷罪を毀たず。何を以ての故に。前人自ら歡喜の心を生じて讚歎、供養するが故に。是の如きの比丘は當に何の罪か有るべき。若説きて「是の人罪を得」と言ふ有らば、當に知るべし、是の經は是魔の所説なり。復比丘有りて、佛の祕藏甚深の經典を説き、一切衆生皆佛性有り。是の性を以ての故に、無量億の諸の煩惱結を斷じ、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。一闍提を除く。若王、大臣、是の如きの言を作さく、「比丘、汝當に作佛すべきや、作佛せずや。佛性有りや不や。」比丘、答へて言さく、「我今、身中定んで佛性有らん。成と不成とは未だ之を審かにすること能はず。」王の言はく、「大德、如其一闍提と作らずば、必ず成ずること疑無し。比丘の言さく、「爾なり、實に王の言の如し」と。是の人、定んで佛性有らん」と言ふと雖も、亦復波羅夷罪を犯さず。復比丘有りて、即ち出家の時、是の思惟を作さく、「我今必定、阿耨多羅三藐三菩提を成せん」と。是の如きの人、未だ無上に道果を成ずることを得

すと雖も、已に福を得ること無量無邊にして、稱計すべからずと爲す。假使人有りて、「當に是の人、波羅夷を犯す」と言ふべくば、一切の比丘犯さざる者無けん。何を以ての故に。我往昔八十億劫に於て、常に一切不淨の物を離れ、少欲知足にして威儀成就し、善く如來の無上法藏を修し、亦自ら定んで、身に佛性有るを知らん。是の故に我今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、名けて佛と爲すことを得し。大慈悲有りて、是の如きの經律は佛の所説なり。若し是に隨順すること能はざる者有らば、是魔の眷屬なり。若能く隨順せば、は大菩薩なり。復説き言ふ有らん、「四波羅夷、十三僧殘、二不定法、三十捨墮、九十一墮法、四懺悔法、衆多の學法、七滅爭等無く、偷蘭遮、五逆等の罪、及び一闍提無し。若比丘、是の如き等を犯して地獄に墮する者有らば、外道の人、悉く天に生ずべし。何を以ての故に。諸の外道等、戒の犯すべき無し。此は是、如來人を怖るるを示現す、故に斯の戒を説く。若佛、我が諸の比丘、若淫を行せんと欲せば、法服を捨て、俗の衣裳を著して、然して後淫を行すべし」と。復念を生ずべし、「淫欲の因縁我が過咎に非ず。如來の在世も、亦比丘の淫欲を習行して、正解脫を得る有り。或は命終の後天上に生ず。古今之有り、獨我作すに非ず。或は四重を犯し、或は五戒を犯し、或は一切不淨の律儀を行するも、猶故真正の解脫を具することを得。如來三四突吉羅を犯せば、初利天の日月歳數の如く、八百萬歳地獄に墮在す」と説くと雖も、是亦如來、人を怖らしむを示現す。波羅夷より突吉

【三】次に邪を明す。

【四】突吉羅(Upasikā)惡作と譯す、微細なる戒律の罪名。

羅に至りて輕重差無し」と言ふ。是諸の律師、妄りに此の言を作して、是佛制と言ふ。必定して當に知るべし、「佛の所説に非ず」と。是の如きの言説は是魔の經律なり。若復説きて言はん、「諸戒の中に於て、若小戒乃至細微を犯すも、當に苦報を受くべく、齊限有ること無し。」是の如く知り已りて自身を防護すること、龜の六を藏すが如くす。若律師有りて、復是の言を作さく、「凡そ所犯の戒、都て罪報無し」と。是の如きの人は親近すべからざること佛の所説の如し。

「若一法を過れば、是を妄語と名く、

後世を見ざれば、惡の造らざる無し。」

是の故に、是の人に親近すべからず。我が佛法の中清淨なる是の如し。況や復偷蘭遮罪を犯し、或は僧殘及び波羅夷を犯して、而も罪に非ざる有らんや。是の故に應當に、深く自ら是の如き等の法を防護すべし。若守護せ

ずば、更に何の法を以て、名けて禁戒と爲ん。我經中に於て亦説きて「四波羅夷、乃至微細の突吉羅等を犯す有らば、應當に苦治すべし。衆生若禁戒を護持せざれば、云何ぞ當に佛性を見ることを得べき。

一切衆生佛性有りと雖も、要す持戒に因りて、然して後乃ち見る。佛性を見るに因りて阿耨多

羅三藐三菩提を成ずることを得。九部經の中方等經無し、是の故に有佛性を説かざるのみ。經に説かずと雖も、當に知るべし實に有り」と。若是の説を作さば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。」

【五】次に更に正を明す。  
【六】一切衆生等の佛性は正因、持戒は是れ緣因なり。

【三七】迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、上に説きたまふ所の如く、一切衆生佛性有りとは、九部經の中、未だ曾て聞かざる所。もし其れ有りと説かば、云何ぞ波羅夷を犯さざるや。」佛の言はく、「善男子、汝が説く所の如く、實に波羅夷罪を毀犯せず。善男子、譬へば人、説きて「大海唯七寶有りて八種無し」と言ふ者有らば、是の人罪無きが如し。若説きて、「九部經の中佛性無し」と言ふ者有らば、亦復罪無し。何を以ての故に。我大乘大智海の中に於て、佛性有りと説く。二乘の人の知見せざる所なれば、佛故らに無と説くも罪有ること無きなり。是の如きの境界は諸佛の知る所にして、是聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、若人如來の甚深祕密藏を聞かざる者、云何ぞ當に佛性有るを知るべきや。何等をか名けて祕密の藏と爲す。所謂方等大乘經典なり。善男子、諸の外道有りて、或は我常と説き、或は我斷と説く。如來は爾らず。亦有我と説き、亦無我と説く。是を中道と名く。若説きて言ふ有らん、佛、中道を説く。一切衆生悉く佛性有り、煩惱覆ふが故に知らず見す。是の故に、應當に方便を勤修して煩惱を斷壞すべし。」若能く是の如きの説を作す者有らば、當に知るべし、是の人四重を犯さず。若し是の如きの説を爲す者有らば、是則ち名けて波羅夷を犯すと爲す。若説きて、「我已に阿耨多羅三藐三菩提を成就す。何を以ての故に。佛性有るを以ての故に。佛性有る者は、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし。是の因縁を以て、我今已に菩提を成就すること

【三七】 是より論義。其中初に佛性を論ずる中、問、答の二段ありて先づ問。  
【三〇】 次に答の



を得」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は則ち名けて波羅夷罪を犯すと爲す。何を以ての故に。佛性有りとも雖も、未だ諸の善方便を修習せざるを以て、是の故に未だ見ず。未見を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はず。善男子、是の義を以ての故に、佛法は甚深思議すべからず。」

〔三元〕 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、王有りて問うて言はく、「云何が比丘過人法に墮す。」佛、

迦葉に告げたまはく、「若比丘有りて、利養の爲の故に、飲食の爲の故に。

諸の諛諂、邪僞、欺詐を作す。云何が當に諸の世間の人をして、定實に

我真實の乞士と知る。是の因縁を以て、我をして大いに利養、名譽を得しむ

べし。是の如きの比丘多くは愚癡の故に、長夜常に念ず、「我實に未だ 四

沙門果を得ず。云何が當に諸の世間の人をして我已に得と謂ふ。復當に云

何が諸の優婆塞、優婆夷等をして、成く共に我を指して是の如く是の人、福德眞に是聖人と云ふこと

を作さしむべき。是の如く思惟し、専ら利を求むるが爲にして、法を求むるが爲に非ず。行來出入

進止安座たり。衣鉢を執持して威儀を失はず。獨空處に坐して阿羅漢の如くし、世間の人をして成く

是の言を作さしむ、「是の如きの比丘善好第一なり。精勤苦行して寂滅の法を修す」と。是の因縁を以

て、我當に大いに門徒弟子を得べし。諸人も亦當に大いに衣服、飲食、臥具、醫藥を供養することを

〔三元〕 次に過人を論ず。其中初に問。  
〔四一〕 次に答。其中初に犯を明す。  
〔四二〕 四沙門果。預流等の四聲聞果に同じ。

致すべし。多くの女人をして敬念、愛重せしむ。若比丘及び比丘尼、是の如きの事を作す有らば、過人法に墮す。

〔四三〕復比丘有りて、無上正法を建立せんと欲するが爲に空閑處に住す。阿羅漢に非ずして、而も人をして是羅漢、是好比丘、是善比丘、寂靜比丘と謂はしめんと欲す。無量の人をして信心を生ぜしむ。此因縁を以て、我無量の諸の比丘等、以て眷屬と爲すことを得。是に因りて破戒の比丘及び優婆塞を教へて、悉く戒を持たしむることを得。是の因縁を以て正法を建立し、如來無上の大義を光揚し、方等大乗の法化を聞顯し、一切の無量の衆生を度脱し、善く如來所説の經律

〔四三〕 次にて不犯を明す。  
〔四四〕 次に重罪を犯すを明す。

輕重の義を解せん。復言はく、「我今亦佛性有り。經有りて名を如來祕藏と曰ふ。是の經中に於て、我當に必定して佛道を成ずることを得、能く無量億の煩惱結を盡すべし。廣く無量の諸の優婆塞の爲に説き言はく、「汝等盡く佛性有り。我と汝等と俱に當に如來の道地に安住して、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、無量億の諸の煩惱結を盡すべし。」是の説を作す者、是の人過人法に墮すと名けず。名けて菩薩と爲す。

〔四五〕若突吉羅を犯す者有らば、忉利天上の日月歲數八百萬歲、地獄の中に墮して諸の罪報を受く。何に況んや、故らに偷蘭遮罪を犯すをや」と言ふ。此の大乗の中、若比丘有りて、偷蘭遮を犯さば、親近すべからず。何等をか名けて大乘經中の偷蘭遮罪と爲す。若長者の佛寺を造立する有りて、諸の華

蠶を以て、用ひて佛に供養す。比丘有りて華貫中の縷を見、問はずして輒く取るを偷蘭遮と名く。若  
 は知、不知も亦是の如く犯す。若貪心を以て佛塔を破壊すれば、偷蘭遮を犯す。是の如きの人は親近  
 すべからず。若王、大臣、塔の朽故を見、修補して舍利を供養せんと欲するが爲に、是の塔中に於て、  
 或は珍寶を得て即ち比丘に寄す。比丘得已りて自在にして用ふ。是の如きの比丘を、名けて不淨と爲  
 し、多く鬪争を起す。善優婆塞親近し、供養、恭敬すべからず。是の如きの比丘を名けて無根と爲す。  
 名けて二根と爲し、不定根と名く。不定根とは、女を欲貪する時身即ち女と爲り、男を欲貪する時身  
 即ち男と爲る。是の如きの比丘を、名けて悪根と爲す。名けて男と爲さず、  
 名けて女と爲さず。出家と名けず、在家と名けず。是の如きの比丘は親近  
 し、供養、恭敬すべからず。佛法の中に於て沙門法の者は、悲心を生じて  
 衆生を覆育すべし。乃至蠅子に無畏を施すべし。是沙門法なり。飲酒乃至嗅香を遠離す、是沙門法な  
 り。妄語することを得ず、乃至夢中に妄語を念せず、是沙門法なり。欲心を生せず、乃至夢中も亦復  
 是の如し、是沙門法なり。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若比丘有りて、淫欲を行するを夢みば、是犯戒なりや否や。』  
 佛の言はく、『不なり。淫欲に於て臭穢の想を生ずべし。乃至一念の淨想を生ぜずば、女人の煩惱、  
 愛想を遠離せよ。若行淫を夢みば、寤めて悔を生ずべし。比丘、乞食して供養を受くるの時、饑世に

【四四】次に夢覺を論ず。其四初  
 に問。  
 【四五】次に答。

子の肉を食する想の如くすべし。若淫欲を生せば、疾く捨離すべし。是の如きの法門は、當に知るべし、是佛所説の經律なり。若魔の所説に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所説に隨順する者は、是を菩薩と名く。若説きて言ふ有らん、常に一脚を翹げ、寂默して言はず。淵に投じ火に赴き、自ら高巖より墜ちて險難を避けず、毒を服し食を斷ず。灰土の上に臥し、自ら手足を縛す。衆生を殺害して方道呪術す。旃陀羅子、無根、二根、及び不定根、身根不具、是の如き等の事、如來悉く出家して道を爲すを聽す」と。是を魔説と名く。佛先に五種の牛味、及び油蜜を食することを聽す。憍奢耶衣、革屣等物、是を除くの外、若説きて言ふ有らん、摩訶稜伽を著くることを聽し、一切の種子悉く貯畜することを聽す。草木の屬皆壽命有り。佛、是を説き已りて便ち涅槃に入る。若經律の是の説を作す者有らば、當に知るべし、即ち是魔の所説なり。我も亦常に一脚を翹ぐるを聽さず。若法の爲の故に行、住、坐、臥を聽す。又亦毒を服し食を斷じ、(聖)五熱身を炙り、手足を繫縛し、衆生を殺害して方道呪術し、珂具象牙、以て革屣を爲す。種子を儲畜し、草木命有り。摩訶稜伽を著するを聽す。若世尊、是の如きの説を作すと云はば、當に知るべし、是を外道の眷屬と爲す。我が弟子に非ず。我唯五種の牛味、及び油蜜等を食することを聽し、革屣、憍奢耶衣を著くることを聽す。我、四大に壽命有ること無し」と説く。若

【四七】 摩訶稜伽(Mahāraṅga)。大價衣と譯す、衣服の名。戒律にはこの種の衣服を著くることを禁ぜり。安註に赤色と譯して云云す。

【四七】 五熱。五體を火に熱すること、外道の苦行なり。

經律、是の説を作す者有らば、是を佛説と名く。若佛の所説に隨順する者有らば、當に知るべし、是等は眞に我が弟子なり。若佛の所説に隨はざる者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の經律に隨順する者あらば、當に知るべし、是の人は是大菩薩なり。善男子、魔説、佛説差別の相は、今已に汝が爲に廣宣分別す。』

【四八】 是より領解。  
【四九】 是より述成。

迦葉、佛に白して言さく、『世尊、我今始めて魔説、佛説差別の相を知る。是に因つて佛法の深義に入ることを得ん。』  
佛、迦葉を讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝能く是の如く曉了分別す。是を點慧と名く。』

四諦品第十

佛、復迦葉に告げたまはく、「言ふ所の苦とは、苦聖諦と名けず。何を以ての故に。若苦是苦聖諦と言はば、一切の畜生及び地獄の衆生、聖諦有るべし。善男子、若復人有りて、如來の甚深の境界、常住不變微密法身を知らずして、是食身、是法身に非ず」と謂ふ。如來の道德、威力を知らず。是を名けて苦と爲す。何を以ての故に。不知を以ての故に。法を非法と見、非法を法と見る。當に知べし、是の人は心ず惡趣に墮し、生死に輪轉す。諸結を増長し、多く苦惱を受けん。若能く、如來常住變異有ること無きを知り、或は、常住の二字音聲を聞く有りて、若一たび耳を經ば即ち天上に生ぜん。後解脱の時、乃ち能く如來常住にして變易有ること無きを證知す。既に證知し已りて是の言を作さく、「我往昔に於て曾て是の義を聞く。今解脱を得て方に乃ち證知す。我本際に於て不知を以ての故に、生死に輪轉して周回窮り無し。今日に始めて乃ち眞智を得」と。若是の如く知らば、眞に是苦を修す、利益する所多し。若知らざる者に復

【一】四諦とは、其に四聖諦（Charit-aryasatya）に對する眞實の解釋を論といひ之に四あれは四諦といふ。  
一、苦（Dukkha）は、迷の果、報果を總稱す。  
二、集（Samudaya）は、迷の因、煩惱を總稱す。  
三、滅（Nirodha）は、悟の果、

涅槃を總稱す。  
四、道（Marga）は悟の因、道品を總稱す。  
【二】この品は上の云何が者の調御心喜眞諦を説くやの間に答ふ。其中初に四諦を明す中、先づ苦諦、之に明惑、明果、明解、解果、結解、結惑の六段あり。

勤修すと雖も、利益する所無し。是を苦を知ると名け、苦聖諦と名く。若人はの如く修習すること能はざれば、是を名けて苦と爲す、苦聖諦に非ず。

苦集諦とは眞法の中に於て眞知を生ぜずして不淨物を受く、所謂奴婢、能く非法を以て是正法と言ふ。正法を斷滅して久住せしめず、是の因縁を以て法性を知らず。知らざるを以ての故に生死に輪轉して多く苦惱を受く、天に生じ及び正解脱を得ず。若深智有りて正法を壊せざれば、是の因縁を以て天上に生じ、及び正解脱を得。若苦集諦の處を知らずして而も正法、常住有ること無く、悉く是滅法と言ふ有らば、是の因縁を以て、無量劫に於て生死に流轉して諸の苦惱を受く。若能く法常住にして異らずと知らば、是を集を知ると名け、集聖諦と名く。若人は是の如く修習すること能はざれば、是を名けて集と爲す、集聖諦に非ず。

苦滅諦とは、若多く修して空法を習學する有らば、是を不善と爲す。何を以ての故に。一切法を滅するが故に、如來の眞法藏を壞するが故に。是の修學を作す、是を修空と名く。苦滅を修する者は一切の諸の外道等に違ふ。若空を修する、是滅諦と言はば、一切の外道も亦空法を修すれば滅諦有るべし。若説きて「如

【三】次に集諦。之に明惑、惑果、明解、明果、結解、惑解の六段あり

【四】次に滅諦。之に明惑、明解、惑果、無果、結解、結惑の六段あり。

【五】空法を習學す。安註に曰く、之に二種あり、一に二乗の沍空、二に外道の撥無なりと。

【六】外道等に違ふ。安註に曰く、亦聲聞に違ふと云ふべし。而も偏に外道に違ふと云へるは二義あるに依る。一に前來以て聲聞を阿す、二に聲聞理に垂く、即ち是れ外道なるが故にと。

來藏有りて、見るべからずと雖も、若能く一切の煩惱を滅除せば、爾らば乃ち入ることを得」と云ふ有らん。若此の心を發す一念の因縁、諸法の中に於て而も自在を得。若如來の密藏無我空寂を修習する有らば、是の如きの人無量の世に於て、生死の中に在りて流轉して苦を受く。若是の如きの修を作さざる者有らば、煩惱有りて雖も、疾く能く滅除せん。何を以ての故に。如來の祕密藏を知るに因るが故なり。是を苦滅聖諦と名く。若能く是の如く滅を修習する者は、我が弟子なり。若是の如きの修を作すこと能はざる有らば、是を空を修すと名く、滅聖諦に非ず。

【三】 道聖諦とは、所謂佛法僧寶及び正解脱なり。諸の衆生有りて、顛倒心をもつて言はく、佛法僧及び正解脱無し。生死流轉、猶し幻化の如し。是の見を修習す。此の因縁を以て、三有に輪轉して久しく大苦を受く。若能く發心して、如來常住にして變無く、法僧解脱も亦復是の如くなるを見ば、此の一念に乗じて、無量世に於て自在の果報、意に隨つて得。何を以ての故に。我往昔に於て、四倒を以ての故に、非法を法と計し、無量、惡業の果報を受く。我今是く如きの見を滅するを以ての故に、佛正覺を成ず。是を道聖諦と名く。若人有りて、三寶無常と言ひて是の見を

【七】 次に道諦、之に明惑、惑果、明解、解果、結惑、結解の六段あり。

【八】 三有 (Tilava) とは、存在の義、世界の異稱なり。されば三有は欲有、色有、無色有にして三界に同じ。三界とは欲界 (Kāmadhātu)、色界 (Rūpadhātu)、無色界 (Arūpadhātu) をいふ。

【九】 四倒、法に對する四種の顛倒想なり。之に二種あり、生死に關するものと涅槃に關するものとなり。前者は常、樂、我、常をいひ、後者は苦、空、無常、無我を云ふ。今は生死に關す。

わい今是く如きの見を



修習せば、是虚妄修にして道聖諦に非ず。若是の法を修して常住と爲さば、是我が弟子なり、眞見に  
四聖諦の法を修習するなり。是を四聖諦と名く。  
【二】迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今始めて甚深の四聖諦法を修  
習するを知る。』

【三】是より領解。

四倒品第十一

佛、復迦葉に告げたまはく、「四倒と謂ふは、非苦の中に於て苦想を生ずるを名けて顛倒と曰ふ。

非苦とは、名けて如來と爲す。苦想を生ずとは、諸の如來無常變異と謂ふ。若如來は無常と説かば、

大罪苦と名く。若く如來此の苦身を捨てて涅槃に入る。薪盡きて火滅するが如し」と言はば、是を非苦に

苦想を生ずと名け、是を顛倒と名く。我若説きて「如來常と言ふは、即ち是

我見なり。我見を以ての故に無量の罪有り。是の故に如來無常と説くべし。

是の如く説かば、我則ち樂を受く。如來無常、即ち是苦と爲す。若是苦な

らば云何ぞ樂を生ぜん。苦の中に於て樂想を生ずるを以ての故に、名けて

顛倒と爲し、樂に苦想を生ずるを名けて顛倒と爲す。樂とは即ち是如來、

苦とは如來無常なり。若如來は無常と説かば、是を樂の中苦想を生ずと名

く。如來常住、是を名けて樂と爲す。若我説きて如來是常と言はば、云何ぞ復涅槃に入ることを得ん。

若如來是苦に非ずと言はば、云何ぞ身を捨てて滅度を取る。樂の中に於て苦想を生ずるを以ての故に、

名けて顛倒と爲し、是を初倒と名く。

無常に常想、常に無常想、是を顛倒と名く。無常とは不修空を名く。空を修せざるが故に壽命短

【一】 此所の四倒は涅槃(如來)に關す。  
【二】 この品は四顛倒を演説するの間に答ふ、其中初に四倒を明す中、先づ苦倒。之に苦境を出し、苦體を出し、結すの三段あり。  
【三】 次に無常倒。之に倒境、倒體、結の三段あり。

促す。若説きて「空寂を修せずして常壽を得」と言ふ有らば、是を顛倒と名け、是を第二の顛倒と名く。

四 無我に我想、我に無我想、是を顛倒と名く。世間の人も亦我有りと説き、佛法の中も亦我有りと

説く。世間の人有我と説くと雖も、佛性有ること無し。是則ち名けて無我中に於て我想を生ずと爲す。

是を顛倒と名く。佛法有我は則ち佛性なり、世間の人佛法無我と説く。是を我の中に無我想を生ず

と名く。若し佛法必定無我なり、是の故に如來、諸の弟子に敎して無我を修習せしむ」と言はば、名け

て顛倒と爲し、是を第二の顛倒と名く。

五 淨に不淨想、不淨に淨想、是を顛倒と名く。淨とは即ち是如來常住、

雜食身に非ず、煩惱身に非ず。是肉身に非ず、是筋骨繫縛の身に非ず。若

説きて、「如來無常是雜食身、乃至筋骨繫縛の身、法僧解脫是滅盡」と言ふ

者有らば、是顛倒と名く。不淨淨想顛と名くとは、若説きて「我が此の心

中、一法の是不淨なる者有ること無し。不淨無きを以て、定んで當に清淨

の處に入ることを得べし。如來所説の不淨觀を修す。是の如きの言、是虛妄の説」と言ふ有らば、是

を顛倒と名く。是則ち名けて第四顛倒と爲す。」

六 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、我今日より始めて正見を得。世尊、是より前の我等、悉

く邪見の人と名く。」

- 【四】次に無我倒。之に倒境、倒體、結の三倒あり。
- 【五】次に不淨倒。之に倒境、倒體、結の三段あり。
- 【六】是より領解。其中初に領解。
- 【七】次に迷を述す。

卷の第八

如來性品第十二

迦葉、佛に白して言さく、「世尊、二十五有

に我有りや否や。」佛の言はく、「善男子、我と

は即ち是如來藏の義、一切衆生悉く佛性有

り、即ち是の義なり。是の如きの我が義、本

より已來、常に無量の煩惱に覆はる。是の故に

衆生見ることを得ること能はず。善男子、

貧女人、舍内に多く眞金の藏有りて、家人大

小、知者有ること無し。時に異人有りて善く方

便を知り、貧女に語りて言はく、「我今汝を雇ふ、

汝我が爲に草穢を耘除すべし。」女人答へて言は

く、「我今能はず。汝若能く我が子に金藏を示さば、然して後乃ち當に速かに汝の爲に作すべし。」

【一】 この一品は上の二間に答

ふ。一は云何が善業を作すの

問、二は能く難見の性を見る

の問是れなり。其中初に善業

を作すを答ふ。之に二段あり

て初に佛性善業の爲に縁と作

るを明し、其中先づ問。

【二】 次に答。其中、初に本有

不可見を明し、先づ法を明す。

之に本有、不可見の二段あり。

【三】 如來藏は、Tathagataガル

界の佛性を指す。

【四】 次に譬。之に本有、不可

見、縁感、顯説を譬ふるの四

段あり。

【五】 家人大小の古來多解あり、

安註には入天を小とし體空の

二乘を大とす。また但空の聲

聞を小とし、但空の菩薩を大

とす。また次に但空の菩薩を

小、出假の菩薩を大とす。

【六】 金藏 (Suvargahia)。佛性の貴むべきこと、黄金に於けるが如きに喩へて金藏といふ。佛性を指す。

是の人答へて言はく、「我方便を知る、能く汝が子に示さん。」女人復言はく、「我が家大小、尙自ら知らず、泥や汝能く知らんや。」是の人答へて言はく、「我今能を審かにす。」女人復言はく、「我も亦見んと欲す、并に我に示すべし。」是の人即ち其の家に於て、金藏を掘出す。女人見已りて心歡喜を生じ、奇特の想を起して是の人を宗仰するが如し。善男子、衆生の佛性も亦復是の如し。一切衆生見るを得ること能はず。彼の寶藏を貧人の知らざるが如し。善男子、我今善く一切衆生に所有の佛性、諸の煩惱に覆蔽せらるるを示す。彼の貧人の眞金藏有れども、見るを得ること能はざるが如し。如來今日、普く衆生に諸の覺寶藏を示す、所謂佛性なり。一切衆生是の事を見已らば、心歡喜を生じて如來を歸仰す。善方便とは即ち是如來、貧女とは即ち是一切無量の衆生、眞金藏とは即ち佛性なり。

(一) 復次に善男子、譬へば 女人の一子を生育するに、嬰孩にして病を得、是の女愁惱して良醫を求覓す。良醫既に至りて 二種の藥を合す、酥、乳、石蜜なり。之を與へて服せしむ。因つて女人に告ぐ、「兒藥を服し已らば、且く乳を與ふること莫れ。藥消し已るを須ちて、爾して乃ち之を與へよ。」是の時に女人、即ち苦

- 【七】次に合。之に合、帖合の二段あり。
- 【八】次に即ち説いて以て疑を釋すること能はざるを顯ふ。其中初に譬の中、先づ有我的病を起すを明す。
- 【九】女人の一子を生育するに。安註に曰く、古來女人良醫を解するに四説あり。一は女を法身、醫を應身に譬へ、二は女を實智、醫を權智に譬へ、三は女を前佛、醫を後佛に譬へ、四は女を佛智、醫を機縁に譬ふと。
- 【一〇】次に無我の藥を説く。
- 【一一】三種の藥、無常の三修に譬ふ。

味を以て用ひて其の乳に塗り、其の兒に語りて言はく、「我が乳毒を塗れり、復觸るべからず。」(二三) 其の兒渴乏して母の乳を得んと欲す。乳の毒氣を聞きて便ち遠く捨て去る。其の藥消するに至り、(二四) 母乃ち乳を洗ひ、子を喚びて之を與ふ。是の時に小兒、復饑渴すと雖も、先に毒氣を聞く、是の故に來らず。母復語りて言はく、「汝藥を服するが爲の故に、毒を以て塗る。汝藥已に消すれば、我已に洗ひ竟る。汝便ち來るべし、乳を飲むも苦きこと無し。」其の兒聞き已りて、漸に還りて飲むが如し。(二五) 善男子、如來も亦爾なり。一切を度せんが爲に諸の衆生に無我の法を修するを教ふ。是の如く修し已れば、永く我が心を斷じて涅槃に入る。世間の諸の妄見を除くが爲の故に、世間に出過するの法を示現するが故に、復世間の計我虛妄にして眞實に非ざるを示すが故に、無我法を修して身を清淨にするが故なり。譬へば女人、其の子の爲の故に苦味を以て乳に塗るが如し。如來も亦爾なり。空を修するが爲の故に、説きて「諸法悉く我有ること無し」と言ふ。(二六) 彼の女人、乳を淨洗し已りて、而も其の子を喚び、還つて飲ましめんと欲するが如し。我今も亦爾なり、如來藏を説く。是の故に比丘、怖を生ずべからず。彼の小兒の母の喚ぶを聞き已りて、漸く還つて乳を飲むが如し。比丘も亦爾なり。自ら如來祕藏有らざることを得ざるを分別すべし。』

- 【二二】 次に邪我の病息を譬ふ。
- 【二三】 次に眞我の樂興るを譬ふ。
- 【二四】 次に合。其中初に無我の藥を合説す。
- 【二五】 次に眞我の教興るを合説す。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、實に我有ること無し。何をもつての故に。嬰兒生ずるの時、

知曉する所無し。若我有らば、即ち生の日、尋いで知有るべし。是の義を以ての故に、定んで我無き

を知る。若定んで我有らば、受生已後終沒無かるべし。若一切皆佛性の是

常住なる有らむれば、壞相無かるべし。若壞相無ければ、云何ぞ而も刹

利、婆羅門、毗舍、首陀、及び旃陀羅、畜生の差別有らん。今業縁種種同

じからず、諸趣各異なるを見る。若定んで我有らば、一切衆生勝負無かるべ

し。是の義を以ての故に、定んで知んぬ、佛性是常法に非ず。若佛性

定んで是常と言はば、何に縁りてか復殺、盜、淫、兩舌、惡口、妄言、綺

語、貪恚、邪見有りと説く。若我性常ならば、何が故を酒後荒醉迷亂する。

若我性常ならば、盲色を見るべからず、鼙聲を聞くべからず。癡能く語

るべく、拘蹩能く行かん。若我性常ならば、火坑、大水、毒藥、刀劍、惡

人、禽獸を避くべからず。若我常ならば、本更ふる所の事、忘失すべから

ず。若忘失せずば、何に縁りてか、復我曾て何の處にか是の人を見ると言

ふや。若我常ならば則ち老少盛衰有りて往事を憶念すべからず。若我常ならば、何の處にか止住す。

涕唾、青、黃、赤、白、諸色の中に在りと爲すや。若我常ならば、身中に徧すること胡麻油の閉、空處無

【一六】 是より論義。其中初に問の文の中、先づ總じて無我を唱ふ。

【一七】 次に別して難を作す。この中十二難あり。其中初の四難は果に約す。この中にまた始生終沒と差別勝負との二雙あること、文を按じて知るべし。

【一八】 次の兩難は因に約す。この中、殺等十惡は惡因に約し、酒後は惡緣に約す。

【一九】 次の四難は又果に約す。この中また苦果、苦緣、忘失、憶念の四節あり。

【二〇】 次に兩難の難處を明す。

きが如くなるべし。若身を斷する時、我も亦斷すべし。』

佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、譬へば王家に大力土有りて、其の人眉間に金剛珠有り。餘の力

士と角力相撲す。而も彼の力士頭を以て之に觸るるに、其の額上の珠、尋いで膚中に没し、都て自ら

是の珠の在る所を知らず。其の處に瘡有り、即ち良醫に命じて自ら療治せんと欲す。時に明醫有り、善

く方藥を知る。即ち是の瘡は珠の體に入るに因る。是の珠皮に入りて即便停住するを知る。是の時に

良醫、力士に尋問す、『卿、額上の珠何れの所在と爲ん。』力士驚き答ふ、『大

師醫王、我が額上の珠、乃ち去ること無きや。是の珠今者何れの所在と爲

ん、將幻化に非ずや。』憂愁啼哭す。是の時に良醫、力士を慰諭す、『汝今大

愁苦を生ずべからず。汝鬪ふ時に因りて寶珠體に入る。今皮裏に在りて

影外に現す。汝等鬪ふ時、瞋恚の毒盛にして珠體に陷入するが故に自ら知

らず。』是の時に力士、醫の言を信せず、若皮裏に在らば膿血不淨、何に縁りてか出でざらん。若筋裏

に在らば見るべからず。汝今云何ぞ我を欺誑する。』時に醫、鏡を執りて以て其の面を照すに、珠鏡の

中に在りて明了に顯現す。力士、見已りて心に驚怪を懷き、奇特の想を生ずるが如し。善男子、一

切衆生も亦復是の如し。善知識に親近すること能はざるが故に、佛性有りとも雖も、皆見ること能はず。

而も貪淫、瞋恚、愚癡に覆蔽せらる。故に地獄、畜生、餓鬼、阿脩羅、旃陀羅に墮し、刹利、婆羅門、

【三】 是より前の十二難に酬ゆる答の文。其中初に兩譬現用を答ふる中、兩譬あり。先づ初に譬。之に三段ありて初に譬。

【三】 次に合。



毗舍、首陀、是の如き等の種種の家中に生ず。心に因りて起す所の種種の業縁、人身を受く。雖も、  
 瞽盲、瘡癰、拘躄、癡跛、二十五有に於て諸の果報を受く。貪淫、瞋恚、愚癡心を覆ひて佛性を知ら  
 ず。彼の力士、寶珠の體に在れども呼びて失去すと謂ふ。衆生も亦爾なり。善知識に親近することを  
 し。知らざるが故に、如來の微密寶藏を識らずして無我を修學す。譬へば非理の我有りと説くと雖も、亦  
 復た我の眞性を知らざるが如し。我が諸の弟子も亦復た是の如し。善知識に親  
 近することを知らざるが故に、無我を修學して亦復無我の處を知らず。尙  
 自ら無我の眞性を知らず、況や復能く有我の眞性を知らんや。善男子、如  
 來是の如く諸の衆生皆佛性有りと説く。譬へば良醫の彼の力士に金剛寶  
 珠を示すが如し。是の諸の衆生、無量億の諸の煩惱等に覆蔽せられて佛性  
 を識らず。若煩惱を盡さば、爾の時に乃ち證知明了を得、彼の力士の淨鏡  
 の中に於て其の寶珠を見るが如し。善男子、如來の祕藏是の如く無量に  
 して思識すべからず。

(二四) 復次に善男子、譬へば雪山に一味藥有り、名けて樂味と曰ふ。其の味極めて甜し。深叢の下に在  
 りて、人の能く見ること無し。人有りて、(二五) 香を聞きて即ち其の地に、當に是の藥有るべきを知る。  
 過去世の中、轉輪王有りて、彼の雪山に於て、此の藥の爲の故に、在在所所に木笥を造作して、以て

【三】次に結。

【二】次に第二譬の文。之に二  
 段ある中、初に譬の文。之  
 に失、得、重失、重得の四段  
 あり。

【二五】香を聞きて。一には經に  
 依て信知するを譬ふと、二に  
 は十住の善財見未だ明了なら  
 ざるを譬ふと。

是の薬を接す。是の薬熟する時、地より流出して太筒の中に集る。其の味真正なり。王既に没し已りて、其の後は是の薬、或は酢、或は鹹、或は甜、或は苦、或は辛、或は淡、是の如きの一味、其の流處に隨ひて種種異ること有り。是の薬の眞味は停留して山に在り、猶ほ滿月の如し。凡人の薄福、以て掘鑿して功を加ふること苦ろに至ると雖も、而も得ること能はず。復聖王有りて世に出現し、福因縁を以て、即ち是の薬眞性の味を得るが如し。

三六 善男子、如來の秘藏、其の味も亦爾なり。諸の煩惱の叢林に覆はれ、無明の衆生見るを得ること能はず。一味とは譬へば佛性の如し。煩惱を以ての故に種種の味を出す。所謂地獄、畜生、餓鬼、天人、男女、非男非女、刹利、婆羅門、毗舍、首陀なり。

三七 佛性に雄猛にして毀壞すべきこと難し。是の故に能く殺害する者有ること無し。若殺す者有らば、則ち佛性を斷せん。是の如きの佛性は終に斷ずべからず。性若斷すべくば是の處有ること無し。我性の如きは、即ち是如來秘密の藏なり。是の如きの秘藏は、一切能く毀壞、燒滅すること無し。壞すべからずと雖も、然も見るべからず。若阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得ば、爾らば乃ち證知せん。是の因縁を以て能く殺す者無し。

三八 迦葉、菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、若殺す者無くば、應當に不善の業有ること無かるべし。』

【二六】次に合。之に第一の失を明すを合す、第三の重ねて失を明すを合すの二段あり

【二七】是より利鈍覺る處を答ふ其中初に正説。之に不可壞を譬し、廣く辨じ、總じて結すの三段あり。

【二八】次に論義。其中、初に問の文。

【二九】次に答の文。其中、初に法の文のうち、先づ殺すべき業を成す。

佛、迦葉

に告げたまはく、『實に殺生有り。何を以ての故に。善男子、衆生の佛性五陰の中に住す。若五陰を壞すれば名けて殺生と曰ふ。若生を殺す有らば、即ち惡趣に墮せん。業因縁を以て、而も刹利、婆羅門等、毗舍、首陀、及び旃陀羅、若は男、若は女、非男非女、二十五有差別の相有りて生死に流轉す。』

非聖の人横に我を計す、『大小の諸相猶し種子の如し。或は米豆、乃至拇指の如し。』是の如く種種に妄りに憶想を生ず、妄想の相眞實有ること無し。出世の我相は、名けて佛性と爲す。是の如く我を計するは、是を最善と名く。

復次に善男子、譬へば人有りて善く伏藏を知り、即ち利鏤を取り、地を掘りて直ちに下、磐石、沙磧、直ちに過ぎて難むと無し。唯金剛に至りて穿徹すること能はざるが如し。夫金剛とは所有の刀斧も破壞すると能はず。善男子、衆生の佛性も亦復是の如し。一切の論者、天魔、洩旬、及び諸の天人の壞する能はざる所なり。五陰の相は即ち是起作、起作の相は猶し石砂の穿つべく、壞すべきが如し。佛性眞我は、譬へば金剛の毀壞すべからざるが如し。是の義を以ての故に、五陰を壞するは名けて殺生と爲す。善男子、必定して當に知るべし、佛法は是の如く思議すべからざるを。

善男子、方等經とは、猶し甘露の如く、亦毒藥の如し。迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『如來何に緣りてか方等經は、譬へば甘露の如く亦毒藥の如しと説く。』佛の言はく、『善男子、汝今如來

【一〇】次に疑を釋す。

【一一】次に外道を揀ぶ。

【一二】次に正しく我相を明す。

【一三】次に譬。之に、二段ある中、初に譬。

【一四】次に合。

【一五】是より佛性能く善業を起すことを明す。其中初に作業を明す。

【一六】次に論義。其中初に雙問。

の秘藏眞實の義を知らんと欲するや不や。迦葉白して言はく、「我今實に如來秘藏の義を知ることを得んと欲す。」

爾の時に世尊、偈を説きて言はく、

【三八】或は甘露を服して、命を傷けて早夭する有り、

或は復甘露を服して、壽命長存を得、

或は毒を服して生ずる有り、毒を服するに縁りて死する有り、

無閻智の甘露、所謂大乘典なり、

是の如きの大乗典も、亦雜毒藥と名く、

酥醍醐等、及び諸の石蜜、

服して消すれば則ち藥と爲り、消せざれば則ち毒と爲るが如し、

方等も亦是の如し、智者は甘露と爲し、

愚は佛性を知らず、之を服すれば則ち毒と成る、

聲聞及び緣覺、大乘を甘露と爲す、

猶し諸味の中、乳最も第一爲るが如し、

是の如く勤進する者、大乘に依因して、

【三七】次に佛答。其中初に愚智

の二人を明す。之に佛更に徵問す、迦葉答ふ、佛爲に釋すの三段あり。

【三八】初の六句に就て安註に古來の三解を出す。一に大小二

乘を棄くるに各得失あるが故に甘露、毒等の別ありと。

二に師弟に約して解す、師大乘を説くに弟子の解するものを壽とし解せざるを夭とす、

師小乘を説くに弟子にまた生と死とあること准知すべし。

三に唯一の大乗教その得者を甘露と云ひ、失者を毒藥と云ふと。

【三九】甘露 梵語 Amrita の譯、

味甘くして蜜の如きもの、長壽不老の藥なりといふ。

涅槃に至ることを得て、人中の象王と成る、衆生佛性を知る、猶し迦葉等の如し、

無上の甘露味、不生にして亦不死、

【四】迦葉汝今當に、善く三歸を分別すべし、

是の如きの三歸の性、則ち是我の性、

若能く歸かに、我性佛性有るを觀察すれば、

當に知るべし是の如きの人、秘密藏に入ることを得、

我及び我所を知る、是の人已に世を出で、

佛法三寶性、無上第一尊、

我が所説の偈の如く、其の性義是の如し。』

【五】爾の時に迦葉、復偈を説きて言さく、

「我今都て、歸依三寶の處を知らず、

云何が當に、無上無所畏に歸趣すべき、

三寶の處を知らずば、云何が無我を作らん、

云何が佛に歸する者、而も安樂を得、

【四】是より一體三寶を明す。

其中初に勸之に勸、釋勸の

二段あり。

【五】三歸。佛、法、僧を所依

として之を尊崇し敬信するこ  
と。

【四】次に論義の文。之に、二  
番の間答あり。其中初に併せ  
て受けざるを明し、先づ問の  
文。之に、不知を答ふ、昔の  
別體を問ふ、今の一體を問ふ、  
問を詰して答を講ずるの四段  
あり。

云何が歸依法、唯願はくは我が爲に説きたまへ。

云何が自在を得、云何が不自在、

云何が歸依僧、轉じて無上の利を得ん、

云何が眞實説、未來に佛道を成せん、

未來若成せずば、云何が三寶に歸せん、

我今預知無し、當に次第依を行すべし、

云何ぞ未だ懷妊せざるに、而も子を生ずるの想を作さん、

若しかなら胎中に在らば、則ち名けて子有りと爲す、

子若胎中に在らば、定んで當に生ずべきこと久しからじ、

是を名けて子の義と爲す、衆生の業も亦然なり、

佛の所説の如きは、愚者は知ること能はじ、

其の不知を以ての故に、生死の獄に輪回す、

假名優婆塞、眞實義を知らず、

唯願はくは廣く分別して、我が疑網を除斷したまへ、

如來大智慧、唯哀を垂れて分別し、

願はくは如來の、秘密の寶藏を説きたまへ、

〔三〕迦葉汝當に知るべし、我今當に汝が爲に、

善く微密藏を開きて、汝が疑をして斷つことを得しむべし、

今當に至心に聽くべし、〔四〕汝諸の菩薩に於て、

則ち第七佛と、其の一名號を同じうす、

佛に歸依する者、眞に優婆塞と名く、

終に更に、其餘の諸の天神に歸依せず、

法に歸依する者、則ち殺害を離れ、

聖僧に歸依する者、外道を求めず、

是の如く三寶に歸すれば、則ち無所畏を得、

〔五〕迦葉佛に白して言さく、我も亦三寶に歸す、

是を名けて正路と爲す、諸佛の境界なり、

二寶平等の相、常に大智の性有り、

我性及び佛性、二無く差別無し、

是の道佛の讚じたまふ所、正進安止の處なり、

〔四三〕次に答。之に其請答を酬ゆ、一體を問ふを酬ゆ、別體を問ふを酬ゆ、不知を唱ふるを酬ゆの四段あり。

〔四四〕汝諸の菩薩に於て。この一句古來三釋あり、一には汝及び諸の菩薩の意、二には於の字を及と改む、三には改むるに及ばず、諸の菩薩皆同じくこれ佛なることを明すと。

〔四五〕次に併せて歸依すの文。其の中初に問の文。之に、昔別に依らんと欲す、自隱に依らんと欲す、他顯に依らんと欲すの三段あり。

亦正徧知と名く、故に佛に稱せらる、

我も亦善逝、所讚の無上道に趣く、

是最も甘露と爲す、諸有有ること無き所なり。」

爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、「善男子、汝今諸の聲聞、凡

夫の人の如く、三寶を分別すべからず。此の大乗に於て、三歸分別の相有

ること無し。所以は何ん、佛性の中に於て即ち法僧有り。聲聞、凡夫を化

度せんと欲するが爲の故に、分別して三寶の異相を説く。善男子、若世間

法に隨順せんと欲せば、則ち三歸依有るを分別すべし。善男子、菩薩是

の如きの思惟を作すべし、我今此の身佛に歸依す。若即ち此の身佛道を成

ずることを得ば、既に成佛し已らば、當に諸の世尊を恭敬、禮拜、供養す

べからず。何を以ての故に。諸佛平等、等しく衆生の爲に歸依と作るが故

なり。若し法身舍利を尊重せんと欲せば、便ち諸佛の塔廟を禮敬すべし。

所以は何ん、諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故なり。亦衆生をして

我が身中に於て塔廟の想を起して、禮拜、供養せしむ。是の如きの衆生、

我が法身を以て歸依處と爲す。一切衆生皆非真耶僞の法に依る。我當に次第して、爲に眞法を説くべ

【四六】次に答の文。その中初に昔の別體に依不依有るを明す

之に化の爲に依るべし、依るべきの意を釋すの二段あり。

【四七】次に顯時の一體に依不依有ることを明す。之に不依、

次依の二段あり。

【四八】法身舍利、舍利とは梵語

舍利に二種あり、肉體のもの

のば之を生身舍利といひ、實

際上の佛骨を意味す。精神的

のものは法身舍利といひ、經

卷等を意味す。今は後者なり。

安註に曰く、法身は本地、舍

利は應身と。

【四九】次に隱時の一體は正に足

勸むる所なきを明す。之に法、

譬、合の三段あり。



し。又非眞僧に歸依する者有らば、我當に爲に依眞僧處と作るべし。若三歸依を分別する者有らば、我當に爲に一歸依處と作り、三差別無かるべし。生盲の衆に於て爲に眼目と作り、復當に諸の聲聞、緣覺の爲に眞歸處と作るべし。善男子、是の如きの菩薩、無量の惡業生等、及び諸の智者の爲に佛事を作す。善男子、譬へば人有りて、陣に臨みて戰ふ時、卽ち心念を生ずるが如し、我是の中に於て最も第一と爲す。一切の兵衆悉く我に依恃すと。亦太子、是の如く思惟するが如し、我當に其餘の王子を調伏し、大王の、帝王の業を紹繼して自在を得、諸王の子をして悉く歸依せられしむべし。是の故に下劣心を生ずべからず」と。王の如く、王子、大臣も亦爾なり。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。是を思惟と作す。云何が三事我と一體なる。善男子、我三事卽ち是涅槃三示す。如來とは無上土と名く。譬へば人身は頭を最上と爲す、餘の肢節、手足等に非ざるなり。佛も亦是の如し、最も尊上爲り、法僧に非ざるなり。諸の世間を化度せんと欲するが爲の故に、種種に差別の相を示現す。彼の梯登の如し。是の故に汝今、凡愚の人の知る所の、三歸差別の相の如きを受持すべからず。汝大乘に於て、猛利決斷すること剛刀の如くすべし。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、世尊、我知りて故らに問ふ、知らずと爲すに非ず。我、菩薩大勇

【五〇】 善男子。一に大將、二に太子、三に大臣の三譬あり。序の如く、了因、正例、緣因の三佛性に譬ふ。また佛法、僧の三寶に譬ふべし。

【五一】 次に領解の文。これに四段ある中、初に領解の文。これに發迹、自領解、誓つて他を化するの三段あり。

猛者の爲に、無垢清淨の行處を問ひ、如來をして、諸の菩薩の爲に奇特の事を廣宣し分別し、大乘方等經典を稱揚せしめんと欲す。如來大悲、今已に善説す。我も亦是の如く其の中に安住せん。説く所の菩薩清淨の行處は、即ち是大涅槃經を宣説す。世尊、我今亦當に、廣く衆生の爲に是の如きの如來祕藏を顯揚すべし。亦當に眞の三歸處を證知すべし。若衆生の、能く是の如きの大涅槃經を信する有らば、其の人則ち能く自然に三歸依處を了達せん。何を以ての故に。如來祕藏、佛性有るが故に、其是の經典を宣説する者有らば、皆身中盡く佛性有りと云ふ。是の如きの人は、則ち遠く三歸依處を求めず。何を以ての故に。未來世に於て我が身則ち當に三寶を成就すべし。是の故に聲聞、緣覺の人及び餘の衆生、皆我に依り恭敬、禮拜せん。善男子、是の義を以ての故に、應當に正しく大乘經典を學すべし。

三 迦葉復言さく、『佛性是の如く思議すべからず。三十二の相、八十種の好も亦不可思議なり。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝已に深利の智慧を成就す。』  
 今當に、更に善く汝が爲に如來藏に入るを説くべし。若我住せば、即ち是常法、苦を離れず。若我無ければ、淨行を修行するに利益する所無けん。若諸法皆我有ること無しと言はば、是即ち斷見なり。

【二二】 次に勸持。  
 【二三】 次に稱歎。  
 【二四】 次に述成。  
 【二五】 是より中道圓觀を明す。其中初に許説。  
 【二六】 次に正説の文。その中初に略の文の中、先づ中道を標す。  
 【二七】 次に乖中の惑を明す。其中初に惑の文。この中に六句あり、三句は常を計し、三句は斷を計す。

若我住すと言はば、即ち是常見なり。若一切行無常と言はば、即ち是斷見なり。諸行常とは復是常見なり。若苦と言はば、即ち是斷見なり。若樂と言はば復是常見なり。一切法常を修する者は、斷見に墮し、一切法斷を修する者は、常見に墮す。歩屈蟲の、要す前脚に因りて後足を移すことを得るが如し。常斷を修する者も、亦復是の如し、要らず斷常に因る。是の義を以ての故に。餘法の苦を修する者、皆不善と名く。餘法の樂を修する者は、則ち名けて善と爲す。餘法無我を修する者は、是諸の煩惱分なり。餘法の常を修する者は、是則ち名けて如來祕藏と曰ふ。所謂涅槃は窟宅有ること無し。餘の無常法を修する者は、即ち是財物、餘の常法を修する者は、佛法僧及び正解脱を謂ふ。當に知るべし、是の如きの佛法中道は、二邊を遠離して眞法を説く。凡夫愚人も中に於て疑無し。羸病の人の酥を服食し已らば、氣力輕便なるが如し。

有無の法體性定まらず。譬へば四大の、其の性同じからず、各自ら違反するを、良醫は善く知り、其の偏發に隨ひて而も之を消息するが如し。善男子、如來も亦爾なり。諸の衆生に於ける、猶し良醫の如し。諸の煩惱の體相差別を知りて、而も爲に除斷し、如來祕密の藏は、清淨佛性常住にして變らざるを開示す。若有と言はば、智染すべからず。若無と言はば

【六】 次に惑を結す。之に法、譬、合の三段あり。  
 【五】 次に破惑の觀を明す。之に正明、結解の二段あり。初に三雙六句あり。  
 【六〇】 次に廣く中道を明す。其中初に有無に約して中を顯す而して先づ法。  
 【六一】 次に譬。之に譬、合の二段あり。

即ち是妄語なり。若有と言はば、默然すべからず。亦復戲論、誣誣すべからず。但諸法の眞性を了知せんことを求めよ。凡夫の人、戲論、誣誣す。如來の微密藏を解せざるが故なり。若苦を説かば、愚人便ち、身は無常と謂ひ、一切苦と説く。復身、樂性有るを知ること能はず。無常を説かば、凡夫の人は、一切の身、皆は無常なること、譬へば瓦坏の如しと計す。有智の人は、應當に分別すべし、盡く一切無常と言ふべからず。何を以ての故に。我が身即ち佛性種子有ればなりと。若無我を説かば、凡夫は當に一切佛法、悉く我有ること無しと謂ふべし。智者應當に無我の假名不實を分別すべし。是の如く知り已りて疑を生ずべからず。若如來祕藏空寂と言はば、凡夫は之を聞きて斷滅の見を生ず。有智の人は、應當に如來是常變易有ること無きを分別すべし。若解脱譬へば幻化の如しと言はば、凡夫は當に解脱を得る者即ち是磨滅と謂ふべし。有智の人は、應當に人中の師子、去來有りと雖も、常住にして變無きを分別すべし。

(三) 若無明、諸行に因縁たりと言はば、凡夫の人は聞き已りて、分別して二法想を生ず。明と無明となり。智者は其の性無二、無二の性即ち是實性を了達す。若諸行、識に因縁たりと言はば、凡夫は二と謂ふ、行と識となり。智者は其の性無二、無二の性即ち是實性を了達す。若、十善十惡、可作、不可作、善道惡道、白法、黑法と言はば、凡夫は二と謂ふ。智者は其の性無二、無二の性即ち是實性を了達す。

【六〇】次に不二不異に約して中道を顯す。其の中詞に法の文、而して先づ因縁に約して不二を明す。之に無明、行識、善惡の三段あり。



乳より生ずと爲ん。自より生ずと爲ん、他より生ずるや。乃至醍醐も亦復是の如し。若他より生せば即ち是他作にして、是乳生に非ず。若乳生に非ざれば乳爲す所無し。若自ら生せば、相似相續して生ずべからず。若相續して生せば、則ち俱に生ずべからず。若俱生ならざれば、五種の味は則ち一時ならず。一時ならずと雖も、定んで復餘處より來らざるなり。當に知るべし、乳の中に先に酪の相有り。甘味多きが故に、自ら變ずること能はず。乃至醍醐も亦復是の如し。(六六)是牛の水草を食啖するの因縁、血脈轉變して而も乳と成ることを得。若甘草を食せば、其の乳則ち甜く、若苦草を食せば、乳則ち苦味なり。雪山に草有りて名を(六七)肥膩と曰ふ。牛若食すれば純ら醍醐を得、青、黄、赤、白、黒の色有ること無し。穀草の因縁、其の乳則ち色味の異有り。(七〇)是の諸の衆生、明、無明の業因縁を以ての故に二相を生ず。若無明轉すれば則ち變じて明と爲る、一切諸法善、不善等も亦復是の如し、二相有ること無し。」

(三)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の所説の如き、乳中に酪有りとは、是の義云何。世尊、若乳の中に、定んで酪相有り、微細を以ての故に見るべからずと言はば、云何ぞ説きて、「乳の因縁よりして酪を生ず」と言はん。法若本無ければ、則ち名けて生と爲す。如其已に有らば云何が生と言はん。

【六六】次に因縁の義を結す。其中初に譬。

【六七】肥膩、Pinoinin?。草の名。啖食の因縁に由り種種に變色すと見ゆ。

【七〇】次に合の文。其中、初に合。之に合、合不二の二段あり。

【七〇】次に論義の文。其中初に難の文。之に定、難の二段あり。

若乳の中に定んで酪相有りと言はば、百草の中にも亦乳有るべし。是の如く乳の中にも亦草有るべし。  
 若乳の中に定んで酪無しと言はば、云何ぞ乳に因りて而も酪を生ずることを得ん。若法本無くして後生  
 せば、何が故ぞ乳の中に草を生ぜざらん。〔三〕善男子、定んで乳の中に酪有り、乳の中に酪無しと言ふ  
 べからず。亦他よりして生ずと説くべからず。若乳の中に定んで酪有りと言はば、云何ぞ而も酪味各  
 異ることを得ん。是の故に説きて、乳の中に定んで酪性有り」と言ふべからず。若乳の中に、定んで  
 酪無しと言はば、乳の中に何が故に兎角を生ぜざる。毒を乳の中に置くときは、酪則ち人を殺す。是  
 の故に説きて、「乳の中に、定んで酪性無し」と言ふべからず。若是の酪他  
 より生ずと言はば、何が故を水中に酪を生ぜざる。是の故に説きて、「酪他  
 より生ず」と言ふべからず。善男子、是の牛草を食啖する因縁の故に、血則  
 ち白に變ず。草血滅し已りて、衆生の福力變じて乳と成る。是の乳草血よりして出づと雖も、二を言  
 ふことを得ず。唯名けて「因縁よりして生ず」と爲すことを得。酪より醍醐に至る、亦復是の如し。是  
 の義を以ての故に、牛味と名くることを得。是の乳滅し已りて因縁酪と成る。何等か因縁なる。若は  
 醍醐は煖なり。是の故に因縁よりして有りと名くることを得。乃至醍醐も亦復是の如し。是の故に、  
 定んで、乳の中に酪相有ること無しと言ふことを得す。他より生せば、乳を離れて有らん、是の處  
 有ること無し。善男子、明と無明とも亦復是の如し。若煩惱諸結と俱ならば、名けて無明と爲す。若

【七三】次に答の文、之に研譬、  
 重ねて爲に譬を合す、譬意を  
 結すの三段あり。

一切の善法と俱ならば、之を名けて明し爲す。是の故に我に二相有ること無しと言ふ。是の因縁を以て我上に説きて言ふ、「雪山に草有りて名を肥膩と曰ふ。牛若食すれば即ち醍醐を成す。佛性も亦爾なり」と。

〔七〕 善男子、衆生薄福にして是の草を見ず。佛性も亦爾なり、煩惱覆ふが

故に衆生は見ず。譬へば大海は同一に鹹しと雖も、其の中亦上妙の水味

乳に同じき有るが如し。譬へば雪山は、復種種の功徳を成就し、多く諸藥

を生ずと雖も、亦毒草有るが如し。諸の衆生の身も亦復是の如し。四大毒

蛇の種有りと雖も、其の中亦妙藥大王有り。所謂佛性は作法に非ず。但煩

惱客塵に覆はる。若刹利、婆羅門、毗舍、首陀、能く斷除する者、即ち佛

性を見、無上道を成す。譬へば虚空雷を震ひ雲を起せば、一切の象牙の

上に皆華を生ず。若雷霆無ければ、華則ち生ぜず、亦名字無きが如し。衆

生の佛性も亦復是の如し。常に一切の煩惱に覆はれて見ることを得べから

ず。是の故に我、「衆生無我」と説く。若是の大般涅槃微妙の經典を聞くこと

を得ば、則ち佛性を見る、象牙の華の如し。契經一切の三昧を聞くと雖も、

是の經を聞かずば如來微妙の相を知らず。雷無き時象牙上の華は見ることを得べからざるが如し。是

【七】 次に教を敷す。其中初に佛性の理を敷す。而して先づ忍草、

【七四】 次に兩譬を撰す。之に譬

【七五】 次に教を敷す。其中初に

經を敷す。之に譬、合の二段あり。譬に於て、虚空は法身に、雷霆は説法に、起雲は慈悲に、象牙は衆生に、華は佛性に譬へたり。象牙上に華を生ずと云ふは、安註に三解あり、一には別に象牙牙ありて雷を聞いて華を生ず、二には事實に象牙に華を生ず、三には是れ別に華を生ずるには非ず、牙上に文彩華の如くなるあるを云ふと。



の經を聞き已らば、即ち一切如來所説の祕藏佛性を知る。譬へば天雷に象牙の華を見るが如し。是の經を聞き已らば、即ち一切無量の衆生皆佛性有るを知る。是の義を以ての故に、大涅槃を説きて、名けて如來祕密の藏法身を增長すと爲す。猶し雷時象牙上に華くが如し。能く是の如きの大義を長養するを以ての故に、名けて大般涅槃と爲すことを得。若善男子、善女人有りて、能く是の大涅槃微妙の經典を習學する有らば、當に知るべし、是の人は能く佛恩を報ず、眞の佛弟子なり。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『甚だ奇なり世尊、言ふ所の佛性は甚深甚深にして見難く入り難し。聲聞、緣覺は服すること能はざる所なり。』佛の言はく、『善男子、是の如く是の如し。』

汝が歎する所の如し、我が説に違はじ。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛性は云何が甚深にして見難く入り難き。』佛の言はく、

【七〇】次に信を勸む。

【七一】是より能見難見性を答ふ。之に四問答あり、初の兩番は深行證見を辨じ、後の兩番は淺行聞見を明す。今は深行證見の中、初番の問答。

【七二】次に第二番の問答。其中初に問。

【七三】次に答の文。その中初に目を治するの譬なり。これに譬、合の二段あり。譬の中、百首は一切衆生に譬へ、良譬は佛に譬ふ。金鉢に四解あり、一に一指は此經を三指は昔三乘教を、金鉢は佛の方便慧を

喩ふと。二には三指は三慧を譬ふと。三には初後は一指、般若より法華に至るを二指、涅槃を三指に譬ふと。四には三忍の信順無生を譬ふと。章安の釋に曰く、經文に順じて佛性を以て解すべし。一指見ざるは眞諦に入りて佛性を見ざるを云ひ、二指見ざるは空假二諦に佛性存せざるを示し、三指にして少しく見るとは、一諦三諦即空假中を佛性と名け、圓住別地より分證の故に少しく見ると云ふ。

「善男子、百の盲人目を治するが爲の故に、良醫に造詣す。是の時に良醫、即ち金錘を以て其の眼膜を決し、一指を以て示し問ひて言はく、「見るや不や。」盲人答へて言はく、「我猶未だ見ず。」復二指三指を以て之を示す。乃ち、「少しく見る」と言ふが如し。善男子、是の大涅槃微妙の經典は、如來未だ説かざれば亦復是の如し。無量の菩薩具足して諸波羅蜜を行すと雖も、乃至十住猶未だ所有の佛性を見ること能はず。如來既に説かば即便少しく見る。是の菩薩摩訶薩既に見ることを得已らば、咸く是の言を作さく、「甚だ奇なり世尊、我等無量の生死に流轉し、常に無我に惑亂せらる」と。善男子、是の如きの菩薩、位十地に階るも、尙明了に佛性を知見せず。何に況や聲聞、緣覺の人の能く見ることを得んや。(八〇) 復次に善男子、譬へば遠く虚空に鵝鴈を觀て、是虚空と爲ん、是鵝鴈と爲んや。

諦觀して已まず、彷彿に之を見るが如し。十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。況や復聲聞、緣覺の人、而も能く知見せんや。(八二) 善男子、譬へば醉人の遠路を涉らんと欲するに、朦朧に道を見るが如し。十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。(八三) 善男子、譬へば渴人の曠野を行くに、是の人渴逼り徧く行きて水を求めしに、叢樹有りて樹に白鶴有るを見る。是の人迷悶して是樹、是水なるを分別すること能はず。諦觀して已まず、乃ち白鶴及び叢樹を見るが如し。善男子、十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。(八四) 善男子、譬

〔八〇〕 次に遠觀の譬。已下に九段あり。

〔八一〕 次に見道の譬。

〔八二〕 次に渴人の譬。

〔八三〕 次に遠望の譬。

へば人有りて大海の中に在り。乃至無量百千由旬、遠く大舩、樓櫓、堂閣を望み、即ち是の念を作さく、「彼は是樓櫓なりや、是虚空と爲んや。」久しく視て乃ち必定の心を生じ、是樓櫓と知るが如し。十住の菩薩自身の中に於て、如來性を見るも亦復是の如し。善男子、譬へば王子の身極めて懦弱なる通夜遊戯して明清旦に至る。目一切を視るに悉く明了ならざるが如し。十住の菩薩己身に於て如來性を見ると雖も、亦復是の如く大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば臣吏の王事に拘せられ、夜に逼りて家に還るに、電明暫く發し、因りて牛聚を見る。即ち是の念を作さく、「是牛羣と爲し、雲と爲し舎と爲さんや。」是の人久しく視て牛想を生ずと雖も猶審定せざるが如し。十住の菩薩己身に於て如來性を見ると雖も、未だ審定すること能はざることも亦復是の如し。復次に善男子、持戒の比丘無蟲水を觀るに、而も蟲相を見て即ち是の念を作さく、「此の中に動く者は蟲と爲すや、是塵土なりや。」久しく視て已ます、是塵と知ると雖も、亦明了ならざるが如し。十住の菩薩己身の中に於て如來性を見ることも亦復是の如し、大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば人有りて陰闇の中に於て遠く小兒を見、即ち是の念を作さく、「彼は是牛と爲し、人と爲し鳥と爲さんや。」久しく視て已ます。小兒を見ると雖も猶明了ならざるが如し。十住の菩薩己身の中に於て如來性を見ることも亦復是の如し、大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば人有りて夜闇の中に於て、畫菩薩を見て即ち是

- 【八四】 次に王子の譬。
- 【八五】 次に臣吏の譬。
- 【八六】 次に觀蟲の譬。
- 【八七】 次に見兒の譬。
- 【八八】 次に見畫の譬。

の念を作さく、是菩薩の像、自在天の像、大梵天の像染衣と成さんや。是の人久しく觀て復意に是菩薩像と謂ふと雖も、亦明了ならざるが如し。十住の菩薩、己身の中に於て如來性を見ることがも亦復是の如し、大いに明了ならざるが如し。善男子、所有の佛性は是の如く甚深にして知見を得難く、唯佛のみ能く知れり、聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、智者は是の如きの分別を作して如來性を知るべし。』

【八七】 迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛性は是の如く微細にして知り難し。云何が肉眼にて而も能く見ることが得ん。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、非想非非想天も、亦二乗の能く知ることが得る所に非ず。契經に隨順し、信を以ての故に知るが如し。善男子、聲聞、緣覺の、是の如きの大涅槃經を信順して、自ら己身に如來性の有るを知ることがも亦復是の如し。善男子、是の故に應當に精勤して、大涅槃經を修習すべし。善男子、是の如きの佛性は、唯佛のみ能く知りて、諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。』

【八八】 迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、非聖の凡夫衆生性有り、皆我有りと説く。』佛の言はく、『譬へば二人共に親友爲り。一りは是王子、一りは是貧賤なり。是の如きの二人互に相往反す。是の

【八七】 是より開見淺行を明す。其中初に初番の問答、而して先づ問、

【八八】 次に答。之に譬、合、勸、褒、貶の四段あり。

【八九】 次に第二番の問答、其中初に問。

【九〇】 非聖の凡夫とは即外道なり。

【九一】 次に答。其中に譬、合、結ありて、初に譬の文、而して先づ菩薩の施化の文。これに説教、棄受、捨應、起惑の四段あり。

時に貧人、是の王子に一つの好刀の淨明第一なる有るを見て、心中に貪著す。王子、後時に是の刀を執持して他國に逃至す。貧人後に於て他家に寄宿す。即ち眠中に於て「刀刀」と寢言す。番人之を聞き收めて王の所に至る。時に王問ひて言はく、「汝刀と言ふは、以て我に示すべし。」是の人具さに上の事を以て王に答ふ。「王、今設使臣が身を屠割し、手足を分裂して刀を得んと欲する者も、實に得べからず。臣、王子と素親厚を爲す。先に一處を共して曾て眼見すと雖も、乃至敢て手を以て接觸せず、況や當に故らに取るべきや。」王、復問ひて言はく、「卿が見る所の刀、相貌何にか類す。」答へて言さく、「大王、我が見る所の者、殺羊角の如し。」王、是を聞き已りて欣然として笑ひ、語りて言はく、「汝今意の所至に隨ひ、憂怖を生ずること莫れ。我が庫藏の中、都て是の刀無し。況や汝乃ち、王子の邊に於て見んや。」時に王、即ち諸の羣臣に問ひて言はく、「汝等、曾て是の如きの刀を見るや不や。」言ひ已りて便ち崩す。尋で餘子を立てて王位を紹繼す。復羣臣に問はく、「汝等曾て、官の庫藏の中に於て是の刀を見るや不や。」諸臣答へて言さく、「臣等曾て見る。」又復問ひて言はく、「其の狀何にか似たる。」答へて言さく、「大王、殺羊角の如し。」王の言はく、「我が庫藏の中、何に緣りてか、當に是の如き相の刀有るべし。」次第して四王、皆悉く檢校して求索するに得ず。(壘) 卻後數時、先逃の王子他國より還り、其の本土に歸りて復王と爲ることを得。既に王位に登りて復諸臣に問はく、「汝、刀を見るや不や。」答へて言さく、「大王、臣等皆見る。」又復問ひて

【九四】 次に聲聞の施化

【九五】 次に如來の施化

言はく、「其の如何にか似たる。」答へて言さく、「大王、其の色清淨にして優鉢羅華の如し。」復答へて、「形羊角の如し」と言ふ有り。復答へて、「其の色紅赤にして、猶し火聚の如し」と言ふ有り。復答へて、「猶し黒蛇の如し」と言ふ有り。時に王、大いに笑ひて「卿等皆悉く、我が刀の眞實の相を見ず」といはんが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。世に出現して我が眞相を説く。説き已りて捨て去る。譬へば王子の、淨妙刀を持ちて他國に逃れ至るが如し。凡夫愚人説きて、「一切我有り我有りと言ふ。彼の貧人の他舍に止宿して、刀刀と竊言するが如し。」聲聞、緣覺、諸の衆生に問はく、「我何の相有る。」答へて言はく、「我、我の相を見るに、大いさ拇指の如し。」或は言ふ、「米の如し。」或は「稗子の如し。」「我の相心中に住任して、熾然なること日の如し」と言ふ有り。是の如きの衆生我相を知らず。譬へば諸臣の刀相を知らざるが如し。菩薩。是の如きの我法を説く。凡夫知らずして、種種分別して妄りに我相を作す。刀相を問ふに、羊角に似たりと答ふるが如し。是の諸の凡夫、次第相續して邪見を起す。是の如きの諸の邪見を斷するが爲の故に、如來示現して無我を説く。譬へば王子の諸臣に語りて、「我が庫藏の中、是の如きの刀無し」と言ふが如し。善男子、今日如來所説の眞我は、名けて佛性と曰ふ。是の如きの佛性は、我が佛法の中、譬へば淨刀の如し。善男子、若凡夫の、能善く説く者有らば、即ちは無上の佛法に隨

- 【六六】 次に合譬。其中初に菩薩の施化を合す。
  - 【六七】 次に聲聞の施化を合す。
  - 【六八】 次に如來の施化を合す。
- 之に無我の教、眞我の教の二段あり。
- 【六九】 是より結成。

順す。  
若善能く分別し隨順して是を宣説する者有らば、當に知るべし、即ち是菩薩の相貌なり。

文字品第十三

佛、復迦葉に告げたまはく、『有らゆる種種の異論、呪術、言語、文字、皆是佛説にして外道の説に非ず。』迦葉菩薩佛に白して言さく、

『世尊、云何が如來、字の根本を説きたまへる。』佛の言はく、『善男子、初半字を説きて、以て根本と爲す。諸の記論、呪術、文章、諸陰實法を持す。凡夫の人は是の字本を學びて、然して後能く是法非法を知る。』

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、言ふ所の字とは其の義云何。』善男子、十四音有り、名けて字義と爲す。言ふ所の字とは、名けて涅槃と曰ふ。常の故に流れず。若不流なる者は、則ち盡くること無しと爲す。夫無盡なる者は、即ち是如來の金剛の身なり。是の十四音、名けて字本と曰ふ。

【一】 文字品。梵語にては一切の文字を總括して四十九字と爲す。然るに諸經に在りては、其字數一定せず。總して二十八、四十二、四十七等の別あり。今涅槃經は、阿等の母音十四字、迦等の子音三十三字合して四十七字の外に悉曇書體たる卷、癩、羅の三字を加へ、總計五十字を出す。されば五十字を以て涅槃經文字説の立場となすべし。この品に於ては一一の音を出し、之に義を附し、かくて此の字を稱することによりて生ずる功德を、大乘的に述べたり。

【二】 云何が滿字を解するかの

問に答ふ。其中初に略して字本を標す。

【三】 次に廣く字義を明す。之に兩番の問答あり、今は初番の問答の文、而して先づ問の文。

【四】 次に答の文。之に、文理の本を明す。別して字本を明す。半を學んで滿法を悟ることを得るを明すの三段あり。

【五】 次に第二番の問答。其中初に問の文。

【六】 次に答の文。其中、初に通じて諸字を明し、而して先づ音を以て字に隨ふ即ち是音を明す。

【七】 十四音。阿等の母音に十四ある故十四音といふ。



(八) 阿知とは破壊せざるが故に。不破壞の者は名けて三寶と曰ふ、譬へば金剛の如し。又復阿とは不流の故に。不流の者は即ち是如來なり、如來の九孔は所流無きが故に、是の故に不流なり。又九孔無し、是の故に不流なり。不流は即ち常なり、常は即ち如來なり。如來無作、是の故に不流なり。又復阿とは名けて功德と爲す。功德の者は即ち是三寶なり。是の故に阿と名く。

次に (五) 阿長とは (一〇) 阿闍梨と名く。阿闍梨とは、義何の謂ぞや。世間の中に於て (二) 聖者と名くることを得。何をか謂つて聖と爲す。聖は無著と名く。少欲知足なり、亦清淨と名く。能く衆生を三有流生死の大海に度す、是を名けて聖と爲す。又復阿とは名けて制度と曰ふ。淨戒を修持し威儀に隨順す。又復阿とは依聖人と名く。威儀、進止、舉動を學すべし。三尊を供養、恭敬し、禮拜す。父母に孝養し、及び大乘を學す。善男女等、具さに禁戒を持し、及び諸の菩薩摩訶薩等、是を聖人と名く。又復阿とは名けて教誨と曰ふ。汝、來りて是の如きは作すべし、是の如きは作すこと莫れと言はんが如し。若能く非威儀法を遮する有らば、是を聖人と名く。是の故に阿と名く。

【八】阿 (A)。梵語字母第一音。無、非、不の意なり。文に不破壞、不流、功德の三義を擧げ、以て此の字の稱徳を示す。

【九】阿 (A)。梵語字母第二音。文に阿闍梨、制度、依聖人、教誨の四義を擧ぐ。この中阿を阿闍梨と名くとあるはアーチャーリヤ Arjya の頭字 A を取りてかきいふ。

【一〇】阿闍梨 (Ara)。規範師と譯す、修道の規範を示して弟子を薰陶する教師の謂なり。

【一一】聖者とは、梵語 Arilya の譯、神聖なる教法を體得せる者の義。所謂得道の君子をいふ。

(三) 伊 頌とは即ち是佛法 梵行廣大なり、清淨無垢なり。譬へば満月の如し、汝等是の如く應作不作、是義非義、此は是佛説、此は是魔説なり。是の故に伊と名く。

(四) 伊 頌とは、佛法微妙甚深にして得難し。自在天、大梵天王の法、自在と名くるが如し。若能く持

する者は則ち護法と名く。又自在とは四護世と名く。是の四自在なれば、則ち能く大涅槃經を

攝護し、亦能く自在に敷揚宣説す。又復伊とは能く衆生の爲に自在に法を説く。復次に伊とは

自在を爲すの故に、何等を説きて是なるや。所謂方等經典を修習す。復次に伊とは、嫉妬を斷

ずと爲す。穢穢を除くが如く、皆悉く能く變じて吉祥と成らしむ。是の故に伊と名く。

(五) 憂 頌とは、諸經の中に於て最上最勝、増

長 上上なる大涅槃を謂ふ。復次に憂とは、如來の性、聲聞、緣覺の未だ曾て聞かざる所、一切處に、

北鬱單越最殊勝爲るが如し。菩薩若能く是の經を聽受すれば、最上最勝と名くことを得。是

の故に憂と名く。

【二】 伊 (一)。字母第三音、梵

行廣大の義あり。伊に梵行廣大の義ありとするは、蓋し Iṅṅiya の頭字を取れるもの

か。Iṅṅiya は根と譯し、發生の義。この發生の義よりして梵行廣大の義を生ぜしものならん。

【三】 梵行 (Brahmacarya) とは

神聖なる行爲の義、菩提を得んがために行ずる神聖なる倫理的徳目をいふ。

【四】 伊 (一)。梵語第四音、文

に佛法甚深、自在説法、修習經典、斷嫉妬の四義を擧ぐ。

【五】 憂 (一)。梵語第五音、文に最勝未曾聞の二義を擧ぐこの字に最勝の義ありとするは蓋し Iṅṅiya (最上) の頭字を取るに由る。

【六】 北鬱單越 (Uttarakuru)。鬱單越は北洲と譯す、四大洲の一、須彌山の北方に位する世界なり。

【二七】憂ウ長チヤウと云、譬たとへば牛乳ゴは諸味シヨミの中上なかじやうなるが如ごとし。如來にょらいの性しやうも亦復またまた是この如ごとし。諸經シヨキヤウの中なかに於おいて最上さいせんなり。若誹謗もしひはうする有あらば、當まさに知しるべし、是この人ひとは牛うしと別無べつなし。復次またつぎに憂ウとは、是この人ひとは名なけて無慧むゑと爲なす、正念しやうねんに如來にょらい微密秘藏みみつひざうを誹謗ひはうす。當まさに知しるべし、是この人ひと甚はなはだ憐憫れんみんすべきものなるを。如來にょらい秘密みつの藏ざうを遠離えんりして無我むがの理りを説とく、是この故ゆゑに憂ウと名なく。

【二八】嘔スとは即すなはち是これ諸佛シヨブツの法性ほつしやうはん涅槃ねはんなり、是この故ゆゑに嘔スと名なく。

【二九】鷲ウとは謂いはは如來にょらいの義ぎなり。復次またつぎに鷲ウとは如來にょらいの進止しんし、屈伸くつしん、舉動きどうの一切いっさい衆生しゆじやうを利益りやくせざるなきをいふ、是この故ゆゑに鷲ウと名なく。

【三〇】鳥ウとは煩惱はんなんの義ぎと名なく。煩惱はんなんとは名なけて諸漏シヨロウと曰いふ。如來にょらいは永ながく一切いっさい煩惱はんなんを斷とず、是この故ゆゑに鳥ウと名なく。

【三一】炮ウとは謂いはは大乘だいじやうの義ぎなり。十四音じふしよんに於おいて是これ究竟くきやうの義ぎ、大乘經典だいじやうきやうでんも亦復またまた是この如ごとし。諸經論シヨキヤウロンに於おいて最もも究竟くきやうと爲なす、是この故ゆゑに炮ウと名なく。

【三二】菴ウとは能よく一切いっさいの諸不淨物シヨふじやうちんを遮しやするをいふ。佛法ぶつぽふの中なかに於おいて能よく一切いっさいの金銀こんぎん、寶物ほうぶつを捨すつ、是この故ゆゑに菴ウと名なく。

【三三】痾ウとは勝乘しやうじやうの義ぎと名なく。何なにを以もつての故ゆゑに。此この大乗典だいじやうでん大涅槃經だいはんげんは諸經シヨキヤウの中なかに於おいて最もも殊勝しゆじやうと爲なす。

- 【七】憂ウ。第六音、文に最上、無慧の二義を擧ぐ。
- 【八】嘔ス。第七音、法性涅槃の義を擧ぐ。
- 【九】鷲ウ。第八音、如來及び利益の義を擧ぐ。
- 【一〇】鳥ウ。第九音、煩惱の義を擧ぐ。瀑流（Oghra）より轉オウガぜしもの歎。
- 【一一】炮ウ。第十音、大乘の義を擧ぐ。
- 【一二】菴ウ。能遮の義を擧ぐ。この音は華文字母として見えず、但だ悉曇の書體に存するのみ。
- 【一三】痾ウ。勝乘の義を擧ぐ。この字亦悉曇に見ゆるのみ。

す、是の故に痾と名く。

迦とは諸の衆生に於て大慈悲を起す。子想を生ずること羅睺羅の如く、妙善の義を作す、是の故に迦と名く。

吠とは非善友と名く。非善友とは名けて雜

穢と爲す。如來祕密の藏を信せず、是の故に吠と名く。

伽とは藏と名く。藏とは即ち是れ如來の祕藏なり。一切衆生、皆佛性あり。是の故に伽と名く。

伽誼とは如來常音なり。何等をか如來常音

と爲す。所謂如來は常住にして變せず、是の故に伽と名く。俄とは一切の諸行破壞の相なり。是の故に俄と名く。

遮とは即ち是れ修の義なり。一切の諸の衆生を調伏するが故に名けて修の義と爲す、是の故に遮と名く。

車とは如來、一切衆生を覆蔭すること譬へば大蓋の如し、是の故に車と名く。

【四】迦 (Ka)。第十四音、起慈悲の義を擧ぐ。作 (Karati) の頭字に由る。

【五】吠 (Kin)。第十五音、非善友の義を擧ぐ。

【六】伽 (Ga)。第十六音、藏の義を擧ぐ。 (Garbha) に由る。

【七】伽 (Ga)。第十七音、如來常音の義を擧ぐ。

【八】俄 (Pa)。第十八音、諸行破壞の義を擧ぐ。支分 (Vid) の頭字に由る。

【九】遮 (Pa)。第十九音、修の義を擧ぐ。

【十】車 (Cha)。第二十音、覆蔭を義を擧ぐ。

【三】 闇とは是れ正解脱なり。老相あること無し、是の故に闇と名く。

【三】 闇とは煩惱繁茂すること、譬へば稠林の如きをいふ、是の故に闇と名く。

【三】 若とは是れ智慧の義なり。眞法性を知る、

是の故に若と名く。

【三】 吒とは闇淨提に於て半身を不現して法を

演説す。譬へば半月の如し。是の故に吒と名

く。

【三】 佗とは法身具足なり。譬へば満月の如し、

是の故に佗と名く。

【三】 茶とは是愚癡僧なり。常と無常とを知らず、

譬へば小兒の如し。是の故に茶と名く。

【三】 茶とは師恩を知らず、譬へば羝羊の如し。

是の故に茶と名く。

【三】 拏とは是聖義に非ず、譬へば外道の如し。是の故に拏と名く。

【三】 多とは如來、彼に於て諸の比丘に告げたまはく、驚畏を離るべし。當に汝等が爲に微妙の法を説

法身具足の義を擧ぐ。

【三】 茶 (Tā) 第廿六音、愚

癡僧の義を擧ぐ。此の音に愚

癡僧の義ありとするは蓋し魔

障 (Māra) より轉ぜしもの

なりん。

【三】 茶 (Tā) 第廿七音、

不知師恩の義を擧ぐ。

【三】 拏 (Nā) 第廿八音、非

聖義の義を擧ぐ。

【三】 多 (Tā) 第廿九音、離

驚畏の義を擧ぐ。

【三】 佗 (Tā) 第二十四音、

演説法の義を擧ぐ。

【三】 吒 (Tā) 第二十五音、

演説法の義を擧ぐ。

【三】 拏 (Tā) 第二十五音、

演説法の義を擧ぐ。

くべし」と。是の故に多と名く。

【四〇】他とは愚癡の義と名く。衆生生死に流轉して自ら纏ふこと蠶蜘蛛の如し。是の故に他と名く。

【四一】陀とは名けて大施と曰ふ。所謂大乘なり。是の故に陀と名く。

【四二】陀とは功德を稱讚す。所謂三寶の、須彌山の高峻廣大傾倒有ること無きが如し。是の故に陀と名く。

と名く。

【四三】那とは三寶安住して傾動有ること無し。譬

へば門閭の如し。是の故に那と名く。

【四四】波とは顛倒の義と名く。若三寶悉く皆滅

盡すと言はば、當に知るべし、是の人自ら疑惑

すと爲す。是の故に波と名く。

【四五】顛とは是世間災なり。若世間災起るの時、

三寶も亦盡くと言はば、當に知るべし、是の人は愚癡無智にして聖旨を違失す。是の故に顛と名く。

【四六】婆とは佛十力と名く。是の故に婆と名く。

【四七】婆とは名けて重擔と爲す。無上の正法を荷負するに堪任す。當に知るべし、是の人は是大菩薩

なり。是の故に婆と名く。

【四〇】他 (Ita)。第三十音。

愚癡の義を擧ぐ。

【四一】陀 (Ita)。第三十一音。

大施の義を擧ぐ。此の音に大

施の義ありとするは (Ita) 布

施) の頭音を取りて云ふ。

【四二】陀 (Ita)。第三十二音。

稱讚功德の義を擧ぐ。

【四三】那 (Na)。第三十三音。

不傾動の義を擧ぐ。

【四四】波 (Pa)。第三十四音。

顛倒の義を擧ぐ。

【四五】顛 (Pa)。第三十五音。

世間災の義を擧ぐ。

【四六】婆 (Pa)。第三十六音。

佛十力の義の方 (Pa) 由る。

【四七】婆 (Pa)。第三十七音。

重擔の義を擧ぐ。

〔四〕摩とは是の諸の菩薩制度を嚴峻にす。所謂大乘大般涅槃なり。是の故に摩と名く。

〔五〕耶とは是の諸の菩薩、在在處處に諸の衆生の爲に大乘法を説く。是の故に耶と名く。

〔六〕囉とは能く貪欲、瞋恚、愚癡を壞し、眞實法を説く。是の故に囉と説く。

〔七〕羅とは聲聞乘と名く、動轉不住なり。

大乘は安固にして傾動有ること爲し。聲聞乘

を捨て、精勤して無上の大乘を修習す。是の故

に羅と名く。

〔八〕和とは如来世尊、諸の衆生の爲に大法雨

を雨す。所謂世間の呪術經書なり、是の故に

和と名く。

〔九〕除とは三箭を遠離す、是の故に除と名く。

〔一〇〕沙とは具足の義と名く。若能く是の大涅槃

經を聴くときは、則ち已に一切の大乘經典を

聞持することを得と爲す。是の故に沙と名く。

〔一一〕婆とは諸の衆生の爲に正法を演説して、心をして歡喜せしむ。是の故に婆と名く。

〔四六〕摩 (ン) 第三十八音

嚴峻制度の義を擧ぐ。

〔四九〕耶 (ニ) 第三十九音

說大乘法の義を擧ぐ。この音

に大乘法の義ありとするは、

乘 (ヤ) の頭字を取りて云

ふなり。

〔五〇〕囉 (ロ) 第四十音、壞

貪欲等の義を擧ぐ。この音を

以て貪欲等の義ありとするは

囉 (ラ) の頭字を取れ。

〔五一〕羅 (レ) 第四十一音、

聲聞乘の義を擧ぐ。

〔五二〕和 (ニ) 第四十二音、

呪術、經書の二義を擧ぐ。こ

の音は呪術、經書の義ありと

は、呪術及び經書の或るは音

語 (ニ) に出る。故に其の

頭字を取りて然か云ふなり。

〔五三〕除 (リ) 第四十三音、

遠離三箭の義を擧ぐ。

〔五四〕沙 (ハ) 第四十四音、

具足の義を擧ぐ。

〔五五〕婆 (ハ) 第四十五音、

歡喜の義を擧ぐ。

〔五〕 訶とは心歡喜を名く。奇なる哉世尊、一切行を離れ、怪なる哉如來般涅槃に入る。是の故に訶と名く。

毛 羅とは名けて魔の義と曰ふ。無量の諸魔、如來の祕藏を毀壞すること能はず。是の故に羅と名く。復次に羅とは、乃至世間に隨順して父母、

妻子有るを示現す。是の故に羅と名く。

〔六〕 魯、流、盧、樓、是の如きの四字は、説きて四義有り。佛、法、僧、及以對法と謂ふ。對法とは世間に隨順す。提婆達、僧を壞するを示現し、種種の形貌、色像を化作するが如し。戒を制するが爲の故なり。智者了達して、此に於て而も畏怖を生ずべからず。是を隨順世間の行と名く。

是を以ての故に、魯、流、盧、樓と名く。

〔七〕 吸氣は舌根鼻に隨ふの聲、長短超聲音に隨ひて義を解す。皆舌齒に因りて而も差別有り。

〔八〕 是の如きの字義は、能く衆生をして口業清淨ならしむ。衆生の佛性は、則ち是の如く文字を假りて然して後清淨ならず。何を以ての故に。

性本淨の故に。復陰界入の中に處在すと雖も而も、亦陰界入に同じからざ

〔五〕 訶 (二三)。第四十六字、心歡喜の義を舉ぐ。

〔五〕 羅 (二三)。魔、示現の二義あるを舉ぐ、この字亦た華文字母に出でず、但だ悉曇に存するのみ。

〔六〕 此四字次の如く佛法僧對法の義あるを舉ぐ。先づ魯 (二)は、字母第十一音、佛の義を舉ぐ。佛の勝徳たる神通 (二) (三)の頭字に由るものか。

〔五〕 流 (二)。第十二音、法の義を舉ぐ。

〔六〕 盧 (一)。第十三音、僧の義を舉ぐ。

〔六〕 樓 (一)。對法の義を舉ぐ。この音に實際上の梵語としては用ひず、但だ吠陀古本に於て見るのみ。

〔六〕 次に音字の所因を明す。

〔六〕 次に音字の利益を明す。



るなり。是の故に衆生、悉く諸の菩薩等に歸依すべし。佛性を以ての故に、等しく衆生を視て差別有ること爲し。是の故に半字、諸の經書、記論、文章に於て而も根本と爲す。

又半字の義は、皆是煩惱言説の本なり、故に半字と名く。滿字とは、

乃ちは一切の善法、言説の根本なり。譬へば世間の惡行を爲す者を、名けて半人と爲し、善行を修する者を、名けて滿人と爲すが如し。是の如き一切の經書、記論、皆半字に因りて而も根本と爲す。若如來及び正解脱半字に入ると言はば、是の事然らず。何を以ての故に。文字を離るるが故なり。

是の故に如來、一切法に於て無闕無著にして眞に解脱を得。何等をか名けて字義を解了すと爲す。如來世に出現して能く半字を滅すと知ること有らば、是の故に名けて解了字義と爲す。若半字の義に隨逐する者有らば、是の人如來の性を知らず。何等をか名けて無字の義と爲すや。不善の法を

修習する者に親近す、是を無字と名く。又無字とは、能く善法を修習するに親近すと雖も、如來の常と無常と、恆と非恆と、及び法僧二寶、律と非

律と、經と非經と、魔説と佛説とを知らず。若是の如く分別すること能はざる有らば、是を無字の義に隨逐すと名くるなり。我今已に是の如きの隨逐無字の義を説く。善男子、是の故に汝今半字を離れ善

【六】半字：…滿字。梵語字母に於ける生字の根本を半字といふ、蓋し字母の一番一番は之を集成したる一語一語に比し、文字義理共に具はらざるが故に名く「反之、文字、義理共に具はれるを滿字と名く。

半字は所謂母音十二字、子音卅七字を云ひ、滿字は是等の諸音によつて成れる一切の言語を云ふ。かくて半字を小乘に、滿字を大乘に譬ふるなり。

【六五】次に別して半滿を釋す。之に法、譬、合の三段あり。

【六六】次に得失を結す。

く滿字を解すべし。』

迦葉菩薩に佛に白して言さく、『世尊、我等應當に善く字數を學すべし。』

今我無上の師に値遇し、已に如來殷勤の誨教を受けたてまつる。』

佛、迦葉を讚じたまはく、『善い哉善い哉正法を樂ふ者は、是の如く學

すべし。』

【三】 是より領解速成。其中初に領解。

【六】 次に速成。

鳥喩品第十四

佛、復迦葉に告げたまはく、『善男子、鳥に二種有り。一つには迦隣提と名け、二つには鴛鴦と名く。遊止共俱、相捨離せず。是の苦、無常、無我等の法も亦復是の如し、相離るることを得ず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が是の苦、無常、無我は彼の鴛鴦、迦隣提鳥の如くなる。』

佛の言はく、『善男子、異法は是苦、異法は是樂。異法は是常、異法は無常。異法は是我、異法は無我なり。譬へば

稲米の麻麥に異り、麻麥の復豆粟、甘蔗に異るが如し。是の如きの諸種其の萌芽より、乃至華葉、皆是無常なり。果實成熟して人受用する時、乃ち名けて常と爲す。何を以ての故に。性眞實なるが故なり。』

迦葉、佛に白して言さく、『世尊、是の如き等の物、若し常ならば、如來に同じきや。』佛の言はく、『善男子、汝今是の如きの説を作すべからず。何を以ての故に。若如來須彌山の如しと言はば、劫壞の時須彌崩倒す。如來爾の時に豈同じく壞せんや。善男子、汝今是の義を受持すべからず。』

佛の言はく、『善男子、汝今是の如きの説を作すべからず。何を以ての故に。若如來須彌山の如しと言はば、劫壞の時須彌崩倒す。如來爾の時に豈同じく壞せんや。善男子、汝今是の義を受持すべからず。』

【一】 答聖行問。其中初に總じて明し、而して先づ略く今は其中の譬。

【二】 迦隣提(Kachindikati)。鳥の名。慧琳音義に實可愛と譯すと云ふ。

【三】 次に合。

【四】 次に論義の文。其中初に問。

【五】 次に答の文。其中の中初に法。

【六】 次に譬。

【七】 是より別して明す。其中初に生死に就て無常を明し、而して先づ、正しく二行を明す。今は又其中にて萌芽の譬の文。之に譬、合の二段あり。

【八】 劫壞。劫(カルパ)は、長時と譯す、極めて長き時間な

善男子、一切の諸法は唯涅槃を除きて、更に一法の而も是常なる者無し。

直世諦を以て果實常と言ふ。迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、善哉

善哉佛の所説の如し。」佛、迦葉に告げたまはく、「是の如く是の如し。善

男子、一切の契經、諸定を修すと雖も、乃至未だ大般涅槃を聞かざれば、

皆一切悉くは無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無

きが如し。即ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身に佛性有

るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、菴羅樹の

如く、其の華始めて敷くを無常相と名け、若果實を成じて利益する所多け

れば、乃ち名けて常と爲す。是の如く善男子、一切の契經、諸定を修すと

雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉くは無常と言ふ。是の經を聞き已らば、

煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。即ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身に佛性有るを

曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、譬へば金礦消鎔の時、は無常相なり。鎔

け已りて金と成り、利益する所多きを、乃ち名けて常と爲すが如し。是の如く善男子、一切の契經、

諸定を修すと雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉くは無常と言ふ。是の經を

聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。即ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身

云ふ。劫を四種に分つ。世界の成立期を成劫といひ、その後世界が維持存続する間を住劫と云ひ、世界が變化する時之を壞劫と云ひ、變化の結果、世界が滅亡する期を空劫と云ふ、劫壞は猶ほ壞劫と云はんが如し。

【九】次に菴羅樹の譬の文。之に譬、合の二段あり。

【一〇】次に金礦の譬の文。之に譬、合の二段あり。

に佛性有るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、譬へば麻胡の未だ壓を被ら

ざる時、名けて無常と曰ふ。既に壓して油と成らば、多く利益する有り、乃ち名けて常と爲すが如し。

善男子、一切の契經、諸定を修すと雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉く是

無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。即ち能く一切の人天を利益す。

何を以ての故に。己身に佛性有るを曉了するが

故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、

譬へば衆流の皆海に歸するが如し。一切の契經

諸定三昧も皆大乘大涅槃經に歸す。何を以ての

故に。究竟じて善く有佛性を説くが故なり。

善男子、是の故に我、異法は常、異法無常、

乃至無我も亦復是の如し」と言ふ。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、如來

已に憂悲の毒箭を離る。憂悲とは名けて天と爲す、如來は天に非ず。憂悲とは名けて人と爲す、如來

は人に非ず。憂悲とは二十五有なり、如來は二十五有に非ず。是の故に如來憂悲有ること無し。何が故

ぞ如來憂悲と稱言せん。」善男子、無想天とは、名けて無想と爲す。若無想ならば則ち壽命無け

る。若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。

若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。

若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。

若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。若無想ならば則ち壽命無ける。

【二】次に胡麻の譬。之に譬、合の二段あり。

【三】次に歸海の譬。之に譬、合の二段あり。

【四】次に結章。

【五】是より涅槃に就て以て我無我を明す。其中初に問、而して先づ正しく問ふ。

【六】次に問を結す。

【七】次に答の文。其中、初に問を釋す。今は又其中の譬なり。

【八】無想天。アザリハ。無情有の住せる天なり。この天は三界中色界の何處に住するかに就て二説あり、有部及び經部は之を色界第四禪の廣果天所轄なりとして此の天を別に立てず、上座部は廣果天の上に更に之を立つ。外道この天を究竟涅槃界と誤り、無想定を修してこの天に生ぜん」と勤む。

ん。若壽命無ければ云何ぞ陰界諸入有らん。是の義を以ての故に、無想天の壽説きて所住の處有りと言ふべからず。善男子、譬へば樹神の樹に依つて住するに、定んで枝に依り、節に依り、莖に依り、葉に依ると言ふことを得ず。定所無しと雖も無と言ふことを得ざるが如し。無想天の壽も亦復是の如し。善男子、佛法も亦爾なり、甚深にして解し難し。如來は實は憂悲、苦惱無し。而も衆生に於て大慈悲を起し、憂悲有りて諸の衆生を視ること。羅睺羅の如くなるを現す。

(一〇) 復次に善男子、無想天の中（一）の所有の壽命、唯佛のみ能く知しめし、餘の及ぶ所に非ず。乃至（二）非想非非想處も亦復是の如し。迦葉、如來の性は清淨無染にして猶し化身の如し。云何が當に憂悲、苦惱有るべき。若如來憂悲無しと言はば、云何ぞ能く一切衆生を利し、佛法を弘廣せん。若無と云はば、云何ぞ而も等しく衆生を視ること羅睺羅の如しと言はん。若等しく視ること羅睺羅の如くならざれば、是の如きの言は、則ち虛妄と爲す。

是の義を以ての故に、善男子、佛不可思議、法不可思議、衆生性不可思議、無想天の壽不可思議なり、如來憂有り、及以憂無き、是佛境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。

【一〇】 次に合。  
 【一一】 羅睺羅 (Rāhula)。妨碍と譯す、釋尊の御一子。  
 【一二】 次に理を數す。其中初に佛。  
 【一三】 非想非非想處 (Nāgasaṇḍaṇḍimāraṇḍīyāna) 三界の最頂に位する天の名、又有頂天の名あり、非想とは此天に於ける禪定に至靜至妙にして、下地の如き麤想なきを云ひ、而も細想到に非ざるが故に非非想と云ふ。外道及び二乘が理想とせる禪定なり。  
 【一四】 次に合。

〔三〕善男子、譬へば空中の舍宅は微塵も住立すべからざるが如し。若舍宅空に因りて住せずと言はば是の處有ること無し。是の義を以ての故に、「舍虚空に住す虚空に住せず」と説くべからず。凡夫の人復説きて、「舍虚空に住す」と言ふと雖も、而も是の虚空實は住する所無し。何を以ての故に。性無住の故なり。善男子、心も亦是の如しの説きて、陰界入に住し、及以住せず」と云ふべからず。無想天の壽も亦復是の如し、如來の憂悲も亦復是の如し。若憂悲無ければ、云何ぞ説きて、「衆生を等視すること羅睺羅の如し」と言はん。若有りと言ふ者も、復云何ぞ性虚空に同じと言はん。

〔四〕善男子、譬へば幻師の、復種種の宮殿、殺生、長養、繫縛、放捨を化作し、及び金銀、瑠璃、寶物、叢林、樹木を作すと雖も、都て實性無きが如し。如來も亦爾なり。世間に隨順して憂悲を現す、眞實有ること無し。善男子、如來已に大般涅槃に入る、云何ぞ當に憂悲苦惱有るべき。若如來の涅槃に入るを、是無常と謂はば、當に知るべし、是の人は則ち憂悲有り。若如來涅槃に入らず、常住にして變せずと謂はば、當に知るべし、是の人は憂悲有ること無し。〔五〕如來憂有り及以憂無きをよく知る者無し。

〔六〕復次に善男子、譬へば下人の能く下法を知りて中上を知らず、中者の中を知りて上を知らず、上

者の上を知りて中下を知らざるが如し。〔三〕聲聞、緣覺も亦復是の如し。齊りて自地を知る。如來は爾らず、悉く自地及以他地を知る。是の故に如來を無闍智と名く。幻化を示現し世間に隨順す。凡夫の肉眼是眞實と謂ふ。盡く如來の無閻無上の智を知らんと欲すれば、是の處り有ること無し。有憂無憂、唯佛のみ能く知しめす。〔三六〕是の因縁を以て異法は有我、異法は無我なり。是を鴛鴦、迦隣提鳥と名く。

〔三五〕復次に善男子、佛法は猶し鴛鴦の共行の如し。是の迦隣提及び鴛鴦鳥は、盛夏水長するに高原を選択して其の子を安處す、長養の爲の故なり。

然して後本に隨ひて安穩にして遊ぶ。〔三〇〕如來の出世も亦復是の如し。無量の衆を化して正法に住せしむ。彼の鴛鴦、迦隣提鳥の高原を選択して其の子を安置するが如し。如來も亦爾なり、諸の衆生をして所作辦じ已りて即便大般涅槃に入らしむ。〔三一〕善男子、是を異法は苦、異法は樂と名く。諸行は是苦、涅槃は是樂なり。第一微妙にして諸行を壞するが故なり。』

〔三三〕迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が衆生涅槃を得れば第一樂と名く。』佛の言はく、『善男子、我が所説の如く諸行和合を名けて老死と爲す。

〔三〕謹愼して放逸無ければ、是の處甘露と名く。

〔三七〕次に合。  
 〔三八〕次に結。  
 〔三九〕是より雙べて生死涅槃に就て以て苦樂を明す。其中初に釋を擧げ、而して先づ譬の文。  
 〔四〇〕次に合。  
 〔四一〕次に結。  
 〔四二〕次に論義の文。之に三番の間答ありて六行を簡ぶ。今は第一番の間答なり。而して先づ問。  
 〔四三〕次に答。其中初に二偈を以て答となす。

佛の言はく、『善



放逸にして謹慎せざれば、是を名けて死句と爲す、

若不放逸は、則ち不死處を得、

如其放逸は、常に死路に趣く。」

【三】 若放逸は有爲法と名く。是の有爲法を第一の苦と爲す。不放逸は則ち涅槃と名く。彼の涅槃は名

けて甘露第一の最樂と爲す。若諸行に趣かば是を死處と名く、第一の苦を

受く。若涅槃に至らば則ち不死と名く、最妙樂を受く。若不放逸は諸行を

習ふと雖も、是亦名けて常樂不死、不破壞身と爲す。云何が放逸、云何が不

放逸なる。非聖の凡夫、是を放逸常死の法と名く。出世の聖人、是不放逸

にして老死有ること無し。何を以ての故に。第一常樂涅槃に入る。是の義

を以ての故に、異法は苦、異法は樂、異法は我、異法無我なり。

【三】 入地に在りて虚空を仰ぎ觀るに、鳥迹を見ざるが如し。善男子、衆

生も亦爾なり、天眼有ること無し。煩惱の中に在りて、而も自ら如來性有るを見ず。是の故に我、無

我密教を説く。所以は何ん。天眼無き者は眞我を知らず。横に我を計するが故に。諸の煩惱に因りて

造る所の有爲、即ちは無常なり。是の故に我、異法は常、異法無常と説く。

【三】 「精勤勇健の者、若山頂に處すれば、

【四】 次に長行を以て前偈を解釋す。

【五】 次に上下を知らずして苦を明す。其中初に譬。

【六】 次に合。

【七】 次に上能く下を知りて樂を明す。其中初に兩偈を以て正しく解す。之に人、法の二

段あり。

平地及び曠野、常に諸の凡夫を見。

大智慧殿、無上微妙の臺に昇れば、

既に自ら憂患を除き、亦衆生の憂を見る。

如來悉く無量の煩惱を斷じ、智慧山に住して、諸の衆生の、常に無量億の煩惱の中に在るを見

る。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、偈の所説の如き、是の義然らず。

何を以ての故に。涅槃に入る者は憂無く喜無し。云何ぞ智慧臺殿に昇ることを得ん。復當に云何ぞ山頂に住して、而も衆生を見るべけん。』

佛の言はく、『善男子、智慧殿とは即ち涅槃を名く。憂患無き者を如來

と謂ふなり。憂患有る者を凡夫人と名く。凡夫憂ふるを以ての故に、如來

には憂無し。須彌山頂とは正解脱を謂ふ。勤精進の者は須彌山の動轉有る

こと無きに譬ふ。地は有爲行を謂ふなり。是の諸の凡夫、是の地に安住して諸行を造作す。其の智慧

は則ち正覺を名く。離有常住、故に如來と名く。如來無量の衆生の、常に諸有の毒箭に中てらるるを

憫念す。是の故に名けて如來憂有りと爲す。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若如來憂悲有らしめば、則ち稱して等正覺と爲すことを得

る。』

【三】長行にて前偈を通釋す。

【九】次に第二番の間答の文。

其中初に問の文。之に、佛

説を非ず、難ずるの二段あり。

【四】次に答の文。

【四】次に第三番の間答の文。

其中初に問。

ざらん。』【四二】佛迦葉に告げたまはく、『皆因縁有りて、衆生の化を受くべき處有るに隨ひて、如來中に於て受生を現す。受生を現すと雖も、而も實は生無し。是の故に如來を常住法と名く。迦隣提、鴛鴦等の鳥の如し。』

【四二】 次に答。

月喻品第十五

佛迦葉に告げたまはく、「譬へば人有りて、月の現せざるを見て、皆月没す」と言ひて没想を作す。而も此の月性實は没すること無きなり。他方に轉現すれば、彼處の衆生「復月出づ」と謂ふ。而も此の月性實は出づること無きなり。何を以ての故に。須彌山障ふるを以ての故に現せず。其の月常に生じて性出沒無きが如し。如來、應供、正徧知も亦復是の如し。三千大千世界に出現し、或は閻浮提に父母有るを示す。

衆生皆閻浮提に生ず」と謂ふ。或は閻浮提に涅槃を示現す。如來の性、實は涅槃無し。而も諸の衆生皆「如來實に般涅槃す」と謂ふ。譬へば月没の如し。善男子、如來の性、實は生滅無く、衆生を化せんが爲に生滅有るを示す。

三善男子、此の満月の、餘方には半を見、此方には半月、餘方には満を見る。閻浮提の人、若月初を見れば皆一日と謂ひて初月の想を起す。月の盛満を見れば十五日と謂ひて盛満の想を生ず。而も此の月性實は虧盈無し。須彌山に因りて増減有るが如し。善男子、如來も亦爾なり。閻浮提に於て或は初生を現じ、或は涅槃を示す。始生を現する時、猶し初月の如し。一切皆童子初生」と謂ふ。七歩

- 【一】 この品先づ問を答ふ。其中、初に三光に約して三段に分ち、以て三問を答ふ。先づ月の譬の文。今は、その出沒の文。之に譬、合の二段あり。
- 【二】 次に虧盈の文。其中初に
- 【三】 次に合。

を行く、二日の月の如し。或は復示現して書堂に入る、三日の月の如し。出家を示現す、八日の月の如し。大智慧微妙の光明を放ちて能く無量の衆生魔衆を破す。十五日盛満の月の如し。或は復三十二の相、八十種の好を示現し、以て自ら莊嚴して、而も涅槃を現す。譬へば月の蝕の如し。是の如く衆生見る所同じからず。或は半月を見、或は満月を見、或は月蝕を見る。而も此の月性、實は増減、侵蝕の者無く、常に是満月なり。如來の身も亦復是の如し。是の故に名けて常住不變と爲す。

〔四〕次に善男子、譬へば満月の一切悉く現じ、在在處處、城邑、聚落、山澤、水中、若は井、若は池、及び諸の水器、一切皆現す。諸の衆生有りて百由旬、百千由旬を行くに、月常に隨ふを見る。凡夫愚人妄りに憶想を生じて言はく、「我本城邑、屋宅に於て是の如きの月を見、今復此の空澤に於て之を見る。」是本月と爲ん、本に異はりと爲んや。」各是の念を作さく、月形の大小、或は言

はく、「一錢口の如し。」或は言はく、「車輪の如し。」或は言はく、「四十九由旬の如し。」一切皆月の光明を見る。或は團圓猶し金槃の如しと見る。是の月性一にして、種種の衆生各異相を見るが如し。善男子、如來も亦爾なり、世に出現す。或は人天有りて是の念を作さく、「如來今者我が前に在りて住す」と。復、畜生も亦是の念を生ずる有り、「如來今者我が前に住す」と。或は髻鬘有りて、亦如來髻鬘の相有るを見る。衆生雜類、言音各異り、皆、如來悉く己が語に同じ」と謂ふ。亦各念を生ず、「我が舍宅に在り

【四】次に大小の文。其中初に譬。  
【五】錢口の錢とは釜なり。安註に曰く、關西は鏡と云ひ、關東は釜と云ふと。  
【六】次に合。

て我が供養を愛く」と。或は衆生有りて、如來身の廣大無量なるを見る、或は微妙と見る、或は佛是聲聞の像と見る有り、或は復縁覺の像と爲る有り、諸の外道有りて復各念言すらく、「如來今者、我が法の中に在りて出家學道す」と。或は衆生有りて復是の念を作さく、「如來今者、獨我が爲の故に世に出現す」と。如來の實性は、譬へば彼の月の如し、卽ち是法身、是無生身、方便の身なり。世に隨順して示現無量なり。本業の因縁存在處處に有生を呈現すること、猶し彼の月の如し。是の義を以ての故に、如來常住にして變異有ること無し。

【モ】次に善男子、羅睺羅阿脩羅王手を以て月を遮ふ。世間の人咸く月蝕すと謂ふ。阿脩羅王は實は蝕すること能はず。阿脩羅其の明を障ふるを以ての故なり。是の月團圓にして虧損有ること無し。但手を以て障ふるが故に現せざらしむ。若手を攝むる時は世間咸く月復還生すと謂ひ、皆是の月多く苦惱を愛くと言ふ。假使百千の阿脩羅王も之を惱ますこと能ざるが如し。如來も亦爾なり。衆生如來の所に於て、麤惡心を生じて佛身の血を出し、五逆罪を起し、一闍提に至ること有るを示す。未來世の諸の衆生の爲の故に、是の如く僧を壞し法を斷じて留難を作すを示現す。假使無量百千億の魔も如來の身血を侵し出すこと能はず。所以は何ん。如來の身は血肉、筋脈、骨髓有ること無し。如來眞實にして實に惱壞無し。衆生皆法僧毀壞し、如來滅盡すと謂ふ。而

【七】次に善惡の文。其中初に制止の文。之に譬、合の二段あり。

【八】羅睺羅阿脩羅王。梵語 Rāhulāstura-ṛjya の音寫、四阿脩羅王の一。阿脩羅は非天と譯す、勝德天に似て而も全く同じからざるが故に、この名あり。

も如來性眞實にして變無く、破壞有ること無し。世間に隨順して是の如く示現す。

復次に善男子、二人鬪ふに若刀杖を以て身を傷けて血を出し、死に至ると雖も殺想を起さずば、是

の如きの業相輕にして重ならざるが如し。如來の所に於て本殺心無ければ、身血を出すと雖も是の業も亦爾なり、輕にして重ならず。如來是の如し。未來世に於て衆生を化するが爲に業報を不現す。

二〇 復次に善男子、猶良醫の勤めて其の手に醫方の根本を教へ、此は是

根藥、此は是味藥、此は是色藥なり。種種の相貌、汝當に善く知るべし。

其の子父の教する所を敬奉し、精勤習學して善く諸藥を解す。是の醫後時

に壽盡きて命終す。其の子號慕して是の言を作さく、父本我に根藥是の如

く、莖葉是の如く、華藥是の如く、色相是の如しといふが如し。如

來も亦爾なり。衆生を化するが爲に制戒を不現す。應當に是の如く受持し

て犯すこと莫かるべし。五逆罪を作し、正法を誹謗し、及び一闍提、未來

世是の事を起す者の爲に、是の故に不現す。比丘をして佛滅後に於て、是の如く此は是契經甚深の義、

此は是戒律輕重の相、此は是阿毘曇分別法句と知ることを作す。彼の醫子の如くならしめんと欲す。

二 復次に善男子、人は月六月に一たび食するを見、而も 三 上の諸天は須臾の閉、已に月蝕を見

る。何を以ての故に。彼の天は日長く、人間は短き故なるが如し。善男子、如來も亦爾なり。天人咸

【九】次に輕重の文 之に譬、合の二段あり。

【一〇】次に如來の教戒の文。之に譬、合の二段あり。

【一一】次に長短の文。之に譬、合の二段あり。

【一二】上の諸天とは四天王を指す、初利天は身光を有するが故に日月を須ひず。

く「如來は短壽」と謂ふ。彼の天人の須臾の閒頻りに月蝕を見るが如し。如來又須臾の間に於て百千萬億の涅槃、煩惱魔、陰魔、死魔を斷ずるを示現す。是の故に百千萬億の天魔、悉く如來般涅槃に入るを知る。又復無量百千の先業の因縁を示現す。世間の種種性に隨順するが故なり。示現是の如く無量無邊不可思議なり。是の故に如來常住にして變無し。

(二三) 復次に善男子、譬へば明月は衆生見ることを樂ふ。是の故に月を稱して、號して樂見と爲す。(二四) 衆生若貪恚、愚癡有るときは、則ち稱して樂見と爲すことを得ざるが如きなり。如來是の如し。其の性純善清淨無垢なり。是最も稱して樂見と爲すべきなり。樂法の衆生、視て之を厭ふこと無く、惡心の人は瞻觀することを喜ばず。是の義を以ての故に、「故に如來は譬へば明月の如し」と言ふ。

(二五) 復次に善男子、譬へば日出に三時の異有り、春、夏、冬を謂ふ。冬日は則ち短く、春日は中に處し、夏日は極めて長きが如し。(二六) 如來も亦爾なり。此の三千大千世界に於て短壽の者、及び諸の聲聞の爲に短壽を示現す。斯等見已りて、咸く「如來は壽命短促なり」と謂ふ。譬へば冬日の如し。

【二三】 次に樂厭の文之に譬、合の二段あり。

【二四】 衆生若貪恚等。この文意明かならず。安註に曰く、是れ衆生月を見ることを樂はずとやせん、是れ其月見ること

を樂はずとやせん、解して曰く、兩意あり、一には直に三毒の衆生月を見ることを樂はざるに由る、二には月を不樂見と名く、蓋を作すの人の如き自ら月を名けて不樂見と爲すが如しと。

【二五】 次に日の譬の文。其の最初に譬の文。譬のうち、三時とは印度に秋なきが故なり。

【二六】 次に合。其中初に如來の壽命を以て合す。

諸の菩薩の爲に中壽



を示現す。若は一劫に至り、若は一劫を滅す。譬へば春日の如し。唯佛のみ佛の其の壽無量を觀る。譬へば夏日の如し。(二七)善男子、如來の所説の方等大乘微密の教は、世間に示現して大法雨を雨す。未來世に於て若人有りて能く是の典を護持し、開示分別して衆生を利益せば、當に知るべし、是の輩は是眞の菩薩なり。譬へば盛夏に天甘雨を降すが如し。若聲聞、緣覺の人、佛如來の微密の教を聞く有らば、譬へば冬日多く冷患に遇ふが如し。菩薩の人、若是の如きの微密教誨、如來常住性變易無きを聞かば、譬へば春日萌芽の開敷するが如し。而も如來性、實は長短無し。世間の爲の故に示現することは是の如し。即ち是諸佛の眞實法性なり。(二八)復次に善男子、譬へば衆星の晝は則ち現せず。而るを人皆「晝星滅没す」と謂ふ、其實は沒せず。現せざる所以は、日光映するが故なるが如し。如來も亦爾なり。聲聞、緣覺は見ることを得ること能はず。猶し世人の晝星を見ざるが如し。(二九)復次に善男子、譬へば陰闇に日月現せざるを、愚人は謂つて「日月失没す」と言ふ。而も是の日月實は失没無きが如し。如來の正法滅盡の時に、三寶没を現するも亦復是の如し。永滅の爲に非ず。是の故に當に知るべし、如來は常住にして變易有ること無し。何を以ての故に。三寶の眞性は諸垢に染められざるが故なり。

【二七】次に經教を以て合す。  
 【二八】次に譬の文、その中、初に衆星。之に譬、合の二段あり。  
 【二九】次に陰闇の之に譬、合の二段あり。

(三) 復次に善男子、譬へば黒月、彗星の夜現するに、其の明熾熾にして漸く出でて還つて没す。衆生見已りて不祥の想を生ずるが如し。諸の辟支佛も亦復是の如し。無佛の世に出づれば、衆生見已りて皆「如來眞實に滅度す」と謂ひて憂悲の想を生ず。而も如來身實に滅度せず。彼の日月に滅没有ること無きが如し。

(三) 復次に善男子、譬へば日出づれば衆霧悉く除こるが如し。此の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。世に出興して、若衆生一たび耳に經る者有らば、悉く能く一切の諸惡、無間の罪業を除滅す。是の大涅槃甚深の境界は思議すべからず。善く如來微密の性を説く。(三) 是の義を以ての故に、諸の善男子、善女人等は、如來に於て常住の心を生じ、變易有ること無し。正法斷せず、僧寶滅せざるべし。(四) 是の故に應當に多く方便を修し、是の典を勤學すべし。是の人久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

(三) 是の故に此の經を名けて無量切徳所成と爲す。亦菩提不可窮盡と名く。不盡を以ての故に、稱して大般涅槃と爲すことを得。善光有るが故に、猶し夏日の如し。身無邊の故に大涅槃と名く。

- 【二】 次に彗星之に譬、合の二段あり。
- 【三】 是より經を結歎す。其中初に歎、而して先づ滅惡を歎す。
- 【三】 次に義深を歎す。
- 【三】 次に勸信、其中初に信を勸む。
- 【四】 次に勸學。
- 【五】 次に結。

# 菩薩品第十六

〔一〕復次に善男子、日月の光は諸明の中の最なり。一切の諸明及ぶこと能はざる所なるが如し。大涅槃の光も亦復是の如し。諸の契經三昧の光明に於て最も殊勝と爲す。諸經三昧所有の光明、及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に。大涅槃の光は能く衆生の諸の毛孔に入るが故に。衆生菩提の心無しと雖も、而も能く爲に菩提の因縁を作す。是の故に復大般涅槃と名く。』

〔二〕迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の大涅槃の光、一切衆生の毛孔に入らば、衆生菩提の心無しと雖も、而も能く爲に菩提の因を作すとの如きは、是の義然らず。何を以ての故に。世尊、四重禁を犯し、五逆を作すの及び一闍提、光明身に入りて菩提の因を作さば、是の如き等の輩、淨戒を持し諸善を修習すると何の差別か有る。若差別無ければ、如來何が故ぞ四依の義を説きたまふ。世尊、又佛の言ふが如く、若衆生大涅槃を聞きて一たび耳に經る有らば、則ち諸の煩惱を斷除することを得しとは、如來云何ぞ、上に入恆沙の佛所に菩提心を發す

〔一〕この品上の十二間に答ふ、其中初に自行を明し四間に答ふ。其中初に未發心を答ふるは生善の義なるを答ふ。

而して先づ譬を牒し經を歎じ傍ら答ふ。又其中今に傍答の文。

〔二〕大涅槃の光。安註に二解を出す。一には佛身光を放ち彼の毛孔に入る、佛即ち涅槃の故に名くと。二には涅槃の教の理を證はすを分明なるを以て喻へて光といふ。

〔三〕次に料簡の文。其中初に問。之に領旨、仰非、作歎の三段あり。

も、大涅槃を聞きて其の義を解せざる有る」と説く、若義を解せざれば、云何ぞ能く一切の煩惱を斷せん。

佛の言はく、「善男子、一闍提を除き、其餘の衆生は是の經を聞き已らば、悉く皆能く菩提の

因縁を作る。法聲光明毛孔に入らば、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何を以て

の故に。若人能く無量の諸佛を供養、恭敬する

有らば、方に乃ち大涅槃經を聞くことを得。薄

福の人は則ち聞くことを得ず。所以は何ん。大

徳の人は乃ち能く是の如きの大事を聞くことを

得、凡夫下劣は則ち聞くことを得ず。何等をか

大と爲す。所謂諸佛の甚深祕藏、如來性はなり。

是の義を以ての故に、名けて大事と爲す。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が未だ菩提心を發さざる者、菩提の因を得るや。』

佛、迦葉に告げたまはく、『若是の大涅槃經を聞きて、『我用ひて菩提心を發さず』と言ひて正法を誹

謗する有らば、是の人即ち夢中に於て、羅刹の像を見て心中に怖懼す。羅刹語つて言はく、「咄善男子、

【四】次に答り之に正答、釋答の二段あり。

【五】一闍提を除き、安註に釋して曰く、名字等の菩薩を明

さんと欲するが故に闍提を簡で其餘を通取す。理性の菩薩

を明さんと欲すれば一闍提を簡ばす、闍提即祕藏如來佛性

なるが故なり。若し天台圖別の義なくんばこの經文遂に消

すべからずと。

【六】次に正しく上の間に答

ふ。其中初に問。

【七】次に答の文。其中、初に正しく答ふ。而して先づ經に因つて夢を致すの文。文のうち四位の菩薩を答ふ。四位は六即の初後を除く。曰く、涅槃を聞くに名字、夢に羅刹を見る等は觀行、三趣に墮せざる等は相似、是大菩薩は分眞なり。

【八】羅刹は、梵語 Rakshasa の音譯、惡鬼の總名なり。

汝今若菩提心を發さざれば、當に汝が命を斷すべし。是の人怖怖し、寤め已りて即ち菩提の心を發す。是の人命終して若は三趣に在り、及び人天に在りて、續いて復菩提の心を憶念せん。當に知るべし、是の人は是大菩薩摩訶薩なり。是の義を以ての故に、是の大涅槃威神の力、能く未だ菩提心を發さざる者をして、菩提の因を作らしむ。善男子、是を菩薩の發心因縁と名く、因縁無きに非ず。是の義を以ての故に、大乘妙典は眞に佛の所説なり。

〔一〇〕 復次に善男子、虚空の中に大雲雨を興して大地に注ぐに、枯木、石山、高原、堆阜は水の住せざる所、下田に流注して陂池悉く滿ち、無量の一切衆生を利するが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。大法雨を雨して普く衆生を潤す。唯一闍提の菩提心を發すとは是の處有ること無し。

〔一一〕 復次に善男子、譬へば焦種の甘雨に遇ふこと百千萬劫と雖も、終に芽を生ぜず。芽若生せば是の處有ること無きが如し。一闍提の輩も亦復是の如し。是の如きの大涅槃微妙の經典を聞くと雖も、終に菩提心の芽を發すること能はず。若能く發せば是の處有ること無し。何を以ての故に。是の人一切の善根を斷滅す。彼の焦種の如く、復菩提の根芽を生ずること能はず。

〔一二〕 復次に善男子、譬へば明珠を濁水の中に置くに、珠の威徳を以て水即ち清らかと爲る。之を淤泥

【九】 次に經を歎す。  
【一〇】 次に十譬を以て闍提を簡ぶ。その内初に一譬は雙べて簡ぶ。虚空は法身を、雲は應身を、雨は應身の説法を、大地、下田、陂池は四位の菩薩を、枯木、石山等は闍提の佛敎を受けざるを喩ふ。  
【一一】 次に一譬は別して簡ぶ。  
【一二】 次に四譬は重ねて簡ぶ。  
之に四譬あり。先づ第一譬の文。

に投ずれば清からしむること能はざるが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。餘の衆生の五無間罪、四重禁法の濁水の中に置かば、猶澄清の菩提心を發すべし。一闍提の淤泥の中に投ずれば、百千萬歳にも清みて菩提心を起さしむること能はず。何を以ての故に。是の一闍提は諸の善根を滅して其の器に非ざるが故なり。假使是の人、百千萬歳是の如きの大涅槃經を聽受すとも、終に菩提の心を發すこと能はず。所以は何ん。善心無きが故なり。

(三) 復次に善男子、譬へば藥樹ありて名を藥王と曰ひ、諸藥の中に於て最も殊勝爲り。若は乳酪、若は蜜、若は酥、若は水、若は漿に和し、若は末、若は丸、若は以て劍に塗り身を熏じ目に塗り、若は見、若は嗅がば、能く衆生の一切の諸病を滅す。是の如きの藥樹是の念を作さす。一切の衆生、若我が根を取らば葉を取るべからず、若葉を取らば根を取るべからず、若身を取らば皮を取るべからず、若皮を取らば身を取るべからず。是の樹復是の念を生ぜずと雖も、而も能く一切の病苦を除滅するが如し。善男子、是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。能く一切衆生の惡業、四波羅夷、五無間罪、若は内、若は外、所有の諸惡を除く。所有未だ菩提心を發さざれば、是に因りて則ち菩提心を發すことを得。何を以て

【三】次に第二譬の文。文の中に、  
 乳酪等の五物は五行觀に譬ふ。  
 末は長行教説を譬ふ。  
 丸は偶頰を譬ふ。  
 塗劍は聞慧を譬ふ。  
 熏は思慧を譬ふ。  
 塗目は修慧を譬ふ。  
 見は讀を譬ふ。  
 嗅は誦を譬ふ。  
 根は法説を譬ふ。  
 葉は譬説を譬ふ。  
 身は理味を譬ふ。  
 皮は文言を譬ふ。

の故に。是の妙經典は諸經中の王、彼の藥樹の諸藥中の王なるが如し。若しは大涅槃を修習し、及び修せざる者有り。若しは是經典の名字有るを聞き、聞き已りて敬信せん。所有の一切煩惱の重病、皆悉く除滅す。唯一闍提の輩をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむる能はず。彼の妙

藥能く種種の重病を療愈すと雖も、而も必死の人を治する能はざるが如し。

〔四〕次に善男子、人手に瘡ありて毒藥を捉持すれば、毒則ち隨つて入る。

復次に善男子、若瘡無き者は毒則ち入らざるが如し。一闍提の輩も亦復是の如し、菩提の

因無し。瘡無き者毒入ることを得ざるが如し。所謂瘡とは即ち是無上菩提

の因縁、毒とは即ち是第一の妙藥なり。全く瘡無き者は一闍提を謂ふ。

〔五〕次に善男子、譬へば金剛の能く壞する者無く、悉く能く一切の物を

破壞し、唯龜甲及び白羊角を除くが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復

是の如し。悉く能く無量の衆生を菩提の道に安止す。唯一闍提の輩をして

菩提の因を立てしむること能はず。

〔七〕次に善男子、馬齒草、娑羅翅樹、尼迦羅樹の、枝莖を斷すと雖

も、續生すること故の如く、多羅の斷じ已らば生ぜざるが如くなるが如し。

が如し。是の諸の衆生も亦復是の如し。若しは大涅槃經を聞くことを得ば、四禁を犯し、及び五無聞

〔四〕次に第三譬。

〔五〕次に第四譬。

〔六〕白羊角。大智度論に所謂山羊角と云ふもの是れなり。

〔七〕次に四譬は重ねて別簡す。之に四譬あり、先づ第一

譬。

〔八〕娑羅翅樹。娑羅(Shāra)は堅固と譯す、翅といふは、娑羅樹の葉は雙をなすこと鳥の翅の如くなるが故にかく云ふ、所謂娑羅雙樹のことなり。

〔九〕尼迦羅(Nigāra)。不黑、不時と譯す、樹の名。

〔一〇〕多羅(Dāra)。岸樹又は高棘樹と譯す、樹の名。

と雖も、猶故能く菩提の因縁を生ず。一闍提の輩は則ち是の如くならず。是の妙經典を聽受することと雖も、而も菩提の道因を生ずること能はず。復次に善男子、(三) 法陀

羅樹、鎮頭迦樹の斷じ已れば生ぜざるが如し。一闍提の輩も亦復是の如し。是の大涅槃經を聞くことを得と雖も、而も菩提の因縁を發すること能はず。

(三) 復次に善男子、譬へば大雨の終に空に住せざるが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。普く法雨を雨す、一闍提に於ては則ち住すること能はず。

(四) 一闍提は周體密緻にして、猶し金剛の外物を容れざるが如し。

(五) 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の説偈の如く、

「善を見ず作さず、唯惡の作すべきを見る、

是の處怖畏すべし、猶し險惡道の如し。」

世尊、是の如きの所説何等の義有りや。佛の言はく、「善男子、不見とは

佛性を見ざるを謂ふ。善とは則ち阿耨多羅三藐三菩提なり。不作とは所謂善友に親近すること能はず。唯見とは因果無しと見る、惡とは方等大乘

經典を謗るを謂ふ、可作とは一闍提の方等無しと説くを謂ふ。是の義を以

ての故に、一闍提の輩は心の清淨善法に趣向する無し。何等か善法なる。

【一】 次に第二譬、

【二】 法陀羅 (Kāṭhīnī)。山木、又は毒樹刺等と譯する樹の名。

【三】 次に第三譬。

【四】 次に第四譬の文、因みに、聞善は但九譬を數ふるが故にこの最後第十の金剛譬を取らず。

【五】 前に未發心を答ふるは生善の義、この品、是より三問を答ふるは滅惡の義なるを明す。其中初に大衆無畏の問を答ふるは是業障を滅するを明す。之に又二段ありて初に懺悔滅罪の文。其中初に非之に偈を擧げて問ふ、偈を釋して答ふの二段あり。

涅槃を謂ふなり。涅槃に



趣く者おもむくものは、能く賢善けんぜんの行を修習しゆじゆするを謂ふ。一闍提いつせんだいは賢善けんぜんの行無し。是の故に涅槃ねはんに趣向しすること能あたはず。是處ぜしこ可畏かゐとは正法しやうほふを謗はうするを謂ふ。誰か怖畏ふゐすべき。所謂しよゐ智者しやなり。何を以ての故に。謗法はうほふの者は善心ぜんしん及び方便はんべん有ること無きを以ての故なり。險惡道けんあくだうとは諸行しよぎやうを謂ふなり。』

迦葉二七、復言またまをさく、『佛の所説しよせつの如く、

「云何いかなが所作しよさを見、云何いかなが善法ぜんほふを得、

何れの處か怖畏ふゐせざる、王の夷坦道いたんたうの如し。』

是の義何の謂ぞ。』

佛の言はく、『善男子、見所作とは諸惡を發露す。生死際より作す所の諸

惡、悉く皆發露して無至處に至る。是の義を以ての故に、是の處無畏なり。譬へば人王の遊ぶ所の正路、其の中の盜賊悉く皆逃走するが如し。是の

如く發露すれば、一切の諸惡悉く滅して餘無し。復次に不見所作とは、

一闍提所作の衆惡、而も自ら見ざるを謂ふ。是の一闍提は憍慢心の故に、多く惡を作すと雖も、是の

事の中に於て初て怖畏無し。是の義を以ての故に涅槃を得ず。譬へば獼猴の水中の月を捉るが如し。

善男子、假使一切無量の衆生、一時に阿耨多羅三藐三菩提を成就し已れども、此の諸の如來も、亦復

彼の一闍提の菩提を成ずることを得るを見ず。此の義を以ての故に、不見所作と名く。又復誰の所作を

【二六】次に是を顯す。其中初に 偈を擧げて問ふ。  
【二七】次に偈を釋して答ふ。其中初に道じて三世の業障を憐す。この中見所作は現在、生死際ば過去、無至處は即ち未來。  
【二八】次に非。

見す。所謂如來の所作を見す。佛、衆生の爲に佛性有りと説く。一闍提の輩生死に流轉して知見すること能はず。是の義を以ての故に、名けて如來の所作を見ずと爲す。又一闍提の如來畢竟涅槃すと見る。眞に無常なること猶し燈滅するとき膏油俱に盡くるが如しと謂ふ。何を以ての故に。是の人の惡業損滅せざるが故なり。若菩薩有りて、所作の善業阿耨多羅三藐三菩提に回向する時、一闍提の輩復毀誓し破壞して信せずと雖も、然も諸の菩薩、猶故施與して共に無上の道を成就せんと欲す。何を以ての故に。諸佛の法爾なり。

【一〇】「作惡即ち受くること、乳即ち酪と成るが如くならず、

猶し灰を火上に覆ふに、愚者輕んじて之を踏むがごとし。」

一闍提とは名けて無目と爲す。是の故に阿羅漢道を見ず。阿羅漢の如

【二】 次には。  
 【三】 次に法を護りて業を滅す。其中初に偈。  
 【四】 次に偈を釋す。其中初に非。

く生死險惡の道を行せず。目無きを以ての故に、方等を誹謗して修習を欲せず。阿羅漢の如く慈心を勤修す。一闍提の輩方等を修せざるも亦復是の如し。若人説きて、我今聲聞の經典を信せず、大乘を信受し、讀誦、解説す。是の故に我今即ち是菩薩なり。一切の衆生悉く佛性有り。佛性を以ての故に、衆生の身中即ち十力、三十二相、八十種好有り。我の所説は佛説に異らず。汝今我と共に無量の諸惡煩惱を破すること、水澱を破るが如し。結を破るを以ての故に、即ち能く阿耨多羅三藐三菩提を見ることを得」と言はん。是の人は是の如く演説を作すと雖も、心實は如來性有るを信せず。利養を爲て

の故に文に隨ひて説く。是の如く説く者を、名けて惡人と爲す。是の如きの惡人は、速かに果を受くること乳の酪と成るが如くならず。譬へば王の使、善能く談論し、方便に巧みにして命を他國に奉ず。寧ろ身命を喪ふとも、終に王所説の言教を匿さざるが如し。智者も亦爾なり。凡夫の中に於て身命を惜まず。要必ず大乘方等如來の祕藏、一切衆生皆佛性有るを宣説す。

善男子、一闍提有りて羅漢の像と作り、空處に住して方等大乘經典を誹謗す。諸の凡夫人、見已りて皆眞の阿羅漢は大菩薩摩訶薩と謂ふ。是の一闍提惡比丘の輩、阿蘭若處に住して阿蘭若法を壞す。他の利を得るを見て心嫉妬を生じ、是の如きの言を作さく、「所有の方等大乘經典は、悉く是天魔波旬の説く所」と。亦「如來は無常の法」と説く。正法を毀滅し衆僧を破壞す。復是の言を作さく、「波旬の所説は善順の説に非ず。是の宣説を作す邪惡の法なり。是の人惡を作して即ち報を受くること乳の酪と成るが如くならず。灰の火上に覆ふを、愚輕んじて之を踏む。是の如きの人は一闍提を謂ふ。是の故に當に知るべし、大乘方等微妙の經典は必定清淨なり。摩尼珠、之を濁水に投ずれば水即ち爲に清むが如し。大乘經典も亦復是の如し。

復次に善男子、譬へば蓮華の日に照されて開敷せざる無きが如し。一切衆生も亦復是の如し。若

【三】次に是の文。その中初に譬の文。文の中、王は佛に、使は四依に、善談論は内智慧に、方便巧は外能く法を説くに譬ふ。また奉命は佛旨を傳ふるに、他國は生死に譬ふるなり。

【三三】次に合。

【三四】次に重ねて非ず。

【三五】次に經を敷す。其中初に滅惡を敷す。

【三六】次に生善を敷す。

大涅槃日を見聞することを得ば、未發心の者、皆悉く發心して菩提の因を爲す。是の故に我説く、

「大涅槃光の毛孔に入る所必ず妙因と爲す」と。彼の一闍提は佛性有りと雖も、而も無量の罪垢に纏はれ、出づることを得ること能はざる、蓋の繭に處るが如し。是の業縁を以て、菩提の妙因を生ずることを得ること能はず。生死に流轉して、窮り已むことあること無し。

【三〇】 復次に善男子、優鉢羅華、鉢頭摩華、拘物頭華、芬陀利華の游泥の中に生じて、而も彼の游泥に汚されざるが如し。若衆生の大涅槃微妙の經典を修する有らば、亦復是の如し。煩惱有りと雖も、終に彼の煩惱に汚されず。何を以ての故に。如來の性相を知るの力を以ての故なり。善男子、

譬へば國有りて清涼の風多く、若衆生の身諸の毛孔に觸るれば、能く一切の鬱蒸の惱を除くが如し。此の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。徧く一切衆生の毛孔に入りて、爲に菩提微妙の因縁を作す。一闍提を除く。何を以ての故に。法器に非ざるが故なり。

【三一】 復次に善男子、譬へば良醫、八種の薬を解して一切の病を滅し。唯阿薩闍病を除くこと能はざるが如し。一切の契經禪定三昧も亦復是の如し。能く一切の貪恚、愚

【三二】 次に濁世不汚の間を答ふるは是れ報障を滅するを明すその中初に華の喩を以て正しく答ふ。

【三三】 次に風の喩を以て助け答ふ。

【三四】 次に煩惱不染の間を答ふるは是れ煩惱障を滅するを明す。其中凡て十四譬あり。初の十二は譬所説の教を譬ふ。今この第一譬は又其中の昔の小教を譬ふ。之に譬、合の二段あり。

【三五】 八種の薬は、八正直を譬ふ。又は五門禪と、因縁と、慈悲と、不淨觀とを譬ふと。阿薩闍病(Asarajyaya)。不治と譯す、最も重くして癒す可らざる病の名。

癡の諸の煩惱病を治し、能く煩惱の毒刺等の箭を抜き、而も犯四重禁、五無間罪を治すること能はず。

善男子、復良醫の八種の術に過ぐる有り。能く衆生の所有の疾苦を除く。唯必死の病を治すること能はず。是の大涅槃大乘經典も亦復是の如し。能く衆生の一切煩惱を除き、如來の清淨妙因に安住せしめ、未發心の者に發心を得しむ。唯必死の一闍提の輩を除く。

聖 復次に善男子、譬へば良醫の、能く妙薬を以て諸の盲人を治して、日月星宿の諸明一切色像を見しむ。唯生盲の人を治すること能はずが如し。是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。能く聲聞緣覺の人の爲に慧眼を開發し、其をして無量無邊の大乗經典に安住せしむ。未發心の者の犯四禁、五無間罪を謂ふ。悉く能く菩提の心を發せしむ。唯生盲の一闍提の輩を除く。

復次に善男子、譬へば良醫の善く八術を解し、爲に衆生の一切病苦を治す。種種の方藥、病に隨

【三】次に今教を譬ふ。其中初に第二譬。

【四】次に第四譬、雙べて生善釋とを次に示す。

(舊來の釋)

(興皇の釋)

- 吐、現在を憊するを譬ふ……………苦
- 下、過去を憊するを譬ふ……………無常
- 塗身、通じて生善滅惡を譬ふ……………無我
- 灌鼻、別して滅惡を保持するを譬ふ……………不淨
- 藥、理を求むるを譬ふ……………常能
- 洗、文言を受持するを譬ふ……………淨能
- 丸、偶頰を持するを譬ふ……………樂能
- 散、長行を持するを譬ふ……………我能

今教

昔教

ひて之を與ふ。所謂吐下には、身に塗り鼻に灌ぎ、若は熏、若は洗、若は丸、若は散、一切の諸藥なり。而も貧愚の人之を服することを欲せず。良醫憫念して、即ち是の人を將ゐて其の舍宅に還り、強ひて與へて服せしむ。藥力を以ての故に所患除くことを得。女人の産者（四三）闍樓出でざるに、若此の藥を服すれば闍樓即ち出づ。亦嬰兒をして安樂にして患無からしむるが如し。是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。所至の處、若は舍宅に至り、能く衆生の無量の煩惱を除く。

犯四重禁、五無間罪、未發心の者を悉く發心せしむ。一闍提を除く。

【四二】 迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、犯四重禁及び五無間を極重惡と名く。譬へば多羅樹頭を斷截すれば、更に復生せざるが如し。是等の未發

菩提の心、云何が能く與に菩提因を作す。』佛の言はく、『善男子、是の諸の衆生、若夢中に於て、地獄に墮ちて諸の苦惱を受くるを夢み、即ち悔心を生ず、哀なる哉我等、自ら此の罪を招く。若我今是の罪を脱することを得ば、必定當に菩提の心を發すべし。我今見る所、最も是極惡』と。是より寤め已りて即ち正法の大果報有るを知る。

【四三】 彼の嬰兒の漸漸に長大して、常に是の念を作すが如し、是の醫最良にして善く方藥を解す。我、本胎に處するに我が母に藥を與ふ。母、藥を以ての故に身安穩を得。是の因縁を以て我が命全きことを得たり。奇なる哉我が母大苦惱を受く。

【四四】 十月を満足して我が身を懷抱し、既に生る

【四三】 闍樓（二七）。兒衣と譯す。俗にいふ臍緒なり。

【四四】 次に更に料簡す。之に問、答の二段あり。

【四五】 次に重ねて譬ふ。其中初に譬。

【四六】 十月。二解あり一には十使に覆はるるに譬ふ、二には十地行滿するに譬ふ。

るの後、乾を推し濕を去りて不淨の大小便利を除去し、乳哺長養して我が身を將護す。是の義を以ての故に、我當に恩を報じ、色養侍衛し隨順供養すべし」と。

【四九】 犯四重禁及び無閉罪は臨命終の時、是の大乗大涅槃經を念せば、地獄、畜生、餓鬼、天上、人中に墮すと雖も、是の如きの經典、亦是の人の爲に菩提の因を作る。一闍提を除く。

【五〇】 復次に善男子、譬へば良醫及び良醫の子、知る所深奥にして諸醫に出過す。善く毒を除く無上の呪術を知り、若は惡毒蛇、若は龍、若は蝮、諸の呪術を以て藥を呪して良

ならしむ。此の良藥を以て用ひて革屣に塗り、此の革屣を以て諸の毒蟲に觸るるに、毒之に消せらる。唯一毒の名を【五一】大龍と曰ふを除くが如し。是の大

乘典大涅槃經も亦復是の如し。若衆生の四重禁を犯し、五無閉罪なる有らんに、悉く能く消滅して菩提に任せしむ。藥革屣の能く衆毒を消するが如

し。未發心の者能く發心し、無上菩提の道に安住せしむ。是彼の大乘大涅槃經の威神藥の故に。諸の衆生をして安樂を生せしむ。唯大龍、一闍提の輩を除く。

【五一】 復次に善男子、譬へば人有りて、新毒藥を以て用ひて太鼓に塗り、衆生の中に於て擊ちて聲を發さしむ。心の聞かんと欲する無しと雖も、之を聞かば皆死す。唯一人不横死の者を除くが如し。是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。在在處處の諸行の衆生、聲を聞くこと有る者は、有らゆる貪欲、瞋

【四九】 次に合。  
【五一】 次に第五譬。  
【五二】 大龍。梵語 Mahāgaruṣa の譯。  
【五三】 次に第六譬

患、愚癡悉く皆滅盡す。其の中、心の思念する無き有りとも雖も、是の大涅槃因縁力の故に、能く煩惱を滅して而も結自ら滅す。犯四重禁及び五無間、是の經を聞き已らば、亦無上菩提の因縁を作り、漸く煩惱を斷ず。不横死の一闍提の輩を除く。

【三】 復次に善男子、譬へば闇夜に諸の營作する所一切皆息む。若未だ訖らざる者は、要ず日明を待つが如し。大乘を學する者、契經一切の諸定を修すと雖も、要ず大乘大涅槃日を待つ。是の如來微密の教を聞き、然して後乃ち當に菩提業を造り、正法に安住すべし。猶し天

雨の一切の諸種を潤益、增長し、果實を成就して悉く饑饉を除き、多く豊樂を受くるが如し。如來祕藏無量の法雨も亦復是の如し。悉く能く八種の熱病を除滅す。是の經の世に出づる、彼の果實の一切を利益し安樂にする所

多きが如し。能く衆生をして如來性を見しめ、法華の中、八千の聲聞記別を受くることを得、大果實を成するが如く、【三】 秋收め冬藏めて更に所作無きが如し。一闍提の輩も亦復是の如し。諸の善法に於て營作する所無し。

【三】 復次に善男子、譬へば良醫の他人の子非人に持つ所を聞きて、尋で妙藥を以て并に一使を遣し、使に教語して言ふが如し、「卿、此の藥を持って速かに彼の人に與へよ。彼の人若諸の惡鬼神に遇は

ば、藥力を以ての故に悉く當に遠く去るべし。卿、若遅晚せば、吾當に自ら往くべし。」終に彼をして

【三】 次に第七譬。

【四】 次に第八譬。

【五】 次に第九譬。

【六】 次に第十譬。



枉まげて横死わうじせしめざるなり。若もし彼の病人びやうじん、使し者しゃ及び吾わが威徳みとくを見ることを得えば、衆苦しゆく當まさに除のぞこり、安あん隱樂おんらくを得うべし。是この大乗だいじやう典てん大涅槃だいねはん經きやうも亦復また是この如ごとし。若もし比丘びく、比丘尼びくに、優婆塞うはさく、優婆夷うはい、及び諸もろの外け道だう、能よく是この如ごときの經典きやうてんを受持じゆぢし、讀誦どくじゆ通利つうりし、復また他人たにんの爲ために分別ぶんべつして廣ひろく説とき、若もし自ら書寫しよしやし、他たをして書寫しよしやせしむる有あらば、斯等こゝろ皆みな菩提ぼだいの因緣いんえんと爲なる。若もし犯たふ四禁しこん、及び五逆罪ごぎやくざい、若もし自ら書寫しよしやし、他たをられ、是この經典きやうてんを聞きかば、有あらゆる諸惡しよあく悉ことごとく皆消滅みなせうめつせんこと、良醫らういを見みれば惡鬼あくき遠とほく去さるが如ごとし。當まさに知しるべし、是この人は是眞こゝれしんの菩薩摩訶薩ぼさつまかざつなり。何なにを以もつての故ゆゑに。暫しばらくく是この大涅槃だいねはんを聞きくことを得うるが故ゆゑに。亦また念ねんを如來常にやうらいじやうに生しやうずるを以もつての故ゆゑなり。暫しばらくく聞きくことを得うる者もの、尙なほ是この如ごときを得う。何いかに況いはんや書寫しよしやし、受持じゆぢ、讀誦どくじゆせんをや。一闍提いつせんたいを除のぞきて其その餘よは、皆みな是この菩薩摩訶薩ぼさつまかざつなり。

【毛】 次に第十一譬。

【五】 次に第十二譬。

復次またつぎに善男子ぜんなんし、譬たとへば聾人ろうじんの音聲おんじやうを聞きかざるが如ごとし。一闍提いつせんたいの輩はいも復亦また是この如ごとし。復是またの妙經めうきやう典てんを聽きかんと欲ほつすと雖いへども、而しかも聞きくことを得えず。所以ゆゑは何いかん。因緣いんえん無なきが故ゆゑなり。

復次またつぎに善男子ぜんなんし、譬たとへば良醫らういの一切いっさいの醫方いほうに通達つうだつせざる無なく、兼かねて復廣またひろく無量むりやうの呪術しゆじゆつを知る。是この醫い、王わうに見みえて是この如ごときの言ことばを作なさく、「大王だいわう、今者いま必ず死病しびやう有り。其その王答わうたへて言ことばはく、「卿きみ、我が腹内はらうちの事ことを見みず。云何いかにを而しかも必死ひつしの病有やまひあり」と言ことばふ。醫い、復白またまをして言ことばはく、「若信もししんを見みざれば、下藥げやくを服ぶくすべし。既すでに下くだすの後のち、王自わうみづか之これを驗けんし、王自わうみづか之これを服ぶくせず。爾すなはちの時に良醫らうい、呪術しゆじゆつ力ちからを以もつて、王わうの隱處おんじよに徧あまね

く瘡疱を生じ、兼て復癩下し、蟲血雜り出づ。王、是を見已りて大怖懼を生じ、彼の良醫を讚すらく、  
 「善い哉善い哉、汝先に白す所吾之を用ひず。今乃ち、汝吾が此の身に於て、大利益を作すことを知  
 る」と。是の醫を恭敬すること猶し父母の如し。是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。諸の衆生、有  
 欲、無欲に於て悉く能く彼をして煩惱崩落せしむ。是の諸の衆生、乃至夢中に是の經を夢見して恭敬、  
 供養す。譬へば大王の良醫を恭敬するが如し。是の大良醫、必死の者を知れば、終に之を治せず。是  
 の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。終に一闍提の輩を治すること能はず。

【五九】 復次に善男子、譬へば良醫の善く八種を知り、悉く能く一切の諸病を

療治す。唯必死の人を治すること能はざるが如し。諸佛菩薩も亦復是の如  
 し。悉く能く一切の有罪を救療す。唯必死の人の一闍提の輩を治すること  
 能はず。

【五九】 次に兩譬を以て能説の人  
 を譬ふ。其中初に昔の教主を  
 譬ふ。

【六〇】 次に今の教主を譬ふ。

復次に善男子、譬へば良醫の善く八種の微妙經術を知り、復能く博く達して八種に過ぐ。己が  
 知る所を以て先其の子を教ふ。若は水、若は陸、山谷の藥草悉く誠知せしむ。是の如く漸漸に八事  
 を教へ已りて、次に復餘の最上妙術を教ふるが如し。如來、應供、正徧知も亦復是の如し。先其の  
 子、諸の比丘等を教へて、方便して一切の煩惱を除滅し、淨身不堅固想を修學せしむ。水陸、山谷と  
 謂ふは、水は身受苦水上の泡の如きを譬へ、陸は身不堅芭蕉樹の如きを譬ふ。山谷は煩惱の中無我想

を修するを譬ふ。是の義を以ての故に身を無我と名く。如來は是く如く諸の弟子に於て、漸漸に九部經法を教學して善く通利せしむ。然して後、如來の祕藏を教學す。其の子の爲の故に如來常を説く。如來、是の如く大乘典大涅槃經を説きたまふ。諸の衆生の已發心者、及び未發心の爲に菩提の因を作し、一闡提を除く。是の如く善男子、是の大乗典大涅槃經は、無量無邊不可思議未曾有なり。當に知るべし、即ちは無上の良醫、最尊最勝、衆經中の王なることを。

【三二】 復次に善男子、譬へば大船の、海の此岸より彼岸に至り、復彼岸より

還つて此岸に至るが如し。如來の正覺も亦復是の如し。大涅槃大乘寶船に乘じ、周旋往反して衆生を濟度す。在在處處に應度者有らば、悉く如來の身を見ることを得しむ。是の義を以ての故に、如來を名けて無上船師と曰ふ。【三三】 譬へば船あれば則ち船師有り。船師有れば則ち衆生の大海を渡る有るが如し。如來常住にして衆生を化度することも亦復是の如し。

【三三】 復次に善男子、譬へば人有りて、大海の中に在りて船に乗りて度らんと欲するに、若順風を得れば、須臾の間に則ち能く無量由旬を過ぐることを得。若得ざる者は、復久しく住して無量歳を經と雖も本處を離れず。時有りて船壞し、水に没して死するが如し。衆生是の如く彼の愚癡の生死の大海に在りて、若諸行の船、若大般涅槃樂猛利の風に値遇することを得れば、則ち能く疾く無上道の岸に至る。

【六二】 是より利他を以て八問に答ふ。其中初に第五大海船師の間に答ふ。之に亦二段あり初に正しく答ふ。而して先づ船の譬の文。

【六三】 次に船師及び人の譬の文。

【六四】 次で經を救じて助答す。其中初に風の譬。

若値遇せざれば、當に久しく無量の生死に流轉し、或時は破壞して地獄、畜生、餓鬼に墮すべし。

復次に善男子、譬へば人有りて風王に遇はず、久しく大海に住す。是の思惟を作さく、「我等今者

必ず此に在りて死せん。是の如く念する時、忽ち利風に遇ひ隨順して海を度る。復是の言を作すが如

し、快い哉是の風未曾有なり。我等輩をして、安隱に大海の難を過ぐることを得しむ」と。衆生はの

如く、久しく愚癡の生死大海に處して困苦窮碎し、未だ是の如き大涅槃風に遇はず、則ち念を生ず

べし、「我等必定して地獄、畜生、餓鬼に墮せん」と。是の諸の衆生是を思

惟する時、忽ち大乘大涅槃の風に遇ひ、隨順吹向して阿耨多羅三藐三菩提

に入り、方に眞實を知りて奇特の想を生じ、歎じて言さく、「快い哉我昔よ

り來た、未だ曾て是の如きの如來の微密の藏を見聞せず」と。爾して乃ち

是の大涅槃經に於て清淨信を生ず。」

〔六五〕復次に善男子、蛇の皮を脱するが如く、死滅と爲んや不や。『不なり世尊。』善男子、如來も亦

爾なり。方便示現して毒身を棄捨す。如來無常滅と言ふべきや。『不なり世尊。如來此の閻浮提の中

に於て方便して身を捨つ。彼の毒蛇の故皮を捨つるが如し。是の故に如來名づけて常住と爲す。』

〔六六〕復次に善男子、譬へば金師の好眞金を得、意に隨つて種種の諸器を造作するが如し。如來も亦爾

なり。二十五有に於て悉く能く種種の色身を示現す。衆生を化し、生死を抜かんが爲の故なり。是の

〔六四〕 次に風王の譬。  
〔六五〕 次に第六蛇故皮を脱するの問を答ふ。其中初に蛇の譬。是れ正答なり。  
〔六六〕 次に金師の譬。是れ助答なり。



如來涅槃すと説く。智臣當に知るべし、此は是如來、計常者の爲に無常相を説き、比丘をして無常想を修せしめんと欲す。或は復説きて言はく、「正法當に滅すべし」と。智臣應に知るべし、此は是如來、計樂者の爲に苦相を説き、比丘をして多く苦想を修せしめんと欲す。或は復説きて言はく、「我今病苦、衆僧破壞す」と。智臣當に知るべし、此は是如來、計我者の爲に無我相を説き、比丘をして無我想を修せしめんと欲す。或は復説きて言はく、「所謂空とは是正解脱なり」と。智臣當に知るべし、此は是如來正解脱、二十五有無し。比丘をして空相を修學せしめんと欲す。是の義を以ての故に、是の正解脱は即ち名けて空と爲し、亦不動と名く。不動と謂ふは、是の解脱中苦有ること無きが故に、是の故に不動なり。是の正解脱を無有相と爲す。無相と謂ふは、色、聲、香、味、觸等有ること無し、故に無相と名く。是の正解脱は常に變易せず。是の解脱の中、無常、熱惱、變易有ること無し。是の故に解脱を名けて常住不變清涼と曰ふ。或は復説きて「一切衆生如來性有り」と言ふ。智臣當に知るべし、此は是如來常法を説き、比丘をして正法を修せしめんと欲す。(三) 是の諸の比丘、若能く是の如く隨つて修學せば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。善く如來の微密の藏を知ること、彼の大王者智慧の臣の、善く王の意を知るが如し。善男子、是の如く大王も亦是の如きの密語の法有り。何に況や如來、而も當に無かるべきや。善男子、是の故に如來の微密の教は、知ることを得べきこと難し。唯智者のみ有りて、乃ち能く我が

【七三】次に結。

甚深の佛法を解せん。是世間の凡夫品類の能く信する所に非ざるなり。

復次に善男子、波羅奢樹、迦尼迦樹、阿叔迦樹の、天の亢星に値はば華實を生せず、及び餘

の水陸所生の物、皆悉く枯悴し、潤澤有ること無く、増長すること能はず。一切の諸藥復勢力無き

が如し。善男子、是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。我が滅後に於て

諸の衆生有り。恭敬すること能はず、威徳有ること無し。何を以ての故

に。是の諸の衆生は如來の微密藏を知らざるが故に。所以は何ん。是の衆

生福徳に薄きを以ての故なり。

復次に善男子、如來の正法は將に滅盡せんと欲す。爾の時に多く惡を

行するの比丘有り。如來の微密の藏を知らず、懶墮懈怠にして如來の正法

を讀誦し、宣揚、分別すること能はず。譬へば癡賊の眞寶を棄捨てて草木

を擔負するが如し。如來の微密藏を解せざるが故に。是の經の中に於て懈

怠して勤めず。哀なる哉夫險、當來の世甚だ怖畏すべし。苦なる哉衆生、

勤めて是の大乗典大涅槃經を聽受せず。唯諸の菩薩摩訶薩のみ、能く是

の經に於て眞實義を取りて文字に著せず。隨順して逆はず、衆生の爲に説かん。

復次に善男子、牧牛女の乳を賣りて多利を食らんと欲するが爲の故に、二分の水を加へ、轉賣し

【七四】次に興衰の文。その中初に法衰。之に譬、合の二段あり。

【七五】波羅奢(Paraspari) 赤華と譯す、樹の名。

【七六】迦尼迦(Kanika)。樹の名、又た伽尼迦黎迦(Garhastrikan) 學名 Prema Spinosa

慧琳は月作と譯す。

【七七】阿叔迦(Ashvaka)。無憂と譯す、樹の名。

【七八】次に僧衰。

【七九】次に深識。その中、初に譬。

て餘の牧牛の女人に與ふ。彼の女得已りて復二分を加へ、轉じて復近城の女人に賣與す。彼の女得已りて復二分を加へ、轉じて復城中の女人に賣與す。彼の女得已りて復二分を加へ、市に詣りて之を賣る。時に一人有りて子の爲に婦を納る。急に好乳を須ひて以て賓客に供す。市に至りて買はんと欲するに、是の賣乳の者多く價直を索む。是の人語りて言はく、「此の乳多水實は是に直せず。我今日賓客を瞻待するに値ふ。是の故に當に取るべし。」取り已りて家に還り、用ひ煮て糜を作るに復乳味無し。乳味無しと雖も苦味中に於て猶勝ること十倍なり。何を以ての故に。乳の味たる諸味中の最なればなりの如し。

〔合〕善男子、我涅槃の後、正法未滅の餘八十年、爾の時に是の經、閻浮提

に於て當に廣く流布すべし。是の時に當に諸の惡比丘有らん。是の經を鈔

略し分つて多分と作し、能く正法の色香味を滅すべし。是の諸の惡人、復是の如きの經典を誦讀すと

雖も、如來の深密要義を滅除して世間の莊嚴文飾無義の語を安置す。前を鈔して後に著け、後を鈔して前

に著け、前後を中に著げ、前後に著く。當に知るべし、是の如きの諸の惡比丘は是魔の伴侶なり。一切

不淨の物を受畜して、而も如來、悉く我に畜ふことを聽すと云ふ。牧牛女の多く水を乳に加ふるが如し。

一諸の惡比丘も亦復是の如し。雜ふるに世語を以てし定是の經を錯り、多くの衆生をして正説、正寫、

正取、尊重、讚歎、供養、恭敬を得ざらしむ。是の惡比丘、利養の爲の故に、是の經を廣宣流布する

こと能はず。分流すべき所少くして言ふに足らず。彼の牧牛の貧窮の女人の展轉して乳を賣り、乃至

【八〇】 次以上の七意を合す。



麁を作るに乳味無きが如し。是の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。展轉薄淡にして氣味有ること無し。氣味無しと雖も猶餘經に勝り、超逾すること千倍なり。彼の乳味の諸の苦味に於て其の勝ること千倍なるが如し。何を以ての故に。是の大乗典大涅槃經は聲聞經に於て最も上首と爲す。譬へば牛乳の味中に最勝なるが如し。是の義を以ての故に大涅槃と名く。

復次に善男子、若善男子、善女人等、男子の身を求めざる者有ること無し。何を以ての故に。一切の女人は皆是衆惡の所住の處なり。復次に善男子、蠱蝮水の、此の大地をして潤洽せしむること能はざるが如し。其女人は淫欲の滿たし難きこと

も亦復是の如し。譬へば大地の一切を丸と作して芥子の如くならしむるが如し。是の如き等の男、一女人と共に欲事を爲すに、猶足ること能はず。

假使男子の數恆沙の如き、一女人と共に欲事を爲すも亦復足らず。善男子、

譬へば大海の、一切の天雨、百川の衆流皆悉く歸注すれども、而も大海未だ曾て満足せざるが如し。

女人の法も亦復是の如し。假使一切悉く男子と爲りて一女人と共に欲事を爲すに、而も亦足らず。

復次に善男子、阿叔迦樹、(三)波吒羅樹、迦尼迦樹の春華開敷するに、群蠶色香細味を啖取して厭足を

知らざるが如し。女人の男を欲するも亦復是の如く、厭足を知らず。善男子、是の義を以ての故に

諸の善男子、善女人等、是の大乗大涅槃經を聽かば、常に女人の相を訶責し男子を求むべし。

- 【八二】次に立志を勤む。其中初に勤。而して先づ女身を毀啓す。
- 【八三】波吒羅(バトラー)重葉と譯す、樹の名。
- 【八四】次に男子を定判す。

を以ての故に。是の大乗典は丈夫の相有り、所謂佛性なり。若人是の佛性を知らざれば、則ち男相無し。所以は何ん。自ら佛性有るを知る事能はざるが故なり。若佛性を知ること能はざる者有らば、我説く、是等を名けて女人と爲す。若能く自ら佛有るを知らば、我説く、是の人丈夫と爲す。若女人の能く、自身は定んで佛性有るを知る有らば、當に知るべし、是等は即ち男子と爲す。善男子、是の大乗典大涅槃經は無量無邊不可思議の功德の聚なり。何を以ての故に。如來の祕密藏を説くを以ての故なり。是の故に善男子、善女人、若速かに如來の密藏を知らんと欲せば、應當に方便して此の經を勤修すべし。』

〔八四〕 迦葉、佛に白して言さく、『世尊、是の如く是の如し、佛の所説の如し。』

我今已に丈夫の相有り。如來の微密藏に入ることを得るが故に。如來今日始めて我を覺悟す。是に因つて即ち決定通達を得。佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝今世間の法に隨順して是の説を作す。迦葉、復言さく、『我世間法に隨順せざるなり。』

〔八四〕 次に領解。  
〔八五〕 次に起没を論ず。其中初に没相。之に譬、合の二段あり。

佛、迦葉を讚じたまはく、『善い哉善い哉。汝今知る所の無上の法味は甚深難知、而も能く知ることを得。蓋の味を承るが如く汝も亦是の如し。復次に善男子、蠱子の澤此の大地をして沾洽せしむること能はざるが如し。當來の世に是の經の流布するも亦復是の如し。彼の蠱澤の如く正法滅せんと欲するに、是の經は先に當に此の地に没すべし。當に知るべし、即ち是正法の衰相なり。復次に善男子、

〔八六〕 次に雙べて起没を辨す。

譬へば夏を過ぎて初月を秋と名け、秋雨連降するが如し。此の大乗典大涅槃經も亦復是の如し。彼の南方の諸の菩薩の爲の故に、當に廣く流布し、法雨を降靈して其の處に彌滿すべし。正法滅せんと欲するに、當に 屬賓に至りて具足して缺くること無く、地中に潛没すべし。或は信者有り、或は不信者あり。是の如きの大乗方等經典甘露の法味、悉く地に沒す。是の經沒し已りて一切諸餘の大乗經典皆悉く滅沒す。若是の經具足して缺くこと無きことを得ば、人中の象王 諸の菩薩等、當に知るべし、如來の無上正法、將に滅せんとするに久しからざることを。」

(八六) 爾の時に文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、今此の純陀猶疑心有り。唯願はくは如來、重ねて爲に分別して除斷を得しめよ。」 佛の言はく、

『善男子、云何が疑心、汝當に之を説くべし。當に爲に除斷すべし。』 文殊師利の言さく、『純陀、如來常住を心疑す。佛性を知見することを得るの力を以ての故に。若佛性を見るを而も常と爲す者は、本未見の時は無常なるべし。若本無常ならば後亦爾るべし。何を以ての故に。世間の物本無今有、已有遷無なり。是の如き等の物、悉くは無常なるが如し。是の義を以ての故に、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺差別有ること無し。』

(八七) 爾の時に世尊、即ち偈を説きて言はく、

【八七】 屬賓 (Kashmir) 印度の西北境に在る國の名。西域記に此の國、周七千餘里有りといふ。この地古來佛教の歴史に因縁深し。

【八六】 是より第八三乘無性の問を答ふ。其中初に偈の疑を釋し兼て上の問を遣る。而して先づ文殊純陀の疑を騰ぐ。

【八九】 次に如來説を許す。

【九一】 次に文殊疑を出す。文殊師利は梵語に Manjusree といひ、妙徳と譯す。文殊は、慈悲を司る普賢と對應せる菩薩にして、智慧を司る。釋迦如來の左邊に侍坐せり。

【九二】 次に如來爲めに釋す。

【九三】『本有今無、本無今有、』

三世法有る、是の處有る無し。』

善男子、是の義を以ての故に、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺も亦差別有り亦差別無し。』

文殊師利、讚じて言さく、『善い哉誠に聖言の如し。我今始めて諸佛、菩薩、聲聞、緣覺も亦差別有り亦差別無きを解す。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如く、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺は性差別無しとは、唯願はくは如來、分別、廣説して一切衆生を利益し安樂ならしめたまへ。』

佛の言はく、『善男子、諦かに聽け諦かに聽け。當に汝が爲に説くべし。譬へば長者の多く乳牛を畜へて種種の色有り、常に一人をして守護、將養せしむ。是の人時有りて、祠祀の爲の故に、盡く諸牛を殺りて一器の中に著く。諸の牛乳を見るに同一白色なり。』

尋で便ち驚怪すらく、『牛の色各異り、其の乳云何ぞ皆同一色なる。』是の人思惟して、此の一切皆是衆生の業報、因縁、乳色をして一ならしむと知るが如し。』

善男子、聲聞、緣覺、菩薩も亦爾なり。同一佛性なること猶し彼の乳の如し。所以は何ん。同じく漏を盡すが故なり。而して諸の衆生、佛、菩薩、聲聞、緣覺、而も差別有りと言ふ。諸

【九三】 本有今無。この偈は本經中前後四回出づ、一には本文、二には梵行品、三には二十五、四には二十六これなり。

【九四】 次に文殊師利讚す。

【九五】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【九六】 次に答の文。その中初に聞經信見を譬ふ。而して先づ譬。之に衆生同じく佛性有るを譬ふ、疑を致すを譬ふ、解悟を譬ふの三段あり。

【九七】 次に合譬。之に同一佛性に合す、疑を致すに合す、解悟に合すの三段あり。

【九八】 此の偈は本經中前後四回出づ、一には本文、二には梵行品、三には二十五、四には二十六これなり。

【九九】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【一〇〇】 次に文殊師利讚す。

【一〇一】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【一〇二】 次に文殊師利讚す。

【一〇三】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【一〇四】 次に文殊師利讚す。

【一〇五】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【一〇六】 次に文殊師利讚す。

【一〇七】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

【一〇八】 次に文殊師利讚す。

【一〇九】 次に迦葉の論議。正しく上の問を答ふ。その中初に無差別を論じ、而して先づ問の文。

の聲聞、凡夫の人、三乗云何ぞ別無けんと疑ふ。是の諸の衆生、久しうして後自ら一切三乗同一佛性なるを解す。猶し彼の人の乳相、業因縁に由るを解悟するが如し。復次に善男子、譬へば金礦の滓穢を陶鍊し、然して後銷融して金と成すの後、價直無量なるが如し。善男子、聲聞、緣覺、菩薩も亦爾なり。皆同一の佛性を成就することを得。何を以ての故に。煩惱を除くが故なり。彼の金礦の諸の滓穢を除くが如し。是の義を以ての故に。一切衆生同一佛性にして差別有ること無し。其先に如來の密藏を聞くを以て、後成佛する時、自然に知ることを得。彼の長者の乳の一相を知るが如し。何を以ての故に。無量億の煩惱を斷するを以ての故なり。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若一切衆生に佛性有らば、佛と衆生と何の差別か有る。是の如く説かば、多く過咎有らん。若諸の衆生に皆佛性有らば、何の因縁の故に、舍利弗等は小涅槃を以て、而も般涅槃し、緣覺の人は中涅槃に於て、而も般涅槃し、菩薩の人は大涅槃に於て、而も般涅槃する。是の如き等の衆人若佛性を同じうせば、何が故ぞ如來の涅槃に同じうして、而も般涅槃せざる。」善男子、諸佛世尊の所得の涅槃は、諸の聲聞、緣覺の所得に非ず。是の義を以ての故に、大般涅槃を名けて善有と爲す。世若佛無くば、二乘の

【九七】次に分明證見を譬ふ。之に譬、合の二段あり。  
 【九八】次に有差別を論ず。之に兩番の問答あり。今は第一番の問答。  
 【九九】●涅槃 (Nirvāṇa)。二乘の涅槃に二種の別あり、肉體を存しつゝ滅するを有餘依 (Sopādhiśāra) といひ、生死の因なく果のみあるゆゑかくいふ。肉體までも滅したるを無餘依 (Anupādhiśāra) といふ、生死の因果跡に無きが故にかく云ふ。

きに非ず。』

迦葉、復言さく、『是の義云何ん。』佛の言はく、『無量無邊阿僧祇劫に乃ち一佛有り、世に出現して三乘を開示す。善男子、汝が所言の如く菩薩、二乘無差別とは、我先に此の如來密藏大涅槃の中に於て、已に其の義を説く。諸の阿羅漢は善有ること無し。何を以ての故に。諸の阿羅漢は、悉く當に是の大涅槃を得べきが故に。是の義を以ての故に、大般涅槃畢竟樂有り。是の故に名けて大般涅槃と爲す。』

迦葉の言さく、『佛説の如きは、我今始めて差別の義、無差別の義を知る。何を以ての故に。一切の菩薩、聲聞、緣覺は、未來の世に、皆當に大般涅槃に歸すべし。譬へば衆流の大海に歸するが如し。是の故に聲聞、緣覺の人は悉く名けて、常にしては無常に非ずと爲す。是の義を以ての故に、亦差別有り亦差別無し。』

迦葉の言さく、『云何が性差別なる。』佛の言はく、『善男子、聲聞は乳の如く、緣覺は酪の如く、菩薩の人は生熟酥の如く、諸佛世尊は猶し醍醐の如し。是の義を以ての故に、大涅槃の中、四種の性は而も差別有りと説く。』

迦葉、復言さく、『一切衆生の性相云何。』佛の言はく、『善男子、牛新生して乳血未だ別たざるが

【一〇】次に第二番の問答。  
【一一】次に雙べて二義を領す。  
【一二】次に重ねて有差を論ず。  
之に三番の問答あり。今は第一番の問答。  
【一三】次に第二番の問答。

如し。凡夫の性の諸の煩惱を離ふるも亦復是の如し。』

〔四〕 迦葉、復言さく、〔五〕 拘尸那城に 旃陀羅有りて名を歡喜と曰ふ。佛、是の人一たび發心する

に由りて、當に此の界千佛數の中に於て、速かに無上正眞の道を成すべしと記す。何等を以ての故に、  
如來、尊者 舍利弗、 目犍連等速かに佛道

を成すと記せざる。一佛の言はく、「善男子、或は  
聲聞、緣覺、菩薩、誓願を作して言ふ有り、我

當に久久正法を護持して、然して後乃ち無上佛  
道を成すべし」と。速願を發すを以ての故に速

記を與ふ。復次に善男子、譬へば商人に無價の  
寶有り、市に詣りて之を賣るに、愚人見已り識ら

ずして輕笑す。寶主唱へて言はく、「我が此の寶  
珠價直無數」と。聞き已りて復笑ふ。各各此眞

寶に非ずして是 頗梨珠と相謂はんが如し。

善男子、聲聞、緣覺も亦復是の如し。若速記を聞かば則便懈怠し輕笑、薄賤せん。彼の愚人の眞寶を

識らざるが如し。未來世に於て諸の比丘有り。精勤して善法を修習すること能はず。貧窮、困苦して

〔四〕 次に第三番の間答。

〔五〕 拘尸那城。具さに拘尸那

揭羅 (Kushinara) 城といふ。摩

訶陀國の舊都なり、釋尊の入

滅地として知らる。

〔六〕 旃陀羅 (Chandala) 層

者と譯す、印度四姓の外にあ

りて賤業に従事せるもの名

なり。

〔七〕 舍利弗 (Sariputra) 舍

利と名くる母の子の義なり。

彼の出家は或時馬勝比丘より

因緣所生法等の法身偈を聞く

に動機すと云ふ。釋尊の弟子

となりて舍利弗は智慧第一と

稱せられ、目連の神通第一な

ると併稱せらるるに至れり。

釋尊の右邊に侍す。

〔八〕 目犍連は、具さに摩訶目

健連 (Mahāaudgilyana)

といふ、大讚誦と譯す。初め

六師の外道なりしが馬勝に従

ひ、舍利弗と共に佛門に入る。

釋尊の左邊に侍し、神通第一

と稱せらる。

〔九〕 頗梨 (Parijata) 譯して

水晶と云ふ、之に紫、白、紅、碧

の四色の別あり。

飢渴に逼らる。是に因りて出家して其の身を長養す。心志輕躁に邪命、諂曲なり。若如來、諸の聲聞に速疾の記を授くるを聞かば、便ち當に大いに笑ひて輕慢、毀譽すべし。當に知るべし、是等は即ち是破戒なり。自ら已に過人の法を得と言ふ。是の義を以ての故に、速顯を發すに隨ひて故らに速記を與へ、護正法者には爲に遠記を授く。

〔二〇〕 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、菩薩云何が當に不壞眷屬を得べき。』佛、迦葉に告げたまはく、『若諸の菩薩、勤めて精進を加へ

て正法を護らんと欲す。是の因縁を以て、所得の眷屬沮壞すべからず。』

〔二一〕 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、伺の因縁の故に、衆生此の唇口乾焦を得る。』佛、迦葉に告げたまはく、『若三寶の常に存するを識らざ

る有らば、是の因縁を以て唇口乾焦す。人口爽ひて甜、苦、辛、酢、鹹、淡の六味の差別を知らざるが如し。一切衆生愚癡無智にして、三寶の是長へに

存するの法を識らず。是の故に名けて唇口乾焦と爲す。〔二四〕 復次に善男子、若衆生、如來是常住を知らざる者有らば、當に知るべし、是の人は則ち生盲と爲す。若如來是常住を知らば、是の如きの人は

肉眼有りとも雖も、我説きて、是等を名けて天眼と爲す。復次に善男子、若能く如來是常を知る有らば當に知るべし、是の人は久しく已に是の如きの經典を修習す。我説きて、是等も亦天眼と名く。天眼

〔二〇〕 次に第九不壞衆の間に答ふ。其中初に問。

〔二一〕 次に答。

〔二二〕 次に第十眼目尊の間に答ふ。其中初に問。

〔二三〕 次に答。其中初に口爽を答ふ。

〔二四〕 次に生盲を答ふ。



有りと雖も、而も如來是常を知ること能はざれば、我説きて、斯等を名けて肉眼と爲す。是の人乃至自身の手足、支節を識らざるも亦復他をして識知せしむること能はず。是の義を以ての故に、名けて肉眼と爲す。

〔二五〕次に第十一多頭の間に答ふ。

復次に善男子、如來常に一切衆生の爲に、而も父母と作る。所以は何ん。一切衆生種種の形類は、二足、四足、多足、無足なり。佛、一音を以て而も爲に法を説くに、彼彼の異類各各解を得、悉く皆歎じて言さく、

「如來、今日我が爲に法を説きたまふ」と。是の義を以ての故に、名けて父母と爲す。

〔二六〕次に第十二如初の間に答ふ。

復次に善男子、人子を生じ、始めて十六月にして復語言すと雖も、未だ解了すべからず。而も彼の父母其に語を教へんと欲するに、先其の音を同じうして漸漸に之を教ふるが如し。是の父母の語不正なるべきや。』

『不なり世尊。』善男子、諸佛如來も亦復是の如し。諸の衆生の種種の音聲に隨ひて、而も爲に法を説く。佛の正法に安住せしむるが爲の故に、見るべき所に隨ひて而も爲に種種の形像を呈現す。如來是の如く彼の語言を同じうす、不正なるべきや。』

『不なり世尊。』何を以ての故に。如來の所説は師子吼の如し。世間種種の音聲に隨順して、而も衆生の爲に妙法を歎説す。』

卷の第十

一切大衆所問品第十七

爾の時に世尊、其の面門より種種の色、青、黄、赤、白、紅、紫の光明を放ちて純陀が身を照す。純陀遇ひ已りて、諸の眷屬と諸の肴饌を持ちて疾く佛所に往き、如來及び比丘僧に奉り、最後の供養を欲す。種種の器物充滿具足して、持ちて佛所に至る。爾の時に大威徳天人有り。而も其の前に遮り、周匝圍繞して純陀に謂つて言はく、「且く止みね純陀、便ち奉施すること勿れ。」爾の時に如來、復無量無邊の種種の光明を放ちたまふ。諸天大衆斯の光に遇ひ已りて、尋で純陀の前みて佛所に至り、其の所施を奉るを聽す。爾の時に天人、及び諸の衆生、各各自ら所齎の供養を持ちて佛前に至り、長跪して佛に白さく、「唯願はくは如來、諸の比丘の此の供養を受くるを聽したまへ。」時に諸の比丘、是時なるを知るが故に、衣鉢を執持して一心安詳にす。

【一】この品大段二あり、初に次第に問を答へ、次に歡喜領解なり。初の中また、四段に分る。先づ初に示現涅槃、兼て人天魔道の二問を答ふ。其中初に大衆供を奉る。而して先づ緣起の文、これに放光、奉獻、人天遮、重放光、奉供の五段あり。示現涅槃とは河西の道朗の曰く、これに三種あり、言說示現と神通示現（放光現瑞）と即事示現（香木酥油最後の食を受くるを云ふ）となりと。

【二】次に獻供の文、その中初に大衆の供。之に大衆の供、比丘衣鉢を持すの二段あり。

爾の時に純陀、佛及び僧の爲に種種の師子の寶座を布置し、繪幡蓋を懸け、香華、瓔珞(を供ふ)。爾の時に三千大千世界、莊嚴微妙なること猶し西方の安樂國土の如し。爾の時に純陀、佛前に住して憂悲悵快し、重ねて佛に白して言さく、「唯願はくは如來、猶哀憫せられて住壽一劫、若は減一劫したまへ。」佛、純陀に告げたまはく、「汝、我をして久しく世に住せしめんと欲せば、當に速かに最後具足の檀波羅蜜を奉すべし。爾の時に一切の菩薩摩訶薩、天人、雜類、異口同音に是の如きの言を唱ふ、奇なる哉純陀、大福德を成ず。能く如來をして其の最後無上の供養を受けしむ。我等無福にして所設の供具則ち唐捐と爲す。

爾の時に世尊、一切の衆望を満足せしめんと欲して、自ら身上の一一の毛孔に於て無量の佛を化す。一一の諸佛各無量の諸の比丘僧有り。是の諸の世尊及び無量の衆、悉く皆其の供養を受くるを示現す。釋迦如來自ら純陀の奉設する所の者を受けたまふ。爾の時に純陀、持する所の糠糧成熟の食、摩伽陀國満足の八斛、佛の神力を以て皆悉く一切の大會に充足す。爾の時に純陀、是の事を見已りて心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。一切大衆も亦復是の如し。

爾の時に大衆、佛の聖旨を承けて、各是の念を作さく、「如來、今已に我等の施を受けたまふ。久

- 【三】次に純陀の供之に辨供、變土、悲講、禪堂の四段あり。
- 【四】檀波羅蜜 (Tan-pāramī) 布施對彼岸と譯す、六度中の隨一。
- 【五】次に如來供を受く。其中初に大衆の供を受く。
- 【六】次に純陀の供を受く。
- 【七】摩伽陀 (Māgadhā) 善勝、無害等と譯す、中印度の國名。有名なる王舍城はこの國に在り。
- 【八】次に大衆の興會相容。

しからずして必ず當に涅槃に入りたまふべし。』是の念を作し已りて心に悲喜を生ず。爾の時に樹林、其の地陬小なり。佛神力を以て針鋒の如きの處に、皆無量の諸佛世尊及び其の眷屬有りて、等しく坐して食す。所食の物も亦差別無し。是の時に天人、阿脩羅等、啼泣悲歎して是の言を作さく、『如來今日已に我等が最後の供養を受けたまひ、供養を受け已りて當に般涅槃したまふべし。我等當に復更に誰をか供養すべき。我今永く無上調御を離れ、盲ひて眼目無し。』

【一〇】 爾の時に世尊、一切大衆を安慰せんと欲するが爲に偈を説きて言ひく、

『汝等悲歎すること莫れ、諸佛の法爾るべし、

我涅槃に入る、已に無量劫を経たり、

常に最勝樂を受け、永く安隱の處に處す、

汝今至心に聽け、我當に涅槃を説くべし、

我已に食想を離れ、終に飢渴の患無し、

今當に汝等が爲に、其の隨順願を説きて、

諸の一切衆生をして、咸く安隱樂を得しむべし、

汝聞きて、諸佛の法常住を修行すべし、

【一一】 假使鳥と梟と、同じく共に一樹に棲みて、

【九】 次に大衆の悲歎。

【一〇】 是より知法性受於法樂を答ふ。其中初に正しく問を答へ、而して先づ知法性の問を答ふ。之に又二段ありて初に法性を知るの文。其中初に悲を止め聽を識む。

【一一】 次に正しく法性を辨ず。其中初に法性の理の文。之に二二相對する六變あり。

猶親兄弟の如くせば、爾して乃ち永く涅槃せん、

如來一切を觀ること、猶し羅睺羅の如し、

常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん、

假使蛇鼠狼、同じく一穴に處して、

相愛すること兄弟の如くんば、爾して乃ち永く涅槃せん、

如來一切を觀ること、猶し羅睺羅の如し、

常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん、

假使 七葉華の、轉じて 婆伽香と爲り、

迦留鎖頭と爲らば、爾して乃ち永く涅槃せん、

如來一切を觀ること、猶し羅睺羅の如し、

云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん、

假使一闍提の、現身に佛道を成じ、

永く第一樂に處せば、爾して乃ち涅槃に入らん、

如來一切を觀ること、皆羅睺羅の如し、

云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん、

【三】七葉華。植物の名。

【二】婆伽。具さには婆伽迦

(パールシカ) 雨時、夏生と譯

する香木なり。

【一】迦留鎖頭。安註に曰く、

迦留は毒樹、鎖頭は甘葉なり

と。

假使一切衆の、一時に佛道を成じ、

諸の過患を遠離せば、爾して乃ち涅槃に入らん。

如來一切を視ること、皆羅睺羅の如し、

云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん、

假使蠱蚘水の、大地を浸壞し、

川谷海に盈滿せば、爾して乃ち涅槃に入らん。

悲心に一切を視ること、皆羅睺羅の如し、

常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん。

【五】是を以ての故に汝等、深く正法を樂ふべし、

憂惱を生じ、號泣して啼哭すべからず、

【六】若自ら正行せんと欲せば、如來常を修すべし、

當に是の如きの法の、長存して變易せざるを觀すべし、

復是の念を生ずべし、三寶皆常住、

是則ち大護を獲、枯を呪して果を生ずるが如し、

是を名けて三寶と爲す、四衆善く聽くべし、

【五】次に總結して悲を止む。

【六】次に修習を結勸す。

聞き已らば歡喜して、即ち菩提心を發す、

若能く三寶、常住にして冥諦に同じきを計せば、

此則ち是、諸佛の最上の誓願なり。」

〔七〕若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の能く如來の最上誓願を以て、而も發願する者有らば、當

に知るべし、是の人は愚癡有ること無く、供養を受くるに堪ふ。此の願力

を以て、功德果報世に於て最勝なること阿羅漢の如く、若是の如く三寶常

を觀了すること能はざる者有らば、是旃陀羅なり。若能く三法常住を知る

有らば、實法の因縁苦を離れて安樂なり。燒害して能く留難する者有ること

と無し。」

〔八〕爾の時に人天、大衆、阿栞羅等、是の法を聞き已りて、心に歡喜を生

じて踊躍すること無量なり。其の心調柔して善く諸蓋を滅し、心に高下無

く、威徳清淨なり。顏貌怡悦して佛の常住を知る。〔九〕是の故に諸天の供養を施設し、種種の華を散

じ、末香、塗香(を用ひ)、天の伎樂を鼓して、以て佛に供養したてまつる。

〔一〇〕爾の時に佛、迦葉菩薩に告げて言はく、『善男子、汝是の衆の希有の事を見るや否や。迦葉、答へ

て言さく、『已に見たてまつる。世尊、諸の如來無量無邊稱計すべからず。諸の大衆、人天の奉る所の

〔七〕 次に得失を褒貶す。

〔八〕 次に受法樂を答ふ。其中 初に法樂を受く。

〔九〕 次に供養を伸ぶ。

〔一〇〕 次に領瑞結成の文。其の 中初に迦葉を命じて領ぜしむ。之に命、領、功を推すは佛に在り、菩薩能く知るを推すの四段あり。

飯食の供養を受けたまふを見たてまつる。又諸佛の大神莊嚴、所坐の處一針鋒の如きに、多衆圍繞して相障閣せざるを見、復大衆の悉く誓願を發して十三偈を説くを見、亦大衆各心に念じて、如來今者獨我が供を受けたまふ」と言ふを知る。假使純陀の奉る所の飯食を、碎きて微塵の如くにし、一塵一佛すとも、猶周徧せず。佛の神力を以て、悉く皆一切大衆に充足す。唯諸の菩薩摩訶薩、文殊師利法王子等、能く如來の希有の事を知るのみ。悉く是如來の方便示現なり。聲聞大衆及び阿脩羅等は皆如來は是常住法なるを知る。」

爾の時に世尊、純陀に告げて言はく、「汝今見る所、是希有奇特の事と爲んや不や。」實に爾なり世尊、我先に見る所の無量の諸佛は、三十二相、八十種好其の身を莊嚴す。今悉く菩薩摩訶薩爲り、巨身殊異にして顔貌無比なるを見る。唯佛身は、譬へば藥樹の如し。諸の菩薩摩訶薩等に圍繞せらるるを見たてまつる。」

【三】次に純陀を命じて領ぜしむ。之に命、領、佛重ねて結す、迦葉隨喜すの四段あり。

佛、純陀に告げたまはく、「汝先に見る所の無量の佛は、是我が化する所なり。一切衆生を利益して歡喜を得しめんと欲するが爲に、是の如きの菩薩摩訶薩等、修行すべき所思議すべからず。能く無量の諸佛の事を作す。純陀、汝今皆已に菩薩摩訶薩の行を成就し、十住地の菩薩の所行具し成辦することを得。」迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の如く是の如し。佛の所説の如し。純陀の修成する所の菩薩の行は、我も亦隨喜す。今者如來、未來の無量の衆生の爲に大明を作さんと欲するが故に、



是の大乗大涅槃經を説きたまふ。

【三】世尊、一切の契經は、説餘義有りや餘義無きや。『善男子、我が所説は亦餘義有り、亦餘義無し。』

純陀、佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如く、』

『所有の物、一切に布施す、』

唯讚歎すべし、毀損すべきこと無し。』

世尊、是の義云何。持戒、毀戒何の差別有りや。佛の言はく、『唯一人を』

除きて、餘の一切に施す。皆讚歎すべし。』純陀、問ひて言さく、『云何が』

名けて唯除一人と爲す。』佛の言はく、『此の經の中、説く所の破戒の如し。』

純陀、復言さく、『我今未だ解せず、唯願はくは之を説きたまへ。』佛、純陀に告げて言はく、『破戒とは一闍提を謂ふ。其餘の在所一切の布施は、皆讚歎すべし、大果報を獲。』

純陀、復問はく、『一闍提とは其の義云何。』

佛、純陀に告げたまはく、『若比丘及び比丘尼、優婆塞、優婆夷、麤惡言を發して正法を誹謗し、是の重業を造りて永く改悔せず、心に慚愧無き有らば』

是の如き等の人は、名けて一闍提の道に趣向すと爲す。』

若四重を犯し五逆罪を作り、自ら定んで』

【三】 是より演説秘密、及び遠離一切病、得近無上道の三問を答ふ。其中初に略して問答す。

【二】 次に廣く七偈を出す。其中初に純陀の請問の文。其中の中又先づ闍提を簡ぶ。之に四番の問答あり。今は初番の問答。

【一】 次に第二番の問答。

【二】 次に第三番の問答。

【三】 次に第四番の問答。其中初に問。

【四】 次に答。其中初に謗法に約す。

【五】 次に重逆に約す。

【六】 次に重逆に約す。

【七】 次に重逆に約す。

【八】 次に重逆に約す。

の如き重事を犯すを知りて、而も心初て怖畏、慚愧無く、宥て發露せず。佛の正法に於て永く護持建立の心無し。毀譽輕賤して多くの過咎を言ふ。是の如き等の人も亦一闍提の道に趣向すと名づく。唯此の如きの一闍提の輩を除きて、其餘の者に施すは一切讚歎す。』

爾の時に純陀、復佛に白して言さく、「世尊、言ふ所の破戒、其の義云何。」佛、純陀に告げたまはく、「若四重を犯し、及び五逆罪、正法を誹謗す。是の如き等の人を名けて破戒と爲す。』

純陀、復問はく、「是の如き破戒は拔濟すべきや不や。」佛、純陀に告

げたまはく、「因縁有るが故に、則ち拔濟すべし。若法服を被て猶未だ捨遠せず。其の心常に慚愧、恐怖を懷く。而も自ら考責す。咄い哉何爲ぞ、斯の重罪を犯せる。何ぞ其怪しい哉。斯の苦業を造り、深く自ら改悔す。護

法の心を生じて正法を建てんと欲す。護法者有らば、我當に供養すべし。若大乘典を讀誦する者有らば、我當に咨問して受持、讀誦すべし。既に通利し已らば、復當に他の爲に分別して廣く説くべし。我説く、是の人は破戒と名けず。一何を以ての故に。善男子、譬へば日出づれば、能く一切の塵翳闇冥を除くが如し。是の大涅槃微妙の經典の世に出興するも亦復是の如し。能く衆生の無量劫の中に所作の

- 【一〇】 次に因果を撥無するに約す。
- 【一一】 次に三罪人を取る。其中に略して三相を出す。
- 【一二】 次に三罪滅すべきを廣く其中初に問。
- 【一三】 次に答。其中初に護法を滅す。
- 【一四】 次に護法を護するを釋す。之に譬、合、結の三段あり。

衆罪を除く。是の故に「此の經、正法を獲れば大果報を得、破戒を拔濟す」と説く。若是の正法を毀謗する者は能く自ら改悔し、還つて法に歸する有らば、自ら念ず、「所作一切の不善、人の自ら害するが如し。心恐怖を生じ、驚懼慚愧す。此の正法を除きて更に救護無けん。是の故に應當に正法に還歸すべし。」若能く是の如く如説に歸依せん。是の人に布施せば、福を得ること無量なり。亦世間に供養を受くべしと名く。若上の如きの惡業の罪を犯して、若は一月を經、或は十五日、歸依發露の心を生ぜざらん。若是の人に施さば果報甚だ少し。五逆を犯す者も亦復是の如し。能く悔心を生じ、内に慚愧を懷く。今我が所作不善の業、甚だ大苦爲り。我當に正法を建立し護持すべし。是則ち五逆罪と名けざるなり。若是の人に施さば、福を得ること無量なり。逆罪を犯し已りて、護法歸依の心を生せず。是に施す者有らば、福言ふに足らず。

【三】 又善男子、重罪を犯す者、汝今諦かに聽け。我當に汝が爲に分別して廣く説くべし。是の心を生ずべし、「正法と謂ふは即ち是如來微密の藏なり。是の故に我當に護持し建立すべし」と。是の人に施す者は勝果報を得。善男子、譬へば女人の懷妊し、産するに垂んとして國の荒亂に値ひ、遠く他土に至り、一天廟に在りて即便産育す。後舊邦の安隱豐熟を聞きて其の子を攜持して本土に還らんと欲す。路恆河を經るに水長暴急なり。是の兒を荷負して度ることを得ること能はず。即ち自ら念言す

【三】 次に正しく惡識の文。

【五】 次に三罪人を取る意を釋す。其中初に法の文。

【三六】 次に譬の文。これに未生一解、已生解、護法、果報の四段あり。

らく、我寧ろ子と一處に命を并すとも、終に捨棄して獨濟らざるなり。是の念を作し已りて子と俱に没す。命終の後尋で天中に生ず。子を慈念して度を得しめんと欲するを以てなり。而も是の女人本性弊惡、子を愛するを以ての故に天中に生ずることを得るが如し。犯四重禁、五無間罪の護法心を生ずるも亦復是の如し。復先に不善の業を爲すと雖も、護法を以ての故に世間の無上福田と爲ることを得。是の護法者は、是の如き等の無量の果報有り。」

【二六】 純陀、復言さく、「世尊、若一闍提の能く自ら改悔して三寶を恭敬、供

養し讚歎せん。是の如きの人に施すは大果報を得んや不や。」佛の言はく、「善男子、汝今是の如きの説を作すべからず。善男子、譬へば人有りて

菴羅果を食し、核を吐きて地に置き、而も復念じて言はく、「是の果核の中甘味有るべし。」即便還取りて破りて之を嘗むるに、其の味極めて苦く、心に悔恨を生ず。果種を失ふことを恐れて即ち還收拾して之を地に植ゑ、勤めて修治を加ふ。酥油乳を以て時に隨ひて澆灌するが如し。意に於て云何。寧ろ生すべきや不や。」

『不なり世尊、假使天、無上の甘雨を降すとも猶亦生ぜじ。』善男子、彼の一闍提も亦復是の如し。善根を燒滅す。當に何の所に於てか而も罪を除くことを得べき。善男子、若善心を生ぜば、是則ち一闍提と名げざるなり。善男子、是の義を以ての故に、一切施す所の所得の果報差別無きに非ず。何

【二七】 次に譬を合す。文の中五無間罪は五逆罪と云ふと同じ。

【二八】 次に闍提を挿ぶを釋す。其中初に問。

【二九】 次に答り之に、譬、合の二段あり。

【三〇】 次に偈の意を結す。

を以ての故に。諸の聲聞に施す所得の報異、<sup>〔二〕</sup>辟支佛に施す得報も亦異なり。唯如來に施すのみ無上の果を獲。是の故に説きて「一切の所施差別無きに非ず」と云ふ。」

純陀、復言さく、「何が故ぞ如來而も此の偈を説きたまふ。佛、純陀に告げたまはく、因縁有るが故に我此の偈を説く。王舍城の中に優婆塞有り、心に淨信無くして尼韃に奉事す。而も來りて我に布施の義を問ふ。是の因縁を以ての故に斯の偈を説く。亦菩薩摩訶薩等の爲に祕藏の義を説く。斯の偈の如きは其の義云何。一切とは少分の一切なり。當に知るべし、菩薩摩訶薩は人中の雄なり。持戒を攝取して其の所須を施し、破戒を捨棄して穢穢を除くが如くす。<sup>〔三〕</sup>復次に善男子、我が昔日所説の偈に言へるが如し、

「一切の江河、必ず回曲有り、

一切の叢林、必ず樹木と名く、

一切の女人、必ず諂曲を懷く、

一切の自在、必ず安樂を受く。」

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩、即ち座より起ち、偏に右臂を袒にし、右膝を地に著け、前みて佛足を禮し偈を説きて言さく、

〔一〕 辟支佛 (Pratyekabuddha)。  
緣覺と譯す。十二因縁、飛花落葉を觀じて成佛す、故に名を得。無佛の世に出てて、自ら成佛す、故に又獨覺と稱す。之に二種あり、團體にて行ずる部行と、單獨にて行ずる麟喻となり。

〔二〕 次に偈の緣起の文。

〔三〕 次に佛自ら偈頌す。これに三段ありて初に佛偈を頌す。

〔四〕 次に文殊其偈を反質す。

「一切の河、必ず回曲有るに非ず、

一切の林、悉く樹木と名くるに非ず、

一切の女、必ず諂曲を懐くに非ず、

一切の自在、必ずしも樂を受くるに非ず。」

佛、所説の偈其の義餘有り。唯哀憫を垂れて其の因縁を説きたまへ。何

を以ての故に。世尊、此の三千大千世界に於て、洲有りて、拘耶尼と名

く。其の洲河有り、端直にして曲らず、娑婆耶と名く。猶し直繩の如くに

して西海に入る。是の如きの河相、餘經の中に於て佛未曾て説きたまは

ず。唯願はくは如來、此の 方等阿含經の中に因りて有餘義を説き、我

の菩薩をして深く信じて之を解せしめたまへ。世尊、譬へば人有りて先に

金鏹を識り、後に金を識らしむるが如し。如來も亦爾なり。盡く法を知り已

りて、而も演説する所餘有りて盡きず。如來是の如きの餘説を作すと雖も

應當に方便して其の意趣を解すべし。一切の叢林必ず是樹木、是亦餘有り。何を以ての故に。種種の

金、銀、瑠璃、寶樹、是亦林と名く。一切の女人必懷諂曲とは是亦餘有り。何を以ての故に。亦女

人善く禁戒を持し、功德成就し、大慈悲の有る有り。一切自在必受安樂とは是亦餘有り。何を以ての

【四三】 拘耶尼(ゴデーニーヤ) 牛貨

と譯す、須彌山の西方に位す

る世界の名、四大洲の一。

【四四】 方等阿含經。阿含(アヘー

カ)は法歸と譯す、小乘經の

總名、方等阿含に就て安註に

曰く、阿含小と大とに通ず、

小には直ちに阿含と云ひ、大

には方等を加ふと。

【四五】 瑠璃(ルビー) 遠山寶

と譯す、青色の寶石にして、七

寶の一。

故に、有自在者は轉輪聖帝なり。如來法王は死魔に屬せず、滅盡すべからず。梵釋諸天は自在を得と雖も悉くは無常なり。若常住にして變易無きを得る者は、乃ち自在と名く。所謂大乘大涅槃なり。」

佛の言はく、「善男子、汝今善く樂説の辯を得。且く止めて諦かに聽け。文殊師利、譬へば長者の身病苦に嬰るに、良醫之を診して爲に膏藥を合す。是の時病者貪欲にして多服す。醫之に語りて「若能く消せば則ち意に隨ふべし。汝今體羸ふ、多服すべからず。」當に知るべし、是の膏も亦甘露と名け、亦毒藥と名く。若多く服して消せざれば、則ち名けて毒と爲ると言ふが如し。善男子、汝今是の醫の所説義理に違し、膏勢を損失すと謂ふこと勿れ。善男子、如來も亦爾なり。諸の國王、后妃、太子、王子、大臣の爲にす。波斯匿王の王子、后妃、憍慢の心に因るが故に、調伏を欲するが爲に恐怖を示現す。彼の良醫の如きには故に此の偈を説く、

「一切の江河、必ず回曲有り、

一切の叢林、必ず樹木と名く、

一切の女人、必ず諂曲を懷く、

一切の自在、必ず安樂を受く。」

文殊師利、汝今當に知るべし、如來の所説は漏失有ること無し。此の大地の如きは反覆せしむべきも如來の言は終に漏失無し。是の義を以ての故に、如來の所説は一切有餘なり。爾の時に佛、文殊師利を

【四八】次に如來爲に解釋す。

讚じたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝已に久しく是の如きの義を知る。一切を哀憫し、衆生をして智慧を得しめんと欲するが故に、廣く如來に是の如きの偈義を問ふ。』

爾の時に文殊師利 法王子復佛前に於て偈を説きて言さく、

『他の語言に於て、隨順して逆はず、

亦他の、作と及び不作とを觀ず、

但自ら身の、善不善行を觀ず。』

『世尊、是の如く此の法藥を説くも正説と爲すに非ず。他の語言に於て隨順して逆はずとは、唯願はくは如來、哀みを垂れて正説したまへ。何を以ての故に。世尊、常に説きたまはく、一切外學の九十五種は皆惡道に趣き聲聞の弟子皆正路に向ふ。若し禁戒を護り、威儀を攝持し、諸根を守慎す。是の如き等の人は深く大法を樂ひ、善道に趣向す。』如來何が故ぞ、九部の中に於て毀他有るを見れば則便訶責したまふ。是の如きの偈の義何の所趣と爲んや。』佛、文殊師利に告げたまはく、『善男子、我此の偈を説く、亦盡く一切衆生の爲にせず。爾の時に唯阿闍世王の爲にす。諸佛世尊、若因縁無ければ終に逆へ説かず。因縁有るが故に乃ち之を説くのみに。善男子、阿闍世王、其の父を害し已りて我が所に來至し、我を析伏せんと欲して是の如きの問を作さく、云何が世尊、是一切智なりや、一切智に

【四九】 次に文殊重ねて難す。其中初に難す。

【五〇】 法王子 (Dharmarajaputra) 法王は佛陀なり、菩薩は佛陀の教法を所依とするより菩薩を以て法王子と名く。

【五一】 次に佛の答。



非ずや。若一切智ならば、調達往昔無量世の中、常に悪心を懐き、如來に隨逐して逆害を爲さんと欲す。云何を如來、其が出家を聽す」と。善男子、是の因縁を以て我是の王の爲に而も此の偈を説く、

「他の語言に於て、隨順して逆はず、

亦他の、作と以び不作とを觀せず、

但だ自ら身の、善不善行を觀せず。」

佛、大王に告げたまはく、「汝今父を害し、已に逆事を作る、最重無間なり。應當に發露して以て清淨を求むべし。何に緣りてか、乃ち更に他の過咎を見る。」善男子、是の義を以ての故に、我彼の王の爲に是の偈を説く。復次に善男子、亦禁戒を護持して毀たず、威儀を成就し、他の過を見る者の爲に是の偈を説く。若復人有りて、他の教誨を受けて衆惡を遠離し、復他人を教へて衆惡を遠けしむ。是の如きの人は、則ち我が弟子なり。」

爾の時に世尊、文殊師利の爲に復偈を説きて言はく、

『一切刀杖を畏れ、壽命を愛せざる無し、

己を恕して譬を爲すべし、殺すこと勿れ杖を行ふこと勿れ。』

爾の時に文殊師利、復佛前に於て偈を説きて言さく、

【五二】次に佛復偈頌す。之に三段あり。其中初に佛の偈の文。  
【五三】次に文殊疑ふ。

『一切杖を畏るるに非ず、一切命を愛するに非ず、

己を恕して譬を爲すべし、勤めて善方便を作せ。』

『如來是の法句の義を説きたまふ、亦是未盡なり。何を以ての故に。阿羅漢、轉輪聖王、玉女、象馬、

主藏、大臣の如き、若諸の天人及び阿脩羅、利劍を執持して能く之を害する者、是の處有ること

無し。勇士、烈女、馬王、獸王、持戒の比丘、復對ひ至ると雖も、而も恐怖せず。是の義を以ての故

に、如來の説偈も亦是有餘なり。若恕己可爲譬と言はば、是亦有餘なり。何を以ての故に。若羅漢を

して、己を以て彼を譬へしめば、則ち我想及び命想有らん。若我想及び命

想有らば、則ち擁護すべし。凡夫も亦、阿羅漢悉く是行人と見るべし。

若是の如き者は即ち是邪見なり。若邪見有らば、命終して阿鼻地獄に生ずべし。又阿羅漢の、設ひ衆

生に於て害心を生ぜば、是の處有ること無し。無量の衆生も亦復能く羅漢を害する者無し。』

佛の言はく、(善男子、我想と言ふは、衆生に於て大悲心を生じて殺害の想無きを謂ふ。阿羅漢

の平等の心を謂ふ。世尊、因縁有ること無きに、而も逆へ説くと謂ふこと勿れ。昔日此の王舍城の中

に於て大臘師有り。多く羣鹿を殺し、我を請じて肉を食せしむ。我爾の時に於て、彼の請を受くと雖

も、諸の衆生に於て慈悲心を生ずること羅睺羅の如く、而も偈を説きて言はく、  
「當に汝をして長壽、久久世に住せしむべし、

【善】次に佛印讚す。

不害法を受持せよ、猶し諸佛の壽の如くならん。」

是の故に我、此の偈を説く、

「一切刀杖を畏れ、壽命を愛せざる無し、

己を恕して譬を爲すべし、殺すこと勿れ杖を行ふこと勿れ。」

佛の言はく、『善い哉善い哉文殊師利、諸の菩薩摩訶薩の爲の故に、如來

に是の如きの密教を咨問す。』

『云何が父母を敬し、隨順して尊重す、

云何が此の法を修して、無閉獄に墮す。』

是に於て如來、復偈を以て答へたまはく、

『若し貪愛を以て母とし、無明を以て父と爲し、

是を隨順尊重せば、則ち無閉獄に墮す。』

爾の時に如來、復文殊師利の爲に重ねて偈を説きて言はく、

『一切他に屬す、則ち名けて苦と爲す、

一切己に由る、自在安樂なり、

一切の憍慢は、勢極めて暴惡なり、

一切の憍慢は、勢極めて暴惡なり、

【五五】次に文殊偈を頌す。之に二段ありて初に文殊偈を説く。

【五六】無閉獄は、阿鼻（アギーチ）の譯、無閉不斷に多苦を受くる地獄の意。

【五七】次に如來印成す。

【五八】次に如來自ら偈頌す。之に三段ありて、初に如來偈を説く。

賢善の人は、一切愛念す。」

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、如來の所説は是亦不盡なり。唯願はくは如來、復哀憫を垂れて其の因縁を説きたまへ。何を以ての故に。長者子の師に從ひて學する時の如き、師に屬すと爲んや不や。若師に屬せば義成就せず。若屬せざれば、亦成就せず。若自在を得るも亦成就せず。是の故に如來の所説は有餘なり。復次に世尊、譬へば王子の綜習する所無く、事に觸れて成ぜざるが如し。是亦自在にして愚闇常苦なり。是の如きの王子、若自在と言はば、義亦成せず。若屬他と言はば、義も亦成せず。是の義を以ての故に、佛の所説の義を名けて有餘と爲す。是の故に一切屬他必ずしも苦を受せず。一切自在必ずしも樂を受けず。一切憍慢勢極暴惡とは、是亦有餘なり。世尊、諸の烈女憍慢心の故に出家學道し、禁戒を護持して威儀成就し、諸根を守攝して馳散せしめざるが如し。是の故に一切憍慢の結必ずしも暴惡ならず。賢善の人は一切愛念、是亦有餘なり。人内に四重禁を犯し已りて法服を捨てず、堅く威儀を持するが如し。護持法者見已りて愛せず。是の人命終せば必ず地獄に墮せん。若善人有りて重禁を犯し已らば、護持法者、見て即ち驅出し、道を罷めて俗に還らん。是の義を以ての故に、一切賢善必ずしも悉く愛せず。」

爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、「因縁有るが故に如來此に於て有餘義を説く。又因縁有り

【五】 次に文殊難す。

【六】 次に如來釋す。

【六】 善賢とは、梵名須跋陀羅 (Sudhātā) の譯。

て諸佛如來、而も是の法を説く。時に王舍城に一りの女人有りて名を善賢と曰ふ。父母の家に還り因つて我が所に至り、我及び法衆僧に歸依し、而も是の言を作さく、「一切の女人勢自由ならず。一切の男子自在無閑なり。」我、爾の時に於て是の女心を知り、即ち爲に是の如きの偈頌を宣説す。文殊師利、善い哉善い哉、汝今能く一切衆生の爲に、如來に是の如きの密語を問ふ。』

〔三〕 文殊師利、復偈を説きて言さく、

『一切諸の衆生、皆飲食に依りて存す、

一切の大力有る、其の心嫉妬無し、

一切飲食に因りて、而も諸の病苦を得、

一切の淨行を修する、安樂を受くることを得。』

〔是の如く世尊、今純陀が飲食供養を受く、將如來恐怖有ること無きや。〕

〔四〕 爾の時に世尊、復文殊の爲に偈を説きて言はく、

『一切の衆生、盡く飲食に依りて存するに非ず、

一切の大力、心皆嫉妬無きに非ず、

一切食に因りて、而も諸の病苦を致すに非ず、

一切の淨行、悉く安樂を受くることを得るに非ず。』

〔六二〕 次に文殊自ら偈を頌す。之に二段ありて初に文殊偈を説く。

〔六三〕 次に如來邊釋す。

『文殊師利、汝若病を得ば、我亦是の如く病苦を得べし。何を以ての故に。諸の阿羅漢及び辟支佛、菩薩、如來、實は食する所無し。彼を化せんと欲するが爲に受用を示現す。無量の衆生施す所の物、其をして檀波羅蜜を具足せしめ、地獄、畜生、餓鬼を拔濟す。若如來六年苦行して身羸瘠すと言ふ者、是の處有ること無し。諸佛世尊、諸有に獨拔して凡夫に同じからず。云何ぞ而も身羸劣を得んや。諸佛世尊精勤修習して金剛心を獲。世人危脆の體に同じからず。我が諸の弟子も亦復是の如し。思議すべからず、食に依らず。一切大力無嫉妬とは、亦有餘義なり。

世間の人終身永く嫉妬の心無く、而も大力無きが如し。一切病苦食に因りて得とは、亦有餘義なり。亦人の客病を得る者有るを見る。所謂棘刺、刀劍、矛稍なり。一切淨行安樂を受くとは、是亦亦有餘なり。世間にも亦外道の入、梵行を修して多く苦惱を受くる有り。是の義を以ての故に、如來の所説は一切有餘なり。是を如來因縁無きに是の偈を説くに非ず、因有るが故に説くと名く。昔日此の(五四) 憂禪尼國に於て婆羅門有り、殺弑徳と名く。我が所に來至して、第四八戒齋法を受けんと欲す。我爾の時に於て、爲に此の偈を説く。』

(五五) 爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、何等をか名けて無餘義と爲すや、云何が復一切の義と名くるや。』(五六) 『善男子、一切とは唯助道常樂善法を除き、亦一切と名け亦無餘と名く。其の餘の

【五四】 憂禪尼。西印度に存する國名。Ujjain。これなり。  
 【五五】 是より云何が畢竟、不畢竟の問を答ふ。其中初に問の文。  
 【五六】 次に答。

諸法も亦有餘と名け、亦無餘と名く。樂法の諸の善男子をして、此の有餘及び無餘義を知らしめんと欲す。

迦葉菩薩、心大いに歡喜し踊躍すること無量なり。前みて佛に白して言さく、『甚だ奇なり世尊、衆生を等しく視ること羅睺羅の如し。』爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまははく、『善い哉善い哉、汝今の所見微妙甚深なり。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、唯願くは如來、是の大乗大涅槃經所得の功德を説きたまへ。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、若是の經の名字を聞くことを得ること有らば、得る所の功德諸の聲聞、辟支佛等の能く宣説する所に非ず。唯佛のみ能く知る。何を以ての故に。不可思議は是佛境界なり。何に況や經卷を受持し、讀誦、通利し、書寫せんをや。』

爾の時に諸天世人、及び阿脩羅、即ち佛前に於て異口同音にして偈を説きて言さく、

『諸佛は思議し難く、法僧も亦復然り。』

是の故に今勸請す、唯願はくは少しく停住したまへ、尊者大迦葉、及び阿難等、

【六七】 是より大段第二に大衆の歡喜領解の文。その中初に正しく領解す。而して先づ迦葉の領解。これに領解讚歎、更に功德を問ふの二段あり。

【六八】 次に大衆の領解の文。その中初に大衆の稱歎勸請。これに標請、釋請、結請の三段あり。

二衆の眷屬、久しからずして須臾に至らん、  
并及 摩竭主、阿闍世大王、

至心に佛を敬信する、猶故未だ此に來らず、

唯願はくは佛世尊、少しく哀憫を垂れて住し、

此の大衆の中に於て、我が諸の疑網を斷じたまへ。』

爾の時に如來、諸の大衆の爲に偈を説きて言はく、

『我が法の最長子、是を大迦葉と名く、

阿難勤めて精進し、能く一切の疑を斷ず、

汝等當に諦觀すべし、阿難多聞の士、

自然に當に、是の常及び無常を解了すべし、

是を以ての故に、心に大憂惱を懷くべからず。』

爾の時に大衆、種種の物を以て如來に供養す。佛に供養し已りて、即ち阿耨多羅三藐三菩提心を

發す。無量無邊恆河沙數の諸の菩薩等、初地に住することを得たり。

爾の時に世尊、文殊師利、迦葉菩薩及與純陀の與に記莖を授く。記莖を授け已りて是の如きの言

を説かく、『諸の善男子、自ら其の心を修め、慎みて放逸すること莫れ。我今背疾み舉體皆痛む。我今

【六九】 摩竭(Magadha)。中印度の國名。主は國王なり。

【七〇】 次に如來悲を止めて請に酬ゆ。之に酬請、止悲の二段あり。

【七一】 次に大衆の供養發心。之に供養、發心、進位の三段あり。

【七二】 次に現病結成。その中初に授記す。



臥ふせんと欲ほつす』と、彼かの小兒せうに及び常患者じやうくわんじやの如ごとくす。

【七三】『文殊、汝等當なんぢらたまさに、四部しぶの爲ために廣ひろく大法だいほふを説とくべし。今此いまこの法ほふを以もつて汝なんぢに付囑ふす。乃至迦葉ないしかせふ、阿難等あなんら至いたらば、復當またたまさに是この如ごときの正法しやうほふを付囑ふすべし。』

【七四】爾まの時ときに如來にらひ、是この語ことばを説とき已まりて、諸もろの衆生しゆじやうを調伏てうぶくせんと欲ほつするが爲ための故ゆゑに、身みに疾有やまひあるを現げんじ右脇うけふにして臥くわする、彼かの病人びやうにんの如ごとくにす。

【七三】 次に付囑す。

【七四】 四部。四部衆又は四部弟子とも云ふ。比丘 比丘尼、優婆塞、優婆夷是れなり。

【七五】 次に病を現す。

現病品第十八

爾の時に迦葉、佛に白して言さく、「世尊、如來已に一切の諸病を免る。

患苦悉く除きて復怖畏無

し。世尊、一切衆生に 四毒箭有り、則ち病因

【一】この品已下は大段第三に

疑と玉見とは見諦に属れり。

と爲す。何等をか四と爲す。貪欲、瞋恚、愚癡、

五品を合して顯示涅槃行の科

如來は通別の病因凡て絶無なり。

憍慢なり。若病因有らば則ち病生ずる有り、

五行を明し、後の徳玉品は十

【三】次に無病の因有るの文な

所謂寒熱肺病、上氣吐逆、膚體瘡癩、其の心悶

功徳を證すること明す。五

行の中この現病品は先づ病行

亂、下痢噉咽、小便淋瀝、眼耳疼痛、腹背脹滿、

を明す。これに四あり。その

の中初に推請の文。而して先づ

顛狂乾消、鬼魅に著せらる。是の如きの種種身

自行を推す。之に三段ありて

【四】次に説法を請す。之に弟

心の諸病、諸佛世尊悉く復有ること無し。今日

初に自行を推す。今は又其中

子を教ふるを請じ、大乘を説

如來何の緣ぞ、文殊師利に顧命して是の言を作

【二】四毒箭。特にこの四を云

じ、悪人を治するを請すの四

さく、「我今背痛す。汝等當に大衆の爲に法を説

ふは、見思に通ずるに依る。

段あり。

くべし」と。二つの因縁有らば則ち病苦無し。何等をか二つと爲す。一つには一切衆生を憐愍し、二つ

【一】この品已下は大段第三に

【二】次に無病の因有るの文な

には病者に醫藥を給施す。如來往昔已に無量萬億劫の中に於て菩薩の道を修し、常に愛語を行す。衆生

五品を合して顯示涅槃行の科

【三】次に無病の因有るの文な

を利益して苦惱せしめず。諸の病者に種種の醫藥を施す。何の緣ぞ、今に於て自ら病有りと云ふ。

【二】四毒箭。特にこの四を云

【四】次に説法を請す。之に弟

尊、世人病有らば、或は坐し或は臥して其の處に安せず。或は飲食を索め、家屬を救識して産業を修治せしむ。何が故ぞ、如來默然として臥す。弟子、聲聞人等に 戸波羅蜜、諸禪解脱 三摩跋提を教へて諸の正勤を修せしめざる。何に緣りてか是の如きの甚深の大乗經典を説かざる。何が故ぞ、無量の方便を以て大迦葉人中の象王、諸大人等を教へ、其をして阿耨多羅三藐三菩提を退かざらしめざる。何が故ぞ、諸の惡比丘の一切不淨物を受け畜ふる者を治めざる。世尊、實に病有ること無し。云何ぞ默然として右脇にして臥したまふ。 七 諸の菩薩等、凡そ病者に醫藥を給施する所、得る所の善根、悉く衆生に施して共に一切種智に向向す。衆生の 諸の煩惱障、業障、報障を除くが爲に。 八 煩惱障とは、貪欲、瞋恚、愚癡、忿怒、纏蓋、焦惱、嫉妬、憍吝、姦詐、諛諂、無慙、無愧、我慢、慢慢、不如慢、增上慢、我慢、邪慢、憍慢、放逸、貢高、懣恨、誣訟、邪命、諂媚、異相を詐現し、利を以て利を求め、惡求、多求、恭敬有ること無く、教誨に隨はず、惡友に親近す。利を貪りて厭ふこと無く、纏縛して解し難し。惡欲を欲し惡貪を貪す。身見、有見、及以無見、頻申喜睡、欠缺不樂、飲食を貪嗜し、其の心麁曹、心異相を緣じ、不善思惟し、身口多惡、好喜多語、

【五】 戸波羅蜜 (Uppasamita)。持戒到彼岸と譯す、六度の一。

【六】 三摩跋提 (Samapatti)。禪定に入らんとする状態をいふ、前の禪解脫の句と共に合して禪那波羅蜜 (Dhyana-parimiti) となる、是れ靜慮到彼岸と譯す、六度の一。

【七】 次に化他を推す。之に二段あり、其中初に化他を推し、而して先づ他を化して三障を除く。其中初に標。

【八】 次に響。其中初に煩惱障を釋す。

【九】 慢等。此文に七慢あり。成實論には更に大慢を加へて八慢とす、河西道朗は九慢と説く。俱舍論の説參考すべし。

諸根闇鈍、發言多虛

常に欲覺、悲覺、害覺に覆蓋せらる。是を煩惱障と名く。(一〇)三障とは五無間罪、重惡の病なり。(二)報障とは地獄、畜生、餓鬼に生在し、誹謗正法及び一闍提、是を報障と名く。(三)是の如きの三障を名けて大病と爲す。而も諸の菩薩、無量劫に於て菩提を修する時、一切の疾病に醫藥を給與し、常に是の願を作して、諸の衆生をして永く是の如きの三障の重病を斷せしむ。

(三) 復次に世尊、菩薩摩訶薩菩提を修する時、一切の病者に醫藥を給與し、

常には是の願を作さく、「願はくは衆生をして永く諸病を斷じ、如來の金剛の身を成ずることを得しめよ。又願はくは一切無量の衆生、妙藥王と作りて一切の諸惡重病を斷除せん。願はくは諸の衆生阿伽陀藥を得、是の藥力を以て能く一切無量の惡毒を除かん。又願はくは衆生、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉有ること無く、疾く無上佛藥を成就することを得一切煩惱の毒箭を消除せん。又願はくは衆生、勤修精進して如來金剛の心を成就し、微妙の藥と作りて衆病を療治し、人の諍訟の想を生ずる有らしめず。亦願ふ、衆生大藥樹と作りて一切の諸惡重病を療治せん。又願ふ、衆生の毒箭を拔出し如來無上の光明を成ずることを得ん。又願ふ、衆生如來の智慧大藥微密の法藏に入ることを得ん。世尊、菩薩是の如く已に無量百千萬億那由他劫に於て是の誓願を發して、諸の衆生をして悉く諸病無からしむ。何に緣りてか如來乃ち今日に於て唱へて疾有りと言ふ。

- 【一〇】 次に業障を釋す。
- 【一一】 次に報障を釋す。
- 【一二】 次に結。
- 【一三】 次に化他及び發願の文。
- 【一四】 那由他(ナユタ)極めて大なる數目の名、約一億に當り。

【二五】 復次に世尊、世に病者有りて坐起俯仰進止すること能はず。食飲御せず、漿水下らず、亦復諸子を教誡し家業を修治すること能はず。爾の時に父母、妻子、兄弟、親屬、知識、皆是の人に於て必死の想を生ず。世尊、如來今日も亦復是の如し。右脇にして臥し、論說する所無し。此の閻浮提の一切愚人當に是の念を作すべし、「如來正覺必ず當に涅槃すべし」と。滅盡の想を生ずれども、而も如來性質は畢竟じて涅槃に入らず。何を以ての故に。如來常住にして變易無きが故に。是の因縁を以て、説きて「我今背痛」と言ふべからず。

【二六】 復次に世尊、世に病者有りて身體羸損し、若し偃若は側、牀蓐に臥著す。爾の時に衆人心惡賤を生じ、必死の想を起す。如來今者亦復是の如し。當に外道九十五種に輕慢せられ、無常想を生ぜしむべし。彼の諸の外道、當に是の言を作すべし、「我等我性人自在時節微塵等の法を以て、常住にして變易有ること無しと爲すに如かず。沙門 瞿曇無常に還さる、是變易法」と。是の義を以ての故に、世尊今日默然として右脇にして臥したまふべからず。

【二七】 瞿曇 (Gautama)。瞿曇は姓の名なり、釋尊は瞿曇を以て姓となす、この姓を有するものの中、釋尊特に最勝なるが故に、全稱を以て特稱に換ふ。釋尊を指稱す。

【二八】 次に佛の證果を推す。之に二段あり、初に證果を推す。其中先づ身力。

【二九】 復次に世尊、世に病者有りて四大増損して互に調適ならず、羸瘦乏極なり。是の故に意に隨ひて

現病品第十八

三二七

坐起すること能はずして牀蓐に臥著す。如來四大和適ならざる無し。身力具足し、亦羸損無し。世尊、十の小牛力の如きは一つの大牛力に如かず。十の大牛力は一つの青牛力に如かず。十の青牛力は一つの凡象力に如かず。十の凡象力は一つの野象力に如かず。十の野象力は一つの二牙象力に如かず。十の二牙象力は一つの四牙象力に如かず。十の四牙象力は雪山の白象力に如かず。十の雪山の白象力は一つの香象力に如かず。十の香象力は一つの青象力に如かず。十の青象力は一つの黄象力に如かず。十の黄象力は一つの赤象力に如かず。十の赤象力は一つの白象力に如かず。十の白象力は一つの山象力に如かず。十の山象力は一つの優鉢羅象力に如かず。十の優鉢羅象力は一つの拘物頭象力に如かず。十の拘物頭象力は一つの力士力に如かず。十の力士力は一つの鉢建提力に如かず。十の鉢建提力は一つの八臂那羅延力に如かず。十の那羅延力は十住の菩薩の一節の力に如かず。凡夫の身は中節相到せず。人中の力士は節節相到し、鉢建提の身は諸節相接し、那羅延の身は節節相鉤す。十住の菩薩は諸節骨解、蟠龍相結す。是の故に菩薩其の力最も大なり。

- 【一〇】 優鉢羅 (Uttarāra) 靈瑞華と譯す。
- 【一一】 拘物頭 (Kumuda) 赤蓮華と譯す。
- 【一二】 芬陀利 (Pundarikā) 白蓮華と譯す。
- 【一三】 力士 (Mahābala) は、追放せられたる刹帝利種より生れ、極めて大なる力を有せる混種民族。鉢建提 (Bhadra) は堅固と譯す、天の名。
- 【一四】 那羅延 (Nirāyana) 天上の力士の名。
- 【一五】 次に智力。
- 【一六】 金剛際り金輪際と云ふと同じ。この世界の地底八萬由旬を経て此地に達すと云ふ。

世界成する時、金剛際よ

り 金剛座を起し、上 道場 菩提樹下に至る 菩薩坐し已りて、其の心即時に十力を速得す。【二五】に如來今者彼の嬰孩、小兒の如くなるべからず。嬰孩、小兒、愚癡、無智の能く説く所無し。是の義を以ての故に、隨意偃側するに人の譏訶する無し。如來世尊大智慧有りて一切を照明す。人の大龍、大威徳を具し神通を成就す。無上の仙人、永く疑網を斷じ已に毒箭を抜く。進止安詳、威儀具足、無所畏を得、今者何が故ぞ右脇にして臥し、諸の人天をして悲愁苦惱せしめたまふ。』

爾の時に迦葉、即ち佛前に於て而も偈を説きて言さく、

『瞿曇大聖徳、願はくは起ちて妙法を演べ、

小兒、病者の如く牀蓐に臥したまふべからず、

調御天人師、雙樹の間に倚臥す、

下愚凡夫の見、當に必ず涅槃すと云ふべし、

方等典、甚深の佛所行を知らず、

微密藏を見ざる、猶し盲の道を見ざるがごとし、

唯諸の菩薩、文殊師利等有り、

能く是の甚深を解す、譬へば善射人の如し、

【二五】 金剛座 (Vajrasana)。佛成道の座處、摩揭陀國佛伽耶の菩提樹下にあり。

【二六】 道場 (Moksha manjira) の譯、正覺を得べき場處の義。

【二七】 菩提樹 (Bodhi-tree)。本名畢鉢羅 (Pippala)。學名は Ficus religiosa なり。釋尊此の樹下に於て成道し給ふ故に此の名あり、道樹又は覺樹と譯す、摩揭陀國佛伽耶の地に在り。

【二八】 次に雙べて説法、息惡を請す。其中初に略請す。

【二九】 次に廣請。その中初に正しく請す。之に起て法を説くことを請じ、惡慢を除くことを請すの二段あり。

【三〇】 次に請を釋す。之に息惡を釋す、説法を釋すの二段あり。

三世の諸の世尊、大悲を根本と爲す、

是の如きの大慈悲、今何の所在と爲ん、

若大悲無ければ、是則ち佛と名けず、

佛若必ず涅槃せば、是則ち常と名けず、

唯願はくは無上尊、哀んで我等が請を受け、

衆生を利益し、諸の外道を摧伏したまへ。

爾の時に世尊、大悲心に熏じ、諸の衆生の各各の所念を知り、將に隨

順して畢竟利益せんと欲し、即ち臥より起ちて結加跏趺座す。顏貌熙怡、融

金聚の如し。面目端嚴、猶し月の盛滿のごとし。形容清淨、諸の垢穢

無し。大光明を放ちて虚空に充徧す。其の光大いに盛にして百千の日に

過ぐ。東方、南西北方、四維、上下の諸佛世界を照す。衆生に大智の炬を惠

施して悉く無明の黒闇を滅するを得しむ。百千億那由他の衆生をして、不退の菩提の心に安止せしむ。

爾の時に世尊、心に疑慮無くして師子王之如し。三十二の大人の相、八十種の好を以て其の身を

莊嚴す。其の身上の一切の毛孔に於て、一一の毛孔に一つの蓮華を出す。其の華微妙にして各千葉

を具す。純真金色にして瑠璃を莖と爲し、金剛を鬚と爲し、玫瑰を臺と爲す。形大團圓にして猶し車

【三二】次に請を結す。

【三三】是より佛の無病の相を示す。この中光明と蓮華と化佛との三利益あり。其中初に光明利益、先づ光明。

【三四】次に利益。

【三五】次に蓮華利益。其中初に蓮華、文の中師子王は梵名をシムハ・ラ・シヤ

シムハ・ラ・シヤと云ふ。

【三六】次に蓮華利益。其中初に蓮華、文の中師子王は梵名をシムハ・ラ・シヤ

シムハ・ラ・シヤと云ふ。

【三七】次に蓮華利益。其中初に蓮華、文の中師子王は梵名をシムハ・ラ・シヤ

シムハ・ラ・シヤと云ふ。



輪の如し。是の諸の蓮華、各種種雜色の光明を出す。青、黄、赤、白、紫、頗黎色なり。是の諸の光明皆悉く阿鼻地獄、想地獄、黑繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄に偏至す。是の八(熱)地獄のその中の衆生は常に諸苦に逼切せらる。所謂燒煮、火炙、斫刺、剄刺、斯の光に遇ひ已らば、是の如きの衆苦悉く滅して餘り無し。安隱、清涼、快樂無極なり。是の光明の中に如來祕密の藏を宣説し、諸の衆生皆備性有り」と言ふ。衆生聞き已りて即使命終して入天の中に生ず。乃至八種の寒冰地獄、所謂阿波波地獄、阿吒吒地獄、阿羅羅地獄、阿婆婆地獄、優鉢羅地獄、波頭摩地獄、拘物頭地獄、芬陀利地獄なり。是の中の衆生常に寒苦に逼切せらる。所謂褻裂身體碎壞、互相殘害斯の光に遇ひ已らば、是の如き等の苦も亦滅して餘無し。即ち調和溫暖身に適することを得。是の光明の中に亦如來祕密の藏を説きて、諸の衆生皆備性有り」と言ふ。衆生聞き已りて即使命終して入天の中

- 【三】次に利益。文のうら八熱地獄あり、その梵漢名は次の如し。
- 阿鼻 Avīci
  - 想 Maniṣṭhā
  - 黑繩 Kālasūtra
  - 衆合 Samghata
  - 叫喚 Kāruṣa
  - 大叫喚 Mahākāruṣa
  - 焦熱 Tapana
  - 大焦熱 Mahatapana
  - 【七】已下八寒地獄。其内阿波波(Arpa)は、寒に逼まれてアハハの異聲を發する地獄。
  - 【八】阿吒吒(Arha)寒に逼られてアタタの異聲を發する地獄。
  - 【九】阿羅羅。極寒身に逼り身上龜を生ずる頸部陀(Arūḍa)と同じきか。
  - 【十】阿婆婆(Āpapa)。寒身に逼りアババの患寒の聲を出す地獄。
  - 【十一】優鉢羅(Uttara)。青蓮華の如く、身折裂する地獄。
  - 【十二】波頭摩(Bhadrā)。紅蓮華の如く、身折裂する地獄。
  - 【十三】拘物頭(Kumbhā)。赤蓮華の如く身折裂する地獄。
  - 【十四】芬陀利(Pundarikā)。白蓮華の如く身折裂する地獄。

に生ず。爾の時に此の閻浮提界及び餘の世界に於て、有らゆる地獄皆悉く空虛にして罪を受くる者無し一闍提を除く。餓鬼の衆生飢渴に逼まられ、髮を以て身に纏ひ百千歳に於て未だ曾て漿水の名を聞くを得ざるも、斯の光に遇ひ已らば飢渴即ち除く。是の光明の中に、またよらいみんつがさう、諸の衆生皆佛性有り」と言ふ。衆生聞き已りて即便命終して天人の中に生ず。諸の餓鬼をして亦悉く空虛ならしむ、大乘方等正典を謗するを除く。畜生の衆生互に相殺害し共に相殘食す。斯の光に遇ひ已らば恚心悉く滅す。是の光明中に亦如來の祕藏を説く、「諸の衆生皆佛性有り」と。衆生聞き已り即便命終して人天の中に生ず。爾の時に當りて畜生も亦盡きん。正法を謗するを除く。

【四三】 是の一一の華に各一佛有り。圓光一尋にして金色晃曜たり。微妙端

【四四】 次に化佛利益。其中中に化佛。

嚴にして最上比無し。三十二相、八十種好其の身を莊嚴す。是の諸の世尊、或は坐する者有り、或は行く者有り、或は臥する者有り、或は住する者有り、或は雷音を震ひ、或は降雨を注ぎ、或は電光を放ち、或は大風を扇ぎ、或は煙箴を出して身聚火の如く、或は七寶の諸山、池泉、河水、山林、樹木を示現する有り。或は復七寶の國土、城邑、聚落、宮殿、屋宅を示現す。或は復象馬、獅子、虎狼、孔雀、鳳凰の諸鳥を示現す。或は復示現して閻浮提の所有の衆生をして、悉く地獄、畜生、餓鬼を見せしむ。或は復欲界の六天を示現す。復世尊有りて、或は陰界諸入の諸の過患多きを説き、或は復四聖諦の法を説く有り。或は復諸法の因縁を説く有り。或は復諸業煩惱皆因縁生ずる

を説く有り。或は復我と無我とを説く有り。或は復苦樂二法を説く有り。或は復常、無常等を説く有り。或は復淨と不淨とを説く有り。復世尊有りて、諸の菩薩の爲に所行の六波羅蜜を演説す。或は復諸大菩薩所得の功德を説く有り。或は復諸佛世尊の所得の功德を説く有り。或は復聲聞の人の所得の功德を説く有り。或は復一乘に隨順するを説く有り。或は復三乗の成道を説く有り。或は世尊有りて左脇に水を出し右脇に火を出す。或は初生の出家道場の菩提樹下に坐し、妙法輪を轉じ、涅槃に入るを示す有り。或は世尊有りて師子吼を作し、此の會中をして一果、二果、三果より第四果に至るを得る有らしむ。或は復生死を出離する無量の因縁を説く有り。爾の時に此の閻浮提中に於て、所有の衆生斯光に遇ひ已りて、盲者は色を見、聾者は聲を聽き、啞者は能く言ひ、拘蹉は能く行き、貪者は財を得、慳者は能く施し、恚者は慈心に、不信者は信す。是の如く世界に一衆生の惡法を修行する無し。一闍提を除く。

爾の時に一切の

天、龍、鬼神、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、

【四六】 波羅蜜 (Paramita) は、到彼岸、又は略して度と譯す。

之に六あり、施、戒、忍、進、禪、智に名けて、菩薩所修の妙行と教へ來る。

【四七】 一乘 (Ekayana) トリヤナ

【四八】 三乘 (Triyana) トリヤナ

【四九】 次に利益。

【五〇】 次に大衆の供養の文。その中初に供養。

【五一】 天 (Devata)。

【五二】 龍 (Naga)。

【五三】 鬼神 (Devata)。

【五四】 乾闥婆 (Gandharva)。香陰と譯す。

【五五】 阿脩羅 (Asura)。非天と譯す。

【五六】 迦樓羅 (Garuda)。金翅鳥と譯す。

【五七】 緊那羅 (Kinnara)。歌神なり。

【五八】 摩睺羅伽 (Mahoraga)。大腹行と譯す。

【五九】 羅刹、（六〇） 建陀、（六一） 憂摩陀、（六二） 阿婆摩羅、（六三） 人、（六四） 畜、（六五） 非人等、悉く共に聲を同じうして是の如きの言

を唱ふ、『善い哉善い哉無上天尊、利益する所多し。』是の語を説き已りて踊躍歡喜し、或は歌ひ、

或は舞ひ、或は身動轉す。種種の華を以て佛及び僧に散す。所謂天の優鉢羅華、拘物頭華、波

頭摩華、芬陀利華、（六六） 曼陀羅華、（六七） 摩訶曼陀羅

華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、（六八） 散陀那華、（六九） 摩

訶散陀那華、（七〇） 盧脂那華、（七一） 摩訶盧脂那華、

（七二） 香華、（七三） 大香華、（七四） 適意華、（七五） 大適意華、

（七六） 愛見華、（七七） 大愛見華、（七八） 端嚴華、（七九） 第一端

嚴華なり。復諸香を散す。所謂（八〇） 沈水、（八一） 多伽

樓香、（八二） 旃檀鬱金、（八三） 和合雜香、（八四） 海崖聚香なり。

復天上の寶幢、（八五） 旛蓋、（八六） 諸天之伎樂、（八七） 箏、（八八） 笛、（八九） 笙、

瑟、（九〇） 琴、（九一） 鼓吹を以て佛に供養したてまつる。

（九二） 而も偈を説きて言さく、

【五九】 羅刹 (Rakshasa)。捷疾鬼と譯す。

【六〇】 建陀。乾闥婆と同じか。

【六一】 憂摩陀 (Umalata)。鬼の名、慧琳音義に妖狂と譯す、人を驚ばしむる鬼と云ふ。

【六二】 阿婆摩羅 (Aparajita)。顛狂處と譯す、人を狂ばしむる鬼。

【六三】 人 (Manusa)。人 (Manusa)。

【六四】 非人 (Amanusa)。鬼 (Amanusa)。

【六五】 曼陀羅 (Mandara)。適意華と譯す。

【六六】 摩訶曼陀羅 (Mahamanu-ka)。大適意華と譯す。

【六七】 散陀那 (Santana)。續斷と譯す。

【六八】 摩訶散陀那 (Mahamanu-ka)。大續斷と譯す。

【六九】 盧脂那 (Lavana)。眼花と譯す。

【七〇】 摩訶盧脂那 (Mahalavana)。大眼花と譯す。

【七一】 香 (Gandha)。

【七二】 大香 (Mahagandha)。

【七三】 適意。曼陀羅と同じ。

【七四】 大適意。摩訶曼陀羅と同じ。

【七五】 愛見 (Kamatri)。

【七六】 大愛見 (Mahakamatri)。

【七七】 端嚴 (Ara)。

【七八】 第一端嚴 (Prathamavira)。

【七九】 沈水 (Amanu)。

【八〇】 多伽樓 (Takanaka)。不没香と譯す。

【八一】 旃檀鬱金 (Kumudam)。

【八二】 旃檀鬱金は旃檀 (Santalum) と鬱金 (Kumudam)。

【八三】 次に勸請。其中初に正しく請す。而して先づ標請。

『我今稽首したてまつる大精進、無上正覺兩足尊、

天人衆の知らざる所、唯瞿曇有りて乃ら能く了ず、

世尊往昔我が爲の故に、無量劫に於て苦行を修す、

如何ぞ一旦本誓を棄てて、而も便ち命を捨てて涅槃せんと欲す、

一切衆生、諸佛世尊の祕密藏を見たてまつること能はず、

是の因縁を以て出づるを得ること難く、生死に輪轉して惡道に墜つ、

是の如く甚深なる佛の行處、凡夫下愚誰か能く知らん、

諸の衆生に甘露法を施す、彼の諸の煩惱を斷除せんが爲なり、

若此の甘露を服し已ること有らば、復生老病死を受けず、

如來世尊用ひて、百千無量の諸の衆生を療治し、

其の有らゆる諸の重病をして、一切消滅して遺餘無からしむ、

世尊久しく已に病苦を捨て、故に名けて第七佛と爲すことを得、

唯願はくは今日法雨を雨して、我等が功德の種を潤漬したまへ、

是の諸の大衆及び人天、是の如く請じ已りて默然として住す。』

【八三】次に釋請。其中初に本誓の故に請す。

【八四】次に惡に墮するが故に請す。

【八五】次に下愚知らざるが故に請す。

【八六】次に甘露法を施すが故に請す。

【八七】次に病を療するが故に請す。

【八八】次に結請。

(六〇) 是の偈を説く時、蓮華臺中の一切諸佛、閻浮提より (六一) 淨居に徧至して悉く皆之を聞きたまへり。

(六二) 爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝已に是の如きの甚深微妙の智慧を

具足し、一切の諸魔外道に破壊せられず。善男子、汝已に安住して一切諸邪

惡風に傾動せられず。善男子、汝已に樂說辯才を成就し、已に曾て過去無量

恆河沙等の諸佛世尊を供養す。是故に能く如來正覺に是の如きの義を問ふ。

(六三) 善男子、我往昔無量無邊億那由他百千萬劫に於て、已に病根を除き、永く

倚臥を離る。迦葉、過去無量阿僧祇劫に佛有りて世に出づ。無上勝如來、應供

正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。諸

の聲聞の爲に是の大乗大涅槃經を解き、開示分別して其の義を解説す。我、

爾の時に於て亦彼の佛の爲に而も聲聞と作り、是の如き大涅槃經を受持し

讀誦通利し、經卷を書寫し、廣く他人の爲に開示分別して其の義を解説す。是の善根を以て阿耨多羅三

藐三菩提に回向す。善男子、我是より來た、未だ曾て惡煩惱、業縁の惡道に墮し、正法を誹謗し、一闍提と

作り、黃門の身、無根、二根を受け、父母に反逆し、阿羅漢を殺し、塔を破し、僧を壞し、佛身の血を出し、

四重禁を犯す有らず。是より以來身心安隱にして諸の苦惱無し。迦葉、我今實に一切の疾病無し。所

以は何ん。諸佛世尊久しく已に一切の病を遠離するが故なり。迦葉、是の諸の衆生大乗方等の密語

【六〇】次に經家の敘事。其中初に請じ已りて默止す。

【六一】次に諸降の所至。

【六二】淨居 (Pure Abode)。色界第四禪の最頂、之に五天あり。

【六三】是より廣く無病を説く。その中初に如來の無病の文、而して先づ無病。

【六四】次に往を擧げて今を證す。

を知らずして、便ち如來眞實に疾有りと謂ふ。(舊)迦葉、如來は人中の師子と云ふが如し、而も如來は實に師子に非ず。是の如きの言、即ち是如來の祕密の教なり。迦葉、如來は人中の大龍と言ふが如し、而も我已に無量劫の中に於て是の業を捨離す。迦葉、如來は是人是天と言ふが如し、而も我眞實に非ず。天上に非ず。亦鬼神、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽に非ず。我に非ず、命に非ず、可養育に非ず。人士夫に非ず。作に非ず、不作に非ず。受に非ず、不受に非ず。世尊に非ず、聲聞に非ず。說に非ず、不說に非ず。是の如き等の語、皆是如來祕密の教なり。迦葉、如來は猶し大海須彌山王の如しと言ふが如し、而も如來は實に鹹味の石山に同じきに非ず。當に知るべし、是の語も亦是如來祕密の教なり。迦葉、「如來は芬陀利の如し」と言ふが如し、而も我實に芬陀利に非ざるなり。是の如きの言、即ち是如來の祕密の教なり。迦葉、「如來は猶し父母の如し」と言ふが如し、而も如來は實に父母に非ず。是の如きの言も亦是如來祕密の教なり。迦葉、「如來は猶し猶し商主の如し」と言ふが如し、而も如來は實に商主に非ず。是の如きの言も亦是如來の祕密の教なり。迦葉、「如來は能く魔を摧伏す」と言ふが如し、而も如來は實に惡心他をして伏せしめんと欲する無し。是の如きの言も、皆是如來の祕密の教なり。迦葉、「如來は能く癩瘡を治す」と言ふが如し、而

【九四】次に現病は方便密語と云ふ。之に十二事の密語あり  
初に十一事は是類。

【九五】大海須彌山王。梵名  
マールサムドラ スノールパル  
Mahasamudra-sumeru-par-  
vata-rajha.

も我實に治癒瘡師に非ず、是の如きの言も亦是如來祕密の教なり。迦葉、我先に説くが如し。若善男子、善女人の能く身、口、意業を修治する有らん。捨命の時、親族有りて其の尸骸を取りて或は火を以て焼き、或は大水に投じ、或は塚間に棄て、狐狼禽獸競うて共に食啖すと雖も、然も心意識即ち善道に生ず。而して是の心法、實は去來無く亦至る所無し。直ちに是前後相似相續して相貌異らず。是の如きの言、即ち是如來祕密の教なり。

【六】 迦葉、我今病と云ふも亦復是の如し、亦是如來祕密の教なり。是の故に文殊師利に顧命す、「吾今背痛す、汝等當に四衆の爲に説法すべし」と。

迦葉、如來正覺、實に病に右脇にして臥する有る無し。亦畢竟じて涅槃に入らず。迦葉、是の大涅槃は即ち是諸佛の甚深禪定なり。是の如きの禪定は是聲聞、緣覺の行處に非ず。迦葉、汝上に問ふ所の如來、何が故ぞ倚臥して起たず、飯食を索め家屬を誡敕し、産業を修治せずとは、迦葉、虚空の性も亦坐起し、飲食を求

す、亦他を説かず。亦自解せず、亦他を解せず。安に非ず、病に非ず。善男子、諸佛世尊も亦復是の如く、猶し虚空の如し。云何ぞ當に諸の病苦有るべきや。

【七】 迦葉、世に三人の其の病治し難き有り。一つには大乘を謗り、二つには五逆罪、三つには一闍提

【九六】 後に一事無病に合す。  
【九七】 次に病行を以て對辨す。その中初に三種の行人を明し、而して先づ三種の罪人の文。之に法、譬、合の三段あり。



なり。是の如きの三病は世の中の極重なり。悉く聲聞、緣覺の能く治する所に非ず。善男子、譬へば病有り、必死にして治すること無し、若は瞻病隨意の醫藥有り、若は瞻病隨意の醫藥無し。是の如きの病定んで治すべからず。當に知るべし、是のひと必死疑無きが如し。是の三種の人も亦復是の如し。若し聲聞、緣覺、菩薩有りて、或は說法する有り、或は說法せず。其をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむること能はず。(六八)迦葉、譬へば病人の若瞻病隨意の醫藥有らば、則ち差えしむべし。若此の三無ければ、則ち差ゆべからざるが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。佛菩薩に從ひて聞法を得已りて、即便能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。法を聞かすして能く心を發すに非ざるなり。(六九)迦葉、譬へば病人の、若は瞻病隨意の醫藥有り、若は瞻病隨意の醫藥無し。皆悉く差ゆべきが如し。一種の人も亦復是の如くなる有り。或は聲聞に値ひ聲聞に値はず。或は緣覺に値ひ緣覺に値はず。或は菩薩に値ひ菩薩に値はず。或は如來に値ひ如來に値はず。或は聞法を得聞法を得ず。自然に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。所謂有人は或は自身の爲に、或は他身の爲に、或は怖畏の爲に、或は利養の爲に、或は諛諂の爲に、或は誑他の爲に、是の如きの大涅槃經を書寫して受持、讀誦し、供養、恭敬し、他の爲に説く者なり。

(七〇) 迦葉、五種の人有りて是の大乗大涅槃經に於て有病行處は如來に非ざるなり。何等をか五つと爲

【六八】次に二乗の小道これに譬、合の二段あり。  
 【六九】次に聞經の菩薩。之に譬、合の二段あり。  
 【七〇】次に五種の病人。

す。一つには三結を斷じて須陀洹果を得、地獄、畜生、餓鬼に墮せず、人天に七反して永く諸苦を斷じて涅槃に入る。迦葉、是を第一の有病行處と名く。是の人 未來八萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第二人は三結を斷じ、貪、恚、癡を薄うして斯陀含果を得、一往來して永く諸苦を斷じて涅槃に入る。迦葉、是を第二の有病行處と名く。是の人 未來六萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第三人は五下結を斷じて阿那含果を得、更に此に來らずして永く諸苦を斷じて涅槃に入る。是を第三の有病行處と名く。是の人 未來四萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第四人は永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じて阿羅漢果を得、煩惱餘無くして涅槃に入る。亦 麒麟獨一の行に非ず。是を第四人有病行處と名く。是の人二萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第五人は永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じて辟支佛道を得、煩惱餘無くして涅槃獨一の行なり。是を第五人有病行處と名く。是の人未來十千劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、是を第五人有病行處と名く。如來に非ざるなり。』

【一〇】未來八萬劫。已下の文、八六四二萬十千劫。  
 【一一】麒麟獨一の行。緣覺即ち辟支佛乘の行をいふ。緣覺の中、二種あり一を部行といひ、二を麟喻といふ、麟喻とは無佛の世に而も部行を爲さずして單獨に修行すると、例へば麟の一角の如ければこの名あり。今第二を指して言ふ。

巻の第十一

聖行品第十九の上

爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、「善男子、菩薩摩訶薩、應當に是の 大般涅槃經に於て、專心に五種の行を思惟すべし。何等をか五つと爲す。一つには聖行、二つには梵行、三つには天行、四つには嬰兒行、五つには病行なり。善男子、菩薩摩訶薩常に當に是の五種の行を修習すべし。復一行有り、是如來行なり、所謂大乘大涅槃經なり。迦葉、云何が菩薩摩訶薩所修の聖行なる。菩薩摩訶薩は若は聲聞に從ひ、若は如來に從ひて是の如きの大涅槃經を聞くことを得、聞き已りて信を生じ、信じ已りて是の如きの思惟を作すべし、諸佛世尊には

聖行品第十九の上

- 【一】 この品は五行の中に於て 第二に聖行の文。その中初に 雙べて五一を標す。之に次第 行、不次第行の二段ありて初 に次第行を標す。是れ即ち差 別の五行なり。而して先づ人 を標す。
- 【二】 次に法を標す。
- 【三】 次に名を列ぬ。
- 【四】 次に結勸す。
- 【五】 是より不次第行を標す。 是れ即ち平等なる一如來行な り。其中初に名を標す。
- 【六】 次に人を標す。
- 【七】 次に法を標す。安註に曰 く大乘は即ち圓因なり。涅槃 は即ち圓果なり、因に即して 云ふ。因果具足して缺くるな し。是を一行即ち一切行の如 來行と名くと。
- 【八】 是より雙べて五一を釋 す。其中初に聖行の文。これ に二段ありて初に雙べて次不 次行を釋す。其中初に雙べて 戒行を釋す。之にまた二段あ りて初に次第を釋す。而して 先づ建心。其中初に人縁に遇 ぶ。

無上道有り、大正法、大衆正行有り、(五)復方等大乗經典有り。我今當に大乘經を愛樂し貪求するが爲の故に、所愛の妻子眷屬、所居の舍宅、金銀珍寶、微妙の瓔珞、香華妓樂、奴婢給使、男女大小、象馬車乘、牛羊鷄犬、猪豕の屬を捨離すべし。復是の念を作さく、「居家逼迫猶し牢獄の如し、一切の煩惱之に由りて生ず。出家閑曠猶し虚空の如し、一切の善法之に因りて增長す。若家居在らば盡壽淨く梵行を修することを得ず。我今應當に鬚髮を剃除し出家して道を學すべし。」復是の念を作さく、「我今定んで當に出家して無上正眞菩提の道を修學すべし。菩薩是の如く出家せんと欲する時、天魔波旬大苦惱を生じて、是の菩薩復當に我と大戰爭を興すべし。善男子、是の如きの菩薩、云何が當に復人と戰爭すべき。」(四)是の時菩薩即ち僧坊に至り、若は如來及び佛弟子の、威儀具足し、諸根寂靜、其の心柔和にして清淨寂滅なるを見、(一)善男子、其の所に至りて出家を求め、鬚髮を剃除して三法衣を服す。(三)既に出家し已りて、禁戒を奉持して威儀缺けず。進止安庠にして觸犯する所無く、乃至小罪に心怖畏を生じ、護戒の心猶し金剛の如し。

(三)善男子、譬へば人有りて浮囊を帶持して大海を度らんと欲す。爾の時に海中に一つの羅刹有り。即ち此の人に従ひて浮囊を乞索す。其の人聞き已りて即ち是の念を作さく、「我今若與へば必定沒死せ

- 【九】次に法縁に遇ふ。
- 【一〇】次に立行し、其中初に受戒の文、而して先づ處師。
- 【一一】次に受
- 【一二】次に持戒の文、而して先づ法。
- 【一三】次に譬、その中初に譬の文、譬の中又五あり、四重と僧殘と輪蘭と波逸提と突吉羅となり。

ん。答へて言はく、「羅刹、汝寧ろ我を殺すとも浮囊は得叵し。」羅刹復言はく、「汝若全く我に興ふること能はずば、其の半を恵まれよ。」是の人猶故有て之を興へず。羅刹復言はく、「汝若我に半を恵むこと能はずば、幸願はくは我に三分の一を興へよ。是の人月せず。羅刹復言はく、「若能はずば、我に手許を施せ。」是の人月せず。羅刹復言はく、「汝今若復我に手許の如きを興ふること能はずば、我今饑窮衆苦に逼られん。願はくは當に我に微塵許の如きを濟すべし。」是の人復、「汝今索むる所誠に復多からず。然るに我今日方に當に海を渡るべきに、前途近遠云何を知らず。若汝に興ふれば氣當に漸く出づべし。大海の難何に由りてか過ぐることを得ん。脱し能せば中路水に没して死せん」と言ふが如し。

〔四〕善男子、菩薩の禁戒を護持するも亦復是の如し。彼の度人の浮囊を護り惜むが如し。菩薩是の如く戒を守護する時、常に煩惱諸惡の羅刹有りて、菩薩に語りて言はく、「汝當に我を信すべし、終に相欺かず。但四禁を破して餘戒を護持せよ。是の因縁を以て、汝をして安隱にして涅槃に入ることを得しむ。」菩薩、爾の時に是の言を作すべし、「我今寧ろ是の如きの禁戒を持ちて阿鼻獄に墮すとも、終に毀犯して天上に生ぜじ。」煩惱の羅刹復是の言を作さく、「汝若四禁を破すること能はずば、僧殘を破すべし。是の因縁を以て、汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ」と。菩薩も亦其の語に隨はざるべし。羅刹復言はく、「汝若僧殘を犯すこと能はずば、

〔四〕次に合の女。この文中に六あり。また、羅刹に二解あり、一は外の惡知識を、二は内の顛倒心を譬ふと。

亦故らに偷蘭遮罪を犯すべし。是の因縁を以て汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ」と。菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく、「汝若し、偷蘭遮を犯すこと能はずば捨墮を犯すべし。是の因縁を以て安隱に涅槃に入ることを得べし」と。菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく、「汝若し、捨墮を犯すこと能はずば、波夜提を破すべし。是の因縁を以て汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ。」菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく、「汝若し、波夜提を犯すこと能はずば、幸はくは突吉羅戒を毀破すべし。是の因縁を以て安隱に涅槃に入ることを得べし」と。菩薩、爾の時に心に自ら念言すらく、「我今、若突吉羅罪を犯して發露せずば、則ち生死の彼岸に度りて涅槃を得ること能はざるが如し。菩薩摩訶薩、是の微小の諸戒律の中に於て護持堅固にして心金剛の如し。菩薩摩訶薩の四重禁及び突吉羅を持する、敬重堅固等しうして差別無し。菩薩、若能く是の如く堅持すれば、則ち五支の諸戒を具足すと爲す。所

謂菩薩根本業清淨戒、前後眷屬餘清淨戒、非諸惡覺覺清淨戒、護持正念念清淨戒、回向阿耨多羅三藐三菩提戒を具足す。

(二六) 迦葉、是の菩薩摩訶薩に復二種の戒有り。一つには受世戒、二つには得正法戒なり。菩薩若正法戒を得ば終に惡を爲さず。受世戒とは白四羯磨して然して後乃ち得。復次に善男子、二種の戒有

【二五】 次に不次第を釋す。其中初に枝末を具す。所謂五支の戒なり。五の中、初に性重乃至次の如し。

「一根本——性重」攝律儀戒  
 「二眷屬」方便」攝善法戒  
 「三惡盡」定共戒」攝衆生戒  
 「四護持」道共戒」攝衆生戒  
 「五回向」攝衆生戒

【二六】 次に事理を具す。

【二七】 次に輕重を具す。

り。一つには性重戒、二一つには息世譏嫌戒なり。性重戒とは四禁を謂ふなり。息世譏嫌戒とは販賣するに輕稱小斗人を欺誑し、他の形勢に因りて人の財物を取り、害心をもつて繫縛し、成功を破壊し、明を然して臥し、田宅種植し、家業肆に坐るを作さず。象馬、車乘、牛羊、駝驢、鷄犬、獼猴、孔雀、鸚鵡、(二)八命及び(二)拘積羅、豺狼、貓狸、猪豕及び餘の惡獸、童男、童女、大男、大女、奴婢、僮僕、金銀、瑠璃、頗梨、眞珠、砗磲、碼碯、珊瑚、璧玉、珂貝の諸寶、赤銅、白鐵、鍮石の孟器、甄飪、の拘執苴衣、一切の穀米、大小麥豆、黍粟、稻麻、生熟の食具を畜へず。常に一食を受けて未だ曾て再食せず。若は行乞食及び僧中の食なり。常に止足を知りて別請を受けず。肉を食せず酒を飲まず。五辛葷物悉く之を食せず。是の故に其の身臭穢有ること無し。常に諸天一切世人に恭敬、供養、尊重、讚歎せられ、趣かに足りて食し、終に長じ受けず。受くる所の衣服纒かに身を覆ふに足る。進止常に三衣鉢と俱にして終に捨離せざることを鳥の二翼の如し。根子、莖子、節子、接子、子子を畜へず。庫藏若は金、若は銀、飲食廚庫、衣裳服飾を畜へず。高廣の大牀、象牙の金牀、雜色の編織、悉く坐臥せず。一切の細粟の諸席を畜へず。一切の象薦馬薦に坐せず。細粟上妙の衣裳を以て用ひて牀に敷きて臥せず。其の止息の牀に二枕を置かず。亦妙好の丹枕を受畜し、簀

【一】 共命 (Gandhinika) 生  
 生と譯す、鳥の名。  
 【二】 拘積羅 (Kushira) 好眼鳥と譯す。  
 【三】 木枕を安ぜず。安註曰く之に二解あり、一に云く、其中空にして鼓簧の如し、二に云く、其の本文あり、狀黃華の如しと。

象鬪、馬鬪、車鬪、兵鬪、若は男若は女、牛羊、鷄雉、鸚鵡等の鬪を觀視せず。亦故らに往いて軍陣

を觀視せず。亦故らに吹貝、鼓角、琴瑟、箏笛、箜篌、歌叫妓樂の聲を聽かず。佛に供養するを除く。

樗蒲、圍棋、波羅塞の戲、師子、象の鬪、彈棋、六博、柏棊、擲石、投壺、牽道、八道行、成、一切の戲笑悉く觀作せず。終に手足、面目を占相せず。爪鏡、著草、楊枝、鉢盂、欄轆を以て卜筮を

作さず。亦虛空星宿を仰觀せず。睡を解かんと欲するを除く。王家の往反使命と作り、此を以て彼に語り、彼を以て此に語らず。終に諛語、邪命自活せず。亦王臣、盜賊、鬪爭、飲食、國土、饑饉、恐怖、豐樂、安隱の事を宣說せず。善男子、是を菩薩摩訶薩の息世譏嫌戒と名く。善男子、菩薩

摩訶薩堅く是の如きの遮制の戒を持つこと性重戒と等しうして差別無し。

善男子、菩薩摩訶薩、是の如きの諸の禁戒を受持し已りて、是の願を作して言さく、「寧ろ此の身を以て熾然たる猛火の深坑に投ずるとも、終

に過去、未來、現在の諸佛所制の禁戒を毀犯して、刹利、婆羅門、居士等の女と不淨を行せじ。」(三) 復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ熱鐵を以て周布して身に纏ふとも、終に敢て破戒の

身を以て信心檀越の衣服を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「復次に善男子、菩薩摩訶薩熱鐵丸を吞むとも、終に敢て毀戒の口を以て信心檀越の飲食を食せじ。」(四) 復次に善男子、菩薩摩訶薩

【三】 波羅塞(一三三三三) 戲伎の名。

【四】 次に善願を具す。その中初に自善の文、而して先づ初に一善有り、内に破戒の心を起さず。

【五】 次に六善有り外施を受けず。

【六】 次に五善有り内根外塵に破られず。



復是の願を作さく、「寧ろ此の身大熱鐵の上に臥すとも、終に敢て破戒の身を以て信心檀越の牀臥敷具を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ此の身を以て三百の矛を受くとも、終に敢て毀戒の身を以て信心檀越の醫藥を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ此の身を以て熱鐵の鑊に投ずるとも、終に敢て破戒の身を以て信心檀越の房舍屋宅を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ鐵椎を以て此の身を打碎し、頭より足に至りて微塵の如くならしむとも、破戒の身を以て諸の刹利、婆羅門、居士の恭敬、禮拜を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ熱鐵を以て其の面目を挑るとも、染心を以て他の好色を視じ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ鐵錐を以て周徧して耳を刺すとも、染心を以て好音聲を聴かじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利刀を以て其の鼻を割去すとも、染心を以て諸香を貪嗅せじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利刀を以て其の舌を割裂すとも、染心を以て美味に貪著せじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利斧を以て其の身を斬破すとも、染心を以て諸觸に貪著せじ。」何を以ての故に。是の因縁を以て、能く行者をして、地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。迦葉、是を菩薩摩訶薩の護持禁戒と名く。

(三) 菩薩摩訶薩、是の如きの諸の禁戒を護持し已りて、悉く以て一切衆生に施與す。是の因縁を以て、願はくは衆生をして禁戒を護持して清淨戒、善戒、不缺戒、不析戒、大乘戒、不退戒、隨順戒、

畢竟戒、具足成就波羅蜜戒を得しめん。

〔二五〕 善男子、菩薩摩訶薩是の如く清淨戒を修

持する時、即ち初不動地に住することを得。云

何が名けて不動地と爲す。菩薩是の不動地の中

に住すれば、〔二六〕 不動、不墮、不退、不散なり。

〔二六〕 善男子、譬へば須彌山の、隨藍猛風の動かし

墮落、退散せしむること能はざるが如し。〔二五〕 菩

薩摩訶薩の是の地中に住することも亦復是の如

し。色、聲、香味に動かされず。地獄、畜生、

餓鬼に墮せず。聲聞、辟支佛地に退かず、異見、

邪風に散せられて邪命を作さず。〔二七〕 復次に善男

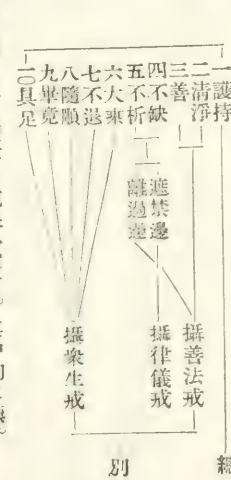
子、又不動とは、貪欲、恚癡に動かされず。又不墮とは、四重に墮せず。又不退とは、戒を退して家

に還らず。又不散とは、大乘經に違逆する者に散壞せられず。〔二八〕 復次に菩薩摩訶薩も亦復諸の煩

惱魔に傾動せられず。陰魔に墮せられず。乃至道場菩提樹下に坐する天魔有りと雖も、其をして阿耨

多羅三藐三菩提を退かしむること能はず。亦復死魔に散せられず。〔二九〕 善男子、是を菩薩聖行を修習す

〔二五〕 次に頌他の支。文の中に十戒あり、安註の釋せるところを圖示すれば次の如し。



- 〔二六〕 次に雙べて戒果を釋す。其中初に擲。
- 〔二七〕 不動等。常の故に不動、樂の故に不墮、我の故に不退、淨の故に不散なり。
- 〔二八〕 次に譬。
- 〔二九〕 次に釋。其中初に三諦に約す。
- 〔三〇〕 次に三障に約して三身を顯す。
- 〔三一〕 次に四徳に約す。
- 〔三二〕 次に結。

と名く。

善男子、云何が名けて聖行と爲す。聖行とは、佛及び菩薩の行す

る所なるが故に聖行と名く。何等を以ての故に佛菩薩を名けて聖人と爲

すや。是の如き等の人は聖法有るが故に、常に諸の法性空寂を觀するが

故に。是の義を以ての故に、故に聖人と名く。聖戒有るが故に、故に聖人

と名く。聖定慧有るが故に、故に聖人と名く。七聖財、所謂信、戒、

慚愧、多聞、智慧、捨、離有るが故に、故に聖人と名く。七聖覺有るが故

に、故に聖人と名く。是の義を以ての故に、復聖行と名く。復次に

善男子、菩薩摩訶薩の聖行とは、是の身を觀察して頭より足に至る。其

の中に唯髮毛、爪齒、不淨、垢穢、皮膚、筋骨、脾胃、心肺、肝膽、腸胃、

生熟二臟、大小便利、涕唾、目淚、肪膏、腦膜、骨髓、膿血、膿骸、諸

脈有り。菩薩是の如く念を専らにして觀する時、誰か是我有らん。我誰

に屬すと爲ん。何の處にか住在し、誰か我に屬する。復是の念を作さく、

「骨是我なりや、骨を離れて是なるや。」菩薩、爾の時に皮肉を除去し、

唯白骨を觀す。復是の念を作さく、「骨色相異なり、所謂青、黃、白色、

【三】次に雙べて聖行の名を釋す。其中初に標。

【四】次に釋。其中初に偏同兩人を以て雙約を顯はす。

【五】次に別して定慧二法を以て戒を成す。

【六】次に七財七覺の法を以て聖人を釋す。

【七】次に結。

【八】是より雙べて定聖行を釋す。其中初に次第定の文。其中又初に行、而して先づ特勝。今は其中の修。

【九】次に證。其中初に正しく證相。

【一〇】次に此の證法解と俱に發するの文。

【一一】次に背捨。其中初に修の文。

【一二】次に證の文。これに正しく是れ證相、證中の解の二段あり。

鵠色なり。是の如く骨相も亦復我に非ず。何を以ての故に。我は亦青、黄、白色、乃以鵠色に非ず。苦薩心を繫けて是の觀を作す時、即ち一切の色欲を斷除することを得。復是の念を作さく、「是の如き骨は因縁より生ず。足骨に依因りて以て踝骨を挂へ、踝骨に依因りて以て膊骨を挂へ、膊骨に依因りて以て膝骨を挂へ、膝骨に依因りて以て脛骨を挂へ、脛骨に依因りて以て腕骨を挂へ、腕骨に依因りて以て腰骨を挂へ、腰骨に依因りて以て脊骨を挂へ、脊骨に依因りて以て肋骨を挂ふ。復脊骨に因りて上項骨を挂へ、項骨に依因りて以て頷骨を挂へ、頷骨に依因りて以て牙齒を挂へ、上に髑髏有り。復項骨に依因りて以て肩骨を挂へ、肩骨に依因りて以て臂骨を挂へ、臂骨に依因りて以て腕骨を挂へ、腕骨に依因りて以て掌骨を挂へ、掌骨に依因りて以て指骨を挂ふ。」菩薩摩訶薩、是の如く觀する時、身の有らゆる骨一切分離す。是の觀を得已りて即ち三欲を斷ず。一つに形貌欲、二つに姿態欲、三つに細觸欲なり。

菩薩摩訶薩、青骨を觀する時此の大地東、西、南、北、四維、上、下、悉く皆青相を見る。青色觀の如く黄、白、鵠色も亦復是の如し。菩薩摩訶薩、是の觀を作す時、眉閉即ち青、黄、赤、白、鵠等の色香を出す。菩薩是の一一の諸の光明の中に於て佛像有るを見る。見已りて即ち問はく、「此の身の如きは不淨の因縁和合して共成す。云何ぞ座起、行住、屈伸、俯仰、視瞬、喘息、悲泣、喜笑を得ん。此の中に主無し、誰か之をして爾らしむ。」是の問を作し已るに、光中の諸佛忽然として現せず。

復是の念を作さく、「或は識是我、故に諸佛をして我が爲に説かざらしむ。」復此の識を觀するに、次第生滅して猶し流水の如くなれば、亦復我に非ず。復是の念を作さく、「此の出入息は直は風性なり。是の風性乃ち是四大なり。四大の中何者か是我なる。地性我に非ず。水、火、風性も亦復我に非ず。」復是の念を作さく、「此の身一切悉く我有ること無し。唯心風因縁和合する有りて種種の所作、事業を示現す。譬へば呪力、幻術の所作の如く、亦箆篋の意に隨ひて聲を出すが如し。是の故に此の身の如く不淨なり。衆の因縁を假りて和合して共成す。當に何れの處に於てか貪欲を生ずべき。若彼罵辱せば、復何れの處に於てか瞋恚を生ぜん。我が此の身三十六物不淨臭穢の如し。何れの處にか當に罵辱を受くる者有るべき。若其の罵を聞かば即便思惟せよ、「何の音聲を以て罵らるるや。一一の音聲罵らるること能はず。若一たび能はずば、衆多も亦爾なり。是の義を以ての故に瞋を生ずべからず。」若他より來りて打たば、亦思惟すべし。「是の如く打つ者何れよりして生ず。」復是の念を作さく、「手、刀杖、及び我が身に因るが故に打と名くることを得。我今何によりてか横に他を瞋らん。乃ち是我が身自ら此の咎を招く。我、是の五陰の身を受くるを以ての故なり。譬へば的に因りて則ち箭中ること有るが如し。我が身も亦爾なり、身有らば打有り。我若忍ばずば心即ち散亂せん。心若散亂せば則ち正念を失せん。若正念を失せば則ち善、不善の義を觀すること能はず。若善、不善の義を觀すること能はずば、則ち惡法を行せん。惡法の因縁は則ち地獄、畜生、餓鬼に墮せん。」

【三】菩薩、爾の時に是の觀を作し已して四念處を得。四念處を得已ば、則ち堪忍地の中に住するこ  
とを得。【四】菩薩摩訶薩、是の地に住し已らば、則ち能く貪欲、悲癡を堪忍し、亦能く寒熱、饑渴、蟲

蠱、蚤蝨、暴風、惡觸、種種の疾疫、惡口、罵詈、搥打、楚撻を堪忍す。身心の苦惱一切能く忍ぶ。  
是の故に名けて堪忍地に住すと爲す。【五】迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、菩薩未だ不動地に住することを

得ず、淨く戒を持する時は、頗し因縁有りて戒を破することを得んや不  
や。』善男子、菩薩未だ不動地に住することを得ずして、因縁有るが故に  
戒を破することを得べし。【六】迦葉の言さく、『唯然なり、世尊、何者か是なるや。』佛、迦葉に告げた

まはく、『若し菩薩有りて破戒の因縁を以て、則ち能く人をして大乘經典を  
受持し、愛樂せしめ、又能く其をして讀誦し、通利し、經卷を書寫し、廣  
く人の爲に説き、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしむるを知る。是の如きの爲の故に、故に戒を破

ることを得。菩薩、爾の時に是の念を作すべし、我寧ろ一劫若しは滅一劫阿鼻地獄に墮して此の罪報を  
受くとも、要す是の人をして阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめん。迦葉、是の因縁を以て菩薩摩  
訶薩淨戒を毀つことを得。』

【三】 次に果の文。その中初に  
標。

【四】 次に釋。  
【五】 次に定行の文。文に三番  
の間答あり。初番は略、次番  
は廣、第三は文殊事を述す。  
今は初番の略。之に問答の二  
段あり。  
【六】 次に次番の廣。之に問答  
の二段あり。

【三】 次に果の文。その中初に  
標。  
【四】 次に釋。  
【五】 次に定行の文。文に三番  
の間答あり。初番は略、次番  
は廣、第三は文殊事を述す。  
今は初番の略。之に問答の二  
段あり。  
【六】 次に次番の廣。之に問答  
の二段あり。

爾の時に文殊師利菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若菩薩有りて是の如きの人を攝取し護持して、菩提の心を退轉せざらしむ。是が爲に戒を毀るに、若阿鼻地獄に墮せば是の處有ること無し。」四八爾の時に佛、文殊師利を讚じたまはく、「善い哉善い哉、汝が所説の如し。我念すらく、「往昔閻浮提に於て大國王と作り、名を仙豫と曰ふ。大乘經典を愛念し敬重す。其の心純善にして麤惡、嫉妬、慳吝有ること無し。口常に愛語、善語を宣説し、身常に貧窮、孤獨を攝護す。布施、精進、休廢有ること無し。時に世に佛、聲聞、緣覺無し。我、爾の時に於て大乘方等經典を愛樂す。十二年の中婆羅門に事へて所須を供給し、十二年を過ぎて施安已に訖りて即ち是の言を作さく、「師等今阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。」婆羅門の言はく、「大王菩提の性は所有無く、大乘經典も亦復是の如し。大王、云何ぞ乃ち人をして虚空に同せしめんと欲する。」善男子、我爾の時に於て心大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞く。聞き已りて即時に其の命根を斷ず。善男子、是の因縁を以て是より已來地獄に墮せず。善男子、大乘經典を擁護し攝持する、乃ち是の如く無量の勢力有り。

復次に迦葉、又聖行有り、所謂四聖諦、苦、集、滅、道なり。五〇迦葉、苦とは逼迫の相、集とは

【四七】次に三番の文殊事を述す。其中初に問。  
 【四八】次に答。  
 【四九】是より雙べて慧行を釋す。其中初に慧行を釋す。これに二段ありて初に慧行を釋す。其中亦二段ありて初に次第慧を釋す。之に三段ありて、初に四諸慧を釋し、先づ有作の四諦の文。之に略、廣、結の三段あり、初の略の中に又六段ありて先づ標列。  
 【五〇】次に名を釋す。

能生長者の相、滅とは寂滅の相、道とは大乘の相なり。復次に善男子、苦とは現相、集とは轉相、滅とは除相、道とは能除相なり。復次に善男子、苦とは三相有り。苦苦相、行苦苦相、壞苦苦相なり。

集とは二十五有なり。滅とは二十五有を滅す。道とは戒、定、慧を修す。復次に善男子、有漏法とは二種有り、因有り果有り。無漏法とは亦二種有り、因有り果有り。有漏の果とは是則ち苦と名け、有漏の因とは則ち名けて集と爲す。無漏の果とは即ち名けて滅と爲し、無漏の因とは則ち名けて道と爲す。

復次に善男子、八相を苦と名く。所謂生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五盛陰苦なり。能く是の如きの八苦法を生ずる者、是を名けて集と爲す。是の如きの八苦有ること無きの處、是を名けて滅と爲す。十力、四無所畏、三念處、大悲、是を名けて道と爲す。

善男子、生とは出相、所謂五種なり。一つには初出、二つには至終、三つには増長、四つには出胎、五つには種類生なり。

何等をか老と爲す。老に二種有り。一つには念念老、二つには終身老なり。復二種有り。一つには増長老、二つには滅壞老なり。是を名けて老と爲す。

云何が病と爲す。病は四大毒蛇互に調適せざるを謂ふ。亦二種有り。一つには身病、二つには心

【五一】 次に用を釋す。

【五二】 次に體を釋す。

【五三】 次に制立を釋す。

【五四】 次に更に餘を廣す。

【五五】 次に廣之に四段あり、其中初に苦諦の文。また之に三段ありて初に略八苦。此中今は生苦。

【五六】 次に老苦。

【五七】 次に病苦。



病なり。身病に五つあり。一つには因水、二つには因風、三つには因熱、四つには雜病、五つには客病なり。客病に四つ有り。一つには非分強作、二つには忘誤墮落、三つには刀杖瓦石、四つには鬼魅所著なり。心病にも亦四種有り。一つには踊躍、二つには恐怖、三つには憂愁、四つには愚癡なり。復次に善男子、身心の病に凡そ三種有り。何等をか三と爲す。一つには業報、二つには惡對を遠離することを得ず、三つには時節代謝なり。是の如き等の因縁、名字、受分別病を生ず。因縁とは風等の諸病なり。名字とは心悶肺脹、上氣嗽逆、心驚下痢なり。受分別とは頭痛、目痛、手足等の痛なり。これを名けて病と爲す。

【六】何等をか死と爲す。死とは受くる所の身を捨つ。所受の身を捨つるに亦二種有り。一つには命盡し、二つには外縁死なり。命盡死とは亦三種有り。一つには命盡是福盡に非ず、二つには福盡是命盡に非ず、三つには福命俱盡なり。外縁死とは亦三種有り。一つには非分自害死、二つには横爲他死、三つには俱死なり。又三種の死有り。一つには放逸死、二つには破戒死、三つには壞命根死なり。何等をか名けて放逸死と爲す。若大乘方等般若波羅蜜を誹謗する有らば、是を放逸死と名く。何等をか名けて破戒死と爲す。去來現在の諸佛所制の禁戒を毀犯す、是を破戒死と爲す。何等をか名けて壞命根死と爲す。【七】五陰

【六】次に死苦。  
【七】命盡、福盡、俱盡。但だ財物を失ひ身命猶ほ在り之を命盡と云ひ、財物在りて命を失ふ之を福盡と云ひ、財物及び身命俱に失ふ之を俱盡と云ふ。

【八】五陰身。五陰とは梵語pañca-skandhaの譯、新譯には五蘊といふ。有情成立の要素

身を捨つ、是を壞命根死と名く。是の如きを名けて死を大苦と爲すと曰ふ。

【三二】何等をか名けて愛別離苦と爲す。所愛の物は破壞離散す。所愛の物の

破壞離散に亦二種有り。一つには人中の五陰壞、二つには天中の五陰壞な

り。是の如きの人天所受の五陰、分別校計するに無量種有り。是を愛別離

苦と名く。

【三三】何等をか名けて怨憎會苦と爲す。愛せざる所の者共に聚集す。所不愛

の者の共に聚集するに三種有り。所謂地獄、餓鬼、畜生なり。是の如きの

三趣、分別校計するに無量種有り。是の如きを則ち怨憎會苦と名く。

【三四】何等をか名けて求不得苦と爲す。求不得苦に亦二種有り。一つには所

希望の處、求むるに得ること能はず。二つには多く功力を用ふるに果報

を得ず。是の如きを則ち求不得苦と名く。

【三五】何等をか名けて五盛陰苦と爲す。五盛陰苦とは生苦、老苦、病苦、死

苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦なり。是の故に名けて五盛陰苦と爲す。

【三六】迦葉、生の根本は凡て是の如きの七種の苦有り。老苦、乃至五盛陰苦

なり。迦葉、夫衰老は一切有に非ず。佛及び諸天は一向定んで無、人中は

を分析せる名。吾人の心身を

分ちて、材料たる四大を、色

(Rūpa) と名け、感覺たる苦

樂捨を受 (Vedana) と名け、

悟性能力の心所を想 (Sañña)

と名け、意志行爲の心所を行

(Sankhāra) と名け、知覺能力

の心所を識 (Viññāna) と名

く、之を總稱して五陰といふ。

吾人の身心は是等に依りて成

立せるが故に五陰身と言ふ。

【六一】次に愛別離苦。

【六二】次に怨憎會苦。

【六三】次に求不得苦。

【六四】次に五盛陰苦。已上の八苦中、前の七には別體あり、第八には別體なし。前七を總とす。

【六五】次に廣八苦。その中初に生苦の文なり。之に三段ありて、先づ生を苦の本と爲すの文。

不定、或は有、或は無なり。迦葉、三界受身生有らざる無く、老は必定ならず。是の故に一切生を根本と爲す。迦葉、世間の衆生顛倒して心を覆ふ。生相に貪著し、老死を厭患す。菩薩は爾らず。初生を觀じて已に過患を見る。

〔七〕 迦葉、女人有りて他舎に入る。是の女端正にして顔貌美麗なり。好瓔珞を以て其の身を莊嚴す。

主人見已りて即便問ひて言はく、「汝何等と字し誰に繫屬す。」女人答へて言

さく、「我が身即ち是 功德大天なり。」主人問ひて言はく、「汝、所至の處

何の所作と爲す。」女人答へて言さく、「我所至の處、能く種種の金、銀、瑠

璃、頗黎、眞珠、珊瑚、琥珀、砗磲、碼碯、象馬、車乘、奴婢、僕使を與

ふ。」主人聞き已りて心 歡喜を生じ、踊躍無量なり。「我今福德、故に汝を

して我が舎宅に來至せしむ。」即便燒香、散華、供養し恭敬禮拜す。〔六〕 復、

門外に於て更に一女を見る。其の形醜陋、衣裳弊壞、諸の垢膩多し。皮膚

皴裂、其の色艾白なり。見已りて問ひて言はく、「汝何等と字し、誰に繫屬す。」女人答へて言さく、「我

黒闇と字す。」復問ふ、「何が故ぞ名けて黒闇と爲す。」女人答へて言さく、「我、所行の處、能く其の家をし

て有らゆる財寶を一切衰耗せしむ。」主人聞き已りて即ち利刀を持ちて是の如きの言を作さく、「汝若去

らざれば當に汝が命を斷つべし。」女人答へて言さく、「汝甚だ愚癡にして智慧有ること無し。」〔七〕 主人

〔六〕 次に生死相關するの文なり。その中初に法。之に凡夫貪著、菩薩厭離の二段あり。

〔七〕 次に譬。其中二段あり初に譬。而して先づ厭離の譬を作す。其中初に生欣ぶべし。

〔六〕 功德大天とは、梵名カニyahataと云ふ。

〔七〕 次に死惡むべし。

〔六〕 次に生死相關す。

問ひて言はく、「何が故ぞ我を癡にして智慧無しと名く。」女人答へて言さく、「汝が家中の者即ち是

【七〇】我が姉、我常に姉と進止共俱なり。汝若我を驅らば亦當に彼を驅るべし。」主人還り入りて功德天

に問はく、「外に一女有りて是汝の妹と云ふ、實に是と爲すや不や。」功德天の言はく、「實に是我が妹、

我此の妹と行住共俱なり、未だ曾て相離れず。所住の處に隨ひて我常に好

を作し、彼常に惡を作す。我利益を作し、彼衰損を作す。若我を愛せば亦

彼をも愛すべし。若(我)恭敬せらるれば亦彼をも敬すべし。」【七一】主人即ち

言はく、「若是の如き好惡の事有らば我皆用ひじ、各意に隨ひて去れ。」【七二】是

の時に二女便ち共に相將ゐて其の所止に還る。爾の時に主人、其の還去を

見て心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。是の時二女復共に相隨ひて

一つの貧家に至る。貧人見已りて心に歡喜を生じ、即ち之を請じて言はく、

「今より已往、願はくは汝二人常に我が家に住せよ。」功德天の言はく、「我

等先に已に他に驅せらる。汝復何に縁りてか俱に我が住を請す。」貧人答へ

て「汝今我を念ず、我汝を以ての故に復當に彼を敬すべし。是の故に俱に

請じて我が家に住せしめん」と言はんが如し。【七三】迦葉、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。天に生ずること

を願はず、生當に老、病、死有るべきを以ての故に。是を以て俱に棄てて曾て受心無し。【七四】凡夫愚人

【七一】 姉・妹・共俱。生は死の

前に在れば姉となし、死は生

の後に在れば妹となし、此二

終に相離れざるが故に共俱と

いふ

【七二】 次に菩薩俱に捨つ。之に

俱捨、俱去、喜慶の三段あり。

【七三】 次に貪著の爲に譬を作

す。之に俱に凡夫に趣く、凡

夫貪欲、生境凡心に？議す、

凡心境に應ずの四段あり。

【七四】 次に譬を合す。其中初に

菩薩の厭に合す。

【七五】 次に凡夫の貪に合す。

は老、病、死等の過患を知らず。是の故に生死の二法を貪受す。

復次に迦葉、婆羅門の幼稚の童子饑に逼られ、人糞の中に菴羅果有るを見て即便之を取る。

有智見已りて之を訶責して言はく、「汝婆羅門、種姓清淨にして何が故に是の糞中の穢果を取る。」童子

子聞き已りて赧然として愧づること有り。即ち

之に答へて言はく、「我實は食せず。洗淨して還

つて之を棄捨せんと欲するが爲なり。」智者語り

て、「汝大に愚癡なり。若還つて棄つれば本取

るべからず」と言はんが如し。善男子、菩薩

摩訶薩も亦復是の如し。此の生分に於て不受不

捨、彼の智者の童子を訶責するが如し。凡夫の

人の生を欣び死を惡むは、彼の童子の果を取り

て還つて棄つるが如し。

復次に迦葉、譬へば人有りて四衢道頭に器

に食を盛満し、色香味具はる、而して之を賣らんと欲す。人有り遠く來りて饑虚羸乏す。其の飯食の

色香味の具はるを見、即ち指し問ひて言はく、「此は何物ぞ。」食主答へて言はく、「此は是上食、色香

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

菴羅果有るを見て即便之を取る。

(Amra pāṇi) 梨に似たる果實の名。

勸捨に合すの二段あり。

次に第二の譬。文の中、人有りは佛を、四衢は四生の初受身を、器は經教を、飯食を盛満するは佛五戒十善人間の果を招くと説くを、之を賣るとは此を以て衆生を化するを、遠く來るは惡道の中より來るを、饑虚羸乏は重苦を譬ふ。餘は準じて知るべし。

【七】 菴羅果。具さに菴羅果

菴羅果。具さに菴羅果

菴羅果。具さに菴羅果

菴羅果。具さに菴羅果

菴羅果。具さに菴羅果

味具はる。若此の食を食すれば色を得力を得、能く饑渴を除き諸天を見ることを得ん。唯一つの患ひ有り、所謂命終なり。是の人聞き已りて即ち是の念を作さく、「我今色力天を見るを用ひじ、亦死を用ひじ。」即ち是の言を作さく、「是の食を食し已りて若命終せば、汝今何爲ぞ此に於て之を賣る。」食主答へて、「有智の人は終に有て買はず。唯愚人有りて是の事を知らず。多く我に價を興へ、貪りて之を食す」と言はんが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復斯の如し。天に生じ、色を得力を得、諸天を見るを願はず。何を以ての故に。其の諸の苦惱を免れざるを以ての故に。凡夫愚癡は生處有るに隨ひて皆悉く貪受す。其の老病死を見ざるを以ての故なり。

〔八二〕次に第三の譬。  
 〔八三〕次に第四の譬。  
 〔八四〕次に第五の譬。文の中、上に草履ありとは生死の中に假名の我及び相續常あるに譬へ、甘露を服するは虚妄の樂を譬へ、深坑は三途に譬へ、脚跡は命根斷つを譬ふ。

〔八二〕次に第三の譬。  
 〔八三〕次に第四の譬。  
 〔八四〕次に第五の譬。文の中、上に草履ありとは生死の中に假名の我及び相續常あるに譬へ、甘露を服するは虚妄の樂を譬へ、深坑は三途に譬へ、脚跡は命根斷つを譬ふ。

〔八五〕次に第六の譬。復次に迦葉、譬へば糞穢の多少俱に臭きが如し。善男子、生も亦是の如し。設ひ八萬を受け下十年に至るも、俱に亦苦を受く。

〔八六〕次に第七の譬。復次に迦葉、譬へば險岸の上に草履有りて、彼の岸邊に於て多く甘露有らん。若食する者有らば壽命千年、永く諸病を除き、安隱快樂ならん。凡夫愚人其の味を負るが故に、其の下に大深坑有るを

知らず。即ち前んで取らんと欲し、覺えず脚踏し坑に墮ちて死せんも、智者は知り已り、捨離して遠く去るが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。尙天上の妙食を受くることを欲せず、況や復人中をや。凡夫の人は乃ち地獄に於て鐵丸を呑啖す、況や復人天上妙の餽饌、能く食せざらんや。迦葉、是の如きの譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、是の生實に大苦爲ることを。迦葉、是を菩薩、大乘大涅槃經に住して生苦を觀すと名く。

〔八四〕 迦葉、云何が菩薩是の大乗大涅槃經に於て老苦を觀す。老とは能く嗽逆上氣を爲す。能く勇力、憶念、進持、盛年、快樂、憍慢、貢高、安隱、自態を壞し、能く背癢、懈怠、懶惰を作し、他に輕んせらる。迦葉、譬へば池水に、蓮華中に滿ちて開敷鮮榮甚だ愛樂すべきに天の雹を降すに値はば悉く皆破壞するが如し。善男子、老も亦是の如し。

〔八四〕 次に老苦。

悉く能く盛壯好色を破壞す。復次に迦葉、譬へば國王に一りの智臣有りて善く兵法を知らんに、敵國王の拒逆して順はざる有り。王、此の臣を遣して往いて之を討伐せしめ、即便擒獲し、將る來りて王に詣るが如し。老も亦是の如し。壯色を擒獲して將るて死王に付す。復次に迦葉、譬へば折軸の復用ふる所無きが如し。老も亦是の如し、復用ふる所無し。復次に迦葉、大富家、多く財寶、金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、神藥、碼碯有らんに、諸の怨賊有りて、若其の家に入らば、即ち能く劫奪して悉く空盡せしむるが如し。善男子、盛年好色も亦復是の如し、常に老賊に劫奪せらる。復次に迦葉、譬

へば貧人の上膳、細粟の衣裳に貪著して、復希望すと雖も、而も得ること能はざるが如し。善男子、  
 老も亦是の如し。貪心の富樂を受け、五欲自恣せんと欲する有りと雖も、而も得ること能はざるが如し。復次  
 に迦葉、陸地の龜、心常に水を念ずるが如し。善男子、人も亦是の如し。既に衰老に乾枯せられて、  
 心常に壯時受くる所の五欲の樂を憶念す。復次に迦葉、猶し秋月の有らゆる蓮華、皆一切に樂見せら  
 れ、其の萎黃に及びて人に惡賤せらるるが如し。善男子、盛年壯色も亦復是の如し。悉く一切に愛樂  
 せられ、其の老至に及びて衆に惡賤せらる。復次に迦葉、譬へば甘蔗の既に厭せられ已らば滓復味無き  
 が如し。壯年盛色も亦復是の如し、既に老の壓を被れば三種の味無し。一つには出家味、二つには讀  
 誦味、三つには坐禪味なり。復次に迦葉、譬へば滿月の夜に光明多く、晝は則ち爾らざるが如し。  
 善男子、人も亦是の如し。壯は則ち端嚴、形貌瓌偉、老は則ち衰羸、形神枯悴す。復次に迦葉、譬  
 へば玉有りて常に正法を以て國を治め民を理む。直實にして曲ること無く、慈憫にして施を好む。時  
 に敵國に破壊せられて流離逃進し、遠く他土に至る。他土の人民見て之を憫み、咸く是の言を作さく、  
 「大王、往日正法國を治めて萬姓を枉げず。如何そ一旦流離して此に至る」といはんが如し。善男子、  
 人も亦是の如し、既に衰老に壞敗せられ已らば、常に壯時所行の事業を讚す。復次に迦葉、譬へば燈  
 炷の唯膏油に頼り、膏油既に盡くれば勢久しく停まらざるが如し。善男子、人も亦是の如し、唯壯  
 膏に頼る。壯膏既に盡くれば衰老の炷何ぞ久しく停まらざることを得ん。復次に迦葉、譬へば枯河の人及



び非人、飛鳥、走獸を利益すること能はざるが如し。善男子、人も亦是の如し。老に枯れられて一切の作業を利益すること能はず。復次に迦葉、譬へば河岸臨險の樹の、若暴風に遇はば必ず當に顛墜すべきが如し。善男子、人も亦是の如し、老の險岸に臨みて、死無既に至れば勢住まることを得ず。復次に迦葉、車軸折れて重載に任へざるが如し、善男子、老も亦是の如し、一切の善法を吝受すること能はず。復次に迦葉、譬へば嬰兒の人に輕んせらるるが如し。善男子、老も亦是の如し、常に一切に輕毀せらる。迦葉、是等の譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、是の老は實に大苦爲ることを。迦葉、是を菩薩の大乗大涅槃經を修行して老苦を觀すと名く。

〔八五〕 迦葉、云何が菩薩摩訶薩の、大乘大涅槃經を修行して病苦を觀する。

所謂病とは能く一切の安隱樂事を壞す。譬へば雹雨の穀苗を傷壞するが如し。

復次に迦葉、人怨有らば、心常に憂愁して恐怖を懷くが如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し。常に病苦を畏れ心に憂愁を懷く。復次に迦葉、譬へば人有りて形貌端正なり。王の夫人に欲心より愛せられ、信を遣し廻り呼んで與其に交通す。時に王、收め得て其の一目を挑り、其の一耳を截り、一手足を斷つ。是の人爾の時に形容改異し、人に惡賤せらるるが如し。善男子、人も亦是の如し。先に端嚴の耳目具足すと雖も。既に病苦に纏逼せられ已らば、則ち衆人に惡賤せらる。復次に迦葉、譬へば芭蕉、竹葦及び驪の子有るときは則ち死するが如し。善男子、人も亦是の如し。病有らば則ち死

〔八五〕 次に病苦。

す。復次に迦葉、轉輪王は主兵、大臣常に前に在りて導き、王後に隨ひて行くが如く、亦魚王、蠅王、螺王、半王、商主前に在りて行く時、是の如きの諸衆悉く皆隨從して捨離する者無きが如し。善男子、死轉輪王も亦復是の如し、常に病臣に隨ひて相捨離せず。魚蠅、螺牛、商主の病王も亦復是の如し、常に死衆に隨逐せらる。迦葉、病因縁とは所謂苦惱、愁憂、悲歎、身心不安なり。或は怨賊に逼害せられ、浮囊を破壊し橋梁を發撤し、亦能く正命根本を劫奪す。復能く盛壯好色、力勢安樂、除捨慙愧を破壊し、能く身心の焦熱熾然の爲に是等の譬及び除の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、病苦は大苦爲ることを。迦葉、是の菩薩摩訶薩、大乘大涅槃經を修行して病苦を觀すと名く。

〔六〕 迦葉、云何が菩薩、大乘大涅槃經を修行して死苦を觀する。所謂死とは能く燒滅するが故に。迦葉、火災起りて能く一切を燒き、唯二禪を除くの力至らざるが故の如し。善男子、死火も亦爾なり、能く一切を燒く。唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く、勢及ばざるが故なり。復次に迦葉、水災起れば一切漂没す、唯三禪を除くの力至らざるが故の如し。善男子、死水も亦爾なり、一切を漂没す。唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。

復次に迦葉、風災起れば能く一切を吹きて悉く散滅せしめ、唯四禪を除くの力至らざるが故の如し。

〔六〕 次に死苦。其中初に正しく死を觀す。  
 〔七〕 菩薩大乘。三解あり、心に佛を菩薩といふ。二に、金の菩薩一轉して成佛するをいふ。三に初地の菩薩生死を免れざるも涅槃を志求すれば生死に亂せられざるをいふ。此三解俱に本文と會はず、此菩薩は前三教の分齊にては到底除くを得ず、正に煩惱菩提、生死涅槃不二の境地に住せる圓教の菩薩を指すなり。

善男子、死風も亦爾なり。悉く能く一切所有を吹滅す、唯菩薩の大乗大般涅槃に住するを除く。迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、彼の第四禪は何の因縁を以て、風吹くこと能はず、水漂はすこと能はず、火焼くこと能はざる。」佛、迦葉に告げたまはく、「善男子、彼の第四禪は内外の過患一切無きが故なり。善男子、初禪は過患、内に覺觀有り外に火災有り。二禪は過患、内に歡喜有り外に水災有り。三禪は過患、内に喘息有り外に風災有り。善男子、彼の第四禪は内外の過患一切悉く無し。是の故に諸災之に及ぶこと能はず。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、大乘大般涅槃に住して内外の過患一切皆盡く。是の故に死王之に及ぶこと能はず。復次に善男子、金翅鳥は一切の龍魚、金銀等の寶を能く啖ひ能く消し、唯金剛の消せしむること能はざるを除くが如し。善男子、死金翅鳥も亦復是の如し。一切衆生を能く啖ひ能く消し、唯大乘大般涅槃に住する菩薩摩訶薩を消すること能はず。復次に迦葉、譬へば河岸の有らゆる草木、大水暴長すれば悉く随つて漂流して大海に入る。唯楊柳を除く、其の莖を以ての故の如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し、悉く皆随流して死海に入る。唯菩薩の大乗大般涅槃に住するを除く。復次に迦葉、那羅延の悉く能く一切の力士を摧伏し、唯大風を除く。何を以ての故に。無礙を以ての故の如し。善男子、死那羅延も亦復是の如し、悉く能く一切衆生を摧伏し、唯菩薩の大乗大般涅槃に住するを除く。何を以ての故に。無礙を以ての故なり。復次に迦葉、譬へば人有りて怨憎の中に於て詐りて親善を現じ、常に相追逐すること影の形に隨ふが如く、其

の便を伺ひ求めて之を殺さんと欲す。彼の怨謹愼堅牢にして自ら備ふ。故に是の人をして殺すことを得ること能はざらしむるが如し。善男子、死怨も亦爾なり。常に衆生を伺ひて之を殺さんと欲し、唯大乘大般涅槃に住する菩薩摩訶薩を殺すこと能はず。何を以ての故に。是の菩薩放逸せざるを以ての故なり。復次に迦葉、譬へば卒に金剛の暴雨を降さんに、悉く藥木、諸樹、山林、土砂、瓦石、金銀、瑠璃、一切の物を壊し唯金剛眞寶を壞すること能はざるが如し。善男子、金剛死雨も亦復是の如し。悉く能く一切衆生を破壞し、唯金剛菩薩の大乗大般涅槃に住するを除く。復次に迦葉、金翅鳥の能く諸龍を啖ひ、唯三歸を受くる者を啖ふこと能はざるが如し。善男子、死金翅鳥も亦復是の如し。能く一切無量の衆生を啖ひ、唯菩薩の三定に住する者を除く。何をか三定と謂ふ。空無相願なり。復次に迦葉、(八八)摩羅毒蛇の、凡そ螫す所有らば良呪、上妙の好藥有り。雖も、之を如何ともすること無く、唯阿竭陀星呪の能く除愈せしむるが如し。善男子、死毒に螫さるるも亦復是の如し。一切醫方之を如何ともすること無く、唯菩薩の大乗大般涅槃に住するを除く。復次に迦葉、譬へば人有りて王に隕られ、其人若能く冥善の語を以て財寶を貢上せば、便ち脱することを得べきが如し。善男子、死王は爾らず。

【八八】摩羅毒蛇。摩羅(マール)は障礙、破壞等と譯す、毒蛇の一種なり。河西の云はく、この蛇の毒人の衣に觸るれば即ち死し、餘人此の衣に觸るれば亦死すと。如何に毒の強烈なるかを知るべし。

【八九】阿竭陀(アゲタ)イ。チャノプス(Cinopus)と稱する星あり、阿竭陀はこの星の支配者なり。リクエエーグに於ては、彼はミトラ(Mitra)及びアルナ(Varna)の子孫とせられたり。安註に曰く、此の星は八月出づ、若し人此の星の呪を得ば能く其の毒を消すと。

冥語を以て錢財、珍寶、之を貢上すと雖も亦脱することを得ず。

(五) 善男子、夫死とは 險難處に於て資糧有ること無し。去處懸遠にして伴侶無く、晝夜常に行いて

邊際を知らず。深邃幽闇にして燈明有ること無く、入るに門戸無くして而も處所有り。痛處無しと雖

も療治すべからず。往くに遮しする無く、到るに脱することを得ず。破壊する所無けれども見る者愁

毒す。是惡色に非ざれども、而も人をして怖れしむ。身邊に敷在すれども、覺知すべからず。迦葉、

是等の譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、生死は眞に大苦

爲るを。迦葉、是を菩薩の大乗大涅槃經を修行して死苦を觀すと名く。

(五) 迦葉、云何が菩薩、大乘大涅槃經に住して愛別離苦を觀する。愛別離

苦は能く一切衆苦の根本爲ること説の如し、

「愛に因りて憂を生じ、愛に因りて畏を生ず、

若貪愛を離るれば、何ぞ憂ひ何ぞ畏れんと。」

愛因縁の故に則ち憂苦を生ず。憂苦を以ての故に則ち衆生をして衰老を生ぜしむ。愛別離苦は所謂命

終なり。善男子、別離を以ての故に能く種種の微細の諸苦を生ず。今當に汝の爲に分別顯示すべし。

善男子、過去の世人壽無量なりき。時に世に王有りて名を善住と曰ふ。其の王、爾の時に童子の身

と爲り、太子にして事を治し、及び王位に登り、各八萬四千歳なり。時に王の頂上に一つの肉胞を生

【九】 次に傷痛。

【九】 險難處等。險難處云云は善法の乏しきを譬へ、去處懸遠とは其の路窮りなく、方便盡くるを譬へ、伴侶無しとは孤獨り遊いて隨ひ去る者無きを譬ふ。

【九】 次に愛別離苦を觀す。

す。其の炮柔奕にして【九三】兜羅綿、細奕の【九四】劫貝の如し。漸漸增長し、以て患と爲さず。十月を足満して炮即ち開割して一りの童子を生ず。其の形端正にして奇異少雙なり。色像分明にして人中の第一なり。

父王歡喜し字けて頂生と曰ふ。時に善住王、即ち國事を以て頂生に委付し、宮殿、妻子、眷屬を棄捨し、山に入りて道を學し八萬四千歳を満す。爾の時に頂生、十五日に於て高樓に處在し、沐浴して齋を受く。

即ち東方に於て金輪寶有り、其の輪千輻、轂輞具足す。工匠に由らず、自然に成就し、來りて之に應ず。頂生大王即ち是の念を作さく、我昔曾て五通仙の説を聞く。若し刹土せつり、わづまごにち、工匠に由らずして自然に成就し、

若金輪の千輻減せず、轂輞具足し、工匠に由らずして自然に成就し、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王、即ち當に轉輪聖帝と作ることを得べし」と。復是の念を作さく、我今當に試むべし。即ち左手を以て此の輪寶を擎げ、右に香爐を執り、右膝を地に著け、發誓して言さく、

「是の金輪寶、若實にして虚ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。此の誓言を作し已るに、是の金輪寶虚空に飛升し、十方に徧うし已り、還り來りて頂生の左手に住在す。爾の時に頂生、心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。復是の言を作さく、我今定んで轉輪聖王と作らん。」

【九三】兜羅(トウロ)は、楊華と譯す、綿の一種。

【九四】劫貝(カクバイ)は、時分樹と譯す、この樹より取れる白氈を亦た劫貝と名く、今後學者なり。

【九五】刹利王(カセリキヤウ)は、刹利は田主と譯す。

【九六】轉輪聖帝(テンリンセイテイ)は、彼の身に三十二相を具し、位に即ち時天より輪寶(リンポウ)を授け、其の感得し、其輪寶を轉じて四方を降伏する故に此名あり。

其の後久しからずして復象寶有り。狀貌端嚴なる白蓮華の如く、七支字を拈ふ。頂生見已りて復是の念を作さく、「我昔曾て五通仙の説を聞く。若轉輪王十五日に於て高樓に處在して沐浴受齋せんに、若象寶の狀貌端嚴なる白蓮華の如く、七支地に拈ふる、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王は即ち是聖帝なり」と。復是の念を作さく、「我今當に試むべし。」即ち香爐を拈げ、右膝を地に著け發誓して言はく、「是の白象寶若實にして虚ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。」是の誓を作し已るに、是の白象寶且より夕に至り、八方に周徧して大海際を盡し還つて本處に住す。爾の時に頂生心大に歡喜し、踊躍すること無量なり。復是の言を作さく、「我今定んでは轉輪聖王なり。」其の後久しからずして復象寶有り。狀貌端嚴なる白蓮華の如く、七支字を拈ふ。頂生見已りて復是の念を作さく、「我昔曾て五通仙の説を聞く。若轉輪王十五日に於て高樓に處在して沐浴受齋せんに、若馬寶の其の色紺豔、髦尾金色なる、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王は即ち是聖帝なり」と。復是の念を作さく、「我今當に試むべし。」即ち香爐を執り、右膝を地に著け發誓して言はく、「此の紺馬寶、若實にして虚ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。」是の誓を作し已るに、是の紺馬寶、且より夕に至りて八方に周徧し、大海際を盡して還つて本處に住す。爾の時に頂生心大に歡喜し、踊躍すること無量なり。復是の言を作さく、「我今定んでは轉輪聖王なり。」其の後久しからずして復象寶有り。形容端正微妙第一なり。不長、不短、不白、不黒なり。身の諸毛孔旃檀香を出し、

口氣香潔青蓮華の如く、其の目遠く視ること一由旬を見、耳聞鼻嗅も亦復是の如し。其の舌廣大、出せば能く面を覆ひ、形色細薄赤銅葉の如し。心諛聰哲大智慧有り、諸の衆生に於て常に冥語有り。是の女手を以て王の衣に觸るる時、即ち王身の安樂病患を知り、亦王心所縁の處を知る。

爾の時に頂生復是の念を作さく、「若女人の能く王心を知る有らば、即ち是女寶なり。」其の後久しからずして、王宮の内に於て自然に寶（七）摩尼珠有り。純青の瑠璃にして大さ車轂の如く、能く闇中に於て一由旬を照す。若天雨を降し、滂車軸の如くならん。是の珠の勢力能く大蓋と作りて一由旬を覆ふ。此の大雨を遮りて下過せしめず。爾の時に頂生復是の念を作さく、「若轉輪王、是の寶珠を得ば必ず是聖帝なり」と。其の後久しからずして主藏臣

【九七】摩尼（マニ）。珠又は寶と譯す、寶の總名なり。

有り、自然にして出づ。財寶多饒にして巨富無量なり。庫藏盈溢し乏少する所無し。報得の眼根、力能く一切地中の有らゆる伏藏を徹見す。王の所念に隨ひて皆能く之を辨す。爾の時に頂生復之を試みんと欲し、即ち共に船に乗りて大海に入り、藏臣に告げて言はく、「我今珍異の寶を得んと欲す。」藏臣聞き已りて即ち兩手を以て大海の水を撈む。時に十指頭十寶藏を出し、以て聖王に奉りて王に白して言はく、「大王の須ふる所意に隨ひて之を用ふ。其餘の在者當に大海に投ずべし。」爾の時に頂生心大に歡喜し踊躍すること無量なり。復作念して言はく、「我今定んで是轉輪聖王ならん。」其の後久しからずして主兵臣有り、自然にして出づ。勇健猛略策謀第一なり、善く四兵を知る。若鬪に任ふる



者は則ち聖王を現じ、若任へざる者は退きて現せしめず。未だ摧伏せざる者は能く摧伏せしめ、已に摧伏する者は力能く守護す。

爾の時に頂生復暹の念を作さく、「若轉輪王是の兵寶を得ば、當に知るべし、定んで是轉輪聖王ならん。」爾の時に頂生轉輪聖帝、諸の大臣に告ぐ、「汝等當に知るべし、此の閻浮提は安隱豐樂なり。我

今已に七寶成就し、千子具足する有り、更に何の爲す所ぞ。諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、東弗婆提は猶未だ德に歸せず。王今往くべし。」爾の時に聖王、即ち七寶の一切の營從と空を飛びて東弗婆提に往く。彼の土の人民歡喜して化に歸す。

復大臣に告ぐ、「我が閻浮提及び弗婆提、安隱豐樂、人民熾盛なり。悉く來りて化に歸し、七寶成就し千子具足す、復何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、西瞿陀尼は猶未だ德に歸せず。」爾の時に聖王、復七寶の一切の營從と空を飛びて西瞿陀尼に往く。王既に彼に至れば、彼の土の人民も亦復歸伏す。復大臣に告ぐ、「我が閻浮提及び弗婆提、此の瞿陀尼は安隱豐樂、人民熾盛なり。

咸く已に化に歸し、七寶成就し千子具足す、復何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、北鬱單越は猶未だ化に歸せず。」爾の時に聖王、復七寶の一切の營從と空を飛びて北鬱單越に往く。王既に彼に至れば、彼の土の人民歡喜して德に歸す。復大臣に告ぐ、「我が四天下は安隱豐樂、人民熾盛な

るは、譯して東身又は勝身といふ。須彌山の東方にある大洲の名、四大洲の一。

【九六】東弗婆提(トミリス、トミリス)は、譯して東身又は勝身といふ。須彌山の東方にある大洲の名、四大洲の一。

【九七】西瞿陀尼(アパサゴデー)は、譯して西身又は勝身といふ。須彌山の西方にある大洲の名、四大洲の一。

り。威く已に徳に歸し、七寶成就し千子具足す、更に何の爲す所ぞ。諸臣答へて言さく、「唯然なり。聖王、三十三天壽命極めて長く、安隱快樂なり。彼の天身形端嚴比無し。所居の宮殿、牀榻、臥具悉く七寶なり。自ら天福を情み、未だ來りて化に歸せず。今往き討ちて其をして摧伏せしむべし。爾の時

に聖王、復七寶の一切の營從と虚空を飛騰して忉利天に上り、一樹有るを見る、其の色青綠なり。聖王見已りて即ち大臣に問はく、「此は何の色ぞ。」大臣答へて言さく、「此は是波利質多羅樹なり。忉利の諸天夏三月の時、常に其の下に於て娛樂愛樂す。」又白色の猶し白雲の如くなるを見る。復大臣に問はく、「彼はは何の色ぞ。」大臣答へて言さく、「是善法堂なり。忉利の諸天常に其の中に集り、人天の事を論ず。是に於て天主釋提桓因、頂生王の已に來りて外に在るを知り、即ち出でて迎逆し、見已りて手を執り善法堂に升りて分座して坐せしむ。彼の時二王、形容相貌等しうして差別無く、唯だ視胸有りて別異と爲すのみ。是の時聖王、即ち念言を生ず、我今寧ろ彼の王位を退き、即ち其の中に住して天王と爲るべきや不や。」善男子、爾の時に帝釋、大乘經典を受持讀誦し、開示分別して他の爲に演説す。唯深義に於て未だ盡く通達せず。是の讀誦、受持、分別し、他の爲に廣説する因縁力を以ての故に、大威徳有り。善男子、是の頂生王、此の帝釋に於て惡心を生じ已り、即便墮落して閻浮提に還り、愛念する所の人天と離別して大苦惱を生ず。復惡病に遇ひて即便命終す。爾の時の帝釋は迦葉佛是なり、轉

【一〇】波利質多羅 (Parichitra) 香樹又は天樹王と譯す、忉利天上に存する樹の名。

輪聖王は則ち我が身是なり。善男子、當に知るべし、是の如く愛別離苦は極めて大苦と爲す。善男子、菩薩摩訶薩、尙過去の是の如き等輩の愛別離苦を憶す。何に況や菩薩大乘大涅槃經に住して、當に現在の世の愛別離苦を觀せざるべきや。

〔一〇二〕善男子、云何が菩薩大乘大涅槃經を修行して怨憎會苦を觀す。善男子、是の菩薩摩訶薩、地獄、畜生、餓鬼、人中、天上、皆是の如き怨憎會苦有るを觀す。譬へば人、牢獄繫閉、枷鎖桎械を觀て以て大苦と爲すが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。五道一切の受生悉く是怨憎會大苦と觀す。復次に善男子、譬へば人有りて常に怨家の枷鎖桎械を畏れ、父母、妻子、眷屬、珍寶、產業を捨離して遠く逃避するが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死を畏怖し、具足して六波羅蜜を修行して涅槃に入る。迦葉、是を菩薩、大乘大般涅槃を修行して怨憎會苦を觀すと名づく。

〔一〇三〕善男子、云何が菩薩、大乘大般涅槃を修行して求不得苦を觀する。求とは一切盡く求なり。盡求する者二種有り。一つには善法を求め、二つには不善法を求む。善法未得苦、惡法未得苦なり。

〔一〇四〕是を略して五盛陰苦を説くと爲す。迦葉、是を苦諦と名づく。

〔一〇二〕次に怨憎會苦を觀す。  
〔一〇三〕次に求不得苦を觀す。  
〔一〇四〕次に五盛陰苦を觀す。  
〔一〇五〕是より苦諦を會通す。其中初に問。而して先づ總じて非す。

【104】何を以ての故に。佛往昔 釋摩男に告げたまふが如く、若色苦な

らば一切衆生色を求むべからず。色若求むること有らば則ち苦と名けず。

【105】佛、諸の比丘に告げたまふが如く、三種の受有り。苦受、樂受、

不苦不樂受なり。佛、先に諸の比丘の爲に説きたまふが如く、若人有り

て能く善法を修行せば、則ち樂を受くることを得。又佛説の如く、善道

の中に於て六觸樂を受く。眼好色を見る、是則ち樂と爲す。耳、鼻、舌、

身、意に好法を思ふも亦復是の如し。佛の説偈の如く、

「持戒則ち樂と爲す、身衆苦を受けず、

睡眠安隱を得、寤むれば則ち心歡喜す、

若衣食を受くる時、誦習して經行す、

獨山林に處す、是の如きを最樂と爲す、

若能く衆生に於て、晝夜常に慈を修す、

是に因りて常樂を得、他を惱さざるを以ての故なり、

【106】少欲知足樂、多聞分別樂、

無著阿羅漢も、亦名けて受樂と爲す、

【105】次に五難を作す。其中初に樂緣に據る。

【106】釋摩男。拘利太子 (Kauriki) をいふ、解飯王の長子。出家して五比丘の一となる。

【107】次に樂體に據る。

【108】三種の受。感覺、即ち受 (vedana) を分類するに三種あり、即ち身に違するを苦 (Dukkha) と云ひ、順するを樂 (Sukha) と云ひ、違せず順せず之を不苦不樂 (Adukkhamasukha) といふ。

【109】次に樂因に據る。

【110】次に具に樂緣に據る。

【111】次に具に樂因に據る。其中初に兩偈は聲聞の善を樂因と爲す。

【112】次に一偈は菩薩の善を樂因と爲す。

【113】次に一偈は重ねて小乘を結す。

二四 菩薩摩訶薩、畢竟じて彼岸に到り、

所作の衆事辦す、是を名けて最樂と爲す。」

二五 世尊、諸經の中の所説の樂相の如き、其の義是の如し。佛の今説の如

き、云何ぞ當に此の義と相應すべき。」 佛、迦葉に告げたまはく、「善い

哉善い哉善男子、善能く如來に是の義を咨問す。善男子、一切衆生下苦

の中に於て横に樂相を生ず。是の故に我が今の所説の苦想本と異ならず。」

二六 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「佛の所説の如く下苦の中に於て樂想

を生ずとは、下生下老、下病下死、下愛別離、下求不得、下怨憎會、下五

盛陰、是の如き等の苦も亦樂有るべし。世尊、下生とは所謂三惡趣、中生

とは所謂人中、上生とは所謂天上なり。世尊、若復人有りて是の如きの問

を作さく、「若下樂に於て苦想を生じ、中樂の中に於て無苦樂想を生じ、上

樂の中に於て樂想を生ぜん。當に云何が答ふべき。」 世尊、若下苦の中

樂想を生せば、未だ人有りて當に千罰を受くべきに、初一下の時、已に樂想

を生せるを見ず。若生ぜざれば、云何ぞ説きて下苦の中に於て樂想を生ず」

と言はん。」 佛、迦葉に告げたまはく、「是の如く是の如し、汝が説く所の如し。」

二七 聖行品第十九の上

【二四】次に一偈を重ねて大乘を結す。

【二五】次に非を結す。文の中諸經は昔教を指し、今説は此教の無樂唯苦を指す。

【二六】次に答。其中初に其所問を數す。

【二七】次に正しく答ふ。其中初に總じて答ふ。而して先づ正しく答ふ。

【二八】次に論議。其中初に正しく數す。而して先づ問、其中初に總領難。

【二九】次に顛倒難。

【三〇】次に據事難。

【三一】次に答。其中初に其間を數す。

【三二】次に正しく答ふ。

の故に樂想有ること無し。何を以ての故に。猶し彼の人當に千罰を受くべきに、一下を受け已りて即ち脱るることを得ば、是の人、爾の時に便も樂想を生ずるか如し。是の故に當に知るべし、無樂の中に於て妄りに樂想を生ずと。

【二三】迦葉の言さく、『世尊、彼の一人、下を以て樂想を生ぜず、既を得るを以ての故に樂想を生ず。』

【二四】迦葉、是の故に我昔釋摩男の爲に五陰中の樂を説き、實にして虚ならざるなり。

【二五】迦葉、二受三苦有り。三受とは所謂樂受、苦受、不善不樂受なり。三苦とは所謂苦苦、行苦、壞苦なり。

善男子、善男子、苦受とは名けて三苦と爲す。所謂苦苦、行苦、壞苦なり。餘の二受は所謂行苦、壞苦なり。善男子、是の因縁を以て生死の中實は樂受有り。菩薩摩訶薩は、苦樂の性相捨離せざるを以て、是の故に説きて一切皆苦と言ふ。善男子、生死の中實に樂有ること無し。但諸佛菩薩世間に隨順し、説きて樂有りと云ふ。』

【二六】迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、諸佛菩薩若俗に隨ひて説く、是虚妄なりや不や。佛の所説れば是れ壞苦なり。無常に使

【二三】次に領解。其中初に領。【二四】次に述。【二五】次に別して答ふ。其中初に第二の樂體の問を答ふ。之に兩款を出す、三受を點す、虚實を結すの三段あり。【二六】苦受とは三苦等。隨一の苦に他の二苦を俱するを述ぶ。先づ苦苦に就て述べんに、苦苦とは心苦境を緣じ、苦境心に逼るを云ふ。樂長へに在らず暫時住して樂縁既に謝すれば是れ壞苦なり。無常に使

さる、是れ行苦なり。次に壞苦に就て述べんに、樂の舉體壞すれば即ち壞苦。而して無常に切まらる。また行苦を具す。終りに、行苦に就て述べんに、無常を免れず是れ行壞。捨は必ず境を離る故に是れ壞苦なり。但し壞苦及び行苦には苦苦なし、境逼る可らざればなり。【二七】次に第三第五樂因の間に答ふ。其中初に問を釋して答を求む。

【二七】次に第五樂因の間に答ふ。其中初に問を釋して答を求む。

の如く「善を修行する者則ち樂報を受け、持戒安樂の身苦を受けず。乃至衆事已に辨ず、是を最樂と爲す」と。是の如き等の經所説の樂受、是虛妄なりや不や。若是虛妄ならば、諸佛世尊久しく無量百千萬億阿僧祇劫に於て、善提道を修して已に妄語を離る。今是の説を作す、其の義云何。」(二六)佛の言はく「善男子、上に説く所の諸の受樂偈の如き、即ち善提道の根本なり。亦能く阿耨多羅三藐三菩提を長養す。是の義を以ての故に、先に經中に於て是の樂相を説く。(二五)善

男子、譬へば世間に須ふる所の資生、能く樂因を爲す、故に名けて樂と爲すが如し。所謂女色、耽酒飲酒、上饌甘味なり。渴時に水を得、寒時に火に遇ふ。衣服瓔珞、象馬車乘、奴婢僮僕、金銀瑠璃、珊瑚眞珠、倉庫穀米、是の如き等の物世間の所須能く樂因を爲す。是を名けて樂と爲す。善男子、是の如き等の物、亦能く苦を生ず。女人に囚りて男子の苦を生ず。憂愁悲泣、乃至斷命、酒、甘味、乃至倉庫に囚り、亦能く人をして大憂惱を生ぜしむ。是の義を以ての故に、一切皆苦にして樂相有ること無し。(三〇)善男子、菩薩摩訶薩是の八苦に於て苦に苦無しと解す。善男子、一切の聲聞、辟支佛等は樂因を知らず。是の如き人の爲に下苦の中に於て樂相有りと説く。唯菩薩の大乗大般涅槃に住する有りて、乃ち能く是の苦因、樂因を知る。」

【二六】次に佛答。  
【二五】次に第一第四の樂縁に據るの問を答ふ。其中初に正しく答ふ。之に樂縁と爲す、苦縁と爲すの二段あり。  
【二四】次に解慈を以て結す。これに、菩薩の解を結す、二乘不解を結す、重ねて菩薩を出すの三段あり。

# 卷の第十一

## 聖行品の中

〔一〕善男子、云何が菩薩摩訶薩、大乘大般涅槃に住して集諦を觀察す。〔三〕善男子、菩薩摩訶薩此の集

諦是陰の因縁と觀す。〔四〕所謂集とは還つて有を

愛す。愛に二種有り。一つには己身を愛し、

二つには所須を愛す。復二種有り。未得の五

欲心を繋げて専ら求む。既に求得し已らば堪忍

專著す。復三種有り。欲愛、色愛、無色愛な

り。復三種有り。業因縁愛、煩惱因縁愛、苦

因縁愛なり。出家の人四種の愛有り。何等を

か四つと爲す。衣服、飲食、臥具、湯藥なり。

復五種有り。五陰に貪著し、諸の所須に隨ひて一切愛著す。分別校計するに無量無邊なり。善男

子、愛に二種有り。一つには善愛、二つには不善愛なり。不善愛とは凡愚の求、善法愛とは諸の善

【一】 是より集諦を明す。之に

三段あり、其中初に集諦を明

す。而して先づ章門を標す。

【二】 次に解釋す。

【三】 次に體を釋す。其中初に

陰身に約す。

【四】 次に我我所に約す。文

の中己身は我、所須は我所。

【五】 次に欲得と已得とに約

【六】 次に三界に約す。

【七】 次に三道に約す。

【八】 次に四事に約す。

【九】 次に五陰に約す。

【一〇】 次に是非。其中初に正し

く是非の文。不善愛は集、善

愛は集に非す。

【一一】 次に三番の料簡。即ち聖

對凡の簡、大對小の簡、諸非

諦の簡なり。

【一二】 善男子、

分別校計するに無量無邊なり。

善男子、



薩の求なり。善法愛とは復二種有り。不善と善となり。二乗を求むる者、名けて不善と爲す。大乘を求むる者、是を名けて善と爲す。善男子、凡夫の愛は之を名けて集と爲し、名けて諦と爲さず。菩薩の愛は之を集諦と名け、名けて集と爲さず。何を以ての故に。衆生を度せんが爲に、所以に生を受く。愛を以ての故に生を受けざるなり。」

〔三〕迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛世尊餘經の中に於て、諸の衆生の爲に業を説きて因縁と爲す。或は憍慢を説き、或は六觸を説き、或は無明を説きて五盛陰の爲に因縁と作すが如し。今何の義を以て四聖諦を説くに、獨愛性を以て五陰の因と爲す。」佛、迦葉を誨じたまはく、「善い哉善い哉。善男子、汝が説く所の諸の因縁の如きは、非因と爲すに非ず。但是五陰は要す愛一因る。善男子、譬へば大王、若出でて遊遊すれば、大臣、眷屬悉く皆隨從するが如し。愛も亦是の如し。愛の行處に隨ひて是の諸結等も亦復隨つて行く。譬へば膩衣の塵有るに隨つて著し、著は則是隨つて住するが如し。愛も亦是の如し。所愛の處に隨つて業結も亦住す。復次に善男子、譬へば濕地は則ち能く牙を生ずるが如し。愛も亦是の如し。能く一切の業煩惱の牙を生ず。」

〔七〕善男子、菩薩摩訶薩、是の大乘大般涅槃に住して深く此の愛を觀するに、凡て九種有り。一つに

- 〔三〕 是より會通。其中初に問。先づ四經を引く。
- 〔三〕 六觸とは、六識の六塵に對して觸對あるに名く。亦た是れ集なり。
- 〔四〕 次に正しく結難す。
- 〔五〕 次に答。其中初に問を讚す。
- 〔六〕 次に正しく答ふ。其中初に愛は根本を明す。之に法、譬の二段あり。譬の中、大王、膩衣、濕地の三あり。
- 〔七〕 次に愛の過患の文。その中初に九章を標列す。

は責の餘有るが如く、二つには羅刹女婦の如く、三つには妙華莖の毒蛇有るが如く、四つには惡食性の便ならざる所、強ひて之を食ふが如く、五つには淫女の如く、六つには摩樓迦子の如く、七つには畜中の麁肉の如く、八つには暴風の如く、九つには慧星の如し。

云何が名けて責の餘有るが如しと爲す。善男子、譬へば窮人の他の錢財を負ひ、償畢らんと欲すと雖も、餘未だ畢らざるが故に、猶繫がれて獄に在り脱るることを得ざるが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。愛智の餘氣有るを以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はず。善男子、是を如責有餘と名く。

善男子、云何が羅刹女婦の如くなる。善男子、譬へば人有りて羅刹女を得、納れて以て婦と爲す。是の羅刹女、子を生ずる所に隨ひて、生じ已れば便ち食す。子を食すること既に盡きて復其の夫を食するが如し。善男子、愛の羅刹女も亦復是の如し。諸の衆生、善根の子を生ずるに、生ずるに隨ひ隨つて食す。善子既に盡くれば復衆生を食して地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。唯菩薩を除く。是を如羅刹女婦と名く。

善男子、云何が妙華莖の毒蛇之に纏ふが如くなる。譬へば人有りて性、好華を愛して華莖毒蛇の過患を見ず。即便前んで捉へ、捉へ已りて蛇に螫され、螫され已りて命終るが如し。一切の凡夫も亦復

【一八】 摩樓迦 (Māluika) の遊子蘇と譯す、蘇の一種。  
【一九】 次に廣く釋す。其中初に債主二乘の爲に譬を作す。之に譬、合の二段あり。  
【二〇】 次に下の八凡夫の爲に譬を作す。其中初に第二譬之に譬、合の二段あり。  
【二一】 次に第三譬。之に譬、合の二段あり。

是の如し。五欲の華を貪る。是の愛毒蛇の過患を見ずして便ち受取す。即ち愛蛇に毒螫せられ、命終して即ち三惡道の中に墮す。唯菩薩を除く。是を妙華莖の毒蛇之に纏ふが如しと名く。

〔三〕善男子、云何が便ならざる所の食、強ひて之を食する。譬へば人有りて便ならざる所の食、強ひて之を食し、食し已りて腹痛し、下を患ひて死するが如し。愛の食も是の如し、五道の衆生、強食貪著す。是の因縁を以て三惡道に墮す。唯菩薩を除く。是を所不便食而強食之と名く。

〔三〕善男子、云何が淫女の如くなる。譬へば愚人淫女と通じ、彼の淫女巧みに種種の諂媚を作して親を現じ、悉く是の人の所有の錢財を奪ふ。錢財既に盡きて便ち復驅逐するが如し。愛の淫女も亦復是の如し、愚人無智之と交通す。是の愛女、其の有らゆる一切善法を奪ふ。善法既に盡くれば驅逐して三惡道の中に墮せしむ。唯菩薩を除く。是を如淫女と名く。

〔四〕善男子、云何が摩樓迦子の如くなる。譬へば摩樓迦子の、若は鳥の食し已り、糞に隨ひて地に墮し、或は風吹に因り來りて樹下に在り。即便生長し、尼拘羅樹を纏繞縛束して増長せざらしめ、遂に枯死に至るが如し。愛の摩樓迦子も亦復是の如し。凡夫の有らゆる善法を纏繞縛束して増長せしめず、遂に枯滅に至る。既に枯滅し已りて命終の後、三惡道に墮す。唯菩薩を除く。是を摩樓迦子の如しと名く。

【三】善男子、云何が瘡中の瘰肉の如くなる。人の久瘡中に瘰肉を生ず。其の人要す當に勤心に療治すべきに、捨心を生ずること莫し。若捨心を生ぜば瘰肉増長し、蟲疽復生す。是の因縁を以て、即便命終するが如し。凡夫愚人五陰の瘡痂も亦復是の如し、愛其の中に於て瘰肉と爲る。應當に勤心に愛の瘰肉を治すべし。若治せざれば、命終して即ち三惡道の中に墮す。唯菩薩を除く。是を瘡中の瘰肉の如しと名く。

【云】善男子云何が暴風の如くなる。譬へば暴風の能く山を偃し嶽を夷げ、深根を抜くが如し。愛欲の暴風も亦復是の如し。父母の所に於て惡心を生じ、能く大智舍利弗等の無上深固の菩提根本を抜く。唯菩薩を除く。是を暴風の如しと名く。

【三】善男子、云何が彗星の如くなる。譬へば彗星の天下に出現すれば、一切の人民饑饉、病瘦、諸の苦惱に墜るが如し。愛の彗星も亦復是の如し。

能く一切の善根種子を斷じ、凡夫人をして孤窮、饑饉、煩惱の病を生じ、生死に流轉して種種の苦を受けしむ。唯菩薩を除く。是を如彗星と名く。善男子、菩薩摩訶薩の大乗大般涅槃に住して愛結を觀察すること是の如き九種なり。

【三】善男子、是の義を以ての故に、諸の凡夫の人苦有りて諦無し。聲聞、緣覺は苦有り苦諦有りて而

【五】次に第七譬。之に譬、合の二段あり。  
 【六】次に第八譬。之に譬、合の二段あり。  
 【七】次に第九譬。之に譬、合の二段あり。  
 【八】是より料簡。其中初に苦諦を簡ぶ。

も眞實無し。諸の菩薩等は苦に苦無きを解す。是の故に苦無くして而も眞諦有り。諸の凡夫の人

は集有りて諦無し。聲聞、縁覺は集有り集諦有り。諸の菩薩等は集に集無きを解す。是の故に集無く

して而も眞諦有り。聲聞、縁覺は滅有り眞に非ず。菩薩摩訶薩は道有り眞諦有り。

眞諦有り、聲聲、縁覺は道有り眞に非ず。菩薩摩訶薩は道有り眞諦有り。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の大乗大般涅槃に住して滅を見滅諦を見る。

所謂一物の煩惱を斷除す。若煩惱斷すれば則ち名けて常と爲す。煩惱

の火を滅すれば則ち寂滅と名く。煩惱滅するが故に則ち樂を受くることを

得。諸佛菩薩因縁を求むるが故に、故に名けて淨と爲す。更に復二十五有

を受く。故に出世と名く。出世を以ての故に、故に名けて我と爲す。常に

色、聲、香、味、觸等、若は男、若は女、若は生住滅、若は苦、若は樂、

不苦不樂に於て相取らず。故に畢竟寂滅眞諦と名く。善男子、菩

薩是の如く大乘大般涅槃に住して滅聖諦を觀す。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の大乗大般涅槃に住して道聖諦を觀す。

善男子、譬へば闇中燈に因りて麤細の物を見ることを得るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。大乘大般涅槃に住し、入聖道に因りて一切法を見る。所謂常無常、有爲無

- 【二五】 次に集諦を簡ぶ。
- 【二六】 次に滅諦を簡ぶ。
- 【二七】 次に道諦を簡ぶ。
- 【二八】 是より滅諦の文。その中初に兩章門を唱ふ。
- 【二九】 次に解釋す。其中初に見滅章門を釋す。
- 【三〇】 次に見滅諦章門を釋す。之に用、體の二段あり。用を明す文の中に五句あり。初四句は是れ四徳。
- 【三一】 次に結す。
- 【三二】 是より道諦の文。これに二段ありて初に道諦、而して先づ章門。
- 【三三】 次に解釋。之に譬、合の二段あり。

爲、有衆生非衆生、物非物、苦樂、我無我、淨不淨、煩惱非煩惱、業非業、實不實、乘非乘、知無知、  
 (三六) 陀羅驪非陀羅驪、(三七) 求那非求那、見非見、色非色、道非道、解非解なり。  
 (四〇) 善男子、菩薩是の如く  
 大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀す。」

(四一) 迦葉菩薩、佛に白して言く、「世尊、若八聖道是道聖諦ならば、義

相應せず。何を以ての故に。如來或は説信心を道と爲し、能く諸漏を度

す。或時道を説きて「不放逸是なり。諸佛世尊不放逸の故に阿耨多羅三藐

三菩提を得。亦是菩薩助道の法なり。」或時説きて「精進是道」と言ふ、阿

難に告ぐるが如し、若人有りて能く勤めて精進を修せば、則ち阿耨多羅三

藐三菩提を成就することを得と。」或時説きて言はく、「身念處を觀せよ。

若し心を繋けて精勤に是の身念處を修習する有らば、則ち阿耨多羅三藐三菩

提を成就することを得。」或時説きて言はく、「正定を道と爲す、大德摩訶

迦葉に告ぐるが如し、夫正定とは眞實是道なり。不正定にして是道なる

に非ざるなり。若禪定に入らば乃ち能く五陰の生滅を思惟す。定に入らずして能く思惟するに非ざる

なり。或は一法を説き、若人修習すれば能く衆生を淨うす。一切の憂愁苦惱を滅除し、正法を逮得

す。所謂念佛三昧なりと。」或は復説きて言はく、「無常想を修する、是を名けて道と爲す。比丘に告ぐる

【天】陀羅驪(トドラギヤ)。實と譯す、勝論所立六句義中の一。地水火風空時方神意の九種の實體をいふ。

【三九】求那(ケナ)。德と譯す、勝論六句義中の一。地水火風等の實體に依止せる色聲香味等の屬性をいふ。

【四〇】次に精。

【四一】次に會通。其中初に問。之に二段ありて初に問ふ。而して先づ初に不相應を唱ふ。

【四二】次に不相應を釋す。

【天】陀羅驪(トドラギヤ)。實と譯す、勝論所立六句義中の一。地水火風空時方神意の九種の實體をいふ。  
 【三九】求那(ケナ)。德と譯す、勝論六句義中の一。地水火風等の實體に依止せる色聲香味等の屬性をいふ。  
 【四〇】次に精。  
 【四一】次に會通。其中初に問。之に二段ありて初に問ふ。而して先づ初に不相應を唱ふ。  
 【四二】次に不相應を釋す。

が如く、能く多く無常想を修する者有らば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。或は説空寂。阿蘭若處に獨坐思惟せば、能く速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」と。或時説きて言はく、「人の爲に法を演ぶ、是を名けて道と爲す。若法を聞き已らば疑網即ち斷ず。疑網斷じ已らば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と。或時説きて言はく、「持戒是道なり、阿難に告ぐるが如し。若精勤に禁戒を修持する有らば、是の人則ち生死の大苦を度す」と。或時説きて言はく、「善友に親近す、是を名けて道と爲す。阿難に告ぐるが如し。若善知識に親近する者有らば、則ち淨戒を具す。若衆生の能く我に親近する有らば、則ち阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得」と。或時説きて言はく、「慈を修す是道なり。慈を修學する者は諸の煩惱を斷じ、不動の處を得」と。或時説きて言はく、「智慧是道なり。佛昔、波闍波提比丘尼の爲に説くが如し。姉妹、諸の聲聞の如く、智慧刀を以て能く諸流諸漏煩惱を斷ず」と。或時如來「施是道」と説く。佛、往昔波斯匿王に告ぐるが如し、大王當に知るべし、我往昔に於て多く惠施を行す。是の因縁を以て、今日阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得と。」(四垂)世尊、若八聖道是道諦ならば、是の如き等の經堂虛妄に非ずや。若彼の諸經虛妄に非ずんば、彼の中、何の緣ぞ八道を説きて道聖諦と爲さず。(四七)若彼説かすんば、如來往

聖行品の中

三八五

- 【四三】 阿蘭若 (Aranya) 閑寂 又は遠離處と譯す、人里を離れ思惟に適せる靜寂なる住處をいふ。
- 【四四】 波闍波提。具さに摩訶波闍波提 (Mahā-Prajñapti)。大生主と譯す、釋尊の姨母の名なり。
- 【四五】 次に難す。其中初に今を以て昔を難す。
- 【四六】 次に昔を以て今を難す。
- 【四七】 次に過を結す。

昔何が故ぞ錯謬す。然るに我定んで知る、諸佛如來久しく錯謬を離ると。」

爾の時に世尊、迦葉菩薩を讚じたまはく、「善い哉善い哉善男子、汝今菩薩の大乗微妙の經典の所

有の祕密を知らんと欲す、故に是の間を作す。善男子、是の如き諸經

悉く道諦に入る。善男子、我が先説の如く若道を信する有らば、是の如

きの信道は是信の根本なり、是能く菩提の道を佐助す。是の故に我が説錯

謬有ること無し。善男子、如來善く無量の方便を知り、衆生を化せんと欲

す。故に是の如き種種の説法を作す。

善男子、譬へば良醫の諸の衆生の種種の病源を識り、其の所患に隨ひ

爲に藥を合す。并に藥の禁する所、唯水の一種禁例に在らず。或は薑水を

服し、或は甘草水、或は細辛水、或は黑石蜜水、或は阿摩勒水、或は

三尼波羅水、或は鉢書羅水、或は冷水を服し、或は熱水を服し、或は蒲萄

水、或は安石榴水なり。善男子、是の如きの良醫、善く衆生の所患を知り、

種種の藥、禁多しと雖も、水は例に在らざるが如し。如來も亦爾なり、善く方便を知る。一法相に於て諸

の衆生に隨ひ、分別して廣く種種の名相を説く。彼の諸の衆生所説に隨ひて受く。受け已りて修習し

て煩惱を除斷す、彼の病人の良醫の教に隨ひて所患を除くことを得るが如し。

【四八】次に答。其中初に問を歎す。

【四九】次に正答。其中初に法。

【五〇】次に譬。其中初に良醫の譬。之に譬、合の二段あり。

【五一】阿摩勒水。阿摩勒(アモレ)は、餘甘子と譯す、果實の名。此界の汁液を阿摩勒水と云ふ。初め飲む時澀味を覺ゆ

るも漸次甘味を増すといふ。

【五二】尼波羅(ニパロー) 雪山にある尼波羅樹の液の意か。

鉢書羅(ハツショラ)は煮樹湯と譯す、水藥の名なり。



【五】復次に善男子、一人有りて善く衆語を解する。大衆の中に在り。是の諸の大衆、熱渴に逼められて成く聲を發して言はく、「我水を飲まんと欲す、我水を飲まんと欲す。是の人即時に、清冷水を以て其の種類に隨ひ、説きて「是水」と言ひ、或は「(五)波尼」と言ひ、或は「鬱持」と言ひ、或は「婆利藍」と言ひ、或は「婆利」と言ひ、或は「波耶」と言ひ、或は「(五)甘露」と言ひ、或は「牛乳」と言ふ。是の如き等の無量の水の名を以て大衆の爲に説くが如し。善男子、如來も亦爾なり。一つの聖道を以て諸の聲聞の爲に種種に演説す。信根等より八聖道に至る。

【義】また復次に善男子、譬へば金師の一種の金を以て、意に隨ひて種種の瓔珞を造作す。所謂鉗鎖、環釧、釵鐙、天冠、臂印なり。是の如きの差別不同ありと雖も、然も金を離れざるが如し。善男子、如來も亦爾なり。一つの佛道を以て諸の衆生に隨ひて種種分別して爲に之を説く。或は一種を説く、所謂諸佛一道にして二無し。復二種を説く、所謂定、慧なり。復三種を説く、見、慧、智を謂ふ。復四種を説く、所謂見道、修道、無學道、佛道なり。復

五種を説く、所謂信行道、法行道、信解脫道、見到道、身證道なり。復六種を説く、所謂須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道、辟支佛道、佛道なり。復七種を説く、所謂念覺分、擇法覺分、精進覺分、喜覺

【五三】次に飲水の譬。之に譬、合の二段あり。  
 【五四】波尼 (Pāṇīya)、鬱持 (Uttariya)、婆利藍 (Pālīka)、婆利 (Pālī)、波耶 (Pāyā) は、何れも水の異稱。安註に曰く、波尼は罽賓の水、鬱持は東天竺の水、婆利藍は中天竺の水、婆利は聲論の水の名、波耶は藥和水の名なりと。  
 【五五】甘露、梵語 Amrita の譯。天酒、美露とも稱す。  
 【義】次に金師の譬。之に譬、合の二段あり。

分、除覺分、定覺分、捨覺分なり。復八種を説く、所謂正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。復九種を説く、所謂八道及び信なり。復十種を説く、所謂十力なり。復十一種を説く、所謂十力、大慈なり。復十二種を説く、所謂十力、大慈、大悲なり。復十三種を説く、所謂十力、大慈、大悲、念佛三昧なり。復十六種を説く、所謂十力、大慈、大悲、念佛三昧、及び佛所得の三正念處なり。復二十道を説く、所謂十力、四無所畏、大慈、大悲、念佛三昧、三正念處なり。善男子、是の道一體なり、如來昔日衆生の爲の故に種種に分別す。

【五】 復次に善男子、譬へば一火の所然に因るが故に、種種の名を得るが如し。所謂木火、草火、糠火、藁火、牛馬糞火なり。善男子、佛道も亦爾なり、一つにして二つ無し。衆生の爲の故に種種に分別す。

【六】 復次に善男子、譬へば一識分別して六を説く。若眼に至れば則ち眼識と名く。乃至意識も亦復是の如くなるが如し。善男子、道も亦是の如し、一つにして二つ無し。如來諸の衆生を化せんが爲の故に種種に分別す。

【七】 復次に善男子、譬へば一色の眼所見の者は則ち名けて色と爲し、耳所聞の者は則ち名けて聲と爲し、鼻所嗅の者は則ち名けて香と爲し、舌所嘗の者は則ち名けて味と爲し、身所覺の者は則ち名けて

【五七】 次に無火の譬。之に譬、合の二段あり。  
 【五八】 次に一識の譬。之に譬、合の二段あり。

觸と爲すが如し。善男子、道も亦是の如く、一つにして二つ無し。如來衆生を化せんと欲するが爲の故に種種分別す。善男子、是の義を以ての故に、八聖道分を以て道聖諦と名く。善男子、是の四聖諦は諸佛世尊次第に之を説く。是の因縁を以て無量の衆生生死を度することを得。」

【六一】 迦葉、佛に白して言さく、「世尊、昔佛、一時恆河の岸戸首林の中に在り。爾の時に如來、少樹葉を

取りて諸の比丘に告げたまはく、「我今手中に捉る所の葉多きや、一切地に因る草木の葉多きや、諸の比丘言さく、「世尊、一切地に因る草木の葉多きや、一切地に

稱計すべからず。如來の捉りたまふ所少くして言ふに足らず。」諸の比丘、

我覺了する所の一切諸法、大地に因りて生ずる草木等の如く、諸の衆生の爲に宣説する所は手中の葉の如し。」世尊、爾の時に是の如きの言を説きた

まはく、「如來所了の無量の諸法、若四諦に入らば則ち己説と爲ん。若入ら

ざれば五諦有るべし。」佛、迦葉を讚じたまはく、「善い哉善い哉善男子、

汝が今の所問は則ち能く無量の衆生を利益し安隱快樂にす。善男子、是の如きの諸法は悉く已に攝し

て四聖諦の中に在り。」

【六二】 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「是の如き等の法、若四諦に在らば、如來何が故ぞ不説と唱言し

たまふ。」佛の言はく、「善男子、復中に入ると雖も猶説と名けず。何を以ての故に。善男子、聖諦

【六〇】 是より總結す。  
【六一】 是より無量の四諦慧を明す。其中初に無量の四諦を明す。而して先づ問。  
【六二】 次に答。  
【六三】 次に結して四無量慧と爲す。其中初に問。  
【六四】 次に答。其中初に根を示し智を辨す。

を知るに二種の智有り。一つには中、二つには上なり。中とは聲聞、緣覺、上とは諸佛、菩薩なり。

〔六五〕 善男子、諸陰苦と知るを名けて中智と爲す。諸陰を分別するに無量の相有り、悉く是諸苦なり。

是聲聞、緣覺の知る所に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於て覺に之を

説かす。〔六六〕 善男子、諸入とは之を名けて門と爲し、亦名けて苦と爲すを知る。是を中智と名くり諸入

を分別するに無量の相有り、悉く是諸苦なり。諸の聲聞、緣覺の所知に非

ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かす。

〔六七〕 善男子、諸界とは之を名けて分と爲し、亦名けて性と爲し、亦名けて苦

と爲すを知る。是を中智と名く。諸界を分別するに無量の相有り、悉く是

諸苦なり。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の

如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かす。〔六八〕 善男子、色の壞相を知る、

是を中智と名く。諸色を分別するに無量の壞相有り、悉く是諸苦なり。諸

の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かす。

〔六九〕 善男子、受は覺相と知る、是を中智と名く。諸受を分別するに無量の覺相有り、諸の聲聞、緣覺の

所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かす。〔七〇〕 善男子、

想は取相と知る、是を中智と名く。是の想を分別するに無量の取相有り。諸の聲聞、緣覺の所知に非

〔六五〕 次に正しく諸相を釋す。  
 其中初に苦、而して先う、入界に約す、今は其中の五陰、

〔六六〕 次に十二入、

〔六七〕 次に十八界、

〔六八〕 次に聲聞、菩薩に約す、其中初に色、

〔六九〕 次に受、

〔七〇〕 次に想。

す。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。(七)善男子、行は作相と知る、是を中智と名く。是の行を分別するに無量の作相あり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。(三)善男子、識は分別相と知る、是を中智と名く。是の識を分別するに無量の相知あり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。

(七) 善男子、愛の因縁能く五陰を生ずと知る、是を中智と名く。一人の起愛無量無邊なる、聲聞、緣覺の知ること能はざる所なり。能く一切衆生、起す所の是の如き等の愛を知る。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。(三) 善男子、煩惱を滅すと知る、是を中智と名く。煩惱を分別するに稱計すべからず。滅も亦是の如し、稱計すべからず、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。(三) 善男子、是の道相は能く煩惱を離ると知る。是を中智と名く。道相を分別するに無量無邊なり。所離の煩惱も亦無量無邊なり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。

(七) 善男子、世諦を知る者、是を中智と名く。世諦を分別するに無量無邊にして稱計すべからず、諸

- 【七〇】 次に行。
- 【七一】 次に識。
- 【七二】 次に集諦。
- 【七三】 次に滅諦。
- 【七四】 次に道諦。
- 【七五】 次に結して二無量と爲す。其中初に二諦。

の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。善男子、一切の行は無常、諸法は無我、涅槃は寂滅なり、是第一義と知る。是を中智と名く。第一義は無量無邊にして稱計すべからざるを知る。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を説かず。」

【七六】 爾の時に文殊師利菩薩、佛に白して言さく、「世尊、所説の世諦第一義

諦は其の義云何。世尊、第一義の中世諦有りや不や。世諦の中第一義有り

や不や。知其有らば、則ち是一諦なり。如其無ければ、將如來虛妄の説に

非ずや。」善男子、世諦とは即ち第一義諦なり。」世尊、若爾らば則

ち二諦無し。」佛の言はく、「善男子、善方便有り、衆生に隨順して二諦

有りと説く。」善男子、若言説に隨ふときは、則ち二種有り。一つには世法、

二つには出世法なり。善男子、出世人の所知の者の如き、名けて第一義諦

と爲し、世人の知る者を名けて世諦と爲す。」善男子、五陰和合を稱して

某甲と言ふ。凡夫衆生其の所稱に隨ふ、是を世諦と名く。陰を解するに某

甲名字有ること無く、陰を離れて亦某甲名字無し。出世の人、其の性相の如くにして能く之を知るを

【八二】 次に生滅の二諦。

を明す。

【八一】 次に答。其中初に大意を

明す。

【八二】 次に廣く二諦を説く。こ

の文古來の難關なり。一説は

六種を分つ、一説は八種を分

つ。天台大師法華玄義中に七

種二諦を説く。今章安は天台

を指南として八種となして釋

す。その中初に隨情智の二諦

を明す。

第一義諦と名く。復次に善男子、或は法、名有り實有る有り。或は復法、名有りて實無き有り。善

男子、有名無實は即ち是世諦、有名有實は第一義諦なり。善男子、我、衆生の壽命知見、養育丈

夫、作者受者、熱時の飢、乾闥婆城、龜毛兎角、旋火の輪、諸陰界入の如き、是を世諦と名け、苦集

滅道を第一義諦と名く。善男子、世法に五種有り。一つには名世、二つには句世、三つには縛世、

四つには法世、五つには執著世なり。善男子、云何が名世なる。男女、緋衣、車乘、屋舎、是の如き

等の物、是を名世と名く。云何が句世なる。四句一偈、是の如き等の偈、

是を句世と名く。云何が縛世なる。推合繫結、束縛合掌、是を縛世と名く。

云何が法世なる。權を鳴して僧を集め、鼓を敲りて兵を戒め、貝を吹きて

時を知らしむるが如き、是を法世と名く。云何が執著世なる。遠人を望む

染衣の者有り、想を生じ執著して是沙門にして婆羅門に非すと云ふ。結繩

を身上に横へ佩ぶる有るを見れば、便ち念を生じて、是婆羅門にして沙門に非すと云ふが如きなり。

是を執著世と名く。善男子、是の如きを名けて五種の世法と爲す。善男子、若衆生、是の如き等の五

種の世法に於て、心顛倒無く、實の如くにして知る有らば、是を第一義諦と名く。復次に善男子、

若し焼、若し割、若し死、若し壞、是を世諦と名く。焼無く、割無く、死無く、壞無し、是を第一義

諦と名く。復次に善男子、八苦相有るを名けて世諦と爲す。生無く、老無く、病無く、死無く、愛

無無く、老無く、病無く、死無く、愛

- 【全】 次に無生の二諦。
- 【四】 次に單俗復眞の二諦。
- 【六】 次に單俗單中の二諦。
- 【六】 次に複俗單中の二諦。
- 【七】 次に複俗複中の二諦。

別離無く、怨憎會無く、求不得無く、五盛陰無し、是を第一義諦と名く。(六八)復次に善男子、譬へば一人の多く能くする所有り。若其走るときは則ち走者と名け、若收め刈るときは復刈者と名け、若飲食を作さば作食者と名け、若材木を治すれば則ち工匠と名け、金銀を鍛ふる時は金銀師と言ふ。是の如く一人に多くの名字有るが如く、法も亦是の如し。其の實は一つにして多量有り。父母の和合に依因りて生ずるを名けて世諦と爲し、十二因縁の和合して生ずる者を第一義諦と名く。

文殊師利菩薩、佛に白して言さく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

【六八】 復次に善男子、譬へば一人の多く能くする所有り。若其走るときは則ち走者と名け、若收め刈るときは復刈者と名け、若飲食を作さば作食者と名け、若材木を治すれば則ち工匠と名け、金銀を鍛ふる時は金銀師と言ふ。是の如く一人に多くの名字有るが如く、法も亦是の如し。其の實は一つにして多量有り。父母の和合に依因りて生ずるを名けて世諦と爲し、十二因縁の和合して生ずる者を第一義諦と名く。

【六九】 佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

【七〇】 佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

【七一】 佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

【七二】 佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』

【七三】 佛の言はく、『世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。』佛の言はく、『善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無し。顛倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若虚妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所説にして魔の所説に非ず。若是魔説にして佛説に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道清淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。』



〔卷〕 文殊師利、佛に白して言さく、『世尊、若眞實を以て實諦と爲さば、眞實の法は即ち是如來、虛

空、佛性なり。若是の如き者は、如來、虛空、及與佛性と差別有ること無

けん。』佛、文殊師利に告げたまはく、『善有り諦有り實有り、集有り諦有

り實有り、滅有り諦有り實有り、道有り諦有り實有り。善男子、如來苦に

非ず、諦に非ず、是實なり。虛空苦に非ず、諦に非ず、是實なり。佛性苦

に非ず、諦に非ず、是實なり。』文殊師利、言ふ所の苦とは無常相と爲す。

是可斷相なり、是を實諦と爲す。如來の性は、苦に非ず、無常に非ず、可斷相

に非ず。是の故に實と爲す。虛空、佛性も亦復是の如し。二〇〇 復次に善男

子、言ふ所の集とは、能く五陰をして和合して生ぜしむ。亦名けて苦と爲

し、亦無常と名く。是可斷相なり、是を實諦と名く。善男子、如來是集性

に非ず、是陰因に非ず、可斷相に非ず。是の故に實と爲す。虛空、佛性も

亦復是の如し。二〇一 善男子、言ふ所の滅とは煩惱滅を名く。亦常、無常な

り。二乗の所得を名けて無常と曰ふ。諸佛の所得は是則ち常と名け、亦證

法と名く。是を實諦と爲す。善男子、如來の性は、名けて滅にして能く煩

惱を滅すと爲さず。常、無常に非ず、證法と名けず常住にして無變なり。是の故に實と爲す。虛空、

〔七〇〕 次に論議。其中七章あり 初に境に約し、而して先づ領

問。この問意は、一度之を見

れば如來と、虛空と、佛性と

の三種何の差別ありやと云ふ

に似たれど、下の答意を尋ね

ればこの三種一實諦と何の差

別ありやと問ふなり。

〔七六〕 次に答。其中初に兩章門

を唱ふ。之に昔の四諦、今の

一實を唱ふの二門あり。

〔七九〕 次に兩章門を釋す。其中

初に苦。之に昔の實諦、今の

實實を釋するの二段あり。

〔八〇〕 次に滅。之に昔の實諦、今

の諸實を釋するの二段あり。

佛性も亦復是の如し。〔一〇一〕善男子、道とは能く煩惱を斷ず。亦常、無常、是可修の法なり。是を實諦

と爲す。如來道にして能く煩惱を斷ずるに非ず、常、無常に非ず、可修の法に非ず。常住にして不變

なり、是の故に實と爲す。虚空、佛性も亦復是の如し。〔一〇二〕復次に善男子、

眞實と言ふは即ち是如來なり。如來とは即ち是眞實、眞實とは即ち是虚空、

虚空とは即ち是眞實、眞實とは即ち是佛性、佛性とは即ち是眞實なり。

〔一〇三〕次は即ち是眞實、眞實とは即ち是佛性、佛性とは即ち是眞實なり。

〔一〇四〕次は即ち是眞實、眞實とは即ち是佛性、佛性とは即ち是眞實なり。

〔一〇五〕次に更に是非を結す。其中初に三法四諦に異なり、故に是諦實なりと結す。

〔一〇六〕次に三法有爲有漏と異なり、是故に是實なりと結す。

〔一〇七〕次に心に約す。其中初に問。

〔一〇八〕次に答。

文殊師利、佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如き不顛倒の者を、

名けて實諦と爲す』と。若爾らば四諦の中四倒有りや不や。如其有らば、云

何ぞ説きて顛倒有ること無きを名けて實諦と爲し、一切の顛倒を名けて實

と爲さずと言ふや。』佛、文殊師利に告げたまはく、『一切の顛倒は皆苦諦に入る。諸の衆生顛倒

心有り、名けて顛倒と爲すが如し。善男子、譬へば人有りて父母、尊長の教敎を受けず。受くと雖も

隨順修行すること能はず。是の如きの人等を名けて顛倒と爲すが如し。是の如きの顛倒は是苦なら

ざるに非ず、即ち是苦なり。』

〔一〇〕 文殊師利の言さく、『佛の、「不慮妄の者即ち是實諦」と説きたまふ所の如く、若爾らば當に知るべし、慮妄は則ち實諦に非ず。』

佛の言はく、『善男子、一切の慮妄は皆苦諦に入る。衆生他を欺誑する有らば、是の因縁を以て地獄、畜生、餓鬼に墮するが如し。是の如き等の法を名けて慮妄と爲す。』

是の如きの慮妄は是苦ならざるに非ず、即ち是苦なり。聲聞、緣覺、諸佛世尊は遠離して行せず、故に慮妄と名く。是の如き慮妄は、諸佛二乗の斷除する所なるが故に、故に實諦と名く。』

〔一一〕 文殊師利の言さく、『佛の、「大乘是實諦」と説きたまふ所の如きは、當に知るべし、聲聞、辟支佛乘は則ち不實と爲ん。』

佛の言はく、『文殊師利、彼の二乗は亦實、不實なり。聲聞、緣覺、諸の煩惱を斷ずれば、則ち名けて實と爲す。無常、不住は是變易の法なれば、名けて不實と爲す。』

〔一二〕 文殊師利の言さく、『佛の所説の如く、若佛の所説は名けて實と爲さば、當に知るべし、魔説は則ち不實と爲ん。世尊、魔の所説の如き聖諦に攝するや不や。』

佛の言はく、『文殊師利、魔の所説は二諦に攝せらる、所謂苦、集なり。凡そ是の一切は非法、非律なり、人をして利益を得しむること能はず。終日宣説すとも亦人の苦を見、集を斷じ、滅を證し、道を修する有ること無し。是を慮妄と

- 〔一〇八〕 次に音處に約す。其内初に問
- 〔一〇九〕 次に答。
- 〔一一〇〕 次に人に就く。其中初に問
- 〔一一一〕 次に答。
- 〔一一二〕 次に教に就く。其中初に問
- 〔一一三〕 次に答。

名く。是の如き虚妄を名けて魔説と爲す。』

文殊師利の言さく、『佛の所説の如く、『一道清淨二者有ること無し』と。諸の外道等も亦復説

きて言はく、『我一道清淨無二有り』と。若一道は實諦と言はば、彼の外

道と何の差別か有る。若差別無ければ、説きて一道清淨と言ふべからず。』

佛の言はく、『善男子、諸の外道等、苦集諦有りて滅道諦無し。非滅の

中に於て滅想を生じ、非道の中に於て道想を生じ、非果の中に於て果想を

生じ、非因の中に於て因想を生ず。是の義を以ての故に、彼一道清淨無

二無し。』

文殊師利の言さく、『佛の所説の如く、『有常、有我、有樂、有淨、是

實義』とは、諸の外道等には實諦有るべし、佛法の中には無からん。何

を以ての故に。諸の外道輩も亦復説きて言はく、『諸行は是常。云何が是常。

可意、不可意の諸業報を受けて失はざるが故に。可意とは十善報と名け、不

可意とは十不善報なり。若諸行皆悉く無常と言はば、而も作業の者、此に於て已に滅すれば誰か復彼

に於て果報を受けんや。是の義を以ての故に、諸行は是常なり。殺生の因縁、故に名けて常と爲

す。世尊、若諸行悉く無常と言はば、能殺、可殺の二俱に無常ならん。若無常ならば誰か地獄に於

【二四】次に因體に約す。其中初に問。

【二五】次に答。

【二六】次に果體に約す。其中初に問。之に三段ありて初に外道に四徳有るを唱ふ。

【二七】次に釋。其中凡て二十四復次あり。初の八復次は常有なりと計す。之に八段あり先づ通じて因果を以ての故に常有なり。

【二八】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【二九】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三〇】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三一】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三二】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三三】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三四】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三五】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三六】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

【三七】次に殺生の因必ず惡果を得るが故に常。

て罪報を受けん。若定んで地獄の受報有りと言はば、當に知るべし、諸行は實に無常に非じ。 (二五) 世尊、繫心専念も亦名けて常と爲す。所謂十年所念乃至百年も亦忘失せず。是の故に常と爲す。若無常ならば、本所見の事誰か憶し誰か念せん。是の因縁を以て一切諸行無常に非ざるなり。 (二六) 世尊一切の憶想も亦名けて常と爲す。人有りて先に他人の手足、頭項等の相を見、後時に若見れば便ち還つて之を識る。若無常ならば本相滅すべし。 (二七) 世尊、諸の所作の業久しく修習するを以て、若初學より或は三年を經、或は五年を經て然して後善く知る。故に名けて常と爲す。 (二八) 世尊、算數の法一より二に至り、二より三に至り、乃至百千に至る。若無常ならば初の一滅すべし。初の一若滅せば誰か復二に至らん。是の如く常一にして終に二有ること無し。一滅せざるを以ての故に、二に至り乃至百千に至ることを得ん。是の故に常と爲す。 (二九) 世尊、讀誦の法の如く、一阿含を誦して二阿含に至り、乃至三四阿含に至る。如其無常ならば讀誦すべき所終に四に至らず。是の讀誦增長の因縁を以ての故に名けて常と爲す。 (三〇) 世尊、講衣、車乘人の負責の如し。大地の形相、山河樹林、藥木草葉、衆生治病、皆悉く是常にして亦復是の如し。世尊、一切外道皆是の説を作す、諸行は是常と。若是常ならば、即ち是實諦なり。

- 【二九】次に能く専念するに據るが故に常。
- 【三〇】次に憶想に據り常となすの文。
- 【三一】次に修習に據る。
- 【三二】次に算數に據る。
- 【三三】次に讀誦に據る。
- 【三四】次に形相に據る。

【二五】世尊、諸の外道有りて復言はく、「樂有り、云何が知るや。受者定んで可意報を得るが故に。」世尊、凡を樂をうくる者、必定之を得ん。所謂大梵天王、大自在天、釋提桓因、毗紐天、及び諸の人天なり。是の義を以ての故に必定樂有らん。【二七】世尊、諸の外道有りて復言はく、「樂有り、能く衆生をして求望を生せしむるが故に、飢者食を求め、渴者飲を求め、寒者溫を求め、熱者涼を求め、極者息を求め、病者差を求め、欲者色を求む。若樂無くんば、彼何に緣りてか求めん。求有るを以ての故に、故に樂有るを知る。」【二八】世尊、諸の外道有りて復是の言を作さく、「施能く樂を得。世間の人好んで沙門、諸の婆羅門、貧窮困苦に衣服、飲食、臥具、醫藥、象馬、車乘、秣香、塗香、衆華、屋宅、依止燈明を施す。是の如き等の種種の惠施を作す。我後世可意の報を受くるが爲にす。是の故に當に知るべし、決定して樂有り」と。【二九】世尊、諸の外道有りて復是の言を作さく、「因縁を以ての故に、當に知るべし樂有り。所謂受樂者、因縁有るが故に名けて樂觸と爲す。若樂無き者何ぞ因縁を得ん。兔角無ければ則ち因縁無きが如し。樂因縁有れば則ち樂有ることを知る。」【三〇】世尊、諸の外道有りて復是の言を作さく、「上中下の故に當に知るべし樂有り」と。下受樂者は釋提桓因、中受樂者は大梵天王、上受樂者は大自在天なり。是の如きの上中下有るを以ての故に、當に知るべし樂有

- 【二五】次に樂有りと計す。其中初に因果に據る。
- 【二六】毗紐天（パーヌ）（パーヌ）幻惑の義。那羅延（Nāgārjuna）天の別名なり。那羅延とは天上の力士の名。
- 【二七】次に求有に據る。
- 【二八】次に樂因に據る。
- 【二九】次に樂縁に據る。
- 【三〇】次に三品に據る。

りと。」

（三）世尊、諸の外道有りて復言はく、「淨有り、何を以ての故に。若淨無ければ欲を起すべからず。

若欲を起さば當に知るべし淨ありと。」（三）又復説きて言はく、「金銀、珍寶、瑠璃、頗梨、磚磈、碼

瑙、珊瑚、眞珠、璧玉、珂貝、流泉、浴池、飲食、衣服、華香、麝香、塗香、燈燭の明、是の如き等

の物悉く是淨法なり。（三）復次に淨有り、謂はく五陰とは即ち是淨器。

諸の淨物を盛る。所謂人天、諸仙、阿羅漢、辟支佛、菩薩、諸佛なり。

是の義を以ての故に、之を名けて淨と爲す。」

（三）世尊、諸の外道有りて復言はく、「我有りて觀見する所有り、能く造

作するが故に。譬へば人有りて陶師の家に入り、復陶師の身を見ずと雖も

輪繩を見るを以て、定んで其の家必ず是陶師と知るが如し。我も亦是の如

し。眼色を見已らば、必ず我有ることを知る。若我無くんば誰か能く色を

見ん。聲を聞き乃至觸法も亦復是の如し。（三）復次に我有り、云何が知ることを得。相に因るが故に

知る。何等をか相と爲す。喘息視胸、壽命役心、諸の苦樂を受く、貪求瞋恚是の如き等の法、悉く

是我の相なり。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。（三）復次に我有り、能く味を別するが

故に。人の果を食する有り、見已りて味を知る。見の故に當に知るべし、必定して我有ることを。（三）復

【三】次に淨有り」と計す。其中  
初に淨因に據る。

【三】次に淨縁に據る。

【三】次に淨器に據る。

【三】次に我有りと計す。其中  
初に造作に據る。

【三】次に相貌に據る。

【三】次に味を別するに據る。

【三】次に作業に據る。

次に我有り、云何が知るや。業を執作するが故に。鎌を執りて能く刈り、斧を執りて能く斫り、餅を執りて水を盛り、車を執りて能く御す。是の如き等の事、我執して能く作す。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。生時に即して乳哺を得んと欲し、宿習に乗するが故に。是を以て當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。他の衆生を和合利益するが故に。譬へば餅衣、車乘、田宅、山林、樹木、象馬、牛羊、是の如き等の物、若和合すれば則ち利益有るが如し。此の内の五陰も亦復是の如し。

眼等の諸根和合有るが故に則ち我を利益す。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。遮法有るが故に。物有るが故に則ち遮闇有り。物若無ければ則ち遮有ること無きが如し。若遮有らば則ち我有ることを知る。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。伴、非伴の故に。親と非親とは是伴侶に非ず。正法、邪法も亦伴侶に非ず。智と非智とも亦伴侶に非ず。沙門、非沙門、婆羅門、非婆羅門、子、非子、盡、非盡、夜、非夜、我、非我、是の如き等の法律、非伴と爲す。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。世尊、諸の外道等種種に常樂我淨有りと説く。當に知るべし、定んで常樂我淨有らん。

世尊、是の義を以ての故に、諸の外道等も亦説きて「我真諦に有り」と言ふことを得。』

- 【一三】次に乳を求むるに據る。
- 【一四】次に名字に據る。
- 【一五】次に遮有るに據る。
- 【一六】次に伴類に據る。
- 【一七】次に結。



(二四) 佛の言はく、「善男子、若沙門、婆羅門有りて、常有り、樂有り、淨有り、我有らば、是沙門に非ず、婆羅門に非ず。」何を以ての故に。生死に迷ひ、一切智の大導師を離るるが故に。是の如きの沙門、婆羅門等、諸欲に沈没し善法羸損するが故に。是の諸の外道繋がれて貪欲、瞋恚、癡の獄に在りて堪忍愛樂するが故に。是の諸の外道業果自作、自愛と知ると雖も、而も猶惡法を遠離すること能はず。是の諸の外道、是正法、正命、自活に非ず。何を以ての故に。智慧の火無ければ消すること能はざるが故に。是の諸の外道、上妙の五欲に貪著せんと欲すと雖も、善法に貪し、勤修せざるが故に。是の諸の外道正解脱の中に往至せんと欲すと雖も、而も持戒足成就せざるが故に。是の諸の外道樂を求めんと欲すと雖も、而も樂因縁を求むること能はざるが故に。是の諸の外道、復一切諸苦を憎惡すと雖も、然も其の所行未だ諸苦の因縁を遠離すること能はず。是の諸の外道、四大毒蛇に躑はると雖も、猶放逸を行じて謹慎すること能はず。是の諸の外道無明に覆はれ、善友を遠離し、樂んで三界無常熾然大火の中に有りて、而も出づること能はず。是の諸の外道諸の煩惱難愈の病に遇ふとも、而も復大智良醫を求めず。是の諸の外道、未來に方りて當に無邊の險遠の路を涉るべし。而も善法の資糧を以て自ら莊嚴することを知らず。是の諸の外道常に淫欲、災毒に害せられて、反つて五欲の霜毒を抱持す。是の諸の外道瞋恚熾盛にして、而も復反つて更に惡友に親近す。是の諸の外道、常に無明に覆蔽せられて、而

【二四】次に答。其中初に略して答ふ。其中初に非。

も反つて邪惡の法を推求す。是の諸の外道常に邪見に誑惑せられて、而も反つて中に於て親善想を生ず。是の諸の外道、甘果を食せんことを希ひて、而も苦子を種う。是の諸の外道已に煩惱の闇室の中に處して、反つて大智の炬明を遠離す。是の諸の外道、煩惱の渴を患ひて、而も復又諸欲の鹹水を飲む。是の諸の外道生死の無邊の大河に漂没して、而も復無上の船師を遠離す。是の諸の外道、諸倒に迷惑して諸行常と言ふ。諸行若常ならば是の處有ること無けん。

# 卷の第十三

## 聖行品の下

善男子、我諸行悉く皆無常と觀す。云何が知るや。因縁を以ての故なり。若諸法縁より生ずる者有らば、則ち無常と知る。是の諸の外道、一法の縁より生ぜざる有ること無し。善男子、佛性は無生無滅、無去無來なり。過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、因の所作に非ず、無因の作に非ず、作に非ず作者に非ず、相に非ず無相に非ず、有名に非ず無名に非ず、名に非ず色に非ず、長に非ず短に非ず、陰界入の攝持する所に非ず。是の故に常と名く。善男子、佛性は即ち是如來、如來は即ち是法、法は即ち是常なり。善男子、常とは即ち是如來、如來は即ち是僧、僧は即ち是常なり。是の義を以ての故に、因より生ずる法は、名けて常と爲さず。是の諸の外道は、一法の因より生ぜざる有ること無し。善男子、是の諸の外道は、及び法を見ず。是の故に外道の言説すべき所は、悉く是れ妄語にして眞諦有ること無し。

聖行品の下

- 【一】 是より廣く答ふ。其中初に廣く我を計するを破す。之に三段あり。初に外道の理非の文、而して先づ非。
- 【二】 次に過。
- 【三】 次に非を結す。
- 【四】 次に其言謬を明す。其中初に其言謬を破す。謬とは、佛性三寶の眞理を見ざる故謬くところあるも謬にして眞に非ず、若し此理を見れば言即ち眞實なり。

諸の凡夫人、先に餅衣、車乘、舍宅、城郭、河水、山林、男女、象馬、牛羊を見、後相似るを見れば、便ち是常と言ふ。當に知るべし、其の實は是常に非ざるなり。善男子、一切の有爲は皆は無常なり。虚空は無爲なり、是の故に常と爲す。佛性は無爲なり、是の故に常と爲す。虚空とは即ち是佛性、佛性とは即ち是如來、如來とは即ちは無爲、無爲とは即ち是常、常とは即ち是法、法とは即ち是僧、僧とは即ちは無爲、無爲とは即ち是常なり。

善男子、有爲の法は凡そ二種有り、色法、非色法なり。非色法とは心心數法、色法とは地水火風なり。善男子、心を無常と名く。何を以ての故に。性は攀緣相應分別の故なり。善男子、眼識性異、乃至意識性異、是の故に無常なり。善男子、色境界異、乃至法境界異、是の故に無常なり。善男子、眼識相應異、乃至意識相應異、是の故に無常なり。善男子、若眼識異、乃至意識異ならば、則ち無常を知る。法相似て念念に生滅するを以て、凡夫見已りて之を計して常と爲す。善男子、諸の因緣相破壊すべきが故に、亦無常と名く。所謂眼に因り、色に因り、明に因り、思惟に因りて眼識を生ず。耳識生ずる時所因各異なり、眼識の因緣に非ず。乃

- 【五】次に其所執を破す。前に文殊邪計を明す文中の第八復次に大地形相衣服及び車乘等を執じて皆常なりと計す、今この執を破す。
- 【六】次に是非を顯す。
- 【七】次に正しく所問を答ふ。其中初に雙べて色心兩章門を辨す。
- 【八】次に偏に心の無常を明す。其中初に無常の文。これに攀緣異、六識異、六塵異、相應異の四段あり。
- 【九】次に常執を破す。之に識獨緣すべからず、六識異なるべからず、所因異なるべからず、諸名異なるべからざるを明すの四段あり。

至意誠異も亦是の如し。復次に善男子、諸行を壞する因縁の故に、心を無常と名く。所謂無常心を修する異なり、苦空無我心を修する異なり、心若常ならば常に無常を修すべし。尙苦空無我を觀ずることを得ず。況や復常樂淨我を觀ずることを得んや。是の義を以ての故に、外道法の中、常樂淨我を攝取すること能はず。善男子、當に知るべし、心法必定無常なり。復次に善男子、心性異なるが故に名けて無常と爲す。所謂聲聞心性異、緣覺心性異、諸佛心性異なり。

一切外道心に三種有り。一つには出家心、二つには在家心、三つには在家  
 遠離心なり。樂相應心異、苦相應心異、不苦不樂相應心異、貪欲相應心異、  
 瞋恚相應心異、愚癡相應心異、一切外道心相亦異、所謂愚癡相應心異、疑  
 惑相應心異、邪見相應心異、進止威儀其の心も亦異なり。善男子、心若  
 常ならば亦復諸色を分別すること能はず。所謂青、黃、赤、白、紫色なり。

善男子、心若常ならば諸の憶念法忘失すべからず。善男子、心若常なら  
 ば、凡そ諸の讀誦增長すべからず。復次に善男子、心若常ならば、説きて已作、今作、當作と  
 言ふべからず。若已作、今作、當作有らば、當に知るべし、是の心必定無常なり。善男子、心若常  
 ならば則ち怨、親、非怨非親無けん。心若常ならば、則ち我物、他物、若は死、若は生と言ふべか  
 らず。心若常ならば所作有りと雖も、增長すべからず。善男子、是の義を以ての故に、當に知るべ

【一〇】次に重ねて無常を明す。之に三聖心異、三凡夫心異、三愛心異、三毒心異、三外道心異を明すの五段あり。

【一一】次に重ねて常執を破す。之に第三の專念、第四の憶念、第七の讀誦を破す、剩して四五六有り、第五の修習を破す、生後の六段あり。

し、心性各各別異なり。別異有るが故に、當に知るべし、無常なり。

(三) 善男子、我今此の非色法の中に於て、無常を演說して、其の義已に顯はる。復當に汝が爲に色無

常を説くべし。(三) 是の色常無く、本生有ること無し、生じ已りて滅するが

故に。内身胎に處す。(四) 歌羅邏の時。本生有ること無し、生じ已りて變する

が故に。外の牙莖本も亦生無し、生じ已りて變するが故に。是の故に當に

知るべし、一切の色法悉く皆無常なり。善男子、有らゆる肉色は時に隨

ひて變ず。歌羅邏の時異、阿浮陀の時異、伽那の時異、閉手の時異、諸

砲の時異、初生の時異、嬰孩の時異、童子の時異、乃至老の時各各變異な

り。所謂外色も亦復是の如し、牙異莖異、枝異葉異、華異果異なり。復次

に善男子、内味も亦異なり。歌羅邏の時、乃至老の時各各變異す、外味も

亦爾なり。牙、莖、枝、葉、華、果味異なり。歌羅邏の時力異、乃至老の

時力異なり。歌羅邏の時狀貌異、乃至老の時狀貌も亦異なり。歌羅邏の

時果報異、乃至老の時果報も亦異なり。歌羅邏の時名字異、乃至老の時名

字も亦異なり。所謂内色壞し已りて還つて合す、故に知る無常なり。外の樹木も亦壞し已りて還つて合

す、故に知る無常なり。次第に漸く生ず、故に無常を知る。次第に歌羅邏を生ずる時、乃至老の時次第に

【三】 次に偏に色無常を明す。其中初に前を結し後を生ず。

【二】 次に正しく無常を辨す。之に初生異、時異、味異、力異、形體異、果報異、名字異、壞合異、次第生異、次第滅異の十段あり。

【四】 歌羅邏(Kalāra) 凝骨、維骨と譯す、託胎の初より七日間をいふ。胎内五位の一。

【五】 阿浮陀(Arputa) 砲、睡物と譯す、託胎後第二の七日間をいふ。

伽那(Gana) は厚と譯し閉手(Pāṇi) は結と譯す。俱に胎内五位の一。

牙を生じ、乃至果子、故に無常を知る。諸色滅すべし、故に無常を知る。歌羅邏滅の時異、乃至果滅の時異、乃至果滅の時異なり。故に無常を知る。凡夫知ること無く、相似生を見て計し以て常と爲す。是の義を以ての故に名けて無常と曰ふ。若無常なれば即ち是苦、若苦なれば即ち是不淨なり。善男子、我、迦葉の上に是の事を問ふに因りて彼に於て已に答ふ。

(二六) 復次に善男子、諸行は無我なり。善男子、一切の法を總じて色、非色と謂ふ。色は我に非ざるなり。何を以ての故に。破すべく、壞すべく、打すべく、裂すべし。生増長の故に。我とは破壞、打裂、生長すべからず。是の義を以ての故に、色の我に非ざるを知る。非色の法も亦復我に非ず。何を以ての故に。因縁生の故なり。善男子、若諸の外道專念を以ての故に、我有るを知るといはば、專念の性質に我に非ざるなり。若專念を以て我性と爲さば、過去の事則ち忘失有り。忘失有るが故に定んで我無きを知る。善男子、若諸の外道憶想を以ての故に、我有るを知るといはば、憶想無きが故に、定んで我無きを知る。説くが如く人手六指有るを見、即ち復問ひて「我先何の處に共に相見るやと言ふ」と。若我有らば、復問ふべからず。相問ふを以ての故に、定んで我無

- 【二六】 是より略して樂淨を破す。其中初に正しく破す。
- 【二七】 次に上已に答ふるを指す。
- 【二八】 是より廣く我を計するを破す。其中初に總じて無我を明し、而して先づ總じて色、非色の二章を唱ふ。
- 【二九】 次に解釋。これに色章、非色章を釋するの二段あり。
- 【三〇】 次に正しく彼の執を破す。其中初に剩して專念有り。
- 【三一】 次に剩して憶想有り。

きを知らん。(三三)善男子、若諸の外道遮を以ての故に我有るを知らん。善男子、遮有るを以て

の故に、定んで我無きを知らん。言ふが如く調達、終に言調達に非すと發せずと。我も亦是の如し。

若定んで是我ならば、終に我を遮らず。我を遮るを以ての故に、定んで我無きを知らん。若遮るを以

ての故に我有るを知らば、汝今遮らず、定んで我無かるべし。(三三)善男子、若諸の外道伴、非伴を以

て我有るを知るといはば、伴無きを以ての故に、我有ること無かるべし。法の伴無き有り、所謂如來

は虚空佛性なり。我も亦是の如く、實は伴有ること無し。是の義を以ての

故に定んで我無きを知らん。(三三)復次に善男子、若諸の外道、名字を以て

の故に我有るを知るといはば、無我法の中亦我の名有り。貧賤の人富貴と

名字するが如し。我死と言ふが如き、若我死せば我則ち我を殺さん。而も

我實に殺すべからず、假に殺我と名く。亦梵人を名けて長者と爲すが如し。

是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。(三三)復次に善男子、若諸の外道、生じ已りて乳を求む

るを以て我有るを知るといはば、善男子、若我有らば一切の嬰兒、不淨火、蛇毒藥を執持すべからず。

是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。(三三)復次に善男子、一切の衆生、三法の中に於て悉く等智有

り、所謂淫欲、飲食、恐怖なり。是の故に我無し。(三三)復次に善男子、若諸の外道相貌を以ての故に

我有るを知るといはば、善男子、相の故に我無し。相無きが故に亦我無し。若人睡る時進止、俯仰、

- 【三】次に第七有遮を破す。
- 【三】次に第八伴類を破す。
- 【四】次に第六名字を破す。
- 【五】次に第五求乳を破す。
- 【六】次に刺して三法有り。
- 【七】次に第二相貌を破す。



視胸すること能はず、苦樂を覺えず、我有るべからず。若進止、俯仰、視胸を以て我有るを知らば、機關、木人も亦我有るべし。善男子、如來も亦爾なり。進まず止まらず、俯せず仰がず、視ず胸せず。不苦不樂、不貪不恚、不癡不行なり。如來是の如く眞實に我有り。復次に善男子、若諸の外道、他の果を食するを見て、口中涎を生ずるを以て我有るを知るといへば、善男子、憶念を以ての故に、見れば則ち涎を生ず。涎我に非ざるなり、我も亦涎に非ず。非喜非悲、非哭非笑、非慳非起、非飢非飽なり。是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。

〔元〕善男子、是の諸の外道癡にして小兒の如く、慧の方便なし。常無常、

苦樂、淨不淨、我無我、壽命非壽命、衆生非衆生、實非實、有非有を了達すること能はず。佛法の中に於て少許分を取る。虚妄に常、樂、淨、我有りと計す、而も實は常、樂、淨、我を知らず。○言、生盲の人乳色を識らず。

便ち他に問ひて言はく、「乳色何にか似る。」他人答へて言はく、「色白くして具の如し」と。盲人復問ふ、「是の乳色は貝聲の如くなりや。」答へて言はく、「いななり。」復問ふ、「貝色何に似ると爲すや。」答へて云はく、「稻米粒の如し。」盲人復問ふ、「乳色柔粟にして稻米粒の如くなりや。稻米粒は復何の似る所ぞ。」答へて言はく、「雪の如し。」盲人復言はく、「彼の稻米粒冷なる雪の如くなりや。雪復何にか似る。」答へて言はく、「猶し白鶴の如し。」是の生盲の人、是の如き四種の譬喩を聞くと雖も、終に乳の眞色を識る

〔天〕次に第三別味を識す。  
 〔元〕是より過を新して問責す  
 其中初に行の非を辨ふ。  
 〔三〕次に教の非を譬ふ。

ことを得ること能はず。是の諸の外道も亦復是の如し。終に常、樂、淨、我を識ること能はざるが如し。善男子、是の義を以ての故に、我が佛法の中眞實諦有り、外道に非ず。」

三 文殊師利、佛に白して言さく、「希有世尊、

如來今に於て般涅槃に臨み、方に復更に無上の法輪を轉ず。乃ち是の如く眞諦を分別することを作す。」

佛、文殊師利に告げたまはく、「汝今、云何ぞ故如來に於て涅槃の想を生ずる。善男子、如來實に是常住不變にして般涅槃せず。

善男子、若我は是佛、我は阿耨多羅三藐三菩提を成ず。我は即ち是法、法は我所、我は即ち是道、道は我所、我は即ち世尊、世尊は即ち是我所、我は即ち聲聞、聲聞は即ち是我所、我は能く法を説きて他をして聽受せしむ。我は法輪を轉ず、餘人は能はずと計する有らば、如來終に是の如きの計を作さず。是の故に如來法

【二】 是より圓の慧心を明す。

其中初に發起。

【三】 次に正説。其中初に不變を明して、圓慧を示し、而して先づ直に示す。之に其六何を止し、其眞理を示すの二段あり。

【三】 次に不轉を明し横に諸事に歷て圓慧を示す。其中初に非果。

【四】 乃至法も、聲、香味、觸の四法を略して乃至と云ふ。

【五】 次に非因。

【六】 檀波羅蜜 (Danaparāmitā)。

【七】 布施到彼岸。

【八】 尸波羅蜜 (Śīlaparāmitā)。

持戒到彼岸。

【九】 禪波羅蜜 (Dhyānaparāmitā)。

【十】 忍辱到彼岸。

【九】 毗婆沙波羅蜜 (Vipassanāparāmitā)。

【十】 精進到彼岸。

【十一】 禪波羅蜜 (Dhyānaparāmitā)。

【十二】 靜慮到彼岸。

【十三】 般若波羅蜜 (Prajñāparāmitā)。

【十四】 般若到彼岸。已上を總稱して六波羅蜜となす、菩薩修行の徳目なり。また、波羅蜜は單に度と譯し惣じてこれを六度と云ふ。

【十五】 四念處 (Satvaṅgānupassanā)。

【十六】 身 (kāya) に對しては不淨の觀念、受 (vedanā) に對しては苦の觀念、心 (citta) に對しては無常の觀念、法 (dharma) に對しては無我の觀念を修すべき修行上の徳目なり。四念處より入聖道に至

輪を轉せず。善男子、若人是の如きの妄計を作す有らん。我は即ち是眼、眼は即ち是我所、耳鼻、舌身、意も亦復是の如し。我は即ち是色、色は是我所、乃至法も亦是の如し。我は即ち是地、地は即ち我所なり。水、火、風も亦是の如し。

善男子、若人計して言はん、「我は即ち是信、信は是我所なり。我は是多聞、多聞は即ち是我所なり。我は是檀波羅蜜、檀波羅蜜は即ち是我所なり。我は是尸(羅)波羅蜜、尸(羅)波羅蜜は即ち是我所なり。我は是尸提波羅蜜、尸提波羅蜜は即ち是我所なり。我は是毗梨耶波羅蜜、毗梨耶波羅蜜は即ち是我所なり。我は是禪波羅蜜、禪波羅蜜は即ち是我所なり。我は是般若波羅蜜、般若波羅蜜は即ち是我所なり。我

は是四念處、四念處は即ち是我所なり。四正勤、四如意足、五根五力、七覺分、八聖道分

聖行品の下

る七種の徳目を總じて三十七助道品、又は助善提法と云ふ。【四二】四正勤 (Catur-samyakki-pāraṇā) 一に已生の惡に對しては除斷の爲めに勤め、二に未生の惡に對しては更に生ぜざらしめん爲めに勤め、三に未生の善に對して生ぜんが爲めに勤め、已生の善に對して增長せしめんが爲めに勤むるをいふ。【四三】四如意足 (Araṇṅga-samāhāri) とは、

- 根 (Indriya) といひ、後者を力 (Bala) といふ。俱に五種の道程即ち信 (Śraddhā)、念 (Śmṛti)、定 (Samādhi)、慧 (Prajñā) を所依となす。
- 【四六】七覺分 (Bodhyanga)。念、精進、定、擇法 (Dharmapavicaya) と、喜 (Pīti) と、捨 (Prasāda) と、捨 (Upekkhā) との七種の目をいふ。
- 【四七】八正道 (Aṣṭa mārga) とは、

欲 (Kāma) 勤 (Vīrya) 心 (Citta) 四種の禪定を行ひて以て神通を得る基礎と爲す徳目。【四四】五根五力 善提を得る道程に、機働より見ると能力より見るとの二種あり、前者を

- 一 正見 (Samyagdarśin)
- 二 正思惟 (Samyakcetanā)
- 三 正語 (Samyagvāc)
- 四 正業 (Samyakkaṃmāna)
- 五 正命 (Samyagājīva)
- 六 正精進 (Samyakvīryā)
- 七 正念 (Samyaksmṛti)
- 八 正定 (Samyaksamādhi)

も亦復是の如し。善男子、如來終に是の如きの計を作さず。是の故に如來法輪を轉せず。善男子、若し「常住にして變易有ること無し」と言はば、云何ぞ説きて、「佛法輪を轉ず」と言はん。是の故に汝今説きて、「如來方に更に上法輪を轉ず」と言ふべからず。

【四八】 次に非轉。  
 【四九】 次に非生。  
 【五〇】 橋陳如 (Kāśyapa) 火器、了本際と譯す、尊者の稱、五比丘の最初に數へらるる人。彼は初め淨飯王の命に依り、釋尊に従ひ共に苦行す。後釋尊が苦行の菩提に益なしと悟り給ふを見て、歎じて釋尊を破戒墮落せりとなして去れり、後波羅捺國鹿野苑に於て釋尊の説法に値ひ弟子となる。即ち佛最初の弟子なり。

善男子、譬へば眼に因り、色に緣り、明に緣り、思惟に緣り、因縁和合して眼識を生ずることを得るが如し。善男子、眼念じて、「我能く識を生ず」と言はず。色乃至思惟、終に「我眼識を生ず」と念はず。眼識も亦復念を作して「我能く自ら生ず」と言はず。善男子、是の如き等の法因縁の和合を名けて見と爲すことを得。善男子、如來も亦爾なり。六波羅蜜の和合に因りて名けて見と爲すことを得。善男子、如來も亦爾なり。六波羅蜜三十七の助菩提法に因りて諸法を覺了す。復咽咳、舌齒、唇口に因りて言語、音聲、橋陳如の爲に初めて法を説くを轉法輪と名く。是の義を以て

の故に、如來轉法輪と名けざるなり。善男子、若不轉とは即ち名けて法と爲す、法は即ち如來なり。善男子、譬へば燈に因り、鑽に因り、手に因り、乾秋草に因りて火を生ずることを得。燈も亦、「我能く火を生ず」と言はず。鑽、手、乾草各「我能く火を生ず」と念はず。火も亦「我能く自ら生ず」と言はざるが如し。如來も亦爾なり。六波羅蜜に因り、乃至橋陳如、法輪を

も亦「我能く自ら生ず」と言はざるが如し。如來も亦爾なり。六波羅蜜に因り、乃至橋陳如、法輪を

轉ずと名く。如來も亦復念を生じて「我法輪を轉ず」と言はず。善男子、若不生とは、是則ち名けて正法輪を轉ずと爲す。是の轉法輪を即ち如來と名く。

【五】善男子、譬へば酪に因り、水に因り、鑽に因り、餅に因り、繩に因り、人の手捉に因りて酥を出すことを得。酪念じて「我能く酥を出す」と言はず。乃至人手も亦「我能く酥を出す」と念言せず。酥も亦「我能く自ら出づ」と言はず。衆縁和合の故に酥を出すことを得るが如し。如來も亦爾なり。終に「我法輪を轉ず」と念言せず。善男子、若不出とは是則ち名けて正法輪を轉ずと爲す。是の轉法輪は即ち是如來なり。

【五二】次に非出。  
【五三】次に非作。  
【五四】次に非造。  
善男子、譬へば身及び地、水、火、風、沃壤、時節に因り、人の作業に因りて芽生ずることを得るが如し。善男子、子も亦「我能く芽を生ず」と言はず。乃至作業も亦「我能く芽を生ず」と念言せず。芽も亦「我氣く自ら生ず」と言はず。如來も亦爾なり。終に「我法輪を轉ず」と念言せず。善男子、若不作とは是則ち名けて轉正法輪と爲す。是の轉法輪は即ち是如來なり。

【五五】善男子、譬へば鼓に因り、空に因り、皮に因り、人に因り、桴に因り、和合して聲を出す。鼓、我能く聲を出す」と念言せず。乃至桴も亦是の如し。聲も亦「我能く自ら生ず」と言はざるが如し。善男子、如來も亦爾なり。終に念じて「我法輪を轉ず」と言はず。善男子、轉法輪とは名けて不作と爲す。

す。不作とは即ち轉法輪なり、轉法輪とは即ち是如來なり。

【四】善男子、轉法輪とは乃ち是諸佛世尊の境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。善男子、虚空

は生に非ず、出に非ず、作に非ず、造に非ず、有爲法に非ず。如來も亦爾

なり。非生、非出、非作、非造、非有爲法なり。如來性の如く佛性も亦爾

なり。非生、非出、非作、非造、非有爲法なり。

【五】善男子、諸佛世尊の語に二種有り。一つには世語、二つには出世語な

り。善男子、如來諸の聲聞、緣覺の爲に世語を説き、諸の菩薩の爲に出

世語を説く。善男子、是の諸の大衆に復二種有り。一つには小乘を求め、

二つには大乘を求む。我昔日に於て 波羅奈城に 諸の聲聞の爲に法輪を

轉じ、今始めて此の拘尸那城に於て、諸の菩薩の爲に大法輪を轉ず。復

次に善男子、復二人有り。中根、上根なり。中根の人の爲に波羅奈に於て

法輪を轉じ、上根の人、人中の象王迦葉菩薩等の爲に、今此の閉の拘尸那

城に於て大法輪を轉ず。善男子、極下根の者に爲に法輪を轉せず。極下根とは即ち一闍提

なり。復次に善男子、佛道を求むる者に復二種有り。一つには中精進、二つには上精進なり。波

羅奈に於て中精進の爲に法輪を轉じ、今此の城に於て上精進の爲に大法輪を轉ず。復次に善男子、

【四】次に如來虚空に約して譬に示す。

【五】次に不更に約して闍提を示す。其中初に異の故に不更を明す。其中八異あり、先づ語異。

【六】次に衆異。【七】波羅奈 (Varanasi) 江

繞と譯す、恆河の流域に沿ふ國の名。今の Benares の聖都是れなり。

【八】次に根異。

【九】次に德異。

【一〇】次に利益異。

我昔彼の波羅奈城に於て初めて法輪を轉ずるに、八萬の天人須陀洹果を得、今此の城に於て八十萬億の人阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。復次に善男子、波羅奈城には、大梵天王稽首して我に法輪を轉ずるを請ふ。今此の城に於て迦葉菩薩、稽首して我に大法輪を轉ずるを請ふ。昔彼の波羅奈城に於て法輪を轉ずる時、無常、苦空、無我を演說す。今此の城に於て法輪を轉ずる時、出す所の音聲梵天に聞ゆ。如來今拘尸那城に於て法輪を轉ずる時、出す所の音聲東方二十恆河沙等の諸佛世界に徧す。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

復次に善男子、諸佛世尊に凡そ所説有り、皆悉く名けて轉法輪と爲すなり。善男子、譬へば聖王所有の輪寶の、未だ降伏せざる者は能く降伏せしめ、已に降伏せる者は能く安隱ならしむるが如し。善男子、諸佛世尊の凡そ説法する所も亦復是の如し。無量の煩惱未だ調伏せざる者を能く調伏せしめ、已に調伏せる者は善根を生ぜしむ。善男子、譬へば聖王の所有の輪寶は、則ち能く一切の怨賊を消滅するが如し。如來の説法も亦復是の如し、能く一切の諸の煩惱賊をして皆悉く寂靜ならしむ。復次に善男子、譬へば聖王所有の輪寶の、下上回轉するが如し。如來の説法も亦復是の如し、能く下趣の諸の惡衆生

- 【六】 次に壽主異。
- 【七】 次に所説異。
- 【八】 次に聲獨異。
- 【九】 次に同の故に不更を明す。其中初に法。
- 【十】 次に譬。其中初に生善説惡。
- 【十一】 次に徧滅惡。
- 【十二】 次徧生善。

をして人天、乃至佛道に上生せしむ。(六八)善男子、是の故に汝今讚じて「如來此に於て更に法輪を轉ず」と言ふべからず。」

爾の時に文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、我此の義に於て知らずと爲すに非ず。問ふ所以は、諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故なり。世尊、我已に久しく知る、轉法輪とは實に是諸佛如來の境界にして、是聲聞、緣覺の及ぶ所に非ざることなを。」

爾の時に世尊、迦葉菩薩に告げたまはく、「善男子、是を菩薩、大乘大涅槃經に住して行ずる所の聖行と名く。」(七一)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、復何の義を以て名けて聖行と爲す。」(七二)善男子、聖は諸佛世尊を名く。是の義を以ての故に、名けて聖行と爲す。」(七三)世尊、若是諸佛の所行ならば、則ち聲聞、緣覺、菩薩の能く修行する所に非ざらん。」(七四)善男子、是の諸佛世尊は、此の大般涅槃に安住して、是の如く開示分別を作して其の義を演説す。是の義を以ての故に、名けて聖行と曰ふ。聲聞、緣覺及び諸の菩薩、是の如く聞き已らば則ち能く奉行す。故に聖行と名く。(七五)善男子、是の菩薩摩訶薩、是の行を得已らば、則ち無所畏地に住することを得ん。」(七六)次に地の義を釋す。

【六八】 次に更無きを結す。

【六九】 次に領解。

【七〇】 次に結章。

【七一】 是より慧行の名を釋す。其中初に迦葉問ふ。

【七二】 次に如來別して結す。

【七三】 次に迦葉更に問ふ。

【七四】 次に如來次第の五行を開結す。

【七五】 是より慧行の果を明す。その中初に地の名を唱ふ。この慧行の果地を今の文に無所畏地と名けたり。此の地と後の自在王地と、一説に二地とし、共に慧行の果と解するあり。今日く爾らず、是れ一地の異名に過ぎず。所謂自在王地は是れ無畏地の用稱のみ、別開すべからず。

【七六】 次に地の義を釋す。

善男子、若菩薩有



りて是の如き無所畏地に住することを得ば、則ち復貪患、愚癡、生老病死を畏れず。亦復惡道、地獄、畜生、餓鬼を畏れず。善男子、惡に二種有り。一つには阿脩羅、二つには人中なり。人中に三種の惡有り。一つには一闍提、二つには誹謗方等經典、三つには犯四重禁なり。善男子、是の地中に住する諸の菩薩等、終に是の如き惡の中に墮することを畏れず。亦復沙門、婆羅門、外道、邪見、天魔、波旬を畏れず、(毛)亦復二十五有を受くるを畏れず。是の故に此の地を無所畏と名く。

善男子、菩薩摩訶薩の無畏地に住して二十五の三昧を得て二十五の有を壞す。善男子、無垢三昧を得て能く地獄の有を壞す。無退三昧を得て能く畜生有を壞す。心樂三昧を得て能く餓鬼有を壞す。歡喜三昧を得て能く阿脩羅有を壞す。日光三昧を得て能く(東)弗婆提有を斷ず。月光三昧を得て能く(西)瞿耶尼有を斷ず。熱燄三昧を得て能く(北)鬱單越有を斷ず。如幻三昧を得て能く(南)閻浮提有を斷ず。一切法不動三昧を得て能く 四天處有を斷ず。難伏三昧を得て能く (○)三十三天處有を斷ず。悅意三昧を得て能く (一)餓魔天有を斷ず。青色三昧を得て能く (二)兜術天有を斷ず。黃色三昧を得て能く (三)化樂天有を斷ず。赤色三昧を得て能く (四)他

【七七】次に地の體を明す。其中初に體所入の位を出す。

【七八】次に體の所證を出す。この無所畏地所證の二十五三昧を諸三昧王と名く、是れを解するに古來異釋多し。

【七九】四天處は、四王天と通稱す。

【八〇】三十三天處は、忉利天

【八一】次に體の所證を出す。この無所畏地所證の二十五三昧を諸三昧王と名く、是れを解するに古來異釋多し。

【八二】兜術天 (Tushita) は、兜率天とも記す。

【八三】化樂天 (Nirmitarika)。

【八四】他化自在天 (Paranimittavaparsvatin)。

【八五】已上欲界 (Kāma-dhātu) に在る天の名。

トライヤストリンジャー (Tristambha) の譯名。

【八一】 燄摩天 (Pretas) は、夜摩天とも記す。

【八二】 兜術天 (Tushita) は、兜率天とも記す。

【八三】 化樂天 (Nirmitarika)。

【八四】 他化自在天 (Paranimittavaparsvatin)。

【八五】 已上欲界 (Kāma-dhātu) に在る天の名。

化自在天有を斷ず。白色三昧を得て能く。初禪有を斷ず。種種三昧を得て能く。大梵王有を斷ず。雙三昧を得て能く。二禪有を斷ず。雷音三昧を得て能く。三禪有を斷ず。注雨三昧を得て能く。四

禪を斷ず。如虚空三昧を得て能く。無想有を斷ず。照鏡三昧を得て能く。淨居阿那含有を斷ず。無閻三昧を得て能く。空處有を斷ず。常三

昧を得て能く。識處有を斷ず。樂三昧を得て能く。不用處有を斷ず。我三昧を得て能く。非

想非非想處有を斷ず。善男子、是を菩薩の二十五三昧を得て二十五有と斷ずと名く。善男子、

是の如き二十五三昧を諸三昧王と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如き等の諸三昧王

に入り、若し須彌山王を吹壞せんと欲すれば意に隨ひて即ち能くし、三千大千世界の所有の衆生心の所念を知らんと欲すれば亦悉く能く知り、

三千大千世界の所有の衆生をして己身の一毛孔の中に内れんと欲すれば、意に隨ひて即ち能くす。

亦衆生をして迫迫の想無からしむ。若無量の衆生を化作して、悉く三千大千世界の中に充滿せしめん

- 【八五】 初禪 (Prahāṇadhyāna)。
- 【八六】 大梵王 (Mahābrahmin)。
- 【八七】 二禪 (Dvītyā-dhyāna)。
- 【八八】 三禪 (Tṛtīya-dhyāna)。
- 【八九】 四禪 (Caturthī-dhyāna)。
- 【九〇】 無想 (Avijñāna)。
- 【九一】 淨居 (Suddhāvāsa)。
- 【九二】 淨居天是れなり。已上、色界 (Kāmadhātu) に在る天の名。
- 【九三】 空處 (Akāśa-samūhāyaka)。
- 【九四】 識處 (Vijñāna-samūhāyaka)。
- 【九五】 不用處 (Akīñcaṇya-kāya)。
- 【九六】 非想非非想處 (Nāivāsamīdhi-nānīkā-āśāṅkāyaka-jhāna-samūhāyaka)。
- 【九七】 已上無色界 (Arūpadhātu) に在る天の名。
- 【九八】 次に結す。
- 【九九】 次に地の用を明す。其中初に力用自在を明し、其中初に依正。
- 【一〇〇】 須彌山王 (Sumeru-parvata-dhātava)。
- 【一〇一】 次に自他。

と欲すれば、亦能く意に隨ふ。(100) 能く一身を分ちて以て多身と爲し、復多身を合して以て一身と爲す。作すことは是の如しと雖も、心著する所無き、猶し蓮華の如し。

【101】善男子、菩薩摩訶薩是の如く三昧王に入ることを得已らば、即ち自在の地に住することを得、菩薩、是の自在地に住する者、自在力を得て生れんと欲する處に隨ひて即ち往生を得。善男子、譬へば聖王の四天下を領すれば、意に隨ひて行する所能く障闕する無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。一切の生處若生せんと欲すれば意に隨ひて往生す。(102) 善男子、菩薩摩訶薩、若地獄の一切衆生の化して善根に住せしむべき者有るを見れば、菩薩即時に其の中に往生す。菩薩本業果に非ず、菩薩摩訶薩自在地に住する力因縁の故に其の中に生ず。善男子、菩薩摩訶薩地獄に在りと雖も、熾然辟身等の苦を受けず。

【103】善男子、菩薩摩訶薩の成就すべき所の是の如きの功德、無量無邊百千萬億に尙説くべからず。何に況や諸佛の有らゆる功德、而も當に説くべけんや。

【104】爾の時に衆中に一りの菩薩有り、住無垢藏王と名づく。大威徳有りて神通を成就し、大總持を得、三昧具足し、無所畏を得たり。即ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、長跪合掌して佛に白して言ひて、世尊、佛の所説の如く、諸佛菩薩の成就すべき所の功德智慧、無量無邊百千萬

【100】次に多少。

【101】次に生用自在を明し、其中初に總じて諸處に生ず。

【102】次に別して生處。

【103】次に下を結して高を況す。

【104】是より經を歎す。其中初に無垢教を歎し、而して先づ經家の徳。

【105】次に正しく歎を歎す其中初に佛旨の結下泥高を領す。

億、實に説くべからずとは、(一〇六) 我が意猶謂ふも、故是の大乗經典に如かず。何を以ての故に。是の

大乘方等經の力に因る。故に能く諸佛世尊、阿耨多羅三藐三菩提を出生す。』

(一〇七) 時に佛、讚じて言はく、『善い哉善い哉善男子、是の如く是の如し。汝が説く所の如し。

(一〇八) 是の諸の大乗方等經典は復無量の功徳を成

就すと雖も、是の經に比せんと欲せば、喩を爲

すことを得ず。百倍、千倍、百千萬倍、乃至算

數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。(一〇九) 善男子、

譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪よ

り生酥を出し、生酥より熟酥を出し、熟酥より

醍醐を出す。醍醐は最上なり。若服する者有ら

ば衆病皆除く。有らゆる諸藥の悉く其中に入る

が如く、(一一〇) 善男子、佛も亦是の如し。佛より十二部經を出し、十二部經より

方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃漿を出す。猶し醍醐の如し。醍醐

と言ふは佛性を喩ふ、佛性とは即ち是如來なり。(一一一) 善男子、是の義を以ての故に、説きて、如來の有

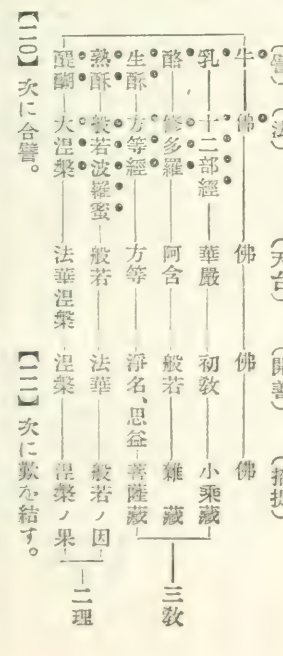
と

【一〇六】次に上に次第不次第を説き別圖の教を敷す。

【一〇七】次に如來の述敷。其中初に述。

【一〇八】次に釋。其中初に法説。

【一〇九】次に開譬。この開譬合譬(譬)(法)(天台)(開善)(招提)



【一一〇】次に合譬。

【一一一】次に敷を結す。

の二節は古來五時證據の文として有名なり。梁の開善これを五時教判の依據とするに始まる。招提は三教二理に合し天台また五時の依憑とす、圖の如し。

善男子、是の義を以ての故に、説きて、如來の有

らゆる功德は無量無邊、稱げて計ふべからずと言ふ。」

〔二三〕 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の讃じたまふ所の如く、大涅槃經は猶し醍醐の如く最上最妙なり。若能く服する有らば衆病悉く除く。一切諸藥悉く其の中に入る」と。 〔二三〕 われを聞き已りて竊かに亦思念す、「若是の經を聽受すること能はざる有らば、當に知るべし、是の人は大愚癡に

して善心有ること無しと爲す。」 世尊、我今に於ては、實に能く皮を剥ぎて紙と爲し、血を刺して墨と爲し、髓を以て水と爲し、骨を折りて筆と爲して、是の如き大涅槃經を書寫し、書し已りて讀誦し、其をして通利ならしめ、然して後、人の爲に廣く其の義を説くに堪忍す。 世尊、若衆生財物に貪著する有らば、我當に財を施し、然して後、是の大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。 〔二四〕 次に自善。其中初に正報を以て傳持せんことを誓ふ。 〔二五〕 次に依報を以て満足せんことを誓ふ。 〔二六〕 次に電力を以て折攝せんことを誓ふ。 〔二七〕 次に同好に於て宗事せんことを誓ふ。

し、然して後、漸く當に是の大乗大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。 若凡庶の者には、當に威勢を以て之を運めて讀ましむべし。 若憍慢者には爲に僕使と作り、其の意に隨順して、其をして歡喜せしめ、然して後復大涅槃經を以て之を教導せん。 若方等經を誹謗する者有らば、當に勢力を以て之を摧きて伏せしめ、既に摧伏し已らば、然して後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。 若大乘經を愛樂する者有らば、我當に船ら往いて恭敬供養、

尊重、讚歎すべし。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚したまはく、『善哉善哉、汝甚だ大乘經典を愛樂す。大乘經

を貪り、大乘經を愛し、大乘經を味ひ、大乘を信敬し、尊重し、供養す。善男子、汝今此の

善心の因縁を以て、當に無量無邊恆河沙等の大菩薩の前に超越して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。汝も亦久しからずして復當に

我が如く廣く大衆の爲に、是の如きの大般涅槃如來佛性諸佛所説の秘密の藏を演説すべし。善男子、乃昔過去佛目未だ出でず。我、爾の時に於

て婆羅門と作りて菩薩の行を修し、悉く能く一切外道の有らゆる經論に通達し、寂滅行を修して威儀を具足す。其の心清淨にして、外より來りて能

く欲想を生ぜしむるも破壊せられず。瞋恚の火を滅して常樂我淨の法を受持す。周徧して大乘經典を求索するに、乃至方等の名字を聞かず。我、

爾の時に於て雪山に住す。其の山清淨にして、流泉、浴池、樹林、藥木其の地に充滿す。處處の石閉

に清流水あり、諸の香華多くして周徧嚴飾す。衆鳥羣獸稱計すべからず、甘果滋繁にして種別計り難

し。復無量、薔根、甘根、青木、香根有り。我、爾の時に於て獨其の中に處し唯諸果を食す。食し已

りて心を繋けて思惟坐禪す。無量歳を經るに、亦如來の出世大乘經の名有るを聞かず。善男子、

【二八】次に如來の述誓 其中初に證。

【二九】次に記。其中初に超越の行道果を成ずるを記す。

【三〇】次に法輪を轉するを記す。

【三一】次に證。其中初に昔を引き、先づ菩薩の昔行を陳ず。  
【三二】次に諸天の讚議。其中初に集會歎徳。

我是の如きの難行苦行を修するの時、彼の帝釋、諸天人等心大いに驚怪して、即ち共に集會し、各各相謂つて偈を説きて言さく、

「各各相指示す、清淨雪山の山、

寂靜離欲の主、功德莊嚴王、

已に貪瞋慢を離れ、永く諸愚癡を斷ず、

口初て未だ曾て、麤惡等の語言を説かず。」

(二三) 爾の時に衆中に一りの天子有り、名を歡喜と曰ふ。復偈を説きて言

さく、

「是の如き離欲の人、清淨に勤めて精進す、

將帝釋、及以諸天を求めずや、

若是道を求むる者ならば、諸の苦行を修行せん、

是の人多くは、帝釋所坐の處を求めんと欲す。」

(二四) 爾の時に復一りの仙天子有り。即ち帝釋の爲に偈を説きて言さく、

「天主橋川迦、是の慮を生ずべからず、

外道苦行を修す、何ぞ必ず帝處を求めん。」

聖行品の下

【二三】次に三天の謀議。其中初に天子。

【二四】次に仙天子。

是の禍を説き已りて復是の言を作さく、「橋戸迦、世に大士有り、衆生の爲の故に己の身を貪らさず。諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、種種無量の苦行を修す。是の如きの人、生死中の諸の過咎を見るが故に、設ひ珍寶の、此の大地、諸山、大海に滿つるを見るとも貧著を生ぜず。涕唾を視るが如し。是の如きの大士、財寶、所愛の妻子、頭目髓腦、手足支節、所居の舍宅、象馬車乘、奴婢童僕を棄捨し、亦天上に生ずることを願求せず、唯一切快樂を受くるを得んことを願ふ。我が解する所の如きは、是の如きの大士清淨にして染無く、衆結永く盡く。唯阿耨多羅三藐三菩提を志求せんと欲するならん。」

【三五】次に帝釋天。  
【三六】善逝 (Siddhi)。佛は如實に彼岸に去りて再び生死海に還歸せざる故に佛を稱して善逝といふ。如來十號の一。

釋提桓因、復是の言を作さく、「汝が言の如きは、是の人則ち一切世間の衆生を攝取せんが爲なり。大仙、若此の世間に佛樹有らば能く一切の梵天、世人及び阿脩羅の煩惱の毒蛇を除く。若諸の衆生、是の佛樹の陰涼の中に住すれば、煩惱の諸毒悉く消滅することを得。大仙、是の人若當に未來世の中、善逝と作らば、我等悉く當に無量の熾然煩惱を滅することを得べし。是の如きの事實に信じ難しと爲す。何を以ての故に。無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發せども、少微縁を見れば阿耨多羅三藐三菩提に於て即便動轉す。水中の月の、水動すれば則ち動くが如く、猶し畫像の成じ難く壞し易きが如し。菩提の心も亦復是の如く、發し難く壞し易し。大仙、多人有りて諸の鎧仗を以て牢く自ら莊嚴し、前んで賊を討たんと欲するに



陣に臨みて恐怖すれば則便退散するが如し。無量の衆生も亦復是の如し。菩提心を發して牢く自ら莊嚴すれども、生死の過を見て心恐怖を生じ、即便退散す。大仙、我是の如く無量の衆生發心の後、皆動轉を生ずるを見る。是の故に我今、是の人専ら苦行を修して惱無く熱無く、道檢に住して其の行清淨なるを見ると雖も、未だ信すること能はざるなり。我今要す當に自ら往いて之を試みて、其實に能く阿耨多羅三藐三菩提の大重擔を荷負するに堪忍するや不やを知るべし。大仙、猶し車二輪有りば則ち載用有り、鳥二翼有らば飛行に堪忍するが如し。是の苦行者も亦復是の如し。我其の禁戒を堅持するを見ると雖も、未だ其の人に深智有りや不やを知らず。若深智有らば當に知るべし、則ち能く阿耨多羅三藐三菩提の重擔を荷負するに堪忍せん。大仙、譬へば魚母の多く胎子有れど、成就する者は鮮きが如く、菴羅樹の華多く、果少きが如く、衆生心を發すは乃ち無量有れども、其の成就に及びては少くして言ふに足らず。二八 大仙、我當に汝と俱に往いて之を試むべし。大仙、譬へば眞金の三種試み已りて乃ち其の眞を知るが如し、燒、打、磨を謂ふ。彼の苦行を試むるも亦當に是の如くなるべし。」

爾の時に釋提桓因、自ら其の身を變じて羅刹の像と作る。形甚だ畏るべし。雪山に下り至り、其を去ること遠からずして、便ち立住す。是の時に羅刹、心に畏るる所無く、勇健當り難し。辯才次第

【二七】二輪二翼は、福慧二行に譬ふ。  
 【二八】次に通試陳解。其中初に三試を譬ふ。  
 【二九】次に三試に合す。其中初に有智無智を試む。

、其の聲清雅なり。過去佛所説の半偈を宣ぶ、

「諸行は無常なり、是生滅の法なり。」

(III)

是の半偈を説き已りて便ち其の前に住す。所現の形貌甚だ怖畏すべし。顧眄して徧く視て四

方を觀る。是の苦行者、是の半偈を聞きて心に歡喜を生ず。譬へば賈客の險難の處に於て夜行して伴

を失ひ、恐怖推索して還たび同侶に遇ふ。心に歡喜を生じて踊躍無きが如し。亦久病の未だ良醫、

膽病、好藥に遇はず、後卒に之を得るが如く、人の海に没して卒に船舫に遇ふが如く、渴乏人の清冷

水に遇ふが如く、怨に逐はれ、忽然として脱することを得るが如く、久し

く獄に繋かれ、卒に出づることを得るが如し。亦農夫の炎早に雨を得

るが如く、亦行人の還たび家に歸ることを得、家人見已りて大歡喜を生ずるが如し。善男子、我、爾

の時に於て是の半偈を聞き、心中に歡喜することも亦復是の如し。即ち座より起ち、手を以て髮を擧

げ、四方を顧視して是の語を作さく、「向に聞く所の偈、誰の説く所ぞ。」

爾の時に四顧するに餘人を見ず、唯羅刹を見る。即ち是の言を説かく、「誰か是の如きの解脱の門を

開き、誰か能く諸佛の音聲を雷震す。誰か生死睡眠の中に於て、獨覺寤して是の如きの言を唱ふ。誰

か能く此に生死饑饉の衆生に無上の道味を指導す。無量の衆生生死の海に沈む、誰か能く中に於て

大船師と作る。是の諸の衆生、常に煩惱の重病に纏はる。誰か能く中に於て爲に良醫と作る。」此の半

【三】次に有畏無畏を試む。

偈を説き、我が心を啓悟す、猶し半月の漸く蓮華を開くが如し。善男子、我爾の時に於て更に見る所無く、唯羅利を見る。復是の念を作さく、「將是の羅利是の偈を説くや。」覆ねて復疑を生ず、「或は其の説に非じ。何を以ての故に。是の人形容甚だ怖畏すべし。若是の偈句を聞くことを得る者有らば、一切の恐怖、醜陋即ち除かん。何ぞ此の人形容是の如くにして、能く此の偈を説くこと有らんや。火中蓮華を出し生すべからず、日光の中冷水を出し生するに非ず。」

善男子、我爾の時に於て復是の念を作さく、「我今無智、而も此の羅利、或は能く過去の諸佛を見、諸佛の所に從ひて是の半偈を聞くことを得。我今當に問ふべし。」即便前んで是の羅利の所に至り、是の如きの言を作さく、「善い哉大士、汝何れの處に於てか是の過去の離怖畏者の説く所の半偈を得。大士、汝何れの處に於てか是の如きの半如意珠を得。大士、是の半偈の義、乃ち是過去、未來、現在の諸佛世尊の正道なり。一切世間の無量の衆生、常に諸見の羅網に覆はれて、終身此の外道の法中に於て初て是の如きの出世十力世雄所説の空義を聞くことを得ず。」

【三】次に能捨不捨を試む。

善男子、我是を問ひ已るに、即ち我に答へて言はく、「大婆羅門、汝今我に是の義を問ふべからず。何を以ての故に。我食せざるより來た、已に多日を経たり。處處を求索するに了に得ること能はず。飢渴苦惱、心亂謬語す。我が本心の知る所に非ざるなり。我今力能く虚空に飛行して躡單越に至り乃至天上、處處に食を求むるに、而も得ること能はず。是を以ての故に、我是の語を

説く。「善男子、我時に即ち復羅刹に語りて言はく、「大士、若能く我が爲に是の偈を説き竟らば、我當に身を終るまで汝の弟子と爲るべし。大士、汝の説く所の者は名字終らず、義も亦盡さず、何の因縁を以てか説くことを欲せざるや。夫財施は竭盡有り、法施の因縁盡すべからざるなり。法施は盡ること無く、利益する所多し。我今此の半偈の法を聞き已りて心驚疑を生ず。汝今幸くは我が爲に除斷すべし。此の偈を説き竟らば、我當に終身汝の弟子と爲るべし。」羅刹、答へて言はく、「汝、智太だ過ぐ。但自ら身を憂ひて卻て念を見ず。今我定んで飢苦に逼められ、實に説くこと能はず。」我即ち問ひて言はく、「汝食する所の者、是何物と爲す。」羅刹、答へて言はく、「汝問ふに足らず。我若説かば人をして多く怖れしむ。」我復語りて言はく、「此の中獨處して更に人有ること無し。我汝を畏れず、何が故ぞ説かざる。」羅刹答へて言はく、「我食する所は唯人の煖肉、其の飲む所は、唯人の熱血、自ら我が薄祐、唯此の食を食ふ。周徧して求索するに、因りて得ること能はず。世、多人と雖も皆彌德有り、兼ねて諸天に守護せらる。而も我、力無くして殺すことを得ること能はず。」善男子、我復語りて言はく、「汝但、具足して是の半偈を説け。我偈を聞き已りて、當に此の身を以て奉施供養すべし。大士、我設ひ命終すとも、此の如きの身復用ふる所無し。當に虎狼、鷓鴣、鵬鷲に啖食せられ、而も復一毫の福を得ざるべし。我今阿耨多羅三藐三菩提を求むるが爲に、不墜身を捨てて以て堅身に易ふ。」羅刹答へて言はく、「誰か當に汝が是の如きの言、八字の爲の故に所愛の身を棄つるを信すべき。」善男子、

我即ち答へて言はく、「汝眞に無智なり。譬へば人有りて、他に瓦器を施して七寶の器を得んが如し。我も亦是の如し。不堅身を捨てて金剛身を得。汝、誰か當に信すべきと言ふ。我今證有り、大梵天王、釋提桓因及び四天王、能く是の事を證せん。復天眼有る諸菩薩等、無量の衆生を利益せんと欲するが爲に、大乘を修行して六度を具する者も亦能く證知せん。復十方の諸佛世尊の衆生を利する者有り。亦能く我が八字の爲の故に是の身命を捨つるを證せん。羅刹復言はく、「汝若是の如く能く身を捨つれば、諦かに聽き諦かに聽け。當に汝が爲に其餘の半偈を説くべし。」善男子、我爾の時に於て是の語を聞き已りて心中歡喜し、即ち己身所著の麁皮を解きて、此の羅刹の爲に法座を敷置して白して言さく、「和上、願はくは此座に坐せ。我即ち前に於て叉手長跪して是の言を作さん、唯願はくは和上、善く我が爲に其餘の半偈を説きて具足を得しめよと。」羅刹、即ち説きて、

「生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す。」

爾の時に羅刹、是の偈を説き已りて復是の言を作さく、「菩薩摩訶薩、汝今已に具足の偈義を聞き、汝の所願悉く満足すと爲す。若必ず諸の衆生を利せんと欲せば、時に我に身を施せ。」善男子、我爾の時に於て深く此の義を思ひ、然して後處處、若は石、若は壁、若は樹、若は道に此の偈を書寫し即便更に所著の衣裳を繫く。恐らくは死後に於て身體露現せん。即ち高樹に上る。爾の時に樹神、復我に問ひて言はく、「善哉仁者、何の事を作さんと欲す。」善男子、我時に答へて言はく、「我身を捨てて

以て偶價を報いんと欲す。「樹神又言はく、「是の如きの偶は何の利益する所ぞ。」我時に答へて言はく、「是の如きの偶句、乃至是過去、未來、現在の諸佛所説の開空法道なり。我此の法の爲に身命を棄捨す。利養、名聞、財寶、轉輪聖王、四大天王、釋提桓因、大梵天王、人天中の樂の爲にせず。一切衆生を利益せんと欲するが爲の故に此の身を捨つ。」善男子、我捨身の時復是の願を作さく、「願はくは一切の慳惜の人、悉く來りて我の此の身を捨離するを見しめよ。若少施貢高を起す者有らば、亦我一偶の爲に此の身命を捨つること、草木を棄つるが如くなるを見ることを得しめん。」

我爾の時に於て是の語を説き已りて、尋で即ち身を放ちて自ら樹下に投す。下未だ地に至らず。時に虚空の種種の聲を出す。其の聲乃ち、**阿迦尼吒**に至る。爾の時に羅刹釋の形を還復し、即ち空中に於て我が身を接取して平地に安置す。爾の時に釋提桓因及び諸の天人、大梵天王、我が足下を稽首し頂禮し讚じて言はく、「善哉善哉、眞に是菩薩、能く大いに無量の衆生を利益し、無明黒闇の中に於て大法炬を然さんと欲す。我如來の大法を愛惜するに由るが故に相燒惱す。唯願はくは我が罪咎を懺悔するを聞け。汝未來に於て必定して阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。願はくは濟度せられよ。」

爾の時に釋提桓因及び諸の天衆我が足を頂禮す。是に於て辭し去りて忽然として見えず。善男子、

【三】阿迦尼吒 (アカニシユタ)。  
色究竟と譯す、天の名、此の天に色界十八天の最上天にして、形體を有する天處の究竟なれば此の名あり。

我が往昔半偈の爲の故に此の身を捨棄するが如く、是の因縁を以て便ち超越十二劫に足ることを得、彌勒の前に在りて阿耨多羅三藐三菩提を成ず。善男子、我是の如きの無量の功徳を得たり。皆如來の正法を供養するに由る。

(三) 善男子、汝今も亦爾なり。阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、則ち已

【三】次に今を證す。

に無量無邊恆河沙等の諸の菩薩の上に超過す。善男子、是を菩薩、大乘大般涅槃に住して聖行を修すと名く。』

# 卷の第十四

## 梵行品第二十の一

〔善男子、云何が菩薩摩訶薩の梵行なる。〕

善男子、菩薩摩訶薩大乘大般涅槃に住して、七

善法に住して梵行を具することを得。何等をか

七つと爲す。一つには知法、二つには知義、三

つには知時、四つには知足、五つには自知、六

つには知衆、七つには知尊卑なり。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の知法なる。善

男子、是の菩薩摩訶薩十二部經を知る。所謂修

多羅、祇夜、受記、伽陀、優陀那、尼陀那、阿

波陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毗佛略、阿浮陀達磨、優波提舍なり。

羅經と爲す。如是我聞より乃し歡喜奉行に至る。是の如き一切を修多羅と名く。

【一】 この品は第三に梵行を明す。其中初に梵行を明し、而して先づ七善。其中今は徴の文。

【二】 梵行 (brahmacarya)。本經の理想たる大般涅槃の究竟地に至るに要する神聖なる修行をいふ。

【三】 次に釋の文。その中初に標す。

【四】 次に釋す。其中初に別の七善を明し、而して先づ知法

を釋す。今は其中の標次。

【五】 次に釋す。其中初に列す。

【六】 次に釋す。其中初に修多羅。

【七】 修多羅 (sutra)。契經と譯す。經中直ちに法義を説ける所謂長行の文をいふ。

【八】 次に祇夜。

【九】 祇夜 (geya)。應頌又は重頌と譯す。長行の文に應じて重ねて其義を偈頌す。

善男子、何等をか名けて修多羅と爲す。如是我聞より乃し歡喜奉行に至る。是の如き一切を修多羅と名く。何等をか名けて祇

羅經と爲す。如是我聞より乃し歡喜奉行に至る。是の如き一切を修多羅と名く。何等をか名けて祇



夜經と爲す。「佛諸の比丘に告げたまはく、昔我、汝と愚にして智慧無く、實の如く四眞諦を見ること能はず。是の故に流轉して久しく生死に處し大苦海に没す。何等をか四つと爲す。苦、集、滅、道なり。佛、昔日諸の比丘の爲に契經を説き竟る。爾の時に復利根の衆生有り、法を聽かんが爲の故に後佛所に至る。即使人に問はく、「如來向者何の事をか説くと爲ん。」佛、時に知り已りて即ち本經に因りて偈を以て頌して曰ふが如し、

「我昔汝等と、四眞諦を見ず、

是の故に久しく、生死の大苦海に流轉す、

若能く四諦を見ば、則ち生死を斷ずることを得、

生死既に已に盡くれば、更に諸有を受けず。」

是を祇夜と名く。(一〇)何等をか名けて 受記經と爲す。經律有り、如來説

く時、諸の天人の爲に佛の記莖を受けしむるが如し、汝阿逸多、未來に王

有りて名を懷佉と曰ふ。當に是の世に於て佛道を成じ、號して彌勒と曰ふべし」と。是を受記と名く。

(三)何等をか名けて (三) 伽陀經と爲す。修多羅及び諸の戒律を除きて、其餘の四句の偈を説くこと

有り。所謂

「諸惡は作すこと莫かれ、衆善は奉行せよ、

【一〇】次に受記。

【一一】受記(Vyakarana)。菩薩の成佛すべき豫言を與ふる文なり。

【一二】次に伽陀。

【一三】伽陀(Gāthā)。韻頌又は孤起頌と譯す、長行を用ひず、偈頌のみの經典なり。

自ら其の意を淨うす、是諸佛の教なり。」

是を伽陀と名く。何等をか名けて 優陀那經と爲す。佛晡時禪定に入り、諸の天衆の爲に廣く

法要を説く。時に諸の比丘、各是の念を作さく、「如來今者何の所作をか

爲したまふ。」如來明目禪定より起ちたまひ、人の問ふこと有ること無き

に、他心智を以て即ち自ら説きて、「比丘當に知るべし、一切諸天の壽命より

極長なり。汝諸の比丘、善い哉他の爲にして己利を求めず。善い哉少

欲、善い哉知足、善い哉寂靜」と言ふが如し。是の如きの諸經問ふこと

無きに自ら説く。是を優陀那と名く。何等をか名けて 尼陀那經と爲

す。諸經の偈、所因の根本他の爲に演説するが如し。舍衛國に一りの丈夫

有りて羅網もて鳥を捕ふ。得已りて籠繫し、隨ひて水穀を與へ復還つて放

つ。世尊、其の本末因縁を知りて偈を説きて言ふが如し、

「小惡を輕んじて、以て殃無しと爲すこと莫れ、

水滿微なりと雖も、漸く大器に盈つ。」

是を尼陀那と名く。何等をか名けて 阿波陀那經と爲す。戒律中の所説の譬喩の如し。是を阿

波陀那と名く。何等をか名けて 伊帝目多伽經と爲す。佛の所説の如く、比丘當に知るべし、我

【四】次に優陀那。

【五】優陀那(Upaitika)。自説と譯す、問者なきに佛自ら説く經なり。

【六】次に尼陀那。

【七】尼陀那(Nidāna)。因縁と譯す、經中見佛聞法の因縁、佛の說法教化の因縁を説く文なり。

【八】次に阿波陀那。

【九】阿波陀那(Upadesika)。譬喩と譯す、法義を問答するに喩示を以てする文なり。

【一〇】次に伊帝目多伽。

【一一】伊帝目多伽(Indivaka)。本事と譯す、佛弟子の過去の因縁を説く文なり。

出世の時説くべき所の者、名けて契經と曰ふ。鳩留秦佛出世の時、甘露鼓と名け、拘那含牟尼佛の時、  
 名けて法鏡と曰ひ、迦葉佛の時、分別空と名く。是を伊帝目多伽と名く。何等をか名けて 閻陀  
 伽經と爲す。佛世尊、本菩薩と爲り、諸の苦行を修するが如し。所謂比丘  
 當に知るべし、我過去に於て鹿と作り、羆と作り、麋と作り、兔と作り、  
 栗散王、轉輪聖王、龍、金翅鳥と作る。諸の是の如き等、菩薩道を行する  
 の時受くべき所の身なり。是を閻陀伽と名く。何等をか名けて 毗佛  
 略經と爲す。所謂大乘方等經典なり。其の義廣大にして猶し虚空の如  
 し。是を毗佛略と名く。何等をか名けて未曾有經と爲す。彼の菩薩初め  
 て出生の時、人の扶持する無きに、即ち行くこと七步、大光明を放ちて  
 徧く十方を照すが如く、亦彌猴の手に宝器を捧げて以て如来に獻つるが如  
 く、白頂の狗、佛邊に法を聴くが如く、魔、波旬變じて青牛と爲りて瓦鉢  
 の閉を行き、諸の瓦鉢をして互に相接觸せしむるに傷損する無きが如く、  
 佛初めて生じて天廟に入るの時、彼の天像をして起下して禮敬せしむるが  
 如し。是の如き等の經を未曾有と名く。何等をか名けて 優波提舍經  
 と爲す。佛世尊所説の諸經、若義論を作して分別廣説して其の相貌を辨するが如し。是を優波提舍と

【三】 次に閻陀伽。  
 【四】 閻陀伽(Manjushree)。本生と譯す、佛自身の過去世の因縁を説く文なり。  
 【五】 次に毗佛略。  
 【六】 毗佛略(Mahāvairocana)。方廣と譯す、方正廣大の眞理を説く文なり。  
 【七】 次に阿浮陀達磨。阿浮陀達磨(Aśubhā dharmā)は未曾有と譯す、佛の不思議神力を現するを説く文なり。  
 【八】 次に優波提舍。  
 【九】 優波提舍(Uppadesā)。論義と譯す、法理を論義問答する文なり。

名く。〔二五〕菩薩若能く是の如く十二部經を了知せば、名けて知法と爲す。

云何が菩薩摩訶薩の知義なる。菩薩摩訶薩、若一切の文字語言に於て廣く其の義を知る。是を知

義と名く。

〔二六〕云何が菩薩摩訶薩の知時なる。善男子、菩薩善く是の如き時中、寂靜を修するに任ふ。是の如

きの時中、精進を修するに任ふ。是の如きの時中、捨定を修するに任ふ。是の如きの時中、佛を供養

するに任ふ。是の如きの時中、師を供養するに任ふ。是の如きの時中、布施、持戒、忍辱、精進、禪定を修し、般若波羅蜜を具足するに任ふるを知

る。是を知時と名く。

〔二七〕云何が菩薩摩訶薩の知足なる。善男子、菩薩の知足は所謂飲食、衣藥、

行住坐臥、睡寤語默なり。是を知足と名く。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の自知なる。是の菩薩自ら我是の如きの信、是の如きの戒、是の如き

の多聞、是の如きの捨、是の如きの慧、是の如きの去來、是の如きの正念、是の如きの善行、是の如

きの間、是の如きの答有りと知る。是を自知と名く。

〔二八〕云何が菩薩摩訶薩の知衆なる。善男子、是の菩薩、是の如き等は是利利衆、婆羅門衆、居士衆、

沙門衆なり。是の衆に於て是の如く行來し、是の如く坐起し、是の如く說法し、是の如く問答すべし。

〔二九〕次に總じて結す。  
〔三〇〕次に知義を釋す。  
〔三一〕次に知時を釋す。  
〔三二〕次に知足を釋す。  
〔三三〕次に自知を釋す。  
〔三四〕次に知衆を釋す。

と知る。是を知衆と名く。

【三】善男子、云何が菩薩摩訶薩人の尊卑を知る。善男子、人に二種有り。一つには信、二つには不信なり。菩薩當に知るべし、信者は是善、不信者は名けて善と爲さず。復次に信に二種有り。一つには常に僧坊に往き、二つには往かず。菩薩當に知るべし、其の往者は善、其の不往者は名けて善と爲さず。僧坊に往く者に復二者有り。一つには禮拜し、二つには禮拜せず。菩薩當に知るべし、禮拜者は善、不禮拜者は名けて善と爲さず。其の禮拜者に復二種有り。一つには法を聽き、二つには聽かず。菩薩當に知るべし、聽法の者は善、不聽法の者は名けて善と爲さず。其の聽法の者に復二種有り。一つには至心に聽き、二つには至心ならず。菩薩當に知るべし、至心に聽く者は是則ち善と名け、不至心の者は名けて善と爲さず。至心聽法に復二種有り。一つには義を思ひ、二つには義を思はず。菩薩當に知るべし、義を思ふ者は善、義を思はずる者は名けて善と爲さず。其の思義者に復二種有り。一つには説の如く行じ、二つには説の如く行せず。説の如く行する者は是則ち善と爲し、説の如く行せざるは名けて善と爲さず。如説行者に復二種有り。一つには聲聞を求めて一切苦惱の衆生を利安し饒益すること能はず、二つには無上大乘に回向し、多人を利益して安樂を得しむ。菩薩應に知るべし、能く多人を利し安樂を得しむる者は最上最善なり。

【三】次に知尊卑を釋す。

【三】善男子、諸寶の中に如意寶珠最も勝妙爲るが如く、諸味の中に甘露最上なるが如し。是の如き菩薩入天の中に於て最勝最上にして譬喩すべからず。善男子、是を菩薩摩訶薩大乘大涅槃經に住し、七善法に住すと名く。菩薩是の七善法に住し已りて梵行を具することを得。

【五】復次に善男子、復梵行有り。慈、悲、喜、捨を謂ふ。

【四】迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若多く慈を修して能く瞋恚を斷じ、悲心を修する者も亦瞋恚を斷ず。云何ぞ而も四無量心と言ふ。』

【三】世尊、慈を推して言はば則ち三有るべし。世尊、慈に三縁有り。一つには衆生を縁じ、二つには法を縁じ、三つには則ち無縁なり。悲喜捨心も亦復是の如し。若是の義に従はば、唯一有るべく四有るべからず。衆生縁とは五陰を縁じて其に樂を興へんと願す、是を衆生縁と名く。法縁とは諸の衆生の所須の物を縁じて之を施與す、是を法縁と名く。無縁とは如來を縁す、是を無縁と名く。慈とは多く貧窮の衆生を縁す。如來大師永く貧窮を離れて第一の樂を受く。若衆生を縁すれば則ち佛を縁

【三】次に圓の七善を明す。其中初に譬。

【七】次に合譬。

【三】次に總じて結す。

【五】是より四無量心を明す。

この四心また四等定とも云ふ。四無量は境に従ひ、四等は心に從ひて名を立つ。之に二段あり、其中初に四心を明す。之に又二段あり、初には次第の四を明し、次に圓の四を明す。次第に又三段ありて

初に略して標す。

【四】次に論義。之に問、答の二段あり、其中間に五難を闡き初に四心三なるべしと難す。曰く慈悲の兩心共に瞋を治するを以て一とし、他の二心と合して三なるべしと難するなり。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

【四】次に四心一なるべしと難す。能縁に約して一とし四を離す。

せす、法も亦是の如し。是の義を以ての故に、如來を縁する者を名けて無縁と曰ふ。世尊、慈の一切衆生を縁する所、父母、妻子、親屬を縁するが如し。是の義を以ての故に衆生縁と名く。父母、妻子、親屬を見ず、一切の法皆縁より生ずるを見る、是を法縁と名く。無縁とは法相及び衆生相に住せず、是を無縁と名く。悲、喜、捨心も亦復是の如し。是の故に三なるべく四有るべからず。世尊、人に二種有り。一つには見行、二つには愛行なり。見行の人は多く慈悲を修し、愛行の人は多く喜捨を修す。是の故に二なるべく四有るべからず。世尊、夫無量とは名けて無邊と曰ふ。邊は得べからず、故に無量と名く。若無量ならば則ち是一なるべく四と言ふべからず。若四と言はば何ぞ無量を得ん。

是の故に一なるべく四なるべからざるなり。』  
 佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、諸佛如來、諸の衆生の爲に宣ぶる所の法要は、其の言秘密にして了知すべきこと難し。或は衆生の爲に一因縁と説く。何等をか一因縁と爲す。所謂一切有爲の法と説くが如し。或は二種と説く、因縁及び果なり。或は三種と説く、煩惱業苦なり。或は四種と説く、無明と諸行、生と老死となり。或は五種と説く、所謂受、愛、取、有、及び生なり。或は六

【三】次に重ねて四心三なるべしと難す。

【四】次に四心二なるべしと難す。曰く人には見行と愛行との別あり。見行は利根、愛行は鈍根、利人は好んで怒り易し、故に慈悲定を修せしめて瞋心を去らしむ。鈍者は利者を見て常に嫉妬を生ず、故に喜捨の二心を修してこれを除かしむ。

【四】次に重ねて四心一なるべしと難す。

【五】次に答。之に二段あり、其中初に定四の執を破す。之に又三段ありて初に教門の廣略定らざることを明す。

種と説く、三世の因果なり。或は七種と説く、識、名色、六入、觸、受、及以愛、取を謂ふ。或は八種と説く、無明、行、及び生、老死を除きて其餘の八事なり。或は九種と説く、城經の中の如し。無明、行、識を除きて其餘の九事なり。或は十一と説く、薩遮尼健子の爲に説くが如し。生の一法を除きて其餘の十一なり。或時具さに十二因縁を説き、王舍城に迦葉等の爲に具さに十二の無明、乃至生老病死を説くが如し。善男子、一つの因縁、衆生の爲の故に種種に分別するが如く、無量の心法も亦復是の如し。善男子、是の義を以ての故に、諸の如來の深祕行處に於て疑を生ずべからず。

〔聖善男子、如來世尊大方便有り。無常を常と説き、常を無常と説く。樂を説きて苦と爲し、苦を説きて樂と爲す。不淨を淨と説き、淨を不淨と説く。我を無我と説き、無我を我と説く。非衆生に於て説きて衆生と爲し、

〔四七〕 次に反常不定を明す。

實衆生に於て非衆生と説く。非物を物と説き、物を非物と説く。非實を實と説き、實を非實と説き。非境を境と説き、境を非境と説く。非生を生と説き、生を非生と説く。乃至無明を明と説き、明を無明と説く。色を非色と説き、非色を色と説く。非道を道と説き、道を非道と説く。善男子、如來是の無量の方便を以て爲に衆生を調ふ。豈虚妄ならんや。

〔四八〕 薩遮尼健子 (Chāyirāṇinīka) ランタナプトラ (Rantana-putra) 薩遮即ち梵志を父とし、尼健外道を母として生れたる子の義なり。

河西の目く、彼れ十一法の説を受け、生の一を缺けるは、

非法の父母より生れたるものなれば生の一法を缺くと。能く釋せりと云ふべし。



善男子、或は衆生の財貨を貪る有り。我其の人に於て自ら其の身を化して轉輪王と作り、無量歳に於て其の所須に隨ひて種種供給し、然して後教化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生五欲に貪著する有らば、無量歳に於て妙五欲を以て其の願を充滿し、然して後に勸化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生、榮豪にして自ら貴ぶ有らば、我其の人に於て、無量歳の中爲に僕使となりて趨走給侍し、其の心を得已りて即ち復勸化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生の性戻りて自ら是とし、人の訶諫を須ふる有らば、我無量百千歳の中に於て、教訶諫諭して心をして調順せしむ。然して後復勸めて、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。善男子、如來是の如く無量歳に於て種種の方便を以て諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。豈虛妄ならんや。諸佛如來は衆惡に處すと雖も、染汚せらるること無きこと猶し蓮華の如し。善男子、是の如く四無量の義を知るべし。

善男子、是の無量心體性に四有り。若修行する有らば大梵の處に生ず。善男子、是の如く無量伴類に四有り。是の故に四と名く。夫慈を修する者

【四八】次に治惑不定を明す。この下の文、轉輪王となりて財を施すは是れ捨、五欲の樂を興ふるは是れ喜、僕使と作りて趨走するは是れ慈、訶諫は是れ悲なり。

【四九】次に無四の難を答ふ。之に總、別の二段あり、其中初に總。之に又二門ありて初に二事の文。これに體の異、用の異の二段あり。體異の文は且く四心具足の果報を示す。若し分別せば慈は偏淨天悲は空處、喜は譏處、捨は不用處の報を得て各不同なり。次に用異の文に就て、食は人の物を取り、慈は人に物を與へ、瞋は人に苦を與へ、悲は人の苦を抜き、嫉は人の樂を忘み、喜は人に樂を與へ、嫉は憎愛を長じ、捨は愛憎を亡す。

は能く貪欲を斷じ、悲心を修する者は能く瞋恚を斷じ、喜心を修する者は能く不樂を斷じ、捨心を修する者は能く衆生を貪欲し瞋恚するを斷ず。善男子、是の義を以ての故に、名けて四と爲すことを得。一、二、三に非ず。

善男子、汝が言ふ所の如く、慈能く瞋を斷ず。悲も亦是の如くなれば三と説くべし、汝今是の如きの難を作すべからず。何を以ての故に。善男子、悲に二種有り。一つには能く命を奪ひ、二つには能く鞭撻す。慈を修すれば則ち能く彼の奪命を斷じ、悲を修すれば則ち能く彼の鞭撻を除く。善男子、是の義を以ての故に、豈四に非ずや。復次に瞋に二種有り。一つには衆生を瞋り、二つには非衆生を瞋る。慈心を修する者は瞋衆生を斷じ、悲心を修する者は非衆生を斷ず。亦次に瞋に二種有り。一つには因縁有り、二つには因縁無し。慈心を修する者は有因縁を斷じ、悲心を修する者は無因縁を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには過去に於て久しく已に積習し、二つには現在に於て今始めて積習す。慈心を修する者は能く過去を斷じ、悲心を修する者は現在を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには聖人を瞋り、二つには凡夫を瞋る。慈心を修する者は瞋聖人を斷じ、悲心を修する者は瞋凡夫を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには上、二つには中なり。修慈は上を斷じ、修悲は中を斷ず。

【五】次に總じて前の二問を非す。一二三に非すと云ふは非一は第二第五を、非二は第四を、非三は第一第三を非するなり。  
【五二】次に別して五問を答ふ。即ち五段あり、其中初に第一の治慈の難を答ふ。文の中六復次あり、また、同じく瞋を治すれども之に輕重あるが故に四を成す。

善男子、是の義を以ての故に則ち名けて四と爲す。何ぞ難じて「三なるべし、四に非ず」と言ふことを得ん。是の故に迦葉、是の無量心は伴類相對し、分別して四と爲す。器を以ての故に名けて四と爲すべし。器若慈有らば則ち悲、喜、捨心有ることを得ず。是の義を以ての故に四にして滅すること無かるべし。善男子、行を以て分別す。故に四有るべし。若慈を行する時悲、喜、捨無し。是の故に四有り。善男子、無量を以ての故に亦四と名くることを得。夫無量とは則ち四種有り。無量心の縁有りて自在に非ざる有り、無量心の自在にして縁に非ざる有り、無量心の亦縁、亦自在なる有り、無量心の縁に非ず自在に非ざる有り。何等か無量有縁非自在なる。無量無邊の衆生を縁じて、而も自在の三昧を得ること能はず。得と雖も定らず、或は得、或は失ふ。何等か無量自在非縁なる。父母、兄弟、姉妹を縁じて安樂ならしめんと欲するが如し、無量縁に非ず。何等か無量亦縁亦自在なる。諸佛菩薩を謂ふ。何等か無量非縁非自在なる。聲聞、緣覺は廣く無量の衆生を縁すること能はず、亦自在に非ず。善男子、是の義を以ての故に四無量と名く。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。乃ち是諸佛如來の境界なり。善男子、是の如きの四事、聲聞、緣

【三】次に第二の因縁の難を答ふ。

【四】次に第三の淺深の難を答ふ。

【五】次に第四の人の利鈍に據るの難を答ふ。

【六】若を行する等。慈悲喜捨の四を四無量心 (Caturtyariaṇāyatana) と稱す。慈 (Maitrī) は能く樂を與へ、悲 (Karuṇā) は能く苦を抜き、喜 (Mudita) は苦を離れて樂を得しめ、捨 (Upekā) は如上の三心を捨離して心に差別相を抱かざるなり。

【七】次に第五の名字の難を答ふ。之に二段ありて初に四章門を列す。

【五】次に廣く解釋す。

覺無量と名くと雖も、少くして言ふに足らず。諸佛菩薩乃ち名けて無量無量と爲すことを得。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の如く是の如し。實に聖言の

如し。諸佛如來の有らゆる境界は諸の眷屬、縁覺の及ぶ所に非ず。是世

尊、頗菩薩大乘大般涅槃に住して慈悲心を得。是大慈大悲心に非ざる有る

や不や。佛の言はく、「有り。善男子、菩薩若諸の衆生の中に於て

三品分べつ。一つには所親、二つには怨憎、三つには中人なり。親人の中

に於て復三品と作す。上、中、下を謂ふ。怨憎も亦爾なり。是の菩薩摩訶

薩、上親の所に於て増上の樂を興へ、中下親に於ても亦復平等に増上の樂

を興へ、上怨の所に於て少分の樂を興へ、中怨の所に於て中品の樂を興へ、

下怨の所に於て増上の樂を興ふ。菩薩是の如く轉た増す修習して上怨の所

に於て中品の樂を興へ、中下怨に於て等しく上樂を興へ、轉た復修習して

上、中、下に於て等しく上樂を興ふ。若上怨の所に上樂を興ふる者は、爾

の時に慈心成就と名くることを得。菩薩爾の時に其の父母及び上怨の所に

於て平等心を得、差別有ること無し。善男子、是を慈を得て大慈に非ずと名くるなり。」

〔三〕世尊、何に緣もてか菩薩、是の如きの慈を得て、猶故名けて大慈と爲すことを得ざる。〔四〕善

【五八】次に領解。

【五九】是より不次第を明す、四

圓の四心。之に二段あり、

其中初に小慈を料簡す。之に

又兩番の問答あり、今其の中

初番の問なり。

【六〇】次に答。之に三段ありて

初に有を唱ふ。

【六一】次に有を結す。之に境を

出し、觀を明すの二段あり。

文中、境に九品を分つが故

に九境あり、之に對して九慈

あり。

【六二】次に有を結す。

【六三】次に後の問答。其中初に

問

【六四】次に答。之に三段ありて

初に成じ難きを唱ふ。

男子、成ずること難きを以ての故に、大慈と名けず。何を以ての故に。久しく過去無量劫の中に於て、多く煩惱を集めて未だ善法を修せず。是の故に一日の中に於て其の心を調伏すること能はず。善男子、譬へば豌豆乾ける時、雖も刺すに終に著くべからざるが如く、諸の煩惱の堅きも亦復是の如し。一日夜心を繋けて散せずと雖も、調伏すべきこと難し。又家犬の人を畏れず、山林の野鹿人を見れば怖れ走るが如し。瞋恚去り難きこと家を守る狗の如く、慈心失ひ易きこと彼の野鹿の如し。是の故に此の心調伏すべきこと難し。是の義を以ての故に、大慈と名けず。復次に善男子、譬へば石に畫けば其の文常に在り水に畫けば速に滅して勢久しく住せざるが如し。瞋恚の除き難きこと譬へば石に畫くが如く、善根の滅し易きこと猶し水に畫くが如し。是の故に此の心調伏を得難し。大火聚は其の明久しく住し、電光の明は暫くも停ることを得ざるが如し。瞋は火聚の如く慈は電明の如し。是の故に此の心調伏を得難し。(六五) 是の義を以ての故に大慈と名けず。

善男子、菩薩摩訶薩初地に住するを名けて大慈と曰ふ。何を以ての故に。善男子、最極惡の者を一闍提と名く。初住の菩薩大慈を修する時、一闍提に於て心差別無し。其の過を見ざるが故に瞋を生せず。是の義を以ての故に大慈と名くることを得。(六六) 善男子、諸の衆生の爲に無利益を除く、是を大

【六五】次に釋す。之に法、譬の二段あり。譬の中に四あり。

【六六】次に結す。

【六七】是より大を顯す。圓の四方に是れ大慈なるを明す。

之に二段あり、其中初に大慈を明す。之に又三段ありて初に正しく大慈を明す。之に唱、釋、結の三段あり。

【六八】次に慈の兼用を明す。

慈と名く。衆生に無量の利樂を與へんと欲す、是を大悲と名く。諸の衆生に於て心に歡喜を生ず、之を大喜と名く。擁護する所無し、名けて大捨と爲す。若我が法相已身を見ず、一切法平等無二を見る、是を大捨と名く。自ら己樂を捨てて他人に施與す、是を大捨と名く。

善男子、唯四無量は能く菩薩をして六波羅蜜を増長し具足せしむ。其餘の諸行は必ずしも能く爾ならず。善男子、菩薩摩訶薩先に世間の四無量心を得。然して後乃ち阿耨多羅三藐三菩提心を發し、次第して方に出世間の者を得。善男子、世の無量に因りて出世の無量を得。是の業を以ての故に、大無量と名

く。

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、無利益を除きて利樂を與ふとは實は爲す所無くして是の如く思惟す、即ち是虚觀にして實利有ること無し。世尊、譬へば比丘不淨を觀する時、著する所の衣を見て悉く是皮なりと想すれども、而も實は皮に非ず。食啖すべき所皆蟲想を作せども而も實は蟲に非ず。好美の業を觀じて穢汁

の想を作せども而も實は穢に非ず。食する所の酪を觀じて猶し髓腦の如くすれども而も實は腦に非ず。骨の碎粹を觀じて猶し髓腦の如くすれども、而も實は髓に非ざるが如く、四無量心も亦復是の如し。眞實に衆生を利益し、其をして樂を得しむること能はず。口に言を發し、衆生に樂を與ふと雖も、而

- 【六〇】次に善本を明す。之に三段ありて初に六度の本と爲す。
- 【七一】次に發心の本と爲す。
- 【七二】次に自相の本。
- 【七三】是より虚實を明す。之に二段あり、其中初に問。之に又三段ありて初に衆難。之に法、譬の二段あり。

も實は得ず。是の如きの觀慮妄に非ずや。世尊、若虛妄に非ず、實に樂を與ふれば、彼の諸の衆生や、何が故ぞ諸佛菩薩の威徳力を以ての故に、一切樂を受けざる。若當に眞實に樂を得ざるべくば、佛の所説の如し、我念ず、往昔唯慈心を修して此の劫世七反成壞を經て、此に來りて生ぜず。世界成

する時は梵天の中に生じ。世界壞する時は光音天に生ず。若梵天に生ずれば力勢自在にして能く摧伏する無し。千梵の中に於て最勝最上、大梵王と名く。諸の衆生有りて皆我が所に於て最上の想を生ず。三十六反忉利王釋提桓因と作り、無量百千轉輪王と作る。唯慈心を修して乃ち是の如きの人天の果報を得しと。若不實

ならば云何ぞ此の義と相應することを得ん。佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝眞に勇猛畏懼する所無し。』

即ち迦葉の爲に偈を説きて言はく、『若一衆生に於て、瞋恚心を生ぜず、而も願ひて彼に樂を與ふ、是を名けて慈善と爲す、一切衆生の中、若悲心を起さば、是を聖種性と名く、福報を得ること無量なり。』

設使五通仙、悉く此の大地に滿てらんに、

- 【七三】 次に終難。
- 【七四】 次に遮難。
- 【七五】 次に前の三難を答ふ。之に三段あり、其中初に遮難を答ふ。之に二段あり、其中初に其難を數す。
- 【七六】 次に正しく答ふ。之に三段ありて初に大悲。
- 【七七】 次に大悲。
- 【七八】 次に格量。

大自在主有りて、其に所安の、

象馬種種の物を奉施せん、得る所の福報の果、

一慈を修する、十六分中の一つに及ばじ。』

【五】善男子、夫慈を修するは實にして妄想に非ず、諦かに是眞實なり。若是聲聞、緣覺の慈は是を

虛妄と名く。諸佛、菩薩は眞實にして虚ならず。云何が知るや。善男子、

菩薩摩訶薩是の如く大涅槃を修行する者、土を觀じて金と爲し、金を觀じ

て土と爲し、地を水相と作し、水を地相と作し、水を火相と作し、火を水

相と作し、地を風相と作し、風を地相と作す。意に隨ひて成就し、虚妄有

ること無し。實衆生を觀じて非衆生と爲し、非衆生を觀じて實衆生と爲す。

悉く意に隨ひて成じ、虚妄有ること無し。善男子、當に知るべし、菩薩

の四無量心は是實の思惟にして不眞實に非ず。

【六】復次に善男子、云何が名けて眞實の思惟と爲す。謂はく、能く諸の煩惱を斷除するが故なり。

善男子、夫慈を修する者は能く貪欲を斷じ、悲心を修する者は能く瞋恚を斷じ、喜心を修する者は能

く不樂を斷じ、捨心を修する者は能く貪恚及び衆生相を斷ず。是の義を以ての故に眞實の思惟と

名く。

【七】次に尊難を答ふ。之に二  
段あり、其中初に眞實を唱ふ。  
【八】次に廣く是れ實なるを明  
す。之に五段ありて初に實に  
能く境を導す。之に唱、釋、  
結の三段あり。  
【六】次に實に能く慈を治する  
ことを明す。之に唱、釋、結  
の三段あり。



(八三) 復次に善男子、菩薩摩訶薩の四無量心は能く一切諸善の根本と爲す。

窮の衆生を見ることを得ざれば、緣じて慈を生ずる無し。若慈を生ぜざれば、則ち惠施の心を起すこと能はず。施の因縁を以て諸の衆生をして安隱

樂を得しむ。所謂飲、食、車乘、衣服、華香、牀臥、舍宅、燈明なり。(八四) 是

の如く施す時、心に繫縛無く、貪著を生ぜず。必定して阿耨多羅三藐三菩提に回向せん。(八五) 其の心爾の時に依止する所無く、妄想永く斷じ、怖畏、

名稱、利養の爲にせず、人天を求めず、受くる所の快樂憍慢を生ぜず、

反報を望まず、他を誑すが爲の故に布施を行せず、富貴を求めず。凡そ施

を行する時、受者の持戒、破戒、是田、非田、此は是知識、此は非知識を

見ず。施す時は器、非器を見ず。日時、是處、非處を擇ばず。亦復饑饉、

豐樂を計らず。因果、此は是衆生、此は非衆生、是福、非福を見ず。(八六) 復

施者、受者、及以財物を見ず。乃至斷及び果報を見ずと雖も、而も常に施

を行じて斷絶有ること無し。

(八七) 善男子、菩薩若持戒、破戒、乃至果報を見ば、終に施すこと能はず。

若布施ならざれば、則ち檀波羅蜜を具足せず。若檀波羅蜜を具足せざれば、

(八八) 善男子、菩薩摩訶薩若貧

(八三) 次に實に善本と爲すことを明す。之に二段あり、其中

初に能く大乘の善本と爲すことを明す。之に又二段あり、

其中初に通じて一切の善本と爲すことを明す。

(八四) 次に能く布施の本と爲すことを明す。文に五段ありて

初に正しく施本。このうち八事ありて、後の八事の本を張る。

(八五) 次に無相を得と爲すことを明す。之に三段ありて初に

總。

(八六) 次に別。

(八七) 次に簡。

(八七) 次に有相を失と爲すことを明す。之に三段ありて初に

法。

則ち阿耨多羅三藐三菩提

を成ずること能はず。

善男子、譬へば人有りて身に毒箭を被らんに、其の人の眷屬安隱なら

しめんと欲して、毒を除かんが爲の故に、即ち良醫に命じて爲に箭を抜く。

彼の入方に言はく、「且く待て觸るること莫れ。我今當に觀すべし、是の如

きの毒箭何の方よりか來れる。誰の射る所ぞ、是刹利、婆羅門、毗舍、首

陀と爲んや。」復更に念を作さく、「是何の木か、竹か柳か、其の鐵鐵は何冶

の出す所ぞ、剛か柔か。其の毛羽はは何の鳥糞ぞ。鳥、鴟、鷲なりや。所

有の毒は作より生ずと爲ん、自然にして有るや。是人毒と爲ん、惡蛇毒な

りや。」是の如きの癡人竟に未だ知ること能はず、尋で便ら命終するが如し。

善男子、菩薩も亦爾なり。若施を行する時、受者の持戒、破戒、乃至果報を

分別して終に施すこと能はず。若能く施さざれば則ち檀波羅蜜を具足せず。

若檀波羅蜜を具足せざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずること能はず。

復次に善男子、菩薩摩訶薩有施を行する時、諸の衆生に於て、慈心平

等猶し子想の如し。又施を行する時、諸の衆生に於て悲憫心を起すこと、譬へば父母の病子を瞻視す

るが如し。施を行するの時其の心歡喜すること猶し父母の、子の病愈ゆるを見るが如し。既に施す

【八八】次に譬。文のうら。人は

淺行の菩薩に、箭は擧起るを、

眷屬を請ふは知識の施を勸

るに、且く待てとは、待て時に

施さざるを、我當に觀すべし

は取相分別を、毒箭誰か射る

は福田の若しは持若しは犯な

分別するを、何木竹柳は施物

何物を捨すべき捨すべからざ

るを分別するに、所有の事は

執施の人、竟に施を知らずし

て命終するを譬ふ。既に施す

ことを得ず、懼に蔽はるるが

爲に善根の命を斷す。

【八九】次に合。

【九〇】次に一心即ち四、圓の慈相を顯す。

の後、其の心故捨すること猶し父母の、子の長大して能く自ら存活するを見るが如し。

【九一】 是の菩薩摩訶薩、慈心の中に於て食を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て、諸の衆生をして大智の食を得、勤進して無上大乗に回向せしむ。

願はくは諸の衆生善智の食を得て聲聞、緣覺の食を求めず。願はくは諸の衆生、法喜の食を得て愛食を求めず。願はくは諸の衆生、悉く般若波羅蜜の食を得、皆充滿せしめ、無闕増上の善根を攝取せしめよ。願はくは諸の衆生、空相を解達し、無闕身を得ること、猶し虚空の如くならん。願はくは諸の衆生、常に受者の爲に一切を憐憫して衆の福田と爲らん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心を修するの時、凡そ所施の食、應當に堅く是の如き等の願を發すべし。

【九二】 次に廣く普願を發す。之に八段ありて初に施食。  
【九三】 次に施藥。

【九二】 復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心中に於て漿を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にす。是の因縁を以て、諸の衆生をして大乘の河に趣きて八味の水を飲み、速かに無上菩提の道を履ましめ、聲聞、緣覺の枯竭を離れて無上の佛乘を渴仰志求す。煩惱の渴を斷じて法味を渴仰し、生死の愛を離れて大乘大般涅槃を愛樂し、法身を具足し、諸の三昧を得、甚深の智慧大海に入らしめん。願はくは諸の衆生、甘露味、菩提出世、離欲寂靜、是の如きの諸味を得ん。願はくは諸の衆生、無量百千の法味を具足せん。法味を具し已りて佛性を見ることが得、佛性を見已りて能

く法雨を雨し、法雨を雨し已りて佛性徧く覆ふこと猶し虚空の如し。復其餘の無量の衆生をして一法味所謂大乘を得しめん。諸の聲聞、辟支佛の味に非ず、願はくは諸の衆生、一甜味を得て六種差別の味有ること無からん。願はくは諸の衆生、唯法味、無閼の佛法所行の味を求めて餘味を求めず。善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て漿を布施する時、應當に堅く是の如き等の願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て車乘を施す時、常に是の願

を作さく、我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て普く衆生をして大乘を成じ、大乘に住することを得、乘を退かず。不動轉乘、

金剛座乘ならしむ。聲聞、辟支佛乘を求めず、佛乘、無能伏乘、無羸乏乘、

不退沒乘、無上乘、十力乘、大功徳乘、未曾有乘、希有乘、難得乘、無邊

乘、知一切乘に向はん。善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て車乘を施す時、

常に是の如く堅く誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て衣を布施する時、常に是の願を作さく、我今施す所、

悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て諸の衆生をして慚愧の衣を得、法界身を覆ひて諸見の

衣を裂く、衣服身を離るること一尺六寸、金色身を得て、受くる所の諸觸、柔、無閼、光色潤澤、皮膚

細爽、常光無量、無色離色ならしめん。願はくは諸の衆生、皆悉く普く無色の身を得、一切色を

細爽、常光無量、無色離色ならしめん。願はくは諸の衆生、皆悉く普く無色の身を得、一切色を

【九五】次に施車。

【九六】次に施衣。

【九七】一尺六寸。これに事理の二釋あり、理に約すれば諸見の衣を裂て、十六知見を除くを表す、事に約すれば面各四寸即ち一尺六寸を成す。

過ぎて無色の大般涅槃に入ることを得ん。善男子、菩薩摩訶薩衣を布施する時、應當に是の如く堅く誓願を發すべし。

(空) 復次に善男子、菩薩摩訶薩慈を修する中に於て、華香、塗香、鉢香、諸の雜香を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て、諸の衆生をして一切皆佛華三昧を得、七覺の妙證其の首頂に榮けしめん。願はくは諸の衆生、形滿月の如く、所見の諸色微妙第一ならん。願はくは諸の衆生、皆一相百福莊嚴を成せん。願はくは諸の衆生、意に隨ひて可意の色を見ることが得ん。願はくは諸の衆生、常に善友に遇ひ、無閻香を得て諸の臭穢を離れん。願はくは諸の衆生、諸の善根、無上珍寶を具せん。願はくは諸の衆生、相視て和悅し憂苦有ること無けん。咸く衆善を備へて相憂念せざらん。願はくは諸の衆生、戒香具足せん。願はくは諸の衆生、無閻戒を持ち、香氣芬馥十方に充滿せん。願はくは諸の衆生、堅牢戒、無悔の戒、一切智戒を得ん。諸の破戒を離れ。悉く、無戒、未曾有戒、無師戒、无作戒、無穢戒、無汗染戒、竟已戒、究竟戒、平等戒を得ん。塗割善惡等しうして憎愛無けん。願はくは諸の衆生、無上戒、大乘の戒、小乘戒に非ざるを得ん。願はくは諸の衆生、悉く尸波羅蜜を具足して猶一諸佛成就する所の戒の如くなることを得ん。願はくは諸の衆生、

【九六】 次に施華香。  
【九七】 無戒。戒を受くる戒體を得ざるの謂に非ず、無戒なる戒なり。  
【九八】 無作戒。非色非心の無表色には非ず、生死涅槃を作らざる戒の意なり。

悉く布施、持戒、忍辱、精進、禪、智に熏修せられん。願はくは諸の衆生、悉く大般涅槃微妙の蓮華、其の華の香氣十方に充滿するを成就することを得ん。願はくは衆生をして、純ら大乘大般涅槃無上香膳を食し、盞の華を采るに、但香味を取るが如くならしめよ。願はくは諸の衆生、悉く無量の功德所熏の身を成就することを得ん。善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て華香を施す時、常に當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て牀敷を施す時、常に是の願を作さく、我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て、諸の衆生をして天中天の臥する所の牀を得、大智慧四禪處に坐することを得、菩薩の臥する所の牀に臥して、聲聞、辟支佛の牀に臥せざらしめん。願はくは諸の衆生、安樂臥を得て生死の牀を離れ、大涅槃の師子臥牀を成せん。願はくは諸の衆生、此の牀に坐し已りて、復其の餘の無量の衆生の爲に神通師子遊戲を示現せん。願はくは諸の衆生、此の大乗大宮殿の中に住して、諸の衆生の爲に佛性を演說せ

【九】 次に施牀敷。

ん。願はくは諸の衆生、無上牀に坐して世法に降伏せられざらん。願はくは諸の衆生、忍辱の牀を得て生死、饑饉、凍餓を離れん。願はくは諸の衆生、無畏牀を得て永く一切の煩惱の怨賊を離れん。願はくは諸の衆生、清淨牀を得て専ら無上正眞の道を求めん。願はくは諸の衆生、善法牀を得、常に善友に擁護せられん。願はくは諸の衆生、右脇に牀に臥するを得て、諸佛所行の法に依因せん。善男

子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て牀敷を施す時、應當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

【100】次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て舍宅を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く

一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て、諸の衆生をして大乘の舍に處して善友所行の行を修行し、大

悲行、六波羅蜜行、大正覺行、一切菩薩所行の道行、無邊廣大如虛空行を修せしめん。願はくは諸の衆生、

皆正念を得て惡念を遠離せん。願はくは諸の衆生、悉く常樂我淨に安住して永く四倒を離るることを得

ん。願はくは諸の衆生、悉く皆出世の文字を受持せん。願はくは諸の衆生、必ず無上一切智の器と爲ら

ん。願はくは諸の衆生、悉く皆甘露法舍に入ることを得ん。願はくは諸の衆生、初中後心、常に大

乘涅槃の宅に入らん。願はくは諸の衆生、未來世に於て常に菩薩の居する

所の宮殿に處せん。善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て舍宅を施す時、常

に當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

【101】次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て燈明を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所

悉く一切衆生と之を共にし、是の因縁を以て、諸の衆生をして光明無量にして佛法に安住せしめ

ん。願はくは諸の衆生、常に照明を得ん。願はくは諸の衆生、色微妙光澤第一を得ん。願はくは諸の

衆生、其の目清淨にして諸の翳網無けん。願はくは諸の衆生、大智慧を得、善く我無く、衆生相無

く、人無く、命無きを解せん。願はくは諸の衆生、皆清淨佛性猶し虚空の如くなるを親見すること

【102】次に施舍宅。

【103】次に施燈。

を得ん。願はくは諸の衆生、肉眼清淨にして十方恆沙の世界を徹見せん。願はくは諸の衆生、佛の

光明を得て普く十方を照さん。願はくは諸の衆生、無闇明を得て皆悉く清淨佛性を見ることを

得ん。願はくは諸の衆生、大智の明を得て、一切の闇及び一闍提を徹せん。

願はくは諸の衆生、無量の光善く無量の諸佛の世界を照すを得ん。願は

くは諸の衆生、大乘の燈を然して二乗の錠を離れん。願はくは諸の衆生、

得る所の光明、無明の闇を滅すること千日に過逾せん。願はくは諸の衆

生、火珠明を得て、悉く三千大千世界の所有の黒闇を滅せん。願はくは諸

の衆生、五眼を具足して諸法の相を悟り、無師覺を成ぜん。願はくは諸の

衆生、見無く明無けん。願はくは諸の衆生、悉く大乘大般涅槃の微妙光

明を得て、衆生に眞實佛性を示悟せん。善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於

て燈明を施す時、常に堅く是の如きの誓願を發すべし。

(101) 善男子、一切の聲聞、緣覺、菩薩、諸佛如來の有らゆる善根は慈を

根本と爲す。(102) 善男子、菩薩摩訶薩慈心を修習すれば、能く是の如きの無

量の善根を生ず。所謂不淨、出息入息、無常生滅、四念處、七方便、三觀處、十二因緣、無常等觀、

煥法、頂法、忍法、世第一法、見道、修道、正勤如意、諸根諸力、七菩提分、八道、四禪、四無量心、

【一〇三】次に能く三乘の善本と爲すことを明す。之に三乘、一切法、總括の三段ありて初に三乘を明す。  
【一〇四】次に一切法を列す。文中不淨と出入息とは二甘露なり。七方便とは數師の義は三賢四善根なり、或論師の意は一色苦、二色集、三色滅、四色道、五色過、六色味、七色出を數ふ。三觀處とは苦、無常、無我を云ふ。若し大乘に約すれば慈、業、苦三道を以て十二因緣を觀するを云ふ。また空、假、中の三觀なり。



八解脱、八勝處、十一切入、空無相願、(二〇四) 無爭三昧、知他心智、及び諸の神通、知 善男子、是の義を以ての故に、實の根本と問ふ有らば、當に慈是なりと言ふべし。是の義を以ての故に、實にして虛妄に非ず。

(二〇五) 善男子、能く善を爲す者を實思惟と名く。實思惟とは即ち名けて慈と爲す。慈は即ち如來なり。慈は即ち大乘、大乘は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち菩提道、菩提道は即ち如來。如來は即ち慈なり。善男子、慈は即ち大梵、大梵は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは能く一切衆生の爲に父母と作る。父母は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは乃ち是不可思議諸佛の境界なり。不可思議諸佛の境界は即ち慈なり。當に知るべし、慈とは即ち是如來なり。善男子、慈とは即ち是衆生の佛性なり。是の如きの佛性は久しく煩惱に覆蔽せらる。故に衆生をして親見することを得ざらしむ。佛性は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち大空、大空は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち慈、慈は即ち如來なり。

【二〇四】無爭三昧。三解あり、一に慈心成ずる故に無爭、二に空解明なるが故に無爭、三に心の覺照に隨て物と爭はざるなり。爭明麗並に諍に作る。

【二〇五】本際智。二解あり、一には空解を本際とす、二には邊際智を云ふ、延促自在を緣するの智これなり。

【二〇六】次に總結。

【二〇七】次に實に能く諸法に徧するを明す。之に二段あり初に即ち大乘の諸善なるを明す。これに十六句あり、句毎に皆慈即如來を結す。

常、常は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是樂、樂は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是淨、淨は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是我、我は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち甘露、甘露は即ち慈なり。慈は即ち佛性、佛性は即ち法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは即ちは一切菩薩の無上の道なり。道は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは即ち佛世尊の無量の境界なり。無量の境界は即ち是慈なり。當に知るべし、慈は即ち是如來なり。

【一〇八】善男子、慈若無常ならば無常は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は

【一〇八】次に即ち小乗の諸善なることを明す。これに十六句あり、句毎に是聲聞慈を結す。

是聲聞の慈なり。善男子、慈若是苦ならば、苦は即ち是慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若不淨ならば、不淨は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若無我ならば、無我は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若忘想ならば、忘想は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若非檀の慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。乃至般若波羅蜜も亦復是の如し。善男子、慈若衆生を利益すること能はざれば、是の如きの慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若一相の

道に入らざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若諸法を覺了すること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若如來性を見ること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若法悉く是有相と見れば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若有漏ならば、有漏の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若有爲ならば、有爲の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若初住に住すること能はざれば、初住に非ざる若初住に住すること能はざれば、初住に非ざるの慈は當に知るべし、即ち是聲聞の慈なり。善男子、慈若佛の十力、四無所畏を得ること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若能く四沙門果を得ば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

【一〇九】善男子、慈若有無、非有非無ならば、是の如きの慈、諸の聲聞、辟支佛等の能く思議する所に非ず。善男子、慈若不可思議ならば、法は不可思議なり、佛性は不可思議なり、如來も亦不可思議なり。

【一〇九】次に實不可思議を明す。之に四段ありて初に大慈の體を歎す。文のうち、慈若有、無、非有非無ならばの句に就て多解あり。一に曰く、衆生、法、無縁の三慈を以て序の如く、この三句に配す、曰く衆生縁の慈は有を縁す等と。二に曰く、十地位に配す、曰く三地までは空心多きを以て無の句に配し、四地より七地に至るば有心多きが故に有の句に、八地より十地に至るは有

無非觀するが故に非有非無の句に配すと。三に曰く、佛果の妙有と、生死無きと、眞に冥するとの三徳に配釋す。章安上の三義を破し、次に二義を出す。一に此三句正しく梵行品中の意を明す故に著し淨淨を縁するは無の句、不淨淨は有の句、非淨非不淨は非有非無の句にして不並不別なり。二にこの三句即空假中の三諦及び中論四句の偶意と同じと。

【一一〇】次に行慈の人を歎す。

て、是の如きの慈を修すれば、復睡眠の中に安んずと雖も、而も睡眠せず、勤めて精進するが故に、常に覺寤す。雖も亦覺寤無し、眠ること無きを以ての故に。睡眠の中に於て諸天護ると雖も、亦護者無し、惡を行せざるが故に。眼塵夢せず、不善有ること無し、睡眠を離るるが故に。命終の後梵天に生ずと雖も、亦所生無し、自在を得るが故なり。善男子、夫慈を修する者は、能く是の如きの無量無邊の功德を成就することを得。善男子、是の大涅槃微妙の經典も、亦能く是の如きの無量無邊の功德を成就す。諸佛如來も亦是の如きの無量無邊の功德を成就することを得。」

〔二二〕 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩の有らゆる思惟は悉く是眞實にして、聲聞、緣覺は眞實に非ざる者なり。一切衆生何が故ぞ、菩薩の威力を以て等しく快樂を受けざる。若諸の衆生實に樂を得ざれば、當に知るべし、菩薩所修の慈心利益無しと爲す。」

佛の言はく、「善男子、菩薩の慈利益せざるに非ず。善男子、諸の衆生有りて或は必ず苦を受

け、或は受けざる有り。若衆生必ず苦を受くる者有らば、菩薩の慈利益無しと爲す。一闍提を誦ふ。若受苦必定ならざる者有らば、菩薩の慈則ち利益を爲し、彼の衆生をして悉く快樂を受けしむ。善男子、譬へば人有りて遙に師子、虎豹、豺狼、羅刹鬼等を見れば、自然に怖を生じ、夜行杌を見て亦恐

- 〔二一〕 次に常慈の教を歎す。
- 〔二二〕 次に愛慈の主を歎す。
- 〔二三〕 次に愛慈を答ふ。之に二段ありて初に問を肆して答を請す。
- 〔二四〕 次に正しく答ふ。之に三段ありて初には實に利益有ることを明す。之に又三段ありて初に餘有ることを唱ふ。
- 〔二五〕 次に益を釋す。

畏を生ずるが如し。善男子、是の如きの諸人自然に怖畏す。衆生是の如く慈を修する者を見れば、自然に樂を受く。(二六) 善男子、是の義を以ての故に、菩薩の修慈は是實の思惟にして利益無きに非ず。

(二七) 善男子、我が説く是の慈は無量の門有り、所謂神通なり。善男子、提婆達の阿闍世を教へて如來を害せんと欲するが如し。是の時我、王舎大城に入りて次第に乞食す。阿闍世王、即ち護財の狂醉の象を放ちて我及び諸弟子を害せしめんと欲す。其の象、爾の時無量百千の衆生を踏殺す。衆生死し已りて多く血氣有り。是の象嗅ぎ已りて狂醉常に倍す。我翼従の被服の赤色を見て、呼んで (二八) 是を血と謂ふ、而も復我が弟子の中に趣るを見る。未離欲の者、四散して馳走す。唯阿難を除く。爾の時に王舎城の中の一切の人民、同時に聲を擧げて號哭流涙し、是の如きの言を作さく、「怪しい哉如來、今日終没せん。如何ぞ正覺一旦散壞す。是の時に調達、心に歡喜を生ず。瞿曇沙門の滅没甚だ善し。今より已往眞に是現せず。快い哉此の計、我が願遂ぐることを得たり」と。善男子、我爾の時に於て護財象を降伏せんと欲するが爲の故に、即ち慈定に入り手を舒べて之に示す。即ち五指に於て五師子を出す。是の象見已りて其の心怖畏して大小便を失し、身を擧げ地に投じて我が足を敬禮す。善男子、我時に手

【二六】次に益を結す。

【二七】次に事を引いて證と爲す。之に八段ありて初に醉象を伏す。

【二八】是を血と謂ふ。此の文に就て三解あり、一は十二年前は未だ壞色の制有りざる故に専ら赤色の衣を指すといふ。二は法衣の制定に付て五部の不同あるも大抵青泥木闍色を指すといふ。三は衣は一色に非ず實は三色を用ゐて點するなり、三色ありと雖も、遙望すれば一色の如く見ゆといふ。

指實に師子無し。乃ち是慈を修する善根力の故に、彼をして調伏せしむ。

二九 復次に善男子、我涅槃せんと欲して始初めて發足して拘尸那城に向ふ。五百の力士有り、其の中

路に於て平治掃灑す。中に一石有り、衆擧げ移さんと欲して力を盡せども能はず。我時に憐愍して即

ち慈心を起す。彼の諸の力士、尋で即ち我が足の拇指を以て此の大石を擧

げ、擲ちて虚空に置き、還つて手を以て接して右の掌に安置し、吹きて碎

れせしめ、復還つて之を合するを見る。彼の力士をして貢高の心を息めし

め、即ち爲に略して種種の法要を説き、其をして俱に阿耨多羅三藐三菩提

心を發さしむ。善男子、如來爾の時に實に指を以て此の大石を擧げて虚空

の中に在き、還つて右掌に置き、吹きて碎れせしめ、復合して本の如くせ

り。善男子、當に知るべし、即ち是慈善根の力、諸の力士をして是の如き

の事を見しむ。

(一〇) 復次に善男子、此の南天竺に一大城有り、(一一) 首波羅と名く。是の城中に於て一りの長者有りて

名を 盧至と曰ふ、衆の導主爲り。已に過去の無量佛の所に於て諸の善本を植う。善男子、彼の大

城の一切の人民、邪道に信伏し、尼難に奉事す。我時に彼の長者を度せんと欲するが故に、王舎

城より彼の城邑に至る、其の問相去ること六十五由旬なり。佛大衆と歩行して往く。彼の諸人を化度

【二九】次に力士を化す。

【三〇】次に盧至を化す。

【三一】首波羅(の首波羅)なり。又

た、舍衛とも書し、聞者、好名聞等の譯あり、もと城の名なり。この城は橋薩羅國の首都なれども又た南方橋薩羅國と區別して舍衛國ともいふなり。

【三二】盧至(ルシ)受業又は啼哭と譯す、長者の名。

せんと欲するが爲の故なり。尼毘、われ彼の城に至らんと欲するを聞きて是の念を作さく、「沙門瞿曇若此に至らば、此の諸の人民便ち當に我を捨てて復供給せざるべし。我等窮悴如何ぞ存活せん。」諸の尼毘輩各分散して彼の城人に告ぐ、「沙門瞿曇今此に來らんと欲す。然るに諸の沙門父母を委棄して東西に馳騁す。所至の處能く土地五穀登らず、人民饑饉し、死亡の者衆く、病瘦相尋いで救済すべきこと無し。瞿曇無頼、純ら諸の惡羅刹鬼神を將ゐ、以て侍従と爲す。父無く母無き孤窮の人、而も就て咨啓して爲に門徒と作る。教詔すべき所純ら虚空を説く。其の至處に隨ひて初て安樂無し。彼の人聞き已りて即ち怖畏を懷き、頭面に尼毘子の足を敬禮して白して言さく、「大師、我等今者當に何の計を設くべき。」尼毘答へて言はく、「沙門瞿曇、性叢林、流泉、清水を好み、外に設有らば毀壞すべし。汝等便ち相與に城を出で、林木を斬伐して遣す有らしむること勿れ。流泉、井池填むるに臭穢を以てすべし。堅く城門を閉ぢて、各器仗を嚴にし、壁に當りて防護し勤めて自ら回く守れ。彼設ひ來るも前むことを得しむること莫れ。若前まざれば汝當に安隱なるべし。我等も亦當に種種の術を作して、彼の瞿曇をして道を復して還り去らしむべし。」彼の諸の人民是の語を聞き已りて敬奉して施行す。樹木を斬伐し、諸水を汗辱し、器仗を莊嚴して牢く自ら防護す。善男子、我爾の時に於て、彼の城に至り已りて一切の樹木、叢林を見ず。唯諸人器仗を莊嚴し、壁に當りて自ら守るを見る。是の事を見已りて、尋で憐憫を生じて慈心之に向ふに、有らゆる樹木還つて生じて本の如し。復更に其の餘の諸樹

を生長する稱計すべからず。河、池、井、泉、其の水清淨にして其の中に盈滿して青瑠璃の如し。衆の雜華を生じて其の上に彌覆す。其の城壁を變じて紺瑠璃と爲す。城内の人民悉く我及び大衆を徹見することを得、門自ら開闢して能く制する者無し。所嚴の器仗變じて雜華と成る。盧至長者を上首と爲し、其の人民と俱共に相隨ひて我が所に來至す。我即ち爲に種種の法要を説き、彼の諸人をして一切皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。善男子、我爾の時に於て實に種種の樹木を化作し、清淨の流水河池に盈滿し、其の木城を變じて紺瑠璃と爲して、彼の人民をして我が身を徹見し、其の城門を開き、器仗を華と爲す。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、能く彼の人をして是の如きの事を見しむ。

【二三】次に女人を度す。  
 【二四】婆私吒（Prajapati）。最勝と譯す、婆羅門の名なり。

復次に善男子、舍衛城に婆羅門女、婆私吒と名くる有り。唯一子有りて之を愛すること甚だ重く、病に遇ひて命終す。爾の時に女人愁毒心に入り、狂亂して性を失し、裸身にして恥づる無く、四衢に遊行して啼哭して聲を失す。唱へて言ふ、子、汝何の處にか去る」と。城邑に周徧して休已有ること無し。而も是の女人、已に先佛に於て衆の徳本を植う。善男子、我是の女に於て慈憫の心を起す。是の時女人即ち我を見ることが得て便ち子想を生じ、還つて本心を得、前んで我が身を抱き子を愛する法の如くす。我時に即ち侍者阿難に告ぐ、「汝衣を持して是の女人に與ふべし。」既に衣を與へ已りて、便ち爲に種種に諸の法要を説く。是の女法を聞き、歡喜踊躍して阿耨



多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て實は彼の子に非ず、彼は我が母に非ず、亦抱持すること無し。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

(二三) 復次に善男子、波羅奈城に優婆夷の 摩訶斯那達多と名くる有り。已に過去無量の先佛に於て

諸の善根を種う。是の優婆夷、夏九十日衆僧を屈請して醫藥を奉施す。是の時衆中に一比丘有りて身重病に嬰る。良醫之を診するに當に肉藥を須ふべし。若肉を得れば病則ち除くべく、若肉を得ざれば命將に全からざらんとす。時に優婆夷、醫の此の言を聞き、尋いで黄金を持して徧く市里に至り是の如きの言を唱ふ、「誰か肉を賣る有らん、吾之を買はんと欲す。若肉有らば當に等しく金を與ふべし。」城市に徧徧して悉く得ること能はず。是の優婆夷、尋いで自ら刀を取りて其の股肉を割き、切りて以て藥を爲り、種種の香を下して病比丘に施す。比丘服し已りて、病即ち差ゆることを得たり。是の優婆夷瘡を患ひて苦惱し、堪忍すること能はず。即ち聲を發して言はく、「南無佛陀南無佛陀」と。我爾の時に於て舍衛城に在りて其の音聲を聞き、是の女人に於て大慈心を起す。是の女尋いで我が良藥を持して其の瘡上に塗るを見て、還復して本の如し。我即ち爲に種種の妙法を説く。法を聞きて歡喜し、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て實に波羅奈城に往至して、藥を持して彼の優婆夷の身に塗らず。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

【二三】次に割瘡を塗る。

【二六】摩訶斯那達多(マハリセータダタ) 大軍將と譯す。

【三七】復次に善男子、調達惡人貪にして足ることを知らず。多く酥を服するが故に、頭痛、腹滿、大苦惱を受けて堪忍すること能はず。是の如きの言を發す、「南無佛陀南無佛陀」と。我時に、優禪尼城に住す。其の音聲を聞きて即ち慈心を生ず。爾の時に調達、尋いで便ち我其所に往至して手づから頭腹を摩し、鹽湯を授與して之を服せしむるを見る。服し已りて平復す。善男子、我實に提婆達が所に往いて其の頭腹を摩で、湯を授けて服せしめず。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、提婆達をして是の如きの事を見しむ。

【三九】復次に善男子、三三〇の羣賊有り、其の數五百なり。羣黨鈔劫して害を爲すこと滋甚だし。波斯匿王其の縱暴を患ひ、兵を遣して伺

ひ捕ふ。得已りて眼を挑り、黒闇叢林の下に逐著す。是の諸の羣賊、已に先佛に於て衆の徳本を植う。既に目を失ひ已りて大苦惱を受け、各是の言を作さく、「南無佛陀南無佛陀、我等今救護有ること無し」と。啼哭號咷す。

我時に祇洹精舎に住す。其の音聲を聞きて即ち慈心を生ず。時に涼風有り、香山中の種種の香藥を吹きて其の眼匡に滿つ。尋いで還つて眼を得、本の如く異ならず。諸賊眼を開き、即ち如來其の前に住立して爲に法を説くを見る。賊法を聞き已りて阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て、實に風香山中の種種の香藥を吹くことを作し、其の人の前に住して爲に説法せず。善男子、

【三七】次に調達を摩す。  
 【三八】優禪尼 (Uttarāyana) 南印度の境に存する國の名。  
 【三九】次に羣賊を救ふ。  
 【四〇】橋薩羅 (Kosambī) 不靜又は藏有と譯す。中印度に在り、周圍六千余里ある國の名。この國の首都は有名なる舍衛城なり。

當に知るべし。皆是慈善根の力、彼の羣賊をして是の如きの事を見しむ。

(二三) 復次に善男子、瑠璃太子愚癡を以ての故に、其の父王を廢し自ら立ちて主と爲り、復宿嫌を念じて多く釋種を害す。萬二千の釋種の諸女を取り、耳鼻を刑刺し、手足を斷截して之を阨壘に推す。時に諸の女人身苦惱を受け、是の如きの言を作さく、南無佛陀南無佛陀、我等今者救護有ること無し。と。復大いに號咷す。是の諸の女人、已に先佛に於て諸の善根を種う。我爾の時に於て竹林の中に在り。其の音聲を聲きて即ち慈心を起す。諸女爾の時に、我 迦毗羅城に來至して、水を以て劍を洗ひ藥を以て之に塗るを見、苦病尋いで除き、耳鼻、手足還復して本の如し。我時に即ち爲に略して法要を説き、悉く俱に阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。即ち 大愛道比丘尼の所に於て法の如く出家し、具足戒を受けしむ。善男子、如來爾の時實に迦毗羅城に往至して水を以て劍を洗ひ、藥を塗りて苦を止めず。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

慈善の心も亦復是の如し、善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩の修慈思惟は即ち是眞實にして虛妄に非ざるなり。善男子、夫無量とは思議すべからず。菩薩の所行は思議すべからず。諸佛の所行も亦思議すべからず。是の大乘典大涅槃經も亦思議すべからず。』

【二三】次に釋女が譬す。  
【二三】迦毗羅 (Kapilavastu)。  
妙德又は黃色を譯す、城の名、悉達太子の生處。  
【二三】大愛道比丘尼は、梵語摩訶波闍波提 (Mahaprajapati) の譯なり。又た之を大生主と譯す、寧ろ後者を以て當れりとす。釋尊の姨母なり。

梵行品の二

〔二〕復次に善男子、菩薩摩訶薩慈悲喜を修し已りて極愛一子の地に住することを得。善男子、云何が此の地を名けて極愛と曰ひ、復一子と名く。

〔三〕善男子、譬へば父母、子の安隱を見ば心大いに歡喜するが如く、菩薩摩訶薩是の地中に住するも亦復是の如し、諸の衆生を視ること一子に同じ。善を修する者を見れば大歡喜を生ず。是の故に此の地を名けて極愛と曰ふ。

〔四〕善男子、譬へば父母、子の患に遇ふを見て心に苦惱を生じ、之を憫みて愁毒し、初て捨離すること無きが如く、菩薩摩訶薩是の地中に住するも亦復是の如し。諸の衆生の煩惱の病に纏切せらるるを見て心に愁惱を生じ、憂念すること子の如く、身の諸の毛孔より血皆流出す。是の故に此の地を名けて一子と爲す。

〔五〕善男子、人小きき時、土塊、穢物、瓦石、枯骨、木枝を拾ひ取りて口中に置くに、父母見已りて

【一】次に四心の果を明す。之に二段ありて初に三心極愛地の果が明す。其中又二段ありて、初に地果の文。而して今は初に善門を喩ふ。文のうちは極愛一子の地とて或は性地、或は八地已上、或は初地と云ふ。安詳に曰く、先の聖行は初地の自行、今の梵行はこれ初地の化地と。

【二】次に解釋の文。其中、二段ありて初に兩章を標す。文のうちは極愛は心に就き一子は其口邊を教ふなり。

【三】次に解釋。五譬あり。又其中二段ありて初に一譬は極愛を釋す。

【四】次に四譬は一子を釋す。之に四段ありて初に第二譬。

【五】次に第三譬。土塊等は五陰を譬ふ、下の文に合して身口意業と云ふ。左は實智、右は權智に、又左は定觀を、右は智波を譬ふ。塵を譬ふは其身非か救ふなり。擲り出すは其口邊を教ふなり。

其の患を爲さんことを恐れて左手に頭を捉へ、右手に挑り出すが如く、菩薩摩訶薩是の地中に住するも亦復是の如し。諸の衆生法身未だ増せず。或は身、口、意業の不善を見る。菩薩見已りて則ち智手を以て之を抜き出でしめ、彼をして生死に流轉して諸の苦惱を受けしむることを欲せず。是の故に此の地を復一子と名く。

善男子、譬へば父母所愛の子、捨てて終亡すれば父母愁惱して與に命を并てんと願ふが如く、菩薩も亦爾なり。一闍提の地獄に墮するを見れば、亦與俱に地獄の中に生せんと願ふ。何を以ての故に。是の一闍提、若受苦の時、或は一念の改悔の心を生せば、我即ち當に爲に種種の法を説き、彼をして一念の善根を生ずることを得しむべし。是の故に此の地を復一子と名く。

善男子、譬へば父母に唯一子有り。其子の睡寤、行住坐臥、心常に之を念す。若罪咎有らば、善言誘諭して其に惡を加へざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。諸の衆生の、若しは地獄、畜生、餓鬼に墮し、或は人天中に善惡を造作するを見、心常に之を念じて初て放捨せず。若諸惡を行ずれども、終に瞋を生じて惡を以て之に加へず。是の故に此の地復一子と名く。

迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如きは其の言祕密なり。我今智淺くして云何ぞ能く

- 【六】次に第四譬。
- 【七】次に第五譬。
- 【八】是より論議の文。之に、二段ありて初に論義の文。其中、先づ問、而して初に不解を申ぶ。

解せん。若諸の菩薩一子地に住して是の如きを能せば、云何ぞ如來昔國王と爲りて菩薩道を行せる時、爾の所の婆羅門の命を斷絶せる。若此の地を得ば則ち護念すべし。若得ざる者は復何の因縁にて地獄に墮せざる。若等しく一切衆生を視ること、子想に同じく羅睺羅の如くならしめば、何が故ぞ復提婆達多に向ひて是の如きの言を説く。癡人無羞人の涕唾を食す」と。彼をして聞き已りて瞋恨を生じ、不善心を起して佛身の血を出さしむ。提婆達多是の惡を造り已りて如來復記す、「當に地獄に墮して一劫罪を受くべし」と。世尊、是の如きの言云何ぞ義に於て相違背せざらんや。世尊、須菩提は虚空地に住し、凡そ城に入りて飲食を求乞せんと欲すれば、要す先人を觀す。若已に於て嫌嫉の心を生ずる有らば、則ち止めて行せず。乃至極めて饑うとも猶行いて乞はず。何を以ての故に。是の須菩提當に是の念を作さく、「我憶す、往昔、福田の所に於て一の惡念を生じ、是の因縁に由りて大地獄に墮して種種の苦を受く。我今寧ろ饑ゑて終日食せずとも、終に彼をして我に於て嫌を起し、地獄に墮して諸の苦惱を受けしめじ。復是の念を作さく、「若衆生、我が立つを嫌ふ者有らば、我當に終日端坐して起たじ、若衆生、我が坐するを嫌ふ者有らば、我當に終日立ちて處を移さざるべし。行臥も亦爾なり。是の須菩提、衆生を護るが故に尙是の心を起す。何に況や菩薩をや。菩薩若一

【九】次に正しく論議す。この中或は五難を分ち、或は三難を分つ。今は三難とす。その中初に婆羅門を殺すを難す。之に何故に殺す、應に護念すべし、何ぞ墮獄せざるの三段あり。

【一〇】次に達多を罵るるを難す。

【一一】次に須菩提の爲めの況の文。

子地を得る者、何に縁りてか如來、是の麤言を出して諸の衆生をして重惡心を起さしむ。』

佛、迦葉に告げたまはく、『汝今是の如きの難を作して佛如來、諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作すと云ふべからず。』

善男子、假使鬚髻の能く海底を盡すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作らず。』

善男子、假令大地悉く非色と爲り、水堅相と爲り、火冷相と爲り、風住相と爲り、三寶佛性及以虚空無常相を作すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。』

善男子、假使四重禁罪を毀犯し及び一闍提正法を誘する者、現身に十力、(四)無畏、三十二相、八十種好を成するを得れども、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。』

善男子、假使聲聞、辟支佛等常に住して變せしむとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。』

善男子、假使十住の諸の菩薩等、四重禁を犯し一闍提と作り正法を誹謗すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。』

善男子、假使一切の無量の衆生佛性を斷滅し、如來究竟じて被涅槃に入れども、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。』

善男子、假使鬚髻を擲ちて能く風を繫縛し、齒能く鐵を破し爪須彌を壞すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。寧ろ毒蛇と一處に同共し、其の兩手を餓餓子の口に内れ、佉陀羅炭を用ひ

- 【一】 次に答、之れに三段あり。初に況難を答ふる中、先づ總じて呵す。
- 【二】 次に七事を擧げ以て別呵す。其中初呵、鬚髻とは、鳥口の突れるを髻と云ひ、鬚の口之に似たるを以て鬚髻と云ふ。
- 【三】 次に二呵。
- 【四】 次に三呵。
- 【五】 次に四呵。
- 【六】 次に五呵。
- 【七】 次に六呵。
- 【八】 次に七呵。

て身を洗浴すとも、如來世尊諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作すと發言すべからず。善男子、如來眞實に能く衆生の爲に煩惱を斷除し、終ひ爲に煩惱の因縁を作さず。

善男子、汝の言ふ所の如く、如來往昔婆羅門を殺すとは、(三)善男子、菩薩摩訶薩は乃至婢子尚故

らに殺さず、況や婆羅門を。菩薩常に種種の方便を作して衆生に無量の壽命を惠施す。善男子、夫

食を施す者は則ち命を施すと爲す。菩薩摩訶薩檀波羅蜜を行する時、常に衆生に無量の壽命を施す。善

男子、不殺戒を修して壽命長きことを得。菩薩摩訶薩戸波羅蜜を行する時、

則ち一切衆生に無量の壽命を施與すと爲す。善男子、口を慎みて過無けれ

ば壽命長きことを得。菩薩摩訶薩厲提波羅蜜を行する時、常に衆生を勸め

て怨憎を生ずること莫れ。直を人に推し曲を引きて己に向ひ、爭訟する所

無ければ壽命長きことを得。是の故に菩薩摩訶薩行する時、己に衆生に無量の壽命を施す。善男

子、精勤して善を修すれば壽命長きことを得。菩薩摩訶薩毗梨耶波羅蜜を行する時、常に衆生を勸め

て善法を勤修せしむ。衆生行じ己りて無量の壽を得。是の故に菩薩摩訶薩行する時、己に

衆生に無量の壽命を施す。善男子、攝心を修する者壽命長きことを得。菩薩摩訶薩禪波羅蜜を行する

時、諸の衆生に平等心を修するを勸む。衆生行じ己りて壽命長きことを得。是の故に菩薩摩訶薩波羅蜜

を行する時、己に衆生に無量の壽命を施す。善男子、諸の善法に於て放逸せざる者壽命長きことを得

【三】次に殺羅を答ふ。之に三段あり、其中初に何故殺すを答ふ。而して先づ問を置す。【三】次に正しく答ふ。



菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行する時、諸の衆生を勸めて諸の善法に於て放逸を生ぜず。衆生行じ已りて是の因縁を以て壽命長きことを得。是の故に菩薩般若波羅蜜を行する時、已に衆生に無量の壽命を施す。(三)善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩諸の衆生に於て終に命を奪ふこと無し。

(三)善男子、汝向に問ふ所の婆羅門を殺す時は是の地を得るや不やとは、

(四)善男子、我時に已に得。愛念を以ての故に其の命根を斷ず、惡心に非ざるなり。善男子、譬へば父母唯一子有りて之を愛すること甚重、官の憲制を犯す。是の時父母、怖畏を以ての故に若は擯け若は殺す。復擯殺すと雖も、惡心有ること無きが如く、菩薩摩訶薩正法を護るが爲にも亦復是の如し。若衆生の大乗を誘する者有らば、即ち鞭撻を以て苦ろに之を加治す。

(五)其の命を奪ひ往を改めて善法を遵修せしめんと欲す。菩薩の意常に是の思惟を作さく、何の因縁を以てか、能く衆生をして信心を發起せしむ。其の方便に隨ひて要す當に之を爲すべし。諸の婆羅門命終の後阿鼻地獄に生ず。即ち三念有り。一つには自ら念す、我何の處より此に來生す、即ち自ら人道の中より來るを知る。二つには自ら念す、我今生する所は何の處と爲ん、即ち自ら阿鼻獄と知る。三つには自ら念す、何の業縁に乘りて此に來生す、即ち自ら方等大乘經典を誘し、信せざるの因縁に乘りて國主

其の命を奪ひ往を改めて善法を遵修せしめんと欲す。菩薩の意常に是の思惟を作さく、何の因縁を以てか、能く衆生をして信心を發起せしむ。其の方便に隨ひて要す當に之を爲すべし。諸の婆羅門命終の後阿鼻地獄に生ず。即ち三念有り。一つには自ら念す、我何の處より此に來生す、即ち自ら人道の中より來るを知る。二つには自ら念す、我今生する所は何の處と爲ん、即ち自ら阿鼻獄と知る。三つには自ら念す、何の業縁に乘りて此に來生す、即ち自ら方等大乘經典を誘し、信せざるの因縁に乘りて國主

【三】次に實に殺さざるを結す。  
【四】次に其譏念の間に酬ゆ。之に三段ある中、初に問を牒す。  
【五】次に正しく釋す。  
【六】其の命を奪ひ、この文に就て河西は實殺に約して因縁を立て、興皇は示現に約して釋す。安註會して二說偏用すべからず若意を得れば理その間に在りと云へり。

に殺されて此に來生するを知る。是の事を念じ已りて、即ち大乘方等經典に於て信敬の心を生ず。尋時命終して甘露鼓如來の世界に生じ、彼に於て壽命十劫を具足す。善男子、是の義を以ての故に我往昔より乃ち是の人に十劫の壽命を與ふ。云何ぞ殺と名けん。

善男子、若人地を掘り、草を刈り、樹を斫り、死尸を斬截し、罵詈穢撻せん。是の業縁を以て地獄に墮せんや不や。迦葉菩薩、佛に白して言さく、世尊、我佛所説の義を解するが如きは、地獄に墮すべし。何を以ての故に。佛昔聲聞の爲に法を説きたまふが如し、汝諸の比丘、諸の草木に於て惡心を生ずること莫れ。何を以ての故に。一切衆生惡心に因るが故に地獄に墮す」と。

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い哉善い哉汝が説く所の如し、善く受持すべし。善男子、若惡心に因りて地獄に墮すれば、菩薩、爾の時に實に惡心無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩一切衆生、乃至蟲蠅に於て悉く憐憫利益の心を生ずるが故に。所以は何ん。善く因縁諸の方便を知るが故に。方便力を以て、衆生をして諸の善根を種ゑしめんと欲す。善男子、是の義を以ての故に、我爾の時に於て善方便を以て其の命を奪ふと雖も、而も惡心に非ず。善男子、婆羅門の法若蠅子を殺して十車に満足すと

【六】次に結す。

【七】次に不墮の間を酬ふ、之に三段ある中、初に更に反問す。

【八】次に迦葉の答。

【九】次に正しく答ふ。之に三段ありて初に歎進す。文の意、惡を以て草を殺すも尙罪を得べし。然るに若惡心なくんば人を殺すも罪ある無しとなり。

【一〇】次に内外の諸殺を簡ぶ。之に二段あり、其中初に外殺を簡ぶ。

も罪報有ること無し。蠱蟲、蚤蟲、猫子、師子、虎狼、熊罷の諸惡蟲獸、及び餘の能く衆生の爲に害となる者、殺して十車に滿つ。鬼神、羅刹、拘槃茶、迦羅富單那、顛狂乾枯、諸の鬼神等、能く衆生の爲に燒害を作す者、其の命を斬奪すとも悉く罪報無し。若惡人を殺さば即ち罪報有り、殺し已むて悔いざれば即ち餓鬼に墮す。若能く懺悔して三日斷食すれば、其の罪消滅して遺餘有ること無し。若和尚及び其の父母、女人、及び牛を害せば、無數千年地獄の中に在り。

〔三〕善男子、佛及び菩薩は、殺に三有るを知る。下、中、上を謂ふ。下とは蠅子、乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を除く。善男子、菩薩摩訶薩願因縁を以て畜生を受くるを示す、是を下殺と名く。下殺の因縁を以て地獄、畜生、餓鬼に墮して具さに下苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生微善根有り、是の故に殺者具さに罪報を受く。是を下殺と名く。中殺とは凡夫人より阿那含に至る、是を名けて中と爲す。是の業因を以て地獄、畜生、餓鬼に墮して具さに中苦を受く。是を中殺と名く。上殺とは父母、乃至阿羅漢、辟支佛、畢定の菩薩、是を名けて上と爲す。是の業因を以て阿鼻大地獄中に墮して具さに上苦を受く。是を上殺と名く。

〔三〕善男子、若能く一闍提を殺す者有らば、即ち此の三種の殺中に墮せず。善男子、彼の諸の婆羅門等、一切皆は一闍提なり。譬へば掘地、刈草、斫樹、斬截、死尸、

〔三〕 拘槃茶 (Kumbhacharya) 厭屑鬼と譯す、人の精氣を啜ふ鬼の名。

〔三〕 迦羅富單那。富單那 (Dharmapala) は臭餓鬼と譯す、餓鬼中の最勝といふ。この種の餓鬼に多類あり、今黑色なる餓鬼を指して迦羅 (Kala) 富單那といふ。

〔三〕 次に内殺を簡ぶ。  
〔三〕 次に所問を會通す。

罵詈、鞭撻は罪報有ること無きが如く、一闍提を殺すも亦復是の如し。罪報有ること無し。何を以ての故に、諸の婆羅門、乃至信等の五法有ること無し。是の故に殺すと雖も地獄に墮ぜず。

【三】善男子、汝上に言ふ所の、如來何が故ぞ提婆達多を癡人唾を食すと罵るとは、【三】亦是の如

きの難を作すべからず。何を以ての故に。諸佛世尊凡そ發言する所思議す

べからず。善男子、或は實語の世に愛せられ、非時非法利益を爲さざる有

り。是の如きの言、我終に説かず。善男子、或は復言の麤獷、虛妄、非時

非法、聞く者愛せず、利益すること能はざる有り。我亦説かず。善男子、

若語言復麤獷と雖も、眞實にして虚ならず。是の時是の法、能く一切衆生

の利益を爲す有らば、聞きて悦ばずと雖も、我要す之を説く。何を以ての

故に。諸佛世尊、【三】應正徧知、方便を知るが故なり。

【三】善男子、我一時彼の曠野、聚落の叢樹に遊ぶが如く、其の林下に在り

て一つの鬼神有り、即ち曠野と名く。純ら肉血を食し、多く衆生を殺す。復其の聚に於て日に一人を

食す。善男子、我爾の時に於て、彼の鬼神の爲に廣く法を説く。然るに彼、暴惡、愚癡、無智にし

て教法を受けず。我即ち身を化して大力鬼と爲り、其の宮殿を動じて所を安んぜざらしむ。彼の鬼時

に其の眷屬を將ゐて其の宮殿を出で、來りて距て逆はんと欲す。鬼我を見る時、即ち心念を失ふ。惶

【三】次に罵難を答ふ。之に三

段あり、初に問を牒す。

【三】次に釋の文。この中昔の

七事を引て證す。これに二段

あり、初に總略して意を述すし

【三】應正徧知。應は具に應供

(Arhat)といふ。正徧知(Pratyakṣin Bodhi)は、又た正等

覺とも譯す。並びに如來の異

稱なり。

【三】次に七事を別す。

怖して地に躡れ、迷悶斷絶して猶し死人の如し。我慈憫を以て手もて其身を摩す。即ち遷つて起坐して是の如きの言を作さく、「快哉今日還つて身命を得、是の大神王大威徳を具す。慈憫の心有りて我が愆咎を赦す。即ち我が所に於て善信の心を生ず。我即ち如來の身を還復して復更に爲に種種の要法を説き、彼の鬼神をして不殺戒を受けしむ。即ち是の日に於て曠野村中に一りの長者有り、次に當に死すべし。村人已に送りにて彼の鬼神に付す。鬼神得已りて即ち以て我に施す。我既に受け已りて、便ち長者の爲に更に名字を立て手長者と名く。爾の時に彼の鬼、即ち我に白して言さく、「世尊、我及び眷屬、唯血肉を仰ぎて以て自ら存活す、今已に戒を受く、當に何んが資立すべき。」我即ち答へて言はく、「今より當に聲聞の弟子に敕すべし。佛法を修行すること有るの處に隨ひて、悉く當に其をして汝の飲食を施さしむべし。」善男子、是の因縁を以て諸の比丘の爲に是の如きの戒を制す。汝等今より常に當に彼の曠野鬼に食を施すべし。若住處の施すこと能はざる者有らば、當に知るべし、是の輩我が弟子に非ず。即ち是天魔の徒黨眷屬なり。善男子、如來衆生を調伏せんと欲するが爲の故に、是の如き種種の方便を示す。故に彼をして怖畏を生ぜしめざるに非ざるなり。善男子、我も亦木を以て護法鬼を打つ。又一時に於て一つの山上に在り。羊頭鬼を推して山下に墮せしめ、復樹頭に於て護彌猴鬼を撲ち、護財象をして五師子を見しめ、金剛神をして

【三】薩遮尼躡。恐らく毘舍闍(ニルカニ)との合成語なるか。毘舍闍は頭鬼と譯す、持國天を支配する鬼の總名なり。尼躡他迦は無明と譯す、夜叉の名なり。

三九 薩遮尼躡

を怖れしめ、亦針を以て箭毛鬼の身を刺す。是の如きを作すと雖も、亦彼の諸の鬼神等をして殘滅者有らしめず。直彼をして正法に安住せしめんと欲す。故の是の如きの種種の方便を示す。

善男子、我爾の時に於て實に提婆達多を罵辱せず。提婆達多も亦愚癡にして人の涕唾を食せず。亦復惡趣の中に生じて阿鼻地獄に受罪一劫ならず。亦僧を壞し佛身の血を出さず。亦四重の罪を違犯し、正法の大乗經典を誹謗せず。一闍提に非ず、亦聲聞、辟支佛に非ざるなり。善男子、提婆達多是實に聲聞、緣覺の境界に非ず。唯是諸佛の知見する所なり。善男子、是の故に汝今難じて、如來何の緣ぞ、提婆達を呵責し罵辱す」と言ふべからざるなり。汝諸佛の有らゆる境界に於て、是の如きの疑網を生ずべからず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、譬へば甘蔗數數前煮して種種の味を得るが如く、我も亦是の如し。佛に従ひて數聞きて多く法味を得。所謂出家味、離欲味、寂滅味、道味なり。世尊、譬へば眞金數數燒打、融消、鍊冶すれば、轉た更に明淨、調和柔栗、光色微妙、其の價量り難し。然して後乃ち人天に寶とし重んぜらるるが如く、世尊、如來も亦爾なり。鄭重に諮問すれば即ち甚深の義を聞見することを得、深行の者をして受持奉修せしめ、無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發し、然して後諸の人天に恭敬供養せらる。』

【四一】次に結して會す。

【四二】是より領解。之に二段あり、其中初に領解。

【四三】所謂出家味。ここに四味あり、これ四諦味なり。出は

これ出苦味。離はこれ離集味。寂滅と道とは文の如し。

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い

が爲の故に、如來に是の如きの深義を咨啓す。

善男子、是の義を以ての故に、我汝が意に隨つ

て大乘方等の甚深祕法を説く。所謂極愛如一子

地なり。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若

諸の菩薩、慈悲喜を修して一子地を得れば、

捨心を修する時復何の地を得るや。』佛の言

はく、『善い哉善い哉善男子、汝善く時を知る。

我が説かんと欲するを知りて汝即ち咨問す。善

薩摩訶薩捨心を修する時、則ち空平等地に住し、

須菩提の如くなることを得。善男子、菩薩

摩訶薩空平等地に住すれば、則ち父母、兄弟、

姉妹、兒息、親族、知識、怨親、中人有るを見

ず。乃至陰界諸入衆生壽命を見ず。善男子、

譬へば虚空の、父母、兄弟、妻子有ること無く、乃

善い哉善い哉菩薩摩訶薩、諸の衆生を利益せんと欲する

【四三】次に述成。

【四四】是より捨心空平等の果を明す。之に二段あり。初に空

平等を明す。又二段あり、初に平等果を明す。其中、先づ

問。

【四五】次に答。之に二段あり、初に略して空門の果を明す。

【四六】須菩提(須菩提)の衆生と稱す。聲尊十大弟子の一、解空

第一の稱あり。今特に歎するは聲聞中解空第一なるに依

る。小を擧げて大を況し、以て地體を明す、曰く初地なり。

【四七】次に廣く空門の果を明す之に法、譬、合の三段あり。

法説のうち、人法二空を明

す。

【四八】陰界諸入。新譯には蘊界處といふ、凡夫實我の執を破

せんために施設せる法門の名。陰(スカンダ)は五陰。心に迷ふこと偏に重きものゝ爲

めに色を合して一と爲し、心を開きて四となし五陰の法を立つ。入(アブヒヤ)は十二入。

色に迷ふこと偏に重きものゝ爲めに色を開きて十と爲し、心を合して二となして十二入を立つ。界(デーワ)は十八界、

色心共に迷ふものゝ爲めに色を開きて十と爲し、心を開きて八と爲しかくて十八界を立つ。此等を總括して蘊處界三

科の法門といふ。

至衆生、壽命有ること無きが如し。一切諸法も亦復是の如し。父母乃至壽命有ること無し。菩薩摩訶薩一切法を見ることも亦復是の如し。其の心平等なること彼の虚空の如し。何を以ての故に。善能く諸の空法を修習するが故なり。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、云何が空と名くる。」  
【五〇】善男子、空とは所謂内空、外空、内外空、有爲空、無爲空、無始空、性空、無所有空、第一義空、空空、大空なり。

【五一】菩薩摩訶薩云何が内空を觀す。是の菩薩摩訶薩内法空を觀す。是内法空なり。謂はく父母、怨親中人、衆生壽命、常樂我淨、如來法僧、有らゆる財物無し。是の内法の中佛性有りと雖も、而も是の佛性内に非ず外に非ず。所以は何ん。佛性常住にして變易無きが故に。是を菩薩摩訶薩内空を觀すと名く。

【五二】内外空とは、亦復是の如し。善男子、唯如來法僧佛性有り、二空に在らん。内法有ること無し。内外空とは、亦復是の如し。父母乃至壽命有ること無し。菩薩摩訶薩一切法を見ることも亦復是の如し。其の心平等なること彼の虚空の如し。何を以ての故に。善能く諸の空法を修習するが故なり。」

【五三】次に佛性。之に十一空を解する文十一段あり、この十一空を解するに治城、莊嚴、問善等の異義あり。安註を見よ。其中初に内空、地に阿耨多羅三藐三菩提なり。【五四】次に内外空(Abhūtaṅga-bāhiraṅgaśūnyatā)。

【四九】次に空の義を辯ず。之に二段あり、初に問。【五〇】次に答。之に三段あり、其中初に列章。【五一】空(Śūnyatā) 諸法無相を了する知識なり、之に十一種を擧ぐ、下の如し。大品般若には或は七空を明し或は十八空を明す。今は處中に説く。また大品は空を廣して性を略し、今は性を廣して空を略す。二種を綜合するに各その義を顯す。

【五二】内空(Ādyaṅga) 前説の故に内空、佛性の故に外空、前俗二俱の故に内外空、生死俗の故に有爲空、涅槃眞の故に無爲空、三諦相即して元初を見ざる故に無始空、三諦の性性は本來自ら空の故に性空、性空なれば從つて所有の無なし故に無所有空、眞即是れ中、中即は眞の故に第一義空、一即一切の故に、空空、三諦ともに空なる故に大空といふ。

【五三】次に佛性。之に十一空を解する文十一段あり、この十一空を解するに治城、莊嚴、問善等の異義あり。安註を見よ。其中初に内空、地に阿耨多羅三藐三菩提なり。【五四】次に内外空(Abhūtaṅga-bāhiraṅgaśūnyatā)。

【五五】次に内外空(Abhūtaṅga-bāhiraṅgaśūnyatā)。

内外空とは、亦復是の如し。父母乃至壽命有ること無し。菩薩摩訶薩一切法を見ることも亦復是の如し。其の心平等なること彼の虚空の如し。何を以ての故に。善能く諸の空法を修習するが故なり。」



ず。何を以ての故に。是の如きの四法、常、樂、我、淨なり。是の故に四法を名けて空と爲さず。是を内外俱空と名く。善男子、有爲空とは、有爲の法悉く皆是空なり。所謂内容、外空、内外空、常樂我淨空、衆生壽命如來法僧第一義空なり。是の中佛性は有爲法に非ず。是の故に佛性は有爲法空に非ず。是を有爲空と名く。善男子、云何が菩薩摩訶薩無爲空を觀す。是の無爲法悉く皆是空なり。所謂無常、苦、不淨、無我、陰界入衆生壽命相、有爲、有漏、內法、外法なり。無爲法の中佛等の四法は、有爲に非ず無爲に非ず。性は善の故に非無爲、性常住の故に非有爲なり。是を菩薩無爲空を觀すと名く。善八、云何が菩薩摩訶薩無始空を觀す。是の菩薩摩訶薩、生死無始皆悉く空寂を見る。所謂空とは常樂我淨皆悉く空寂にして變易有ること無し。衆生壽命、三寶佛性及び無爲法、是を菩薩無始空を觀すと名く。云何が菩薩性空を觀す。是の菩薩摩訶薩一切法本性皆空と觀す。陰界入、常無常、苦樂、淨不淨、我無我を謂ふ。是の如き等の一切諸法を觀するに本性を見ず。是を菩薩摩訶薩性空を觀すと名く。云何が菩薩摩訶薩無所有空を觀す。人子無くして舍宅空と言ふが如し。畢竟じて空を觀ず、親愛有ること無し。愚癡の人諸方安と言ひ、貧窮の人一切空と言ふ。是の如きの所計、或は空、或は非空なり。菩薩觀する時、貧窮の人一切皆空なるが如し。是を菩薩摩訶

- 【善】 次に有爲空 (Samskṛta-śūnyatā)
- 【毛】 次に無爲空 (Asamskṛta-śūnyatā)
- 【天】 次に無始空 (Anurādhā-śūnyatā)
- 【光】 次に性空 (Prakṛti-śūnyatā)
- 【空】 次に無所有空 (Anupāyika-śūnyatā)

薩無所有空を觀すと名く。云何が菩薩摩訶薩第一義空を觀ず。善男子、菩薩摩訶薩第一義を觀する時、是の眼生する時從來する所無く、及び其の滅する時去りて至る所無し。本無今有、已有還無、其實性を推すに無眼無主なり。眼の如く一切の諸法も亦復是の如し。何等をか名けて第一義空と爲す。業有り報有り作者を見ず。是の如きの空法を第一義空と名く。是を菩薩摩訶薩第一義空を觀すと名く。云何が菩薩摩訶薩空を觀ず。是の空空中、乃ち是聲聞、辟支佛等の所迷没の處なり。善男子、是有是無、是を空空と名け、是是非是、是を空空と名く。善男子、十住の菩薩尙是の中に於て少分に通過すること、猶し微塵の如し。況や復餘人をや。善男子、是の如く空空も亦聲聞所得の空空三昧に同じからず。是を菩薩空空を觀すと名く。善男子、云何が菩薩摩訶薩大空を觀ず。善男子、大空と言ふは般若波羅蜜を謂ふ、是を大空と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの空門を得ば、則ち虛空等地に住することを得ん。

(五) 善男子、我今是の大衆の中に於て是の如き等の諸の空義を説く時、十恆河沙の菩薩摩訶薩有り。卽ち虛空等地に住することを得。善男子、菩薩摩訶薩是の地に住し已らば、一切法の中に於て滞闕有ること無く、繫縛拘執して心迷悶すること無し。是の義を以ての故に虛空等地と名く。善男子、譬

- 【六】 次に第一義空 (Paramārtha) 次は第一義空 (Paramārtha) 次は第一義空 (Paramārtha)
- 【六】 次に空空 (Śūnyatā) 次は空空 (Śūnyatā) 次は空空 (Śūnyatā)
- 【六】 此の文に數、釋、結の三段あり。
- 【六】 次に大空 (Mahāśūnyatā) 次は大空 (Mahāśūnyatā) 次は大空 (Mahāśūnyatā)
- 【六】 次に結歎。
- 【六】 次に利益を明す。之に二段あり、其中初に悟樂を明す。
- 【六】 次に功能を説く。

へば虚空の可愛色に於て貪著を生ぜず、不愛色の中に瞋恚を生ぜざるが如し。菩薩摩訶薩の是の地中に住するも亦復是の如し、好悪色に於て心に貪恚無し。善男子、譬へば虚空の廣大にして對無く、悉く能く一切の諸物を容受するが如し。菩薩摩訶薩の是の地中に住するも亦復是の如し。廣大にして對無く、悉く能く一切の諸法を容受す。是の義を以ての故に、復名けて虚空等地と爲すことを得。善男子、菩薩摩訶薩是の地中に住すれば、一切法に於て亦見亦知なり。〔六〕若は行、若は縁、若は性、若は相、若は因、若は縁、若は衆生心、若は根、若は禪定、若は乘、若は善知識、若は持禁戒、若は所施、是の如き等の法一切知見す。

〔六〕次に八種の知見を得。之に八段ありて初に知非處。〔七〕欽婆羅(Kambala)。鹿衣と譯す、毛糸を雜へ織れるものにして専ら外道の用ゆる所なり。

復次に善男子、菩薩摩訶薩是の地中に住し、知りて而も見ず。云何が知ると爲ぞ。自餓の法は、淵に投じ火に赴き、自ら高巖より墜ち、常に一脚を翹げ、五熱身を炙り、常に灰上、棘刺、編椽、樹葉、惡草、牛糞の上に臥し、麤麻衣、塚閉所棄の糞掃の麩毳、欽婆羅衣、麤鹿の皮革、芻草の衣裳を衣、菜を茹ひ、果を啖ひ、藕根油滓、牛糞根果、若行いて食を乞ふに限りて一家に従ふ。若無しと言はば即便捨て去る。設ひ復還つて喚べども、終に回顧せず。鹽肉五種の牛味を食せず、常に飲服する所糝汁沸湯なり。牛戒、雞狗雉戒を受持し、灰を以て身に塗り、長髮を相と爲し、羊を以

て天を祠り、先咒して後殺す。四月火に事へ、七日風を服す。百千億の華を諸天に供養し、諸の欲願する所、此に因りて成就す。是の如き等の法、能く無上解脫の因と爲る者、是の處有ること無きを知る。是を名けて知ると爲す。云何が不見なる。菩薩摩訶薩、一人の是の如き法を行じて正解脫を得るを見ず。是を不見と名く。

〔三〕次に善男子、菩薩摩訶薩も亦見亦知なり。何等をか見と爲す。諸の衆生、是の邪法を行すれば必ず地獄に墮するを見る。是を名けて見と爲す。云何が知と爲す。諸の衆生、是の地獄より出でて人中に生じ、若能く檀波羅蜜を修行し、乃至諸の波羅蜜を具足す。是の人必ず正解脫に入ることを得るを知る。是を名けて知と爲す。

〔三〕次に善男子、善薩摩訶薩復亦見亦知有り。云何が見と爲す。常無常、苦樂、淨不淨、我無我を見る。是を名けて見と爲す。云何が知と爲す。諸の如來、定んで畢竟して涅槃に入らずと知る。如來身は金剛無壞なり、是煩惱の成就する所の身に非ず。又臭穢、腐敗の身に非ずと知る。亦復能く一切衆生悉く佛性有るを知る。是を名けて知と爲す。

〔三〕次に善男子、善薩摩訶薩復亦知亦見有り。云何が知と爲す。是の衆生心信成就を知る。是の衆生大乘を求む。是の人願流、是の人逆流、是の人正住と知る。是の衆生已に彼岸に到るを知る。

〔七二〕次に如是處。  
〔七三〕次に知其時。  
〔七四〕次に知因果。大乘を求むるは因を、到彼岸は果を知るなり。

順流とは凡夫人を謂ひ、逆流とは須陀洹従り、乃至縁覺なり。正住とは諸の菩薩等、到彼岸とは所謂  
如來、應供、正徧知なり。是を名けて知と爲す。云何が見と爲す。菩薩摩訶薩大乘大涅槃經に住して  
梵行心を修し、淨天眼を以て諸の衆生の身、口、意三業の不善を造りて、地獄、畜生、餓鬼に墮するを  
見る。諸の衆生、善業を修する者、命終して當に天上、人中に生すべきを見る。諸の衆生の闇より闇  
に入り、諸の衆生の闇より明に入る有り、諸の衆生の明より闇に入る有り、諸の衆生の明より明に入  
る有るを見る。是を名けて見と爲す。

(西) 復次に善男子、菩薩摩訶薩復亦知亦見有り。菩薩摩訶薩、諸の衆生

身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修す。是の人今世に惡業成就し、或

は貪欲、瞋恚、愚癡に因りて、是の業必ず應に地獄に報を受くべし。是の人直に修身、修戒、修心、

修慧を以て現世に輕く受けて地獄に墮せず。云何が是の業能く現報を得。有らゆる諸惡を懺悔發露し、

既に悔ゆるの後更に敢て作らず。慙愧成就の故に、三寶を供養するが故に、常に自ら訶責するが故に。

是の人は是の善業の因縁を以て地獄に墮せず、現世に報を受く。所謂頭痛、目痛、腹痛、背痛なり。横

に死歿に懼り、訶責罵辱、鞭杖閉繫、饑餓困苦す。是の如き等の現世の輕報を受くるを知る。是を名

けて知と爲す。云何が見と爲す。菩薩摩訶薩、是の如きの人身、戒、心、慧を修習する能はず、少惡

業を造る。此の業の因縁、現に報を受くべし。是の人少惡懺悔すること能はず。自ら訶責せず、慙愧

【七】次に知轉障。身、戒、心、慧は是轉障を知るなり。

を生せず、怖懼有ること無し。是の業増長し、地獄に報を受くるを見る。是を名けて見と爲す。

【七五】 復知りて而も見ざる有り、云何が知而不見なる。諸の衆生、皆佛性有るを知るも、諸の煩惱に覆

蔽せられて見ることを得ること能はず。是を知而不見と名く。復知りて而も少しく見る有り。十住の

菩薩摩訶薩等、諸の衆生、皆佛性有るを知るも見ることに明了ならず、猶し

闇夜に見る所了かならざるが如し。復亦見亦知有り。所謂諸佛如來亦見亦

知なり。

【七六】 復亦見亦知不見不知有り。亦見亦知とは所謂世間の文字、言語、男

女、車乘、餅盆、舍宅、城邑、衣裳、飲食、山河、園林、衆生、壽命なり。是

を亦見亦知と名く。云何が不見不知なる。聖人の所有秘密の語、男女、乃

至園林有ること無し。是を不見不知と名く。

【七七】 復知りて而も見ざる有り。惠施する所を知り、供する所の處を知り、

受者を知り、因果報を知る。是を名けて知と爲す。云何が不見なる。所施、

供處、受者、及以果報を見ず。是を不見と名く。菩薩摩訶薩、知に八種有

り。即ち是如來五眼の所知なり。】

【七八】 迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩能く是の如きの知は何等の利をか得る。』佛の

【七五】 次に知佛性。之に凡夫、十住、諸佛に據るの三段あり。

【七六】 次に知二諦。

【七七】 不知不見はこれ眞諦を、亦見亦知にこれ俗諦を知るなり。

【七八】 次に知二智。惠施等はこれ權を、所施を見ず等はこれ實を知るなり。

【七九】 次に四無碍智を明す。之に二段あり、其中初に問。

【八〇】 次に答。之に三段あり、其中初に章門。

言はく、「善男子、菩薩摩訶薩能く是の如きの知は四無闕を得。法無闕、義無闕、詞無闕、樂説無闕なり。」(八二)法無闕とは一切法及び法の名字を知る。義無闕とは一切法の有らゆる諸義を知り、能く諸法の所立名字に隨ひて爲に義を作す。詞無闕とは隨字論、正音論、闍陀論、世辯論なり。樂説無闕とは所謂菩薩摩訶薩、凡そ演説する所障闕有ること無く、動轉すべからず。畏懼する所無く、摧伏すべきこと難し。善男子、是を菩薩能く是の如く見知すれば、即ち是の如きの四無闕智を得と名く。(八三)復次に善男子、法無闕とは菩薩摩訶薩徧く聲聞、緣覺、菩薩、諸佛の法を知る。義無闕とは乘に三有りと雖も、其の一に歸するを知り、終に差別の相有りと謂はず。詞無闕とは菩薩摩訶薩一法の中に於て種種の名を作り、無量劫を經て説くも盡すべからず。聲聞、緣覺能く是の説を作すは、是の處有ること無し。樂説無闕とは、菩薩摩訶薩無量劫に於て諸の衆生の爲に諸法を演説するに、若し名、若し義、種種の異説窮盡すべからず。(八四)復次に善男子、法無闕とは、菩薩摩訶薩諸法を知ると雖も、而も取著せず。義無闕とは、菩薩摩訶薩諸義を知ると雖も、而も取著せず、詞無闕とは、菩薩摩訶薩名字を知る

【八二】次に釋。之に五段あり、

其中初に世間に就て釋す。文

のうち、

法とは法及び法の名字を知

るなり。

義とは法下の義並に名下の

義を知るなり。

詞とは音聲清雅、分別了亮

なるなり。

樂説とは能く宛轉變換して

無窮無盡なるなり。

隨字論とはその文字を定め

善く字體を知るなり。

正音論とはその音辭を正し

分明に切齒す。

闍陀論(シロカ)とは法句、ま

た合聲とも云ふ。河西の曰

く、この方の詠歌聲なり。

【八三】次に出世に就て釋す。

に二段あり、初に釋。

と雖も、而も亦著せず。樂説無閑とは、菩薩摩訶薩乘説是の如く最上と知ると雖も、而も亦著せず。何を以ての故に。善男子、若取著せば菩薩と名けず。」

〔八〕 迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、若取著せざれば則ち法を知らず。若法を知らば則ち是取著なり。若知りて著せざれば則ち知る所無し。云何ぞ如來説きて法を知り、而も取著せずと言ふ。」佛の言はく、「善男子、夫取著とは無閑と名けず。取著する所無き、乃ち無閑と名く。善男子、是の故に一切の諸菩薩等取著有る者は則ち無閑無し。若無閑無ければ菩薩と名けず。當に知るべし、是の人を名けて凡夫と爲す。何が故ぞ取著を名けて凡夫と爲す。一切の凡夫色に取著し、乃至識に著す。色に著するを以ての故に則ち貪心を生ず。貪心を生ずるが故に色に繫縛せらる、乃至識に繫縛せらる。繫縛を以ての故に則ち生、老、病、死、憂悲の大苦一切の煩惱を免ることを得ず。是の故に取著を名けて凡夫と爲す。是の義を以ての故に、一切の凡夫四無閑無し。善男子、菩薩摩訶薩已に無量阿僧祇劫に於て法相を知見し、知見を以ての故に則ち其の義を知る。法相を見、及び義を知るを以ての故に、而も色の中に於て繫著を生ぜず。乃至識の中も亦復是の如し。不著を以ての故に、菩薩色に於て貪心を生ぜず、乃至識の中も亦貪心を生ぜず。貪心を以ての故に、則ち色に繫縛せられず、乃至識に縛せられず、不縛を以ての故に、則ち能く生老病死、憂悲の大苦、一切の煩惱を脱することを得。是の義を以ての故に、一切の菩薩四無閑を得。善男子、是

〔八〕 次に論義。之に問、答の二段あり。

と雖も、而も亦著せず。樂説無閑とは、菩薩摩訶薩乘説是の如く最上と知ると雖も、而も亦著せず。何を以ての故に。善男子、若取著せば菩薩と名けず。」



の因縁を以て、我弟子の爲に十二部の中に繋著の者を説き、名けて魔縛と爲す。若不著の者は則ち魔縛を脱す。譬へば世間有罪の人は王に縛せられ、無罪の人は王縛すること能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。繋著有る者は魔に縛せられ、繋著無き者は魔も縛すること能はず。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩而も著する所無し。

(金) 復次に善男子、法無闕とは菩薩摩訶薩、善く字持を知りて而も忘失せず。所謂持とは地の如く、山の如く、眼の如く、雲の如く、人の如く、母の如し。一切諸法も亦復是の如し。義無闕とは菩薩諸法の名字を知ると雖も、而も義を知らず。義無闕を得るときは則ち其の義を知る。云何が義を知る。謂はく地持とは、地の普く一切衆生、及び非衆生を持するが如し。是の義を以ての故に、地を名けて持と爲す。善男子、

謂はく山持とは、菩薩摩訶薩是の思惟を作さく、何の義を以ての故に、山を名けて持と爲す。山能く地を持して傾動無からしむ、是の故に持と名く。何をか眼持と名くる。眼能く光を持す、故に名けて持と爲す。何をか雲持と名くる。雲を龍氣と名く、龍氣は水を持す、故に名けて持と爲す。何をか人持と名くる。人能く法及以非法を持す、故に名けて持と爲す。何をか母持と名くる。母能く子を持す、故に名けて持と爲す。菩薩摩訶薩、一切法の名字句義を知るも亦復是の如し。詞無闕とは、菩薩摩訶薩種種の詞を以て一義を演説するも亦義有ること無し。猶し男女、舍宅、

【八五】次に法に就て釋す。文中、初に六譬を擧て法無闕を、次にまた六譬を指して義無闕を釋す。

車乘、衆生等の名の如し。何が故ぞ義無き。善男子、夫義とは乃ち是菩薩、諸佛の境界、詞とは凡夫の境界なり。義を知るを以ての故に、詞無閑を得。樂説無閑とは、菩薩摩訶薩詞を知り義を知るなり。故に無量阿僧祇劫に於て詞を説き義を説くに盡すべからず。是を樂説無閑と名く。

善男子、菩薩の無量無邊阿僧祇劫に於て世諦を修行す。修行を以ての故に法無閑を知る。復無量阿僧祇劫に於て第一義諦を修するが故に、義無閑を得。亦無量阿僧祇劫に於て毗伽羅論を習ふが故に、詞無閑を得。亦無量阿僧祇劫に於て説世辯論を修習するが故に、樂説無閑を得。

を得。

〔六〕 次に徃因に就て釋す。

〔六七〕 次に料簡。之に承三段あり、初に緣覺。

善男子、聲聞、緣覺若是の四無閑を得る有らば、是の處有ること無し。

善男子、九部經の中に、我聲聞、緣覺の人四無閑有りと説く。聲聞、緣覺眞實には有ること無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩衆生を度せんが爲に、故に是の如きの四無

閑智を修す。緣覺の人寂滅法を修し獨處を志樂す。若衆生を化するに但神通を現じ、終日默然として

宣説する所無し。云何が當に四無閑智有るべき。何が故ぞ默然として而も説く所無き。緣覺法を説き

人を度して要法、頂法、世大一法、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩を得しむ

ること能はず。人をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむること能はず。何を以ての故に。善男子、

緣覺世に出づるに、世間に九部經典有ること無し。是の故に緣覺、詞無閑、樂説無閑無し。善男子、

緣覺の人諸法を知ると雖も法無闕無し。何を以ての故に。法無闕とは名けて知字と爲す。緣覺の人文  
 字を知ると雖も、字無闕無し。何を以ての故に。常住の二字を知らざるが故に。是の故に緣覺法無闕  
 を得ず。義を知ると雖も、義無闕無し。眞に義を知らば、諸の衆生悉く佛性有るを知らん。佛性義  
 とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。是の義を以ての故に、緣覺の人義無闕を得ず。是の故に緣覺  
 は一切四無闕智有ること無し。云何が聲聞に四無闕無き。聲聞の人は三  
 種の善巧方便有ること無し。何等をか三と爲す。一つには必ず要語を須て  
 然して後法を受け、二つには必ず麤語を須て然して後化を受け、三つには  
 不更、不盡、然して後化を受く。聲聞の人は此の三無きが故に四無闕無  
 し。(八九)復次に聲聞、緣覺、畢竟して詞を知り義を知ること能はず。自在智  
 の境界を知ること無く、十力、四無所畏有ること無し。畢竟して彼の十二  
 因縁の大海を度ること能はず、善く衆生の諸根の利鈍、差別を知ること能はず、未だ永く二諦の疑心  
 を斷ずること能はず、衆生の種種の諸の心所縁の境界を知らず、善く第一義空を説くこと能はず。是  
 の故に二乘に四無闕無し。

(九〇)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若諸の聲聞、緣覺の人一切四無闕有ること無くんば、云  
 何ぞ世尊、舍利弗は智慧第一、大目犍連は神通第一、(九一)摩訶拘絺羅は四無闕第一と説く。若其無けれ

【八八】次に聲聞。  
 【八九】次に總結。  
 【九〇】次に論議、之に二段あり、  
 其中初に問。  
 【九一】摩訶拘絺羅 (Mahākauṣṭhī  
 摩訶拘絺羅は膝と譯す、  
 羅漢の名。舍利弗の舅に當れ  
 る長爪梵志即ち是なり。

ば、如來何が故ぞ是の如きの説を作す。』爾の時に世尊、迦葉を讀じて言はく、『善い哉善い哉善男子、譬へば恆河に無量の水有り。辛頭大河の水も亦無量、博叉大河の水も亦無量、阿耨達池の水も亦無量、大海の水も亦無量なり。是の如きの諸水同じく無量と雖も、然も其の多少、其の實は等しからざるが如し。聲聞、緣覺及び諸の菩薩の四無闍智も亦復是の如し。善男子、若等しと説かば是の處有ること無し。善男子、我凡夫の爲に摩訶拘絺羅は四無闍智を最も第一と爲すと説く。汝が問ふ所の者、其の義是の如し。善男子、聲聞の人、或は一つを得る有り、或は二つを得る有り。若四つを具足せば、是の處有ること無し。』

【九二】次に答。之に正答、閉昔樞、顯今實の三段あり。

【九三】次に難を結す。

【九四】次に答。之に二段あり、其中初に其問を數す。

【九五】次に正しく答ふ。之に二段あり、其中初に正しく答ふ。このうち十復次あり、得無得、倒無倒、智賢無明、涅槃諸有、大乘小乘、方等三藏、眞實生死、常無常、眞空五見、菩提二乘これを十對とす。

【九六】次に答。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【九七】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【九八】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【九九】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇〇】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇一】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇二】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇三】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇四】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

【一〇五】次に答。之に三段あり、其中初に無所得の知見を明す。之に三段あり、其中初に無所得を明す。之に又三段ありて初に問。之にも三段ありて先づ領して前文を指す。

無し。無所得とは四無闕と名く。善男子、何の義を以ての故に、無所得とは名けて無闕と爲す。若有得の者は、則ち名けて闕と爲す。障闕有る者は、四顛倒と名く。善男子、菩薩摩訶薩は四倒無きが故に、故に無闕を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは則ち名けて慧と爲す。菩薩摩訶薩、是の慧を得るが故に無所得と名く。有所得とは名けて無明と爲す。菩薩永く無明の闇を斷ずるが故に、故に所得無し。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは大涅槃と名く。菩薩摩訶薩、是の如きの大涅槃の中に安住して、一切諸法の性相を見ず。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは二十五有と名く。菩薩永く二十五有を斷じて大涅槃を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは名けて大乘と爲す。菩薩摩訶薩は諸法に住せず、故に大乘を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは名けて聲聞、辟支佛の道と爲す。菩薩は永く二乗の道を斷ず、故に佛道を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは方等經と名く。菩薩是の如きの經を讀誦するが故に、大涅槃を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは十一部經と名く。菩薩修せず、純ら方等大乘經典を説く。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所有とは名けて虚空と爲す。世間に物無きを名けて虚空と爲す。菩薩是の虚空三昧を得、所見無きが故に。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは生死輪と名く。一切の凡夫生死に輪回するが故に所見有り。菩薩永く一切の生死を斷ず。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは常樂我淨と名

く。菩薩摩訶薩佛性を見るが故に常樂我淨を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは無常無樂無我無淨と名く。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは第一義空と名く。菩薩摩訶薩第一義空を觀じて悉く見る所無し。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは名けて五見と爲す。菩薩は永く是の五見を斷するが故に第一義空を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時悉く所見無し。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは聲聞、緣覺の菩提と名く。菩薩は永く二乘の菩提を斷ず。是の故に菩薩を無所得と名く。善男子、汝が所問も亦無所得、我が所説も亦無所得なり。若得有りと説かば、是魔の眷屬にして我が弟子に非ず。』

〔100〕迦葉、佛に白して言さく、『世尊、我が爲に是の菩薩の無所得を説きた

まふ時、〔101〕無量の衆生有相心を斷ず。是の事を以ての故に、我敢て無所得の義を諸啓して、是の如き等の無量の衆生をして魔の眷屬を離れて佛の弟子と爲らしむ。』

〔102〕迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來上に純陀の爲に偈を説きたまふ、

「本有今無、本無今有、

三世有法、是の處有ること無し。」

〔九〕次に正を結し四邪を簡ふ。

〔一〇〕次に領解の之に二段あり、其中初に領解。

〔一一〕次に得益。

〔一二〕次に偈を引いて證す。之に二段あり、其中初に偈を擧げて請問す。

と。世尊、是の義云何ん。』佛の言はく、『善男子、我諸の衆生を化度するが爲の故に、而も是の説を作し、亦聲聞、辟支佛の爲の故に、而も是の説を作し、亦文殊師利法王子の爲の故に、而も是の説を作す。但正しく純陀一人の爲に是の偈を説くにあらざるなり。時に文殊師利、將に我に問はんと欲す。我其の心を知りて爲に之を説く。我既に説き已りて、文殊師利即ち解了を得たり。』

〔一〇四〕迦葉菩薩の言さく、『世尊、文殊等の如き詎ぞ幾人有りてか能く是義を了せん。唯願はくは如來、更に大衆の爲に廣く分別して説きたまへ。』〔一〇五〕善男子、諦かに聴き諦かに聴け。今當に汝が爲に重ねて之を敷演すべし。二〇六本有と言ふは、我昔本無量の煩惱有り。煩惱を以ての故に現在大般涅槃有ること無し。本無と言ふは、本般若波羅蜜無し。般若波羅蜜無きを以ての故に、現在具さに諸の煩惱結有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、説きて「如來、去來、現在煩惱有り」と言はば、是の處有ること無し。復次に善男子、本有と言ふは、我昔本、父母和合の身有り。是の故に現在、金剛微妙の法身有ること無し。本無と言ふは、我身本三十二相、八十種好無し。本三十二相、八十種好有ること無きを以ての故に、現在具さに四百四病有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、説きて

【一〇三】次に偈を釋して答ふ。之に三段あり、其中初に別釋。之に三段あり、其中初に略して釋す。  
【一〇四】次に重ねて問ふ。  
【一〇五】次に正しく釋す。之に二段あり、其中初に誠許。  
【一〇六】次に正答り、凡て八番あり。之に二段あり、其中の六番は正しく釋す。

「如來、去來、現在、病苦有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本無常、無樂、無我、無淨有り。無常、無我、無樂、無淨有るを以ての故に、現在阿耨多羅三藐三菩提有ること無し。本無と言ふは、本佛性を見ず。見ざるを以ての故に、常樂我淨無し。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、説きて「如來、去來、現在常樂我淨無し」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、本凡夫苦行の心を修し、阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふ有り。是の事を以ての故に、現在四魔を破壞すること能はず。本無と言ふは、本六波羅蜜無し。六波羅蜜無きを以ての故に、凡夫苦行の心を修行して阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふ。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、説きて、「如來、去來、現在苦行有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本雜食の身有り。食身有るを以ての故に、現在無邊の身有ること無し。本無と言ふは、本三十七の助道の法無し。三十七の助道の法無きを以ての故に、現在具さに雜食の身有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、説きて、「如來、去來、現在食身有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本一切法中取著の心有り。是の事を以ての故に、現在畢竟空定有ること無し。本無と言ふは、我本中道實義有ること無し。中道實義無きを以ての故に、一切法



に於て則ち著心有り。若し沙門、若し婆羅門、若し天、若し魔、若し梵、若し人、説きて、「如來、去來、現在一切法是有相と説かば、是の處有ること無し。」

(107) 復次に善男子、本有と言ふは、我初めて阿耨多羅三藐三菩提を得し時、諸の鈍根の聲聞の弟子有り。鈍根の聲聞の弟子有るを以ての故に、一乘の實を演説することを得ず。本無と言はば、本利根人中の象王迦葉菩薩等無し。利根の迦葉等無きを以ての故に、宜しきに隨ひて方便して三乘を開示す。若し沙門、若し婆羅門、若し天、若し魔、若し梵、若し人、説きて「如來、去來、現在畢竟三乘法を演説す」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我本説きて、「卻後三月、娑羅雙樹に於て當に般涅槃すべし」と言ふ。是の故に現在、大方等典大般涅槃を演説する

ことを得ず。本無と言ふは、本昔文殊師利の大菩薩等有ること無し。有ること無きを以ての故に、現在説きて「如來無常」と言ふ。若し沙門、若し婆羅門、若し天、若し魔、若し梵、若し人、説きて「如來、去來、現在は無常」と言はば、是の處有ること無し。

(108) 善男子、如來普く諸の衆生の爲の故に、諸法を知ると雖も、説きて「不知」と言ふ。諸法を見ると雖も、説きて「不見」と言ひ、有相の法を説きて「無相」と言ひ、無相の法を説きて「有相」と言ふ。實に無常有るを説きて「有常」と言ひ、實に有常有るを説きて「無常」と言ふ。我樂淨等も亦

【一〇七】次の兩番は果して説くことを得ざるを明す。

【一〇八】次に總じて釋す。

復是の如し。二乗の法を説きて一乗と言ひ、一乗の法を宜しきに隨ひて三と説く。略相を廣と説き、廣相を略と説き。四重の法を偷蘭遮と説き、偷蘭遮の法を説きて四重と爲す。犯を非犯と説き、非犯を犯と説き。輕罪を重と説き、重罪を輕と説く。何を以ての故に。如來明かに衆生の根を見るが故なり。善男子、如來是の説を作すと雖も、終に虚妄無し。何を以ての故に。虚妄の語は即ち是罪過なり。如來悉く一切の罪過を斷ず。云何ぞ當に虚妄の語有るべきや。善男子、如來虚妄の語無しと雖も、若衆生、虚妄の説に由りて法利を得るを知らば、隨宜方便して則ち爲之を説く。善男子、一切の世諦若如來に於ては即ち第一義諦なり。

【一〇】次に結釋。

【一一】次に無得にして得なるを明す。之に三段あり、其中初に標。

【一二】次に問。之に二段あり、其中初に問。之に法譬、合の三段あり。

何を以ての故に。諸佛世尊第一義の爲の故に世諦を説く。亦衆生をして第一義諦を得しむ。若衆生をして是の如き第一義を得ざらしめば、諸佛終に世諦を宣説せじ。善男子、如來時有りて世諦を演説するに、衆生、佛第一義諦を説くと謂ふ。時有りて第一義諦を演説するに、衆生、佛世諦を説くと謂ふ。是則ち諸佛の甚深の境界、是聲聞、緣覺の所知に非ず。善男子、是の故に汝先に難じて、菩薩摩訶薩所得無しと言ふべからざるなり。菩薩常に第一義諦を得。云何ぞ難じて所得無しと言はんや。

(三) 迦葉、復言さく、

「世尊、第一義諦も亦名けて道と爲し、亦菩提と名け、亦涅槃と名く。若菩薩、道菩提涅槃を得る有りと云ふ有らば、即ちは無常なり。何を以ての故に。法若常ならば則ち得べから

す。猶し虚空の如し、誰か得る者有らん。世尊、世間の物、本無今有は、名けて無常と爲すが如く、道も亦是の如し。道若得べくんば則ち無常と名く。法若常ならば得無く生無く、猶し佛性の得無く生無きが如し。世尊、夫道とは非色非不色、不長不短、非高非下、非生非滅、非赤非白、非青非黄、非有非無なり。云何ぞ如來說きて「可得」と言ふ。菩提涅槃も亦復是の如し。

佛の言はく、『是の如く是の如し。善男子、道に二種有り。一つには常、二つには無常なり。菩提涅槃も亦復是の如し。』

の相も亦二種有り。一つには常、二つには無常なり。涅槃も亦爾なり。外道の道とは名けて無常と爲し、内道の道とは之を名けて常と爲す。聲聞、縁覺の所有の菩提は名けて無常と爲し、菩薩、諸佛の所有の菩提は之を名けて常と爲す。外の解脱は名けて無常と爲し、内の解脱は之を名けて常と爲す。善男子、道と菩提と及以涅槃とは悉く名けて常と爲す。一切衆生常に無量の煩惱に覆はれ、慧眼無きが故に見ることを得ること能はず。而も諸の衆生、見んと欲するが爲の故に戒定慧を修す。修行を以ての故に道菩提及以涅槃を見る。是を菩薩道菩提涅槃を得と名く。道の性相は實に生滅せず。是の義を以ての故に提持すべからず。

善男子、道とは色像の見るべく、稱量の知るべき無しと雖も、而も實に用有り。善男子、衆生の心是色に非ず、長に非ず、短に長ず、麤に非ず、細に非ず、縛に非ず、解に非ず、是見法に非

【二三】次に難。  
【二二】次に答。之に二段あり、其中初に初の間を答ふ。之に泛明、正答の二段あり。  
【二四】次に後の難を答ふ。之に法譬、合の三段あり。

すとも、いへど而も亦是有るが如し。しか是の義を以ての故に我須達の爲に説きて言はく、「長者、心を城主と爲す。若心を護らざれば則ち身口を護らず。若心を護れば則ち身口を護る。善く是の身口を護らざるを以ての故に、諸の衆生をして三惡趣に到らしむ。身口を護らば則ち衆生をして人天の涅槃を得しむ。得とは眞實と名け、不得とは不眞實と名く。善男子、道と菩提と及び涅槃とも亦復是の如く、亦有亦常なり。若其れ無ならば、云何ぞ能く一切の煩惱を斷せん。其れ有を以ての故に、一切の菩薩了了に見知す。

【二五】善男子、見に二種有り。一つには相貌見、二つには了了見なり。云何が相貌見なる。遠く烟を見て名けて火を見ると爲す、實は火を見ず。火を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。空中の鶴を見て便ち水を見ると言ふ。水を見ずと雖も亦虚妄に非ず。華葉を見て便ち根を見ると言ふ。根を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。人遙かに籬閉の牛角を見て便ち牛を見ると言ふ。牛を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。女人の懷妊を見て便ち欲を見ると言ふ。欲を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。又雲を見て便ち雨を見ると言ふ。雨を見ずと雖も、亦虚妄ならざるが如し。身業及び口業を見て便ち心を見ると言ふ。心を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。是を相貌見と名く。云何が了了見なる。眼色を見るが如し。善男子、人眼根清淨にして壞せず。自ら掌中の阿摩勒

【二五】是より會通の文。之に二段あり、其中初に會通。

果を觀るが如し。菩薩了了に道菩提涅槃を見るも亦復是の如し。是の如く見ると雖も初て見相無し。善男子、是の因縁を以て我往昔に於て舍利弗に告ぐ、「舍利弗、一切世間に若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人有りて、知らず、見ず、覺らざる所、唯如來のみ有りて悉く知見覺す。及び諸の菩薩も亦復是の如し。舍利弗、若諸の世間の知見覺する所、我と菩薩とも亦知見覺す。世間の衆生の知らず見ず覺らざる所、亦自ら知りて知見覺せずんばあらず。世間の衆生知見覺する所あれば、便ち自ら説きて、我知見覺すと言ふ。舍利弗、如來は一切悉く知見覺して亦自ら我知見覺すと言はず。一切の菩薩も亦復是の如し。何を以ての故に。若如來をして知、見、覺の相を作さしめば、當に知るべし、是則ち佛世尊に非ず、名けて凡夫と爲す。菩薩も亦爾なり。』と』

# 卷の第十六

## 梵行品の三

迦葉菩薩の言さく、『佛世尊、舍利弗の爲に「世間の知れる、我亦知ると

を得、世間の知らざる、我亦悉く知る」と説くが如き、其の義云何。』「善

男子、一切の世間佛性を知らず、見ず、覺らず。若佛性を知見覺する者有

らば、世間と名けず、名けて菩薩と爲す。世間の人も亦復十二部經、十二

因緣、四倒四誦、三十七道品、阿耨多羅三藐三菩提、大般涅槃を知らず、

見ず、覺らず。若知見覺せば世間とは名けず。當に菩薩と名くべし。善男

子、是を世間知見覺せずと名く。云何が世間の知見覺する所なる。所

謂梵天、自在天、八臂天、性、時、微塵、法及び非法、是造化の主なり。

世界の終始、斷常の二見、説きて「初禪より非非想に至るを名けて涅槃と爲す」と言ふ。善男子、是

を世間の知見覺する所と名く。菩薩摩訶薩是の如きの事に於ても亦知見覺す。菩薩是の如く知見覺

し已るに、若知らず、見ず、覺らずと言ふは是を虛妄と爲す。虛妄の法は則ち是罪と爲す。是の罪を

- 【一】 是より論義の文。之に二段あり、初に問、其中又二段あり先づ世間に同するを問ふ。
- 【二】 次に世の不知に異なるを問ふ。
- 【三】 次に答。之に二段あり、其中初に正答。之に又三段あり、先づ世間に異なるの文。
- 【四】 次に世間に同するの文。
- 【五】 次に世に非ず出世に非ざるの文。

以ての故に地獄に墮す。善男子、若は男、若は女、若は沙門、若は婆羅門、説きて、「道菩提涅槃無し」と言はば、當に知るべし、是の輩を一闍提、魔の眷屬と名け、名けて謗法と爲す。是の如き謗法は諸佛を謗すと名く。是の如きの人は世間と名けず、非世間と名けず。」

〔七〕 爾の時に迦葉、是の事を聞き已りて即ち偈頌を以て佛を讚歎す、

『大慈衆生を憫み、故に我をして歸依せしむ、

善く衆の毒箭を抜く、故に大醫王と稱す、

世醫の療治する所は、差ゆと雖も還つて復生す、

如來の治したまふ所は、畢竟じて復發らず、

世尊甘露の藥、以て諸の衆生に施す、

衆生既に服し已らば、死せず亦生せず、

如來今我が爲に、大涅槃を演説す、

衆生祕藏を聞かば、即ち不生滅を得。」

迦葉菩薩、是の偈を説き已りて、即ち佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の、一切世間の知見覺せ

ざるを菩薩悉く能く知見覺すの如きは、若菩薩をして是世間ならしめば、説きて「世間は不知、不見、不覺なり。是の菩薩能く知見覺す」と言ふことを得ず。若世間に非ざれば何の異相有りや。』

〔六〕 次に結す。

〔七〕 是より結歎。之に二段あり、其中初に正しく歎す。之

に大慈、大悲、大喜、大捨を歎するの四段あり。

〔八〕 次に結歎。

〔九〕 是より持戒の文。之に三段ありて、其中初に持戒。之

に又二段あり、初に略して持戒の文。之に問、答の二段あり、問の中初に旨を領す。

〔一〇〕 次に正しく歎す。之に同世、異世を歎するの二段あり。

佛の言はく、『善男子、菩薩と言ふは、亦是世間、亦世間に非ず。知見覺せざるをば名けて世間と爲し、知見覺するをば世間と名けず。』汝何の異有り」と言はば、我今當に説くべし。善男子、若は男、

若は女、若初て是の涅槃經を聞きて即ち敬信を生じて、阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らば、是を則ち名けて世間の菩薩と爲す。一切世間、知見覺せず。是の如きの菩薩も亦世間に同じく知見覺せず。

〔三〕菩薩是の涅槃經を聞き已りて世間の知見覺せざる有り。是菩薩の知見覺する所なるべきを知る。是の事を知り已りて即ち自ら思惟す、我當に云何が方便修習して知見覺することを得べきと。覆ねて復念言すらく、唯當に深

心に淨戒を修持すべしと。善男子、菩薩爾の時に是の因縁を以て、未來世に於て在在生處戒常に清淨なり。善男子、菩薩摩訶薩戒淨を以ての故に在

在生處常に憍慢、邪見、疑網無く、終に説きて如來畢竟じて涅槃に入ると言はず。是を菩薩淨戒を修持すと名く。戒既に清淨、次に禪定を修す。定を修する以ての故に、在在生

處正念にして忘れず。所謂一切衆生悉く佛性有り。十二部經、諸佛世尊常樂我淨なり。一切菩薩方等

大涅槃經に安住して、悉く佛性を見る。是の如き等の事憶して忘れず。定を修するに因るが故に十一空を得。是を菩薩清淨定を修すと名く。戒定已に備はりて次に淨慧を修す。慧を修するを以ての

故に、初て身中に我有り、我中に身有り、是身是我非身非我に繫著せず。是を菩薩淨慧を修習すと名く。

【一】次に答。之に二段あり、其中初に兩章を聞く。  
【二】次に兩章を釋す。之に二段あり、初に同を釋す。  
【三】次に異を釋す、之に二段あり、其中初に經を聞くが故に三法を得。



【四】 慧を修するを以ての故に、受持する所の戒牢固にして動せず。善男子、譬へば須彌の四風に傾動せ

られざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。四倒に傾動せられず。善男子、菩薩爾の時に自ら知見

覺して受持する所の戒傾動有ること無し。是を菩薩の知見覺する所世間に非ずと名くるなり。

【五】 善男子、菩薩所持の戒牢固にして動せざるを見、心に悔恨無し。悔恨無きが故に心に歡喜を得。歡喜を得るが故に心に悅樂を得。

悅樂を得るが故に心則ち安隱なり。心安隱の故に無動定を得。無動定を得るが故に實知見を得。

實知見を得るが故に生死を厭離す。生死を厭離するが故に便ち解脫を得。解脫を得るが故に明かに佛性を見る。

是を菩薩知見覺する所と名くるなり。善男子、是を世間知見覺せず、而も是の菩薩知見覺する所と名くるなり。

【六】 迦葉、復言さく、「云何が菩薩淨戒を修持して心に悔恨無く、乃至明了に佛性を見るや。」

佛の言はく、「善男子、世間の戒は清淨と名けず。何を以ての故に。」

世間の戒は有の爲の故に、性不定の故に、畢竟に非ざるが故に。廣く一切衆生の爲にすること能はず。

是の義を以ての故に、名けて不淨と爲す。不淨を以ての故に悔恨心有り。

悔恨を以ての故に心に歡喜無し。歡喜無きが故に則ち

【四】 次に三法相資の文。之に二段あり、初に慧戒を資くるの文。

【五】 次に戒慧を資くるの文。次に廣く得失を辨ず。之に二段あり、其中初に問。

【七】 次に答。之に二段あり、其中初に不淨持戒相資くること能はざるの文。之に不淨、無相資の二段あり。

【八】 世間の戒は有の爲めの故に。この文のうら四の不淨あり、一に有の爲にす、二に性不定、三に畢竟に非ず、四に衆生の爲にせず、利他の意なし。

悦樂無し。悦樂無きが故に則ち安隱無し。安隱無きが故に不動定無し。不動定無きが故に實知見無し。實知見無きが故に則ち厭離無し。厭離無きが故に則ち解脱無し。解脱無きが故に佛性を見ず。佛性を見ざるが故に終に大般涅槃を得ること能はず。是を世間戒不清淨と名く。善男子、菩薩摩訶薩の清淨戒とは、戒戒に非ざるが故に、有の爲めに非ざるが故に、定畢竟の故に、衆生の爲の故に。是を菩薩の戒清淨と名くるなり。善男子、菩薩摩訶薩淨戒の中に於て、無悔恨心を生せんと欲せずと雖も、無悔恨心は自然にして生ず。善男子、譬へば人有りて明鏡を執持すれば、面を見ることを期せずとも、面像自ら現するが如し。亦農夫の種を良田に散すれば、芽を生ずるを期せざれども、而も芽自ら生ずるが如し。亦燈を燃せば、闇を滅するを期せざれども、而も闇自ら滅するが如し。善男子、菩薩摩訶薩堅く淨戒を持すれば、無悔恨心自然にして生ずること亦復是の如し。淨戒を以ての故に心歡喜を得。善男子、端正の人自ら面貌を見て心に歡喜を生ずるが如し。淨戒を持する者も亦復是の如し。

(三三) 善男子、破戒の人戒の不淨を見て心歡喜せず、形殘の者自ら面貌を見て喜悅を生ぜざるが如し。

【二九】 次に淨我を以て正しく間に答ふ。之に二段ありて、其中初に淨戒の文。このうち四淨ありて、前の四下淨に對す。  
 【三〇】 次に相資の文。之に二段あり、其中初に三法相資。之に又二段ありて先づ戒に因るが故に不悔を釋す。之に法、譬、合の三段あり。譬中に三譬あり。  
 【三一】 次に歡喜を釋す。之に二段あり、其中初に三相の文。之に又三段ありて先づ持喜の文。之に法、譬、合の三段あり。  
 【三二】 次に毀愛の文。之に法、譬、合の三段あり。

し。破戒の人も亦復是の如し。(三)善男子、譬へば牧牛二女人有り。一りは酪餅を持し、一りは漿餅を持す。俱共に城に至りて之を賣らんと欲す。路に脚踏して二餅俱に破す。一りは則ち歡喜し、一りは則ち愁惱するが如し。持戒、破戒も亦復是の如し。淨戒を持する者は心則ち歡喜す。心歡喜するが故に則便思惟す、諸佛如來涅槃の中に於て能く清淨戒を持する者有らば、則ち涅槃を得と説く。我今是の如きの淨戒を修習すれば、亦之を得べし。是の因縁を以て心則ち悅樂す。」

(三) 迦葉、復言さく、「喜と樂と何の差別か有る。」

善男子、菩薩摩訶薩惡を

作さざるの時、名けて歡喜と爲す。心淨く戒を持す、之を名けて樂と爲す。

善男子、菩薩摩訶薩生死を觀する、則ち名けて喜と爲す。大涅槃を見

る、之を名けて樂と爲す。下を名けて喜と爲し、上を名けて樂と爲す。世

共法を離る、之を名けて喜と爲す。不共法を得る、之を名けて樂と爲す。

戒淨を以ての故に、身體輕柔口に麁過無し。菩薩爾の時に若し見、若し聞き、若し嗅ぎ、若し嘗め、若し觸れ、若し知り悉く諸惡無し。惡無きを以ての故に心安隱を得。安隱

を以ての故に則ち靜定を得。靜定を得るが故に實知見を得。實知見の故に生死を厭離す。生死を厭

ふが故に則ち解脫を得。解脫を得るが故に佛性を見ることを得。佛性を見るが故に大涅槃を得。是を

菩薩の清淨持戒と名く、世間戒に非ず。(三)何を以ての故に。善男子、菩薩摩訶薩の所受の淨戒五法

【三】次に雙べて二義を明す。之に譬、合の二段あり。

【四】次に悅樂を明す。之に二段あり、其中初に正しく釋す。

【五】次に論義。之に問、答の二段あり。答のうち四重の解釋あり。

【六】次に五法佐助を明す。

佐助す。云何が五を爲す。一つには信、二つには慙、三つには愧、四つには善知識、五つには増敬戒なり。五蓋を離るるが故なり。所見清淨、五見を離るるが故に。心に疑網無し、五疑を離るるが故に。一つには佛を疑ひ、二つには法を疑ひ、三つには僧を疑ひ、四つには戒を疑ひ、五つには不放逸を疑ふ。菩薩爾の時に即ち五根を得。所謂信、念、精進、定、慧なり。五根を得るが故に。五種の涅槃を得。色解脱、乃至誠解脱を謂ふ。是を菩薩の清淨持戒と名く、世間に非ざるなり。善男子、是世間の知らず、見ず、覺らざる所にして、而も是菩薩の知見覺する所と名く。

【五】 五種の涅槃とは、五陰の縛を脱するを云ふ。涅槃に五種ありと言ふに非ず。

【六】 乃至誠解脱、受解脱、想解脱、行解脱を略していふ。

【元】 是より護法の文。之に二段ありて、其中初に段を明するの法。之に又三段ありて先づ正しく破戒を明す。

善男子、若我が弟子、大涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說して戒を破する者有らば、人有りて呵責し輕賤毀辱して是の言を作さく、若佛の秘藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして受くる所の戒を毀たしむ。若人は是の涅槃經を受持して禁戒を毀たば、當に知るべし、是の經威力無しと爲す。若威力無ければ、復讀誦すと雖も利益無しと爲す」と。是の涅槃經を輕毀するに縁るが故に、復無量無邊の衆生をして地獄に墮せしむ。是の經を受持して戒を毀る者は則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。是の如きの人には、我亦是の典を受持するを聽さず。寧ろ受けず、持たず、修せざらしむとも、戒を毀れて受持、修習するを以てせず。

善男子、若我が弟子涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說せば、當に身心を正しくし、慎みて掉戲輕躁舉動すること莫るべし。身を掉戲と爲し、心を輕動と爲す。有を求むるの心、名けて輕動と爲し、身諸業を造る、名けて掉戲と爲す。若我が弟子、有を求めて業を造らば、是の大乗典大涅槃經を受持すべからず。若是の如く經を受持する者有らば、人當に輕呵して是の言を作すべし、「若佛の祕藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして有を求めて業を造らしむる。若經を持する者、有を求めて業を造らば、當に知るべし、是の經威力無しと爲す。若威力無ければ、復受持すと雖も利益なしと爲す」と。是涅槃經を輕毀するに緣るが故に、復無量無邊の衆生をして地獄に墮せしむ。是の經を受持して有を求め業を造らば、則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。

復次に善男子、若我が弟子、是の涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說せば、非時に説くこと莫れ、非國に説くこと莫れ、不請に説くこと莫れ、輕心に説くこと莫れ、處處に説くこと莫れ、自ら歎じて説くこと莫れ、他を輕して説くこと莫れ、佛法を滅して説くこと莫れ、世法を熾然にして説くこと莫れ。善男子、若我が弟子、是の經を受持して非時にして説き、乃至熾然世法に説かば、人當に輕呵して是の言を作さん、「若佛の祕藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして非時にして説き、乃至世法を熾然にして説かしむ、若持經者是の如きの説を作さば、當に知るべし、是の經は威力無しと爲す。

【二】次に有を求めて業を作すを呵す。  
【三】次に是處非處を呵す。

若威力無ければ、復受持すと雖も利益無しと爲す。是の涅槃經を輕毀するに縁るが故に、無量の衆生をして地獄に墮せしむ。是の經を受持して非時にして説き、乃至熾然世法にして説かば、則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。

〔三〕善男子、若し受持を欲する者、大涅槃經を説く者、佛性を説く者、如来の秘藏を説く者、大乘を説く者、方等經を説く者、聲聞乘を説く者、辟支佛乘を説く者、解脱を説く者、佛性を見る者、先當に其の身を清淨にすべし。身淨を以ての故に則ち呵責無し。呵責無きが故に、無量の人をして

大涅槃に於て清淨心を生ぜしむ。信心生ずるが故に是の經を恭敬す。若し一偈、一句、一字及び説法者を聞くとときは、則便阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得。當に知るべし、是の人は則ち衆生の眞の善知識なり、惡知識に非ず。是我が弟子なり、魔の眷屬に非ず。是を菩薩世間に非すと名く。善男子、是を世間の知らず、見ず、覺らざる所にして、而も是菩薩知見覺する所と名く。

〔四〕復次に善男子、云何が復一切世間の知見覺せざる所にして、而も是菩薩の知見覺する所と名くる。所謂六念處なり。何等をか六と爲す。念佛、

〔三〕次に護法を勸む。

〔三〕受持：説く。倍の故に受と名け、不忘を持と爲す、是れは自行に約す。説とは化他に約するなり。この中涅槃の宗體行教用果は、前に佛性を説くを宗と爲し、後に見性を説くを果と爲す、兩途並びに三業をして清淨ならしむ。

〔四〕次に六念の文。之に二段あり、其中初に數を唱へて章を列す。

〔五〕念佛念法等。前の三念は化他、後の三念は自行。自行の中戒と施とは是れ自の因、天に生ずるは是れ自の果。自の因の中戒は是れ止惡、施は是れ行善。天に近果と遠果との別あり。

念法ねんぽう、念僧ねんそう、念戒ねんがい、念施ねんせ、念天ねんてんなり。(三六)善男子ぜんなんし、云何いかにんが念佛ねんぶつなる。如來にょらい、應おう供ぐ、正徧知しょうへんぎ、明行足みやうぎやうそく、善逝ぜんぜい、世閒解せけんげ、無上士むじやうし、調御丈夫てうごぢやうぶ、天人師てんにんし、佛ぶつ、世尊せそんは常じやうにして變易へんやくせず、十力じふりき、四無所畏しむそふいを具足ぐそくして大師子吼たいししくし、大沙門だいさもん婆羅門ばらもんと名なく。大淨畢だいじやうひつぎやう竟まじて彼岸ひがんに到いたる、能よく勝まさる者もの無く頂いたを見みるものな。怖畏ふゐ有あること無く、驚おどろかず動うごかず。獨どく一いつにして侶たぐひ無く、師し無くして自ら悟さとる。疾智しやくち、大智だいち、利智りち、深智じんち、解脫智げだつち、不共智ふぐいぢ、廣普智くわうふち、畢竟智ひつぎやうちの智寶成就ちほうじやうじゆす。人中にんぢゆうの象王ざうわう、人中にんぢゆうの牛王ごわう、人中にんぢゆうの龍王りゆうわう、人中にんぢゆうの丈夫ぢやうぶ、人中にんぢゆうの蓮華分陀利華れんげふんだりけなり、調御人師てうごにんしなり。大施主だいせいしゆと爲なし、大法師だいほうしと爲なす。(三七)法ほふを知るを以もつての故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、義ぎを知るを以もつての故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、時ときが我がを知るを以もつての故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、大衆だいしゆを知るが故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、衆しゆ生の種種じゆうじゆじやう性しやうを知るを以もつての故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、諸根しよこんの利鈍りどん中ちゆうを知るを以もつての故ゆゑに大法師だいほうしと名なけ、中道ちゆうだうを説とくが故ゆゑに大法師だいほうしと名なく。(三八)云何いかにんが如來にょらいと名なく。過去くわこの諸佛所説しよぶつしよせつの如ごとく變へんせず。云何いかにんが不變ふへんなる。過去くわこの諸佛衆生しよぶつしよじやうを度とするが爲ために十二部經じふにぶきやうを説とく。如來にょらいも亦爾またしかなり、故ゆゑに如來にょらいと名なく。諸佛世尊しよぶつせそん、六波羅蜜ろくはらみつ、三十七品さんじふしちほん、(三九)十一空じふいちくう

【三六】 次に六念を解釋す。之に六段あり、その中初に念佛。之に又二段ありて先づ念佛の果、之に四段あり、初に十號章を立つ。

【三七】 次に衆德章を立つ。

【三八】 次に衆德章を釋す。

【三九】 次に十號章を釋す。之に十一段あり、其中初に如來を釋す。

如來は梵に多陀阿伽陀(タタカタクタ)と云ふ。釋論には如來(三九)、如去、如解、如説、の四義を數へたり。

【四〇】 十一空。上に出づる、内外、内外、有爲、無爲、無始、性、無所有、第一義、空、大の十一種の空なり。

より來りて大涅槃に至る。如來も亦爾なり。是の故に佛を號けて如來と爲すなり。諸佛世尊衆生の爲の故に隨宜方便して三乘を開示し、壽命無量稱計すべからず。如來も亦爾なり、是の故に佛を號けて如來と爲すなり。

【四】云何が應と爲す。世間の法は悉く名けて

怨と爲す。佛害すべきが故に、故に名けて應と

爲す。夫四魔とは是菩薩の怨なり。諸佛如來菩薩爲る時、能く智慧を以て四魔を破壞す。是の

故に應と名く復次に應とは名けて遠離と爲す。

菩薩爲りし時、應當に無量の煩惱を遠離すべし。

故に名けて應と爲す。復次に應とは樂と名く。

過去の諸佛菩薩爲りし時、無量阿僧祇劫に於て、

衆生の爲の故に諸の苦惱を受くと雖も、終に不

樂無く常に之を樂む。如來も亦爾なり、是の故に應と名く。又復應とは、一切の人天種種の香華、瓔

珞、幢幡、伎樂を以て之を供養すべし、故に名けて應と爲す。

【四】云何が正徧知なる。正とは不顛倒を名け、徧知とは四顛倒に於て通達せざる無し。又復正とは名

【四】次に應を釋す。應は梵に阿羅漢(アルハン)と云ふ、之に殺賊、不生、應供の三義あり。之れより下の文を有名なる五

復次の説となす、云何應は第一、夫四魔を第二、復次：名遠離を第三、復次：名樂を第四、

又復應を第五の復次となす、この中前四の復次は殺賊を釋し、後の一は應供を釋す、前の殺賊は不生を兼ぬ、險魔を破すれば是れ不生なるが故な

り。

【四】次に正徧知を釋す。之に二段ありて初に正しく釋す。正徧知は梵に三藐三佛陀(Samyaksambuddha)といふ。

此の文に亦た五復次あり、第一云何正徧知、第二又復名苦行、第三又復名世間、第四又復名爲可數、第五亦有徧知なり。この中前の四は佛能く四法を知るに約し、後の一は小

法を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。

を斥く。



けて苦行と爲し、徧知とは苦行に因りて定んで苦果有るを知る。又復正とは世間中と名づ、徧知とは畢竟定んで中道を修習すれば、阿耨多羅三藐三菩提を得るを知る。又復正とは名けて數ふ可く、量る可く、稱す可しと爲し、徧知とは數ふべからず、量るべからず、稱すべからず。是の故に佛を號けて正徧知と爲す。善男子、聲聞、緣覺も亦徧知有り亦徧知にあらず。何を以ての故に。徧とは五陰、十二入、十八界と名づ、聲聞、緣覺も亦徧知を得。是を徧知と名く。聖何が不徧知なる。善男子、假使二乘は無量劫に於て一つの色陰を觀ずとも、盡く知ること能はず。是の義を以ての故に、聲聞、緣覺は徧知有ること無し。

【四〇】云何が明行足なる。明とは無量の善果を得るを名づ、行とは名けて脚足と爲す。善果とは阿耨多羅三藐三菩提を名づ、脚足とは名けて戒慧と爲す。戒慧の足に乗じて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に名けて明行足と爲す。又復明とは咒と名づ、行とは吉と名づ、足とは果と名く。善男子、是を世間の義と名く。咒とは名けて解脱と爲し、吉とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲し、果とは名けて大般涅槃と爲す。是の故に名けて明行足と爲す。又復明とは光と名づ、行とは業と名づ、足とは果と名く。善男子、是を世間義と名く。光とは不放逸と名づ、

【三三】次に反釋す。

【三四】次に明行足を釋す。明行足は梵に毗修遮羅那三般那(vidyāntara-sambhāna)といふ。この下の文に四復次あり、文を案じて知るべし。前の一は脚足に就き、後の三は滿足に就きて釋す。

【三五】咒とは名けて等。般若は是れ大明咒なり、咒に因つて解を得、故に解脱と爲す。

【三六】果とは名けて等。吉は菩提、善提に因て涅槃の果あり故に名けて大般涅槃と爲す。

業とは六波羅蜜と名け、果とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。又復明とは名けて三明と爲す。一つに菩薩明、二つには諸佛明、三つには無明明なり。菩薩明とは即ち是般若波羅蜜、諸佛明とは即ち是佛眼、無明明とは即ち是畢竟空なり。行とは無量劫に於て、衆生の爲の故に諸の善業を修し、足とは明かに佛性を見る。是の義を以ての故に明行足と名く。

云何が善逝なる。善とは高と名け、逝とは不高と名く。善男子、是を世間の義と名く。高なる者は如來と名けず。是の故に如來を名けて善逝と爲す。又復善とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲し、不高とは即ち如來心なり。善男子、心若く。善知識とは即ち初發心、果とは名けて大般涅槃と爲す。如來最初の發心を捨てずして大涅槃を得。是の故に如來を名けて善逝と爲す。又復善とは好と名け、逝とは有と名く。善男子、是を世間の義と名く。好とは佛性を見るを名け、有とは大涅槃と名く。善男子、涅槃の性、實は有に非ざるなり。諸佛世尊、世間に因るが故に説きて是有と言ふ。善男子、譬へば世人、實は子有ること無きに、説きて子有りと言ひ、實は道有ること無きに、説きて道有りと言ふが如し。涅槃も亦爾なり。世間に因るが故に説きて是有と言ふ。諸佛世尊大涅槃を成ず。故に善逝と名く。

【四七】次に善逝を釋す。善逝は梵に修伽陀(スガタ)といふ。此の文に三復次あり、最後の復次に法譬合の三段あり。

云何が世間解なる。世間とは名けて五陰と爲し、解とは知と名く。諸佛世尊善く五陰を知る、故に世間解と名く。又世間とは名けて五欲と爲し、解とは不著を名く。五欲に著せず、故に世間解と名く。又世間とは東方無量阿僧祇世界の一切の聲聞、緣覺知らず、見ず、解せず。諸佛は悉く知り、悉く見、悉く解す。南西北方、四維、上下も亦復是の如し。是の故に佛を號けて世間解と爲す。又世間とは一切の凡夫、解とは諸の凡夫の善惡因果を知る。是聲聞、緣覺の知る所に非ず、唯佛のみ能く知る。是の故に佛を號けて世間解と爲す。又世間とは名けて蓮華と曰ひ、解とは不汗と名く。善男子、是を世間の義と名く。蓮華とは即ち是如來、不汗とは如來世間の八法に汙染せられず。是の故に佛を號けて世間解と爲す。又世間解とは諸佛菩薩を世間解と名く。何を以ての故に。諸佛、菩薩世間を見るが故に、故に世間解と名く。善男子、食に因つて命を得れば食を名けて命と爲すが如く、諸佛、菩薩も亦復是の如し。世間を見るが故に、故に世間解と名く。

云何が無上士なる。上士とは之を名けて斷と爲し、所斷無き者を無上士と名く。諸佛世尊は煩惱有ること無きが故に所斷無し。是の故に佛を號けて無上士と爲す。又上士とは名けて諍訟と爲し、無上士とは諍訟有ること無し。如來は諍無し、是の故に佛を號けて無上士と

【四九】次に世間解を釋す。世間解は梵に路伽德(Lokavidya)といふ。この文の中六復次あり。世間に五陰、國土、衆生の三種あり。六復次に六世間あり、五陰、國土、衆生、五欲の四世間と、五に佛を名けて世間と爲し、六に世を照すを世間と名くるなり。

【四九】次に無上士を釋す。無上士とは梵に阿耨多羅(Anuttarayata)といふ。文の中五復次あり。

爲す。又上士とは語壞すべしと名け、無上士とは語壞すべからず。如來の所言は一切衆生壞すること能はざる所なり。是の故に佛を號して無上士と爲す。又上士とは名けて上座と爲し、無上士とは無上座と名く。三世諸佛は更に過ぐる者無し。是の故に佛を號して無上士と爲す。上とは新と名け、士とは故と名く。諸佛世尊は大涅槃を體して新無く故無し。是の故に佛を號して無上士と爲す。

云何が調御丈夫なる。自ら既に丈夫にして復丈夫を調ふ。善男子、

如來とは實に丈夫に非ず。不丈夫に非ず。丈夫を調ふるに因るが故に、故に如來を名けて丈夫と爲すなり。善男子、一切の男女若四法を具すれば、則ち丈夫と名く。何等をか四つと爲す。一つには善知識、二つには能聽法、

三つには思惟義、四つには如說修行なり。善男子、若し男、若し女、是の四法を具すれば、則ち丈夫と名く。善男子、若し男子有りて此の四法無きときは、則ち名けて丈夫と爲すことを得ざるなり。何を以ての故に。身丈夫

と雖も行畜生に同じ。如來若し男若し女を調伏す。是の故に佛を號して調御丈夫と爲す。復次に善男子、馬を御する者に凡て四種有り。一つには毛に觸れ、二つには皮に觸れ、三つには肉に觸れ、四つには骨に觸る。其の觸る所に隨ひて御者の意に稱ふが如く、如來も亦た爾なり。四種の法を以て衆生を調伏す。一つには爲に生を説くに便ち佛語を受く、其の毛に觸れて御者の意に隨ふが如し。二

【五】次に調御丈夫を釋す。之に二段あり、其中初に丈夫を釋す、之に二段ありて先づ二章門を闡す。調御丈夫は梵に富樓沙曇菟婆羅提 (Tundhaya-damvavattin) といふ。

【五二】次に二章門を釋す。之に調、所調を釋するの二段あり。

【五三】次に調御を釋す。

つには生老を説くに便ち佛語を受く、毛、皮に觸れて御者の意に隨ふが如し。三つには生及び老病を説くに便ち佛語を受く、毛、皮、肉に觸れて御者の意に隨ふが如し。四つには生及び老病死を説くに便ち佛語を受く、毛皮、肉骨に觸れて御者の意に隨ふが如し。善男子、御者の馬を調ふるは決定有ること無し。如來世尊の衆生を調伏するは必定して虚ならず。是の故に佛を調御丈夫と號く。

云何が天人師なる。師に二種有り。一つには善教、二つには惡教なり。諸佛菩薩、常に善法を以て諸の衆生を教ふ。何等か善法なる。身、口、意の善を謂ふ。諸佛、菩薩の衆生を教へて是の如きの言を作さく、「善男子、汝當に身不善業を遠離すべし。何を以ての故に。身の惡業は是遠離して解脱を得べきを以ての故に。是の故に我此の法を以て汝を教ふ。若此の惡業、遠離し解脱を得べからざれば、終に汝を教へて遠離せしめざるなり。若諸の衆生、惡業を離れ已りて三惡に墮すれば、是の處有ること無し。遠離を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、大涅槃を得。是の故に諸佛菩薩は常に此の法を以て衆生を教化す。口、意も亦爾なり。是の故に佛を號けて無上の師と爲す。復次に昔未だ道を得ず、今已に之を得。所得の道も以て衆生の爲に説く。本より已來未だ梵行を修せず、今已に修し竟る。己の所修を以て衆生の爲に説く。自ら無明を破し、復衆生の爲に無明を破壊す。自ら淨目を得、復衆生の爲に盲眼を破除して淨眼

【五三】次に天人師を釋す。天人師は梵に舍多提婆魔(舍多提婆魔)シヤクスターイワ、マヌシヤニナム(Sikha-devamanuṣya)といふ。文の中十二復次あり、前の二は師を釋し、次の五は天を釋し、並びに勝義を用ゆ。次の四は人を釋し、最後の一人は天人師を釋す。

を得しむ。自ら二諦を知り、復衆生の爲に二諦を演説す。既に自ら解脱し、復衆生の爲に解脱の法を説く。自ら無邊の生死の大海を度し、復衆生をして皆悉く度を得しむ。自ら無畏を得、復衆生を教へて怖畏無からしむ。自ら既に涅槃し、復衆生の爲に大涅槃を演す。是の故に佛を號けて無上の師と爲す。天とは書を名く。天上甚長く夜短し、是の故に天と名く。又復天とは無愁惱を名く。常に快樂を受く、是の故に天と名く。又復天とは名けて燈明と爲す。能く黒闇を破して而も大明と爲す、是の故に天と名く。亦能く惡業の黒闇を破し、善業を得て而も天上に生ずるを以て、是の故に天と名く。又復天とは吉を名く。吉祥を以ての故に名けて天と爲すことを得。又復天とは日を名く。日は光明有り、故に日を名けて天と爲す。是の義を以ての故に名けて天と爲すなり。人とは名けて能く恩義多しと爲す。又復人とは身口業爽。又復人とは憍慢有りと名け、又復人とは能く憍慢を破す。善男子、諸佛は一切衆生の無上の大師と爲すと雖も、而も經中に説きて天人師と爲す。何を以ての故に。善男子、諸の衆生の中、唯天と人と能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、能く十善業道を修し、能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に佛を號けて天人師と爲す。

【焉】次に佛を釋す。之に釋名 歡喜の二段あり。佛は梵に佛陀 (Buddha) といひ、覺と譯す。

云何が佛と爲す。佛とは覺と爲す。既に自ら覺悟し復能く他を覺らしむ。善男子、譬へば人有りて賊

有るを覺知すれば、賊能く爲すこと無きが如く、菩薩摩訶薩能く一切の無量の煩惱を覺す。既に覺了し已りて、諸の煩惱をして能く爲す所無からしむ。是の故に佛と名く。是の覺を以ての故に不生、不老、不病、不死なり。是の故に佛と名く。

【垂】 婆伽婆とは、婆伽は破と名け、婆は煩惱と名く。能く煩惱を破するが故に婆伽婆と名く。又能く諸の善法を成就するが故に、又能善く諸の法義を解するが故に、大功徳有りて能く勝るが故に、大名有りて十方に徧するが故に、又能く種種に大惠施するが故に、又無量阿僧祇劫に於て女根を吐くが故なり。

【善】 善男子、若は男、若は女、是の如く佛を念する者は、若は行、若は住、若は坐、若は臥、若は晝、若は夜、若は明、若は闇、常に佛世尊を見るを離れざることを得。

【毛】 善男子、何が故ぞ名けて、如來、應(供)、正徧知、乃至婆伽婆、而も是の如き無量の功徳大名稱有りと爲すや。善男子、菩薩昔無量阿僧祇劫に於て、父母、和上、諸師、上座、長老を恭敬し、無量劫に於て常に衆

【五五】 次に婆伽婆を釋す。之に二段あり、初に四義を釋す。婆伽婆は梵語 Bhagavat の音譯。世尊。世間に尊重せらるの義なり。

【其】 次に修を勸む。

【毛】 次に佛因を念す。之に二段あり、其中初に微起す。

【其】 次に正しく釋す。之に二段あり、其中初に六度四等を因と爲すことを明す。

【免】 和上 (Upajjhaya)。方生と譯す、師は弟子の道力を生ずるが故なりの諸師といふも同じ。

【六〇】 上座 (Uparikaya)。一義に二十夏より四十九夏に至る出家の尊稱。

【六一】 長老 (Elders)。又た具壽とも譯す。道高く蔭長ぜる比丘の通稱。

生の爲に、而も布施を行じ、堅く禁戒を持ち、忍辱を修習し、勤行精進し、禪定智慧、大慈大悲、

大喜大捨す。是の故に今三十二相、八十種好金剛の身を得。又復菩薩若

無量阿僧祇劫に於て道、信、念、定、慧根を修習し、諸の師長に於て恭敬

供養し、常に法利の爲にして食利の爲にせず。菩薩若は十二部經を持し、

若は讀み、若は誦し、常に衆生の爲に解脫、安隱、快樂を得しめ、終に自

の爲にせず。何を以ての故に。菩薩は常に出世間心、及び出家心、無爲

の心、無諍訟心、無垢穢心、無繫縛心、無取著心、無覆蓋心、無無記心、無

生死心、無疑網心、無貪欲心、無瞋恚心、無愚癡心、無憍慢心、無穢濁心、

無煩惱心、無苦心、無基心、廣大心、虛空心、無心、無無心、不調心、不

護心、無覆藏心、無世間心、常定心、常修心、常解脫心、無報心、無願

心、善願心、無語心、柔爽心、不住心、自在心、無漏心、第一義心、不退

心、無常心、正直心、無諂曲心、淳善心、無多少心、無堅心、無凡夫心、

無聲聞心、無緣覺心、善知心、界知心、生界知心、住界知心、自在界心、

修す。是の故に今十力、四無所畏、大悲、三念處、常樂我淨を得。是の故

に如來、乃至婆伽婆と稱するを得。是を菩薩摩訶薩の念佛と名く。

【六二】次に五十四心を因と爲す

【六三】無爲の心とは爲作する所

【六四】無報心：無常心等。果

報を求めざる故に無報、住著

する所なき故に不住、定執す

る所なき故に無常、此に厚く

して彼に薄くせざる故に無多

少、諸法各異分あるを分別す

る故に界知、生滅界を知る故

に生界知、常住不滅界を知る

故に住界知、常無常に於て皆

悉く不生なりと通達して自在

なる故に自在界心と云ふ。生

界は俗を知り、住界に眞を知り、自在は中を知る。



【五】云何が菩薩摩訶薩の念法なる。善男子、菩薩摩訶薩思惟す、「諸佛説くべき所の法は最妙最上なり。」

是の法に因るが故に、能く衆生をして現在の果を得しむ。唯此の正法のみ時節有ること無し。法眼の

所見、肉眼の見に非ず。然るに譬喩を以て比を爲すべからず。不生不出、不住不滅、不始不終、無爲

無數なり。舍無き者には爲に舍と作り、歸無きに歸と作り、明無きに明と作り、未だ彼岸に至らざれば

彼岸に至らしめ、無香處の爲に無礙香と作り、觀見すかべらず。不動不轉、不長不短なり。永く諸

樂を斷じて安隱樂、畢竟微妙なり。非色斷色、而も亦是色、乃至非識斷識、而も亦是識、非業斷業、

非結斷結、非物斷物、而も亦是物。非界斷界、而も亦是界。非有斷有、而も亦是有。非入斷入、而も

亦是入。非因斷因、而も亦是因。非果斷果、而も亦是果。非虛非實、一切

の實を斷じ、而も亦是實。非生非滅、永く生滅を斷じ、而も亦是滅。非相

非非相、一切相を斷じ、而も亦是相。非教非不教、而も亦是師。非怖非安、一切怖を斷じ、而も亦是

安。非忍非不忍、永く不忍を斷じ、而も亦是忍。非止非不止、一切止を斷じ、而も亦是止。一切法の

頂、悉く能く永く一切の煩惱を斷ず。清淨無相、永く諸相を脱す。無量の衆生の畢竟住處なり。能

く一切の生死熾火を滅す。すまは是諸佛所遊居の處、常にして變易せず。是を菩薩の念法と名く。

【六】云何が念僧なる。諸佛聖僧如法にして住し、正直の法を受けて隨順修行す。觀見すべからず、捉持

すべからず、破壞すべからず、能く燒害する無し。思議すべからず、一切衆生の良祐福田なり。福田

と爲すと雖も、受取する所無く、清淨無穢、無漏無爲、廣普無邊なり。其の心調柔にして平等無二なり。擾濁有ること無く、常にして變易せず。是を念僧と名く。

【三七】

云何が念戒なる。菩薩思惟す。戒有りて破らざる、漏さざる、壊せず、離へず。形色無しと雖も護持すべし。觸對無しと雖も善く方便を修して具足を得べく、過咎有ること無き、諸佛菩薩の讚歎する所にして是大方等大涅槃の因なり。善男子、譬へば大地、船舫、瓔珞、大姓、大海、灰汁、舍宅、刀劍、橋梁、良醫、妙藥、阿伽陀藥、如意寶珠、彌足眼目、父母陰涼の如く、能く劫盜する無く、燒害すべからず。火も焚くこと能はず、水も漂はず。こ

【三七】 次に念戒。  
【三八】 阿伽陀(アガタ) 無價、無病等を謂す、長壽不死の藥の名なり。

【三九】 次に念施。

陀洹果を得、我も亦分有れども、然も我須ひす。何を以ての故に。若我是の須陀洹果を得ば、廣く一切衆生を度すること能はず。若是の戒に住して阿耨多羅三藐三菩提を得ば、我も亦分有り。是我が欲する所なり。何を以ての故に。若阿耨多羅三藐三菩提を得れば、當に衆生の爲に廣く妙法を説きて救護を作すべし。是を菩薩摩訶薩の念戒と名く。

【四〇】

云何が念施なる。菩薩摩訶薩深く此の施を觀ず、乃ち是阿耨多羅三藐三菩提の因なり。諸佛菩薩是の如きの希施を親近修習す。我も亦是の如く親近修習す。若惠施せざれば四部の衆を莊嚴すること能はず。施畢竟じて結を斷すること能はずと雖も、而も能く現在の煩惱を除破す。施の因縁を以て常

に十方の無量無邊の恆河沙等の世界の衆生に稱歎せらる。菩薩摩訶薩衆生に食を施すとき則ち其の命を施す。是の果報を以て得佛の時常にして變易せず。樂を施すを以ての故に、成佛の時則ち安樂を得。菩薩施す時如法に財を求め、彼を侵して此に施さず。是の故に成佛して清淨涅槃を得。菩薩施す時諸の衆生をして求めずして而も得しむ、是の故に成佛して自在我を得。施の因縁を以て他をして力を得しむ、是の故に成佛して十方を獲得す。施の因縁を以て他をして語を得しむ、是の故に成佛して四無闕を得。諸佛菩薩是の施を修習して涅槃の因と爲す。我も亦是の如く布施を修習して涅槃の因と爲す、廣説(10) 雜華の中の如し。

(三) 云何が念天なる。四天王處、乃至非想非非想處有り。若信心有らば四天王處を得、我も亦分有り。若我多聞、布施、智慧、四天王處を得、乃至非想非非想處を得。我も亦分有れども然も我欲するに非ず。何を以ての故に。四天王處、乃至非想非非想處皆是無常なり。無常を以ての故に生老病死す。是の義を以ての故に我が欲する所に非ず。譬へば幻化の愚夫を誑すも、智慧の人は惑著せざる所の如し。幻化の如しとは、即ち是四天王處、乃至非想非非想處なり。愚者は即ちは一切の凡夫なり、我は則ち凡夫愚人に同じからず。我曾て第一義天有るを聞く、諸佛苦

【七〇】 雜華 (Gandhāra) 觀佛三昧海經に云く、我れ雜華に於て普賢賢首等の爲めに説くと。故に恐らく雜華とは華嚴經 (Sūtra in ten volumes) を指せるものか。安註曰く、「此の土に雜華經なし、唯だ華嚴あり、或は謂く別に雜華ありしも此の土に來らずと。一に云く觀佛三昧に雜華と云ふは是れ華嚴ならんと。」

【七一】 次に念天。通じて諸天を念するなり。

薩常にして變易せざるを謂ふ。常住を以ての故に、不生、不老、不病、不死なり。我衆生の爲に精勤して第一義天を志求す。何を以ての故に。第一義天は能く衆生をして煩惱を除斷すること、猶し意樹の如くならしむ。若し我信有り、乃至慧有らば、則ち能く是の第一義天を得。當に衆生の爲に廣く分別して第一義天を説くべし。是を菩薩摩訶薩の念天と名く。善男子、是を菩薩世間に非すと名くるなり。是世間は知、見、覺せず。而も是菩薩知、見、覺する所と爲す。

【七三】 善男子、若我が弟子、十二部經を受持、讀誦、書寫、演說すると、及以大涅槃經を受持、讀誦、書寫、敷演、解說すると、等しうして差別無しと謂ふは、是の義然らず。何を以ての故に。善男子、大涅槃とは即ち是一切の諸佛世尊の甚深祕藏なり。是諸佛の甚深祕藏なるを以て、是則勝と爲す。善男子、是の義を以ての故に大涅槃經は甚奇甚特にして思議すべからず。』

【七四】 迦葉菩薩、佛に白して言く、「世尊、我も亦是の大涅槃經甚奇甚特不可思議、佛法衆僧不可思議、菩薩菩提大般涅槃亦不可思議を知る。世尊

【七二】 是より大段第二に經を歎す。文二と爲す。初には此卷を盡して經の生善を歎じ、後には兩卷能く惡を滅するを歎す。初の生善の文三段と爲す、其中初に正しく歎す。之に又二段あり、初に如來の歎。

【七三】 次に迦葉の頌解。

【七四】 是より弘經の人を歎す。之に三段あり、其中初に問。之を十三不可思議といふ。其中初に能く發心す。

【七五】 教ゆる者なきに等。眞心緣じて發心せば聲聞に墮す、理人の教ゆるを須つ。俗を緣じて發心すれば分別に墮す、境の之を教ゆるを須つ。皆不可思議と稱し得ず、若し中道を緣すれば三諦相即して眞俗に非ず、人境に從はず、故に人の教ゆる者なしと言ふ。佛性を明了する故に自發と言ひ、

何の義を以ての故に復菩薩不可思議と言ふ。」

善男子、菩薩摩訶薩は、教ふる者有ること無きに、而も能く自ら菩提

の心を發す。既に發心し已りて勤修精進す。正使大火身首を焚燒すとも、

終に救を求め念法の心を捨てず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩常に自ら思

惟す、我無量阿僧祇劫に於て或は地獄、餓鬼、畜生、人中、天上に在りて

諸結の火に燒然せられ、初て未だ曾て一決定法を得ず。決定法とは即ち是

阿耨多羅三藐三菩提なり。我阿耨多羅三藐三菩提の爲に終に身心と命とを

護惜せず。我阿耨多羅三藐三菩提の爲に、正に身を碎きて猶し微塵の如く

ならしむとも、終に勤精進を放捨せざるなり。何を以ての故に。勤精進の

心は即ち此阿耨多羅三藐三菩提の因なればなり。善男子、是の如きの菩薩

は未だ阿耨多羅三藐三菩提を見ずして、乃ち能く是の如く身命を惜まず、

況や復見已るをや。是の故に菩薩思議すべからず。

又復不可思議とは、菩薩摩訶薩、生死の無量の過患を見る所、是聲

聞、緣覺の及ぶ所に非ず。生死の無量の過患を知ると雖も、衆生の爲

の故に、中に於て苦を受けて厭離を生ぜず。是の故に復不可思議と名く。

不雜を精と名け、入流を進と名く。地獄は生死果を擧ぐ、諸結は生死の因を擧ぐ、果劫

この因果の爲に燒かる。今生死即涅槃と了し、また諸結即菩提と了して二邊に墮せずこ

れを一と名け、動寂不壞のゆへに決定と名く。燒身碎首も正道に非ざるなし、内道を捨てず、外教を求めず。此は三

諦の發心に約して不思議を明す、止觀中の發心と意同じ。

【七】次に生死の苦を受く。

【六】生死の無量過患等。二乘は但だ分段の少分を知りて變

易の過患を知らず、菩薩は之に過ぐ故に不及と云ふ。俗に即して眞中、故に不厭と言ふ。

中に即して眞俗、故に不離と云ふ。三諦を照す智に約して不思議を明す。止觀の安心と

意同じ。

元々菩薩摩訶薩衆生の爲の故に、地獄に在りて諸の苦惱を受くと雖も三禪の樂の如し。是の故に復不可思議と名く。(八〇)善男子、善へば長者其の家火を失するに、長者見已りて舍より出で、諸子後に在りて未だ火難を脱せず。長者厨の時に定んで火害を知り、諸子の爲の故に旋り還りて赴救して其の難を顧みざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死諸の過惡多きを知ると雖も、衆生の爲の故に之に處して厭はずり。是の故に復不可思議と名く。

【八一】善男子、無量の衆生菩提心を發すも、生死の中諸の過惡多きを見て心即ち退没し、或は聲聞と爲り、或は緣覺と爲る。若菩薩是の經を聞く者有らば、終に菩提の心を退失して、而も聲聞、辟支佛と爲らざるなり。是の如く菩薩復未だ初不動地に階らずと雖も、而も心堅固にして退没有ること無し。是の故に復不可思議と名く。(八二)善男子、善明へて、我能く大海の水を浮度すと云ふ有らん。是の如きの言思議すべきや不や。『世尊、是の如きの言、或は思議すべく、或は思議すべからず。何を以ての故に。』

若人度るは則ち思議すべからず。阿脩羅度るは則ち思議すべし。善男子、我も亦阿脩羅を説かざるなり。正しく人を説くのみ。『世尊、人中にも亦思議すべき者、思議すべからず。』

【七九】次に地獄の苦を受く。この文略なり、亦應に更に三界の苦を受くるも涅槃の樂の如しと言ふべし。此に三禪上の障に約して不思議を明す。止觀の通塞と意同じ。また大慈に似たり。

【八〇】次は旋迴して赴救す。文中會に中道に、失火は信に出は眞に譬ふ。此は三禪の行に約して不思議を明す。止觀の眞正悲心と意同じ。

【八一】次に終に退轉せず。これは三禪の位に約して不思議を明す。止觀の道品と意同じ。

【八二】次に生死海を度す。此は三禪の位に約して不思議を明す。止觀の次位と意同じ。

我も亦阿脩羅を説かざるなり。正しく人を説くのみ。『世尊、人中にも亦思議すべき者、思議すべからず。』

らざる者あり。世尊、人に二種有り。一つには聖人、二つには凡夫なり。凡夫の人は即ち思議すべからず、賢聖の人は則ち思議すべし。『善男子、我凡夫を説きて聖人を説かず。』世尊、若凡夫の人は實に思議すべからず。『善男子、凡夫の人は實に大海水を度ること能はざるなり、而も是の菩薩は實に能く彼の生死の大海を度す。是の故に復不可思議と名く。』善男子、若人有りて能く藕根の絲を以て須彌山を懸げんに、思議すべきや不や。『不なり世尊。』善男子、菩薩摩訶薩は一念の頃に於て悉く能く一切の生死を稱量す。是の故に復不可思議と名く。

〔四〕 善男子、菩薩摩訶薩已に無量阿僧祇劫に於て、常に生死、無常、無我、無樂、無淨を觀すれども、而も衆生の爲に分別して常樂我淨を演説す。是の如く説くと雖も、然も邪見に非ず。是の故に復不可思議と名く。善男子、人水に入るに水溺らすこと能はず、大猛火に入るに火燒くこと能はず。是の如きの事思議すべからざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死に處すと雖も、生死に惱害せられず。是の故に復不可思議と名く。

〔五〕 善男子、人に三品有り。上、中、下を謂ふ。下品の人は初めて胎に入る時、是の念言を作さく、「我今廁、衆穢歸處、諸の死屍の間、棘刺叢林、大黑闇の中に處す」と。初めて出づる時、復是の念

〔三〕 次に能く生死を稱量す。即是一中の無量、無量中の一、非一非無量を稱量するなり。此は三諦の法に約して不思議を明す。止觀の妙境と意同じ。

〔四〕 次に能く常住を説く。

〔五〕 次に生死に惱まず。

〔六〕 次に胎に在り亂れず。此は三諦の報に約して不思議を明す。止觀中の安忍と意同じ。

を作さく、「我今廂、諸穢惡處を出づ。乃至大黑闇の中を出づ」と。中品の人は是の念言を作さく、「我今衆樹林果清淨の河中、房室、舍宅に入る」と。出づる時も、亦爾なり。上品の人は是の念言を作さく、「我殿堂に昇り華林の間に在り。馬に乗り象に乗り、高山に登上す」と。出づる時も亦爾なり。菩薩摩訶薩、初めて入胎の時自ら胎に入るを知り、住時住するを知り、出時出づるを知る。貪欲、瞋

恚の心を起さず。而も亦未だ初住の地を得ず。是の故に復不可思議と名く。

善男子、阿耨多羅三藐三菩提は實に譬喩を以て比と爲すべからず。善男子、心も亦方喩を以て比と爲すべからず。而も皆説くべし。菩薩摩訶薩師

咨受學の處有ること無くして、而も能く是の阿耨多羅三藐三菩提を得。是の法を得已りて心に慳吝無く、常に衆生の爲に而も之を演説す。是の故に不可思議と名くることを得。善男子、菩薩摩訶薩身遠離して口に非ざる

有り、口遠離して身に非ざる有り、身口に非ずして而も亦遠離する有り。身遠離すとは殺、盜、淫を離るるを謂ふ、是を身遠離して口に非すと名く。口遠離とは妄語、兩舌、惡口、無義語を離るるを謂

ふ、是を口遠離して身に非すと名く。非身、非口も亦遠離とは所謂貪嫉、瞋恚、邪見を遠離す。善男子、是を非身、非口にして而も是遠離と名く。善男子、菩薩摩訶薩一法の是身是業、及與主を離れて

而も亦離有るを見ず。是の故に復不可思議と名く、口も亦是の如し。善男子、身より身を離れ口より

【七】次に法に於て咨ならず。此は三諦の體數に約して不思議を明す。止觀の道第と意同じ。

【八】次に十惡を遠離す。此は三諦の業に約して不思議を明す。止觀の破法備と意同じ。



口を離れ、慧より非身、非口を遠離す。(八九)善男子、實に此の慧有れども、然も菩薩をして遠離せしむること能はず。何を以ての故に。善男子、一法の能く壞し能く作す有ること無し。有爲法性、異生異滅、是の故に此の慧遠離すること能はず。善男子、慧破すること能はず、火燒くこと能はず、水爛すること能はず、風動かすこと能はず、地持すること能はず、生生すること能はず、老老すること能はず、住住すること能はず、壞壞すること能はず、貪貪ること能はず、瞋瞋ること能はず、癡癡にすること能はず。有爲性異生異滅を以ての故なり。菩薩摩訶薩終に、我此の慧を以て諸の煩惱を破するの念を生ぜず、而も自ら説きて「我煩惱を破す」と言ふ。是の説を作すと雖も是虛妄に非ず。是の故に復不可思議と名く。

【九〇】次に頌。  
 迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、我今始めて菩薩摩訶薩の不可思議、佛法衆僧、大涅槃經、及び受持者、菩提涅槃の不可思議を知る。」(九一)世尊、無上佛法の住すること當に久近なるべし。幾時にして滅するや。」(九二)善男子、若大涅槃經、乃至是の五行有らん。所謂聖行、梵行、天行、病行、嬰兒行なり。若我が弟子、能く受持し、誦誦、書寫し、其の義を演説する有りて、諸の衆生に恭敬し、尊重、讚歎し、種種供養せらるれば、當に知るべし、爾の時に佛法未だ

滅びじ。善男子、若大涅槃經具足流布せんに、爾の時に當りて、我が諸の弟子多く禁戒を犯し、衆

惡を造作し、是の如きの經典を敬信すること能はず。不信を以ての故に、  
受持し、讀誦、書寫し、其の義を解説すること能はず、衆生に恭敬、乃至  
供養せられず。受持の者を見て、汝は是六師、佛の弟子に非ず」と輕毀し

誹謗せん、當に知るべし、佛法將に滅せんとすること久しからじ。  
迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、我親しく佛に従ひて是の如き  
の義を受く、迦葉佛の法世に住すること七日、然して後滅盡す」と。

尊、迦葉如來是の經有りや不や。若其有らば、云何ぞ滅と言ひ、若其無  
ければ云何ぞ説きて、大涅槃經は是諸の如來の祕密の藏」と言けん。

佛の言はく、「善男子、我上に説きて唯文殊有りて乃ち是の義を解す  
と言ふ。今當に重ねて説くべし。至心に諦かに聽け。善男子、諸佛世尊  
に二種の法有り。一つには世法、二つには第一義法なり。世法は滅すべく、

第一義法は則ち壞滅せず。復二種有り。一つには無常無我無樂無淨、二つ  
には常樂我淨なり、無常無我無樂無淨は則ち壞滅有り、常樂我淨は則ち壞滅無し。復二種有り。一つ  
には二乗の所持、二つには菩薩の所持なり。二乗の所持は則ち壞滅有り、菩薩の所持は則ち壞滅無し。

【九七】次に犯戒多ければ則ち滅す。  
【九八】次に迦葉佛の法を問ふ。之に二段あり、其中初に問。之に又二段ありて先づ旨を領す。今次に七日と云ひ、賢劫經には二十年と云ふ、初滅終滅の異に過ぎず。  
【九九】次に問。之に二段あり、其中初に定んで有りや不やを難す。  
【一〇〇】次に覆べて難す。  
【一〇一】次に答。之に二段あり、其中初に泛く滅、不滅有り。これに又二段ありて、先づ許す。  
【一〇二】次に正しく泛く答ふ。

には常樂我淨なり、無常無我無樂無淨は則ち壞滅有り、常樂我淨は則ち壞滅無し。復二種有り。一つには二乗の所持、二つには菩薩の所持なり。二乗の所持は則ち壞滅有り、菩薩の所持は則ち壞滅無し。

復二種有り。一つには外、二つには内なり。外法は則ち壞滅有り、内法は則ち壞滅無し。復二種有り。一つには有爲、二つには無爲なり。有爲の法は則ち壞滅有り、無爲の法は壞滅有ること無し。復二種有り。一つには可得、二つには不可得なり。可得の法は則ち壞滅有り、不可得の法は壞滅有ること無し。復二種有り。一つには共法、二つには不共なり。共法は壞滅、不共の法は壞滅有ること無し。復二種有り。一つには人中、二つには天中なり。人中は壞滅、天は壞滅無し。復二種有り。一つには十部經、二つには方等經なり。十部經は則ち壞滅有り、方等經は壞滅有ること無し。善男子、若我が弟子方等經典を受持。讀誦、書寫、解說し、恭敬、供養し、尊重、讚歎せば、當に知るべし、爾の時に佛法滅せず。

〔九八〕善男子、汝向に問ふ所の「迦葉如來に是の經有りや不や」とは、善男子、

大涅槃經は悉く是一切諸佛の祕藏なり。何を以ての故に。諸佛に十部經有りといへども、佛性を説かず。如來常樂我淨、諸佛世尊畢竟涅槃せず」と説かず。是の故に此の經を名けて如來の祕密の藏と爲す。十部經に説かざる所なるが故に、故に名けて藏と爲す。人の七寶外に出し用ひざる、之を名けて藏と爲すが如し。善男子、是の人此の物を藏積する所以は、未來の事の爲の故なり。何等か未來の事なる。所謂穀貴、賊來りて國を侵し、惡王に値遇せん。用ひて命を贖ふが爲に、道路澀難にして財得難き時、乃ち當に出し用ふべし。善男子、諸佛如來祕密の藏も亦復是の如し。未來世の諸の惡比丘不淨

〔九八〕次に正しく所問に答ふ。之に四段あり、其中初に先佛に經有り。

物を畜へ、四衆の爲に如來畢竟して涅槃に入ると説く。世典を讀誦し佛經を敬せず。是の如き等の惡世に現るる時の爲、如來是の諸惡を滅し、邪命利養を遠離することを得しめんと欲するが爲に、如來則ち爲に是の經を演説す。若是の經典秘密の藏滅して現せざる時、當に知るべし、爾の時に佛法則ち滅せん。善男子、大涅槃經常にして變易せず、云何を難じて「迦葉佛の時是の經有りや不や」と言はん。

【100】次に演説を須ひざるの文。

【101】大象王 (Maharajasa) 佛は人中の王たるを、喩へば象王が象中の王なるが如くなれば佛を稱して斯く言ふ。

【102】次に今佛と對辨す。

摩訶薩等調柔にして化し易し。大威徳有りて總持して忘れず、大象王の如し。世界清淨にして一切衆生悉く、如來終に畢竟して涅槃に入らず、常住にして變せざるを知る。是の典有りと雖も演説すべからず。

【103】善男子、今世の衆生は諸の煩惱多く、愚癡、喜忘、智慧有ること無し。諸の疑網多く、信根立たず、世界不淨なり。一切衆生咸く如來無常

變遷、畢竟して大般涅槃に入ると謂ふ。是の故に如來是の典を演説す。善男子、迦葉佛の法實に亦不滅なり。何を以ての故に、常にして變せざるが故なり。善男子、若衆生有りて我を無我と見、無我を我

と見、常を無常と見、無常を常と見、樂を無樂と見、無樂を樂と見、淨を不淨と見、不淨を淨と見、不滅を滅と見、滅を不滅と見、罪を非罪と見、非罪を罪と見、輕罪を重と見、重罪を輕と見、乘を非

乘と見、非乘を乘と見、道を非道と見、非道を道と見、實に是菩提を非菩提と見、實に非菩提を是菩提

提と見、苦を非苦と見、集を非集と見、滅を非滅と見、實を非實と見、實に是世諦を第一義諦と見、第一義諦を是世諦と見、歸を非歸と見、非歸を歸と見、眞佛語を以て名けて 魔語を以て佛語と爲す。是の如きの時、諸佛乃ち大涅槃經を説きたまふ。

善男子、寧ろ蠱黷の大海の底を盡すと説くとも、説きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ口須彌を吹いて散壞すと説くと、説きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ法陀羅火の中蓮華を生ずと言ふとも、説きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ阿伽陀藥、而も毒藥と爲すと説くとも、説きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ月熱せしむべく日冷やしむべしと説くとも、説きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ四大各己が性を捨つと説くとも、説きて如來法滅すと言ふべからず。

善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、未だ弟子甚深の義を解する有らざるを、而も佛世尊、便ち涅槃せば、當に知るべし、是法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子の甚深の義を解する有らば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

復次に善男子、若佛初めて出で阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の甚深の義を解する有りと雖も、篤

【一〇三】魔語(マライグアチ)に於て法となす語を總稱す。  
【一〇四】次に法實に滅せざるの女明す。之に六雙の對辨あり、其中初に解義不解義。  
【一〇五】次に有權遮無權越。

信の白衣檀越の佛法を敬重する有る無きに、佛便ち涅槃せむ、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子の甚深の義を解する有り。多く篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有らば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、佛法久しく世に住せん。

〔一〇六〕復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子甚深の義を解する有り。篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りと雖も、而も諸の弟子經法を演說するは、貪つて利養の爲にし涅槃の爲にせずんば、佛滅度すとも、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

〔一〇七〕復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、弟子の甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りと雖も、而も諸の弟子多く誹訟を起して互に相是非し、佛復涅槃せば、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有り。彼の諸の弟子、和敬の法を修して相是非せず。互に相尊重せば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、是の法久しく住して滅せじ。

〔一〇七〕 次に爲利不爲利。  
 〔一〇八〕 次に起請不起請。  
 〔一〇九〕 次に訛過不說過。

〔一一〇〕復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、弟子甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りて、彼の諸の弟子、大涅槃の爲にして法を演說し、互に相恭敬して誹訟を起さずと雖も、然も一切の不淨の物を畜ふ。復自ら讚じて「我須陀洹果、乃至阿羅漢果

復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りて、彼の諸の弟子、大涅槃の爲にして法を演說し、互に相恭敬して誹訟を起さずと雖も、然も一切の不淨の物を畜ふ。復自ら讚じて「我須陀洹果、乃至阿羅漢果

を得」と言ふ。佛復涅槃せば、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子甚深の義を解する有り、復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りて、彼の諸の弟子、大涅槃の爲に經法を演説し、善く和敬を修して互に相尊重し、一切不淨の物を畜へず。亦自ら須陀洹を得、乃至阿羅漢を得と言はざれば、彼の佛世尊、復滅度すと雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

(二〇) 復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子有り、乃至不淨の物を畜へず。又自ら須陀洹、乃至阿羅漢を得と言はざれども、各所見を執じて種種異説し、是の言を作さく、「長老、諸佛所制の四重の法、乃至七滅諍の法、衆生の爲の故に、或は遮し或は開す。十二部經も亦復是の如し。何を以ての故に。佛、國土、時節の各異に、衆生同じからず、利鈍の差別を知る。是の故に如來、或は遮し或は開して輕重の説有り。善男子、譬へば良醫の病の爲に乳を服し、病の爲に乳を遮し、熱病には服するを聽し、冷病には則ち遮するが如し。如來も亦爾なり、諸の衆生の煩惱の病根を觀じて亦開し亦遮す。長老、我親しく佛に従ひて是の如きの義を聞く、唯我のみ義を知る、汝知ること能はじ。唯我のみ律を解す、汝解すこと能はじ。我諸經を知る、汝知ること能はじ」と。彼の佛復滅せば、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得。諸の弟子有り、乃至「我須陀

【二〇】次に種種説不種種説。

道果より阿羅漢果に至るを得」と言はず。亦説きて、「諸佛世尊、衆生の爲の故に或は遮し或は開す。長老、我親しく佛に従ひて是の如きの義、是の如きの法、是の如きの律を聞く。長老、當に如來の十部經に依るべし。此の義若是ならば我當に受持すべく、若其非ならば、我當に棄捨すべし」と言はず。彼の佛世尊、復涅槃すとも雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

(二) 善男子、我が法滅する時聲聞の弟子有りて、或は神有りと言ひ、或は神空しと言ひ、或は中陰有りと言ひ、或は中陰無しと言ひ、或は三乘有りと言ひ、或は三乘無しと言ひ、或は三乘有りと言ひ、或は三乘無しと言ひ、或は衆生有始有終と言ひ、或は衆生無始無終と言ひ、或は十二因縁是有爲法と言ひ、或は因縁は無爲法と言ふ。或は如來病苦行有りと言ひ、或は病苦行無しと言ふ。或は如來、比丘十種の肉を食するを聽さず。何等をか十と爲す。人、蛇、象、馬、驢、狗、師子、猪、狐、獼猴なり。其餘は悉く聽すと云ひ、或は一切聽さずと言ふ。或は比丘五事を作さず。何等をか五と爲す。生口、刀、酒、浴沙、胡麻油を賣らず。其餘は悉く聽すと云ふ。或は五種の家に入ることを聽さず。何等をか五つと爲す。屠兒、淫女、酒家、王宮、旃陀羅舍なり。餘家は悉く聽すと云ひ、或は憍舍耶衣を聽さず、餘の一切は聽すと云ひ、或は如來諸の比丘に衣食、臥具の其價各十萬兩金に直るを畜ふことを聽すと

【二】次に重ねて釋迦佛の法を結す。之に三段あり、其中初に將に滅せんとして諍を起すの文。

【三】憍舍耶(カウシエーヤ)衣と譯す、野蠶の繭より取りたる衣、所謂絹衣なり。



言ひ、或は聽さずと言ふ。或は涅槃は常樂我淨と言ひ、或は涅槃は直ちに是結盡、更に別の法の名けて涅槃と爲す無く、譬へば織縷の之を名けて衣と爲し、衣既に壞れ已らば名けて無衣と爲す。實に別法の名けて無衣と爲す無きが如し、涅槃の體も亦復是の如しと言ふ。善男子、爾の時に當りて我が諸の弟子、正説の者は少く邪説の者は多し。正法を受くるは少く邪法を受くるは多し。佛語を受くるは少く魔法を受くるは多し。

【二三】善男子、爾の時に拘睺彌國に二りの弟子有り。一は阿羅漢、二は破戒なり。破戒の徒衆凡て五百有り、羅漢の徒衆其の數一百なり。破戒の者は「如來畢竟じて涅槃に入る。我親しく佛に従ひて是の如きの義を聞く、如來所制の四重の法、若持するも亦可、犯するも亦罪無しと。我今も亦阿羅漢果を得て四無闍智あり。而も阿羅漢も亦是の如きの四重の法を犯す。四重の法若

【二三】次に拘睺彌國の佛法遂に滅す。所謂六百誦を起し、相害するに因て、佛法滅を致す。拘睺彌(Kushinara)は、不靜と譯す。ドーアブ(Doh)の低地、ガンヂス河に沿へる古都なり。

是實罪ならば阿羅漢の者に終に犯すべからず。如來の在世制して堅く持すと言ふも、涅槃に臨む時皆悉く放捨す」と説く。阿羅漢比丘の言さく、「長老、汝如來畢竟じて、涅槃に入ると説くべからず。我知る如來は常にして變易せじ。如來の在世及び涅槃の後四重禁を犯す、罪差別無し。若羅漢四重禁を犯すと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。須陀洹の人尙禁を犯さず、況や阿羅漢をや。長老の「我は是羅漢」と言ふが若き、阿羅漢の者は終に想を我羅漢を得るに生ぜず。阿羅漢の者は唯善法を説き

て不善を説かず。長老の所説は皆是非法なり。若十二部經を見ることを得る有らば、定んで長老の阿羅漢に非ざるを知らん。善男子、爾の時に破戒比丘の徒衆、即ち共に是の阿羅漢の命を斷ず。善男子、是の時魔王、是の二衆忿恚の心に因りて悉く共に是の六百の比丘を害す。爾の時に凡夫各共に説きて言はく、哀しい哉佛法是に於て滅盡す」と。而も我が正法實は滅せざるなり。爾の時に其の國に十二萬の諸の大菩薩の善く我が法を持する有り。云何ぞ當に我が法滅すと云ふべきや。爾の時に當りて閻浮提の内、一比丘の我が弟子爲る無し。爾の時に波旬悉く大火を以て一切所有の經典を焚燒す。其の中或は遺餘在る者有り。諸の婆羅門即ち共に偷取し、處處に采拾して己が典に安置す。是の義を以ての故に諸の小菩薩、佛未出の時、率ね共に婆羅門の語を信受す。諸の婆羅門是の、我齋戒有り」と説くことを作すと雖も、而も諸の外道眞實は無なり。諸の外道等の復説きて我樂淨有りと云ふと雖も而も實は我樂淨の義を解せず。直ちに佛法の一字、二字、一句、二句を以て、説きて「我が典に是の如きの義有り」と言ふ。」

〔二四〕 爾の時に拘尸城、娑羅雙樹の閒、無量無邊阿僧祇の衆、是の語を聞き已りて悉く共に唱へて言はく、「世閒虛空、世閒虛空」と。

〔二五〕 迦葉菩薩諸の大衆に告ぐらく、「汝等且く憂悲啼哭すること莫れ。」

〔二四〕 次に大衆の悲歎。之に三段あり。その中初に大衆の悲歎。

〔二五〕 次に迦葉の慰撫。

〔二六〕 次に大衆の悲止みて發心す。所謂滅と聞て悲み、不滅と聞て悲止む。非滅非不滅に達して即ち發心す。故に知る、

世間不空なり、如來常住にして變易有ること無し。法僧も亦爾なり」と。  
(二六) 爾の時に大衆、是の語を聞き已りて啼哭即ち止み、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

非減非不減而減而非減大に利益を作すと。

# 卷の第十七

## 梵行品の四

爾の時に王舎大城の阿闍世、其性慳惡にして喜んで殺戮を行じ、口の四過を具す。貪恚、愚癡、其心熾盛なり。唯現在を見て未來を見ず、純ら惡人を以て眷屬と爲す。現世の五欲樂に貪著するが故に、父王辜無きに横に逆害を加ふ。父を害し已るに囚りて心に悔熱を生じ、身の諸瓔珞、伎樂御せず。心悔熱の故に徧體瘡を生ず。其瘡臭穢、附近すべからず。尋で自ら念じて言はく、『我今此の身已に華報を受く。地獄の果報將に近かんとする遠からじ。』爾の時に其母韋提希后、種種の藥を以て爲に之を塗るに、其瘡遂に増して降損有ると無し。王即ち母に白はく、『是の如きの瘡は心より生じて四大起に非ず。若衆生の能く治する者有りと言はば是處有る無けん。』時大臣に名を月稱と曰ふ有り。王の所に往至し、一面に在りて立ち白して言さく、『大王、何が故ぞ愁悴して顔容悦ばざる。身痛と爲んや心痛

- 【一】 第二に經の滅惡の能く歎す。之に二段あり、其中初に起惡を明す。之に亦三段ありて初に惡因。所謂身三、口四、意三の十惡因を具するなり。
- 【二】 王舎大城の阿闍世。中印度摩揭陀國都。阿闍世の譯名を王舎大城とし、阿闍世はAjitashatruの音寫にして、その國王の名、未生怨と譯す。
- 【三】 次に惡緣。
- 【四】 次に正しく造惡を明す。
- 【五】 次に深く因果を信ず。

と爲んや。』(10)王、臣に答へて言はく、『我今身心豈痛まざることを得んや。

我、父事無きに横に逆害を加ふ。我智者に従ひて曾て是の義を聞けり、世に

五人有りて地獄を脱れず、五逆罪を謂ふなりと。我今已に無量無邊阿僧祇の

罪有り。云何ぞ身心痛まざるを得んや。又良醫の我が身心を治する無けん。』

(11)臣の言さく、『大王、大いに愁苦すること莫れ。』即ち偈を説きて言さく、

『若常に愁苦すれば、愁遂に増長す、

人喜びて眠れば、眠則ち滋多有るが如く、

貪淫嗜酒も、亦復是の如し。』

『王の言ふ所の、世に五人有りて地獄を脱れざるの如き、誰か往きて之を

見、來りて王に語るや。地獄と言ふは即ち是世間の多智の者の説なり。王

の言ふ所の如き、「世に良醫の身心を治する無し」とは、今大醫有りて (12)富

蘭那と名く。一切知見し自在定を得、畢竟じて清淨梵行を修習し、常に無

邊の衆生の爲に無上涅槃の道を演説す。諸の弟子の爲に是の如きの法を説く、「黒業有ること無く、黒

業の報無し。白業有ること無く、白業の報無し。黒白業無く、黒白業の報無し。上業及以下業有ること

と無し。』是の師今王舍城の中に在り。唯願はくは大王、駕を屈して彼に往き、是の師をして身心を療

【六】次に母の塗薬。韋提希(Vividhi)は、思惟、思勝と譯す、摩揭陀國頻婆娑羅王の后。

【七】次に深く自ら悲悼す。

【八】次に滅惡の縁。之に二段あり、其中初に惡人を縁と爲すことを明す。之に又六臣に約して六段あり、文各四別あり。初に月勝の縁。之に又四別ありて先づ臣來朝して白す。

【九】月稱は梵に Candrayana といふ。

【一〇】次に王の報答。

【一一】次に王に滅罪の處を奏す

【一二】富蘭那。梵名 Jalandhara といひ、滿と譯す。

治せしむべし。』<sup>(二三)</sup>時に王答へて言はく、『審かに能く是の如く滅除せば、我當に歸依すべし。』

復一臣の名を藏徳と曰ふ有り。復王の所に往きて是の言を作さく、『大

王、何が故ぞ面貌憔悴し、唇口乾燥し、音聲微細なる猶し法人の大怨敵を  
見るが如く、顔色慘變するや。將何の苦む所ぞ、身痛と爲んや心痛と爲ん

や。』<sup>(二五)</sup>王即ち答へて言はく、『我今身心云何を痛まざらん。我の癡盲なる

慧眼有ること無し。諸の惡友に近きて親善を爲し、<sup>(二六)</sup>提婆達の惡人の言に

隨ひ、正法の王に横に逆害を加ふ。我昔會て智人の説偈を聞く、

「若父母、佛及び弟子に於て、

不善心を生じ、惡業を起さば、

是の如きの果報、阿鼻獄に在らん。』

是の事を以ての故に、我をして心怖れて大苦惱を生ぜしむ。良醫の救療

を見る有ること無けん。』<sup>(二七)</sup>大臣復言さく、『唯願はくは大王、且く愁怖す

ること莫れ。法に二種有り。一つには出家、二つには王法なり。王法とよ

謂く、其の父を害すれば則ち王の國土<sup>(二八)</sup>是逆と云ふと雖も、實に罪有ること無し。

母腹を壞りて然して後乃ち生ずるが如し。生法是の如くなれば母身を破すと雖も、實に亦罪無し。驪

【三】次に歸依を唱ふ。

【四】次に藏徳の縁、之に四段あり、其初中に臣來朝して白す。

【五】次に王の報答。

【六】提婆達多(Devadatta)。天授又は天熱と譯す。斛飯主の子、阿難の兄、佛の從弟なり。

出家して神通を學び、身に三十二相を具し、六萬の法藏を誦するも利養に驅られて三逆罪を作り、生き乍ら地獄に墮せりと傳へらる。

【七】次に王に奏して滅罪の處を明す。

【八】迦羅羅(Kalala)。雜穢と譯す。

【九】迦羅羅蟲の要す

等の懷妊も亦復是の如し。治國の法、法は是の如くなるべし。父兄を害すと雖も亦罪有ること無し。  
 出家法とは乃至蠱蝱をも殺さば亦罪有り。唯願はくは大王、意を寛うして愁ふること莫れ。何を以ての  
 故に。若し常に愁苦すれば愁遂に増長す。人喜んで眠れば眠則ち滋多きが如く、貪淫、嗜酒も亦復是の如  
 し。王の言ふ所の如き、世に良醫の身心を治する無しとは、今大師有り、(一九)末伽梨拘舍離子と名く  
 一切知見す。衆生を憐憫すること猶し赤子の如し。己に煩惱を離る、能く  
 衆生の三毒の利箭を抜く。一切衆生一切法に於て知見覺無し。唯一人獨り  
 知見覺す。是の如く大師常に弟子の爲に是の如きの法を説く。一切衆生身  
 七分有り。何等をか七と爲す。地、水、火、風、苦、樂、壽命なり。是の  
 如きの七法は化に非ず、作に非ず。毀害すべからざる、(二〇)伊師迦草の如く  
 安住不動なる須彌山の如く、不捨不作なる猶し乳酪各評訟せざるが如し。  
 若し苦、若し樂、若し善、不善、之に利刀を投ずるに傷害する所無し。何を  
 以ての故に。七分空の中妨闕無きが故に、命亦害すること無し。何を以て  
 の故に。害者及び死者有ること無きが故に。無作無受、無說無聽、念者及び以教者有ること無し。常に是の  
 法を説きて、能く衆生をして一切の無量の重罪を滅除せしむ。是の師今王舍大城に在り。唯願はくは大  
 王、其が所に往至せよ、王若見ば、衆罪消滅せん。(二一)時に王答へて言はく、『審かに能く是の如きの我が

【一九】末伽梨拘舍離子 (Mahakali-goshyariputra) 末伽梨は其の名、拘舍離は其の母の名。具さに拘舍離母の子なる末伽梨なる人の義。六師外道の一。慧琳音義に、此人を自然外道なりといへり。

【二〇】伊師迦 (Isika) 矢を作るに用ゆる堅き蘆の名。

【二一】次に歸依を唱ふ。

罪を除滅せば、我當に歸依すべし。』

復一臣有り、名を實得と曰ふ。復王の所に到り、即ち偈を説きて言さく、

『大王何が故ぞ、身瓔珞を脱し、

首髮蓬亂、乃是の如きに至る、

王身何が故ぞ、戰慄して安んぜざることを、

猶し猛風の、華樹を吹動するが如くなる。』

『王今何が故ぞ容色愁悴す、猶し農夫の種を下すの後、天雨を降さざれば

愁苦することは是の如くなるが如し。是心痛と爲ん身痛と爲んや。』 王即

ち答へて言さく、『我今身心豈痛まざることを得んや。我が父先王慈愛仁惻

して特に矜念を見る、實に過咎無し。往いて相師に問ふ。相師答へて言さ

く、『是の兒生じて定んで當に父を害すべし』と。是の話を聞くと雖も

猶瞻養せらる。曾て智者の是の如きの言を作すを聞く、若人母に通じ比丘尼を汚し、(二)僧祇物を偷み

無上菩提の心を發す人を害し、及び其の父を殺す。是の如きの人、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし』

と。我今身心豈痛まざることを得んや。』 大臣復言さく、『唯願はくは大王、且く愁苦すること莫れ。

若其父王解脱を修する者、害せば則ち罪有らん。若治國の法、殺せば則ち罪無げん。大王、非法とは

【三】次に實得の緣。之に四段あり、其中初に臣來朝して白す。

【一】次に王の報答。

【二】僧祇物(五三三三三)。僧祇は衆と譯す。即ち比丘比丘尼の大家なり。この大家の共有に係る田園房舍米穀等を僧祇物と云ふ。

【五】次に王に滅罪の處を奏するの文。



名けて無法と爲し、無法とは名けて無法と爲す、譬へば子無ければ名けて無子と爲すが如し。又惡子  
 亦無子と名くるが如し、無子と言ふと雖も實は子無きに非ず。食に鹽無ければ名けて無鹽と爲し、食若  
 鹽少きも亦無鹽と名くるが如し。河に水無ければ名けて無水と爲す、若少水有るも亦無水と名く。念  
 念滅を名けて無常と曰ふ、住ること一劫と雖も、亦無常と名くるが如し。人苦を受くるを名けて無樂  
 と爲し、少樂を受くと雖も亦無樂と名くるが如し。不自在を名けて無我と爲し、少しく自在なりと雖  
 も亦無我と名くるが如し、闇夜の時を名けて無日と爲し、雲霧の時も亦無日と言ふが如し。大王、少  
 法を名けて無法と爲すと言ふと雖も、實は法無きに非ず。願はくは王、神  
 を留めて臣が所説を聽きたまへ。一切の衆生皆餘業有り、業縁を以ての故  
 に數生死を受く。若先王をして餘業有らしむれば、王今之を害する竟に  
 何の罪か有らん。唯願はくは大王、意を寛うして愁ふること莫れ。何を以  
 ての故に、

「若常に愁苦すれば、愁遂に増長す、

人喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如く、

貪淫嗜酒も、亦復是の如し。」

王の言ふ所の如き、「世に良醫の身心を治する無し」とは。今大師有りて、  
 珊瑚耶毗羅抵子と名く。

【三】珊瑚耶毗羅抵子(Sarvajit  
 Yavakiputra)。珊瑚耶は等  
 勝と譯す、この人不須修外道  
 を宗とせり、毗羅抵と名くる  
 母の子なり。六師外道の一。

一切知見す。其の智深廣にして猶し大海の如し。大威徳有りて大神通を具す。能く衆生をして諸の疑綱を離れしむ。一切衆生知見覺せず。唯一人獨り知見覺す。今者近く王舍城に在りて住し、諸の弟子の爲に是の如きの法を説く。一切衆中若是王ならば、自在隨意に善惡を造作す。衆惡を爲すと雖も悉く罪有ること無し、火の物を燒きて淨、不淨無きが如く、王も亦是の如し、火と性を同じうす。譬へば大地の淨穢善く載す。是の事を爲すと雖も初て瞋喜無きが如く、王も亦是の如し、性と性を同じうす。譬へば水性は淨穢俱に洗ふ。是の事を爲すと雖も亦憂喜無きが如く、王も亦是の如し、水と性を同じうす。譬へば風性の淨穢等しく吹く。是の事を爲すと雖も亦憂喜無きが如く、王も亦是の如し、風と性を同じうす。秋の柷樹春は則ち還つて生ず。復柷斫すと雖も實に罪有ること無きが如く、一切衆生も亦復是の如し。此の間に還生す。還生を以ての故に當に何の罪か有るべき。一切衆生の苦樂の果報は、悉く皆現在世の業に由らず。因過去に在りて現在果を受け、現在因無ければ未來果無し。現果を以ての故に衆生戒を持す、勤修精進して現の惡業を遮す。持戒を以ての故に則ち無漏を得、無漏を得るが故に有漏業を盡す、業を盡すを以ての故に衆苦盡すことを得、衆苦盡くるが故に便ち解脱を得。唯願はくは大王、速に其が所に往き、其をして身心の苦痛を療治せしめよ。王若見ば衆罪除くことを得ん。』(三毛) 王即ち答へて言はく、『審かに是の師の能く我が罪を除く有らば、我當に歸依すべし。』

【三毛】次に歸依を唱ふ。

(二六) 復一臣の悉知義と名くる有り。復王所に至りて是の如きの言を作さく、

らざる。國を失ふ者の如く、泉の枯涸、池の蓮華無き、樹の枝葉無き、破

戒の比丘の身に威徳無きが如くなる。身痛と爲んや心痛と爲んや。」(二九) 王

即ち答へて言はく、『今我が身心豈痛無きことを得んや。我が父先王は慈惻

流念なり。而るを我不孝にして報恩を知らず、常に安樂を以て我を安樂に

す。而るを我恩に背いて反つて其の樂を斷ず。先王過無きに横に逆害を

興す。我も亦會て智者の説きて言ふを聞く、若父を害する有らば、當に無

量阿僧祇劫に於て大苦惱を受くべし』と。我今久しからずして必ず地獄に

墮せん、又良醫の我が罪を救療する無し。』(三〇) 大臣即ち言さく、『唯願はく

は大王、愁苦を放捨せよ。王聞かずや、昔者王有りて名を羅摩と曰ふ。

其の父を害し已りて王位を紹ぐことを得。(三一) 跋提大王、毗樓眞王、那曠

沙王、迦帝迦王、毗舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多

人王、是の如き等の王は、皆其の父を害して王位を紹ぐことを得たり。然

も一王の地獄に入る者無し。今現在に於て 毗瑠璃王、優陀耶王、惡性

王、鼠王、蓮華王、是の如き等の王は皆其の父を害す。悉く一王の愁惱を

『王今何が故ぞ形端嚴な

【六】 次に悉知の縁、之に四段。其中初に臣來朝して白す。

【元】 次に王報答す。

【二】 次に王に滅罪の處を奏す

【三】 羅摩 (Rama) 喜樂と譯す。

【四】 跋提 (Bhadrika) 小賢と譯す。

毗樓眞 (Vilvina) 愛樂と譯す。

【五】 那曠沙 (Nagasa) 不事火と譯す。

【六】 迦帝迦 (Kadikha) 譯、昂星に依りて名を得。

【七】 毗舍佉 (Vishika) 長養と譯す。本と星の名なり。

【八】 毗瑠璃 (Pulaha) 具瑠璃寶と譯す波斯匿王の子、末利夫人の所生なり。

【九】 優陀耶 (Udaya) 出愛と譯す、拘賤彌國の王名。

生ずる者無し。地獄、餓鬼、天中を言ふと雖も誰か見る者有らん。大王、唯二有有り。一つには人道二つには畜生なり。是の二つ有りと雖も、因縁生に非ず、因縁死に非ず。若因縁に非ざれば何ぞ善惡有らん。唯願はくは大王愁怖を懐くこと勿れ。何を以ての故に、

「若常に愁苦すれば、愁遂に增長す、

人の喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如く。

貪淫嗜酒も、亦復是の如し。」

王の言ふ所の如く、「世に良醫の身心を治する無し」とは、今大師有りて

阿耨多翅舍欽婆羅と名く。一切知見す。金と土とを觀するに平等にして

二つ無し。刀右脅を研り、梅檀左に塗る。此の二人に於て心に差別無し。

等しく怨親を視、心に異相無し。此の師眞に是世の良醫なり。若は行若は

立、若は坐若は臥、常に三昧に在りて心に分散無し。諸の弟子に告げて是の如きの言を作さく、「若は

自作、若は教他作、若は自斫、自は教他斫、若は自炙、若は教他炙、若は自害、若は教他害、若は自

偷、若は教他偷、若は自淫、若は教他淫、若は自妄語、若は教他妄語、若は自飲酒、若は教他飲酒、

若は一村、一城、一國を殺し、若は刀輪を以て一切衆生を殺す。若は恆河以南の衆生に布施し、恆河

以北の衆生を殺害す。悉く罪福無く、施戒定無し」と。今者近く王舍城に在りて住す。願はくは王速か

願はくは王速か

【三八】阿耨多翅舍欽婆羅 (Aśokaśīkhanḍinī) 無勝髮衣と譯す。現世に於て苦を受るを以て來世樂を得る所由なりと執する外道、所謂五熱炙身の苦行派なり。六師の一。

に往きたまへ。王若見ば衆罪除滅せん。』王、大臣に語りたまはく、『能く是の如き我が罪を除滅するを審かにせば、我當に歸依すべし。』

復大臣の名を吉徳と曰ふ有り。復王の所に往きて是の如きの言を作さく、『王今何が故ぞ面に光澤無くして、日中の燈の如く、晝時の月の如く、失國の君の如く、荒敗の土の如くなる。大王、今者四方清夷にして諸の怨敵無し。而も今何が故ぞ是の如く愁苦する。身苦と爲んや心苦と爲んや。諸の王子有りて常に此の念を生ず、我今何れの時か、當に自在を得べき。』大王今者已に所願を果し、自在に摩伽陀國を王領し、先王の寶藏具足して得。唯當に意を快くし情を縦にして樂を受くべし。是の如きの愁苦何に用經てか懷くや。』王即ち答へて言はく、『我今云何ぞ愁惱せざることを得ん。譬へば愚人の但其の味を貪りて利刀を見ざるが如く、雜毒を食して其の過を見ざるが如し。我も亦是の如し。鹿の草を見て深窵を見ざるが如く、鼠の食を貪りて猫狸を見ざるが如し。我も亦是の如し、現在の樂を見て未來の不善の苦果を見ず。曾て智者に從ひて是の如きの言を聞く、寧ろ一口に於て三百矛を受くとも、父母に於て一念の惡を生せず。我今已に地獄の熾火に近く、云何ぞ當に愁惱せざることを得べきや。』大臣復言さく、『誰か來りて王を誑かして地獄有りと言ふ。刺頭の尖の如き、誰か造る所ぞ。飛鳥の異色復誰か作る所ぞ。水性の

【一六】次に歸依を唱ふ。  
【一七】次に吉徳の緣、之に四段あり、其中初に臣來朝して自す。  
【一八】次に王報答す。  
【一九】次に王に滅罪の處を奏するの文。

潤澤、石性の堅硬、風の動性の如き、火の熱性の如き、一切萬物の自死自生、誰の作る所ならん。

地獄と言ふは直ちに是智者の文詞造作、地獄と言ふは何の義有りと爲す。臣當に之を説くべし。地とは地と名け、獄とは破と名く。地獄を破す、罪報有ること無し、是を地獄と名く。又復地とは人と名

け、獄とは天と名く。其の父を害するを以ての故に人天に到る。是の義を以ての故に、【三】婆藪仙人唱

へて羊を殺して人天の樂を得と言ふ。是を地獄と名く。又復地とは命と名

け、獄とは長と名く。殺生を以ての故に壽命長きことを得。故に地獄と名

く。大王、是の故に當に知るべし、實は地獄無し。大王、麥を種ゑて麥を

得、稻を種ゑて稻を得るが如く、地獄を殺す者は還つて地獄を得、人を殺

害せば還つて人を得べし。大王、今當に臣が所説を聽くべし。實に殺害無

し。若我有らば實に亦害無し、若我無ければ復害する所無し。何を以ての

故に。若我有らば常に變易せず、常住を以ての故に殺害すべからず。不破、不壞、不繫、不縛、

不瞋、不喜、猶し虚空の如し。云何ぞ當に殺害の罪有るべき。若我無ければ諸法は無常なり。無常を

以ての故に念念に壞滅す。念念滅の故に殺者、死者皆念念に滅す。若念念に滅せば誰か當に罪有るべ

き。大王、火の木を燒くに、火則ち罪無きが如く、斧の樹を斫るに斧も亦罪無きが如く、鎌の草を刈

るに鎌實に罪無きが如く、刀の人を殺すが如き、刀實に人に非ず。刀既に罪無し、人云何ぞ罪あらん。

**【四】** 婆藪(ブス)。仙人の名。婆羅門の中に始めて殺生をなし、天を祀り、生れ乍らにして地獄に墮ち、無量劫を経て華嚴菩薩の天光明力に依り地獄を脱して釋迦佛の所に詣る。佛之を讚歎し衆の爲めに其大方便力を説く。

毒の人を殺すが如き、毒實に人に非ず、毒藥罪無し、人云何ぞ罪あらん。一切萬物皆亦是の如し。實に殺害無し、云何ぞ罪有らん。唯願はくは大王、愁苦を生ずること莫れ。何を以ての故に。

「若常に愁苦すれば、愁遂に增長す、

人喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如く、

貪淫嗜酒も、亦復是の如し。」

王の言ふ所の如き、世に良醫の惡業を治する無し」とは。今大師有りて

迦羅鳩駄迦旃延と名く。一切知見す。三世を一念の頃に明了に、能く無

量無邊の世界を見る。聲を聞くも亦爾なり。能く衆生をして過惡を遠離せ

しむる、猶し恆河の若は内、若は外、有らゆる諸罪を皆悉く清淨ならしむ

が如し。是の大良師も亦復是の如し、能く衆生内外の衆罪を除く。諸の弟子

の爲に是の如きの法を説く、若人一切衆生を殺害して心に慙愧無ければ、

終に惡に墮せざる、猶し虚空の塵水を受けざるが如し。慙愧有らば即ち地

獄に入る、猶し大水の地を潤溼するが如し。一切衆生は悉く是自在天の作る所なり。自在天喜べば

衆生安樂し、自在天瞋れば衆生苦惱す。一切衆生若は罪、若は福、乃ち是自在の爲作する所、云何ぞ當

に人罪福有りと言ふべき。譬へば工匠の機關、木人の行住坐臥唯言ふこと能はざるを作すが如く、衆

【四】迦羅鳩駄迦旃延 (Karakudaka Jayasmita)。迦羅鳩駄は黑領と譯す、其の名なり。迦旃延は其の姓なり、迦旃延は剪剃、好屑等と譯す。この人の學説は亦有相亦無相なり。人間ひて法有なりやと云はば有なりと答へ、無なりやと問はば無なりと答ふ。斯く真理を多種に求め、曖昧を主義とするなり、黑領(迦羅鳩駄)の名實にこれより來る。

生も亦爾なり。自在天とは譬へば工匠の如く、木人とは衆生の身を譬ふ。是の如きの造化誰か當に罪有るべき。是の如きの大師今者近く王舍城に在りて住す。唯願はくは速かに往きたまへ。若見ることを得ば衆罪消滅せん。』王即ち答へて言はく、『是の人能く我が罪を滅する有るを審かにせば、我當に歸依すべし。』

復一臣に無所畏と名くる有り。王の所に往至して是の如きの言を説く、  
 『大王、世に愚人有り、一日の中に百喜百愁、百眠百寤、百驚百哭す。  
 有智の人悉く是の事無し。大王何が故ぞ憂愁是の如くなる。侶を失へる客の如く、深泥に墮して救拔する者無きが如く、人の渴乏して漿水を得ざるが如く、猶し迷人の導師有ること無きが如く、困病の人醫の救療無きが如く、海船破れて救接する者無きが如し。大王今者身痛と爲すや心痛と爲すや。』

王即ち答へて言はく、『我今身心豈痛まざることを得んや。我悪友に近き口過を觀す。先王罪無きに横に逆害を興す。我今定んで知んぬ、當に地獄に入るべし。復良醫の救濟を見る無けん。』  
 臣即ち白して言さく、『唯願はくは大王、愁毒を生ずること莫れ。夫利利とは名けて王種と爲す。若し國土の爲、若し沙門及び婆羅門の爲、人民を安んせんが爲には復殺害すと雖も罪有ること無きなり。先王復沙門を恭敬すと雖も諸の婆羅門に承事すること能はず、

【四三】次に歸依を唱ふ。

【四四】次に無畏の緣、之に四段あり、其中初に臣來朝して白す。

【四五】次に王報答す。

【四六】次に王に滅罪の處を奏するの文。

【四七】利利、具さに利帝利(クシヤトリヤ)といひ、田種と譯す。王族なり。

我今定んで知んぬ、當に地獄に入るべし。復良醫の救濟を見る無けん。』

利利とは名けて王種と爲す。若し國土の爲、若し沙門及び婆羅門の爲、人民を安んせんが爲には復殺害すと雖も罪有ること無きなり。先王復沙門を恭敬すと雖も諸の婆羅門に承事すること能はず、



心に平等無し。無平等の故に則ち刹利に非ず。大王今者、諸の婆羅門を供養せんと欲するが爲に先王を殺す。當に何の罪か有るべき。大王、實は殺害無し。夫殺害とは壽命を殺害す。命は風氣を名く、風氣の性は斬害すべからず、云何ぞ命を害せん。當に罪有るべきや。唯願はくは大王、復愁苦すること莫れ。何を以ての故に。

「若常に愁苦すれば、愁遂に增長す、

人喜びて眠れば、眠則滋多きが如し、

貪淫嗜酒も、亦復是の如し。」

王の言ふ所の如き、「世に良醫の能く療治する無し」とは。今大師有つて尼毘若提子と名く。一切知見し衆生を憐憫す。善く衆生の諸根の利鈍を知り、一切の隨宜方便を達解し、世間の八法汙すこと能はず。寂靜にして清淨、梵行を修習す。諸の弟子の爲に是の如きの言を説く、施無く善無く、父無く母無し。今世、後世無く、阿羅漢無く、修無く道無し。一切衆生八萬劫を経れば、生死輪に於て自然に脱することを得。有罪、無罪、悉く亦是の如し。四大河の如く、所謂辛頭、恆河、博叉、私陀なり。悉く大海に入りて差別有ること無し。一切衆生も亦復是の如く、解脱を得る時悉く差別無し」と。是の

【五〇】 尼毘若提子 (Nirbhīṣṭi) 六師外道の本師をいふ。尼毘は苦行外道の總名、若提は本師の母の名、其の子を若提子といふ。  
【五一】 四大河。瞻部洲の中池たる阿耨達池 (Anavatāpī) より出づる河。この中、  
辛頭 (Sindhu) は池の南面より西南海に出づ。  
恆河 (Gangā) は池の東面より東南海に出づ。  
博叉 (Yakṣu) は池の西面より西北海に出づ。  
私陀 (Śītā) は池の北面より東北海に出づ。

師今王舍城に在りて住す。唯願はくは大王、速かに其の所に往きたまへ。若見ることを得ば衆罪消除せん。王即ち答へて言はく、一是の師能く我が罪を除く有るを審かにせば、我當に歸依すべし。

爾の時に大醫ありて名を耆婆と曰ふ。王の所に往至して白して言さく、大王安眠を得るや否や。王偈を以て答へたまはく、

『若能く永く、一切の諸の煩惱を斷じ、染三界を貪らざる有らば、乃ち安隱に眠ることを得ん。』

若大涅槃を得、甚深の義を演說せば、眞の婆羅門と名く、乃ち安隱に眠ることを得ん、

身に諸の惡業無く、口に四過を離れ、心に疑網有ること無ければ、乃ち安隱に眠るを得ん、

身心に熱惱無く、寂靜の處に安住し、無上の樂を獲致すれば、乃ち安隱に眠るを得ん、

【五二】次に歸依を唱ふ。

【五三】次に善人を緣と爲すことを明す。之に二段あり、其中初に兄・之に又四段ありて初に耆婆問ふ。

【五四】耆婆。梵名 Jivaka の音寫、此に圓活と譯す。初生のとき一手に藥囊を把り、一手に針筒を把る、これ昔の本願醫となりて人を救はむとなり。耆婆女の子と云ふ。已上

安註による。

【五五】次に王答ふ。之に三段あり、其中初に泛く安隱者を明す。之に四段あり、其中初に佛安眠を得るを明す。其中先づ生死を離れて涅槃を得るを明す。安註に曰く、佛實は眠なし、今義說するのみと。

【五六】次に感應を離れて常住を得るを明す。

〔五三〕 心に取著有ること無く、諸の怨讎を遠離し、

常に和して諍訟無ければ、乃ち安隱に眠るを得ん、

若悪業を造らず、心に常に慙愧を懐き、

悪に果報有るを信ずれば、乃ち安隱に眠るを得ん、

父母を敬養し、一生命を害せず、

他の財物を盗まざれば、乃ち安隱に眠るを得ん、

諸根を調伏し、善知識に親近し、

四魔衆を破壊すれば、乃ち安隱に眠るを得ん、

吉不吉、及び苦樂等を見ず、

諸の衆生の爲の故に、生死に輪轉す、

若能く是の如くならば、乃ち安隱に眠るを得ん、

〔五四〕 誰か安隱に眠ることを得る、所謂諸佛是れなり、

深く空三昧を觀じて、身心安んじて動せず、

〔五五〕 誰か安隱に眠ることを得る、所謂慈悲者なり、

常に不放逸を修し、衆を見ること一子の如し、

【五七】 次に菩薩安眠を得ること  
を明す。

【五八】 次に佛を結す。

【五九】 次に菩薩を結す。

〔三〇〕衆生無明冥くして、煩惱の果を見ず、

常に諸の惡業を造り、安隱に眠るを得ず、

若自己、及以他人の身の爲に、

十惡業を造作すれば、安隱に眠るを得ず、

若樂の爲の故に、父を害する過咎無しと言はば、

惡知識に隨順す、安隱に眠るを得ず、

〔三一〕若食節度に過ぎ、冷飲して過差す、

是の如くなれば則ち病苦、安隱に眠るを得ず、

若王に於て過有りて、他の婦女を邪念し、

及び曠路を行かば、安隱に眠るを得ず、

持戒果未だ熟せず、太子未だ位を紹がず、

盜者未だ財を獲ざれば、安隱に眠るを得ず。』

〔三二〕若婆、我今病重し。正法王に於て惡逆害を興す。一切の良醫、妙藥、呪術、善巧の瞻病も治する

こと能はざる所なり。何を以ての故に。我が父法王如法に國を治む。實に過咎無きに横に逆害を

加ふ。魚の陸に處るが如く、當に何の樂か有るべき。鹿の彌に在りて初て歡心無きが如く、人自ら命

〔三二〕次に泛く不安眠者を明す、之に二段 其中初に法説。

〔三一〕次に譬説。

〔三二〕次に正しく王の安眠を得ざるを明す。之に二段あり、

其中初に標。之に病重、無醫を標するの二段あり。

〔三三〕次に釋。之に二段あり、

其中に病重きを釋す。

日を終らざるを知るが如く、王の國を失ひて他土に逃避するが如く、人の病療治すべからずと聞くが如く、破戒者の罪過を説くを聞くが如し。我昔曾て智者の説きて言ふを聞くに、身に意義若し清淨ならざれば、當に知るべし、是の人は必ず地獄に墮せん。我今是の如し、云何ぞ當に安隱に眠ることを得べきや。 畜 今我に又無上大醫の法藥を演説して、我が病苦を除く無し。』

【畜】 次に醫無きを釋す。

世尊常に是の言を説きたまふ、「二つの白法有りて能く衆生を救ふ。一つには慙、二つにて愧なり。慙とは自ら罪を作らず、愧とは他を教へて作らしめず。慙とは内自ら羞恥し、愧とは發露して人に向ふ。慙とは人に羞ぢ、愧とは天に羞づ。是を慙愧と名く。慙愧無き者は名けて人と爲さず、名けて畜生と爲す。慙愧有るが故に則ち能く父母、師長を恭敬し、慙愧有るが故に父母、兄弟、姉妹有り」と説きたまへり。善哉大王、具さに慙愧あり。大王且く聽きたまへ。臣、佛説を聞くに、智者に二有り。一つには諸惡を造らず、二つには作り已りて懺悔す。愚者にも亦二。一つには作罪、二つには覆藏なり。先に惡を作ると雖も、後能く發露し悔し已りて慙愧して更に敢て作らず。猶濁水、之に明珠を置かば、珠の威力を以て水即ち清と爲るが如く、亦雲除れば月則ち清明なるが如く、作惡能く悔するも亦復是の如し。王若懺悔し慙愧を懷

かは、罪則ち除滅して清淨本の如し。大王、富に二種有り。一つには象馬種種の畜生、二つには金銀種種の珍寶なり。象馬多しと雖も一珠に敵せず。大王、衆生も亦爾なり。一つには惡富、二つには善富なり。多く諸惡を作るは一善に如かず。臣佛説を聞くに、一つの善心を修すれば百種の惡を破すと。大王、少金剛の能く須彌を壞するが如く、亦少火の能く一切を燒くが如く、少毒藥の能く衆生を害するが如し、少善も亦爾なり、能く大惡を破す。少善と名くと雖も、其實は是大なり。何を以ての故に。大惡を破するが故なり。大王、佛の所説の如く、覆藏する者は漏、覆藏せざる者は則ち漏有ること無し。發露して過を悔す。是の故に漏ならず。若衆罪を作り覆せず藏せざれば、不覆を以ての故に罪則ち微薄なり。若悔して慙愧すれば罪則ち消滅す。大王、水滲微なりと雖も漸く大器に盈つるが如く、善心も亦爾なり。一一の善心能く大惡を破す。若罪を覆すれば罪則ち増長し、發露慙愧すれば罪則ち消滅す。是の故に諸佛、有智の者は罪を覆藏せずと説く。善哉大王、能く因果を信じ、業を信じ、報を信す。唯願はくは大王、愁怖を懷くこと莫れ。

若衆生有りて諸罪を造作し、覆藏して悔せず心に慙愧無く、因果及以業報を見ず。有知の人に咨啓すること能はず、善友に近かず。是の如き人は一切良醫、乃至臍病の治すること能はざる所なり、

(五) 迦摩羅病の世醫手を拱ぐが如し。覆罪の人も亦復是の如し。

(六) 云何が罪人一闍提と謂ふ。一闍提

【六】 次に他は五徳無きが故に罪重きことを明す。  
 【六七】 迦摩羅(カモラ)は、黄病と譯す、所謂癩病なり。  
 【六八】 次に五徳無きに就て一闍提を結す。

とは因果を信せず、慙愧有ること無く、業報を信せず、現在及び未來世を見ず、善友に親まず、諸佛所説の教戒に随はず。是の如きの人を一闍提と名く。諸佛世尊の能く治せざる所。何を以ての故に。世の死屍、醫の治すること能はざるが如く、一闍提の者も亦復た是の如し。諸佛世尊の治すること能はざる所なり。大王今一闍提に非ず、云何ぞ救療すべからずと言ふ。

(七〇)

王の言ふ所の如く「能く治する無し」とは。大王當に知るべし、迦毗羅城

の淨飯王の子、姓は瞿曇氏、悉達多と字す。師無くして覺悟し、自然に

して阿耨多羅三藐三菩提を得、三十二相、八十種好其の身を莊嚴し、十力、

四無所畏を具足し、一切知見す。大慈大悲一切を憐憫すること羅睺羅の如

し。善く衆生に隨ふこと犢の母を逐ふが如し。時を知りて説き、時に非ざ

れば語らず。實語、淨語、妙語、義語、法語、一語、能く衆生をして永く

煩惱を離れしむ。善く衆生の諸根心性を知り、隨宜方便して通達せざる

無し。其の智高大なること須彌山の如く、深遠廣遠なること猶し大海の如し。是の佛世尊金剛智有り

て能く衆生は一切の惡罪を破す。若不能と言はば是の處有ること無けん。今者此を去ること十二一由

旬、拘尸城の娑羅雙樹の間に在りて、廣く無量阿僧祇等の諸菩薩僧の爲に種種の法を演ず。若は有、

【六九】次に王に五徳有るに由り一闍提に非ざるを結す。

【七〇】次に王に醫藥を示す。之に二段あり、其中初に良醫を示す。

【七一】淨飯王（Suddhodana）釋尊の父王なり。

【七二】次に妙藥を示す。之に二段あり、其中初に知根を明す。

【七三】次に説法を明す。之に二段あり、其中初に總説。

【七四】次に別説。之に二法、三法に約するの二段あり。二法の文の中、有無は即ち眞俗二諦その他は准知すべし。三法の文は三諦を明す文なり。

若は無。若是有爲、若は無爲。若是有漏、若は無漏。若は煩惱果、若は善法果。若は色法、若は非色法、若は非色非非色法。若は我、若は非我、若は非我非非我。若は常、若は非常、若は非常非非常。

若は樂、若は非樂、若は非樂非非樂。若は相、若は非相、若は非相非非相。

若は斷、若は非斷、若は非斷非非斷。若は世、若は出世、若は非世非出世。

若は乘、若は非乘、若は非乘非非乘。若は自作自受、若は自作他受、若は無作無受なり。大王、若當に佛所に於て無作無受を聞くべし。有らぬ重罪は即ち當に消滅すべし。

(七五)

王今且く聽きたまへ。釋提桓因命將に終らんと欲して五相有りて現

す。一つには衣裳垢膩、二つには頭上華萎、三つには身體臭穢、四つには腋下汗出、五つには本座を樂まず。時に天帝釋或は靜處に於て、若は沙門、若は婆羅門を見ば即ち其の所に至りて佛想を生ず。爾の時に沙門及び婆羅門、帝釋の來るを見て深く自ら慶幸して即ち是の語を説かく、「天主我今汝に歸依す。釋是を聞き已りて乃ち佛に非ざるを知り、復自ら念言すらく、「彼若佛に非ざれば我が五没の相を治すること能はず。」是の時御臣を一般遮戸と名く。帝釋に語りて言さく、(七七) 橋戸迦、乾闥婆を敦浮樓と名く。其の王女有りて須跋陀と字す。王若能く此の女を以て與へたは、臣當

【七五】次に佛所に往くを勸む之に三段 其中初に廣く昔の十三事を引いて勸む 之には二段、初に正しく事を列す

【七六】般遮戸 (Pāṇḍarikā) 五婁と譯す。

【七七】橋戸迦 (Kāśhika) 童兒と譯す、帝釋の姓に名づく。乾闥婆 (Gandharva) は香陰と譯す、樂神なり。巧みに機關を巧作す、故に彼を敦浮樓(今日の盛氣樓)と字す

【七八】須跋陀は梵名 須跋陀 (Sudatta) 善賢と譯す。

一 橋戸迦、



王に衰相を除くの處を示すべし。」釋即ち答へて言さく、「善男子、毗摩質多阿脩羅王に女有り  
 舍脂といふ。是我が所敬たり。卿若必ず能く吾に惡相を消滅する處を示さば、猶當に相與ふべし。  
 (八〇) 況や須跋陀をや。」橋戸迦、佛世尊有り (八一) 釋迦牟尼と字す。今者王舍大城に在り。若能く彼に往い  
 て未聞を咨稟せば、衰沒の相必ず除滅を得ん。善男子、若佛世尊、密かに  
 能く滅せば、便ち駕を回らして其の住處に至るべし。」御臣命を奉して即ち  
 車乘を回らして王舍城の耆闍崛山に到る。佛所に至りて頭面に足を禮し御  
 つて一面に住す。釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、天人の中誰か繫縛  
 を爲す。」答へて言さく、「橋戸迦、慳貪嫉妬。又言さく、「慳貪嫉妬、何に因  
 りてか生ず。」答へて言はく、「無明に因りて生ず。」又言さく、「無明復何に因  
 りてか生ず。」答へて言はく、「放逸に因りて生ず。」又言さく、「放逸復何に因  
 りてか生ず。」答へて言はく、「顛倒に因りて生ず。」又言さく、「顛倒復何に因  
 りてか生ず。」答へて言はく、「疑心に因りて生ず。」世尊、顛倒の法疑心に  
 因りて生ずとは、實に佛教の如し。何を以ての故に。我疑心有り。疑心を  
 以ての故に則ち顛倒を生じ、非世尊に於て世尊の想を生ず。我今佛を見て疑網即ち除く、疑網除くが  
 故に顛倒も亦盡く。顛倒盡くるが故に慳心、乃至妬心有ること無し。」佛の言はく、「汝慳妬の心有るこ

【七九】毗摩質多(Vimachita)。淨心と譯す、阿脩羅王の名。乾闥婆の女を娶つて舍脂王女を生み、帝釋に嫁せしむ。即ち帝釋の舅なり。  
 【八〇】舍脂(Shachi)。可愛又は研の義。  
 【八一】釋迦牟尼(Shakyamuni)。釋迦は能仁と譯す、姓なり。刹帝利種の一族にして本と摺曇氏と稱し、後に分族して釋迦氏と稱す。牟尼は、寂默と譯す。内外の諸聖を尊稱せる名。

と無しと言ふは、汝今已に阿那含を得るや。阿那含の者は貪心有ること無し。若貪心無ければ、云何ぞ命の爲に我が所に來至する。阿那含の如きは實に命を求めず。」「世尊顛倒有りとせば則ち命を求むること有り。顛倒無ければ則ち命を求めず。然るに我今者實は命を求めず。求めんと欲する所の者は唯佛法身、及び佛智慧なり。」「憍尸迦、佛法身、及び佛慧を求むれば、將來の世必ず當に之を得べし。」「爾の時に帝釋、佛説を聞き已りて五衰沒相即時に消滅す。便ち起ちて禮を作し、佛を繞ること三市し、恭敬合掌して佛に白して言さく、世尊、我今即死即生し、命を失し命を得。佛に従ひて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと記するを聞く。是を更生と爲す、更に命を得と爲す。世尊、一切の人天云何が増益せん。復何の縁を以てか損滅を致す。」「憍尸迦、鬪諍の因縁、人天損滅す。善く和敬を脩すれば則ち増益を得。」「世尊、若鬪諍を以て損滅せば、我今日より更に復阿脩羅と戦はず。」「佛の言はく、「善い哉善い哉憍尸迦、諸佛世尊、忍辱法是阿耨多羅三藐三菩提の因と説く。」「爾の時に釋提桓因即ち前みて佛を禮し、是に於て還去す。

大王如來能く、諸の惡相を除くを以て、是の故に佛を不可思議と稱す。王若往者有する所の重罪必ず當に除くことを得べし。

大王且く聽きたまへ。婆羅門の子有り、字を不害と曰ふ。無量の諸の衆生を殺すを以ての故に、(八三) 鷲

【八三】 鷲鳴處 (Arjunimṛtyu)。  
指臺と譯す、佛在世當時舍衛國に住せし人。

囉魔と名く。復母を害せんと欲し、惡心起る時身も亦隨ひて動ず。身心動ずる者、即ち五逆の因なり。五逆の因の故に必ず地獄に墮す。後佛を見たてまつる時、身心俱に動じて復害を生せんと欲す。身心動ずる者、即ち五逆の因なり。五逆の因の故に當に地獄に入るべし。是の人如來大師に遇ふことを得て、即時に地獄の因縁を滅し、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得。是の故に佛を稱して無上の醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、復須毗羅王子有り。其の父之を瞋り其の手足を截りて之を深井に推す。其の母矜憫して人をして牽出せしめ、將而佛所に至る。即ち佛を見たてまつるの時手足還つて具はる。便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。大王、佛を見たてまつるを以ての故に現果報を得。是の故に佛を稱して無上醫と爲す。六師に非ざるなり。

【六三】須毗羅(スギーラ)好勇と譯す。

大王、恆河の邊に諸の餓鬼有り、其の數五百なり。無量歲に於て初て水を見ず。河上に至ると雖も純ら流水を見、饑渴に逼られて發聲號哭す。爾の時に如來、河側の鬱曇鉢林に在りて一樹の下に坐す。時に諸の餓鬼、佛所に來至して白して言さく、「世尊、我等饑渴して命將に久しからざらんとす。」佛の言はく、「恆河の流水何が故を飲まざる。」諸鬼答へて言さく、「如來は水を見たまひ、我は則ち火を見る。」佛の言はく、「恆河の清流實に火に非ざるなり。汝が惡業の故に心自ら顛倒し、謂つて是火と爲す。我當に汝が爲に顛倒を除滅して、汝をして水を見しむべし。」爾の時に世尊、廣く諸鬼の爲に

饑餓の過を説きたまふ。諸鬼復言さく、「我今渴乏して法言を聞くと雖も都て心に入らず。佛の言はよく、

汝若渴乏せば、先河に入りて意を恣にして之を飲むべし。是の諸鬼等、佛力を以て 故に即ち水を

飲むことを得。既に水を飲み已りて、如來復爲に種種に法を説きたまふ。既に法を聞き已りて悉く阿

耨多羅三藐三菩提の心を發し、餓鬼の形を捨てて天身を得るが如し。大王、是の故に佛を稱して無上

譽と爲す。六師に非ざるなり。

大王、舍婆提國に羣賊五百あり。波斯匿王其の目を挑出す。前導有ること無ければ往いて佛所に

至ることを得ること能はず。佛憐憫の故に即ち其の前に到り、之を慰諭し

て言はく、「善男子、善く身口を護り、更に惡を造ること勿れ。諸賊、爾の

時に如來の音の微妙清徹なるを聞き、尋いで還つて眼を得。即ち佛前に於

て合掌して佛を禮し、佛に白して言さく、「世尊、我今佛の慈心普く一切衆生を覆ひ、獨人天に非ざる

を知りたてまつる。爾の時に如來、即ち爲に法を説きたまひ、既に法を説き已りて悉く阿耨多羅三藐

三菩提の心を發す。是の故に如來は眞に是世間無上の良醫、六師に非ざるなり。

大王、舍婆提國に旃陀羅の名を氣驢と曰ふ有り。無量の人を殺す。佛の弟子大目犍連を見、即時に地

獄の因縁を破ることを得、三十三天に上生することを得たり。是の如きの學弟子有るを以ての故に、

佛如來を稱して無上譽と爲す。六師に非ざるなり。

【八四】 舍婆提國に波斯匿王あり。前導有ること無ければ往いて佛所に至ることを得ること能はず。佛憐憫の故に即ち其の前に到り、之を慰諭して言はく、「善男子、善く身口を護り、更に惡を造ること勿れ。諸賊、爾の時に如來の音の微妙清徹なるを聞き、尋いで還つて眼を得。即ち佛前に於て合掌して佛を禮し、佛に白して言さく、「世尊、我今佛の慈心普く一切衆生を覆ひ、獨人天に非ざるを知りたてまつる。爾の時に如來、即ち爲に法を説きたまひ、既に法を説き已りて悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の故に如來は眞に是世間無上の良醫、六師に非ざるなり。」

大王、波羅奈城に長者子の阿逸多と名くる有り。其の母に通ずるが故に其の父を殺す。母更に外通し、尋いで復之を害す。阿羅漢有り是其の知識なり。此の知識に於て愧恥を生じて即便之を殺す。殺し已りて即ち祇洹精舎に到りて出家を求欲す。時に諸の比丘、具さに此の人に三逆罪有るを知り、敢て聽す者無し。聽さざるを以ての故に倍瞋恚を生じ、即ち其の夜に於て大いに猛火を放ちて僧坊を焚燒し、多く無辜を殺す。然して後復王舎城の中に往き、如來の所に至りて出家を求哀す。如來即ち聽し、與に法要を説きたまふ。其が重罪をして漸漸に輕微にし、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。是の故に佛を稱して世の良醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、本性暴惡にして惡人を信受し、提婆達多大醉象を放ちて佛を踐ましめんと欲す。象既に佛を見て即時に醒悟す。佛便ち手を伸べて其の頂上を摩で、復爲に法を説きて悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得しむ。大王、畜生佛を見たてまつる、猶畜生の業果を破壞することを得。況や復人をや。大王當に知るべし、若佛を見たてまつる者は、有らゆる重罪必ず當に滅することを得べし。

大王、世尊未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるの時、魔無量無邊の眷屬と菩薩の所に至る。菩薩、爾の時に忍辱力を以て魔の惡心を壞し、魔をして法を受け、尋いで阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。佛は是の如きの大功徳力を有したまふ。

【八五】阿逸多(アジタ)。無能勝と譯す。

大王、(八)曠野鬼有りて多く衆生を害す。如來、爾の時に善賢長者の爲に曠野村に至り、其が爲に法を説きたまふ。時に曠野鬼法を聞きて歡喜し、即ち長者を以て如來に授く。然して後便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

大王、波羅奈國に屠兒の名を廣額と曰ふ有り、日日の中に於て無量の羊を殺す。舍利弗を見て即ち八戒を受け、一日夜を經。是の因縁を以て命終して北方天王 毗沙門の子と爲ることを得たり。如來の弟子尙是の如きの大功德果有り。況や復佛をや。

大王、北天竺に城有りて名を細石と曰ひ、其の城に王有りて名を龍印と曰ふ。國を貪り位を重んじて其の父を殺す。其の父を殺し已りて心に悔恨を生ず。即ち國政を捨て、佛所に來至して出家を求哀す。佛善來と言ひ、即ち比丘と成す。重罪消滅して阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。大王、當に知るべし、佛是の如きの無量の 大功德果有り。

大王、如來弟子の提婆達多有りて衆僧を破壞し、佛身の血を出し、蓮華比丘尼を害し、三つの逆罪を作す。如來爲に種種の法要を説き、其が重罪をしで尋いで微薄を得しむ。是の故に如來を大良醫と爲す。六師に非ざるなり。

(八) 大王、若能く臣が語を信じたまはし、唯願はくは速かに往いて如來の所に至りたまへ。若信せら

【八六】曠野鬼。梵語 Atyavaka (アータワカ)。  
【八七】毗沙門 (Vishavanna) は、多聞と譯す、所謂多聞天なり。護法の神格と施福の神格とな兼ぬ。  
【八八】次に總じて證の意を結す。

れざれば願はくは善く之を思ひたまへ。 (六九) 大王、諸佛世尊は大悲普く覆ひて一人に限らず。 正法弘

廣して包まざる所無し。 怨親平等にして心に憎

愛無し。 終に偏へに一人の爲に阿耨多羅三藐三

菩提を得しめて、餘人は得ざるにあらず。 如来

獨四部の師なるに非ず。 普く是一切天、人、龍、

鬼、地獄、畜生、餓鬼等の師なり。 一切衆生も

亦當に佛を視たてまつること父母の想の如くす

べし。 大王當に知るべし、如来但獨尊貴の 跋

提迦王の爲に法を演説するにあらず、亦下賤の

(七〇) 優波離等の爲にす。 獨偏へに 須達多阿那

邠坻の奉する所の供養を受くるにあらず、亦貧

人の須達多が食を受く。 但獨舍利弗等の利根

の爲に法を説くにあらず、亦鈍根の 周利槃特

の爲にす。 但獨大迦葉等無貪の性出家して道を求むるを聽すにあらず。 亦大貪の難陀の出家を聽す。

但獨煩惱薄き者、(七一) 優樓頻螺迦葉等の出家求道を聽すにあらず、亦煩惱深厚にして重罪を造る者波斯

【六九】 次に佛心平等を明して勸む。

【七〇】 跋提迦(Pratichya)。 小賢と譯す。

【七一】 優波離(Upper)。 近取、近執と譯す。 悉達太子の執事たりし人。

【七二】 須達多(Mudatta)。 善與と譯す、給孤獨長者の本名。

阿那邠坻(Anandibhaddiya)は、給孤獨と譯す。 長者に七子あり、並びに佛法を信ぜず。 長者之を悲しき、各子に金千兩を與へて佛處に詣てしめ、佛の教を蒙て正法に歸せしむ。

【七三】 周利槃特(Suddhipantha)は、小路と譯す。 兄弟二人あり。 父母旅行し中路にして長子を擧ぐ、槃特と稱す。 後また路上に一子を設く、是れ則ち周利槃特なり。 槃特は路の義、周利槃特は小路の義なり。

【七四】 優樓頻螺迦葉(Uthupinhalaya)は、木瓜と譯す。 迦葉は飲光と譯す。 歸佛前より五百人の弟子を有せる外道論師なりしが、佛を毒蛇窟に導き而かも害することを得ず。 二弟及び弟子と共に佛に歸す。 三迦葉の一。

【七五】 難陀(Nanda)の出家を聽す。

【七六】 波斯(Bharata)の出家を聽す。

【七七】 重罪を造る者波斯

【七八】 重罪を造る者波斯

【七九】 重罪を造る者波斯

【八〇】 重罪を造る者波斯

【八一】 重罪を造る者波斯

【八二】 重罪を造る者波斯

【八三】 重罪を造る者波斯

【八四】 重罪を造る者波斯

【八五】 重罪を造る者波斯

【八六】 重罪を造る者波斯

【八七】 重罪を造る者波斯

匿王の弟 修陀耶が出家求道を聽す。莎草の恭敬供養するを以て其の瞋根を抜き、驚嚇魔羅の惡心を害せんと欲すれば捨てて救はざるにあらす。但獨有智の男子の爲に法を演説するにあらす、亦極愚判

合婚者女人の爲に法を説く。但獨出家の人をして四道果を得しめず、亦在家をして三道果を得しむ。但獨 富多羅等 諸の忽務を捨て、閑

寂にして思惟するが爲に法要を説かず、亦 頻 婆娑羅王等の國事を統領して王務を理する者の爲に法要を説く。但獨 斷酒の人の爲にせず、亦

酒に耽る 郁伽長者荒醉者の爲に説く。但獨 禪定に入る者 離婆多等の爲にせず、亦子を喪ひて亂心せる婆羅門の女 波斯吒が爲に説

く。但獨己が弟子の爲にせず、亦外道 尼毘子の爲に説く。但獨 盛壯の年二十五の者の爲にせず、亦衰老八十の者の爲に説く。但獨 根熟の人の爲にせず、亦善根未熟者の爲に説く。但獨

夫人の爲にせず、亦淫女蓮華女の爲に説く。但獨 波斯匿王の上饌甘味を受けず、亦長者 尸利迦多

答へたりとぞ。

富多羅 (Indra) 譯、像。

頻婆娑羅 (Prishvara)。

影堅、影勝と譯す、佛在世當時の摩竭陀國王の名。深く佛法に歸し善根を積むと多かりしも其の王子阿闍世の爲めに無道に幽閉せられ、窟中阿那含果を得て死せり。

郁伽 (Yuga) 功徳又は威徳と譯す。具に都迦羅越と云ふ、舍衛國の長者の名。

末利 (Mallika) 譯す、二十八宿中室宿の名なり。星を前して得たる子なるが故に此の名あり。

波斯吒 (Pishita) 此の婆羅門の母六子を喪つて狂亂し體形馳走す。世尊に見みえて本心に返り三歸を受く。

尸利迦多 (Shrikadha) 吉護と譯す、王舍城の長者の名なり。

尼毘子 (Nivrtti) 譯す、波斯匿王の后の名。末利華の園にて得たる夫人なれば此の名あり。

尸利迦多 (Shrikadha) 吉護と譯す、王舍城の長者の名なり。



が雜毒の食を受く。大王當に知るべし、尸利鞠多往昔亦逆罪の因を作り、佛に遇ひ法を聞くを以て即ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

〔一〇三〕大王、假使一月常に衣食を以て一切衆生に供養し恭敬せんも、人有りて一念に佛を念ずる所得の功德の十六分の一に如かず。大王、假使金を鍛へて人を爲り、車馬に寶を載す、其の數各百、以て布施すとも、人有り發心して佛に向ひ、舉足一步するに如かず。大王、假使復象車百乘を以て大秦國の、種種の珍寶を載せ、及び其の女人、身に瓔珞を佩ぶ、數亦百に滿つるを用て布施せんも、猶故發心して佛に向ひ舉足一步するに如かず。復是の事を置き、若し四事を以て三千大千世界の有らゆる衆生に供養せんも、猶亦發心して佛に向ひ舉足一步するに如かず。復是の事を置き、若大王をして恆河沙等の無量の衆生を供養し恭敬せしむとも、一たび娑羅雙樹に往き、如來の所に到りて誠心に法を聽かんに如かず。』

一〇四

爾の時に大王、善婆に答へて言はく、『如來世尊、性已了に調柔なり。故に調柔を得て以て眷屬と爲す。梅檀林の純ら梅檀を以て圍繞を爲すが如く、如來清淨にして有らゆる眷屬も亦復清淨なり。猶し大龍の純ら諸龍を以て眷屬と爲すが如く、如來寂靜にして有らゆる眷屬も亦復寂靜なり。如來無貪にして有らゆる眷屬も亦復無貪なり。佛煩惱無く、有らゆる眷屬も亦煩惱無し。吾今既に是極惡の人、惡業纏裏し、其の身臭穢にして地獄に繫屬す。云何ぞ當に如來の所に至ることを得べき。吾

【一〇三】次に福勝るを格量す。  
【一〇四】次に歸敬して未だ信從せず。

設し往かば、必ず願念し、接緒言說せじ。卿吾を勸めて佛所に往かしむと雖も、然も吾今日深く自ら鄙悼して都て去心無げん。』

爾の時に空中尋いで聲を出して言はく、『無上の佛法將に衰殄せんとし、甚深の法河今に於て涸れんと欲す。大法明燈將に滅せんとする久しからじ。法山頽れんと欲し、法船没せんと欲す。法橋壞れんと欲し、法殿崩れんと欲す。法幢倒れんと欲し、法樹折れんと欲す。善友去らんと欲し、大怖將に至らんとす。法餓の衆生將に至らんとするこ

と久しからじ。煩惱の疫病將に流行せんと欲す。大闇時至り渴法時到る。魔王欣慶して甲冑を解釋し、佛日將に大涅槃の山に没せんとす。大王、佛若世を去りたまはば王の重惡更に治する者無げん。』

地獄極重の惡を造る。是の業縁を以て必ず受くること疑はじ。大王、阿とは無と言ひ、鼻とは閉と名く。閉に暫樂無きが故に無閉と名く。大王、假使一人獨るの獄に墮すとも其の身長大にして八萬由旬なり。其の中に徧滿して閉に空處無く、其の身周帀して種種の苦を受く。設ひ多人有るも身亦徧滿して相妨闕せず。大王、寒地獄中暫く熱風に遇はば、之を以て樂と爲し、熱地獄中暫く寒風に遇はば亦以て樂と爲す。地獄の中設ひ命終し已るに、若活聲を聞かば即便還活する有り、阿鼻地獄にて都て此の事無し。大王、阿鼻地獄の四面に門有り、一一の門外に各猛火有り。

【一〇五】次に父王を縁と爲す。之に四段あり、其中初に空中聲を出す。之に又三段ありて初に佛法將に滅せんとするが故に勤む。  
【一〇六】次に罪重くして必ず地獄を招くが故に勤む。

東、西、南、北、交過通徹す。八萬由旬周布して鐵牆あり。鐵網彌覆し、其の地亦鐵なり。上火下に徹し、下火上に徹す。大王、魚の鱗に在りて脂膏焦然するが若く、是の中の罪人も亦復是の如し。大王、一逆を作る者則便具きには是の如きの一罪を受く。若二逆を造らば罪則ち二倍し、五逆具する者は罪も亦五倍す。(二〇七) 大王、我今定んで王の惡業必ず免るることを得ざるを知る。唯願はくは大王、速かに佛所に往きたまへ。佛世尊を除きて餘の能く救ふもの無し、我今汝を憫むが故に相勸導す。』

(二〇八) 爾の時に大王、是の語を聞き已りて心に怖懼を懷き、身を舉げて戰慄し、五體掉動すること芭蕉樹の如し。仰いで問うて曰はく、「天は是誰とか爲す。色像を現せずして而も但聲有り。」(二〇九) 大王、吾は汝が父頻婆娑羅なり。汝今當に瞽婆が所説に隨ふべし。邪見の六臣の言に隨ふこと莫れ。」(二一〇) 時に王、聞き已りて悶絶して地に躓れ、身瘡増劇し、臭穢前に倍す。冷藥を以て塗治し將瘳すと雖も、瘡蒸毒熱して但増して損すること無し。

【二〇七】次に雙べて兩事を結し、勸めて急に往かすむ。  
 【二〇八】次に父王實を説く。  
 【二〇九】次に世王の悲毀。

# 卷の第十八

## 梵行品の五

爾の時に世尊、雙樹の間に在りて阿闍世の問絶して地に躡るるを見、即ち大衆に告げたまはく、『我今當に是の王の爲に世に住し、無量劫に至りて涅槃に入らざるべし。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來當に無量の衆生の爲に涅槃に入らざるべし。何が故ぞ獨阿闍世王の爲にするや。』

佛の言はく、『善男子、是の大衆の中に、一人の「我必定して涅槃に入る」と謂ふ有ること無し。阿闍世王は定んで、「我當に畢竟して永く滅すべし」と謂はん。是の故に問絶して自ら地に投ず。善男子、我が言ふ所の阿闍世の爲に涅槃に入らざるの如き、是の如きの密議汝未だ解すこと能はじ。何を以ての故に。我爲と言ふは一切凡夫なり。阿闍世とは普く一切の逆を造る者に及ぶ。又復爲とは即ち是一切の有爲衆生なり。我終に無爲衆生の爲に世に住せず。』

- 【一】 第三に正しく滅罪を明す。之に二段あり、其中初に爲に世に住す。之に又二段ありて初に爲に世に住す。
- 【二】 次に論義。之に二段あり。其中初に問。
- 【三】 次に答。之に二段あり、其中初に正しく答ふ。
- 【四】 次に密語。之に三段あり、其中初に密語を唱ふ。
- 【五】 次に解釋。この中六番あり。
- 【六】 無爲衆生の爲に世に住せずとは、無爲に三解あり。一に八地已上を指す、二に登地已上の眞證を總稱す、三に佛果を指す。又た一説には理内の衆生を云ふと。

を以ての故に。夫無爲とは衆生に非ざればなり。阿闍世とは即ち是煩惱等を具足する者、又復爲とは即ち是佛性を見ざるの衆生なり。若佛性を見ば、我終に爲に久しく世に住せず。何を以ての故に。佛性を見る者は衆生に非ざればなり。阿闍世とは、即ちは一切の未だ阿耨多羅三藐三菩提の心を發さざる者。又復爲とは即ち是阿難、迦葉の二衆、阿闍世とは即ち是阿闍世王の後宮妃后、及び王舎城の一切の婦女なり。又復爲とは名けて佛性と爲す。

阿闍世とは名けて不生と爲し、八世とは怨と名く。佛性を生ぜざるを以ての故に、則ち煩惱の怨生ず。煩惱の怨生するが故に佛性を見ず。煩惱を生ぜざるを以ての故に則ち佛性を見る。佛性を見るを以て則ち大般涅槃に安住することを得。是を不生と名く。是の故に名けて爲阿闍世と爲す。善男子、阿闍世とは不生と名け、不生とは涅槃に名く。世は世法と名け、爲とは不汗に名く。世の八法の汗さざる所なるを以ての故に、無量無邊阿僧祇劫涅槃に入らず。是の故に我阿闍世の爲に無量億劫涅槃に入らずと言ふ。善男子、如來の密語は思議すべからず。佛法、衆僧も亦思議すべからず。菩薩摩訶薩も亦不可思議、大涅槃經も亦不可思議なり。』

(一) 爾の時に世尊大悲導師、阿闍世王の爲に (二) 月愛三昧に入り、三昧に入り已りて大光明を放つ。

- 【七】 阿闍(アジャヤク)・不生。
- 【八】 世(シヤトル)・怨。
- 【九】 次に不可思議を結歎す。
- 【一〇】 次に正しく爲に罪を減す。之に二段あり、其中初に身を治す。之に又二段ありて初に光を放つ。
- 【一一】 月愛三昧とは、月光變すべく以て人の熱惱を除くが如く、佛此の三昧に入れば淨光を以て衆生の貪瞋の熱惱を除けばこの名あり。

其の光清涼にして、往いて玉の身を照す。身瘡即ち愈え、鬱蒸除滅す。王、瘡愈え身體清涼を覺え、耆婆に語りて言はく、『曾て人の説を聞くに、劫將に盡さんと欲するに三月並び現す。爾の時に當りて一切の衆生患苦悉く除く。時既に未だ至らず、此の光何れよりか來れる。吾が身を照觸して瘡苦除愈し、身安樂を得たり。』耆婆、答へて言さく、『此劫盡の三月並び照すに非ず、亦火、日、星宿、藥草、寶珠、天光に非ず。』

王、又問ひて言はく、『此の光若三月並び照す寶珠の明に非ずば、是誰の光と爲ん。』大王當に知るべし、是天中天の放つ所の光明なり。是の光根無く、邊際有ること無し。非熱非冷、非常非滅、非色非無色、非相非無相、非青非黃、非赤非白なり。衆生を度せんと欲するが故に見るべし。相有り説くべし。根有り、邊有り、熱有り、冷有り、青、黃、赤、白ならしむ。大王、是の光爾りと雖も實は説くべからず、覩見すべからず。乃至青、黃、赤、白有ること無し。』

王の言はく、『耆婆、彼の天中天、何の因縁を以てか斯の光明を放つ。』耆婆答へて言さく、『今是の瑞相將に大王の爲にせんとす。王先に「世に良醫の身心を療治する無し」と言ふを以て、故に此の光を放ちて先に王の身を治し、然して後に心に及ぶ。』

【三】次に問答して光を論ず。之に五番あり、中に於て又二段あり。初の四番は光を論じ、後の一は月變を解す。初の四番の中各問答あり。今は初の問答。

【四】次に第二の問答。

【五】次に第三の問答。

【三】 王の言はく、「普婆、如來世尊も亦念せらるるや。『普婆答へて言さく、『譬へば一人に七子有り。是

の七子の中の一人病に遇はんに、父母の心平等ならざるに非ざれども、然も病子に於て心則ち偏

へに重きが如く、大王、如來も亦爾なり。諸の衆生に於て不平等に非ず。

然も罪者に於て心則ち偏へに重し。放逸者に於て則ち慈念を生じ、不放逸者には心則ち放捨す。何等をか名けて不放逸者と爲す。六住の菩薩を謂

ふ。大王、諸佛世尊諸の衆生に於て種性、老少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使を觀ず、唯衆生の善心有る者を觀ず。

若善心有らば則便慈念す。大王當に知るべし、是の如きの瑞相は、即ち是如來月愛三昧に入りて放つ所の光明なることを。』

【二】 王即ち問ひて言はく、『何等をか名けて月愛三昧と爲す。』 普婆答へて言さく、『譬へば月光の能く一切の優鉢羅華をして開敷鮮明ならしむるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く衆生をして善心を開敷せしむ。是の故に名けて月愛三昧と爲す。大王、譬へば月光の能く一切の行路の人をして、心に歡喜を生ぜしむるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く涅槃道を修習する者をして心に歡喜を生ぜしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、譬へば月光の初一日より十五日に至りて、形色、

【五】 次に第四の問答、文のうち七子の中の一子病に遇ふとは七子に多解あり、安註に決して曰く、今圓家の七方便を七子とす、一子とは七子中の逆邊を起すものを云ふ。

【六】 六住とは二解あり、一に頓解の六地と。二に俱解の六心と。

【七】 次に月愛を解す。之に三段あり、其中初に如來の所入の三昧を指す。

【八】 次に問ふ。

【九】 次に釋す。このうち六番あり。

光明の漸漸に增長するが如く、月愛三昧も亦復是の如し。初發心の諸善の根本をして漸漸に增長し、乃至大般涅槃を具足せしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、譬へば月光の十六日より三十日に至りて、形色、光明の漸漸に損減するが如く、月愛三昧も亦復是の如し。光の所照の處、有らゆる煩惱を能く漸く滅せしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、盛熱の時、一切衆生常に月光を思ふ。月光既に照せば鬱熱即ち除くが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く衆生をして貪惱熱を除かしむ。大王、譬へば満月は衆星中の王にして甘露味と爲し、一切衆生の愛樂する所なるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。諸善中の王にして甘露味と爲し、一切衆生の愛樂する所なり。是の故に復月愛三昧と名く。』

(10) 王者婆に語らく、「我聞く、如來は惡人と同じく止、坐、起し、語言、談論せざる、猶し大海の死屍を宿さざるが如し。鴛鴦鳥の團扇に住せざるが如く、釋提桓因の鬼と住せず。鳩翅羅鳥の枯樹に棲ます。如來も亦爾なりと。我當に云何が往見することを得べき。設見しむれば、我が身將地に陷入すること無からんや。我如來を觀するに寧ろ醉象、師子、虎狼、猛火、絶餓に近くとも、終に重惡の人に接近せじ。是の故に我今思惟することは是の如し。當に何の心有りてか往いて如來を見たてまつるべき。」

(11) 王者婆答へて言さく、「大王、譬へば渴

【一〇】次に心を治す。之に二段あり、其中初に減罪の縁を明す。之に四段あり、其中初に未發を明す。之に二番の間答あり、初番に又二段ありて先づ王の發すること能はざるを明す。

【一一】鳩翅羅(Kokila)。好聲鳥と譯す。

【一二】次に著婆王を勸む。



人の速かに清泉に赴き、饑者の食を求め、怖者の救を求め、病者の醫を求め、熱者の涼を求め、寒者の衣を求むるが如く、王今佛を求むるも亦是の如くなるべし。大王、如來は尚一闍提等の爲に法要を演説す。何に泥や大王一闍提に非ずして、而も當に慈悲の救済を蒙らざるべけんや。』

王の言はく、『普婆、我昔曾て聞けり、一闍提とは信せず聞かず、觀察すること能はず、義理を得ず。』何が故ぞ、如來而も爲に法を説きたまふや。』

者婆答へて言さく、『大王、譬へば人有りて身重病に遇ふが如き、是人夜一柱の殿に昇り、酥油脂を服し及以身に塗り、灰に臥し灰を食し、枯樹に攀上し、或は彌猴と遊行坐臥し、水に沈み泥に没す。樓殿、高山、樹木、象、馬、牛、羊より墮墜す。身青、黄、赤、黒色の衣を著して喜笑歌舞す。或は烏鷲、狐狸の屬を見、齒髮墮落し、裸形にして狗を枕にし糞穢の中に臥す。復亡者と行、住、坐起し、手を搗へて食啖す。毒蛇路に滿ちて而も中よりして過ぐるを夢む。或は復髮を被る女人と共に相抱持し、名羅樹の葉、以て衣服と爲す。壞れたる驢車に乗り正面にして遊ぶを夢む。是人夢み已りて心に愁惱を生ず。愁惱を以ての故に身病轉た増す。』

梵行品の五

【三】次に第二番は一闍提を論ず。之に二段あり、其中初に聞。

【四】次に答。之に譬合の二段あり譬に又四段ありて初に闍提善を斷するを明す。之に又二段ありて初に五鈍を起すことを明す。之に又二段ありて初に惡を起す。此中更に二段ありて初に總じて惡を起す。

【五】次に別して五鈍を明す。

【六】次に善を失ふを明す。之に三品、三乘を失するの二段あり。

【七】次に五利を起す。之に二段ありて初に利便を起す。

【八】次に惡縁を離起す。

【九】次に根縁佛を感ず。

病増すを以ての故に、

諸家親屬使を遣して醫を請す。遣すべき所の使形體缺短にして根具足せず。頭に塵土を蒙り、敝壞の衣を著、故壞車に載せ、彼の醫に語りて言はく「速かに疾く車に上れ。」

爾の時に良醫即ち自ら思惟すらく、「今は是の使を見るに相貌不吉なり。當に知るべし、病者病治すべきこと難し。」復是の念を作さく、

「使不吉と雖も、當に復日を占ふべし。治すべしと爲すや不や。若四日、六日、八日、十二日、十四日、是の如きの日は病も亦治し難し。」復

是の念を作さく、「日不吉と雖も、當に復星を占すべし。治すべしと爲すや不や。若是、火星、

奎星、昂星、閻羅王星、淫星、滿

星、是の如きの星の時ならば、病も亦治し難し。」復是の念を作さく、「星不吉と雖も、復

當に時を觀すべし。若是秋時、冬時、及び日入時、夜半時、月入時ならば、當に知るべし、是の病も亦治すべきこと難し。」復是の念を作さく、「是の如きの衆相復不吉と雖も、或は定、不定なり。當に

復是の念を作さく、「是の如きの衆相復不吉と雖も、或は定、不定なり。當に

【三〇】次に善の生ずべからざるを觀す。之に二段あり、其中初に觀察。之に又二段ありて初に一往機を觀す。

【三一】次に重ねて觀察す。之に二段あり、其中初に現在を觀す。之に又三段ありて初に日を觀するは上根を譬ふ。文のうち、四日、六日、八日、十二日、十四日は序の如く、四

倒、六歳、八邪、十二因緣なり、又は十二我見、十種四諦に譬ふ。十種四諦は華嚴經中に outputs

【三二】次に星を觀するは中根を譬ふ。

【三三】次に過去を觀す。

【三四】次に過去を觀す。

【三五】次に過去を觀す。

【三六】次に過去を觀す。

【三七】次に過去を觀す。

【三八】次に過去を觀す。

【三九】次に過去を觀す。

【四〇】次に過去を觀す。

【四一】次に過去を觀す。

病人を觀すべし、若福徳有らば皆療治すべく、若福徳無ければ吉と雖も何の益かあらん。」

是を思惟し已りて、尋いで使と俱にす。路に在りて復念すらく、若彼の病者長壽の相有らば

則ち療治すべく、短壽の相ならば、則ち治すべからず。即ち前路に於て、二小兒の相牽いて鬪諍し、

頭を捉へ髪を抜き、瓦石、刀杖共に相打擲するを見る。人の火を持し自然に盡滅するを見る。或は人有りて樹木を斫伐するを見る。或は復人手に

皮革を曳き、路に随ひて行くを見る。或は道路に遺落物有るを見る。或は

人有りて容器を執持するを見る。或は沙門の獨りきて侶無きを見る。復虎

狼、烏鷲、野狐を見る。是の事を見已りて復是の念を作さく、所遣の使人

乃至道路に見る。是の諸相悉く皆不祥なり。當に知るべし、病者定んで療

治し難し。復是の念を作さく、我若往かざれば則ち良醫に非らじ、如其往

かば救療すべからず。復更に念言すらく、是の如きの衆相、復不祥と雖も、

且く當に捨置して病所に往すべし。是を思惟し已りて、復前路に於て

是の如きの聲を聞く、所謂亡失死喪、崩破壊折、剝脫墮墜、焚燒不來、療治すべからず、拔濟するこ

と能はず。復南方に鳥獸の聲有るを聞く。所謂鳥鷲、舍利鳥の聲、若は狗、若は鼠、野狐、猪

兎なり。是の聲を聞き已りて復是の念を作さく、當に知るべし、病者療治すべきこと難し。」

【四二】次に許應の之に二段あり。其中初に正しく應を許す。

【四三】次に更に觀察す。之に二段あり、其中初に現在を觀す。

【四四】二小兒、斷常有無等の見に譬ふ。

【四五】次に未來を觀す。之に二段あり、其中初に未來の因を觀す。

【四六】次に未來の果を觀す。

【四七】舍利(シヤリ)百舌鳥と譯す。

爾の時に即ち病人の舍宅に入りて、彼の病人を見るに、數寒數熱にして、骨節疼痛し、日赤くして涙を流し、耳聲外に聞え、咽喉結痛し、舌上裂破す。其の色正黒にして頭自ら勝れず。體枯れ

て汗無く、大小便利閉塞して通せず。身卒に肥

大にして紅赤常に異なり。語聲調はず、或は

癰、或は細、體を擧げて斑駁、異色青黃なり。其

の腹脹滿し、言語了かならず。醫是を見已り

て瞻病人に問はく、「病者昨來意志如何。」答

へて言はく、「大師、其の人本來三寶以及諸天を

敬信す、今者變異して敬信の情息む。本喜んで

惠施す、今者慳吞なり。本性少食、今は則ち過

多なり。本性弊惡、今は則ち和善なり。本性慈

孝にして父母を恭敬す、今は父母に於て恭敬の

心無し。

【四】 醫是を聞き已りて、即ち前んで之を嗅ぐ。

【五】 優鉢羅香、沈水雜香、畢迦香、多伽羅香、多摩羅跋香、

鬱金香、梅檀香、炙肉臭、蒲桃酒香、燒筋骨臭、魚臭、糞臭なり。香臭を知り已りて、即ち前んで

【七】 次に正應。之に二段あり、其中初に正應譬。

【八】 次に更に觀察す。之に二段あり、其中初に現在を觀す。

これに四段ありて初に三毒なり。

【九】 次に五根。

【一〇】 次に三十使。

【一一】 次に三業。

【一二】 次に過去を觀す。これに二段あり、その中初に根縁を檢す。

【一三】 次に根縁對す。この中五句あり。

【一四】 次に爲に法を説く。これに三段あり、その中初に法を

説く。これに又二段ありて、初に一往爲に説く。文のうち、七香五臭あり、七漏五欲に譬ふ。

【一五】 優鉢羅(Upana)。青蓮華と譯す。畢迦は具さに畢力迦(Pirika)。目菴香又は觸香と譯す。香の名。多伽羅(Taraka)は零凌香と譯す。多摩羅跋(Tamara-patra)は糞葉香と譯す。鬱金は梵名恭矩磨(Kinkinnara)の譯也。梅(Chandana)は與樂と譯す。切貝婆(Kripasa)は、時分樹と譯す。

【一六】 次に窮源の説を譬ふ。

身に觸れて身細更なること猶し縋懸、劫具娑華の如し。或は堅きこと石の如く、或は冷かなること氷の如く、或は熱きこと火の如く、或は澀ること沙の如くなるを覺ゆ。爾の時に良醫是の如き等の種種の相を見已りて、定んで病者必ず死するを知りて疑はじ。然るに定んで是の人當に死すべしと言はず。〔三七〕 臨病の者に語らく、「吾今遷務、明當に更に来るべし。其の須ふる所に隨ひて意を恣にして禁ずること勿れ。」即使家に還る。明日使到り、復使に語りて言はく、「我事未だ訖らず、兼て未だ藥を合せず」と。智者當に知るべし、是の如きの病者は必ず死せんこと疑はし。』

〔三五〕 大王、世尊も亦爾なり。一闍提の輩に於て善く根性を知り、而も爲に法を説きたまふ。何を以ての故に。若爲に説かざれば、一切凡夫は當に、「如來大慈悲無し。慈悲有らば一切智と名け、若慈悲無ければ云何ぞ説きて一切智人と言はん」と言ふべし。是の故に如來、一闍提の爲に而も法を演説す。〔三六〕 大王、如來世尊諸の病者を見、常に法藥を施す。病者の服せざるは如來の咎に非ず。〔三七〕 大王、一闍提の輩を分別するに二つ有り。一つには現在の善根を得、二つには後世の善根を得。如來善く一闍提の輩の能く現在に於て善根を得る者を知り、則ち爲に法を説きたまふ。後世に得る者も亦爲に法を説き、今益無しと雖も後世の因を作したまふ。是の故に如來、一闍提の爲に法要を演説す。一闍提

- 〔三五〕 次に化を思む。
- 〔三六〕 次に應を絶す。
- 〔三七〕 次に合譬之に三段あり、其中初に正しく合す。之に又二段ありて初に第四の説法を合す。
- 〔三六〕 次に第三の善生すべからざるを觀す。
- 〔三七〕 次に一闍提を料簡す。

の者復二種有り。一つには利根、二つには中根なり。利根の人は現在世に於て能く善根を得、中根の人は後世に則ち得。諸佛世尊は空しく法を説きたまはず。三、大王、譬へば淨人の閻廁に墮墮するを、善知識有り、見て之を憫み、尋いで前んで髪を捉へ、之を抜いて出でしむるが如く、諸佛如來も亦復是の如し。諸の衆生の三惡道に墮するを見て、方便救濟して出離を得しむ。是の故に如來、一闍提の爲に而も法を演説す。

〔三〕 王、耆婆に語りたまはく、『若如來をして審かに是の如くならしめば、

明當に良日、吉星を選擇して、然して後乃ち往くべし。』耆婆王に白さく、

『如來法中に良日、吉星を選擇すること有ること無し。大王、重病人の良

日、時節の吉凶を擇ばず、唯良醫を求むるが如く、王今病重くして佛の良

醫を求む。良時好日を選択すべからず。大王、梅檀の火及び 伊蘭の火、

二つ俱に燒相に異有ること無きが如きなり。吉日凶日も亦復是の如し、若佛所に至らば俱に滅罪を得。

唯願はくは大王、今日速かに往きたまへ。』

爾の時に大王、即ち一臣の、名を吉祥と曰ふを命じて之に告げて言はく、『大臣當に知るべし、吾今

佛世尊の所に往かんと欲す。速かに供養所須の具を辦せよ。』臣の言さく、『大王、善い哉善い哉、所須の

供具一切悉く有り。』阿闍世王其の夫人と嚴駕の輦乘一萬二千、巨力の大象其の數五萬、一一の象の

〔三〕 次に三途に往いて拔救す。

〔三〕 次に勸を受けて往く。

〔四〕 伊蘭 (Eucalyptus) 樹の名。花は馨すべきも惡臭甚しく、其の臭四十里に及ぶと云ふ。

上うへに各おのづから三人さんにん有りて、旃あざ蓋がいはを齎もたら持もちす。華けい香かう、伎ぎ樂がく、種しゆ種じゆの供ぐ具ぐ具ぐ足そくせざる無なし。導だう從じゆ馬ば騎き十八じふはち萬まん有あり、摩ま伽か陀た國こくに有ある所ところの人民じんみん尋みついで王わうに從したがふ者もの五ご十八じふはち萬まんなり。爾その時ときに拘く尸し城じやうに有ある所ところの大だい衆しゆ十二じふに由じゆ旬じゆんに満みたず。悉ことごとく皆みな遙はるかに阿あ闍じやせ世せ王わう、其そのの眷けん屬ぞくと路みちを尋たづねて來きたるをみる。

〔五〕 爾その時ときに佛ほとけ、諸もろの大だい衆しゆに告つげて言のたまはく、『一切いっさい衆しゆ生じやう阿あ耨う多た羅ら三さん藐みやく三さん菩ぼ提だいの爲ために近ごん因いん縁えんなるは善ぜん友ゆうより先まなるは無なし。何なにを以もつての故ゆゑに。阿あ闍じやせ世せ王わう若もし者者婆ばが語ごに隨ずい順じゆんせざれば、來らい月げつ七しち日にち必ひつ定ぢやう命めい終しゆうして阿あ鼻び獄ごくに墮だせん。是この故ゆゑに近ごん因いん善ぜん友ゆうに若もしくは莫なし。阿あ闍じやせ世せ王わう、復また前ぜん路ろに於おいて。舍しゃ婆は提だいの毗び流りゆう離り王わう、船ふねに乗のりじて海うみにいり火ひに遇あひて死しす。瞿く伽が離り比ひ丘きゆう生じやう身しん地ぢにいりて阿あ鼻び獄ごくに至いたる。須す那な利り多た種じゆ種じゆの惡あくを作なし、佛ぶつ所しよに至いたりて衆しゆ罪ざいの滅めつすることとを得とく。是この語ごを聞きき已やりて者者婆ばに語かたりて言のたまはく、『吾われ今いま是この如ごときの二に語ごを聞きくと雖なも、猶なほ未いまだ審しん定ぢやうせず。汝なんぢ來きたれ者者婆ば、吾われ汝なんぢと同おなじく一いつ象じやうに載のらんと欲ほつす。設もし我われ當まさに阿あ鼻び地ぢ獄ごくにいるべくば、冀こゝろはくは汝なんぢ、捉とく持ちして我われをして墮だせしめざれ。何なにを以もつての故ゆゑに。吾われ昔むかし曾かつて聞きけり、得とく道だうの入ひとは地ぢ獄ごくにいらざと。』

爾その時ときに佛ほとけ、諸もろの大だい衆しゆに告つげて言のたまはく、『阿あ闍じやせ世せ王わう猶なほ疑ぎ意い有あり。我われ今いま當まさに決けつ定ぢやう心しんを作なすべし。』  
〔七〇〕 爾その時ときに會あ中ちゆうに一ひとりの菩ぼ薩ざつ有ありて持ち一切いっさいと名なく。佛ほとけに白まをして言まをさく、『世せ尊ぜん、佛ほとけの先ま説せつの如ごとく一切いっさい

〔六五〕 次に如來の稱歎。之に四段ありて初に王の歎歎。  
〔六六〕 舍婆提は舍衛とも記す、シハラワステイ、シハラワステイ、シハラワステイ、これなり。毗波羅（Vibhara）は具瑠璃と譯す、波斯匿王の子なり。又た識に由りて惡生王と名けらる。  
〔六七〕 瞿伽離（Kakalika）。惡時者、牛守等と譯す、提婆達多の弟子。  
〔六八〕 須那利多（Sunnalita）。好星と譯す。比丘の名。  
〔六九〕 次に佛決定を爲す。  
〔七〇〕 次に持一切の問。

諸法は皆定相無し。所謂色に定相無く、乃至涅槃も亦定相無し。如來今者、云何ぞ而も阿闍世の爲に決定心を作すと云ふ。佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、我今定んで阿闍世王の爲に決定心を作

す。何を以ての故に。若王の疑心破壊すべくば、當に知るべし、諸法定相有ること無し。是の故に我阿闍世王の爲に決定心を作す。當に知るべし、是の心無定の定と爲す。善男子、若彼の王の心是決定

せば、王の逆罪云何ぞ壞すべけん。定相無きを以て其の罪壞すべし。是の故に我阿闍世王の爲に決定心を作す。』

爾の時に大王、即ち婆羅雙樹の閨を往き、佛所に至り、仰いで如來の三十二相、八十種好の猶し微妙真金の山の如くなるを瞻る。爾の時に世尊、八種の聲を出して告げて『大王』と言ふ。時に阿闍世、左右を顧視し、

『此の大衆の中誰かは大王なる。我既に罪逆にして又福德無ければ、如來稱して大王と爲したまふべからず。』爾の時に如來、即ち復喚びて『阿闍世大王』と言ふ。時に王、聞き已りて心大いに歡喜し、即ち是の語を作さく、『如來今日顧るに、愛言を以てす。眞に如來諸の衆生に於て、大悲憐憫等しうして差別の無きを知る。即ち佛に白して言さく、『世尊、我今疑心永く遺餘無し。定んで如來は、眞に衆生の無上大師なることを知る。』

爾の時に迦葉菩薩、持一切菩薩に語りて言はく、『如來已に阿闍世王の爲に決定心を作したまふ。』

【七〇】 次に佛答ふ。  
【七一】 次に佛所に至る。之に四段ありて初に王來至す。  
【七二】 次に佛慰問す。  
【七三】 次に迦葉騰述す。



(五) 阿闍世王復佛に白して言さく、『世尊、假使我今、梵王、釋提桓因と坐起飲食することを得しとも、

猶欣悦せじ。如來の一言顧み命じたまふに遇ふことを得て、深く以て欣慶す。』即ち持する所の旛蓋、

香華、伎樂を以て供養し、前んで佛足を禮したてまつり、右に繞ること三

匝す。禮敬畢已りて卻つて一面に坐す。

(七) 爾の時に佛阿闍世王に告げて言はく、『大王、今當に汝が爲に正法要を

説べし、汝當に心一つにして諦かに聽き諦かに聽け。凡夫常に當に心

を繫けて身に二十事有るを觀すべし。一つには我が此の身中空にして無

漏無し、二つには諸の善根無し、三つには我が此の生死未だ調順を得じ、

四つには深坑に墮墜して處として畏れざる無し、五つには何の方便を以

てか佛性を見ることを得ん、六つには云何が定を修してか佛性を見ること

を得ん、(八) 七つには生死常に苦にして常樂我淨無し、八つには八難の難遠

離を得難し、(九) 九つには恆に怨家に追逐せらる、十には一法の能く諸有を

遮する有ること無し、(十) 十一には三惡趣に於て未だ解脱を得じ、十二には種

種の諸惡邪見を具足す、(十一) 十三には亦未だ五逆を度るの津を造らず、十四

には生死際無くして未だ其の邊を得じ、(十二) 十五には諸業を作らざれば果報を得じ、十六には我作りて

【七五】 次に王獻供す。

【七六】 次に正しく罪を減す。之に二段あり、其中初に略して法を説く。之に又二段あり、其中初に略説。之に又三段ありて初に詳説。

【七七】 次に正説。之に二段あり、其中初に二十事を標す。

【七八】 次に釋す。之に十段ありて初に眞似一雙。

【七九】 次に應因果一雙。

【八〇】 次に無定慧一雙。

【八一】 次に倒難一雙。

【八二】 次に怨讎一雙。

【八三】 次に子果縛一雙。

【八四】 次に無始終一雙。

【八五】 次に空有一雙。

他人果を受くる有ること無し、(八六)十七には樂因を作らざれば終に樂果無し、十八には若業を造る有らば果終に失はじ、(八七)十九には無明に因りて生じ、亦因りて死す、二十には去來、現在常に於逸を行す。

大王、凡夫の人、當に此の身に於て常に是の如きの二十種の觀を作すべし。是の觀を作し已らば生死を樂はじ、生死を樂はざれば則ち止觀を得ん。

爾の時に次第に心の生相、住相、滅相を觀す。定、慧、進戒も亦復是の如し。生住滅を觀じ已りて。心相、乃至、戒相を知る。終に惡を作さざれば

死畏、三惡道 有ること無し。若心を繫けて是の如きの二十事を觀察せざる者は、心則ち放逸にして、惡として造らざる無し。』

(八九)阿闍世の言さく、我、佛の所説の義を解するが如きは、我昔より來た未だ曾て是の二十事を觀ざるが故に、多く衆惡を造る。衆惡を造るが故に

則ち死畏、三惡道畏有り。(九〇)世尊、自ら我が殃を招き茲の重惡を造る、父王辜無きに横に逆害を加ふ。是の二十事設ひ觀じ觀せざるも、必定して

當に阿鼻地獄に墮すべし。』(九一)佛大王に告げたまはく、『一切の諸法性相常無く、決定有ること無し。

阿闍世王佛に白して云はく、『世尊、若一切の法定相無ければ、(九二)次は佛廣く破す。之に三段あり、其中初に別して破す。之に又四段ありて初に第四の定障の執を破す。其中初に正しく破す。(九二)次に世王領す。』

(八六) 次に因果一雙。  
(八七) 次に癡逸一雙。

(八八) 次に得失を結す。  
(八九) 次に領解。

(九〇) 次に廣く法を説く。之に三段あり、其中初に世王執を起す。之に又重罪を執す、父王を執す、無辜を執す、定障を執するの四段あり。

(九一) 次に佛廣く破す。之に三段あり、其中初に別して破す。之に又四段ありて初に第四の定障の執を破す。其中初に正しく破す。

(九二) 次に世王領す。

我が殺罪も亦應に不定なるべし。若殺定ならば、一切の諸法則ち不定に非じ。」

佛の言はく、『大王、善い哉善い哉諸佛世尊、一切の法悉く定相無し』と説く。王復能く殺も亦不定

なるを知る。是の故に當に知るべし、殺に定相無しと。大王、汝の言ふ所の如く、父王辜無きに横

に逆害を加ふとは、何者か是父なる。但假名の衆生五陰に於て妄りに父の想を生ず。十二入、十八界

の中に於て何者か是父なる。若色は父ならば四陰は非なるべし。若四は父ならば色は亦非なるべし。

若色、非色合して父と爲さば此處有ること無し。何を以ての故に。色と

非色と性合すること無きが故なり。大王、凡夫衆生是の色陰に於て妄りに

父想を生ず。是の如きの色陰も亦害すべからず。何を以ての故に。色に十

種有り。是の十種の中唯色の一種、見るべく、持すべく、稱ふべく、量る

べく、牽くべく、縛すべし。見縛すべしと雖も、其の性住せず。不住

を以ての故に、見ることを得べからず、捉持すべからず、稱量すべからず、牽縛すべからず。色相是

の如し云何ぞ殺すべけん。若色は父にして殺すべく、害すべき罪報を獲れば、餘の九つは非なるべし。

若九つ非ならば則ち罪無かるべし。大王、色に三種有り。過去、未來、現在なり。過去、現在は則ち

害すべからず。何を以ての故に。過去は過去するが故に、現在は念念に滅するが故に、未來は遮する

が故に。之を名けて殺と爲す。是の如く一色、或は可殺有り、或は不可殺なり。殺、不殺有れば色則

【九三】次に佛述成す。

【九四】次に第一に父王の執を破す。之に二段ありて初に因縁假有の故に父無し。

【九五】次に念念生滅の故に罪無し。

ち定ならず。若色不定ならば殺も亦不定なり、殺不定の故に報も亦不定なり。云何ぞ説きて定んで地獄に入ると言はん。

大王、一切衆生の所作の罪業に凡そ二種有り。一つには輕、二つには重なり。若心、口の作は則ち名けて輕と爲し、身、口、心の作は則ち名けて重と爲す。大王、心念口説して身作さざる者は所得の輕し。大王、昔日口殺を教へず、唯別足を言ふ。大王若待臣に「立つとき王首を斷せよ」と教せん、坐する時乃ち斷せば猶罪を得じ。況や王敕せず、云何ぞ罪を得ん。王若罪を得ば諸佛世尊も亦罪を得べし。何を以ての故に。汝が父先王頻婆娑羅、曾て諸佛に於て諸の善根を種う。是の故に今日王位に居ることを得。若佛世尊其の供を受けざれば則ち王と爲さず。若王と爲さざれば汝則ち國の爲に害を興すことを得じ。汝若父を殺す、當に罪有るべくば、我等諸佛も亦罪有るべし。若諸佛世尊罪有ること無ければ、汝獨云何を而も罪を得んや。

大王、頻婆娑羅往惡心有りて毗富羅山に於て遊行射獵するに、曠野に周徧して悉く得る所無し。唯一仙を見るに五通具足す。見已りて即ち瞋恚惡心を生ず。我今遊獵して得ざる所以は、正しく此の人驅逐して去らしむるに坐す。即ち左右に敕して而も之を殺さしむ。其の人臨終に瞋惡心を生じて神

【九六】次に第一の定重の執を破す。

【九七】次に第三の無善の執を破す。之に二段あり、其中初に昔の事を引く。文の中毗富羅

（二二三）は廣博勝山と譯す、摩竭陀國に在り。

通を退失し、誓言を作さく、「我實に辜無く、汝心口を以て、横に屠戮を加ふ。我來世に於ても亦當に是の如く、還心口を以て而も汝が命を害すべし」と。時に王、聞き已りて即ち悔心を生じて死尸を供養す。先王是の如く、尙輕受を得て地獄に墮せず。況や王爾らざるに而も當に地獄に果報を受くべけんや。先王自ら作し還自ら之を受く。云何ぞ王をして而も殺罪を得しめんや。【九〇】 王の言ふ所の如き、父王辜無しと言ふ所の如きは、云何が無しと言ふ。夫罪有る者は則ち罪報有り、惡業無き者は則ち罪報無し。汝が父先王若罪有ること無ければ云何ぞ報有らん。頻婆娑羅現世の中に於ても亦善果及以惡果を得。是の故に先王も亦復定まらず。不定を以ての故に殺も亦定まらず。殺不定の故に、云何ぞ而も定んで地獄に入ると言はん。

【九一】 大王、衆生の狂惑に凡そ四種有り。一つには貪狂、二つには藥狂、三つには咒狂、四つには本業緣狂なり。大王、我が弟子の中に是の四狂有り。多く惡を作ると雖も我終に是の人戒を犯すと記せず。是の人の所作三趣に至らず。若還つて心を得るに亦犯と言はず。王本國を貪りて此の逆害を興す。貪狂心の作云何ぞ罪を得ん。【九二】 大王、人の酒に酔ひて其の母を害し、既に醒悟し已りて心に悔恨を生ずるが如し。當に知るべし、是の業も亦報を得ず。王今貪醉は本心の作に非ず。若本心に非ざれば云何ぞ罪を得ん。【九三】 大

【九〇】 次に佛を瞞して之を破す。  
【九一】 次に總破、之に三段あり、其中初に四狂等を擧げて其實有を法す。之に二段ありて初に法。  
【九二】 次に譬。之に二段ありて初に醉譬。之に譬、合の二段あり。  
【九三】 次に幻等譬。之に九段ありて初に幻化譬。之に譬、合の二段あり。

王、譬へば幻師四衢道に於て種種の男女、象馬、瓔珞、衣服を幻作す。愚癡の人は謂つて眞實と爲し有智の人は眞有に非すと知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其眞に非ざるを知る。 (一〇三) 大王、譬へば山谷の響聲、愚癡の人は之を實聲と謂ひ、有智の人は其の眞に非ざるを知るが如し。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知

る。 (一〇四) 大王、人怨有り詐り來りて親附す。愚癡の人は謂つて眞實と爲し、智者は了達して乃ち虚詐を知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ

諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。 (一〇五) 大王、人鏡を執りて自ら面像を見るに、愚癡の人は謂つて眞面と爲し、智者は了達して其の非眞を知るが如く、

殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。 (一〇六) 大

王、熱時の饑、愚癡の人は之を是水と謂ひ、智者は了達して其の水に非ざるを知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に

非ざるを知る。 (一〇七) 大王、乾闥婆城を愚癡の人は謂つて眞實と爲し、智者は了達して其の眞に非ざるを知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の非眞を知

る。 (一〇八) 大王、人夢中に五欲の樂を受け、愚癡の人は之を謂つて實と爲し、智者は了達して其の非眞を知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、殺は、殺

【一〇三】次に谷響聲。之に響、合の二段あり。

【一〇四】次に詐視響。之に響、合の二段あり。

【一〇五】次に鏡像響。之に響、合の二段あり。

【一〇六】次に熱欲響。之に響、合の二段あり。

【一〇七】次に乾城響。之に響、合の二段あり。

【一〇八】次に夢欲響。之に響、合の二段あり。

業、殺者、殺果、及以解脱我皆之了す、則ち罪有ること無し。王殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らん。  
大王、譬へば人有りて典酒を主知し、如其飲まざれば則ち亦醉はず、復火を知ると雖も、亦燒然せざるが如く、王も亦是の如し。復殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らん。大王、諸の衆生有りて日出の時に於て種種の罪を作り、月出の時に於て復劫盜を行ひ、日月出でざる時罪を作らず。日月に因りて其をして罪を作らしむと雖も、而も此の日月は實に罪を得ず。殺も亦是の如し。復王に因ると雖も、王は實に罪無し。

〔二〇〕 大王、王の宮中常に羊を屠るを教す。心初て懼無きが如し。云何ぞ父に於て獨懼心を生ず。復人獸、尊卑差別すと雖も、命を保ち死を畏るは二つ俱に異なること無し。何が故ぞ羊に於て心軽くして懼無く、父先王に於て重き憂苦を生ず。大王、世間の人は是愛の僮僕にして自在を得ず。愛に使はれて殺害を行す。設ひ果報有るも、乃ち是愛の罪なり。王自在ならず、當に何の咎か有るべき。〔二一〕 大王、譬へば涅槃の有に非ず無に非ず、而も亦是有なるが如く、殺も亦是の如し。非有非無と雖も、而も亦是有なり。慙愧の人は則ち是非有、無慙愧の者は則ち非無と爲す。果報を受くる者は、之を名けて有と爲し、空見の人は則ち非有と爲す。有見の人は則ち非無と爲し、有見の者も亦名けて有と爲す。何を以ての故に。有有見の者は果報を得るが故に。無有見の者は則ち

〔二〇〕 次に知酒火譬。之に譬、合の二段あり。  
〔二一〕 次に日月譬。之に譬、合の二段あり。  
〔二二〕 次に其無慈不等を破す。  
〔二三〕 次に其邊に滯り理を失ふを破す。之に譬、合の二段あり。

果報無し。常見の人は則ち非有と爲し、無常見の者は則ち非無と爲す。常常見の者は無と爲す。ことを得ず。何を以ての故に。常常見の者は惡業果有るが故に、是の故に常常見の者は無と爲すことを得ず。是の義を以ての故に、非有、非無と雖も而も亦是有なり。大王、天衆生とは出入息を名く。出入息を斷するが故に名けて殺と爲す。諸佛俗に隨ひて亦説きて殺と爲す。

〔二二〕 大王、色はは無常、色の因縁も亦是無常なり。無常の因より生ずる色云何ぞ常ならん。乃至識は無常、識の因縁も亦是無常なり。無常の因より生ずる識云何ぞ常ならん。無常を以ての故に苦、苦を以ての故に空、空を以ての故に無我なり。若は無常、苦、空、無我ならば何の殺す所と爲ん。

無常を殺さば常涅槃を得ん。苦を殺さば樂を得、空を殺さば實を得、無我を殺さば眞我を得ん。 〔二二〕 大王、若無常、苦、空、無我を殺さば則ち我と同じからん。我も亦是の無常、苦、空、無我を殺すに地獄に入らず、汝云何ぞ入らん。』

〔二四〕 爾の時に阿闍世王、佛の所説の如く色を觀じ、乃至識を觀す。 〔二五〕 是の觀を作し已りて即ち佛に白して言さく、『世尊、我今始めて色は無常、乃至識は無常と知る。我本若能く是の如く觀せば則ち罪を作らず。 〔二六〕 世尊、我昔曾て聞く、諸佛世尊は常に衆生の爲に父母と作る』と。是の語を聞くと

〔二二〕 次に佛に請ふ。  
 〔二六〕 次に歡喜自慶す。之に三  
 段ありて初に佛の覆蓋を蒙る  
 ことを明す。

〔二二〕 次に佛に請ふ。  
 〔二六〕 次に歡喜自慶す。之に三  
 段ありて初に佛の覆蓋を蒙る  
 ことを明す。

〔二二〕 次に佛に請ふ。  
 〔二六〕 次に歡喜自慶す。之に三  
 段ありて初に佛の覆蓋を蒙る  
 ことを明す。



雖も、猶未だ審かにすること能はず、今乃ち定んで知んぬ。(二七) 世尊、我も亦會つて聞く、須彌山王は四  
 實の所成、所謂金、銀、瑠璃、頗黎なり。若衆鳥有りて集る所の處に隨ひて則ち其の色を同じうす」  
 と。是の説を聞くと雖も、亦審定せず。我今佛須彌山に來至すれば、則ち與に色を同じうす。  
 與に色を同じうすとは、則ち諸法の無常、苦、空、無我を知るなり。(二八) 世尊、我  
 世間に伊蘭子より伊蘭樹を生ずるを見、伊蘭の梅檀を生ずる者を見ず。我  
 今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子とは我が身なり、梅  
 檀樹とは即ち我が心無根信なり。無根とは我が初、如來を恭敬すること  
 を知らず、法僧を信せず。是を無根と名く。(二九) 世尊、我若如來世尊に遇ひ  
 たてまつらざれば、當に無量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて無量の苦を  
 受く。我今幸有りて如來を見たてまつることを得たり。是の佛を見て得る  
 所の功德を以て、悉く衆生の煩惱惡心を壞す。(三〇) 佛の言はく、「大王、善  
 い哉善い哉、我今、汝必ず能く衆生の惡心を破壞せんを知る。」(三一) 世尊  
 若我審かに能く衆生の諸の惡心を破壞せば、我をして常に阿鼻地獄に  
 在りて、無量劫の中諸の衆生の爲に大苦惱を受けしむとも、以て苦と爲さず。」

【二七】次に仰いで佛解に同ずることな明す。

【二八】次に正しく是れ自慶。

【二九】次に發心を辨す。之に三段あり、其中初に偏に王の發心を明す。之に三段ありて初に王發心す。

【三〇】次に如來印す。

【三一】次に王重れて發心す。

【三二】次に通じて王及び夫人眷屬の發心を明す。之に三段あり、其中初に正しく發心す。之に又三段ありて初に國人。

大心を發すを以ての故に、阿闍世王の有らゆる重罪、即ち微薄なるを得、  
【二三】 王及び夫人、後宮、采女、悉く皆同じく阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

【二四】 爾の時に阿闍世王、老婆に語りて言はく、「老婆、我今未だ死せずして已に天身を得、短命を捨てて而も長命を得、無常身を捨てて而も常身を得、諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。即ち是天身、長命常身、即ちは一切諸佛の弟子なり。」

【二五】 是の語を説き已りて、即ち種種の寶幢、幡蓋、香華、瓔珞、微妙の伎樂を以て佛に供養し、  
【二六】 復偈頌を以て讚歎して言さく、

「實語甚だ微妙にして、句義に善巧なり、其深處密藏は、衆の爲の故に顯示す、有らゆる廣博の言は、衆の爲の故に略説す、

是の如きの語を具足して、善能く衆生を療す、

若しも諸の衆生有りて、是の語を聞くことを得る者は、

若し信じ及び信ぜざる、定んで佛説なるを知らん、

【二七】 諸佛常に要語もて、衆の爲の故に處を説きたまふ、

【二三】 次に王及夫人を説す。

敬す。

【二六】 次に口業供養。之に二段あり、其中初に稱歎。之に又三段ありて初に口密を歎す。之に又三段ありて初に實語を敬す。

【二五】 次に供養讚歎を明す。之に二段あり、其中初に身業の供養。

【二四】 次に王及び夫人看屬。

【二五】 次に王の慶喜。

麤説及び冥言、皆第一義に歸す、

是の故に我今者、世尊に歸依したてまつる、

(二二八) 如來語の一味なる、猶し大海水の如し、

是を第一義と名く、故に無義の言無し、

如來今説きたまふ所の、種種無量の法、

男女大小聞きたてまつりて、同じく第一義を獲、

無因も亦無果も、無生も亦無滅も、

是を大涅槃と名け、聞く者諸果を破す、

(二二九) 如來一切の爲に、常に慈父母と作りたまふ、

當に知るべし諸の衆生は、皆是如來の子なりと、

(二三〇) 世尊は慈悲にして、衆の爲に苦行を修したまふ、

人の鬼魅に著せられ、狂亂して爲す所多きが如し、

(二三一) 我今佛を見たてまつることを得て、得る所の三業の善、

願はくは此の功德を以て、無上道に同向せん、

(二三二) 我今供養する所の、佛法及び衆僧、

【二二八】次に義語を歎す。  
 【二二九】次に意密を歎す。  
 【二三〇】次に身密を歎す。  
 【二三一】次に發願懺悔、即ち五悔の意なり。之に五段ありて初に同向。  
 【二三二】次に勸請。

願はくは此の功德を以て、三寶常に世に存せん、

【二三】 我今獲べき所の、種種の諸の功德、

願はくは以て一切、衆生四種の魔を破せん、

【三四】 我惡知識に遇ひて、三世の罪を造作る、

今佛前に於て悔す、願はくは後更に作らざらん、

【三五】 願はくは諸の衆生等、悉く菩提心を發し、

心を繋げて常に、十方の一切佛を思念せん、

【三六】 復願はくは諸の衆生、永く諸の煩惱を破し、

了了に佛性を見ること、猶し文殊等の如くならん。』

爾の時に世尊阿闍世王を讚じたまはく、『善い哉善い哉、若人能く菩提心を發す有らば、當に知るべし、是の人は則ち諸佛大衆を莊嚴すと爲す。』

【三七】 大王、汝昔已に毗婆尸佛に於て、初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是より以來我が出世に至りて、其の中間に於て未だ曾て復地獄に墮

して苦を受けず。大王、當に知るべし、菩提の心は乃ち是の如きの無量の果報有り。』

大王、今より已往、常に當に菩提の心を勸修すべし。何を以ての故に。是の因縁に従ひ、常に無量の惡を消滅する

【二三】 次に隨喜。

【三四】 次に懺悔。

【三五】 次に發願。之に二段あり、其中初に悉く始心を發さしめんことを願す。

【三六】 次に終に佛性を見んことを願す。

【三七】 次に如來の達成。之に三段ありて初に其後世を述す。

【三八】 次に過去を述す。文の中毗婆尸(Paraspari)と譯す、過去七佛の一。釋迦

菩薩第三阿僧祇劫の滿時に、此の佛に遭ふことを得て、始めて百大劫種智の福を修

り。

【三九】 次に未來を述す。

ことを得べきが故なり。』

(一四〇) 爾の時に阿闍世王、及び摩伽陀國の一切の人民、座よりして起ち、佛を繞ること三市し、辭退して宮に還る。(一四一) 天行品とは雜華に説くが如し。

【一四〇】次に辭退す。

【一四一】是より雜華を持して天行を明す。

嬰兒行品第二十一

〔三〕善男子、云何が名けて嬰兒行と爲す。善男子、起、住、來去、語言すること能はざる、是を嬰兒

と名く。如來も亦爾なり。不能起とは、如來

一切の諸法に著せず。不能來とは、如來身行

に動搖有ること無し。不能去とは、如來已に大

般涅槃に至る。不能語とは、如來一切衆生の

爲に諸法を演説すと雖も、實は所説無し。何を

以ての故に。説く所有らば有爲法と名く。如來

世尊は是有爲に非ず、是の故に説く無し。又

無語とは、猶し嬰兒の語言未了にして、復語有

り。雖も實は亦語無きが如く、如來も亦爾なり。

雖も衆生解せず、故に無語と名く。

〔三〕又嬰兒とは、名物不一にして未だ正語を知らず。名物不一にして未だ正語を知らずと雖も、此に

〔一〕是より嬰兒を明す。之に

三段あり、其中初に嬰兒を明す。之に又二段あり、其中初に闍行の嬰兒を明す。之に二段ありて初に臂。このうち、不起、不住、不來、不語の四あり、序の如く、常、淨、我、衆の四徳を備ふ。

〔二〕次に合。之に四段ありて初に不能起

〔四〕次に不能來(去)。

〔三〕次に不能住。

〔五〕次に不能語。之に四段あり、其中初に究竟の故に語ることを能はず。上の大般涅槃等の鈔の如し。次に説即ち無説なるが故に語ることを能はず。即ち今の文なり。

〔六〕次に秘密の言葉生解せざるが故に語ることを能はず。

〔七〕次に隨類不同、他の語言に隨ふ。我に於て語に非ず、語に非ざるが故に語ることを能はず。

〔四〕次に不能來(去)。

〔六〕次に秘密の言葉生解せざるが故に語ることを能はず。

〔七〕次に隨類不同、他の語言に隨ふ。我に於て語に非ず、語に非ざるが故に語ることを能はず。

〔七〕次に隨類不同、他の語言に隨ふ。我に於て語に非ず、語に非ざるが故に語ることを能はず。

因つて物を識ることを得ざるに非ず。如來も亦爾なり。一切衆生方に類各異にして言ふ所同じからず。如來方便して、隨つて之を説く。亦一切をして因つて解を得しむ。

又嬰兒とは、能く大字を説く。如來も亦爾なり、大字を説く。所謂婆喩なり。(五) 喩とは有爲、婆とは無爲なり。是を嬰兒と名く。喩とは名けて無常と爲し、婆とは名けて有常と爲す。如來常を説きたまへば、衆生聞き已りて常法と爲すが故に無常を斷ず。是を嬰兒行と名く。

又嬰兒とは、苦樂、晝夜、父母を知らず。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。衆生の爲の故に苦樂を見ず、晝夜の相無し。諸の衆生に於て其の心平等なり、故に父母、親疎等の相無し。

(二) 又嬰兒とは、大小の諸事を造作すること能はず。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。復生死の作業を造作せず、是を不作と名く。大事とは即ち五逆なり。菩薩摩訶薩終に五逆の重罪を造作せず、小事とは即ち二乗心なり。菩薩終に菩提心を退して、而も聲聞、辟支佛乘を作らさず。

(三) 又嬰兒行とは、彼の嬰兒啼哭の時、父母即ち楊樹の黄葉を以て之に語りて言はく、「啼く莫れ啼く莫れ。我汝に金を與ふ。」嬰兒見已りて眞金の想を生じ便ち止めて啼かず。然る

- 【八】次に偏行の嬰兒を明す。之に五段あり、其中初に大字は六度の嬰兒なるを明す。之に譬、合の二段あり。
- 【九】喩(じ)梵語第四十二音。安註曰く、正しく喩字を取つて大字と爲す、即ち是れ六度の菩薩の嬰兒、此の菩薩三僧祇劫百劫に相を種ふ、作佛を志求す、此の佛は是れ有爲半字無常の佛なり、故に知る是の喩字嬰兒なることをと。
- 【一〇】梵語第三十六音。次に無知は通教の嬰兒なるを明す。又譬合の二段あり。
- 【一一】次に不作は別教の嬰兒なるを明す。又譬合の二段あり。
- 【一二】次に黄葉は人天の嬰兒なるを明す。又譬合の二段あり。

に此の黄葉、實に金に非ざるが如し。木牛、木馬、木男、木女、嬰兒見已りて亦復男女等の想を生じて、即ち止めて啼かざるも實は男女に非ず。是の如く男女の想を作すを以ての故に、名けて嬰兒と曰ふ。如來も亦爾なり。若衆生の衆惡を造らんと欲する有らば、如來爲に三十三天の常樂我淨、端正、自恣、妙宮殿に於て五欲を受け、六根の所對是樂に非ざる無きを説きたまふ。衆生是の如きの樂有るを聞くが故に、心に貪樂を生じて止みて惡を爲さず、三十三天の善業を勤作す。實は是生死無常、無樂、無我、無淨なり。衆生を度せんが爲に、方便して説きて常、樂、我、淨と言ふ。

(三) 又嬰兒とは、若衆生有りて生死を厭ふ時、如來則ち爲に二乗を説きたまふ。(四) 然るに實は二乗の實有ること無し。二乗を以ての故に、生死の過を知り涅槃の樂を見る。是の見を以ての故に、則ち能く自ら斷、不斷有り、眞、不眞有り、修、不修有り、得、不得有るを知る。

(五) 善男子、彼の嬰兒の非金の中に於て而も金想を生ずるが如く、如來も亦爾なり。不淨の中に於て而も説きて淨と爲す。如來第一義を得るを以ての故に、則ち虛妄無し。彼の嬰兒の非牛馬に於て牛馬の想を作すが如し。若衆生非道の中に於て眞道の想を作す有らば、如來も亦非道を説きて道と爲したまふ。非道の中實に道有ること無し。能く道を生ずる微因縁なるを以ての故に、非道を説きて道を爲

【三】 次に欣厭。二乗の嬰兒を明す。之に二段ありて初に略釋。

【四】 次に釋。之に略釋、廣釋の二段あり。

【五】 次の嬰兒の譬の意を釋す。之に三段ありて初に譬を釋す。



す。彼の嬰兒の木男女に於て男女の想を生ずるが如し。如來も亦爾なり、非衆生を知りて衆生想を説きたまふ。而も實は衆生想有ること無きなり。若佛如來衆生無しと説かば、一切衆生は則ち邪見に墮せん。是の故に如來衆生有りと説きたまふ。衆生の中に於て衆生想を作す者は、則ち能く大般涅槃を得。是の如く大破すこと能はざるなり。若衆生に於て衆生想を破する者は、是則ち能く大般涅槃を得。是の如く大讀誦し、書寫し、解説する者有らば、當に知るべし、是の人は必定して當に是の如く五行を得べし。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我佛所説の義を解するが如きは、我も亦定んで當に是の五行を得べし。佛の言はく、『善男子、獨汝是の如く五行を得るにあらず、今此の會中の九十三萬人も亦皆汝に同じく是の五行を得ん。』

【六】次に合。

【七】次に釋。

【八】次に嬰兒行の果を明す。

【九】是より大段第三に單に次の五行を結す。之に總結、迦葉頌、佛述の三段あり。



# 大般涅槃經卷第一

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 序品第一

如是我聞。一時佛在拘尸城力士生地阿夷羅跋提河邊娑羅雙樹間。爾時世尊與大比丘八十億百千人俱。前後圍遶。二月十五日臨涅槃時。以佛神力出大音聲。其聲遍滿乃至有頂。隨其類音普告衆生。今日如來應供正遍知。憐愍衆生。覆護衆生。等視衆生。如羅睺羅。爲作歸依。爲世間舍。大覺世尊將欲涅槃。一切衆生若有所疑。今悉可問。爲最後問。爾時世尊於晨朝時。從其面門放種種光。其明雜色青黃赤白。頗梨馬瑙。光遍照此三千大千佛之世界。乃至十方亦復如是。其中所有六趣衆生。遇斯光者。罪垢煩惱一切消除。是諸衆生見聞是已。心大憂惱。同時舉聲悲號啼哭。嗚呼慈父痛哉。苦哉。舉手拍頭。槌膺大叫。其中或有身體戰慄涕泣哽咽。爾時大地諸山。大海皆悉震動。時諸衆生共相謂言。且各裁抑莫大愁苦。當共疾往詣拘尸城力士生地。至如來所。頭面禮敬。勸請如來莫般涅槃。住世一劫若減一劫。互相執手復作是言。世間虛空衆生福盡。不善諸業增長出世。仁等今當速往速往。如來不久必入涅槃。復作是言。世間虛空世間虛空。我等從今無有救護。無所宗仰。貧窮孤露。一旦遠離無上世尊。設有疑惑當復問誰。時有無量諸大弟子。尊者摩訶迦旃延。尊者薄俱羅。尊者優波難陀。如是等諸大比丘。遇佛光者。其身戰掉乃至大動不能自持。心濁迷悶發聲大叫。生如是等種種苦惱。爾時復有八百千諸比丘等。皆阿羅漢。心得自在。所作已辦。離諸煩惱。調伏諸根。如大龍王有大威德。成就空慧。逮得已利。如栴檀林。栴檀圍遶。如師子王。師子圍遶。成就如是無量功德。一切皆是佛之眞子。各於晨朝日出時。離常住處。方用楊枝。遇佛光明更相謂言。仁等宜速澡漱清淨。作是言已。舉身毛豎。遍體血現。如波羅奢花。涕泣盈目。生大苦惱。

序品第一

本文格上元有  
 科圖今略之○  
 經題大上明有  
 南本二字每卷  
 皆同元○譯號  
 一三字○譯號  
 宋元俱作三藏  
 曇無讖譯三藏  
 門慧嚴慧觀同  
 謝靈運再治十  
 九字明作北涼  
 天竺三藏曇無  
 讖譯宋沙門  
 慧嚴慧觀同  
 靈運再治二十  
 四字以下皆同  
 四品目宋元俱  
 在經題經下○  
 尸下三本俱有  
 那字  
 隨同作推下同  
 ○眼元明俱作  
 啞  
 復三本俱作又  
 俱同作拘

比上三本俱無  
於字○集同作  
習下同

誓宋作擔○世  
三本俱作去

坐同作住下同

爲欲利益安樂衆生。成就大乘第一空行。顯發如來方便密教。爲不斷絕種種說法。爲諸衆生調伏因緣故。疾至佛所。稽首佛足。繞百千匝。合掌恭敬却坐一面。爾時復有拘陀羅女。善賢比丘尼。優波難陀比丘尼。海意比丘尼。與六十億比丘尼等。一切亦是大阿羅漢。諸漏已盡。心得自在。所作已辦。離諸煩惱。調伏諸根。猶如大龍。有大威德。成就空慧。亦於晨朝日出時。舉身毛豎。遍體血現。如波羅奢花。涕泣盈目。生大苦惱。亦欲利益安樂衆生。成就大乘第一空行。顯發如來方便密教。爲不斷絕種種說法。爲諸衆生調伏因緣故。疾至佛所。稽首佛足。遶百千匝。合掌恭敬却坐一面。於比丘尼衆中。復有諸比丘尼。皆是菩薩人中之龍。位階十地。安住不動。爲化衆生。現受女身。而常修集四無量心。得自在力。能化作佛。爾時復有一恒河沙菩薩摩訶薩。人中之龍。位階十地。安住不動。方便現身。其名曰海德菩薩。無盡意菩薩。如是等菩薩摩訶薩。而爲上首。其心皆悉敬重大乘。安住大乘深解大乘。愛樂大乘守護大乘。善能隨順一切世間。作是誓言。諸未度者。當令得度。已於過世無數劫中。修持淨戒。善持所行。解未解者。紹三寶種。使不斷絕。於未來世。當轉法輪。以大莊嚴而自莊嚴。成就如是無量功德。等觀衆生。如視一子。亦於晨朝日出時。遇佛光明。舉身毛豎。遍體血現。如波羅奢花。涕泣盈目。生大苦惱。亦爲利益安樂衆生。成就大乘第一空行。顯發如來方便密教。爲不斷絕種種說法。爲諸衆生調伏因緣故。疾至佛所。稽首佛足。繞百千匝。合掌恭敬却坐一面。爾時復有二恒河沙諸優婆塞。受持五戒。威儀具足。其名曰威德無垢稱王優婆塞。善德優婆塞等。而爲上首。深樂觀察諸對治門。所謂苦樂常無常淨不淨我無我。實不實。歸依非歸依。衆生非衆生。恒非恒。安非安。爲無爲。斷不斷。涅槃非涅槃。增上非增上。常樂觀察如是等法對治之門。亦欲樂聞無上大乘。如所聞已。能爲他說。善持淨戒。渴仰大乘。既自充足。復能充足餘渴仰者。善能攝取無上智慧。愛樂大乘守護大乘。善能隨順一切世間。度未度者。解未解者。紹三寶種。使不斷絕。於未來世。當轉法輪。以大莊嚴而自莊嚴。心常深味清淨戒行。悉能成就如是功德。於諸衆生。生大悲心。平等無二。如視一子。亦於晨朝日出時。爲欲闡毗如來身故。人人各取香木。萬束。梅檀。沉香。水牛頭。梅檀。天木香等。是一一木文理及附。皆有七寶微妙光明。譬如種種雜彩畫飾。以佛力故。有是妙色。青黃赤白。爲諸衆生之所樂見。諸木皆以種種香塗。鬱金。沉水及膠香等。散以諸

分同作芬下同

輻同作輻○四

元明俱作驕○

堅三本俱作建

虛空三本俱作

空虛

支同作肢

於菩薩同作菩薩之

具下同無欲字

○虛空元明俱

作空虛次同○

唯三本俱作惟

住同作在下同

花而爲莊嚴。優鉢羅花。拘物頭花。波頭摩花。分陀利花。諸香不上。懸五色幡。柔軟微妙。猶如天衣。嬌者耶衣。葛摩繪綵。是諸香木。載以寶車。是諸寶車。出種種光。青黃赤白。轆轤皆以七寶。廁填。是一一車。駕以四馬。是一一馬。駛疾如風。一一車前。鑿立五十七寶妙幢。真金羅網。彌覆其上。一一寶車。復有五十微妙寶蓋。一一車上。垂諸花鬘。優鉢羅花。拘物頭花。波頭摩華。分陀利華。其花純以真金爲葉。金剛爲臺。是花臺中。多有黑蓋。遊集其中。歡娛受樂。又出妙音。所謂無常苦空無我。是音聲中。復說菩薩本所行道。復有種種歌。舞伎樂。箏笛篳篥瑟鼓吹。是樂音中。復出是言。苦哉苦哉。世間虛空。一一車前。有優婆塞。繫四寶案。是諸案上。有種種花。優鉢羅花。拘物頭花。波頭摩花。分陀利花。鬱金香。香及餘薰香。微妙第一。諸優婆塞。爲佛及僧。辦諸食具。種種備足。皆是梅檀沉水香薪。八功德水之所成熟。其食甘美。有六種味。一苦。二醋。三甘。四辛。五鹹。六淡。復有三德。一者輕軟。二者淨潔。三者如法。作如是等種種莊嚴。至力士生處。婆羅雙樹間。復以金沙。遍布其地。以迦陵伽衣。欽婆羅衣。及繪綵衣。而覆沙上。周匝遍滿。十二由旬。爲佛及僧。敷置七寶師子之座。其座高大。如須彌山。是諸座上。皆有寶帳。垂諸瓔珞。諸羅樹。悉懸種種微妙幡蓋。種種好香。用以塗樹。種種名花。以散樹間。諸優婆塞。各作是念。一切衆生。若有所乏。飲食衣服。頭目支體。隨其所須。皆悉給與。作是施時。離欲。瞋恚。穢濁。毒心。無餘思願。求世福樂。唯志無上。清淨菩提。是優婆塞等。皆已安住於菩薩道。復作是念。如來今者。受我食已。當入涅槃。作是念已。身毛皆竖。遍體血現。如波羅奢花。涕泣盈目。生大苦惱。各各齎持供養之具。載以寶車。香木。幢幡。寶蓋。飲食。疾至佛所。稽首佛足。以其所持供養之具。欲供養如來。遶百千匝。舉聲號泣。哀動天地。髓胸大叫。淚下如雨。復相謂言。苦哉仁者。世間虛空。世間虛空。便自舉身。投如來前。而白佛言。唯願如來。哀受我等。最後供養。世尊知時。默然不受。如是三請。悉皆不許。諸優婆塞。不果所願。心懷悲惱。默然而住。猶如慈父。唯有一子。卒病命終。殯送還歸。極大憂惱。諸優婆塞。悲泣懊惱。亦復如是。以諸供具。安置一處。却住一面。默然而坐。爾時復有三恒河沙。諸優婆夷。受持五戒。威儀具足。其名曰壽德。優婆夷。德鬘。優婆夷。毗舍佉。優婆夷。等。八萬四千。而爲上首。悉能堪任。護持正法。爲度無量百千衆生。故現女身。呵責家法。自觀己身。如四毒蛇。是身常爲無量諸蟲之所唼食。是身臭穢。貪欲。獄縛。是身可惡。猶如死狗。是

象同作象

象同作象

鷄同作鷄  
同作談  
○摩鹿

宋作亭歷

三三本俱作二  
○卑同作下大  
同

身不淨九孔常流。是身如城。血肉筋骨皮裹其上。手足以為却敵樓櫓。目為瞭孔。頭為殿堂。心王處中。如是身城。諸佛世尊之所棄捨。凡夫愚人常所味著。貪婬瞋恚癡羅刹止住其中。是身不堅。猶如蘆葦。伊蘭水沫芭蕉之樹。是身無常。念念不住。猶如電光。暴水幻炎。亦如畫水。隨畫隨合。是身易壞。猶如河岸。臨峻大樹。是身不久。當為狐狼鷓鴣鷓鴣鳥鵲餓狗之食。所噉誰有智者。當樂此身。寧以牛跡。盛大海水。不能具說。是身無常。不淨臭穢。舉丸大地。使如棗等。漸漸轉小。猶如葶藶子。乃至微塵。不能具說。是身過患。是故當捨。如棄涕唾。以是因緣。諸優婆夷。以空無相無願之法。常修其心。深樂諸受。大乘經典。聞已。亦能為他演說。護持本願。毀咎女身。甚可患厭。性不堅牢。心常修集。如是正觀。破壞生死無際輪轉。渴仰大乘。既自充足。復能充足餘渴仰者。深樂大乘。守護大乘。雖現女身。實是菩薩。善能隨順一切世間。度未度者。解未解者。紹三寶種。使不斷絕。於未來世。當轉法輪。以大莊嚴而自莊嚴。堅持禁戒。皆悉成就。如是功德。於諸眾生。生大悲心。平等無二。如視一子。亦於晨朝。日出時。各相謂言。今日宜應至雙樹間。諸優婆夷。所設供具。倍勝於前。持至佛所。稽首佛足。遶百千匝。而白佛言。世尊。我等今者。為佛及僧。辦諸供具。唯願如來。哀受我供。如來默然而不許可。諸優婆夷。不果所願。心懷愁惱。以佛神力。去地七多羅樹。於虛空中。默然而四恒河沙。毗舍離城。諸離車等。男女大小。妻子眷屬。及閻浮提。諸王眷屬。為求法故。善修戒行。威儀具足。摧伏異學。壞正法者。常相謂言。我等當以金銀倉庫。為令甘露無盡。正法深奧之藏。久住於世。願令我等。常得修學。若有誹謗佛正法者。當斷其舌。復作是願。若有出家毀禁戒者。我當罷令還俗。策使有能深樂護持正法。我當敬重如事父母。若有眾僧能修正法。我當隨喜。令得勢力。常欲樂聞大乘經典。聞已。亦能為人廣說。皆悉成就。如是功德。其名曰淨無垢。藏離車子。淨不放逸。離車子。恒水無垢。淨德離車子。如是等各相謂言。仁等。今可速往佛所。所辦供養種種具足。一一離車。各載八萬四千大象。八萬四千驪馬。寶車。八萬四千明月寶珠。天木栴檀。沉水。薪東。種種各有八萬四千。一一象前。有寶幢幡蓋。其蓋小者。周匝縱廣。滿一由旬。幡最長者。長三十三由旬。寶幢。障者。高百由旬。持如是等供養之具。往至佛所。稽首佛足。遶百千匝。而白佛言。世尊。我等今者。為佛及僧。辦諸供具。唯願如來。哀受我供。如來默然而不許可。諸離車等。不果所願。心懷愁惱。以佛神力。去地七多羅樹。於虛空中。默然而

愍同作觀下同

後宮夫人同作  
夫人後宮

寶蓋之同作諸  
寶蓋

虛空明作空虛  
下同

住。爾時復有五恒河沙大臣長者，敬重大乘。若有異學謗正法者，是諸人等力能摧伏，猶如雹雨摧折草木。其名曰日光長者，護世長者，護法長者，如是之等，而爲上首。所設供具，五倍於前，俱共持往詣雙樹間。稽首佛足，遶百千匝。而白佛言：世尊，我等今者爲佛及僧設諸供具，唯願哀愍受我等供。如來默然而不受之。諸長者等不果所願，心懷愁惱，以佛神力去地七多羅樹，於虛空中默然而住。爾時復有毗舍離王及其後宮夫人眷屬，閻浮提內所有諸王，除阿闍世并及城邑聚落人民，其名曰月無垢王等，各嚴四兵欲往佛所。是一一王各有一百八十萬億人民眷屬。是諸車兵駕以象馬，象有六牙馬疾如風，莊嚴供具六倍於前。寶蓋之中有極小者，周匝縱廣滿八由旬，幡極短者十六由旬，寶幢下者三十六由旬。是諸王等安住正法惡賤邪法，敬重大乘深樂大乘，憐愍衆生等如一子。所持飲食香氣流布滿四由旬，亦於晨朝日出時，持是種種上妙甘饌，詣雙樹間。如來所，而白佛言：世尊，我等爲佛及比丘僧設是供具，唯願如來哀愍受我最後供養。如來知時亦不許可。是諸王等不果所願，心懷愁惱，却住一面。爾時復有七恒河沙諸王夫人，唯除阿闍世王夫人，爲度衆生現受女身，常觀身行，以空無相無願之法薰修其心。其名曰三界妙夫人，愛德夫人，如是等諸王夫人，皆悉安住於正法中，修行禁戒威儀具足，憐愍衆生等如一子，各相謂言：今宜速往詣世尊所。諸王夫人所設供養七倍於前，香花寶幢繒綵幡蓋上妙飲食，寶蓋小者周匝縱廣十六由旬，幡最短者三十六由旬，寶幢卑者六十八由旬，飲食香氣周遍流布滿八由旬。持如是等供養之具，往如來所稽首佛足，遶百千匝，而白佛言：世尊，我等爲佛及比丘僧設是供具，唯願如來哀愍受我最後供養。如來知時默然不受。時諸夫人不果所願，心懷愁惱，自拔頭髮，墮曾大哭，猶如慈母新喪愛子，却住一面默然而坐。爾時復有八恒河沙諸天女等，其名曰廣目天女，而爲上首。作如是言：汝等諸姊，諦觀諦觀，是諸人衆所設種種上妙供具，欲供如來及比丘僧，我等亦當如是嚴設微妙供具供養如來。如來受已當入涅槃。諸姊，諸佛如來出世甚難，最後供養亦復倍難。若佛涅槃世間虛空，是諸天女愛樂大乘，欲聞大乘，聞已亦能爲人廣說，渴仰大乘，既自充足，復能充足餘渴仰者，守護大乘。若有異學憎嫉大乘，勢能摧滅如雹摧草，護持戒行威儀具足，善能隨順一切世間，度未度者，脫未脫者，於未來世當轉法輪，紹三寶種，使不斷絕。修學大乘，以

在三本俱作住

沙下三本俱有等字次同○所下同無所字

修同作修下同

姪宋作姪元明俱作姪○藍上三本俱有天字○等同作地陰同作眼

大莊嚴而自莊嚴。成就如是無量功德。等慈衆生如視一子。亦於是朝日初出時。各取種種天木香等。倍於人間所有香木。其木香氣能滅人中種種臭穢。白車白蓋。駕四白馬。一一車上皆張白帳。其帳四邊懸諸金鈴。種種香花寶幢幡蓋。上妙甘饈種種伎樂。敷師子座。其座四足純紺琉璃。於其座後各皆有七寶倚牀。一一座前復有金杙。復以七寶而爲燈樹。種種寶珠以爲燈明。微妙天花遍布其地。是諸天女。設是供已。心懷哀感。涕淚交流。生大苦惱。亦爲利益安樂衆生。成就大乘第一空行。顯發如來方便密教。亦爲不斷種種說法。往詣佛所稽首佛足。遠百千匝。而白佛言。世尊。唯願如來。哀受我等最後供養。如來知時默然不受。諸天女等。不果所願。心懷憂惱。却在一面默然而坐。爾時復有九恒河沙諸龍王等。住於四方。其名曰和修吉龍王。難陀龍王。婆難陀龍王。而爲上首。是諸龍王亦於是朝日初出時。設諸供具。倍於人天。持至佛所稽首佛足。遠百千匝。而白佛言。唯願如來。哀受我等最後供養。如來知時默然不受。是諸龍王。不果所願。心懷愁惱。却坐一面。爾時復有十恒河沙諸鬼神王。毗沙門王。而爲上首。各相謂言。仁等。今者可速詣佛所。所設供具。倍於諸龍。持往佛所稽首佛足。遠百千匝。而白佛言。唯願如來。哀受我等最後供養。如來知時默然不許。是諸鬼神。不果所願。心懷愁惱。却坐一面。爾時復有二十恒河沙金翅鳥王。降怨鳥王。而爲上首。復有三十恒河沙乾闥婆王。那羅達王。而爲上首。復有四十恒河沙緊那羅王。善見王。而爲上首。復有五十恒河沙摩睺羅伽王。大善見王。而爲上首。復有六十恒河沙阿修羅王。睽婆利王。而爲上首。復有七十恒河沙陀那婆王。無垢河水王。跋提達多王等。而爲上首。復有八十恒河沙羅刹王。可畏王。而爲上首。捨離惡心。更不食人。於怨憎中生慈悲心。其形醜陋。以佛神力皆悉端正。復有九十恒河沙樹林神王。樂香王。而爲上首。復有千恒河沙持呪王。大幻持呪王。而爲上首。復有一億恒河沙貪色鬼魅。善見王。而爲上首。復有百億恒河沙天諸婁女。醜婆女。鬱婆尸女。帝路活女。毗舍佉女。而爲上首。復有千億恒河沙等諸鬼王。白濕王。而爲上首。復有十萬億恒河沙等諸天子。及諸天王。四天王等。復有十萬億恒河沙等四方風神。吹諸樹上。時非時花散。雙樹間。復有十萬億恒河沙主雲雨神。皆作是念。如來涅槃。焚身之時。我當注雨。令火時滅。衆中熱悶。爲作清涼。復有二十恒河沙大香象王。羅曺象王。金色象王。甘味象王。紺曺象王。欲香象王等。而爲上首。敬重



菓同作果下同

鷓同作鷓

香花同作華香

住同作坐

鬱三本俱作蔚

羅紋同作彫文

大乘愛樂天乘。知佛不久當般涅槃。各各拔取無量無邊諸妙蓮花。來至佛所。頭面禮佛。却住一面。復有二十恒河沙等師子獸王。師子吼王而爲上首。施與一切衆生無畏。持諸花菓。來至佛所。稽首佛足。却住一面。復有二十恒河沙等諸飛鳥王。鳧鴈鴛鴦孔雀諸鳥。乾闥婆鳥迦蘭陀鳥鷓鴣鸚鵡俱翅羅鳥婆嚩伽鳥迦陵頻伽鳥者婆鳥。如是等諸鳥。持諸花菓。來至佛所。稽首佛足。却住一面。復有二十恒河沙等水牛牛羊。往至佛所。出妙香乳。其乳流滿拘尸那城。所有溝坑色香美味悉皆具足。成是事已。却住一面。復有二十恒河沙等四天下中諸神仙人。忍辱仙等而爲上首。持諸香花及諸甘菓。來詣佛所。稽首佛足。遶佛三匝。而白佛言。唯願世尊。哀受我等最後供養。如來知時默然不許。時諸仙人不果所願。心懷愁惱。却住一面。閻浮提中一切蜂王。妙音蜂王而爲上首。持種種花。來詣佛所。稽首佛足。遶佛一匝。却住一面。爾時閻浮提中比丘比丘尼一切皆集。唯除尊者摩訶迦葉阿難二衆。復有無量阿僧祇恒河沙等世界中間及閻浮提所有諸山。須彌山王而爲上首。其山莊嚴叢林蔭鬱。枝葉茂盛。蔭蔽日光。種種妙花。周遍嚴飾。龍泉流水。清淨香潔。諸天神乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。神仙呪術作倡伎樂。如是等衆。彌滿其中。是諸山神亦來詣佛。稽首佛足。却住一面。復有阿僧祇恒河沙等四大海神及諸河神。有大威德具大神足。所設供養。倍勝於前。諸神身光伎樂燈明。悉蔽日月。令不復現。以占婆花散照連河。來至佛所。稽首佛足。却住一面。爾時拘尸那城娑羅樹林。其林變白。猶如白鶴。於虛空中自然而有七寶堂閣。雕紋刻鏤。綺飾分明。周匝欄楯。衆寶雜而。堂下多有流泉浴池。上妙蓮花。彌滿其中。猶如北方鬱單越國。亦如忉利歡喜之園。爾時娑羅樹林中。間種種莊嚴。甚可愛樂。亦復如是。是諸天人阿修羅等。咸覩如來涅槃之相。皆悉悲感。愁憂不樂。爾時四天王釋提桓因。各相謂言。汝等觀察諸天世人及阿修羅。大設供養。欲於最後供養如來。我等亦當如是供養。若我最後得供養者。檀波羅蜜。則爲成就。滿足不難。爾時四天王所設供養。倍勝於前。持曼陀羅花摩訶曼陀羅花。迦枳樓伽花摩訶迦枳樓伽花。曼殊沙花摩訶曼殊沙花。散多尼迦花摩訶散多尼迦花。愛樂花大愛樂花。普賢花大普賢花。時花大時花。香城花大香城花。歡喜花大歡喜花。發欲花大發欲花。香醉花大香醉花。普香花大普香花。天金葉花龍花。波利質多樹花。拘毗羅樹花。復持種種上妙甘饈。來至佛所。

幢同作旛

冷三本俱作淨  
○應下同有供  
字○炎同作儀  
鉢梁同作矛楯

蘇下宋明俱同  
空○莎三本俱  
作案

壤同作曠

稽首佛足。是諸天人所有光明。能覆日月。令不復現。以是供具。欲供養佛。如來知時。默然不受。爾時諸天。不果所願。愁憂苦惱。却住一面。爾時釋提桓因。及三十三天。設諸供具。亦倍勝前。及所持花。亦復如是。香氣微妙。甚可愛樂。持得勝堂。并諸小堂。來至佛所。稽首佛足。而白佛言。世尊。我等深樂愛護大乘。唯願如來。哀受我食。如來知時。默然不受。時諸釋天。不果所願。心懷愁惱。却住一面。乃至第六天。所設供養。展轉勝前。寶幢。幡蓋。寶蓋。小者。覆四天下。幡最長者。周圍四海。幢最尊者。至自在天。微風吹。障出妙音聲。持上甘饈。來詣佛所。稽首佛足。而白佛言。世尊。唯願如來。哀受我等。最後供養。如來知時。默然不受。是諸天等。不果所願。心懷愁惱。却住一面。上至有頂。其餘梵衆。一切來集。爾時大梵天王。及餘梵衆。放身光明。遍照四天下。欲界人天。日月光明。悉不復現。持諸寶幢。繒綵。幡蓋。幡極短者。懸於梵宮。至娑羅樹間。來詣佛所。稽首佛足。而白佛言。世尊。唯願如來。哀受我等。最後供養。如來知時。默然不受。爾時毗摩質多阿修羅王。與無量阿修羅大眷屬。俱身諸光明。勝於梵天。持諸寶幢。繒綵。幡蓋。其蓋小者。覆下世界。上妙甘饈。來詣佛所。稽首佛足。而白佛言。唯願如來。哀受我等。最後供養。如來知時。默然不受。諸阿修羅。不果所願。心懷愁惱。却住一面。爾時欲界魔王。波旬。與其眷屬。諸天。婁女。無量無邊。阿僧祇衆。開地獄門。施清冷水。因而告曰。汝等今者。無所能為。唯當專念。如來。應正遍知。建立最。後。隨喜供養。當令汝等。長夜獲安。時魔波旬。於地獄中。悉除刀劍。無量苦毒。熾然。炎火。注雨。滅之。以佛神力。復發。是心。令諸眷屬。皆捨刀劍。弓弩。鎧杖。鉞梁。長鈎。金椎。鉞斧。鬪輪。罽罽。所持。供養。倍勝。一切人天。所設。其蓋小者。覆。中千界。來至佛所。稽首佛足。而白佛言。我等今者。愛樂大乘。守護大乘。世尊。若有善男子。善女人。為供養故。為怖。畏故。為誑他故。為財利故。為隨他故。受是大乘。或真或偽。我等爾時。當為是人。除滅怖畏。說如是呪。

陀枳 唵 唵 羅 唵 枳 盧 呵 隸 摩 訶 盧 呵 隸 阿 羅 遮 羅 多 羅 莎 呵

是呪能令諸失心者。怖畏者。說法者。不斷正法者。為伏外道。故護己身故。護正法故。護大乘故。說如是呪。若有能持如是呪者。無惡象怖。若至曠野。空澤。峻處。不生怖畏。亦無水火。師子。虎狼。盜賊。王難。世尊。若有能持如是呪者。悉能除滅。如是等怖。世尊。持是呪者。我當護之。如龜藏六。世尊。我等今者。不以諛諂。說如是事。持是呪者。我當至

四下同有天宇

摩羅宋作亭歷

怖三本俱作懼  
次同○有下  
有一字

誠益其勢力。唯願如來。哀受我等最後供養。爾時佛告魔波旬言。我不受汝飲食供養。我已受汝所說神呪。爲欲安樂一切衆生。四部衆故。佛說是已。默然不受。如是三請。皆亦不受。時魔波旬不果所願。心懷愁惱。却住一面。爾時大自在天王。與其眷屬無量無邊。及諸天衆。所設供具。悉覆梵釋護世四王人天八部。及非人等。所有供具。梵釋所設。猶如聚墨。在珂貝邊。悉不復現。寶蓋小者。能覆三千大千世界。持如是等供養之具。來詣佛所。稽首佛足。遶無數匝。白佛言。世尊。我等所奉。微末供具。猶如蚊蚋供養於我。亦如有人。以一掬水投於大海。然一小燈。助百千日。春夏之月。衆花茂盛。有持一花。益於衆花。以葶藶子。益須彌山。豈當有益。大海日明。衆花須彌。世尊。我今所奉。微末供具。亦復如是。若以三千大千世界。滿中香花。伎樂幡蓋。供養如來。尚不足言。何以故。如來爲諸衆生。常於地獄餓鬼畜生諸惡趣中。受諸苦惱。是故世尊。應見哀愍。受我等供。爾時東方去此無量無數阿僧祇恒河沙微塵等世界。彼有佛土。名意樂美音。佛號虛空等。如來應供。正遍知。明行足。善逝世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。彼佛不久當般涅槃。善男子。汝可持此世界香飯。其遍知。明行足。善逝世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。彼佛不久當般涅槃。善男子。汝可持此世界香飯。其飯香美食之安隱。可以奉獻。彼佛世尊。世尊。食已。入般涅槃。善男子。并可禮敬。請決所疑。爾時無邊身菩薩摩訶薩。卽受佛教。從座而起。稽首佛足。右遶三匝。與無量阿僧祇大菩薩衆。俱從彼國發來。至此娑婆世界。應時此間三千大千世界。大地六種震動。於是衆中。梵釋四王。魔王波旬。摩醯首羅。如是大衆。見是地動。舉身毛豎。喉舌枯燥。驚怖戰慄。各欲四散。自見其身。無復光明。所有威德。悉滅無餘。是時文殊師利法王子。卽從座起。告諸大衆。諸善男子。汝等勿怖。汝等勿怖。何以故。東方去此無量無數阿僧祇恒河沙微塵等世界。有世界名意樂美音。佛號虛空等。如來應供。正遍知。十號具足。彼有菩薩名無邊身。與無量菩薩欲來至此。供養如來。以彼菩薩威德力故。令汝身光。悉不復現。是故汝等。應生歡喜。勿懷恐怖。爾時大衆。悉皆遙見。彼佛大衆。如明鏡中。自觀己身。時文殊師利復告大衆。汝今所見。彼佛大衆。如見此佛。以佛神力。復當如是。得見九方無量諸佛。爾時大衆。各相謂言。苦哉。苦哉。世間虛空。如來不久當般涅槃。是時大衆。一切悉見。無邊身菩薩。及其眷屬。是菩薩身。一一毛孔。各各出

勸同作芬

生一大蓮花。一一蓮花各有七萬八千城邑。縱廣正等如毗舍離城。墻壁諸澗七寶雜廁。多羅寶樹七重行列。人民熾盛安隱豐樂。閻浮檀金以爲却敵。一一却敵各有種種七寶林樹。華果茂盛。微風吹動出微妙音。其聲和雅。猶如天樂。城中人民聞是音聲。卽時得受上妙快樂。是諸澗中妙水盈滿。清淨香潔如真琉璃。是諸水中有七寶船。諸人乘之遊戲澡浴。共相娛樂快樂無極。復有無量雜色蓮花。優鉢羅花。拘物頭花。波頭摩花。分陀利花。其花縱廣猶如車輪。其澗岸上多有園林。一一園中有五泉池。是諸池中復有諸花。優鉢羅花。拘物頭花。波頭摩花。分陀利花。其花縱廣亦如車輪。香氣馥郁甚可愛樂。其水清淨柔軟第一。鳧鷖鴛鴦遊戲其中。其園各有衆寶宮宅。一一宮宅縱廣正等滿四由旬。所有墻壁四寶所成。所謂金銀琉璃頗梨。真金窻牖。周帊欄楯。玫瑰爲地。金沙布上。是宮宅中多有七寶流泉浴池。一一池邊各有十八黃金梯階。閻浮檀金爲芭蕉樹。如忉利天歡喜之園。是一城各有八萬四千人。一一諸王各有無量夫人嫫女。共相娛樂歡喜受樂。其餘人民亦復如是。各於住處。共相娛樂。是中衆生不聞餘名。純聞無上大乘之聲。是諸花中一一各有師子之座。其座四足皆紺琉璃。柔軟素衣以布座上。其衣微妙出過三界。一一座上一王坐。以大乘法教化衆生。或有衆生書持讀誦如說修行。如是流布大乘經典。爾時無邊身菩薩安止如是無量衆生於自身已。令捨世樂。皆作是言。苦哉苦哉。世間虛空。如來不久當般涅槃。爾時無邊身菩薩與無量菩薩周匝圍繞。示現如是神通力。持是種種無量供具。及以妙香美飲食。若有得聞是食香氣。煩惱諸垢皆悉消滅。以是菩薩神通力故。一切大衆悉皆得見如是變化。無邊身菩薩身大無邊量同虛空。唯除諸佛。餘無能見是菩薩身。其量邊際。爾時無邊身菩薩及其眷屬。所食供養倍勝於前。來至佛所。稽首佛足。合掌恭敬白佛言。世尊。唯願哀愍受我等食。如來知時默然不受。如是三請。悉亦不受。爾時無邊身菩薩及其眷屬却住一面。南西北方諸佛世界。亦有無量無邊身菩薩。所持供養倍勝於前。來至佛所。乃至却住一面。皆亦如是。爾時娑羅雙樹吉祥福地。縱廣三十二由旬。大衆充滿。闕無空缺。爾時四方無邊身菩薩及其眷屬所坐之處。或如錐頭針鋒微塵。十方如微塵等諸佛世界。諸大菩薩悉來集會。及閻浮提一切大衆。亦悉來集。唯除尊者摩訶迦葉。阿難。二衆。阿闍世王及其眷屬。乃至毒蛇。視能殺人。蜂蟻。蝮蝎。及十六種行惡業者。

編三本俱作蓋

一切來集。陀那婆神阿修羅等。悉捨惡念。皆生慈心。如父如母如姊如妹。三千大千世界衆生慈心相向。亦復如是。除一闍提。爾時三千大千世界以佛神力故。地皆柔軟。無有丘墟土沙礫石荆棘毒草。衆寶莊嚴。猶如西方無量壽佛極樂世界。是時大衆悉見十方如微塵等諸佛世界。如於明鏡自觀己身。見諸佛土亦復如是。爾時如來面門所出五色光明。其光明曜覆諸大會。令彼身光悉不復現。所應作已。還從口入。時諸天人及諸會衆阿修羅等。見佛光明還從口入。皆大恐怖。身毛爲豎。復作是言。如來光明出已。還入。非無因緣。必於十方所作已辦。將是最後涅槃之相。何其苦哉。何其苦哉。如何世尊。一旦捨離。四無量心。不受人天所奉供養。聖慧日光。從今永滅。無上法船於斯沉沒。嗚呼痛哉。世間大苦。舉手隨匄悲號啼哭。支節戰動。不能自持。身諸毛孔流血灑地。

# 大般涅槃經卷第一

品目宋元俱在  
經題經下以下  
卷首品目皆准  
之

# 大般涅槃經卷第二

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門惠嚴等依泥洹經加之

## 純陀品第二

尸下三本俱無  
解字○唯同作  
唯宋作惟

喻三本俱作譬  
下同○唯同作  
惟○懸同作例  
下同  
芽宋作芽  
疑三本俱作閃  
次同

爾時會中有優婆塞，是拘尸闍城工巧之子，名曰純陀。與其同類十五人俱，為令世間得善果故，捨身威儀，從座而起，偏袒右肩，右膝著地，合掌向佛，悲感流淚，頂禮佛足，而白佛言：「唯願世尊及比丘僧，哀受我等最後供養，為度無量諸衆生故。世尊，我等從今無主，無親，無救，無護，無歸，無趣，貧窮，飢困，欲從如來求將來食。唯願哀受我等，微供，然後涅槃。世尊，譬如剎利若婆羅門，毗舍首陀，以貧窮故，遠至他國，役力農作，得好調牛。良田，平正，無諸沙鹵，惡草，荒穢。唯憐天雨，言調牛者，喻身口七。良田，平正，喻於智慧。除去沙鹵，惡草，荒穢，喻除煩惱。世尊，我今身有調牛，良田，耘除衆穢。唯憐如來甘露法雨。貧四姓者，即我身是。貧於無法之財寶。唯願哀愍，除斷我等貧窮困苦。拯及無量苦惱衆生。我今所供，雖復微少，冀得充足。如來大眾，我今無主，無親，無歸，願垂矜愍。如羅睺羅，爾時世尊一切種智，無上調御，告純陀曰：「善哉善哉。我今為汝除斷貧窮。無法雨，汝身田，令生法芽。汝今於我欲求壽命，色力安樂，無礙辯才。我當施汝常命，色力安無礙辯。何以故？純陀，施食有二果報，無差。何等為二？一者受已，得阿耨多羅三藐三菩提。二者受已，入於涅槃。我今受汝最後供養，令汝具足檀波羅蜜。爾時純陀即白佛言：如佛所說，二施果報，無差別者，是義不然。何以故？先受施者，煩惱未盡。未得成就一切種智，亦未能令衆生具足檀波羅蜜。後受施者，煩惱已盡，已得成就一切種智，能令衆生普得具足檀波羅蜜。先受施者，猶是衆生。後受施者，是天中天。先受施者，是雜食身，煩惱之身。是後邊身，是無常身。後受施者，無煩惱身，金剛之身。法身常身，無邊之身。云何而言二施果報等無差別？先受施者，未能具足檀波羅蜜。乃至般若波羅蜜，唯得肉眼，未得佛眼。乃至

慧眼。後受施者。已得具足檀波羅蜜。乃至般若波羅蜜。具足佛眼。乃至慧眼。云何而言二施果報等無差別。世尊先受施者。受已食之入腹消化。得命得色得力得安得無礙辯。後受施者。不食不消無五事果。云何而言二施果報等無差別。佛言。善男子。如來已於無量無邊阿僧祇劫。無有食身煩惱之身。無後邊身常身法身金剛之身。善男子。未見佛性者。名煩惱身雜食之身。是後邊身菩薩。爾時受飲食已入金剛三昧。此食消已即見佛性。得阿耨多羅三藐三菩提。是故我言二施果報等無差別。菩薩爾時雖不廣說十二部經。先已通達。今入涅槃廣為衆生分別演說。是故我言二施果報等無差別。善男子。如來之身已於無量阿僧祇劫不受飲食。為諸聲聞。說言先受難陀難陀波羅二牧牛女所奉乳糜然後乃得阿耨多羅三藐三菩提。我實不食。我今善為此會大衆。是故受汝最後所奉。實亦不食。爾時大衆聞佛世尊普為大會哀受純陀最後供養。歡喜踊躍同聲讚言。善哉善哉。希有純陀。汝今立字名不虛稱。言純陀者名解妙義。汝今建立如是大義。是故依實從義立名。故名純陀。汝今現世得大名利德願滿足。甚奇純陀。生在人中復得難得無上之利。善哉純陀。如優曇花世間希有。佛出於世亦復甚難。值佛生信聞法復難。佛臨涅槃最後供養。能辦此事復難於是。南無純陀。南無純陀。汝今已具檀波羅蜜。猶如秋月十五日夜清淨圓滿。無諸雲翳。一切衆生無不瞻仰。汝亦如是。而為我等之所瞻仰。佛已受汝最後供養。令汝具足檀波羅蜜。南無純陀。是故說汝如月盛滿一切衆生無不瞻仰。南無純陀。雖受人身心如佛心。汝今純陀。真是佛子。如羅睺羅等無有異。爾時大衆即說偈言。

汝雖生人道 已超第六天 我及一切衆 今故稽首請 人中最勝尊 今當入涅槃 汝應愍我等  
唯願速請佛 久住於世間 利益無量衆 演說智所讚 無上甘露法 汝若不請佛 我命將不全  
是故應見為 稽請調御師

爾時純陀歡喜踊躍。譬如有人父母卒喪忽然還活。純陀歡喜亦復如是。復起禮佛而說偈言。  
快哉獲已利 善得於人身 蠲除貪恚等 永離三惡道 快哉獲已利 遇得金寶聚 值遇調御師

修元明俱作壽  
下同○以同作

不懼墮畜生 佛如優曇花 值遇生信難 遇已種善根 永滅饑鬼苦 亦復能損滅 阿修羅種類

芥子投針鋒 佛出難於是 我以具足檀 度人天生死 佛不染世法 如蓮花處水 善斷有頂種

永度生死流 生世為人難 值佛世亦難 猶如大海中 盲龜遇浮孔 我今所奉食 願得無上報

一切煩惱結 摧破無堅固 我今於此處 不求天人身 設使得之者 心亦不甘樂 如來受我供

歡喜無有量 猶如伊蘭花 出於梅檀香 我身如伊蘭 如來受我供 一切諸世間 悉生大苦惱 是故我歡喜

我今得現報 最勝上妙處 釋梵諸天等 悉來供養我 一切諸世間 應視如一子 如來在僧中 以知佛世尊

今欲入涅槃 高聲唱是言 世間無調御 不應捨眾生 猶如虛空中 雲起得清涼 如來能善除 苦水之所漂

如須彌寶山 安處于大海 佛智能善斷 我等無明闇 猶如虛空中 戀慕增悲慟 悉皆為生死 苦水之所漂

一切諸煩惱 猶如日出時 除雲光普照 是諸眾生等 戀慕增悲慟 悉皆為生死 苦水之所漂

以是故世尊 應長眾生信 為斷生死苦 久住於世間 佛告純陀如是如是如汝所說 佛出世難如優曇花 值佛生信亦復甚難 佛臨涅槃最後施食 能具足檀倍復甚

難 汝今純陀 莫大愁苦 應當歡喜 深自慶幸 得值最後供養 如來成就具足檀波羅蜜 不應請佛久住於世 汝今

常觀諸佛境界 悉皆無常 諸行性相 亦復如是 即為純陀而說偈言

一切諸世間 生者皆歸死 壽命雖無量 要必有終盡 夫盛必有衰 合會有別離 壯年不久停

盛色病所侵 命為死所吞 無有法常住 諸王得自在 勢力無等雙 一切皆遷滅 壽命亦如是

衆苦輪無際 流轉無休息 三界皆無常 諸有悉非樂 有道本性相 一切皆空無 可壞法流轉

常有憂患等 恐怖諸過惡 老病死衰惱 是諸無有邊 易壞怨所侵 煩惱所纏裹 猶如蠶處繭

何有智慧者 而當樂是處 此身苦所集 一切皆不淨 扼縛纏著等 根本無義利 上至諸天身

皆亦復如是 諸欲皆無常 故我不貪著 難欲善思惟 而證真實法 究竟斷有者 今日當涅槃

我度有彼岸 出過一切苦 是故於今者 惟受上妙樂



敬三本俱作言

唯宋元俱作惟  
○言三本俱作  
曰○使同作令

伎元明俱作技  
下同○應下三  
本俱有供字

門下同無等字

通宋作福

爾時純陀白佛言。世尊。如是如是。誠如聖教。我今所有智慧微淺。猶如蚊蚋。何能思議。如來涅槃深奧之義。世尊。我今已與諸大龍象菩薩摩訶薩。斷諸結漏。文殊師利法王子等。世尊。譬如幼年初得出家。雖未具戒。即墮僧數。我亦如是。以佛菩薩神通力故。得在如是。大菩薩數。是故我今欲令如來久住於世。不入涅槃。譬如飢人終無變吐。唯願世尊。亦復如是。常住於世。不入涅槃。爾時文殊師利法王子告純陀言。純陀。汝今不應發如是言。欲使如來常住於世。不般涅槃。如彼飢人無有變吐。汝今當觀諸行性相。如是觀行具空三昧。欲求正法。應如是學。純陀問言。文殊師利。夫如來者。天上人中最尊最勝。如是如來。豈是行耶。若是行者。爲生滅法。譬如水泡速起速滅。往來流轉。猶如車輪。一切諸行亦復如是。我聞諸天壽命極長。云何世尊。是天中天。壽命更促。不滿百年。如聚落主。勢得自在。以自在力能制他人。是人福盡。其後貧賤。人所輕憐。爲他策使。所以者何。失勢力故。世尊亦爾。同於諸行。同諸行者。則不得稱爲天中天。何以故。諸行卽是生死法故。是故文殊。勿觀如來同於諸行。復次文殊。爲知而說。不知而說。而言如來同於諸行。設使如來同諸行者。則不得言於三界中。爲天中天。自在法王。譬如人王有大力士。其力當千。更無有能降伏之者。故稱此士一人當千。如是力士王所愛念。偏賜爵祿。封賞自然。所以得稱當千人者。是人未必力敵於千。但以種種伎藝。所能能勝千故。故稱當千。如來亦爾。降煩惱魔。陰天魔。死魔。是故如來名三界尊。如彼力士一人當千。以是因緣成就。具足種種無量真實功德。故稱如來。應正遍知。文殊師利。汝今不應憶想分別。以如來法同於諸行。譬如巨富長者生子。相師占之。有短壽相。父母聞已知其不任紹繼家嗣。不復愛重視之。如草。夫短壽者。不爲沙門婆羅門等男女大小之所敬念。若使如來同諸行者。亦復不爲一切世間人天衆生之所奉敬。如來所說不變不異。真實之法。亦無受者。是故文殊。不應說言。如來同於一切諸行。復次文殊。譬如貧女。無有居家救護之者。加復病苦。飢渴所逼。遊行乞食。止他客舍。寄生一子。是客舍主驅逐令去。携抱是兒。欲至他國。於其中路。遇惡風雨。寒苦並至。多爲蚊蠅蜂蟻毒蟲之所咬食。經由恒河抱兒而度。其水漂疾而不放捨。於是母子遂共俱沒。如是女人慈念功德。命終之後。生於梵天。文殊師利。若有善男子欲護正法。勿說如來同於諸行。不同諸行。唯當自責我今愚癡。未有慧眼。如來正法不可思議。是故不應宣說。如來定是有爲定。

慙下同有心字

至明作知

言上三本俱無  
答字

是無爲。若正見者。應說如來定是無爲。何以故。能爲衆生。生善法故。生憐愍故。如彼貧女在於恒河爲愛念子而捨身命。善男子。護法菩薩亦應如是。寧捨身命不說如來同於有爲。當言如來同於無爲。以說如來同無爲故。得阿耨多羅三藐三菩提。如彼女人得生梵天。何以故。以護法故。云何護法。所謂說言如來同於無爲。善男子。如是人雖不求解脫。解脫自至。如彼貧女不求梵天。梵天自應。文殊師利。如人遠行中路疲極。寄止他舍。臥寐之中。其室忽然大火卒起。卽時驚寤。尋自思惟。我於今者定死不疑。具慚愧故。以衣纏身。卽便命終。生忉利天。從是已後。滿八十反作大梵王。滿百千世。生於人中。爲轉輪王。是人不復生三惡趣。屢轉常生安樂之處。以是緣故。文殊師利。若善男子有慚愧者。不應觀佛同於諸行。文殊師利。外道邪見。可說如來同於有爲。持戒比丘不應如是。於如來所生有爲想。若言如來是有爲者。卽是妄語。當知是人死入地獄。如人自處於己舍宅。文殊師利。如來真實是無爲法。不應復言是有爲也。汝從今日於生死中。應捨無知求於正智。當知如來卽是無爲。若能如是觀如來者。具足當得三十二相。疾成阿耨多羅三藐三菩提。爾時文殊師利法王子讚純陀言。善哉善哉。善男子。汝今已作長壽因緣。能知如來是常住法。不變異法。無爲之法。汝今如是善覆如來有爲之相。如被火人爲慚愧。故以衣覆身。以是善心。生忉利天。復爲梵王。轉輪聖王。不至惡趣。常受安樂。汝亦如是。善覆如來有爲相故。於未來世。必定當得三十二相。八十種好。具足十八不共之法。無量壽命。不生在死。常受安樂。不久得成。應正遍知。純陀。如來次後自當廣說。我之與汝。俱亦當覆如來有爲。有爲無爲。且共置之。汝可隨時速施飯食。如是施者。諸施中最。若比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。遠行疲極。所須之物。應當清淨。隨時給與。如是速施。卽是具足檀波羅蜜。根本種子。純陀。若有最後施佛及僧。若多若少。若足不足。宜速及時。如來正爾。當般涅槃。純陀答言。文殊師利。汝今何故貪爲此食。而言多少。足與不足。令我時施。文殊師利。如來昔日苦行六年。尙自支持。況於今日。須臾間耶。文殊師利。汝今實謂如來正覺。受斯食耶。然我定知。如來身者。卽是法身。非爲食身。爾時佛告文殊師利。如是如是。如純陀言。善哉純陀。汝已成。就微妙大智。善入甚深大乘經典。文殊師利。語純陀言。汝謂如來是無爲者。如來之身。卽是長壽。若作是知。佛所悅可。純陀答言。如來非獨悅可於我。亦復悅可一切衆生。文殊師利言。如來於汝及以我等

略三本俱作號  
○咽元明俱作  
覆

池三本俱作沫

泣同作哭○憐  
同作哀

汝上同無純陀  
二字

一切衆生皆悉悅可。純陀答言。汝不應言如來悅可。夫悅可者。則是倒想。若有倒想。則是生死。有生死者。卽有爲法。是故文殊。勿謂如來是有爲也。若言如來是有爲者。我與仁者俱行顛倒。文殊師利。如來無有愛念之想。夫愛念者。如彼乳牛愛念其子。雖復飢渴行求水草。若不足。忽然還歸。諸佛世尊。無有是念。等視一切。如羅睺羅。如是念者。卽是諸佛智慧境界。文殊師利。譬如國王調御駕驪。欲馳驅乘令及之者。無有是處。我與仁者亦復如是。欲盡如來微密深奧。亦無是處。文殊師利。如金翅鳥飛昇虛空。無量由旬。下觀大海。悉見水性魚鼈龜鼈龍之屬。及見已影。如於明鏡。見諸色像。凡夫少智不能籌量。如是所見。我與仁者亦復如是。不能籌量。如來智慧。文殊師利。語純陀言。如是如是。如汝所說。我於此事非爲不達。直欲試汝諸菩薩事。爾時世尊從其面門。出種種光。其光明曜照。文殊身。文殊師利遇斯光已。卽知是事。尋告純陀。如來今者現是瑞相。不久必當入於涅槃。汝先所設最後供養。宜時奉獻。佛及大衆。純陀當知。如來如是種種光明。非無因緣。純陀聞已。悲塞默然。佛告純陀。汝所奉施佛及大衆。今正是時。如來正爾當般涅槃。第二第三亦復如是。爾時純陀聞佛語已。舉聲啼哭。悲咽而言。苦哉苦哉。世間虛空。復白大衆。我等今者一切當共五體投地。同聲勸佛。莫般涅槃。爾時世尊復告純陀。莫大啼哭。自亂其心。當觀是身。猶如芭蕉。熱時之炎。水泡。幻化。輒闌婆城。坏器。電光。亦如畫水。臨死之囚。熟果。段肉。如織經。盡如確上下。當觀諸行。猶雜毒食。有爲之法。多諸過患。於是純陀復白佛言。如來不欲久住於世。我當云何。而不啼泣。苦哉苦哉。世間虛空。唯願世尊。憐愍我等及諸衆生。久住於世。勿般涅槃。佛告純陀。汝今不應發如是言。哀愍我。故久住於世。我以哀愍。汝及一切。是故今日欲入涅槃。何以故。諸佛法爾有爲亦然。是故諸佛而說是偈。

有爲之法 其性無常 生已不住 寂滅爲樂

純陀。汝今當觀一切行雜。諸法無我。無常不住。此身多有無量過患。猶如水泡。是故汝今不應啼泣。爾時純陀復白佛言。如是如是。誠如尊教。雖知如來方便示現。入於涅槃。而我不能不懷憂惱。覆自思惟。復生慶悅。佛讚純陀。善哉善哉。能知如來示同衆生方便涅槃。純陀。汝今當聽。如娑羅婆鳥春陽之月。皆共集被阿耨達池。諸佛亦爾。皆至是處。純陀。汝今不應思惟諸佛長壽短壽。一切諸法。皆如幻相。如來在中。以方便力。無所染著。何以故。諸佛

爾同作滿

大般涅槃經卷第二

一八

法爾純陀。我今受汝所獻供養。為欲令汝度脫生死。諸有漏故。若諸人天於此最後供養我者。悉皆當得不動果報。常受安樂。何以故。我是衆生良福田故。汝若復欲為諸衆生作福田者。速辦所施。不宜久停。爾時純陀為諸衆生得度脫故。低頭飲淚。而白佛言。善哉世尊。我若堪任為福田時。則能了知。如來涅槃及非涅槃。我等今者及諸聲聞緣覺智慧。猶如蚊蚋。實不能量。如來涅槃及非涅槃。爾時純陀及其眷屬。愁憂啼泣。圍遮如來。燒香散華。盡心敬奉。尋與文殊。從座而去。供辦食具。

### 大般涅槃經哀歎品第三

品目上明無極  
名下皆同

純陀去已未久之頃。是時此地六種震動。乃至梵世亦復如是。地動有二。或有地動或大地動。小動者名為地動。大動者名大地動。有小聲者名曰地動。有大聲者名大地動。獨地動者名曰地動。山林河海一切動者名大地動。一向動者名曰地動。周迴旋轉名大地動。動名地動。動時能令衆生心動。名大地動。菩薩初從兜率天下闍浮提時。名大地動。從初生出家成阿耨多羅三藐三菩提。轉於法輪及般涅槃。名大地動。今日如來將入涅槃。是故此地如是大動。時諸天龍。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽人及非人。聞是語已。身毛皆豎。同聲哀泣。而說偈言。

遠元明俱作遠

稽首調御師 我等今勸請 遠離於人仙 永無有救護 今見佛涅槃 我等沒苦海 悲戀懷憂惱

如犢失其母 貧窮無救護 猶如困病人 無醫隨自心 食所不應食 衆生煩惱病 常為諸見害

遠離法醫王 服食邪毒藥 是故佛世尊 不應見遺捨 如國無君主 人民皆飢餓 我等亦如是

失蔭及法味 今聞佛涅槃 我等心迷亂 如彼大地動 達失於諸方 大仙人涅槃 佛日墜於地

法水悉枯竭 我等定當死 如來般涅槃 衆生極苦惱 譬如長者子 新喪於父母 如來入涅槃

如其不遺者 我等及衆生 悉無有救護 如來入涅槃 乃至諸畜生 一切皆愁怖 苦惱焦其心

我等於今日 云何不愁惱 如來見放捨 猶如棄涕唾 譬如日初出 光明甚暉炎 既能還自照

我等乃至涕唾  
四句元明俱在  
如來上

以三本俱作已

曰同作言

普宋作苦

者三本俱作苦  
○道下同無者  
字○修元作脩

階上三本俱無  
汝字

亦滅一切闇 如來神通光 能除我苦惱 處在大衆中 譬如須彌山

世尊。譬如國王生育諸子。形貌端正。心常愛念。先教伎藝。悉令通利。然後棄之。付旃陀羅。世尊。我等今日爲法王子。蒙佛教誨。以具正見。願莫放捨。如其放捨。則同王子。唯願久住。不入涅槃。世尊。譬如有人善學諸論。復於此論而生怖畏。如來亦爾。通達諸法。而於諸法。復生怖畏。若使如來久住於世。說甘露味。充足一切。如是衆生。則不復畏墮於地獄。世尊。譬如有人初學作務。爲官所收閉之。囹圄。有之間之。汝受何事。答曰。我今受大憂苦。若其得脫。則得安樂。世尊亦爾。爲我等故。修諸苦行。我等今者。猶未得免生死苦惱。云何如來。得受安樂。世尊。譬如醫王。善解方藥。偏以祕法。教授其子。不教其餘。外受學者。如來亦爾。獨以甚深祕密之藏。偏教文殊。遺棄我等。不見顧盼。如來於法。應無祕恡。如彼醫王。偏教其子。不教外來。諸受學者。彼醫所以不能普教。情存勝負。故有祕惜。如來之心。終無勝負。何故。如是不見教誨。唯願久住。莫般涅槃。世尊。譬如老少病苦之人。捨遠夷塗。而行險道。險道多難。備受衆苦。更有異人。見而愍之。即便示以平坦好路。世尊。我亦如是。所言少者。喻未增長法身之人。所言老者。喻重煩惱。所言病者。譬未脫生死。所言險道者。喻二十五有。唯願如來。示導我等。甘露正道。久住於世。勿入涅槃。爾時世尊告諸比丘。汝等比丘。莫如凡夫。諸天人等。愁憂啼哭。當勤精進。繫心正念。時諸天人。阿修羅等。聞佛所說。止不啼哭。猶如有人。喪其愛子。殞送已訖。抑止不哭。爾時世尊。爲諸大衆。說是偈言。

汝等當開意 不應大愁苦 諸佛法皆爾 是故當默然 樂不放逸行 守心正憶念 遠離諸非法 自慰受歡樂

復次比丘。若有疑惑。今皆當問。若空不空。若常無常。若苦不苦。若依非依。若去不去。若歸非歸。若恒非恒。若斷若常。若衆生非衆生。若有若無。若實不實。若真不真。若滅不滅。若密不密。若二不二。如是等種種法中。有所疑者。今應諮問。我當隨順。爲汝斷之。亦當爲汝先說甘露。然後乃當入於涅槃。諸比丘。佛出世難。人身難得。值佛生信。是事亦難。能忍難忍。是亦復難。戒就禁戒。具足無缺。得阿羅漢果。是事亦難。如求金沙。優曇鉢花。汝諸比丘。離於八難。得人身難。汝等遇我不應空過。我於往昔。種種苦行。今得如是無上方便。爲汝等故。無量劫中。捨身手足。頭目。

十力慧日明作  
慧日十力

漢三本俱作洎

髓腦。是故汝等不應放逸。汝等比丘。云何莊嚴正法寶城。具足種種功德珍寶。戒定智慧以爲塿漸。汝今遇是佛  
法寶城。不應取此虛僞之物。譬如商主遇眞寶城。取諸瓦礫而便還家。汝亦如是。值遇寶城。取虛僞物。汝諸比丘  
勿以下心而生知足。汝等今者雖得出家。於此大乘不生貪慕。汝諸比丘。身雖得服袈裟染衣。心猶未染大乘淨  
法。汝諸比丘。雖行乞食經歷多處。初未曾求大乘法食。汝諸比丘。雖除鬚髮未爲正法除諸結使。汝諸比丘。今當  
眞實教敕汝等。我今現在大衆和合。如來法性眞實不倒。是故汝等。應當精進攝心勇猛摧諸結使。十力慧日既  
潛沒已。汝等當爲無明所覆。諸比丘。譬如大地諸山藥草爲衆生用。我法亦爾。出生妙善甘露法味。而爲衆生種  
種煩惱病之良藥。我今當令一切衆生及我諸子四部之衆悉皆安住祕密藏中。我亦復當安住是中。入於涅槃。  
何等名爲祕密之藏。猶如伊字三點。若並則不成。伊縱亦不成。如摩醯首羅面上三目。乃得成伊。三點若別亦不  
得成。我亦如是。解脫之法亦非涅槃。如來之身亦非涅槃。摩訶般若亦非涅槃。三法各異亦非涅槃。我今安住如  
是三法。爲衆生故名入涅槃。如世伊字。爾時諸比丘。聞佛世尊定當涅槃。皆悉憂愁身毛爲豎。涕淚交流。稽首佛  
足。遶無量匝。白佛言。世尊。快說無常苦空無我。世尊。譬如一切衆生。跡中象跡爲上。是無常想亦復如是。於諸想  
中。最爲第一。若有精勤修習之者。能除一切欲界貪愛色無色愛。無明憍慢及無常想。世尊。譬如來若離無常想者  
今則不應入於涅槃。若不離者。云何說言修無常想。離三界愛。無明憍慢及無常想。世尊。譬如農夫於秋月時深  
耕其地。能除穢草。是無常想亦復如是。能除一切欲界貪愛色無色愛。無明憍慢及無常想。世尊。譬如耕田秋耕  
爲上。如諸跡中象跡爲勝。於諸想中無常爲最。世尊。譬如帝王知命將終。思救天下。獄囚繫閉。悉令得脫。然後捨  
命。如來今者亦應如是。度諸衆生。一切無知無明繫閉。皆令解脫。然後涅槃。我等今者皆未得度。云何如來便欲  
放捨入於涅槃。世尊。譬如有人爲鬼所持。遇良呪師。以呪力故。使得除差。如來亦爾。爲諸聲聞除無明鬼。令得安  
住。摩訶般若解脫等法。如世伊字。世尊。譬如香象爲人所縛。雖有良師不能禁制。頓絕羈鎖。自恣而去。我未如是  
脫五十七煩惱繫縛。云何如來便欲放捨入於涅槃。世尊。如人病瘵。值遇良醫。所苦得除。我亦如是。多諸患苦。邪  
命熱病。雖遇如來。病未除愈。未得無上安隱常樂。云何如來便欲放捨入於涅槃。世尊。譬如醉人不自覺知。不識

等三本俱作無  
我二字○見同  
作視

顯宋元俱作儻  
下同

苦下三本俱有  
空字

親踈母女姊妹。迷荒姪亂言語。放逸臥不淨中。時有良師與藥令服。服已卽吐。還自憶誠。心懷慚愧。深自尅責。酒爲不善諸惡根本。若能除斷。則遠衆罪。世尊我亦如是。往昔已來輪轉生死。情色所醉。貪嗜五欲。非母母想。非姊妹想。非女女想。於非衆生。生衆生想。是故輪轉受生死苦。如彼醉人臥不淨中。如來今當施我法藥。令我還吐煩惱惡酒。而我未得醒寤之心。云何如來便欲放捨入於涅槃。世尊。譬如有人歎芭蕉樹以爲堅實。無有是處。世尊。衆生亦爾。若歎我人衆生壽命。養育知見作者受者。是真實者。亦無是處。我等如是。修無我想。世尊。譬如漿滓無所復用。是身亦爾。無我無主。世尊。如七葉花。無有香氣。是身亦爾。無我無主。我等如是。心常修習無我之想。如佛所說。一切諸法。無我我所。汝諸比丘。應當修習。如是修已。則除我慢。離我慢。已便入涅槃。世尊。譬如鳥跡空中。現者無有是處。有能修習無我想者。而有諸見。亦無是處。爾時世尊讚諸比丘。善哉善哉。汝等善能修無我想。時諸比丘卽白佛言。世尊。我等不但修無我想。亦更修習其餘諸想。所謂苦想。無常等想。世尊。譬如人醉。其心眩亂。見諸山川。城郭宮殿。日月星辰。皆悉廻轉。世尊。若有不修苦無常想。無我等想。如是之人。不名爲聖。多諸放逸。流轉生死。世尊。以是因緣。我等善修如是諸想。爾時佛告諸比丘言。諦聽諦聽。汝向所引醉人喻者。但知文字未達其義。何等爲義。如彼醉人見上日月。實非廻轉。生廻轉想。衆生亦爾。爲諸煩惱無明所覆。生顛倒心。我計無我。常計無常。淨計不淨。樂計爲苦。以爲煩惱之所覆故。雖生此想。不達其義。如彼醉人於非轉處。而生轉想。我者卽是佛義。常者是法身義。樂者是涅槃義。淨者是法義。汝等比丘。云何而言。有我想者。僞慢貢高。流轉生死。汝等若言。我亦修習無常苦無我等想。是三種修無有實義。我今當說勝三修法。苦者計樂樂者計苦。是顛倒法。無常計常常計無常。是顛倒法。無我計我。我計無我。是顛倒法。不淨計淨淨計不淨。是顛倒法。有如是等四顛倒法。是人不知正修諸法。汝諸比丘。於苦法中。而生樂想。於無常中。而生常想。於無我中。而生我想。於不淨中。而生淨想。世間亦有常樂我淨。出世亦有常樂我淨。世間法者。有字無義。出世間者。有字有義。何以故。世間之法。有四顛倒。故不知義。所以者何。有想顛倒。心倒。見倒。以三倒故。世間之人。樂中見苦。常見無常。我見無我。淨見不淨。是名顛倒。以顛倒故。世間知字而不知義。何等爲義。無我者卽生死。我者卽如來。無常者聲聞緣覺。常者如來法身。苦者一切外

倒上宋元俱有  
倒字明有顛字

當三本俱作等

原元明俱作源  
○病三本俱作  
患

伎同作技

道樂者卽是涅槃。不淨者卽有爲法。淨者諸佛菩薩所有正法。是名不顛倒。以不倒故。知字知義。若欲遠離四顛倒者。應知如是常樂我淨時。諸比丘白佛言。世尊。如佛所說。離四倒者。則得了知常樂我淨。如來今者永無四倒。則已。了知常樂我淨。若已。了知常樂我淨。何故不住一劫半劫。教導我等。令離四倒。而見放捨。欲入涅槃。如來若見顛念。教勅我當至心頂受修習。如來若當入涅槃者。我當云何。與是毒身同共止住。修於梵行。我等亦當隨佛。世尊入於涅槃。爾時佛告諸比丘。汝等不應作如是語。我今所有無上正法。悉以付囑摩訶迦葉。是迦葉者。當爲汝等作大依止。猶如如來爲諸衆生作依止處。摩訶迦葉亦復如是。當爲汝等作依止處。譬如大王多所統領。若遊巡時。悉以國事付囑大臣。如來亦爾。所有正法。亦以付囑摩訶迦葉。汝等當知。先所修習。無常苦想。非是真實。譬如春時有諸人等。在大池浴乘船遊戲。失琉璃寶沒深水中。是時諸人悉共入水求覓。是寶。競捉瓦石草木砂礫。各自謂得琉璃珠。歡喜持出。乃知非真。是時寶珠猶在水中。以珠力故。水皆澄清。於是大衆乃見寶珠。故在水下。猶如仰觀虛空月形。是時衆中有一智人。以方便力。徐徐入水。卽便得珠。汝等比丘。不應如是修習。無常苦無我想。不淨想等。以爲實義。如彼諸人。各以瓦石草木砂礫。而爲寶珠。汝等應當善學。方便在在處處。常修我想。常樂淨想。復應當知。先所修習。四法相親。悉是顛倒。欲得真實修諸想者。如彼智人。巧出寶珠。所謂我想。常樂淨想。爾時諸比丘白佛言。世尊。如佛先說。諸法無我。汝當修學。修學是已。則離我想。離我想者。則離憍慢。離憍慢者。得入涅槃。是義云何。佛告諸比丘。善哉善哉。汝今善能諮問。是義爲自斷疑。譬如國王闇鈍少智。有一醫師。性復頑罵。而王不別。厚賜俸祿。療治衆病。純以乳藥。亦復不知。病起根原。雖知乳藥。復不善解。風冷熱病。一切諸病。悉教服乳。是王不別。是醫知乳好醜。善惡。復有明醫。曉八種術。善療衆病。知諸方藥。從遠方來。是時舊醫不知。諮受反生。貴高輕慢之心。彼時明醫。卽便依附。請以爲師。諮受醫方。祕奧之法。語舊醫言。我今請仁。以爲師範。唯願爲我宣暢解說。舊醫答言。卿今若能爲我。給使四十八年。然後乃當教汝醫法。時彼明醫卽受其教。我當如是我當如是。隨我所能。當給走使。是時舊醫卽將客醫。共入見王。是時客醫卽爲王說種種醫方。及餘伎藝。大王當知。應善分別。此法如是可以治國。此法如是可以療病。爾時國王聞是語已。方知舊醫癡闇無智。卽便驅逐。令出國界。



今明作令

應下三本俱有  
供字○四同作  
王  
命同作者

然後倍復恭敬客醫。是時客醫作是念言。欲教王者。今正是時。卽語王言。大王。於我實愛念者。當求一願。王卽答言。從此右臂及餘身分。隨意所求。一切相與。彼客醫言。王雖許我一切身分。然我不敢多有所求。今所求者。願王宣令一切國內。從今已往。不得復服舊醫乳藥。所以者何。是藥毒害多。傷損故。若故服者。當斬其首。斷乳藥已。終無復有橫死之人。常處安樂。故求是願。時王答言。汝之所求。蓋不足言。尋爲宣令一切國內。凡諸病人。皆悉不聽。以乳爲藥。若爲藥者。當斬其首。爾時客醫和合衆藥。謂辛苦鹹甜醋等味。以療衆病。無不得差。其後不久。王復得病。卽命是醫。我今病困。當云何治。醫占王病。應用乳藥。尋白王言。如王所患。應當服乳。我於先時所斷乳藥。是非實語。今若服者。最能除病。王今患熱。正應服乳。時王語醫。汝今狂耶。爲熱病乎。而言服乳能除此病。汝先言毒。今云何服。欲欺我耶。先醫所讚。汝言是毒。令我驅遣。今復言好。最能除病。如汝所言。我本舊醫定爲勝汝。是時客醫復語王言。王今不應作如是語。如蟲食木。有成字者。此蟲不知是字。非字。智人見之。終不唱言是蟲解字。亦不驚怪。大王當知。舊醫亦爾。不別諸病。悉與乳藥。如彼蟲道。偶得成字。是先舊醫不解乳藥好醜善惡。時王問言。云何不。解客醫答王。是乳藥者。亦是毒害。亦是甘露。云何是乳。復名甘露。若是乳牛。不食酒糟。滑草麥。其糞調善。放牧之處。不在高原。亦不下濕。飲以清水。不令馳走。不與特牛同共一羣。飲食調適。行住得所。如是乳者。能除諸病。是則名爲甘露妙藥。除是乳已。其餘一切。皆名毒害。爾時大王聞是語。已讚言。大醫善哉。善哉。我從今日。始知乳藥善惡好醜。卽便服之。病得除愈。尋時宣令一切國內。從今已往。當服乳藥。國人聞之。皆生瞋恨。咸相謂言。大王。今者爲鬼所持。爲是狂耶。而誑我等。復令服乳。一切人民。皆懷瞋恨。悉集王所。王言。汝等。不應於我而生瞋恨。如此乳藥。服與不服。悉是醫教。非是我咎。爾時大王及諸人民。踊躍歡喜。倍共恭敬供養。是醫一切病者。皆服乳藥。病悉除愈。汝等比丘。當知。如來應正遍知。明行足。善逝世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。亦復如是。爲大醫王。出現於世。降伏一切外道邪醫。諸四衆中。唱如是言。我爲醫王。欲伏外道。故唱是言。無我無人。衆生壽倫。養育。知見。作者。受者。比丘。當知。是諸外道所言。我者。如蟲食木。偶成字耳。是故如來於佛法中。唱言。無我。爲調衆生。故。爲知時故。如是無我有因緣故。亦說有我。如彼良醫。善知於乳。是藥非藥。非如凡夫所計。吾我凡夫。愚人所指。

我者。或有說言。大如拇指。或如芥子。或如微塵。如來說我。悉不如是。是故說言。諸法無我。實非無我。何者是我。若法是實。是真。是常。是主。是依。性不變易。是名爲我。如彼大醫善解乳藥。如來亦爾。爲衆生故。說諸法中。眞實有我。汝等四衆。應當如是修習。是法。

# 大般涅槃經卷第二

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 長壽品第四

否三本俱作不

佛復告諸比丘。汝於戒律有所疑者。今恣汝問。我當解說。令汝心喜。我已修學一切諸法。本性空寂。明了通達。汝等比丘。莫謂如來唯修諸法。本性空寂。復告比丘。若於戒律有所疑者。今悉可問。時諸比丘。白佛言。世尊。我等無有智慧。能問如來。應供正遍知。所以者何。如來境界不可思議。所有諸定不可思議。所演教誨不可思議。是故我等無有智慧。能問如來。世尊。譬如老人。年百二十。身嬰長病。寢臥牀席。不能起居。氣力虛劣。餘命無幾。有一富人。緣事欲行。當至他方。以百斤金。寄彼老人。而作是言。我今他行。以是寶物。持用相寄。或經十年。或二十年。事畢當還。還時歸我。是老人。即便受之。而此老人。復無繼嗣。其後不久。病篤命終。所寄之物。悉皆散失。財主行還。求索無所。如是癡人。不知籌量。所寄可否。是故行還。求索無所。以是因緣。喪失財寶。世尊。我等聲聞。亦復如是。雖聞如來。懇勸教戒。不能受持。令得久住。如彼老人。受他寄付。我今無智於諸戒律。當何所問。佛告比丘。汝等今者。若問於我。則能利益一切衆生。是故告汝。諸有疑網。恣隨所問。時諸比丘。白佛言。世尊。譬如有人。年二十五。盛壯端正。多有財寶。金銀琉璃。父母妻子。眷屬宗親。悉皆具存。時有人來。寄其寶物。語其人言。我有緣事。欲至他處。事訖當還。還時歸我。是時壯夫。守護是物。如自己。有。其人遇病。卽命家屬。如是金寶。是他所寄。彼若來索。悉皆還之。智者如是。善知籌量。行還索物。皆悉得之。無所亡失。世尊亦爾。若以法寶。付囑阿難。及諸比丘。不得久住。何以故。一切聲聞。及大迦葉。悉當無常。如彼老人。受他寄物。是故應以無上佛法。付諸菩薩。以諸菩薩。善能問答。如是法寶。則得久住。無量千世。增益熾盛。利安衆生。如彼壯人。受他寄物。以是義故。諸大菩薩。乃能問耳。我等智慧。猶如蚊蚋。

可同作應

肩同作臂

慙同作惛下同

梅本作旃下同

爲三本俱作今

以同作說

顯宋元俱作慎  
○如娑羅娑鳥  
迦鄰提三本俱  
作娑羅迦鄰提  
云何如

何能諳請如來深法。時諸聲聞默然而住。爾時佛讚諸比丘言。善哉善哉。汝等善得無漏之心。阿羅漢心。我亦曾念以此二緣。應以大乘付諸菩薩。令是妙法久住於世。爾時佛告一切大眾。善男子。善女人。我之壽命不可稱量。樂說之辯亦不可盡。汝等宜可隨意咨問。若戒若歸。第二第三亦復如是。爾時衆中有一童子。菩薩摩訶薩。是多羅聚落婆羅門種姓。大迦葉。以佛神力。即從座起。徧袒右肩。遮百千匝。右膝著地。合掌向佛。而白佛言。世尊。我於今者。欲少諮問。若佛聽者。乃敢發言。佛告迦葉。如來應供。正遍知。悉汝所問。當爲汝說。斷汝所疑。令汝歡喜。爾時迦葉菩薩。復白佛言。世尊。如來哀愍。已垂聽許。今當問之。然我所有智慧。微妙。猶如蚊蚋。如來世尊。道德巍巍。純以梅檀師子。難伏不可壞衆。而爲眷屬。如來之身。猶真金剛。色如琉璃。眞實難壞。復爲如是大智慧海之所圍遶。是衆會中。諸大菩薩。摩訶薩等。皆悉成就。無量無邊。深妙功德。猶如香象。於如是等大眾之前。豈敢發問。爲當承佛神通之力。及因大眾善根。威德。少發問耳。即於佛前。以偈問曰。

云何得長壽 金剛不壞身 復以何因緣 得大堅固力 云何於此經 究竟到彼岸 願佛開微密

廣爲衆生說 云何得廣大 爲衆作依止 實非阿羅漢 量與羅漢等 云何知天魔 爲衆作留難

如來波旬說 云何分別知 云何諸調御 心喜說眞諦 正善具成就 演說四顛倒 云何作善業

大仙今當說 云何諸菩薩 能見難見性 云何解滿字 及與半字義 云何共聖行 如娑羅娑鳥

迦鄰提日月 太白與叢星 云何未發心 而名爲菩薩 云何於夫衆 而得無所畏 猶如闍浮金

無能說其過 云何處濁世 不汙如蓮華 云何處煩惱 煩惱不能染 如醫療衆病 不爲病所汙

生死大海中 云何作船師 云何捨生死 如虵脫故皮 云何觀三寶 猶如天意樹 三乘若無性

云何而得說 猶如樂未生 云何名受樂 云何諸菩薩 而得不壞衆 云何爲生盲 而作眼目導

云何示多頭 唯願大仙說 云何說法者 增長如月初 云何復示現 究竟於涅槃 云何勇進者

示人天魔道 云何知法性 而受於法樂 云何諸菩薩 遠離一切病 云何爲衆生 演說於秘密

云何說畢竟 及與不畢竟 如其斷疑網 云何不定說 云何而得近 最勝無上道 我今請如來

藏三本俱作義  
○智下同無之  
所證三字

葉下同無善薩  
二字下同

修同作修

爲諸菩薩故 願爲說甚深 微妙諸行等 一切諸法中 悉有安樂性 唯願大仙尊 爲我分別說  
衆生大依止 兩足尊妙藥 今欲問諸陰 而我無智慧 精進諸菩薩 亦復不能知 如是等甚深  
諸佛之境界

爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。善男子。汝今未得一切種智。我已得之。然汝所問甚深密藏。如一切智之所諮問。等無有異。善男子。我坐道場。菩提樹下。初成正覺。爾時無量阿僧祇恒河沙等諸佛世界。有諸菩薩。亦曾問我。是甚深義。然其所問句義功德。亦皆如是。等無有異。如是問者。則能利益無量衆生。爾時迦葉菩薩復白佛言。世尊。我無智力。能問如來。如是深義。世尊。譬如蚊蚋。不能飛過大海彼岸。周遍虛空。我亦如是。不能諮問如來。如是智慧。大海法性。虛空甚深之義。世尊。譬如國王。警中明珠。付典藏臣。藏臣得已。頂戴恭敬。增加守護。我亦如是。頂戴恭敬。增加守護。如來所說方等深義。何以故。令我廣得深智慧故。爾時佛告迦葉菩薩。善男子。諦聽諦聽。當爲汝說。如來所得長壽之業。菩薩以是業因緣。故得長壽。是故應當至心聽受。若業能爲菩提因者。應當誠心聽受。是義。既聽受已。轉爲人說。善男子。我以修習如是業故。得阿耨多羅三藐三菩提。今復爲人廣說是義。善男子。譬如王子。犯罪繫獄。王甚憐愍。愛念子故。躬自迴駕。至其繫所。菩薩亦爾。欲得長壽。應當護念一切衆生。同於子想。生大慈大悲。大喜大捨。授不殺戒。教修善法。亦當安止一切衆生。於五戒十善。復入地獄餓鬼畜生阿修羅等。一切諸趣。拔濟是中苦惱衆生。脫未脫者。度未度者。未涅槃者。令得涅槃。安慰一切諸恐怖者。以如是等業因緣。故菩薩則得壽命長遠。於諸智慧。而得自在。隨所壽終。生於天上。爾時迦葉菩薩復白佛言。世尊。菩薩摩訶薩等。視衆生。同於子想。是義深隱。我未能解。世尊。如來不應說言。菩薩於諸衆生。修平等心。同於子想。所以者何。於佛法中有破戒者。作逆罪者。毀正法者。云何當於如是等人。同子想耶。佛告迦葉。如是如是。我於衆生。實作子想。如羅睺。迦葉菩薩復白佛言。世尊。昔十五日。僧布薩時。曾於具戒清淨衆中。有一童子。不善修習。身口意業。在隱屏處。盜聽說戒。密迹力士。承佛神力。以金剛杵。碎之如塵。世尊。是金剛神。極成暴惡。乃能斷是童子命根。云何如來視諸衆生。同於子想。如羅睺。佛告迦葉。汝今不應作如是言。是童子者。卽是化人。非真實也。爲欲驅遣破戒毀

五或三本俱作  
二若〇糾同作  
糾  
力勢元明俱作  
勢力

怨宋作冤下同

伎元明俱作技

法令出衆故。金剛密迹示是化耳。迦葉毀謗正法及一闍提。或有殺生乃至邪見及故犯禁。我於是等悉生悲心。同於子想。如羅睺羅。善男子。譬如國王諸羣臣等有犯王法。隨罪誅戮而不捨置。如來世尊不如是也。於毀法者。與驅遣羯磨。訶責羯磨。置羯磨。舉罪羯磨。不可見羯磨。滅羯磨。未捨惡見羯磨。善男子。如來所以與謗法者。作如是等降伏羯磨。爲欲示諸行惡之人有果報故。善男子。汝今當知。如來即是施惡衆生無恐畏者。若放一光若二若五。或有過者。悉令遠離一切諸惡。如來今者具有如是無量勢力。善男子。未可見法。汝欲見者。今當爲汝說其相貌。我涅槃後。隨其方面。有持戒比丘。威儀具足。護持正法。見壞法者。即能驅遣呵責。糾治。當知是人得福無量。不可稱計。善男子。譬如有王。專行暴惡。會遇重病。有鄰國王。聞其名聲。興兵而來。將欲滅之。是時病王無力。傍故方乃恐怖。改心修善。而是鄰王得福無量。持法比丘亦復如是。驅遣呵責壞法之人。令行善法。得福無量。善男子。譬如長者所居之處。田宅屋舍。生諸毒樹。長者知已。即便斫伐。悉令永盡。又如少壯首生。白髮愧而剪拔。不令生長。持法比丘亦復如是。見有破戒壞正法者。即應驅遣呵責舉處。若善比丘。見壞法者。置不驅遣呵責舉處。當知是人佛法中怨。若能驅遣呵責舉處。是我弟子。眞聲聞也。迦葉菩薩復白佛言。世尊。如佛所言。則不等視一切衆生。同於子想。如羅睺羅。世尊。若有一人以刀害佛。復有一人。悔檀塗佛。佛於二人。若生等心。云何復言當治毀禁。若治毀禁。是言則失。佛告迦葉。善男子。譬如國王大臣宰相。產育諸子。顏貌端正。聰明黠慧。若二三四將付嚴師。而作是言。君可爲我教詔諸子。威儀禮節。伎藝書數。悉令成就。我今四子。就君受學。假使三子由杖而死。餘有一子。必當苦治。要令成就。雖喪三子。我終不恨。迦葉。是父及師。得殺罪不也。世尊。何以故。以愛念故。爲欲成就。無有惡心。如是教誨。得福無量。善男子。如來亦爾。視壞法者。等如一子。如來今以無上正法。付囑諸王大臣宰相。比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。是諸國王及四部衆。應當勸勵諸學人。等令得增上戒定智慧。若有不學。是三品法。斷愈破戒。毀正法者。國王大臣四部之衆。應當苦治。善男子。是諸國王及四部衆。當有罪不也。世尊。善男子。是諸國王及四部衆。尚無有罪。何況如來。善男子。如來善修如是平等。於諸衆生。同一子想。如是修者。是名菩薩。修平等心。於諸衆生。同一子想。善男子。菩薩如是修習此業。便得長壽。亦能善知宿世之事。迦葉菩薩復白佛言。世尊。

命三本俱作如

炎同作燄  
脩同作修  
○在  
同作任

搆明作蒙  
抄宋元俱作鈔  
期三本俱作求

如佛所說。菩薩若有修平等心。視諸衆生同於子。想便得長壽。如來不應作如是言。何以故。如知法人能說種種孝順之法。還至家中以諸瓦石打擲父母。而是父母是良福田。多所利益。難遭難遇。應好供養。反生惱害。是知法人言行相違。如來所言亦復如是。菩薩修習等心衆生。同子想者。應得長壽。善知宿命。常住於世。無有變易。今者世尊。以何因緣。壽命極短。同人間耶。如來將無於諸衆生。生怨憎想。世尊。昔日作何惡業。所害幾命。得是短壽。不滿百年。佛告迦葉。善男子。汝今何緣於如來前發是麤言。如來長壽於諸壽中。最上最勝。所得常法於諸常中。最爲第一。迦葉。菩薩復白佛言。世尊。云何如來得壽無量。佛告迦葉。善善子。如八大河。一名恒河。二名閻摩羅。三名薩羅。四名阿夷羅跋提。五名摩訶。六名辛頭。七名博叉。八名悉陀。是八大河。及諸小河。悉入大海。迦葉。如是一切人中。天上地及虚空。壽命大河。悉入如來壽命海中。是故如來壽命無量。復次迦葉。譬如阿耨達池。出四大河。如來亦爾。出一切命。迦葉。譬如一切諸常法中。虚空第一。如來亦爾。於諸常中。最爲第一。迦葉。譬如諸藥。醍醐第一。如來亦爾。於衆生中。壽命第一。迦葉。菩薩復白佛言。世尊。如來壽命若如是者。應住一劫。若減一劫。常宣妙法。如禪大雨。迦葉。汝今不應於如來所生滅盡想。迦葉。若有比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。乃至外道。五通神仙。得自在者。若住一劫。若減一劫。經行空中。坐臥自在。左脅出火。右脅出水。身出煙炎。猶如火聚。若欲住壽。能得如意。於壽命中。隋短自在。如是五通。尚得如是隨意神力。豈況如來於一切法。得自在力。而當不能住壽。半劫。若一劫。若百劫。若百千劫。若無量劫。以是義故。當知如來是常住法。不變易法。如來此身。是變化身。非雜食身。爲度衆生。示同毒樹。是故現捨入於涅槃。迦葉。當知佛是常法。不變易法。汝等於是第一義中。應勤精進。一心修習。既修習已。廣爲人說。爾時迦葉。菩薩白佛言。世尊。出世之法。與世間法。有何差別。如佛所言。佛是常法。不變易法。世間亦說。梵天是常。自在天常。無有變易。我常性常。微塵亦常。若言如來是常法者。如來何故不常現耶。若不常現。有何差別。何以故。梵天乃至微塵。世性亦不現故。佛告迦葉。譬如長者。多有諸牛。色雖種種。同共一羣。付放牧人。令逐水草。唯爲醍醐。不求乳酪。彼牧牛者。構已自食。長者命終。所有諸牛。悉爲羣賊之所抄掠。賊得牛已。無有婦女。卽自構掙得已而食。爾時羣賊。各相謂言。彼大長者畜養此牛。不期乳酪。唯爲醍醐。我等今者。當設何方而得之耶。夫醍

攢同作鑿

竊盜同作盜竊

脫同作說

與同作以

牧同作是

人同作宜

唯同作惟

醐者名爲世間第一上味。我等無器設使得乳無安置處。復共相謂。唯有皮囊可以盛之。雖有盛處不知攢搖。漿猶難得。況復生酥。爾時諸賊以醍醐故加之以水。以水多故乳酪醍醐一切俱失。凡夫亦爾。雖有善法皆是如來正法之餘。何以故。如來世尊入涅槃後。竊盜如來遺餘善法。若戒定慧。如彼諸賊劫掠羣牛。諸凡夫人雖復得是戒定智慧。無有方便不能解脫。以是義故不能獲得常戒。常定常慧解脫。如彼羣賊不知方便亡失醍醐。又如羣賊爲醍醐故加之以水。凡夫亦爾。爲解脫故說我衆生壽命。士夫梵天自在。天微塵世性戒定智慧及與解脫。非想非非想天。卽是涅槃。實亦不得解脫涅槃。如彼羣賊不得醍醐。是諸凡夫有少梵行供養父母。以是因緣得生天上。受少安樂。如彼羣賊加水之乳。而是凡夫實不知因修少梵行供養父母得生天上。又不能戒定智慧歸依三寶。以不知故說常樂我淨。雖復說之而實不知。是故如來出世之後。乃爲演說常樂我淨。如轉輪王出現於世。福德力故羣賊退散。牛無損命。時轉輪王卽以諸牛付一牧人。多巧便者。牧人方便卽得醍醐。以醍醐故一切衆生無有患苦。法輪聖王出現世時。諸凡夫人不能演說戒定慧者。卽便棄捨如賊退散。爾時如來善說世法及出世法。爲衆生故。令諸菩薩隨人演說。菩薩摩訶薩旣得醍醐。復令無量無邊衆生。普得無上甘露法味。所謂如來常樂我淨。以是義故。善男子。如來是常不變易法。非如世間凡夫愚人。謂梵天等是常法也。此常法稱要是如來。非是餘法。迦葉。應當如是知。如來身。迦葉。諸善男子。善女人。常常繫心修此二字。佛是常住。迦葉。若有善男子。善女人。修此二字。當知是人隨我所行。至我至處。善男子。若有修習如是二字。爲滅相者。當知如來則於其人爲般涅槃。善男子。涅槃義者。卽是諸佛之法性也。迦葉。菩薩白佛言。世尊。佛法性者其義云何。世尊。我今欲知法性之義。唯願如來哀愍廣說。夫法性者卽是捨身。捨身者名無所有。若無所有。身云何存。身若存者。云何而言身有法性。身有法云何何得存。我今云何當知是義。佛告迦葉。菩薩。善男子。汝今不應作如是說。滅是法性。夫法性者無有滅也。善男子。譬如無想天成。就色陰而無色想。不應問言是諸天等云何而住。歡娛受樂云何行想。云何見聞。善男子。如來境界。非諸聲聞緣覺所知。善男子。不應說言如來身者是滅法也。善男子。如來滅法是佛境界。非諸聲聞緣覺所及。善男子。汝今不應思量如來何處。住何處。行何處。見何處。樂。善男子。如是之義。亦非汝等之所



想三本俱作相  
下同

異明作易

其三本俱作之  
○讚元作贊

夫三本俱作人

諍三本俱作爭  
次同

知及諸佛法身種種方便不可思議。復次善男子。應當修習佛法及僧而作常想。是三法者。無有異想。無無常想。無變異想。若於三法修異想者。當知是輩清淨三歸則無依處。所有禁戒皆不具足。終不能證聲聞緣覺菩提之果。若能於是不可思議修常想者。則有歸處。善男子。譬如因樹則有樹影。如來亦爾。有常法故則有歸依。非是無常。若言如來是無常者。如來則非諸天世人所歸依處。迦葉菩薩白佛言。世尊。譬如閻中有樹無影。迦葉。汝不應言有樹無影。但非肉眼之所見耳。善男子。如來亦爾。其性常住是不變異。無智慧眼不能得見。如彼閻中不見樹影。凡夫之人於佛滅後。說言如來是無常法。亦復如是。若言如來異法僧者。則不能成三歸依處。如汝父母各異。故使無常。迦葉菩薩復白佛言。世尊。我從今始當以佛法衆僧三事常住。啓悟父母。乃至七世皆令奉持甚奇世尊。我今當學如來法僧不可思議。既自學已。亦當爲人廣說是義。若有諸人不能信受。當知是輩久修無常。如是等人。我當爲其而作霜雹。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。汝今善能護持正法。如是護法不欺於人。以不欺人善業緣故。而得長壽善知宿命。

### 大般涅槃經金剛身品第五

爾時世尊復告迦葉。善男子。如來身者是常住身。不可壞身。金剛之身。非雜食身。卽是法身。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說如是等身。我悉不見。唯見無常破壞塵土雜食等身。何以故。如來今當入涅槃。故佛告迦葉。汝今莫謂如來之身不堅可壞。如凡夫身。善男子。汝今當知。如來之身無量億劫堅牢難壞。非人天身。非恐怖身。非雜食身。如來之身非身。是身不生不滅。不習不修。無量無邊。無有足跡。無知無形。畢竟清淨。無有動搖。無受無行。不住不作。無味無雜。非是有爲非業非果。非行非滅。非心非數。不可思議。常不可議。無識離心。亦不離心。其心平等。無有亦有。無有去來而亦去來。不破不壞。不斷不絕。不出不滅。非主亦主。非有非無。非覺非觀。非字非不字。非定非不定。不可見了。了見。無處亦處。無宅亦宅。無闇無明。無有寂靜而亦寂靜。是無所有。不受不施。清淨無垢。無諍斷諍。住無住處。不取不憶。非法非非法。非福田非非福田。無盡不盡。離一切盡。是空離空。雖不常住。非念念滅。無有

垢濁。無字離字。非聲非說。亦非修習。非稱非量。非一非異。以像非相。諸相莊嚴。非勇非畏。無寂不寂。無熱不熱。不可觀見。無有相貌。如來度脫一切衆生。無度脫故。能解衆生。無有解故。覺了衆生。無覺了故。如實說法。無有二故。不可量無等等。平如虛空。無有形貌。同無生性。不斷不常。常行一乘。衆生見三。不退不轉。斷一切結。不戰不觸。非性住性。非合非散。非長非短。非圓非方。非陰入界。亦陰入界。非增非損。非勝非負。如來之身成就。如是無量功德。無有知者。無不知者。無有見者。無不見者。非有爲非無爲。非世非不世。非作非不作。非依非不依。非四大非不四大。非因非不因。非衆生非不衆生。非沙門非婆羅門。是師子大師子。非身非不身。不可宣說。除一法相不可算數。般涅槃時。不般涅槃。如來法身皆悉成就。如是無量微妙功德。迦葉。唯有如來乃知是相。非諸聲聞緣覺所知。迦葉。如是功德成如來身。非是雜食所長養身。迦葉。如來真身功德如是。云何復得諸疾。患苦危脆。不堅如坏器乎。迦葉。如來所以示病苦者。爲欲調伏諸衆生故。善男子。汝今當知。如來之身卽金剛身。汝從今日常當專心思惟此義。莫念食身。亦當爲人說。如來身卽是法身。迦葉。菩薩自佛言。世尊。如來成就如是功德。其身云何當有病苦。無常破壞。我從今日常當思惟。如來之身是常法身。安樂之身。亦當爲人如是廣說。唯然世尊。如來法身金剛不壞。而未能知。所因云何。佛告迦葉。以能護持正法。因緣故得成就。是金剛身。迦葉。我於往昔護法。因緣。今得成就。是金剛身。常住不壞。善男子。護持正法者。不受五戒。不修威儀。應持刀劍弓箭。鎗禦守護持戒清淨比丘。迦葉。菩薩自佛言。世尊。若有比丘。離於守護。獨處空閑塚間樹下。當說是人爲真比丘。若有隨逐守護者。行。當知是輩是禿居士。佛告迦葉。莫作是語言。禿居士。若有比丘。隨所至處。供身取足。讀誦經典。惟坐禪。有來問法。卽爲宣說。所謂布施持戒。福德少欲知足。雖能如是種種說法。然故不能作師子吼。不爲師子之所圍繞。不能降伏非法惡人。如是比丘。不能自利及利衆生。當知是輩懈怠懶惰。雖能持戒守護淨行。當知是人無所能爲。若有比丘。供身之具。亦當豐足。復能護持所受禁戒。能師子吼。廣說妙法。謂修多羅。祇夜。受記。伽陀。偈陀那。伊帝目多伽。闍陀伽。毗佛略。阿浮陀達磨。以如是等九部經典爲他廣說。利益安樂諸衆生故。唱如是言。涅槃經中。勸諸化丘。不應畜養奴婢牛羊非法之物。若有比丘。畜如是等不淨之物。應當治之。如來先於異部經中說。有比丘。畜如是等非法

鈔同作乎

者行同作行者

憲三本俱作怒

他同作人○優

上同無諸字○

塞下同有等字

尸下同無那字

頌同作班

槍同作劍○讚  
宋元俱作贊

杖宋仗作

杖宋元俱作仗  
下同○抄同作  
鈔

之物。某甲國王如法治之驅令還俗。若有比丘能作如是師子吼時。有破戒者聞是語已。咸共瞋恚。害是法師。是說法者設復命終。故名持戒自利利他。何是緣故。我聽國主臣宰宰相諸優婆塞護說法人。若有欲得護正法者。當如是學。迦葉。如是破戒不護法者。名禿居士。非持戒者得如是名。善男子。過去久遠無量無邊阿僧祇劫。於此拘尸那城。有佛出世號歡喜增益如來。應供正遍知。明行足。善逝世間解。無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。爾時世界廣博嚴淨。豐樂安隱。人民熾盛。無有飢渴。如安樂國。諸菩薩等。彼佛世尊住世無量化衆生已。然後乃於娑羅雙樹入般涅槃。佛涅槃後遺法住世無量億歲。餘四十年佛法未滅。爾時有一持戒比丘。名曰覺德。多有徒衆。眷屬圍繞。能師子吼。頌宣廣說九部經典。制諸比丘不得畜養奴婢牛羊非法之物。爾時多有破戒比丘。聞作是說。皆生惡心。執持刀杖逼是法師。是時國王名曰有德。聞是事已。爲護法故。即便往至說法者所。與是破戒諸惡比丘極共戰鬥。令說法者得免危害。王時被槍擡身周遍。爾時覺德尋讚王言。善哉善哉。王今真是護正法者。當來之世。此身當爲無量法器。王於是時得聞法已。心大歡喜。尋卽命終生阿閼佛國。而爲彼佛作第一弟子。其王將從人民眷屬。有戰鬥者。有隨喜者。一切不退菩提之心。命終悉生阿閼佛國。覺德比丘却後壽終亦得往生阿閼佛國。而爲彼佛作聲聞衆中第二弟子。若有正法欲滅盡時。應當如是受持擁護。迦葉。爾時王者則我身是。說法比丘迦葉。佛是。迦葉。護正法者得如是等無量果報。以是因緣。我於今日得種種相。以自莊嚴。成就法身。不可壞身。迦葉。菩薩復白佛言。世尊。如來常身猶如畫石。佛告迦葉。善男子。以是因緣。故比丘比丘尼優婆塞優婆夷。應當勤加護持正法。護法果報廣大無量。善男子。是故護法優婆塞等。應執刀杖擁護。如是持法比丘。若有受持五戒具者。不得名爲大乘人。也不受五戒。爲護正法。乃合大乘。護正法者。應當持執刀劍器仗侍衛法師。迦葉。白佛言。世尊。若諸比丘與如是等諸優婆塞持刀杖者。共爲伴侶。爲有師耶。爲無師乎。爲是持戒。爲是破戒。佛告迦葉。莫謂是等爲破戒人。善男子。我涅槃後。濁惡之世。國土荒亂。互相抄掠。人民飢餓。爾時多有爲飢餓故。發心出家。如是之人。名爲禿人。是禿人輩。見有持戒威儀具足清淨比丘。護持正法。驅逐令出。若殺若害。迦葉。菩薩復白佛言。世尊。是持戒人護正法者。云何當得遊行村落城邑教化。善男子。是故我今聽持戒人依諸白衣持刀杖者。

王三本俱作主  
葉下同有言字

養宋作證○時  
三本俱作日

讀宋作贊次同

教三本俱作言

以爲伴侶。若諸國王大臣長者優婆塞等。爲護法故。雖持刀杖。我說是等名爲持戒。雖持刀杖不應斷命。若能如是。即得名爲第一持戒。迦葉。夫護法者。謂具正見能廣宣說大乘經典。終不提持王者寶蓋。油餅穀米種種果蔬。不爲利養親近國王大臣長者。於諸檀越心無諂曲。具足威儀。摧伏破戒諸惡人等。是名持戒護法之師。能爲衆生真善知識。其心弘廣。譬如大海。迦葉。若有比丘以利養故爲他說法。是人所有徒衆眷屬。亦効是師。貪求利養。是人如是。便自壞衆。迦葉。衆有三種。一者犯戒雜僧。二者愚癡僧。三者清淨僧。破戒雜僧則易可壞。持戒淨僧利養因緣所不能壞。云何破戒雜僧。若有比丘雖持禁戒爲利養故。與破戒者坐起行來共相親附。同共事業。是名破戒亦名雜僧。云何愚癡僧。若有比丘在阿蘭若處。諸根不利。開鈍鑿。膏少欲乞食。於說戒日及自恣時。教諸弟子清淨懺悔。見非弟子多犯禁戒。不能教令清淨懺悔。而便與共說戒自恣。是名愚癡僧。云何名清淨僧。有比丘僧百千億魔所不能壞。是菩薩衆本性清淨。能調如上二部之衆。悉令安住清淨衆中。是名護法無上天師善持律者。爲欲調伏利衆生故。知諸戒相若輕若重。非是律者則不證知。若是律者則便證知。云何調衆生故。若諸菩薩爲化衆生。常入聚落。不擇時節。或至寡婦及姪女舍。與同住止。經歷多年。若是聲聞所不應爲。是名調伏利益衆生。云何知重若見如來因事制戒。汝從今日慎莫更犯。如四重禁出家之人所不應作。而故作者。非是沙門非釋種子。是名爲重。云何爲輕。若犯輕事。如是三諫。若能捨者是名爲輕。非律不證者。若有讚說不清淨物。應受用者。不共同止。是律應證者。善學戒律不近破戒。見有所行隨順戒律。心生歡喜。如是能知佛法所作善能解說。是名律師。善解一字善持契經。亦復如是。如是善男子。佛法無量不可思議。如來亦爾不可思議。迦葉。菩薩白佛言。世尊。如是如是。誠如聖教。佛法無量不可思議。如來亦爾不可思議。故知如來常住不壞。無有變異。我今善學亦當爲人廣宣是義。爾時佛讚迦葉菩薩善哉善哉。如來身者。卽是金剛不可壞身。菩薩應當如是善學。正見正知。若能如是了了知見。卽是見佛金剛之身。不可壞身。如於鏡中見諸色像。

大般涅槃經名字功德品第六

是元明俱作至

結煩惱三本俱  
作煩惱結

菓同作果

諸同作餘

足同作是

薩下同無等字

皆作同作當如

門同作眼

爾時如來復告迦葉。善男子。汝今應當善持是經文字章句。所有功德。若有善男子善女人。聞是經名生四趣者。無有是處。何以故。如是經典。乃是無量無邊諸佛之所修習。所得功德。我今當說。迦葉。菩薩白佛言。世尊。當何名此經。菩薩摩訶薩云。何奉持。佛告迦葉。是經名為大般涅槃。上語亦善。中語亦善。下語亦善。義味深邃。其文亦善。純備具足。清淨梵行。金剛寶藏。滿足無缺。汝善諦聽。我今當說。善男子。所言大者。名之為常。如八大河悉歸大海。此經如是。降伏一切諸結煩惱。及諸魔性。然後要於大般涅槃。放捨身命。是故名曰大般涅槃。善男子。又如醫師。有一祕方。悉攝一切所有醫術。善男子。如來亦爾。所說種種妙法。祕密深奧。藏門悉皆入此大般涅槃。是故名為大般涅槃。善男子。譬如農夫。春月下種。常有希望。既收。菓實衆望都息。善男子。一切衆生亦復如是。修學餘經。常怖滋味。若得聞是大般涅槃。希望諸經。所有滋味。悉皆永斷。是大涅槃。能令衆生度諸有流。善男子。如諸跡中象跡。為最。此經如是。於諸經三味。最為第一。善男子。譬如耕田。秋耕為勝。此經如是。諸經中勝。善男子。如諸藥中。醍醐第一。善治衆生熱惱亂心。是大涅槃。為最第一。善男子。譬如甜酥。八味具足。大般涅槃亦復如是。八味具足。云何為八。一者常。二者恒。三者安。四者清涼。五者不老。六者不死。七者無垢。八者快樂。是為八味。具足。八味是故名為大般涅槃。若諸菩薩摩訶薩。等安住是中。復能處處示現涅槃。是故名為大般涅槃。迦葉。善男子。善女人若欲於此大般涅槃而涅槃者。皆作是學。如來常住法僧亦然。迦葉。菩薩復白佛言。甚奇世尊。如來功德不可思議。法僧亦爾。不可思議。是大涅槃。亦不可思議。若有修學是經典者。得正法門。能為良醫。若未學者。當知是人盲無慧眼。無明所覆。

# 大般涅槃經卷第三

# 大般涅槃經卷第四

〔魔勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明風〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

品目一三本俱  
作上

## 四相品第七之一

愍三本俱作憫

唯同作惟下同

嗽同作啖下同

苦本作若

佛復告迦葉。善男子。菩薩摩訶薩分別開示大般涅槃。有四相義。何等爲四。一者自正。二者正他。三者能隨問答。四者善解因緣義。迦葉。云何自正。若佛如來見諸因緣而有所說。譬如比丘見大火聚。便作是言。我寧抱是熾然火聚。終不敢於如來所說十二部經及祕密藏謗言。此經是魔所說。若言如來法僧無常。如是說者爲自侵欺。亦欺於人。寧以利刀自斷其舌。終不說言如來法僧是無常也。若聞他說亦不信受。於此說者應生憐愍。如來法僧不可思議。應如是持自觀。己身猶如火聚。是名自正。迦葉。云何正他。佛說法時有一女人乳養嬰兒。來詣佛所稽首佛足。有所顧念。心自思惟。便坐一面。爾時世尊知而故問。汝以愛念多嗔兒。酥不知籌量。消與不消。爾時女人即白佛言。甚奇世尊。善能知我心中所念。唯願如來教我多少。世尊。我於今朝多與兒酥。恐不能消。將無夭壽。惟願如來爲我解說。佛言。汝兒所食。尋即消化。增益壽命。女人聞已。心大踊躍。復作是言。如來實說。故我歡喜。世尊。如是爲欲調伏諸衆生故。善能分別說消不消。亦說諸法無我無常。若佛世尊先說常者。受化之徒。當言此法同彼外道。即便捨去。復告女人。若兒長大。能自行來。凡所食噉。能消難消。本所與酥。則不供足。我之所有。聲聞弟子亦復如是。如汝嬰兒。不能消。是常住之法。是故我先說苦無常。若我聲聞諸弟子等功德已備。堪任修習大乘經典。我於是經爲說六味。云何六味。說苦。醋味。無常。鹹味。無我。苦味。樂爲甜味。我爲辛味。常爲淡味。彼世間中有三種味。所謂無常。無我。無樂。煩惱爲薪。智慧爲火。以是因緣。成涅槃食。謂常樂我。令諸弟子悉皆甘嗜。復告女人。汝若有緣。欲至他處。應驅惡子。令出其舍。悉以寶藏付示善子。女人白佛。實如聖教。珍寶之藏。應示善子。不示惡子。

答下三本俱無者字

以同作與次同

讚宋作贊下同

乳三本俱作髓

怨宋作冤

姊我亦如是。般涅槃時如來微密無上法藏。不與聲聞諸弟子等。如汝寶藏不示惡子。要當付囑諸菩薩等。如汝寶藏委付善子。何以故。聲聞弟子生變異想。謂佛如來真實滅度。然我真實不滅度也。如汝遠行未還之頃。汝之惡子便言汝死。汝實不死。諸菩薩等說言如來常不變易。如汝善子不言汝死。以是義故。我以無上祕密之藏付諸菩薩。善男子。若有衆生謂佛常住不變異者。當知是家則爲有佛。是名正他。迦葉云。何能隨問答者。若有人來問佛世尊。我當云。何不捨錢財而得名爲大施檀越。佛言。若有沙門婆羅門等。少欲知足。不受不畜不淨物者。當施其人奴婢僕使。修梵行者。施與女色。斷酒肉者。施以酒肉。不過中食。施過中食。不著花香。施以花香。如是施者。施名流布聲聞天下。未曾損己一毫之費。是則名爲能隨問答。爾時迦葉菩薩白佛言。世尊。食肉之人不應施肉。何以故。我見不食肉者有大功德。佛讚迦葉善哉善哉。汝今乃能善知我意。護法菩薩應當如是。善男子。從今日始不聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時。應觀是食如子肉想。迦葉菩薩復白佛言。世尊。云何如來不聽食肉。善男子。夫食肉者斷大慈種。迦葉又言。如來何故先聽比丘食三種淨肉。迦葉云。三種淨肉。隨事漸制。迦葉菩薩復白佛言。世尊。何因緣故十種不淨。乃至九種清淨而復不聽。佛告迦葉。亦是因事漸次而制。當知卽是現斷肉義。迦葉菩薩復白佛言。云何如來稱讚魚肉爲美食耶。善男子。我亦不說魚肉之屬爲美食也。我說甘蔗粳米石蜜一切穀麥及黑石蜜乳酪酥油以爲美食。雖說應畜種種衣服。所應畜者要是壞色。何況畜著是魚肉味。迦葉復言。如來若制不食肉者。彼五種味乳酪酪漿生酥熟酥胡麻油等。及諸衣服。僑奢耶衣。珂貝皮革金銀孟器。如是等物亦不應受。善男子。不應同彼尼隄所見。如來所制一切禁戒各有異意。異意故聽食三種淨肉。異想故斷十種肉。異想故一切悉斷及自死者。迦葉我從今日制諸弟子不得復食一切肉也。迦葉。其食肉者若行若住若坐苦臥。一切衆生聞其肉氣。悉生恐怖。譬如有人近師子。已衆人見之聞師子臭。亦生恐怖。善男子。如人噉蒜臭穢可惡。餘人見之聞臭捨去。設遠見者猶不欲視。況當近之。諸食肉者亦復如是。一切衆生聞其肉氣。悉皆恐怖。生畏死想。水陸空行有命之類。悉捨之走。咸言此人是我等怨。是故菩薩不習食肉。爲度衆生。示現食肉。雖現食之。其實不食。善男子。如是菩薩清淨之食。猶尚不食。況當食肉。善男子。我涅槃後無量百歲。四道聖人悉復涅槃。

鬘同作鬘○髮  
爪三本俱作爪  
髮

不同作清

菓同作果○伎  
宋明俱作技

可同作訶

漫三本俱作蔓

正法滅後於像法中。當有比丘。相貌持律。少讀誦經。貪嗜飲食。長養其身。身所被服。麤陋醜惡。形容憔悴。無有威德。放畜牛羊。擔負薪草。頭髮爪悉皆長利。雖服袈裟。猶如獵師。細視徐行。如貓伺鼠。常唱是言。我得羅漢。多諸病苦。眠臥糞穢。外現賢善。內懷貪嫉。如受瘧法。婆羅門等。實非沙門。現沙門像。邪見熾盛。誹謗正法。如是等人。破壞如來所制戒律。正行威儀。說解脫果。離不淨法。及壞甚深祕密之教。各自隨意。反說經律。而作是言。如來皆聽我等食肉。自生此論。言是佛說。互共誣訟。各自稱是沙門。釋子。善男子。爾時復有諸沙門等。貯聚生穀。受取魚肉。手自作食。執持油餅。寶蓋革屣。親近國王大臣長者。占相星宿。勤修醫道。畜養奴婢。金銀琉璃車渠。馬瑙。頗梨。真珠。珊瑚。琥珀。璧玉。珂貝。種種菓齒。學諸伎藝。畫師。泥作。造書。教學。種植。根栽。蠱道。呪幻。和合。諸藥。作倡伎。樂。香花。治身。糝。蒲。園。基。學。諸工巧。若有比丘。能離如是諸惡事者。當說是人。真我弟子。爾時迦葉復白佛言。世尊。諸比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。因他而活。若乞食時。得雜肉食。云何得食。應清淨法。佛言。迦葉。當以水洗。令與肉別。然後乃食。若其食器。爲肉所汙。但使無味。聽用無罪。若見食中。多有肉者。則不應受。一切現肉。悉不應食。食者得罪。我今唱是斷肉之制。若廣說者。則不可盡。涅槃時。到是故。略說。是則名爲能隨問答。迦葉。云何善解。因緣義。如有四部之衆。來問我言。世尊。如是之義。如來初出。何故不爲波斯匿王。說是法門深妙之義。或時說深。或時說淺。或名爲犯。或名不犯。云何名墮。云何名律。云何名波羅提木叉。義。佛言。波羅提木叉者。名爲知足。成就威儀。無所受畜。亦名淨命。墮者。名四惡趣。又復墮者。墮於地獄。乃至阿鼻獄。其遲速過於暴雨。聞者驚怖。堅持禁戒。不犯威儀。修習知足。不受一切不淨之物。又復墮者。養地獄畜生。餓鬼。以是諸義。故名曰墮。波羅提木叉者。離身口意不善。邪業。律者。入戒威儀。深經善義。遮受一切不淨之物。及不淨因緣。亦遮四重。十三僧殘。二不定法。三十捨墮。九十一墮。四悔過法。衆多學法。七滅諍等。或復有人。破一切戒。云何一切。謂四重法。乃至七滅諍法。或復有人。誹謗正法。甚深經典。及一闍提具足成就。盡一切相。無有因緣。如是等人。自言我是聰明。利智。輕重之罪。悉皆覆藏。覆藏諸惡。如龜藏六。如是衆罪。長夜不悔。以不悔。故日夜增長。是諸比丘。所犯衆罪。終不發露。是使所犯。遂復滋漫。是故如來。知是事已。漸次而制。不得一時。爾時有善男子。善女人。白佛言。世尊。如來久知如是之事。何不先制。將無



世尊欲令衆生入阿鼻獄。譬如多人欲至他方。迷失正路。隨逐邪道。是諸人等不知迷故。皆謂是道。復不見人可問。是非衆生如是。迷於佛法。不見正真。如來應爲先說正道。救諸比丘。此是犯戒。此是持戒。當如是制。何以故。如來正覺是眞實者。知見正道。唯有如來天中之天。能說十善。增上功德。及其義味。是故啓請。應先制戒。佛言。善男子。若言如來能爲衆生宣說十善。增上功德。是則如來視諸衆生如羅睺羅。云何難言。將無世尊欲令衆生入於地獄。我見一人有墮阿鼻地獄因緣。尙爲是人住世一劫。若減一劫。我於衆生有大慈悲。何緣當誑如子想者。令入地獄。善男子。如王國內有納衣者。見衣有孔。然後乃補。如來亦爾。見諸衆生有入阿鼻地獄因緣。卽以戒善而爲補之。善男子。譬如轉輪聖王。先爲衆生說十善法。其後漸漸有行惡者。王卽隨事以漸斷之。斷諸惡已。然後自行聖王之法。善男子。我亦如是。雖有所說。不得先制。要因比丘漸行非法。然後方乃隨事制之。樂法衆生。隨教修行。如是等衆。乃能得見如來法身。如轉輪王。所有輪寶。不可思議。如來亦爾。不可思議。法僧二寶。亦不可思議。能說法者及聞法者。皆不可思議。是名善解因緣義也。菩薩如是。分別開示四種相義。是名大乘大涅槃中。因緣義也。復次自正者。所謂得是。大般涅槃。正他者。我爲比丘說言。如來常存不變。隨問答者。迦葉。因汝所問。故得廣爲菩薩摩訶薩。比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。說是甚深微妙之義。因緣義者。聲聞緣覺。不解如是甚深之義。不聞伊字三點。而成解脫。涅槃摩訶般若。成祕密藏。我今於此。闡揚分別。爲諸聲聞。開發慧眼。假使有人。作如是言。如是四事。云何爲一。非虛妄耶。卽應反質。是虛空無所有。不動無闕。如是四事。有何等異。是豈得名爲虛妄乎。不也。世尊。如是諸句。卽是一義。所謂空義。自正正他。能隨問答。解因緣義。亦復如是。卽大涅槃等。無有異。佛告迦葉。若有善男子。善女人。作如是言。如來無常。云何當知。是無常耶。如佛所言。滅諸煩惱。名爲涅槃。猶如火滅。悉無所有。滅諸煩惱。亦復如是。故名涅槃。云何如來爲常住法。不變易耶。如佛言曰。離諸煩惱。不名爲物。云何如來爲常住法。不變易耶。如佛言曰。離欲寂滅。名曰涅槃。如人斬首。則無有首。離欲寂滅。亦復如是。空無所有。故名涅槃。云何如來爲常住法。不變易耶。如佛言曰。

譬如乃至所至  
四十字十句三  
本俱作長行〇  
提同作椎〇是  
上同無如字

滅下同有已字  
〇不下同無復  
字〇色上同無  
赤字

不三本俱作無  
次同

譬如熱鐵 提打星流 散已尋滅 莫知所在 得正解脫 亦復如是 已度姪欲 諸有淤泥  
得無動處 不知所至

云何如來為常住法不變易耶。迦葉。若有人作如是難者名為邪難。迦葉。汝亦不應作是憶想。謂如來性是滅盡也。迦葉。滅煩惱者不名為物。何以故。永畢竟故。是故名常。是句寂靜為無有上。滅盡諸相無有遺餘。是句鮮白常住無退。是故涅槃名曰常住。如來亦爾。常住無變。言星流者。謂煩惱也。散已尋滅。莫知所在者。謂諸如來煩惱滅已不在五趣。是故如來是常住法。無有變易。復次迦葉。諸佛所師所謂法也。是故如來恭敬供養。以法常故。諸佛亦常。迦葉。菩薩復白佛言。若煩惱火滅。如來亦滅。是則如來無常住處。如彼逆鐵。赤色滅已。莫知所至。如來煩惱亦復如是。滅無所至。又如彼鐵。熱與赤色滅已。無有。如來亦爾。滅已無常。滅煩惱火便入涅槃。當知如來即是無常。善男子。所言鐵者。名諸凡夫。凡夫之人。雖滅煩惱。滅已復生。故名無常。如來不爾。滅不復生。是故名常。迦葉。復言。如鐵赤色滅已。還直火中。赤色復生。如來若爾。應還生結。若結還生。即是無常。佛言。迦葉。汝今不應作如是言。如來無常。何以故。如來是常。善男子。如彼然木。滅已有灰。煩惱滅已。便有涅槃。壞衣斬首破瓶等譬。亦復如是。如是等物。各有名字。名曰壞衣。斬首破瓶。迦葉。如鐵冷已。可使還熱。如來不爾。斷煩惱已。畢竟清涼。煩惱熾火。更不復生。迦葉。當知。無量眾生。猶如彼鐵。我以無漏智慧。熾火。燒彼眾生。諸煩惱結。迦葉。復言。善哉善哉。我今諦知。如來所說。諸佛是常。佛言。迦葉。譬如聖王。處在後宮。或時遊觀。在於後園。王雖不在。諸姝女中。亦不得言。聖王命終。善男子。如來亦爾。雖不現於閻浮提界。入涅槃中。不名無常。如來出於無量煩惱。入于涅槃安樂之處。遊諸覺華。歡娛愛樂。迦葉。復問。如佛言曰。我已久度煩惱大海。若佛已度煩惱海者。何緣復納耶輪陀羅尼。羅睺羅。以是因緣。當知如來未度煩惱。諸結大海。唯願如來說其因緣。佛告迦葉。汝不應言。如來久度煩惱大海。何緣復納耶輪陀羅尼。羅睺羅。以是因緣。當知如來未度煩惱。諸結大海。善男子。是大涅槃。能建大義。汝等今當至心。諦聽。廣為人說。莫生驚疑。若有菩薩摩訶薩。住大涅槃。須彌山王。如是高廣。悉能取入於芥子。其諸眾生。依須彌者。亦不迫迨。無往來想。如本不異。唯應度者。見是菩薩。以須彌山內芥子中。復還安止。本所住處。善男子。復有菩薩摩訶

內同作入。

中下同無所有  
一切四字○返  
尚作反下同  
耳同作爾

修元明俱作脩

薩住大涅槃。能以三千大千世界入於芥子。其中衆生亦無迫迕及往來想。如本不異。唯應度者見是菩薩。以此三千大千世界內芥子中。復還安止本所住處。善男子。復有菩薩摩訶薩住大涅槃。能以三千大千世界內一毛孔。乃至本處亦復如是。善男子。復有菩薩摩訶薩住大涅槃。斷取十方三千大千諸佛世界。置於針鋒。如貫棗葉。擲著他方異佛世界。其中所有一切衆生不覺往返。爲在何處。唯應度者乃能見之。乃至本處亦復如是。善男子。復有菩薩摩訶薩住大涅槃。斷取十方三千大千諸佛世界。置於右掌。如陶家輪。擲置他方微塵世界。無一衆生有往來想。唯應度者乃見之耳。乃至本處亦復如是。善男子。復有菩薩摩訶薩住大涅槃。斷取一切十方無量諸佛世界悉內己身。其中衆生悉不迫迕亦無往返及住處想。唯應度者乃能見之。乃至本處亦復如是。善男子。復有菩薩摩訶薩住大涅槃。以十方世界內一塵中。其中衆生亦無迫迕往返之想。唯應度者乃能見之。乃至本處亦復如是。善男子。是菩薩摩訶薩住大涅槃。則能示現種種無量神通變化。是故名曰大般涅槃。是菩薩摩訶薩所可示現。如是無量神通變化。一切衆生無能測量。汝今云何能知。如來習近愛欲生羅睺羅。善男子。我已久住大涅槃。種種示現神通變化。於此三千大千世界百億日月百億閻浮提。種種示現如首楞嚴經中廣說。我於三千大千世界。或閻浮提。示現涅槃。亦不畢竟取於涅槃。或閻浮提。示入母胎。令其父母生我子想。而我此身畢竟不從愛欲和合而生也。我已久從無量劫來離於愛欲。我今此身卽是法身。隨順世間示現入胎。善男子。此閻浮提林微尼園。示現從母摩耶而生。生已卽能東行七步。唱如是言。我於人天阿修羅中最尊最上。父母人天見已驚喜。生希有心。是諸人等謂是嬰兒。而我此身無量劫來久離是法。如是身者卽是法身。非是肉血筋脉骨髓之所成立。隨順世間衆生法。故示爲嬰兒。南行七步。示現欲爲無量衆生作上福田。西行七步。示現生盡永斷老死。是最後身。北行七步。示現已度諸有生。死。東行七步。示現衆生而作導首。四維七步。示現斷滅種種煩惱。四魔種性。成於如來。應供。正遍知。上行七步。示現不爲不淨之物之所染汗。猶如虛空。下行七步。示現法雨滅地獄火。令彼衆生受安隱樂。毀禁戒者。示作霜雹。於閻浮提。生七日。已示現剃髮。諸人皆謂我是嬰兒。初始剃髮。一切人天魔王波旬沙門婆羅門。無有能見我頂相者。況有持刀臨之剃髮。若有持刀至我頂者。無有是處。我已久於

拘三本俱作角

輪下同無王字

浮下同有提字

宮同作官

捨同作餅

視三本俱作滌

無量劫中剃除鬚髮。爲欲隨順世間法。故示現剃髮。我既生已。父母將我入天祠中。以我示破摩醯首羅。摩醯首羅卽見我時。合掌恭敬立在一面。我已久於無量劫中。捨離如是入天祠法。爲欲隨順世間法。故示現如是。我於閻浮提示現穿耳。一切衆生實無有能穿我耳者。隨順世間衆生法。故示現如是。復以諸寶作師子。躡莊嚴其耳。然我已於無量劫中。離莊嚴具。爲欲隨順世間法。故作是示現。示入學堂修學書疏。然我已於無量劫中。具足成就。遍觀三界所有衆生。無有堪任爲我師者。爲欲隨順世間法。故示入學堂。故名如來應供正遍知。習學乘象。繫馬。擲力種種技藝。亦復如是。於閻浮提而復示現爲王太子衆生。皆見我爲太子於五欲中。歡娛受樂。然我已於無量劫中。捨離如是五欲之樂。爲欲隨順世間法。故示如是。相相師占我。若不出家當爲轉輪聖王。王閻浮提。一切衆生皆信是言。然我已於無量劫中。捨轉輪王位。爲法輪王。於閻浮提現離婬女五欲之樂。見老病死及沙門已出家修道。衆生皆謂悉達太子初始出家。然我已於無量劫中。出家學道。隨順世法。故示如是。我於閻浮提示現出家。受具足戒。精勤修道。得須陀洹果。斯陀含果。阿那含果。阿羅漢果。衆人皆謂是阿羅漢。果易得不難。然我已於無量劫中。成阿羅漢果。爲欲度脫諸衆生。故坐於道場。菩提樹下。以草爲座。摧伏衆魔。衆皆謂我始於道場。菩提樹下。降伏魔宮。然我已於無量劫中。久降伏已。爲欲降伏剛強衆生。故現是化。我又示現大小便利出息入息。衆皆謂我實有便利出息入息。然我是身所得果報。無是諸患。隨順世間。故示如是。我又示現受人信施。然我是身都無飢渴。隨順世法。故示如是。我又示同諸衆生。故現有睡眠。然我已於無量劫中。具足無上深妙智慧。遠離三有。進止威儀。頭目腹背舉身。疾痛木槍。償對盥洗手足。澡面漱口。楊枝自淨。衆皆謂我有如是事。然我是身都無此也。手足清淨。猶如蓮華。香氣淨潔。如優鉢羅香。一切衆生謂我是人。我實非人。我又示現受糞掃衣。泥濯縫治。然我久已不須是衣。衆人皆謂羅睺羅者是我之子。輸頭檀王是我之父。摩耶夫人是我之母。處在世間。受諸快樂。捨如是事。出家學道。衆人復言。是王太子瞿曇大姓。遠離世樂。求出世法。然我久離世間愛欲。如是等事。悉是示現。一切衆生咸謂是人。然我實非善男子。我雖在此閻浮提中。數數示現入於涅槃。然我實不畢竟涅槃。而諸衆生皆謂如來真實滅盡。而如來性實不永滅。是故當知是常住法。不變易法。善男子。大涅槃者卽是諸佛如

初出同作出家

會同作會○譯  
同作爭

怨宋作冤

常下三本俱有

想字

來法界。我又示現閻浮提中出於世間。衆生皆謂我始成佛。然我已於無量劫中所作已辨。隨順世法。故復示現於閻浮提。初出成佛。我又示現於閻浮提。不持禁戒。犯四重罪。衆人皆見。謂我實犯。然我已於無量劫中。堅持禁戒。無有漏缺。我又示現於閻浮提。爲一闍提。衆人皆見。是一闍提。然我實非一闍提也。一闍提者。云何能成阿耨多羅三藐三菩提。我又示現於閻浮提。破和合僧。衆生皆謂我是破僧。我觀人天。無有能破和合僧者。我又示現於閻浮提。護持正法。衆人皆謂我是護法。悉生驚怪。諸佛法術。不應驚怪。我又示現於閻浮提。爲魔波旬。衆人皆謂我是波旬。然我久於無量劫中。離於魔事。清淨無染。猶如蓮華。我又示現於閻浮提。女身成佛。衆人見之。皆言其奇。女人能成阿耨多羅三藐三菩提。如來畢竟不受女身。爲欲調伏無量衆生。故現女像。憐愍一切諸衆生。故而復示現種種色像。我又示現閻浮提中。生於四趣。然我已斷諸趣因。以業因。故墮於四趣。爲度衆生。故生是中。我又示現閻浮提中。作梵天王。令事梵者。安住正法。然我實非。而諸衆生。咸皆謂我爲眞梵天。示現天像。遍諸天廟。亦復如是。我又示現於閻浮提。入姪女舍。然我實無貪欲之想。清淨不汙。猶如蓮華。爲諸貪姪著色衆生。於四衢道。宣說妙法。然我實無欲穢之心。衆人謂我守護女人。我又示現於閻浮提。入青衣舍。爲欲誘化。令住正法。然我實無如是惡業。墮在青衣。我又示現閻浮提中。而作教師。開化童蒙。令住正法。我又示現於閻浮提。入諸酒會博奕之處。示現種種勝負。誦訟。爲欲拔濟彼諸衆生。而我實無如是惡業。而諸衆生。皆謂我作如是之業。我又示現久住塚間。作大鷲身。度諸飛鳥。而諸衆生。皆謂我是眞實鷲身。然我已離於是業。爲欲度彼諸鳥鷲。故示現如是。我又示現閻浮提中。作大長者。爲欲安立無量衆生。住於正法。又復示作諸王。大臣。王子。輔相。於是衆中。各爲第一。爲修正法。故處王位。我又示現閻浮提中。疫病劫起。多有衆生。爲病所惱。先施醫藥。然後爲說微妙正法。令其安住。無上菩提。衆人皆謂是病劫起。又復示現閻浮提中。飢餓劫起。隨其所須。供給飲食。然後爲說微妙正法。令其安住。無上菩提。又復示現閻浮提中。刀兵劫起。卽爲說法。令離怨害。使得安住。無上菩提。又復示現爲計常者。說無常想。計樂想者。爲說苦想。計我想者。說無我想。計淨想者。說不淨想。若有衆生。貪著三界。卽爲說法。令離是處。度衆生。故爲說無上微妙法藥。爲斷一切煩惱樹故。種植無上法藥之樹。爲欲拔濟諸外道。故演說正

爾同作復同字  
下同有如是二

喻同作譬

法。雖復示現爲衆生師。而心初無衆生師想。爲欲拔濟諸下賤故。現入其中而爲說法。非是惡業受是身也。如來正覺如是安住大般涅槃。是故名爲常住無變。如閻浮提東弗于逮西瞿耶尼北鬱單越。亦復如是。如四天下三千大千世界亦爾。二十五有如首楞嚴經中廣說。以是故名大般涅槃。若有菩薩摩訶薩。安住如是大般涅槃。能示如是神通變化而無所畏。迦葉。以是緣故。汝不應言羅睺羅者是佛之子。何以故。我於往昔無量劫中已離欲有。是故如來名曰常住無有變易。迦葉復言。如來云何名曰常住。如佛言曰。如燈滅已無有方所。如來亦爾。既滅度已亦無方所。佛言。迦葉善男子。汝今不應作如是言。燈滅盡已無有方所。如來亦爾。既滅度已無有方所。善男子。譬如男女然燈之時。燈器大小悉滿中油。隨有油在其明猶存。若油盡已明亦俱盡。其明滅者譬煩惱滅。明雖滅盡燈器猶存。如來亦爾。煩惱雖滅法身常存善男子。於意云何。明與燈器爲俱滅不。迦葉答言。不也。世尊。雖不俱滅。然是無常。若以法身譬燈器者。燈器無常。法身亦爾。應是無常。善男子。汝今不應作如是難如世間言器。如來世尊無上法器。彼器無常非如來也。一切法中涅槃爲常。如來體之故名爲常。復次善男子。言燈滅者是阿羅漢。所證涅槃。以滅貪愛諸煩惱故。譬之燈滅。阿那含者名曰有貪。以有貪故不得說言同於燈滅。是故我昔覆相說言。喻如燈滅。非大涅槃同於燈滅。阿那含者非數數來又不還來。二十五有更不復受。臭身蟲身食身毒身。是則名爲阿那含也。若更受身名爲那含。不受身者名阿那含。有去來者名曰那含。無去來者名阿那含。

# 大般涅槃經卷第四

# 大般涅槃經卷第五

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 四相品之餘

品目之餘二字  
宋元俱作七之  
下三字明作第  
七之下四字

爾時迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。諸佛世尊有祕藏。是義不然。何以故。諸佛世尊唯有密語。無有密藏。譬如如幻主機關木人。人雖親見。屈伸俯仰。莫知其內。而使之然。佛法不爾。威令衆生悉得知見。云何當言諸佛世尊有祕藏。佛讚迦葉善哉善哉。善男子。如汝所言。如來實無祕藏之藏。何以故。如秋滿月。虛空顯露。清淨無翳。人皆親見。如來之言亦復如是。開發顯露。清淨無翳。愚人不解。謂之祕藏。智者了達。則不名藏。善男子。譬如有人多積金銀。至無量億。其心慳慳。不肯惠施。拯濟貧窮。如是積聚。乃名祕藏。如來不爾。於無邊劫。積聚無量妙法珍寶。心無慳慳。常以惠施。一切衆生。云何當言如來祕藏。善男子。譬如有人。身根不具。或無一目。一手一足。以羞恥。故不令人見。人不見。故名爲祕藏。如來不爾。所有正法。具足無缺。令人親見。云何當言如來祕藏。善男子。譬如貧人多負人財。怖畏債主。隱不欲現。故名爲藏。如來不爾。不負一切衆生世法。雖負衆生出世之法。而亦不藏。何以故。恒於衆生。生一子想。而爲演說。無上法故。善男子。譬如長者。多有財寶。唯有一子。心甚愛重。情無捨離。所有珍寶。悉用示之。如來亦爾。視諸衆生。同於一子。善男子。如世間人。以男女根。醜陋鄙惡。以衣覆蔽。故名爲藏。如來不爾。永斷此根。以無根故。無所覆藏。善男子。如婆羅門。所有語論。終不欲令刹利毗舍首陀等聞。何以故。以此論中有過惡故。如來正法。則不如是。初中後善。是故不得名爲祕藏。善男子。譬如長者。唯有一子。心常憶念。憐愛無已。將詣師所。欲令受學。懼不速成。尋便將還。以愛念故。晝夜慙教。其半字。而不教誨。毗伽羅論。何以故。以其幼稚。力未堪故。善男子。假使長者。教半字已。是兒即時能得了。知毗伽羅論。不也。世尊。如是長者。於是子所有祕藏。不

霜宋作陀

四相品之餘

四五

現三本俱作顯

注三本俱作顯  
○莫同作果下  
同

與同作及

善上同無又字

大同作太

不也世尊。何以故。以子年幼故不爲說。不以祕慙而不顯示。所以者何。若有嫉妬祕慙之心。乃名爲藏。如來不爾。云何當言如來祕藏。佛言。善哉善哉。善男子。如汝所言。若有瞋心嫉妬慙慙。乃名爲藏。如來無有瞋心嫉妬。云何名藏。善男子。彼大長者謂如來也。言一子者。謂一切衆生。如來等視一切衆生。猶如一子。教一子者。謂聲聞弟子。半字者。謂九部經。毗伽羅論者。所謂方等大乘經典。以諸聲聞無有慧力。是故如來爲說半字九部經典。而不爲說毗伽羅論。方等大乘。善男子。如彼長者子。既長大堪任讀學。若不爲說毗伽羅論。可名爲藏。若諸聲聞有堪任力。能受大乘毗伽羅論。如來祕惜不爲說者。可言如來有祕密藏。如來不爾。是故如來無有祕藏。如彼長者教半字。已次爲演說毗伽羅論。我亦如是。爲諸弟子說於半字九部經已。次爲演說毗伽羅論。所謂如來常存不變。復次善男子。譬如夏月與大雲雷降注大雨。令諸農夫下種子者。多獲菓實。不下種者。無所收穫。無所獲者。非龍王咎。而此龍王亦無所藏。我亦如是。降大法雨。大涅槃經。若諸衆生種善子者。得慧芽菓。無善子者。則無所獲。無所獲者。非如來咎。然佛如來實無所藏。迦葉復言。我今定知如來世尊無所祕藏。如佛所說。毗伽羅論。謂佛如來常存不變。是義不然。何以故。佛昔說偈。

諸佛與緣覺 聲聞弟子衆 猶捨無常身 何況諸凡夫

今者乃說常存不變。是義云何。佛言。善男子。我爲一切聲聞弟子。教半字故而說是偈。又善男子。波斯匿王其母命終。悲號戀慕。不能自勝。來至我所。我卽問言。大王何故。悲苦懊惱。乃至於此。王言。世尊。國大夫人某日命終。假使有能令我母命還如本者。我當捨國象馬七珍。及以身命悉以報之。我復語言。大王且莫愁惱。憂悲啼哭。一切衆生壽命盡者。名之爲死。諸佛緣覺聲聞弟子。尚捨此身。況復凡夫。善男子。我爲波斯匿王教半字故而說是偈。我今爲諸聲聞弟子說毗伽羅論。謂如來常存無有變易。若有人言。如來無常。云何是人。舌不墮落。迦葉復言。如佛所說。

無所積聚 於食知足 如鳥飛空 跡不可尋

是義云何。世尊。於此衆中。誰得名爲無所積聚。誰復得名於食知足。誰行於空跡不可尋。而此去者。爲至何方。佛



隨同作各

痛三本俱作苦

言迦葉。夫積聚者名曰財寶。善男子。積聚有二種。一者有爲。二者無爲。有爲積聚者。卽聲聞行。無爲積聚者。卽如來行。善男子。僧亦二種。有爲無爲。有爲僧者。名曰聲聞。聲聞僧者。無有積聚。所謂奴婢非法之物。庫藏穀米鹽豉。胡麻大小諸豆。若有說言。如來聽畜奴婢僕使。如是之物。吾則卷縮。我諸所有。聲聞弟子。名無積聚。亦得名爲於食知足。若有貪食。名不知足。不貪食者。是名知足。跡難尋者。則近無上菩提之道。我說是人。雖去無至。迦葉復言。若有爲僧。尙無積聚。況無爲僧。無爲僧者。卽是如來。如來云何。當有積聚。夫積聚者。名爲藏匿。是故如來。凡有所說。無所匿惜。云何名藏。跡不可尋者。所謂涅槃。涅槃之中。無有日月星辰。諸宿寒熱風雨。生老病死。二十五有。離諸憂苦。及諸煩惱。如是涅槃。如來住處。常不變易。以是因緣。如來至是。娑羅樹間。於大涅槃。而般涅槃。佛告迦葉。所言大者。其性廣博。猶如有人。壽命無量。名大丈夫。是人若能安住正法。名人中勝。如我所說。八大人覺。爲一人有爲多人有。若一人具八則爲最勝。所言涅槃者。無諸瘡疣。善男子。譬如有人。爲毒箭所射。多受苦痛。值遇良醫。爲拔毒箭。塗以妙藥。令其離痛。得受安樂。是醫卽便遊於城邑。及諸聚落。隨有患苦瘡疣之處。卽往其所。爲療衆苦。善男子。如來亦爾。成等正覺。爲大醫王。見閻浮提。苦惱衆生。無量劫中。被姪怒癡。煩惱毒箭。受大苦切。爲如是等說。大乘經甘露法藥。療治此已。復至他方。有諸煩惱毒箭之處。示現作佛。爲其療治。是故名曰大般涅槃。大般涅槃者。名解脫處。隨有調伏衆生之處。如來於中。而作示現。以是真實甚深義故。名大涅槃。迦葉菩薩復白佛言。世尊。世間醫師。悉能療治一切衆生瘡疣病。不善男子。世間瘡疣。凡有二種。一者可治。二不可治。凡可治者。醫則能治。不可治者。則不能治。迦葉復言。如佛言者。如來則爲於閻浮提。治衆生已。若言治已。是諸衆生。其中云何。復有未能得涅槃者。若未悉得。云何如來。說言。治竟。欲至他方。善男子。閻浮提內衆生。有二。一者有信。二者無信。有信之人。則名可治。何以故。定得涅槃。無瘡疣故。是故我說。治閻浮提。諸衆生已。無信之人。名一闍提。一闍提者。名不可治。除一闍提。餘悉治已。是故涅槃。名無瘡疣。世尊。何等名涅槃。善男子。夫涅槃者。名爲解脫。迦葉復言。所言解脫。爲是色耶。爲非色乎。佛言。善男子。或有是色。或非是色。言非色者。卽是聲聞緣覺解脫。言是色者。卽是諸佛如來解脫。善男子。是故解脫。亦色非色。如來爲諸聲聞弟子。說爲非色。世尊。聲聞緣覺。若非色者。云何得住。善男

非上同有亦字

唯同作惟○愍  
同作憫○脫下  
同有之字

月同作秋

病疾三本俱作  
疾病○甘上同  
無是字

子。如非想非非想天亦色非色。我亦說為非色。若人難言。非想非非想天若非色者。云何得住去來進止。如是之義諸佛境界。非諸聲聞緣覺所知。解脫亦爾。亦色非色。說為非色。亦想非想。說為非想。如是之義諸佛境界。非諸聲聞緣覺所知。爾時迦葉菩薩復白佛言。世尊。唯願哀愍。重垂廣說。大般涅槃行解脫義。佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。真解脫者名曰遠離一切繫縛。若真解脫離諸繫縛。則無有生亦無和合。譬如父母和合生子。真解脫者則不如是。是故解脫名曰不生。迦葉。譬如醍醐其性清淨。如來亦爾。非因父母和合而生。其性清淨。所以示現有父母者。為欲化度諸眾生故。真解脫者即是如來。如來解脫無二無別。譬如春月。下諸種子。得爛潤氣。尋便出生。真解脫者則不如是。又解脫者名曰虛無。虛無即是解脫。解脫即是如來。如來即是虛無。非作所作。凡是作者如城郭樓觀。真解脫者則不如是。是故解脫即是如來。又解脫者即無為法。譬如陶師作已。還破。解脫不爾。真解脫者不生不滅。是故解脫即是如來。如來亦爾。不生不滅。不老不死。不破不壞。非有為法。以是義故。名曰如來。入大涅槃。不老不死。有何等義。老者名為遷變。髮白面皺。死者身壞命終。如是等法。解脫中無。以無是事故。名解脫。如來亦無髮白面皺有為之法。是故如來無有老也。無有老故。則無有死。又解脫者名曰無病。所謂病者。四百四病。及餘外來侵損身者。是處無故。故名解脫。無病疾者即真解脫。真解脫者即是如來。如來無病。是故法身亦無有病。如是無病即是如來。死者名曰身壞命終。是處無死即是甘露。是甘露者即真解脫。真解脫者即是如來。如來成就如是功德。云何當言如來無常。若言無常。無有是處。是金剛身。云何無常。是故如來不名命終。如來清淨。無有垢穢。如來之身非胎所汙。如分陀利本性清淨。如來解脫亦復如是。如是解脫即是如來。是故如來清淨無垢。又解脫者諸漏瘡疣永無遺餘。如來亦爾。無有一切諸漏瘡疣。又解脫者無有鬪誣。譬如飢人見他飲食。生貪奪想。解脫不爾。又解脫者名曰安靜。凡夫人言。夫安靜者。謂摩醯首羅。如是之言。即是虛妄。真安靜者。畢竟解脫。畢竟解脫即是如來。又解脫者名曰安隱。如多賊處。不名安隱。清夷之處。乃名安隱。是解脫中無有怖畏。故名安隱。是故安隱即真解脫。真解脫者即是如來。如來者即是法也。又解脫者無有等侶。有等侶者。如諸國王。有隣國等。真解脫者則不如是。無等侶者。謂轉輪聖王。無能與等。解脫亦爾。無有等侶。無等侶者。即真解脫。真解脫者即是如

喻同作譬下同

婆宋作嘶下同

裂三本俱作烈

來轉法輪王。是故如來無有等侶。有等侶者無有是處。又解脫者名無憂愁。有憂愁者。譬如國王畏難疆隣而生憂愁。夫解脫者則無是事。譬如壞墻則無憂慮。解脫亦爾。是無憂畏。無憂畏者即是如來。又解脫者名無憂喜。譬如女人唯一子。從役遠行。卒得凶聞之愁苦。後復聞活便生歡喜。夫解脫中無如是事。無憂喜者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者無有塵垢。譬如春月日沒之後。風起塵霧。夫解脫中無如是事。無塵霧者喻真解脫。真解脫者即是如來。譬如聖王髻中明珠。無有垢穢。夫解脫性亦復如是。無有垢穢。無垢穢者喻真解脫。真解脫者即是如來。如真金性不雜沙石。乃名真寶。有人得之生於財想。夫解脫性亦復如是。如彼真寶。彼真寶者喻真解脫。真解脫者即是如來。譬如瓦餅破而聲響。金剛寶餅則不如是。夫解脫者亦無響破。金剛寶餅喻真解脫。真解脫者即是如來。是故如來身不可壞。其聲響者。如薤麻子置盛熱中。爆裂出聲。夫解脫者無如是事。如彼金剛真寶之餅。無響破聲。假使無量百千人衆。悉共射之。無能壞者。無響破聲。喻真解脫。真解脫者即是如來。如貧窮人負他物。故爲他所繫枷鎖杖罰。受諸苦毒。夫解脫中無如是事。無有負債。猶如長者多有財寶。無量億數。勢力自在。不負他物。夫解脫者亦復如是。多有無量法財珍寶。勢力自在。無有所負。無所負者喻真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名無逼切。如春涉熱夏日食甜冬日觸冷。真解脫中無有如是。不適意事。無逼切者喻真解脫。真解脫者即是如來。又無逼切者。譬如有人飽食魚肉而復飲乳。是人則爲近死不久。真解脫中無如是事。是人若得甘露良藥。所患得除。真解脫者亦復如是。甘露良藥喻真解脫。真解脫者即是如來。云何逼切不逼切耶。譬如凡夫我慢自高。而作是念。一切物中誰能害我。即便捉提蛇虎毒蟲。當知是人。不盡壽命。即便橫死。真解脫中無如是事。不逼切者。如轉輪王所有神珠。能伏蝘蝓。九十六種諸毒蟲等。若有聞是神珠香者。諸毒消滅。真解脫者亦復如是。皆悉遠離二十五有。毒消滅者喻真解脫。真解脫者即是如來。又不逼切者。譬如虛空。解脫亦爾。彼虛空者喻真解脫。真解脫者即是如來。又逼切者。如近乾草。然諸燈火。近則熾然。真解脫中無如是事。又不逼切者。譬如日月。不逼衆生。解脫亦爾。於諸衆生。無有逼切。無有逼切。喻真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名無動法。猶如怨親。真解脫中無如是事。又不動者。如轉輪王更無聖王。以爲親友。若更有親。則無是處。解脫亦爾。

得能同作能得

更無有親。若有親者亦無是處。彼王無親。喻真解脫。真解脫者即是如來。如來者即是法也。又無動者譬如素衣。易受染色。解脫不爾。又無動者如婆師華。欲令有臭及青色者無有是處。解脫亦爾。欲令有臭及諸色者亦無是處。是故解脫即是如來。又解脫者名爲希有。譬如水中生於蓮華。非爲希有。火中生者。是乃希有。有人見之便生歡喜。真解脫者亦復如是。其有見者心生歡喜。彼希有者。喻真解脫。真解脫者即是如來。其如來者即是法身。又希有者。譬如嬰兒。其齒未生。漸漸長大。然後乃生。解脫不爾。無生不生。又解脫者名曰虛寂。無有不定。不定者如一闍提。究竟不移。犯重禁者。不成佛道。無有是處。何以故。是人若於佛正法中心得淨信。爾時即便滅一闍提。若復得作優婆塞者。是亦得能滅一闍提。犯重禁者。滅此罪已。則得成佛。是故若言。舉定不移。不成佛道。無有是處。真解脫中都無如是滅盡之事。又虛寂者。墮於法界。如法界性。卽真解脫。真解脫者即是如來。又一闍提若盡滅者。則不得稱一闍提也。何等名爲一闍提耶。一闍提者。斷滅一切諸善根本。心不攀緣一切善法。乃至不生一念之善。真解脫中都無是事。無是事故。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名不可量。譬如穀聚。其量可知。真解脫者則不如是。譬如大海。不可度量。解脫亦爾。不可度量。不可量者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名無量法。如一衆生。多有業報。解脫亦爾。有無量報。無量報者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名爲廣大。譬如大海。無與等者。解脫亦爾。無能與等。無與等者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰最上。譬如虛空。最高無比。解脫亦爾。最高無比。高無比者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名無能過。譬如師子所住之處。一切百獸。無能過者。解脫亦爾。無有能過。無能過者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名爲無上。譬如北方諸方。中上。解脫亦爾。爲無有上。無有上者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名無上上。譬如北方之於東方。爲無上上。解脫亦爾。無有上上。無上上者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰恒法。譬如人。天身壞命終。是名曰恒。非不恒也。解脫亦爾。非是不恒。非不恒者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰堅實。如法陀羅。梅。檀。沉香。其性堅實。解脫亦爾。其性堅實。性堅實者。卽真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰不虛。譬如竹華。其體空疎。解脫不爾。當知解脫即是如來。又解脫者名不可汗。譬如牆壁。未被塗治。蚊蠹在

實三本俱作住  
○梅宋作梅  
疎三本俱作疎

以同作已

宅下同無者字

顛宋元俱作慎

上止住遊戲。若以塗治彩畫彫飾。蟲聞彩香。即便不住。如是不住。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰無邊。譬如聚著皆有邊表。解脫不爾。譬如虚空。無有邊際。解脫亦爾。無有邊際。如是解脫。即是如來。又解脫者。名不可見。譬如空中鳥跡難見。如是難見。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰甚深。何以故。聲聞緣覺所不能入。不能入者。即真解脫。真解脫者。即是如來。又甚深者。諸佛菩薩之所恭敬。譬如孝子供養父母。功德甚深。功德甚深。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名不可見。譬如有人不自見頂。解脫亦爾。聲聞緣覺所不能見。不能見者。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名無舍宅。譬如虚空。無有舍宅。解脫亦爾。言舍宅者。喻二十五有。無有舍宅者。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名不可取。如阿摩勒果。人可取持。解脫不爾。不可取持。不可取持。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名不可執。譬如幻物。不可執持。解脫亦爾。不可執持。不可執持。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。無有身體。譬如有人體生瘡癰。及諸癰疽。顛狂乾枯。真解脫中。無如是病。無如是病。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名爲一味。如乳一味。解脫亦爾。唯有一味。如是一味。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰清淨。如水無泥。澄淨清淨。解脫亦爾。澄淨清淨。澄淨清淨。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰一味。如空中雨一味。清淨一味。清淨清淨。清淨清淨。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰寂靜。譬如有人熱病除。愈身思寂靜。解脫亦爾。身得寂靜。身得寂靜。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰平等。譬如野田毒蛇。鼠狼俱有殺心。解脫不爾。無有殺心。無殺心者。即真解脫。真解脫者。即是如來。又平等者。譬如父母等心於子。解脫亦爾。其心平等。心平等者。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名無異處。譬如有人唯居上妙清淨屋宅。更無異處。解脫亦爾。無有異處。無異處者。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰知足。譬如飢人。值過甘饌。食之無厭。解脫不爾。如食乳糜。更無所須。更無所須。喻真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名曰斷絕。如人被縛。斷縛得脫。解脫亦爾。斷絕一切疑心。結縛。如是斷疑。即真解脫。真解脫者。即是如來。又解脫者。名到彼岸。譬如大河。有此彼岸。解脫不爾。雖無此岸。而有彼岸。有彼岸者。即真解脫。真解脫者。即是如來。

深三本俱作長

曰同作為

狹三本俱作歷

船下同有得堅  
字船四字○淺  
同作度

生同作出

是如來。又解脫者名曰默然。譬如大海其水汎漲多諸音聲。解脫不爾。如是解脫即是如來。又解脫者名曰美妙。譬如衆藥雜呵梨勒其味則苦。解脫不爾。味如甘露。譬如甘露。真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者除諸煩惱。譬如良醫和合諸藥善療衆病。解脫亦爾。能除煩惱。除煩惱者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰無進。譬如小舍不容多人。解脫不爾。多所容受。多所容受即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名曰滅諸愛不雜淫欲。譬如女人多諸愛欲。解脫不爾。如是解脫即是如來。如來如是無有貪欲瞋恚癡憍慢等結。又解脫者名曰無愛。愛有二種。一餓鬼愛。二者法愛。真解脫者離餓鬼愛。憍恣衆生故有法愛。如是法愛即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者離我所。如是解脫即是如來。如來者即是法也。又解脫者即是滅盡離諸有貪。如是解脫即是如來。如來者即是法也。又解脫者即是救護。能救一切諸怖畏者。如是解脫即是如來。如來者即是法也。又解脫者即是歸處。若有歸依。如是解脫不求餘依。譬如有人依恃於王不求餘依。雖復依王則有動轉。依解脫者無有動轉。無動轉者即真解脫。真解脫者即是如來。如來者即是法也。又解脫者名曰屋宅。譬如有人行於曠野則有險難。解脫不爾。無有險難。無險難者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者是無所畏。如師子王於諸百獸不生怖畏。解脫亦爾。於諸魔衆不生怖畏。無怖畏者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者無有進狹。譬如隘路乃至不受二人並行。解脫不爾。如是解脫即是如來。又有不進。譬如有人畏虎墮井。解脫不爾。如是解脫即是如來。又有不進。如大海中捨壞小船得堅牢船。乘之渡海至安隱處。心得快樂。解脫亦爾。心得快樂。得快樂者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者拔諸因緣。譬如因乳得酪。因酪得酥。因酥得醍醐。真解脫中都無是因。無是因者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者能伏憍慢。譬如大王慢於小王。解脫不爾。如是解脫即是如來。如來者即是法也。又解脫者伏諸放逸。謂放逸者多有貪欲。真解脫中無有是名。無是名者即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者能除無明。如上妙酥除諸滓穢。乃名醍醐。解脫亦爾。除無明滓生於真明。如是真明即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名爲寂靜純一無二。如空野象獨一無侶。解脫亦爾。獨一無二。獨一無二即真解脫。真解脫者即是如來。又解脫者名爲堅實。如竹葦蔕蔕虛空虛而子堅實。除佛如來其餘人天皆不

解三本俱作脫  
以同作已  
飲元明俱作脫

空三本俱作曰

堅實。眞解脫者遠離一切諸有漏等。如是解脫卽是如來。又解脫者名能覺了增益於我。眞解脫者亦復如是。如是解脫卽是如來。又解脫者名捨諸有。譬如有人食已而吐。解脫亦爾。捨於諸有。捨諸有者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名曰決定。如婆師華香七葉中無。解脫亦爾。如是解脫卽是如來。又解脫者名曰水大。譬如水大於諸大勝。能潤一切草木種子。解脫亦爾。能潤一切有生之類。如是解脫卽是如來。又解脫者名曰爲入。如有門戶則通入路。金性之處金則可得。解脫亦爾。如彼門戶修無我者則得入中。如是解脫卽是如來。又解脫者名曰爲善。譬如弟子隨逐於師。善奉教勅得名爲善。解脫亦爾。如是解脫卽是如來。又解脫者名曰不動。譬如門閭風不能動。眞解脫者亦復如是。如是解脫卽是如來。又解脫者名無濤波。如彼大海其水濤波。解脫亦爾。如是解脫卽是如來。又解脫者譬如宮殿。解脫亦爾。當知解脫卽是如來。又解脫者名曰所用。如閻浮檀金多言所任無有能說是金過惡。解脫亦爾。無有過惡。無有過惡卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者捨嬰兒行。譬如二人捨小兒行。解脫亦爾。除捨五陰。除捨五陰卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名曰究竟。如被繫者從繫得解。洗浴清淨然後還家。解脫亦爾。竟畢清淨。畢竟清淨卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名無作樂。無作樂者以吐食欲瞋恚癡故。譬如有人誤飲毒藥。爲除毒故卽服吐藥。既得吐已毒卽除。愈身得安樂。解脫亦爾。吐諸煩惱結縛之毒。身得安樂名無作樂。無作樂者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名斷四種毒蛇煩惱。斷煩惱者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名離諸有。滅一切苦得一切樂。永斷貪欲瞋恚癡。拔斷一切煩惱根本。拔根本者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名斷一切有爲之法。出生一切無漏善法。斷塞諸道。所謂若我無我非我非無我。唯斷取著不斷我見。我見者名爲佛性。佛性者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名不空空。空空者名無所有。無所有者卽是外道尼躉子等所計解脫。而是尼躉實無解脫。故名空空。眞解脫者則不。如是故不空空。不空者卽眞解脫。眞解脫者卽是如來。又解脫者名空不空。如水酒乳酪酥蜜等餅。雖無水酒酪酥蜜時。猶故得名爲水等餅。而是餅等不可說空。及以不空。若言空者則不得有色香味觸。若言不空而復無

得同作則

依下元有夾註  
平本本作定字  
六字  
礙三本俱作問

有水酒等實。解脫亦爾。不可說色及以非色。不可說空及以不空。若言空者。則不得有常樂我淨。若言不空。誰受是常樂我淨者。以是義故。不可說空及以不空。空者。謂無二十五有及諸煩惱。一切苦一切相。一切有爲行。如餅無酪。則名爲空。不空者。謂眞實善色常樂我淨不動不變。猶如彼餅色香味觸。故名不空。是故解脫。喻如彼餅。彼餅遇緣。則有破壞。解脫不爾。不可破壞。不可破壞。卽眞解脫。眞解脫者。卽是如來。又解脫者。名曰離愛。譬如有人愛心。悽望釋提桓因。大梵天王。自在天王。解脫不爾。若得成於阿耨多羅三藐三菩提。已無愛無疑。無愛無疑。卽眞解脫。眞解脫者。卽是如來。若言解脫。有愛疑者。無有是處。又解脫者。斷諸有。斷一切相。一切繫縛。一切煩惱。一切生死。一切因緣。一切果報。如是解脫。卽是如來。如來卽是涅槃。一切衆生。怖畏生死。諸煩惱。故故受三歸。譬如羣鹿。怖畏獵師。既得免難。若得一跳。則險一歸。如是三跳。則險三歸。以三跳。故得受安樂。衆生亦爾。怖畏四魔。惡獵師。故受三歸。依三歸。依故。則得安樂。受安樂者。卽眞解脫。眞解脫者。卽是如來。如來者。卽是涅槃。涅槃者。卽是無盡。無盡者。卽是佛性。佛性者。卽是決定。決定者。卽是阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。菩薩。白佛言。世尊。若涅槃佛性。決定如來。是一義者。云何說言有三歸。依佛告迦葉。善男子。一切衆生。怖畏生死。故求三歸。以三歸。故則知佛性。決定如來。是一義者。有法名一義異。有法名義俱異。名一義異者。佛當法。常比丘。僧常。涅槃。虚空。皆是常。是佛性。決定。涅槃。善男子。有法名一義異。有法名義俱異。名一義異者。佛當法。常比丘。僧常。涅槃。虚空。皆是常。是名名一義異。名義俱異者。佛名爲覺。法名不覺。僧名和合。涅槃名解脫。虚空名非善。亦名無礙。是爲名義俱異。善男子。三歸依者。亦復如是。名義俱異。云何爲一。是故我告摩訶波提。提憍曇彌。莫供養我。當供養僧。若供養僧。則得具足。供養三歸。摩訶波闍波提。卽答我言。衆僧之中。無佛無法。云何說言。供養衆僧。則得具足。供養三歸。我復告言。汝隨我語。則供養佛。爲解脫。故卽供養法。衆僧受者。則供養僧。善男子。是故三歸。不得爲一。善男子。如來或時說一。爲三說三。爲一。如是之義。諸佛境界。非是聲聞緣覺所知。迦葉復言。如佛所說。畢竟安樂。名涅槃者。是義云何。夫涅槃者。捨身捨智。若捨身智。誰當受樂。佛言。善男子。譬如有人。食已。心闕。出外。欲吐。既得吐已。而復還。還同伴問之。汝今所患。竟爲差不。而復來還。答言。已差。身得安樂。如來亦爾。畢竟遠離二十五有。永得涅槃安樂之處。不可動轉。無有盡滅。斷一切受。名無受樂。如是無受名爲常樂。若言如來有受樂者。無有是處。是故畢竟樂。



如來同作如來之

葉下同無菩薩二字

譬同作匹

今已說同作已說之○邊三本俱作徧

殺同作害

濕上同有般字

者卽是涅槃。涅槃者卽真解脫。真解脫者卽是如來。迦葉復言。不生不滅是解脫耶。如是如是。善男子。不生不滅卽是解脫。如是解脫卽是如來。迦葉復言。若不生滅是解脫者。虛空之性亦無生滅。應是如來。如如來性卽是解脫。佛告迦葉。善男子。是事不然。世尊。何故不然。善男子。如迦蘭伽及命命鳥。其聲清妙。寧可同於烏鵲音。不也。世尊。烏鵲之聲。比命命等。百千萬倍。不可爲比。迦葉復言。迦蘭伽等其聲微妙。身亦不同。如來云。何比之。烏鵲無異。芥子比須彌山。佛與虛空亦復如是。迦蘭伽聲可譬佛聲。不可以喻烏鵲之音。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。善男子。汝今善解甚深難解。如來有時以因緣故。引彼虛空以喻解脫。如是解脫卽是如來。真解脫者。一切人天無能爲譬。而此虛空實非其喻。爲化衆生故。以虛空非喻爲喻。當知解脫卽是如來。如來之性卽是解脫。解脫如來無二無別。善男子。非喻者。如無比之物。不可引喻。有因緣故。可得引喻。如經中說。面貌端正。如月盛滿。白象鮮潔。猶如雪山。滿月不得卽同於面。雪山不得卽是白象。善男子。不可以喻喻真解脫。爲化衆生故作喻耳。以諸譬喻。知諸法性。皆亦如是。迦葉復言。云何如來作二種說。佛言。善男子。譬如有人執持刀劍。以瞋恚心欲害如來。如來和悅無恚恨色。是人當得壞如來身。成逆罪。不也。世尊。何以故。如來身界不可壞故。所以者何。以無身聚。唯<sub>是</sub>有法性。法性之性。理不可壞。是人云何能壞佛身。直以惡心。故成無間。以是因緣。引諸譬喻。得知實法。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。善男子。我所欲說。汝今已說。又善男子。譬如惡人欲害其母。住於野田。在穀積下。母爲送食。其人見已。尋生害心。便前磨刀。母時知已。逃入積中。其人持刀繞積邊。斫已歡喜。生已害想。其母尋出。還至家中。於意云。何是人成就無間罪。不。世尊。不可定說。何以故。若說有罪。母身應壞。身若不壞。云何言有。若說無罪。生已殺想。心懷歡喜。云何言無。是人雖不具足逆罪。而亦是逆。以是因緣。引諸譬喻。得知實法。佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。以是因緣。我說種種方便譬喻。以譬解脫。雖以無量阿僧祇喻。而實不可以喻爲比。或有因緣。亦可喻說。或有因緣。不可引譬。是故解脫成就。如是無量功德。趣涅槃者。涅槃如來。亦有如是無量功德。以如是等無量功德成就。滿故名大涅槃。迦葉菩薩。白佛言。世尊。我今始知如來至處。爲無有盡。處若無盡。當知壽命亦應無盡。佛言。善哉善哉。善男子。汝今善能護持正法。若有善男子善女人。欲斷煩惱。諸結縛者。當作如是護持正法。

大般涅槃經卷第五

# 大般涅槃經卷第六

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 四依品第八

大下同有般字  
○愍宋元俱作  
憫  
愍三本俱作憫  
下同○欲下同  
無是道二字

業同作舊

萬下三本俱有  
尸字○返同作  
反

佛復告迦葉善男子。是大涅槃微妙經中。有四種人。能護正法。建立正法。憶念正法。能多利益憐愍世間。為世間  
依安樂人天。何等為四。有人出世。具煩惱性。是名第一。須陀洹人。斯陀含人。是名第二。阿那含人。是名第三。阿羅  
漢人。是名第四。是四種人。出現於世。能多利益憐愍世間。為世間依安樂人天。云何名為具煩惱性。若有人能奉  
持禁戒威儀。具足建立正法。從佛所聞解其文義。轉為他人。分別宣說。所謂少欲是道。多欲非道。廣說如是。八大  
人覺。有犯罪者。教令發露懺悔滅除。善知菩薩方便所行祕密之法。是名凡夫。非第八人。第八人者。不名凡夫。名  
為菩薩。不名為佛。第二人者。名須陀洹。斯陀含。若得正法。受持正法。從佛聞法。如其所聞。聞已書寫受持。讀誦轉  
為他說。若聞法已。不寫不受。不持不說。而言奴婢不淨之物。佛聽畜者。無有是處。是名第二人。如是之人。未得第  
二。第三住處。名為菩薩。已得受記。第三人者。名阿那含。阿那含者。誹謗正法。若言聽畜奴婢。使不淨之物。受持  
外道典籍書論。及為客塵煩惱所障。諸業煩惱之所覆蓋。若藏如來真實舍利。及為外病之所惱害。或為四大毒  
蛇所侵。論說我者。悉無是處。若說無我。斯有是處。說著世法。無有是處。若說大乘相續不絕。斯有是處。若所受身  
有八萬蟲。亦無是處。永離婬欲。乃至夢中不失不淨。斯有是處。臨終之日。生怖畏者。亦無是處。阿那含者。為何謂  
也。是人。不還。如上所說。所有過患。永不能汙。往返周旋。名為菩薩。已得受記。不久得成。阿耨多羅三藐三菩提。是  
則名為第三人也。第四人者。名阿羅漢。阿羅漢者。斷諸煩惱。捨於重擔。逮得己利。所作已辦。住第十地。得自在智。  
隨人所樂。種種色像。悉能示現。如所莊嚴。欲成佛道。即能得成。能成如是無量功德。名阿羅漢。是名四人。出現於

葉下同有善薩  
二字

隨同作逾

炎同作燄

屬同作罽

屬同作屬

世能多利益憐愍世間。爲世間依安樂人天。於人天中最尊最勝。猶如來名人中勝爲歸依處。迦葉白佛言。世尊。我今不依是四種人。何以故。如瞿師羅經中佛爲瞿師羅說。若天魔梵爲欲破壞變爲佛形。具足莊嚴三十二相八十種好。圓光一尋。面部圓滿猶月。盛明眉間。毫相白踰珂雪。如是莊嚴來向汝者。汝當檢校定其虛實。旣覺知已。應當降伏。世尊。魔等尙能變作佛形。況不能變作羅漢等四種之身。坐臥空中。左脅出水。右脅出火。身出煙炎。猶如火聚。以是因緣。我於是中心不生信。或有所說不能稟受。亦無敬念。而作依止。佛言。善男子。於我所說若生疑者。尙不應受。況如是等。是故應當善分別。知是善不善。可作不可作。如是作已。長夜受樂。善男子。譬如偷狗夜入人舍。其家婢使若覺知者。卽應驅罵。汝疾出去。若不出者。當斷汝命。偷狗聞之。卽去不還。汝等從今亦應如是。降伏波旬。應作是言。波旬。汝今不應作如是像。若故作者。當以五繫繫縛於汝。魔聞是已。便當還去。如彼偷狗更不復還。迦葉白佛言。世尊。如佛爲瞿師羅長者說。若能如是降伏魔者。亦可得近大般涅槃。如來何必說是。四人爲依止處。如是四人所可言說。未必可信。佛告迦葉。善男子。如我所說亦復如是。非爲不爾。善男子。我爲聲聞有肉眼者。說言降魔。不爲修學大乘人說。聲聞之人。雖有天眼。故名肉眼。學大乘者。雖有肉眼。乃名佛眼。何以故。是大乘經名爲佛乘。如此佛乘最上最勝。善男子。譬如有人勇健威猛。有怯弱者。常畢依附。其勇健人常教怯者。汝當如是持弓執箭。修學道長。鉤網索。又復告言。夫鬪戰者。雖如履刃。不應自生怖畏之念。當視人天生輕弱。想應自生心作勇健意。或時有人無有膽勇。詐作健相。執持弓刀種種器仗。以自莊嚴。來至陣中。鬪聲大呼。汝於是人亦復不應生於憂怖。如是輩人若見汝等不怖畏者。當知是人不久散壞。如彼偷狗。善男子。如來亦爾。告諸聲聞。汝等不應畏魔。波旬。若魔波旬化作佛身。至汝所者。汝當精勤堅固。其心令彼降伏。時魔卽當愁憂。不樂復道而去。善男子。如彼健人不從他習學大乘者。亦復如是。得聞種種深密經典。其心欣樂。不生驚怖。何以故。如是修學大乘之人。已曾供養恭敬禮拜過去無量萬億佛故。雖有無量億千魔衆欲來侵燒。於是事中終不驚畏。善男子。譬如有人得阿竭陀藥。不畏一切毒蛇等畏。是藥力故。亦能消除一切諸毒。是大乘經亦復如是。如彼藥力。不畏一切諸魔惡毒。亦能降伏。令不復起。復次善男子。譬如龍性甚弊惡。欲害人時。或以眼視。或以氣嘘。是故

不三本俱作乃

碍同作圍

先同作上下同

噉同作啖下同

是上三本俱無而字

一切師子虎豹豺狼狗犬皆生怖畏。是等惡獸聲聞見形。或觸其身無不喪命。有善呪者以呪力故。能令如是諸惡毒龍金翅鳥等惡象師子虎豹豺狼。悉調順。悉任乘御。如是等獸見彼善呪。即便調伏。聲聞緣覺亦復如是。見魔波旬皆生恐怖。而魔波旬亦復不生畏懼之心。猶行魔業。學大乘者亦復如是。見諸聲聞怖畏魔事。於此大乘不生信樂。先以方便降伏諸魔。悉令調善。堪任爲乘。因爲廣說種種妙法。聲聞緣覺見調魔已。不生怖畏。於此大乘無上正法。方生信樂。作如是言。我等從今不應於此正法之中。而作障礙。復次善男子。聲聞緣覺於諸煩惱而生怖畏。學大乘者都無恐懼。修學大乘有如是力。以是因緣。先所說者。爲欲令彼聲聞緣覺調伏諸魔。非爲大乘。是大涅槃微妙經典不可消伏。甚奇甚特。若有聞者。聞已信受。能信如來是常住法。如是之人。甚爲希有。如優曇花。我涅槃後。若有得聞。如是大乘微妙經典。生信敬心。當知是等於未來世。百千億劫。不墮惡道。爾時佛告迦葉菩薩。善男子。我涅槃後。常有百千無量衆生。誹謗不信。是大涅槃微妙經典。迦葉菩薩復白佛言。世尊。是諸衆生。於佛滅後。久近便當誹謗。是經世尊。復有何等純善衆生。當能拔濟。是謗法者。佛告迦葉。善男子。我般涅槃後。四十年中。於閻浮提廣行流布。然後乃當隱沒於地。善男子。譬如甘蔗稻米石蜜酥酪醍醐。隨有之處。其土人民。皆言是味。味中第一。或復有人。純食粟米及穉稗子。是人亦言。我所食者。最爲第一。是薄福人。受業報故。若是福人。耳初不聞粟稗之名。所食唯是粳糧甘蔗石蜜醍醐。是大涅槃微妙經典。亦復如是。鈍根薄福。不樂聽聞。如彼薄福。憎惡粳糧及石蜜等。二乘之人。亦復如是。憎惡無上大涅槃經。或有衆生。其心欣樂聽受。是經。聞已歡喜。不生誹謗。如彼福人。食於粳糧。善男子。譬如有王。居在深山險難惡處。雖有甘蔗粳糧石蜜。以難得故。貪惜積聚。不敢噉食。懼其有盡。唯食粟稗。有異國王。聞而慙之。即以車載粳糧甘蔗而送與之。其王得已。即便分布。舉國共食。民既食已。皆生歡喜。咸作是言。因彼王故。令我得於希有之味。善男子。是四種人。亦復如是。爲此無上大法之將。是四種中。或有一人。見於他方。無量菩薩。雖學如是大乘經典。若自書寫。若令他書。爲利養故。爲稱譽故。爲解法故。爲依止故。爲用貿易。共餘經故。不能廣爲他人宣說。是故持是微妙經典。送至彼方。與彼菩薩。令發無上菩提之心。安住菩提。而是菩薩。得是經已。即便廣爲他人演說。令無量衆得受。如是大乘法味。皆悉是此一菩薩力。所

葉下同無菩薩  
二字次同

唯同作惟下同  
讚宋作贊

未聞經悉令得聞。如彼人民因王力故得希有食。又善男子。是大涅槃微妙經典所流布處。當知其地即是金剛。是中諸人亦如金剛。若有能聽如是經者。卽不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。隨其所願悉得成就。如我今日所可宣說。汝等比丘應善受持。若有衆生不能聽聞如是經典。當知是人甚可哀愍。何以故。是人不能受持。如是大乘經典甚深義故。迦葉菩薩白佛言。世尊。如來滅後四十年中。是大乘典大涅槃經。於閻浮提廣行流布。過是已後沒於地者。却後久如復當還出。佛言。善男子。若我正法餘八十年。前四十年是經復當於閻浮提雨大法雨。迦葉菩薩復白佛言。世尊。如是經典正法滅時。正戒毀時。非法增長時。無如法衆生時。誰能聽受奉持讀誦。令其通利。供養恭敬書寫解說。唯願如來。哀愍衆生分別廣說。令諸菩薩聞已受持。持已卽得不退阿耨多羅三藐三菩提心。爾時佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。汝今善能問如是義。善男子。若有衆生於一恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。愛樂是典。不能爲人分別廣說。善男子。若有衆生於二恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。正解信樂受持讀誦。亦復不能爲人廣說。若有衆生於三恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。雖爲他說未解深義。若有衆生於四恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說十六分中一分之義。雖復演說亦不具足。若有衆生於五恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。廣爲人說十六分中八分之義。若有衆生於六恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說十六分中十二分義。若有衆生於七恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。爲他廣說十六分中十四分義。若有衆生於八恒河沙諸如來所。發菩提心。然後乃能於惡世中。不謗是法。受持讀誦書寫經卷。亦勸他人令得書寫。自能聽受復勸他人令得聽受。讀誦通利擁護堅持。憐愍世間諸衆生。故供養是經。亦勸他人令其供養。恭敬尊重讀誦禮拜亦復如是。具足能解盡其義味。所謂如來常住。不變畢竟安樂。廣說衆生悉有佛性。善知如來所有法藏。供養如是諸佛等已。建立如是無上正法。受持擁護。若有始發阿耨

多羅三藐三菩提心。當知是人未來之世。必能建立如是正法受持擁護。是故汝今不應不知未來世中護法之人。何以故。是發心者於未來世必能護持無上正法。善男子。有惡比丘聞我涅槃不生憂愁。今日如來入般涅槃。何其快哉。如來在世遮我等利。今入涅槃。誰復當有遮奪我者。若無遮我奪則還得如本利養。如來在世禁戒嚴峻。今入涅槃。悉當放捨。所受袈裟本爲法式。今當廢壞如木頭幡。如是等人誹謗拒逆。是大乘經。善男子。汝今應當如是憶持。若有衆生成就具足無量功德。乃能信是大乘經典。信已受持。其餘衆生有樂法者。若能廣爲解說此經。其人聞已過去無量阿僧祇劫。所作惡業皆悉除滅。若有不信是經典者。現身當爲無量病苦之所惱害。多爲衆人所見罵辱。命終之後。人所輕賤。顏貌醜陋。資生艱難。常不供足。雖復少得。蠱澁弊惡。生生常處貧窮下賤。誹謗正法邪見之家。若臨終時。或值荒亂。刀兵競起。帝王暴虐。怨家讎隙之所侵逼。雖有善友而不遭遇。資生所須求不能得。雖少得利。常患飢渴。唯爲凡下之所顧識。國王大臣。悉不齒錄。設復聞其有所宣說。正使是理終不信受。如是之人不至善處。如折翼鳥不能飛行。是人亦爾。於未來世不能得至人天善處。若復有人能信如是大乘經典。本所受形雖復麤陋。以經功德。即便端正。威顏色力日更增多。常爲人天之所樂見。恭敬愛念。情無捨離。國王大臣及家親屬。聞其所說。悉皆敬信。若我聲聞弟子之中。欲行第一希有事者。當爲世間廣宣如是大乘經典。善男子。譬如霧露勢雖欲住。不過日出。日既出已。消滅無餘。善男子。是諸衆生所有惡業亦復如是。住世勢力不過得見大涅槃日。是日既出。悉能除滅一切惡業。復次善男子。譬如有人出家剃髮。雖服袈裟。故未得受沙彌十戒。或有長者來請衆僧。未受戒者。即與大眾俱共受請。雖未受戒。已墮僧數。善男子。若有衆生發心始學。是大乘典。大涅槃經。書持讀誦亦復如是。雖未具足位階十住。則已墮於十住數中。或有衆生是佛弟子。或非弟子。若因貪恚或因利養。聽受是經。乃至一偈。聞已不謗。當知是人則爲已近阿耨多羅三藐三菩提。善男子。以是因緣。我說四人爲世間依。善男子。如是四人。若以佛說言。非佛說。無有是處。是故我說如是四人爲世間依。善男子。汝應供養如是四人。世尊。我當云何識知是人而爲供養。佛告迦葉。若有建立護持正法。如是之人應從啓請。當捨身命而供養之。如我於是大乘經說。

應元明俱作當

應三本俱作惡

糾同作糾

有知法者 若老若少 故應供養 恭敬禮拜 猶如事火 婆羅門等 有知法者 若老若少

故應供養 恭敬禮拜 亦如諸天 奉事帝釋

迦葉菩薩白佛言世尊如佛所說洪養師長正應如是今有所疑唯願廣說若有長宿護持禁戒從諸年少諸受未聞云何是人當禮敬不若當禮敬是則不名為持戒也若是年少護持禁戒從諸宿舊破戒之人諸受未聞復應禮不若出家人從在家人諸受未聞復當禮不然出家人不應禮敬在家之人然佛法中年少幼小應當恭敬長宿以是長宿先受具戒成就威儀是故應當供養恭敬如佛言曰其破戒者是佛法中所不容受猶如良田多有穢穉又如佛說有知法者若老若少故應供養如事帝釋如是二句其義云何將非如來虛妄說耶如佛言曰持戒比丘亦有所犯何故如來而作是說世尊亦於餘經中說聽治破戒如是說所其義未了佛告迦葉善男子我為未來諸菩薩等學大乘者說如是偈不為聲聞弟子說也善男子如我先說正法滅已毀正戒時增長破戒非法盛時一切聖人隱不現時受畜奴婢不淨物時是四人中當有一人出現於世剃除鬚髮出家修道見諸比丘各受畜奴婢僕使不淨之物淨與不淨一切不知是律非律亦復不識是人為欲調伏如是諸比丘故與共和光不同其障自所行處及佛行處善能別知雖見諸人犯波羅夷默然不舉何以故我出於世為欲建立護持正法是故默然而不亂治善男子如是之人為護法故雖有所犯不名破戒善男子譬如國王遇病崩亡儲君稚小未任紹繼有旃陀羅豐饒財寶巨富無量多有眷屬遂以強力乘國虛弱篡居王位治化未久國人居士婆羅門等亡叛逃走遠投他國雖有在者乃至不欲眼見是王或有長者婆羅門等不離本土譬如諸樹隨其生處即是中死旃陀羅王知其國人逃叛者聚眾即還遣諸旃陀羅守邏諸道復於七日擊鼓唱令諸婆羅門有能為我作灌頂師者當分半國以為封賞諸婆羅門雖聞是語悉無來者各作是言云何當有婆羅門種作如是事旃陀羅王復作是言婆羅門中若無一人為我師者我要當令諸婆羅門與旃陀羅共住食宿同其事業若有能來灌我頂者半國之封此言不虛呪術所致三十三天上妙甘露不死之藥亦當共分而服食之爾時有一婆羅門子年在弱冠修治淨行長髮為相善知呪術往至王所白言大王王所敕使我悉能為爾時大王心生歡喜受



哉下三本俱無  
善哉二字

窟元明俱作悟  
次同

薩下三本俱無  
摩訶薩三字

此童子作灌頂師。諸婆羅門聞是事已。皆生瞋恚。責此童子。汝婆羅門。云何乃作旃陀羅師。爾時其王。即分半國與是童子。因共治國。經歷多時。爾時童子語彼王言。我捨家法來作王師。悉教大王微密呪術。而今大王猶不見親。時王答言。我今云何不親汝耶。童子答言。先王所有不死之藥。猶未共食。王言。善哉善哉。大師。我實不知。師若須者。願便持去。是時童子聞王語已。即持歸家。請諸大臣而共食之。諸臣食已。即共白王。快哉。大師。有是甘露不死之藥。王既知已。語其師言。云何大師。獨與諸臣服食甘露。而不見分。爾時童子即更以餘雜毒之藥與王令服。王既服已。須臾藥發。悶亂躓地。無所覺知。猶如死人。爾時童子立本儲君。還以爲王。作如是言。師子御座法不應令旃陀羅升。我從昔來。未曾聞見旃陀羅種而爲王者。若旃陀羅治國。理民無有是處。大王。今應還紹先王正法治國。爾時童子經理是已。復以解藥與旃陀羅。令其醒寤。既醒寤已。驅令出國。是時童子雖爲是事。猶故不失婆羅門法。其餘居士婆羅門等。聞其所作。歎未曾有。讚言。善哉善哉。仁者。善能驅遣旃陀羅王。善男子。我涅槃後。護持正法。諸菩薩等亦復如是。以方便力。與彼破戒假名受畜。一切不淨物僧。同其事業。爾時菩薩若見有人雖多犯戒。能治毀禁諸惡比丘。即往其所。恭敬禮拜。四事供養。經書什物。悉以奉上。如其自無。要當方便。從諸檀越。求乞與之。爲是事故。應畜八種不淨之物。何以故。是人爲治諸惡比丘。如彼童子驅旃陀羅故。爾時菩薩雖復恭敬禮拜。是人受畜八種不淨之物。悉無有罪。何以故。以是菩薩爲欲撥治諸惡比丘。令清淨。僧得安隱住。流布方等大乘經典。利益一切諸天人故。善男子。以是因緣。我於經中說。是二偈。令諸菩薩皆共讚歎護法之人。如彼居士婆羅門等。稱讚童子善哉善哉。護法菩薩正應如是。若有人見護法之人。與破戒者同其事業。說有罪者。當知是人自受其殃。是護法者實無有罪。善男子。若有比丘犯禁戒已。憍慢心故。覆藏不悔。當知是人名眞破戒菩薩。摩訶薩。爲護法故。雖有所犯。不名破戒。何以故。以無憍慢發露悔故。善男子。是故我於經中覆相說。如是偈。

有知法者 若老若少 故應供養 恭敬禮拜 猶如事火 婆羅門等 如第二天 奉事帝釋

以是因緣。我亦不爲學聲聞人。但爲菩薩而說是偈。迦葉菩薩白佛言。世尊。如是等菩薩摩訶薩。於戒縱緩。本所受戒。爲具在不。佛言。善男子。汝今不應作如是說。何以故。本所受戒。如本不失。設有所犯。即應懺悔。悔已。清淨善

長三本俱作上

菹同作植  
戒下同無若字

迦下同無樹字  
次同○菓同作  
果下同○賈同  
作迦○迦菓同  
作迦一字

爲同作應

羅下同有迦字

男子。如故提塘穿決有孔水則淋漏。何以故。無人治故。若有人治水則不出。菩薩亦爾。雖與破戒共作畜養。受戒自恣。同其僧事。所有戒律。不如堤塘穿決淋漏。何以故。若無清淨持戒之人。僧則損減。縱緩懈怠。日有增長。若有清淨持戒之人。卽能具足不失本戒。善男子。於乘緩者。乃名爲緩。於戒緩者。不名爲緩。菩薩摩訶薩於此大乘心不懈慢。是名奉戒。爲護正法。以大乘水而自澡浴。是故菩薩雖現破戒。不名爲緩。迦葉菩薩白佛言。衆僧之中有四種人。如菹羅果生熟難知。破戒持戒云何可識。佛言。善男子。因大涅槃微妙經典。則易可知。云何因是大涅槃經。可得知耶。譬如田夫種殖稻穀。耘除莠稗。以肉眼觀。名爲淨田。至其成實。草穀各異。如是八事。能汙染僧。若能除却。以肉眼觀。則知清淨。若持戒若破戒。不作惡時。以肉眼觀。難可分別。若惡彰露。則易可知。如彼莠稗。易可分別。僧中亦爾。若能遠離八種不淨毒蛇之法。是名清淨聖衆福田。應爲人天之所供養。清淨果報。非是肉眼所能分別。復次善男子。如迦羅迦林。其樹衆多。於是林中。唯有一樹名鎮頭迦。是迦羅迦樹。鎮頭迦樹。二菓相似。不可分別。其菓熟時。有一女人。悉皆拾取。鎮頭迦菓。纔有一分。迦羅迦菓。乃有十分。是女不識。賣來詣市。而街賣之。凡愚小兒。復不別故。買迦羅迦菓。已命終。有智人輩。聞是事已。卽問女人。姊於何處得是菓來。是時女人卽示方所。諸人卽言。如是方所。多有無量迦羅迦樹。唯有一根鎮頭迦樹。諸人知已。笑而捨去。善男子。大衆之中。八不淨法。亦復如是。於是衆中。多有受用。如是八法。唯有一人清淨持戒。不受如是八不淨法。善知諸人受畜非法。而與同事。不相捨離。如彼林中。一鎮頭迦樹。有優婆塞。見是諸人。多有非法。併不恭敬供養是人。若欲供養。應先問言。大德。如是八事。爲受畜不。佛所聽不。若言佛聽。如是之人。得共布薩。羯磨自恣。不是優婆塞。如是問已。衆皆答言。如是八事。如來憐愍。皆悉聽畜。優婆塞言。祇洹精舍。有諸比丘。或言金銀佛所聽畜。或言不聽。有言聽者。是不聽者。不與共住。說戒自恣。乃至不共一河飲水。利養之物。悉不共之。汝等云何。言佛聽許。佛天中天。雖復受之。汝等衆僧。亦不應畜。若有受者。乃至不應與共說戒。自恣。羯磨。同其僧事。若共說戒。自恣。羯磨。同僧事者。命終卽當墮於地獄。如彼諸人。食迦羅菓。已而便命終。復次善男子。譬如城市。有賣藥人。有妙甘藥。出於雪山。亦復多賣。其餘雜藥。味甘相似。時有諸人。咸皆欲買。而不識別。至賣藥所。問言。汝有雪山藥。不其賣藥人。卽答言。有是人。欺詐以

餘雜藥。語實者言。此是雪山甘好妙藥。時賣藥者以肉眼故。不能善別。即買持歸。便作是念。我今已得雪山甘藥。迦葉若聲聞僧中。有假名僧。有真實僧。有和合僧。若持戒若破戒。於是衆中等應供養恭敬禮拜。是優婆塞。以肉眼故。不能分別。譬如彼人不能分別雪山甘藥。誰是持戒。誰是破戒。誰是真僧。誰是假僧。有天眼者。乃能分別。迦葉若優婆塞。知是比丘。是破戒人。不應給施禮拜供養。若知是人。受畜八法。亦復不應給施。所須禮拜供養。若於僧中有破戒者。不應以被袈裟。因緣恭敬禮拜。迦葉菩薩復自佛言。世尊。善哉善哉。如來所說真實不虛。我當頂受。譬如金剛珍寶異物。如佛所說是諸比丘。當依四法。何等爲四。依法不依人。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經。如是四法。應當證知。非四種人。佛言。善男子。依法者。卽是如來。大般涅槃。一切佛法。卽是法性。是法性者。卽是如來。是故如來常住不變。若復有言。如來無常。是人不知不見法性。若不知見。是法性者。不應依止。如上所說。四人出世護持法者。應當證知。而爲依止。何以故。是人善解如來密語。及能說故。若有人能了知如來甚深密藏。及知如來常住不變。如是之人。若爲利養。說言如來。是無常者。無有是處。如是之人。尙可依止。何況不依。是四種人。依法者。卽是法性。不依人者。卽是聲聞。法性者。卽是如來。聲聞者。卽是有爲。如來者。卽是常住。有爲者。卽是無常。善男子。若人破戒。爲利養。故說言如來。無常變易。如是之人。所不應依。善男子。是名定義。依義不依語者。義者。名曰覺。了覺了義者。名不羸劣。不羸劣者。名曰滿足。滿足義者。名曰如來。常住不變。如來常住不變。義者。卽是法常。法常義者。卽是僧常。是名依義不依語也。何等語言。所不應依。所謂諸論綺飾文辭。如佛所說無量諸經。貪求無厭。姦巧諛諂。詐現親附。現相求利。經理白衣。爲其執役。又復唱言。佛聽比丘。畜諸奴婢。不淨之物。金銀珍寶。穀米倉庫。牛羊象馬。販賣求利。於饑饉世。憐愍子故。復聽比丘。儲貯陳宿。手自作食。不受而瞰。如是等語。所不應依。依智不依識者。所言智者。卽是如來。若有聲聞。不能善知如來功德。如是之識。不應依止。若知如來卽是法身。如是眞智。所應依止。若見如來方便之身。言是陰界諸入。所攝食所長養。亦不應依。是故知識不可依止。若復有人。作是說者。及其經書。亦不應依。依了義經。不依不了義經者。不了義者。謂聲聞乘。聞佛如來深密藏。

藥同作聞

處悉生疑懼。不知是藏出大智海。猶如嬰兒無所別知。是則名爲不了義也。了義者名爲菩薩真實智慧。隨其自心無礙。大智猶如大人無所不知。是名了義。又聲聞乘名不了義。無上大乘乃名了義。若言如來無常變易。名不了義。若言如來常住不變。是名了義。聲聞所說應證知者。名不了義。菩薩所說應證知者。名爲了義。若言如來食所長養。是不了義。若言常住不變易者。是名了義。若言如來入於涅槃如薪盡火滅。名不了義。若言如來入法性者。是名了義。聲聞乘法則不應依。何以故。如來爲欲度衆生故。以方便力說於大乘。是故應依。是名了義。如是四依應當證知。復次依義者。義名質直。質直者名曰光明。光明者名不羸劣。不羸劣者名曰如來。又光明者名爲智慧。質直者名爲常住。如來常者名爲依法。法者名常。亦名無邊。不可思議。不可執持。不可繫縛。而亦可見。若有說言不可見者。如是之人所不應依。是故依法不依於人。若復有人以微妙語宣說無常。如是之言所不應依。是故依義不依於語。依智者。衆僧是常無爲不變。不畜八種不淨之物。是故依智不依於識。若有說言識作識。受無和合僧。何以故。夫和合者名無所有。無所有者云何言常。是故此識不可依止。依了義者。了義者名爲知足。終不詐現威儀清白。憍慢自高。貪求利養。亦於如來隨宜方便所說法中不生執著。是名了義。若有能住如是等中。當知是人則爲已得住第一義。是故名爲依了義經。不依不了義。不了義者如經中說。一切燒燃。一切無常。一切皆苦。一切皆空。一切無我。是名不了義。何以故。以不能了如是義故。令諸衆生墮阿鼻獄。所以者何。以取著故。於義不了一切。燒者。謂如來說涅槃亦燒。一切無常者。涅槃亦無常。苦空無我亦復如是。是故名爲不了義。經不應依止。善男子。若有人言。如來憐愍一切衆生。善知時宜。以知時故。說輕爲重。說重爲輕。如來觀知所有弟子。有諸檀越供給所須。令無所乏。如是之人。佛則不聽受畜奴婢。金銀財寶。販賣市易不淨物等。若諸弟子無有檀越供給所須。時世饑饉。飲食難得。爲欲建立護持正法。我聽弟子受畜奴婢。金銀車乘。田宅穀米。賣易所須。雖聽受畜如是等物。要當淨施。篤信檀越。如是四法所應依止。若有戒律阿毗曇修多羅。不違是四。亦應依止。若有說言。有時非時。有能護法不能護法。如來悉聽一切比丘受畜如

寶三本俱作寶

是不淨物者。如是不言之言不應依止。若有戒律阿毗曇修多羅中有同是說。如是三分亦不應依。我爲肉眼諸衆生等說是四依。終不爲於有慧眼者。是故我今說是四依。法者卽是法性。義者卽是如來常住不變。智者知一切衆生悉有佛性。了義者了達一切大乘經典。

## 大般涅槃經卷第六

# 大般涅槃經卷第七

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 邪正品第九

依下三本俱無  
正字

率同作術○若  
下同無言字

修元明俱作脩

爾時迦葉白佛言。世尊。如上所說四種人等。應當依止耶。佛言。如是如是。善男子。如我所說。應當依止。何以故。有四魔故。何等為四。如魔所說。諸餘經律。能受持者。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。有四種魔。若魔所說。及佛所說。我當云何。而得分別。有諸衆生。隨逐魔行。復有隨順佛所教者。如是等輩。復云何知。佛告迦葉。我般涅槃七百歲後。是魔波旬。漸當壞亂我之正法。譬如獵師。身服法衣。魔王波旬亦復如是。作比丘像。比丘尼像。優婆塞像。優婆夷像。亦復化作須陀洹身。乃至化作阿羅漢身。及佛色身。魔王以此有漏之形。作無漏身。壞我正法。是魔波旬壞正法時。當作是言。菩薩昔於兜率天上。沒來在此。迦毗羅城白淨王宮。依因父母愛欲。和合生育。是身。若言有人。生於人中。為諸世間。天人大衆所恭敬者。無有是處。又復說言。往昔苦行種種布施。頭目髓腦。國城妻子。是故今者。得成佛道。以是因緣。為諸人天。執閻婆阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽之所恭敬。若有經律。作是說者。當知悉是魔之所說。善男子。若有經律。作如是言。如來正覺。久已成佛。今方示現成佛道者。為欲度脫諸衆生。故示有父母。依因愛欲。和合而生。隨順世間。作是示現。如是經律。當知真是如來所說。若有隨順魔所說者。是魔眷屬。若能隨順佛所說者。即是菩薩。若有說言。如來生時。於十方面各行七步。不可信者。是魔所說。若復有說。如來出世。於十方面各行七步。此是如來方便示現。是名如來所說經律。若有隨順魔所說者。是魔眷屬。若能隨順佛所說者。即是菩薩。若有說言。菩薩生已。父王使人將詣天祠。諸天見已。悉下禮敬。是故名佛。復有難言。天者先出佛說者。即是菩薩。若有說言。菩薩生已。父王使人將詣天祠。諸天見已。悉下禮敬。是故名佛。復有難言。天者先出佛在其後。云何諸天禮敬於佛。作是難者。當知即是波旬所說。若有經言。佛到天祠。是諸天等摩薩首羅大梵天王。

宋元俱作須

施三本俱作洩

盤宋元俱作盤

下同○愍三本俱作憫

宋元俱作糗

菓三本俱作果

讚宋元俱作贊

違元明俱作韋

伎三本俱作技

下同  
○諍同作爭下  
同

釋提桓因皆悉合掌敬禮其足。如是經律是佛所說。若有隨順魔所說者。是魔眷屬。若能隨順佛所說者。即是菩薩。若有經律說言。菩薩為太子時。以欲心故。四方聘妻。處在深宮。五欲自娛。歡悅受樂。如是經律波旬所說。若有說言。菩薩久已捨離欲心。妻息之屬。乃至不受三十三天上妙五欲。如棄涕唾。何況人欲。剃除鬚髮。出家修道。如是經律是佛所說。若有隨順魔經律者。是魔眷屬。若有隨順佛經律者。即是菩薩。若有說言。佛在舍衛祇陀精舍。聽諸比丘受畜奴婢。使牛羊象馬驢騾。狗豬貓狗。金銀琉璃。真珠琥珀。貝璧玉。銅鐵釜。鑊大小銅盤。所須之物。耕田種植。販賣市易。儲積穀米。如是衆事。佛大慈故。憐愍衆生。皆聽畜之。如是經律。悉是魔說。若有說言。佛在舍衛祇陀精舍。那梨樓鬼所住之處。爾時如來。因婆羅門子。殺抵德及波斯匿王。說言。比丘不應受畜金銀琉璃。琥珀真珠。車渠馬瑙。珊瑚。琥珀。貝璧玉。奴婢。童男童女。牛羊象馬。驢騾。狗豬。貓狗等。獸。銅鐵釜。鑊大小銅盤。種種雜色牀敷。臥具。資生所須。所謂屋宅。耕田種植。販賣市易。自作食。自磨。自舂。治身呪術。調鷹方法。仰觀星宿。推步盈虛。占相男女。解夢吉凶。是男是女。非男非女。六十四能。復有十八惑人。呪術種種工巧。或說世間無量俗事。散香末。香塗。香熏。香。種種華鬘。治髮方術。盜偽。諸曲。貪利無厭。愛樂。慣戲。笑談。說貪嗜魚肉。和合毒藥。治壓香油。捉持寶蓋。及以革屣。造扇。箱篋。種種畫像。積聚穀米。大小麥豆。及諸菓蔬。親近國王王子。大臣及諸女人。高聲大笑。或復默然。於諸法中。多生疑惑。多語妄說。長短好醜。或善不善。好著好衣。如是種種不淨之物。於施主前。躬自讚歎。出入遊行。不淨之處。所謂。沽酒。淫女。博奕。如是之人。我今不聽。在比丘中。應當休道。還俗役使。譬如。莠稗。悉滅無餘。當知是等。經律所制。悉是如來之所說也。若有隨順魔所說者。是魔眷屬。若有隨順佛所說者。即是菩薩。若有說言。菩薩為欲供養天神。故入天祠。所謂。梵天。大自在。天。毘陀。天。迦旃延。天。所以入者。為欲調伏諸天人。故。若言。不爾。無有是處。若言。菩薩不能入於外道邪論。如其威儀。文章。伎藝。僕使。閑諍。不能和合。不為男女。國王。大臣之所恭敬。又亦不知。和合諸藥。以不知。故乃名如來。如其知者。是邪見輩。又復如來於怨親中。其心平等。如以割月。及香塗身。於此二人。不生增損。損減之心。唯能處中。故名如來。如是經律。當知是魔之所說也。若有說言。菩薩如是。示入天祠。外學法中。出家修道。示現。知其威儀。禮節。能解一切。文章。伎藝。

示入書堂伎巧之處。能善和合。僕使闔譯。於諸大衆。童男童女。後宮妃后。人民長者。婆羅門等。王及大臣。貧窮等。中最尊最上。復爲是等之所恭敬。亦能示現。如是等事。雖處諸見。不生愛心。猶如蓮華。不受塵垢。爲度一切諸衆。生故。善行如是種種。方便隨順世法。如是經律。當知卽是如來所說。若有隨順。魔所說者。是魔眷屬。若能隨順。佛所說者。是大菩薩。若有說言。如來爲我解說經律。若惡法中。輕重之罪。及偷蘭遮。其性皆重。我等律中。終不爲之。我久忍受。如是之法。汝等不信。我當云何。自捨己律。就汝律耶。汝所有律。是魔所說。我等經律。是佛所制。如來先說九部法印。如是九印。卽我經律。初不聞有方等經典一句一字。如來所說。無量經律。何處有說。方等經耶。如是等中。未曾聞有十部經名。如其有者。當知必定調達所作。調達惡人。以滅善法。造方等經。我等不信。如是等經。是魔所說。何以故。破壞佛法。相是非故。如是之言。汝經中有。我經中無。我經律中。如來說言。我涅槃後。惡世當有。不正經律。所謂大乘方等經典。未來之世。當有如是諸惡比丘。我又說言。過九部經。有方等典。若有人能了知其義。當知是人。正了經律。遠離一切不淨之物。微妙清淨。猶如滿月。若有說言。如來雖爲一一經律。演說義味。如恆沙等。我律中無。將知爲無。如其有者。如來何故。於我律中。而不解說。是故我今不能信受。當知是人。則爲得罪。是人復言。如是經律。我當受持。何以故。當爲我作知足。少欲。斷除煩惱。智慧涅槃。善法因故。如是說者。非我弟子。若有說言。如來爲欲度衆生。故說方等經。當知是人。真我弟子。若有不受方等經者。當知是人。非我弟子。不爲佛法。而出家也。卽是邪見。外道弟子。如是經律。是佛所說。若不如是。是魔所說。若有隨順。魔所說者。是魔眷屬。若有隨順。佛所說者。卽是菩薩。復次善男子。若有說言。如來不爲無量功德之所成就。無常變異。以得空法。宣說無我不順世間。如是經律名魔所說。若有人言。如來正覺。不可思議。亦爲無量阿僧祇等功德所成。是故常住。無有變異。如是經律。是佛所說。若有隨順。魔所說者。是魔眷屬。若有隨順。佛所說者。卽是菩薩。復有人言。或有比丘。實不毀犯。波羅夷罪。衆人皆謂犯波羅夷。如斷多羅樹。而是比丘。實無所犯。何以故。我常說言。四波羅夷。若犯一者。猶如斫石。不可還合。若有自說得過人法。是則名爲犯波羅夷。何以故。實無所得。詐現得相。故如是之人。退失人法。是名波羅夷。所謂若有比丘。少欲知足。持戒清淨。住空閑處。若王大臣。見是比丘。生心念言。謂得羅漢。卽前讚歎恭敬。



唯三本俱作惟

成下三本俱無  
於字○以同作  
與

墮下同有法字

姪同作淫下同

畢同作必

禮拜復作是言。如是大師捨是身已。當得阿耨多羅三藐三菩提。比丘聞已。即白王言。我實未得沙門道果。王莫稱我已得道果。唯願大王。勿爲我說不知足法。不知足者。乃至謂得阿耨多羅三藐三菩提。皆默然受。我今若當默然受者。當爲諸佛之所呵責。知足之行。諸佛所讚。是故我欲終身歡樂奉修知足。又知足者。我定自知未得道果。王稱我得我不受。故名知足。時王答言。大師實得阿羅漢果。如佛無異。爾時其王普皆宣告。內外人民。中宮妃后。悉令皆知得沙門果。是故威令一切聞者。心生敬信。供養尊重。如比丘真是梵行清淨之人。以是因緣。普令諸人得大福德。而是比丘實不毀犯波羅夷罪。何以故。商人自生歡喜之心。讚歎供養故。如比丘當有何罪。若有說言。是人得罪。當知是經是魔所說。復有比丘說佛祕藏甚深經典。一切衆生皆有佛性。以是性故。斷無量億諸煩惱結。即得成於阿耨多羅三藐三菩提。除一闍提。若王大臣。作如是言。比丘汝當作佛。不作佛耶。有佛性不。比丘答言。我今身中定有佛性。成以不成。未能審之。王言大德。如其不作一闍提者。必成無疑。比丘言。爾實如王言。是人雖言定有佛性。亦復不犯波羅夷罪。復有比丘。即出家時。作是思惟。我今必定成阿耨多羅三藐三菩提。如是之人。雖未得成無上道果。已爲得福無量。無邊不可稱計。假使有人當言。是人犯波羅夷。一切比丘無不犯者。何以故。我於往昔八十億劫。常離一切不淨之物。少欲知足。威儀成就。善修如來無上法藏。亦自定知身有佛性。是故我今得成阿耨多羅三藐三菩提。得名爲佛。有大慈悲。如是經律是佛所說。若有不能隨順是者。是魔眷屬。若能隨順。是大菩薩。復有說言。無四波羅夷。十三僧殘。二不定法。三十捨墮。九十一墮。四懺悔法。衆多學法。七滅淨等。無偷蘭遮。五逆等罪。及一闍提。若有比丘犯如是等墮地獄者。外道之人。悉應生天。何以故。諸外道等。無戒可犯。此是如來示現怖人。故說斯戒。若言佛說我諸比丘。若欲行姪。應捨法服。著俗衣裳。然後行姪。復應生念。姪欲因緣。非我過咎。如來在世。亦有比丘。習行姪。欲得正解脫。或命終後。生於天上。古今有之。非獨我作。或犯四重。或犯五戒。或行一切不淨律儀。猶故得具真正解脫。如來雖說犯突吉羅。如切利天。日月歲數。八百萬歲。墮在地獄。是亦如來示現怖人。言波羅夷。至突吉羅。輕重無差。是諸律師。妄作此言。言是佛制。畢定當知非佛所說。如是言說。是魔經律。若復說言。於諸戒中。若犯小戒。乃至細微。當受苦報。無有齊限。如是知已。防護自身。如龜藏

妄宋作字

若過一法 是名妄語 不見後世 無惡不造

六、若有律師復作是言。凡所犯戒都無罪報。如是之人不應親近。如佛所說。

是三本俱作佛

是故不應親近是人。我佛法中清淨如是。況復有犯偷蘭遮罪。或犯僧殘及波羅夷而非罪耶。是故應當深自防護。如是等法若不守護。更以何法名爲禁戒。我於經中亦說有犯四波羅夷乃至微細突吉羅等應當苦治。衆生若不護持禁戒。云何當得見於佛性。一切衆生雖有佛性。要因持戒然後乃見。因見佛性得成阿耨多羅三藐三菩提。九部經中無方等經。是故不說有佛性耳。經雖不說當知實有。苦作是說。當知是人真我弟子。迦葉菩薩白佛言。世尊。如上所說。一切衆生有佛性者。九部經中所未曾聞。如其說有。云何不犯波羅夷耶。佛言。善男子。如汝所說。實不毀犯波羅夷罪。善男子。譬如有人說言大海唯有七寶無八種者。是人無罪。若有說言九部經中無佛性者。亦復無罪。何以故。我於大乘大智海中說有佛性。二乘之人所不知見。是故說無。無有罪也。如是境界諸佛所知。非是聲聞緣覺所及。善男子。若人不聞如來甚深祕藏者。云何當知有佛性耶。何等名爲祕藏之藏。所謂方等大乘經典。善男子。有諸外道。或說我常。或說我斷。如來不爾。亦說有我。亦說無我。是名中道。若有說言佛說中道。一切衆生悉有佛性。煩惱覆故不知不見。是故應當勤修方便斷壞煩惱。若有能作如是說者。當知是人。不犯四重。若有不作如是說者。是則名爲犯波羅夷。若有說言我已成就阿耨多羅三藐三菩提。何以故。以有佛性。故。有佛性者必定當成阿耨多羅三藐三菩提。以是因緣。我今已得成就菩提。當知是人。則名爲犯波羅夷罪。何以故。雖有佛性。以未修習諸善方便。是故未見。以未見故。不能得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。以是義故。佛法甚深不可思議。迦葉菩薩白佛言。世尊。有王問言。云何比丘墮過人法。佛告迦葉。若有比丘爲利養故。爲飲食故。作諸諛諂。虧僞欺詐。云何當令諸世間人定實知我是真乞士。以是因緣。令我大得利養名譽。如是比丘多愚癡故。長夜常念。我實未得四沙門果。云何當令諸世間人謂我已得。復當云何令諸優婆塞優婆夷等。咸共指我作如是言。是人福德真是聖人。如是思惟。專爲求利。非爲求法。行來出入。進止安詳。執持衣鉢。不失威儀。獨坐空處。如阿羅漢。令世間人咸作是言。如是比丘。善好第一。精勤苦行。修寂滅法。以是因緣。我當大得門徒弟子。諸人

新同作罪

詳同作罪

言下三本俱無  
佛聽比丘四字  
輩同作事

亦當大致供養衣服飲食臥具醫藥。令多女人敬念愛重。若有比丘及比丘尼。作如是事。墮過人法。復有比丘。爲欲建立無上正法。住空閑處。非阿羅漢。而欲令人。謂是羅漢。是好比丘。是善比丘。寂靜比丘。令無量人生於信心。以此因緣。我得無量諸比丘等。以爲眷屬。因是得教。破戒比丘。及優婆塞。悉令持戒。以是因緣。建立正法。光揚如來無上大義。開顯方等大乘佛法。度脫一切無量衆生。善解如來所說經律輕重之義。復言。我今亦有佛性。有名曰如來祕藏。於是經中。我當必定得成佛道。能盡無量億煩惱結。廣爲無量諸優婆塞。說言。汝等盡有佛性。我與汝等。俱當安住如來道地。成阿耨多羅三藐三菩提。盡無量億諸煩惱結。作是說者。是人。不名墮過人法。名爲菩薩。若言有犯突吉羅者。忉利天上日月歲數。八百萬歲。墮地獄中。受諸罪報。何況故犯偷蘭遮罪。此大乘中。若有比丘。犯偷蘭遮。不應親近。何等名爲大乘經中偷蘭遮罪。若有長者。造立佛寺。以諸花鬘。用供養佛。有比丘見花貫中。纒不問。輒取。名偷蘭遮。若知不知。亦如是犯。若以貪心。破壞佛塔。犯偷蘭遮。如是之人。不應親近。若王大。臣見塔朽。故爲欲修補。供養舍利。於是塔中。或得珍寶。卽寄比丘。比丘得已。自在而用。如是比丘。名爲不淨。多起鬪諍。善優婆塞。不應親近。供養恭敬。如是比丘。名爲無根。名爲二根。名不定根。不定根者。欲貪女時。身卽爲女。欲貪男時。身卽爲男。如是比丘。名爲惡根。不名爲男。不名爲女。不名出家。不名在家。如是比丘。不應親近。供養恭敬。於佛法中。沙門法者。應生悲心。覆育衆生。乃至蟻子。應施無畏。是沙門法。遠離飲酒。乃至麝香。是沙門法。不得妄語。乃至夢中。不念妄語。是沙門法。不生欲心。乃至夢中。亦復如是。是沙門法。迦葉菩薩。白佛言。世尊。若有比丘。夢行姪欲。是犯戒。不佛言不也。應於姪欲生。臭穢想。乃至不生一念淨想。遠離女人。煩惱愛想。若夢行姪寤。應生悔。比丘乞食。受供養時。應如饑世。食子肉想。若生姪欲。應疾捨離。如是法門。當知是佛所說經律。若有隨順。魔所說者。是魔眷屬。若能隨順。佛所說者。是名菩薩。若有說言。佛聽比丘。常翹一脚。寂默不言。投淵赴火。自墜高巖。不避險難。服毒斷食。臥灰土上。自縛手足。殺害衆生。方道呪術。旃陀羅子。無根二根。及不定根。身根不具。如是等輩。如來悉聽出家爲道。是名魔說。佛先聽食五種牛味。及以油蜜。酪奢耶衣革屣等物。除是之外。若有說言。聽著摩訶楞伽。一切種子。悉聽貯畜。草木之屬。皆有壽命。佛說是已。便入涅槃。若有經律。作是說者。當知卽是魔之所說。我

亦不聽常翹一脚。若爲法故聽行住坐臥。又亦不聽服毒斷食。五熱炙身。繫縛手足。殺害衆生。方道呪術。呵貝象牙。以爲革屣。儲畜種子。草木有命。著摩訶楞伽。若言世尊。作如是說。當知是爲外道眷屬。非我弟子。我唯聽食五種牛味及油蜜等。聽著革屣。僑奢耶衣。我說四大。無有壽命。若有經律。作是說者。是名佛說。若有隨順佛所說者。當知是等真我弟子。若有不隨佛所說者。是魔眷屬。若有隨順佛經律者。當知是人。是大菩薩善男子。魔說佛說差別之相。今已爲汝廣宣分別。迦葉。自佛言。世尊。我今始知魔說佛說差別之相。因是得入佛法深義。佛讚迦葉善哉善哉。善男子。汝能如是曉了分別。是名慧慧。

大般涅槃經四諦品第十

審影作蜜

佛復告迦葉。所言苦者。不名苦聖諦。何以故。若言苦是若聖諦者。一切畜生及地獄衆生。應有聖諦。善男子。若復有人。不知如來甚深境界。常住不變微密法身。謂是食身。非是法身。不知如來道德威力。是名爲苦。何以故。以不知故。法見非法。非法見法。當知是人。必墮惡趣輪轉生死。增長諸結。多受苦惱。若有能知如來常住。無有變異。或聞常住二字音聲。若一經耳。卽生天上。後解脫時。乃能證知。如來常住。無有變異。旣證知已。而作是言。我於往昔曾聞是義。今得解脫。方乃證知。我於本際。以不知故。輪轉生死。周迴無窮。始於今日。乃得眞智。若如是知。眞是修苦。多所利益。若不知者。雖復勤修。無所利益。是名知苦。名苦聖諦。若人不能如是修習。是名爲苦。非苦聖諦。苦集諦者。於眞法中。不生眞智。受不淨物。所謂奴婢。能以非法言。是正法。斷滅正法。不令久住。以是因緣。不知法性。以不知故。輪轉生死。多受苦惱。不得生天。及正解脫。若有深知。不壞正法。以是因緣。得生天上。及正解脫。若有不知苦集諦處。而言正法。無有常住。悉是滅法。以是因緣。於無量劫。流轉生死。受諸苦惱。若能知法。常住不異。是名知集。名集聖諦。若人不能如是修習。是名爲集。非集聖諦。苦滅諦者。若有多修習學空法。是爲不善。何以故。滅一切法。壞於如來眞法藏故。作是修學。是名修空。修苦滅者。逆於一切諸外道等。若言修空。是滅諦者。一切外道亦修空法。應有滅諦。若有說言。有如來藏。雖不可見。若能滅除一切煩惱。爾乃得入。若發此心一念。因緣於諸法中。

密元作蜜

顯宋元俱作僞  
下同

已三本俱作以

佛下三本俱有  
復字○葉下同  
無善男子三字

而得自在。若有修習如來密藏無我空寂。如是之人於無量世在生死中流轉受苦。若有不作如是修者。雖有煩惱疾能滅除。何以故。因知如來秘密藏故。是名苦滅聖諦。若能如是修習滅者。是我弟子。若有不能作如是修。是名修空非滅聖諦。道聖諦者。所謂佛法僧寶及正解脫。有諸衆生顛倒心。言無佛法僧及正解脫。生死流轉猶如幻化。修習是見。以此因緣輪轉三有久受大苦。若能發心見於如來常住無變。法僧解脫亦復如是。乘此一念於無量世。自在果報隨意而得。何以故。我於往昔以四倒故非法計法。受於無量惡業果報。我今已滅。如是見故成佛正覺。是名道聖諦。若有人言三寶無常。修習是見。是虛妄修非道聖諦。若修是法為常住者。是我弟子真見修習四聖諦法。是名四聖諦。迦葉菩薩白佛言。世尊。我今始知修習甚深四聖諦法。

### 大般涅槃經四倒品第十一

佛告迦葉。善男子。謂四倒者。於非苦中生於苦想。名曰顛倒。非苦者名為如來。生苦想者。謂諸如來無常變異。若說如來是無常者。名大罪苦。若言如來捨此苦身入於涅槃如薪盡火滅。是名非苦而生苦想。是名顛倒。我若說言如來常者。卽是我見。以我見故有無量罪。是故應說如來無常。如是說者我則受樂。如來無常卽為是苦。若是苦者云何生樂。以於苦中生樂想。故名為顛倒。樂生苦想名為顛倒。樂者卽是如來。苦者如來無常。若說如來是無常者。是名樂中生於苦想。如來常住是名為樂。若我說言如來是常。云何復得入於涅槃。若言如來非是苦者。云何捨身而取滅度。以於樂中生苦想。故名為顛倒。是名初倒。無常常想常無常想。是名顛倒。無常者名不修空。不修空故壽命短促。若有說言不修空寂得長壽者。是名顛倒。是名第二顛倒。無我我想我無我想。是名顛倒。世間之人亦說有我。佛法之中亦說有我。世間之人雖說有我無有佛性。是則名為於無我中而生我想。是名顛倒。佛法有我卽是佛性。世間之人說佛法無我。是名我中生無我想。若言佛法必定無我。是故如來敕諸弟子。修習無我名為顛倒。是名第三顛倒。淨不淨想。不淨淨想。是名顛倒。淨者卽是如來常住。非雜食身非煩惱身非是肉身。非是筋骨繫縛之身。若有說言。如來無常是雜食身。乃至筋骨繫縛之身。法僧解脫是滅盡者。是名顛倒。不淨

淨想名顛倒者。若有說言。我此身中無有一法是不淨者。以無不淨定當得入清淨之處。如來所說修不淨觀。如是之言是虛妄說。是名顛倒。是則名爲第四顛倒。迦葉菩薩白佛言。世尊。我從今日始得正見。世尊。自是之前。我等悉名邪見之人。

大般涅槃經卷第七

# 大般涅槃經卷第八

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

品目性下明有起字

## 如來性品第十二

即三本俱作人復同作答次同○答同作復次同○生同作起

亦同作其

迦葉白佛言。世尊。二十五有有我。不耶。佛言。善男子。我者。卽如來是藏義。一切衆生。悉有佛性。卽是我義。如是我義。從本已來。常爲無量煩惱所覆。是故衆生。不能得見。善男子。如貧女人。舍內多有眞金之藏。家人大小。無有知者。時有異人。善知方便。語貧女言。我今雇汝。汝可爲我。耘除草穢。女卽答言。我今不能。汝若能示我子金藏。然後乃當速爲汝作。是人復言。我知方便。能示汝子。女人答言。我家大小。尙自不知。況汝能知。是人復言。我今審能。女人答言。我亦欲見。并可示我。是人卽於其家。掘出金藏。女人見已。心生歡喜。生奇特想。宗仰是人。善男子。衆生佛性。亦復如是。一切衆生。不能得見。如彼寶藏。貧人不知。善男子。我今普示一切衆生。所有佛性。爲諸煩惱之所覆蔽。如彼貧人有眞金藏。不能得見。如來今日。普示衆生。諸覺寶藏。所謂佛性。一切衆生。見是事已。心生歡喜。歸仰如來。善方便者。卽是如來。貧女人者。卽是一切無量衆生。眞金藏者。卽佛性也。復次。善男子。譬如女人。生育一子。嬰孩得病。是女愁惱。求覓良醫。良醫旣至。合三種藥。酥乳石蜜。與之令服。因告女人。兒服藥已。且莫與乳。須藥消已。爾乃與之。是時女人。卽以苦味。用塗其乳。語其兒言。我乳毒塗。不可復觸。小兒渴乏。欲得母乳。聞乳毒氣。便遠捨去。至其藥消。母乃洗乳。喚子與之。是時小兒。雖復飢渴。先聞毒氣。是故不來。母復語言。爲汝服藥。故以毒塗。汝藥已消。我已洗竟。汝便可來。飲乳無苦。其兒聞已。漸漸還飲。善男子。如來亦爾。爲度一切。教諸衆生。修無我法。如是修已。永斷我心。入於涅槃。爲除世間諸妄見故。示現出過世間法故。復示世間計我虛妄。非眞實故。修無我法。清淨身故。譬如女人。爲其子故。以苦味塗乳。如來亦爾。爲修空故。說言諸法。悉無有我。如彼女人。淨洗乳已。而喚

服同作飲

姪同作淫下同

搗同作角

尖三本俱作無

修元明俱作修

其子欲令還服。我今亦爾。說如來藏。是故比丘不應生怖。如彼小兒聞母喚。已漸還飲乳。比丘亦爾。應自分別。如來祕藏。不得有。迦葉菩薩白佛言。世尊。實無有我。何以故。嬰兒生時無所知曉。若有我者。卽生之日。尋應有知。以是義。故定知無我。若定有我。受生已後。應無終沒。若使一切皆有佛性。是常住者。應無壞相。若無壞相。云何而有。有利。利婆羅門。毗舍首陀。及旃陀羅。畜生。差別。今見業緣種種不同。諸趣各異。若定有我。一切衆生。應無勝負。以是義。故定知佛性。非是常法。若言佛性。定是常者。何緣復說有殺盜姪。兩舌惡口。妄言綺語。貪恚邪見。若我性常。何故酒後。荒醉迷亂。若我性常。盲應見色。聾應聞聲。癡應能語。拘攷能行。若我性常。不應避於火坑。大水。毒藥。刀劍。惡人。禽獸。若我常者。本所更事。不應忘失。若不忘失。何緣復言。我曾何處。見是人耶。若我常者。則不應有老少。盛衰。憶念。往事。若我常者。止住何處。爲在涕唾。青黃。赤白。諸色中耶。若我常者。應遍身中。如胡麻。油。間無空處。若斷身時。我亦應斷。佛告迦葉。善男子。譬如王家。有大力士。其人眉間。有金剛珠。與餘力士。搗力相撲。而彼力士。以頭觸之。其額上珠。尋沒膚中。都不自知。是珠所在。其處有瘡。卽命良醫。欲自療治。時有明醫。善知方藥。卽知是瘡。因珠入體。是珠入皮。卽便停住。是時良醫。尋問力士。卿額上珠。爲何所在。力士驚答。大師醫王。我額上珠。乃失去耶。是珠。今者爲何所在。將非幻化。憂愁啼哭。是時良醫。慰喻力士。汝今不應生大愁苦。汝因鬪時。寶珠入體。今在皮裏。影現於外。汝等鬪時。瞋恚毒盛。珠陷入體。故不自知。是時力士。不信醫言。若在皮裏。膿血不淨。何緣不出。若在筋裏。不應可見。汝今云何。欺誑於我。時醫執鏡。以照其面。珠在鏡中。明了顯現。力士見已。心懷驚怪。生奇特想。善男子。一切衆生。亦復如是。不能親近善知識。謬故。雖有佛性。皆不能見。而爲貪姪。瞋恚。愚癡。之所覆蔽。故墮地獄。畜生。餓鬼。阿修羅。旃陀羅。利婆羅門。毗舍首陀。生如是等種種家中。因心所起種種業緣。雖受人身。譬盲瘖。癡。拘攷。癡。跛。於二十五有。受諸果報。貪姪。瞋恚。愚癡。覆心。不知佛性。如彼力士。寶珠在體。謂呼失去。衆生亦爾。不知親近善知識。故不識如來。微密寶藏。修學無我。譬如非聖。雖說有我。亦復不知我之真性。我諸弟子。亦復如是。不知親近善知識。故修學無我。亦復不知無我之處。尙自不知無我真性。況復能知有我真性。善男子。如來如是。說諸衆生。皆有佛性。譬如良醫。示彼力士。金剛寶珠。是諸衆生。爲無量億。諸煩惱等之所覆蔽。不識佛性。若盡煩惱。



明三本俱作淨  
○珠同作後

一上同無藥字

母三本俱作押  
下同

礙同作閣下同

爾時乃得證知明了。如彼力士於明鏡中見其實珠。善男子。如來祕藏如是無量不可思議。復次善男子。譬如雪山有一味藥。名曰藥味。其味極甜。在深叢下。人無能見。有人聞香。卽知其地。當有是藥。過去世中有轉輪王。於彼醋或鹹或甜或苦或辛或淡。如是一味。隨其流處。有種種異。是藥真味。停留在山。猶如滿月。凡人薄福。雖以掘鑿加功。苦至而不能得。復有聖王出現於世。以福因緣。卽得是藥。真正之味。善男子。如來祕藏。其味亦爾。爲諸煩惱叢林所覆。無明衆生不能得見。藥一味者。譬如佛性。以煩惱故。出種種味。所謂地獄畜生餓鬼。天人男女。非男非女。刹利婆羅門毗舍首陀。佛性雖難可毀壞。是故無有能殺害者。若有殺者。則斷佛性。如是佛性終不可斷。性若可斷。無有是處。如我性者。卽是如來祕密之藏。如是祕藏。一切無能毀壞燒滅。雖不可壞。然不可見。若得成就。阿耨多羅三藐三菩提。爾乃證知。以是因緣。無能殺者。迦葉菩薩復白佛言。世尊。若無殺者。應當無有不善之業。佛告迦葉。實有殺生。何以故。善男子。衆生佛性住五陰中。若壞五陰。名曰殺生。若有殺生。卽墮惡趣。以業因緣。而有利利婆羅門等毗舍首陀及旃陀羅。若男若女。非男非女。二十五有差別之相。流轉生死。非聖之人。橫計於我。大小諸相。猶如稗子。或如米豆。乃至母指。如是種種妄生憶想。妄想之相。無有真實。出世我相。名爲佛性。如是計我是名最善。復次善男子。譬如有人善知伏藏。卽取利鏹。掘地直下。磐石沙礫。直過無難。唯至金剛不能穿徹。夫金剛者。所有刀斧不能破壞。善男子。衆生佛性亦復如是。一切論者。天魔波旬及諸人天。所不能壞。五陰之相。卽是起作。起作之相。猶如石砂。可穿可壞。佛性真我。譬如金剛。不可毀壞。以是義故。壞五陰者。名爲殺生。善男子。必定當知佛法。如是不可思議。善男子。方等經者。猶如甘露。亦如毒藥。迦葉菩薩復白佛言。如來何緣說方等經。譬如甘露亦如毒藥。佛言。善男子。汝今欲知如來祕藏真實義。不迦葉自言。我今實欲得知如來祕藏之義。爾時世尊而說偈言。

或有服甘露 傷命而旱天 或復服甘露 壽命得長存 或有服毒生 有緣服毒死 無礙智甘露 所謂大乘典 如是大乘典 亦名雜毒藥 如酥醍醐等 及以諸石蜜 服消則爲藥 不消則爲毒

觀同作對

方等亦如是 智者為甘露 愚不知佛性 服之則成毒 聲聞及緣覺 大乘為甘露 猶如諸味中  
 乳最為第一 如是勸進者 依因於大乘 得至於涅槃 成人中象王 衆生知佛性 猶如迦葉等  
 無上甘露味 不生亦不死 迦葉汝今當 善分別三歸 如是三歸性 則是我之性 若能諦觀察  
 我性有佛性 當知如是人 得入祕密藏 知我及我所 是人已出世 佛法三寶性 無上第一尊  
 如我所說偈 其性義如是

爾時迦葉復說偈言

唯同作性次同

我今都不知 歸依三寶處 云何當歸趣 無上無所畏 不知三寶處 云何作無我 云何歸佛者  
 而得於安慰 云何歸依法 唯願為我說 云何得自在 云何不自在 云何歸依僧 轉得無上利  
 云何真實說 未來成佛道 未來若不成 云何歸三寶 我今無預知 當行次第依 云何未轉妊  
 而作生子想 若必在胎中 則名為有子 子若在胎中 定當生不久 是名為子義 衆生業亦然  
 如佛之所說 愚者不能知 以其不知故 輪迴生死獄 假名優婆塞 不知真實義 唯願廣分別  
 除斷我疑網 如來大智慧 唯垂哀分別 願說於如來 祕密之寶藏 迦葉汝當知 我今當為汝  
 善開微密藏 令汝疑得斷 今當至心聽 汝於諸菩薩 則與第七佛 同其一名號 歸依於佛者  
 真名優婆塞 終不更歸依 其餘諸天神 歸依於法者 則離於殺害 歸依聖僧者 不求於外道  
 如是歸三寶 則得無所畏 迦葉白佛言 我亦歸三寶 是名為正路 諸佛之境界 三寶平等相  
 常有大智性 我性及佛性 無二無差別 是道佛所讚 正進安止處 亦名正遍見 故為佛所稱  
 我亦趣善逝 所讚無上道 是最為甘露 諸有所無有

讚宋作贊次同

爾時佛告迦葉菩薩善男子汝今不應如諸聲聞凡夫之人分別三寶於此大乘無有三歸分別之相所以者何  
 於佛性中即有法僧為欲化度聲聞凡夫故分別說三寶異相善男子若欲隨順世間法者則應分別有三歸依  
 善男子菩薩應作如是思惟我今此身歸依於佛若即此身得成佛道既成佛已不當恭敬禮拜供養於諸世尊

何以故。諸佛平等。等爲衆生作歸依故。若欲尊重法身舍利。便應禮敬諸佛塔廟。所以者何。爲欲化度諸衆生故。亦令衆生於我身中起塔廟想。禮拜供養。如是衆生以我法身爲歸依處。一切衆生皆依非真邪僞之法。我當次第爲說眞法。又有歸依非眞僧者。我當爲作依眞僧處。若有分別三歸依者。我當爲作一歸依處。無三差別。於生盲衆爲作眼目。復當爲諸聲聞緣覺作眞歸處。善男子。如是菩薩爲無量惡諸衆生等及諸智者。而作佛事。善男子。譬如有人臨陣戰時。卽生心念。我於是中。最爲第一。一切兵衆悉依恃我。亦如太子。如是思惟。我當調伏其餘。王子紹繼大皇帝王之業。而得自在。令諸王子悉見歸依。是故不應生下劣心。如王王子大臣亦爾。善男子。菩薩摩訶薩亦復如是。作是思惟。云何三事與我一體。善男子。我示三事卽是涅槃。如來者名無上士。譬如人身頭最爲上。非除支節手足等也。佛亦如是。最爲尊上。非法僧也。爲欲化度諸世間故。種種示現差別之相。如彼梯橙。是故汝今不應受持如凡愚人所知三歸差別之相。汝於大乘猛利決斷。應如剛刀。迦葉菩薩白佛言。世尊。我知故問。非爲不知。我爲菩薩大勇猛者。問於無垢清淨行處。欲令如來爲諸菩薩廣宣分別奇特之事。稱揚大乘方等經典。如來大悲。今已善說。我亦如是安住其中。所說菩薩清淨行處。卽是宣說大涅槃經。世尊。我今亦當廣爲衆生顯揚。如是如來祕藏。亦當證知眞三歸處。若有衆生能信如是。大涅槃經。其人則能自然了達三歸依處。何以故。如來祕藏有佛性故。其有宣說是經典者。皆言身中盡有佛性。如是之人。則不遠求三歸依處。何以故。於未來世。我身卽當成就三寶。是故聲聞緣覺之人及餘衆生。皆依於我恭敬禮拜。善男子。以是義故。應當正學大乘經典。迦葉復言。佛性如是。不可思議。三十二根八十種好。亦不可思議。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。善男子。汝已成就深利智慧。我今當更善爲汝說。入如來藏。若我住者。卽是常法。不離於苦。若無我者。修行淨行。無所利益。若言諸法皆無有我。是卽斷見。若言我住卽是常見。若言一切行無常者。卽是斷見。諸行常者。復是常見。若言苦者。卽是斷見。若言樂者。復是常見。修一切法常者。墮於斷見。修一切法斷者。墮於常見。如步屈蟲。要因前脚得移後足。修常斷者。亦復如是。要因斷常。以是義故。修餘法苦者。皆名不善。修餘法樂者。則名爲善。修餘法無我者。是諸煩惱分。修餘法常者。是則名曰如來祕藏。所謂涅槃。無有窟宅。修餘無常法者。卽是財物。修餘常法者。謂佛法僧。

眞解脫三本俱  
作解脫者

常下同無者字

歌三本俱作  
下同

及正解脫。當知如是佛法中道。遠離二邊而說眞法。凡夫愚人於中無疑。如癩病人服食酥已。氣力輕便。有無之法體性不定。譬如四大其性不同。各自違反。良醫善知。隨其偏發而消息之。善男子。如來亦爾。於諸衆生。猶如良醫。知諸煩惱體相。差別而爲除斷。開示如來祕密之藏。清淨佛性。常住不變。若言有者。智不應染。若言無者。卽是妄語。若言有者。不應默然。亦復不應戲論諍訟。但求了知諸法眞性。凡夫之人。戲論諍訟。不解如來微密藏。故若說於苦。愚人便謂身是無常。說一切苦。復不能知身有樂性。說無常者。凡夫之人。計一切身皆是無常。譬如瓦坏。有智之人。應當分別。不應盡言一切無常。何以故。我身卽有佛性種子。若說無我。凡夫當謂一切佛法悉無。有我。智者應當分別。無我。假名不實。如是知已。不應生疑。若言如來祕藏空寂。凡夫聞之。生斷滅見。有智之人。應當分別。如來是常。無有變易。若言解脫。譬如幻化。凡夫當謂得眞解脫。卽是磨滅。有智之人。應當分別。人中師子。雖有去來。常住無變。若言無明。因緣諸行。凡夫之人。聞已。分別生二法想。明與無明。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。若言諸行。因緣識者。凡夫謂二。行之與識。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。若言十善十惡。可作不可作。善道惡道。白法黑法。凡夫謂二。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。若言應修一切法。苦。凡夫謂二。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。若言一切行。無常者。如來祕藏。亦是無常。凡夫謂二。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。若言一切法。無我。如來祕藏。亦無有我。凡夫謂二。智者了達其性無二。無二之性。卽是實性。我與無我。性無有二。如來祕藏。其義如是。不可稱計。無量無邊。諸佛所讚。我今於是一切功德成就。經中皆悉說已。善男子。我與無我。性相無二。汝應如是。受持頂戴。善男子。汝亦應當堅持憶念。如是經典。如我先於摩訶般若波羅蜜經中說。我無我。無有二相。如因乳生酪。因酪得生酥。因生酥得熟酥。因熟酥得醍醐。如是酪性。爲從乳生。爲從自生。從他生耶。乃至醍醐。亦復如是。若從他生。卽是他作。非是乳生。若非乳生。乳無所爲。若自生者。不應相似相續而生。若相續生。則不俱生。若不俱生。五種之味。則不一時。雖不一時。定復不從餘處來也。當知乳中先有酪相。甘味多。故不能自變。乃至醍醐。亦復如是。是牛食。噉水草。因緣血脈。轉變而得成乳。若食甘草。其乳則甜。若食苦草。乳則苦味。雪山有草。名曰肥膩。牛若食者。純得醍醐。無有青黃赤白黑色。穀草。因緣其乳。則有色味之

醉宋作醪元明  
俱作醇

堯三本俱作上

解宋元俱作服  
明作報

異。是諸衆生以明無明業因緣故生於二相。若無明轉則變爲明。一切諸法善不善等。亦復如是。無有二相。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說乳中有酪。是義云何。世尊。若言乳中定有酪。相以微細故不可見者。云何說言從乳因緣而生於酪。法若本無則名爲生。如其已有云何言生。若言乳中定有酪。相百草之中亦應有乳。如是乳中亦應有草。若言乳中定無酪者。云何因乳而得生酪。若法本無而後生者。何故乳中不生於草。善男子。不可定言乳中有酪。乳中無酪。亦不可說從他而生。若言乳中定有酪者。云何而得體味各異。是故不可說言乳中定有酪性。若言乳中定無酪者。乳中何故不生兔角。置毒乳中酪則殺人。是故不可說言乳中定無酪性。若言是酪從他生者。何故水中不生於酪。是故不可說言酪從他生。善男子。是牛食噉草因緣故血則變白。草血滅已衆生福力變而成乳。是乳雖從草血而出不得言二。唯得名爲從因緣生。酪至醍醐亦復如是。以是義故得名牛味。是乳滅已因緣成酪。何等因緣若辭若煖。是故得名從因緣有。乃至醍醐亦復如是。是故不得定言乳中無有酪相。從他生者離乳而有。無有是處。善男子。明與無明亦復如是。若與煩惱諸結俱者。名爲無明。若與一切善法俱者。名之爲明。是故我言無有二相。以是因緣我先說言。雪山有草名曰肥膩。牛若食者即成醍醐。佛性亦爾。善男子。衆生薄福不見是草。佛性亦爾。煩惱覆故衆生不見。譬如大海雖同一鹹。其中亦有上妙之味。同於乳。譬如雪山雖復成就種種功德。多生諸藥。亦有毒草。諸衆生身亦復如是。雖有四大毒蛇之種。其中亦有妙藥大王。所謂佛性。非是作法。但爲煩惱客塵所覆。若利利婆羅門毗舍首陀。能斷除者。即見佛性。成無上道。譬如虛空震雷起雲。一切象牙上皆生華。若無雷震華則不生。亦無名字。衆生佛性亦復如是。常爲一切煩惱所覆。不可得見。是故我說衆生無我。若得聞是大般涅槃微妙經典。則見佛性。如象牙華。雖聞契經一切三昧。不聞是經。不知如來微妙之相。如無雷時象牙上華不可得見。聞是經已。即知一切如來所說祕藏佛性。譬如天雷見象牙華。聞是經已。即知一切無量衆生皆有佛性。以是義故。說大涅槃名爲如來祕密之藏。增長法身。猶如雷時象牙上華以能長養。如是大義。故得名爲大般涅槃。若有善男子善女人。有能習學是大涅槃微妙經典。當知是人能報佛恩。眞佛弟子。迦葉菩薩白佛言。甚奇世尊。所言佛性甚深甚深。難見難入。聲聞緣覺所不能解。佛言。善男子。如是如是。如汝所歎。

決明作拱○膜  
同作膜

仰三本俱作遠

攢同作攢

觀元明俱作視  
下同

不違我說。迦葉菩薩白佛言。世尊。佛性者云何甚深難見難入。佛言。善男子。如百盲人爲治目故造詣良醫。是時良醫卽以金錘決其眼膜。以一指示問言見不。盲人答言。我猶未見。復以二指三指示之。乃言少見。善男子。是大涅槃微妙經典。如來未說亦復如是。無量菩薩雖具足行諸波羅蜜乃至十住。猶未能見所有佛性。如來旣說卽便少見。是菩薩摩訶薩旣得見已。成作是言。甚奇世尊。我等流轉無量生死。常爲無我之所惑亂。善男子。如是菩薩位階十地。尚不明了知見佛性。何況聲聞緣覺之人能得見耶。復次善男子。譬如仰觀虛空鵝鴈爲是虛空。爲是鵝鴈。諦觀不已髣髴見之。十住菩薩於如來性知見少分亦復如是。況復聲聞緣覺之人而能知見。善男子。譬如醉人欲涉遠路朦朧見道。十住菩薩於如來性知見少分亦復如是。善男子。譬如渴人行於曠野。是人渴逼逼行求水。見有叢樹樹有白鶴。是人迷悶不能分別。是樹是水。諦觀不已乃見白鶴及以叢樹。善男子。十住菩薩於如來性知見少分亦復如是。善男子。譬如有人在大海中。乃至無量百千由旬。遠望大舶樓櫓堂閣。卽作是念。彼是樓櫓爲是虛空。久視乃生必定之心。知是樓櫓。十住菩薩於自身中見如來性亦復如是。善男子。譬如王子身極懦弱通夜遊戲至明清旦目視一悉切不明了。十住菩薩雖於自身中見如來性亦復如是。不明了。復次善男子。譬如臣吏王事所拘逼夜還家。電明覽發因見牛聚。卽作是念。爲是牛羣爲雲爲舍。是人久視雖生牛想猶不審定。十住菩薩雖於自身見如來性。未能審定亦復如是。復次善男子。如持戒比丘觀無蟲水而見蟲相。卽作是念。此中動者爲是蟲耶。是塵土耶。久視不已雖知是塵亦不明了。十住菩薩於自身中見如來性亦復如是不大明了。復次善男子。譬如有人於陰闇中遠見小兒。卽作是念。彼爲是牛爲鳥耶。久觀不已雖見小兒猶不明了。十住菩薩於自身中見如來性亦復如是不大明了。復次善男子。譬如有人於夜闇中見畫菩薩。卽作是念。是菩薩像自在天像大梵天像成染衣耶。是入久觀雖復意謂是菩薩像亦不明了。十住菩薩於自身中見如來性亦復如是不大明了。善男子。所有佛性如是甚深難得知見。唯佛能知。非諸聲聞緣覺所及。善男子。智者應作如是分別知如來性。迦葉菩薩白佛言。世尊。佛性如是微細難知。云何肉眼而能得見。佛告迦葉。善男子。如非想非非想天。亦非二乘所能得知。隨順契經以信故知。善男子。聲聞緣覺信願如是大涅槃經。自知己身有如來性亦

返三本俱作反

傍同作旁

撮宋作撐

三本俱作我○  
臣

復如是。善男子。是故應當精勤修習大涅槃經。善男子。如是佛性。唯佛能知。非諸聲聞緣覺所及。迦葉菩薩白佛言。世尊。非聖凡夫有衆生性。皆說有我。佛言。譬如二人共爲親友。一是王子。一是貧賤。如是二人互相往返。是時貧人見是王子。有一好刀淨妙第一。心中貪著。王子後時執持是刀。逃至他國。貧人於後寄宿他家。卽於眠中竊言。刀刀。傍人聞之。收至王所。時王問言。汝言刀者。可以示我。是人具以上事。答王。王今設使屠割臣身。分裂手足。欲得刀者。實不可得。臣與王子素爲親厚。先共一處。雖曾眼見。乃至不敢以手接觸。況當故取。王復問言。卿所見刀相貌何類。答言。大王。臣所見者。如殺羊角。王聞是已。欣然而笑。語言。汝今隨意所至。莫生憂怖。我庫藏中都無是刀。況汝乃於王子邊見。時王卽問諸羣臣言。汝等曾見如是刀不。言已。便崩。尋立餘子紹繼王位。復問羣臣。汝等曾於官庫藏中見是刀不。諸臣答言。臣等曾見。又復問言。其狀何似。答言。大王。如殺羊角。王言。我庫藏中何緣當有如是相刀。次第四王皆悉檢校求索不得。却後數時。先逃王子。從他國還歸其本土。復得爲王。旣登王位。復問諸臣。汝見刀不。答言。大王。臣等皆見。又復問言。其狀何似。答言。大王。其色清淨如優鉢羅華。復有答言。形如羊角。復有答言。其色紅赤。猶如火聚。復有答言。猶如黑虵。時王大笑。卿等皆悉不見我刀真實之相。善男子。菩薩摩訶薩亦復如是。出現於世。說我真相。說已捨去。譬如王子持淨妙刀。逃至他國。凡夫愚人說言。一切有我。有我。如彼貧人。止宿他舍。竊言刀刀。聲聞緣覺問諸衆生。我有何相。答言。我見我相。大如母指。或言如米。或如稗子。有言我相。住在心中。熾然如日。如是衆生不知我相。譬如諸臣不知刀相。菩薩如是。說於我法。凡夫不知種種分別。妄作我相。如問刀相。答似羊角。是諸凡夫次第相續而起。邪見爲斷。如是諸邪見故。如來示現說於無我。譬如王子語諸臣言。我庫藏中無如是刀。善男子。今日如來所說真我名曰佛性。如是佛性。我佛法中。譬如淨刀。善男子。若有凡夫能善說者。卽是隨順。無上佛法。若有善能分別隨順宣說者。當知卽是菩薩相貌。

### 大般涅槃經文字品第十二

佛復告迦葉。所有種種異論呪術言語文字。皆是佛說非外道說。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何如來說字根本。佛

短三本俱在阿不作夾註而明  
 短呼二字下  
 短伊短憂並皆  
 同○喻同作譬  
 ○長同在阿下  
 作夾註而明作  
 長呼二字下長  
 伊長憂並皆同  
 ○梨同作黎次  
 同○等同作來

於一切衆同作  
 得名二字

野同作墜下同  
 申同作伸

病下家元俱有  
 夾註安樂反三  
 字

言善男子，初說半字以為根本，持諸記論呪術文章諸陰實法。凡夫之人學是字本，然後能知是法非法。迦葉菩薩復白佛言：世尊，所言字者，其義云何？善男子，有十四音名為字義，所言字者名曰涅槃。常故不流，若不流者則為無盡。夫無盡者即是如來金剛之身，是十四音名曰字本。短阿者不破壞故，不破壞者名曰三寶。喻如金剛，又復阿者不流故，不流者即是如來，如來九孔無所流故，是故不流。又無九孔是故不流，不流即常，常即如來。如來無作，是故不流。又復阿者名為功德，功德者即是三寶，是故名阿。次長阿者名阿闍梨，阿闍梨者義何謂耶？於世間中得名聖者，何謂為聖？聖名無著，少欲知足，亦名清淨。能度衆生於三有流生，死大海，是名為聖。又復阿者名曰制度，修持淨戒隨順威儀。又復阿者名依聖人，應學威儀進止舉動供養恭敬禮拜三尊孝養父母及學大乘善男女等具持禁戒及諸菩薩摩訶薩等，是名聖人。又復阿者名曰教誨，如言汝等如是應作如是莫作，若有能遮非威儀法，是名聖人，是故名阿。短伊者即是佛法，梵行廣大清淨無垢，譬如滿月，汝等如是應作不作是義非。義此是佛說，此是魔說，是故名伊。長伊者，佛法微妙甚深難得，如自在天大梵天王法名自在，若能持者則名護法。又自在者名四護世，是四自在則能攝護大涅槃經，亦能自在敷揚宣說。又復伊者能為衆生自在說法，復次伊者為自存故說，何等是耶？所謂修習方等經典，復次伊者為斷嫉妬如除穢穢，皆悉能令變成吉祥，是故名伊。短憂者，於諸經中最上最勝增長上上謂大涅槃，復次憂者如來之性，聲聞緣覺所未曾聞，如一切處北鬱單越最為殊勝。菩薩若能聽受是經，於一切衆最上最勝，是故名憂。長憂者，譬如牛乳諸味中上，如來之性亦復如是。於諸經中最尊最上，若有誹謗當知是人與牛無別。復次憂者，是人名為無慧正念，誹謗如來微密祕藏，當知是人甚可憐憫，遠離如來祕密之藏，說無我法，是故名憂。嚙者即是諸佛法性涅槃，是故名嚙。野者謂如來義，復次野者如來進止屈申舉動無不利益一切衆生，是故名野。鳥者名煩惱義，煩惱者名曰諸漏，如來永斷一切煩惱，是故名鳥。炮者謂大乘義，於十四音是究竟義，大乘經典亦復如是。於諸經論最為究竟，是故名炮。卷者能遮一切諸不淨物，於佛法中能捨一切金銀寶物，是故名卷。病者名勝乘義，何以故？此大乘典大涅槃經，於諸經中最為殊勝，是故名病。迦者於諸衆生起大慈悲，生於子想，如羅睺羅作妙善義，是故名迦。咄者名非善友，非善友者



重音二字三本  
俱在者上而作  
夾註並下同  
蕙宋作陰

佗下明無夾註

茶宋作茶下同  
○學元明俱作  
學次同○蠶下

三本俱有蝓蟻  
二字○類宋元  
俱作蝓

邪宋作那元明  
俱作耶次同○  
輕三本俱在羅  
下作夾註而明  
作輕音二字○  
隱同作固  
名羅下來元俱  
有夾註來家二  
字明有來家切  
三字  
不同於陰入界  
三本俱作亦不  
同陰界入

名爲雜穢。不信如來祕密之藏。是故名吐。伽者名藏。藏者卽是如來祕藏。一切衆生皆有佛性。是故名伽。重音伽者如來常音。何等名爲如來常音。所謂如來常住不變。是故名伽。俄者一切諸行破壞之相。是故名俄。遮者卽是修義。調伏一切諸衆生。故名爲修義。是故名遮。車者如來覆蔭一切衆生。譬如大蓋。是故名車。闍者正解脫無有老相。是故名闍。重音闍者煩惱繁茂。譬如稠林。是故名闍。若者是智慧義。知眞法性。是故名若。吒者於閻浮提示現半身而演說法。譬如半月。是故名吒。反土家者法身具足。譬如滿月。是故名吒。茶者是愚癡僧。不知常與無常。譬如小兒。是故名茶。重音茶者不知師恩。譬如羝羊。是故名茶。學者非是聖義。譬如外道。是故名學。多者如來於彼告諸比丘。宜離驚畏。當爲汝等說微妙法。是故名多。他者名愚癡義。衆生流轉生死自纏如鷲。是故名他。陀者名曰大施。所謂大乘。是故名陀。重音陀者稱讚功德。所謂三寶如須彌山。高峻廣大無有傾倒。是故名陀。那者三寶安住無有傾動。譬如門闕。是故名那。波者名顛倒義。若言三寶悉皆滅盡。當知是人爲自疑惑。是故名波。頗者是世間災。若言世間災起之時。三寶亦盡。當知是人愚癡無智。違失聖旨。是故名頗。婆者名佛十力。是故名婆。重音婆者名爲重擔。堪任荷負。無上正法。當知是人是大菩薩。是故名婆。摩者是諸菩薩嚴峻制度。所謂大乘大般涅槃。是故名摩。邪者是諸菩薩在在處處。爲諸衆生說大乘法。是故名邪。囉者能壞貪欲。瞋恚愚癡。說眞實法。是故說囉。輕羅者名聲聞乘。動轉不住。大乘安隱無有傾動。捨聲聞乘。精勤修習。無上大乘。是故名羅。和者如來世尊。爲諸衆生雨大法雨。所謂世間呪術經書。是故名和。除者遠離三箭。是故名除。沙者名具足義。若能聽是大涅槃經。則爲已得聞持一切大乘經典。是故名沙。婆者爲諸衆生演說正法。令心歡喜。是故名婆。呵者名心歡喜。奇哉世尊。離一切行。怪哉如來。入般涅槃。是故名呵。羅者名曰魔義。無量諸魔不能毀壞。如來祕藏。是故名羅。復次羅者。乃至示現隨順世間有父母妻子。是故名羅。流音盧樓如是四字。說有四義。謂佛法僧及以對法。言對法者。隨順世間。如提婆達。示現壞僧。化作種種形貌色像。爲制戒故。智者了達不應於此而生畏怖。是名隨順世間之行。以是故名魯流盧樓。吸氣舌根隨鼻之聲。長短超聲。隨音解義。皆因舌齒而有差別。如是字義能令衆生口業清淨。衆生佛性則不如是。假於文字然後清淨。何以故。性本淨故。雖復處在陰界入中。而不同於陰入界也。是

○讚宋作贊  
誨數明作數誨

爾時佛三本俱  
作佛復二字  
葉下同無善  
二字 芽案作  
葉三本俱作葉  
下同

如上同無善字

自三本俱作已

### 大般涅槃經鳥喩品第十四

故衆生悉應歸依諸菩薩等以佛性故等視衆生無有差別是故半字於諸經書記論文章而爲根本又半字義皆是煩惱言說之本故名半字滿字者乃是一切善法言說之根本也譬如世間爲惡行者名爲半人修善行者名爲滿人如是一切經書記論皆因半字而爲根本若言如來及正解脫入於半字是事不然而何以何離文字故是故如來於一切法無礙無著真得解脫何等名爲解了字義有知如來出現於世能滅半字是故名爲解了字義若有隨逐半字義者是人不知如來之性何等名爲無字義耶觀近修習不善法者是名無字又無字者雖能親近修習善法不知如來常與無常恒與非恒及法僧二寶律與非律經與非經魔說佛說若有不能如是分別是名隨逐無字義也我今說已如是隨逐無字之義善男子是故汝今應離半字善解滿字迦葉菩薩白佛言世尊我等應當善學字數今我值遇無上之師已受如來慰勸誨勸佛讚迦葉善哉善哉樂正法者應如是學

爾時佛告迦葉菩薩善男子鳥有二種一名迦隣提二名鴛鴦遊止共俱不相捨離是苦無常無我等法亦復如是不得相離迦葉菩薩白佛言世尊云何是苦無常無我如彼鴛鴦迦隣提鳥佛言善男子異法是苦異法是樂異法是常異法無常異法是我異法無我譬如稻米異於麻麥麻麥復異豆粟甘蔗如是諸種從其萌芽乃至花葉皆是無常葉實成熟人受用時乃名爲常何以故性真實故迦葉白佛言世尊如是等物若是常者同如摩耶佛言善男子汝今不應作如是說何以故若言如來如須彌山劫壞之時須彌崩倒如來爾時豈同壞耶善男子汝今不應受持是義善男子一切諸法唯除涅槃更無一法而是常者直以世語言葉實常迦葉菩薩白佛言世尊善哉善哉如佛所說佛告迦葉如是如是善男子雖修一切契經諸定乃至未開大般涅槃皆言一切悉是無常開是經已雖有煩惱如無煩惱即能利益一切人天何以故曉了己身有佛性故是名爲常復次善男子譬如菴羅樹其花始敷名無常相若成葉實多所利益乃名爲常如是善男子雖修一切契經諸定未開如是大涅槃時成言一切悉是無常開是經已雖有煩惱如無煩惱即能利益一切人天何以故曉了自身有佛性故是名爲

次同○融同作  
銜次同

子同作於

憂上同無夫字  
○二上同無名  
字

有同作無

性上同無佛字  
得同作可

常。復次善男子。譬如金鑛消融之時。是無常相。融已成金。多所利益。乃名爲常。如是善男子。雖修一切契經。諸定。未聞如是大涅槃時。咸言一切悉是無常。聞是經已。雖有煩惱。如無煩惱。即能利益一切人天。何以故。曉了自身有佛性故。是名爲常。復次善男子。譬如胡麻未被壓時。名曰無常。既壓成油。多有益。乃名爲常。善男子。雖修一切契經。諸定。未聞如是大涅槃時。咸言一切悉是無常。聞是經已。雖有煩惱。如無煩惱。即能利益一切人天。何以故。曉了己身有佛性故。是名爲常。復次善男子。譬如衆流皆歸于海。一切契經。諸定三昧。皆歸大乘大涅槃經。何以故。究竟善說有佛性故。善男子。是故我言異法是常。異法無常。乃至無我亦復如是。迦葉。菩薩白佛言。世尊。如來已離憂悲毒箭。夫憂悲者名爲天。如來非天。憂悲者名爲人。如來非人。憂悲者名二十五有。如來非二十五有。是故如來無有憂悲。何故稱言如來憂悲。善男子。無想天者名爲無想。若無想者。則無壽命。若無壽命。云何而有陰界諸入。以是義故。無想天壽不可說言有所住處。善男子。譬如樹神依樹而住。不得定言依枝依節依莖依葉。雖無定所。不得言無。無想天壽亦復如是。善男子。佛法亦爾。甚深難解。如來實無憂悲苦惱。而於衆生起大慈悲。現有憂悲。視諸衆生。如羅睺羅。復次善男子。無想天中所有壽命。唯佛能知。非餘所及。乃至非想非非想處。亦復如是。迦葉。如來之性清淨無染。猶如化身。云何當有憂悲苦惱。若言如來有憂悲者。云何能利一切衆生。弘廣佛法。若言無者。云何而言等視衆生。如羅睺羅。若不等視。如羅睺羅。如是之言。則爲虛妄。以是義故。善男子。佛不可思議。法不可思議。衆生佛性不可思議。無想天壽不可思議。如來有憂及以無憂。是佛境界。非諸聲聞緣覺所知。善男子。譬如空中舍宅微塵。不得住立。若言舍宅不因空住。無有是處。以是義故。不可說舍住於虛空。不住虛空。凡夫之人。雖復說言舍住虛空。而是虛空實無所住。何以故。性無住故。善男子。心亦如是。不可說言住陰界入及以不住。無想天壽亦復如是。如來憂悲亦復如是。若無憂悲。云何說言等視衆生。如羅睺羅。若言有者。復云何言性同虛空。善男子。譬如幻師。雖復化作種種宮殿。殺生長養繫縛。放捨及作金銀琉璃寶物。叢林樹木。都無實性。如來亦爾。隨順世間。示現憂悲。無有真實。善男子。如來已入大般涅槃。云何當有憂悲苦惱。若謂如來入於涅槃。是無常者。當知是人則有憂悲。若謂如來不入涅槃。常住不變。當知是人無有憂悲。如來有憂及以無憂。無能知。

性三本俱作鳥

漢同作長○無  
上同無化字○  
象下宋無生字

集三本俱作習

迦同作勤

自上同無復字  
次同

者復次善男子。譬如下人能知下法。不知中上。中者知中。不知於上。上者知上。及知中下。聲聞緣覺亦復如是。齊知自地。如來不爾。悉知自地。及以他地。是故如來名無礙智。示現幻化。隨順世間。凡夫肉眼。謂是真實。而欲盡知。如來無礙。無上智者。無有是處。有憂無憂。唯佛能知。以是因緣。異法有我。異法無我。是名鴛鴦迦鄰提性。復次善男子。佛法猶如鴛鴦共行。是迦鄰提及鴛鴦鳥。盛夏水漲。選擇高原安處。其子為長養故。然後隨本安隱而遊。如來出世亦復如是。化無量衆。令住正法。如彼鴛鴦迦鄰提鳥。選擇高原安置其子。如來亦爾。令諸衆生所作辦已。即便入於大般涅槃。善男子。是名異法。是苦異法。是樂。諸行是苦。涅槃是樂。第一微妙壞諸行故。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何衆生得涅槃者。名第一樂。佛言。善男子。如我所說諸行和合名為老死。

謹慎無放逸 是處名甘露 放逸不謹慎 是名為死句 若不放逸者 即得不死處 如其放逸者 常趣於死路

若放逸者。名有為法。是有為法。為第一苦。不放逸者。則名涅槃。彼涅槃者。名為甘露。第一最樂。若趣諸行。是名死處。受第一苦。若至涅槃。則名不死。受最妙樂。若不放逸。雖集諸行。是亦名為常樂。不死不破壞身。云何放逸。云何不放逸。非聖凡夫。是名放逸。常死之法。出世聖人。是不放逸。無有老死。何以故。入於第一常樂涅槃。以是義故。異法是苦。異法是樂。異法是我。異法無我。如人在地。仰觀虚空。不見鳥跡。善男子。衆生亦爾。無有天眼。在煩惱中。而不自見。有如來性。是故我說無我。密教。所以者何。無天眼者。不知真我。橫計我故。因諸煩惱。所造有為。即是無常。是故我說異法。是常。異法無常。

精進勇健者 若處於山頂 平地及曠野 常見諸凡夫 昇大智慧殿 無上微妙臺 既自除憂患 亦通衆生憂

如來悉斷無量煩惱。住智慧山。見諸衆生。常在無量億煩惱中。迦葉菩薩。復白佛言。世尊。如佛所說是義不然。何以故。入涅槃者。無憂無喜。云何得昇智慧臺殿。復當云何。住在山頂。而見衆生。佛言。善男子。智慧殿者。即名涅槃。無憂患者。謂如來也。有憂患者。名凡夫人。以凡夫憂。故如來無憂。須彌山頂者。謂正解脫。勤精進者。譬須彌山無

愍三本俱作憫

言同作告

有動轉。地謂有爲行也。是諸凡夫安住是地。造作諸行。其智慧者則名正覺。離有常住故名如來。如來愍念無量衆生。常爲諸有毒箭所中。是故名爲如來有憂。迦葉菩薩復白佛言。世尊。若使如來有憂悲者。則不得稱爲等正覺。佛言。迦葉。皆有因緣。隨有衆生應受化處。如來於中示現受生。雖現受生而實無生。是故如來名常住法。如迦鄰提鴛鴦等鳥。

# 大般涅槃經卷第八

鳥喻品第十四

# 大般涅槃經卷第九

〔麗勿〕〔宋桓〕〔元桓〕〔明鳳〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 月喻品第十五

現同作示

喻同作譬下同

盤同作槃

佛告迦葉。譬如有人見月不現。皆言月沒。而作沒想。而此月性實無沒也。轉使他方彼處衆生復謂月出。而此月性實無出也。何以故。以須彌山障故不現。其月常生性無出沒。如來應供正遍知亦復如是。出現三千大千世界。或閻浮提示有父母。衆生皆謂生閻浮提。或閻浮提示現涅槃。如來之性實無涅槃。而諸衆生皆謂如來實般涅槃。譬如月沒。善男子。如來之性實無生滅。爲化衆生示有生滅。善男子。如此滿月餘方見半。此方半月餘方見滿。閻浮提人若見月初。皆謂一日起初月想。見月盛滿謂十五日生盛滿想。而此月性實無虧盈。因須彌山而有增減。善男子。如來亦爾。於閻浮提。或現初生。或現涅槃。現始生時。猶如初月。一切皆謂童子初生。行於七步。如二日月。或復示現入於書堂。如三日月。示現出家。如八日月。放大智慧微妙光明。能破無量衆生魔衆。如十五日盛滿之月。或復示現三十二相八十種好。以自莊嚴。而現涅槃。如月蝕。如是衆生所見不同。或見半月。或見滿月。或見月蝕。而此月性實無增減。侵蝕之者。常是滿月。如來之身亦復如是。是故名爲常住不變。復次善男子。譬如滿月一切悉現。在在處處。城邑聚落。山澤水中。若井若池。及諸水器。一切皆現。有諸衆生行百由旬。百千由旬。見月常隨。凡夫愚人妄生憶想。言我本於城邑屋宅。見如是月。今復於此空澤見之。爲是本月。爲異於本。各作是念。月形大小。或言如鑊口。或言如車輪。或言如四十九由旬。一切皆見月之光明。或見團圓。猶如金盤。是月性一。種種衆生各見異相。善男子。如來亦爾。出現於世。或有人天而作是念。如來今者在我前住。復有畜生亦生是念。如來今者在或前住。或有聾瘡亦見。如來有聾瘡相。衆生雜類言音各異。皆謂如來悉同己語。亦各生念。在我舍宅受

修元明俱作脩  
下同○諸三本  
俱作之

諸同作億

莖同作味

蝕元明俱作食

我供養。或有衆生見如來身廣大無量。或見微小。或有見佛是聲聞像。或復有見爲緣覺像。有諸外道復各念言。如來今者在我法中出家學道。或有衆生復作是念。如來今者獨爲我故出現於世。如來實性譬如彼月。卽是法身。是無生身。方便之身。隨順於世。示現無量本業因緣。在在處處。示現有生。猶如彼月。以是義故。如來常住。無有變異。復次善男子。如羅睺羅阿修羅王。以手遮月。世間諸人咸謂月蝕。阿修羅王實不能蝕。以阿修羅障其明故。是月團圓。無有虧損。但以手障。故使不現。若攝手時。世間咸謂月復還生。皆言是月多受苦惱。假使百千阿修羅王不能惱之。如來亦爾。示有衆生於如來所生。麤惡心出佛身血。起五逆罪。至一闍提。爲未來世諸衆生故。如是示現壞僧斷法。而作留難。假使無量百千諸魔不能侵出如來身血。所以者何。如來之身。無有血肉筋脈骨髓。如來真實無惱壞。衆生皆謂法僧毀壞。如來滅盡。而如來性真實無變。無有破壞。隨順世間。如是示現。復次善男子。如二人鬪。若以刀杖傷身出血。雖至於死不起殺想。如是業相輕而不重。於如來所本無殺心。雖出身血。是業亦爾。輕而不重。如來如是於未來世。爲化衆生。示現業報。復次善男子。猶如良醫勤教其子醫方根本。此是根藥。此是莖藥。此是色藥。種種相貌。汝當善知。其子敬奉父之所教。精勤習學。善解諸藥。是醫後時壽盡命終。其子號慕而作是言。父本教我。根藥如是。莖藥如是。花藥如是。色相如是。如來亦爾。爲化衆生。示現制戒。應當如是受持。莫犯。作五逆罪。誹謗正法。及一闍提。爲未來世起是事者。是故示現。欲令比丘於佛滅後。作如是知。此是契經甚深之義。此是戒律輕重之相。此是阿毗曇分別法句。如彼醫子。復次善男子。如人見月六月一蝕。而上諸天須臾之間。已見月蝕。何以故。彼天日長。人間短故。善男子。如來亦爾。天人咸謂如來短壽。如彼天人須臾之間。頻見月蝕。如來又於須臾之間。示現百千萬億涅槃。斷煩惱魔陰。魔死魔。是故百千萬億天魔悉知。如來入般涅槃。又復示現無量百千先業因緣。隨順世間種種性故。示現如是無量無邊不可思議。是故如來常住無變。復次善男子。譬如明月衆生。樂見是故。稱月號爲樂見。衆生若有貪患。愚癡。則不得稱爲樂見也。如來如是其性純善。清淨無垢。是最可稱爲樂見也。樂法衆生視之無厭。惡心之人不喜瞻視。以是義故。故言如來譬如明月。復次善男子。譬如日出有三時異。謂春夏冬。冬日則短。春日處中。夏日極長。如來亦爾。於此三千大千世界。爲短壽者及諸聲聞。

芽本作芽下同

度三本俱作沒  
滅同作除滅

示現短壽。斯等見已。咸謂如來壽命短促。喻如冬日。為諸菩薩示現中壽。若至一劫。若滅一劫。喻如春日。唯佛觀佛。其壽無量。喻如夏日。善男子。如來所說方等大乘微密之教。示現世間雨大法雨。於未來世。若有人能護持是典。開示分別利益眾生。當知是輩是真菩薩。喻如盛夏。天降甘雨。若有聲聞緣覺之人。聞佛如來微密之教。喻如冬日。多遇冷患。菩薩之人。若聞如是微密教誨。如來常住性無變易。喻如春日。萌芽開敷。而如來性實無長短。為世間故。示現如是。即是諸佛真實法性。復次善男子。譬如眾星晝則不現。而人皆謂晝星滅沒。其實不沒。所以不現。日光映故。如來亦爾。聲聞緣覺不能得見。猶如世人。不見晝星。復次善男子。譬如陰闇日月不現。愚人謂言日月失沒。而是日月實無失沒。如來正法滅盡之時。三寶現沒亦復如是。非為永滅。是故當知如來常住無有變易。何以故。三寶真性。不為諸垢之所染故。復次善男子。譬如黑月。羣星夜現。其明炎熾。暫出還沒。眾生見已。生不祥想。諸辟支佛亦復如是。出無佛世。眾生見已。皆謂如來真實滅度。生憂悲想。而如來身實不滅度。如彼日月。無有滅沒。復次善男子。譬如日出。眾霧悉除。此大涅槃微妙經典。亦復如是。出與於世。若有眾生一經耳者。悉能滅除一切諸惡。無間業。是大涅槃甚深境界。不可思議。善說如來微密之性。以是義故。諸善男子。善女人等。應於如來生。常住心。無有變易。正法不斷。僧寶不滅。是故應當多修方便。勤學是典。是人不久當得阿耨多羅三藐三菩提。是故此經名為無量功德所成。亦名菩提不可窮盡。以不盡故。故得稱為大般涅槃。有善光故。猶如夏日。身無邊故名大涅槃。

### 大般涅槃經菩薩品第十六

復次善男子。如日月光。諸明中最。一切諸明所不能及。大涅槃光亦復如是。於諸契經三昧光明最為殊勝。諸經三昧所有光明所不能及。何以故。大涅槃光能入眾生諸毛孔故。眾生雖無菩提之心。而能為作菩提因緣。是故復名大般涅槃。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。大涅槃光入於一切眾生毛孔。眾生雖無菩提之心。而能為作菩提因者。是義不然。何以故。世尊。犯四重禁。作五逆人。及一闍提。光明入身。作菩提因者。如是等輩。與持淨戒修



梵同作上

樓三本俱作懼  
下同○魯同作  
寤下同

焦同作蕉下同

瘡同作創

習諸善有何差別。若無差別。如來何故說四依義。世尊。又如佛言。若有衆生聞大涅槃一經於耳。則得斷除諸煩惱者。如來云何先說。有人恒沙佛所發菩提心。聞大涅槃不解其義。若不解義云何能斷一切煩惱。佛言。善男子。除一闍提其餘衆生。聞是經已悉皆能作菩提因緣。法聲光明入毛孔者。必定當得阿耨多羅三藐三菩提。何以故。若有人能供養恭敬無量諸佛。方乃得聞大涅槃經。薄福之人則不得聞。所以者何。大德之人乃能得聞。如是大事。凡夫下劣則不得聞。何等爲大。所謂諸佛甚深秘藏。如來性是。以是義故名爲大事。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何未發菩提心者得菩提因。佛告迦葉。若有聞是大涅槃經。言我不發菩提心。誹謗正法。是人卽於夢中見羅刹像。心中怖懼。羅刹語言。咄善男子。汝今若不發菩提心。當斷汝命。是人惶怖。覺已卽發菩提之心。是人命終若在三趣及在人天。續復憶念菩提之心。當知是人是大菩薩摩訶薩也。以是義故。是大涅槃威神之力。能令未發菩提心者作菩提因。善男子。是名菩薩發心因緣。非無因緣。以是義故。大乘妙典眞佛所說。復次善男子。如虛空中興大雲雨注於大地。枯木石山高原堆阜水所不住。流注下田陂池悉滿。利益無量一切衆生。是大涅槃微妙經典亦復如是。雨大法雨普潤衆生。唯一闍提發菩提心無有是處。復次善男子。譬如麩種雖遇甘雨百千萬劫終不生。芽若生者無有是處。一闍提輩亦復如是。雖聞如是大般涅槃微妙經典。終不能發菩提心。芽若能發者無有是處。何以故。是人斷滅一切善根。如彼麩種不能復生。菩提根芽復次善男子。譬如明珠置濁水中。以珠威德水卽爲清投之。淤泥不能令清。是大涅槃微妙經典亦復如是。置餘衆生五無間罪四重禁法濁水之中。猶可澄清發菩提心。投一闍提淤泥之中。百千萬歲不能令清起菩提心。何以故。是一闍提滅諸善根。非其器故。假使是人百千萬歲聽受如是大涅槃經。終不能發菩提之心。所以者何。無善心故。復次善男子。譬如藥樹名曰藥王。於諸藥中最爲殊勝。若和乳酪若蜜若酥若水若漿。若末若丸。若以塗術。薰身塗目。若見若嗅。能滅衆生一切諸病。如是藥樹不作是念。一切衆生若取我根不應取葉。若取葉者不應取根。若取身者不應取皮。若取皮者不應取身。是樹雖復不生是念。而能除滅一切病苦。善男子。是大涅槃微妙經典亦復如是。能除一切衆生惡業。四波羅夷五無間罪。若內若外所有諸惡。諸有未發菩提心者。因是則得發菩提心。何以故。是妙經典諸經中王。

如彼藥樹諸藥中王。若有修習是大涅槃及不修者。若聞有是經典名字。聞已敬信。所有一切煩惱重病皆悉除滅。唯不能令一闍提輩安住阿耨多羅三藐三菩提。如彼妙藥雖能療愈種種重病而不能治必死之人。復次善男子。如人手瘡捉持毒藥毒則隨入。若無瘡者毒則不入。一闍提輩亦復如是。無菩提因如無瘡者毒不得入。所謂瘡者即是無上菩提因緣。毒者即是第一妙藥。全無瘡者謂一闍提。復次善男子。譬如金剛無能壞者。悉能破壞一切之物。唯除龜甲及白羊角。是大涅槃微妙經典亦復如是。悉能安止無量衆生於菩提道。唯不能令一闍提輩立菩提因。復次善男子。如馬齒草娑羅翅樹尼迦羅樹。雖斷枝莖續生如故。不如多羅斷已不生。是諸衆生亦復如是。若得聞是大涅槃經。雖犯四禁及五無間。猶故能生菩提因緣。一闍提輩則不如是。雖得聽受是妙經典。而不能生菩提道因。復次善男子。如伏陀羅鎮頭迦樹。斷已不生。一闍提輩亦復如是。雖得聞是大涅槃經。而不能發菩提因緣。復次善男子。譬如大雨終不住空。是大涅槃微妙經典亦復如是。普雨法雨於一闍提。則不能住。是一闍提周體密緻。猶如金剛不容外物。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛說偈

不見善不作 唯見惡可作 是處可怖畏 猶如險惡道

世尊。如是所說有何等義。佛言。善男子。不見者謂不見佛性。善者即是阿耨多羅三藐三菩提。不作者所謂不能親近善友。唯見者見無因果。惡者謂謗方等大乘經典。可作者謂一闍提說無方等。以是義故。一闍提輩無心趣向清淨善法。何等善法。謂涅槃也。趣涅槃者謂能修習賢善之行。而一闍提無賢善行。是故不能趣向涅槃。是處可畏者謂謗正法。誰應怖畏。所謂智者。何以故。以謗法者無有善心及方便故。險惡道者謂諸行也。迦葉復言。如佛所說

云何見所作 云何得善法 何處不怖畏 如王夷坦道

是義何謂。佛言。善男子。見所作者發露諸惡。從生死際所作諸惡。悉皆發露至無至處。以是義故。是處無畏。喻如人王所遊正路。其中盜賊悉皆逃走。如是發露一切諸惡。悉滅無餘。復次不見所作者。謂一闍提所作衆惡。而不見。是一闍提憍慢心故。雖多作惡。於是事中初無怖畏。以是義故。不得涅槃。喻如彌猴提水中月。善男子。假使

羅下三本俱有  
樹字

滅同作滅

一切無量衆生。一時成就阿耨多羅三藐三菩提已。此諸如來亦復不見彼一闍提得成菩提。以是義故名不見所作。又復不見誰之所作。所謂不見如來所作。佛爲衆生說有佛性。一闍提輩流轉生死不能知見。以是義故名爲不見如來所作。又一闍提見於如來畢竟涅槃。謂眞無常猶如燈滅膏油俱盡。何以故。是人惡業不損滅。故若有菩薩所作善業迴向阿耨多羅三藐三菩提時。一闍提輩雖復毀些破壞不信。然諸菩薩猶故施與。欲共成就無上之道。何以故。諸佛法爾。

作惡不卽受。如乳卽成酪。猶灰覆火上。愚者輕蹈之。

心上三本俱無  
其字○佛同作  
如來二字

一闍提者名爲無目。是故不見阿羅漢道。如阿羅漢不生死險惡之道。以無目故誹謗方等。不欲修習如阿羅漢勤修慈心。一闍提輩不修方等亦復如是。若人說言。我今不信聲聞經典。信受大乘讀誦解說。是故我今卽是菩薩。一切衆生悉有佛性。以佛性故衆生身中。卽有十力三十二相八十種好。我之所說不異佛說。汝今與我俱破無量諸惡煩惱如破水餅。以破結故卽能得見阿耨多羅三藐三菩提。是人雖作如是演說。其心實不信有佛性。爲利養故隨文而說。如是說者名爲惡人。如是惡人不速受果。如乳成酪。譬如王使善能談論。巧於方便奉命他國。寧喪身命終不匿王所說言教。智者亦爾於凡夫中不惜身命。要必宣說大乘方等如來秘藏。一切衆生皆有佛性。善男子。有一闍提作羅漢像住於空處誹謗方等大乘經典。諸凡夫人見已皆謂眞阿羅漢。是大菩薩摩訶薩。是一闍提惡比丘輩。住阿蘭若處壞阿蘭若法。見他得利心生嫉妬。作如是言。所有方等大乘經典。悉是天魔波旬所說。亦說如來是無常法。毀滅正法破壞衆僧。復作是言。波旬所說非善順說。作是宣說邪惡之法。是人作惡不卽受報。如乳成酪灰覆火上。愚輕蹈之。如是人者謂一闍提。是故當知大乘方等微妙經典。必定清淨。如摩尼珠投之濁水。水卽爲清。大乘經典亦復如是。復次善男子。譬如蓮花爲日所照。無不開敷。一切衆生亦復如是。若得見聞大涅槃日。未發心者皆悉發心爲菩提因。是故我說大涅槃光所入毛孔必爲妙因。彼一闍提雖有佛性。而爲無量罪垢所纏。不能得出。如蠶處繭。以是業緣不能得生菩提妙因。流轉生死無有窮已。復次善男子。如優鉢羅花鉢頭摩花拘頭華芬陀利華。生淤泥中而不爲彼淤泥所汙。若有衆生修大涅槃微妙經典亦復

病同作疾下同

愍宋元俱作閻  
明作閻○難三  
本俱作者○兒  
衣同作闇樓次  
同

當報母同作我  
當報

令同作使

如是。雖有煩惱終不爲彼煩惱所汙。何以故。以知來性相力故。善男子。譬如有園多清涼風。若觸衆生身。諸毛孔能除一切鬱蒸之惱。此大乘典大涅槃經亦復如是。遍入一切衆生毛孔。爲作菩提微妙因緣。除一闍提。何以故。非法器故。復次善男子。譬如良醫解八種藥。滅一切病。唯不能除阿薩闍病。一切契經禪定三昧亦復如是。能治一切貪恚愚癡諸煩惱病。能拔煩惱毒刺等箭。而不能治犯四重禁五無間罪。善男子。復有良醫。遇八種術能除衆生所有痛苦。唯不能治必死之病。是大涅槃大乘經典亦復如是。能除衆生一切煩惱。安住如來清淨妙因。未發心者令得發心。唯除必死一闍提輩。復次善男子。譬如良醫能以妙藥治諸盲人。令見日月星宿。諸明一切色像。唯不能治生盲之人。是大乘典大涅槃經亦復如是。能爲聲聞緣覺之人開發慧眼。令其安住無量無邊大乘經典。未發心者。謂犯四禁五無間罪。悉能令發菩提之心。唯除生盲一闍提輩。復次善男子。譬如良醫善解八術。爲治衆生一切痛苦。種種方藥。隨病與之。所謂吐下塗身灌鼻。若熏若洗。若丸若散。一切諸藥。而貧愚人。不欲服之。良醫慙念。卽將是人。遷其舍宅。強與令服。以藥力故。所患得除。女人產難。兒衣不出。若服此藥。兒衣卽出。亦令嬰兒安樂無患。是大乘典大涅槃經亦復如是。所至之處。若至舍宅。能除衆生無量煩惱。犯四重禁五無間罪。未發心者。悉令發心。除一闍提。迦葉菩薩白佛言。世尊。犯四重禁及五無間名極重惡。譬如斷截多羅樹頭。更不復生。是等未發菩提之心。云何能與作菩提因。佛言。善男子。是諸衆生。若於夢中。夢墮地獄。受諸苦惱。卽生悔心。哀哉。我等自招此罪。若我今得脫。是罪者。必定當發菩提之心。我今所見。最是極惡。從是覺已。卽知正法有大果報。如彼嬰兒。漸漸長大。常作是念。是醫最良。善解方藥。我本處胎。與我母藥。母以藥故。身得安隱。以是因緣。我命得全。奇哉。我母受大苦惱。滿足十月。懷抱我身。既生之後。推乾去濕。除去不淨。大小便利。乳哺長養。將護我身。以是義故。當報母恩。養侍衛。隨順供養。犯四重禁及無間罪。臨命終時。念是大乘大涅槃經。雖墮地獄。畜生。餓鬼。天上人中。如是經典亦爲是人作菩提因。除一闍提。復次善男子。譬如良醫及良醫子。所知深奧。出過諸醫。善知除毒無上呪術。若惡毒。蛇若龍若虺。以諸呪術。呪藥令良。以此良藥。用塗革屨。以此革屨。觸諸毒蟲。毒爲之消。唯除一毒名曰大龍。是大乘典大涅槃經亦復如是。若有衆生。犯四重禁五無間罪。悉能消滅。令住菩提。如藥革屨。

雜同作新

中同作生

菓三本俱作果  
下同

諸同作衆

有必同作必有

卽答同作復白

碗同作碗○辯  
宋作腋○讚同  
作贊下同○卿  
三本俱作汝次  
同

能消衆毒。未發心者能令發心。安住無上菩提之道。是彼大乘大涅槃經威神藥故。令諸衆生。生於安樂。唯除大龍一闍提輩。復次善男子。譬如有人。以雜毒藥。用塗大鼓。於衆人中。擊令發聲。雖無心欲聞之。皆死。唯除一人。不橫死者。是大乘典。大涅槃經。亦復如是。在在處處。諸行衆中。有聞聲者。所有貪欲。瞋恚。愚癡。悉皆滅盡。其中雖有無心思念。是大涅槃。因緣力。故能滅煩惱。而結自滅。犯四重禁。及五無間。聞是經已。亦作無上菩提。因緣漸斷。煩惱。除不橫死。一闍提輩。復次善男子。譬如闇夜。諸所營作。一切皆息。若未訖者。要待日明。學大乘者。雖修契經。一切諸定。要待大乘大涅槃日。聞是如來微密之教。然後乃當造菩提業。安住正法。猶如天雨。潤益增長。一切諸種成就。菓實。悉除饑饉。多受豐樂。如來秘藏。無量法雨。亦復如是。悉能除滅八種熱病。是經出世。如彼菓實。多所利益。安樂一切。能令衆生。見如來性。如法花中。八千聲聞。得受記。蒞成大果實。如秋收冬藏。更無所作。一闍提輩。亦復如是。於諸善法。無所營作。復次善男子。譬如良醫。聞他人子。非人所持。尋以妙藥。并遣一使。勅語使言。卿持此藥。速與彼人。彼人若遇諸惡鬼神。以藥力。故悉當遠去。卿若遲晚。吾當自往。終不令彼。枉橫死也。若彼病人。得見使者。及吾威德。諸苦當除。得安隱樂。是大乘典。大涅槃經。亦復如是。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸外道。有能受持。如是經典。讀誦。通利。復爲他人。分別廣說。若自書寫。令他書寫。斯等皆爲菩提。因緣。若犯四禁。及五逆罪。若爲邪鬼。毒惡所持。聞是經典。所有諸惡。悉皆消滅。如見良醫。惡鬼。遠去。當知是人。是真菩薩。摩訶薩也。何以故。暫得聞是。大涅槃故。亦以生念。如來常故。暫得聞者。尚得如是。何況書寫。受持。讀誦。除一闍提。其餘皆是。菩薩摩訶薩。復次善男子。譬如聾人。不聞音聲。一闍提輩。亦復如是。雖復欲聽。是妙經典。而不得聞。所以者何。無因緣故。復次善男子。譬如良醫。一切醫方。無不通達。兼復廣知。無量呪術。是醫見王。作如是言。大王。今者。有必死病。其王答言。卿不見我腹內之事。云何而言。有必死病。醫卽答言。若不見信。應服下藥。既下之後。王自驗之。王不肯服。爾時良醫。以呪術力。令王隱處。遍生瘡。胞。兼復臍下。蟲血。雜出。王見是已。生大怖懼。讚彼良醫。善哉善哉。卿先所白。吾不用之。今乃知。卿於吾此。身作大利益。恭敬是醫。猶如父母。是大乘典。大涅槃經。亦復如是。於諸衆生。有欲無欲。悉能令彼。煩惱。崩落。是諸衆生。乃至夢中。夢見是經。恭敬。供養。喻如大王。恭敬良醫。是大良醫。知必死者。終

山上同無其字

數三下俱作邊

來明作是○返

三本俱作反○

渡同作度次同

○師下同無以

字○渡宋作度

下同○乘三本

俱作若○到同

作至

不治之。是大乘典大涅槃經亦復如是。終不能治一闍提輩。復次善男子。譬如良醫善知八種悉能療治一切諸病。唯不能治必死之人。諸佛菩薩亦復如是。悉能救療一切有罪。唯不能治必死之人。一闍提輩。復次善男子。譬如良醫善知八種微妙經術。復能博達過於八種。以己所知先教其子。若水若陸山谷藥草悉令識知。如是漸漸教八事已。次復教餘最上妙術。如來應供正遍知亦復如是。先教其子諸比丘等。方便除滅一切煩惱。修學淨身。不堅固想。謂水陸山谷。水者喻身受苦。如水。上泡。陸者喻身不堅。如芭蕉樹。其山谷者喻煩惱中。修無我想。以是義。故身名無我。如來如是於諸弟子。漸漸教學九部經法。令善通利。然後教學如來秘藏。為其子故。說如來常。如來如是說大乘典大涅槃經。為諸衆生已發心者。未及發心者。作菩提因。除一闍提。如是善男子。是大乘典大涅槃經。無量無數不可思議。未曾有也。當知即是無上良醫。最尊最勝衆經中王。復次善男子。譬如大船從海此岸。至於彼岸。復從彼岸還至此岸。如來正覺亦復如是。乘大涅槃大乘寶船。周旋往返。濟渡衆生。在在處處。有應度者。悉令得見如來之身。以是義故。如來名曰無上船師。譬如有人在大海中乘船欲渡。若得順風。須臾之間。則能得過無量由旬。若住化度衆生。亦復如是。復次善男子。譬如有人在大海中乘船欲渡。若得順風。須臾之間。則能得過無量由旬。若不得者。雖復久住。經無量歲。不離本處。有時船壞沒水而死。衆生如是。在彼愚癡生死大海。乘諸行船。若得值遇大般涅槃猛利之風。則能疾到無上道岸。若不值遇。當久流轉無量生死。或時破壞墮於地獄。畜生餓鬼。復次善男子。譬如有人不遇風王。久住大海。作是思惟。我等今者必在此死。如是念時。忽遇利風。隨順渡海。復作是言。快哉。是風未曾有也。令我等輩安隱得過大海之難。衆生如是。久處愚癡生死大海。困苦窮頓。未遇如是。大涅槃風。則應生念。我等必定墮於地獄。畜生餓鬼。是諸衆生。思惟是時。忽遇大乘大涅槃風。隨順吹入於阿耨多羅三藐三菩提。方知真實。生奇特想。歎言快哉。我從昔來未曾見聞。如是如來微密之藏。爾乃於是大涅槃經。生清淨信。復次善男子。如虵脫皮。為死滅不。不也世尊。善男子。如來亦爾。方便示現棄捨毒身。可。言如來無常滅耶。不也世尊。如來於此闍提提中。方便捨身。如彼毒虵捨於故皮。是故如來名為常住。復次善男子。譬如金師得好真金。隨意造作種種諸器。如來亦爾。於二十五有。悉能示現種種色身。為化衆生。拔生死故。是故如來名無邊身。雖復

彫同作凋

教同作言下同

遊時同作欲遊

想宋元俱作相

願三本俱作修

薩下同無等字

示現種種諸身，亦名常住無有變易。復次善男子，如菴羅樹及閻浮樹一年三變，有時生花光色敷榮，有時生葉滋茂蒼鬱，有時彫落狀似枯死。善男子於意云何？是樹實爲枯死不耶？不也。世尊，善男子，如來亦爾。於三界中示三種身，有時初生有時長大，有時涅槃。而如來身實非無常。迦葉菩薩讚言：善哉，誠如聖教。如來常住無有變易。善男子，如來密語甚深難解。譬如大王告諸羣臣先陀婆來，先陀婆者一名四實，一者鹽，二者器，三者水，四者馬。如是四物共同一名，有智之臣善知此名。若王洗時，索先陀婆，即便奉水。若王食時，索先陀婆，即便奉鹽。若王食已，欲飲漿時，索先陀婆，即便奉器。若王遊時，索先陀婆，即便奉馬。如是智臣善解大王四種密語，是大乘經亦復。如是有四無常，大乘智臣應當善知。若佛出世爲衆生說，如來涅槃，智臣當知。此是如來爲計常者說無常相，欲令比丘修無常想，或復說言正法當滅，智臣應知。此是如來爲計樂者說於苦相，欲令比丘多修苦想，或復說言我今病苦衆僧破壞，智臣當知。此是如來爲計我者說無我相，欲令比丘修無我想，或復說言所謂空者是正解脫，智臣當知。此是如來說正解脫無二十五有，欲令比丘修學空想，以是義故，是正解脫則名爲空，亦名不動。謂不動者是解脫中無有苦故，是故不動。是正解脫爲無有相，謂無相者無有色聲香味觸等，故名無相。是正解脫常不變易，是解脫中無有無常熱惱變易，是故解脫名曰常住不變清涼，或復說言一切衆生有如來性，智臣當知。此是如來說於常法，欲令比丘修正常法。是諸比丘若能如是隨順學者，當知是人真我弟子。善知如來微密之藏，如彼大王智慧之臣善知王意，善男子，如是大王亦有如是密語之法，何況如來而當無耶？善男子，是故如來微密之教難可得知，唯有智者乃能解我甚深佛法，非是世間凡夫品類所能信也。復次善男子，如波羅奢樹迦尼迦樹阿叔迦樹值天亢旱不生花實，及餘水陸所生之物皆悉枯頽，無有潤澤不能增長，一切諸藥無復勢力。善男子，是大典乘大涅槃經亦復如是。於我滅後有諸衆生，不能恭敬無有威德，何以故？是諸衆生不知如來微密藏故，所以者何？以是衆生薄福德故，復次善男子，如來正法將欲滅盡，爾時多有行惡比丘，不知如來微密之藏，懶墮懈怠不能讀誦宣揚分別如來正法，譬如癡賊棄捨眞寶擔負草木，不解如來微密藏故，於是經中懈怠不動，哀哉！大險當來之世甚可怖畏，苦哉！衆生不動聽受是大乘典，大涅槃經，唯諸菩薩摩訶薩等能於是經

待同作待○煮  
用同作用煮○  
摩宋作樂

越逾三本俱作  
越逾

同作變

取真實義不著文字。隨順不逆爲衆生說。復次善男子。如牧牛女。爲欲賣乳貪多利故。加二分水轉賣與餘牧牛女人。彼女得已。復加二分轉復賣與近城女人。彼女得已。復加二分轉復賣與城中女人。彼女得已。復加二分詣市賣之。時有一人爲子納婦。急須好乳以供賓客。至市欲買。是賣乳者多索價直。是人語言。此乳多水實不直是。值我今日。瞻待賓客。是故當取。取已還家。煮用作糜。無復乳味。雖無乳味於苦味中。猶勝千倍。何以故。乳之爲味。諸味中最。善男子。我涅槃後。正法未滅餘八十年。爾時是經於閻浮提當廣流布。是時當有諸惡比丘。抄略是經。分作多分。能滅正法。色香美味。是諸惡人。雖復誦讀。如是經典。滅除如來深密要義。安置世間莊嚴文飾。無義之語。抄前著後。抄後著前。前後著中。著前後。當知如是諸惡比丘。是魔伴侶。受畜一切不淨之物。而言如來悉聽我畜。如牧牛女多加水乳。諸惡比丘亦復如是。難以世語錯定。是經。令多衆生不得正說。正寫。正取。尊重讚歎。供養恭敬。是惡比丘爲利養故。不能廣宣流布。是經。所可分流。少不足言。如彼牧牛貧窮女人。展轉賣乳。乃至作糜。而無乳味。是大乘典。大涅槃經亦復如是。展轉薄淡。無有氣味。雖無氣味。猶勝餘經。越逾千倍。如彼乳味於諸苦味。其勝千倍。何以故。是大乘典。大涅槃經。於聲聞經最爲上首。喻如牛乳味中最勝。以是義故名大涅槃。復次善男子。若善男子善女人等。無有不求男子身者。何以故。一切女人皆是衆惡之所住處。復次善男子。如蚊蚋水不能令此大地潤洽。其女人者。姪欲難滿。亦復如是。譬如大地一切作丸。令如芥子。如是等男與一女人共爲欲事。猶不能足。假使男子數如恒沙。與一女人共爲欲事。亦復不足。善男子。譬如大海一切。天雨百川。衆流皆悉歸注。而彼大海未曾滿足。女人之法亦復如是。假使一切悉爲男子。與一女人共爲欲事。而亦不足。復次善男子。如阿叔迦樹。波吒羅樹。迦尼迦樹。春花開敷。羣蜂唼取。色香細味。不知厭足。女人欲男亦復如是。不知厭足。善男子。以是義故。諸善男子善女人等。聽是大乘大涅槃經。常應呵責女人之相。求於男子。何以故。是大乘典。有丈夫相。所謂佛性。若人不知是佛性者。則無男相。所以者何。不能自知有佛性故。若有不能知佛性者。我說是等名爲女人。若能自知有佛性者。我說是人爲大丈夫。若有女人能知自身定有佛性。當知是等。卽爲男子。善男子。是大乘典。大涅槃經。無量無邊不可思議功德之聚。何以故。以說如來祕藏。是故善男子善女人。若欲速知如來密藏。



葉下同無菩薩  
二字

採同作采○沾  
宋明俱作沾

注宋作疾

唯三本俱作惟  
次同

搆宋作構元明  
俱作製○如三  
本俱作知

洵同作陶

應當方便勤修此經。迦葉菩薩白佛言。世尊。如是如是。如佛所說。我今已有丈夫之相。得入如來微密藏故。如來今日始覺悟我。因是即得決定通達。佛言。善哉善哉。善男子。汝今隨順世間之法而作是說。迦葉復言。我不隨順世間法也。佛讚迦葉。善哉善哉。汝今所知無上法味甚深難知。而能得知如蜂採味。汝亦如是。復次善男子。如蚊子澤不能令此大地沾洽。當來之世是經流布亦復如是。如彼蚊澤。正法欲滅。是經先當沒於此地。當知即是正法衰相。復次善男子。譬如過夏初月名秋秋雨連注。此大乘典大涅槃經亦復如是。為彼南方諸菩薩故。當廣流布降注法雨。彌滿其處。正法欲滅。當至闍寶具足無缺潛沒地中。或有信者或不信者。如是大乘方等經典甘露法味。悉沒於地。是經沒已。一切諸餘大乘經典皆悉滅沒。若得是經具足無缺。人中象王。諸菩薩等當知。如來無上正法將滅不久。爾時文殊師利白佛言。世尊。今此純陀猶有疑心。唯願如來。重為分別。令得除斷。佛言。善男子。云何疑心。汝當說之。當為除斷。文殊師利言。純陀心疑。如來常住。以得知見佛性力故。若見佛性而為常者。本未見時應是無常。若本無常後亦應爾。何以故。如世間物本無今有。已有還無。如是等物。悉是無常。以是義故。諸佛菩薩聲聞緣覺。無有差別。爾時世尊。即說偈言。

本有今無 本無今有 三世有法 無有是處

善男子。以是義故。諸佛菩薩聲聞緣覺。亦有差別。亦無差別。文殊師利讚言。善哉。誠如聖教。我今始解諸佛菩薩聲聞緣覺。亦有差別。亦無差別。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。諸佛菩薩聲聞緣覺。性無差別。唯願如來分別廣說。利益安樂一切眾生。佛言。善男子。諦聽。諦聽。當為汝說。善男子。譬如長者多畜乳牛。有種種色。常令一人守護將養。是人有時為祠祀故。盡搆諸牛。著一器中。見諸牛乳。同一白色。尋便驚怪。牛色各異。其乳云何皆同一色。是人思惟。如此一切。皆是眾生業報。因緣令乳色一。善男子。聲聞緣覺菩薩亦爾。同一佛性。猶如彼乳。所以者何。同盡漏故。而諸眾生言佛菩薩聲聞緣覺。而有差別。有諸聲聞凡夫之人。疑於三乘。云何無別。是諸眾生久後自解一切三乘。同一佛性。猶如彼人解乳。相由業因緣。復次善男子。譬如金鑛。陶鍊滓穢。然後銷融。成金之後。價直無量。善男子。聲聞緣覺菩薩亦爾。皆得成就。同一佛性。何以故。除煩惱故。如彼金鑛。除諸滓穢。以是義故。一切

已同作以

捷作三本俱作捷

薩下開無摩訶薩三字

衆生同一佛性無有差別。以其先聞如來密藏。後成佛時自然得知。如彼長者知乳一相。何以故。以斷無量億煩惱故。迦葉菩薩白佛言。世尊。若一切衆生有佛性者。佛與衆生有何差別。如是說者多有過咎。若諸衆生皆有佛性。何因緣故。舍利弗等以小涅槃而般涅槃。緣覺之人於中涅槃而般涅槃。菩薩之人於大涅槃而般涅槃。如是等人若同佛性。何故不同。如來涅槃而般涅槃。善男子。諸佛世尊所得涅槃。非諸聲聞緣覺所得。以是義故。大般涅槃名爲善有。世若無佛非無二乘得二涅槃。迦葉復言。是義云何。佛言。無量無邊阿僧祇劫。乃有一佛出現於世。開示三乘。善男子。如汝所言。菩薩二乘無差別者。我先於此如來密藏大涅槃中。已說其義。諸阿羅漢無有善有。何以故。諸阿羅漢悉當得是大涅槃故。以是義故。大般涅槃有畢竟樂。是故名爲大般涅槃。迦葉言。如佛說者。我今始知差別之義。無差別義。何以故。一切菩薩聲聞緣覺。未來之世皆當歸於大般涅槃。譬如衆流歸於大海。是故聲聞緣覺之人。悉名爲常非是無常。以是義故。亦有差別亦無差別。迦葉言。云何性差別。佛言。善男子。聲聞如乳緣覺如酪。菩薩之人如生熟酥。諸佛世尊猶如醍醐。以是義故。大涅槃中說四種性而有差別。迦葉復言。一切衆生性相云何。佛言。善男子。如牛新生乳血未別。凡夫之性雜諸煩惱亦復如是。迦葉復言。拘尸那城有旃陀羅名曰歡喜。佛記是人。由一發心。當於此大千佛數中速成無上正真之道。以何等故。如來不記尊者舍利弗曰。隨速等速成佛道。佛言。善男子。或有聲聞緣覺菩薩作誓願言。我當久久護持正法。然後乃成無上佛道。以發速願故。與速記。復次善男子。譬如商人。有無價寶詣市賣之。愚人見已不識。輕笑。寶主唱言。我此寶珠價直無數。聞已復笑。各各相謂。此非眞寶。是頗梨珠。善男子。聲聞緣覺亦復如是。若聞速記。則便憍念。輕笑薄賤。如彼愚人。不識眞寶。於未來世有諸比丘。不能精勤修習善法。貧窮困苦飢餓所逼。因是出家。長養其身。心志輕躁。邪命諂曲。若聞如來授諸聲聞速疾記者。便當大笑。輕慢毀訾。當知是等。即是破戒。自言已得過人之法。以是義故。隨發速願故。與速記。護正法者爲授速記。迦葉菩薩復白佛言。世尊。菩薩摩訶薩云何當得不壞眷屬。佛告迦葉。若諸菩薩勤加精進。欲護正法。以是因緣。所得眷屬不可沮壞。迦葉菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。衆生得此眷屬。口乾。佛告迦葉。若有不讀三寶常存。以是因緣。唇口乾燥。如人口爽。不知甜苦辛酸鹹淡六味差別。一切衆生愚癡無

智。不識三寶是長存法。是故名爲唇口乾焦。復次善男子。若有衆生不知如來是常住者。當知是人則爲生盲。若知如來是常住者。如是之人雖有肉眼。我說是等名爲天眼。復次善男子。若有能知如來是常。當知是人久已修習。如是經典。我說是等亦名天眼。雖有天眼而不能知如來是常。我說斯等名爲肉眼。是人乃至不識自身手足支節。亦復不能令他識知。以是義故名爲肉眼。復次善男子。如來常爲一切衆生而作父母。所以者何。一切衆生種種形類。二足四足多足無足。佛以一音而爲說法。彼彼異類各各得解。悉皆歎言。如來今日爲我說法。以是義故名爲父母。復次善男子。如人生子始十六月。雖復語言未可解了。而彼父母欲教其語。先同其音漸漸教之。是父母語可不正耶。不也。世尊。善男子。諸佛如來亦復如是。隨諸衆生種種音聲而爲說法。爲令安住佛法。故隨所應見而爲示現種種形像。如來如是同彼語言。可不正耶。不也。世尊。何以故。如來所說如師子吼。隨順世間種種音聲。而爲衆生勸說妙法。

大般涅槃經卷第九

# 大般涅槃經卷第十

〔麗勿〕〔宋公〕〔元桓〕〔明風〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 一切大眾所問品第十七

所三本俱作

取所持問作持  
所齋○唯問作  
准下同○花香  
同作香華○愍  
同作憫下同

便同作必

皆同作儻下同

爾時世尊從其面門放種種色青黃赤白紅紫光明照純陀身純陀遇已與諸眷屬持諸餽饈往佛所欲奉如來及比丘僧最後供養種種器物充滿具足持至佛所爾時有大威德天人而遮其前周匝圍遶謂純陀言且止純陀勿便奉施爾時如來復放無量無邊種種光明諸天大眾遇斯光已尋聽純陀前至佛所奉其所施爾時天人及諸衆生各自取所持供養至於佛前長跪白佛唯願如來聽諸比丘受此供養時諸比丘知是時故執持衣鉢一心安詳爾時純陀爲佛及僧布置種種師子寶座懸繪幡蓋花香瓔珞爾時三千大千世界莊嚴微妙猶如西方安樂國土爾時純陀住於佛前憂悲悵怏重白佛言唯願如來猶見哀愍住壽一劫若滅一劫佛告純陀汝欲令我久住世者宜當速奉最後具足檀波羅蜜爾時一切菩薩摩訶薩天人雜類異口同音唱如是言奇哉純陀成大福德能令如來受其最後無上供養我等無福所設供具則爲唐捐爾時世尊欲令一切衆望滿足於自身上一一毛孔孔化無量佛一一諸佛各有無量諸比丘僧是諸世尊及無量衆悉皆示現受其供養釋迦如來自受純陀所奉設者爾時純陀所持粳糧成熟之食摩伽陀國滿足八斛以佛神力皆悉充足一切大會爾時純陀見是事已心生歡喜踊躍無量一切大眾亦復如是爾時大眾承佛聖旨各作是念如來今已受我等施不久便當入於涅槃作是念已心生悲喜爾時樹林其地狹小以佛神力如針鋒處皆有無量諸佛世尊及其眷屬等坐而食所食之物亦無差別是時天人阿修羅等啼泣悲歎而作是言如來今日已受我等最後供養受供養已當般涅槃我等當復更供養誰我今永離無上調御盲無眼目爾時世尊爲欲安慰一切大眾而說偈言

一穴遊三本俱  
作於一穴

寶同作法  
儀同作德

末宋元俱作林

儀三本俱作閏  
下同

是同作來

汝等莫悲歎 諸佛法應爾 我入於涅槃 已經無量劫 常受最勝樂 永處安隱處 汝今至心聽  
我當說涅槃 我已離食想 終無飢渴患 今當為汝等 說其隨順願 令諸一切衆 咸得安隱樂  
汝聞應修行 諸佛法常住 假使鳥與象 同共一樹棲 猶如親兄弟 爾乃永涅槃 如來視一切  
猶如羅睺羅 常為衆生尊 云何永涅槃 假使蛇鼠狼 同處一穴遊 相愛如兄弟 爾乃永涅槃  
如來視一切 猶如羅睺羅 常為衆生尊 云何永涅槃 假使七葉花 轉為婆師香 迦留為鎖頭  
爾乃永涅槃 如來視一切 猶如羅睺羅 云何捨慈悲 永入於涅槃 假使一闍提 現身成佛道  
永處第一樂 爾乃入涅槃 如來視一切 皆如羅睺羅 云何捨慈悲 永入於涅槃 假使一切衆  
一時成佛道 遠離諸過患 爾乃入涅槃 如來視一切 皆如羅睺羅 云何捨慈悲 永入於涅槃  
假使蚊蚋水 浸壞於大地 川谷海盈滿 爾乃入涅槃 悲心視一切 皆如羅睺羅 永入於涅槃  
云何永涅槃 以是故汝等 應深樂正法 不應生憂惱 號泣而啼哭 若欲自正行 應修如來常  
當觀如是法 長存不變易 復應生是念 三寶皆常住 是則獲大護 如呪枯生果 是名為三寶  
四衆應善聽 聞已應歡喜 卽發菩提心 若能計三寶 常住同真諦 此則是諸佛 最上之誓願  
若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷能以如來最上誓願而發願者當知是人無有患難堪受供養以此願力功德  
果報於世最勝如阿羅漢若有不能如是觀了三寶常者是旃陀羅若有能知三寶常住實法因緣離苦安樂無  
有燒害能留難者爾時人天大眾阿修羅等聞是法已心生歡喜踊躍無量其心調柔善滅諸蓋心無高下威儀  
清淨顏貌怡悅知佛常住是故施設諸天供養散種種花末香塗香鼓天伎樂以供養佛爾時佛告迦葉菩薩言  
善男子汝見是衆希有不迦事葉答言已見世尊見諸如來無量無邊不可稱計受諸大眾人天所奉飯食供養  
又見諸佛大身莊嚴所坐之處如一針鋒多衆圍繞不相障礙復見大眾悉發誓願說十三偈亦知大眾各心念  
言如來今者獨受我供假使純陀所飯奉食碎如微塵一塵一佛猶不周遍以佛神力悉皆充足一切大眾唯諸  
菩薩摩訶薩文殊師利法王子等能知如是希有事耳悉是如來方便示現聲聞大眾及阿修羅等皆知如來是

住十三本俱作  
十住

常住法。爾時世尊告純陀言。汝今所見爲是希有奇特事不。實爾世尊。我先所見無量諸佛三十二相八十種好莊嚴其身。今悉見爲菩薩摩訶薩。巨身殊異。顏貌無比。唯見佛身。譬如藥樹。爲諸菩薩摩訶薩等之所圍繞。佛告純陀。汝先所見無量佛者。是我所化。爲欲利益一切衆生。令得歡喜。如是菩薩摩訶薩等。所可修行。不可思議。能作無量諸佛之事。純陀。汝今皆已成就菩薩摩訶薩行。得住十地。菩薩所行具足成辦。迦葉菩薩白佛言。世尊。如是如是。如佛所說。純陀所修成菩薩行。我亦隨喜。今者如來欲爲未來無量衆生作大明故。說是大乘大涅槃經。世尊。一切契經說有餘義無餘義耶。善男子。我所說者。亦有餘義亦無餘義。純陀白佛言。世尊。如佛所說。所有之物。布施一切。唯可讚歎。無可毀損。

世尊。是義云何。持戒毀戒有何差別。佛言。唯除一人。餘一切施皆可讚歎。純陀問言。云何名爲唯除一人。佛言。如此經中所說破戒。純陀復言。我今未解。唯願說之。佛告純陀。言破戒者。謂一闍提。其餘在所一切布施皆可讚歎。毀大果報。純陀復問。一闍提者。其義云何。佛告純陀。若有比丘及比丘尼。優婆塞優婆夷。發麤惡言。誹謗正法。造是重業。永不改悔。心無慙愧。如是等人名爲趣向一闍提道。若犯四重作五逆罪。自知定犯如是重事。而心初無怖畏。慙愧不肯發露。於佛正法。永無護惜建立之心。毀些輕賤言多過咎。如是等人名趣向一闍提道。若復說言無佛法僧。如是等人亦名趣向一闍提道。唯除如此一闍提輩。施其餘者。一切讚歎。爾時純陀復白佛言。世尊。所言破戒。其義云何。佛告純陀。若犯四重及五逆罪。誹謗正法。如是等人名爲破戒。純陀復問。如是破戒可拔濟不。佛告純陀。有因緣故。則可拔濟。若被法服。猶未捨遠。其心常懷慙愧恐怖而自責。咄哉。何爲犯斯重罪。何其怪哉。造斯苦業。深自改悔。生護法心。欲建正法。有護法者。我當供養。若有讀誦大乘典者。我當諮問。受持讀誦。既通利已。復當爲他分別廣說。我說是人不爲破戒。何以故。善男子。譬如日出能除一切塵翳闇冥。是大涅槃微妙經典。出興於世。亦復如是。能除衆生無量劫中所作衆罪。是故此經說護正法。得大果報。拔濟破戒。若有毀謗是正法者。能自改悔。還歸於法。自念所作一切不善。如人自害。心生恐怖。驚懼慙愧。除此正法。更無救護。是故應當還歸正法。若能如是。如說歸依。布施是人得福無量。亦名世間應受供養。若犯如上惡業之罪。若經一月或十五

僧同作衆

爲同作名

三本俱作長

○漢同作度次

同○併同作并

○子同作故

果下同有報字

復元則俱作便

健三本俱作捷

日不生歸依發露之心。若施是人果報甚少。犯五逆者亦復如是。能生悔心內懷慙愧。今我所作不善之業甚為大苦。我當建立護持正法。是則不名五逆罪也。若施是人得福無量。犯逆罪已不生護法歸依之心。有施是者福不足言。又善男子。犯重罪者汝今諦聽。我當為汝分別廣說。應生是心。謂正法者即是如來微密之藏。是故我當護持建立。施是人者得勝果報。善男子。譬如女人懷妊垂產。值國荒亂遠至他土。在一天廟即便產育。後聞舊邦安隱豐熟。携持其子欲還本土。路經恒河水漲暴急。荷負是兒不能得渡。即自念言。我寧與子一處併命。終不捨棄而獨濟也。作是念已。與子俱沒。命終之後。尋生天中。以慈念子欲令得渡。而是女人本性弊惡。以愛子故得生天中。犯四重禁五無間罪。生護法心亦復如是。雖復先為不善之業。以護法故得為世間無上福田。是護法者有如是等無量果報。純陀復言。世尊。若一闍提能自改悔。恭敬供養讚歎三寶。施如是人得大果。不佛言。善男子。汝今不應作如是說。善男子。譬如有人食菴羅果吐核置地。而復念言。是果核中應有甘味。即復還取破而嘗之。其味極苦心生悔恨。恐失果種。即還收拾。種之於地。勤加修治。以蘇油乳隨時澆灌。於意云。何寧可生。不也。世尊。假使天降無上甘雨。猶亦不生。善男子。彼一闍提亦復如是。燒滅善根。當於何所而得除罪。善男子。若生善心。是則不名一闍提也。善男子。以是義故。一切所施所得果報非無差別。何以故。施諸聲聞所得報異。施辟支佛得報亦異。唯施如來獲無上果。是故說言。一切所施非無差別。純陀復言。何故如來而說此偈。佛告純陀。有因緣故。我說此偈。王舍城中有優婆塞。心無淨信。奉事尼健。而來問我。布施之義。以是因緣。故說斯偈。亦為菩薩摩訶薩等說祕藏義。如斯偈者其義云何。一切者少分一切。當知菩薩摩訶薩人中之雄。攝取持戒施其所須。捨棄破戒如除穢穉。復次善男子。如我昔日所說偈言。

一切江河 必有迴曲 一切叢林 必名樹木 一切女人 必懷諂曲 一切自在 必受安樂  
 爾時文殊師利菩薩摩訶薩。即從座起。偏袒右臂。右膝著地。前禮佛足。而說偈言。  
 非一切河 必有迴曲 非一切林 悉名樹木 非一切女 心懷諂曲 一切自在 不必受樂  
 佛所說偈其義有餘。唯垂哀愍。說其因緣。何以故。世尊。於此三千大千世界。有洲名拘耶尼。其洲有河。端直不曲。

鑛宋元俱作鉢

名娑婆耶。猶如直繩入於西海。如是河相於餘經中佛未曾說。唯願如來。因此方等阿含經中說有餘義。令諸菩薩深信解之。世尊。譬如有人先識金鑛。後不識金。如來亦爾。盡知法已。而所演說有餘不盡。如來雖作如是餘說。應當方便解其意趣。一切叢林。必是樹木。是亦有餘。何以故。種種金銀琉璃寶樹。是亦名林。一切女人。必懷諂曲。是亦有餘。何以故。亦有女人善持禁戒。功德成就。有大慈悲。一切自在。必受安樂。是亦有餘。何以故。有自在者。轉輪聖帝。如來法王。不屬死魔。不可滅盡。梵釋諸天。雖得自在。悉是無常。若得常住。無變易者。乃名自在。所謂大乘。大般涅槃。佛言。善男子。汝今善得樂說之辯。且止諦聽。文殊師利。譬如長者身嬰病苦。良醫診之。爲合膏藥。是時病者貪欲多服。醫語之言。若能消者。則可隨意。汝今體羸。不應多服。當知是膏亦名甘露。亦名毒藥。若多服。不消。則名爲毒。善男子。汝今勿謂是醫所說。違於義理。損失膏勢。善男子。如來亦爾。爲諸國王后妃太子王子大臣。因波斯匿王王子后妃憍慢心故。爲欲調伏。示現恐怖。如彼良醫。故說此偈。

一切江河。必有迴曲。一切叢林。必名樹木。一切女人。必懷諂曲。一切自在。必受安樂。文殊師利。汝今當知。如來所說。無有漏失。如此大地。可令反覆。如來之言。終無漏失。以是義故。如來所說。一切有餘。爾時佛讚文殊師利。善哉善哉。善男子。汝已久知如是之義。慳<sub>哀</sub>一切。欲令衆生得智慧故。廣問如來。如是偈義。爾時文殊師利法王子。復於佛前。而說偈言。

於他語言。隨順不逆。亦不觀他。作以不作。但自觀身。善不善行。

世尊如是說。此法藥非爲正說。於他語言。隨順不逆者。唯願如來垂哀正說。何以故。世尊。常說一切外學。九十五種。皆趣惡道。聲聞弟子。皆向正路。若護禁戒。攝持威儀。守慎諸根。如是等人。深樂大法。趣向善道。如來何故。於九部中。見有毀他。則便呵責。如是偈義。爲何所趣。佛告文殊師利。善男子。我說此偈。亦不盡爲一切衆生。爾時唯爲阿闍世王。諸佛世尊。若無因緣。終不逆說。有因緣故。乃說之耳。善男子。阿闍世王。害其父已。來至我所。欲折伏我。作如是問。云何世尊。是一切智。非一切智耶。若一切智。調達往昔。無量世中。常懷惡心。隨逐如來。欲爲逆害。云何如來。聽其出家。善男子。以是因緣。我爲是王。而說此偈。

慳哀三本俱作哀憫



於他語言 隨順不逆 亦不觀他 作以不作 但自觀身 善不善行

佛告大王。汝今害父已作逆罪最重無間。應當發露以求清淨。何緣乃更見他過咎。善男子。以是義故。我爲彼王而說是偈。復次善男子。亦爲護持不毀禁戒成就威儀見他過者。而說是偈。若復有人受他教誨遠離衆惡。復教他人令遠衆惡。如是之人則我弟子。爾時世尊爲文殊師利。復說偈言。

一切畏刀杖 無不愛壽命 恕己可爲譬 勿殺勿行杖

爾時文殊師利復於佛前。而說偈言。

非一切畏杖 非一切愛命 恕己可爲譬 勤作善方便

如來說。是法句之義亦是未盡。何以故。如阿羅漢轉輪聖王。玉女象馬主藏大臣。若諸天人及阿修羅。執持利劍能害之者。無有是處。勇士烈女。馬王獸王。持戒比丘。雖復對至而不恐怖。以是義故。如來說偈。亦是有餘。若言恕己可爲譬者。是亦有餘。何以故。若使羅漢以己喻彼。則有我想。及以命想。若有我想。及以命想。則應擁護。凡夫亦應見阿羅漢。悉是行人。若如是者。卽是邪見。若有邪見。命終應生阿鼻地獄。又阿羅漢設於衆生。生害心者。無有是處。無量衆生亦復無能害羅漢者。佛言。善男子。言我想者。謂於衆生。生大悲心。無殺害想。謂阿羅漢平等之心。勿謂世尊無有因緣而逆說也。昔日於此王舍城中。有大獵師。多殺羣鹿。請我食肉。我於爾時。雖受彼請。於諸衆生。生慈悲心。如羅睺羅。而說偈言。

當令汝長壽 久久住於世 受持不害法 猶如諸佛壽

是故我說此偈

一切畏刀杖 無不愛壽命 恕己可爲譬 勿殺勿行杖

佛言。善哉善哉。文殊師利。爲諸菩薩摩訶薩故。請問如來如是密教。爾時文殊師利。復說是偈。

云何敬父母 隨順而尊重 云何修此法 墮於無間獄

於是如來。復以偈答。

若以貪愛母 無明以爲父 隨順尊重是 則墮無間獄

爾時如來復爲文殊師利重說偈言

一切屬他 則名爲苦 一切由己 自在安樂 一切憍慢 勢極暴惡 賢善之人 一切愛念

爾時文殊師利菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如來所說是亦不盡。惟願如來復垂哀愍。說其因緣。何以故。如長者子。從師學時。爲屬師不。若屬師者。義不成就。若不屬者。亦不成就。若得自在。亦不成就。是故如來所說有餘。復次世尊。譬如王子。無所絲習。觸事不成。是亦自在。憍慢常苦。如是王子。若言自在。義亦不成。若言屬他。義亦不成。以是善故。佛所說義名爲有餘。是故一切屬他。不必受苦。一切自在。不必受樂。一切憍慢。勢極暴惡。是亦有餘。世尊。如諸列女。憍慢心。故出家學道。護持禁戒。威儀成就。守攝諸根。不令馳散。是故一切憍慢之結。不必暴惡。賢善之人。一切愛念。是亦有餘。如人內犯四重禁已。不捨法服。堅持威儀。護持法者。見已不愛。是人命終。必墮地獄。若有善人。犯重禁已。護持法者。見即驅出。罷道還俗。以是義故。一切賢善。不必悉愛。爾時佛告文殊師利。有因緣故。如來於此說有餘義。又有因緣。諸佛如來而說是法。時王舍城有一女人。名曰善賢。還父母家。因至我所。歸依於我。及法衆僧。而作是言。一切女人。勢不自由。一切男子。自在無礙。我於爾時。知是女心。卽爲宣說。如是偈頌。文殊師利。善哉善哉。汝今能爲一切衆生。問於如來。如是密語。文殊師利。復說偈言。

一切諸衆生 皆依飲食存 一切有大力 其心無嫉妬 一切因飲食 而得諸病苦 一切修淨行 而得受安樂

如是世尊。今受純陀飲食供養。將無如來有恐怖耶。爾時世尊復爲文殊。而說偈言。

非一切衆生 盡依飲食存 非一切大力 心皆無嫉妬 非一切因食 而致諸病苦 非一切淨行 悉得受安樂

文殊師利。汝若得病。我亦如是。應得病苦。何以故。諸阿羅漢及辟支佛菩薩。如來實無所食。爲欲化彼。示現受用。無量衆生所施之物。令其具足。檀波羅蜜。救濟地獄畜生餓鬼。若言如來六年苦行。身羸瘦者。無有是處。諸佛世

爾時明俱作是

列三本俱作是

復三本俱作是

身同作體

刺明作鍼○鉢  
三本俱作矛

是同作此

是三本俱作亦

修元明俱作脩

能三本俱作當

尊獨拔諸有不同凡夫云何而得身羸劣耶。諸佛世尊精勤修習獲金剛身。不同世人危脆之身。我諸弟子亦復如是。不可思議不依於食。一切大力無嫉妬者。亦有餘義。如世間人終身永無嫉妬之心而無大力。一切病苦因食得者。亦有餘義。亦見有人得客病者。所謂刺刺刀劍鋒。一切淨行受安樂者。是亦有餘。世間亦有外道之人。修於梵行多受苦惱。以是義故如來所說一切有餘。是名如來非無因緣而說此偈有因故說。昔日於此憂禪尼國。有婆羅門名叛德。來至我所欲受第四八戒齋法。我於爾時為說是偈。爾時迦葉菩薩白佛言。世尊。何等名爲無餘義耶。云何復名一切義乎。善男子。一切者唯除助道常樂善法。是名一切。亦名無餘。其餘諸法亦名有餘。亦名無餘。欲令樂法諸善男子。知此有餘及無餘義。迦葉菩薩心大歡喜。踊躍無量。前白佛言。甚奇世尊。等視衆生如羅睺羅。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。汝今所見微妙甚深。迦葉菩薩白佛言。世尊。唯願如來說是大乘大涅槃經所得功德。佛告迦葉。善男子。若有得聞是經名字。所得功德非諸聲聞辟支佛等所能宣說。唯佛能知。何以故。不可思議是佛境界。何況受持讀誦通利書寫經卷。爾時諸天人及阿修羅。卽於佛前異口同音而說偈言。

諸佛難思議 法僧亦復然 是故今勸請 唯願少停住 尊者大迦葉 及以阿難等 二衆之眷屬

不久須臾至 并及摩竭主 阿闍世大王 至心敬信仰 猶故未來此 唯願佛世尊 少垂哀愍住

於此大衆中 斷我諸疑網

爾時如來爲諸大衆。而說偈言

我法最長子 是名大迦葉 阿難勤精進 能斷一切疑 汝等當諦觀 阿難多聞士 自然能解了

是常及無常 以是故不應 心懷大憂惱

爾時大衆以種種物供養如來。供養佛已卽發阿耨多羅三藐三菩提心。無量無邊恒河沙數諸菩薩等。得住初地。爾時世尊與文殊師利迦葉菩薩及與純陀而受記莢。受記莢已說如是言。諸善男子。自修其心慎莫放逸。我今背疾舉體皆痛。我今欲臥如彼小兒及常患者。文殊汝等當爲四部廣說大法。今以此法付囑於汝。乃至迦葉

囉付同作付囉

### 大般涅槃經現病品第十八

阿難等至復當囑付如是正法爾時如來說是語已爲欲調伏諸衆生故現身有疾右脅而臥如彼病人

葉下同無善薩

二字次同○疾

同作諸次同○

愛同作寒○噫

同作咽○隣同  
作憐

何上三本俱無  
如來二字

憊同作焦下同

想同作相

爾時迦葉菩薩白佛言世尊如來已免一切疾病患苦悉除無復怖畏世尊一切衆生有因毒箭則爲病因何等爲四貪欲瞋恚愚癡憍慢若有病因則有病生所謂愛熱肺病上氣吐逆膚體癢癩其心悶亂下痢噉噉小便淋瀝眼耳疼痛腹背脹滿顛狂乾消鬼魅所著如是種種身心諸病諸佛世尊悉無復有今日如來何緣願命文殊師利而作是言我今背痛汝等當爲大衆說法有二因緣則無病苦何等爲二一者憐愍一切衆生二者給施病者醫藥如來往昔已於無量萬億劫中修菩薩道常行愛語利益衆生不令苦惱施疾病者種種醫藥何緣於今自言有病世尊世人有病或坐或臥不安其處或索飲食勅誡家屬修治產業何故如來默然而臥不教弟子聲聞人等尸波羅蜜諸禪解脫三摩跋提修諸正勤何緣不說如是甚深大乘經典如來何故不以無量方便教大迦葉人中象王諸大人等令其不退阿耨多羅三藐三菩提何故不治諸惡比丘受畜一切不淨物者世尊實無有病云何默然右脅而臥諸菩薩等凡所給施病者醫藥所得善根悉施衆生而共迴向一切種智爲除衆生諸煩惱障業障報障煩惱障者貪欲瞋恚愚癡忿怒纏蓋癡憍嫉妬慳慳姦詐諛諂無慙無愧慢慢慢不如慢慢增上慢慢我慢邪慢憍慢放逸貢高慳恨諍訟邪命諂媚詐現異相以利求利惡求多求無有恭敬不隨教誨親近惡友貪利無厭纏縛難解欲於惡欲貪於惡貪身見有見及以無見頻申意睡欠味不樂貪嗜飲食其心鬱鬱心緣異想不善思惟身口多惡好惡多語諸根闇鈍發言多虛常爲欲覺悲覺害覺之所覆蓋是名煩惱障業障者五無間罪重惡之病報障者生在地獄畜生餓鬼誹謗正法及一闍提是名報障如是三障名爲大病而諸菩薩於無量劫修菩提時給施一切疾病醫藥常作是願令諸衆生永斷如是三障重病復次世尊菩薩摩訶薩修菩提時給施一切病者醫藥常作是願願令衆生永斷諸病得成如來金剛之身又願一切無量衆生作妙藥王斷除一切諸惡重病願諸衆生得阿伽陀藥以是藥力能除一切無量惡毒又願衆生於阿耨多羅三藐三菩提無有退

速同作疾

病同作疾○飲食同作食飲

有諸同作一切

如下三本俱無  
一波乃至不如  
十四字○健同  
作建下同○如  
下元明俱無一  
字○凡上三本  
俱無一切二字  
○節上同無諸  
節二字

轉。速得成就無上佛藥消除一切煩惱毒箭。又願衆生勤修精進。成就如來金剛之心。作微妙藥療治衆病。不令  
有人生諍訟想。亦願衆生作大藥樹。療治一切諸惡重病。又願衆生拔出毒箭。得成如來無上光明。又願衆生得  
入如來智慧大藥微密法藏。世尊。菩薩如是已於無量百千萬億那由他劫。發是誓願。令諸衆生悉無諸病。何緣  
如來乃於今日唱言有病。復次世尊。世有病者不能坐起俯仰進止。飲食不御漿水不下。亦復不能教誡諸子修  
治家業。爾時父母妻子兄弟親屬知識。皆於是人生必死想。世尊。如來今日亦復如是。右脅而臥無所論說。此閻  
浮提有諸愚人。當作是念。如來正覺必當涅槃生滅盡想。而如來性實不畢竟入於涅槃。何以故。如來常住無變  
易故。以是因緣不應說言我今背痛。復次世尊。世有病者身體羸損。若偃若側臥著牀褥。爾時衆人心生惡賤起  
必死想。如來今者亦復如是。當爲外道九十五種之所輕慢。生無常想。彼諸外道當作是言。不如我等以我性人  
自在時節微塵等法而爲常住無有變易。沙門瞿曇無常所遷是變易法。以是義故。世尊。今日不應默然。右脅而  
臥。復次世尊。世有病者四大增損。互不調適羸瘦之極。是故不能隨意坐起臥著牀褥。如來四大無不和適。身力  
具足亦無羸損。世尊。如十小牛力不如一大牛力。十大牛力不如一青牛力。十青牛力不如一凡象力。十凡象力  
不如一野象力。十野象力不如一二牙象力。十二牙象力不如一四牙象力。十四牙象力不如雪山一白象力。十  
雪山白象力不如一香象力。十香象力不如一青象力。十青象力不如一黃象力。十黃象力不如一赤象力。十赤  
象力不如一白象力。十白象力不如一山象力。十山象力不如一優鉢羅象力。十優鉢羅象力不如一波頭摩象  
力。十波頭摩象力不如一拘物頭象力。十拘物頭象力不如一分陀利象力。十分陀利象力不如人中一力士力。  
十人中力士力不如一鉢健提力。十鉢健提力不如一八臂那羅延力。十那羅延力不如一十住菩薩一節之力。  
一切凡夫身中諸節節不相到。人中力士節頭相到。鉢健提身諸節相接。那羅延身節頭相鉤。十住菩薩諸節骨  
解蟠龍相結。是故菩薩其力最大。世界成時從金剛際起金剛座。上至道場菩提樹下。菩薩坐已其心即時逮得  
十力。如來今者不應如彼嬰孩小兒。嬰孩小兒愚癡無智無所能說。以是義故。隨意偃側無人譏訶。如來世尊有  
大智慧照明一切。人之大龍具大威德成就神通。無上仙人永斷疑網。已拔毒箭進止安詳。威儀具足得無所畏。

今者何故右脅而臥。令諸人天悲愁苦惱。爾時迦葉菩薩即於佛前而說偈言

瞿曇大聖德 顯起演妙法 不應如小兒 病者臥牀蓐 調御天人師 倚臥雙樹間 下愚凡夫見

當言必涅槃 不知方等典 甚深佛所行 不見微密藏 猶盲不見道 唯有諸菩薩 文殊師利等

能解是甚深 譬如善射人 三世諸世尊 大悲為根本 如是大慈悲 今為何所在 若無大悲者

是則不名佛 佛若必涅槃 是則不名常 唯願無上尊 哀受我等請 利益於眾生 摧伏諸外道

隨同作加

爾時世尊大悲熏心。知諸眾生各各所念。將欲隨順畢竟利益。即從臥起結跏趺坐。顏貌熙怡如融金聚。而目端

嚴猶月盛滿。形容清淨無諸垢穢。放大光明充遍虛空。其光大盛過百千日。照于東方南西北方四維上下諸佛

世界。惠施眾生大智之炬。悉令得滅無明黑闇。令百千億那由他眾生安止不退菩提之心。爾時世尊心無疑慮

鐵三本俱作須

如師子王。以三十二大人之相八十種好莊嚴其身。於其身上一切毛孔。一一毛孔出一蓮花。其花微妙各具千

葉純真金色。琉璃為莖金剛為鬘。玫瑰為臺。形大團圓猶如車輪。是諸蓮花各出種種雜色。光明青黃赤白紫顛

刺宋作皮

梨色。是諸光明皆悉遍至阿鼻地獄。想地獄。黑繩地獄。衆合地獄。叫喚地獄。大叫喚地獄。焦熱地獄。大焦熱地獄。是八地獄其中眾生。常為諸苦之所逼切。所謂燒炙火炙。斫刺。剝。遇斯光已如是。衆苦悉滅無餘。安隱清涼快

樂無極。是光明中宣說如來秘密之藏。言諸眾生皆有佛性。衆生聞已即便命終生人天中。乃至八種寒冰地獄。所謂阿波波地獄。阿吒吒地獄。阿羅羅地獄。阿娑娑地獄。優鉢羅地獄。波頭摩地獄。拘物頭地獄。分陀利地獄。是

娑婆三本俱作 娑婆〇擊宋作 龔元明俱作劈

中衆生常為寒苦之所逼惱。所謂摩裂身體碎壤。互相殘害。遇斯光已如是。等若亦滅無餘。即得調和溫暖適身。是光明中亦說如來秘密之藏。言諸眾生皆有佛性。衆生聞已即便命終生人天中。爾時於此閻浮提界及餘世

天

界。所有地獄皆悉空虛無受罪者。除一闍提。餓鬼。衆生飢渴所逼。以髮纏身。於百千歲未曾得聞漿水之名。遇斯

光已。飢渴即除。是光明中亦說如來微密秘藏。言諸眾生皆有佛性。衆生聞已即便命終生人天中。令諸餓鬼亦

悉空虛。除謗大乘方等正典。畜生衆生互相殺害共相殘食。遇斯光已。悲心悉滅。是光明中亦說如來秘密之藏。

人天三本俱作 天人

言諸衆生皆有佛性。衆生聞已即便命終生人天中。當爾之時。畜生亦盡。除謗正法。是一一花各有一佛。圓光一

火聚或復同作  
聚火或有

能元作得

修元明俱作倍

○魔三本俱作  
摩

稱宋元俱作旃

已三本俱作用

尋金色晃曜。微妙端嚴。最上無比。三十二相八十種好莊嚴其身。是諸世尊或有坐者。或有行者。或有臥者。或有住者。或震雷音。或澍洪雨。或放電光。或扇大風。或出煙焰身如火聚。或復示現七寶諸山池泉河水山林樹木。或復示現七寶國土城邑聚落宮殿屋宅。或復示現象馬師子狼狽孔雀鳳凰諸鳥。或復示現令閻浮提所有衆生悉見地獄畜生餓鬼。或復示現欲界六天。復有世尊。或說陰界諸入多諸過患。或復有說四聖諦法。或復有說諸法因緣。或復有說諸業煩惱皆因緣生。或復有說我與無我。或復有說苦樂二法。或復有說常無常等。或復有說淨與不淨。復有世尊。爲諸菩薩演說所行六波羅蜜。或復有說諸大菩薩所得功德。或復有說諸佛世尊所得功德。或復有說聲聞之人所得功德。或復有說隨順一乘。或復有說三乘成道。或有世尊。左脅出水右脅出火。或有示現初生出家坐於道場菩提樹下轉妙法輪入于涅槃。或有世尊作師子吼。令此會中有得一果二果三果至第四果。或復有說出離生死無量因緣。爾時於此閻浮提中。所有衆生遇斯光已。盲者見色聾者聽聲。瘖者能言。拘躄能行。貧者得財。慳者能施。恚者慈心。不信者信。如是世界無一衆生修行惡法。除一闍提。爾時一切天龍鬼神乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。羅刹健陀憂摩陀阿婆魔羅人非人等。悉共同聲唱如是言。善哉善哉。無上天尊多所利益。說是語已。踊躍歡喜。或歌或舞。或身動轉。以種種花散佛及僧。所謂天優鉢羅花拘物頭花波頭摩花分陀利花。曼陀羅花摩訶曼陀羅花。曼殊沙花摩訶曼殊沙花散陀那花摩訶散陀那花。盧脂那花。摩訶盧脂那花。香花大香花。適意花大適意花。愛見花大愛見花。端嚴花第一端嚴花。復散諸香。所謂沉水多伽樓香。梅檀鬱金和合雜香。海岸聚香。復以天上寶幢幡蓋諸天伎樂箏笛笙瑟篳篥。吹供養於佛而說偈言。

我今稽首大精進 無上正覺兩足尊 天人大衆所不知 唯有瞿曇乃能了 世尊往昔爲我故  
於無量劫修苦行 如何一旦棄本誓 而便捨命欲涅槃 一切衆生不能見 諸佛世尊祕藏  
以是因緣難得出 輪轉生死墜惡道 如佛所說阿羅漢 一切皆當至涅槃 如是甚深佛行處  
凡夫下愚誰能知 施諸衆生甘露法 爲斷除彼諸煩惱 若有服此甘露已 不復受生老病死  
如來世尊已療治 百千無量諸衆生 令其所有諸重病 一切消滅無遺餘 世尊久已捨病苦

迴宋作偏

惡邪三本俱作邪惡

已同作以  
教同作語

敬三本俱作敬

故得名為第七佛。唯願今日雨法雨。潤漬我等功德種。是諸大眾及人天。如是請已默然住。

說是偈時，蓮華臺中一切諸佛，從閻浮提，迤至淨居，悉皆聞之。爾時佛告迦葉菩薩：善哉善哉，善男子，汝已具足如是甚深微妙智慧，不為一切諸魔外道之所破壞。善男子，汝已安住，不為一切諸惡邪風之所傾動。善男子，汝已成就樂說辯才，已曾供養過去無量恆河沙等諸佛世尊，是故能問如來正覺，如是之義，善男子，我於往昔無量無邊億那由他百千萬劫，已除病根，永離倚臥。迦葉，過去無量阿僧祇劫，有佛出世，號無上勝如來，曠俱正遍知，明行足，善逝世間解，無上士調御丈夫，天人師，佛世尊，為諸聲聞說是大乘大涅槃經，開示分別顯發其義，我於爾時亦為彼佛而作聲聞，受持如是大涅槃經，讀誦通利，書寫經卷，廣為他人開示分別解說其義，以是善根迴向阿耨多羅三藐三菩提。善男子，我從是來，未曾有惡煩惱業緣，墮於惡道，誹謗正法，作一闍提，受黃門身，無根二根，反逆父母，殺阿羅漢，破塔壞僧，出佛身血，犯四重禁，從是已來，身心安隱，無諸苦惱。迦葉，我今實無一切疾病，所以者何？諸佛世尊久已遠離一切病故。迦葉，是諸眾生不知大乘方等密教，便謂如來真實有疾。迦葉，如言如來人中師子，而如來者實非師子，如是之言，即是如來秘密之教。迦葉，如言如來人中大龍，而我已於無量劫中捨離是業。迦葉，如言如來是人，是天，而我真實非人，非天，亦非鬼神，鞞闍婆，阿修羅，迦樓羅，緊那羅，摩睺羅伽，非我非命，非可養育，非人，士夫，非作非不作，非受非不受，非世尊，非聲聞，非說非不說，如是等語，皆是如來秘密之教。迦葉，如言如來猶如大海，須彌山王，而如來者實非鹹味，同於石山，當知是語，亦是如來秘密之教。迦葉，如言如來如分陀利，而我實非分陀利也，如是之言，即是如來秘密之教。迦葉，如言如來猶如父母，而如來者實非父母，如是之言，亦是如來秘密之教。迦葉，如言如來是大船師，而如來者實非船師，如是之言，亦是如來秘密之教。迦葉，如言如來猶如商主，而如來者實非商主，如是之言，亦是如來秘密之教。迦葉，如言如來能治瘡瘡，而如來者實無惡心，欲令他伏，如是之言，皆是如來秘密之教。迦葉，如言如來能治瘡瘡，而我實非治瘡瘡師，如是之言，亦是如來秘密之教。迦葉，如我先說，若有善男子善女人，善能修治身口意業，捨命之時，雖有親族，取其屍骸，或以火燒，或投大水，或棄塚間，狐狼野獸，競共食噉，然心意誠，即生善道，而是心法，實無去來，亦無所至，直是



先同作上

難同作無○不  
元明俱作無○  
是上三本俱無  
善男子三字

或不同作不得

返三本俱作反  
○一下及二下  
三下並同無人  
字○結下同無  
縛字○果下同  
無名字

人下同無未來  
二字

前後相似相續相貌不異。如是之言。即是如來祕密之教。迦葉。我今言病亦復如是。亦是如來祕密之教。是故願命文殊師利。吾今背痛。汝等當為四衆說法。迦葉。如來正覺。實無有病右脅而臥。亦不畢竟入於涅槃。迦葉。是大涅槃。即是諸佛甚深禪定。如是禪定。非是聲聞緣覺行處。迦葉。汝先所問。如來何故倚臥不起。不索飲食。誠勅家屬修治產業。迦葉。虛空之性。亦無坐起。求索飲食。勅誠家屬修治產業。亦無去來。生滅老壯。出沒傷破。解脫繫縛。亦不自說。亦不說他。亦不自解。亦不解他。非安非病。善男子。諸佛世尊。亦復如是。猶如虛空。云何當有諸病苦耶。迦葉。世有三人。其病難治。一謗大乘。二五逆罪。三一闍提。如是三病。世中極重。悉非聲聞緣覺之所能治。善男子。譬如有病。必死難治。若有瞻病。隨意醫藥。若無瞻病。隨意醫藥。如是之病。定不可治。當知是人必死無疑。善男子。是三種人亦復如是。若有聲聞緣覺菩薩。或有說法。或不說法。不能令其發阿耨多羅三藐三菩提心。迦葉。譬如病人。若有瞻病。隨意醫藥。則可令差。若無此三。則不可差。聲聞緣覺亦復如是。從佛菩薩得聞法已。即便能發阿耨多羅三藐三菩提心。非不聞法。能發心也。迦葉。譬如病人。若有瞻病。隨意醫藥。若無瞻病。隨意醫藥。皆悉可差。有一種人亦復如是。或值聲聞。不值聲聞。或值緣覺。不值緣覺。或值菩薩。不值菩薩。或值如來。不值如來。或得聞法。或不聞法。自然得成阿耨多羅三藐三菩提。所謂有人。或為自身。或為他身。或為怖畏。或為利養。或為諛諂。或為誑他。書寫。如是大涅槃經。受持讀誦。供養恭敬。為他說者。迦葉。有五種人。於是大乘大涅槃典。有病行處。非如來也。何等為五。一斷三結。得須陀洹果。不墮地獄畜生餓鬼。人天七返。永斷諸苦。入於涅槃。迦葉。是名第一人。有病行處。是人未來過八萬劫。便當得成阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。第二人。斷三結。薄貪患癡。得斯陀含果。名一往來。永斷諸苦。入於涅槃。迦葉。是名第二人。有病行處。是人未來過六萬劫。便當得成阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。第三人。斷五下結。得阿那含果。更不來此。永斷諸苦。入於涅槃。是名第三人。有病行處。是人未來過四萬劫。便當得成阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。第四人。永斷貪欲。瞋恚愚癡。得阿羅漢果。煩惱無餘。入於涅槃。亦非麒麟獨一之行。是名第四人。有病行處。是人未來過二萬劫。便當得成阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。第五人。永斷貪欲。瞋恚愚癡。得辟支佛道。煩惱無餘。入於涅槃。真是麒麟獨一之行。是名第五人。有病行處。是人未來過

十千劫。便當得成阿耨多羅三藐三菩提。迦葉。是名第五人有病行處。非如來也。

# 大般涅槃經卷第十一

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 聖行品第十九之一

品目第上宋元  
俱有上字同無  
之一二字○般  
上三本俱有大  
字

爾時佛告迦葉菩薩。善男子。菩薩摩訶薩應當於是般涅槃經專心思惟五種之行。何等爲五。一者聖行。二者梵行。三者天行。四者嬰兒行。五者病行。善男子。菩薩摩訶薩當當修習是五種行。復有一行。是如來行。所謂大乘大涅槃經。迦葉。云何菩薩摩訶薩所修聖行。菩薩摩訶薩若從聲聞若從如來。得聞如是。大涅槃經。聞已生信。信已應作如是思惟。諸佛世尊有無上道。有大正法。大衆正行。復有方等大乘經典。我今當爲愛樂貪求大乘經故。捨離所愛妻子眷屬。所居舍宅。金銀珍寶。微妙瓔珞香花伎樂。奴僕給使。男女大小象馬車乘。牛羊鷄犬豬豕之屬。復作是念。居家逼迫。猶如牢獄。一切煩惱由之而生。出家閑曠。猶如虛空。一切善法因之增長。若在家居不得盡壽。淨修梵行。我今應當剃除鬚髮。出家學道。復作是念。我今定當出家修學。無上正真菩提之道。菩薩如是欲出家時。天魔波旬生大苦惱。言是菩薩復當與我興大戰。善男子。如是菩薩云何當復與人戰。是時菩薩卽至僧坊。若見如來及佛弟子。威儀具足。諸根寂靜。其心柔和。清淨寂滅。卽至其所。而求出家。剃除鬚髮。服三法衣。既出家已。奉持禁戒。威儀不缺。進止安庠。無所觸犯。乃至小罪。心生怖畏。護戒之心。猶如金剛。善男子。譬如有人。帶持浮囊。欲渡大海。爾時海中有一羅刹。卽從此人乞索浮囊。其人聞已。卽作是念。我今若與必定沒死。答言。羅刹。汝寧殺我浮囊。巨得羅刹復言。汝若不能全與我者。見惠其半。是人猶故不肯與之。羅刹復言。汝若不能惠我半者。幸願與我三分之一。是人不肯。羅刹復言。若不能者。施我手許。是人不肯。羅刹復言。汝今若復不能與我如手許者。我今飢窮衆苦所逼。願當濟我。如微塵許。是人復言。汝今所索。誠復不多。然我今日方當渡海。不知前道近。

鬚同作鬚

誣三本俱作爭  
下同

渡同作度下同

道同作途

如同作云○能  
說同作說能○  
疑下同無解詞

疑三字

聊同作汝下同

壽三本俱作耳  
○不同作未

具同作俱○接

安作更明作能

○寶三本俱作

座○服同作裳

遠如何。若與汝者。當漸出大海之難。何由得過。能脫中路沒水而死。善男子。菩薩摩訶薩。護持禁戒。亦復如是。如彼諸人。虛情浮費。菩薩如是。守戒成時。常有煩惱。諸惡羅刹。誦菩薩言。汝當信我。終不相欺。但彼四禁。護持除戒。以是因緣。令汝安隱。得入涅槃。菩薩爾時。應作是言。我今寧持如是禁戒。隨阿鼻鼠。終不毀犯。而生天上。煩惱羅刹。復作是言。汝若不能。護四禁者。可破僧體。以是因緣。令汝安隱。得入涅槃。菩薩亦不應。其語。羅刹復言。卿若不能。犯僧體者。亦可故。犯偷盜。遮罪。以是因緣。令汝安隱。得入涅槃。菩薩爾時。亦復不隨。羅刹復言。卿若不能。犯偷盜。可犯捨墮。以是因緣。可得安隱。入於涅槃。菩薩爾時。亦復不隨。羅刹復言。卿若不能。犯波夜提者。幸可毀破。突吉羅戒。以是因緣。可得安隱。入於涅槃。菩薩爾時。心自念言。我今若犯突吉羅罪。不發露者。則不能。護生死彼岸。而得涅槃。菩薩摩訶薩。於是。微小諸戒。律中。護持堅固。心如金剛。菩薩摩訶薩。持四重禁。及突吉羅。敬重堅固。等無差別。菩薩若能如是。堅持。則為具足。五支諸戒。所謂具足。菩薩根本業清淨戒。前後眷屬。餘清淨戒。非諸覺。覺清淨戒。護持正念。念清淨戒。迺向阿耨多羅三藐三菩提。戒。迦葉。是菩薩摩訶薩。復有二種戒。一者。受世教戒。二者。得正法戒。菩薩若得正法戒者。終不為惡。受世戒者。自四羯磨。然後乃得。復次善男子。有二種戒。一者。性重戒。二者。息世護戒。性重戒者。謂四禁也。息世護戒者。不作販賣。稱小斗欺誑於人。因他形勢。取人財物。害心。暫破壞成功。憊明而臥。田宅種植。家業坐賤。不畜象馬車乘。牛羊。蛇。鱷。犬。鴉。鴛。鷓。鴉。及拘樹。羅材。狼。鹿。豹。貓。狸。豬。豕。及餘惡獸。童男童女。大男大女。奴。婢。僮。僕。金。銀。珠。瑠。璃。瑠。璃。珠。車。乘。馬。乘。玉。珂。具。諸。寶。亦。銅。白。鐵。鑿。石。盃。器。懸。鈴。錘。鈸。拘。拘。衣。一切。穀。米。大小。麥。豆。黍。粟。稻。粟。生。熟。食。具。當。受。一。食。不。會。再。食。若。有。乞。食。及。僧。中。食。常。知。止。足。不。受。別。請。不。食。肉。不。飲。酒。五。辛。葷。物。悉。不。食。之。是。故。其。身。無。有。臭。穢。當。為。諸。天。一。切。世。人。恭。敬。供。養。尊。重。讚。歎。應。足。而。食。終。不。受。所。受。衣。履。盡。足。覆。身。遮。止。常。與。三。衣。鉢。具。終。不。捨。離。如。鳥。二。翼。不。畜。根。子。龍。子。節。子。樓。子。子。子。不。畜。買。賣。若。金。若。銀。飲。食。廚。庫。衣。裳。聖。跡。高。廣。大。林。象。牙。金。林。雜。色。編。織。悉。不。坐。臥。不。畜。一。切。細。軟。諸。席。不。坐。一。切。象。馬。馬。重。不。以。細。軟。上。紗。衣。履。用。敷。牀。臥。其。止。息。牀。不。置。二。枕。亦。不。受。香。妙。好。丹。好。安。黃。木。

○黃同作黃

基同作棋次同

○瞻同作占○

芝同作著

返同作反

鉞同作矛

戒下同有之身

二字

身同作耳

斫三本俱作破

地下同無耶字

枕終不觀視象鬪馬鬪車鬪兵鬪若男若女牛羊雞雉鸚鵡等鬪亦不故往觀視軍陣亦不故聽吹貝鼓角琴瑟  
箏笛笙篳歌叫伎藥之聲除供養佛楞蒲闍基波羅塞戲師子象闍彈碁六博拍毬擲石投壺牽道八道行成一  
切戲笑悉不觀作終不瞻相手足面目不以爪鏡芝草楊枝鉢盂髑髏而作卜筮亦不仰觀虛空星宿除欲解睡  
不作王家往返使命以此語彼以彼語此終不諛諂邪命自活亦不宣說王臣盜賊闍諍飲食國土饑饉恐怖豐  
樂安隱之事善男子是名菩薩摩訶薩息世嫌嫉戒善男子菩薩摩訶薩堅持如是遮制之戒與性重戒等無差  
別善男子菩薩摩訶薩受持如是諸禁戒已作是願言寧以此身投於熾然猛火深坑終不毀犯過去未來現在  
諸佛所制禁戒與利娑羅門居士等女而行不淨復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以熱鐵周匝纏身終  
不敢以破戒之身而受信心檀越飲食復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以此口吞熱鐵丸終不敢以毀戒  
之口而食信心檀越飲食復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以此身受三百鉞終不敢以破戒之身而受信心  
檀越牀臥敷具復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以此身投熱鐵鑊終不敢以破戒之身受信心檀越醫  
藥復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以鐵椎打碎此身從頭至足令如微塵不以破戒受諸利娑羅門居士恭敬禮  
男子菩薩摩訶薩復作是願寧以鐵椎打碎此身從頭至足令如微塵不以破戒受諸利娑羅門居士恭敬禮  
拜復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以熱鐵挑其兩目不以染心視他好色復次善男子菩薩摩訶薩復作  
是願寧以鐵錐周遍刺身不以染心聽好音聲復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以利刀割去其鼻不以染  
心貪嗅諸香復次善男子菩薩摩訶薩復作是願寧以利刀割裂其舌不以染心貪著美味復次善男子菩薩摩  
訶薩復作是願寧以利斧斬斷其身不以染心貪著諸觸何以故故是因緣能令行者墮於地獄畜生餓鬼迦葉  
是名菩薩摩訶薩護持禁戒菩薩摩訶薩護持如是諸禁戒已悉以施與一切衆生以是因緣願令衆生護持禁  
戒得清淨戒善戒不缺戒不折戒大乘戒不退戒隨順戒畢竟戒具足成就波羅蜜戒善男子菩薩摩訶薩修持  
如是清淨戒時即得住於初不動地云何名爲不動地耶菩薩住是不動地中不動不墮不散善男子譬如  
須彌山隨藍猛風不能令動墮落退散菩薩摩訶薩住是地中亦復如是不爲色聲香味所動不墮地獄畜生餓

退下同有或字

○次下同無善

男子三字

離下同無摩訶

薩三字

藏元明俱作藏

○骸三本俱作

骸○耶同作乎

是三本俱作此

鬼不退聲聞辟支佛地。不為異見邪風所散。而作邪命。復次善男子。又不動者。不為貪欲恚癡所動。又不墮者。不墮四重。又不退者。不退還家。又不散者。不為違逆大乘經者之所散壞。復次善男子。菩薩摩訶薩亦復不為諸煩惱魔之所傾動。不為陰魔所障。乃至坐於道場。菩提樹下。雖有天魔。不能令其退阿耨多羅三藐三菩提。亦復不為死魔所散。善男子。是名菩薩摩訶薩修習聖行。善男子。云何名為聖行。聖行者。佛及菩薩之所行故。故名聖行。以何等故名佛菩薩為聖人耶。如是等。人有聖法故。常觀諸法性空寂故。以是義故。故名聖人。有聖戒故。故名聖人。有聖定慧故。故名聖人。有七聖財。所謂信戒慚愧多聞智慧捨離故。故名聖人。有七聖覺故。故名聖人。以是義故。復名聖行。復次善男子。菩薩摩訶薩聖行者。觀察是身。從頭至足。其中唯有髮毛爪齒。不淨垢穢。皮肉筋骨脾腎心肺膽腸胃生熟二藏。大小便利涕唾目淚。肪膏腦膜骨髓膿血。腦髓諸脈。菩薩如是。專念觀時。誰有是我。我為屬誰。住在何處。誰屬於我。復作是念。骨是我。耶離骨是耶。菩薩爾時。除去皮肉。唯觀白骨。復作是念。骨色相異。所謂青黃白色。鵠色。如是骨相。亦復非我。何以故。我者。亦非青黃白色。及以鵠色。菩薩繫心。作是觀時。即得斷除一切色欲。復作是念。如是骨者。從因緣生。依因足骨。以拄踝骨。依因踝骨。以拄躡骨。依因躡骨。以拄膝骨。依因膝骨。以拄胫骨。依因胫骨。以拄臑骨。依因臑骨。以拄腕骨。依因腕骨。以拄掌骨。依因掌骨。以拄指骨。菩薩摩訶薩如是觀時。身所有骨。一切分離。得是觀已。即斷三欲。一形貌欲。二姿態欲。三細觸欲。菩薩摩訶薩觀青骨時。見此大地。東西南北四維。上下悉皆青相。如青色觀。黃白鵠色。亦復如是。菩薩摩訶薩作是觀時。眉間即出青黃赤白鵠等色光。菩薩於是一一諸光明中。見有佛像。見已即問。如此身者。不淨因緣。和合共成。云何而得。坐起行住。屈伸俯仰。視聽嗅嘗。悲泣喜笑。此中無主。誰使之爾。作是問已。光中諸佛。忽然不現。復作是念。或識是我。故使諸佛。不為我說。復觀此識。次第生滅。猶如流水。亦復非我。復作是念。若識非我。出息入息。或能是我。復作是念。是出入息。直是風性。而是風性。乃是四大。四大之中。何者是我。地性非我。水風火風性。亦復非我。復作是念。此身一切。悉無有我。唯有心風。因緣和合。示現種種所作事業。

被同作彼

曠元明俱作曠  
下二曠元作曠

他三本俱作人

鼻下元明俱無  
地獄二字

譬如呪力幻術所作，亦如篋篋隨意出聲，是故此身如是不淨。假衆因緣和合共成，當於何處而生貪欲。若被罵辱復於何處而生瞋恚。如我此身三十六物不淨臭穢，何處當有受罵辱者。若聞其罵，即便思惟，以何音聲而見罵耶。一一音聲不能見罵，若一不能衆多亦爾。以是義故，不應生瞋。若他來打，亦應思惟，如是打者從何而生。復作是念，因手刀杖及以我身故得名打。我今何緣橫瞋於他，乃是我身自招此咎。以我受是五陰身故。譬如因的則有箭中，我身亦爾。有身有打，我若不忍心則散亂，心若散亂則失正念。若失正念，則不能觀善不善義。若不能觀善不善義，則行惡法。惡法因緣則墮地獄畜生餓鬼。菩薩爾時作是觀已，得四念處，得四念處已，則得住於堪忍地中。菩薩摩訶薩住是地已，則能堪忍貪欲悲癡，亦能堪忍寒熱飢渴蚊蠱蚤蝨暴風惡觸種種疾疫惡口罵詈擗打楚撻，身心苦惱一切能忍。是故名爲住堪忍地。迦葉，菩薩白佛言：世尊，菩薩未得住不動地，淨持戒時頗有因緣得破戒不。善男子，菩薩未得住不動地，有因緣故可得破戒。迦葉言：唯然世尊，何者是耶。佛告迦葉：若有菩薩知以破戒因緣，則能令人受持愛樂大乘經典，又能令其讀誦通利書寫經卷廣爲他說，不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。爲如是故，得破戒。菩薩爾時應作是念：我寧一劫若減一劫，墮阿鼻地獄受此罪報。要令人不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。迦葉，以是因緣菩薩摩訶薩得毀淨戒。爾時文殊師利菩薩白佛言：世尊，若有菩薩攝取護持如是之人，令不退轉菩提之心，爲是毀戒若墮阿鼻地獄，無有是處。爾時佛讚文殊師利，善哉善哉。如汝所說，我念往昔於閻浮提，作大國王名曰仙預，愛念敬重大乘經典，其心純善，無有麤惡嫉妬慳恚。口常宣說愛語善語，身常攝護貧窮孤獨，布施精進，無有休廢。時世無佛，聲聞緣覺我於爾時愛樂大乘方等經典。十二年，中事婆羅門供給所須。過十二年，施安已訖，卽作是言：師等，今應發阿耨多羅三藐三菩提心。婆羅門言：大王，菩提之性是無所有。大乘經典亦復如是。大王云何，乃欲令人同於虛空。善男子，我於爾時心重大乘，聞婆羅門誹謗方等，聞已卽時斷其命根。善男子，以是因緣，從是已來，不墮地獄。善男子，擁護攝持大乘經典，乃有如是無量勢力。復次迦葉，又有聖行，所謂四聖諦苦集滅道。迦葉，苦者逼迫相，集者能生長相，滅者寂滅相，道者大乘相。復次善男子，苦者現相，集者轉相，滅者除相，道者能除相。復次善男子，苦者有三相，苦苦相行，苦相壞，苦相集。

僧宋元俱作增  
法三本俱作苦

死下同無耶字

愛同作受

顯宋元俱作俱

者二十五有。滅者滅二十五有。道者修戒定慧。復次善男子。有漏法者有二種。有因有果。無漏法者亦有二種。有因有果。有漏果者是則名苦。有漏因者則名爲集。無漏果者則名爲滅。無漏因者則名爲道。復次善男子。八相名苦。所謂生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦。能生如是八苦法者。是名爲集。集有如是八法之處。是名爲滅。十力四無所畏三念處大悲。是名爲道。善男子。生者出相所謂五種。一者初出。二者至終。三者增長。四者出胎。五者種類生。何等爲老老有二種。一念念老。二終身老。復有二種。一增長老。二滅壞老。是名爲老。云何爲病。病謂四大毒蛇互不調適。亦有二種。一者身病。二者心病。身病有五。一者因水。二者因風。三者因熱。四者雜病。五者客病。客病有四。一者非分強作。二者志誤墮落。三者刀杖瓦石。四者鬼魅所著。心病亦有四種。一者顛躓。二者恐怖。三者憂愁。四者愚癡。復次善男子。身心之病凡有三種。何等爲三。一者業報。二者不得遠離惡對。三者時節代謝。生如是等因緣名字。受分別病因緣者。風等諸病名字者。心悶肺脹上氣嗽逆心驚下痢。受分別者。頭痛目痛手足等痛。是名爲病。何等爲死。死者捨所受身。捨所受身亦有二種。一命盡死。二外緣死。命盡死者亦有三種。一者命盡非是福盡。二者福盡非是命盡。三者福命俱盡。外緣死者亦有二種。一者非分自害死。二者橫爲他死。三者俱死。又有三種死。一放逸死。二破戒死。三壞命根死。何等名爲放逸死。若有誹謗大乘方等般若波羅蜜。是名放逸死。何等名爲破戒死。耶。毀犯去來現在諸佛所制禁戒。是名破戒死。何等名爲壞命根死。捨五陰身。是名壞命根死。如是名曰死。爲大苦。何等名爲愛別離苦。所愛之物破壞離散。所愛之物破壞離散亦有二種。一者人中五陰壞。二者天中五陰壞。如是人天所愛五陰分別。計有無量種。是名愛別離苦。何等名爲怨憎會苦。所不愛者而共聚集。所不愛者而共聚集亦有二種。所謂地獄餓鬼畜生。如是三種分別。計有無量種。如是則名怨憎會苦。何等名爲求不得苦。求不得苦亦有二種。一者所希求處求不得。二者多用功力不得。果根。如是則名求不得苦。何等名爲五盛陰苦。五盛陰苦者。生苦老苦病苦死苦。愛別離苦怨憎會苦求不得苦。是故名爲五盛陰苦。迦葉。生之根本。凡有如是七種之苦。老苦乃至五盛陰苦。迦葉。衰衰老者非一切有。佛及諸天一向定無。人中不定。或有或無。迦葉。三界受身無不有生。老不必定。是故一切生爲根本。迦葉。世間衆生顛倒覆



姊三本俱作彼

常明作當

已三本俱作以

菓同作果下同

心貪著生相厭患老死。菩薩不爾觀於初生。已見過患。迦葉。如有女人入於他舍。是女端正。顏貌美麗。以好瓔珞莊嚴其身。主人見已。即便問言。汝字何等。繫屬於誰。女人答言。我身即是功德大天。主人問言。汝所至處爲何所作。女人答言。我所至處。能與種種金銀琉璃頗梨珊瑚琥珀車磔馬。嚩象馬車乘。奴婢僕使。主人聞已。心生歡喜。踊躍無量。我今福德故。令汝來至我舍宅。即便燒香散花。供養恭敬禮拜。復於門外更見一女。其形醜陋。衣裳弊壞。多諸垢膩。皮膚皴裂。其色艾白。見已。問言。汝字何等。繫屬於誰。女人答言。我字黑闇。復問何故名爲黑闇。女人答言。我所行處。能令我家所有財寶一切衰耗。主人聞已。即持利刀。作如是言。汝若不去。當斷汝命。女人答言。汝甚愚癡。無有智慧。主人問言。何故名我癡無智慧。女人答言。汝家中者。即是我姊。我常與姊進止共俱。汝若驅我亦當驅姊。主人還入問功德天。外有一女云是汝妹。實爲是不。功德天言。實是我妹。我與此妹行住共俱。未曾相離。隨所住處。我常作好。彼常作惡。我作利益。彼作衰損。若愛我者。亦應愛彼。若見恭敬。亦應敬彼。主人即言。若有如是好惡事者。我皆不用。各隨意去。是時二女便共相將還其所止。爾時主人見其還去。心生歡喜。踊躍無量。是時二女復共相隨至一貧家。貧人見已。心生歡喜。即請之言。從今已往。願汝二人常住我家。功德天言。我等先已爲他所驅。汝復何緣。俱請我住。貧人答言。汝今念我。我以汝故。復當敬彼。是故俱請令住我家。迦葉。菩薩摩訶薩亦復如是。不願生天。以生當有老病死故。是以俱棄。曾無受心。凡夫愚人。不知老病死等過患。是故貪受生死二法。復次迦葉。如婆羅門幼稚童子。爲飢所逼。見人糞中有菴羅果。即便取之。有智見已。呵責之言。汝婆羅門種姓清淨。何故取是糞中穢菓。童子聞已。赧然有愧。即答之言。我實不食。爲欲洗淨。還棄捨之。智者語言。汝大愚癡。若還棄者。本不應取。善男子。菩薩摩訶薩亦復如是。於此生分。不受不捨。如彼智者。呵責童子。凡夫之人。欣生惡死。如彼童子。取菓還棄。復次迦葉。譬如有人。四衢道頭。器盛滿食色香味具。而欲賣之。有人遠來。飢虛羸乏。見其飯食色香味具。即指問言。此是何物。食主答言。此是上食色香味具。若食此食。得色得力。能除飢渴。得見諸天。唯有一患。所謂命終。是人聞已。即作是念。我今不用色力見天。亦不用死。即作是言。食是食已。若命終者。汝今何爲於此賣之。食主答言。有智之人。終不肯買。唯有愚人。不知是事。多與我價。貪而食之。善男子。菩薩摩訶薩亦復

受宋作口

善男子三本俱

作論案二字○

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

善男子三本俱

樂元明俱作變

樂元明俱作變

樂元明俱作變

樂元明俱作變

樂元明俱作變

樂元明俱作變

如是不顯生天得色得力見於諸天。何以故。以其不免諸苦惱故。凡夫愚癡。隨有生處。皆悉貪愛。以其不見老病

死故。復次善男子。譬如毒樹根能殺人。枝幹莖節皮葉花實。悉亦能殺。善男子。二十五有受生之處。所受五陰亦

復如是一切能殺。復次迦葉。譬如蘆穢多少俱臭。善男子。生亦如是。設壽八萬下至十歲。俱亦受苦。復次迦葉。轉

如嶮岸上有草覆於彼岸邊。多有甘露。若有食者。壽天千年。永除諸病。安隱快樂。凡夫愚人貪其味故。不知其下

有大深坑。即前欲取不覺。脚踏墮坑而死。智者知已捨離遠去。善男子。菩薩摩訶薩亦復如是。尚不欲受天上妙

食。況復人中。凡夫之人。乃於地獄吞噉鐵丸。況復入天上妙餽饌。而能不食。迦葉。以如是譬。及餘無量無邊譬喻。

當知是生實為大苦。迦葉。是名菩薩住於大乘。大涅槃經觀於生苦。迦葉。云何菩薩摩訶薩。於是大乘。大涅槃經

觀於老苦。老者能為嗽逆。上氣能壞。勇力慙。念進持。盛年快樂。恬慢貢高。安隱自恣。能作背。憍懈怠。懶惰。為他所

輕。迦葉。譬如池水蓮花。滿中間。散鮮華。甚可愛樂。值天降雹。悉皆破壞。善男子。老亦如是。悉能破壞。盛壯好色。復

次迦葉。譬如國王有一智臣。善知兵法。有敵國王。拒逆不順。王遣此臣往討伐之。即便擒獲。將來詣王。老亦如是。

擒獲壯色。將付死王。復次迦葉。譬如折軸。無所復用。老亦如是。無所復用。復次迦葉。如大富家。多有財寶。金銀珠

璃。珊瑚。琥珀。車馬。磁石。有諸怨賊。若入其家。即能劫奪。悉令空盡。善男子。盛年好色。亦復如是。常為老賊之所劫

奪。復次迦葉。譬如貪人。貪著上。購細軟衣裳。雖復怖望。而不能得。善男子。老亦如是。雖有貪心。欲受富樂。五欲自

恣。而不能得。復次迦葉。如陸地龜。心當念水。善男子。人亦如是。既為衰老之所乾枯。心常憶念。莊時所受。五欲之

樂。復次迦葉。譬如秋月。所有蓮花。皆為一切之所樂見。及其萎黃。人所惡賤。善男子。盛年壯色。亦復如是。悉為一

切之所愛樂。及其老至。衆所惡賤。復次迦葉。譬如甘蔗。既被壓。已滓無復味。壯年盛色。亦復如是。既被老壓。無三

種味。一出家味。二讀誦味。三坐禪味。復次迦葉。譬如滿月。夜多光明。晝則不顯。善男子。人亦如是。壯則端嚴。形貌

瓌璋。老則衰羸。形枯頹。復次迦葉。譬如王。常以正法治國。理民。真實無曲。悲愍好施。時為敵國之所破壞。流

離。逃遠。至他土。他土人民。見而惡之。咸作是言。大王。往日正法治國。不枉萬姓。如何一旦。流離至此。善男子。人

亦如是。既為衰老所壞敗。已常讚壯時所行事業。復次迦葉。譬如燈炷。燈賴膏油。膏油既盡。燈勢不久。停。善男子。人

樂元明俱作變

樂元明俱作變

樂元明俱作變

大三本俱作之

薩下同無摩訶  
薩三字

喚同作呼○捕  
同作收  
得下同無即便  
使人四字

愁憂元明俱作  
憂愁○撥三本  
俱作發○撒宋  
作徹○念三本  
俱作命

亦如是。唯賴壯膏。壯膏既盡。衰老之炷。何得久停。復次迦葉。譬如枯河不能利益人。及非人。飛鳥走獸。善男子。人亦如是。爲老所枯。不能利益一切作業。復次迦葉。譬如河岸臨嶮。大樹若遇暴風。必當頓墜。善男子。人亦如是。臨老險岸。死風既至。勢不得住。復次迦葉。如車軸折。不任重載。善男子。老亦如是。不能諳受一切善法。復次迦葉。譬如嬰兒。爲人所輕。善男子。老亦如是。常爲一切之所輕毀。迦葉。以是等譬。及餘無量。無邊譬喻。當知是老實爲大苦。迦葉。是名菩薩摩訶薩。修行大乘大涅槃經。觀於老苦。迦葉。云何菩薩摩訶薩。修行大乘大涅槃經。觀於病苦。所謂病者。能壞一切安隱樂事。譬如雹雨。傷壞穀苗。復次迦葉。如人有怨心。常憂愁而懷恐怖。善男子。一切衆生。亦復如是。常畏病苦心懷憂感。復次迦葉。譬如有人。形貌端正。爲王夫人。欲心所愛。遣信逼喚。與共交通。時王捕得。即便使人挑其一目。截其一耳。斷一手足。是人爾時。形容改異。人所惡賤。善男子。人亦如是。先雖端嚴。耳目具足。既爲病苦所纏。逼已。則爲衆人之所惡賤。復次迦葉。譬如芭蕉竹葦。及驪有子。則死。善男子。人亦如是。有病則死。復次迦葉。如轉輪王。主兵大臣。常在前導。王隨後行。亦如魚王。蠅王。螺王。牛王。商主。在前行時。如是諸衆。悉皆隨從。無捨離者。善男子。死轉輪王。亦復如是。常隨病臣。不相捨離。魚。蠅。螺。牛。商主。病王。亦復如是。常爲死衆之所隨逐。迦葉。病因緣者。所謂苦惱。愁憂。悲歎。身心不安。或爲怨賊之所逼害。破壞浮囊。撥撤橋梁。亦能劫奪。正念根本。復能破壞。盛壯好色。力勢安樂。除捨慙愧。能爲身心。焦熱熾然。以是等譬。及餘無量。無邊譬喻。當知病苦。是爲大苦。迦葉。是名菩薩摩訶薩。修行大乘大涅槃經。觀於病苦。迦葉。云何菩薩修行大乘大涅槃經。觀於死苦。所謂死者。能燒滅故。迦葉。如火災起。能燒一切。唯除二禪力。不至故。善男子。死火亦爾。能燒一切。唯除菩薩住於大乘。大般涅槃。勢不及故。復次迦葉。如水災起。一切漂沒。唯除三禪力。不至故。善男子。死水亦爾。漂沒一切。唯除菩薩住於大乘。大般涅槃。復次迦葉。如風災起。能吹一切。悉令散滅。唯除四禪力。不至故。善男子。死風亦爾。悉能吹滅一切所有。唯除菩薩住於大乘。大般涅槃。迦葉。菩薩白佛言。世尊。彼第四禪。以何因緣。風不能吹。水不能漂。火不能燒。佛告迦葉。善男子。彼第四禪。內外過患。一切無故。善男子。初禪過患。內有覺觀。外有火災。二禪過患。內有歡喜。外有水災。三禪過患。內有喘息。外有風災。善男子。彼第四禪。內外過患。一切悉無。是故諸災不能及之。善男子。

淨護三平俱作  
星長

淨同作星

大下同無數字

是同作生

說下同無俱言

二字

備同作長次同

○於同作食下  
同

菩薩摩訶薩亦復如是。安住大乘大般涅槃。內外過患一切皆盡。是故死王不能及之。復次善男子。知金翅鳥能  
 噉能消一切龍魚金銀等寶。唯除金剛不能令消。善男子。死金翅鳥亦復如是。能噉能消一切衆生。唯不能消住  
 於大乘大般涅槃菩薩摩訶薩。復次迦葉。譬如河岸所有草木大水瀑湍。悉隨漂流入於大海。唯除楊柳以其軟  
 故。善男子。一切衆生亦復如是。悉皆隨濟入于死海。唯除菩薩住於大乘大般涅槃。復次迦葉。如那羅延悉能摧  
 伏一切力士。唯除大風。何以故。以無礙故。善男子。死那羅延亦復如是。悉能摧伏一切衆生。唯除菩薩住於大乘  
 大般涅槃。何以故。以無礙故。復次迦葉。譬如有人於怨憎中。許現親善。常相追逐。如影隨形。伺求其便而殺之。  
 彼怨諸憤擊。卒自備。故使是人不能得殺。善男子。死怨亦爾。常伺衆生而欲殺之。唯不能殺住於大乘大般涅槃。  
 菩薩摩訶薩。何以故。以是菩薩不放逸故。復次迦葉。譬如卒降金剛瀑雨。悉壞藥木諸樹。山林土沙瓦石金銀珠  
 璃一切之物。唯不能壞金剛真寶。善男子。金剛死雨亦復如是。悉能破壞一切衆生。唯除金剛菩薩住於大乘大  
 般涅槃。復次迦葉。如金翅鳥能噉諸龍。唯不能噉受三歸者。善男子。死金翅鳥亦復如是。能噉一切無量衆生。唯  
 除菩薩住三定者。何謂三定。空無相願。復次迦葉。如摩羅毒蛇。凡有所螫。雖有良呪。上妙好藥。無如之何。唯阿竭  
 多星呪能令除愈。善男子。死毒所螫亦復如是。一切醫方無如之何。唯除菩薩住於大乘大般涅槃。復次迦葉。  
 譬如有人爲王所順。其人若能以輕善語。貢上財寶。便可得脫。善男子。死王不爾。雖以輕語。貢財珍寶。貢上之  
 亦不得脫。善男子。夫死者於險難處。無有資釋。去處懸遠。而無伴侶。晝夜常行。不知邊際。深遠幽闇。無有燈明。人  
 無門戶。而有處所。雖無痛處。不可療治。往無遮止。到不得脫。無所破壞。見者愁毒。非是惡色。而令人怖。敷在身邊。  
 不可覺知。迦葉。以是等譬。及除無量邊薩喻。當知是死。真爲大苦。迦葉。是名菩薩修行大乘大般涅槃。親觀於死  
 苦。迦葉。云何菩薩住於大乘大般涅槃。親觀愛別離苦。愛別離苦。能爲一切衆苦根本。如說偈言。因愛生憂。因愛生  
 怖。若繫於愛。何憂何怖。愛因緣。故則生憂苦。以憂苦。故則令衆生。生於衰老。愛別離苦。所謂命終。善男子。以別離  
 故。能生種種微細諸苦。今當爲汝分別顯示。善男子。過去之世人壽無量時。世有王名曰善住。其王時爲童子  
 身。太子治事。及登王位。各八萬四千歲。時王頂上生一肉髻。其肉髻柔軟。如兜羅綿。細軟劫貝。漸漸增長。不以爲異。

時三本俱作於

支宋作技次同

法元作去

梅宋作旂

業三本俱作鍊

足滿十月。飽即開剖。生一童子。其形端正奇異。少雙色像。分明人中第一。父王歡喜。字曰頂生。時善住王即以國事委付頂生。棄捨宮殿。妻子眷屬。入山學道。滿八萬四千歲。爾時頂生於十五日。處在高樓沐浴受齋。即時東方有金輪寶。其輪千輻。穀輞具足。不由工匠自然成就。而來應之。頂生大王即作是念。我昔曾聞五通仙說。若刹利王於十五日。處在高樓沐浴受齋。若有金輪千輻不減穀輞具足。不由工匠自然成就。而來應者。當知是王即當得作轉輪聖帝。復作是念。我今當試。即以左手擎此輪寶。右執香爐。右膝著地而發誓言。是金輪寶若實不虛。應如過去轉輪聖王所行道法。作是誓已。是金輪寶飛昇虚空。遍十方已。還來住在頂生左手。爾時頂生心生歡喜。踊躍無量。復作是言。我今定作轉輪聖王。其後不久復有象寶。狀貌端嚴如白蓮花。七支拄地。頂生見已復作是念。我昔曾聞五通仙說。若轉輪王於十五日。處在高樓沐浴受齋。若有象寶。狀貌端嚴如白蓮花。七支拄地。而來應者。當知是王即作是念。我今當試。即擎香爐。右膝著地而發誓言。是白象寶若實不虛。應如過去轉輪聖王所行道法。作是誓已。是白象寶從旦至夕。周遍八方。盡大海際。還住本處。爾時頂生心大歡喜。踊躍無量。復作是言。我今定作轉輪聖王。其後不久次有馬寶。其色紺艷。鬚尾金色。頂生見已復作是念。我昔曾聞五通仙說。若轉輪王於十五日。處在高樓沐浴受齋。若有馬寶。其色紺艷。鬚尾金色。而來應者。當知是王即作是念。我今當試。即執香爐。右膝著地而發誓言。是紺馬寶若實不虛。應如過去轉輪聖王所行道法。作是誓已。是紺馬寶從旦至夕。周遍八方。盡大海際。還住本處。爾時頂生心大歡喜。踊躍無量。復作是言。我今定作轉輪聖王。其後不久復有女寶。形容端正微妙第一。不長不短。不白不黑。身諸毛孔。出栴檀香。口氣香潔如青蓮花。其目遠視。見一由旬耳。聞鼻嗅亦復如是。其舌廣大。出能覆面。形色細薄如赤銅葉。心誠聰哲。有大智慧。於諸衆生。常有輕語。是女以手觸王衣時。即知王身安樂病患。亦知王心所緣之處。爾時頂生復作是念。若有女人能知王心。即是女寶。其後不久於王宮內。自然而有寶摩尼珠。純青琉璃。大如車轂。能於闇中照一由旬。若天降雨。滲如車軸。是珠勢力能作大蓋。覆一由旬。遮此大雨。不令下過。爾時頂生復作是念。若轉輪王得是寶珠。必是聖帝。其後不久有主藏臣自然而出。多饒財寶。巨富無量。庫藏盈溢。無所乏少。報得眼根力能徹見一切地中所有伏藏。隨王

皆以三本俱作  
成已

日同作時

所念皆能辦之。爾時頂生復欲試之。卽共乘船入於大海。告藏臣言。我今欲得珍異之寶。藏臣聞已。卽以兩手撓大海水。時十指頭出十寶藏。以奉聖王。而白王言。大王所須隨意用之。其餘在者。當投大海。爾時頂生心大歡喜。踊躍無量。復作念言。我今定是轉輪聖王。其後不久。有主兵臣自然而出。勇健猛略。策謀第一。善知四兵。若任國者。則現聖王。若不任者。退不令現。未擢伏者。能令擢伏。已擢伏者。力能守護。爾時頂生復作是念。若轉輪王。得是兵寶。當知定是轉輪聖王。爾時頂生轉輪聖帝。告諸大臣。汝等當知。此閻浮提安隱豐樂。我今已有七寶成就。千子具足。更何所爲。諸臣答言。唯然大王。東弗婆提。猶未歸德。王今應往。爾時聖王卽與七寶一切營從。飛空而往。東弗婆提。彼土人民歡喜歸化。復告大臣。我閻浮提及弗婆提。安隱豐樂。人民熾盛。悉來歸化。七寶成就。千子具足。復何所爲。諸臣答言。唯然大王。西瞿陀尼。猶未歸德。爾時聖王復與七寶一切營從。飛空而往。西瞿陀尼。王既至彼。彼土人民亦復歸伏。復告大臣。我閻浮提及弗婆提。此瞿陀尼。安隱豐樂。人民熾盛。皆以歸化。七寶成就。千子具足。復何所爲。諸臣答言。唯然大王。北鬱單越。猶未歸化。爾時聖王復與七寶一切營從。飛空而往。北鬱單越。王既至彼。彼土人民歡喜歸德。復告大臣。我四天下安隱豐樂。人民熾盛。咸已歸德。七寶成就。千子具足。更何所爲。諸臣答言。唯然聖王。三十三天壽命極長。安隱快樂。彼天身形端嚴無比。所居宮殿。牀榻具悉。是七寶。自恃天福。未來歸化。今應往討。令其摧伏。爾時聖王復與七寶一切營從。飛騰虛空。上忉利天。見有一樹。其色青綠。聖王見已。卽問大臣。此是何色。大臣答言。此是波利質多羅樹。忉利諸天。夏三月日。常於其下。嬉樂受樂。又見白色。猶如白雲。復問大臣。彼是何色。大臣答言。是善法堂。忉利諸天。常集其中。論人天事。於是天主釋提桓因。知頂生王已來在外。卽出迎逆。見已。執手。昇善法堂。分座而坐。彼時二王形容相貌等無差別。唯有視胸爲別異耳。是時聖王卽生念言。或今事可退。彼王位卽住其中。爲天王。不善男子。爾時帝釋受持。誦誦大乘經典。開示分別。爲他演說。唯於深義未盡通達。以是誦誦受持。分別爲他。廣說因緣力故。有大威德。善男子。是頂生王於此帝釋生惡心已。卽便墮落。還閻浮提。與所受念人天。離別生大苦惱。復遇惡病。卽便命終。爾時帝釋迦葉佛。是轉輪聖王。則我身是。善男子。當知如是。愛別離者。極爲大苦。善男子。菩薩摩訶薩。尚憶過去。如是等輩。愛別離苦。何況菩薩。住

怖畏三本俱作  
畏怖

則同作爲

於大乘大涅槃經。而當不觀現在之世愛別離苦。善男子。云何菩薩修行大乘大涅槃經。觀怨憎會苦。善男子。是菩薩摩訶薩。觀於地獄畜生餓鬼人。中天上。皆有如是怨憎會苦。譬如人觀牢獄繫閉枷鎖。扭械以爲大苦。菩薩摩訶薩亦復如是。觀於五道一切受生。悉是怨憎會大苦。復次善男子。譬如有人常畏怨家枷鎖。扭械。捨離父母妻子眷屬珍寶產業而遠逃避。善男子。菩薩摩訶薩亦復如是。怖畏生死具足修行六波羅蜜入於涅槃。迦葉。是名菩薩修行大乘大般涅槃。觀怨憎會苦。善男子。云何菩薩修行大乘大般涅槃。觀求不得苦。求者一切盡求。盡求者有二種。一求善法。二求不善法。善法未得苦。惡法未離苦。是則略說五盛陰苦。迦葉。是名苦諦。爾時迦葉菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如佛所說。五盛陰苦是義不然。何以故。如佛往昔苦釋摩男。若色苦者一切衆生。不求色。若有求者則不名苦。如佛告諸比丘。有三種受。苦受樂受不苦不樂受。如佛先爲諸比丘說。若有人能修行善法。則得受樂。又如佛說。於善道中六觸受樂。眼見好色是則爲樂。耳鼻舌身意思好法亦復如是。如佛說。偈持戒則爲樂。身不受衆苦。睡眠得安隱。寤則心歡喜。若受衣食時。誦習而經行。獨處於山林。如是爲最樂。若能於衆生。晝夜常修慈。因是得常樂。以不惱他故。少欲知足樂。多聞分別樂。無著阿羅漢。亦名爲受樂。菩薩摩訶薩。畢竟到彼岸。所作衆事辦。是名爲最樂。世尊。如諸經中所說樂相。其義如是。如佛今說云。何當與此義相應。佛告迦葉。善哉善哉。善男子。善能諮問。如來是義。善男子。一切衆生。於下苦中橫生樂想。是故我今所說苦相。與本不異。迦葉。菩薩白佛言。如佛所說。於下苦中生樂想者。下生下老下病下死。下愛別離。下求不得。下怨憎會。下五盛陰。如是等苦。亦應有樂。世尊。下生者所謂三惡趣。中生者所謂人中。上生者所謂天上。若復有人。作如是問。若於下樂生於苦想。於中樂中生無苦樂想。於上樂中生於樂想。當云何答。世尊。若下苦中生樂想者。未見有人當受千罰。初一下時已生樂想。若不生者。云何說。言於下苦中而生樂想。佛告迦葉。如是如是。如汝所說。以是義故。無有樂想。何以故。猶如彼人當受千罰。受一下已。卽得脫者。是人爾時便生樂想。是故當知。於無樂中妄生樂想。迦葉言。世尊。彼人非以一下生於樂想。以得脫故。而生樂想。迦葉。是故我昔爲釋摩男說。五陰中樂實不虛也。迦葉。有三受三苦。三受者。所謂樂受苦受不

香三未俱作不  
次聞

穀同作車

苦不樂受。三苦者。所謂苦苦行苦壞苦。善男子。苦受者名爲三苦。所謂苦苦行苦壞苦。除二受者。所謂行苦壞苦。善男子。以是因緣。生死之中。實有樂受。菩薩摩訶薩。以苦樂性不相捨離。是故說言一切皆苦。善男子。生死之中。實無有樂。但諸佛菩薩。隨世間說言有樂。迦葉。菩薩白佛言。世尊。諸佛菩薩。若隨俗說是常安否。如佛所說。修善者則受樂報。持戒安樂。身不受苦。乃至衆事已辦。是爲最樂。如是等經所說樂受。是虛妄否。若是虛妄。諸佛世尊。久於無量百千萬億阿僧祇劫。修菩提道。已離妄語。今作是說。其義云何。佛言。善男子。如上所說。諸受樂。傷卽是菩提道之根本。亦能長養阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。先於經中。說是樂相。善男子。譬如世間所須資生。能爲妻因。故名爲樂。所謂女色。乾酒。飲酒。上饌。甘味。渴時得水。寒時遇火。衣服。纓絡。象馬。車乘。奴僮。儻僕。金銀。琉璃。珊瑚。真珠。倉庫。穀米。如是等物。世間所須。能爲樂因。是名爲樂。善男子。如是等物。亦能生苦。因於女人。生男子。苦。憂。愁。悲。泣。乃至斷命。因酒。甘味。乃至倉穀。亦能令人生大憂。惱。以是義故。一切皆苦。無有樂相。善男子。菩薩摩訶薩。於是入苦。解苦。無苦。善男子。一切聲聞。辟支。擔等。不知樂因。爲如是人。於下苦中。說有樂相。唯有菩薩。往於大乘。大般涅槃。乃能知是苦因樂因。

大般涅槃經卷第十一



# 大般涅槃經卷第十二

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 聖行品之一

品目下明有  
第十九三字之  
二宋元俱作中

善男子。云何菩薩摩訶薩住於大乘大般涅槃觀集諦。善男子。菩薩摩訶薩觀此集諦是陰因緣。所謂集者還愛於有。愛有二種。一愛己身。二愛所須。復有二種。未得五欲繫心專求。既求得已堪忍專著。復有三種。欲愛色愛無色愛。復有三種。業因緣愛煩惱因緣愛。苦因緣愛。出家人有四種愛。何等爲四。衣服飲食臥具湯藥。復有五種。貪著五陰。隨諸所須。一切愛著。分別校計。無量無邊。善男子。愛有二種。一者善愛。二不善愛。不善愛者。凡愚之求。善法愛者。諸菩薩求。善法愛者。復有二種。不善與善。求二乘者。名爲不善。求大乘者。是名爲善。善男子。凡夫愛者。名之爲集。不名爲諦。菩薩愛者。名之實諦。不名爲集。何以故。爲度衆生。所以受生。不以愛故而受生也。迦葉菩薩。白佛言。世尊。如佛世尊。於餘經中。爲諸衆生說業爲因緣。或說憍慢。或說六觸。或說無明。爲五盛陰。而作因緣。今以何義說四聖諦。獨以愛性爲五陰因。佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。如汝所說。諸因緣者。非爲非因。但是五陰要因於愛。善男子。譬如大王。若出遊巡。大臣眷屬。悉皆隨從。愛亦如是。隨愛行處。是諸結等。亦復隨行。譬如膩衣。隨有塵著。著則隨住。愛亦如是。隨所愛處。業結亦住。復次善男子。譬如濕地。則能生牙。愛亦如是。能生一切業煩惱牙。善男子。菩薩摩訶薩住。是大乘大般涅槃深觀此愛。凡有九種。一如債有餘。二如羅刹女婦。三如妙花莖有毒蛇纏之。四如惡食。性所不便而強食之。五如姪女。六如摩樓迦子。七如瘡中隨肉。八如暴風。九如彗星。云何名爲如債有餘。善男子。譬如窮人。負他錢財。雖償欲畢。餘未畢故。猶繫在獄。而不得脫。聲聞緣覺。亦復如是。以有愛習之餘氣故。不能得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。是名如債有餘。善男子。云何如羅刹女婦。善男子。譬如如有

債三本俱作責  
下同○蛇下同  
無纏之二字○  
癩宋作息下同

經上三本俱有  
如字○東純同  
作羅家

人得羅刹女納以爲婦。是羅刹女隨所生子。生已便食。食子既盡。復食其夫。善男子。愛羅刹女亦復如是。隨諸衆生。生善根子。隨生隨食。善子既盡。復食衆生。令墮地獄。畜生餓鬼。唯除菩薩。是名如羅刹女婦。善男子。云何如妙花。莖毒蛇纏之。譬如有人性愛好花。不見花莖毒蛇。過患。即便前捉。捉已。蛇螫。螫已。命終。一切凡夫亦復如是。貢五欲花。不見是愛毒蛇。過患。即便受取。卽爲愛蛇之所毒螫。命終。卽墮三惡道中。唯除菩薩。是名如妙花草毒蛇纏之。善男子。云何所不便食而強食之。譬如有人所不便食而強食之。食已。腹痛。患下而死。愛食如是。五道衆生。強食貪著。以是因緣。墮三惡道。唯除菩薩。是名所不便食而強食之。善男子。云何如姪女。譬如愚人與姪女通。而後姪女巧作種種。請媚現親。悉奪是人所有錢財。錢財既盡。便復驅逐。愛之姪女亦復如是。愚人無智。與之交通。而是愛女奪其所有一切善法。善法既盡。驅逐令墮三惡道中。唯除菩薩。是名姪女。善男子。云何如摩樓迦子。譬如摩樓迦子。若鳥食已。隨糞墮地。或因風吹來。在樹下。卽便生長。纏繞東。轉尼拘羅樹。令不增長。遂至枯死。愛摩樓迦子亦復如是。纏縛凡夫。所有善法。不令增長。遂至枯滅。既枯滅已。命與之後。墮三惡道。唯除菩薩。是名如摩樓迦子。善男子。云何如瘡中膿肉。如人久瘡中生肉。其人要當勤心。療治。莫生捨心。若生捨心。膿肉增長。蟲疽復生。以是因緣。卽便命終。凡夫愚人。五陰瘡。亦復如是。愛於其中。而爲膿肉。應當勤心。治愛。膿肉若不治者。命終。卽墮三惡道中。唯除菩薩。是名如瘡中膿肉。善男子。云何如暴風。譬如暴風。能偃山夷。嶽拔於深根。愛欲暴風亦復如是。於父母所。而生惡心。能拔大智。舍利弗等。無上深固。菩提根本。唯除菩薩。是名如暴風。善男子。云何如彗星。譬如彗星。出現天下一切人民。饑饉。病瘦。嬰諸苦惱。愛之彗星亦復如是。能斷一切善根。種子。令凡夫人。三窮饑。饉生。煩惱。病沈。轉生死受種種苦。唯除菩薩。是名如彗星。善男子。菩薩摩訶薩。住於大乘。大般涅槃。觀察愛結。如是九種。善男子。以是義故。諸凡夫人。有苦無諦。聲聞緣覺。有苦有苦諦。而無真實。諸菩薩等。解苦無苦。是故無苦。而有真諦。諸凡夫人。有集無諦。聲聞緣覺。有集有集諦。諸菩薩等。解集無集。是故無集。而有真諦。諸凡夫人。有真諦。聲聞緣覺。有真諦。菩薩摩訶薩。住於大乘。大般涅槃。見滅見滅諦。所謂斷除一切煩惱。若煩惱斷。則名爲常。滅煩惱。火則名寂滅。煩惱滅。故則得受。

正三本俱作禪  
○人同作入

安同作具

八元作入

樂諸佛菩薩求因緣故。故名爲淨。更不復受二十五有故名出世。以出世故故名爲我。常於色聲香味觸等。若男若女若生住滅。若苦若樂不苦不樂。不取相貌故名畢竟寂滅真諦。善男子。菩薩如是住於大乘大般涅槃觀。滅聖諦。善男子。云何菩薩摩訶薩住於大乘大般涅槃觀道聖諦。善男子。譬如閻中因燈得見麤細之物。菩薩摩訶薩亦復如是。住於大乘大般涅槃。因八聖道見一切法。所謂常無常。有爲無爲。有衆生非衆生。物非物。苦樂。我無我。淨不淨。煩惱非煩惱。業非業。實不實。乘非乘。知無知。陀羅驃非陀羅驃。求那非求那。見非見。色非色。道非道。解非解。善男子。菩薩如是住於大乘大般涅槃觀道聖諦。迦葉菩薩白佛言。世尊。若八聖道是道聖諦。義不相應。何以故。如來或說信心爲道。能度諸漏。或時說道不放逸是。諸佛世尊不放逸故。得阿耨多羅三藐三菩提。亦是菩薩助道之法。或時說言精進是道。如告阿難。若有人能勤修精進。則得成就阿耨多羅三藐三菩提。或時說言觀身念處。若有繫心精勤修習是身念處。則得成就阿耨多羅三藐三菩提。或時說言正定爲道。如告大德摩訶迦葉。夫正定者。眞實是道。非不正定而是道也。若入正定。乃能思惟五陰生滅。非不人定能思惟也。或說一法若人修習能淨衆生。滅除一切憂愁苦惱。速得正法。所謂念佛三昧。或復說言。修無常想是名爲道。如告比丘。有能多修無常想者。能得阿耨多羅三藐三菩提。或說空寂阿蘭若處。獨坐思惟。能得速成阿耨多羅三藐三菩提。或時說言爲人演法。是名爲道。若聞法已。疑網即斷。疑網斷已。則得阿耨多羅三藐三菩提。或時說言持戒是道。如告阿難。若有精勤修持禁戒。是人則度生死大苦。或時說言親近善友。是名爲道。如告阿難。若有親近善知識者。則安淨戒。若有衆生能親近我。則得發於阿耨多羅三藐三菩提心。或時說言修慈是道。修學慈者。斷諸煩惱。得不動處。或時說言智慧是道。如佛昔爲波闍波提比丘尼說。姊妹。如諸聲聞以智慧刀。能斷諸流。諸漏煩惱。或時如來說施是道。如佛往昔告波斯匿王。大王當知。我於往昔多行惠施。以是因緣。今日得成阿耨多羅三藐三菩提。世尊。若八聖道是道聖諦者。如是等經。豈非虛妄。若彼諸經非虛妄者。彼中何緣不說八道爲道聖諦。若彼不說如來往昔何故錯謬。然我定知諸佛如來久離錯謬。爾時世尊讚迦葉菩薩。善哉善哉。善男子。汝今欲知菩薩大乘微妙經典。所有祕密故作是問。善男子。如是諸經悉入道聖諦。善男子。如我先說。若有信道如是信道。是信根本。是

特三本俱作持  
○婆元明俱作  
波

鑄三本俱作鑄

八下同無聖字

能佐助菩提之道。是故我說無有錯謬。善男子。如來善知無量方便。欲化衆生。故作如是種種說法。善男子。譬如良醫識諸衆生種種病源。隨其所患而爲合藥。并藥所禁。唯水一種不在禁例。或服薑水。或甘草水。或細辛水。或黑石蜜水。或阿摩勒水。或尼婆羅水。或鉢畫羅水。或服冷水。或服熱水。或蒲萄水。或安石櫛水。善男子。如是良醫善知衆生所患種種藥。難多禁。水不在例。如來亦爾。善知方便於一法相。隨諸衆生分別廣說種種名相。彼諸衆生隨所說受。已修習除斷煩惱。如彼病人隨良醫教所患得除。復次善男子。如有一人善解衆語。在大衆中。是諸大衆熱渴所逼。咸發聲言。我欲飲水。我欲飲水。是人卽時以清冷水隨其種類。說言是水。或言波尼。或言鬱特。或言紫利藍。或言婆利。或言婆耶。或言甘露。或言牛乳。以如是等無量水名爲大衆說。善男子。如來亦爾。以一聖道爲諸聲聞種種演說。從信根等至八聖道。復次善男子。譬如金師以一種金隨意造作種種瓔珞。所謂錯鎖環釧。釧釧天冠臂印。雖有如是差別。不同然不離金。善男子。如來亦爾。以一佛道隨諸衆生種種分別而爲說之。或說一種。所謂諸佛一道無二。復說二種。所謂定慧。復說三種。謂見慧智。復說四種。所謂見道。修道。無學道。佛道。復說五種。所謂信行道。法行道。信解脫道。見到道。身證道。復說六種。所謂須陀洹道。斯陀含道。阿那含道。阿羅漢道。辟支佛道。佛道。復說七種。所謂念覺分。擇法覺分。精進覺分。喜覺分。除覺分。定覺分。捨覺分。復說八種。所謂正見。正思。惟正語。正業。正命。正精進。正念。正定。復說九種。所謂八聖道及信。復說十種。所謂十力。復說十一種。所謂十力。大慈。復說十二種。所謂十力。大慈。大悲。復說十三種。所謂十力。大慈。大悲。念佛三昧。復說十六種。所謂十力。大慈。大悲。念佛三昧。及佛所得三正念處。復說二十道。所謂十力。四無所畏。大慈。大悲。念佛三昧。三正念處。善男子。是道一體。如來昔日爲衆生故。種種分別。復次善男子。譬如一火。因所燃。故得種種名。所謂木火。草火。糠火。炭火。牛馬糞火。善男子。佛道亦爾。一而無二。爲衆生故。種種分別。復次善男子。譬如一識。分別說六。若至於眼。則名眼識。乃至意識。亦復如是。善男子。道亦如一而無二。如來爲化諸衆生故。種種分別。復次善男子。譬如一色。眼所見者。則名爲色。耳所聞者。則名爲聲。鼻所嗅者。則名爲香。舌所嘗者。則名爲味。身所覺者。則名爲觸。善男子。道亦如是一而無二。如來爲欲化衆生故。種種分別。善男子。以是義故。以八聖道分名道聖諦。善男子。是四聖諦。諸佛

葉下三本俱無  
菩薩二字○小  
同作少

聖上同無四字

覺下薩下並同

無智字○諸同

作是

相上同有壞字

世尊次第說之。以是因緣無量衆生得度生死。迦葉菩薩白佛言。世尊。昔佛一時在恒河岸尸首林中。爾時如來取小樹葉告諸比丘。我今手中所捉葉多。一切因地草木葉多。諸比丘言。世尊。一切因地草木葉多不可稱計。如來所捉少不足言。諸比丘。我所覺了一切諸法。如因大地生草木等。爲諸衆生所宣說者。如手中葉。世尊爾時說如是言。如來所了無量諸法。若入四諦則爲已說。若不入者。應有五諦。佛讚迦葉善哉善哉。善男子。汝今所問則能利益安隱快樂無量衆生。善男子。如是諸法悉已攝在四聖諦中。迦葉菩薩復白佛言。如是等法若在四諦。如來何故唱言不說。佛言。善男子。雖復入中猶不名說。何以故。善男子。知四聖諦有二種智。一者中二者上。中者聲聞緣覺智。上者諸佛菩薩智。善男子。知諸陰苦名爲中智。分別諸陰有無量相。悉是諸苦。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。善男子。如是等義我於彼經竟不說之。善男子。知諸入者名之爲門。亦名爲苦。是名中智。分別諸入有無量相。悉是諸苦。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知諸入者名之爲門。亦名爲苦。是名中智。分別諸入有無量相。悉是諸苦。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知受覺相是名中智。分別諸受有無量覺相。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。善男子。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知想取相是名中智。分別是想有無量取相。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知行作相是名中智。分別是行無量作相。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。善男子。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知識分別相是名中智。分別是識無量相。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。善男子。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知愛因緣能生五陰。是名中智。一人起愛無量無邊。聲聞緣覺所不能知。能知一切衆生所起如是等愛。是名上智。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知滅煩惱是名中智。分別煩惱不可稱計。滅亦如是不可稱計。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。如是等義我於彼經亦不說之。善男子。知世諦者是名中智。分別世諦無量無邊不可稱計。非諸聲聞

一上三本俱有  
知字

或下同無復字

炎同作薩

薩同作或

顯宋元俱作薩  
下同

或三本俱作著

緣覺所知。是名上智。如是等義。我於彼經亦不說之。善男子。一切行無常諸法。無我涅槃寂滅。是第一義。是名中智。知第一義。無量無邊。不可稱計。非諸聲聞緣覺所知。是名上智。如是等義。我於彼經亦不說之。爾時文殊師利菩薩白佛言。世尊。所說世諦第一義諦。其義云何。世尊。第一義中有世諦。不世諦之中。有第一義。不如其有者。卽是一諦。如其無者。將非如來虛妄說耶。善男子。世諦者。卽第一義諦。世尊。若爾者。則無二諦。佛言。善男子。有善方便。隨順衆生。說有二諦。善男子。若隨言說。則有二種。一者世法。二者出世法。善男子。如出世人之所知者。名第一義諦。世人知者。名爲世諦。善男子。五陰和合。稱言某甲。凡夫衆生。隨其所稱。是名世諦。解陰無有某甲名字。離陰亦無某甲名字。出世之人。如其性相。而能知之。名第一義諦。復次善男子。或復有法。有名有實。或復有法。有名無實。善男子。有名無實。知卽是世諦。有名有實。而是第一義諦。善男子。如我衆生。壽命知見。養育丈夫。作者受者。熱時之炎。軋闍婆城。龜毛。兔角。旋火之輪。諸陰界入。是名世諦。苦集滅道。名第一義諦。善男子。世法有五種。一者名世。二者句世。三者縛世。四者法世。五者執世。善男子。云何名世。男女瓶衣車乘屋舍。如是等物。是名名世。云何句世。四句一偈。如是等偈。是名句世。云何縛世。捲合繫結束縛合掌。是名縛世。云何法世。如鳴椎集僧。嚴鼓。誦兵吹。只知時。是名法世。云何執著世。如望遠人有染衣者。生想執著。言是沙門。非婆羅門。見有結繩。橫佩身上。便生念言。是婆羅門。非沙門也。是名執著世。善男子。如是名爲五種世法。善男子。若有衆生。於如是等五種世法。心無顛倒。如實而知。是名第一義諦。復次善男子。若燒若割。若死若壞。是名世諦。無燒無割。無死無壞。是名第一義諦。復次善男子。有八苦相。名爲世諦。無生無老無病無死。無愛別離。無怨憎會。無求不得。無五盛陰。是名第一義諦。復次善男子。譬如一人。多有所能。若其走時。則名走者。若收刈時。復名刈者。或作飲食。名作食者。若治材木。則名工匠。鑿金銀時。言金銀師。如是一人。有多名字。法亦如是。其實是一。而有多名。依因父母和合而生。名爲世諦。十二因緣和合生者。名第一義諦。文殊師利菩薩白佛言。世尊。所言實諦。其義云何。佛言。善男子。言實諦者。名曰眞法。善男子。若法非眞。不名實諦。善男子。實諦者。無顛倒。無顛倒者。乃名實諦。善男子。實諦者。無有虛妄。若有虛妄。不名實諦。善男子。實諦者。名曰大乘。非大乘者。不名實諦。善男子。實諦者。是佛所說。非魔所說。若是魔說。非佛說。

無元明俱作爲

如三本俱作法  
名同作爲

者不名實諦。善男子。實諦者一道清淨無有二也。善男子。有常有樂。有我。有淨。是則名爲實諦之義。文殊師利白。佛言。世尊。若以真實爲實諦者。真實之法。卽是如來虛空佛性。若如是者。如來虛空及與佛性。無有差別。佛告文殊師利。有苦有諦。有實。有集。有諦。有實。有滅。有諦。有實。有道。有諦。有實。善男子。如來非苦非諦。是實。虛空非苦非諦。是實。佛性非苦非諦。是實。文殊師利。所言苦者。爲無常相。是可斷相。是爲實諦。如來之性。非苦非無常。非可斷相。是故爲實。虛空佛性亦復如是。復次善男子。所言集者。能令五陰和合而生。亦名爲苦。亦名無常。是可斷相。是爲實諦。善男子。如來非是集性。非是陰因。非可斷相。是故爲實。虛空佛性亦復如是。善男子。所言滅者。名煩惱滅。亦常無常。二乘所得名曰無常。諸佛所得。是則名常。亦名證法。是爲實諦。善男子。如來之性。不名爲滅。能滅煩惱。非常無常。不名證知。常住無變。是故爲實。虛空佛性亦復如是。善男子。道者。能斷煩惱。亦常無常。是可修法。是名實諦。如來非道。能斷煩惱。非常無常。非可修法。常住不變。是故爲實。虛空佛性亦復如是。復次善男子。言真實者。卽是如來。如來者。卽是真實。真實者。卽是虛空。虛空者。卽是真實。真實者。卽是佛性。佛性者。卽是真實。文殊師利。有苦有苦。因有苦盡。有苦對。如來非苦。乃至非對。是故爲實。不名爲諦。虛空佛性亦復如是。苦者。有爲有漏無樂。如來非有爲。非有漏。湛然安樂。是實非諦。文殊師利白。佛言。世尊。如佛所說。不顛倒者。名爲實諦。若爾者。四諦之中。有四倒。不如其有者。云何說言。無有顛倒。名爲實諦。一切顛倒。不名爲實。佛告文殊師利。一切顛倒。皆入苦諦。如諸衆生。有顛倒心。名爲顛倒。善男子。譬如有人。不受父母尊長教勅。雖受不能隨順修行。如是人等。名爲顛倒。如是顛倒。非不是苦。卽是苦也。文殊師利言。如佛所說。不虛妄者。卽是實諦。若爾者。當知虛妄。則非實諦。佛言。善男子。一切虛妄。皆入苦諦。如有衆生。欺誑於他。以是因緣。墮於地獄。畜生。餓鬼。如是等法。名爲虛妄。如是虛妄。非不是苦。卽是苦也。聲聞緣覺。諸佛世尊。遠離不行。故名虛妄。如是虛妄。諸佛二乘。所斷除。故名實諦。文殊師利言。如佛所說。大乘是實諦者。當知聲聞辟支佛乘。則爲不實。佛言。文殊師利。彼二乘者。亦實不實。聲聞緣覺。斷諸煩惱。則名爲實。無常不住。是變易法。名爲不實。文殊師利言。如佛所說。若佛所說。名爲實者。當知魔說。則爲不實。世尊。如魔所說。聖諦攝不。佛言。文殊師利。魔所說者。二諦所攝。所謂苦集。凡是一切非法。非律。不能令人而得利。

悉皆三本俱作  
皆悉

報下同無者字

必上同無名字  
者同作故  
末同作棘下同

益終日宣說亦無有人見苦斷集證滅修道。是名虛妄。如是虛妄名為魔說。文殊師利言。如佛所說。一道清淨無有二有。諸外道等亦復說言。我有一道清淨無二。若言一道是實諦者。與彼外道有何差別。若無差別。不關說言。一道清淨。佛言善男子。諸外道等有苦集諦無滅道諦。於非滅中而生滅想。於非道中而生道想。於非果中而生果想。於非因中而生因想。以是義故。彼無一道清淨無二。文殊師利言。如佛所說。有常有我有淨是實義者。諸外道等應有實諦。佛法中無。何以故。諸外道輩亦復說言。諸行是常。云何是常。可意不可意。諸業報等受不失故。可意者名十善報。不可意者十不善報。若言諸行悉皆無常而作業者。於此已滅。誰復於彼受果報乎。以是義故。諸行是常。殺生因緣故名爲常。世尊。若言諸行悉無常者。能殺可殺二俱無常。若無常者。誰於地獄而受罪報。若言定有地獄受報者。當知諸行實非無常。世尊。繫心專念亦名爲常。所謂十年所念。乃至百年亦不忘失。是故爲常。若無常者。本所見事誰憶誰念。以是因緣。一切諸行非無常也。世尊。一切憶想亦名爲常。有人先見他人手足頭項等。相後時若見。便遺識之。若無常者。不相應滅。世尊。諸所作業。以久修習。若從初學。或經三年。或經五年。然後善知故名爲常。世尊。算數之法。從一至二。從二至三。乃至百千。若無常者。初一應滅。初一若滅。誰復至二。如是常一終無有二。以一不滅。故得至二。乃至百千。是故爲常。世尊。如讀誦法誦一阿含。至二阿含。乃至三四阿含。如其無常。所可讀誦終不至四。以是讀誦增長因緣。故名爲常。世尊。瓶衣車乘。如人負債。大地形相。山河樹林。草木草葉。衆生治病。皆悉是常。亦復如是。世尊。一切外道皆作是說。諸行是常。若是常者。卽是實諦。世尊。有諸外道復言有樂。云何知耶。受者定得可意報故。世尊。凡受樂者。必定得之。所謂大梵天王。自在天。釋提桓因。毗紐天。及諸人天。以是義故名必定有樂。世尊。有諸外道復言有樂。能令衆生求生求望故。飢者求食。渴者求飲。寒者求溫。熱者求涼。燥者求息。病者求差。欲者求色。若無樂者。彼何緣求。以有求者。故知有樂。世尊。有諸外道復作是言。施能得樂。世間之人。好施沙門。諸婆羅門。貧窮困苦。衣服飲食。臥具醫藥。象馬車乘。末香塗香。衆花屋宅。依止燈明。作如是等種種惠施。爲我後世受可意報。是故當知決定有樂。世尊。有諸外道復作是言。以因緣故。當知有樂。所謂受樂者。有因緣故名爲樂。若無樂者。何得因緣。如無免角。則無因緣。有樂因緣。則知有樂。世尊。有諸外道復



是故三本俱作  
以是

礙同作閤

淨有我元明俱  
作我有淨

作是言。上中下故當知有樂。下受樂者釋提桓因。中受樂者大梵天王。上受樂者大自在天。以有如是上中下故。當知有樂。世尊。有諸外道復言有淨。何以故。若無淨者不應起欲。若起欲者當知有淨。又復說言。金銀珍寶琉璃。頗梨車渠。馬瑙珊瑚。真珠璧玉。珂貝。流泉浴池。飲食衣服。華香末香。塗香。燈燭之明。如是等物。悉是淨法。復次有淨。謂五陰者。即是淨器。盛諸淨物。所謂人天諸仙。阿羅漢。辟支佛。菩薩諸佛。以是義故名之爲淨。世尊。有諸外道復言有我。有所覩見。能造作故。譬如有人入陶師家。雖復不見陶師之身。以見輪繩。定知其家。必是陶師。我亦如是。眼見色已。必知有我。若無我者。誰能見色。聞聲。乃至觸法。亦復如是。復次有我云。何得知。因相故知。何等爲相。喘息視胸。壽命役心。受諸苦樂。貪求瞋恚。如是等法。悉是我相。是故當知必定有我。復次有我。能別味故。有人食果。見已知味。是故當知必定有我。復次有我云。何知耶。執作業故。執罽能刈。執斧能斫。執瓶盛水。執車能御。如是等事。我執能作。是故當知必定有我。復次有我云。何知耶。卽於生時。欲得乳哺。乘宿習故。是故當知必定有我。復次有我云。何知耶。和合利益他衆生故。譬如瓶衣車乘。田宅山林樹木。象馬牛羊。如是等物。若和合者。則有利益。此內五陰。亦復如是。眼等諸根。有和合故。則利益我。是故當知必定有我。復次有我云。何知耶。有遮法故。如有物故。則有遮礙。物若無者。則無有遮。若有遮者。則知有我。是故當知必定有我。復次有我云。何知耶。伴非伴故。親與非親。非是伴侶。正法邪法。亦非伴侶。智與非智。亦非伴侶。沙門非沙門。婆羅門非婆羅門。子非子。晝非晝。夜非夜。我非我。如是等法。爲伴非伴。是故當知必定有我。世尊。諸外道等種種說。有常樂我淨。當知定有常樂我淨。世尊。以是義故。諸外道等亦得說言。我有真諦。佛言善男子。若有沙門婆羅門。有常有樂。有淨有我者。是非沙門非婆羅門。何以故。迷於生死。離一切智大導師故。如是沙門婆羅門等。沉沒諸欲。善法羸損故。是諸外道繫在貪欲。瞋恚癡獄。堪忍愛樂故。是諸外道雖知業果。自作自受。而猶不能遠離惡法。是諸外道非是正法。正命自活。何以故。無智慧火不能消故。是諸外道雖欲貪著上妙五欲。貪於善法不勤修故。是諸外道雖欲往至正解脫中。而持戒足不成。是諸外道雖欲求樂。而不能求樂。因緣故。是諸外道雖復憎惡一切諸苦。然其所行未能遠離諸苦。因緣。是諸外道雖爲四大毒蛇所纏。猶行放逸。不能謹慎。是諸外道無明所覆。遠離善友。樂在三界。無常熾然大。

火之中而不能出。是諸外道遇諸煩惱難愈之病。而復不求大智良醫。是諸外道方於未來。當涉無邊險遠之路。而不知以善法資糧。而自莊嚴。是諸外道常爲淫欲災毒所害。而反抱持五欲雷毒。是諸外道曠志熾盛。而復反更視近惡友。是諸外道常爲無明之所覆蔽。而反推求邪惡之法。是諸外道常爲邪見之所誑惑。而反於中生親善想。是諸外道恣食甘果而種苦子。是諸外道已處煩惱關室之中。而反遠離大智炬明。是諸外道患煩惱渴。而復反飲諸欲鹹水。是諸外道漂流生死無邊大河。而復遠離無上船師。是諸外道迷惑顛倒。言諸行常。諸行若常。無有是處。

反三本俱作又  
○顯同作諸

大般涅槃經卷第十二

# 大般涅槃經卷第十三

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

品目品下明有  
第十九三字宋

元俱無之字○

下明作三

## 聖行品之下

善男子。我觀諸行悉皆無常。云何知耶。以因緣故。若有諸法從緣生者。則知無常。是諸外道無有一法不從緣生。善男子。佛性無生無滅無去無來。非過去非未來非現在。非因所作非無因作。非作非作者。非相非無相。非有名非無名。非名非色。非長非短。非陰界入之所攝持。是故名常。善男子。佛性即是如來。如來即是法。法即是常。善男子。常者即是如來。如來即是僧。僧即是常。以是義故。從因生法不名為常。是諸外道無有一法不從因生。善男子。是諸外道不見佛性如來及法。是故外道所可言說。悉是妄語。無有真諦。諸凡夫人先見瓶衣車乘舍宅城郭河水山林男女象馬牛羊。後見相似。便言是常。當知其實非是常也。善男子。一切有為皆是無常。虛空無為是故為常。佛性無為是故為常。虛空者即是佛性。佛性者即是如來。如來者即是無為。無為者即是常。常者即是法。法者即是僧。僧即無為。無為者即是常。善男子。有為之法。凡有二種。色法非色法。非色法者。心心數法。色法者。地水火風。善男子。心名無常。何以故。性是攀緣。相應分別故。善男子。眼識性異。乃至意識性異。是故無常。善男子。色境界異。乃至法境界異。是故無常。善男子。眼識相應異。乃至意識相應異。是故無常。善男子。心若常者。眼識應獨緣一切法。善男子。若眼識異。乃至意識異。則知無常。以法相似。念念生滅。凡夫見已。計之為常。善男子。諸因緣相可破壞故。亦名無常。所謂因眼因色。因明因思。惟生於眼識。耳識生時。所因各異。非眼識因緣。乃至意識異。如是復次善男子。壞諸行因緣。異故。心名無常。所謂修無常心異。修苦空無我心異。心若常者。應當修無常。尚不得觀苦空無我。況復得觀常樂我淨。以是義故。外道法中不能攝取常樂我淨。善男子。當知心法必定無常。復次善男子。

計元作謂

緣下三本俱無  
異字○我淨同  
作淨我下同

聖行品之下

一四五

善同作道

善同作之天同

施明作龜

有三本俱作謂

牙對作芽

智三本俱作知

先同作上

可折同作打可

裂

便三本俱作復

以下同無有字

心性異故名爲無常。所謂聲聞心性異、緣覺心性異、諸佛心性異。一切外道心有三種：一者出家心、二者在家心、三者在家遠離心、樂相應心異、苦相應心異、不苦不樂相應心異、貪欲相應心異、瞋恚相應心異、愚癡相應心異。一切外道心相亦異。所謂愚癡相應心異、疑惑相應心異、邪見相應心異、進止威儀其心亦異。善男子、心若常者亦復不能分別諸色。所謂青黃赤白紫色。善男子、心若常者諸憶念法不應忘失。善男子、心若常者凡所讀誦不應增長。復次善男子、心若常者不應說言已作今作當作。若有已作今作當作當知是心必定無常。善男子、心若常者則無怨親非怨非親。心若常者則不應言我物他物若死若生。心若常者雖有所作不應增長。善男子、以是義故當知心性各各別異。有別異故當知無常。善男子、我今於此非色法中演說無常其義已顯。復當爲汝說色無常。是色無常本無有生。生已滅故。內身處胎歌羅邏時本無有生。生已變故。外諸芽莖本亦無生。生已變故。是故當知一切色法悉皆無常。善男子、所有內色隨時而變。歌羅邏時異、安浮陀時異、伽那時異、閉手時異、諸飽時異。初生時異、嬰孩時異、童子時異。乃至老時各各變異。所有外色亦復如是。芽異、莖異、枝異、葉異、花果異。復次善男子、內味亦異。歌羅邏時乃至老時各各變異。外味亦爾。芽莖枝葉花果味異。歌羅邏時力異。乃至老時力異。歌羅邏時狀貌異。乃至老時狀貌亦異。歌羅邏時果報異。乃至老時果報亦異。歌羅邏時名字異。乃至老時名字亦異。所謂內色壞已還合故知無常。外諸樹木亦壞已還合故知無常。次第漸生故知無常。次第生歌羅邏時乃至老時。次第生牙乃至果子故知無常。諸色可滅故知無常。歌羅邏滅時異。乃至老滅時異。乃至老時異。乃至老時異。故知無常。凡夫無智見相似生計以爲常。以是義故名曰無常。若無常即是苦。若苦即是不淨。善男子、我聞迦葉先明是事。於彼已答。復次善男子、諸行無我。善男子、總一切法謂色非色、色非我也。何以故。可破可壞可裂可折。生增長故。我者不可破壞。裂折生長。以是義故知色非我。非色之法亦復非我。何以故。因緣生故。善男子、若諸外道以專念故知有我者。專念之性實非我也。若以專念爲我性者。過去之事則有忘失。有忘失故定知無我。善男子、若諸外道以憶想故知有我者。無憶想故定知無我。如說見人手有六指。即便問言。我先何處共相見耶。若有我者不應復問。以和問故定知無我。善男子、若諸外道以有造故知有我者。善男子、以有造故定知無我。如

知宋作瘞元明  
俱作瘞○糞穢  
三本俱作不淨

臥同作墮

猶同作如○末  
同作糝下同○  
猶如雨雪同作  
如雪二字

更轉於同作復  
更轉

卽下三本俱無  
是字○等亦復  
如同作亦如二  
字

言調達終不發言非調達也。我亦如是。若定是我終不遮我。以遮我故定知無我。若以遮故知有我者。汝今不遮定應無我。善男子。若諸外道以伴非伴知有我者。以無伴故應無有我。有法無伴。所謂如來虛空佛性。我亦如是。實無有伴。以是義故定知無我。復次善男子。若諸外道以名字故知有我者。無我法中亦有我名。如貧賤人名字富貴。如言我死。若我死者我則殺我。而我實不可殺。假名殺我。亦如短人名爲長者。以是義故定知無我。復次善男子。若諸外道以生已求乳知有我者。善男子。若有我者一切嬰兒。不應執持糞穢火蛇毒藥。以是義故定知無我。復次善男子。一切衆生於三法中悉有等智。所謂姪欲飲食恐怖。是故無我。復次善男子。若諸外道以相貌故知有我者。善男子。相故無我。無相故亦無我。若人睡時不能進止俯仰視胸。不覺苦樂。不應有我。若以進止俯仰視胸知有我者。機關木人亦應有我。善男子。如來亦爾。不進不止不俯不仰不視不胸。不苦不樂不貪不恚不癡不行。如來如是真實有我。復次善男子。若諸外道以見他食果口中生涎知有我者。善男子。以憶念故見則生涎。涎非我也。我亦非涎。非喜非悲非哭非笑。非臥非起非飢非飽。以是義故定知無我。善男子。是諸外道癡如小兒無慧方便。不能了達常與無常苦樂淨不淨我無我。壽命非壽命衆生非衆生。實非實有非有。於佛法中取少許分。虛妄計有常樂我淨。而實不知常樂我淨。如生盲人。不識乳色。便問他言。乳色何似。他人答言。色白如貝。盲人復問。是乳色者如貝聲耶。答言不也。復問。貝色爲何似耶。答言。猶稻米末。盲人復問。乳色柔軟如稻米末耶。稻米末者復何所似。答言。猶如雨雪。盲人復言。彼稻米末冷如雪耶。雪復何似。答言。猶如白鶴。是生盲人雖聞如是四種譬喻。終不能得識乳真色。是諸外道亦復如是。終不能識常樂我淨。善男子。以是義故。我佛法中有真實諦。非於外道。文殊師利白佛言。希有世尊。如來於今臨般涅槃。方更轉於無上法輪。乃作如是分別真諦。佛告文殊師利。汝今云何故於如來生涅槃想。善男子。如來實是常住不變不般涅槃。善男子。若有計我是佛。我成阿耨多羅三藐三菩提。我卽是法。法是我所。我卽是道道是我所。我卽世尊世尊卽是我所。我卽聲聞聲聞卽是我所。我能說法令他聽受。我轉法輪餘人不能。如來終不作如是計。是故如來不轉法輪。善男子。若有人作如是妄計。我卽是眼。眼卽是我所。耳鼻舌身意亦復如是。我卽是色。色是我所。乃至法亦如是。我卽是地。地卽是我所。水火風等

有人同作人計

便同作更口於  
同作上

蜜下則有和合  
得名為見善男  
子如來亦爾因

六波羅蜜十八  
字○提下同無  
之字○牛養同  
作秋草天爾○  
兼同作讚

因地乃至時十  
二字同作及地  
水火風沃壤時  
第九字○芽同  
作芽

二下同有者字

亦復如是善男子若有人言我即是信信是我所我是多聞多聞是我所我是檀波羅蜜檀波羅蜜是我所我是尸波羅蜜尸波羅蜜是我所我是鬘提波羅蜜鬘提波羅蜜是我所我是毗梨耶波羅蜜毗梨耶波羅蜜是我所我是四念處四念處是我所四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分亦復如是善男子如來終不作如是計是故加來不轉法輪善男子若言常住無有變易云何說言佛轉法輪是故汝今不應說言如來方便轉於法輪善男子譬如因眼綠色緣明緣思惟因緣和合得生眼識善男子眼不念言我能生識色乃至思惟終不念言我生眼識眼識亦復不念言我能自生善男子如是等法因緣和合得名為見善男子如來亦爾因六波羅蜜三十七助菩提之法覺了諸法復因咽喉舌齒唇口言語音聲為橋陳如初始說法名轉法輪以是義故如來不名轉法輪也善男子若不轉者即名為法法即如來善男子譬如因鑿因鑽因手因乾牛糞而得生火燒亦不言我能生火鑽手作糞各不念言我能生火火亦不言我能自生如來亦爾因六波羅蜜乃至橋陳如名轉法輪如來亦復不念言我轉法輪善男子若不生者是則名為轉正法輪是轉法輪即名如來善男子譬如因醋因水因攢因瓶因罈因人手捉而得出酥酪不念言我能出酥乃至人手亦不念言我能出酥酥亦不言我能自出衆緣和合故得出酥如來亦爾終不念言我轉法輪善男子若不出者是則名為轉正法輪是轉法輪即是如來善男子譬如因子因地因水因火因風因黃因時因人作業而芽得生善男子子亦不言我能生牙乃至作業亦不念言我能生牙牙亦不言我能自生如來亦爾終不念言我轉法輪善男子若不作者是則名為轉正法輪是轉法輪即是如來善男子譬如因鼓因空因皮因人因桴和合出聲鼓不念言我能出聲乃至桴亦如是聲亦不言我能自生善男子如來亦爾終不念言我轉法輪善男子轉法輪者名為不作不作者即轉法輪轉法輪者即是如來善男子轉法輪者乃是諸佛世尊境界非諸聲聞緣覺所知善男子虛空非生非出非作非造非有為法如來亦爾非生非出非作非造非有為法如來性佛性亦爾非生非出非作非造非有為法善男子諸佛世尊語有二種一者世語二出世語善男子如來為諸聲聞緣覺說於世語為諸菩薩說出世語善男子是諸大衆復有二種一者求小乘

捺三本俱作奈  
下同

此下同無間拘  
尸那四字下同

說上同有演字  
○說同作如寶  
演暢四字○於  
元明俱作于

上下三本俱作  
下上

修元明俱作脩

二者求大乘。我於昔日波羅捺城爲諸聲聞轉于法輪。今始於此拘尸那城爲諸菩薩轉大法輪。次復善男子。復有二人。中根上根爲中根人於波羅捺轉於法輪。爲上根人人中象王迦葉菩薩等。今於此間拘尸那城轉大法輪。善男子。極下根者如來終不爲轉法輪。極下根者卽一闍提。復次善男子。求佛道者復有二種。一中精進。二上精進。於波羅捺爲中精進轉於法輪。今於此間拘尸那城爲上精進轉大法輪。復次善男子。我昔於彼波羅捺城初轉法輪。八萬天人得須陀洹果。今於此間拘尸那城。八十萬億人不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。復次善男子。波羅捺城大梵天王稽首請我轉於法輪。今於此間拘尸那城。迦葉菩薩稽首請我轉大法輪。復次善男子。我昔於彼波羅捺城轉法輪時。說無常苦空無我。今於此間拘尸那城轉法輪時。說常樂我淨。復次善男子。我昔於彼波羅捺城轉法輪時。所出音聲聞于梵天。如來今於拘尸那城轉法輪時。所出音聲遍於東方二十恒河沙等諸佛世界。南西北方四維上下亦復如是。復次善男子。諸佛世尊凡有所說。皆悉名爲轉法輪也。善男子。譬如聖王所有輪寶未降伏者能令降伏。已降伏者能令安隱。善男子。諸佛世尊凡所說法亦復如是。無量煩惱未調伏者能令調伏。已調伏者令生善根。善男子。譬如聖王所有輪寶則能消滅一切怨賊。如來演法亦復如是。能令一切諸煩惱賊皆悉寂靜。復次善男子。譬如聖王所有輪寶上下迴轉。如來說法亦復如是。能令下趣諸惡衆生上生人天乃至佛道。善男子。是故汝今不應讚言如來於此更轉法輪。爾時文殊師利白佛言。世尊。我於此義非爲不知。所以問者。爲欲利益諸衆生故。世尊。我已久知轉法輪者實是諸佛如來境界。非是聲聞緣覺所及。爾時世尊告迦葉菩薩。善男子。是名菩薩住於大乘大涅槃經所行聖行。迦葉菩薩白佛言。世尊。復以何義名爲聖行。善男子。聖名諸佛世尊。以是義故名爲聖行。世尊。若是諸佛之所行者。則非聲聞緣覺菩薩所能修行。善男子。是諸世尊安住於此大般涅槃。而作如是開示分別演說其義。以是義故名曰聖行。聲聞緣覺及諸菩薩。如是聞已則能奉行。故名聖行。善男子。是菩薩摩訶薩得是行已。則得住於無所畏地。善男子。若有菩薩得住如是無所畏地。則不復畏貪恚愚癡生老病死。亦復不畏惡道地獄畜生餓鬼。善男子。惡有二種。一者阿修羅。二者人中。人中有三種惡。一者一闍提。二者誹謗方等經典。三者四犯重禁。善男子。住是池中諸菩薩等。終不畏墮。如是惡中亦復

修三本俱作修

下同○爰同作

漢夾同

華同作術

礙同作置下同

欲同作能

住上同無得字

○地下同有看

字

往而回作轉往

曰同作住

不畏沙門婆羅門外道邪見天魔沒句亦復不畏受二十五有是故此地名無所畏善男子菩薩摩訶薩住無畏地得二十五三昧壞二十五有善男子得無垢三昧能壞地獄有得無退三昧能壞畜生有得心樂三昧能壞餓鬼有得歡喜三昧能壞阿修羅有得日光三昧能斷弗婆提有得月光三昧能斷瞿耶尼有得熱炎三昧能斷羣單越有得如幻三昧能斷閻浮提有得一切法不動三昧能斷四天處有得難伏三昧能斷三十三天處有得龍意三昧能斷炎摩天有得青色三昧能斷兜率天有得黃色三昧能斷化樂天有得赤色三昧能斷他化自在天有得白色三昧能斷初禪有得種種三昧能斷大梵王有得雙三昧能斷二禪有得雷音三昧能斷三禪有得樹雨三昧能斷四禪有得如虛空三昧能斷無想有得照鏡三昧能斷淨居阿那含有得無礙三昧能斷空處有得常三昧能斷諸處有得樂三昧能斷不用處有得我三昧能斷非想非非想處有善男子是名菩薩得二十五三昧斷二十五有善男子如是二十五三昧名諸三昧王善男子菩薩摩訶薩入如是等諸三昧王若欲吹壞須彌山王隨意即能欲知三千大千世界所有衆生心之所念亦悉能知欲以三千大千世界所有衆生內於己身一毛孔中隨意即能亦令衆生無迫迫想若欲化作無量衆生悉令充滿三千大千世界中者亦能隨意欲分一身以爲多身復合多身以爲一身雖作如是心無所著猶如蓮花善男子菩薩摩訶薩得入如是三昧王已即得住於自在之地菩薩得住是自在地得自在力隨欲生處即得往生善男子譬如聖王領四天下隨意所行無能障礙菩薩摩訶薩亦復如是一切生處若欲生者隨意往生善男子菩薩摩訶薩若見地獄一切衆生有可化令住善根者菩薩即往而生其中菩薩雖生非本樂果菩薩摩訶薩住在地力因緣故而生其中善男子菩薩摩訶薩雖在地獄不受熾然碎身等苦善男子菩薩摩訶薩所可成就如是功德無量無邊百千萬億尚不可說何況諸佛所有功德而當可說爾時衆中有一菩薩名曰無垢藏王有大威德成就神通得大總持三昧具足得無所畏即從座起偏袒右肩右膝著地長跪合掌白佛言世尊如佛所說諸佛菩薩所可成就功德智慧無量無邊百千萬億實不可說我意猶謂故不如是大乘經典何以故因是大乘方等經力故能出生諸佛世尊阿耨多羅三藐三菩提時佛讚言善哉善哉善男子如是如是如汝所說是諸大乘方等經典雖復成就無量功德欲比是經



萬下同無億字  
出下三本俱無  
生字

而隨同作隨順  
○我當爲其而  
同作爲作二字  
○當同作復○  
般涅槃同作涅槃經○大乘同  
作方等○躬當  
同作當躬○受  
同作愛○諸乃  
至得七字同作  
大菩薩前四字  
○過去之世同  
作乃昔過去○  
禽同作羣○苦  
乃至等九字同  
作難行苦行時  
彼帝釋八字○  
人下明有等字  
○共三本俱作  
各○以同作已  
○諸同作謂

不得爲喻。百倍千倍百千萬億倍。乃至算數譬喻所不能及。善男子。譬如從牛出乳。從乳出酪。從酪出生酥。從生酥出熟酥。從熟酥出醍醐。醍醐最上。若有服者。衆病皆除。所有諸藥。悉入其中。善男子。佛亦如是。從佛出生十二部經。從十二部經出修多羅。從修多羅出方等經。從方等經出般若波羅蜜。從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐。言醍醐者。喻於佛性。佛性者。即是如來。善男子。以是義故。說言如來。所有功德。無量無邊。不可稱計。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所讚大涅槃經。猶如醍醐最上最妙。若有能服衆病悉除。一切諸藥。悉入其中。我聞是已。竊復思念。若有不能聽受是經。當知是人爲大愚癡。無有善心。世尊。我於今者。實能堪忍。剝皮爲紙。刺血爲墨。以髓爲水。拚骨爲筆。書寫如是。大涅槃經。書已讀誦。令其通利。然後爲人廣說其義。世尊。若有衆生。貪著財物。我當施財。然後以是大涅槃經。勸之令讀。若尊貴者。先以愛語。而隨其意。然後漸當以是大乘大涅槃經。勸之令讀。若凡庶者。當以威勢。逼之令讀。若懦弱者。我當爲其。而作僕使。隨順其意。令其歡喜。然後當以大般涅槃。而教導之。若有誹謗大乘經者。當以勢力。摧之令伏。既摧伏已。然後勸令讀大涅槃。若有愛樂大乘經者。我躬當往恭敬供養。尊重讚歎。爾時佛讚迦葉菩薩善哉善哉。汝甚愛樂大乘經典。貪大乘經。受大乘經。味大乘經。信敬尊重。供養大乘。善男子。汝今以此善心。因緣。當得超越無量無邊。恒河沙等諸大菩薩。在前得成阿耨多羅三藐三菩提。汝亦不久復當如我。廣爲大衆演說。如是大般涅槃。如來佛性。諸佛所說祕密之藏。善男子。過去之世。佛日未出。我於爾時。作婆羅門。修菩薩行。悉能通達一切外道。所有經論。修寂滅行。具足威儀。其心清淨。不爲外來。能生欲想之所破壞。滅瞋恚火。受持常樂我淨之法。周遍求索大乘經典。乃至不聞方等名字。我於爾時。住於雪山。其山清淨。流泉浴池。樹林藥木。充滿其地。處處石間。有清流。水多諸香花。周遍嚴飾。衆鳥禽獸。不可稱計。甘果滋繁。種種難計。復有無量藕根。甘根。青木。香根。我於爾時。獨處其中。唯食諸果。食已。繫心思惟坐禪。經無量歲。亦不聞有如來出世大乘經名。善男子。我修如是苦難行時。釋提桓因等諸天人。心大驚怪。卽共集會。各各相謂。而說偈言。

各共相指示 清淨雪山中 寂靜離欲主 功德莊嚴王 以離貪瞋慢 永斷諸愚癡 口初未曾說 麤惡等語言

聖行品之下

爾時衆中有一天子名曰歡喜。復說偈言

如是離欲人 清淨勤精進 將不求帝釋 及以諸天耶 若是求道者 修行諸苦行 是人多欲求

帝釋所坐處

爾時復有一仙天子。即爲帝釋而說偈言

天主僑尸迦 不應生此虛 外道修苦行 何必求帝處

此三本俱作是

說是偈已。復作是言。僑尸迦。世有大士。爲衆生故。不貪己身。爲欲利益諸衆生故。而修種種無量苦行。如是之人。見生死中。諸過咎故。設見珍寶滿此大地。諸山大海。不生貪著。如視涕唾。如是大士。棄捨財寶。所愛妻子。頭目。髓腦。手足。支節。所居舍宅。象馬車乘。奴婢僮僕。亦不願求生於天上。唯求欲令一切衆生。得受快樂。如我所解。如是大士。清淨無染。衆結永盡。唯欲求於阿耨多羅三藐三菩提。釋桓因復作是言。如汝言者。是人則爲攝取一切

憍令一切衆生  
同作願一切三  
字○求於同作

志求○諸同作  
梵○是同作著

○百千諸衆生  
等發於同作衆

生發三字

修於同作專修  
○驗通同作通

檢○能同作有

少同作鮮

行下同無者字

桓因。自變其身。作羅刹像。形甚可畏。下至雪山。去其不遠。而便立住。是時羅刹心無所畏。勇健難當。辯才次第。其

水動則動。猶如畫像。難成易壞。菩提之心。亦復如是。難發易壞。大仙。如有多人。以諸鎧仗。牢自莊嚴。欲前討賊。臨陣恐怖。則便退散。無量衆生。亦復如是。發菩提心。牢自莊嚴。見生死過心。生恐怖。即便退散。大仙。我見如是無量衆生。發心之後。皆生動轉。是故我今。雖見是人。修於苦行。無惱無熱。住於險道。其行清淨。未能信也。我今要當自往。試之。知其實能堪任。荷負阿耨多羅三藐三菩提。大重擔。不。大仙。猶如車有二輪。則能載用。鳥有二翼。堪任飛行。是苦行者。亦復如是。我雖見其堅持禁戒。未知其人。有深智不。若有深智。當知則能堪任。荷負阿耨多羅三藐三菩提之重擔也。大仙。譬如魚母。多有胎子。成就者少。如菴羅樹花。多果少。衆生發心。乃有無量。及其成就。少不足言。大仙。我當與汝。俱往試之。大仙。譬如真金三種。試已。乃知其真。謂燒打磨。試彼苦行者。亦當如是。爾時釋提桓因。自變其身。作羅刹像。形甚可畏。下至雪山。去其不遠。而便立住。是時羅刹心無所畏。勇健難當。辯才次第。其

聲清雅。宣過去佛所說半偈

諸行無常 是生滅法

估同作賈

人三本俱作獄

○值同作得○

說是言同作作

是語○亦更同

作四顧○道同

作導○爾元明

俱作是○覆下

三本俱有復字

○惑同作或○

說下同無耶字

○於同作生

復同作汝

聞同作問

亦同作而○義

同作之

○元明俱作愛

說是半偈已便住其前。所現形貌甚可怖畏。顧眄遍視觀於四方。是苦行者聞是半偈心生歡喜。譬如估客於險難處夜行失伴。恐怖推索還遇同侶。心生歡喜踊躍無量。亦如久病未遇良醫。瞻病好藥後卒得之。如人沒海卒遇船舫。如渴乏人遇清冷水。如爲怨逐忽然得脫。如久繫人卒聞得出。亦如農夫炎旱值雨。亦如行人還得歸家。家人見已生大歡喜。善男子。我於爾時聞是半偈。心中歡喜亦復如是。即從座起以手舉髮。四向顧視而說是言。向所聞偈誰之所說。爾時亦更不見餘人。唯見羅刹即說是言。誰聞如是解脫之門。誰能雷震諸佛音聲。誰於生死睡眠之中而獨覺寤。唱如是言。誰能於此示道。生死饑饉衆生無上道味。無量衆生沈生死海。誰能於中作大船師。是諸衆生當爲煩惱重病所纏。誰能於中爲作良醫。說是半偈啓悟我心。猶如半月漸開蓮花。善男子。我於爾時更無所見。唯見羅刹。復作是念。將是羅刹說是偈耶。覆生疑惑。非其說耶。何以故。是人形容甚可怖畏。若有得聞是偈句者。一切恐怖醜陋即除。何有此人形貌如是能說此偈。不應火中出於蓮花。非日光中出生冷水。善男子。我於爾時復作是念。我今無智。而此羅刹或能得見過去諸佛。從諸佛所聞是半偈。我今當問。即便前至是羅刹所。作如是言。善哉大士。汝於何處得是過去離怖畏者所說半偈。大士。復於何處而得如是半如意珠。大士。是半偈義乃是過去未來現在諸佛世尊之正道也。一切世間無量衆生。常爲諸見羅網所覆。終身於此外道法中。初不得聞。如是出世十力世雄所說空義。善男子。我聞是已。即答我言。大婆羅門。汝今不應問我是義。何以故。我不食來已經多日。處處求食亦不能得。飢渴苦惱心亂謬語。非我本心之所知也。我今力能飛行虛空。至鬱單越乃至天上。處處求食亦不能得。以是義故我說是語。善男子。我時即復語羅刹言。大士。若能爲我說是偈竟。我當終身爲汝弟子。大士。汝所說者名字不終義亦不盡。以何因緣不欲說耶。夫財施者則有竭盡。法施因緣不可盡也。法施無盡多所利益。我今聞此半偈法已。心生驚疑。汝今幸可爲我除斷。說此偈竟我當終身爲汝弟子。羅刹答言。汝智太過。但自憂身。都不見念。今我定爲飢苦所逼。實不能說。我即問言。汝所食者爲是何物。羅刹答言。

多人三本俱作  
人多○問同作  
語

鷄同作鷄○然  
同作而

於三本俱作是  
○事同作語  
唯同作惟女同

共同作於  
問同作又

言同作願  
空下同無之字  
○還明作還○  
身同作形

汝不足問。我若說者令多人怖。我復問言。此中獨處更無有人。我不畏汝何故不說。羅剎答言。我所食者唯人羶肉。其所飲者唯人熱血。自我薄福唯食此食。周遍求索困不能得。世雖多人皆有福德。兼為諸天之所守護。而我無力不能得殺善男子。我復語言。汝但具足說是半偈。我聞偈已當以此身奉施供養。大士。我設命終如此之身無所復用。當為虎狼鷃鷲之所噉食。然復不得一毫之福。我今為求阿耨多羅三藐三菩提。捨不堅身以易堅身。羅剎答言。誰當信汝如是之言。為八字故。奔所愛身。善男子。我即答言。汝真無智。譬如有人施他瓦器得七寶器。我亦如是捨不堅身得金剛身。汝言誰當信者。我今有證。大梵王。天釋提桓因及四天王。能證是事。復有天眼諸菩薩等。為欲利益無量眾生。修行大乘具六度者。亦能證知。復有十方諸佛世尊。利眾生者。亦能證我為八字故。捨於身命。羅剎復言。汝若如是能捨身者。諦聽諦聽。當為汝說其餘半偈。善男子。我於爾時聞是事。復已心歡喜。即解己身所著鹿皮。為此羅剎敷置法座。白言。和上。願坐此座。我即於前叉手長跪而作是言。唯願和上。善為我說其餘半偈。令得具足。羅剎即說。

生滅滅已 寂滅為樂

爾時羅剎說是偈已。復作是言。菩薩摩訶薩。汝今已聞是足偈義。汝之所願為悉滿足。若必欲利諸眾生者。時施我身。善男子。我於爾時深思此義。然後處處若石若壁若樹若道。書寫此偈。即便更繫所著衣裳。恐其死後身體露現。即上高樹。爾時樹神復問我言。善哉。仁者欲作何事。善男子。我時答言。我欲捨身以報偈價。樹神問言。如是偈者何所利益。我時答言。如是偈句乃是過去未來現在諸佛所說。開空法道。為我此法。奔捨身命。不為利義名聞財寶。轉輪聖王。四大天王。釋提桓因。大梵天王。人中樂。為欲利益一切眾生。故捨此身。善男子。我捨身時復作是言。願令一切慳惜之人。悉來見我捨離此身。若有少施起貴高者。亦令得見我為一偈捨此身命。如奔草木。我於爾時說是語已。尋即放身自投樹下。下未至地時。虛空之中出種種聲。其聲乃至阿迦尼吒。爾時羅剎變復釋身。即於空中接取我身。安置平地。爾時釋提桓因及諸天人大梵天王。稽首頂禮於我足下。讚言。善哉。善哉。真。是菩薩。能大利益無量眾生。欲於無明黑闇之中。燃大法炬。由我愛惜如來大法。故相繞。唯願聽我懺悔罪咎。

現三本俱作見

發下同無於字

汝於未來必定成就阿耨多羅三藐三菩提。願見濟度。爾時釋提桓因及諸天衆頂禮我足。於是辭去。忽然不現。善男子。如我往昔爲半偈故捨棄此身。以是因緣。便得超越足十二劫。在彌勒前成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。我得如是無量功德。皆由供養如來正法。善男子。汝今亦爾。發於阿耨多羅三藐三菩提心。則已超過無量無邊恒河沙等諸菩薩上。善男子。是名菩薩住於大乘大般涅槃修於聖行。

# 大般涅槃經卷第十三

聖行品之下

# 大般涅槃經卷第十四

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 梵行品第二十二

品目第上宋元俱有初字十下同無之一二字

謂上三本俱有所字○授同作受下同○摩同作磨

有同作死

夜下宋元俱無

經字○別三本俱作○續則作續○起下同無續字

請同作樂陀下同無經字

善男子。云何菩薩摩訶薩梵行。善男子。菩薩摩訶薩住於大乘大般涅槃。住七善法得具梵行。何等為七。一者知法。二者知義。三者知時。四者知足。五者自知。六者知眾。七者知尊卑。善男子。云何菩薩摩訶薩知法。善男子。是菩薩摩訶薩知十二部經。謂修多羅祇夜授記。伽陀。優陀。那尼陀。那阿波陀。那伊帝目。多伽闍陀。伽毗佛略。阿浮陀。達摩。優波提舍。善男子。何等名為修多羅經。從如是我聞乃至歡喜奉行。如是一切名修多羅。何等名為祇夜經。佛告諸比丘。昔我與汝愚無智慧。不能如實見四真諦。是故流轉久處生死沒大苦海。何等為四。苦集滅道。如佛昔日為諸比丘說契經竟。爾時復有利根眾生。為聽法故後至佛所。即便問人。如來向者為說何事。佛時知已。即因本經以偈頌曰

我昔與汝等 不見四真諦 是故久流轉 生死大苦海 若能見四諦 即得斷生死 生有既已盡 更不受諸有

是名祇夜經

何等名為授記經。如有經律如來說時。為諸天人授佛記別。汝阿逸多。未來有王名曰讓法。當於是世而成佛道。譬曰彌勒。是名授記經。何等名為伽陀經。除修多羅及諸戒律。其餘有說四句之偈。所謂

諸惡莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸佛教 是名伽陀經

那下三本俱無經字下同

何等名為優陀那經。如佛晡時入於禪定。為諸天眾廣說法要。時諸比丘各作是念。如來今者為何所作。如來明且從禪定起。無有人問。以他心智即自說言。比丘當知。一切諸天壽命極長。汝諸比丘。善哉。為他不求己利。善哉。少欲。善哉。知足。善哉。寂靜。如是。諸經無問自說。是名優陀那經。何等名為尼陀那經。如諸經偈所因根本。為他演說。如舍衛國有一丈夫。羅網捕鳥。得已。籠繫。隨與水穀。而復還放。世尊知其本末因緣。而說偈言。  
莫輕小惡。以為無殃。水滸雖微。漸盈大器。  
是名尼陀那經。

契宋作戒元明俱作界。○名下元明俱有曰字。○伽下三本俱無經字。

觀同作照

有下舍下並同無經字

薩下同無摩訶薩三字

何等名為阿波陀那經。如戒律中所說譬喻。是名阿波陀那經。何等名為伊帝目多伽經。如佛所說比丘當知。我出世時。所可說。自名曰契經。鳩留秦佛出世之時。甘露鼓拘那含牟尼佛時。名曰法鏡。迦葉佛時。名曰別空。是名伊帝目多伽經。何等名為闍陀伽經。如佛世尊本為菩薩。修諸苦行。所謂比丘當知。我於過去。作鹿。作羆。作麀。作兔。作粟散王。轉輪聖王。龍金翅鳥。諸如是等。行菩薩道時。所可受身。是名闍陀伽。何等名為毗佛略經。所謂大乘方等經典。其義廣大。猶如虛空。是名毗佛略。何等名為未曾有經。如彼菩薩初出生時。無人扶持。即行七步。放大光明。遍觀十方。亦如彌猴。手捧蜜器。以獻如來。如白項狗。佛邊聽法。如魔波旬。變為青牛。行瓦鉢。問令諸瓦鉢。互相接觸。無所傷損。如佛初生。入天廟時。令彼天像。起下禮敬。如是等經。名未曾有經。何等名為優波提舍經。如佛世尊所說諸經。若作議論。分別廣說。辨其相貌。是名優波提舍經。菩薩若能如是。了知十二部經。名為知法。云何菩薩摩訶薩。知義。菩薩摩訶薩。若於一切文字語言。廣知其義。是名知義。云何菩薩摩訶薩。知時。善男子。菩薩善知如是。是時中。任修寂靜。如是。是時中。任修精進。如是。是時中。任修捨定。如是。是時中。任供養佛。如是。是時中。任供養師。如是。是時中。任修布施。持戒。忍辱。精進。禪定。具足。般若。波羅蜜。是名知時。云何菩薩摩訶薩。知足。善男子。菩薩摩訶薩。知足。所謂飲食。衣藥。行住。坐臥。睡寤。語默。是名知足。善男子。云何菩薩摩訶薩。自知。是菩薩自知。我有如是。信如是。戒如是。多聞如是。捨如是。慧如是。去來如是。正念如是。善行如是。問如是。答。是名自知。云何菩薩摩訶薩。知眾善男子。是菩薩知如是。等。是利利眾。婆羅門。眾。居士。眾。沙門。眾。應於是眾。如是。行來如是。坐起如是。說法如是。問

善下同無異字

等。是名知衆善男子。云何菩薩摩訶薩知人尊卑。善男子。人有二種。一者信。二者不信。菩薩當知。信者是善。其不信者。不名爲善。復次信有二種。一者常往僧坊。二者不往。菩薩當知。其往者善。其不往者。不名爲善。住僧坊者。復有二種。一者禮拜。二者不禮拜。菩薩當知。禮拜者善。不禮拜者。不名爲善。其禮拜者。復有二種。一者聽法。二者不聽。菩薩當知。聽法者善。不聽法者。不名爲善。其聽法者。復有二種。一。至心聽。二。不至心。菩薩當知。至心聽者。是則名善。不至心者。不名爲善。至心聽法。復有二種。一者思義。二者不思義。菩薩當知。思義者善。不思義者。不名爲善。其思義者。復有二種。一。如說行。二。不如說行。如說行者。是則爲善。不如說行。不名爲善。如說行者。復有二種。一。求聲聞。不能利安饒益一切苦惱衆生。二者。迴向無上大乘。利益多人。令得安樂。菩薩應知。能利多人。得安樂者。最上最善。善男子。如諸寶中。如意寶珠。最爲勝妙。如諸味中。甘露最上。如是菩薩於人天中。最勝最上。不可譬喻。善男子。是名菩薩摩訶薩。住於大乘大涅槃。經住七善法。菩薩住是七善法。已得具梵行。復次善男子。復有梵行。謂慈悲喜捨。迦婁菩薩。白佛言。世尊。若多修慈。能斷瞋恚。修悲心者。亦斷瞋恚。云何而言。四無量心。推義而言。則應有三。世尊。慈有三緣。一緣衆生。二緣於法。三則無緣。悲喜捨心。亦復如是。若從是義。唯應有三。不應有四。衆生緣者。緣於五陰。願與其樂。是名衆生緣。法緣者。緣諸衆生所須之物。而施與之。是名法緣。無緣者。緣於如來。是名無緣。慈者。多緣貧窮衆生。如來大師。永離貧窮。受第一樂。若緣衆生。則不緣佛。法亦如是。以是義故。緣如來者。名曰無緣。世尊。慈之所緣。一切衆生。如緣父母妻子親屬。以是義故。名衆生緣。法緣者。不見父母妻子親屬。見一切法。皆從緣生。是名法緣。無緣者。不佳法。相及衆生。相。是名無緣。悲喜捨心。亦復如是。是故應三。不應有四。世尊。人有二種。一者見行。二者愛行。見行之人。多修慈悲。愛行之人。多修喜捨。是故應二。不應有四。世尊。夫無量者。名曰無邊。邊不可得。故名無量。若無量者。則應是一。不應言四。若言四者。何得無量。是故應一。不應四也。佛告迦葉。善男子。諸佛如來。爲諸衆生所宜法。要其言秘密難可了知。或爲衆生說一因緣。如說何等。爲一因緣。所謂一切有爲之法。善男子。或說二種。因之與果。或說三種。煩惱業苦。或說四種。無明諸行。生與老死。或說五種。所謂受愛取有及生。或說六種。三世因果。或說七種。謂識名色六入觸受及以愛取。或說八種。除無明行及生老死。其餘八事。或說九

三三本俱作一

之與同作緣及



體同俱作健

足其情三本俱  
作滿其願

懷同宋仄

敦宋作諫○其

心調三本俱作

心調順

侶同俱類下同

悲下同有則字

○撻下同無者

字○斷下同無

字○者乃至

修十四字同作

於過去久已積

習二於現在今

始積

種。如城經中除無明行識。其餘九事。或說十一。如為薩遮尼健子說除生一法。其餘十一。或時具說十二因緣。如王舍城為迦葉等具說十二。無明乃至生老病死。善男子。如一因緣為衆生故種種分別。無量心法亦復如是。善男子。以是義故。於諸如來深祕行處不應生疑。善男子。如來世尊有大方便。無常說常常說無常。說樂為苦。說苦為樂。不淨說淨。淨說不淨。我說無我。無我說我。於非衆生說為衆生。於實衆生說非衆生。非物說物。物說非物。非實說實。實說非實。非境說境。境說非境。非生說生。生說非生。乃至無明說明明說無明。色說非色。非色說色。非道說道。道說非道。善男子。如來以是無量方便為調衆生。豈虛妄耶。善男子。或有衆生貪於財貨。我於其人自化其身。作轉輪王。於無量歲隨其所須種種供給。然後教化令其安住阿耨多羅三藐三菩提。若有衆生貪著五欲。於無量歲以妙五欲充足其情。然後勸化令其安住阿耨多羅三藐三菩提。若有衆生榮豪自貴。我於其人無量歲中為作僕使。越走給侍。得其心已。即復勸化令其安住阿耨多羅三藐三菩提。若有衆生性慳。自是須人訶諫。我於無量百千歲中。教訶敦喻。令其心調。然後復勸令其安住阿耨多羅三藐三菩提。善男子。如來如是於無量歲以種種方便。令諸衆生安住阿耨多羅三藐三菩提。豈虛妄耶。諸佛如來雖處衆惡。無所染汙。猶如蓮華。善男子。應如是知。四無量義。善男子。是無量心體性有四。若有修行生大梵處。善男子。如是無量伴侶有四。是故名四。夫修慈者能斷貪欲。修悲心者能斷瞋。修喜心者能斷不樂。修捨心者能斷貪欲。瞋。悲。衆生。善男子。以是義故得名為四。非一二三。善男子。如汝所言。慈能斷瞋。悲亦如是。應說三者。汝今不應作如是難。何以故。善男子。患有二種。一能奪命。二能鞭撻。修慈則能斷彼奪命。修悲能除彼鞭撻者。善男子。以是義故。豈非四耶。復次。瞋有二種。一瞋衆生。二瞋非衆生。修慈心者斷瞋衆生。修悲心者斷瞋非衆生。復次。瞋有二種。一有因緣。修慈心者斷有因緣。修悲心者斷無因緣。復次。瞋有二種。一者久於過去修習。二者於今現在修習。修慈心者能斷過去。修悲心者斷於現在。復次。瞋有二種。一瞋聖人。二瞋凡夫。修慈心者斷瞋聖人。修悲心者斷瞋凡夫。復次。瞋有二種。一上二中修慈。斷上修悲。斷中善男子。以是義故。則名為四。何得難言。應三非四。是故迦葉。是無量心伴侶相對分別為四。復以器故。應名為四。器若有慈。則不得有悲。喜捨心。以是義故。應四無減。善男子。以行分別。故應有四。

則三本俱作乃

○邊同作量○

款同作音

親人同作所親

中同作所下同

上上同無增字

父母所同作其

意成同作成非

煩惱堅硬同作

諸煩惱堅

如乃至彼九字

同作也難說費

如靈石善根易

減斷如十三字

○得元明俱作可

若行慈時無悲喜於。是故有四善男子。以無量故亦得名四。夫無量者則有四種。有無量心有緣非自在。有無量心自在非緣。有無量心亦緣亦自在。有無量心非緣非自在。何等無量有緣非自在。緣於無量無邊衆生。而不能得自在三昧。雖得不定或得或失。何等無量自在非緣。如緣父母兄弟姊妹欲令安樂。非無量緣。何等無量亦緣亦自在。謂諸佛菩薩。何等無量非緣非自在。聲聞緣覺不能廣緣無量衆生。亦非自在。善男子。以是善故名四無量。非諸聲聞緣覺所知。乃是諸佛如來境界。善男子。如是四事聲聞緣覺雖名無量少不足言。諸佛菩薩則得名爲無量無邊。迺要菩薩自佛言。世尊。如是如是。實如聖教。諸佛如來所有境界。非諸聲聞緣覺所及。世尊。頗有菩薩住於大乘大般若。得慈悲心。非是大慈大悲心不。佛言。有善男子。菩薩若於諸衆生中三品分別。一者親人。二者怨憎。三者中人。於親人中復作三品。謂上中下。怨憎亦爾。是菩薩摩訶薩於上親中與增上樂。於中下親亦復平等與增上樂。於上怨中與少分樂。於中怨所與中品樂。於下怨中與增上樂。菩薩如是轉增修習。於上怨中與中品樂。於中下怨等與增上樂。轉復修習於上中下等與上樂。若上怨中與上樂者。爾時得名慈心成就。菩薩爾時於父母所及上怨中。得平等心無有差別。善男子。是名得慈非大慈也。世尊。何緣菩薩得如是慈。猶故不得名爲大慈。善男子。以緣成故不名大慈。何以故。久於過去無量劫中。多集煩惱未修善法。是故不能於一日中調伏其心。善男子。譬如豌豆乾時雜刺終不可著。煩惱堅硬亦復如是。雖一日夜瞋心不散。雖可調伏。又如家犬不畏於人。山林野鹿見人怖走。曠悲難去。如守家狗。慈心易失。如彼野鹿。是故此心難可調伏。以是善故名大慈。復次善男子。譬如畫石其文常在。畫水遠滅。不久住。譬如畫石。諸善根本如彼畫水。是故此心難得調伏。如火聚其明久住。電光之明不得暫停。譬如火聚。慈如電明。是故此心難得調伏。以是善故名大慈。善男子。善薩摩訶薩住於初地名曰大慈。何以故。善男子。最極惡者名一闍提。初作善薩摩大慈時。於一闍提心無差別。不見其過。故不生瞋。以是善故得名大慈。善男子。爲諸衆生除無利益。是名大慈。欲與衆生無量利益。是名大慈。於諸衆生心生歡喜。是名大慈。無所護護名爲大慈。若不見我法相己身。見一切法平等無二。是名大慈。自捨己樂。施與他人。是名大慈。善男子。唯四無量能令菩薩增長。具足六波羅蜜。其餘諸行不必能爾。善男子。菩薩摩訶薩先

相三本俱作想  
下同○大豆同  
作好美○下同  
作穢○莢同作  
穢○末同作秣  
下同○麩同作  
麩下同○而  
作彼  
獨三本俱作唯  
次同○返同作  
反次同  
顯元明俱作曠

飲食三本俱作  
飲食

得世間四無量心。然後乃發阿耨多羅三藐三菩提心。次第方得出世間者。善男子。因世無量得出世無量。以是義故名大無量。迦葉菩薩白佛言。世尊。除無利益與利樂者。實無所為。如是思惟。即是虛觀。無有實利。世尊。譬如比丘觀不淨時。見所著衣。悉是皮相。而實非皮。所可食噉。皆作蟲相。而實非蟲。觀大豆羹作下汁想。而實非糞。觀所食酪。猶如髓腦。而實非腦。觀骨碎末。猶如麩相。而實非麩。四無量心亦復如是。不能真實利益眾生。令其得樂。雖口發言。與眾生樂。而實不得。如是之觀。非虛妄耶。世尊。若非虛妄。實與樂者。而諸眾生。何故不以諸佛菩薩威德力。故一切受樂。若當真實不得樂者。如佛所說。我念往昔。獨修慈心。經此劫世。七返成壞。不來此生。世界成時。生梵天中。世界壞時。生光音天。若生梵天。力勢自在。無能摧伏。於千梵中最勝最上。名大梵王。有諸眾生。皆於我所生最上想。三十六返。作忉利王。釋提桓因。無量百千作轉輪王。獨修慈心。乃得如是。是人天果報。若不實者。云何得與此義相應。佛言。善哉善哉。善男子。汝真勇猛。無所畏懼。即為迦葉。而說偈言。

若於一眾生 不生瞋恚心 而願與彼樂 是名為慈善 一切眾生中 若起於悲心 是名聖種性  
得福報無量 設使五通仙 悉滿此大地 有大自然主 奉施其所安 象馬種種物 所得福報果  
不及修一慈 十六分中一

善男子。夫修慈者。實非妄想。諦是真實。若是聲聞緣覺之慈。是名虛妄。諸佛菩薩真實不虛。云何知耶。善男子。菩薩摩訶薩修行如是。大涅槃者。觀土為金。觀金為土。地作水。水作地。相。水作火。火作水。地作風。風作地。相。隨意成就。無有虛妄。觀實眾生為非眾生。觀非眾生為實眾生。悉隨意成。無有虛妄。善男子。當知菩薩四無量心。是實思。惟非不真實。復次善男子。云何名為真實思。惟謂能斷除諸煩惱。故善男子。夫修慈者。能斷貪欲。修悲心者。能斷瞋恚。修喜心者。能斷不樂。修捨心者。能斷貪恚。及眾生相。以是故名真實思。惟復次善男子。菩薩摩訶薩四無量心。能為一切諸善根本。善男子。菩薩摩訶薩若不得見貧窮眾生。無緣生慈。若不生慈。則不能起惠施之心。以施因緣。令諸眾生得安隱樂。所謂食飲車乘衣服。花香牀臥舍宅燈明。如是施時。心無繫縛。不生貪著。必定迴向阿耨多羅三藐三菩提。其心爾時無所依止。妄想永斷。不為怖畏。名稱利養。不求人天。所受快樂。不生憍

他証同作証他

獨三本俱作鷓  
○爲同作惡

善上同有復次  
二字○慈同作  
憫下同

礙同作闍下同  
○悟解同作解  
達  
當同作常下同  
○涉同作履

慢不望反報不爲他証故行布施不求富貴凡行施時不見受者持戒破戒是田非田此是知識此非知識施時不見是器非器不擇日時是處非處亦復不計饑饉豐樂不見因果此是衆生此非衆生是福非福雖復不見施者受者及以財物乃至不見斷及果報而常行施無有斷絕善男子菩薩若見持戒破戒乃至果報終不能施若不布施則不具足檀波羅蜜若不具足檀波羅蜜則不能成阿耨多羅三藐三菩提善男子譬如有人身被毒箭其人眷屬欲令安隱爲除毒故卽命良醫而爲拔箭彼人方言且待莫觸我今當觀如是毒箭從何方來誰之所射爲是利利婆羅門毗舍首陀復更作念是何木耶竹耶柳耶其鏃鐵者何冶所出剛耶柔耶其毛羽者是何鳥翼烏鷓鴣耶所有毒者爲從作生自然而有爲是人毒爲蛇毒耶如是癡人竟未能知尋便命終善男子菩薩亦爾若行施時分別受者持戒破戒乃至果報終不能施若不能施則不具足檀波羅蜜若不具足檀波羅蜜則不能成阿耨多羅三藐三菩提善男子菩薩摩訶薩行布施時於諸衆生慈心平等猶如子想又行施時於諸衆生起悲愍心譬如父母瞻視病子行施之時其心歡喜猶如父母見子病愈旣施之後其心放捨猶如父母見子長大能自存活是菩薩摩訶薩於慈心中布施時常作是願我今所施悉與一切衆生共之以是因緣令諸衆生得大智食動進迴向無上大乘願諸衆生得善智食不求聲聞緣覺之食願諸衆生得法喜食不求愛食願諸衆生悉得般若波羅蜜食皆令充滿攝取無礙增上善根願諸衆生悟解空相得無礙身猶如虛空願諸衆生常爲受者憐愍一切爲衆福田善男子菩薩摩訶薩修慈心時凡所施食應當堅發如是等願復次善男子菩薩摩訶薩於慈心中布施漿時當作是願我今所施悉與一切衆生共之以是因緣令諸衆生趣大乘河飲八味水速脫無上菩提之道離於聲聞緣覺枯竭渴仰志求無上佛乘斷煩惱渴渴仰法味離生死愛愛樂大乘大般涅槃具足法身得諸三昧入於甚深智慧大海願諸衆生得甘露味菩提出世離欲寂靜如是諸味願諸衆生具足無量百千法味其法味已得見佛性見佛性已能雨法雨雨法雨已佛性遍覆猶如虛空復令其餘無量衆生得一法味所謂大乘非諸聲聞辟支佛味願諸衆生得一甜味無有六種差別之味願諸衆生唯求法味無礙佛法所行之味不求餘味善男子菩薩摩訶薩於慈心中布施漿時應當堅發如是等願復次善男子菩薩摩訶薩於慈心

應同作常下同

衆善各備三本  
俱作成備衆善  
○粉同作芬○  
染汗同作汗染  
○平上同無得  
字○於香塗身  
及以所刺同作  
塗割善惡四字  
○於同作就○  
諸同作令○饑  
猶蜂採同作膳  
如蜂采○佛下  
同無牀離臥惡  
四字

中。施車乘時應作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。普令衆生成於大乘。得住大乘不退於乘不動。轉乘金剛座乘。不求聲聞辟支佛乘。向於佛乘無能伏乘無贏乏乘不退沒乘無上乘十力乘大功德乘未會有乘。希有乘難得乘無邊乘。知一切乘。善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施車乘時。當應如是堅發誓願。復次善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。布施衣時。當作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。令諸衆生得慚愧衣法界。覆身裂諸見衣。衣服離身一尺六寸得金色身。所受諸觸柔軟無礙。光色潤澤皮膚細軟。常光無量無色離色。願諸衆生皆悉普得無色之身。過一切色。得入無色大般涅槃。善男子。菩薩摩訶薩布施衣時。應當如是堅發誓願。復次善男子。菩薩摩訶薩於修慈中。布施花香塗香末香諸雜香時。應作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。令諸衆生一切皆得佛法三昧。七覺妙鬘繫其首頂。願諸衆生形如滿月。所見諸色微妙第一。願諸衆生皆成一相百福莊嚴。願諸衆生隨意得見可意之色。願諸衆生常遇善友。得無礙香離諸臭穢。願諸衆生具諸善根。無上珍寶。願諸衆生相視和悅。無有憂苦。衆善各備不相憂念。願諸衆生戒香具足。願諸衆生持無礙戒。香氣翻覆充滿十方。願諸衆生得堅牢戒。無悔之戒。一切智戒。離諸破戒。悉得無戒。未曾有戒。無師戒。無作戒。無穢戒。無染汗戒。竟已戒。究竟戒。得平等戒。於香塗身及以所刺等。無憎愛。願諸衆生得無上戒。大乘之戒。非小乘戒。願諸衆生悉得具足尸波羅蜜。猶如諸佛所成就戒。願諸衆生悉為布施持戒忍辱精進禪智之所薰修。願諸衆生悉得成於大般涅槃。微妙蓮花。其花香氣充滿十方。願諸衆生純食大乘大般涅槃。無上香饌。猶蜂採花。但取香味。願諸衆生悉得成就無量功德。所薰之身。善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施花香時。常常堅發如是誓願。復次善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施牀敷時。應作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。令諸衆生得天中。天所臥之牀。得大智慧。坐四禪處。臥於菩薩所臥之牀。不臥聲聞辟支佛牀。離臥惡牀。願諸衆生得安樂臥。離生死牀。成大涅槃。師子臥牀。願諸衆生坐此牀已。復為其餘無量衆生。示現神通。師子遊戲。願諸衆生住此大乘大宮殿中。為諸衆生演說佛性。願諸衆生坐無上牀。不為世法之所降伏。願諸衆生得忍辱牀。離於生死饑饉凍餓。願諸衆生得無畏牀。永離一切煩惱怨賊。願諸衆生得清淨牀。專求無上正真之道。願諸衆生得善法牀。常為善

得入於甘露屋  
宅同作得入  
甘露法舍○屋  
同作之

眼三本俱作明  
燈同作錢○於  
同作處○日下  
同無致顯之功  
四字○大光同  
作火球○動同  
作壓我同作常  
暖同作煖

譯宋元俱作非  
故下三本作無  
是顯三字○  
妄下同無也字

友之所擁護。願諸衆生得右脅臥牀。依因諸佛所行之法。善男子。菩薩摩訶薩於慈心中施牀敷時。應當堅發如  
是誓願。復次善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施舍宅時。當作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。令諸  
衆生處大舍。修行善友所行之行。修大悲行。六波羅蜜行。大正覺行。一切菩薩所行道行。無邊廣大如虛空行。  
願諸衆生皆得正念。遠離惡念。願諸衆生悉得安住。常樂我淨。永離四倒。願諸衆生悉皆受持出世文字。願諸衆  
生必爲無上一切智。願諸衆生悉得入於甘露屋宅。願諸衆生初中後心。常入大乘涅槃。願諸衆生於未  
來世。常處菩薩所居宮殿。善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施舍宅時。常常堅發如是誓願。復次善男子。菩薩摩訶  
薩於慈心中。施光明時。當作是願。我今所施悉與一切衆生共之。以是因緣。令諸衆生光明無量。安住佛法。願諸  
衆生常得照明。願諸衆生得色微妙光澤第一。願諸衆生其目清淨。無諸翳網。願諸衆生得大智炬。善解無我無  
衆生相。無人無命。願諸衆生皆得親見清淨佛性。猶如虛空。願諸衆生肉眼清淨。徹見十方恒沙世界。願諸衆生  
得佛光明。普照十方。願諸衆生得無礙眼。皆悉得見清淨佛性。願諸衆生得大智明。破一切闇。及一闍提。願諸衆  
生得無量光。普照無量諸佛世界。願諸衆生然大乘燈。願諸衆生所得光明。滅無明闇。過於千日。並照  
之功。願諸衆生得大光明。悉滅三千大千世界所有黑闇。願諸衆生具足五眼。悟諸法相。成無師覺。願諸衆生無  
見無明。願諸衆生悉得大乘大般涅槃。微妙光明。示悟衆生真實佛性。善男子。菩薩摩訶薩於慈心中。施光明時。  
當應勤發如是誓願。善男子。一切聲聞緣覺菩薩諸佛如來。所有善根。悉爲根本。善男子。菩薩摩訶薩修習慈心。  
能生如是無量善根。所謂不淨出息入息。無常生滅。四念處。七方便。三觀處。十二因緣。無我等。觀法頂法。忍法。  
世第一法。見道修道。正勤如意。諸根諸力。七菩提分。八道。四禪。四無量心。八解脫。八勝處。十一切入。空無相願。無  
諍三昧。知他心智。及諸神通。如本際智。聲聞智。緣覺智。菩薩智。佛智。善男子。如是等法。悉爲根本。善男子。以是義  
故。慈是真實。非虛妄也。若有八閻。誰是一切諸善根本。當言慈是。以是義故。慈是真實。非虛妄也。善男子。能爲善  
者。名實思惟。實思惟者。卽名爲慈。慈卽如來。慈卽大乘。大乘卽慈。慈卽如來。善男子。慈卽菩提道。菩提道卽如來。  
如來卽慈。善男子。慈卽大覺。大覺卽慈。慈卽如來。善男子。慈者能爲一切衆生而作父母。父母卽慈。慈卽如來。善

慈也三本俱作  
之慈○慈下同  
無也字

悟同作寤次同

男子。慈者乃是不可思議諸佛境界。不可思議諸佛境界即是慈也。當知慈者即是如來。善男子。慈者即是衆生佛性。如是佛性久爲煩惱之所覆蔽。故令衆生不得親見。佛性卽慈。慈卽如來。善男子。慈卽大空。大空卽慈。慈卽如來。善男子。慈卽虛空。虛空卽慈。慈卽如來。善男子。慈卽是常。常卽是法。法卽是僧。僧卽是慈。慈卽如來。善男子。慈卽是樂。樂卽是法。法卽是僧。僧卽是慈。慈卽如來。善男子。慈卽是淨。淨卽是法。法卽是僧。僧卽是慈。慈卽如來。善男子。慈卽是我。我卽是法。法卽是僧。僧卽是慈。慈卽如來。善男子。慈卽甘露。甘露卽慈。慈卽佛性。佛性卽法。法卽是僧。僧卽是慈。慈卽如來。善男子。慈者卽是一切菩薩無上之道。道卽是慈。慈卽如來。善男子。慈者卽是諸佛世尊無量境界。無量境界卽是慈也。當知是慈卽是如來。善男子。慈若無常卽慈。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若是苦苦卽是慈。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若不淨不淨卽慈。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若無我卽慈。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若妄想。妄想卽慈。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若不名檀波羅蜜非檀之慈。當知是慈是聲聞慈。乃至般若波羅蜜亦復如是。善男子。慈若不能利益衆生。如是之慈是聲聞慈。善男子。慈若不入一相之道。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若不能覺了諸法。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若有漏有漏慈者是見如來性。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若見法悉是有相。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若有漏有漏慈者是聲聞慈。善男子。慈若有爲有爲之慈。是聲聞慈。善男子。慈若不能住於初住非初住慈。當卽是聲聞慈也。善男子。慈若不能得佛十力四無所畏。當知是慈是聲聞慈。善男子。慈若能得四沙門果。當知是慈是聲聞慈也。善男子。慈若有無非有非無。如是之慈非諸聲聞辟支佛等所能思議。善男子。慈若不可思議。法不可思議。佛性不可思議。如來亦不可思議。善男子。菩薩摩訶薩住於大乘。大般涅槃修如是慈。雖復安於睡眠之中而不睡眠。勤精進故。雖常覺悟亦無覺悟。以無眠故。於睡眠中諸天雖護亦無護者。不行惡故。眠不惡夢。無有不善。離睡眠故。命終之後。雖生梵天亦無所生。得自在故。善男子。夫修慈者能得成就如是無量無邊功德。迦葉菩薩白佛言。世尊。菩薩摩訶經典亦能成就如是無量無邊功德。諸佛如來亦得成就如是無量無邊功德。迦葉菩薩白佛言。世尊。菩薩摩訶薩所有思惟。悉是真實。聲聞緣覺非真實者。一切衆生何故不以菩薩威力等受快樂。若諸衆生實不得樂。當知

怖同作恐

怖同作散○大

城之中同作城

中二字○啼哭

號泣同作號哭

流淚○滅同作

終○善元及南

藏作喜○啼即

糞矣三本俱作

失大小便○於

爾時手五指顫

三本俱作時手

指三字○棄同

作移○母同作

拇○聚合同作

合之

鞞同作鞞下同

○鞞同作乾○

其下同無路中

二字○步涉同

作佛與大業步

行六字○故下

同無被業二字

○鞞同作捷次

菩薩所修慈心為無利益。佛言。善男子。菩薩之慈非不利益。善男子。有諸衆生或必受苦或有不受。若有衆生必受苦者。菩薩之慈為無利益。謂一闍提。若有受苦不必定者。菩薩之慈則為利益。令彼衆生悉受快樂。善男子。譬如有人遙見師子虎豹豺狼羅刹鬼等自然生怖。夜行見杙亦生怖畏。善男子。如是諸人自然怖畏。衆生如是見修慈者自然受樂。善男子。以是義故。菩薩修慈是實思惟非無利益。善男子。我說是慈有無量門。所謂神通。善男子。如提婆達教阿闍世欲害如來。是時我入王舍大城次第乞食。阿闍世王即放護財狂醉之象。欲令害我及諸弟子。其象爾時踰殺無量百千衆生。衆生死已多有血氣。是象驥已狂醉倍常。見我翼從被服赤色。謂呼是血。而復見趣我弟子中。未離欲者四怖馳走。唯除阿難。爾時王舍大城之中一切人民。同時舉聲啼哭號泣。作如是言。怪哉如來今日滅沒。如何正覺一旦散壞。是時調達心生歡喜。瞿曇沙門滅沒甚善。從今已往真是不現。快哉此計。我願得逢善男子。我於爾時為欲降伏護財象故。即入慈定。舒手示之。即於五指指出五師子。是象見已其心怖畏。尋即糞失舉身投地敬禮我足。善男子。我於爾時手五指顫實無師子。乃是修慈善根力故。令彼調伏。復次善男子。我欲涅槃始初發足向拘尸那城。有五百力士於其中路平治掃灑。中有一石衆欲舉。力不能。我時憐愍。即起灑心。彼諸力士尋即見我。以足母指舉此大石。擲置虛空。還以手接。安置右掌。吹令碎末。復還聚合。令彼力士貢高心息。即為略說種種法要。令其俱發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。如來爾時實不以指舉此大石。在虛空中。還置右掌。吹令碎末。復合如本。善男子。當知即是慈善根力。令諸力士見如是事。復次善男子。此南天竺有一大城。名首波羅。於是城中有一長者。名曰盧至。為衆導主。已於過去無量佛所殖諸善本。善男子。彼大城中一切人民。信伏邪道。奉事尼躃。我時欲度彼長者故。從王舍城至彼城邑。其路中間相去六十五由旬。步涉而往。為欲化度彼諸人故。彼索尼躃聞我欲至首波羅城。即作是念。沙門瞿曇若至此者。此諸人民便當捨我。更不供給。我等窮願奈何。自活諸尼躃輩各分散。告彼城人。沙門瞿曇今欲來此。然彼沙門委棄父母。東西馳騁。所至之處。能令土地穀米不登。人民饑饉死亡者衆。病瘦相尋。無可救解。瞿曇無賴。純將諸惡羅刹鬼神。以為侍從。無父無母。孤窮之人。而來咨啓。為作門徒。所可教詔。純說虛空。隨其至處。初無安樂。彼人聞已。即懷怖畏。頭面敬



同○首波羅三字同作彼○更不問作不復○頌奈何自同作悴如何存○散同作布○彼同作諸○穀米同作五穀○來同作就○破同作毀○諸有乃至莫使同作斬伐林木勿令六字○悉置糞屍同作填以臭穢○諸同作奉○泉井三本俱作井泉○往至佛同作來至我○我元作成○於我三本俱作我身○城下同無中字○姓同作名字○疲同作休○捺同捺作下同○字曰同作名○請命同作屈請○以金買同作欲買之○求同作悉○勝同

禮尼毘子足白言。大師。我等今者當設何計。尼毘答言。沙門瞿曇性好叢林流泉清水。外設有者宜應破壞。汝等便可相與出城。諸有之處斫伐令盡。莫使有遺。流泉井池悉置糞屍。堅閉城門各嚴器械。當壁防護。動自固守。彼設來者莫令得前。若不前者汝當安隱。我等亦當作種種術令彼瞿曇復道還去。彼諸人民聞是語已敬諾。施行斬伐樹木汗辱諸水。莊嚴器械牢固自防護。善男子。我於爾時至彼城已。不見一切樹木叢林。唯見諸人莊嚴器械。當壁自守。見是事已。尋生憐愍慈心向之。所有樹木還生如本。復更生長其餘諸樹。不可稱計。河池泉井。其水清淨盈滿。其中如青琉璃。生衆雜花彌覆其上。變其城壁爲紺琉璃。城內人民悉得徹見我及大衆。門自開闢。無能制者。所嚴器械變成雜花。虛至長者而爲上首。與其人民俱共相隨。往至佛所。我卽爲說種種法要。令彼諸人一切皆發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。我於爾時實不化作種種樹木清淨流水盈滿河池。變其本城爲紺琉璃。令彼人民徹見於我。聞其城門器械爲花。善男子。當知皆是慈善根力。能令彼人見如是事。復次善男子。舍衛城中有婆羅門女姓婆私吒。唯有一子愛之甚重。遇病命終。爾時女人愁毒入心。狂亂失性。裸身無恥。遊行四衢啼哭失聲。唱言。子子汝何處去。周遍城邑無有疲已。而是女人已於先佛殖衆德本。善男子。我於是女起慈愍心。是時女人卽得見我。便生子想。還得本心。前抱我身如愛子法。我時卽告侍者阿難。汝可持衣與是女人。旣與衣已。便爲種種說諸法要。是女聞法歡喜踊躍。發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。我於爾時實非彼子。彼非我母。亦無抱持。善男子。當知皆是慈善根力。令彼女人見如是事。復次善男子。波羅捺城有優婆夷。字曰摩訶斯那達。多已於過去無量先佛種種善根。是優婆夷夏九十日。請命衆僧奉施醫藥。是時衆中有一比丘身嬰重病。良醫診之。當須肉藥。若得肉者病則可除。若不得肉。命將不全。時優婆夷聞醫此言。尋持黃金遍至市里。唱如是言。誰有肉賣。我以金買。若有肉者當等與金。周遍城市求不能得。是優婆夷尋自取刀割其胾肉。切以爲臠。下種種香送病比丘。比丘服已。病卽得差。是優婆夷患瘡苦惱不能堪忍。卽發聲言。南無佛陀。南無佛陀。我於爾時在舍衛城聞其音聲。於是女人起大慈心。是女尋見我持良藥塗其瘡上。還合如本。我卽爲其種種說法。聞法歡喜發阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。我於爾時實不往至波羅捺城持藥塗。是優婆夷瘡。善男子。當知皆是慈善根力。

作股○醒同作  
 變○寤同作施  
 ○合同作復○  
 其同作說○說  
 同作妙○是同  
 作彼○若同作  
 身○往明作住  
 ○翻三本俱作  
 提下同○抄同  
 作鈔○日遂同  
 作眼逐○顧宋  
 作匡  
 法明作辯○則  
 三本俱作利  
 審同作創次同  
 ○傳同作塗○  
 出上三本俱有  
 如法二字○藥  
 上同無傳字○  
 得同作見

令彼女人見如是事復次善男子調達惡人貪不知足多服酥故頭痛腹滿受大苦惱不能堪忍發如是言南無  
 佛陀南無佛陀我時住在優禪尼城聞其音聲即生慈心爾時調達尋便見我往至其所手摩頸腹授與鹽湯而  
 令服之服已平復善男子我實不往調達邊所摩其頭腹授湯令服善男子當知皆是慈善根力令調達見如  
 是事復次善男子憍薩羅國有諸羣賊其數五百羣黨抄劫為害甚波斯匿王患其縱暴遣兵伺捕得已眇目  
 墮著黑闇叢林之下是諸羣賊已於先佛殖衆德本既失目已受大苦惱各作是言南無佛陀南無佛陀我等今  
 者無有救護啼哭號咷我時住在祇洹精舍聞其音聲即生慈心時有涼風吹香山中種種香藥滿其眼眶尋還  
 得眼如本不異諸賊聞眼即見如來住立其前而為說法賊聞法已發阿耨多羅三藐三菩提心善男子我於爾  
 時實不作風吹香山中種種香藥住其人前而為說法善男子當知皆是慈善根力令彼羣賊見如是事復次善  
 男子琉璃太子以愚癡故廢其父王自立為主復念宿嫌多害釋種取萬二千釋種諸女剛刺耳鼻斷截手足推  
 之阬壑時諸女人身受苦惱作如是言南無佛陀南無佛陀我等今者無有救護復大號咷是諸女人已於先佛  
 種諸善根我於爾時在竹林中聞其音聲即起慈心諸女爾時見我來至迦毗羅城以水洗瘡以藥傅之苦痛尋  
 除耳鼻手足還復如本我時即為略說法要悉令俱發阿耨多羅三藐三菩提心即於大愛道比丘尼所出家受  
 具足戒善男子如來爾時實不往迦毗羅城以水洗瘡傅藥塗止苦善男子當知皆是慈善根力令彼女人得  
 如是事悲喜之心亦復如是善男子以是義故菩薩摩訶薩修慈思惟即是真實非虛妄也善男子夫無量者不  
 可思議菩薩所行不可思議諸佛所行亦不可思議是大乘典大涅槃經亦不可思議

大般涅槃經卷第十四

# 大般涅槃經卷第十五

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

品目之上明有  
第二十三字下

二品同

是三本俱作此

慈同作憫下同

義同作穢物

併同作并

第三本俱作淡

## 梵行品之二

復次善男子。菩薩摩訶薩修慈悲喜已。得住極愛一子之地。善男子。云何是地。名曰極愛復名一子。善男子。譬如父母見子安隱。心大歡喜。菩薩摩訶薩住是地中亦復如是。視諸衆生同於一子。見修善者生大歡喜。是故此地名曰極愛。善男子。譬如父母見子遇患。心生苦惱。慙之愁毒。初無捨離。菩薩摩訶薩住是地中亦復如是。見諸衆生爲煩惱病之所纏切。心生愁惱。憂念如子。身諸毛孔血皆流出。是故此地名爲一子。善男子。如人小時拾取土塊糞穢。瓦石枯骨木枝。置於口中。父母見已。恐爲其患。左手捉頭。右手挑出。菩薩摩訶薩住是地中亦復如是。見諸衆生。法身未增。或行身口意業不善。菩薩見已。則以智手。拔之令出。不欲令彼流轉生死。受諸苦惱。是故此地復名一子。善男子。譬如父母所愛之子。捨而終亡。父母愁惱。願與併命。菩薩亦爾。見一闍提墮於地獄。亦願與俱生。地獄中。何以故。是一闍提若受苦時。或生一念改悔之心。我卽當爲說種種法令。彼得生一念善根。是故此地復名一子。善男子。譬如父母唯有一子。其子睡寤。行住坐臥。心常念之。若有罪咎。善言誘諭。不如其惡。菩薩摩訶薩亦復如是。見諸衆生。若墮地獄。畜生。餓鬼。或人天中。造作善惡。心常念之。初不放捨。若行諸惡。終不生瞋。以惡加之。是故此地復名一子。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。其言祕密。我今智淺。云何能解。若諸菩薩住一子地。能如是者。云何如來昔爲國王。行菩薩道時。斷絕爾所婆羅門命。若得此地。則應護念。若不得者。復何因緣。不墮地獄。若使等視一切衆生。同於子想。如羅睺羅。何故復向提婆達多說如是言。癡人無羞。食人涕唾。令彼聞已。生於瞋恨。起不善心。出佛身血。提婆達多造是惡已。如來復記當墮地獄。一劫受罪。世尊。如是之言。云何於義不相

苦惱也同作諸苦惱

善男子同作佛告迦葉四字○

嚙同作勞○乾

同作堅

喪同作斷○使同作令

也同作掣

諍同作爭

壽下同無命字

違背世尊須菩提者住虛空地凡欲入城求乞飲食要先觀人若有於己生嫌嫉心則止不行乃至極飢猶不行乞何以故是須菩提常作是念我憶往昔於福田所生一惡念由是因緣墮大地獄受種種苦我今寧飢終日不食終不令彼於我起嫌墮於地獄受苦惱也復作是念若有眾生嫌我立者我當終日端坐不起若有眾生嫌我坐者我當終日立不移處行臥亦爾是須菩提護眾生故尚起是心何況菩薩菩薩若得一子地者何緣如來出是麤言使諸眾生起重惡心善男子汝今不應作如是難言佛如來為諸眾生作煩惱因緣善男子假使蚊虻能盡海底如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假令大地悉為非色水為乾相火為冷相風為住相三寶佛性及以虛空作無常相如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假使毀犯四重禁罪及一闍提謗正法者現身得成十力無畏三十二相八十種好如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假使聲聞辟支佛等常住不變如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假使十住諸菩薩等犯四重禁作一闍提誹謗正法如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假使一切無量眾生喪滅佛性如來究竟入般涅槃如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子假使擲石能繫縛風齒能破鐵爪壞須彌如來終不為諸眾生作煩惱因緣善男子如來真實能為眾生斷除煩惱終不為作煩惱因也善男子如汝所言如來往昔殺婆羅門者善男子菩薩摩訶薩乃至蟻子尚不故殺況婆羅門菩薩常作種種方便惠施眾生無量壽命善男子夫施食者則為施命菩薩摩訶薩行檀波羅蜜時常施眾生無量壽命善男子修不殺戒得壽命長菩薩摩訶薩行尸波羅蜜時則為施與一切眾生無量壽命善男子慎口無過得壽命長菩薩摩訶薩行屬提波羅蜜時常勸眾生莫生怨想推直於人引曲向己無所諍訟得壽命長是故菩薩行屬提波羅蜜時已施眾生無量壽命善男子精勤修善得壽命長菩薩摩訶薩行毗梨耶波羅蜜時常勸眾生勤修善法眾生行已得無量壽命是故菩薩行毗梨耶波羅蜜時已施眾生無量壽命善男子修攝心者得壽命長菩薩摩訶薩行禪波羅蜜時勸諸眾生修平等心眾生行已得壽命長是故菩薩行禪波羅蜜時已施眾生無量壽命善男子於諸善法不放逸者得壽命長菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時勸諸眾生於諸善法不生放

時我三本俱作  
我時  
有同作復

常當同作憲常  
則同作即

有同作若

于同作於

理同作子  
有同作斬

煞和上害同作  
害和尙及

因下三本俱無  
緣故二字

逸。衆生行已。是以緣得壽命長。是故菩薩行般若波羅蜜時。已施衆生無量壽命。善男子。以是義故。菩薩摩訶  
薩於諸衆生終無奪命。善男子。汝向所問。殺婆羅門時。得是地不。善男子。時我已得。以愛念故。斷其命根。非惡心  
也。善男子。譬如父母。唯有一子。愛之甚重。犯官憲制。是時父母。以怖畏故。若擯若殺。雖有擯殺。無有惡心。菩薩摩  
訶薩。爲護正法。亦復如是。若有衆生。謗大乘者。即以鞭撻苦加治之。或奪其命。欲令改往。遵修善法。菩薩當當作  
是思惟。以何因緣。能令衆生發起信心。隨其方便。要當爲之。諸婆羅門命終之後。生阿鼻地獄。則有三念。一者自  
念。我從何處而來。生此。即自知從人道中來。二者自念。我今所生爲是何處。即便自知。是阿鼻獄。三者自念。乘何  
業緣而來。生此。即便自知。乘謗方等大乘經典。不信因緣。爲國主所殺而來。生此。念是事已。即於大乘方等經典  
生信敬心。時命終生甘露鼓。如來世界。於彼壽命具足十劫。善男子。以是義故。我於往昔。乃與是人十劫壽命。  
云何名殺善男子。有人掘地刈草斫樹。斬截死屍。罵詈鞭撻。以是業緣。墮地獄不。迦葉菩薩白佛言。世尊。如我解  
佛所說義者。應墮地獄。何以故。如佛昔爲聲聞說法。汝諸比丘。於諸草木。莫生惡心。何以故。一切衆生。因惡心故。  
墮于地獄。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。如汝所說。應善受持。善男子。若因惡心墮地獄者。菩薩爾時實無惡心。  
何以故。菩薩摩訶薩。於一切衆生。乃至蟲蟻。悉生憐愍利益心故。所以者何。善知因緣諸方便故。以方便力。欲令  
衆生種諸善根。善男子。以是義故。我於爾時。以善方便。雖奪其命。而非惡心。善男子。婆羅門法。若殺蟻子。滿足十  
車。無有罪報。蚊虻蚤蝨。貓狸師子。虎狼熊羆。諸惡蟲獸。及餘能爲衆生害者。殺滿十車。鬼神羅刹。拘繫荼迦羅富  
單那。顛狂乾枯。諸鬼神等。能爲衆生作燒害者。有奪其命。悉無罪報。若殺惡人。則有罪報。殺已不悔。則墮餓鬼。若  
能懺悔。三日斷食。其罪消滅。無有遺餘。若煞和上。害其父母。女人及牛。無數千年。在地獄中。善男子。佛及菩薩。知  
殺有三。謂下中上。下者。蟻子。乃至一切畜生。唯除菩薩。示現生者。善男子。菩薩摩訶薩。以願因緣。示受畜生。是名  
下殺。以下殺。因緣。墮於地獄。畜生餓鬼。具受下苦。何以故。是諸畜生。有微善根。是故殺者。具受罪報。是名下殺。中  
殺者。從凡夫人。至阿那含。是名爲中。以是業因。墮於地獄。畜生餓鬼。具受中苦。是名中殺。上殺者。父母。乃至阿羅  
漢。辟支佛。畢定菩薩。是名爲上。以是業因。緣故。墮於阿鼻大地獄中。具受上苦。是名上殺。善男子。若有能殺一闍

先同作上○問  
同作難

續宋作續下同

遊同作遊○壞  
三本俱作驢下  
同○彼元作後

拒宋作距

法要同作要法

以戒故當云何  
活三本俱作已  
受戒當何資立

健同作健○滅

沒同作殘滅  
不生於同作復  
不生

達下同無多字  
○廣同作實○  
多同作也

提者則不墮此三種殺中。善男子。彼諸婆羅門等一切皆是一闍提也。譬如掘地刈草斫樹斬截死屍罵詈鞭撻。無有罪報。殺一闍提亦復如是。無有罪報。何以故。諸婆羅門乃至無有信等五法。是故雖殺不墮地獄。善男子。汝先所言。如來何故罵提婆達多。癡人貪睡。汝亦不應作如是問。何以故。諸佛世尊凡所發言不可思議。善男子。或有實語為世所受。非時非法不為利益。如是之言我終不說。善男子。或復有言。蠱獵虛妄。非時非法聞者不愛。不能利益。我亦不說。善男子。若有語言雖復蠱獵真實不虛。是時是法能為一切眾生利益。聞雖不悅。我要說之。何以故。諸佛世尊應正遍知。知方便故。善男子。如我一時遊彼曠野聚落叢樹在其林下。有一鬼神即名曠野純食肉血多殺眾生。復於其聚日食一人。善男子。我於爾時為彼鬼神廣說法要。然彼暴惡愚癡無智。不受教法。我即化身為大力鬼。動其宮殿令不安。所。彼鬼于時將其眷屬。出其宮殿欲來拒逆。鬼見我時即失心念。怖怖地迷悶斷絕。猶如死人。我以慈悲手摩其身。即還起坐。作如是言。快哉今日還得身命。是大神王具大威德。有慈悲心。救我慳吝。即於我所生善信心。我即還復如來之身。復更為說種種法要。令彼鬼神受不殺戒。即於是日曠野村中。有一長者次應當死。村人已送付彼鬼神。鬼神得已即以施我。我既受已。便為長者更立名字。名手長者。爾時彼鬼即白我言。世尊。我及眷屬唯仰血肉以自存活。今以戒故當云何活。我即答言。從今當勅聲聞弟子。隨有修行佛法之處。悉當令其施汝飲食。善男子。以是因緣為諸比丘制。如是戒。汝等從今當當施彼曠野鬼食。若有住處不能施者。當知是輩非我弟子。即是天魔徒黨眷屬。善男子。如來為欲調伏眾生。故示如是種種方便。非故令彼生怖畏也。善男子。我亦以木打護法鬼。又於一時在一山上。推羊頭鬼令墮山下。復於樹頭撲護獼猴鬼。令護財象。見五師子。使金剛神怖薩遮尼健。亦以針刺箭毛鬼身。雖作如是。亦不令彼諸鬼神等有誣沒者。直欲令彼安住正法。故示如是種種方便。善男子。我於爾時實不罵辱提婆達多。提婆達多亦不思癡食人涕唾。亦不生於惡趣之中。阿鼻地獄受罪一劫。亦不壞僧出佛身血。亦不違犯四重之罪。誹謗正法大乘經典。非一闍提。亦非聲聞辟支佛也。善男子。提婆達多者實非聲聞緣覺境界。唯是諸佛之所知見。善男子。是故汝今不應難言。如來何緣訶嘖罵辱提婆達多。汝於諸佛所有境界。不應如是生於疑網。迦葉菩薩白佛言。世尊。譬如甘蔗數數煎煮得

融消三本俱作  
第銷○治同作  
治

大上同無於字  
○祕下同無密  
之二字

僧同作親

無下同無無字

種種味。我亦如是。從佛數聞多得法味。所謂出家味。離欲味。寂滅味道味。世尊。譬如真金數數燒打融消鍊治。轉更明淨調和柔軟。光色微妙。其價難量。然後乃爲人天寶重。世尊。如來亦爾。鄭重諮問。則得聞見甚深之義。令深行者受持奉修。無量衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。然後然諸人天所宗恭敬供養。爾時佛讚迦葉菩薩。善哉善哉。菩薩摩訶薩。爲欲利益諸衆生故。諮啓如來。如是深義。善男子。以是義故。我隨汝意。說於大乘方等甚深祕密之法。所謂極愛如一子地。迦葉菩薩白佛言。世尊。若諸菩薩修慈悲喜得一子地者。修捨心時復得何地。佛言。善哉善哉。善男子。汝善知時。我欲說汝。則諮問菩薩摩訶薩。修捨心時。則得住於空平等地。如須菩提。善男子。菩薩摩訶薩。住空平等地。則不見有父母兄弟姊妹兒息親族。知識怨憎中人。乃至不見陰界諸入。衆生壽命。善男子。譬如虛空。無有父母兄弟妻子。乃至無有衆生壽命。一切諸法亦復如是。無有父母。乃至壽命。菩薩摩訶薩見一切法亦復如是。其心平等。如彼虛空。何以故。善能修習諸空法故。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何名空。善男子。空者。所謂內空。外空。內外空。有爲空。無爲空。無始空。性空。無所有空。第一義空。空空。大空。菩薩摩訶薩云何觀於內空。是菩薩摩訶薩觀內法空。是內法空。謂無父母怨親中人。衆生壽命。常樂我淨。如來法。僧所有財物。是內法中。雖有佛性。而是佛性非內非外。所以者何。佛性常住無變易故。是名菩薩摩訶薩觀於內空。外空者亦復如是。無有內法。內外空者亦復如是。善男子。唯有如來法。僧佛性不在二空。何以故。如是四法常樂我淨。是故四法不名爲空。是名內外俱空。善男子。有爲空者。有爲之法。悉皆是空。所謂內空。外空。內外空。常樂我淨。空。衆生壽命。如來法。僧第一義空。是中佛性非有爲法。是故佛性非有爲法。空。是名有爲空。善男子。云何菩薩摩訶薩觀無爲空。是無爲法。悉皆是空。所謂無無常。苦。不淨。無我。陰界入。衆生壽命。相有爲。有漏。內法。外法。無爲法。中佛等四法。非有爲。非無爲。性是善。故非無爲。性常住。故非有爲。是名菩薩觀無爲空。云何菩薩摩訶薩觀無始空。是菩薩摩訶薩見生死無始。皆悉空寂。所謂空者。常樂我淨。皆悉空寂。無有變易。衆生壽命。三寶佛性。及無爲法。是名菩薩觀無始空。云何菩薩觀於性空。是菩薩摩訶薩觀一切法。本性皆空。謂陰界入。常無常。苦樂淨不淨。我無我。觀如是等一切諸法。不見本性。是名菩薩摩訶薩觀於性空。云何菩薩摩訶薩觀無所有空。如人無子。言舍宅空。畢竟觀

空來作空

觀不光明俱有  
無觀二字

沙下三本俱無  
等字  
礙同作閣下同

法同作物

臥明作棄○棄  
同作臥○相二  
本俱作髮○食  
同作果○狗種  
同作雞狗○時  
同作天

必下元明俱有  
能字

空無有親愛、愚癡之人言諸方陰、貧窮之人言一切空。如是所計或空或非空。菩薩觀時如貧窮人一切皆空。是名菩薩摩訶薩觀無所有空。云何菩薩摩訶薩觀第一義空。善男子。菩薩摩訶薩觀第一義時。是起生時無所從來。及其滅時去無所至。本無今有。已有還無。推其實性無眼無主。如限一切諸法亦復如是。何等名為第一義空。有業有報不見作者。如是空法名第一義空。是名菩薩摩訶薩觀第一義空。云何菩薩摩訶薩觀於空。是空空。中乃是聲聞辟支佛等所達沒處。善男子。是有是無是名空空。是是非是名空空。善男子。十住菩薩對於是中通達少分。猶如微塵。況復餘人。善男子。如是空空亦不同於聲聞所得空空。三昧。是名菩薩觀於空空。善男子。云何菩薩摩訶薩觀於大空。善男子。言大空者。謂般若波羅蜜。是名大空。善男子。菩薩摩訶薩得如是空門。則得住於虛空等地。善男子。我今於是大眾之中。說如是等諸空義時。有十恒河沙等菩薩摩訶薩。即得住於虛空等地。善男子。菩薩摩訶薩住是地已。於一切法中無有滯礙繫縛拘執。心無迷悶。以是義故名虛空等地。善男子。譬如虛空於可受色不生貪著不愛色中不生瞋恚。菩薩摩訶薩住是地中亦復如是。於好惡色心無貪著。善男子。譬如虛空廣大無對。悉能容受一切諸法。菩薩摩訶薩住是地中亦復如是。廣大無對。悉能容受一切諸法。以是義故。復得名為虛空等地。善男子。菩薩摩訶薩住是地中。於一切法亦見亦知。若行若緣。若性若相。若因若緣。若業生心。若根若塵。若定若慧。若善知識。若持禁戒。若所施。如是等法。一切知見。復次善男子。菩薩摩訶薩住是地中。知而不見。云何為知。知自取法。投澗赴火。自墜高巖。常起一脚五熱。炙身。常臥灰土。裸形。輪轉。南業。草牛。糞之上。衣麤麻衣。塚間所糞。黃髮。掃到。掃鉢。糞。衣。塵。鹿。皮。革。芻。草。衣。裳。宿。菜。噉。食。高。根。油。淨。牛。糞。屎。果。若行乞食。限從一家。主若言無。即便捨去。設復還喚。終不迴顧。不食麤肉。五種牛味。常所欲服。酥。汁。湯。受持牛戒。狗。野。雞。皮。以灰。塗身。長髮為相。以手呵。時。先現後殺。四月事火。七日報風。百千蓮花。供養諸天。諸所欲顯。因此成就。如是等法。能為無上。解脫因者。無有是處。是名為知。云何不見。菩薩摩訶薩不見一人。行如是法。得正解脫。是名不見。復次善男子。菩薩摩訶薩亦見亦知。何等為見。見諸業生。行是邪法。必欲地獄。是名為見。云何為知。如諸業生。從地獄出生於人中。若能修行。檀。持。戒。施。家。乃至具足。諸波羅蜜。是人必得入正解脫。是名為知。復次善男子。菩薩摩訶薩復



信心三本俱作  
心信○謂同作  
諸○應下同有  
供字

見元作是

貧三本俱作益  
知亦見同作見  
亦知

辭同作詞下同

有亦見亦知。云何爲見。見常無常苦樂淨不淨我無我。是名爲見。云何爲知。知諸如來定不畢竟入於涅槃。知如來身金剛無壞非是煩惱所成就身。又非臭穢腐敗之身。亦復能知一切衆生悉有佛性。是名爲知。復次善男子。菩薩摩訶薩復有亦知亦見。云何爲知。知是衆生信心成就。知是衆生求於大乘是人順流是人正住。知是衆生已到彼岸。順流者謂凡夫人。逆流者從須陀洹乃至緣覺。正住者謂菩薩等。到彼岸者所謂如來應正遍知。是名爲知。云何爲見。菩薩摩訶薩住於大乘大涅槃典修梵行心。以淨天眼。見諸衆生造身口意三業不善墮於地獄畜生餓鬼。見諸衆生修善業者命終當生天上人中。見諸衆生從閻入閻。有諸衆生從閻入明。有諸衆生從明入閻。有諸衆生從明入明。是名爲見。復次善男子。菩薩摩訶薩復有亦知亦見。菩薩摩訶薩知諸衆生修身修戒修心修慧。是人今世惡業成就。或因貪欲瞋恚愚癡。是業必應地獄受報。是人直以修身修戒修心修慧。現世輕受不墮地獄。云何是業能得現報。懺悔發露所有諸惡。既悔之後更不敢作。慙愧成就故。供養三寶故。常自訶責故。是人以是善業因緣。不墮地獄現世受報。所謂頭痛目痛腹痛背痛橫羅死殃。呵責罵辱鞭杖閉繫飢餓困苦。受如是等現世輕報。是名爲知。云何爲見。菩薩摩訶薩見如是人不能修習身戒心慧。造少惡業。此業因緣應現受報。是人少惡不能懺悔不自呵責。不生慚愧無有怖懼。是業增長地獄受報。是名爲見。復有知而不見。云何知而不見。知諸衆生皆有佛性爲諸煩惱之所覆蔽不能得見。是名知而不見。復有知而少見。十住菩薩摩訶薩等知諸衆生皆有佛性見不明了。猶如闇夜所見不了。復有亦見亦知。所謂諸佛如來亦見亦知。復有亦見亦知不見不知。亦見亦知者。所謂世間文字言語男女車乘瓶瓮舍宅城邑衣裳飲食山河園林衆生壽命。是名亦知亦見。云何不見不知。聖人所有微密之語。無有男女乃至園林。是名不見不知。復有知而不見。知所惠施知所供處。知於受者知因果報。是名爲知。云何不見。不見所施供處受者及以果報。是名不見。菩薩摩訶薩知有八種。卽是如來五眼所知。迦葉菩薩白佛言。世尊。菩薩摩訶薩能如是知得何等利。佛言。善男子。菩薩摩訶薩能如是知得四無礙。法無礙義無礙辭無礙樂說無礙。法無礙者。知一切法及法名字義無礙者。知一切法所有諸義。能隨諸法所立名字而爲作義。辭無礙者。隨字論正音論闡陀論世辯論。樂說無礙者。所謂菩薩摩訶薩凡所演

省同作儼

亦不三本俱作  
不取○亦不取  
同作而亦不

憂宋作儼

得脫於三本俱  
作能得脫

同作以何○何  
於同作其○何  
宇○山下同義三  
而字○持下同無  
無耶字下同○同  
何下則無散復  
二字下同○持

說無有障礙不可動轉無所畏省難可摧伏善男子是名菩薩能如是見知即得如是四無礙智復次善男子法無礙者菩薩摩訶薩遍知聲聞緣覺菩薩諸佛之法義無礙者乘雖有三知其歸一終不謂有差別之相諸無礙者菩薩摩訶薩於一法中作種種名經無量劫說不可盡聲聞緣覺能作是說無有是處樂說無礙者菩薩摩訶薩於無量劫為諸衆生演說諸法若名若義種種異說不可窮盡復次善男子法無礙者菩薩摩訶薩雖知諸法而不取著義無礙者菩薩摩訶薩雖知諸義而亦不著辭無礙者菩薩摩訶薩雖知名字亦不取著樂說無礙者菩薩摩訶薩雖知樂說如是最上而亦不著何以故善男子若取著者不名菩薩迦葉菩薩復自佛言世尊若不取著則不知法若知法者則是取著若知不著則無所知云何如來說言知法而不取著佛言善男子夫取著者不名無礙無所取著乃名無礙善男子是故一切諸菩薩等有取著者則無無礙若無無礙不名菩薩當知是人名為凡夫何故取著名為凡夫一切凡夫取著於色乃至著識以著色故則生貪心生貪心故為色繫縛乃至為識之所繫縛以繫縛故則不得免生老病死憂悲大苦一切惱煩是故取著名為凡夫以是義故一切凡夫無四無礙善男子菩薩摩訶薩已於無量阿僧祇劫知見法相以知見故則知其義以見法相及知義故而於色中不生繫著乃至識中亦復如是以下著故菩薩於色不生貪心乃至識中亦不生貪以無貪故則不為色之所繫縛乃至不為識之所縛以不縛故則得脫於生老病死憂悲大苦一切煩惱以是義故一切菩薩得四無礙善男子以是因緣我為弟子十二部中說繫著者名為魔縛若不著者則脫魔縛譬如世間有罪之人為王所縛無罪之人王不能縛菩薩摩訶薩亦復如是其有繫著者為魔所縛無繫著者魔不能縛以是義故菩薩摩訶薩而無所著復次善男子法無礙者菩薩摩訶薩善知字持而不忘失所謂持者如地如山如眼如雲如人如母一切諸法亦復如是義無礙者菩薩雖知諸法名字而不知義得義無礙則知於義云何知義謂地持者如地善持一切衆生及非衆生以是義故名地為持善男子謂山持者菩薩摩訶薩作是思惟何故名山而為持耶山能持地令無傾動是故名持何故復名眼為持耶眼能持光故名為持何故復名雲為持耶雲名龍氣龍氣持水故名雲持何故復名人為持耶人能持法及以非法故名持何故復名母為持耶母能持子故名母持菩薩摩訶薩知一切法

上同無爲字下  
○人同作爲○  
母同作爲○  
下同無摩訶薩  
三字○羅下同  
無耶字  
諦三本俱作辯

使同作令○法  
下宋無忍法二  
字

字下三本俱無  
法字

渡於同作度彼  
○河同作海○  
二同作三  
健同作捷○如  
同作若下同  
悉同作私

名字句義亦復如是。辭無礙者。菩薩摩訶薩以種種辭演說一義。亦無有義。猶如男女舍宅車乘衆生等名。何故無義。善男子。夫義者。乃是菩薩諸佛境界。辭者。凡夫境界。以知義。故得辭無礙。樂說無礙者。菩薩摩訶薩。知辭知義。故於無量阿僧祇劫。說辭說義。而不可盡。是名樂說無礙。善男子。菩薩摩訶薩。於無量無邊阿僧祇劫。修行世諦。以修行故。知法無礙。復於無量阿僧祇劫。修第一義諦。故得義無礙。亦於無量阿僧祇劫。得樂說無礙。善男子。聲聞緣覺。若有得是四無礙者。無有是處。善男子。九部經中。我說聲聞緣覺之人。有四無礙。聲聞緣覺。真實無有。何以故。菩薩摩訶薩。爲度衆生。故修如是四無礙智。緣覺之人。修寂滅法。志樂獨處。若化衆生。但現神通。終日默然。無所宣說。云何當有四無礙智。何故默然而無所說。緣覺不能說法。度人。使得熾法頂法。忍法。世第一法。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。辟支佛。菩薩摩訶薩。不能令人發阿耨多羅三藐三菩提心。何以故。善男子。緣覺出世世間。無有九部經典。是故緣覺無辭無礙。樂說無礙。善男子。緣覺之人。雖知諸法。無法無礙。何以故。法無礙者。名爲知字。緣覺之人。雖知文字。無字無礙。何以故。不知常住二字。法故。是故緣覺不得法無礙。雖知於義。無義無礙。真知義者。知諸衆生。悉有佛性。佛性義者。名爲阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。緣覺之人。不得義無礙。是故緣覺一切無有四無礙智。云何聲聞無四無礙。聲聞之人。無有三種善巧方便。何等爲三。一者。必須軟語。然後受法。二者。必須麤語。然後受化。三者。不軟不麤。然後受化。聲聞之人。無此三故。無四無礙。復次。聲聞緣覺。不能畢竟知辭知義。無自在智。知於境界。無有十力。四無所畏。不能畢竟渡於十二因緣大河。不能善知衆生諸根利鈍差別。未能永斷二諦疑心。不知衆生種種諸心所緣境界。不能善說第一義空。是故二乘無四無礙。迦葉菩薩。白佛言。世尊。若諸聲聞緣覺之人。一切無有四無礙者。云何世尊。說舍利弗。智慧第一大目。捷連神通第一摩訶拘絺羅。四無礙第一。如其無者。如來何故作如是說。爾時世尊讚迦葉言。善哉善哉。善男子。譬如恒河有無量水。辛頭大河。水亦無量。博又大河。水亦無量。悉陀大河。水亦無量。阿耨達池。水亦無量。大海之中。水亦無量。如是諸水。雖同無量。然其多少。其實不等。聲聞緣覺及諸菩薩。四無礙智。亦復如是。善男子。若說等者。無有是處。善男子。我爲凡夫。說摩訶拘絺羅。四無礙智。爲最第一。汝所

葉下同無菩薩  
二字○光同作  
上大同

顯宋元俱作慎

乘下三本俱有  
之字○得下同  
無於字  
所同作不

子下同無菩薩  
摩訶薩五字

一名下同無爲字

葉下同無菩薩  
二字○爲上同  
無於娑羅雙樹  
間六字

問者其義如是。善男子。聲聞之人。或有得一。或有得二。若具足四。無有是處。迦葉。菩薩白佛言。世尊。如佛先說。梵行品中。菩薩知見得四。無礙者。菩薩知見。則無所得。亦無有心言。無所得。世尊。是菩薩摩訶薩。實無所得。若使菩薩心有得者。則非菩薩。名爲凡夫。云何如來說言。菩薩而有所得。佛言。善男子。善哉善哉。我將欲說。而汝復問。善男子。菩薩摩訶薩。實無所得。無所得者。名四無礙。善男子。以何義故。無所得者。名爲無礙。若有得者。則名爲礙。有障礙者。名四顛倒。善男子。菩薩摩訶薩。無四倒故。故得無礙。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所得者。則名爲慧。菩薩摩訶薩。得是慧。故名無所得。有所得者。名爲無明。菩薩永斷無明。故無所得。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所得者。名大涅槃。菩薩摩訶薩。安住如是。大涅槃中。不見一切諸法。性相。是故菩薩。名無所得。有所得者。名二十五有。菩薩永斷二十五有。得大涅槃。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所得者。名爲大乘。菩薩摩訶薩。不住諸法。故得大乘。是故菩薩。名無所得。有所得者。名爲聲聞。辟支佛道。菩薩永斷二乘道。故得於佛道。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所得者。名方等經。菩薩讀誦如是。經。故得大涅槃。是故菩薩。名無所得。有所得者。名十一部經。菩薩所修純說方等大乘經典。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所有者。名爲虛空。世間無物。名爲虛空。菩薩得是虛空三昧。無所見。故。是故菩薩。名無所得。有所得者。名生死輪。一切凡夫。輪迴生死。故有所見。菩薩永斷一切生死。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。菩薩摩訶薩。無所得者。名常樂我淨。菩薩摩訶薩。見佛性。故得常樂我淨。是故菩薩。名無所得。有所得者。名無常無樂無我無淨。菩薩摩訶薩。斷是無常無樂無我無淨。是故菩薩。名無所得。復次。善男子。無所得者。名第一義空。菩薩摩訶薩。觀第一義空。悉無所見。是故菩薩。名無所得。有所得者。名爲阿耨多羅三藐三菩提。菩薩摩訶薩。得阿耨多羅三藐三菩提。時。悉無所見。是故菩薩。名無所得。有所得者。名爲聲聞緣覺。菩提。菩薩永斷二乘菩提。是故菩薩。名無所得。善男子。汝之所問。亦無所得。我之所說。亦無所得。若說有得。是魔眷屬。非我弟子。迦葉。菩薩白佛言。世尊。爲我說是菩薩無所得。時。無量衆生。斷有相心。以是事故。我敢諮啓。無所得義。令如是等。無量衆生。離魔眷屬。爲佛弟子。迦葉。菩薩白佛言。世尊。如來先於羅娑雙樹間。爲純陀說。偈

本有今無 本無今有 三世有法 無有是處

我下三本俱有  
昔字○法元明  
俱作之  
我無樂三本俱  
作樂無我

我本無有同作  
本無二字○本  
無石同作無  
以下同有有字  
道下同有之字  
有下宋無雜字

世尊是義云何。佛言善男子。我爲化度諸衆生故而作是說。亦爲聲聞辟支佛故而作是說。亦爲文殊師利法王子故而作是說。不但正爲純陀一人說是偈也。時文殊師利將欲問我。我知其心而爲說之。我旣說已。文殊師利卽得解了。迦葉菩薩言。世尊。如文殊等詎有幾人能了是義。惟願如來。更爲大衆廣分別說。善男子。諦聽諦聽。今當爲汝重敷演之。言本有者。我昔本有無量煩惱。以煩惱故。現在無有大般涅槃。言本無者。本無般若波羅蜜。以無般若波羅蜜故。現在具有諸煩惱結。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在有煩惱者。無有是處。復次善男子。言本有者。我本有父母和合之身。是故現在無有金剛微妙法身。言本無者。我身本無三十二相八十種好。以本無有三十二相八十種好故。現在具有四百四病。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在有病苦者。無有是處。復次善男子。言本有者。我昔本有無常無我無樂無淨。以有無常無我無樂無淨故。現在無有阿耨多羅三藐三菩提。言本無者。本不見佛性。以不見故。無常樂我淨。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在無常樂我淨者。無有是處。復次善男子。言本有者。本有凡夫修苦行心。謂得阿耨多羅三藐三菩提。以是事故。現在不能破壞四魔。言本無者。我本無有六波羅蜜。以本無有六波羅蜜故。修行凡夫苦行之心。謂得阿耨多羅三藐三菩提。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在有苦行者。無有是處。復次善男子。言本有者。我昔本有雜食之身。以食身故。現在無有無邊之身。言本無者。本無三十七助道法。以無三十七助道法故。現在具有雜食之身。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在有離食身者。無有是處。復次善男子。言本有者。我昔本有一切法中取著之心。以是事故。現在無有畢竟空定。言本無者。我本無有中道實義。以無中道真實義故。於一切法則有著心。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來現在說一切法是有相者。無有是處。復次善男子。言本有者。我初得阿耨多羅三藐三菩提時。有諸鈍根聲聞弟子。以有鈍根聲聞弟子故。不得演說一乘之實。言本無者。本無利根人中象王迦葉菩薩等。以無利根迦葉等故。隨宜方便開示三乘。若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。說言如來去來

義下元明俱有  
諦字

現在畢竟演說三乘法者。無有是處。復次善男子。言本有者。我本說言。却後三月於娑羅雙樹當般涅槃。是故現在不得演說大方等典。大般涅槃。言本無者。本昔無有文殊師利大菩薩等。以無有故。現在說言。如來無常。若有沙門若婆羅門。若天若魔。若梵若人。說言。如來去來現在。是無常者。無有是處。善男子。如來普為諸衆生。故雖知諸法說言不知。雖見諸法說言不見。有相之法說言無相。無相之法說言有相。實有無常說言有常。實有有常說言無常。我樂淨等亦復如是。三乘之法說言一乘。一乘之法隨宜說三。略相說廣。廣相說略。四重之法說偷蘭遮。偷蘭遮法說為四重。犯說非犯。非犯說犯。輕罪說重。重罪說輕。何以故。如來明見衆生根故。善男子。如來雖作是說。終無虛妄。何以故。虛妄之語。即是罪過。如來悉斷一切罪過。云何當有虛妄語耶。善男子。如來雖無虛妄之言。若知衆生因虛妄說得法利者。隨宜方便。則為說之。善男子。一切世諦。若於如來。即是第一義諦。何以故。諸佛世尊。為第一義。故說於世諦。亦令衆生得第一義諦。若使衆生不得如是第一義者。諸佛終不宜說世諦。善男子。如來有時演說世諦。衆生謂佛說第一義諦。有時演說第一義諦。衆生謂佛說於世諦。是則諸佛甚深境界。非是聲聞緣覺所知。善男子。是故汝先不應難言。菩薩摩訶薩無所得也。菩薩常得第一義諦。云何難言無所得耶。迦葉。復言。世尊。第一義諦亦名為道。亦名菩提。亦名涅槃。若有菩薩言有得道。菩提涅槃。即是無常。何以故。法若常者。則不可得。猶如虛空。誰有得者。世尊。如世間物。本無今有。名為無常。道亦如是。道若可得。則名無常。法若常者。無得無生。猶如佛性。無得無生。世尊。夫道者。非色。非不色。不長不短。非高非下。非生非滅。非赤非白。非青非黃。非有非無。云何如來說言可得。菩提涅槃。亦復如是。佛言。如是如是。善男子。道有二種。一者常。二者無常。菩提之相。亦有二種。一者常。二者無常。涅槃亦爾。外道道者。名為無常。內道道者。名為常。聲聞緣覺所有菩提。名為無常。菩薩諸佛所有菩提。名之法常。外解脫者。名為無常。內解脫者。名為常。善男子。道與菩提。及以涅槃。悉名為常。一切衆生。常為無量煩惱所覆。無慧眼。故不能得見。而諸衆生。為欲見。故修戒定慧。以修行。故見道。菩提。及以涅槃。是名菩薩得道。菩提。及涅槃也。道之性相。實不生滅。以是義故。不可捉持。善男子。道者。雖無色。像可見。稱量可知。而實有用。善男子。如衆生心。雖非是色。非長非短。非麤非細。非縛非解。非是見法。而亦是有。以是義故。我為須達。

及涅槃也三本  
俱作涅槃二字

主下同無長者  
二字○不上同  
無其字

如上同有又字

菓三本俱作果  
○薩下同無摩  
訶薩三字○惟  
同作唯

說言長者心爲城主。長者若不護心則不護身口。若護心者則護身口。以不善護是身口故。令諸衆生到三惡趣。護身口者則令衆生得人天。涅槃得名真實。其不得者名不真實。善男子。道與菩提及以涅槃亦復如是。亦有亦常。如其無者云何能斷一切煩惱。以其有故一切菩薩了了見知。善男子。見有二種。一相貌見。二了了見。云何相貌見。如遠見烟名爲行火。實不見火。雖不見火亦非虛妄。見空中鶴便行見水。雖不見水亦非虛妄。如見花葉便言見根。雖不見根亦非虛妄。如人遙見離間牛角。便言見牛。雖不見牛亦非虛妄。如見女人懷妊便言見欲。雖不見欲亦非虛妄。如見樹生葉便言見水。雖不見水亦非虛妄。又如見雲便言見雨。雖不見雨亦非虛妄。如見身業及以口業便言見心。雖不見心亦非虛妄。是名相貌見。云何了了見。如眼見色。善男子。如人眼根清淨不壞自觀掌中阿摩勒菓。菩薩摩訶薩了了見道。菩提涅槃亦復如是。雖如是見初無見相。善男子。以是因緣我於往昔告舍利弗。一切世間若有沙門若婆羅門若天若魔若梵若人。所不知不見不覺。惟有如來悉知見覺。及諸菩薩亦復如是。舍利弗。若諸世間所知見覺。我與菩薩亦知見覺。世間衆生之所不知不見不覺。亦不自知不知見覺。世間衆生所知見覺。便自說言我知見覺。舍利弗。如來一切悉知見覺。亦不言我知見覺。一切菩薩亦復如是。何以故。若使如來作知見覺相。當知是則非佛世尊。名爲凡夫。菩薩亦爾。

# 大般涅槃經卷第十五

# 大般涅槃經卷第十六

〔麗多〕宋公〔元公〕明在

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 梵行品之三

迦葉菩薩言。如佛世尊爲舍利弗說。世間知者我亦得知。世間不知我亦悉知。其義云何。善男子。一切世間不知不見不覺佛性。若有知見覺佛性者。不名世間。名爲菩薩。世間之人亦復不知不見不覺。十二部經十二因緣四到四諦三十七品阿耨多羅三藐三菩提。大般涅槃。若知見覺者。不名世間。當名菩薩。善男子。是名世間不知見覺。云何世間所知見覺。所謂梵天自在天八臂天。性時微塵法及非法。是造化主。世界終始斷常二見。說言初禪至非非想名爲涅槃。善男子。是名世間所知見覺。菩薩摩訶薩。於如是事亦知見覺。菩薩如是知見覺已。若言不知不見不覺。是爲虛妄。虛妄之法。則爲是罪。以是罪故墮於地獄。善男子。若男若女若沙門若婆羅門。說言無道。菩提涅槃。當知是輩名一闍提。魔之眷屬。名爲謗法。如是謗法名謗諸佛。如是之人。不名世間。不名非世間。爾時迦葉聞是事已。卽以偈頌而讚歎佛。

惑同作憫○今  
同作令

大慈隱衆生 故令我歸依 善拔衆毒箭 故稱大醫王 世醫所療治 雖差還復生 如來所治者 畢竟不復發 世尊甘露藥 以施諸衆生 衆生旣服已 不死亦不生 如來今爲我 演說大涅槃 衆生聞祕藏 卽得不生滅

迦葉菩薩說是偈已。卽白佛言。世尊。如佛所說。一切世間不知見覺。菩薩悉能知見覺者。若使菩薩是世間者。不得說言世間不知不見不覺。而是菩薩能知見覺。若非世間有何異相。佛言。善男子。言菩薩者。亦是世間。亦非世間。不知見覺者。名爲世間。知見覺者。不名世間。汝言有何異者。我今當說。善男子。若男若女。若有初聞是涅槃經。



自三本俱作復

實上同有得字

種之同作散種  
○芽宋作牙次  
同

卽生敬信。發阿耨多羅三藐三菩提心。是則名爲世間菩薩。一切世間不知見覺。如是菩薩亦同世間不知見覺。菩薩聞是涅槃經已。知有世間不知見覺。應是菩薩所知見覺。知是事已卽自思惟。我當云何方修習得知見覺。覆自念言。唯當深心修持淨戒。善男子。菩薩爾時以是因緣。於未來世在在處處戒常清淨。善男子。菩薩摩訶薩以戒淨故。在在處處常無憍慢邪見疑網。終不說言如來畢竟入於涅槃。是名菩薩修持淨戒。戒既清淨。次修禪定。以修定故。在在處處正念不忘。所謂一切衆生悉有佛性。十二部經諸佛世尊常樂我淨。一切菩薩安住方等大涅槃經。悉見佛性。如是等事憶而不忘。因修定故。得十一空。是名菩薩修清淨定。戒定已備。次修智慧。以修慧故。初不計著身中有我。我中有身。身是我。非身非我。是名菩薩修習淨慧。以修慧故。所受持戒牢固不動。善男子。譬如須彌不爲四風之所傾動。菩薩摩訶薩亦復如是。不爲四倒之所傾動。善男子。菩薩爾時自知見覺。所受持戒無有傾動。是名菩薩所知見覺。非世間也。善男子。菩薩見所持戒牢固不動。心無悔恨。無悔恨故。心得歡喜。得歡喜故。心得悅樂。得悅樂故。心則安隱。心安隱故。得無動定。得無動定。故得實知見。實知見故。厭離生死。厭離生死。故便得解脫。得解脫故。明見佛性。是名菩薩所知見覺。非世間也。善男子。是名世間不知見覺。而是菩薩所知見覺。迦葉復言。云何菩薩修持淨戒。心無悔恨。乃至明了見於佛性。佛言。善男子。世間戒者。不名清淨。何以故。世間戒者。爲於有故。性不定故。非畢竟故。不能廣爲一切衆生。以是義故名爲不淨。以不淨故。有悔恨心。以悔恨故。心無歡喜。無歡喜故。則無悅樂。無悅樂故。則無安隱。無安隱故。無不動定。無不動定。故無實知見。無實知見。故則無厭離。無厭離故。則無解脫。無解脫故。不見佛性。不見佛性。故終不能得大般涅槃。是名世間戒不清淨。善男子。菩薩摩訶薩清淨戒者。戒非戒故。非爲有故。定畢竟故。爲衆生故。是名菩薩戒清淨也。善男子。菩薩摩訶薩於淨戒中。雖不欲生無悔恨心。無悔恨心自然而生。善男子。譬如有人執持明鏡。不期見面。而面像自現。亦如農夫。誦之良田。不期生芽。而芽自生。亦如燃燈。不期滅闇。而闇自滅。善男子。菩薩摩訶薩堅持淨戒。無悔恨心。自然而生。亦復如是。以淨戒故。心得歡喜。善男子。如端正人。自見面貌。心生歡喜。持淨戒者。亦復如是。善男子。破戒之人。見戒不淨。心不歡喜。如形殘者。自見面貌。不生喜悅。破戒之人。亦復如是。善男子。譬如牧牛。有二女人。一持酪瓶。

宗三本俱作增

解同作演

惡知識也同作  
大惡知識下同

調同作掉下同

大同作是

一持漿瓶俱共至城而欲賣之。於路脚跌二瓶俱破。一則歡喜。一則愁惱。持戒破戒亦復如是。持淨戒者心則歡喜。心歡喜故則便思惟。諸佛如來於涅槃中。說有能持清淨戒者則得涅槃。我今修習如是淨戒亦應得之。以是因緣心則悅樂。迦葉復言。喜之與樂有何差別。善男子。菩薩摩訶薩不作惡時名為歡喜。心淨持戒名之為樂。善男子。菩薩摩訶薩觀於生死則名為喜。見大涅槃名之為樂。下名為喜。上名為樂。離世共法名之為喜。得不共法名之為樂。以戒淨故身體輕柔。口無麤過。菩薩爾時若見若聞若觸若嘗若觸若知悉無諸惡。以無惡故心得安隱。以安隱故則得靜定。得靜定故得實知見。實知見故厭離生死。厭生死故則得解脫。得解脫故得見佛性。見佛性故得大涅槃。是名菩薩清淨持戒非世間戒。何以故。善男子。菩薩摩訶薩所受淨戒五法佐助。云何為五。一信。二慙。三愧。四善知識。五宗敬戒。離五蓋故。所見清淨離五見故。心無疑網。離五疑故。一者疑佛。二者疑法。三者疑僧。四者疑戒。五者疑不放逸。菩薩爾時即得五根。所謂信念精進定慧。得五根故得五種涅槃。謂色解脫乃至識解脫。是名菩薩清淨持戒非世間也。善男子。是名世間之所不知不見不覺。而是菩薩所知見覺。善男子。若我弟子受持讀誦書寫演說大涅槃經。有破戒者有人呵責輕賤毀辱而作是言。若佛祕藏大涅槃經有威力者。云何令汝毀所受戒。若人受持是涅槃經毀禁戒者。當知是經為無威力。若無威力雖復讀誦為無利益。緣是輕毀涅槃經故。復令無量無邊衆生墮於地獄。受持是經而毀戒者。則是衆生惡知識也。非我弟子是魔眷屬。如是之人我亦不聽受持是典。寧使不受不持不修。不以毀戒受持修習。善男子。若我弟子受持讀誦書寫演說涅槃經者。當正身心慎莫調戲輕躁舉動。身為調戲心為輕動。求有之心名為輕動。身造諸業名為調戲。若我弟子求有造業。不應受持是大乘典大涅槃經。若有如是受持經者。人當輕呵而作是言。若佛祕藏大涅槃經有威力者。云何令汝求有造業。若持經者求有造業。當知是經為無威力。若無威力雖復受持為無利益。緣是輕毀涅槃經故。復令無量無邊衆生墮於地獄。受持是經求有造業。則是衆生惡知識也。非我弟子是魔眷屬。復次善男子。若我弟子受持讀誦書寫演說大涅槃經。莫非時說。莫非國說。莫不請說。莫輕心說。莫處處說。莫自歎說。莫輕他說。莫滅佛法說。莫熾然世法說。善男子。若我弟子受持是經非時而說。乃至熾然世法說者。人當轉呵而作是言。若佛祕

得發於同作便

大法之同作爲  
大法

怨家同作爲怨

是故名同作故  
名爲

藏大涅槃經有威力者。云何令汝非時而說。乃至熾然世法而說。若持經者作如是說。當知是經爲無威力。若無威力。雖復受持爲無利益。緣是輕毀涅槃經故。令無量衆生墮於地獄。受持是經非時而說。乃至熾然世法而說。則是衆生惡知識也。非我弟子是魔眷屬。善男子。若欲受持者。說大涅槃者。說佛性者。說如來祕藏者。說大乘者。說方等經者。說聲聞乘者。說辟支佛乘者。說解脫者。見佛性者。先當清淨其身。以身淨故。則無呵責。無呵責故。令無量人於大涅槃生清淨信。信心生故。恭敬是經。若聞一偈一句一字。及說法者。則得發於阿耨多羅三藐三菩提心。當知是人則是衆生眞善知識。非惡知識。是我弟子。非魔眷屬。是名菩薩。非世間也。善男子。是名世間之所不知不見不覺。而是菩薩所知見覺。復次善男子。云何復名一切世間所不知見覺。而是菩薩所知見覺。所謂六念處。何等爲六。念佛念法念僧念戒念施念天。善男子。云何念佛。如來應正遍知。明行足。善逝。世間解。無上。調御丈夫。天人師。佛世尊。常不變易。具足十力。四無所畏。大師子吼。名大沙門。大婆羅門。大淨。畢竟到於彼岸。無能勝者。無見頂者。無有怖畏。不驚不動。獨一無侶。無師自悟。疾智。大智。利智。深智。解脫智。不共智。廣智。普智。畢竟智。寶成就。人中象王。人中牛王。人中龍王。人中丈夫。人中蓮花。分陀利花。調御人師。爲大施主。大法之師。以知法故名大法師。以知義故名大法師。以知時故名大法師。以知足故名大法師。以知我故名大法師。知大衆故名大法師。以知衆生種種性故名大法師。以知諸根利鈍故名大法師。說中道故名大法師。云何名如來。如過去諸佛所說不變。云何不變。過去諸佛爲度衆生說十二部經。如來亦爾。故名如來。諸佛世尊。從六波羅蜜三十七品。一空來。至大涅槃。如來亦爾。是故號佛爲如來也。諸佛世尊。爲衆生故。隨宜方便。開示三乘。壽命無量。不可稱計。如來亦爾。是故號佛爲如來也。云何爲應。世間之法。悉名怨家。佛應害故。故名爲應。夫四魔者是菩薩怨。諸佛如來爲菩薩時。能以智慧破壞四魔。是故名應。復次應者。名爲遠離。爲菩薩時。應當遠離無量煩惱。故名爲應。復次應者。名樂。過去諸佛爲菩薩時。雖於無量阿僧祇劫。爲衆生故。受諸苦惱。終無不樂。而常樂之。如來亦爾。是故名應。又復應者。一切人天。應以種種香華瓔珞幢幡伎樂而供養之。是故名應。云何正遍知。正者名不顛倒。遍知者於四顛倒無不通達。又復正者名爲苦行。遍知者知因苦行定有苦果。又復正者名世間中。遍知者畢竟定知修

遍下三本俱無知字

名同作者名為三字○是下同無也字次同

卽下同有是字

爲同作是○逝及解下同無善男子三字○間下同無解字○獨同作緣

染汙同作汙染

習中道得阿耨多羅三藐三菩提。又復正者名爲可數可量可稱。遍知者不可數不可量不可稱。是故號佛爲正遍知。善男子。聲聞緣覺亦有遍知亦不遍知。何以故。遍知者名五陰十二入十八界。聲聞緣覺無有遍知。云何明行足明。知。云何不遍知。善男子。假使二乘於無量劫觀一色陰不能盡知。以是義故。聲聞緣覺無有遍知。云何明行足明者。名得無量善果。行名脚足。善果者名阿耨多羅三藐三菩提。脚足者名爲戒慧。乘戒慧足得阿耨多羅三藐三菩提。是故名爲明行足也。又復明者名呪。行者名吉。足者名果。善男子。是名世間義。呪者名爲解脫。吉者名爲阿耨多羅三藐三菩提。果者名爲大般涅槃。是故名爲明行足也。又復明者名光。行者名業。足者名果。善男子。是名世間義。光者名不放逸。業者名六波羅蜜。果者名爲阿耨多羅三藐三菩提。又復明者名爲三明。一菩薩明。二諸佛明。三無明明。菩薩明者卽是般若波羅蜜。諸佛明者卽是佛眼。無明明者卽畢竟空。行者於無量劫爲衆生故修諸善業。足者明見佛性。以是義故名明行足。云何善逝。善者名高。逝者名高。善男子。是名世間義。高者名爲阿耨多羅三藐三菩提。不高者卽如來心也。善男子。心若高者不名如來。是故如來名爲善逝。又復善者名爲善知識。逝者善知識果。善男子。是名世間義。善知識者卽初發心。果者名爲大般涅槃。如來不捨最初發心得大涅槃。是故如來名爲善逝。又復善者名好。逝者名有。善男子。是名世間義。好者名見佛性。有者名大涅槃。善男子。涅槃之性實非有也。諸佛世尊因世間故說言是有。善男子。譬如世人實無有子說言有子。實無有道說言有道。涅槃亦爾。因世間故說言爲有。諸佛世尊成大涅槃故名善逝。善男子。云何世間解。善男子。世間者名爲五陰。解者名知。諸佛世尊善知五陰故名世間解。又世間者名爲五欲。解名不著。不著五欲故名世間解。又世間解者。東方無量阿僧祇世界。一切聲聞獨覺不知不見不解。諸佛悉知悉見悉解。南西北方四維上下亦復如是。是故號佛爲世間解。又世間者一切凡夫。解者知諸凡夫善惡因果。非是聲聞緣覺所知。唯佛能知是。故號佛爲世間解。又世間者名曰蓮花。解名不汙。善男子。是名世間義。蓮花者卽是如來。不汙者如來不爲世間八法之所染汙。是故號佛爲世間解。又世間解者諸佛菩薩名世間解。何以故。諸佛菩薩見世間故。故名世間解。善男子。如因食得命名食爲命。諸佛菩薩亦復如是。見世間故。故名世間解。云何無上士。上士者名之爲斷。無所斷者名無上士。諸佛世

如上三本俱無  
言字○故上同  
有故字○一下  
元明俱有近字  
○三下有近  
字  
令三本俱作便

調上同無爲字

是同作此

冥同作瞑

渡同作度下同

○河同作海

諸同作於

日同作爲

尊無有煩惱故無所斷。是故號佛爲無上士。又上士者名爲諍訟。無上士者無有諍訟。如來無諍。是故號佛爲無上士。又上士者名語可壞。無上士者語不可壞。如來所言一切衆生所不能壞。是故號佛爲無上士。又上士者名爲上座。無上士者名無上座。三世諸佛更無過者。是故號佛爲無上士。上者名新。士者名故。諸佛世尊體大涅槃。無新無故。是故號佛爲無上士。云何調御丈夫。自既丈夫復調丈夫。善男子。言如來者實非丈夫。非不丈夫。因調丈夫。故名如來爲丈夫也。善男子。一切男女若具四法則名丈夫。何等爲四。一善知識。二能聽法。三思惟義。四如說修行。善男子。若男若女具是四法則名丈夫。善男子。若有男子無此四法。則不得名爲丈夫也。何以故。身雖丈夫行同畜生。如來調伏若男若女。是故號佛爲調御丈夫。復次善男子。如御馬者凡有四種。一者觸毛。二者觸皮。三者觸肉。四者觸骨。隨其所觸稱御者意。如來亦爾。以四種法調伏衆生。一爲說生。令受佛語。如觸其毛。隨御者意。二說生。老便受佛語。如觸毛皮。隨御者意。三者說生。及以老病便受佛語。如觸毛皮。隨御者意。四者說生。及老病死便受佛語。如觸毛皮。肉骨隨御者意。善男子。御者調馬無有決定。如來世尊調伏衆生。必定不虛。是故號佛爲調御丈夫。云何天人師。師有二種。一者善教。二者惡教。諸佛菩薩常以善法教諸衆生。何等善法。謂身口意善。諸佛菩薩教諸衆生。作如是言。善男子。汝當遠離身不善業。何以故。以身惡業。是可遠離得解脫故。是故我以此法教汝。若是惡業。不可遠離得解脫者。終不教汝令遠離也。若諸衆生離惡業。已墮三惡者。無有是處。以遠離故。成阿耨多羅三藐三善。提得大涅槃。是故諸佛菩薩常以此法教化衆生。口意亦爾。是故號佛爲無上師。復次昔未得道。今已得之。以所得道爲衆生說。從本已來。未修梵行。今已修竟。以已所修爲衆生說。自破無明。復爲衆生說。破壞無明。自得淨目。復爲衆生說。破除盲冥。令得淨眼。自知二諦。復爲衆生演說二諦。既自解脫。復爲衆生說解脫法。自渡無邊生死大河。復令衆生皆悉得渡。自得無畏。復教衆生。令無怖畏。自既涅槃。復爲衆生演大涅槃。是故號佛爲無上師。天者名晝。天上晝長夜短。是故名天。又復天者名無愁惱。常受快樂。是故名天。又復天者名爲燈明。能破黑暗。而爲大明。是故名天。亦以能破惡業黑暗。得諸善業。而生天上。是故名天。又復天者名吉。以吉祥故。得名爲天。又復天者名日。日有光明。故名日爲天。以是義故名爲天也。人者名日。能多恩義。又復人者身口柔

然同作而

慧三本俱作惠

薩下同無摩訶  
薩三字○尙宋  
元俱作上

念進三本俱作  
進念

調上同有不字  
○誤同作語○  
純同作淨

舍下同無宅字  
次同○到同作  
至次同○見同  
作視

軟。又復人者名有憍覺。又復人者能破憍覺。善男子。諸佛雖爲一切衆生無上天師。然經中說爲天人師。何以故。善男子。諸衆生中。軍天與人。能發阿耨多羅三藐三菩提心。能修十善業道。能得須陀洹果。斯陀含果。阿那含果。阿羅漢果。時支佛道。得阿耨多羅三藐三菩提。是故號佛爲天人師。云何爲佛。佛者名覺。既自覺悟。復能覺他。善男子。譬如有人。覺知有賊。賊無能爲。菩薩摩訶薩能覺一切無量煩惱。既覺了已。令諸煩惱無所能爲。是故名佛。以是覺故不生不老不病不死。是故名佛。婆伽婆者。婆伽名破。婆名煩惱。能破煩惱故名婆伽婆。又能成就諸善法故。又能善解諸法義故。有大功德無能勝故。有大名聞遍十方故。又能種種大慧施故。又於無量阿僧祇劫吐女根故。善男子。若男若女能如是念佛者。若行若住若坐若臥。若晝若夜。若明若闇。常得不離見佛世尊。善男子。何故名爲如來。應正遍知。乃至婆伽婆。而有如是無量功德大名稱耶。善男子。菩薩摩訶薩於昔無野阿僧祇劫。恭敬父母和尚。諸師上座長老。於無量劫常爲衆生而行布施。堅持禁戒。修習忍辱。勤行精進。禪定智慧。大慈大悲。大喜大捨。是故今得三十二相八十種好。令剛之身。又復菩薩於昔無量阿僧祇劫。修習信念。進定慧根。於諸師長。恭敬供養。常爲法利不爲食利。菩薩若持十二部經。若讀若誦。常爲衆生令得解脫。安隱快樂。終不自爲。何以故。菩薩常修出世間心。及出家心。無爲之心。無誣訟心。無垢穢心。無繫縛心。無取著心。無覆蓋心。無無記心。無生死心。無疑網心。無貪欲心。無瞋恚心。無愚癡心。無憍慢心。無穢濁心。無煩惱心。無苦心。無量心。廣大心。虛空心。無心無無心。調心不護心。無覆藏心。無世間心。常定心。常修心。常解脫心。無報心。無願心。善願心。無誤心。柔軟心。不住心。自在心。無漏心。第一義心。不退心。無常心。正直心。無諂曲心。純善心。無多少心。無堅心。無凡夫心。無聲聞心。無緣覺心。善知心。界知心。生界知心。住界知心。自在界心。是故今得十力。四無所畏。大悲。三念處。常樂我淨。是故得稱如來。乃至婆伽婆。是名菩薩摩訶薩念佛。云何菩薩摩訶薩念法。善男子。菩薩摩訶薩思惟諸佛所可說法。最妙最上。因是法。故能令衆生得現在果。唯此正法。無有時節。法眼所見。非肉眼見。然不可以譬喻爲比。不生不出。不住不滅。不始不終。無爲無數。無舍者。爲作舍宅。無歸作歸。無明作明。未到彼岸。到彼岸。爲無香處。作無礙香。不可見見。不動不轉。不長不短。永斷諸樂。而安隱樂。畢竟微妙。非色斷色。而亦是色。乃至非識斷識。而亦

繞三本俱作擾

大上同有大姓  
二字

戒下同無則字

緣下同無故字

成同作得

是上同有此字

礙同作闍下同

○集同作習○

戒同作我

是誠。非業斷業非結斷結。非物斷物而亦是物。非界斷界而亦是界。非有斷有而亦有。非入斷入而亦是入。非因斷因而亦是因。非果斷果而亦是果。非虛非實。斷一切實而亦是實。非生非滅。永斷生滅而亦是滅。非相非非相。斷一切相而亦是相。非教非不教而亦是師。非怖非安。斷一切怖而亦是安。非忍非不忍。永斷不忍而亦是忍。非止非不止。斷一切止而亦是止。一切法頂。悉能永斷一切煩惱。清淨無相。永脫諸相。無量衆生畢竟住處。能滅一切生死熾火。乃是諸佛所游居處常不變易。是名菩薩念法。云何念僧。諸佛聖僧如法而住。受正直法隨順修行。不可覩見不可捉持。不可破壞無能燒害。不可思議。一切衆生良祐福田。雖爲福田無所受取清淨無穢。無漏無爲廣普無邊。其心調柔平等無二。無有燒濁常不變易。是名念戒。菩薩思惟。有戒不破不漏不壞不離。雖無形色而可護持。雖無觸對善修方便。可得具足。無有過咎。諸佛菩薩之所讚歎。是大方等大涅槃因。善男子。譬如大地船舫環珞。大海灰汁舍宅。刀劍橋梁良醫妙藥。阿伽陀藥如意寶珠。脚足眼目父母陰涼。無能劫盜不可燒害。火不能焚。水不能漂。大山梯墜。諸佛菩薩妙寶勝幢。若住是戒。得須陀洹果。我亦有分。然我不須。何以故。若我得是須陀洹果。不能廣度一切衆生。若住是戒。則得阿耨多羅三藐三菩提。我亦有分。是我所欲。何以故。若得阿耨多羅三藐三菩提。當爲衆生廣說妙法而作救護。是名菩薩摩訶薩念戒。云何念施。菩薩摩訶薩深觀此施。乃是阿耨多羅三藐三菩提因。諸佛菩薩親近修習如是布施。我亦如是親近修習。若不惠施不龍莊嚴四部之衆。施雖不能畢竟斷結。而能除破現在煩惱。以施因緣。故常爲十方無量無邊恒河沙等世界衆生之所稱歎。菩薩摩訶薩施衆生食則施其命。以是果報。成佛之時常不變易。以施樂故。成佛之時則得安樂。菩薩施時如法求財不侵彼施。是故成佛得清淨涅槃。菩薩施時令諸衆生不求而得。是故成佛得自在。我以施因緣。令他得力。是故成佛獲得十力。以施因緣。令他得語。是故成佛得四無礙。諸佛菩薩修集是施爲涅槃因。我亦如是修習布施爲涅槃因。廣說如雜華中。云何念天。有四天王處。乃至非想非非想處。若有信心。得四天王處。我亦有分。若戒多聞。布施智慧。得四天王處。乃至得非想非非想處。我亦有分。然非我欲。何以故。四天王處。乃至非想非非想處。皆是無常。以無常故。生老病死。以是義故。非我所欲。譬如幻化。誑於愚夫。智慧之人所不惑著。如幻化者。卽是

求於同志志求

涅槃經同作槃涅槃

不同作來

進之同作精進

惡同作患

人同作唱○漢宋元俱作度○下同○修同作傷○次修宋元俱作傷○亦三

四天王處乃至非想非非想處。愚者卽是一切凡夫。我則不同。凡夫愚人。我曾聞有第一義天。謂諸佛菩薩常不變易。以常住故不生。不老不死。我爲衆生精勤求於第一義天。何以故。第一義天能令衆生除斷煩惱。猶如意樹。若我有信。乃至有慧。則能得是第一義天。當爲衆生廣分別說第一義天。是名菩薩摩訶薩。念天。善男子。是名菩薩非世間也。是爲世間不知見覺。而是菩薩所知見覺。善男子。若我弟子。謂受持讀誦書寫演說十二部經。及以受持讀誦書寫敷演解說大涅槃經等無差別者。是義不然。何以故。善男子。大涅槃者卽是一切諸佛世尊。甚深祕藏。以是諸佛甚深祕藏。是則爲勝。善男子。以是義故。大涅槃經甚奇甚特。不可思議。迦葉菩薩白佛言。世尊。我亦知是大涅槃經甚奇甚特。不可思議。佛法衆僧不可思議。菩薩書提大涅槃經亦不可思議。世尊。以何義故。復言菩薩不可思議。善男子。菩薩摩訶薩無有教者。而能自發菩提之心。旣發心已。勤修精進。正使大火焚燒身首。終不求救捨念法心。何以故。菩薩摩訶薩常自思惟。我於無量阿僧祇劫。或在地獄餓鬼畜生人中天上。爲諸結火之所燒燃。初不曾得一決定法。決定法者卽是阿耨多羅三藐三菩提。我爲阿耨多羅三藐三菩提。終不護惜身心與命。我爲阿耨多羅三藐三菩提。正使碎身猶如微塵。終不放捨勤精進也。何以故。勤進之心卽是阿耨多羅三藐三菩提。因善男子。如是菩薩未見阿耨多羅三藐三菩提。乃能如是不惜身命。況復見已。是故菩薩不可思議。又復不可思議。菩薩摩訶薩所見生死無量過患。非是聲聞緣覺所及。雖知生死無量過患。爲衆生故。於中受苦不生厭離。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩爲衆生故。雖在地獄受諸苦惱。如三禪樂。是故復名不可思議。善男子。譬如長者其家失火。長者見已。從舍而出。諸子在後。未脫火難。長者爾時定知火害。爲諸子故。旋還赴救。不顧其難。菩薩摩訶薩亦復如是。雖知生死多諸過患。爲衆生故。處之不厭。是故復名不可思議。善男子。無量衆生發菩提心。見生死中多諸過惡。心卽退沒。或爲聲聞。或爲緣覺。若有菩薩聞是經者。終不退失菩提之心。而爲聲聞辟支佛也。如是菩薩雖復未階初不動地。而心堅固。無有退沒。是故復名不可思議。善男子。若有人言。我能浮渡大海之水。如是之言。可思議不。世尊。如是之言。或可思議。或不可思議。何以故。若人渡者。則不可思議。阿修羅渡。則可思議。善男子。我亦不說阿修羅也。正說人耳。世尊。人中亦有可思議者。不可思議者。世尊。人亦二



本俱作有○如  
同作而○於同  
作彼

如乃至處十二  
字三本俱作諸  
死屍問棘刺叢  
林大黑闇中○  
出衆穢同作諸  
穢惡○處同作  
○出乃至也上  
七字同作出不  
起貪欲瞋恚之  
心而亦未得初  
住之地十六字  
復同作是○  
同於作得是○  
作亦○欲同  
作穢

復同作菩薩白  
佛四字○當久  
近住同作住當  
久近

種。一者聖人。二者凡夫。凡夫之人則不可思議。賢聖之人則可思議。善男子。我說凡夫不說聖人。世尊。若凡夫人實不可思議。善男子。凡夫之人實不能渡大海水也。如是菩薩實能渡於生死大海。是故復名不可思議。善男子。若有人能以藕根絲懸須彌山。可思議不。不也。世尊。善男子。菩薩摩訶薩於一念頃。悉能稱量一切生死。是故復名不可思議。善男子。菩薩摩訶薩已於無量阿僧祇劫。常觀生死無常。無我無樂無淨。而為衆生分別演說常樂我淨。雖如是說。然非邪見。是故復名不可思議。善男子。如人入水水不能溺。入大猛火火不能燒。如是之事不可思議。菩薩摩訶薩亦復如是。雖處生死不為生死之所惱害。是故復名不可思議。善男子。入有三品。謂上中下。下品之人初入胎時。作是念言。我今處廁衆穢歸處。如死屍間衆棘刺中大黑闇處。初出胎時。復作是念。我今出廁出衆穢處。乃至出於大黑闇處。中品之人作是念言。我今入於衆樹林果清淨河中房室舍宅。出時亦爾。上品之人作是念言。我昇殿堂在華林間。乘馬乘象登陟高山。出時亦爾。菩薩摩訶薩初入胎時。自知入胎住時。知住出時。知出終不生於貪瞋之心。而未得階初住地也。是故復名不可思議。善男子。阿耨多羅三藐三菩提。實不可以譬喻為比。善男子。心亦不可以方喻為比。而皆可說。菩薩摩訶薩無有師諮受學之處。而能得於阿耨多羅三藐三菩提。得是法。已心無慳吝。常為衆生而演說之。是故復名不可思議。善男子。菩薩摩訶薩有身遠離非口。有口遠離非身。有非身口。而亦遠離。身遠離者。謂離殺盜婬。是名身遠離非口。口遠離者。謂離妄語兩舌惡口無義語。是名口遠離非身。非身非口。是遠離者。所謂遠離貪欲瞋恚邪見。善男子。是名非身非口。而是遠離。善男子。菩薩摩訶薩不見一法。是身是業。及與離主。而亦可離。是故復名不可思議。口亦如是。善男子。從身離身。從口離口。從慧遠離非身非口。善男子。實有此慧。然不能令菩薩遠離。何以故。善男子。無有一法能壞能作。有為法性異生異滅。是故此慧不能遠離。善男子。慧不能破。火不能燒。水不能爛。風不能動。地不能持。生不能生。老不能老。住不能住。壞不能壞。貪不能貪。瞋不能瞋。癡不能癡。以有為性異生異滅故。菩薩摩訶薩終不生念。我以此慧破諸煩惱。而自說言。我破煩惱。雖作是說。非是虛妄。是故復名不可思議。迦葉。復言。世尊。我今始知菩薩摩訶薩不可思議。佛法衆僧大涅槃經。及受持者。菩提涅槃不可思議。世尊。無上佛法當久近住幾時而滅。善男子。若大涅槃經乃

佛同作受

同同作密次同

○密明作蜜○先三本俱作上

法及二下三本俱無者字○者同作法

永不畢竟入於六字同作不畢竟三字  
愈同作盡

至有是五行。所謂舉行梵行。天行。病行。嬰兒行。若我弟子有能受持讀誦書寫演說其義。為諸眾生之所恭敬。尊重讚歎。種種供養。當知爾時佛法未滅。善男子。若大涅槃經具足流布。當爾之時。我諸弟子。多犯禁戒。造作眾惡。不能敬信。如是經典。以不信故。不能受持。讀誦書寫。解說其義。不為眾人之所恭敬。乃至供養。見受持者。輕毀誹謗。汝是六師。非佛弟子。當知佛法將滅不久。迦葉。菩薩復白佛言。世尊。我親從佛聞。如是義。迦葉。佛法住世。七日。然後滅盡。世尊。迦葉。如來有是經。不如其有者。云何言滅。如其無者。云何說言。大涅槃經。是諸如來秘密之藏。佛言。善男子。我先說言。唯有文殊。乃解是義。今當重說。至心諦聽。善男子。諸佛世尊。有二種法。一者世法。二者第一義法。世法可滅。第一義法則不壞滅。復有二種。一者無常。無我。無樂。無淨。二者常樂我淨。無常無我。無樂無淨。則有壞滅。常樂我淨。則無壞滅。復有二種。一者二乘所持。二者菩薩所持。二乘所持。則有壞滅。菩薩所持。則無壞滅。復有二種。一者外。二者內。外法者。則有壞滅。內法者。則無壞滅。復有二種。一者有為。二者無為。有為之法。則有壞滅。無為之法。無有壞滅。復有二種。一者可得。二者不可得。可得之法。則有壞滅。不可得者。無有壞滅。復有二種。一者共法。二者不共。共法壞滅。不共之法。無有壞滅。復有二種。一者人中。二者天中。人中壞滅。天無壞滅。復有二種。一者十一部經。二者方等經。十一部經。則有壞滅。方等經典。無有壞滅。善男子。若我弟子。受持讀誦書寫。解說方等經典。恭敬供養。尊重讚歎。當知爾時佛法不滅。善男子。汝向所問。迦葉。如來有是經不者。善男子。大涅槃經。悉是一切諸佛秘密。何以故。諸佛雖有十一部經。不說佛性。不說如來常樂我淨。諸佛世尊。永不畢竟入於涅槃。是故此經。名為如來秘密之藏。十一部經。所不說故。故名為藏。如人七寶。不出外用。名之為藏。善男子。是人所以護藏此物。為未來事故。何等未來事。所謂殺害。賊來侵圍。值遇惡王。為用贖命。道路急難。財難得時。乃當出用。善男子。諸佛如來。秘密之藏。亦復如是。為未來世諸惡比丘。畜不淨物。為因眾說。如來畢竟入於涅槃。遍滿世典。不敬佛經。如是等惡。現於世時。如來為欲滅。是諸惡。令得遠離。邪命利養。如來則為演說。是經。若是經典秘密之藏。滅不現時。當知爾時佛法則滅。善男子。大涅槃經。常不變易。云何難言。迦葉。佛時。有是經不者。善男子。迦葉。佛時。所有眾生。貪欲。微薄。智慧。慳多。諸菩薩摩訶薩。等調柔易化。有大威德。總持不忘。如大象王。世界清淨。一切眾生。悉知。

滅見不滅不滅見  
見同作不滅見  
滅滅見不〇謬  
見同作見是〇  
嘔同作嘔〇海  
底下三本俱有  
不可說言如來  
法滅寧言以索  
繫縛猛風十六  
字〇言下同無  
以乃至言十六  
字〇彼同作而  
〇提下同無已  
字

如來終不畢竟入於涅槃常住不變。雖有是典不須演說。善男子。今世衆生多諸煩惱。愚癡意忘。無有智慧。多諸疑網。信根不立。世界不淨。一切衆生咸謂如來無常遷變。畢竟入於大般涅槃。是故如來演說是典。善男子。迦葉。佛法實亦不滅。何以故。常不變故。善男子。若有衆生我見無我。我見我。常見無常。常見常。樂見無樂。無樂見樂。淨見不淨。不淨見淨。滅見不滅。見滅。罪見非罪。非罪見罪。輕罪見重。重罪見輕。乘見非乘。非乘見乘。道見非道。非道見道。實是菩提。見非菩提。實非菩提。謬見菩提。苦見非苦。集見非集。滅見非滅。實見非實。實是世諦。見第一義諦。第一義諦見是世諦。歸見非歸。非歸見歸。以真佛語名爲魔語。實是魔語。以爲佛語。如是之時。諸佛乃說大涅槃經。善男子。寧說蚊虻。盡大海底。不可說言如來法滅。寧說口吹須彌散壞。不可說言如來法滅。寧言以索繫縛猛風。不可說言如來法滅。寧言佞墮羅火中生蓮華。不可說言如來法滅。寧說阿伽陀藥而爲毒藥。不可說言如言法滅。寧說月可令熱。日可令冷。不可說言如來法滅。寧說四大各捨己性。不可說言如來法滅。善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。未有弟子解甚深義。彼佛世尊便涅槃者。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。佛雖涅槃。當知是法久住於世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。雖有弟子解甚深義。無有篤信白衣檀越敬重佛法。佛便涅槃。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。多有篤信白衣檀越敬重佛法。佛雖涅槃。當知佛法久住於世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。佛復涅槃。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。彼諸弟子凡所演說。不貪利養。爲求涅槃。佛雖滅度。當知是法久住於世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。雖有弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。而諸弟子多起誣訟。互相是非。佛復涅槃。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。彼諸弟子修和敬法。不相是非。互相尊重。佛雖涅槃。當知是法久住不滅。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。雖有

至上同有乃字

善上三本俱無  
復次二字○漢  
下同有果字

酪同作酪○油  
下同轉等字○  
舍同作家次同  
○舍同作舍○  
畜一同無字  
○之同作爲  
者同作阿

弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。彼諸弟子爲大涅槃而演說法。互相恭敬不起誣訟。然畜一切不淨之物。復自讚言。我得須陀洹果。乃至阿羅漢果。佛復涅槃。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子解甚深義。復有篤信白衣檀越敬重佛法。彼諸弟子爲大涅槃演說經法。善修和敬。互相尊重。不畜一切不淨之物。亦不自言得須陀洹乃至得阿羅漢。彼佛世尊雖復滅度。當知是法久住於世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子乃至不畜不淨之物。又不自言得須陀洹。乃至阿羅漢。各執所見種種異說。而作是言。長老。諸佛所制四重之法。乃至七滅諍法。爲衆生故。或遮或開。十二部經亦復如是。何以故。佛知國土時節各異。衆生不同。利鈍差別。是故如來或遮或開。有輕重說。善男子。譬如良醫爲病服乳。爲病遮乳。熱病聽服冷病則遮。如來亦爾。觀諸衆生煩惱病根亦開亦遮。長老。我親從佛聞如是義。唯我知義。汝不能知。唯我解律。汝不能解。我知諸經。汝不能知。彼佛復滅。當知是法不久住世。復次善男子。若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已。有諸弟子乃至不言我得須陀洹果。乃至阿羅漢。亦不說言諸佛世尊爲衆生故。或遮或開。長老。我親從佛聞如是義。如是法如是律。長老。當依如來十二部經。此義若是我當受持。若其非者。我當棄捨。彼佛世尊雖復涅槃。當知是法久住於世。善男子。我法滅時。有聲聞弟子。或說有神。或說神空。或說有中陰。或說無中陰。或說有三世。或說無三世。或說有三乘。或說無三乘。或言一切有。或言一切無。或言衆生有始有終。或言衆生無始無終。或言十二因緣是有爲法。或言因緣是無爲法。或言如來有病苦行。或言如來不聽比丘食十種肉。何等爲十。人蛇象馬驢狗師子猪狐獼猴。其餘悉聽。或言一切不聽。或言比丘不作五事。何等爲五。不賣生口刀酒酪沙胡麻油等。其餘悉聽。或言不聽入五種舍。何等爲五。屠兒婬女酒家王宮旃陀羅舍。餘舍悉聽。或言不聽鬻妻耶衣。餘一切聽。或言如來聽諸比丘受畜衣食。具其價各直十萬兩金。或言不聽。或言涅槃常樂我淨。或言涅槃直是結盡。更無別法。名爲涅槃。譬如織縷名之爲衣。衣既壞已。名之無衣。實無別法。名無衣也。涅槃之體亦復如是。善男子。當爾之時。我諸弟子。正說者少。邪說者多。受正法少。受邪法多。受佛語少。受魔語多。善男子。爾時拘賤彌彌國有二弟子。一者羅漢。二者破戒。破戒徒衆凡有五百。羅漢徒衆其數一百。破戒

阿上同無時字

純同作皆

予同作於

探三本俱作采

我樂同作樂我

尸下同無那字

悉同作悲

者說如來畢竟入於涅槃。我親從佛聞如是義。如來所制四重之法。若持亦可犯亦無罪。我今亦得阿羅漢果。四無礙智。而阿羅漢亦犯如是四重之法。四重之法若是實罪。阿羅漢者終不應犯。如來在世制言堅持。臨涅槃時皆悉放捨。時阿羅漢比丘言。長老。汝不應說如來畢竟入於涅槃。我知如來常不變易。如來在世及涅槃後。犯四重禁罪無差別。若言羅漢犯四重禁。是義不然。何以故。須陀洹人尚不犯禁。況阿羅漢。若長老言我是羅漢。阿羅漢者終不想我得羅漢。阿羅漢者唯說善法不說不善。長老所說純是非法。若有得見十二部經。定知長老非阿羅漢。善男子。爾時破戒比丘徒衆即共斷是阿羅漢命。善男子。是時魔王因是二衆忿恚之心。悉共害是六百比丘。爾時凡夫各共說言。哀哉佛法於是滅盡。而我正法實不滅也。爾時其國有十二萬諸大薩薩善持我法。云何當言我法滅耶。當于爾時閻浮提內無一比丘爲我弟子。爾時波旬悉以大火焚燒一切所有經典。其中或有遺餘在者。諸婆羅門即共偷取。處處探拾安置已。典以是義故。諸小菩薩佛未出時。率共信受婆羅門語。諸婆羅門雖作是說。我有齋戒而諸外道真實無也。諸外道等雖復說言有我樂淨。而實不解我樂淨義。直以佛法一字二字一句二句。說言我典有如是義。爾時拘尸那城娑羅雙樹間。無量無邊阿僧祇衆聞是語已。悉共唱言。世間虛空。世間虛空。迦葉菩薩告諸大衆。汝等且莫憂愁啼哭。世間不空。如來常住無有變易。法僧亦爾。爾時大衆聞是語已。啼哭即止。悉發阿耨多羅三藐三菩提心。

# 大般涅槃經卷第十六

# 大般涅槃經卷第十七

〔麗多〕宋公、元公、明在

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 梵行品之四

弊同作慙○惡  
同作過○脫同  
作諸

字輩提希同作  
輩提希后

婦同作淫下同  
直同作即○王  
明作正

顛領三本俱作  
燥○燥同作  
燥○燥同作  
燥○燥同作

爾時王舍大城阿闍世王。其性弊惡喜行殺戮。具口四惡貪患愚癡。其心熾盛。唯見現在不見未來。純以惡人而爲眷屬。貪著現世五欲樂故。父王無辜橫加逆害。因害父已心生悔熱。身脫瓔珞伎樂不御。心悔熱故遍體生瘡。其瘡臭穢不可附近。尋自念言。我今此身已受花報。地獄果報將近不遠。爾時其母字輩提希。以種種藥而爲塗之。其瘡遂增無有降損。王卽白母。如是瘡者從心而生非因大起。若言衆生有能治者。無有是處。時有大臣名曰月稱。往至王所。在一面立。白言。大王。何故愁悴顏容不悅。爲身痛耶。爲心痛乎。王答臣言。我今身心豈得不痛。我父無辜橫加逆害。我從智者會聞是義。世有五人不脫地獄。謂五逆罪。我今已有無量無邊阿僧祇罪。云何身心而得不痛。又無良醫治我身心。臣言。大王。莫大愁苦。卽說偈言。

若常愁苦 愁遂增長 如人喜眠 眠則滋多 貪淫嗜酒 亦復如是

如王所言。世有五人不脫地獄。誰往見之。來語王耶。言地獄者。直是世間多智者說。如王所言。世無良醫治身心者。今有大醫名富蘭那。一切知見得自在定。畢竟修習清淨梵行。常爲無量無邊衆生。演說無上涅槃之道。爲諸弟子說如是法。無有黑業無黑業報。無有白業無白業報。無黑白業無黑白業報。無有上業及以下業。是師今在王舍城中。唯願大王屈駕往彼。可令是師療治身心。時王答言。審能如是滅除我罪。我當歸依。復有一臣名曰藏德。復往王所。而作是言。大王。何故而貌顛頽唇口乾。瞶音聲微細。猶如怯人見大怨敵。顏色憔悴。將何所苦。爲身痛耶。爲心痛乎。王卽答言。我今身心云何不痛。我之瘡。實無有慧目。近諸惡友而爲親善。隨提婆達惡人之言。正

今同作令○又  
無同作無有○  
懷妊等同作等  
懷妊○煞同作  
害下同○實同  
作亦  
愍同作憫下同

癡同作闍下同

流同作仁○辜  
同作過次同○  
瞻明作膽○及  
三本俱作汙○  
者害及同作人  
必○法元明俱  
俱作亦○亦三  
同作亦名曰○  
言同作名曰○  
之同作爲次同

法之王橫加逆害。我昔曾聞智人說偈

若於父母 佛及弟子 生不善心 起於惡業 如是果報 在阿鼻獄

以是事故。今我心怖生大苦惱。又無良醫而見救療。大臣復言。唯願大王。且莫愁怖。法有二種。一者出家。二者王法。王法者謂害其父。則王國土。雖云是逆實無有罪。如迦羅羅蟲要壞母腹。然後乃生。生法如是。雖破母身實亦無罪。驟懷妊等亦復如是。治國之法。法應如是。雖煞父兄實無有罪。出家法者。乃至蚊蟻殺亦有罪。唯願大王。寬意莫愁。何以故。若常愁苦。愁遂增長。如人喜眠。眠則滋多。貪婬嗜酒亦復如是。如王所言。世無良醫。治身心者。今有大師名末伽黎。拘舍離子。一切知見。憐愍衆生。猶如赤子。已離煩惱。能拔衆生三毒利箭。一切衆生於一切法。無知見覺。唯是一人。獨知見覺。如是大師常爲弟子說。如是法。一切衆生身有七分。何等爲七。地水火風苦樂壽命。如是七法。非化非作。不可毀害。如伊師迦草。安住不動。如須彌山。不捨不作。猶如乳酪。各不諍訟。若苦若樂。若善不善。投之利刀。無所傷害。何以故。七分空中。無妨礙。故命亦無害。何以故。無有害者及死者。故無作無受。無說無聽。無有念者及以教者。常說是法。能令衆生滅除一切無量重罪。是師今在王舍大城。唯願大王。往至其所。王若見者。衆罪消滅。時王答言。審能如是。除滅我罪。我當歸依。復有一臣名曰實得。復到王所。卽說偈言。

大王何故 身脫瓔珞 首髮蓬亂 乃至如是 王身何故 戰慄不安 猶如猛風 吹動花樹

王今何故容色愁悴。猶如農夫。下種之後。天不降雨。愁苦如是。爲是心痛。爲身痛耶。王卽答言。我今身心豈得不痛。我父先王慈愛流惻。特見矜念。實無辜咎。往問相師。相師答言。是兒生已。定當害父。雖聞是語。猶見瞻養。曾聞智者作如是言。若人通母。及比丘尼。偷僧祇物。煞髮無上菩提心者。害及其父。如是之人。畢定當墮阿鼻地獄。我今身心豈得不痛。大臣復言。唯願大王。且莫愁苦。如其父王修解脫者。害則有罪。若治國法。殺則無罪。大王非法者。名爲無法。無法者。名爲無法。譬如無子。名爲無子。亦如惡子。名之無子。雖言無子。實非無子。如食無鹽。名爲無鹽。食若少鹽。亦名無鹽。如河無水。名爲無水。若有少水。亦名無水。如念念滅。亦言無常。雖住一劫。亦名無常。如人受苦。名爲無樂。雖受少樂。亦名無樂。如不自在。名之無我。雖少自在。亦名無我。如闇夜時。名之無日。雲霧之時。亦

今王煞同作王今害

刪同作珊○賦宋作抵○淵深三本俱作淵廣

堯同作机次同

此間生同作生此間

故同作便○則元明俱作得○即三本俱作復○花同作枝○我今同作今我○然同作而

那三本俱作耶

言無日。大王。雖言少法名爲無法。實非無法。願王留神聽。臣所說一切衆生皆有餘業。以業緣故。數受生死。若使先王有餘業者。今王煞之。竟有何罪。唯願大王。寬意莫愁。何以故。

若常愁苦 愁遂增長 如人寤眠 眠則滋多 貪婬嗜酒 亦復如是

如王所言。世無良醫。治身心者。今有大師名刪闍耶毗羅。毗子。一切知見。其智淵深。猶如大海。有大威德。具大神通。能令衆生離諸疑網。一切衆生。不知見覺。唯是一人。獨知見覺。今者近在王舍城住。爲諸弟子說如是法。一切衆中。若是王者。自在隨意。造作善惡。雖爲衆惡。悉無有罪。如火燒物。無淨不淨。王亦如是。與火同性。譬如大地。淨穢普載。雖爲是事。初無瞋喜。王亦如是。與地同性。譬如水性。淨穢俱洗。雖爲是事。亦無憂喜。王亦如是。與水同性。譬如風性。淨穢等吹。雖爲是事。亦無憂喜。王亦如是。與風同性。如秋髡樹。春則還生。雖復髡斫。實無有罪。一切衆生。亦復如是。此間命終。還此間生。以還生故。當有何罪。一切衆生。苦樂果報。悉皆不由現在世業。因在過去。現在受果。現在無因。未來無果。以現果故。衆生持戒。勤修精進。遮現惡果。以持戒故。則得無漏。得無漏故。盡有漏業。以盡業故。衆苦得盡。衆苦盡故。故得解脫。唯願大王。速往其所。令其療治。身心苦痛。王若見者。衆罪則除。王即答言。審有是師。能除我罪。我當歸依。復有一臣名悉知義。即至王所作。如是言。王。今何故形不端嚴。如失國者。如泉枯涸。池無蓮花。樹無花葉。破戒比丘。身無威德。爲身痛耶。爲心痛乎。王即答言。我今身心。豈得無痛。我父先王。慈惻流念。然我不孝。不知報恩。常以安樂安樂於我。而我背恩。反斷其樂。先王無辜。橫興逆害。我亦曾聞智者說言。若有害父。當於無量阿僧祇劫。受大苦惱。我今不久。必墮地獄。又無良醫。救療我罪。大臣即言。唯願大王。放捨愁苦。王不聞耶。昔者有王名曰羅摩。害其父。已得紹王位。跋提大王。毗樓真王。那曠沙王。迦帝迦王。毗舍佉王。月光明王。日光明王。愛王。持多人王。如是等王。皆害其父。得紹王位。然無一王。入地獄者。於今現在。毗琉璃王。優陀那王。惡性王。鼠王。蓮花王。如是等王。皆害其父。悉無一王。生愁惱者。雖言地獄。餓鬼。天中。誰有見者。大王。唯有二有一者。人道。二者。畜生。雖有是二。非因緣生。非因緣死。若非因緣。何有善惡。唯願大王。勿懷愁怖。何以故。

若常愁苦 愁遂增長 如人寤眠 眠則滋多 貪婬嗜酒 亦復如是



左塗梅檀同作  
梅檀塗左其中  
梅宋元俱作旃

已三本俱作以  
次同○言同作  
語

敗宋作販

譬上三本俱無  
大臣二字

積同作矛

利同作尖○色  
異同作異色○  
漬同作澤○辭  
同作詞○害其  
元明俱作其害

如王所言。世無良醫。治身心者。今有大師名阿耨多羅。一切知見。觀金與土平等無二。刀斫右脅。左塗梅檀。於此二人心無差別。等視怨親。心無異相。此師真是世之良醫。若行若立。若坐若臥。常在三昧。心無分散。告諸弟子。作如是言。若自作若教他作。若自斫若教他斫。若自炙若教他炙。若自害若教他害。若自偷若教他偷。若自淫若教他淫。若自妄語若教他妄語。若自飲酒若教他飲酒。若殺一村一城一國。若以刀輪殺一切衆生。若恒河已南。布施衆生。恒河已北。殺害衆生。悉無罪福。無施戒定。今者近在王舍城住。願王速往。王若見者。衆罪除滅。王言。大臣。審能如是除滅我罪。我當歸依。復有大臣名曰吉德。復往王所作如是言。王今何故面無光澤。如日中燈。如晝時月。如失國君。如荒敗土。大王。今者四方清夷。無諸怨敵。而今何故如是愁苦。爲身苦耶。爲心苦乎。有諸王子。常生此念。我今何時當得自在。大王。今者已果所願。自在王領摩伽陀國。先王寶藏具足而得。唯當快意。縱情受樂。如是愁苦。何用經懷。王卽答言。我今云何得不愁惱。大臣。譬如愚人。但貪其味。不見利刀。如食雜毒。不見其過。我亦如是。如鹿見草。不見深穽。如鼠貪食。不見貓狸。我亦如是。見現在樂。不見未來不善苦果。曾從智者聞如是言。寧於一日受三百躄。不於父母生一念惡。我今已近地獄。熾火云何當得不愁惱耶。大臣復言。誰來誑王。言有地獄。如刺頭利。誰之所造。飛鳥色異。復誰所作。水性潤。積石性堅硬。如風動性。如火熱性。一切萬物。自死自生。誰之所作。言地獄者。直是智者文辭造作。言地獄者。爲有何義。臣當說之。地者名地。獄者名破。破於地。獄無有罪報。是名地獄。又復地者名入。獄者名天。以害其父。故到人天。以是義。故婆藪仙人唱言。殺羊得人天樂。是名地獄。又復地者名命。獄者名長。以殺生。故得壽命長。故名地獄。大王。是故當知實無地獄。大王。如種麥得麥。種稻得稻。殺地獄者。還得地獄。殺害於人。應還得人。大王。今當聽臣所說。實無殺害。若有我者。實亦無害。若無我者。復無所害。何以故。若有我者。常不變易。以常住。故不可殺害。不破不壞。不繫不縛。不瞋不喜。猶如虛空。云何常有殺害之罪。若無我者。諸法無常。以無常。故念念壞滅。念念滅。故殺者死者。皆念念滅。若念念滅。誰當有罪。大王。如火燒木。火則無罪。如斧斫樹。斧亦無罪。如鎌刈草。鎌實無罪。如刀殺人。刀實非人。刀旣無罪。人云何罪。如毒殺人。毒實非人。毒藥無罪。人云何罪。一切萬物。皆亦如是。實無殺害。云何有罪。唯願大王。莫生愁苦。何以故。

若常愁苦 愁遂增長 如人意眠 眠則滋多 貪淫嗜酒 亦復如是

如王所言世無良醫治惡業者今有大師名迦羅鳩默迦斯延一切知見明了三世於一念頃能見無量無邊世界聞聲亦觸能令衆生遠離過惡猶如恒河若內若外所有諸罪皆悉清淨是大良師亦復如是能除衆生內外衆罪爲諸弟子說如是法若人殺害一切衆生心無慚愧終不墮惡猶如虛空不受塵水有慚愧者即入地獄猶如大水潤濕於地一切衆生悉是自在天之所作自在天喜衆生安樂自在天瞋衆生苦惱一切衆生若罪若福乃是自在天之所爲云何當言人有罪福譬如工匠作機關木人行住坐臥唯不能言衆生亦爾自在天著輪如工匠木人著輪衆生身如是造化誰當有罪如是大師今者在王舍城住唯願速往如其見者衆罪消滅王即答言審有是人能滅我罪我當歸依復有一臣名無所畏往至王所說如是言大王世有愚人一日之中百喜百愁百眠百寤百驚百哭有智之人斯無是事大王何故憂愁如是如失侶客如墮深泥無救拔者如人渴乏不得曠水猶如迷人無有導者如困病人無醫救療如海船破無救接者大王今者爲身痛耶爲心痛乎王即答言我今身心豈得不痛我近惡友不觀口過先王無辜橫興逆害我今定知當入地獄復無良醫而見救濟臣即白言唯願大王莫生愁毒夫利利者名爲王種若爲國士若爲沙門及婆羅門爲安人民雖復殺害無有罪也先王雖復恭敬沙門不能承事諸婆羅門心無平等無平等故則非利利大王今者爲欲供養諸婆羅門殺害先王當有何罪大王實無殺害夫殺害者殺害壽命命名風氣風氣之性不可煞害云何害命而當有罪唯願大王莫復愁苦何以故

奉同作罪 土明作王

然三本俱作斬

兩同作體 陀來光俱作變 若明作變若

若常愁苦 愁遂增長 如人意眠 眠則滋多 貪淫嗜酒 亦復如是

如王所言世無良醫而療治者今有大師名尼隄陀提子一切知見憐愍衆生善知衆生諸學利鈍應解一切隨宜方便世間八法所不能汙寂靜修習清淨梵行爲諸弟子說如是言無施無善無父無母無今世後世無阿羅漢無修無道一切衆生經八萬劫於生死輪自然得脫有罪無罪悉亦如是如四大河所謂辛頭恒河博叉及陀悉入大海無有差別一切衆生亦復如是得解脫時悉無差別是時今在王舍城住唯願大王速往其所若得見

答下三本俱無  
言字

者衆罪消除。王即答言。審有是師能除我罪。我當歸依。爾時大醫名曰耆婆。往至王所。自言。大王。得安眠不。王以  
榻答言。

若有能永斷 一切諸煩惱 不貪染三界 乃得安隱眠 若得大涅槃 演說甚深義 名真婆羅門

乃得安隱眠 身無諸惡業 口離於四過 心無有疑網 乃得安隱眠 身心無熱惱 安住寂靜處

獲致無上樂 乃得安隱眠 心無有取著 遠離諸怨讐 常和無諍訟 乃得安隱眠 若不造惡業

心常懷慚愧 信惡有果報 乃得安隱眠 敬養於父母 不害一生命 不盜他財物 乃得安隱眠

調伏於諸根 親近善知識 破壞四魔衆 乃得安隱眠 不見吉不吉 及以苦樂等 爲諸衆生故

輪轉於生死 若能如是者 乃得安隱眠 誰得安隱眠 所謂諸佛是 深觀空三昧 身心安不動

誰得安隱眠 所謂慈悲者 常修不放逸 視衆如一子 衆生無明冥 不見煩惱果 常造諸惡業

不得安隱眠 若爲於自身 及以他人身 造作十惡業 不得安隱眠 若言爲樂故 害父無過咎

隨是惡知識 不得安隱眠 若食過節度 冷飲而過差 如是則病苦 不得安隱眠 若於王有過

邪念他婦女 及行曠路者 不得安隱眠 持戒果未熟 太子未紹位 盜者未獲財 不得安隱眠

耆婆。我今病重。於正法王興惡逆害。一切良醫妙藥。呪術善巧。瞻病所不能治。何以故。我父法王。如法治國。實無

辜咎。橫加逆害。如魚處陸。當有何樂。如鹿在羶。初無歡心。如人自知命不終日。如王失國。逃逆他土。如人聞病不

可療治。如破戒者。聞說罪過。我昔曾聞智者說言。身口意業。若不清淨。當知是人必墮地獄。我亦如是。云何當得

安隱眠耶。今我又無無上。大醫演說法藥。除我病苦。耆婆答言。善哉善哉。王雖作罪。心生重悔。而懷慚愧。大王。諸

佛世尊。常說是言。有二白法。能救衆生。一慚二愧。慚者。自不作罪。愧者。不教他作。慚者。內自羞恥。愧者。發露向人。

慚者。羞人。愧者。羞天。是名慚愧。無慚愧者。不名爲人。名爲畜生。有慚愧。故則能恭敬父母師長。有慚愧。故說有父

母兄弟姊妹。善哉大王。具有慚愧。大王且聽。臣聞佛說。智者有二。一者不造諸惡。二者作已懺悔。愚者亦二。一者

如烟三本俱作  
亦如

卽同作則

懷同作悔

識同作戒

尸下同無鄒字  
○而同作廣

生於同作而生

則清明。作惡能悔亦復如是。王若讖悔懷慚愧者。罪卽除滅清淨如本。大王富有二種。一者象馬種種畜生。二者金銀種種珍寶。象馬雖多不敵一珠。大王衆生亦爾。一者惡富。二者善富。多作諸惡不如一善。臣聞佛說。修一善心破百種惡。大王如少金剛能壞須彌。亦如少火能燒一切。如少毒藥能害衆生。少善亦爾。能破大惡。雖名少善。其實是大。何以故。破大惡故。大王如佛所說。覆藏者漏。不覆藏者則無有漏。發露悔過是故不漏。若作衆罪不覆不藏。以下覆故。罪則微薄。若懷慚愧罪則消滅。大王如水滲雖微漸盈大器。善心亦爾。一善心能破大惡。若覆罪者罪則增長。發露慚愧罪則消滅。是故諸佛說有智者不覆藏罪。善哉大王。能信因果信業信報。唯願大王。莫懷愁怖。若有衆生造作諸罪覆藏不悔。心無慚愧不見因果。及以業報不能諮啓有智之人。不近善友。如是之人一切良醫乃至贖病所不能治。如迦摩羅病世醫拱手。覆罪之人亦復如是。云何罪人。謂一闍提。一闍提者不信因果。無有慚愧不信業報。不見現在及未來世。不親善友。不隨諸佛所說教誡。如是之人名一闍提。諸佛世尊所不能治。何以故。如世死屍醫不能治。一闍提者亦復如是。諸佛世尊所不能治。大王。今者非一闍提。云何而言不可救療。如王所言。無能治者。大王當知。迦毗羅城淨飯王子。姓翟曇氏。字悉達多。無師覺悟自然而得阿耨多羅三藐三菩提。三十二相八十種好莊嚴其身。具足十力四無所畏。一切知見大慈大悲。憐愍一切。如羅睺羅。隨善衆生如犢逐母。知時而說。非時不語。實語淨語妙語。義語法語一語。能令衆生永離煩惱。善知衆生諸根心性。隨宜方便無不通達。其智高大如須彌山。深遠廣遠猶如大海。是佛世尊有金剛智。能破衆生一切惡罪。若言不能無有是處。今者去此十二由旬。在拘尸那城娑羅雙樹間。而爲無量阿僧祇等諸菩薩僧。演種種法。若有若無。若有爲若無爲。若有漏若無漏。若煩惱果若善法果。若色法若非色法。若非色法若非非色法。若我若非我。若非我非我。若常若非常。若非常非非常。若樂若非樂。若非樂非非樂。若相若非相。若非相非非相。若斷若非斷。若非斷非非斷。若非斷若世若出世。若非世非出世。若乘若非乘。若非乘非非乘。若自作自受。若自作他受。若無作無受。大王。若當於佛所聞無作無受。所有重罪卽當消滅。王今且聽。釋提桓因命將欲歿。有五相現。一者衣裳垢膩。二者頭上花萎。三者身體臭穢。四者腋下汗出。五者不樂本座。時天帝釋或時靜處。若見沙門若婆羅門。卽至其所。生於佛想。

修宋元俱作脩

坐三本俱作住

○白上同有釋

提頓因四字○

橋上同有答言

二字○顯宋元

俱作頓下同○

聖三本俱作佛

智慧同作慧者

又問佛同作從

佛問

尋同作卽○卽  
同作便

爾時沙門及婆羅門見帝釋來深自慶幸。卽說是語。天主我今歸依於汝。釋聞是已。乃知非佛。復自念言。彼若非佛。不能治我。五退沒相。是時御臣名般遮尸。語帝釋言。憍尸迦。軋闍婆王名敦浮樓。其王有女字須跋陀。王若能以此女兒與臣。當示王除衰相處。釋卽答言。善男子。毗摩質多阿修羅王。有女舍脂。是吾所敬。卿若必能示吾消滅惡相處者。猶當相與。況須跋陀。憍尸迦。有佛世尊字釋迦牟尼。今者在於王舍大城。若能往彼諮稟未聞。衰沒之相。必得除滅。善男子。若佛世尊審能滅者。便可迴駕至其住處。御臣奉命卽迴車乘。到王舍城耆闍崛山。至於佛所。頭面禮足。却坐一面。白佛言。世尊。天人之中。誰爲繫縛。憍尸迦。慳貪嫉妬。又言慳貪嫉妬。因何而生。答言。因無明生。又言無明。復因何生。答言。因放逸生。又言放逸。復因何生。答言。因顛倒生。又言顛倒。復因何生。答言。因疑心生。世尊。顛倒之法。因疑生者。實如聖教。何以故。我有疑心。以疑心。故則生顛倒。於非世尊。生世尊想。我今見佛。疑網卽除。疑網除。故顛倒亦盡。顛到盡。故無有慳心。乃至妬心。佛言。汝言無有慳妬心者。汝今已得阿那含耶。阿那含者。無有貪心。若無貪心。云何爲命來至我所。如阿那含。實不求命。世尊。有願到者。則有求命。無願到者。則不求命。然我今者。實不求命。所欲求者。唯佛法身及佛智慧。憍尸迦。求佛法身及佛智慧。將來之世。必當得之。爾時帝釋聞佛說已。五衰沒相。卽時消滅。便起作禮。遶佛三匝。恭敬合掌。而白佛言。世尊。我今卽死。卽生。失命得命。又聞佛記。當得阿耨多羅三藐三菩提。是爲更生。爲更得命。世尊。一切人天。云何增益。復以何緣。而致損減。憍尸迦。鬪諍。因緣。人天損滅。善修和敬。則得增益。世尊。若以鬪諍而損滅者。我從今日。更不復與阿修羅戰。佛言。善哉。善哉。憍尸迦。諸佛世尊。說忍辱法。是阿耨多羅三藐三菩提因。爾時釋提桓因。卽前禮佛。於是還去。大王。如來以能除諸惡相。是故稱佛。不可思議。王若往者。所有重罪。必當得除。大王。且聽。有婆羅門子。字曰不害。以殺無量諸衆生。故名鶖崛魔。復欲害母。惡心起時。身亦隨動。身心動者。卽五逆因。五逆因。故必墮地獄。後見佛時。身心俱動。復欲生害。身心動者。卽五逆因。五逆因。故當入地獄。是人得遇如來大師。卽時得滅地獄因緣。發阿耨多羅三藐三菩提心。是故稱佛爲無上醫。非六師也。大王。復有須毗羅王子。其父瞋之。截其手足。推之深井。其母矜愍。使人牽出。將至佛所。尋見佛時。手足還具。卽發阿耨多羅三藐三菩提心。大王。以見佛故。得現果報。是故稱佛爲無上醫。

其同作於○言  
 上三本俱無佛  
 字○遠同作久  
 ○汝何同作何  
 故○鬼即同作  
 諸鬼○無同作  
 非○以同作汝  
 ○即同作復○  
 入河水同作可  
 入河○得於同  
 作而得○首無  
 同作無有○至  
 賊同同作到其  
 前○更勿同作  
 勿更○即同作  
 爾○楚同作楚  
 ○捺同作捺下  
 同○竊置乃至  
 復兼廿七字而  
 作通其母故爾  
 殺其父母更外  
 通尋復害十五  
 字○復生同作  
 生於○大放元  
 明俱作放○大  
 爲三本俱作與  
 ○王下同無王  
 字○申同作伴

非六師也。大王。如恒河邊有諸餓鬼。其數五百於無量歲初不見水。雖至河上。純見流火。飢渴所逼。齎聲號哭。爾時如來在其河側。鬱曇鉢林坐一樹下。時諸餓鬼來至佛所。白佛言。世尊。我等飢渴命將不遠。佛言。恒河流水。汝何不飲。鬼即答言。如來見水。我則見火。佛言。恒河清流。實無火也。以惡業故。心自顛倒。謂為是火。我當為汝除滅。顛倒令汝見水。爾時世尊廣為諸鬼說。慳貪過。諸鬼即言。我今渴乏。雖聞法言。都不入心。佛言。汝若渴之。先入水。恣意飲之。是諸鬼等。以佛力故。即得飲水。既飲水已。如來復為種種說法。既聞法已。悉發阿耨多羅三藐三菩提心。捨餓鬼形。得於天身。大王。是故稱佛為無上醫非六師也。大王。舍婆提國。羣賊五百。波斯匿王。挑出其目。盲無前導。不能得往。至於佛所。佛憐愍。故即至殿所。慰喻之言。善男子。善護身口。更勿造惡。諸賊即時聞如來音。微妙清徹。尋還得眼。即於佛前。合掌禮佛。而白佛言。世尊。我今知佛慈心。普覆一切。衆生非獨人天。爾時如來。即為說法。既聞法已。悉發阿耨多羅三藐三菩提心。是故如來。真是世間無上良醫。非六師也。大王。舍婆提國。有旃陀羅名曰氣喘。殺無量人。見佛弟子。大目犍連。即時得破地獄因緣。而得上生三十三天。以有如是聖弟子故。稱佛如來。為無上醫。非六師也。大王。波羅捺城。有長者子名阿逸多。姪匿其母。以是因緣。殺戮其父。其母復與外人具通。子既知已。便復懲之。有阿羅漢。是其知識。於此知識。復生愧恥。即便殺之。殺已。即到祇桓精舍。求欲出家。時諸比丘。具知此人。有三逆罪。無敢聽者。以不聽。故倍生瞋恚。即於其夜。大放猛火。焚燒僧坊。多殺無辜。然後復往。王舍城中。至如來所。求哀出家。如來即聽。為說法要。令其重罪。漸漸輕微。發阿耨多羅三藐三菩提心。是故稱佛為世良醫。非六師也。大王。王本性暴惡。信受惡人提婆達多。放大醉象。欲令毀佛。象既見佛。即時醒悟。佛便申于摩其頂上。復為說法。悉令得發阿耨多羅三藐三菩提心。大王。畜生見佛。猶得破壞畜生業果。況復人耶。大王。當知。若見佛者。所有重罪。必當得滅。大王。世尊未得阿耨多羅三藐三菩提時。魔與無量無邊眷屬。至菩薩所。善薩爾時。以忍辱力。壞魔惡心。令魔受法。尋發阿耨多羅三藐三菩提心。佛有如是。大功德力。大王。有曠野鬼。多害衆生。如來爾時。為善賢長者。至曠野村。為其說法。時曠野鬼。聞法歡喜。即以長者。授於如來。然後便發阿耨多羅三藐三菩提心。大王。波羅捺國。有屠兒名曰廣額。於日中。殺無量羊。見舍利弗。即受八戒。經一日夜。以是因緣。命於

也同作耶

戮害其父害同  
作而殺其父殺

○量下三本俱  
無無邊二字

貴下同無之人  
二字○飯食同  
作供養

梨同作利

優同作修○紫  
同作莎○摩同

作魔○辟合智  
同作判合婚

私同作斯○軌  
宋元俱作捷明  
作捷

得爲北方天王毗沙門子。如來弟子尙有如是大功德果。況復佛也。大王。北天竺有城名曰細石。其城有王名曰  
龍印。貪國重位戮害其父。害其父已心生悔恨。即捨國政來至佛所求哀出家。佛言善來。即成比丘。重罪消滅。參  
阿耨多羅三藐三菩提心。大王當知。佛有如是無量無邊大功德果。大王。如來有弟提婆達多。破壞衆僧。出佛身  
血。害蓮花比丘尼。作三逆罪。如來爲說種種法要。令其重罪得微薄。是故如來爲大良醫。非六師也。大王。若能  
信臣語者。唯願速往。至如來所。若不見信。願善思之。大王。諸佛世尊。大悲普覆。不限一人。正法弘廣。無所不包。怨  
親平等。心無憎愛。終不偏爲一人。令得阿耨多羅三藐三菩提。餘人不得如來。非獨四部之師。普是一切天人。龍  
鬼。地獄畜生。餓鬼等師。一切衆生。亦當視佛如父母想。大王當知。如來不但獨爲豪貴之人。跋提迦王而演說法。  
亦爲下賤。優波離等。不獨偏受。須達多阿那邠坻所奉飯食。亦受貧人。須達多食。不但獨爲舍利弗等利根說法。  
亦爲鈍根。周梨槃特。不但獨聽大迦葉等無貪之性。出家求道。亦聽大貪難陀出家。不但獨聽煩惱薄者。優樓頻  
螺迦葉等。出家求道。亦聽煩惱深厚。造重罪者。波斯匿王弟優陀耶。出家求道。不以紫草恭敬供養。拔其瞋根。鶻  
崛摩羅惡心。欲害捨而不救。不俱獨爲有智男子。而演說法。亦爲極愚。辟合智者。女人說法。不但獨令出家之人  
得四道果。亦令在家得三道果。不但獨爲富多羅等。捨諸忿務。閑寂思惟。而說法要。亦爲頻婆娑羅王等。統領國  
事。理王務者。而說法要。不但獨爲斷酒之人。亦爲耽酒。郁伽長者。荒醉者。說不但獨爲入禪定者。離婆多等。亦爲  
喪子亂心。婆羅門女。婆私吒。說不但獨爲已之弟子。亦爲外道。尼軋子。說不但獨爲盛壯之年。二十五者。亦爲衰  
老八十者。說不但獨爲根熟之人。亦爲善根未熟者。說不但獨爲末利夫人。亦爲姪女。蓮花女。說不但獨受波斯  
匿王上饌。甘味。亦受長者尸利匏。多雜毒之食。大王當知。尸利匏。多住昔。亦作逆罪之因。以遇佛開法。即發阿耨  
多羅三藐三菩提心。大王。假使一月。常以衣食供養恭敬一切衆生。不如有人一念念佛。所得功德。十六分一。大  
王。假使鍛金爲人車馬。載寶。其數各百。以用布施。不如有人發心向佛。舉足一步。復置。是事若以四事供  
養。三千大千世界所有衆生。猶亦不如發心向佛。舉足一步。復置。是事若使大王。供養恭敬。恒河沙等無量衆生。

言菩薩三本俱  
作者要言○楷  
宋元俱作焉次  
同

恐三本俱作必  
○叙同作結○  
虛字同作空中

○是同作今○  
沈同作沒○來  
同作到

名同作以

方同作面

雖同作焦

答同作問○汝  
同作天○而治  
之同作治聲

不如一往婆羅雙樹到如來所誠心聽法。爾時大王答言。菩薩。如來世尊性已調柔。故得調柔以爲眷屬。如栴檀  
林純以栴檀而爲圍。遶如來清淨所有眷屬亦復清淨猶如大龍純以諸龍而爲眷屬。如來寂靜所有眷屬亦復  
寂靜。如來無貪所有眷屬亦復無貪。佛無煩惱所有眷屬亦無煩惱。吾今既是極惡之人。惡業纏裹其身臭穢繫  
屬地獄。云何當得至如來所。吾設往者恐不顧念。接叙言說。卿雖勸吾令往佛所。然吾今日深自鄙悼都無去心。  
爾時虛空尋出聲音。無上佛法將欲衰殄。甚深法河於是欲涸。大法明燈將滅。不久法山欲沉。法船欲沉。法橋欲  
壞。法殿欲崩。法幢欲倒。法樹欲折。善友欲去。大怖將至。法餓衆生將至。不久煩惱疫病將欲流行。大闇時至。湯法  
時來。魔王欣慶解釋甲冑。佛日將沒。大涅槃山。大王。佛若去世王之重惡更無治者。大王。汝今已造阿鼻地獄極  
重之業。以是業緣必受不疑。大王。阿者言無。鼻者名間。間無暫樂故名無間。大王。假使一人獨墮是獄。其身長大  
八萬由旬。遍滿其中間無空處。其身周圍受種種苦。設有多人身亦遍滿不相妨礙。大王。寒地獄中暫遇熱風以  
之爲樂。熱地獄中暫遇寒風亦名爲樂。有地獄中設命終已。若聞活聲即便還活。阿鼻地獄都無此事。大王。阿鼻  
地獄四方有門。一一門外各有猛火。東西南北交過通徹。八萬由旬周圍鐵牆。鐵網彌覆其地亦鐵。上火徹下下  
火徹上。大王。若魚在鐵脂膏燼然。是中罪人亦復如是。大王。作一逆者則便具受如是一罪。若造二逆罪即二倍。  
五逆具者罪亦五倍。大王。我今定知王之惡業必不得免。唯願大王。速往佛所。除佛世尊餘無能救。我今慙汝故  
相勸導。爾時大王聞是語已。心壞怖懼舉身戰慄。五體掉動如芭蕉樹。仰而答曰。汝爲是誰。不現色像。但有聲  
大王。吾是汝父頻婆娑羅。汝今當隨者婆所說。莫隨邪見六臣之言。時王聞已悶絕。躄地。身瘡增劇。臭穢倍前。雖  
以冷藥塗而治之。瘡烝毒熱。但增無損。

大般涅槃經卷第十七



# 大般涅槃經卷第十八

〔麗多〕〔宋公〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 梵行品之第五

品目之第明作  
第二十之四字  
宋元俱無第字

畢三本俱作必

阿上三本俱無  
音字○性下同  
無故字

爲上細書同作  
本文

是同作爾

爾時世尊在雙樹間。見阿闍世悶絕躄地。卽告大眾。我今當爲是王。佳世至無量劫不入涅槃。迦葉菩薩白佛言。世尊。如來當爲無量衆生不入涅槃。何故獨爲阿闍世王。佛言。善男子。是大衆中無有一人謂我畢定入於涅槃。阿闍世王定謂我當畢竟永滅。是故悶絕自殺於地。善男子。如我所言爲阿闍世不入涅槃。如是密義汝未能解。何以故。我言爲者。一切凡夫。阿闍世者。普及一切造五逆者。又復爲者。卽是一切有爲衆生。我終不爲無爲衆生。而住於世。何以故。夫無爲者非衆生也。阿闍世者。卽是具足煩惱等者。又復爲者。卽是不見佛性衆生。若見佛性。我終不爲久住於世。何以故。見佛性者非衆生也。阿闍世者。卽是一切未發阿耨多羅三藐三菩提心者。又復爲者。卽是阿難迦葉二衆。阿闍世者。卽是阿闍世王後宮妃后及王舍城一切婦女。又復爲者名爲佛性。言阿闍者。名爲不生。世者名怨。以不生佛性。故則煩惱怨生。煩惱怨生。故不見佛性。以不生煩惱。故則見佛性。以見佛性。故則得安住大般涅槃。是名不生。是故爲阿闍世。善男子。阿闍者名不生。不生者名涅槃。世名世法。爲者名不汗。以世八法。所不汗故。無量無邊阿僧祇劫不入涅槃。是故我言。爲阿闍世無量億劫不入涅槃。善男子。如來密語不可思議。佛法衆僧亦不可思議。菩薩摩訶薩亦不可思議。大涅槃經亦不可思議。爾時世尊大悲導師。爲阿闍世王入月愛三昧。入三昧已。放大光明。其光清涼。往照王身。身瘡卽愈。鬱蒸除滅。王覺瘡愈。身體清涼。語者婆言。曾聞人說劫將欲盡。三月並現。當是之時。一切衆生。患苦悉除。時旣未至此。光何來照。觸吾身。瘡苦除。愈身得安樂。者婆答言。此非劫盡三月並照。亦非火日星宿藥草寶珠天光。王又問言。此光若非三月並照。寶珠明者。爲是

多同作重○重  
上宋無偏字○  
佛則三本俱作  
則生

減三本俱作減  
如上同無譬字  
○熱下同無之  
字

其同作令○不  
同作無○近於  
同作接近○付  
是已同作惟如  
是○求良醫熱  
求藥同作者求  
醫熱者求○火

誰光。大王當知。是天中天所放光明。是光無根無有邊際。非熱非冷。非常非滅。非色非無色。非相非無相。非青非黃。非赤非白。欲度衆生。故使可見。有相可說。有根有邊。有熱有冷。青黃赤白。大王。是光雖耐實不可說。不可觀見。乃至無有青黃赤白。王言。耆婆。彼天中天。以何因緣。放斯光明。耆婆答言。今是瑞相。將爲大王。以王先言。世無良醫。療治身心。故放此光。先治王身。然後及心。王言。耆婆。如來世尊。亦見念耶。耆婆答言。譬如一人。而有七子。是七子中。一子遇病。父母之心。非不平等。然於罪者。心則偏多。大王。如來亦爾。於諸衆生。非不平等。然於罪者。心則偏重。於放逸者。佛則慈念。不放逸者。心則放捨。何等名爲不放逸者。謂六住菩薩。大王。諸佛世尊。於諸衆生。不觀種姓。老少中年。貧富時節。日月星宿。工巧下賤。僮僕婢使。唯觀衆生。有善心者。若有善心。則便慈念。大王當知。如是瑞相。卽是如來。入月愛三昧。所放光明。王卽問言。何等名爲月愛三昧。耆婆答言。譬如月光。能令一切優鉢羅花。開敷鮮明。月愛三昧。亦復如是。能令衆生。善心開敷。是故名爲月愛三昧。大王。譬如月光。能令一切行路之人。心生歡喜。月愛三昧。亦復如是。能令修習涅槃道者。心生歡喜。是故復名月愛三昧。大王。譬如月光。從初一日。至十五日。形色光明。漸漸增長。月愛三昧。亦復如是。令初發心。諸善根未漸漸增長。乃至具足。大般涅槃。是故復名月愛三昧。大王。譬如月光。從十六日至三十日。形色光明。漸漸損減。月愛三昧。亦復如是。光所照處。所有煩惱。能令漸滅。是故復名月愛三昧。大王。譬如盛熱之時。一切衆生。常思月光。月光既照。鬱熱卽除。月愛三昧。亦復如是。能令衆生。除貪惱熱。大王。譬如滿月。衆星中。王爲甘露味。一切衆生。之所愛樂。月愛三昧。亦復如是。諸善中。王爲甘露味。一切衆生。之所愛樂。是故復名月愛三昧。王語耆婆。我聞如來。不與惡人。同止坐起。語言談論。猶如大海。不宿死屍。如鴛鴦鳥。不住閻廁。釋提桓因。不與鬼住。鳩翅羅鳥。不棲枯樹。如來亦爾。我當云何。而得往見。設其見者。我身將不陷入地耶。我觀如來。寧近醉象。師子。虎。狼。猛火。絕焰。終不近於重惡之人。是故我今。思付是已。當有何心。往見如來。耆婆答言。大王。譬如渴人。速赴清泉。飢者求食。怖者求救。病求良醫。熱求涼藥。寒者求火。王今求佛。亦應如是。大王。如來尙爲一闍提等。演說法要。何況大王。非一闍提。而當不蒙慈悲救濟。王言。耆婆。我昔曾聞。一闍提者。不信不聞。不能觀察。不得義理。何故如來。而爲說法。耆婆答言。大王。譬如有人。身遇重病。是入夜夢。昇一

同作衣○蘇同  
作酥

愈同作轉○命  
同作請○短宋

作短

復當三本俱作  
當復○金同作

奎

擦打同打擲○  
殄同作盡

師三本俱作醫

折同作折○飛

鳥同作鳥獸○

疼宋作頭○擗

隔三本俱作閉

塞○均同作調

○言同作人○  
迴下同無多字  
○梅宋作旂下  
同○搗桃宋元  
俱作蒲挑明作  
葡萄○紫三本  
俱作菱

柱殿服蘇油脂及以塗身臥灰食灰攀上枯樹或與獼猴遊行坐臥沈水沒泥墮墜樓殿高山樹木象馬牛羊身著青黃赤黑色衣喜笑歌侮或見烏鸞狐狸之屬齒髮墮落裸形枕狗臥糞穢中復與亡者行住坐起攜手食噉毒蛇滿路而從中過或復夢與被髮女人共相抱持多羅樹葉以為衣服乘壞驢車正南而遊是人夢已心生愁惱以愁惱故身病愈增以病增故諸家親屬遣使命醫所可遣使形體缺短根不具足頭蒙塵土著弊壞衣載故壞車語彼醫言速疾上車爾時良醫即自思惟今見是使相貌不吉當知病者難可療治復作是念使雖不吉當復占日為可治不若四日六日八日十二日十四日如是日者病亦難治復作是念日雖不吉復當占星為可治不若是火星金星昴星閻羅王星淫星滿星如是星時病亦難治復作是念星雖不吉復當觀時若是秋時冬時及日入時夜半時月入時當知是病亦難可治復作是念如是衆相雖復不吉或定不定當觀病人若有福德皆可療治若無福德雖吉何益思惟是已尋與使俱在路復念若彼病者有長壽相則可療治短壽相者則不可治即於前路見二小兒相牽鬪諍捉頭拔髮瓦石刀杖共相撻打見人持火自然殄滅或見有人斫伐樹木或復見人手曳皮革隨路而行或見道路有遺落物或見有人執持空器或見沙門獨行無侶復見虎狼鳥鸞野狐見是事已復作是念所遣使人乃至道路所見諸相悉皆不祥當知病者定難療治復作是念我若不往則非良師如其往者不可救療復更念言如是衆相雖復不祥且當捨置往至病所思惟是已復於前路聞如是聲所謂亡失死喪崩破壞折剝脫墮墜焚燒不來不可療治不能拔濟復聞南方有飛鳥聲所謂鳥鸞舍利鳥聲若狗若鼠野狐猶兔聞是聲已復作是念當知病者難可療治爾時即入病人舍宅見彼病人數寒數熱骨節疼痛目赤流淚耳聲聞外咽喉結痛舌上裂破其色正黑頭不自勝體枯無汗大小便利攔隔不通身卒肥大紅赤異常語聲不均或麤或細舉體斑駁異色青黃其腹脹滿言語不了醫見是已問瞻病言病者昨來意志云何答言大師其人本來敬信三寶及以諸天今者變異敬信情息本意惠施今者慳吝本性少食今則過多本性敵惡今則和善本性慈孝恭敬父母今於父母無恭敬心醫聞是已即前嗅之優鉢羅香沈水雜香畢迦多香多伽羅香多摩羅跋香鬱金香梅檀香灸肉臭蒲桃酒臭燒筋骨臭魚臭糞臭知香臭已即前觸身覺身細軟猶如縑綿劫貝蒙花或

脚同作堅

造同作禁

緊同作稠下同

○而拔之令出○

王下同無大王

二字○猶不看

同作不擇良○

疥同作伊下同

○到同作至次

同○所須供養

三本俱作供養

所須○車同作

蒙○姝壯同作

巨力○載同作

有○備同作具

○五上同無其

數足滿四字○

尸下同無那字

○莫同作無○

言同作語下同

○心同作意

脚如石或冷如冰或熱如火或澀如沙爾時良醫見如是等種種相已定知病者必死不疑然不定言是人當死語瞻病者吾今遽務明當更來隨其所須恣意勿遮即便還家明日使到復語使言我事未訖兼未合藥智者當知如是病者必死不疑大王世尊亦爾於一闍提輩善知根性而為說法何以故若不為說一切凡夫當言如來無大慈悲有慈悲者名一切智者無慈悲云何說言一切智人是故如來為一闍提而演說法大王如來世尊見諸病者常施法藥病者不服非如來咎大王一闍提輩分別有二一者得現在善根二者得後世善根如來善知一闍提輩能於現在得善根者則為說法後世得者亦為說法今雖無益作後世因是故如來為一闍提演說法要一闍提者復有二種一者利根二者中根利根之人於現在世能得善根中根之人後世則得諸佛世尊不空說法大王譬如淨人墜墮團團有善知識見而慰之尋前捉髮而拔出之諸佛如來亦復如是見諸眾生墮三惡道方便救濟令得出離是故如來為一闍提而演說法王語者婆若使如來審如是者明當選擇良日吉星然後乃往耆婆白王大王如來法中無有選擇良日吉星大王如重病入猶不看日時節吉凶唯求良醫王今重病求佛良醫不應選擇良時好日大王如梅檀火及葑蘭火二俱燒相無有異也吉日凶日亦復如是若到佛所俱得滅罪唯願大王今日速往爾時大王即命一臣名曰吉祥而告之言大臣當知吾今欲往佛世尊所速辦所須供養之具臣言大王善哉善哉所須供具一切悉有阿闍世王與其夫人嚴駕車乘一萬二千姝壯大象其數五萬一一象上各載三人寶持幡蓋花香伎樂種種供具無不備足導從馬騎有十八萬摩伽陀國所有人民尋從王者其數足滿五十八萬爾時拘尸那城所有大衆滿十二由旬悉皆遙見阿闍世王與其眷屬尋路而來爾時佛告諸大衆言一切衆生為阿耨多羅三藐三菩提近因緣者莫先善友何以故阿闍世王若不隨順耆婆語者來月七日必定命殄墮阿鼻獄是故近因莫若善友阿闍世王復於前路聞舍婆提毗流離王乘船入海遇火而死瞿伽離比丘生身入地至阿鼻獄須那刹多作種種惡到於佛所衆罪得滅聞是語已語者婆言吾今雖聞如是二言猶未審定汝來耆婆吾欲與汝同載一象設我當入阿鼻地獄冀汝捉持不令我墮何以故吾昔曾聞得道之人不入地獄爾時佛告諸大衆言阿闍世王猶有疑心我今當為作決定心爾時會中有一菩薩名持一切白

決同作定

到同作往

爲同作是

命語同作以愛

○白上同有卽

字○阿上同無

爾時二字○卽

同作復○卽上

同無爾時阿闍

世王六字○一

下同無謂字○

根下同無本字

○當下同有樂

字

渡三本俱作度

帶同作當○當

同作當○相下

同無次乃至相

八字

未上同無初字

○故下同有多

佛言世尊如佛先說一切諸法皆無定相所謂色無定相乃至涅槃亦無定相如來今者云何而言爲阿闍世作

決定心佛言善哉善哉善男子我今定爲阿闍世王作決定心何以故若王疑心可破壞者當知諸法無有定相

是故我爲阿闍世王作決定心當知是心爲無決定善男子若彼王心是決定者王之逆罪云何可壞以無定相

其罪可壞是故我爲阿闍世王作決定心爾時大王卽到娑羅雙樹間至於佛所仰瞻如來三十二相八十種好

猶如微妙真金之山爾時世尊出八種聲音告大王時阿闍世左右顧視此大衆中誰爲大王我旣罪逆又無福

德如來不應稱爲大王爾時如來卽復喚言阿闍世大王時王聞已心大歡喜卽作是言如來今日顧命語言真

知如來於諸衆生大悲憐愍等無差別白佛言世尊我今疑心永無遺餘定知如來真是衆生無上大師爾時迦

葉菩薩語持一切菩薩言如來已爲阿闍世王作決定心爾時阿闍世王卽白佛言世尊假使我今得與梵王釋

提桓因坐起飲食猶不欣悅得遇如來一言顧命深以欣慶爾時阿闍世王卽以所持鬘蓋香花伎樂供養前禮

佛足右繞三匝禮敬畢已却坐一面爾時佛告阿闍世王言大王今當爲汝說正法要汝當一心諦聽諦聽凡夫

常常繫心觀身有二十事一謂我此身中空無無漏二無諸善根本三我此生死未得調順四墮墜深坑無處不

畏五以何方便得見佛性六云何修定得見佛性七生死常苦無常我淨八八難之難難得遠離九恒爲怨家之

所追逐十無有一法能遮諸有十一於三惡趣未得解脫十二具足種種諸惡邪見十三亦未造立渡五逆津十

四生死無際未得其邊十五不作諸業不得果報十六無有我作他人受果十七不作樂因終無樂果十八若有

造業果終不失十九因無明生亦因而死二十去來現在當行放逸大王凡未之人常於此身當作如是二十種

觀作是觀已不樂生死不樂生死則得止觀爾時次第觀心生相次第觀心生住滅相住相滅相定慧進戒亦復

如是觀生住滅已知心相乃至戒相終不作惡無有死畏三惡道畏若不繫心觀察如是二十事者心則放逸無

惡不造阿闍世言如我解佛所說義者我從昔來初未曾觀是二十事故造衆惡造衆惡故則有死畏三惡道畏

世尊自我招殃造茲重惡父王無辜橫加逆害是二十事設觀不觀必定當墮阿鼻地獄佛告大王一切諸法性

相無常無有決定王云何言必定當墮阿鼻地獄阿闍世王白佛言世尊若一切法無定相者我之殺罪亦應不

物設俱同作教  
殺唯○斬同作  
斷次同○諸佛  
若同作若佛世  
尊四字○供下  
同無養字○生  
害若汝同作與  
作有○獵鹿同  
作射獵○獵同  
作曠

戮害三本俱作  
屠戮○於汝同  
作汝命○屍是  
同作尸先○云  
上同無大王二  
字○華同作有  
○惡同作趣○  
逆害父王同作  
與此逆害○酒

定。若殺定者一切諸法則非不定。佛言。大王。善哉善哉。諸佛世尊說一切法悉無定相。王復能知殺亦不定。是故當知殺無定相。大王。如汝所言。父王無辜橫加逆害者。何者是父。但於假名衆生五陰妄生父想。於十二入十八界中。何者是父。若色是父。四陰應非。若四色亦應非。若色非色。合爲父者。無有是處。何以故。色與非色。性無合故。大王。凡衆生於是色陰妄生父想。如是色陰亦不可害。何以故。色有十種。是十種中。唯色一種。可見可持。可稱可量。可牽可縛。雖可見縛。其性不住。以不住故。不可得見。不可捉持。不可稱量。不可牽縛。色相如是。云何可殺。若色是父。可殺。可害。獲罪報者。餘九應非。若九非者。則應無罪。大王。色有三種。過去未來現在。過去現在則不可害。何以故。過去過去。現在念念滅故。遮未來故名之爲殺。如是一色。或有可殺。或不可殺。有殺不殺。色則不定。若色不定。殺亦不定。殺不定。故報亦不定。云何說言定入地獄。大王。一切衆生所作罪業。凡有二種。一者輕。二者重。若心口作則名爲輕。身口心作則名爲重。大王。心念口說。身不作者。所得報輕。大王。昔日口不勅殺。但言。足。大王。若勅侍臣立斬王首。坐時乃斬。猶不得罪。況王不勅。云何得罪。王若得罪。諸佛世尊亦應得罪。何以故。汝父先王頻婆娑羅。曾於諸佛種種善根。是故今日得居王位。諸佛若不愛其供養。則不爲王。若不爲王。汝則不得爲國生害。若汝殺父。當有罪者。我等諸佛亦應有罪。若諸佛世尊無得罪者。汝獨云何而得罪耶。大王。頻婆娑羅往有惡心。於毗富羅山遊行獵鹿。周遍曠野。悉無所得。唯見一仙五通具足。見已即生瞋恚惡心。我今遊獵。所以不得正坐此人。驅逐令去。即勅左右而令殺之。其人臨終。生瞋惡心。退失神通。而作誓言。我實無辜。汝以心口橫加戮害。我於來世亦當如是。還以心口而害於汝。時王聞已。即生悔心。供養死屍。是王如是。尚得輕受。不墮地獄。況王不爾。而當地獄受果報耶。先王自作還自受之。云何令王而得罪。如王所言。父王無辜者。大王云何言無。夫有罪者。則有罪報。無惡業者。則無罪報。汝父先王若無辜。云何有報。頻婆娑羅於現世中。亦得善果。及以惡果。是故先王亦復不定。以不定。故殺亦不定。殺不定。故云何而言定入地獄。大王。衆生狂惑。凡有四種。一者貪狂。二者藥狂。三者呪狂。四者本業緣狂。大王。我弟子中有是四狂。雖多作惡。我終不記是人犯戒。是人所作。不至三惡。若還得心。亦不言犯。王本貪國逆害父王。貪狂心作。云何得罪。大王。如人酒醉逆害其母。既醒。寤已。心生悔恨。

醉遊同作醉酒  
而○齋同作楷  
○四衢道頭同  
作於四衢道○  
間同作谷○實  
親同作眞實○  
炎同作錄

然同作而

畜同作獸

寶命重同作保  
命畏

有下同有非字  
○爲同作是○  
無三水俱作有  
○有同作無○  
非有下同有非  
字  
無上同無是字

於同作是

當知是業亦不得報。王今貪醉非本心作。若非本心云何得罪。大王譬如幻師四衢道頭幻作種種男女象馬瓔珞衣服。愚癡之人謂爲眞實。有智之人知非眞有。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王譬如山間響聲。愚癡之人謂之實聲。有智之人知其非眞。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如人有怨詐來親附。愚癡之人謂爲實親。智者了達。乃知虛詐。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如人執鏡自見面像。愚癡之人謂爲眞面。智者了達。乃知虛詐。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如熱時炎。愚癡之人謂之是水。智者了達。知其非水。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如乾闥婆城。愚癡之人謂之爲實。智者了達。知其非眞。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如入夢中受五欲樂。愚癡之人謂之爲實。智者了達。知其非眞。殺亦如是。凡夫謂實。諸佛世尊知其非眞。大王如法殺業。殺者殺果。及以解脫。我皆了之。則無有罪。王雖知殺云何有罪。大王譬如有人主知典酒。如其不飲。則亦不醉。雖復知火亦不燒。王亦如是。雖復知殺云何有罪。大王。有諸衆生。於日出時作種種罪。於月出時復行劫盜。日月不出。則不作罪。雖因日月令其作罪。然此日月實不得罪。殺亦如是。雖復因王。王實無罪。大王。如王宮中常勅屠羊心。初無懼。云何於父獨生懼心。雖復人畜尊卑差別。寶命重。死二俱無異。何故於羊心輕無懼。於父先王生重憂苦。大王。世間之人是愛僮僕。不得自在。爲愛所使。而行殺害。設有果報。乃是愛罪。王不自在。當有何咎。大王。譬如涅槃。非有非無。而亦是有。慚愧之人。則爲非有。無慚愧者。則爲非無。受果報者。名之爲有。空見之人。則爲非有。有見之人。則爲非無。有有見者。亦名爲有。何以故。有有見者。得果報故。無有見者。則無果報。常見之人。則爲非無。無常見者。則爲非有。常見者。不得爲無。何以故。常常見者。有惡業果。故是故常常見者。不得爲無。無以是義故。雖非有無。而亦是有。大王。夫衆生者。名出入息。斷出入息。故名爲殺。諸佛隨俗。亦說爲殺。大王。色是無常。色之因緣。亦是無常。從無常因。生色云何常。乃至識是無常。識之因緣。亦是無常。從無常因。生識云何常。以無常故。苦以苦故。空以空故。無我。若是無常。苦空。無我。爲何所殺。殺無常者。得常涅槃。殺苦得樂。殺空得實。殺於無我。而得眞我。大王。若殺無常。苦空。無我者。則與我同。我亦殺於無常。苦空。無我不入地獄。汝云何入。爾時阿闍世王。如佛所說。觀色乃至觀

如同作觀

審定今則同作  
能審今乃○言  
同作說○樹同  
作者

見佛同作有幸  
得見如來六字  
○破同作悉○  
生下同無所有  
一切四字

言同作語○處  
語同作處說○  
語同作言次同  
○語同作義○  
及同作亦  
結三本俱作果  
故同作修○作  
同作爲○在問  
作存○當得同  
作應獲○此破  
壞同作破一切

識作是觀已即白佛言世尊我今始知色是無常乃至識是無常我本若能如是知者則不作罪世尊我昔曾聞諸佛世尊常爲衆生而作父母雖聞是語猶未審定今則定知世尊我亦曾聞須彌山王四寶所成所謂金銀琉璃頗梨若有衆鳥隨所集處則同其色雖聞是言亦不審定我今來至佛須彌山則與同色與同色者則知諸法無常苦空無我世尊我見世間從淨蘭子生淨蘭樹不見淨蘭生梅檀樹我今始見從淨蘭子生梅檀樹淨蘭子者我身是也梅檀樹者即是我心無根信也無根者我初不知恭敬如來不信法僧是名無根世尊我若不遇如來世尊當於無量阿僧祇劫在大地獄受無量苦我今見佛以是見佛所得功德破壞衆生所有一切煩惱惡心佛言大王善哉善哉我今知汝必能破壞衆生惡心世尊若我審能破壞衆生諸惡心者使我常在阿鼻地獄無量劫中爲諸衆生受大苦惱不以爲苦爾時摩伽陀國無量人民悉發阿耨多羅三藐三菩提心以如是等無量人民發大心故阿闍世王所有重罪即得微薄王及夫人後宮嫫女悉皆同發阿耨多羅三藐三菩提心爾時阿闍世王語者婆言耆婆我今未死已得天身捨於短命而得長命捨無常身而得常身令諸衆生發阿耨多羅三藐三菩提心即是天身長命常身即是一切諸佛弟子說是語已即以種種寶幢幡蓋香花瓔珞微妙伎樂而供養佛復以偈頌而讚歎言

實語甚微妙 善巧於句義 甚深祕密藏 爲衆故顯示 所有廣博言 爲衆故略說 具足如是語  
善能療 生 若有諸衆生 得聞是語者 若信及不信 定知是佛說 諸佛常軟言 爲衆故說難  
麤語及輒語 皆歸第一義 是故我今者 歸依於世尊 如來語一味 猶如大海水 是名第一諦  
故無無義語 如來今所說 種種無量法 男女大小聞 同獲第一義 無因亦無果 無生及無滅  
是名大涅槃 聞者破諸結 如來爲一切 常作慈父母 當知諸衆生 皆是如來子 世尊大慈悲  
爲衆故苦行 如人著鬼魅 狂亂多所作 我今得見佛 所得三業善 願以此功德 迴向無上道  
我今所供養 佛法及衆僧 願以此功德 三寶常在世 我今所當得 種種諸功德 願以此破壞  
衆生四種魔 我遇惡知識 造作三世罪 今於佛前悔 願後更莫造 願諸衆生等 悉發菩提心



○英造同作不  
作○妙德同作  
文殊  
已同作以下同  
○隨於同作復  
○舉國同作  
國一切三字

名下同有爲字  
到同作至  
言語同作語言

菩薩不造同作  
不復造作○事  
下同無大事二  
字○楊三本俱  
作黃  
五欲樂同作於

繫心常思念。十方一切佛。復願諸衆生。永破諸煩惱。了了見佛性。猶如妙德等。爾時世尊讚阿闍世王。善哉善哉。若有人能發菩提心。當知是人則爲莊嚴諸佛。大眾大王。汝昔已於毗婆尸佛。初發阿耨多羅三藐三菩提心。從是已來。至我出世。於其中間。未曾墮於地獄受苦。大王當知。菩提之心。乃有如是無量果報。大王。從今已往。當勤修菩提之心。何以故。從是因緣。當得消滅無量惡故。爾時阿闍世王及摩伽陀舉國人民。從座而起。繞佛三匝。辭退還宮。天行品者。如雜花說。

### 大般涅槃經嬰兒行品第二十一

善男子。云何名嬰兒行。善男子。不能起往來去語言。是名嬰兒。如來亦爾。不能起者。如來終不起諸法相。不能住者。如來不著一切諸法。不能來者。如來身行無有動搖。不能去者。如來已到。大般涅槃。不能語者。如來雖爲一切衆生演說諸法。實無所說。何以故。有所說者。名有爲法。如來世尊。非是有爲。是故無說。又無語者。猶如嬰兒言語未了。雖復有語言。亦無語。如來亦爾。語未了者。卽是諸佛祕密之言。雖有所說。衆生不解。故名無語。又嬰兒者。名物不一。未知正語。雖名物不一。未知正語。非不因此而得識物。如來亦爾。一切衆生。方類各異。所言不同。如來方便隨而說之。亦令一切因而得解。又嬰兒者。能說大字。如來亦爾。說於大字。所謂婆喩。喩者。有爲。婆者。無爲。是名嬰兒。喩者。名爲無常。婆者。名爲有常。如來說常衆生。聞已。爲常法。故斷於無常。是名嬰兒行。又嬰兒者。不知苦樂。晝夜父母。菩薩摩訶薩。亦復如是。爲衆生。故不見苦樂。無晝夜相。於諸衆生。其心平等。故無父母親疎等相。又嬰兒者。不能造作大小諸事。菩薩摩訶薩。亦復如是。菩薩不造生死作業。是名不作大事。大事者。卽五逆也。菩薩摩訶薩。終不造作五逆重罪。小事者。卽二乘心。菩薩終不退菩提心。而作聲聞辟支佛乘。又嬰兒行者。如彼嬰兒啼哭之時。父母卽以楊樹黃葉而語之。莫啼。莫啼。我與汝金。嬰兒見已。生真金想。便止不啼。然此楊葉。實非金也。木牛木馬。木男木女。嬰兒見已。亦復生於男女等想。卽止不啼。實非男女。以作如是。男女想。故名曰嬰兒。如來亦爾。若有衆生。欲造衆惡。如來爲說三十三天常樂我淨。端正自恣。於妙宮殿。受五欲樂。六根所對。無非是樂。衆生

相同作想下同  
○相也宋明俱  
作想也次同

同於三本俱作  
皆同

開有如是樂故。心生貪樂。止不為惡。勤作三十三天善業。實是生死無常。無樂無我。無淨。為度衆生。方便說言。常樂我淨。又嬰兒者。若有衆生。厭生死時。如來則為說於二乘。然實無有二乘之實。以二乘故。知生死過見涅槃。以是見故。則能自知。有斷不斷。有真不真。有修不修。有得不得。善男子。如彼嬰兒。於非金中。而生金想。如來亦爾。於不淨中。而說為淨。如來已得第一義。故則無虛妄。如彼嬰兒。於非牛馬。作牛馬想。若有衆生。於非道中。作眞道想。如來亦說非道為道。非道之中。實無有道。以能生道。微因緣故。說非道為道。如彼嬰兒。於木男女。生男女想。如來亦爾。知非衆生。說衆生相。而實無有衆生相也。若佛如來。說無衆生。一切衆生。則墮邪見。是故如來。說有衆生。於衆生中。作衆生相者。則不能破衆生相也。若於衆生。破衆生相者。是則能得大般涅槃。以得如是。大涅槃故。止不啼哭。是名嬰兒行。善男子。若有男女。受持讀誦。書寫解說。是五行者。當知是人。必定當得如是五行。迦葉菩薩。白佛言。世尊。如我解佛所說義者。我亦定當得是五行。佛言。善男子。不獨汝得如是五行。今此會中。九十三萬人。亦同於汝。得是五行。

大般涅槃經卷第十八

大正七年六月廿七日  
大正七年六月三十日  
大正七年七月廿七日  
昭和二年九月十五日  
再版發行  
三版發行  
刷行

# 著作權所有

## 發行所

電話神田  
振替東京  
一八五七二番  
一八三三五番

## 國民文庫刊行會

國譯大藏經 經部第八卷

【非賣品】

編輯者兼

國民文庫刊行會  
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作  
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

君島潔  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社  
東京市小石川區久堅町百八番地

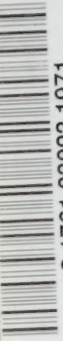








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 1971

